武蔵国分寺跡北方地区

日 影 山 遺 跡
東 山 道 武 蔵 路

－ 第 1 分 冊 －

（本文・実測図編）

1999

西国分寺地区遺跡調査会

推定東山道武蔵路（SF-１）完掘全景空中写真―真上から

巻頭図版 2

推定東山道武蔵路（SF-１）完掘全景空中写真―北上空から

推定東山道武蔵路（SF-１）完掘全景空中写真―南上空から

巻頭図版 4

1．北側　完掘全景―南から

2．西側溝（SD-29・31）土層断面―南から

3．東側溝（SD-30・32）土層断面―南から

推定東山道武蔵路（SF-1）

1．推定東山道武蔵路（SF-1）北側　完掘全景―北から

2．推定東山道武蔵路（SF-1）出土土器

3．SX-13　出土土器

推定東山道武蔵路（SF-1）／SX-13

巻頭図版 6

推定東山道武蔵路（SF-１）北側　完掘全景―真上から

１.〈４時期目道路跡〉硬化面　近景（1）―南から

２.〈４時期目道路跡〉硬化面　近景（2）―南から

巻頭図版 8

1．SF-4　検出状況―南から

2．SD-5（1区）完掘全景―東から

3．SD-5（2区）完掘全景―東から

1．SI-1J　完掘全景ー北から

2．SI-2J　完掘全景ー東から

巻頭図版 10

1．SS-6・9J　検出状況―南から

2．SS-8J　検出状況―東から

3．SS-1J　検出状況―東から

縄文時代　集石

1．SK-913J　土層断面―南から

2．SK-1027J　小穴断面―南から

3．SK-277J　小穴断面―西から

縄文時代　陥穴

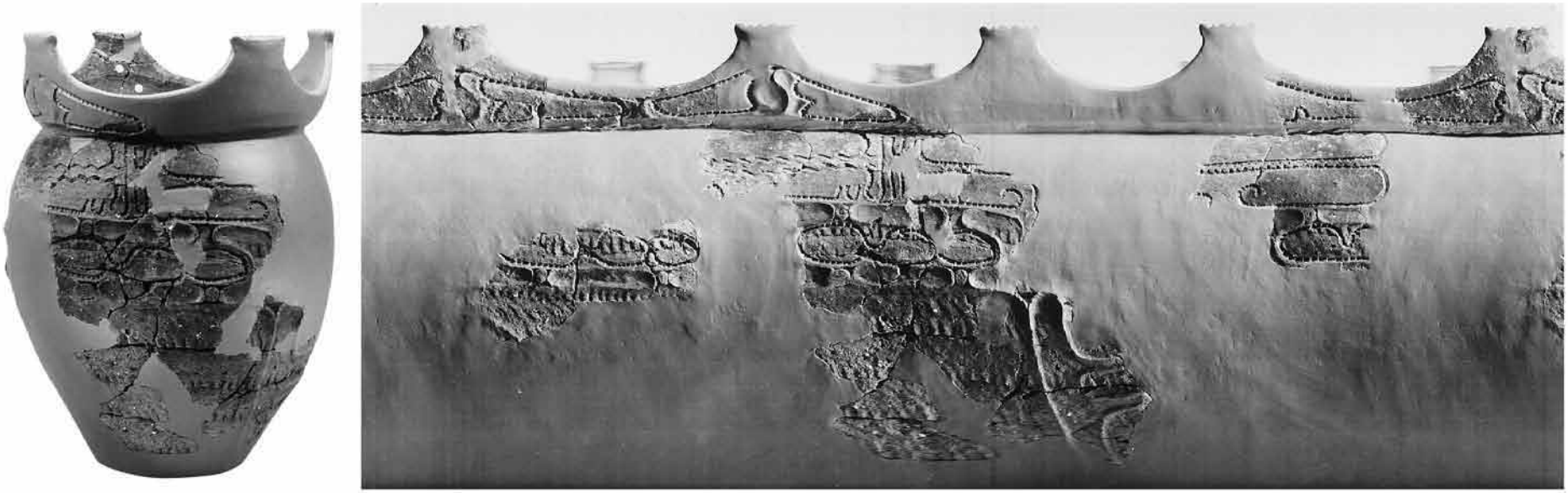
巻頭図版 12

1．土器出土状況

2．土器出土状況

3．出土土器

縄文時代　出土土器



1．縄文時代　出土土器　展開写真（阿玉台Ia式一第222図191）

2．縄文時代　出土土器　展開写真（阿玉台Ia式一第222図192）

縄文時代　出土土器　展開写真

巻頭図版 14

1．第２文化層２号礫群　検出状況―北から

2．第２文化層２号礫群　検出状況―北から

3．遺物出土状況

旧石器時代　礫群／遺物出土状況

旧石器時代　出土遺物

序

東京都の中央に位置している国分寺市は、豊かな自然環境に恵まれ、古来から多くの人々が生活を営んできた地域のひとつであり、市名の由来である武蔵国分寺跡を始めとして各時代の遺跡が知られています。

中央鉄道学園跡地は、武蔵国分寺跡の外郭に拡がる集落跡に連続する台地上にあり、また、縄文時代の日影山遺跡の南端にあたり、以前から埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡でありました。跡地の西側については、西国分寺地区「住宅市街地整備総合支援事業」により開発が進められることとなり、これに伴って発掘調査が実施され、その成果をまとめたものが本書であります。

埋蔵文化財の保存には多々困難な場合がありますが、本遺跡では、用地の東端近くで検出された南北方向に通過する推定東山道武蔵路を事業者と各方面の方々のご尽力により保存し、活用整備していくこととなりました。調査結果の詳細については本報告書をご覧になっていただきたいと思いますが、上記の推定東山道武蔵路以外にも旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代等の遺構と遺物が検出され多大な成果を得ることができました。

本書が多くの人々に活用され、教育、文化、学術研究の一助となり、また、都民の皆様の埋蔵文化財に対する関心と御理解を深めていただく役を担えれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化財保護の主旨をご理解下さり、多大な協力を頂きました西国分寺地区「住宅市街地整備総合支援事業」の事業者である国分寺市、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅都市整備公団、並びに調査を担当していただいた坂誥秀一団長、その他多くの関係者の皆様のご努力に対して心より感謝の意を表します。

平成11年３月

会 長　　坂 東 雅 樹

例　　言

1．本書は、西国分寺地区住宅市街地整備総合支援事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、国分寺市開発二部、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅・都市整備公団の委託を受け、西国分寺地区遺跡調査会が実施した。

3．本調査地区は、東京都国分寺市泉町２丁目１番地（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地・「武蔵国分寺跡」北方地区）に所在する。

4．発掘調査は、平成５年（1993年）11月５日から平成８年（1996年）３月31日まで実施した。調査総面積は、67,000㎡である。

5．整理作業は、平成８年４月１日から平成11年３月31日まで行った。

6．本書の書名については、従前の発掘調査概報などでは「武蔵国分寺跡北西地区の遺跡」としていたが、発掘調査の結果などを考慮に入れ再検討し、「日影山遺跡・東山道武蔵路」に変更した。

7．本書は、編集の都合上、２分冊とした。第１分冊は「本文・実測図編」として本文及び実測図を掲載し、第２分冊は「写真・図版編」として写真図版を掲載した。また、縄文時代・歴史時代の遺構配置図（Ａ２判）は封筒に入れ、別添付とした。

8．本書の編集は、坂誥秀一団長の指導のもとに、持田友宏副団長・早川泉参与・大谷猛参与の助言を得て、板野晋鏡主任調査員が行った。

9．本書の執筆は、「あとがき」＝坂誥秀一団長、「Ⅰ－1.、Ⅶ」＝早川泉参与、「Ⅳ－3.－３）－③、Ⅵ－6.」＝持田友宏副団長、「Ⅰ－2.～5.、Ⅳ－1.、Ⅳ－2.－１）、Ⅳ－2.－２）－①、Ⅵ－2.5.」＝板野晋鏡、「Ⅳ－2.－２）－②～④、Ⅳ－3.－１）－２）、Ⅳ－3.－３）－①②、Ⅳ－4.、Ⅵ－1.」＝伊藤俊治、「Ⅲ、Ⅵ－2.」＝小林定之が行った。また、「Ⅱ」の執筆については、国武貞克氏（東京大学文学部考古学専攻生）にお願いし、月村桂子がこれを補佐した。尚、執筆者名は、目次の頁とそれぞれの文末に記した。

10. 石器の石質鑑定は上本進二氏（神奈川県立七里ガ浜高等学校）に、出土炭化物の樹種同定及び原稿執筆「Ⅴ－3.」は千野裕道氏（東京都埋蔵文化財センター）に、道路状遺構の火山灰分析及び原稿執筆「Ⅴ－4.」は松田隆夫氏（府中市役所）にそれぞれお願いした。

11. 本書の挿図・図版の作成は、円谷猛・田口直美・司東順香・小野真美・関弘江・藤浦礼子・加固直子が行った。

12. 本書では、編集～印刷作業の合理化を計るため、遺物観察表等の罫表組の頁（Ａ４判に換算しておよそ150頁分）は基本的に割愛し、デジタル化した表データを CD-ROM に収録し第１分冊の巻末に添付した。尚、デジタル化に際しては、水山昭宏氏に御教示頂いた。

13. 本書における石器の器種分類は西井幸雄氏（埼玉県埋蔵文化財事業団）に、縄文土器の型式分類は山本典幸氏（国學院大學特別研究生）に、それぞれ指導して頂いた。

14. 巻頭図版13に掲載した縄文土器の展開写真は、小川忠博氏のご厚意により撮影して頂いた。

15. 発掘調査での労務委託は加藤重機建設(株)に、測量・空中写真撮影は(株)こうそく・(株)国際航業に委託した。

16. 整理作業での業者委託は、石器の実測・トレース作業の一部を(株)エーティック環境文化研究所・(株)武蔵文化財研究所に、遺構実測図のトレース作業の一部を(株)山下印刷に、金属製品の保存処理を(株)京都科学に、検出土坑のリン酸分析をパリノ・サーヴェイ(株)・応用地質(株)・(株)クレアテ

ラに、出土炭化物の放射性炭素年代測定を(株)地球科学研究所に、それぞれ委託した。

17. 発掘調査および本書の作成にあたって、次の方々・諸機関より御指導・御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

木下　良、安蒜政雄、小林重義、近藤　滋、中山　晋、坂爪久純、福田健司、有吉重蔵、福田信夫、上敷領久、川島雅人、岩橋陽一、武笠多恵子、荒井健治、塚原二郎、河内公夫、谷口　榮、西野善勝、藤原佳代、杉浦由恵、小川将之、甲斐博幸、飯田充晴、松原典明、木本雅康、館野　孝、塚本師也、川崎義雄、福嶋宗人、五十嵐彰、野口　淳、吉川耕太郎、亀田直美、(故)徳永俊夫

東京都教育委員会、国分寺市教育委員会、府中市教育委員会、(財)東京都埋蔵文化財センター、葛飾区郷土と天文の博物館、(財)君津郡市埋蔵文化財センター、(財)滋賀県文化財保護協会、国分寺市遺跡調査会、府中市遺跡調査会、都立府中病院内遺跡調査会、都営川越道住宅遺跡調査会、武蔵国分寺関連遺跡調査会、落川・一の宮遺跡調査会、防衛庁戦史資料室

18. 発掘参加者は次の方々である。

秋池勝利、秋田裕子、秋山弘、雨宮武富、新井利延、新井忍、荒井晋、新井治美、新井晋、荒川寛高、飯島明美、飯島博文、飯塚敏男、池田盛人、石懸隆行、石川享、石坂誠一、石田倫子、石田学、磯部太平、磯村陽、伊藤信男、伊藤貴之、稲垣浩、井上崇嗣、井上善幸、井上富裕、猪瀬要、岩岡夢、岩田輝穂、岩田亮、岩淵剛、岩元隆博、岩本広海、岩本重規、上渓辰彦、上原正次、宇佐美貴啓、牛田裕一、臼井慶、宇田川肇、内田芳文、梅田嘉美、江口朋子、江嵜明男、江原晶子、江原健、海老沢一人、遠藤清澄、近江幸子、大井史、大泉恵裕、大釜啓滋、大関敦子、太田昌興、大谷敏、大谷清子、大淵志津、岡田みどり、岡部智子、岡本和久、小川隆章、奥村一正、桶田弘子、尾崎繁春、尾崎由美子、小田切広一、小田倉麻子、乙葉潔、小野寺俊昭、小原美智丸、甲斐文治、風間佐智子、加藤さやか、加藤隆一、金子清美、金子雅明、金子昭仁、金子健一、加納知美、鎌田裕子、亀山靖人、鴨志田静男、川上啓、川上純二、川口順司、川津佐知子、川野真介、河原崎理佳、鬼嶋ちあき、木島雄三、岸本晃彦、北村憲孝、木下純芳、木部真也、木村久子、木村裕昭、木村宇宙、邱智鳳、凝地沢、久保田幸一、熊谷寛子、小泉友則、小出圭一、合志あい、鴻田秀雄、古賀真由美、小坂井秀行、児玉紀子、小塚絵巨、小林智之、小鮒通成、小松伸行、小松一、小森貴史、小山猛志、小山正利、紺野千秋、斎藤貴、斎藤良介、佐佐木恵美、佐々木さおり、佐藤誠、佐藤洋介、佐藤真弓、佐藤仁、澤田きく江、澤幡薫、志賀正典、志田貴之、渋谷滋郎、島倉千絵子、島田俊明、嶋津康孝、清水洋行、清水尚子、下山和實、上嶋めぐみ、白石なつめ、白坂昌幸、白須早苗、須賀きみ子、杉浦健治、鈴木雅人、鈴木淳之、鈴木賢次郎、鈴木恵子、鈴木一江、関口良平、曽根隆俊、高橋洋子、高橋慎太郎、高橋岩夫、高橋修二、高橋はるみ、高橋昌広、瀧澤大我、滝澤謙一郎、竹内康、橘樹吉、田中早苗、千田淳、塚田達也、附柳勇喜、土田方正、土屋千年、手塚勝之、寺井重雄、寺内聖治、寺原千恵子、富樫善弥、渡具知喜史、徳永吏世子、得能良介、利根川典江、鳥羽弘子、冨子太郎、富田静香、富田朋広、富永幸司、友寄英治、外山浩二、内藤博隆、永井奈緒美、永桶宏樹、中川洋美、長崎稔、中島信造、中野季美江、中野淳一、中原淳治、中村直明、中村浩司、中村二郎、中村修一、新海由利枝、新村幸成、西田明子、西本義樹、西脇尚人、野崎卓也、野田定男、野本達夫、橋本なぎさ、橋本光弘、東千春、疋田佐知子、引地隆一、樋口晋一、肥田博貴、日高みはる、平賀義則、弘永真一、福垣内浩二、藤井茂男、藤井利勝、藤本修一、藤森賢治、古屋真司、堀部祐紀子、本多実、本田康、本田聡、前田博行、前田仁、前花恵、増沢信二、増田英、松井一夫、松清博、松永真澄、松本京子、丸山りえ、三島丈英、三島百合、水越和也、水澤丈志、水野洋介、水村歩、満窪篤敬、宮城聡子、宮嶋英樹、向山正明、村上美由紀、村木眞弓、村松弘二、森良子、森実裕文、諸沢白夜香、門垣友也、安井春雄、八藤後和浩、矢野悦子、山岡夕希子、山陰みどり、山川一郎、山川昭正、山口真人、山腰淳一、山崎泰志、山崎利雄、山崎進、山崎千絵、山田進、山田真珠美、山田輝生、山本芳江、山本歩、山本英司、山本和一郎、横沢晃、吉澤賢豪、吉沢啓子、吉田暁、吉田圭一、吉塚由香、吉本敏夫、米光輝一、渡辺晶子

目　　次

巻 頭 図 版
序 ――――――――――――――――――――――――――――――――（坂東雅樹）
例 言
目 次／巻頭図版目次／挿図目次／表目次
凡 例／添付 CD-ROM（電子版）について
調査会組織名簿

Ⅰ．序 章
1．調 査 に 至 る 経 過 ――――――――――――――――――――――（早川　泉）――――19
2．遺 跡 の 位 置 と 環 境 ――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）――――20
1）地理的環境　2）歴史的環境
3．調 査 方 法 ――――――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）――――27
1）調査区分　2）調査方法
4．調 査 経 過 ――――――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）――――29
5．層 序 ――――――――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）――――31
1）基本層序　2）層序の対比

Ⅱ．旧 石 器 時 代
1．旧 石 器 時 代 の 調 査 ――――――――――――――――――――（国武貞克）――――37
1）発掘調査　2）整理作業　3）文化層の認定　4）接合資料
2．概 要 ――――――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――38
3．第 1 文 化 層 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――39
1）石 器　2）礫
4．第 2 文 化 層 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――53
1）石 器　2）礫
5．第 3 文 化 層 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――238
1）石 器
6．第 4 文 化 層 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――240
1）石 器
7．第 5 文 化 層 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――240
1）石 器
8．一 括 取 り 上 げ 石 器 ――――――――――――――――――――（国武貞克）――――241
9．出 土 炭 化 物 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）――――252

Ⅲ. 縄 文 時 代
1．概 要 ――――――――――――――――――――――――――――（小林定之）――――255
2．遺 構 ――――――――――――――――――――――――――――（小林定之）――――255
1）竪穴住居跡　2）竪穴状遺構　3）集 石　4）陥 穴
5）土 坑　6）炉 穴　7）小 穴
3．遺 物 ――――――――――――――――――――――――――――（小林定之）――――297
1）土 器 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――297

① 遺構出土土器　② 遺構外出土土器
2）石器 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――303
① 遺構出土石器　② 遺構外出土石器

Ⅳ. 歴 史 時 代
1．概 要 ――――――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）―463
2．古 代（奈良・平安時代）
1）概 要 ――――――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）―463
2）遺 構 ――――――――――――――――――――――――――――――――464
① 道路状遺構 ――――――――――――――――――――――（板野晋鏡）―464
② 溝 跡　③ 土 坑　④ 特殊遺構 ――――――――――――――（伊藤俊治）―469
3）遺 物 ――――――――――――――――――――――――――（伊藤俊治）―490
① 遺構出土遺物　② 遺構外出土遺物
3．中 世 以 降 ――――――――――――――――――――――――（伊藤俊治）―518
1）概 要 ――――――――――――――――――――――――――――――――518
2）遺 構 ――――――――――――――――――――――――――――――――519
① 溝 跡　② 土 坑　③ 特殊遺構　④ 集 石
3）遺 物 ――――――――――――――――――――――――――――――――552
① 遺構出土遺物　② 遺構外出土遺物
③ 表採遺物 ――――――――――――――――――――――――（持田友宏）―553
4．近 代 以 降 ――――――――――――――――――――――――（伊藤俊治）―578
1）遺 構 ――――――――――――――――――――――――――――――――578
2）遺 物 ――――――――――――――――――――――――――――――――578

Ⅴ. 自 然 科 学 分 析
1．概 要――――――――――――――――――――――――――――――――**585**
2．リ ン 酸 分 析 ――――――――――――――――――――――――――585
1）パリノ・サーヴェイ（株）　2）応用地質（株）　3）（株）クレアテラ
3．放 射 性 炭 素 年 代 測 定 ――――――――――――――――――――601
4．樹 種 同 定 ――――――――――――――――――――――――（千野裕道）―603
5．火 山 灰 分 析 ――――――――――――――――――――――――（松田隆夫）―604

Ⅵ. 調 査 成 果
1．旧 石 器 時 代 ――――――――――――――――――――――――（国武貞克）―623
2．縄 文 時 代 ――――――――――――――――――――（板野晋鏡／小林定之）―630
3．歴 史 時 代 ――――――――――――――――――――――――（伊藤俊治）―634
4．道 路 状 遺 構 に つ い て ――――――――――――――――（板野晋鏡）―638
5．道 標 に つ い て ――――――――――――――――――――（持田友宏）―647

Ⅶ. 結 言 ――――――――――――――――――――――――――――（早川　泉）―649

あ と が き ――――――――――――――――――――――――――（坂誥秀一）―656

報 告 書 抄 録 ――――――――――――――――――――――――――――――――659

巻頭図版目次

巻頭図版１． 推定東山道武蔵路(SF－１)
完掘全景空中写真－真上から
巻頭図版２． 推定東山道武蔵路(SF－１)
完掘全景空中写真－北上空から
巻頭図版３． 推定東山道武蔵路(SF－１)
完掘全景空中写真－南上空から
巻頭図版４． 推定東山道武蔵路(SF－１)
１．北側完掘全景－南から
２．西側溝(SD－29・31) 土層断面－南から
３．東側溝(SD－30・32) 土層断面－南から
巻頭図版５． 推定東山道武蔵路(SF－１)／SX－13
１．推定東山道武蔵路(SF－１) 北側完掘全景－北から
２．推定東山道武蔵路(SF－１) 出土土器
３．SX－13出土土器
巻頭図版６． 推定東山道武蔵路(SF－１)
北側完掘全景－真上から
巻頭図版７． 推定東山道武蔵路(SF－１)
１．〈４時期目道路跡〉硬化面近景（１）－南から
２．〈４時期目道路跡〉硬化面近景（２）－南から
巻頭図版８． 歴史時代　古代道路遺構／溝跡
１．SF－４検出状況－南から
２．SD－５（１区）完掘全景－東から
３．SD－５（２区）完掘全景－東から
巻頭図版９． 縄文時代住居跡
１．SI－１J 完掘全景－北から
２．SI－２J 完掘全景－東から
巻頭図版10． 縄文時代集石
１．SS－６・９J 検出状況－南から
２．SS－８J 検出状況－東から
３．SS－１J 検出状況－東から
巻頭図版11． 縄文時代陥穴
１．SK－913J 土層断面－南から
２．SK－1027J 小穴断面－南から
３．SK－277J 小穴断面－西から
巻頭図版12． 縄文時代出土土器
１．土器出土状況
２．土器出土状況
３．出土土器
巻頭図版13． 縄文時代出土土器展開写真
１．縄文時代出土土器展開写真
（阿玉台Ⅰａ式－第222図　191）
２．縄文時代出土土器展開写真
（阿玉台Ⅰａ式－第222図　192）
巻頭図版14． 旧石器時代　礫群／遺物出土状況
１．第２文化層　２号礫群検出状況－北から
２．第２文化層　２号礫群検出状況－北から
３．遺物出土状況
巻頭図版15． 旧石器時代出土遺物

挿図目次

第１図　武蔵野台地と周辺の地形 ――――――――― 22
第２図　調査位置図 ――――――――――――――― 23
第３図　野川流域の遺跡分布図 ―――――――――― 24
第４図　周辺の遺跡分布図 ―――――――――――― 25
第５図　古地図による遺跡周辺の変遷図 ――――――― 26
第６図　調査区分／グリッド設定図 ――――――――― 28
第７図　土層断面模式図 ――――――――――――― 31
第８図　土層柱状図 ――――――――――――――― 32
第９図　層序の対比図 ――――――――――――― 33
第10図　旧石器時代調査範囲・発掘深度図 ――――― 43
第11図　土層断面図 ――――――――――――――― 44
第12図　第１文化層　ブロック・礫群概念図 ――― 45
第13図　第１文化層　ブロック別･母岩別資料分布図(１)
――――――――――― 46
第14図　第１文化層　ブロック別･母岩別資料分布図(２)
――――――――――― 47
第15図　第１文化層　ブロック外出土遺物分布図 ―― 48
第16図　第１文化層　石器実測図（１） ――――― 49
第17図　第１文化層　石器実測図（２）／接合資料実測図
――――――――――― 50
第18図　第１文化層　礫群実測図・接合関係図 ――― 51
第19図　第２文化層　石器分布図 ―――――――― 102
第20図　第２文化層　石器接合関係図 ――――――― 103
第21図　第２文化層　礫分布図 ―――――――――― 104
第22図　第２文化層　ブロック概念図 ――――――― 105
第23図　第２文化層　礫群概念図 ―――――――― 106
第24図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（１）―― 107
第25図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（２）―― 108
第26図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（３）―― 109
第27図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（４）―― 110
第28図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（５）―― 111
第29図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（６）―― 112
第30図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（７）―― 113
第31図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（８）―― 114
第32図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（９）―― 115
第33図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（10）―― 116
第34図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（11）―― 117
第35図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（12）―― 118
第36図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（13）―― 119
第37図　第２文化層　ブロック外出土遺物分布図 ―― 120
第38図　第２文化層　母岩別資料分布図（１）――― 121
第39図　第２文化層　母岩別資料分布図（２）――― 122
第40図　第２文化層　母岩別資料分布図（３）――― 123
第41図　第２文化層　母岩別資料分布図（４）――― 124
第42図　第２文化層　母岩別資料分布図（５）――― 125
第43図　第２文化層　母岩別資料分布図（６）――― 126
第44図　第２文化層　母岩別資料分布図（７）――― 127
第45図　第２文化層　母岩別資料分布図（８）――― 128
第46図　第２文化層　母岩別資料分布図（９）――― 129
第47図　第２文化層　母岩別資料分布図（10）――― 130

第48図 第２文化層　母岩別資料分布図（11）――― 131
第49図 第２文化層　母岩別資料分布図（12）――― 132
第50図 第２文化層　母岩別資料分布図（13）――― 133
第51図 第２文化層　母岩別資料分布図（14）――― 134
第52図 第２文化層　母岩別資料分布図（15）――― 135
第53図 第２文化層　石材別分布図（Sh）　――――― 136
第54図 第２文化層　石材別分布図（SSh/HSh）　―― 137
第55図 第２文化層　石材別分布図（BSh/Ob）　――― 138
第56図 第２文化層　石材別分布図（Ch）　――――― 139
第57図 第２文化層　石材別分布図（Ho）　――――― 140
第58図 第２文化層　石材別分布図（その他の石材）― 141
第59図 第２文化層　石器実測図（１）
－ナイフ形石器　――― 142
第60図 第２文化層　石器実測図（２）
－ナイフ形石器　――― 143
第61図 第２文化層　石器実測図（３）
－ナイフ形石器　――― 144
第62図 第２文化層　石器実測図（４）
－ナイフ形石器／石刃　――― 145
第63図 第２文化層　石器実測図（５）
－ナイフ形石器　――― 146
第64図 第２文化層　石器実測図（６）
－ナイフ形石器　――― 147
第65図 第２文化層　石器実測図（７）
－ナイフ形石器／尖頭器　――― 148
第66図 第２文化層　石器実測図（８）－削器　――― 149
第67図 第２文化層　石器実測図（９）－削器　――― 150
第68図 第２文化層　石器実測図（10）－削器　――― 151
第69図 第２文化層　石器実測図（11）
－削器／掻器　――――― 152
第70図 第２文化層　石器実測図（12）－掻器　――― 153
第71図 第２文化層　石器実測図（13）－掻器　――― 154
第72図 第２文化層　石器実測図（14）－掻器　――― 155
第73図 第２文化層　石器実測図（15）
－掻器／円形掻器　――― 156
第74図 第２文化層　石器実測図（16）－円形掻器―― 157
第75図 第２文化層　石器実測図（17）
－円形掻器／彫器　――― 158
第76図 第２文化層　石器実測図（18）－石核　――― 159
第77図 第２文化層　石器実測図（19）－石核　――― 160
第78図 第２文化層　石器実測図（20）－石核　――― 161
第79図 第２文化層　石器実測図（21）－石核／剥片― 162
第80図 第２文化層　石器実測図（22）－二次加工―― 163
第81図 第２文化層　石器実測図（23）
－掻器／二次加工／微細剥離痕／剥片―― 164
第82図 第２文化層　石器実測図（24）－微細剥離痕― 165
第83図 第２文化層　石器実測図（25）
－微細剥離痕／石刃　―― 166
第84図 第２文化層　石器実測図（27）－縦長剥片　― 167
第85図 第２文化層　石器実測図（26）－縦長剥片　― 168
第86図 第２文化層　石器実測図（28）
－その他の剥片　――― 169
第87図 第２文化層　石器実測図（29）
－礫石器／局部磨製礫　― 170
第88図 第２文化層　石器実測図（30）
－礫石器／敲石　――― 171
第89図 第２文化層　石器実測図（31）－敲石／磨石― 172
第90図 第２文化層　石器実測図（32）－磨石　――― 173
第91図 第２文化層　接合資料実測図（１）――――― 174
第92図 第２文化層　接合資料実測図（２）――――― 175
第93図 第２文化層　接合資料実測図（３）――――― 176
第94図 第２文化層　接合資料実測図（４）――――― 177
第95図 第２文化層　接合資料実測図（５）――――― 178
第96図 第２文化層　接合資料実測図（６）――――― 179
第97図 第２文化層　接合資料実測図（７）――――― 180
第98図 第２文化層　接合資料実測図（８）――――― 181
第99図 第２文化層　接合資料実測図（９）――――― 182
第100図 第２文化層　接合資料実測図（10）　――― 183
第101図 第２文化層　接合資料実測図（11）　――― 184
第102図 第２文化層　接合資料実測図（12）　――― 185
第103図 第２文化層　接合資料実測図（13）　――― 186
第104図 第２文化層　接合資料実測図（14）　――― 187
第105図 第２文化層　接合資料実測図（15）　――― 188
第106図 第２文化層　接合資料実測図（16）　――― 189
第107図 第２文化層　接合資料実測図（17）　――― 190
第108図 第２文化層　接合資料実測図（18）　――― 191
第109図 第２文化層　接合資料実測図（19）　――― 192
第110図 第２文化層　接合資料実測図（20）　――― 193
第111図 第２文化層　接合資料実測図（21）　――― 194
第112図 第２文化層　接合資料実測図（22）　――― 195
第113図 第２文化層　接合資料実測図（23）　――― 196
第114図 第２文化層　接合資料実測図（24）　――― 197
第115図 第２文化層　接合資料実測図（25）　――― 198
第116図 第２文化層　接合資料実測図（26）　――― 199
第117図 第２文化層　接合資料実測図（27）　――― 200
第118図 第２文化層　接合資料実測図（28）　――― 201
第119図 第２文化層　接合資料実測図（29）　――― 202
第120図 第２文化層　接合資料実測図（30）　――― 203
第121図 第２文化層　接合資料実測図（31）　――― 204
第122図 第２文化層　接合資料実測図（32）　――― 205
第123図 第２文化層　接合資料実測図（33）　――― 206
第124図 第２文化層　接合資料実測図（34）　――― 207
第125図 第２文化層　接合資料実測図（35）　――― 208
第126図 第２文化層　接合資料実測図（36）　――― 209
第127図 第２文化層　接合資料実測図（37）　――― 210
第128図 第２文化層　接合資料実測図（38）　――― 211
第129図 第２文化層　礫群実測図（１）
／礫群接合関係図（１）――― 212
第130図 第２文化層　礫群実測図（２）
／礫群接合関係図（２）――― 213
第131図 第２文化層　礫群実測図（３）
／礫群接合関係図（３）――― 214
第132図 第２文化層　礫群実測図（４）　――――― 215
第133図 第２文化層　礫群接合関係図（４）　――― 216
第134図 第２文化層　礫群実測図（５）
／礫群接合関係図（５）――― 217
第135図 第２文化層　礫群実測図（６）
／礫群接合関係図（６）――― 218
第136図 第２文化層　礫群実測図（７）
／礫群接合関係図（７）――― 219
第137図 第２文化層　礫群実測図（８）
／礫群接合関係図（７）――― 220
第138図 第２文化層　礫群実測図（９）
／礫群接合関係図（９）――― 221

第139図 第２文化層　礫群実測図（10）――――― 222
第140図 第２文化層　礫群接合関係図（10）――― 223
第141図 第２文化層　礫群実測図（11）
／礫群接合関係図（11）――― 224
第142図 第２文化層　礫群実測図（12）――――― 225
第143図 第２文化層　礫群接合関係図（12）――― 226
第144図 第２文化層　礫群重量別分布図 ――――― 227
第145図 第２文化層　礫群接合関係図（13）――― 228
第146図 第２文化層　礫群実測図（14）――――― 229
第147図 第２文化層　礫群接合関係図（14）――― 231
第148図 第２文化層　礫群間接合関係図（１）――― 233
第149図 第２文化層　礫群間接合関係図（２）――― 234
第150図 第３文化層　遺物分布図　――――――― 243
第151図 第３文化層　ブロック別
・母岩別資料分布図　――― 244
第152図 第３文化層　石器実測図／接合資料実測図 ― 245
第153図 第４文化層　遺物分布図　――――――― 246
第154図 第４文化層　石器実測図（１）――――― 247
第155図 第４文化層　石器実測図（２）――――― 248
第156図 第５文化層　遺物分布図　――――――― 249
第157図 第５文化層　石器実測図　――――――― 250
第158図 一括取り上げ石器実測図　――――――― 251
第159図 縄文時代遺構配置図　――――――――― 309
第160図 陥穴形態別配置図　――――――――― 310
第161図 住居跡（SI－１J）実測図（１）――――― 311
第162図 住居跡（SI－１J）実測図（２）
／遺物分布図――――――― 312
第163図 住居跡（SI－２J）実測図（１）――――― 313
第164図 住居跡（SI－２J）実測図（２）――――― 314
第165図 住居跡（SI－２J）遺物分布図　――――― 315
第166図 竪穴状遺構（SX－７J）実測図
／遺物分布図　――――――― 316
第167図 竪穴状遺構（SX－61J）実測図（１）　――― 317
第168図 竪穴状遺構（SX－61J）実測図（２）　――― 318
第169図 竪穴状遺構（SX－61J）実測図（３）
／遺物分布図――――――― 319
第170図 集石（SS－１J）実測図　――――――― 320
第171図 集石（SS－６J・９J）実測図　――――― 321
第172図 集石（SS－８J）実測図　――――――― 322
第173図 集石（SS－16J）実測図（４）　――――― 323
第174図 集石（SS－10J・13J・18J・17J・19J）
実測図――――――――― 324
第175図 集石（SS－３J・７J・４J）実測図　――― 325
第176図 集石（SS－14J・12J・15J）実測図　――― 326
第177図 陥穴実測図（１）　――――――――― 327
第178図 陥穴実測図（２）　――――――――― 328
第179図 陥穴実測図（３）　――――――――― 329
第180図 陥穴実測図（４）　――――――――― 330
第181図 陥穴実測図（５）　――――――――― 331
第182図 陥穴実測図（６）　――――――――― 332
第183図 陥穴実測図（７）　――――――――― 333
第184図 陥穴実測図（８）　――――――――― 334
第185図 陥穴実測図（９）　――――――――― 335
第186図 陥穴実測図（10）　――――――――― 336
第187図 陥穴実測図（11）　――――――――― 337
第188図 陥穴実測図（12）　――――――――― 338
第189図 土坑実測図（１）　――――――――― 339
第190図 土坑実測図（２）　――――――――― 340
第191図 土坑実測図（３）　――――――――― 341
第192図 土坑実測図（４）　――――――――― 342
第193図 土坑実測図（５）　――――――――― 343
第194図 土坑実測図（６）　――――――――― 344
第195図 土坑実測図（７）　――――――――― 345
第196図 土坑実測図（８）　――――――――― 346
第197図 土坑実測図（９）　――――――――― 347
第198図 炉跡実測図　――――――――――― 348
第199図 小穴群配置図　――――――――――― 349
第200図 小穴群範囲想定図　――――――――― 351
第201図 小穴実測図（１）　――――――――― 352
第202図 小穴実測図（２）　――――――――― 353
第203図 小穴実測図（３）　――――――――― 354
第204図 小穴実測図（４）　――――――――― 355
第205図 小穴実測図（５）　――――――――― 356
第206図 小穴実測図（６）　――――――――― 357
第207図 土器分布図（１）　――――――――― 358
第208図 土器分布図（２）－早期／前期 ――――― 360
第209図 土器分布図（３）－中期　――――――― 362
第210図 土器分布図（４）－阿玉台式　――――― 364
第211図 土器分布図（５）－後期／晩期　――――― 366
第212図 遺構出土土器（１）　――――――――― 367
第213図 遺構出土土器（２）　――――――――― 368
第214図 遺構出土土器（３）　――――――――― 369
第215図 遺構出土土器（４）　――――――――― 370
第216図 遺構出土土器（５）
／遺構外出土土器（１）――― 371
第217図 遺構外出土土器（２）　――――――――― 372
第218図 遺構外出土土器（３）　――――――――― 373
第219図 遺構外出土土器（４）　――――――――― 374
第220図 遺構外出土土器（５）　――――――――― 375
第221図 遺構外出土土器（６）　――――――――― 376
第222図 遺構外出土土器（７）　――――――――― 377
第223図 遺構外出土土器（８）　――――――――― 378
第224図 遺構外出土土器（９）　――――――――― 379
第225図 遺構外出土土器（10）　――――――――― 380
第226図 遺構外出土土器（11）　――――――――― 381
第227図 遺構外出土土器（12）　――――――――― 382
第228図 遺構外出土土器（13）　――――――――― 383
第229図 遺構外出土土器（14）　――――――――― 384
第230図 遺構外出土土器（15）　――――――――― 385
第231図 遺構外出土土器（16）　――――――――― 386
第232図 遺構外出土土器（17）　――――――――― 387
第233図 遺構外出土土器（18）　――――――――― 388
第234図 遺構外出土土器（19）　――――――――― 389
第235図 遺構外出土土器（20）　――――――――― 390
第236図 遺構外出土土器（21）　――――――――― 391
第237図 遺構外出土土器（22）　――――――――― 392
第238図 石器分布図（１）　――――――――――― 393
第239図 石器分布図（２）－尖頭器／石鏃
二次加工剥片　――――― 394
第240図 石器分布図（３）－打製石斧／礫器　――― 395
第241図 石器分布図（４）－磨製石斧
／スタンプ形石器　――――― 396
第242図 石器分布図（５）－磨石／石皿
／凹石／敲石／その他の石器――― 397

第243図 遺構出土石器（1） ――――――――――― 398
第244図 遺構出土石器（2） ――――――――――― 399
第245図 遺構出土石器（3） ／遺構外出土石器（1）
－尖頭器 ――――――――― 400
第246図 遺構外出土石器（2）－尖頭器／石鏃 ―― 401
第247図 遺構外出土石器（3）－石鏃 ――――― 402
第248図 遺構外出土石器（4）－石鏃 ――――― 403
第249図 遺構外出土石器（5）－石鏃
／スクレイパー ――――― 404
第250図 遺構外出土石器（6）
－スクレイパー／二次加工剥片 ―― 405
第251図 遺構外出土石器（7）－二次加工剥片 ―― 406
第252図 遺構外出土石器（8）－二次加工剥片 ―― 407
第253図 遺構外出土石器（9）－二次加工剥片
／磨製石斧 ――――――― 408
第254図 遺構外出土石器（10）－磨製石斧
／打製石斧 ――――――― 409
第255図 遺構外出土石器（11）－打製石斧 ―― 410
第256図 遺構外出土石器（12）－打製石斧 ―― 411
第257図 遺構外出土石器（13）－打製石斧 ―― 412
第258図 遺構外出土石器（14）－打製石斧 ―― 413
第259図 遺構外出土石器（15）－打製石斧 ―― 414
第260図 遺構外出土石器（16）－打製石斧 ―― 415
第261図 遺構外出土石器（17）－打製石斧 ―― 416
第262図 遺構外出土石器（18）－打製石斧 ―― 417
第263図 遺構外出土石器（19）－打製石斧 ―― 418
第264図 遺構外出土石器（20）－打製石斧 ―― 419
第265図 遺構外出土石器（21）－打製石斧 ―― 420
第266図 遺構外出土石器（22）－打製石斧 ―― 421
第267図 遺構外出土石器（23）－打製石斧 ―― 422
第268図 遺構外出土石器（24）－打製石斧 ―― 423
第269図 遺構外出土石器（25）－打製石斧 ―― 424
第270図 遺構外出土石器（26）－打製石斧 ―― 425
第271図 遺構外出土石器（27）－礫器 ――――― 426
第272図 遺構外出土石器（28）－礫器 ――――― 427
第273図 遺構外出土石器（29）－礫器 ――――― 428
第274図 遺構外出土石器（30）－礫器
／スタンプ形石器 ――― 429
第275図 遺構外出土石器（31）－スタンプ形石器 ―― 430
第276図 遺構外出土石器（32）－スタンプ形石器 ―― 431
第277図 遺構外出土石器（33）－スタンプ形石器 ―― 432
第278図 遺構外出土石器（34）－スタンプ形石器 ―― 433
第279図 遺構外出土石器（35）－スタンプ形石器 ―― 434
第280図 遺構外出土石器（36）－スタンプ形石器 ―― 435
第281図 遺構外出土石器（37）－スタンプ形石器 ―― 436
第282図 遺構外出土石器（38）－スタンプ形石器 ―― 437
第283図 遺構外出土石器（39）－スタンプ形石器 ―― 438
第284図 遺構外出土石器（40）－スタンプ形石器 ―― 439
第285図 遺構外出土石器（41）－スタンプ形石器 ―― 440
第286図 遺構外出土石器（42）－スタンプ形石器 ―― 441
第287図 遺構外出土石器（43）－スタンプ形石器 ―― 442
第288図 遺構外出土石器（44）－スタンプ形石器 ―― 443
第289図 遺構外出土石器（45）－スタンプ形石器 ―― 444
第290図 遺構外出土石器（46）－スタンプ形石器 ―― 445
第291図 遺構外出土石器（47）－スタンプ形石器 ―― 446
第292図 遺構外出土石器（48）－スタンプ形石器 ―― 447
第293図 遺構外出土石器（49）－スタンプ形石器 ―― 448
第294図 遺構外出土石器（50）－スタンプ形石器 ―― 449
第295図 遺構外出土石器（51）
－スタンプ形石器／敲石 ―― 450
第296図 遺構外出土石器（52）－敲石／磨石 ――― 451
第297図 遺構外出土石器（53）－磨石 ――――― 452
第298図 遺構外出土石器（54）－磨石 ――――― 453
第299図 遺構外出土石器（55）－磨石 ――――― 454
第300図 遺構外出土石器（56）－磨石 ――――― 455
第301図 遺構外出土石器（57）－磨石 ――――― 456
第302図 遺構外出土石器（58）－磨石 ――――― 457
第303図 遺構外出土石器（59）－磨石／石皿 ――― 458
第304図 遺構外出土石器（60）－石皿／凹石
／石錘／その他の石器 ――― 459
第305図 遺構外出土石器（61）－その他の石器 ―― 460
第306図 古代道路状遺構実測図（1）－（SF－1） － 491
第307図 古代道路状遺構実測図（2）－（SF－1） － 493
第308図 古代道路状遺構実測図（3）－（SF－1） － 495
第309図 古代道路状遺構実測図（4）－（SF－1） － 496
第310図 古代道路状遺構遺物分布図 －（SF－1） － 497
第311図 古代道路状遺構実測図（5）
－（SF－3・4） ――――― 498
第312図 古代道路状遺構実測図（6）
－（SF－5・6） ――――― 499
第313図 古代溝跡実測図（1） ―――――――― 500
第314図 古代溝跡実測図（2） ―――――――― 501
第315図 古代遺構配置図
－土坑・特殊遺構・小穴――― 503
第316図 古代土坑実測図（1） ―――――――― 504
第317図 古代土坑実測図（2） ―――――――― 505
第318図 古代土坑実測図（3） ―――――――― 506
第319図 古代土坑実測図（4） ―――――――― 507
第320図 古代土坑実測図（5） ―――――――― 508
第321図 古代土坑実測図（6） ―――――――― 509
第322図 古代土坑実測図（7） ―――――――― 510
第323図 古代土坑実測図（8）
／特殊遺構実測図 ――――― 511
第324図 古代小穴実測図 ―――――――――― 512
第325図 古代遺構出土遺物実測図（1） ――――― 513
第326図 古代遺構出土遺物実測図（2） ――――― 514
第327図 古代遺構出土遺物実測図（3） ――――― 515
第328図 古代遺構外出土遺物実測図（1） ――――― 516
第329図 古代遺構外出土遺物実測図（2） ――――― 517
第330図 中世以降溝跡配置図 ―――――――― 555
第331図 中世以降溝跡実測図（1） ――――――― 556
第332図 中世以降溝跡実測図（2） ――――――― 557
第333図 中世以降溝跡実測図（3） ――――――― 558
第334図 中世以降溝跡実測図（4） ――――――― 559
第335図 中世以降遺構配置図
－土坑・特殊遺構・集石・小穴 － 560
第336図 中世以降土坑実測図（1） ――――――― 561
第337図 中世以降土坑実測図（2） ――――――― 562
第338図 中世以降土坑実測図（3） ――――――― 563
第339図 中世以降土坑実測図（4） ――――――― 564
第340図 中世以降土坑実測図（5） ――――――― 565
第341図 中世以降土坑実測図（6） ――――――― 566
第342図 中世以降土坑実測図（7） ――――――― 567
第343図 中世以降土坑実測図（8） ――――――― 568

第344図 中世以降土坑実測図（９） ――――――― 569
第345図 中世以降土坑実測図（10） ――――――― 570
第346図 中世以降特殊遺構実測図（１） ――――― 571
第347図 中世以降特殊遺構実測図（２） ――――― 572
第348図 中世以降特殊遺構実測図（３）
／集石実測図（１）――――― 573
第349図 中世以降集石実測図（２）
／小穴実測図（１）――――― 574
第350図 中世以降小穴実測図（２） ――――――― 575
第351図 中世以降出土遺物実測図（１） ――――― 576
第352図 中世以降出土遺物実測図（２） ――――― 577
第353図 近代以降遺構配置図 ――――――――― 580
第354図 近代以降遺構実測図（１）
／出土遺物実測図 ――――― 581
第355図 近代以降遺構実測図（２） ――――――― 582
第356図 業者別分析遺構配置図 ――――――――― 600
Ⅱ－１図 旧石器時代出土炭化物実測図 ――――― 252

別添第１図 縄文時代遺構配置図
別添第２図 歴史時代遺構配置図

表 目 次

Ⅰ－表１．調査工程表 ――――――――――――― 30
Ⅱ－表１．第１文化層 母岩別器種一覧表 ――――― 42
Ⅱ－表２．第１文化層 母岩別器種一覧表
（１号ブロック）――――― 42
Ⅱ－表３．第１文化層 母岩別器種一覧表
（２号ブロック）――――― 42
Ⅱ－表４．第１文化層 母岩別器種一覧表
（３号ブロック）――――― 42
Ⅱ－表５．第１文化層 母岩別器種一覧表
（ブロック外）――――― 42
Ⅱ－表６．遺物番号出土ブロック対照表① ――――― 52
Ⅱ－表７．第２文化層 母岩別器種一覧表 ――――― 95
Ⅱ－表８．第２文化層 母岩別器種一覧表
（１号ブロック）――――― 96
Ⅱ－表９．第２文化層 母岩別器種一覧表
（２号ブロック）――――― 96
Ⅱ－表10．第２文化層 母岩別器種一覧表
（３号ブロック）――――― 96
Ⅱ－表11．第２文化層 母岩別器種一覧表
（４号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表12．第２文化層 母岩別器種一覧表
（５号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表13．第２文化層 母岩別器種一覧表
（６号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表14．第２文化層 母岩別器種一覧表
（７号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表15．第２文化層 母岩別器種一覧表
（８号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表16．第２文化層 母岩別器種一覧表
（９号ブロック）――――― 97
Ⅱ－表17．第２文化層 母岩別器種一覧表
（10号ブロック）――――― 98
Ⅱ－表18．第２文化層 母岩別器種一覧表
（11号ブロック）――――― 98
Ⅱ－表19．第２文化層 母岩別器種一覧表
（12号ブロック）――――― 98
Ⅱ－表20．第２文化層 母岩別器種一覧表
（13号ブロック）――――― 99
Ⅱ－表21．第２文化層 母岩別器種一覧表
（14号ブロック）――――― 99
Ⅱ－表22．第２文化層 母岩別器種一覧表
（15号ブロック）――――― 99
Ⅱ－表23．第２文化層 母岩別器種一覧表
（16号ブロック）――――― 99
Ⅱ－表24．第２文化層 母岩別器種一覧表
（17号ブロック）――――― 99
Ⅱ－表25．第２文化層 母岩別器種一覧表
（18号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表26．第２文化層 母岩別器種一覧表
（19号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表27．第２文化層 母岩別器種一覧表
（20号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表28．第２文化層 母岩別器種一覧表
（21号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表29．第２文化層 母岩別器種一覧表
（22号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表30．第２文化層 母岩別器種一覧表
（23号ブロック）――――― 100
Ⅱ－表31．第２文化層 母岩別器種一覧表
（24号ブロック）――――― 101
Ⅱ－表32．第２文化層 母岩別器種一覧表
（25号ブロック）――――― 101
Ⅱ－表33．第２文化層 母岩別器種一覧表
（ブロック外）――――― 101
Ⅱ－表34．遺物番号出土ブロック対照表② ――――― 235
Ⅱ－表35．接合資料番号出土ブロック対照表 ――――― 237
Ⅱ－表36．第３文化層 母岩別器種一覧表 ――――― 239
Ⅱ－表37．第３文化層 母岩別器種一覧表
（１号ブロック）――――― 239
Ⅱ－表38．第３文化層 母岩別器種一覧表
（２号ブロック）――――― 239
Ⅱ－表39．第３文化層 母岩別器種一覧表
（ブロック外）――――― 239
Ⅱ－表40．第４文化層 母岩別器種一覧表 ――――― 240
Ⅱ－表41．第５文化層 母岩別器種一覧表 ――――― 241
Ⅱ－表42．一括取り上げ遺物母岩別器種一覧表 ――― 242
Ⅱ－表43．遺物番号出土ブロック対照表③ ――――― 242

凡　例

1．検出遺構は下記の略号で表した。なお縄文時代の遺構は番号の後に「J」を付した。

SI … 住居跡　　SF … 道路状遺構　　SD … 溝跡　　SK … 土坑・陥し穴

SX…特殊遺構　　SS…集石　　P　…小穴

尚、小穴以外の遺構の番号（略記－番号）は、発掘調査時に付した番号をそのまま使用している。このため本書に掲載した遺構の番号は順不同で、番号がないものは欠番である。小穴の番号は、整理調査段階で通し番号に振り換え掲載している。

2．遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりとし、図中にスケールを示した。

旧石器時代　分布図…1/40, 1/120, 1/180

縄文時代　全測図…1/800　分布図…1/1600　住居跡…1/50（炉・小穴1/25）

竪穴遺構…1/40　集石　…1/40, 1/50　陥し穴・土坑・小穴…1/40

土坑集中部・小穴群…1/80

歴史時代　全測図…1/800　分布図…1/1600　土坑・特殊遺構・小穴…1/40

道路状遺構・溝跡…断面1/80, 平面1/200

3．遺構全測図のグリッドラインに付した数字は僧寺中軸線中心点からの距離を表す。

4．第1～5図の方位は、国家座標系の「北」を使用し、それ以外の挿図には国分寺極地座標の「北」を使用している。

5．遺構の説明文中に使用した主軸の傾きの数値は、国分寺極地座標に基づいた値である。但し、道路状遺構（歴史時代・古代）については、国家座標に基づいた値も併記した。

6．遺構断面図中の水糸ラインに示した数字は、標高（TP）を表わす。

7．縄文時代の「陥穴」の断面実測図中に示した点線は、想定生活面までの立ち上がりの推定ラインを表している。

8．遺構実測図中に示したスクリーントーンの指示は次のとおりである。

硬化面　＝　　被熱面　＝　　木根　＝

9．遺物・遺構分布図中のマークの凡例は、それぞれの図中に示した。

10. 旧石器時代の遺物分布図に示した垂直分布の縮尺は、便宜上、垂直方向を1/100とした。

11. 遺物実測図の縮尺は基本的に次のとおりとし、図中にスケールを示した。

旧石器時代　石器…4/5，2/3，1/2

縄文時代　土器…1/3，1/4　石器…4/5，1/2，1/3，1/4

歴史時代　坏・碗・甕…1/3　金属製品…1/2　銭貨…2/3　瓦…1/4

砥石・土錘…1/3

12. 遺物実測図中に示したスクリーントーンの指示は次のとおりである。

旧石器時代・縄文時代の石器　　磨面（強）　＝　　磨面（弱）　＝

歴史時代の遺物　　灰釉陶器の断面　＝

13. 石器実測図中の遺物番号の後ろに記したアルファベットは石器の石質の略記を表わす。尚、石質名及び略記は下記の《石質名一覧表》に示した。
14. 写真図版（第２分冊）中の遺物写真の縮尺は、実測図と同じ縮尺を用いている。また、遺物写真に付した数字は（挿図番号－遺物番号）を示す。

《石質名一覧表》

石　質　名	略　記	石　質　名	略　記
閃緑岩	Dio	斑糲岩	Gb
輝緑岩	Db	石英閃緑岩	QD
安山岩	An	石英安山岩	Da
ガラス質黒色安山岩	GBA	玄武岩	Ba
ガラス質流紋岩	GR	流紋岩	Ry
粗粒凝灰岩	CT	軟質細粒凝灰岩	SFH
硬質細粒凝灰岩	HFT	火山礫凝灰岩	LT
中粒凝灰岩	MT	硬質中粒凝灰岩	HMT
凝灰質砂岩	TSs	流紋岩質凝灰岩	RT
輝緑凝灰岩	Sta	凝灰角礫岩	Tb
礫　岩	Cm	砂　岩	Ss
硬質砂岩	HSs	頁　岩	Sh
珪質頁岩	SSh	硬質頁岩	HSh
黒色頁岩	BSh	泥　岩	Ms
粘板岩	Sl	チャート	Ch
石灰岩	Lm	ホルンフェルス	Ho
大理石	Mb	結晶片岩	Sch
雲母片岩	MiS	緑泥片岩	GMS
片状砂岩	SSs	緑色片岩	GrS
蛇紋岩	SP	千枚岩	Ph
片麻岩	Gn	石　英	Qt
瑪　瑙	Ag	翡　翠	Jad
碧　玉	Jsp	黒曜石	Ob

《巻末 CD 収録の「表名」および「ファイル名」一覧》

	時　代	表　名	ファイル名．拡張子
1	旧石器	旧石器時代石器観察表	**21PIKH.xls**
2	旧石器	旧石器時代接合資料観察表	**22PIKH.xls**
3	旧石器	旧石器時代礫観察表	**23PIKH.xls**
4	旧石器	旧石器時代母岩別器種一覧表	**24PIKH.xls**
5	旧石器	旧石器時代挿図番号出土ブロック対照表	**25PNOTH.xls**
6	縄　文	縄文土器観察表	**31JDKH.xls**
7	縄　文	縄文石器観察表	**32JSTKH.xls**
8	縄　文	縄文時代住居跡小穴一覧表	**33JSTP.xls**
9	歴　史	歴史時代出土遺物観察表	**41RDKH.xls**
10	歴　史	歴史時代中世以降土坑観察表	**42RCDK.xls**

添付 CD-ROM（電子版）について

主な収録内容

およそ150頁分の表データの他、印刷された本報告書の全頁を PDF 化し（報告書の電子版）、また基本的に文章を HTML でも収録しました。表データは、印刷しなかった分を、汎用性のあるデータ形式（Excel 4.0等）で収録したものです。表は、必ずしも印刷しなくても（ディスプレイ上で）利用可能です。

全般的な内容の案内は、CD-ROM の最上位階層にある、Index（INDEX.HTM）を、Web ブラウザで開いて下さい。Index（HTML 形式）は、全ての電子的収録物の、導入部となっています。

取り扱い上の注意点

添付されている CD（コンパクトディスク）は、コンピュータ専用の CD-ROM（シーディーロム）です。Windows（ウィンドウズ）でも Macintosh（マッキントッシュ）でも利用できます。但しコンピュータ以外の装置、例えば音楽 CD プレイヤー等には絶対にかけないで下さい。CD は、磁気媒体とは異なり、物理的に安定した媒体ですが、特にレーベル面には気をつけて下さい（シールを貼るのは危険です）。信号は、光沢面ではなく、1.2㎜の透明樹脂の底部、即ちレーベル面の直下に記録されているからです。

利用法

● HTML

HTML は、いわゆるインターネットのホームページ（正しくは、ウェブサイトもしくはウェブページ）のデータ形式のことです。無論、必ずしもネットワーク専用ではなく、ディスク媒体だけでも利用できる形式です。閲覧のためには、Web ブラウザが必要ですが、最近のパーソナルコンピュータには、すべからく（あらかじめ）用意されています。具体的には、マイクロソフトのインターネット・エクスプローラ、あるいはネットスケープのナビゲーター等が必要です（いずれも無償配付）。最新版は、雑誌付録等で配付されているものを利用して下さい。

● PDF

PDF とは、マイクロフィルムの電子化ともいうべきフォーマットで、印刷頁のレイアウトを、ディスプレイ上で（ほぼ）完全に再現します。事実上、紙の電子的代替物といえます。閲覧、印刷、検索、ジャンプ（ハイパーリンク）といった機能を備えています。PDF 版は（十分に）印刷物と等価な存在です。

PDF に必要なアプリケーションは、Acrobat Reader（無償配付）です。これも、最近のパーソナルコンピュータには、あらかじめ用意されている例が多くなっています。念のため、Windows 用、及び Mac 用の Acrobat Reader を、CD 内に用意してありますので、お持ちでなければ、インストールして下さい。

PDF は、標準状態ではフォントが薄く感じるかもしれません（アンチエイリアス処理＝スムーズフォントのためです－変更できます）。一般的には、表示倍率150～200%が適しているようです。

● 表データ

表データは、Excel Ver.4形式、タブ区切りのテキスト形式等で収録しています。HTML からも直接閲覧できます。Excel 形式は書式を保持でき、しかも Ver.4だと、他のアプリケーションとの高い互換性を確保できます。テキスト形式は、さらに汎用性が高く、タブ区切りならば、Excel や DTP との親和性も高いという利点があります。

平成５年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長　秦　　正博　東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長　天野　　稔　国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事　坂誥　秀一　東京都文化財保護審議会委員（立正大学教授）
　永峯　光一　東京都文化財保護審議会委員（国學院大學教授）
　藤間　恭助　国分寺市文化財保護審議会副委員長
　清水　文夫　東京都住宅局建設部推進課副参事
　水戸　信雄　東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
　木野下藤司　住宅・都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
　吉永　文夫　国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事　本藤　圭孝　東京都住宅局建設部推進課開発係長
　佐々木徳明　国分寺市開発二部開発業務課長

〈調 査 団〉

団　　長　坂誥　秀一　立正大学教授
顧　　問　永峯　光一　国學院大學教授
　吉田　　格　国分寺市遺跡調査会団長
参　　与　持田　友宏　調査会職員
　早川　　泉　東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
主任調査員　板野　晋鏡　調査会職員
調 査 員　滝島　和子　国分寺市教育委員会嘱託職員
調査整理作業員（調査会職員）

月村　桂子	江藤　由香	円谷　　猛
久保木京子	宇田川貴史	渡辺　淳子
梅田　嘉美	入江たか子	熊田　　悟

〈事 務 局〉

事務局長　和田　利昭　調査会職員
事 務 員　夏目みね子　〃

平成６年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長　秦　　正博　東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長　天野　　稔　国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事　坂誥　秀一　東京都文化財保護審議会委員（立正大学教授）
　永峯　光一　東京都文化財保護審議会委員（国學院大學教授）
　藤間　恭助　国分寺市文化財保護審議会委員長
　清水　文夫　東京都住宅局建設部推進課副参事
　林部　昶幸　東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
　木野下藤司　住宅・都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
　吉永　文夫　国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事　本藤　圭孝　東京都住宅局建設部推進課開発係長
　佐々木徳明　国分寺市開発二部開発業務課長

〈調 査 団〉

団　　長　坂誥　秀一　立正大学教授
顧　　問　永峯　光一　国學院大學教授
　吉田　　格　国分寺市遺跡調査会団長
参　　与　持田　友宏　調査会職員
　早川　　泉　東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
主任調査員　板野　晋鏡　調査会職員
調 査 員　滝島　和子　国分寺市教育委員会嘱託職員
補助調査員　伊藤　俊治　調査会職員
　小林　定之　〃
調査整理作業員（調査会職員）

月村　桂子	田口　直美	熊田　　悟
永丘　朋子	円谷　　猛	高柳　良子
雪江　吉照	司東　順香	田倉　雅実
戸塚美枝子	梅田　嘉美	渡辺　淳子
広沢　章満	畑守みどり	宇田川貴史
久保木京子	高浜　誠也	入江たか子
原田　早苗	兼光　育美	柳沼　伸枝

〈事 務 局〉

事務局長　和田　利昭　調査会職員
事 務 員　夏目みね子　〃

平成７年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長　柴崎　正次　東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長　岡村　　豊　国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事　坂誥　秀一　国分寺市文化財保護審議会委員（立正大学教授）
永峯　光一　東京都文化財保護審議会委員（国學院大學教授）
藤間　恭助　国分寺市文化財保護審議会委員長
清水　文夫　東京都住宅局建設部推進課副参事
林部　昶幸　東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
永田　　晃　住宅・都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
吉永　文夫　国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事　本藤　圭孝　東京都住宅局建設部推進課開発係長
佐々木徳明　国分寺市開発二部開発課長

〈調 査 団〉

団　　長　坂誥　秀一　立正大学教授
副 団 長　持田　友宏　調査会職員
顧　　問　永峯　光一　国學院大學教授
吉田　　格　国分寺市遺跡調査会団長
参　　与　早川　　泉　東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
調査指導員　上村　昌男　国分寺市教育委員会文化財課職員
主任調査員　板野　晋鏡　調査会職員
調 査 員　伊藤　俊治　〃
補助調査員　小林　定之　〃
調査整理作業員（調査会職員）

月村　桂子	雪江　吉照	司東　順香
畑守みどり	円谷　　猛	田倉　雅実
中野　宏子	戸塚美枝子	中村　聡子
広沢　章満	飛田　　薫	永丘　朋子
岡本　好古	高浜　誠也	藤田由紀子
久保木京子	田口　直美	渡辺　千絵

〈事 務 局〉

事務局長　和田　利昭　調査会職員
事 務 員　夏目みね子　〃

平成８年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長　柴崎　正次　東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長　岡村　　豊　国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事　坂誥　秀一　国分寺市文化財保護審議会委員（立正大学教授）
永峯　光一　東京都文化財保護審議会委員（国學院大學教授）
藤間　恭助　国分寺市文化財保護審議会委員長
清水　文夫　東京都住宅局建設部大規模団地対策室長
林部　昶幸　東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
鈴木　和政　住宅・都市整備公団東京支社住宅市街地第一部用地計画課長
吉永　文夫　国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事　本藤　圭孝　東京都住宅局建設部大規模団地対策室開発係長
佐々木徳明　国分寺市開発二部開発課長

〈調 査 団〉

団　　長　坂誥　秀一　立正大学教授
副 団 長　持田　友宏　調査会職員
顧　　問　永峯　光一　国學院大學教授
吉田　　格　国分寺市遺跡調査会団長
参　　与　早川　　泉　東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
調査指導員　上村　昌男　国分寺市教育委員会文化財課職員
主任調査員　板野　晋鏡　調査会職員
調 査 員　伊藤　俊治　〃
小林　定之　〃
月村　桂子　〃
補助調査員　円谷　　猛　〃
田口　直美　〃
山田　三郎　〃
多田　貞夫　〃
整理作業員　司東　順香　〃
中野　宏子　〃
中村　聡子　〃

〈事 務 局〉

事務局長　和田　利昭　調査会職員
事 務 員　夏目みね子　〃

平成９年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長	柴崎	正次	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長	岡村	豊	国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事	坂誥	秀一	国分寺市文化財保護審議会委員（立正大学教授）
	永峯	光一	国學院大學教授
	藤間	恭助	国分寺市文化財保護審議会委員長
	清水	文夫	東京都住宅局建設部大規模団地対策室長
	林部	昶幸	東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
	鈴木	和政	住宅・都市整備公団東京支社住宅市街地第一部用地計画課長
	吉永	文夫	国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事	森山	映實	東京都住宅局建設部大規模団地対策室開発係長
	佐々木徳明		国分寺市開発二部開発課長

〈調 査 団〉

団　　長	坂誥	秀一	立正大学教授
副 団 長	持田	友宏	調査会職員
顧　　問	永峯	光一	国學院大學教授
	吉田	格	国分寺市遺跡調査会団長
参　　与	早川	泉	東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
調査指導員	上村	昌男	国分寺市教育委員会文化財課職員
主任調査員	板野	晋鏡	調査会職員
調 査 員	伊藤	俊治	〃
	小林	定之	〃
	月村	桂子	〃
補助調査員	円谷	猛	〃
	田口	直美	〃
	司東	順香	〃
	山田	三郎	〃
	多田	貞夫	〃

〈事 務 局〉

事務局長	水島	光信	調査会職員
事 務 員	夏目みね子		〃

平成10年度西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会　　長	坂東	雅樹	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副参事
副 会 長	林	誠司	国分寺市教育委員会文化財課長
理　　事	坂誥	秀一	国分寺市文化財保護審議会委員長（立正大学教授）
	永峯	光一	前国學院大學教授
	藤間	恭助	前国分寺市文化財保護審議会委員
	大高	一夫	東京都住宅局建設部大規模団地対策室副参事
	大塚	忠	東京都住宅供給公社事業部事業開発課開発担当課長
	鈴木	和政	住宅・都市整備公団東京支社住宅市街地第一部用地計画課長
	吉永	文夫	国分寺市開発二部事業推進課長
監　　事	堀篭	剛	東京都住宅局建設部大規模団地対策室開発担当係長
	志田	敏之	国分寺市開発二部次長

〈調 査 団〉

団　　長	坂誥	秀一	立正大学教授
副 団 長	持田	友宏	日本考古学協会員
顧　　問	永峯	光一	前国學院大學教授
	吉田	格	国分寺市遺跡調査会団長
参　　与	早川	泉	東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
	大谷	猛	〃
調査指導員	上村	昌男	国分寺市教育委員会文化財課職員
主任調査員	板野	晋鏡	調査会職員
調 査 員	伊藤	俊治	〃
	小林	定之	〃
	月村	桂子	〃
補助調査員	円谷	猛	〃
	田口	直美	〃
	司東	順香	〃
	山田	三郎	〃

〈事 務 局〉

事務局長	水島	光信	調査会職員
事 務 員	夏目みね子		〃

Ⅰ．序　　章

１．調査に至る経過

中央鉄道学園跡地は、JR 西国分寺駅南東に広がる広大な敷地である。昭和62年４月の日本国有鉄道の民営化で売却資産として、国鉄清算事業団により売りに出されることになった。この跡地利用については民間企業の参入も含めて、多くの方策が模索されたが、最終的には公共用地としての活用が図られることになり、特定住宅市街地総合整備促進事業として実施が決定された。清算事業団用地約23ha を含む約32ha の広大な敷地に公園、公共公益施設、住宅地の建設が推進されることとなった。

総敷地面積約32ha の内、用地の西側6.7ha については国分寺市・東京都住宅局・住宅供給公社・住宅都市整備公団の四者により、特定住宅市街地総合整備促進事業されることになった。

本地域内が武蔵国分寺遺跡ならびに日影山遺跡の範囲に含まれることは、東京都遺跡地図に明らかであるため、国分寺市教育委員会は開発計画策定にあたって、「埋蔵文化財の内容を把握し、文化財保護上必要な措置をとるための基礎資料を得る」ために、対象地域全体に233箇所の試掘坑を設定して予備調査を平成３年８月14日から12月６日まで実施した。調査の結果は概略当初想定通り、ほぼ全域に遺物の分布が認められることが明らかになった。その中には東山道武蔵路を始めとする奈良平安時代と縄紋時代中期および旧石器時代の遺構と遺物があった。

この調査結果を基にして国分寺市教育委員会は東京都教育庁文化課と東山道武蔵路の保存問題と調査体制、調査区の分担等について協議を重ねてきた。その結果、国分寺市教育委員会で本調査を実施することは発掘調査の規模から困難な状況なので、東京都教育庁が主体的に調査体制を組むことで合意した。東山道武蔵路の保存については、施工四者との間で協議を進め、新設道路から外れる部分についてのみポケットパークとして保存活用を図ることで理解を得たが、新設道路に重なる大部分の武蔵路は破壊されることとなった。

平成５年９月から東京都教育庁文化課は国分寺市教育委員会との合意事項に基づいて、調査予算・調査行程・調査体制を組むために、施工四者との調整を始めることとなった。

９月14日、東京都文化課と国分寺市教育委員会で現況を確認し、基本事項を話し合った。調査体制は東京都が指導する調査会方式とし、会長は東京都副参事・副会長は国分寺市文化財課長をあて、理事には各施工者代表と調査団代表を、調査団には坂誥立正大学教授を団長に、東京都学芸員を参与、国分寺市から嘱託職員を調査員として１名派遣することになった。

９月30日、国分寺市開発二部事務所で施工四者と東京都教育庁文化課・国分寺市教育委員会で事前の打ち合わせが行われた。現場での調査方法、調査会の構成、調査開始日時、東山道の取り扱い、調査に係わる協定書等について話し合いが行われた。特に東山道について、東京都教育庁文化課及び国分寺市教育委員会としては、古代官道が長い距離にわたり良好な状態で残されているので、保存ができないかを保存策を図面で示しながら施行四者に再度申し入れたが、この時点では、すでに平成５年８月18日付けで特定市街地総合整備促進事業として事業決定していること、区画整理と特住総で用地割が決定済なので無理であるとの回答であった。

10月７日、施工四者と国分寺市教育委員会、東京都教育庁文化課との第１回目の調整会議をおこない、調査予算・調査工程・調査体制について了解に達した。

平成５年10月27日、西国分寺地区遺跡調査会設立準備会並びに第１回役員会を国分寺市開発二部の事務所で開催し、事前協議の結果に基づいて11月15日より調査を開始することにした。　　（早川　泉）

２．遺跡の位置と環境

１）地 理 的 環 境（第１・２図）

本遺跡が所在する国分寺市は、新宿からJR中央線で東に約30分程、東京郊外・多摩地域にある人口約10万人の小都市である。東京都全域からみればほぼ中央に位置し、東は小金井市、南は府中市・国立市、西は立川市、北は小平市と隣接しており、地形的には、関東平野の南西部に広がる武蔵野台地上に立地している。武蔵野台地は、北東を荒川支流の入間川、南を多摩川の沖積低地により画された東西50km、南北20kmを測る青梅市付近を頂点に扇状に形成された国内最大級の洪積台地である。台地は、古多摩川の侵食による河岸段丘でその大半を占める上位の武蔵野段丘と下位の立川段丘に分かれる。また、武蔵野段丘の南縁は、立川段丘との比高差10～15mの国分寺崖線と呼ばれる段丘崖となっている。崖線は、武蔵村山市残堀付近から始まり、立川市、国立市、国分寺市を北西から南東へと通過し、さらに小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を通り世田谷区南端付近まで連なっている。

本調査地区は、JR西国分寺駅の南東方向に占地する旧国鉄中央鉄道学園跡地の西側部分に位置している。北には恋ヶ窪谷、南には国分寺崖線を臨む武蔵野段丘面上に立地しており、標高は約79m前後である。南東方向の崖線下には国指定史跡『武蔵国分寺跡』があり、当該地区は、その北西地区の一画をなしている。

北の恋ヶ窪谷は、武蔵野段丘面に深く刻まれた野川の開析谷であり、谷には、日立中央研究所構内の湧水池をはじめ野川の源流となる数々の湧水地がある。また、南方崖線下にも黒鐘谷の湧水地や全国名水百選に選ばれた真姿の池の湧水群など多くの湧水地が存在している。それらの湧水は崖線沿いに東流し、東元町三丁目の不動橋付近で恋ヶ窪谷からの野川本流と合流している。さらに流れは、東方に崖線下を削りながら小金井・三鷹方面へと続き世田谷区二子玉川付近で多摩川に注いでいる。

２）歴 史 的 環 境（第３・４図）

遺跡周辺には段丘の発達と湧水地という地理的条件からか、旧石器・縄文時代の遺跡群と古代律令期以降の遺跡群に集約できる数多くの著名な遺跡が分布している。

旧石器時代では、調査地区南西の崖線上に位置する礫群や細石刃・ナイフ形石器・尖頭器などが検出された多摩蘭坂遺跡、複数の文化層、特にX層文化層の石器群が確認された武蔵台遺跡、北方には岩宿以前に石器が採集された熊野郷遺跡、東には花沢遺跡、殿ヶ谷戸遺跡などが点在している。さらに東方の野川流域沿いには石器編年の基礎が築かれた野川遺跡をはじめ、「野川流域遺跡群」として認識される、はけうえ遺跡、西之台遺跡、前原遺跡、野川中州北遺跡、東京天文台構内遺跡、羽根沢台遺跡等、学史上著名な遺跡が数多く分布している。

縄文時代では、恋ヶ窪谷の南斜面上に本調査区の北端と一部重複する縄文中期の日影山遺跡、北斜面上には集落の中央に形成された墓壙群の一つから２点の硬玉製の垂れ飾りを出土したことで著名な恋ヶ窪遺跡、焼け石を含んだ摺り鉢状の集石土坑が多数検出された恋ヶ窪南遺跡などがある。また、南方崖線沿いには、国の重要文化財に指定されている勝坂式の土器群が出土した多喜窪遺跡、早期から中期の集落跡が確認され加曽利E期の「コウモリ」の意匠を有する釣手土器が出土したことで有名な武蔵台東遺跡、早

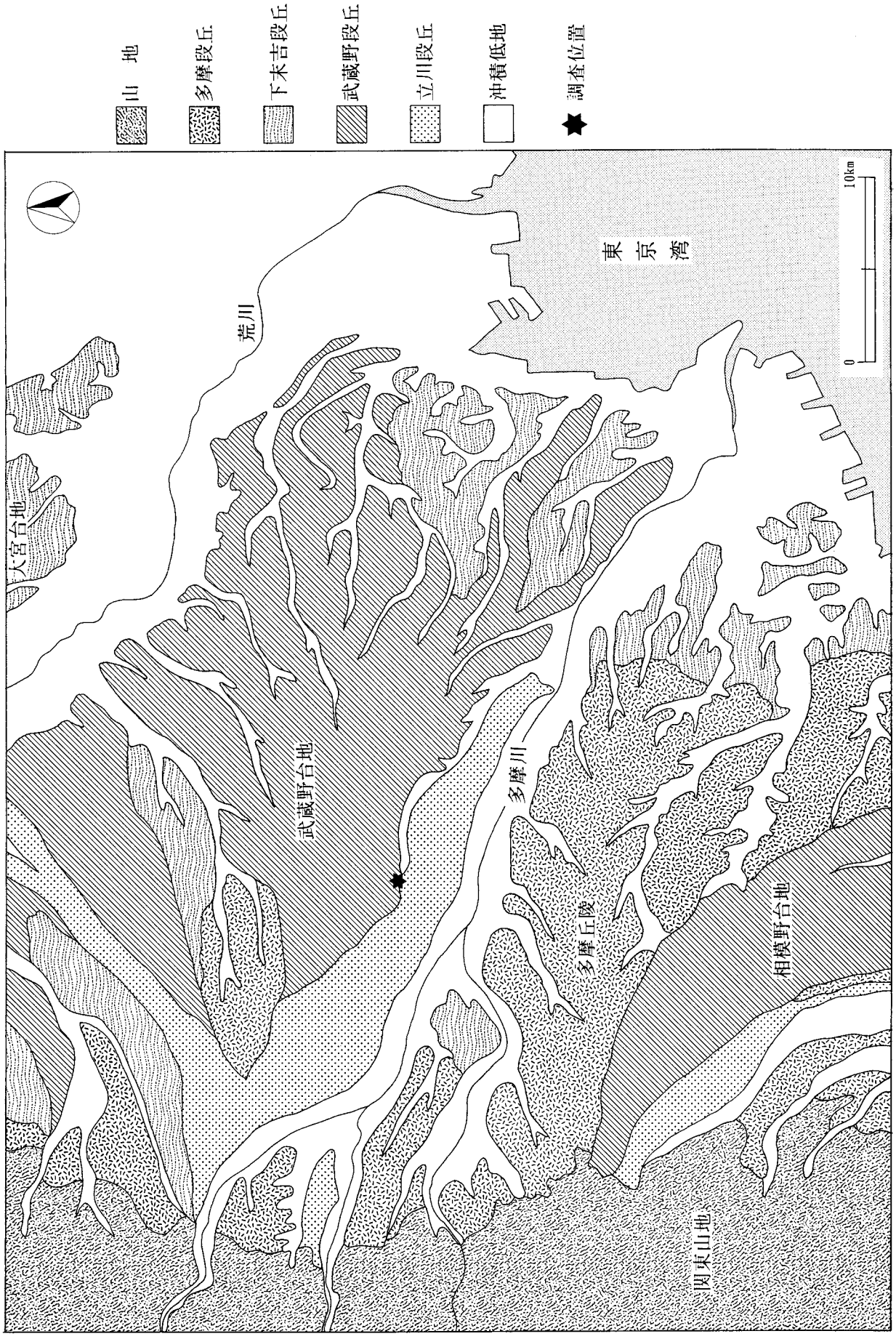
期の大規模な竪穴住居群が検出された武蔵台遺跡などがある。

古代律令期では、調査区の南方崖線下に市名の由来にもなった武蔵国分僧寺跡があり、その西には現府中街道を挟んで国分尼寺跡がある。両寺は、立川段丘面を中心に崖線斜面にかけて伽藍を配し、寺域の範囲は、両寺を合せると東西900m、南北550m に及ぶ。寺の周辺には、寺の建立・維持に関わったと思われる人々の集落群が、南北1.5km、東西２km の広がりを持ち国指定史跡『武蔵国分寺跡』として広範囲に形成されている。また、僧寺と尼寺の間には、古代の官道、「推定東山道武蔵路」が南北に通過している。「推定東山道武蔵路」は、幅12m の両側溝を持つ直線道路遺構として、昭和50年代後半から認識されるようになり、その後の追及調査により、現在では府中市美好町三丁目から国分寺市恋ヶ窪四丁目までの約4.2km が確認されている。その路線上にあたる当該地区でも、両側溝を伴う道路遺構が約350m にわたり一直線に検出されている。また、国分寺跡より南方に約2.6km の府中市大国魂神社付近には国衙の推定地があり、その位置は、近年の発掘調査の成果から、神社境内から東方の「京所地区」（府中市宮町二～三丁目）と呼ばれる一帯にあったことがほぼ確定されている。国衙を中心とした「武蔵国府域」は、東西約3.7km、南北約1.2km の範囲と推定され、竪穴住居約2000軒、掘立柱建物跡約400軒など、該期の遺構が多数検出されている。

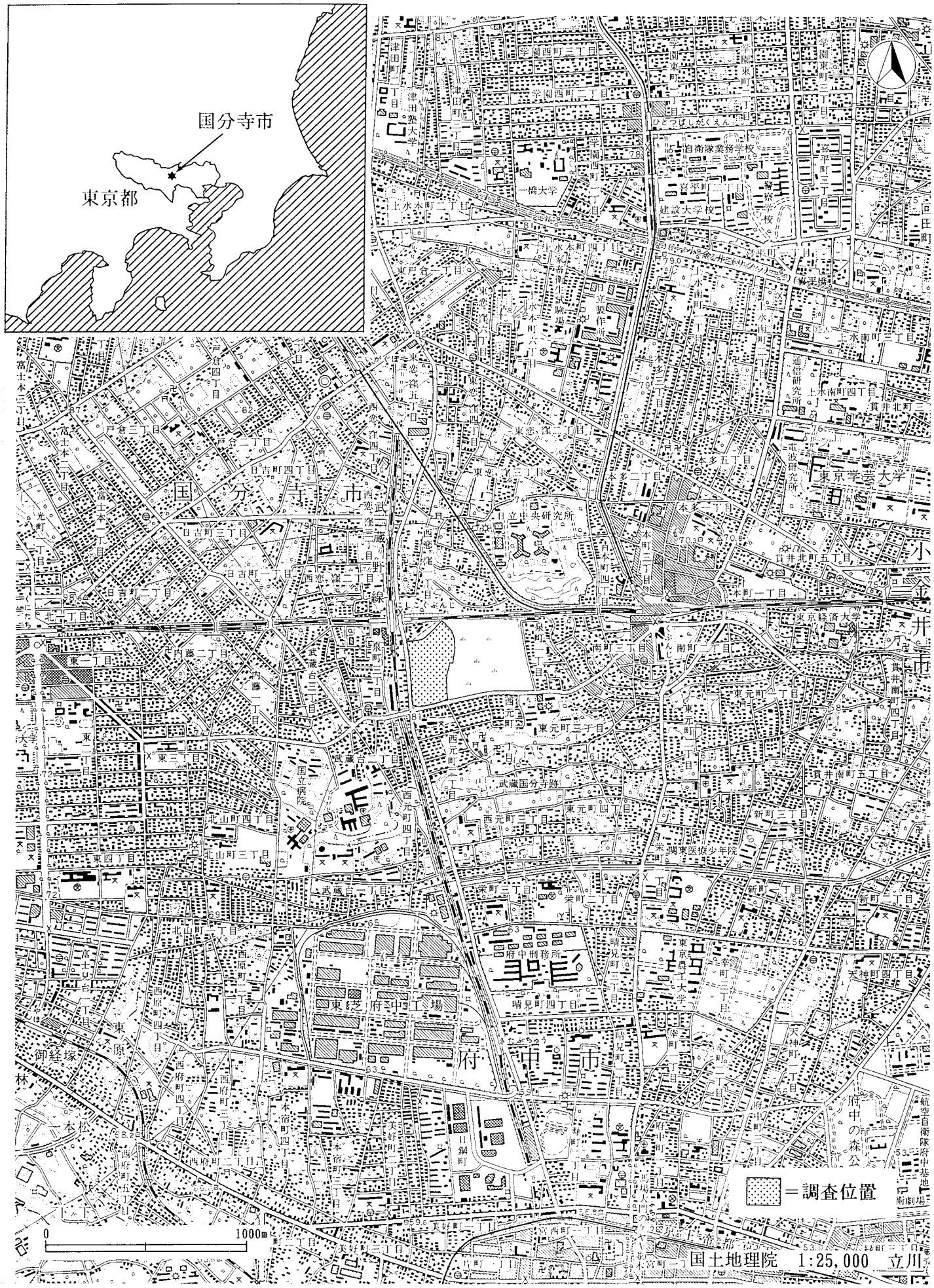
以上のように、古代律令期には、本遺跡周辺は、国分二寺と国府との一体化の中で武蔵国の生活・文化の中心地であったことが窺い知れる。その後、武蔵国分寺が衰退する時期については、発掘調査の結果から、寺院地、伽藍地内に竪穴住居が多く進出する10～11世紀代と推定されている。また、文献上では、元弘３年（1333年）に、足利尊氏の討幕に呼応して上野国で挙兵した新田義貞軍と鎌倉幕府軍との間で戦われた分倍河原の合戦に際し国分寺も焼失したとされる記述が残っている。

次に、中世以降では、古代「東山道武蔵路」の路線をほぼ踏襲したとみられる伝承鎌倉街道上道が、国分尼寺の伽藍を貫き、北側の台地に切り通しを作り、現府中街道の西側から西国分寺駅の東側に向かって南北に通過している。該期の遺跡の多くは、その路線に沿って立地している。尼寺の北側の舌状台地には伝祥応寺跡があり、伝承鎌倉街道に東面する土塁に囲まれた小規模な礫石を有する建物跡が検出されている。さらに北の西国分寺駅の南には恋ヶ窪廃寺跡があり、鎌倉街道に東面する溝跡や礫石建物跡、掘立柱建物跡、土橋状遺構、火葬墓等の遺構が多数検出されており、出土遺物などから13世紀末～15世紀末頃の寺跡として位置付けられている。このほか西国分寺駅の周辺域からは13世紀末の地下式土壙や15世紀末の瀬戸系灰釉華瓶などが検出されている。

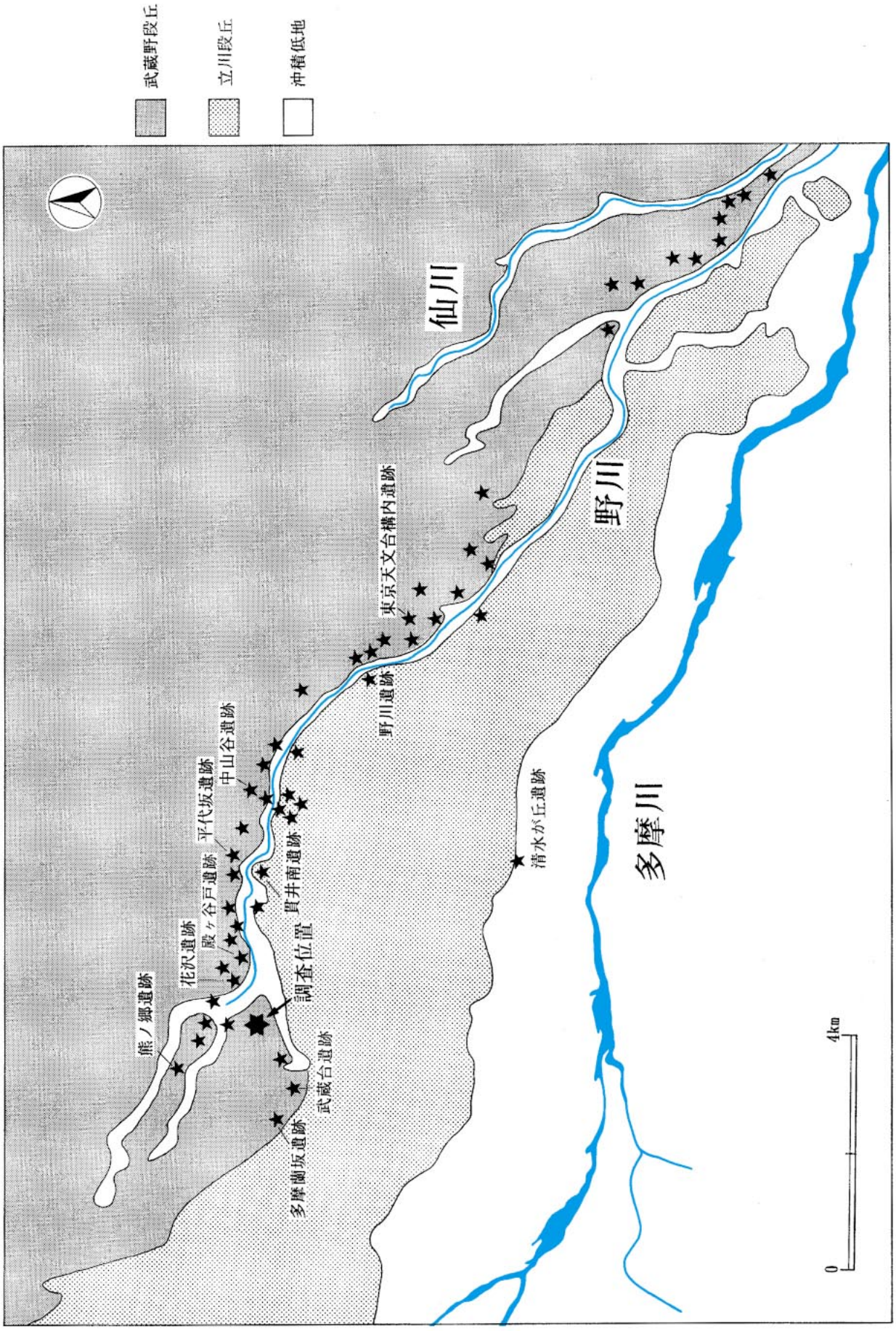
以上が調査区周辺の旧石器時代から縄文時代、奈良平安時代から中世にかけての遺跡群の概略である。その後、近世末までは、検出遺構や出土遺物といった調査事例からみても武蔵の国の中心地域としての役割は失われ、畑地化していき、明治22年に現 JR 中央線の前身である甲武鉄道が敷設され、戦後、東京郊外のベットタウンとして急速に市街地化されるまでは、武蔵野の原野風景を色濃く残す農村地帯であったようである。このことは、幕末に編纂された『新編武蔵風土記稿』の「恋ヶ窪村の条」や、昭和42年に書かれた甲野勇著の『武蔵野を掘る』などからも窺える。



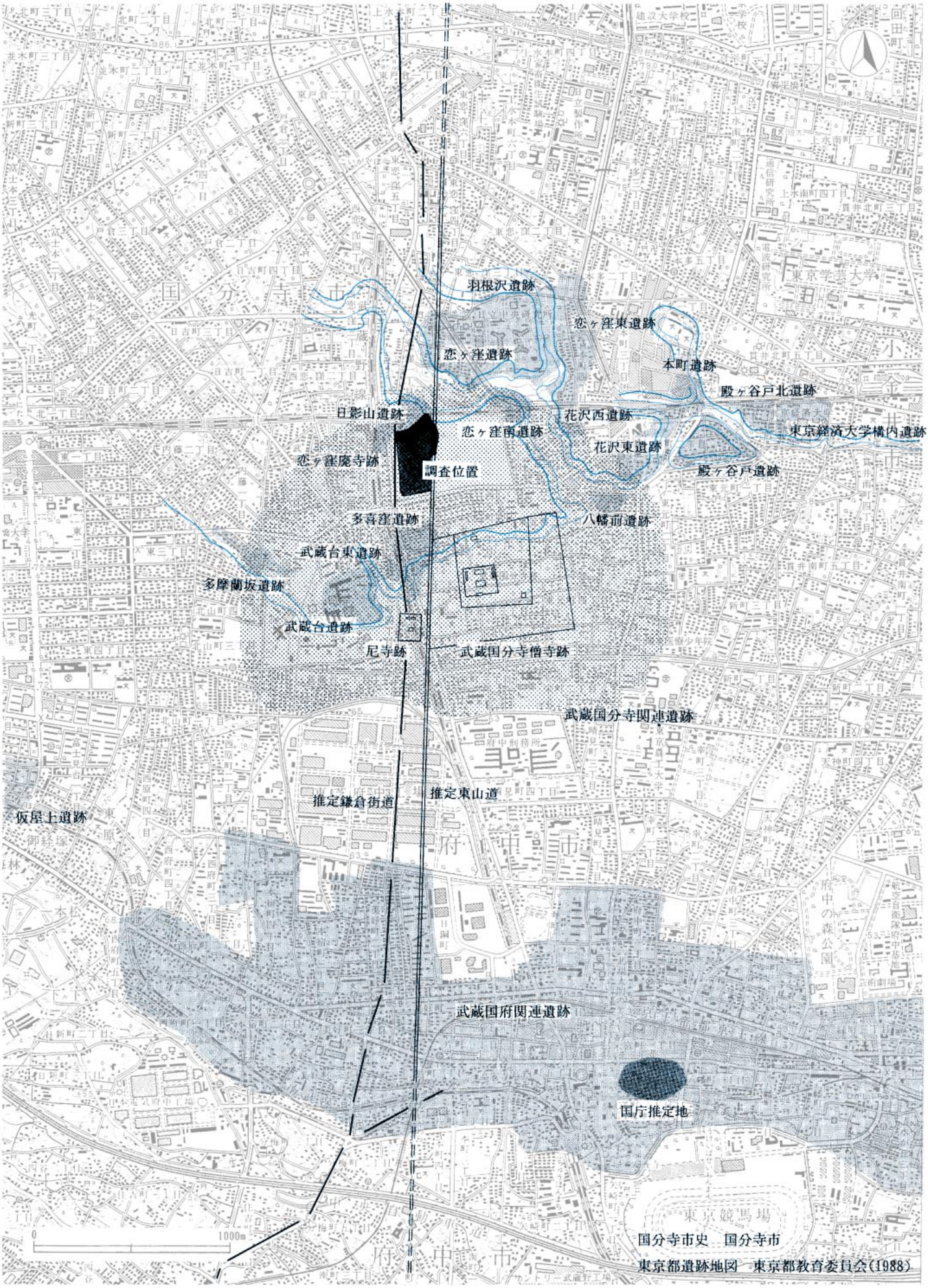
第1図　武蔵野台地と周辺の地形



第２図　調査位置図

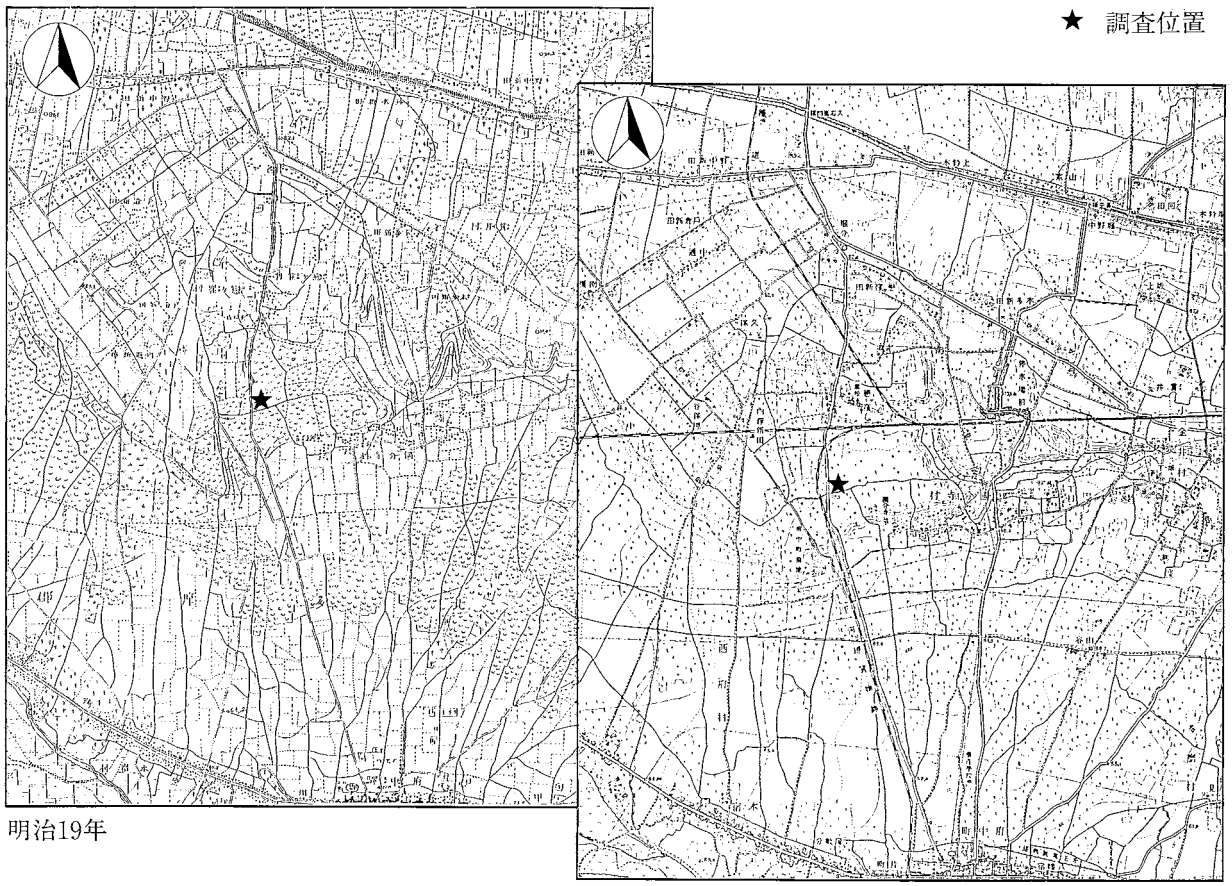


第３図　野川流域の遺跡分布図



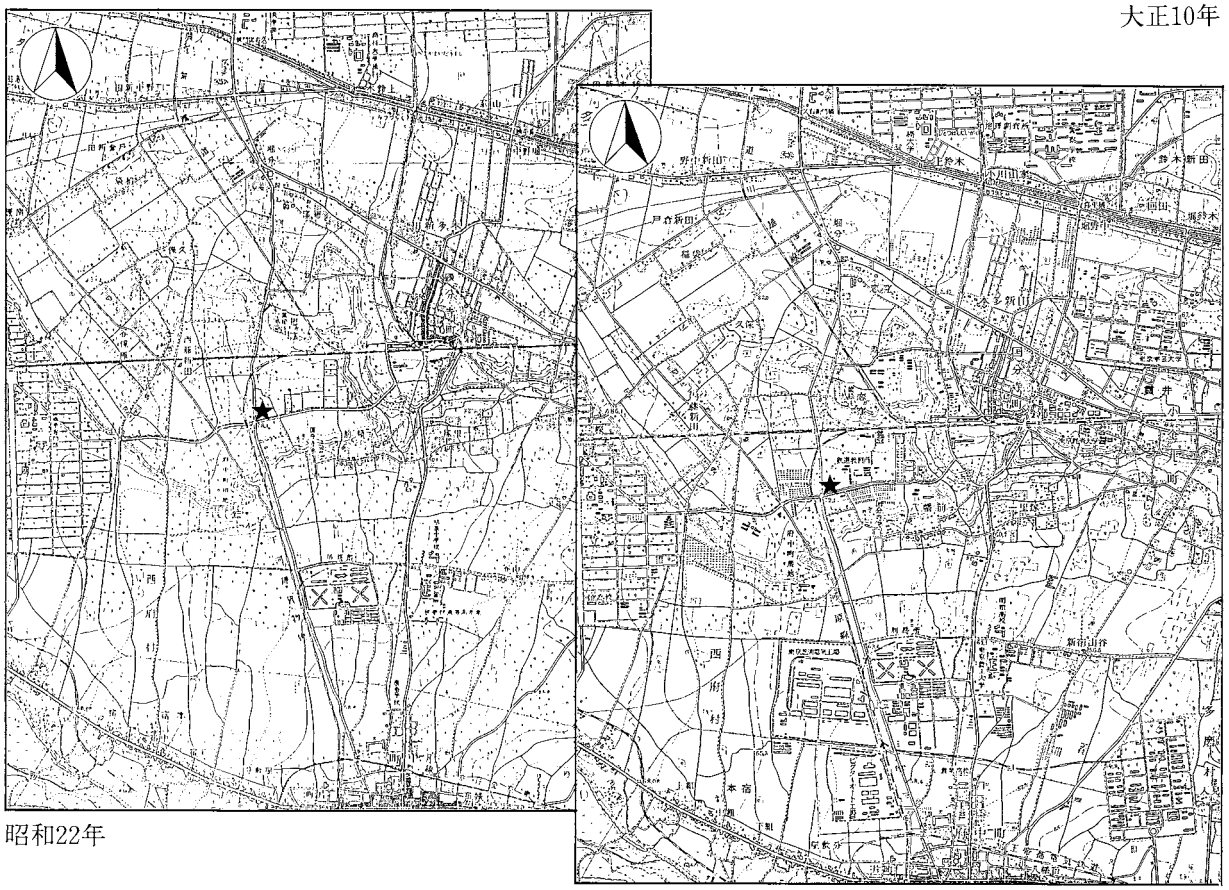
第４図　周辺の遺跡分布図

★　調査位置



明治19年

大正10年



昭和22年

昭和27年

国土地理院　1:25,000　立川

第５図　古地図による遺跡周辺の変遷図

3．調査方法

1）調 査 区 分（第6図）

本調査は、当初、平成5年11月から平成8年10月までの3カ年で発掘調査を、その後平成11年3月末までの2カ年で整理作業を実施する計画であった。各年度毎の調査面積は、全調査対象面積の67,561.92㎡を計画期間の3ヶ年で割り、1ヶ年を22,520.64㎡とした。初年度（平成5年度）は11月から3月末までの5ヶ月間であるため、その5／12にあたる9,091㎡、平成6年度・7年度はそれぞれ22,520.64㎡、平成8年度は7／12にあたる13,492.64㎡とした。

調査区分は、北側と東側の外周道路計画部分が調査開始当初は未買収であったため、それ以外の部分を北西角から順にA－1地区・A－2地区、中央をB地区、南側と外周道路部をC地区とし、順次調査を行うこととし、平成5年11月からA－1地区の調査を開始した。

その後、平成6年2月に開発事業の変更があったため、当初の調査区分とは無関係に各年度の面積比に応じ、新たに調査区の区分を行った。変更後の調査区分は、第6図に示したとうり、既に調査が終了している旧A－1地区を1区とし、平成6年度調査予定の南東部を2区、平成7年度調査予定の南西部を3区、平成8年度調査予定の北東部を4区とした。

更にその後（平成7年2月）、再度事業計画の変更があり、事業主の代表である国分寺市開発二部から調査団に対し「調査期間の短縮」の申し入れがあった。このため、緊急に調査団会議を開き協議した結果、整理作業の短縮はしないという条件の基に、調査体制の強化と充実を計り平成7年度中にすべての調査を終了させることとした。

最終的な、各年度毎の調査区分と調査面積は次のとうりである。

平成5年度調査　＝　**1区**　（9,091㎡）
平成6年度調査　＝　**2区**　（22,520.64㎡）
平成7年度調査　＝**3区・4区**（36,013.28㎡）

2）調 査 方 法

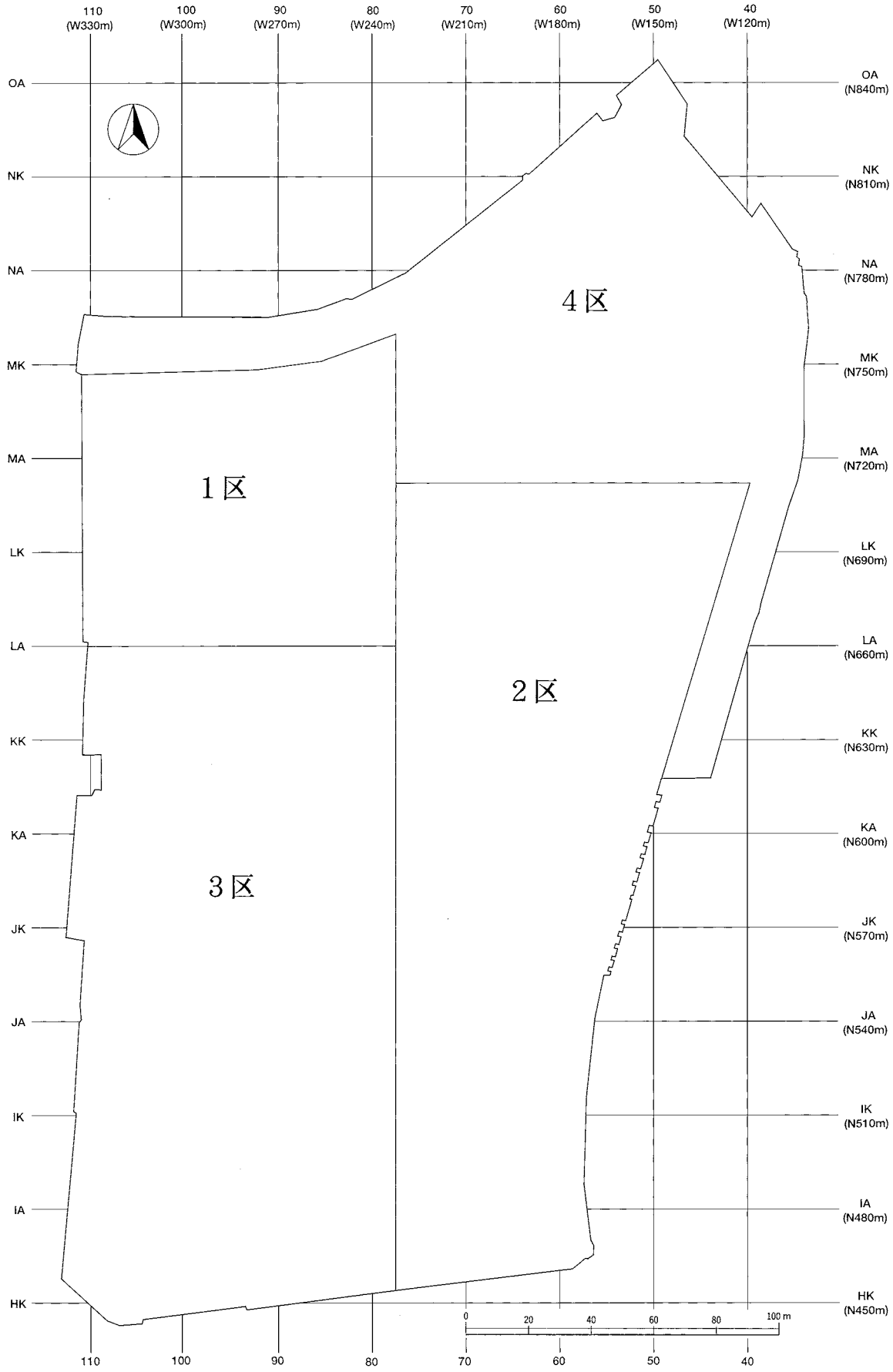
① グリッドは、本調査区が『武蔵国分寺跡』に含まれていることから、国分寺市遺跡調査会で設定した僧寺中軸線中心点を座標原点とする、最小単位が3m四方のグリッドを使用している。方位は、南北中軸線に対し真北が7°08′03″、磁北が0°38′03″それぞれ東偏する。

グリッド線に付された文字は、本調査地区が座標原点を起点とした座標系の第Ⅲ象限に含まれていることから、数字が南北グリッド線に東から西に、アルファベットが東西グリッド線に南から北に向かって振られている。

数字は、1グリッド（3m）ごとに1番ずつ増えていき、アルファベットは、2文字で表現され、頭の文字が20グリッド（60m）を1単位としてAから順に増え、後ろの文字が1グリッド（3m）ごとにAからTまで順に、AA～AT・BA～BT・CA～CTのように増えていく。

グリッドの呼称は、南西角のグリッド線の交点を、東西グリッド線（アルファベット）、南北線（数字）の順に、BC－198・MJ－220のように呼び表わす。

② 表土は全て機械掘りとし、包含層の掘削はスコップによる手掘りとした。



第６図　調査区分／グリッド設定図

③　遺構の確認は、基本的には歴史時代がⅡ層上面、縄文時代がⅢ層上面とした。また、旧石器時代は、９×９ｍの調査坑を調査区毎に数箇所設定し、遺物が検出された場合は拡張して調査する方法を採った。

④　遺物の取り上げについては、歴史時代は遺構出土以外の遺物を一括取り上げで、縄文時代・旧石器時代はトータルステーションを使用し全点出土位置を記録した。

⑤　遺構の実測は、基本的に１／20の縮尺で行った。

⑥　全体図の実測は、トータルステーションによる地形データ測量と空中写真による測量（業者委託）を併用した。

⑦　写真による記録は、白黒フィルム・リバーサルフィルムにより適時行った。また、SF－１（推定東山道武蔵路）の調査は、一部ビデオ撮影により記録した。

⑧　遺物番号の注記は、歴史時代の遺物が、Ｎ１－SF－１－１のように最初に「N」（西国分寺地区の頭文字)、次に「地区名」「遺構番号」「遺物番号」の順に、縄文包含層の遺物が、Ｎ２－52387のように「N」「地区名」「遺物番号」、遺構の遺物がＮ１－SI－１J－32のように「N」「地区名」「遺構番号」「遺物番号」の順に、旧石器時代の遺物が、Ｎ４－P－3852のように「N」「地区名」「P」「遺物番号」の順に記入している。

⑨　遺構番号は時代毎、遺構の種類毎に全地区を通じて通し番号を付した。

４．調査経過

本調査の経過の概要は、次のとうりである。尚、各年度毎の調査工程については、次頁のⅠ－表1. 調査工程表にまとめた。

平成５年11月15日、１区北側から重機による表土掘削を開始し、掘削の終了した所から歴史時代の調査を開始した。２月５日、縄文時代の調査を開始し、縄文時代の調査の終了した３月15日から旧石器時代の調査を開始した。３月31日、旧石器時代の調査終了をもって１区の全調査を終了した。

２区の調査は、平成６年４月22日より南側部分から開始したが、１区とは異なり調査面積が広いため、歴史時代の調査が終わった部分から順次、縄文時代、旧石器時代の調査を同時に進めていった。翌年３月31日北側部分の旧石器時代の調査終了をもって２区の全調査を終了した。

平成７年度の調査は、事業計画の変更により３区と４区を同時に調査することになったため、前年度の倍（１日120人体制）の作業員を確保し、４月５日から開始した。各地区とも２区の調査と同様に各時代毎の調査が終了した部分から順次、同時並行で進めていき、３月31日、４区の旧石器時代の調査終了をもって該年度の全調査を終了した。

整理調査は、発掘調査に平行して遺物の洗浄、注記等の作業は行っていたが、本格的な整理作業は、平成８年４月から実施した。平成８年度は、遺物の洗浄・注記・分類・登録・拓本、及び遺構の実測図の整理、遺構カードの作成などといった基礎的な作業を行った。平成９年度は、遺物の実測・トレース、土器の復元、遺物の写真撮影、遺構写真の焼き付け、遺構実測図のトレース作業などを行った。平成10年度は、主に報告書に掲載するための挿図や写真図版の作成、原稿執筆などの作業を行った。

発　掘　調　査

		平成５年			平成６年		平成７年											平成８年										
		11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
１区	歴史																													
	縄文																													
	旧石器																													
２区	歴史																													
	縄文																													
	旧石器																													
３区	歴史																													
	縄文																													
	旧石器																													
４区	歴史																													
	縄文																													
	旧石器																													

整　理　調　査

		平成８年											平成９年			平成10年												平成11年										
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺物関連	洗浄・注記																																				
	分類・登録																																				
	接合・拓本																																				
	実測・トレース																																				
	復元																																				
	撮影・焼付け・引伸し																																				
遺構関連	第Ⅱ原図作成																																				
	遺構カード																																				
	遺構トレース																																				
	写真整理・引伸し																																				
報告書作成	挿図・図版																																				
	観察表																																				
	原稿執筆																																				

Ⅰ－表1.調査工程表

5．層　序

1）基 本 層 序

本調査地区は、武蔵野段丘面上に立地しており、地層は礫層を基盤に武蔵野ローム・立川ローム・褐色を基調とした２枚の遺物包含層・表土層の順に堆積している。

調査区内の地形は多少の起伏はあるが全体的に見れば北から南、西から東に向かって緩やかな勾配で傾斜している。また、北東部（４区北東角）は、恋ヶ窪谷の南面に入ったノッチ部分の斜面肩にあたるため、谷方向に向かって急傾斜している。

遺存状況は、北側中央（１区の東側と４区西側）と中央東側（２区北部)、北西壁際（４区東壁）が鉄道学園当時の陸上競技場・野球場跡・テニスコートの造成工事でⅢ層からⅣ層中段までが大きく削平されていた。その他の部分については、学園以前のものと思われる大小の撹乱が入るものの比較的良好であった。

本地区での基本層序は次のように区分される。（第７・８図）尚、第７図はすべての層を表わすために便宜上、南東角の壁断面と中央やや北よりの深堀の断面を合体して作図している。

盛土層－ 小礫・ガラ・コンクリートなどを含む。鉄道学園造成時の盛土層。調査区全体を覆っている。

表　土－ 明灰茶褐色土。砂質で粘性は少ない。主に調査区の東部のみで確認できる。学園造成以前の表土層。

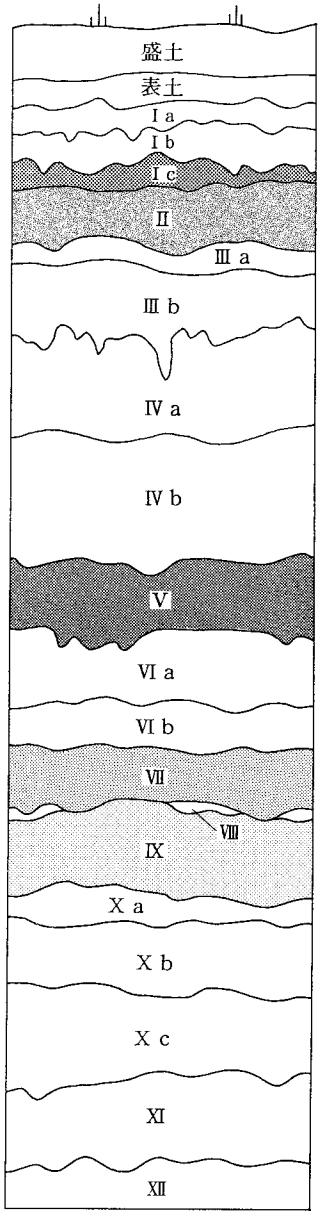
Ⅰａ層－ 灰褐色土。砂質で粘性は少ない。近代遺物を含む。

Ⅰｂ層－ 明黄灰褐色土。砂質で粘性は少なく、黒褐色土粒子・灰褐色土粒子を多く含む。中世･近世とした遺構の覆土は本層が主体となる。尚、**Ⅰａ層**と**Ⅰｂ層**は調査区南側では色調の違いにより区分されたが、全体的には、後世の耕作によるものであろう天地返しされている部分が多く､明確に区分される所は少ない。

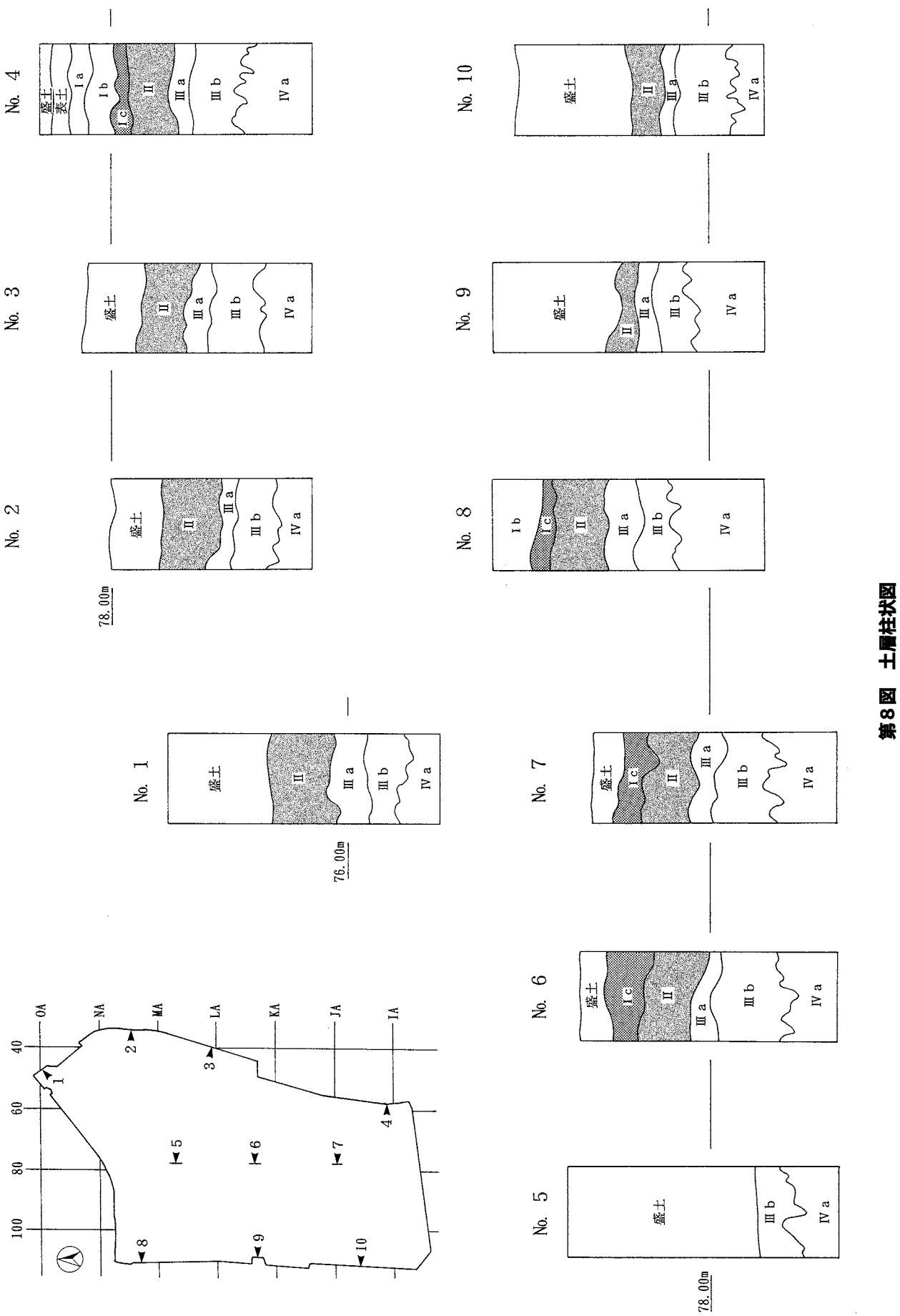
Ⅰｃ層－ 黒褐色土。締まり弱く、粒子が粗くボソボソしている。本層の残りは悪く、層として認識できるのは、１区北西部と２区南東部の一部のみである。古代とした遺構の覆土は本層が主体となる。

Ⅱ　層－ 暗褐色土。粒子は細かく下部へいくほど色調が明るくなり粘性・締まりも強くなる。縄文時代の遺物包含層。本層の上面で歴史時代の遺構確認を行う。層厚は、25～35㎝を測る。

Ⅲａ層－ 明褐色土。所謂ローム漸移層。粘性が強い。本層の上面で、縄文時代の遺構確認を行う。



第７図　土層断面模式図


No. 4
No. 3
No. 2
No. 1
No. 10
No. 9
No. 8
No. 7
No. 6
No. 5
盛土
表土
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
78.00m
76.00m
OA
NA
MA
LA
KA
JA
IA
40
60
80
100
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

第８図　土層柱状図

縄文時代の遺構確認を行う。層厚は、99～99cmを測る。

Ⅲb層－ 褐色ローム（ソフトローム層）。粘性が強く赤色スコリアを含む。旧石器時代の第１文化層。層厚は、約30cm前後。

Ⅳa層－ 褐色ローム。（ハードローム層）粘性が強く締まっている。旧石器時代の第２文化層。層厚は約30cm前後。

Ⅳb層－ 褐色ローム。（ハードローム層）旧石器時代の第３文化層。層厚は約50cm前後。

Ⅴ　層－ 暗褐色ローム。立川ローム第一黒色帯。粘質で硬く締まっている。層厚は約30cm前後。

Ⅵa層－ 褐色ローム。姶良 Tn 火山灰（AT）を含む。層厚は約20cm前後。

Ⅵb層－ 褐色ローム。Ⅵa 層に準ずるが、色調がやや暗い。旧石器時代の第４文化層。層厚は約20cm前後。

Ⅶ　層－ 暗褐色ローム。立川ローム第二黒色帯上部。層厚は約25cm前後。

Ⅷ　層－ 褐色ローム。層厚は薄く、ブロック状で検出される。

Ⅸ　層－ 暗褐色ローム。立川ローム第二黒色帯下部。層厚は約30cm前後。

Ⅹa層－ 暗褐色ローム。層厚は約10cm前後。

Ⅹb層－ 暗褐色ローム。層厚は約20cm前後。

Ⅹc層－ 褐色ローム。橙色粒子を多く含む。旧石器時代の第５文化層。層厚は約35cm前後。

ⅩⅠ層－ 褐色ローム。下部に橙色粒子をブロック状に含む。層厚は約30cm前後。

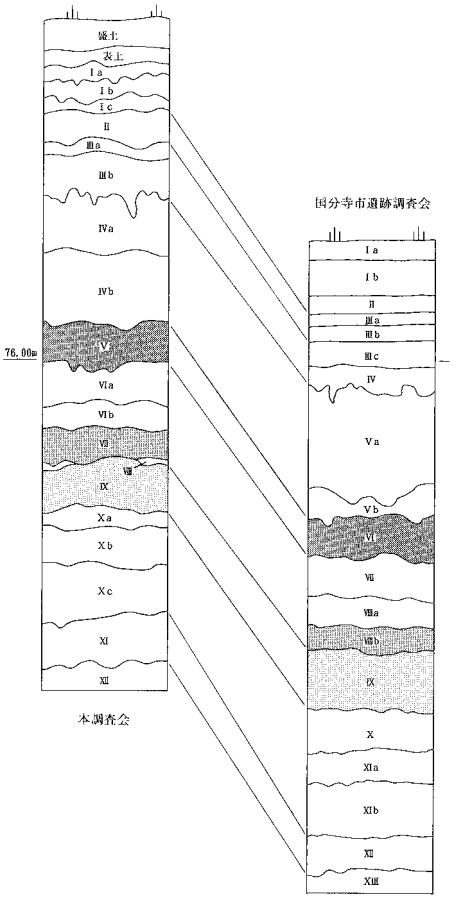
ⅩⅡ層－ 褐色ローム。この層から武蔵野ローム層。粘質で橙色粒子を含む。層厚は約30cm前後。

2）層 序 の 対 比

本調査区の位置する旧国鉄中央鉄道学園跡地では、開発事業に伴う事前調査として当調査会の他にも平成７年度からは「東京都埋蔵文化財センター・西国分寺分室」及び「国分寺市遺跡調査会」が同時に調査を行っている。

このため、調査方法などは事前に三者協議を行い基本的な部分ではおおよその統一を計っているが「国分寺市遺跡調査会」との基本層序の呼称には若干の差異があるため、右に基本層序の対比図を記載しておく（第９図）。

（板野晋鏡）



第９図　層序の対比図

引用・参考文献

・『国分寺市史』上巻　国分寺市史編さん委員会　昭和61年。

・『武蔵台遺跡Ⅰ』都立府中病院内遺跡調査会　1981年。

・『武蔵台遺跡Ⅱ』－資料編１　都立府中病院内遺跡調査会　1984年。

・『武蔵国分尼寺跡Ⅰ』国分寺市教育委員会　平成６年。

・『武蔵国分寺のはなし』国分寺市教育委員会　平成元年。

・『大昔の国分寺』国分寺市教育委員会　1995年。

・『多摩蘭坂遺跡』恋ヶ窪遺跡調査会　1980年。

・『多摩蘭坂遺跡Ⅱ』国分寺市遺跡調査会　平成９年。

・福田信夫「武蔵国分寺と古代道路」『古代文化』VOL.49－特集東山道をさぐる－（財）古代學協會　平成９年。

・塚原二郎「武蔵国府と古代道路」『古代文化』VOL.49－特集東山道をさぐる－（財）古代學協會　平成９年。

・『武蔵国分寺跡北西地区の遺跡発掘調査報告書』－推定鎌倉街道－西国分寺地区遺跡調査会　平成８年。

Ⅱ．旧石器時代

１．旧石器時代の調査

１）発 掘 調 査

旧石器時代の調査は、各調査区毎に９×９ｍの調査坑を設定し、基本的には人力による掘削で掘り進めて行き、遺物・遺構が確認された場合には調査坑を適宜拡張する方法を採った。その結果、２区（平成６年度）の北側および４区の西側において、Ⅳ層を中心として多量の遺物が確認されたため広範に拡張し調査を行った。調査範囲と発掘深度は、第10図に示す通りであり、その総調査面積は、9,200㎡におよんでいる。土層断面図は第11図に示した。

２）整 理 作 業

遺物の分類は、まず、石器と礫とに大別し、次に石器については器種別の分類、石質による母岩別の分類などの細分類を行い、礫は完形礫と破砕礫に二分した。

母岩分類は、接合関係と遺物の分布状況を考慮しながら、同じ石質で、肉眼での観察において判別可能なものを「同一母岩」とし、肉眼での判別が不可能なものについては「単体資料」とした。

石器の接合作業は、作業担当者の根気と努力により、多くの接合資料を得ることができたため、時間の許す限りこの作業を母岩分類と並行しながら、何度も繰り返し行った。

礫については、石質分類、被熱（赤化）、タール状の付着物（付着物）の有無を観察した後、破砕礫の接合作業を行った。

石器と礫の平面分布を個々に概観すると、その分布にはそれぞれ幾つかの集中部があることが看取できた。このため、それらを視覚的に小区分し、石器の集中部については「ブロック」、礫については「礫群」と呼称し、それ以外から出土したものは「ブロック外出土」とした。

また、調査時では礫の集中部を「SR」と呼称して調査をしたが、「SR」を全て「礫群」に変更している。

なお、本報告における作業分担としては、器種分類、母岩分類および文化層の分離を月村桂子が行い、原稿執筆を国武貞克が行った。

３）文 化 層 の 認 定

各文化層の設定は、石材・母岩・接合関係などを考慮しながらも、基本的には遺物の垂直分布を検討して、出土層位を基準に設定した。

４）接 合 資 料

接合資料については、行われている作業の違いを簡潔に示すため次のように類型化して記載した。

Ⅰａ類…剥片剥離の過程を示す接合資料のうち石核を含むもの。

Ⅰｂ類…Ⅰａ類と同様の接合資料であるが、石核を含まないもの。

Ⅱ類…製品とその調整剥片の接合資料。

Ⅲ類…折損や同時割れを示す接合資料。

整理作業において得られた接合資料はすべて図化して掲載した。また製品として分類された石器についても全点図化して掲載した。

以下に文化層ごとの分布状況や出土遺物の説明を述べるが、遺物の詳細（石質・計測値・座標等）につ

いては、第１～３表の遺物観察表にまとめ、巻末添付の CD-ROM に収録した。各表のファイル名は「**21PIKH.xls**」、「**22PIKH.xls**」、「**23PIKH.xls**」である。

２．概　要

武蔵国分寺北西地区遺跡の旧石器時代の調査では、石器総数1123点、礫総数1501点が出土している。遺物はⅢa 層からⅩa 層まで垂直分布幅をもって調査区北側を中心に分布しているが、それぞれに平面的、層位的なまとまりを見せる。これらのまとまりから、接合や母岩別資料の分析などにより有意な単位を抽出し、５枚の文化層を認定し、それぞれにブロック、礫群を捉えた。個々の文化層の詳細な記述をする前に、以下に各文化層ごとの概要を述べる。

第１文化層

Ⅲa 層からⅢb 層を遺物の主体な出土層位とする。出土遺物は石器27点、礫59点であり、ブロック及び礫群が、調査区の南側に２カ所ずつ、調査区の北側に１カ所ずつ検出された。また調査区全体にわたって、単独に石器が出土している。石器群の主体となる製品類は細石刃と尖頭器である。細石刃は２号ブロックから、尖頭器は１号ブロックとブロック外から出土している。石材は細石刃が黒曜石で、尖頭器が黒色ガラス質黒色安山岩およびホルンフェルスである。

第２文化層

Ⅲb 層下部からⅣb 層上部を遺物の主体な出土層位とする。出土遺物は石器1039点、礫1429点であり、調査区北側が分布の中心で、ブロック22カ所、礫群20カ所が検出されている。他には２区北側にブロックと礫群が１カ所ずつ、調査区西側にブロックが２カ所検出されている。合計でブロック25カ所、礫群21カ所が検出され、本遺跡の旧石器時代の資料の中で最も中心となる文化層である。特徴的な製品類は石刃を素材とした二側縁加工のナイフ形石器と尖頭器である。剥片剥離工程を示す良好な接合資料が多数検出されている。後に詳述するが、本文化層は異なる２時期の石器群に分かれた。石材は硬質頁岩、珪質頁岩や黒曜石、およびチャートが主に用いられている。

第３文化層

Ⅳb 層下部を遺物の主体な出土層位とする。出土遺物は石器19点、礫９点であり、調査区南側で２カ所のブロックが検出された。少数の製品や剥片が散漫に分布し、礫群は形成されていない。特徴的な製品類はナイフ形石器と角錐状石器である。石材は黒曜石とチャートが主体に用いられている。

第４文化層

Ⅵ層下部を遺物の主体な出土層位とする。出土遺物は石器３点であり、調査区の北側で石核と剥片が１点ずつ、調査区の南側で剥片が１点検出された。ブロックや礫群は形成されていない。石材はすべてホルンフェルスである。

第５文化層

Ｘａ層を遺物の主体な出土層位とする。出土遺物は石器４点、礫４点であり、調査区北端で検出された。ブロックや礫群は検出されていない。特徴的な石器としては石刃である。石材は硬質細粒凝灰岩と頁岩、ホルンフェルスである。

また、その他に４区北側のⅣb 層中から、炭化物が数点検出されている。これについては、樹種同定および放射線年代測定（Ⅵ．－４に記述）を行った。

３．第１文化層

Ⅲａ層からⅢb 層にかけて検出された（第12図）。検出された遺構は３区南側にブロックが２カ所、４区の中央部にブロックが１カ所で、それぞれのブロックに礫群が１カ所ずつ伴っている。出土石器は細石刃２点、尖頭器６点、ナイフ形石器３点、掻器１点、二次加工のある剥片１点、剥片９点、砕片５点で、合計27点である。礫は59点出土した。

第１文化層は出土層位がⅢａからⅢb 層において出土した石器群をまとめており、第１文化層を構成する３ブロック、３礫群およびブロック外出土遺物はそのすべてが共時性を有するわけではない。まず検出された３ブロックはそれぞれ90m から260m も離れており、また母岩の共有関係もない。出土層位は２号ブロックと２号礫群がⅢａ層下部で、１号ブロックと１号礫群及び３号ブロックと３号礫群はⅢb 層中部からⅢb 層下部である。特徴的な出土遺物としては、詳細は各ブロックの項で述べるが、１、３号ブロックからは尖頭器および尖頭器製作剥片、２号ブロックからは細石刃が検出されている。

１）石 器

１号ブロック

〈出土状況〉（第13図）

３区南側の HP－79グリッドに位置し、合計３点の石器が長径1．5m、短径１m の楕円状の広がりをもって分布する。出土層位はⅢb 層下部である。本ブロックは１号礫群の分布範囲の北東側に分布する。

〈母岩別資料〉（第13図）

保有石材はガラス質黒色安山岩３点で、１母岩が認定され、そのすべてが接合している。尖頭器製作剥片の接合である。３点は40cm から60cm の距離をおいて散在している。

〈出土石器〉

出土石器は剥片３点である。

〈接合資料〉

Ⅱ類１例である。

接合資料２（第17図**16**）は GBA １でⅡ類。尖頭器製作剥片３点の接合である。ガラス質黒色安山岩の板状の剥片を素材にし、素材の主要剥離面を打面として16c、16a、16b の順に剥離されている。接合状態から16c の剥離後、なお３枚の調整剥片が剥離されていることがわかる。図面では16a と16b が接合した状態で示されているが両者は別個の独立した剥片である。素材の主要剥離面には全く調整が施されておら

ず、16a と16b の背面に残る調整も剥離角が大きいことから、尖頭器の調整の中でも未だ初期段階の調整であるといえる。16a と16b は分厚くて打面が大きいことから、素材を粗く剥離して整形した剥片と考えられる。加工された尖頭器は搬出されて残っていない。

２号ブロック

〈出土状況〉（第13図）

３区南側の IO－103～IQ－103グリッドに位置し、合計７点の石器が長径3.6m、短径0.8m の楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢa 層下部である。第17図13の細石刃はブロックの東端で出土している。本ブロックは２号礫群と重複している。

〈母岩別資料〉（第13図）

保有石材は黒曜石５点、ガラス質黒色安山岩２点で３母岩認定された。Ob１にのみ剥片剥離の痕跡が認められる。Ob１は細石刃２点と砕片２点で構成され、細石刃の小規模な剥離が行われたと考えられる。他に GBA３の厚手の縦長剥片が搬入されている。

〈出土石器〉

出土石器は細石刃２点（第17図13、15）、剥片２点、砕片３点である。

13（第17図）は細石刃。線状に残る打面は調整打面で頭部調整も行われている。背面には２枚の主要剥離面と同方向の先行剥離が認められ、末端部は折損している。主要剥離面側へやや湾曲している。

〈接合資料〉

Ⅲ類１例である。

接合資料１（第17図**15**）は Ob１でⅢ類。細石刃が中央で折損した接合。背面に２本の稜をもち打面と末端部を折損している。

３号ブロック

〈出土状況〉（第14図）

４区中央部の MO－62～MQ－62グリッドに位置し、合計６点の石器が南北25m のやや弧状の広がりをもって分布している。石器は散在した状態で分布しているが、Ⅲb 層に分布している３号礫群と分布範囲が重なっていることから、１つのブロックとして第１文化層に含めた。出土層位はⅢb 層中部から下部にかけてである。本ブロックは３号礫群と重複している。

〈母岩別資料〉（第14図）

保有石材は硬質頁岩１点、ガラス質黒色安山岩２点、黒曜石２点、ホルンフェルス１点である。すべて単体で剥片剥離の痕跡は認められない。きわめて広い範囲に散在している。

〈出土石器〉

出土石器は尖頭器２点（第16図１、２）、剥片３点、砕片１点である。

１（第16図）は尖頭器。縦長剥片を素材にし周縁部の表裏両面に細かく連続する調整を施している。裏面側へやや湾曲している。

２（第16図）は尖頭器。厚みのある剥片を用いやや粗雑な調整を両面に施している。ステップやヒンジフラクチャーが多く認められ側縁も直線にならず基部に厚みを残している。

14（第17図）は剥片。背面の末端に丸みを帯びた礫面を残し主要剥離面側へやや湾曲することから小形

の円礫から剥離されたと考えられる。打面は単剥離面である。

ブロック外出土石器（第15図）

ブロック外からは尖頭器４点（第16図３～６）、ナイフ形石器３点（第16図７～９）、掻器１点（第17図10）、二次加工のある剥片１点（第17図11）、剥片１点（第17図12）、砕片１点が出土した。

3（第16図）は尖頭器。LM－75グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。横長剥片を素材にし、周縁部の表裏両面に粗く平坦な剥離を施している。背面の基部付近には右側縁からの調整により、ヒンジフラクチャーが続けて起こったために高く段が残っている。基部は正面からの力により折損している。

4（第16図）は尖頭器。LM－75グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。両面に丁寧な平坦な調整が加えられて、断面凸レンズ形に加工されている。基部は裏面からの力により折損している。実測図の上下が逆になり、最大幅が中央よりやや下に位置する形になる可能性もある。

5（第16図）は尖頭器。JI－112グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。表裏両面に丁寧な平坦な調整が加えられて細身の断面凸レンズ形の尖頭器に加工されている。中央部のやや上寄りの左側縁からの調整がヒンジフラクチャーを起こし段ができている。基部は表面からの力により折損している。

6（第16図）は尖頭器。KD－104グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。表裏両面に丁寧な調整が加えられ、５と同様に細身の断面凸レンズ形の尖頭器に加工されている。基部は表面からの力により折損している。

7（第16図）はナイフ形石器。KE－102グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。表面に、裏面と対向する剥離面をもつ黒曜石の縦長剥片を素材にし、左側縁と右側縁の基部にブランティングを施し涙滴形に加工している。基部には折れ面を残置している。

8（第16図）はナイフ形石器。HM－98グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面に、裏面と対向する剥離面をもつ縦長剥片を素材にし、右側縁の表面側と左側縁の裏面側に平坦な調整を加えている。先端部は先端からの力によりわずかに折損している。

9（第16図）はナイフ形石器。IP－100グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。縦長剥片を素材にし、右側縁の先端部と左側縁の基部にブランティングを施している。基部は表面からの力により折損している。

10（第17図）は掻器。ND－63グリッドから出土し、３号ブロックの約10m 北に分布している。小形の横長剥片の末端に連続する剥離を加え刃部を作出している。打面は表裏両面からの垂直な剥離によって除去されている。

11（第17図）は二次加工のある剥片。LJ－46グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面が礫面に覆われた縦長剥片の左側縁の背面側と、右側縁の主要剥離面側に剥離が認められる。

12（第17図）は縦長剥片。LD－53グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面に礫面を残し中央に高い稜が通る。末端部には、主要剥離面と対向する剥離面をもっている。打面部は折損している。

２）礫

第１文化層では検出された３カ所のブロックにそれぞれ礫群が共伴したため、それぞれの礫群を、１号～３号礫群とした。

１号礫群（第18図、図版12－６）

３区南側の HP－79グリッドに位置し、長径1.8m、短径1.2m の楕円状の広がりをもつ。構成礫は18点で、うち６割が焼け礫である。接合は礫群内で完結する。石材は砂岩16点、チャート１点、礫岩１点である。礫群は、１号ブロックと重複して分布する。

２号礫群（第18図、図版12－７）

３区南側の IO～IQ－103グリッドに位置し、長径3.6m、短径1.2m の楕円状の広がりをもつ。構成礫は19点で、焼け礫はない。接合は礫群内で完結する。石材はホルンフェルス17点、砂岩１点、閃緑岩１点である。礫群は、２号ブロックと重複して分布する。

３号礫群（第18図）

４区中央の MN～MO－63グリッドに位置し、長径17.5m、短径13.7m の不整円形状の広がりをもつ。構成礫は16点で、うち１割が焼け礫である。接合はない。石材は砂岩10点、チャートが２点、閃緑岩１点、硬質砂岩１点、頁岩１点、ホルンフェルス１点である。礫群は、３号ブロックと重複して分布する。

Ⅱ－表１　第１文化層　母岩別器種一覧表

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	細石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1		1													2
HSh単	1																1
Ch単								1				1					2
GBA１											3						3
GBA３											2						2
GBA単	3										1						4
Ob１										2		2					4
Ob単		1									1	2					4
Ho単	2	1									2						5
合計	6	3		1				1		2	9	5					27

Ⅱ－表２　第１文化層　母岩別器種一覧表（１号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	細石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
GBA１											3						3
合計											3						3

Ⅱ－表３　第１文化層　母岩別器種一覧表（２号ブロック）

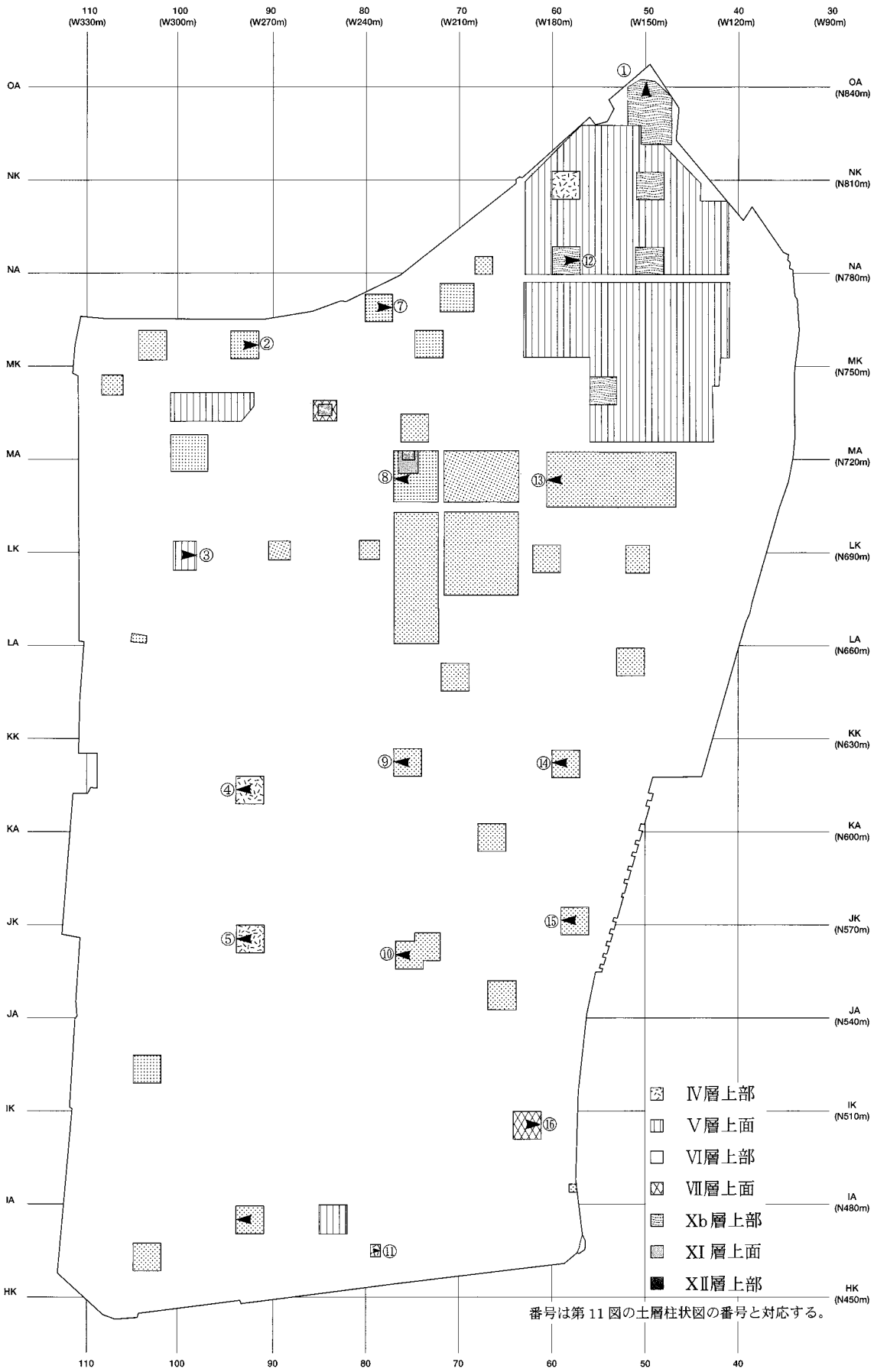
	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	細石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
GBA３											2						2
Ob１										2		2					4
Ob単												1					1
合計										2	2	3					7

Ⅱ－表４　第１文化層　母岩別器種一覧表（３号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	細石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HSh単	1																1
GBA単	1										1						2
Ob単											1	1					2
Ho単											1						1
合計	2										3	1					6

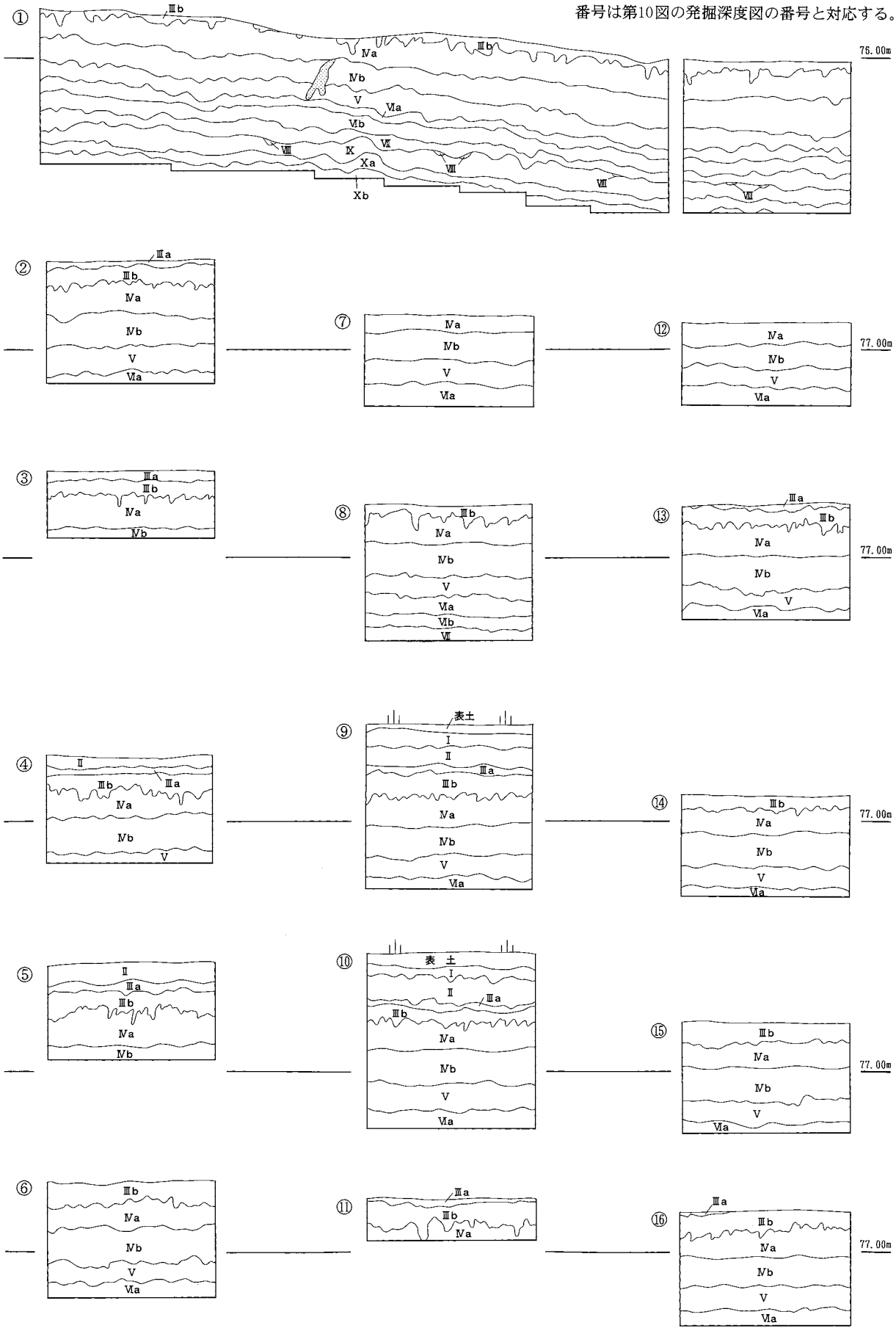
Ⅱ－表５　第１文化層　母岩別器種一覧表（ブロック外）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	細石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1		1													2
Ch単								1				1					2
GBA単	2																2
Ob単		1															1
Ho単	2	1									1						4
合計	4	3		1				1			1	1					11

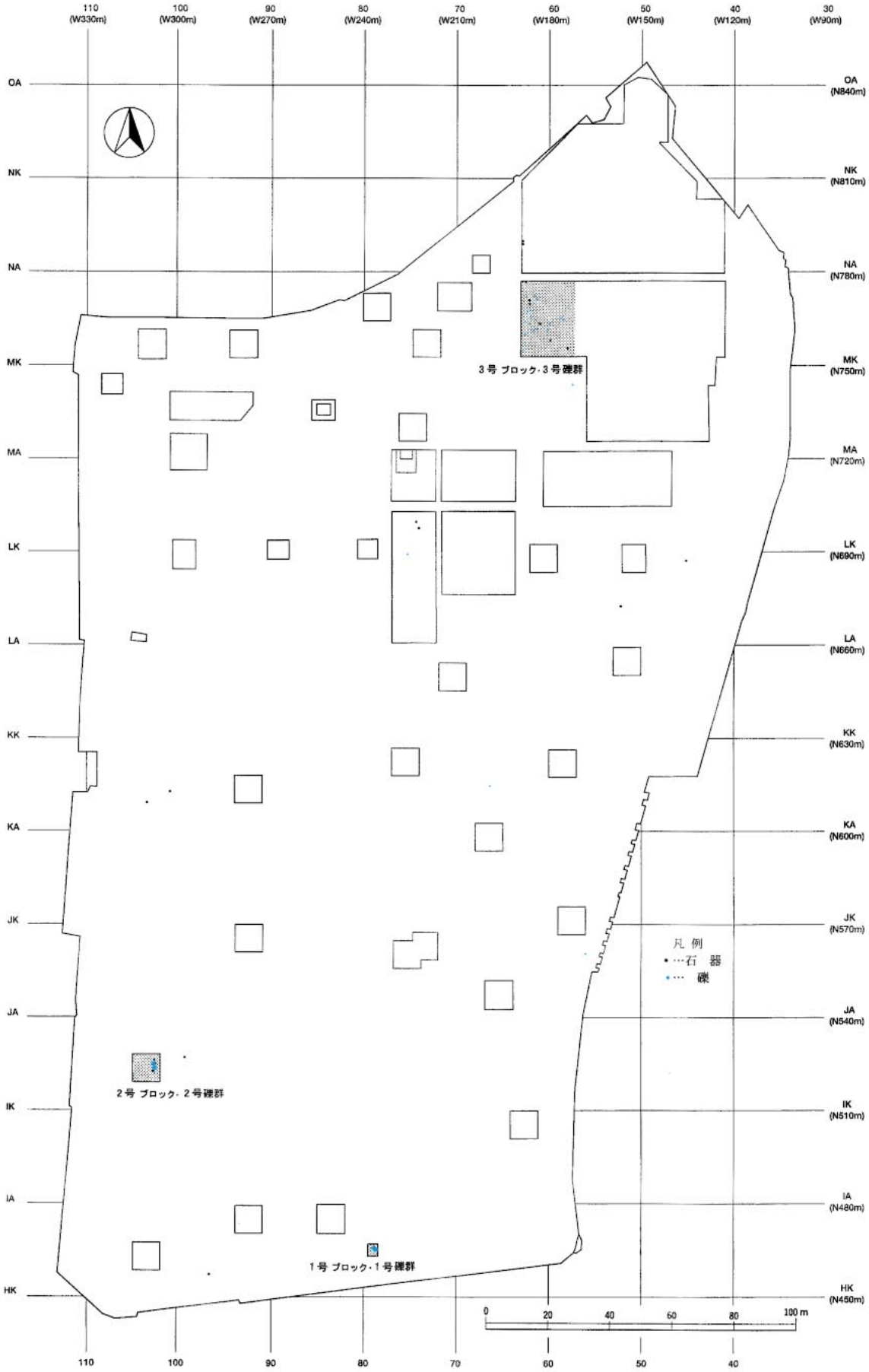


第10図　旧石器時代調査範囲・発掘深度図

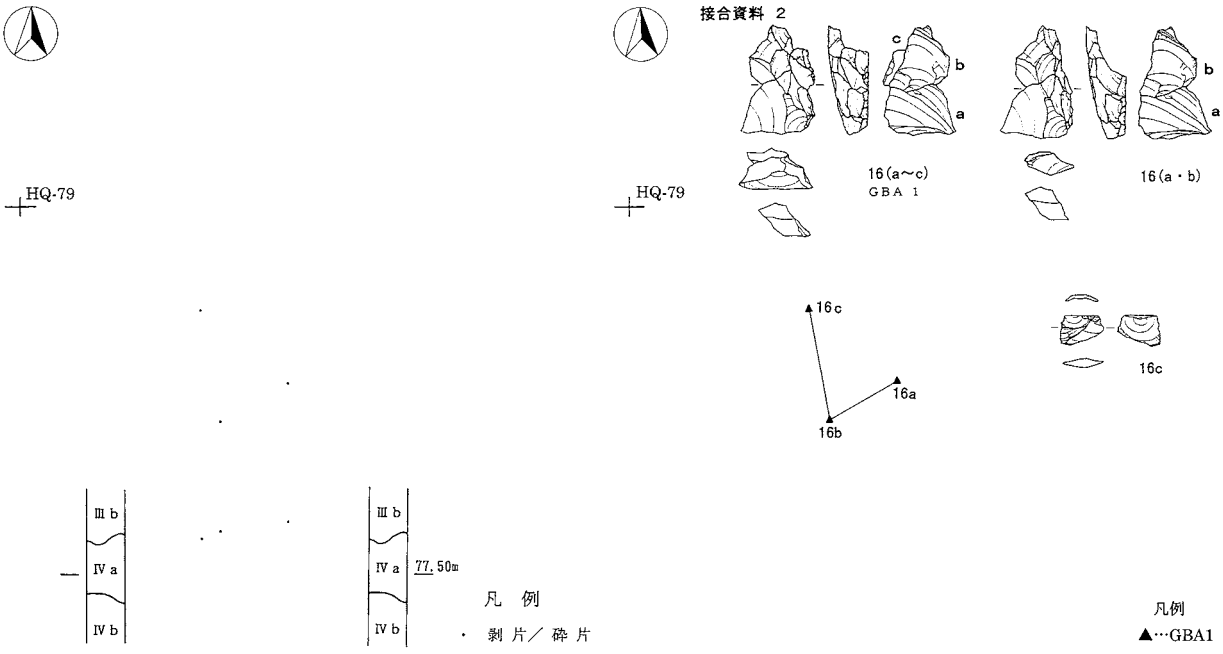
番号は第10図の発掘深度図の番号と対応する。



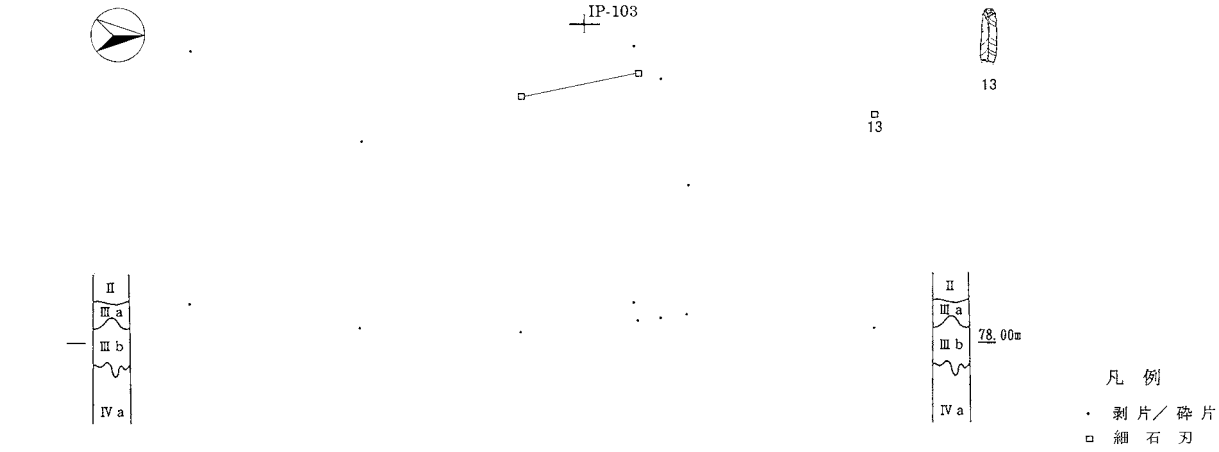
第11図　土層断面図



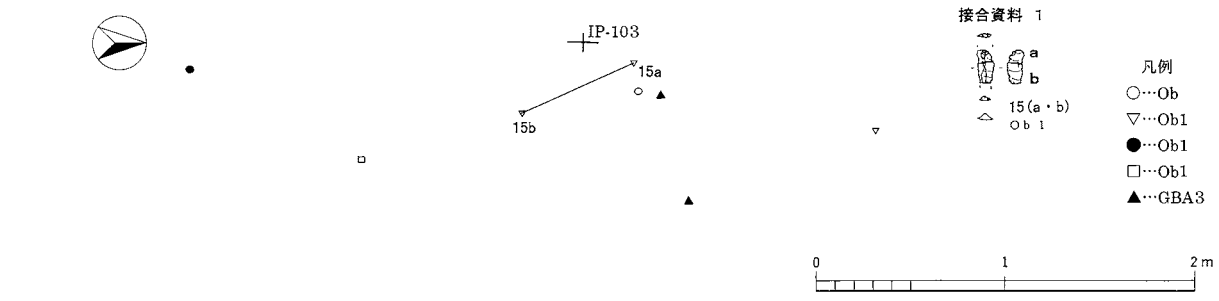
第12図　第１文化層　ブロック・礫群概念図



1号ブロック遺物分布　　母岩別資料分布

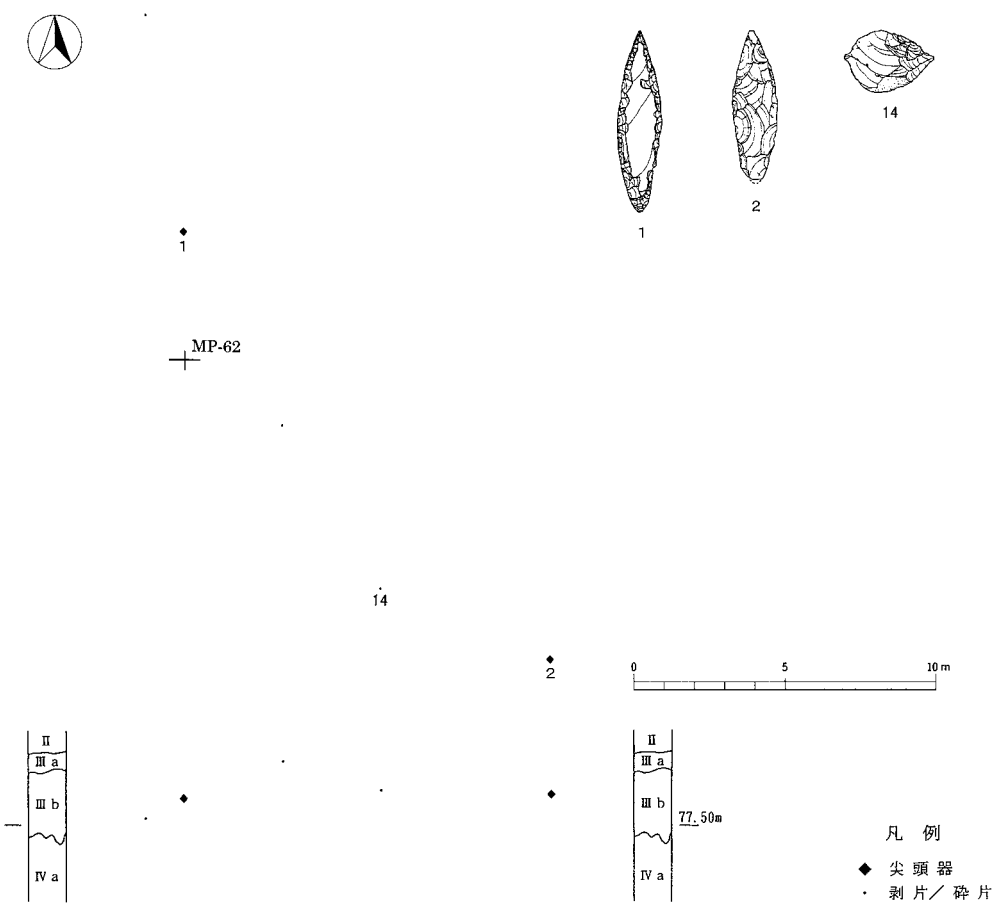


2号ブロック遺物分布

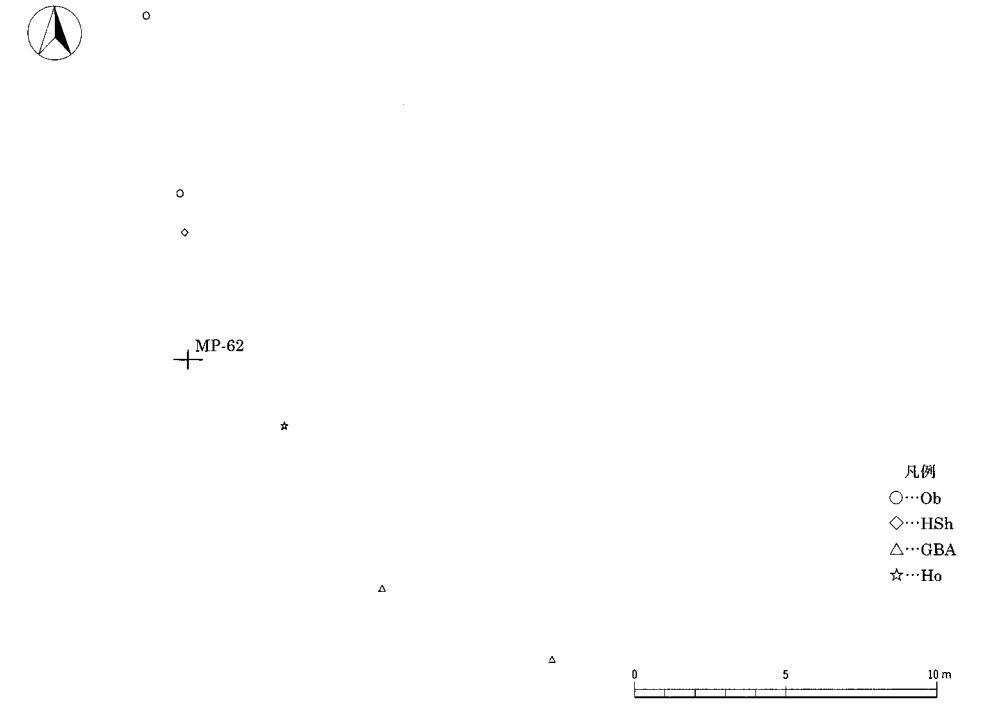


母岩別資料分布

第13図　第１文化層　ブロック別・母岩別資料分布図（１）

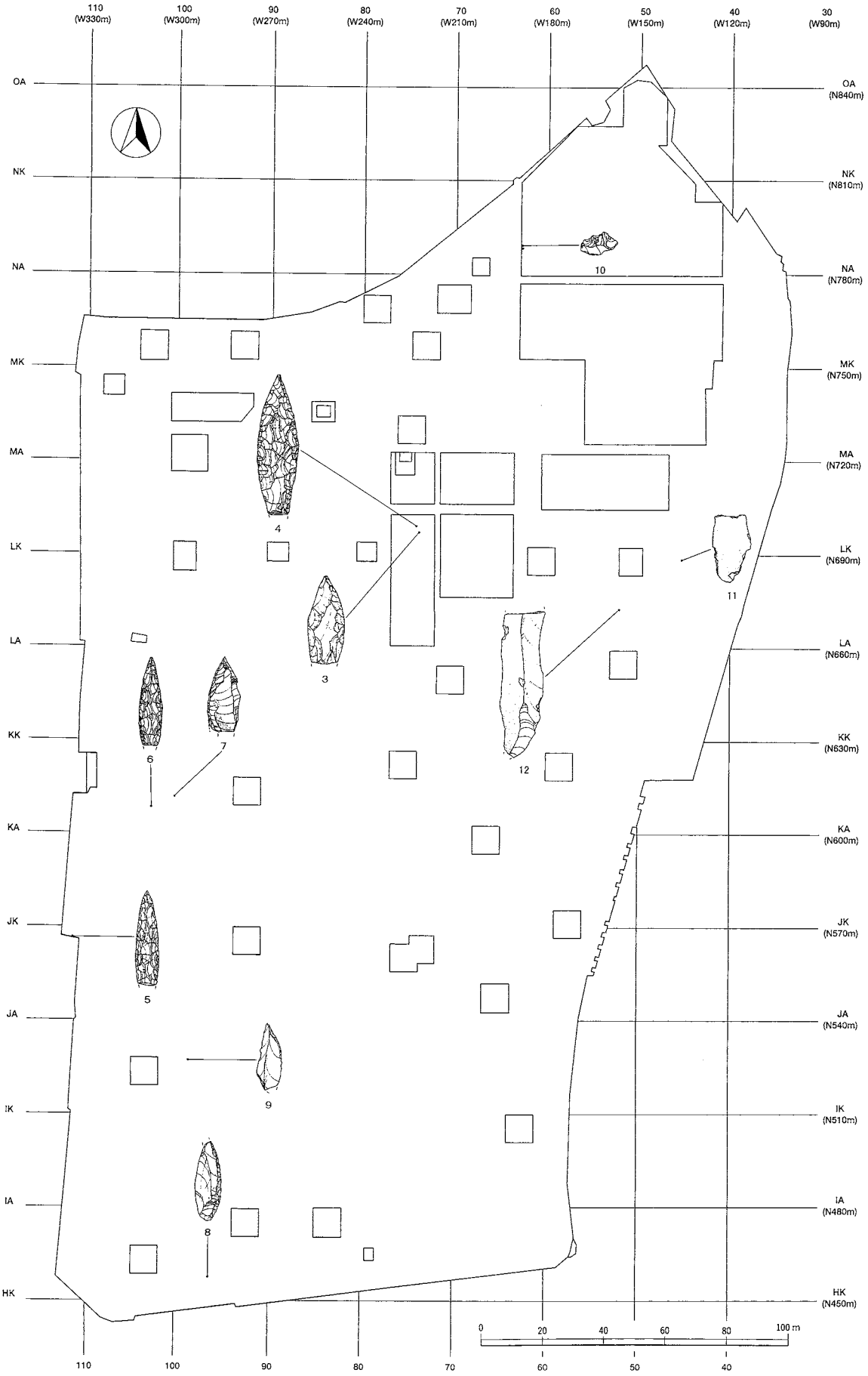


3号ブロック遺物分布

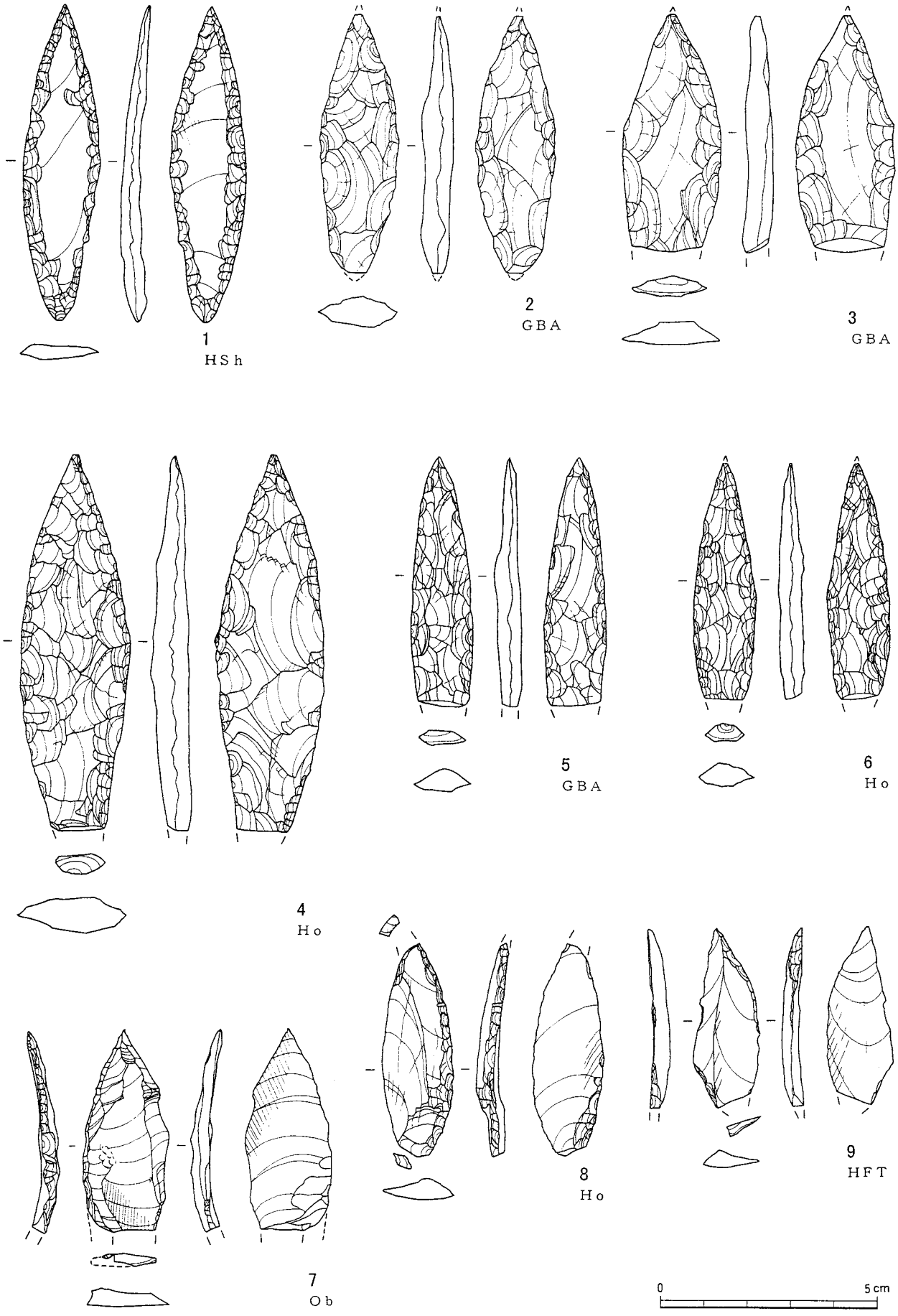


母岩別資料分布

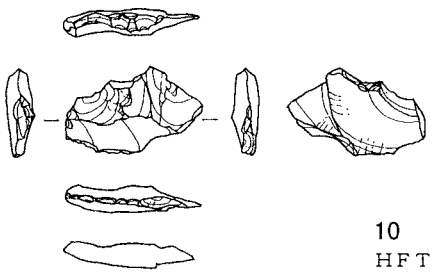
第14図　第１文化層　ブロック別・母岩別資料分布図（２）



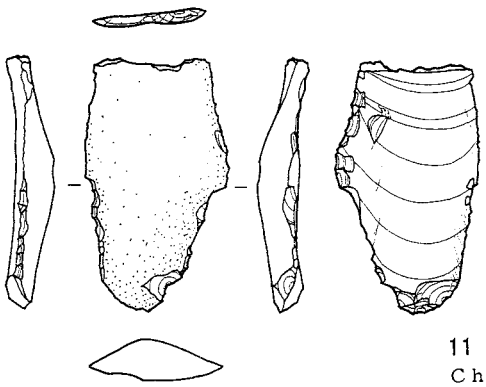
第15図　第１文化層　ブロック外出土遺物分布図



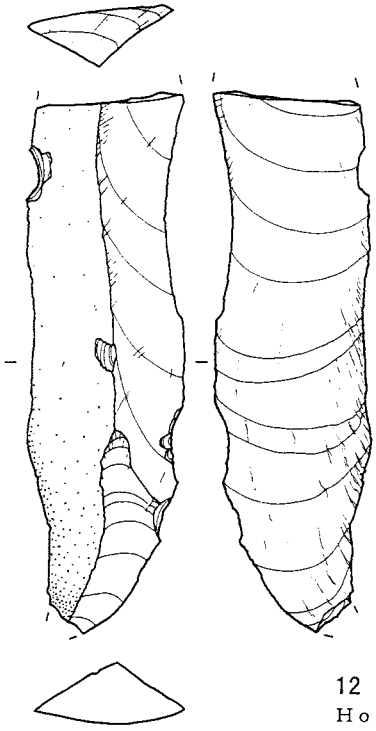
第16図　第１文化層　石器実測図（１）



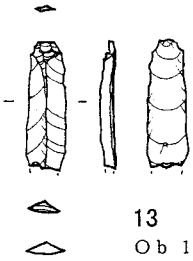
10
HFT



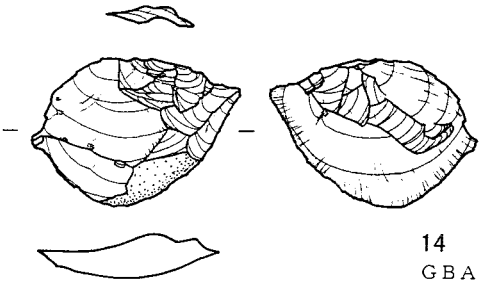
11
Ch



12
Ho

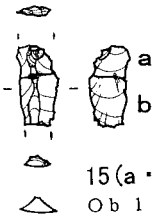


13
Ob 1



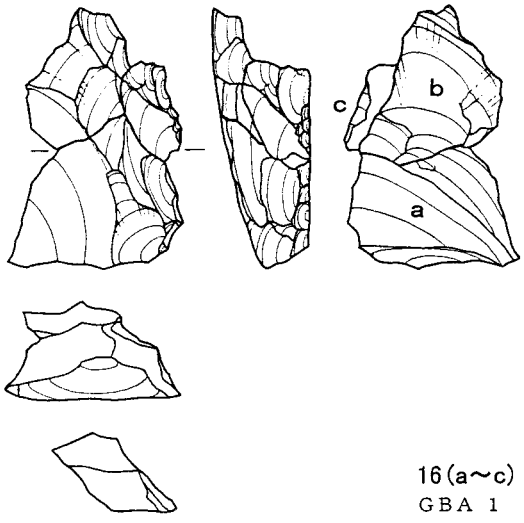
14
GBA

接合資料 1

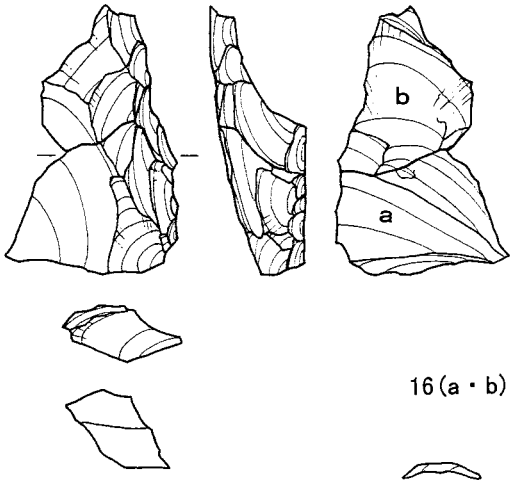


15(a・b)
Ob 1

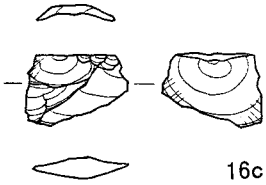
接合資料 2



16(a～c)
GBA 1

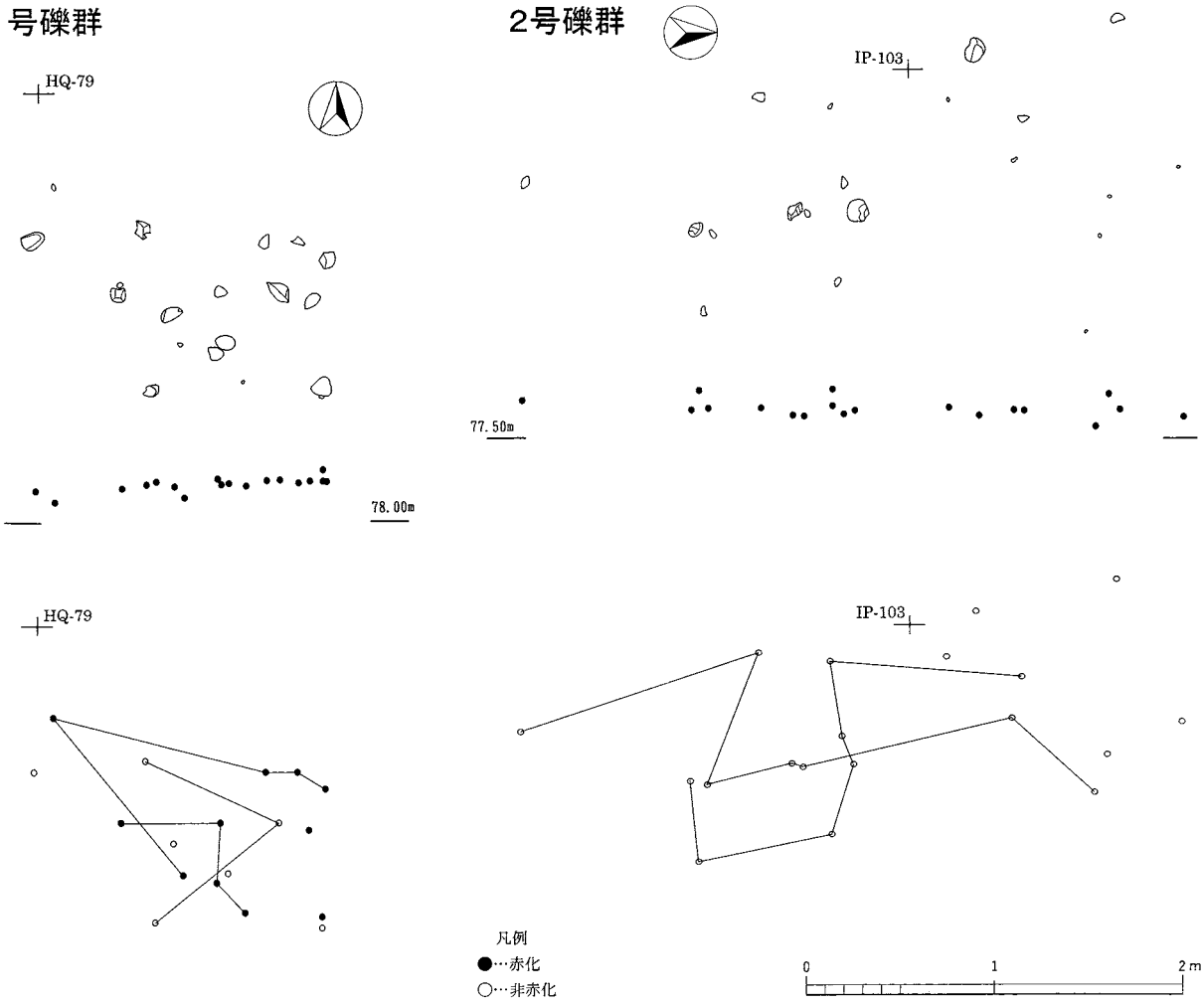


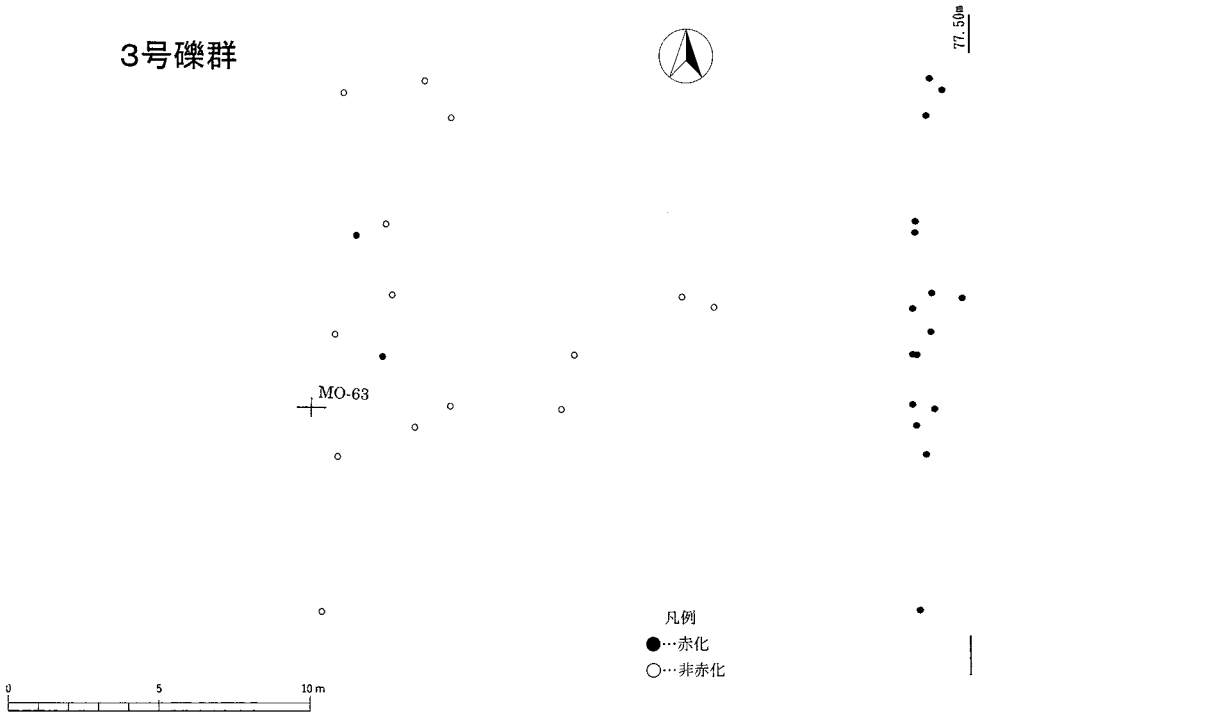
16(a・b)



16c

第17図　第１文化層　石器実測図（２）／接合資料実測図





第18図　第１文化層　礫群実測図・接合関係図

Ⅱ－６表　遺物番号出土ブロック対照表①

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第16図	1	1	3号
	2	1	3号
	3	1	外
	4	1	外
	5	1	外
	6	1	外
	7	1	外
	8	1	外
	9	1	外

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第17図	10	1	外
	11	1	外
	13	1	2号
	14	1	3号
	12	1	外
	15a	1	2号
	15b	1	2号
	16a	1	1号
	16b	1	1号
	16c	1	1号

４．第２文化層

Ⅲb 層下部からⅣb 層上部にかけて検出された。検出された遺構は調査区北側の４区が中心でブロック22カ所、礫群20カ所、他には２区の北側にブロック１カ所、礫群１カ所、調査区西側の１区にブロック２カ所である。出土石器は尖頭器５点、ナイフ形石器85点、削器23点、掻器30点、円形掻器９点、彫器１点、二次加工のある剥片19点、微細剥離痕のある剥片18点、石核31点、剥片475点、砕片328点、礫石器３点、敲石４点、磨石４点、局部磨製礫１点で、合計1039点である。礫は1429点出土した。保有する石材は頁岩、珪質頁岩、硬質頁岩、黒色頁岩、黒曜石、チャート、ホルンフェルスなどが主体となり、他には硬質細粒凝灰岩、ガラス質黒色安山岩なども用いられている（第53～58図）。

ブロック間の関係（第22図）

個別のブロックの説明に入る前に、本文化層で検出された25カ所のブロック間の関係を出土層位、母岩の共有関係、石器及び礫の接合関係から解説する。第２文化層から検出された1039点の石器は145母岩に分類された。まず出土層位を検討すると１～８号ブロックはⅢb 層下部からⅣa 層上部に出土レベルのピークが認められ、Ⅳa 層中部からⅣb 層上部に出土レベルのピークが認められる９～23、25号ブロックとは明確に区別される。次に、ブロックごとに母岩の共有関係を検討すると、母岩を共有するブロックのまとまりは１～８号ブロックと９～25号ブロックとに分かれ、両者の間には母岩の共有関係が認められない。

従って１～８号ブロックは９～23、25号ブロックよりも時期的に新しいものと考えられる。そこで１～８号ブロックをブロック群Ⅰとする。

次に９～25号ブロックに関しては、Ch１、HSh２、Ob２、Ob３、Ob４、Ob10において強い共有関係をもつ９～14号ブロックと、HSh３、HSh５、Sh１、SSh１、SSh４において強い共有関係をもつ15～23号ブロックとに分かれる。そこで前者をブロック群Ⅱa とし後者をブロック群Ⅱb とする。

また石器の接合関係を第20図から検討すると、ブロック群Ⅰについては１、４～８号ブロック間において、ブロック群Ⅱa については10～12号ブロック間において、ブロック群Ⅱb については15、17～19、21号ブロック間において接合関係が認められる。このようにそれぞれのブロック群の内部においては、ブロック間に接合関係が認められるが、ブロック群間にまたがった接合関係は認められない。各ブロック群には礫群の共伴が認められるが、礫の接合関係を第148、149図から検討すると、ブロック群Ⅱa については12号、13号ブロック間において、ブロック群Ⅱb については15号、16号ブロック間と17号、20号ブロック間において密接な関係が認められる。礫の接合から示唆されるブロック間の関係も、石器の場合と同様に各ブロック群の内部の接合関係は認められるが、ブロック群間にまたがった接合関係は認められない。

このようにブロック群Ⅱa とブロック群Ⅱb は母岩を共有する以上共時性を有しながらも、それぞれが有意なまとまりとしてとらえることができる。

24、25号ブロックについては母岩をブロック群Ⅱa、Ⅱb と共有するものの、密接な母岩の共有関係も接合関係も認められず、平面分布も最も近いブロック群Ⅱb と約150m も離れていることから仮にブロック群Ⅱc とする。

以上をまとめると第２文化層は、出土層位と母岩の共有関係からブロック群Ⅰとブロック群Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc という２時期の石器群に分かれる。また母岩を共有し、そのために共時性を有すると考えられるブ

ロック群Ⅱa、Ⅱb、Ⅱcについては、母岩のより密接な共有関係と、石器と礫の接合関係から、とりわけブロック群Ⅱaとブロック群Ⅱbが有意なまとまりとして抽出される、ということになる。

1）石 器

ブロック群Ⅰ（第22図）

ブロック群Ⅰは４区の北西側に分布する１～８号ブロックからなる。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部にかけてに求められる。散漫に分布する21号礫群と垂直平面ともに分布が重なる。石材構成はチャートが35%と最も多く用いられ、次に多いのが珪質頁岩の25%で、他には頁岩11%、黒曜石６%、硬質細粒凝灰岩５%、硬質頁岩２%となり、硬質中粒凝灰岩、赤玉石、片麻岩がそれぞれ１%以下となる。珪質頁岩は武蔵野礫層でしばしば認められる在地の石材と考えられるものである。特徴的な製品類としては、薄手の石刃に二側縁加工を施した小形のナイフ形石器が、まとまって検出されている。

１号ブロック

〈出土状況〉（第24図）

４区北西側のNL－61グリッドを中心に位置し、合計33点の石器が長径６m、短径3.5mの不整円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部である。ブロックを南北に縦断するようにナイフ形石器が５点分布しており、そのうちブロックの南北の縁辺に分布するナイフ形石器１と２は接合する。本ブロックは、21号礫群の分布範囲の北西側に分布する。

〈母岩別資料〉（第38図）

保有石材は頁岩１点、珪質頁岩４点、チャート25点、黒曜石３点で、12母岩が認定された。Ch２を中心とした剥片剥離が認められ、縦長剥片を連続的に剥離し、それによりナイフ形石器を製作した過程を示す接合資料が得られている。またCh３においても小規模な剥片剥離が行われた痕跡が認められるが、小形で不定形な剥片が多い。他にはCh単体とOb５のナイフ形石器とSh６の石核が単品で搬入されている。母岩の共有関係は２、３、４、５、７、８号ブロックとの間に認められ、５号ブロックとの間に接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器５点（第59図１～５）、石核１点（第76図154）、剥片10点、砕片17点である。

1（第59図）はナイフ形石器。薄手の縦長剥片を打面を下にして用い、右側縁と左側縁の下半部にブランティングを施している。裏面の基部には打面付近のバルブの厚みを減じるためか、微細ながらも平坦な加工が施されている。また基部を尖らしている。

2（第59図）はナイフ形石器。１と同様に薄手の縦長剥片を打面を下にして用い、右側縁と左側縁の下半部にブランティングを施している。右側縁の下半部から裏面に向かっては平坦な加工が施されている。１と同様基部を尖らしている。素材、形態、大きさ、加工のどの点についても１とよく似ている。

3（第59図）はナイフ形石器。縦長剥片を打面を上にして用い、左側縁と右側縁の下半部にブランティングを施している。基部には素材剥離時のフェザーエッジを僅かに残置しているものの、両側縁からのブランティングにより丸く加工されているのが特徴である。

4（第59図）はナイフ形石器。縦長剥片を縦方向に用い、打面部を含む上半分をブランティングにより斜めに整形している。

5（第59図）はナイフ形石器の先端部。本ブロックで唯一の黒曜石のナイフ形石器である。右側縁にブランティングが施されている。背面側からの力で折損している。

154（第76図）は石核。単設打面で、末端が薄くなり楔形になる。打面調整は３方向から入念に施されている。縦長剥片が連続的に剥離されている。作業面は正面と両側面で、裏面には礫面が大きく残っている。

〈接合資料〉

Ⅰb類３例である。そのうち接合資料54が５号ブロックとの間の接合である。

接合資料54（第115図**281**）はCh２でⅠb類。剥片２点の接合。調整打面から厚手の縦長剥片281aを剥離した後、同じ打面から281bが剥離されている。281aは打面部を含む上半分が折損し、背面は礫面に覆われている。281bは５号ブロックの出土である。

接合資料55（第115図**１・２**）はCh２でⅠb類。ナイフ形石器２点の接合。縦長剥片を１、２の順で連続的に剥離し、それを素材にして二側縁加工のナイフ形石器を製作した過程を示す接合である。接合後の剥離面の観察から石核右側面からの作業面調整が行われたことが分かる。どちらのナイフ形石器も素材の右側縁下半部を刃部として残し、それ以外の部分にブランティングを施す。両者ともに打面部は除去されている。

接合資料56（第115図**282**）はCh２でⅠb類。剥片２点の接合。同じ打面から小形の縦長剥片２枚が282b、282aの順で剥離されている。両者とも末端は折損している。

２号ブロック

〈出土状況〉（第24図）

４区北西側のNL～NM－59グリッドを中心に位置し、合計６点の石器が長径2.5m楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部にかけてである。接合する石核285aと剥片285bはブロックの中央で近接して出土している。本ブロックは21号礫群の分布範囲の北西側に分布する。

〈母岩別資料〉（第38図）

保有石材は珪質頁岩１点、黒色頁岩１点、チャート４点で３母岩が認定された。Ch６による小規模な剥片剥離が行われている。Ch６では厚手の剥片を素材にし、主要剥離面を打面とした小形で寸詰まりの剥片の剥離が行われている。母岩の共有関係は１、３、５号ブロックとの間に認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器は掻器１点（第69図115）、石核１点（第118図285a）、剥片３点、砕片１点である。

115（第69図）は掻器。打面を厚く残す小形の剥片の末端に、急角度の連続する剥離が加えられ、刃部が作出されている。

〈接合資料〉

Ⅰa類１例である。

接合資料63（第118図**285**）はCh６でⅠa類。石核と剥片１点の接合。厚手の剥片を素材にし、主要剥離面を打面にして剥片285bが剥離されている。石核285aには同様の剥片剥離により３枚の剥離面が残されている。打面部にあたる主要剥離面には、打面と作業面の角度を修正するためか、大きな剥離が一つ加えられている。

３号ブロック

〈出土状況〉（第24図）

４区北西側の NK－59～60グリッドに位置し、合計20点の石器が直径３m の円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb 層下部からⅣa 層上部にかけてである。本ブロックは、24号礫群の分布範囲の北西側に分布する。

〈母岩別資料〉（第38図）

保有石材は頁岩４点、珪質頁岩７点、チャート５点、黒曜石１点、ホルンフェルス３点で10母岩が認定された。Sh４、SSh22、Ho11による低調な剥片剥離が認められる。Ch６においては剥片剥離というよりは、ナイフ形石器とブランティングチップにより構成されていることから、本ブロックに素材が持ち込まれナイフ形石器に加工された可能性を考えることができる。母岩の共有関係は１、２、５、７号ブロックにおいて認められる。他ブロックとの接合関係は認められない。各母岩の分布に偏在は認められないが、ナイフ形石器２点がブロックの南北の外縁部でそれぞれ出土している。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第59図６、７）、剥片３点、砕片15点である。

6（第59図）は一側縁加工のナイフ形石器。打面を残す小形の横長剥片を素材にしている。左側縁にブランティングを施し、打面部を右側縁にそのまま残置させてブランティングの代用としている。打面部を残置させることで、素材の形態を大きく変更させずに、同図１、２などの二側縁加工のナイフ形石器と近似した形態のナイフ形石器に加工している。

7（第59図）は二側縁加工のナイフ形石器。比較的厚みのある縦長剥片を、打面を下にして若干斜めに用いている。右側縁と左側縁の下半部にブランティングを施している。打面部を左側縁の急角度のブランティングにより除去している。そのため加工は高くなっている。刃部は裏面からの力により折損している。

４号ブロック

〈出土状況〉（第24図）

４区北西側の NM－56グリッドを中心に位置し、合計23点の石器が長径4.5m、短径2.5m の楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb 層下部からⅣa 層上部にかけてである。ナイフ形石器３点は、ブロックの中心部で近接して分布している。本ブロックは21号礫群の分布範囲の北東側に分布する。

〈母岩別資料〉（第38図）

保有石材は珪質頁岩４点、黒色頁岩２点、チャート14点、硬質細粒凝灰岩１点、ホルンフェルス２点で11母岩が認定された。Ch８による剥片剥離が認められ、縦長剥片を連続的に剥離した過程を示す接合資料が得られている。また Ch12では剥片２点が接合し、石核が廃棄されている。他には SSh25、SSh 単体、Ch 単体のナイフ形石器が単品で搬入されている。母岩の共有関係は１、６、７、８号ブロックとの間で認められ、そのうち６、７号ブロックとの間に接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器３点（第59図11～13）と二次加工のある剥片１点（第80図170）、石核１点（第76図155）、剥片15点、砕片３点である。

11（第59図）は二側縁加工のナイフ形石器。小形の縦長剥片を素材にし、打面を下に用い、右側縁と左

側縁の下半部にブランティングを施している。打面は左側縁のブランティングによって一部除去されているが、基部に一部が残置されている。

12（第59図）は一側縁加工のナイフ形石器。比較的厚みのある縦長剥片を素材にし縦方向に用いている。右側縁にブランティングを施し、打面を左側縁に残置してブランティングの代用としている。左側縁の上半部は素材の打面部にブランティングを加えることにより整形されている。同図６と同様に打面を残置させてブランティングの代用とし、二側縁加工のナイフ形石器と近似した形態のナイフ形石器に加工している。

13（第59図）はナイフ形石器の基部。縦長剥片を縦に用い、左側縁にブランティングを施している。打面はブランティングにより除去されている。先端は表面からの力により折損している。

155（第76図）は石核。相対する２面に打面を有するが、正面と裏面の作業面では主に上設打面からの剥離が行われ、打点をずらしながら小形の縦長剥片を連続的に剥離している。上設打面は節理を介在とする単剥離面である。一方下設打面からは、右側面を作業面として斜め方向に剥離が行われている。他に右側面には横方向の古い剥離面も認められ、90度の打面転位を繰り返した結果、最終的に賽子状の形状を呈したと考えられる。

〈接合資料〉

Ⅰｂ類３例、Ⅲ類１例である。そのうち接合資料25が６号ブロックと、接合資料80が７号ブロックとの接合である。

接合資料25（第102図**170**）はSSh14でⅢ類。二次加工のある剥片と砕片の接合。剥片剥離時に170aと170bが縦割れを起こし、170aが二次加工のある剥片に加工された。170bは６号ブロックの出土である。二次加工のある剥片の170aが単品で、４号ブロックで出土していることと、SSh14は６号ブロックにおいて剥片剥離の痕跡が認められることから170aが４号ブロックに搬入されたと考えられる。

接合資料64（第118図**286**）はCh12でⅠｂ類。礫面を大きく残す厚手の剥片２点の接合。はじめ286bが剥離された後、打面を90度左に転位し、286aが剥離された。

接合資料67（第119図**289**）はCh８でⅠｂ類。剥片３点の接合。縦長剥片を連続的に剥離した過程を示す接合資料。同じ打面から289a、289cの順で剥離された後、打面が再生され幅広の縦長剥片289bが剥離されている。打面は再生前も再生後も調整されている。

接合資料80（第125図**297**）はHo２でⅠｂ類。剥片２点の接合。長さ６㎝を越える大形の石核において、同じ打面から幅広の縦長剥片を297b、297aの順で剥離している。297aは背面に礫面を大きく残している。打面は単剥離面である。

５号ブロック

〈出土状況〉（第25図）

４区北西側のNJ－61グリッドを中心に位置し、合計25点の石器が長径10.5m、短径５mの楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部にかけてである。接合する削器92aと92bはブロックの中央で近接して出土している。ナイフ形石器９と10はそれぞれブロックの西端と南端に、中央の集中部から離れて分布している。本ブロックは、21号礫群の分布範囲の西南側に分布する。

〈母岩別資料〉（第39図）

保有石材は頁岩４点、珪質頁岩３点、黒色頁岩３点、チャート９点、黒曜石２点、ホルンフェルス３点、

硬質細粒凝灰岩１点で13母岩が認定された。Sh３、Ch２、Ch３において低調な剥片剥離が認められる。他にHFT２、Ob11のナイフ形石器とBSh単体の掻器が単品で搬入されている。母岩の共有関係は１、２、３、６、７、８号ブロックにおいて認められ、１、７号ブロックと接合関係が認められる。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器３点（第59図８～10）、削器１点（第66図92）、掻器１点（第69図116）、二次加工のある剥片１点（第80図168）、微細剥離痕のある剥片１点（81図191）、剥片16点、砕片２点である。

8（第59図）はナイフ形石器。縦長剥片を縦に用い、ブランティングにより打面部を斜めに整形している。

9（第59図）はナイフ形石器。打面を下にして縦長剥片を縦に用い、右側縁に表裏両面からブランティングを施している。基部は右側縁からの力により折損している。

10（第59図）はナイフ形石器。厚手で先が細くなる石刃を用い、右側縁の先端に僅かにブランティングを施しているが、素材の形状を大きく変形させていない。基部には折れ面を残置している。

116（第69図）は掻器。背面に礫面を残す厚手の剥片の左側縁と右側縁の上部に、連続する剥離によって抉りの入った刃部を作出している。

168（第80図）は二次加工のある剥片。背面に礫面を残す厚手の横長剥片の左側縁に、連続する平坦な剥離が加えられている。打面は折損している。

191（第81図）は微細剥離痕のある剥片。厚手の横長剥片の左側縁の末端の主要剥離面側に、不連続な微細な剥離痕が認められる。素材の末端は礫面を一部に残しウートラパッセとなっている。

〈接合資料〉

Ⅰb類１例、Ⅲ類３例である。そのうち接合資料３は７号ブロックと、接合資料54は１号ブロックとの接合である。接合資料54は１号ブロックですでに記載した。

接合資料３（第91図**247**）はSh２でⅢ類。石刃が末端で折損した接合。先端部の247bが７号ブロックで出土している。Sh２は７号ブロックで剥片剥離の痕跡が認められ、本ブロックでは247aが単品で出土していることから、剥離時の折損後、247aが本ブロックに搬入されたものと考えられる。

接合資料27（第102図**92**）はSSh11でⅢ類。削器２点の接合。節理によって92aと92bとに折損している。素材の左側縁には、92bでは表面に、接合面を境に92aでは裏面に、刃部となる加工が施されている。また両者の剥離は連続しておらず、加工も92bの方が鋸歯状で深く、92aの方は微細で浅く、異なっている。従って折損した後92aと92bの双方がそれぞれ削器に加工されたと考えられる。

接合資料44（第112図**274**）はBSh５でⅠb類。剥片２点の接合。寸詰まりの縦長剥片を連続して剥離した過程を示す接合である。274aは縦割れを起こしていて、247bは末端がヒンジフラクチャーになっている。

６号ブロック

〈出土状況〉（第25図）

４区北西側のNJ－58グリッドを中心に位置し、合計48点の石器が径６ｍの円形状の広がりをもって、密集して分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部にかけてである。ナイフ形石器５点は、ブロックの中心部に近接して分布する。接合資料18の石核259aと剥片259b、259cはブロックの西側で、接合資料58の石核14dと剥片やナイフ形石器はブロックの中央部で近接して出土している。本ブロックは、

21号礫群の分布範囲の中心に分布する。

〈母岩別資料〉（第39図）

保有石材は頁岩１点、珪質頁岩24点、硬質頁岩２点、チャート11点、黒曜石２点、ホルンフェルス５点、硬質細粒凝灰岩２点、片麻岩１点で15母岩が認定された。SSh２を中心として剥片剥離が行われている。他にはSSh14、Ch11、Ch20、Ho２で剥片剥離の痕跡が認められる。他にはHFT単体、Sh11、SSh単体のナイフ形石器が単品で搬入されている。母岩の共有関係は４、５、７、８号ブロックとの間に認められ、そのうち４号ブロックと接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器５点（第59図14a～15、第60図16～18）、掻器４点（第70図118～120）、二次加工痕のある剥片１点（第80図173a）、石核３点（第76図156、第98図258b、第99図259a）、剥片13点、砕片22点である。

14a（第59図）はナイフ形石器。厚手の石刃を、打面を下にして縦に用い、左側縁と右側縁の下半部にブランティングを施している。細身で基部の尖る小形のナイフ形石器である。

15（第59図）はナイフ形石器。小形の縦長剥片を打面を上にして縦に用い、右側縁の下半部にブランティングを施している。打面部は折損している。

16（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を用い、打面を基部に残置し、左側縁の先端と基部および、右側縁の基部にブランティングを施している。

17（第60図）はナイフ形石器。小形の横長剥片を横に用い、両側縁にブランティングを施している。基部を丸く加工し、切り出し形を呈する。

18（第60図）はナイフ形石器。厚みのある縦長剥片を打面を上にして縦に用い、左側縁にブランティングを施している。右側縁のブランティングが施されていたであろう部位は、表面からの力により折損している。刃部の裏面には、微細ながらも明確に連続する剥離が観察される。

117（第70図）は掻器。小形の剥片の左側縁に、表面から連続する急角度の剥離を加え、刃部を作出している。

118（a、b）（第70図）は掻器。小形の剥片が中央で２つに折損した後、末端部側に連続する急角度の剥離を加えて、刃部を作出している。末端の急角度の加工と、それに対向する折れ面をブランティングの代用と見なし、該期に特徴的な小形のナイフ形石器とする方が妥当であると考えられる。

119（第70図）は掻器。小形の剥片の打面部を表面からの急角度の剥離で除去し、末端に裏側からやや平坦な連続する剥離によって刃部を作出している。その加工部位から器種分類上、小形のナイフ形石器とした方が妥当であると考えられる。

120（第70図）は掻器。大形の剥片のやや抉れた末端に、連続する剥離を加えて刃部を作出している。

173a（第80図）は二次加工のある剥片。厚手の剥片の末端にブランティング状の加工が施されている。

156（第76図）は石核。打面を残す厚手の剥片を素材にし、その主要剥離面から小形の剥片を剥離した石核である。

230（第86図）は剥片。平坦打面を有する幅広の剥片である。

〈接合資料〉

Ⅰａ類２例、Ⅰｂ類２例、Ⅲ類２例である。

接合資料17（第98図**258**）はSSh２でⅠａ類。石核と剥片の接合。厚手で大形の剥片が剥離された際に打面部からの力によって258aと258bに縦割れを起こしたもの。縦割れ後258bは石核として用いられ、主要剥離面を打面として小形の剥片が剥離されている。

接合資料18（第99図**259**）はSSh２でⅠａ類。石核と打面調整剥片２点の接合。90度の打面転位を繰り返して小形の縦長剥片を剥離していった結果、259aは賽子状の石核となった。打面調整剥片259bは正面から、259cは裏面から剥離されている。

接合資料23（第102図**118**）はSSh25でⅢ類。掻器と剥片の接合。小形の剥片が剥離時に節理により中央で折損し、末端側の118aに剥離を加えて掻器に加工している。

接合資料58（第116図**14**）はCh11でⅠａ類。石核とナイフ形石器１点、剥片２点の接合。相対する２面に打面を持つ石核において、まず下設打面から14bを含む幅広の剥片が剥離される。その後上設打面から、石核左側縁の稜に沿って厚手の石刃が剥離され、ナイフ形石器の素材にされる。再び上設打面から剥離が行われた際、14cは打面直下で大きく石核をとりこんでしまい、同時に石核14dの表面に縦割れが起き、石核14dが廃棄される。

接合資料59（第116図**173**）はCh25でⅠｂ類。剥片と二次加工のある剥片の接合。厚手の剥片173bが剥離された後に，173aを含む剥片が剥離され、それにブランティング状の加工を施されたもの。

接合資料74（第121図**293**）はOb11で剥片が縦割れを起こした接合。剥離時に背面の球果が割れの原因となっている。

７号ブロック

〈出土状況〉（第25図）

４区北西側のNJ－56グリッドを中心に位置し、合計24点の石器が長径６m、短径４mの楕円状の広がりをもって散漫に分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層上部にかけてである。接合資料９の石核252aはブロックの中央に、それに接合する剥片252（b･c）はブロックの北端と西端に離れて分布している。３点のナイフ形石器19、20、21は、ブロックの中心部で近接して分布する。本ブロックは、21号礫群の分布範囲の東側に分布する。

〈母岩別資料〉（第39図）

保有石材は頁岩８点、珪質頁岩２点、硬質頁岩１点、黒色頁岩１点、ホルンフェルス６点、チャート１点、黒曜石１点、硬質細粒凝灰岩２点、赤玉石２点と多岐にわたり、14母岩が認定されたが、どれも数点から１点のみで、１母岩ごとの石器数が少ない。ブロック内で剥片剥離の痕跡を残すものは、Sh２、Sh３、Ho２の３母岩のみで、そのうちSh２は５号、８号ブロックと接合関係をもち、Sh３は石核を含む接合資料が得られている。母岩の共有関係は１、３、４、５、６、８号ブロックとの間に認められ、そのうち５、８号ブロックとの間に接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器３点（第60図19、20、21）、掻器２点（第70図121、第73図144）、微細剥離痕のある剥片１点（第81図190）、石核１点（第92図252a）、剥片11点、砕片６点である。

19（第60図）はナイフ形石器。石刃を素材にし、打面を下に用いて、二側縁にブランティングを施している。左側縁の調整は表裏両面から加えられている。裏面基部には、左側縁から１枚の平坦な加工が施されている。先端は裏面からの力で折損している。

20（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材にし、打面を上に用いて、二側縁にブランティングを施している。中央で裏面からの力により折損し、刃部は残存していない。

21（第60図）はナイフ形石器。石刃を素材にして打面を上に用いた、柳葉形の二側縁加工のナイフ形石器。表面には、裏面と対向する剥離面が観察されることから、素材は両設打面の石刃核から剥離されたことがわかる。裏面基部には、左側縁の縁辺に平坦な加工が施されている。

121（第70図）は掻器。打面を欠損する厚手の剥片を素材にし、微細ながらも左側縁に連続する剥離を加え、刃部を作出している。右側縁の裏面には折れ面から３枚の樋状の剥離が加えられており、これらを彫刀面とする彫器の可能性が高い。

144（第73図）は掻器。厚手の剥片を素材にし、末端に連続する角度の高い剥離を加え、刃部を作出している。刃部と裏面の角度や、刃部の剥離面の形状から、小形で寸詰まりの剥片を剥離した石核の可能性が高い。

190（第81図）は微細剥離痕のある剥片。平坦打面から剥離された石刃の左側縁に、不連続ながらも微細な剥離痕が認められる。右側縁には連続する剥離が認められる。

231（第86図）は赤玉石の剥片。背面の一部に礫面を残し、打面と末端を折損している。

〈接合資料〉

Ⅰａ類１例、Ⅰｂ類２例、Ⅲ類１例である。そのうち接合資料３（第91図247）は５号ブロックと、接合資料４（第91図248）は８号ブロックと、接合資料80（第125図297）は４号ブロックとのブロック間接合であるため、それぞれ５、８、４号ブロックの項で記載した。

接合資料９（第92図**252**）はSh３でⅠａ類。石核と打面調整剥片１点との接合。252aは入念な調整の施された単設打面から、縦長剥片を連続的に剥離した石核。裏面に礫面を大きく残し末端に向かって細くなり、正面形態は楔形に類似する。これに接合する252（b･c）は作業面側からの加撃により、石核の右側面と裏面を取り込みながら打面を再生する。しかし打面の右半を覆うのみで、打面全体を再生しているわけではない。また252（b･c）の打点は作業面より前方へ突きだしており、252（b･c）による打面再生の後もしばらく剥片剥離が行われた後に、石核252aが廃棄されたものと考えられる。

８号ブロック

〈出土状況〉（第26図）

４区北西側のNH－57～56グリッドを中心に位置し、合計14点の石器が長径７m、短径５mの楕円状の広がりをもって散漫に分布している。出土層位はⅣa層上部である。７号ブロックと接合関係にある剥片248bは、ブロックの南端で出土した。本ブロックは、21号礫群の分布範囲の南東側に分布する。

〈母岩別資料〉（第40図）

保有石材は頁岩３点、珪質頁岩１点、チャート１点、黒曜石３点、ホルンフェルス３点、硬質細粒凝灰岩２点、硬質中粒凝灰岩１点で10母岩が認定された。しかしどの母岩も比較的形態の整った縦長剥片で、かつ１、２点ずつであり剥片剥離の痕跡は認められない。とくにHFT１は２点とも稜付き剥片である。Ho10のナイフ形石器が単品で搬入されている。

母岩の共有関係は1, 4, 5, 6, ７号ブロックとの間で認められ、そのうち７号ブロックと接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器１点（第60図26）、微細剥離痕のある剥片１点（第82図192）、剥片10点、砕片２点である。

26（第60図）はナイフ形石器。石刃を素材にし打面を基部に残置させ、右側縁の基部近くにブランティングを施している。

192（第82図）は微細剥離痕のある剥片。厚手の縦長剥片の左側縁に微細な剥離痕が観察される。

〈接合資料〉

Ｉｂ類１例である。

接合資料４（第91図**248**）はSh２でＩｂ類。７号ブロックとの間のブロック間接合である。７号ブロック出土の小形で寸詰まりの剥片248a に、８号ブロック出土の横長剥片248b が、90度打面転位して接合する。その接合状態と248b の背面の剥離構成から求心状の剥片剥離過程を示す接合と考えられる。

さらに248b は末端に、礫面を残す底面を大きく取り込んでおり、石核の長さは248b の長さとほぼ同じくらいであったと考えられる。

ブロック群Ⅱa（第22図）

ブロック群Ⅱａは４区の北東側に分布する９～14号ブロックからなる。出土層位はⅣa 層中部からⅣa 層下部にかけてに求められる。それぞれのブロックは３、10、14～18号礫群を伴っている。石材構成は黒曜石の41％が最も多く、次にチャートの27％で、他には硬質頁岩10％、珪質頁岩10％、頁岩１％となり、硬質細粒凝灰岩、中粒凝灰岩、砂岩がそれぞれ１％以下となる。硬質頁岩と珪質頁岩は遠隔地産と推定されるきわめて良質な頁岩である。なお珪質頁岩には若干在地のものも含まれている。特徴的な製品類としては、石刃素材のナイフ形石器や、先述の良質な硬質頁岩や珪質頁岩製の削器や掻器である。剥片剥離技術をよく示す良好な接合資料が得られている。

９号ブロック

〈出土状況〉（第26図）

４区北側の NO～NP－53グリッドを中心に位置し、合計６点の石器が長径４m、短径0.5m の楕円状の広がりをもって分布している。北西方向に直線状に出土している。出土層位はⅣa 層上部からⅣa 層中部にかけてである。本ブロックは、18号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第40図）

保有石材は珪質頁岩１点、硬質頁岩２点、黒曜石２点、大理石１点で５母岩が認定された。しかしすべて１、２点であり剥片剥離の痕跡は認められない。母岩の共有関係は11、12、17号ブロックとの間に認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器は掻器１点（第70図122）、二次加工のある剥片（第80図167）１点、剥片３点、砕片１点である。

122（第70図）は掻器。小形の剥片の末端と側縁に、連続する剥離を加え刃部を作出している。

167（第80図）は二次加工のある剥片。寸詰まりの小形の剥片の右側縁の打面付近に、連続した剥離が加えられている。

10号ブロック

〈出土状況〉（第26図）

４区北東側の NM－48グリッドを中心に位置し、合計60点の石器が長径4.5m、短径３m のほぼ円形状の広がりをもって密集して分布している。出土層位はIVa 層上部からIVa 層中部である。中央部で３点の石核253a、253b、295a が近接して出土している。これらは３点とも密集部内の石器と密接に接合している。またブロックの東端には単品の石核157が分布している。

〈母岩別資料〉（第41図）

保有石材は珪質頁岩16点、チャート24点、ガラス質黒色安山岩７点、黒曜石２点、ホルンフェルス11点で14母岩が認定された。SSh７、SSh８、Ch４、Ch５、GBA２、Ho１において剥片剥離の痕跡が認められる。これらの母岩のうちで特にどれかが主体となるわけでなく６点から10点ずつ検出された。また、いずれの母岩でも特に定形的な剥片は認められず、寸詰まりの縦長剥片や不定形な剥片が剥離されている。とりわけ SSh８と Ho１では石核を含む接合資料が得られた。母岩の共有関係は11、12、13、14、18、23、24号ブロックにおいて認められ、そのうち12号ブロックと接合関係が認められる。Ch５がブロックの南東に、GBA２がブロックの北東に、Ho１がブロックの西半にまとまって分布する。

〈出土石器〉

出土石器は掻器１点（第70図123）、微細剥離痕のある剥片３点（第81図189、第82図193、第83図204）、石核４点（第77図157、第94図253a、第95図253b、第123図295a）、剥片34点、砕片18点である。

123（第70図）は掻器。厚手の縦長剥片を横方向に用い、側縁に角度の高い剥離が施されている。裏面には左側縁からの樋状の剥離が認められ、これを作業面とする細石刃核の可能性もある。

189（第81図）は微細剥離痕のある剥片。薄手の縦長剥片の右側縁に微細な剥離痕が観察される。

193（第82図）は微細剥離痕のある剥片。薄手の縦長剥片の左側縁の下半部に、不規則ながらも顕著な剥離が観察される。

204（第83図）は微細剥離痕のある剥片。打面の大きな縦長剥片の左側縁の打面部付近に、微細な剥離痕が観察される。

157（第77図）は石核。節理を介在させて分割した半割礫を、長軸方向に用いている。分割面からの調整により打面を作出し、両側縁の稜に沿って、剥片が２枚剥離された後、廃棄された。

〈接合資料〉

Ⅰａ類２例、Ⅰｂ類５例、Ⅲ類１例である。他ブロックと接合関係を有するものは接合資料76（第121図177・189）でこれは、12号ブロックの項で記載した。

接合資料10（第93図**253**）は SSh８でⅠａ類。板状に粗く整形された石核を用いている。はじめは、石核右側縁の稜線に沿って上下の単打面から、比較的大形の縦長剥片を剥離していく。その途中で石核が２つに分割され、それぞれが消費されていく過程を示す接合である。

まず第一に接合図の正面図上面を打面として、石核右側縁の稜線に沿って、打面が厚くて先端が尖る縦長剥片253d が剥離され、その後正面図下面を打面として、やはり同じ形状でやや大形の剥片が剥離される。その剥離痕は、右側面図において観察される。その後、再び正面図上面の打面が加撃され、節理によって石核253b を含む厚手の剥片が剥離される。そしてその石核253b を含む厚手の剥片からは、その剥片自体の打面が加撃され、253e と253g が剥離される。その後終始同じ面を打面として、幅広の小形の剥片を剥離した後に、石核253b が廃棄される。

元の石核からは、90度打面を転位して、節理による先の分割面を打面として253f と253c が剥離された後、石核253a が廃棄される。石核調整や打面調整、頭部調整をほとんど行わずに稜線に沿って粗く縦長剥片を剥離していく点がこの接合資料の特徴である。

接合資料26（第102図**263**）は SSh７でⅢ類。厚手の剥片263（a･b）の剥離時に、打面からの力によって263a と263b が同時割れをおこしたことを示す接合。263a が本ブロックの北側から出土し、263b は一括遺物である。

接合資料48（第113図**277**）は GBA２でⅠb 類。円礫の表皮を直接加撃して剥離された、幅広の剥片が接合する例。まず277d が剥離され、打面を90度転位させ277（a･b･c）が剥離される。どちらも末端はヒンジフラクチャーとなっている。

接合資料49（第113図**278**）も GBA２でⅠb 類。接合資料48と同様の剥片剥離過程を示す接合資料である。やはり円礫の表皮を直接加撃して幅広の剥片278a を剥離した後、打点を約１㎝ほど後退させて、厚手の縦長剥片278b を剥離している。

接合資料66（第119図**288**）は Ch５でⅠb 類。90度打面転位を示す剥片２点の接合。288（b･c）を剥離した後、その作業面を打面として288a を剥離する。

接合資料79（第125図**296**）Ho１でⅠb 類。厚手の幅広の剥片２点の接合。296b は単打面で稜が鋭く立つ厚手の剥片。その後に比較的厚さの均等な296a が剥離される。296a は打面側上半分を欠損している。末端は石核の底面を取り込んでおり、その面を打面とする反対方向の剥離が背面に認められる。

接合資料78（第122図**295**）は Ho１でⅠa 類。半割された円礫を素材とし、分割面を打面として剥片剥離を始めている。おそらくその一番最初の剥離によって295f、295d、295b、295c を含む厚手の剥片が剥離される。その後はその厚手の剥片を石核とするものと元の石核の双方で剥片剥離が行われている。

295f、295d、295b、295c を含む厚手の剥片の剥片時に、295h が同時割れを起こす。その後その厚手の剥片の主要剥離面を作業面とし、周囲の礫面を打面として、求心状の剥離が行われる。その過程で295f が剥離される。295f は剥離時に縦割れを起こしている。その後今度は作業面を打面として295d が剥離される。295d は石核の厚みの半分近くをとりこんでおり、おそらくそれが原因となり、節理に沿って石核は295b と295c に割れて廃棄される。先の厚手の剥片が剥離された後は元の石核においてやはり同じ打面から295e が剥離される。その後左側面を打面として横方向の剥離が加えられ、その過程で295g を含む剥片が剥離される。295g は節理によって打面側を折損している。その後石核295a が廃棄される。

11号ブロック

〈出土状況〉（第27図）

４区北東側の NI～NJ－50グリッドを中心に位置し、合計202点の石器が長径15m、短径14m の不整円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅣa 層中部から下部にかけてである。ブロックの中央に最も密集した部分がみられ、その約４m 南に小さな密集部が認められる。さらに中央の密集部の約３m 北側に製品類を主体にした散漫なまとまりが認められる。ナイフ形石器と削器や掻器は、中央の密集部と北側の散漫なまとまりにおいて散漫に出土している。削器95b と接合する石核95a はブロックの西端で出土している。尖頭器87は中央の密集部と北側の散漫なまとまりの中間で出土している。中央の密集部と北側の散漫なまとまりは接合関係が認められるが、南側の小さな密集部はそのいずれとも接合関係をもたない。本ブロックは、３・17号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第42、43図）

保有石材は頁岩３点、珪質頁岩３点、硬質頁岩17点、黒色頁岩１点、硬質細粒凝灰岩１点、チャート68点、黒曜石97点、ホルンフェルス６点、大理石４点、中粒凝灰岩１点、砂岩１点で36母岩認定された。そのなかでCh１が全体の25%、Ob10が全体の40%を占め剥片剥離の主体をなしている。

Ch１は石核を含む接合資料が得られており、その石核の剥離面の観察から両設打面による縦長剥片の連続的な剥離が行われたことが推定される。しかしこのブロックにおいては定形的な剥片はほとんど検出されておらず砕片が主体を占め、とりわけブランティグチップが目立つことから、Ch１はナイフ形石器の加工を中心とする作業が行われた母岩であると考えられる。

それに対してOb10は、石核こそ検出されていないものの、縦長剥片が多くまた稜付き剥片も検出され、さらにナイフ形石器の未製品とブランティグチップの接合資料も検出されている。このことからOb10は石器の素材となる剥片の生産とナイフ形石器の製作が主に行われた母岩であると考えられる。Ch１とOb10はともに12号ブロックにおいても多数検出されている。他にはHSh２、HSh４、HSh11、Ch９、Ch15、Ch26、Ob２、Mb１においても低調ながら剥片剥離の痕跡が認められる。さらにこのブロックの最大の特徴としては、硬質頁岩やチャート製の抉入削器や掻器がまとまって検出されている点である。これらの多くは製品としてブロック内に搬入されており、刃部再生の砕片が検出されているものもある。母岩の共有関係は10、12、13、14、15、17、23号ブロックとの間に認められるが、とりわけ10、12、13号ブロックとの関係が密接である。接合関係は12号ブロックとの間に有する。Ch１はブロックのほぼ中央に、Ob10はブロックの南西にまとまって分布している。尖頭器１点とナイフ形石器３点はすべてブロックの周縁に位置しており、うち３点が搬入品である。

〈出土石器〉

出土石器は尖頭器１点（第65図87）、ナイフ形石器４点（第60図22、23、24a、25）、削器５点（第66図93、94b、95b、96、97）、円形掻器２点（第74図145、146）、二次加工のある剥片４点（第80図171、172、174、175a）、微細剥離痕のある剥片２点（第82図194、202）、石核３点（第107図95a、第114図279a、第77図158）、剥片86点、砕片93点、礫器１点（第87図236b）、敲石１点（第89図243）である。

87（第65図）は尖頭器。周囲からの平坦な調整で、断面凸レンズ形に加工しているが、粗雑な加工で随所にステップがみられる。基部は丸く加工されている。裏面に認められる大きな剥離面は、尖頭器の基部を加撃した際に剥離された本資料自体の主要剥離面である。従って、本資料は器種分類上は、尖頭器の基部を大きくとり込んだ尖頭器の製作剥片とする方が妥当であると考えられる。単品である。

22（第60図）はナイフ形石器。横長剥片を素材として、打面を左下にして斜めに用い、左側縁と右側縁にブランティングを施している。右側縁にはやや抉りが入る。基部には素材の縁辺を残置している。刃部の裏面側には不連続ながらも明確な剥離が入っている。

23（第60図）はナイフ形石器。石刃を素材とし打面を下に用いて、右側縁にブランティングを施す。右側縁の調整は中央よりやや下でいったん途切れ、その部分が張り出した形になっている。基部には折れ面を残置している。

24a（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材とし、打面を基部に残置させ、右側縁の下半部にブランティングを施す。左側縁は素材剥離時の縦割れの面を残置しておりブランティングの代用と考えられる。刃部の表裏両面には連続的な剥離が認められる。

25（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材とし打面を基部に残置させ左側縁と右側縁の下半部にブ

ランティングを施す。右側縁の上半部の加工は、平坦でノッチ状に入っておりブランティングではない。中央で裏面側からの力により折損している。

93（第66図）は削器。打面部が分厚く三角錐の形状をなす剥片を素材にし、左側縁に連続する剥離を加えて刃部を作出している。刃部中央で２カ所にノッチ状に抉れた部分が観察され、頻繁な使用の痕跡が伺われる。

94b（第66図）は削器。背面に礫面を残す厚手の縦長剥片を素材にし、左側縁に連続する剥離を加え刃部を作出している。

95b（第66図）は削器。打面を残す横長剥片を素材にし、左側縁に連続する剥離を加えて刃部を作出している。

96（第66図）は削器。極めて良質の硬質頁岩の分厚い縦長剥片を素材にし、末端と右側縁に角度の高い剥離を加え刃部を作出している。器体表面の全体に細かいキズが多く認められる。

97（第66図）は削器。極めて良質の硬質頁岩の分厚い石刃を素材にし、両側縁に角度の高い剥離を加えてノッチ状の刃部を作出している。刃部の稜は顕著に磨滅しており、頻繁な使用の痕跡が伺われる。

145（第74図）は掻器。極めて良質の硬質頁岩の縦長剥片を素材にし、左側縁と末端に刃部が作出されている。刃部の稜は顕著に磨滅しており、頻繁な使用の痕跡が伺われる。

146（第74図）は掻器。打面を残す縦長剥片を素材にし、右側縁に連続する剥離を加えられて刃部が作出されている。その加工部位から器種分類上削器とした方が妥当と考えられる。

171（a、b）（第80図）は二次加工のある剥片。黒曜石の横長剥片を素材にし、打面部を背面からの加撃で除去している。打面に続く縁辺は主要剥離面からの２回の加撃で直線状に整形される。それに対向する縁辺には使用に起因すると思われる微細な剥離痕が顕著に観察される。

172（第80図）は二次加工のある剥片。縦長剥片を素材にし、折れ面に背面側から剥離が加えられている。

174（a、b）（第80図）は二次加工のある剥片。縦長剥片が中央で折損した後、末端部側の左側縁の上部に剥離が加えられている。

175a（第80図）は二次加工のある剥片。打面を残す幅広の剥片を素材にし、左側縁の打面付近に、主要剥離面側から平坦な剥離が加えられ、それに隣接した部位には、表面側からブランティング状の角度の高い剥離が加えられている。接合状態からこれらの調整は折損後に加えられたことが理解される。

194（第82図）は微細剥離痕のある剥片。黒曜石の縦長剥片の左側縁の上部に不連続な剥離痕が観察される。

202（第82図）は微細剥離痕のある剥片。小形の剥片の末端に微細な剥離痕が観察される。

158（第77図）は厚手の剥片を素材にしその主要剥離面から小形の剥片が剥離された石核。

211（第84図）は縦長剥片。極めて良質の硬質頁岩で、打面は点状で頭部調整は入念になされている。

229（第86図）は縦長剥片。薄手の縦長剥片が中央部で背面からの力で折損している。

233（第86図）は打面を厚く残す縦長剥片。

236b（第87図）は礫器。ホルンフェルスの大形の礫を用い、平坦な面から剥離を加え片刃の刃部を作出したもの。

243（第89図）は敲石。棒状の砂岩の円礫の一端に敲打痕が観察される。被熱して全面が赤化している。

〈接合資料〉

Ⅰａ類２例、Ⅰｂ類４例、Ⅱ類１例、Ⅲ類６例である。

接合資料32（第107図**95**）はHSh４でⅠａ類。単打面から小形で横長の剥片が、石核95aから連続的に95c、95bの順で２枚剥離されたもの。95cは12号ブロックの出土である。３点とも末端に石核の底面を取り込んでいる。95bは削器に加工されている。95bの剥離後、石核95aは、末端部と打面部に連続する剥離を加えられており、掻器に転用された可能性がある。

接合資料33（第107図**266**）はHSh４でⅠｂ類。２点の小形の剥片が266a、266bの順に剥離されたことを示す接合資料。

接合資料34（第107図**267**）はHSh２で小形の剥片が縦割れを起こしたもの。

接合資料50（第114図**279**）はCh１でⅠａ類。石核と剥片３点の接合。279c、279b、279dの順に剥離されている。この母岩はメノウ質のチャートで、そのためか石核の中心部に石英の結晶が入っており、石核に残される剥離痕にはそれによるヒンジフラクチャーが多く認められる。

接合資料に至る前段階は、石核の正裏を作業面とし、主に正面は下設打面から、裏面は上設打面から縦長剥片を連続的に剥離した痕跡が認められる。その後279cによる作業面からの剥離で石核の右側縁を調整する。次に作業面からの加撃で打面を再生するが、大きく湾曲し打面中央部が凹んでしまう。それを修正するためか、裏面から279b、279dが剥離されるが、打面と作業面のなす角度が鈍角になってしまい、その後剥離は行われずに石核279aは廃棄される。

接合資料52（第115図**280**）はCh１でⅢ類。幅広の剥片が３つに折れたものの接合。背面には主要剥離面と同方向の剥離痕が認められる。

接合資料53（第115図**24**）はCh１でⅠｂ類。ナイフ形石器と剥片の接合である。24aが剥離された後、24bが剥離される。24aは打面が大きく、中央より右寄りに高い稜が通り、先端が細くなる剥片であり、稜の直上の打面を残し左側縁にブランティングを施してナイフ形石器に加工している。24bは一括遺物である。

接合資料57（第115図**94**）はCh９でⅠｂ類。削器と剥片３点の接合。94b、94d、94a、94cの順に縦長剥片が連続して剥離される。94bと94dの剥離後、作業面側から打面が調整され、94a、94cが剥離される。94bは左側縁に礫面を残し、背面中央に高い稜が通る剥片で、左側縁に加工が施され削器にされている。

接合資料69（第120図**175**）はOb10でⅢ類。幅広の剥片が打面付近で２つに折損した後に、打面部側の175aに二次加工を施している。

接合資料70（第120図**171**）はOb10でⅡ類。二次加工のある剥片171（a･b）に調整剥片171cが接合する例。調整剥片171cは、分厚く幅広で二次加工のある剥片171（a･b）を大きく変形させている。171cはおそらく剥離時に縦割れを起こしており右半分は回収されていない。171cの表面にブランティングが認められることから、ナイフ形石器の再加工を行っている可能性が高い。二次加工のある剥片171（a･b）は調整剥片171cの剥離後に主要剥離面の球果からの力により先端が折損している。

接合資料73（第121図**292**）はOb10でⅠｂ類。上下の打面から剥離された２枚の剥片の接合。292a、292bの順に剥離されている。292aの末端はフェザーエッジとなっている。

接合資料75（第121図**174**）はOb２でⅠｂ類。縦長剥片２点と頭部調整の砕片２点の接合。174c、174e、174d、174（a･b）の順に剥離される。174（a･b）の背面の剥離痕を観察すると、はじめは174（a･b）の末端側からの剥離が行われており174c、174eはその際の頭部調整の砕片である。その後打面を180度転位させ174（a･b）の打面側に転じ、174d、174（a･b）が剥離される。黒曜石を素材とし、両設打面から縦

長剥片を連続的に剥離した過程を示す接合資料である。

接合資料77（第121図**294**）はOb13でⅢ類。幅広の剥片が背面側からの力により折損した例。

接合資料84（第127図**236**）はHo15でⅡ類。礫器とその刃部作出剥片の接合。大形の礫の平坦な面から236aをはじめとする剥片を剥離し、片刃の礫器を製作している。

12号ブロック

〈出土状況〉（第28図）

４区北東側のNJ－46～47、NK－46～47グリッドを中心に位置し、合計107点の石器が長径11m、短径７mの楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層中部である。ブロックの中央部に密集部があり約２m北西に、それよりやや小さな密集部が認められる。中央の密集部を取り囲むように、その東側に弧状に製品類が分布している。２カ所の密集部においては各母岩の分布に遍在は認められない。本ブロックは、15、16号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第44図）

保有石材は珪質頁岩２点、硬質頁岩20点、チャート12点、ガラス質黒色安山岩１点、黒曜石66点、大理石６点で23母岩が認定された。Ob10、HSh２を中心とした剥片剥離の痕跡が認められる。Ob10はある程度の大きさをもつ縦長剥片の他に、砕片や特にブランティングチップが目立つことから、ナイフ形石器の製作が中心的に行われたことが推定される。本ブロックや11号ブロックでは第60図25や27のような打面を基部に残置させるナイフ形石器が特徴的に出土している。HSh２は油脂光沢のある良質の硬質頁岩で、小形寸詰まりで、末端が主要剥離面側へ湾曲する剥片が多く剥離されており、小形の石核から剥片剥離が行われたことが推定される。他にMb２ではナイフ形石器が製作されている。Ch１では削器とその調整剥片が検出されている。またOb４は縦長剥片を連続的に剥離した接合資料が得られている。母岩の共有関係は10、11、13、14、15、17、20号ブロックとの間に認められるが、とりわけ10、11、13号ブロックとの関係が密接である。接合関係は10、11号ブロックとの間に認められる。各母岩の分布に偏在は認められないが、ナイフ形石器や削器、掻器などの製品類はブロックの周辺に分布する。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第60図27、28）、削器５点（第67図98a、99、100、101、102）、掻器３点（第71図124、125、126）、円形掻器３点（第74図147、148、149）、二次加工痕のある剥片３点（第80図169、176a、177）、微細剥離痕のある剥片３点（第82図195、196、197）、石核１点（第77図159）、剥片53点、砕片34点である。

27（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材にし、打面を基部に残置して、右側縁にやや角度の低いブランティングを施す。左側縁には微細ながらも連続する剥離が認められる。中央で表面からの力により折損している。

28（第60図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材にし、打面を上部に設定しブランティングにより除去している。左側縁から基部にかけてはブランティングにより弧状に調整され、右側縁の下半部は折れ面を残置させて、結果的に平面形態は涙滴形をなしている。

98a（第67図）は削器。厚手の縦長剥片を素材にし、両側縁と末端に刃部が作出されている。折れ面にも一部調整が加えられている。左側縁には角度の低い加工が、右側縁には角度が高く鋸歯状の加工が施されている。末端は両側縁からの調整で中央やや右寄りに尖頭部が形成されている。

99（第67図）は削器。縦長剥片を素材にし左側縁に連続する剥離が加えられ刃部が作出されている。また右側縁には不連続ながらも剥離が加えられ、ノッチ状の刃部が作出されている。

100（第67図）は削器。打面を残す厚手の縦長剥片を素材とし、両側縁から右末端部にかけて連続する剥離が加えられ、ノッチ状の刃部が作出されている。

101（第67図）は削器。極めて良質の硬質頁岩の幅広の剥片を素材とし、左側縁と末端にノッチ状の刃部が作出されている。打面部は折損している。

102（第67図）は削器。厚手の縦長剥片を素材にし、左側縁に連続する角度の高い剥離が加えられ刃部が作出されている。

124（第71図）は掻器。厚みがありやや末端が湾曲する縦長剥片を素材にし、右側縁の一部を除くほぼ全周にわたって加工が施されている。特に右側縁の下半部と末端には角度の高い規則的な剥離が施され刃部が作出されている。

125（第71図）は掻器。打面を厚く残す寸詰まりの剥片を素材にし、右側縁の主要剥離面に連続する剥離が加えられ刃部が作出されている。

126（第71図）は掻器。厚手の横長剥片を素材にし、打面部とその周囲に平坦な加工を施し刃部が作出されている。

147（第74図）は掻器。礫面を残す幅広の剥片を素材とし、表裏にわたって平坦な加工が施されている。表面にみられる両側縁の調整は浅く不揃いで、それらに対向する裏面にみられる両側縁の調整は深く素材を抉っていることから楔形石器である可能性も否定できない。

148（第74図）は掻器。打面を残す寸詰まりの剥片を素材にし左側縁には裏面から、末端には背面からの剥離が加えられ、刃部が作出されている。

149a（第74図）は掻器。厚手の剥片を素材にし、角度の高い剥離で円形に刃部が作出されている。右側縁の調整はヒンジフラクチャーを起こしている。

169（第80図）は二次加工のある剥片。縦割れを起こした横長剥片の末端に連続する剥離が加えられている。

176a（第80図）は二次加工のある剥片。縦長剥片を縦に用い、右側縁にブランティングを施したナイフ形石器の一部と考えられる。

177（a、b）（第80図）は二次加工のある剥片。打面を残す薄手の石刃の右側縁の下半部に微細ながらも連続する剥離が認められる。

195（第82図）は微細剥離痕のある剥片。薄手の縦長剥片を素材にし、左側縁の下半部と末端に微細な剥離痕が観察される。

196（第82図）は微細剥離痕のある剥片。末端の折損した縦長剥片の左側縁の表裏に不連続な微細な剥離痕が観察される。

197（第82図）は微細剥離痕のある剥片。打面を厚く残す横長剥片を素材にし、末端の縁辺に微細な剥離痕が観察される。

159（第77図）は石核。厚手の剥片を素材にし、主要剥離面を打面として小形の横長剥片が剥離された石核。

232（第86図）は剥片。小形の横長剥片である。背面には同じ形状の剥片が剥離された痕跡が認められる。

〈接合資料〉

Ⅰb類２例、Ⅱ類２例、Ⅲ類２例である。

接合資料35（第108図**149**）はHSh２でⅡ類。掻器とその刃部調整剥片の接合。厚手の剥片を素材にし、右側縁の裏面から149bが剥離されている。

接合資料51（第114図**98**）はCh１でⅡ類。削器とその調整剥片の接合資料。98bは98aの折れ面を打面として剥離されている。器厚を減ずる調整と考えられる。

接合資料68（第120図**176**）はOb10でⅠb類。剥片と二次加工のある剥片の接合。幅広の剥片176bが剥離された後、176aが剥離され二次加工を施されている。両者とも打面部は欠損している。

接合資料72（第120図**291**）はOb10でⅢ類。礫面をもつ幅広の剥片が欠損した接合。

接合資料71（第120図**290**）はOb10でⅢ類。大形で厚手の剥片が欠損した接合。

接合資料76（第121図**177・189**）はOb４でⅠb類。石刃を連続的に剥離した過程を示す接合。10号ブロックとのブロック間接合である。177c、189、177（a･b）の順に剥離される。189は二次加工のある剥片で10号ブロックの出土。左側縁上半にノッチ状の加工が施され、右側縁にも微細な加工が施されている。３点とも頭部調整はよく行われているが、礫面を打面としている。

13号ブロック

〈出土状況〉（第29図）

４区東側のNH～NI－45グリッドを中心に位置し、合計13点の石器が長径４m、短径３mの不整円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣb層上部にかけてで幅広いが主にⅣa層中部から出土している。合計13点の石器のうち４点が掻器であり、それらは中央部で近接して出土している。二次加工のある剥片179のみが西端に離れて出土している。本ブロックは、14号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第45図）

保有石材は珪質頁岩２点、硬質頁岩４点、チャート１点、黒曜石６点で８母岩が認定された。どの母岩もすべて１、２点ずつで剥片剥離の痕跡は認められない。母岩の共有関係は10、11、12、14、15号ブロックの間に認められるが、とりわけ11、12号ブロックとの関係が密接である。他ブロックとの接合関係は認められない。母岩や製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器は掻器１点（第71図127（a･b））、円形掻器３点（第75図150、151、152）、二次加工痕のある剥片１点（第80図179）、微細剥離痕のある剥片２点（第82図198、199）、剥片６点である。

127（第71図）は掻器。127aと127bは同時割れで、127aが打面直下でフェザーエッジになった結果、その段差により127bが剥離された。その後それぞれの右側縁に連続する剥離を施し刃部を作出している。

150（第75図）は掻器。打面を残す分厚い剥片の末端に、規則的な角度の高い剥離を加えて弧状の刃部を作出している。右側縁にも連続する剥離が認められる。表面の刃部の調整が加えられた後に裏面には両側縁から平坦な剥離が加えられている。

151（第75図）は掻器。厚手の剥片を素材にし、全周に角度の高い剥離を加えて刃部を作出している。末端は直線状で両側縁は緩く弧状に加工されている。打面は表面側からの加撃により除去されている。

152（第75図）は掻器。一部に礫面を残す厚手の剥片を素材にし、末端と左側縁に角度の高い規則的な剥離を加えて弧状の刃部を作出している。末端の刃部の右半分は、調整がヒンジフラクチャーを起こして

いる。打面部は表面側からの大きな剥離により除去されており、その剥離面から表面側へは連続する剥離が認められる。

179（第80図）は二次加工のある剥片。寸詰まりの剥片の右側縁の下半部に、連続する剥離が加えられている。打面部は右半分が欠損している。

198（第82図）は微細剥離痕のある剥片。入念に調整された打面から剥離された縦長剥片の両側縁に、微細な剥離痕が観察される。末端は欠損している。

199（第82図）は微細剥離痕のある剥片。打面を残す幅広の剥片の末端に、微細な剥離痕が観察される。裏面には末端部側からの剥離が２枚観察される。

〈接合資料〉

Ⅲ類１例である。

接合資料31（第106図**127**）は削器２点の接合。127a と127b は剥離時の同時割れで、その後それぞれが削器に加工されている。

14号ブロック

〈出土状況〉（第29図）

４区東側の NC－45、NE－47グリッドを中心に位置する。ブロックは、合計32点の石器が NC－45を中心とした径４m の円形状の広がりと NE－47グリッドを中心とした径５m の円形状の広がりに分かれて分布している。出土層位はⅣa 層下部である。石核261a とそれに接合する剥片261b、261c は NC－45を中心とする集中部の南端に近接して出土している。約４m 南側のブロック外には磨石246と剥片２点が出土している。NC－45グリッドを中心とした集中部は、10号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第45図）

保有石材は頁岩１点、珪質頁岩17点、チャート11点、ガラス質黒色安山岩１点、砂岩１点で12母岩が認定された。SSh５と Ch10において、石核を含む剥片剥離の痕跡が認められる。Ch10は楕円形の円礫を長軸方向に用い、打面再生を繰り返しながら縦長剥片を剥離している。しかし原石の形状に制約されてか連続的に剥離するには至っていない。それとは反対に SSh５では90度打面転位を繰り返す剥離によって、寸詰まりの剥片が剥離されている。また剥片剥離の痕跡は認められないものの SSh21においては両設打面の石核が検出されている。母岩の共有関係は10、11、12、13、16、20号ブロックとの間に認められる。他ブロックとの接合関係は認められない。製品類の分布に偏在は認められないが、Ch10がブロックの南東にまとまって出土している。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第61図29、30）、削器２点（第67図103、第68図104）、掻器１点（第71図128）、石核３点（第78図160、第101図261a、第117図283a）、剥片18点、砕片４点、敲石１点（第89図240）である。

29（第61図）はナイフ形石器。薄手の縦長剥片を素材にし、打面を基部に残置させて、両側縁の基部付近にブランティングを施している。

30（第61図）はナイフ形石器。横長剥片を素材にし右側縁と左側縁の下半部に鋸歯状にブランティングを施している。刃部の背面には礫面を残置する。出土層位はⅣa 層下部であるが、出土位置が本ブロック

の北端でブロックの外縁でもあり、またその形態や製作技術からみて本ブロックには共伴しないものと考えられる。

103（第67図）は削器。礫面を大きく残す分厚い縦長剥片を素材にし、両側縁に鋸歯状の刃部を作出している。特に左側縁下半部の加工が規則的である。

104（第68図）は削器。平坦打面を有する縦長剥片を素材にし、右側縁は表面側に、左側縁には裏面側に平坦な加工を加えて刃部を作出している。剥片素材の石核である可能性もある。

128（第71図）は掻器。幅広の縦長剥片を素材にし左側縁に連続する剥離が加えられ刃部が作出されている。器種分類上、削器とする方が妥当と考えられる。

160（第78図）は石核。上下によく調整された打面を設定し、右側縁では礫面を除去するための調整が入念に行われている。裏面には礫面を大きく残している。石核廃棄直前には上設打面から縦長剥片が剥離されている。

240（第89図）は敲石。菱形を呈する平たい円礫の下端の薄く尖っている部位に敲打痕が顕著に残っている。重量は760g あり敲石としては大きい部類に入る。

〈接合資料〉

Ⅰa 類２例、Ⅰb 類１例である。

接合資料21（第100図**260**）は SSh５でⅠb 類。頭部調整や打面調整が行われていない分厚い剥片２点が末端で接合する例。

接合資料22（第101図**261**）は SSh５でⅠa 類。分厚い板状の剥片を素材として、素材の側面を作業面とする剥片剥離の過程を示す接合資料。まず接合図の裏面側を打面として261b が剥離された後、打面を180度転位して表面側から261c が剥離された。その後、打面を90度転位して、右側縁を打面とし、裏面を作業面とする剥片剥離行われた後、最終形態が板状となる石核261a が廃棄された。

接合資料61（第117図**283**）は Ch10でⅠa 類。縦長剥片２点と楕円形の礫を長軸方向に用いた石核が接合する例。まず最も高い打面から283b が剥離される。283b は単打面で原石の状態で稜をなしているところの直上を加撃して剥離されている。原石の稜上にさらに若干の稜作出の調整を施している。その後大幅に打面を再生し、幅広の縦長剥片283c が剥離される。283c の打面は欠損し、背面は礫面や節理面で構成される。その後、打面再生が繰り返されて、小形の剥片が剥離された後に、石核283a が廃棄される。接合状態や石核に残された剥離面の少なさからみて、縦長剥片が連続的に剥離されるには至らなかったと考えられる。

ブロック群Ⅱb（第22図）

ブロック群Ⅱb は、４区の南側に分布する15～22号ブロックと、それに隣接する２区の北端に分布する23号ブロックからなる。出土層位はⅣa 層下部からⅣb 層上部にかけてに求められる。それぞれのブロックは１、２、４、５～９、11～13、20号礫群を伴う。石材構成は珪質頁岩が34%と最も多く、次に硬質頁岩が18%で、黒色頁岩、頁岩、ホルンフェルスがそれぞれ12%となり、砂岩が２%、ガラス質黒色安山岩が１%、で他にはガラス質流紋岩、蛇紋岩、石英、閃緑岩、大理石、メノウがそれぞれ１%以下である。ブロック群Ⅱa と同じく硬質頁岩と珪質頁岩は遠隔地産と推定される極めて良質の頁岩であり、これを主要石材に用いているのが本ブロック群の特徴である。ただし珪質頁岩には在地のものと推定されるものも若干含まれている。特徴的な製品類は石刃を素材とした二側縁加工のナイフ形石器である。剥片剥離技術

をよく示す良好な接合資料が多く得られている。

15号ブロック

〈出土状況〉（第30図）

４区南西の MQ－48、MR－49グリッドを中心に位置し、82点の石器が長径８m、短径７m の不整円形状の広がりをもって分布している。出土層位はIVa 層下部である。ブロックの中央部から約８m 西側には、２点のナイフ形石器36、37と礫石器238および石核287a が分布している。ブロックの中央部には、剥片砕片を主体とした密集部がみられ、その南東部に製品類を主体とした散漫な分布が認められる。接合資料41、42、46は中央の密集部の中に分布し、接合資料36は南東部の散漫なまとまりの中に分布している。本ブロックは、９号礫群と重複する。

〈母岩別資料〉（第46、47図）

保有石材は頁岩６点、珪質頁岩37点、硬質頁岩３点、黒色頁岩24点、チャート６点、黒曜石１点、ホルンフェルス４点、大理石１点、砂岩１点で17母岩が認定された。SSh１、BSh１を中心に剥片剥離が行われた。特に SSh１では両設打面の石刃核から石刃が連続的に剥離された痕跡を示す接合資料が得られている。本ブロックではそのような両設打面の石刃核を含む接合資料が他に、BSh３、HSh７においても認められ、本ブロックの剥片剥離技術の特徴とすることができる。BSh１では90度の打面転位を繰り返しつつ礫面や節理面を剥離するという石核調整の初期の段階と考えられる接合資料が得られている。母岩の共有関係は11、12、13、17、18、21、22、23号ブロックとの間で認められる。接合関係は17、22号ブロックとの間で認められる。ブロックの北西部で SSh１と BSh１による剥片砕片がまとまって検出され、それとは平面分布を違えてブロックの南東部で製品類が散漫に分布している。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器７点（第61図31、32b、33a、34、35、36、37）、削器１点、（第68図105）二次加工痕のある剥片２点（第81図183（a･b）、187h）、微細剥離痕のある剥片１点（第82図200）、石核４点（第96図187a、第108図32a、第112図276a、第119図287a）、剥片40点、砕片25点、礫器２点（第87図235、第88図238）、敲石１点（第89図242）である。

31（第61図）はナイフ形石器。小形の石刃を素材にし、打面を上にして左側縁の上部と右側縁の下半部にブランティングを施している。

32b（第61図）はナイフ形石器。石刃を素材にし、縦方向に用いて打面を含む上半部を斜断するように急斜度の調整を行っている。

33a（第61図）はナイフ形石器。小形の縦長剥片を縦方向に用い、打面を基部に残置して、右側縁の下半部にブランティングを施している。

34（第61図）はナイフ形石器。厚手の石刃を縦方向に用い、二側縁を加工している。打面はブランティングにより除去されている。先端部を欠損している。

35（第61図）はナイフ形石器。小形の縦長剥片を縦方向に用い、二側縁を加工している。

36（第61図）はナイフ形石器。縦長剥片をやや斜めに用い、二側縁を加工している。先端の角度が大きく、切り出し形を呈する。基部を欠損している。

37（第61図）はナイフ形石器。礫面を残し末端がやや裏面へ湾曲する縦長剥片を縦方向に用い、左側縁にブランティングを施す。基部には、折れ面を残置している。

105（第68図）は削器。分厚い縦長剥片を素材に左側縁の裏面側に連続する剥離が加えられて刃部が作出されている。

183（a、b）（第81図）は二次加工のある剥片。小形で寸詰まりの剥片を素材にし、左側縁には背面側から、右側縁の打面付近には主要剥離面側から連続する剥離が加えられている。

187h（第81図）は二次加工のある剥片。末端と打面部を欠損した縦長剥片を素材に左側縁の主要剥離面側へ連続する剥離が加えられている。

200（第82図）は微細剥離痕のある剥片。小形の寸詰まりの剥片の右側縁下半部に微細な剥離痕が観察される。

235（第87図）は礫器。平たい円礫を素材にし、裏面から５回の大きな剥離で整形し片刃の刃部を作出している。

238（第88図）は礫器。235と同様の素材を用い同様の製作工程が観察される。先端部にはより細かい剥離を連続させ刃部が作出されている。

242（第89図）は敲石。三角柱の形状をなす砂岩の礫で一端に敲打痕が集中して観察される。

222（第85図）は石刃。背面に礫面を残し、調整打面をもつ石刃である。

〈接合資料〉

Ⅰa類４例、Ⅰb類５例、Ⅲ類４例である。

接合資料11（第96図**187**）はSSh１でⅠa類。石核１点と剥片16点の接合。はじめ下設打面から187fが剥離され、その後上設打面から187c、187d、187p、187q、187gの順に剥離され、その後上設打面に正面から１回の剥離により、上設打面が更新され、その新たな上設打面から187m、187k、187lが順に剥離される。その後、187qの剥離時に節理によって生じた角を除去するため187i、187jが剥離され下設打面が再生される。その後上設打面において打面調整剥片187h、187o、187nが剥離され、それによって再生された上設打面から187eが剥離される。その後下設打面から187bが剥離され、石核の末端で大きく形状を損ない、石核187aが廃棄される。

接合資料12（第98図**254**）はSSh１でⅠb類。剥片２点の接合。254bが正面図の右斜め方向から剥離された後、254aが上方から剥離される。254bは末端が主要剥離面側に少し湾曲し底面に節理面を残している。また両者はともに打面を欠損している。

接合資料13（第98図**255**）はSSh１でⅠb類。剥片２点の接合。255bが剥離された後、同じ打面から255aが剥離される。両者はともに小形で寸詰まりの剥片である。

接合資料14（第98図**256**）はSSh１でⅢ類。石刃が背面からの力により中程で折損した例である。

接合資料15（第98図**183**）はSSh１でⅢ類。小形で寸詰まりの剥片を素材にした二次加工のある剥片が中程で折損した例である。

接合資料16（第98図**257**）はSSh１でⅢ類。剥片２点の接合。257bが正面図の右斜め方向から剥離された後、257b･cが上方から剥離される。打面はともに平坦打面である。

接合資料36（第108図**32**）はHSh７でⅠa類。石核とナイフ形石器の接合。石核32aは上下に打面をもち、縦長剥片を連続的に剥離した痕跡を持つ石核。上設打面は左側に若干の調整がみられるが下設打面は平坦打面である。はじめは下設打面から剥片剥離が行われていたが、その後上設打面に打面を移した。その上設打面から剥離された剥片でナイフ形石器32aが製作されている。上設打面の近くで２度続けてヒンジフラクチャーが起きており、石核32bが廃棄される原因となったと考えられる。

接合資料37（第109図**33**）はHSh７でⅠｂ類。ナイフ形石器と剥片の接合。17号ブロックとの間のブロック間接合で、33bが17号ブロックの出土である。はじめに33bが剥離され、次に33aが剥離されてナイフ形石器に加工される。33bは調整打面であり背面には主要剥離面と同方向の剥離が残されていて、末端はヒンジフラクチャーを起こしている。33aは左側縁の打面近くにブランティングを施し、ナイフ形石器に加工している。

接合資料41（第110図**271**）はBSh１でⅠｂ類。剥片３点の接合である。石核は節理面に挟まれた薄い板状の形状をなしていたと考えられ、その板状の石核を縦方向に用い、小口面を作業面として剥片剥離を行っている。はじめに正面図にみられる節理面を打面として271（a･b）が剥離される。271（a･b）は打面と底面に節理面を残している。271aは271（a･b）の剥離時の同時割れによるものである。271（a･b）による剥離面を打面として、271cの背面に残された剥離面に観察される何枚かの縦長剥片が剥離される。その後打点を後退させ剥片271cが剥離される。271cは背面に節理面と礫面を残している。その後打面が再生され271cの打面より一段低くなった打面から271d･eが剥離される。

接合資料42（第111図**272**）はBSh１でⅠｂ類。剥片５点の接合である。両側面（接合図では上下の面）を節理面に挟まれた板状の石核において、まだ礫面を残す小口面を作業面として剥片剥離が行われた接合資料である。まず接合図右側面図にみられる剥離面を打面として272a、272c、272bの順で剥離される。これらは３点とも背面に礫面を残している。272bが剥離される前には側方から稜作出の調整が加えられている。その後接合図の上面図にみられる節理面を打面として272dと272eの順で剥離され、作業面下部の礫面を除去している。石核の形状に沿って剥片剥離を開始した初期の段階の接合資料であると考えられる。

接合資料46（第112図**276**）はBSh３でⅠａ類。石核と剥片１点の接合。276aは上下ともに入念に調整された打面をもつ両設打面の石刃核で、表裏に作業面をもつ。表面は主に上設打面から、裏面は主に下設打面から剥片剥離が行われている。276aは右側面には礫面が残されている。剥片276bは石核276aの左側面において上設打面から剥離された剥片の打面部を含む上半部である。右側面に表面の作業面を取り込んでいる。表面には下設打面から剥離された剥片の末端がヒンジフラクチャーを起こして段を残しており、276bの剥離によって結果的にこの段が除去されている。

接合資料62（第117図**284**）はCh31でⅢ類。厚手で大形の剥片が末端付近で折損した接合例である。末端部には礫面を残しておりウートラパッセとなっている。打面は欠損している。

接合資料65（第119図**287**）はCh23でⅠａ類。石核と剥片の接合である。22号ブロックとのブロック間接合であり、剥片287bが22号ブロックの出土である。287aは小形で底面を有する板状の石核であり、平坦打面から打点を左右に移動させながら後退させて剥片287bのような小形の横長の剥片を連続的に剥離している。石核287aの出土層位はⅣa層上部であるが、本ブロックの遺物集中地点から約９ｍも離れており、本ブロックに含めるのは適当ではなく、またその剥片剥離技術の特徴を鑑みても本ブロックとの共時性は再検討を要すると考えられる。

16号ブロック

〈出土状況〉（第30図）

４区東側のMS－43グリッドを中心に位置し、合計15点の石器が長径４ｍ、短径３ｍの不整円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅢb層下部からⅣa層下部と幅を持つが、Ⅳa層下部を主体に出

土している。掻器182a とその刃部再生剥片がブロックの南端で近接して出土している。本ブロックは、数点の礫と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第47図）

保有石材は硬質細粒凝灰岩２点、珪質頁岩７点、黒色頁岩４点、チャート２点で６母岩が認定されたが、すべて１、２点ずつで剥片剥離の痕跡は認められない。ナイフ形石器が４点単品で搬入され、BSh４の掻器において刃部再生を行った接合資料が得られている。母岩の共有関係は14号ブロックとの間に認められる。他ブロックとの接合関係は認められない。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器４点（第61図38～40、43）、掻器（第113図182a）、剥片３点、砕片７点である。

38（第61図）はナイフ形石器。小形の剥片を縦に用い、左側縁にブランティングを施している。左側縁の基部付近は表裏両面から調整を行っている。右側縁は折れ面を残置してブランティングの代用としている。

39（第61図）はナイフ形石器。厚手の縦長剥片をやや斜めに用い、二側縁にブランティングを施している。先端は素材の縁辺を残置し丸くなっている。

40（第61図）はナイフ形石器。厚手の縦長剥片をやや斜めに用い二側縁にブランティングを施している。調整は右側縁は表裏両面から施し、左側縁は表面から施している。先端は破損している。

43（第61図）はナイフ形石器。小形の剥片を縦に用い、二側縁にブランティングが施された極めて小形のナイフ形石器である。

182a（第113図）は掻器。厚手の縦長剥片を素材にし、末端部に連続する急角度の加工を施し刃部を作出している。末端部には素材の段階における右側面からの調整がヒンジフラクチャーを起こしており、その部分には刃部は作出されていない。本資料の刃部がブロック内で作出されたことを示す接合資料が得られている。

〈接合資料〉

Ⅰb類１例、Ⅱ類１例である。

接合資料24（第102図**262**）はSSh10でⅠb類。剥片２点の接合。まず平坦打面から262b が剥離されるが、作業面の中程でヒンジフラクチャーを起こしてしまい、作業面に段ができてしまう。262b は剥離時に縦割れを起こしている。その後同じ打面において打点を右へ移動させ２枚の剥片が剥離されるが、やはり262b と同じく作業面中程でヒンジフラクチャーを起こして寸詰まりの剥片しか剥離されていない。その後作業面を再生させるためか打点を深く後退させ262a が剥離される。末端には石核の底面を取り込んでいる。

接合資料47（第113図**182**）はBSh４でⅡ類。掻器とその刃部作出剥片３点の接合である。これらは近接して出土したため１点の座標で取り上げられ、そのため接合線は表現されていない。厚手で末端に石核の底面を取り込んだ縦長剥片を素材にし、末端部を主要剥離面側から182c、182b、182d の順で剥離し、刃部が作出されている。その接合状態から182b と182d の間に１枚、182d の後に２枚剥離されていることが観察されるため、合計６回の調整で掻器の刃部が作出されている。刃部の右隣は素材剥離以前の、石核右側面からの調整によりヒンジフラクチャーが起きていて抉れており、調整は施されていない。刃部の稜が磨滅している状態が肉眼で観察され使用の痕跡が伺われる。掻器の刃部作出から使用を経て廃棄されるまでの一連の過程を示す接合資料ということができる。

17号ブロック

〈出土状況〉（第31図）

４区南東側の MM～MN－50グリッドを中心に位置し、ブロック中心部から約12m ほど隔てた周辺部に４点の石器が散在する。合計104点の石器からなるブロックの中心には撹乱が入っており、実際には長径９m、短径５m の楕円状の広がりをもっていたことが推測される。MN－51を中心とする密集部の西側には５点のナイフ形石器53、44、54、49、51が散漫に分布している。密集部の中にも製品類が密度濃く分布している。接合資料19、20、40など多くの接合資料はこの密集部の中に分布しているが、接合資料６の250（b･c）のみ密集部から約４m 南で出土し、密集部から出土した250a と接合している。本ブロックの東側に５号礫群、中央部に６号礫群が重複して分布する。また、ブロック密集部から９m ほど隔てた MM－53グリッドに分布する２点のナイフ形石器49、54は、７号礫群と重複している。

〈母岩別資料〉（第48図）

保有石材は頁岩31点、珪質頁岩21点、硬質頁岩10点、黒色頁岩９点、チャート４点、黒曜石１点、ホルンフェルス25点、メノウ１点、砂岩１点、不明１点で32母岩が認定された。Sh１、SSh６を中心に剥片剥離が行われている。特に SSh６では入念に調整された両設打面から石刃が連続的に剥離された過程を示す接合資料が得られている。そのような接合資料は HSh９でも断片的ながら得られており、15号ブロックと同様に本ブロックの剥片剥離技術の特徴とすることができる。他には本ブロックで出土しているナイフ形石器10点のうち９点が搬入品であることは大きな特徴である。母岩の共有関係は９、11、12、15、18、20、21、23号ブロックにおいて認められるが、とりわけ15、20、21号ブロックとの関係が密接である。接合関係は15、18号ブロックとの間に認められる。各母岩の分布に偏在は認められないが、製品類は剥片砕片類が集中する部分に分布するものと、それらから離れたブロックの外縁部に分布するものがある。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器10点（第62図44～49、51～54）、削器２点（第68図109、第69図110）、掻器４点（第72図132～135）、微細剥離痕のある剥片１点（第83図203）、石核１点（第102図263a）、石刃（第62図50、第83図208）、剥片47点、砕片36点、敲石１点（第88図239b）である。

44（第62図）はナイフ形石器。小形の横長剥片を素材にし、打面を左下にして斜めに用い、二側縁にブランティングを施している。左側縁の下半部は折れ面を残置している。

45b（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし、先端部を斜断するような調整を加えている。基部には折れ面を残置している。

46（第62図）はナイフ形石器。石刃を素材にし打面を上にして用い、二側縁にブランティングを施して細身で柳葉形のナイフ形石器に加工している。左側縁の調整は基部にまで達していない。

47（第62図）はナイフ形石器。石刃を素材にし打面を上に用いて、二側縁にブランティングを施している。基部には素材の縁辺を残置している。

48（第62図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材にし打面を基部に残置させて、二側縁にブランティングを施す。上半部は主要剥離面からの力で折損し刃部は残っていない。

49（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし打面を基部に残置させて、先端を斜断するような加工を施している。打面は調整打面である。

51（第62図）はナイフ形石器。湾曲の強い厚手の縦長剥片を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。基部は鋭く尖っている。

52（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし打面を基部に残置させ、左側縁は先端と基部の表面に、右側縁は裏面にブランティングを施している。基部付近の両側縁の加工が平坦であることは特徴的である。

53（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし打面を上に用いて、右側縁は先端と基部に、左側縁は基部にブランティングを施している。52と同様に基部付近の加工が平坦である。また裏面基部にも平坦な加工が施されている。

54（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし基部に打面を残置させ、二側縁にブランティングを施している。

109（第68図）は削器。背面が礫面に覆われた厚手の剥片の右側縁に角度の高い剥離を連続して施し刃部が作出されている。

110（第69図）は削器。背面に礫面を残す稜付き石刃を素材にし、左側縁に剥離を加えて刃部が作出されている。

132（第72図）は掻器。縦長剥片を素材にし末端部を中心に両側縁に連続する剥離を加え刃部が作出されている。

133（第72図）は掻器。小形の剥片を素材にし右側縁に急角度の剥離が加えられて刃部が作出されている。

134（第72図）は掻器。厚手の剥片を素材にし右側縁に急角度の剥離により刃部が作出されている。

135（第72図）は掻器。縦長剥片を素材にし連続する剥離により刃部が作出されている。

203（第83図）は微細剥離痕のある剥片。礫面を有する幅広の剥片の右側縁に微細な剥離痕が観察される。

208（第83図）は稜付き石刃。稜調整は主に左側面から行われているが末端部のみ右側面から行われている。

50（第62図）は調整打面から剥離された石刃。

212（第84図）は縦長剥片。平坦打面から剥離され打面部付近で右側にややねじれている。

214（第84図）は縦長剥片。背面には礫面を残し中央で折損している。

216（第84図）は縦長剥片。背面には節理面を残し調整打面から剥離されている。

221（第85図）は縦長剥片。背面には主要剥離面と同方向に連続して剥離された剥離面が観察される。末端には礫面を残している。

225（第85図）は縦長剥片。背面には反対方向からの剥離面が観察され両設打面の石核から剥離されたことが理解される。打面部は欠損している。

226（第85図）は縦長剥片。225同様に背面の観察から両設打面の石核から剥離されたことが理解できる。下半部は裏面へ強く湾曲している。

234（第86図）はメノウの剥片。打面調整や頭部調整は行われていない。

180（第81図）は剥片。平坦打面から横長剥片が剥離されている。

184a（第81図）は剥片。180に接合する。

〈接合資料〉

Ⅰａ類１例、Ⅰｂ類９例、Ⅲ類１例である。そのうち接合資料37（第109図33）は15号ブロックとの接合で、15号ブロックの項に記載した。

接合資料５（第91図**249**）はSh14でⅠｂ類。剥片２点の接合。まず背面に礫面を大きく残す249bが剥離された後、249aが90度打面を転位させて剥離された。249aは打面部を欠損している。

接合資料６（第91図**250**）はSh５でⅠｂ類。剥片２点の接合。楕円形の円礫を長軸方向に用いて縦長剥片を剥離している。259b･cは打面は欠損しているが、剥片剥離工程のかなり初期の打面から剥離されている。その後打面が更新されて250aが剥離される。250aも打面が欠損しているがバルブの膨らみから考えて打面は折れ面から近い高さにあると考えられる。双方の剥片とも背面に礫面を大きく残す。

接合資料７（第91図**251**）はSh１でⅠｂ類。２点の薄手の小形の剥片が251a、251bの順に剥離されている。251bは一括遺物である。

接合資料19（第99図**45**）はSSh６でⅠａ類。石核とナイフ形石器１点、剥片１点の接合。入念に調整された両設打面の石刃核から石刃を連続的に剥離したことを示す接合資料。まず下設打面から石核右側縁の稜に沿って厚みのある石刃が剥離されナイフ形石器45bの素材とされる。その後上設打面から45cが剥離されて、石核45aが廃棄される。

接合資料20（第100図**180、184**）はSSh６でⅠｂ類。剥片３点の接合。平坦打面から小形の横長の剥片が180b、184の順で剥離され、最後に180aが大きく剥離される。石核調整の剥片の接合と考えられる。

接合資料40（第110図**270**）はHSh９でⅠｂ類。剥片２点の接合。両設打面の石刃核から石刃を連続的に剥離した過程の接合資料であることがわかる。まず上設打面から270aが剥離されるが、ウートラパッセとなり下設打面を大きく取り込んでしまう。その後上設打面から270bが剥離される。270bは打面部を欠損している。

接合資料45（第112図**275**）はBSh２でⅠｂ類。剥片２点の接合。まず右側方から275bが剥離され、その後打面を90度転位させ上方から275aが剥離される。どちらも寸詰まりの横長剥片で背面に礫面を残している。

接合資料81（第125図**298**）はHo３でⅠｂ類。剥片２点の接合。背面はどちらも礫面に覆われている。298a･d、298b･cの順で剥離されている。

接合資料83（第127図**208**）はHo５でⅠｂ類。石刃と稜調整剥片の接合。208aの稜調整はほとんどが左側面から行われているが、末端部のみは右側面から行われている。その末端部の稜調整において208bが剥離された。

接合資料85（第128図**239**）は砂岩でⅢ類。敲石が２つに破損した接合。末端に向かってが細くなり、末端部に敲打痕が観察される。239bが本ブロックの出土で、239aが18号ブロックの出土である。

18号ブロック

〈出土状況〉（第32図）

４区南東側のMM－47～48グリッドを中心に位置し、合計37点の石器が長径４m、短径３mの不整円形の広がりをもって分布している。出土層位はⅣa層下部である。接合資料28はブロックの南半部に、接合資料82は北半部に分布している。局部磨製礫はブロックの最も東端で出土している。本ブロックは、４号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第49図）

保有石材は珪質頁岩25点、硬質頁岩１点、硬質細粒凝灰岩１点、ホルンフェルス９点、砂岩１点で９母岩が認定された。SSh３を中心に剥片剥離が行われている。SSh３は90度の打面転位を繰り返して小形の

縦長剥片を剥離しており、石核を含む接合資料が得られている。他にはSSh12やHo４に剥片剥離の痕跡が認められるが、小形で不定形の剥片が多い。本ブロックは、良質の硬質頁岩や珪質頁岩を素材にし、両設打面の石刃技法が行われたブロック群Ⅱｂの他のブロックとは異なり、在地の石材を用いて小形で不定形な剥片を原石に近い段階から剥離している点が特徴的である。母岩の共有関係は10、11、15、17号ブロックとの間に認められ、そのうち17号ブロックと接合関係がある。SSh１がブロックの南半部に、Ho４がブロックの北西部にまとまって分布している。製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第62図55、56）、掻器４点（第72図136～139）、微細剥離痕のある剥片１点（第83図205）、石核１点（第103図264a）、剥片25点、砕片３点、局部磨製礫１点（第87図237）である。

55（第62図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。左側縁の調整は表裏両面から行われている。右側縁の調整は表面から行われ角度の低い調整である。基部には折れ面を残置する。

56（第62図）はナイフ形石器。幅広の縦長剥片を素材にし打面を下に用いて、右側縁にやや平坦な調整を施して刃部が撥形を呈するナイフ形石器に加工している。

136（第72図）は掻器。小形の薄い剥片の末端に連続する微細な剥離を加え刃部を作出している。刃部の一部のみで大部分は折損していると考えられる。

137（第72図）は掻器。調整打面から剥離された小形の剥片の右側縁に弧状に刃部を作出している。

138（第72図）は掻器。背面に１本の高い稜が通る縦長剥片の末端の折れ面に垂直な剥離が加えられている。その加工部位と調整の特徴からナイフ形石器の可能性が高い。また左側縁の末端付近にもノッチ状に剥離が認められる。

139（第72図）は掻器。調整打面から剥離された不定形な剥片の末端に厚みのある連続する剥離を加えて、刃部を作出している。

205（第83図）は微細剥離痕のある剥片。調整打面から剥離され中央に１本の稜を持つ縦長剥片の右側縁に不連続ながらも微細な剥離痕が認められる。

237（第87図）は局部磨製礫。平たい砂岩の礫の一端の表裏両面に、向きは不明であるが擦痕を伴って平らな面が作出されている。その結果として中央に鋭い稜が形成されている。平らな面を意識的に作出したのか、もしくは敲石として使用している過程で形成されたのかは不明である。

〈接合資料〉

Ⅰａ類１例、Ⅰｂ類１例、Ⅲ類１例である。そのうち接合資料85は17号ブロックとの接合であり17号ブロックの項で記載した。

接合資料28（第103図**264**）はSSh３でⅠａ類。石核と剥片８点の接合である。まず左側面図を作業面として上面から264b、264g、264iの順に剥離される。その後打面を右側面図にみられる面に転位させ264eが剥離される。次にその264eによる剥離面を打面として264cが剥離される。この剥離によって石核底面の礫面が除去され石核264aの打面が形成される。この打面から264h、264fが順に剥離され、その後も石核264aの正面図の剥離面にみられる幅広の剥片が剥離される。その後打面を90度転位させ石核264aの左側面を打面として264dが剥離される。その後同じ打面から石核264aの裏面の剥離面にみられる剥片剥離が行われて石核264aが廃棄される。このように拳より少し小さい円礫を素材にして、90度の打面転位を繰り返しつつ、打面調整を行わず、ある程度安定した打面ができると数枚連続して小形の縦長剥片を剥離

するという剥片剥離過程を示す接合資料である。

接合資料82（第126図**299**）はHo４でⅠｂ類。角礫を素材とした石核の礫面を除去する過程を示す剥片５点の接合である。299e，299a，299（c･b），299d，299fの順に剥離されている。90度の打面転位を繰り返しながら角礫の稜線を挟んで、礫面除去が行われている。石核調整の初期の段階であると考えられる。

19号ブロック

〈出土状況〉（第32図）

４区南東側のMM－45～46グリッドを中心に位置し、合計22点の石器が径５ｍの円形状の広がりをもって分布している。出土層位はⅣa層下部である。接合資料29はブロック全体に分布し、彫器とその削片の資料である接合資料30は、彫器の上半部のみが他と離れたブロックの南端において出土している。

〈母岩別資料〉（第49図）

保有石材は頁岩１点、珪質頁岩17点、硬質頁岩４点で６母岩が認定された。SSh４のみで剥片剥離が行われている。SSh４では打面調整と作業面調整を頻繁に行いながら、両設打面から定形的な石刃を連続的に剥離した過程を示す接合資料が得られている。またSSh13では彫器とその削片の接合資料が得られている。母岩の共有関係は17、20、21、23号ブロックとの間に認められ、そのうち21号ブロックとの間で接合関係が認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器は削器１点（第69図111）、掻器２点（第72図140、第73図141）、彫器１点（第75図153）、石核１点（第105図265a･b）、剥片８点、砕片９点である。

111（第69図）は削器。背面に礫面を残す縦長剥片の右側縁に角度の高い連続する剥離を加え刃部を作出している。バルブの厚みを除去するためか裏面の打面付近には両側縁から平坦な剥離が加えられている。これらの剥離は刃部を切っており刃部作出後の調整である。また左側縁からも裏面へ平坦な剥離が加えられている。このような刃部作出後の裏面への平坦な調整は、150、151にも認められ、本石器群の削器、掻器類の特徴である。

140（第72図）は掻器。小形の横長の剥片の末端に鋸歯状の剥離を加えて刃部を作出している。

141（第73図）は掻器。縦長剥片の打面付近に斜断するような垂直な調整を加えている。加工部位と調整の角度からナイフ形石器の可能性が高い。末端は折損している。

153（a、b）（第75図）は彫器。厚みのある稜付き石刃を素材にし、左側縁に彫刀面を作出して側刃型の彫器を製作している。その後左側面から剥離が加えられるが、この剥離面と右側面や主要剥離面のなす角度は鈍角なので彫刀面かどうかは断定できず、むしろ左側縁に新たに彫刀面を作出するための打面調整であった可能性が高い。中央で表面からの力により折損している。

220（第85図）は縦長剥片。調整打面から剥離され、背面には連続する主要剥離面と同方向の剥離が認められる。末端が広がっている。

〈接合資料〉

Ⅰａ類１例、Ⅱ類１例である。接合資料29は21号ブロックとの接合であるが21号ブロック出土のものは１点のみなので本ブロックの項で記載する。

接合資料29（第104図**265**）はSSh４でⅠａ類。石核と剥片９点の接合。石核には、ウートラパッセになった厚手で大形の石刃を用いている。まず作業面側から打面調整剥片265lが剥離される。その上設打面から

数回の剥離が行われた結果、作業面中程でヒンジフラクチャーが起き段ができてしまう。おそらくこの段を除去するためか裏面から265i、265j、265g が順に剥離され、石核左側縁が調整される。その後調整された石核左側縁の稜に沿って上設打面から石刃265c･d が剥離される。次に下設打面から265k、265e が順に剥離される。その後、先の石刃265c･d の剥離面を打面として左側縁から265f が剥離され上設打面が再生される。さらに作業面の中央よりやや右にみられる高い稜を除去するためか裏面から265h が剥離される。この最後に剥離された265h のみが21号ブロックの出土である。その後再生された上設打面から左側縁の稜を中心に剥片剥離が行われるが、作業面の上半部で続けてヒンジフラクチャーが起きてしまい石核 a･b が廃棄される。石核265a･b は作業面からの力により２つに折損している。このように厚手の剥片を素材にし上下に打面を設定して、頻繁に打面と作業面を調整しながら定形的な石刃を連続的に剥離した過程を示す接合資料である。

接合資料30（第106図**153**）は SSh13でⅡ類。彫器と削片２点の接合。素材は硬質頁岩の厚みのある稜付き石刃で、打面部を左側縁からの打撃で除去した後、その剥離面から左側面図にみられる彫刀面が作出される。この状態で本ブロックに搬入され、左側面を打面にして削片153c、153d が順に剥離される。２点とも末端は素材の主要剥離面に達しているものの、この剥離による剥離面と、左側面や素材の主要剥離面とのなす角度はいずれも鈍角であり、この剥離による剥離面が彫刀面かどうかは断定できない。あるいは左側縁に新たな彫刀面を作出するための打面調整であった可能性も考えられる。接合状態から153c と153d の間に１回剥離が行われている。153a･b は中央で折損しているが、左側縁にみられる彫刀面が作出された後の折損である。153a の右側縁に微細な剥離痕が認められるが、153b の右側縁にはみられず折れ面で中断していることから、折損後に何らかの原因で生じたものと考えられる。

20号ブロック

〈出土状況〉（第33図）

４区南東側の MI－46グリッドを中心に位置し、合計14点の石器が長径９m、短径７m の不整円形状の広がりをもって散漫に分布している。出土層位はIVa 層下部からIVb 層上部である。ブロックの中心部から約９m ほど隔てた周辺部に４点の石器が散在する。ブロックの南側に12号礫群、西側に13号礫群が重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第50図）

保有石材は頁岩２点、珪質頁岩４点、黒色頁岩４点、チャート１点、ホルンフェルス３点で９母岩が認定された。BSh１のみに剥片剥離の痕跡が認められる。BSh１と Sh９の石核が出土しているが両者ともに両設打面から石刃を連続的に剥離した痕跡が認められる石刃核である。また SSh 単体の微細剥離痕のある剥片は打面再生剥片を素材としている。他に SSh20と Ch 単体のナイフ形石器が単品で搬入されている。母岩の共有関係は10、11、12、13、14、15、17、19、21号ブロックとの間に認められるが、とりわけ17号ブロックとの関係が密接である。接合関係は21号ブロックとの間に認められる。各母岩及び製品類の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第63図57、58）、微細剥離痕のある剥片１点（第83図206）、石核２点（第78図162、第79図163）、剥片６点、砕片３点である。

57（第63図）はナイフ形石器。調整打面から剥離された石刃を素材にし、打面を基部に残置して先端を

斜断するような調整を施している。先端部は表面からの力により折損している。また左側縁の基部付近には微細な剥離痕が認められる。

58（第63図）はナイフ形石器。背面と打面に礫面を残す縦長剥片を素材にし、左側縁にくの字形にブランティングを施している。先端部は表面からの力により折損している。

206（第83図）は微細剥離痕のある剥片。良質の硬質頁岩の打面再生剥片の左側縁に不連続ながらも微細な剥離痕が認められる。

162（第78図）は石核。小形の円礫を素材にし、相対する２面に打面を設定し縦長剥片を剥離している。裏面には礫面を大きく残している。はじめ上設打面からの剥離が行われていたが作業面中程が凸形に残ってしまう。それを修正するためか下設打面から剥離が行われたが、右側面図にみられる寸詰まりの剥離面がヒンジフラクチャーを起こしてしまい石核は廃棄された。

163（第79図）は石核。楕円形の円礫を長軸方向に用い、相対する２面に打面を設定して縦長剥片を剥離している。裏面には礫面を大きく残している。はじめ単剥離面である上設打面から剥離されたが後に複剥離面である下設打面に打面が転位された。下設打面からは３枚の剥離面が残されているが、正面図にみられる寸詰まりの剥離面が大きくヒンジフラクチャーを起こしてしまい石核は廃棄された。

〈接合資料〉

Ⅲ類１例である。

接合資料43（第112図**273**）は BSh１でⅢ類。小形の縦長剥片が、打面付近で背面からの力により折損した接合。

21号ブロック

〈出土状況〉（第34図）

４区東側の MN～MO－42、MN～MO－43、MO～MQ－44、MO～MQ－46グリッドに位置し、合計26点の石器が長径14m、短径10m の不整円形状の広がりをもって極めて広い範囲に散在している。出土層位はIVa 層下部からIVb 層上部にかけてである。剥片砕片の比較的多いブロックの中心部を囲んで、周辺部にナイフ形石器や削器などの製品が散漫に分布している。南西方向に約75m 離れたブロック外から出土した石核268a と接合する剥片268b はブロックの北東部で出土している。本ブロックの北西側に１号礫群、西側に２号礫群、北側に11号礫群が重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第50、51図）

保有石材は頁岩５点、珪質頁岩４点、硬質頁岩３点、黒色頁岩４点、チャート３点、ガラス質黒色安山岩１点、ホルンフェルス４点、砂岩２点で17母岩が認定されたが、すべて１、２点ずつであり明確に剥片剥離の痕跡を示す母岩は認められない。Ch18では掻器の刃部再生が行われたことを示す接合資料が得られている。母岩の共有関係は11、15、17、19、20、23号ブロックとの間に認められ、接合関係は19号ブロックとの間に認められる。また、本ブロック出土の HSh６の剥片が、南西方向に約75m 離れたブロック外で出土した HSh６の石核に接合している。各母岩の分布に偏在は認められないが、製品類が広く散漫に分布しているのが特徴といえる。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器２点（第61図41、42）、削器３点（第68図106～108）、掻器２点（第71図130、第72図131a）、微細剥離痕のある剥片１点（第82図201）、石核１点（第78図161）、石刃１点（第83図207a）、

剥片10点、砕片４点、磨石２点（第89図241、244）である。

41（第61図）はナイフ形石器。背面に礫面を残す石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。右側縁の下半部は礫面を残置してブランティングの代用とし縁辺に微弱な剥離を加えている。右側縁の上半部は表面の稜上から調整が加えられている。

42（第61図）はナイフ形石器。石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。基部はやや丸く加工されている。

106（第68図）は削器。調整打面から剥離された石刃で背面の一部に礫面を残している。右側縁の下半部に連続する剥離がノッチ状に加えられ刃部が作出されている。

107（第68図）は削器。メノウ質のチャートの厚手の石刃を素材にし、左側縁の上半部と右側縁の下半部に連続する角度の高い剥離によってノッチ状の刃部が作出されている。右側縁の打面付近の裏面には連続する平坦な剥離が加えられている。左側縁下半部の礫面が残置されている部分には微細な剥離痕が認められる。

108（第68図）は削器。調整打面から剥離された石刃の左側縁の中程に連続する剥離によってノッチ状に刃部が作出されている。また左側縁の末端の表面側と右側縁の末端の裏面側にも微細ながら連続する剥離が認められる。

130（第71図）は掻器。小形の剥片の末端と折れ面に角度の高い連続する剥離を加えて刃部を作出している。

131a（第72図）は掻器。厚手の縦長剥片を素材にし、末端に角度の低い剥離を加えて弧状に刃部が作出されている。末端部の左側縁寄りには節理面が残存し刃部は作出されていない。この節理の部分に刃部再生剥片が接合する。

201（第82図）は微細剥離痕のある剥片。調整打面から剥離された石刃の右側縁に不連続ながら微細な剥離痕が認められる。右側縁の末端部付近にも微細な剥離痕が観察される。

161（第78図）は石核。入念に調整された打面から縦長剥片が連続的に剥離されている。正面図の中央にみられる最も古い大きな剥離面は、石核の素材の段階の主要剥離面である。裏面には礫面が大きく残され、右側縁には裏面側へ連続する剥離が加えられ稜が作出されている。正面図にみられる中央の寸詰まりの剥片が剥離された結果ヒンジフラクチャーが起きてしまい石核は廃棄された。

207a（第83図）は左側面に入念に稜が作出された石刃。

241（第89図）は磨石。正面図にみられる面が丸みを帯びているが明確な磨痕は認められない。一端に敲打痕が認められ敲石としての機能も有していたと考えられる。

244（第89図）は磨石。全面が丸みを帯びているが明確な磨痕は認められない。両端部と周縁部に擦痕と敲打痕が認められ敲石としての機能も有していたと考えられる。

〈接合資料〉

Ⅰａ類２例、Ⅰｂ類１例、Ⅱ類１例である。接合資料29（第104図265）は18号ブロックとの接合であり、18号ブロックの項において記載した。

接合資料８（第91図**207**）はSh７でⅠｂ類。微細剥離痕のある剥片と石刃の接合。はじめ入念な稜調整が行われた石刃207aが剥離された後、打面再生が行われて剥片207bが剥離された。

接合資料38（第109図**268**）はHSh６でⅠａ類。石核と剥片の接合である。単設打面で全面を作業面とする石刃核から剥片268bが剥離されている。この剥片268bは本ブロックの出土である。剥片268bは深い打

点から剥離されたため打面付近が分厚くなって石核を抉ってしまい、さらに末端がウートラパッセになったため石核の形状を大きく損なっている。

その後作業面から入念な打面調整が行われて再び268b の剥離面から剥片が剥離される。しかしヒンジフラクチャーを起こしてしまい、石核268a は廃棄される。石核268a は本ブロックから南西へ約75m 離れた23号ブロックのブロック外において出土している。

接合資料60（第116図**131**）は Ch18でⅡ類。掻器とその刃部再生剥片の接合。厚手の縦長剥片を素材にし末端に比較的平坦な剥離を加え弧状に刃部を作出している。刃部の中央より少し左の部位を裏面から加撃し131b を剥離して、刃部を再生している。

131b は節理を介在として剥離されたか、もしくは折損したため、131b の剥離面は節理によって裏面とのなす角度が垂直になってしまい、新たに剥離は加えられていない。それ以外の部位は大幅に刃部が再生され弧状の刃部が作出されている。しかし他の調整剥片は回収されていない。

22号ブロック

〈出土状況〉（第33図）

４区西南側の MP－54～55グリッドに位置し、合計６点の石器が長径2.5m、短径1.5m の不整円形状の広がりをもって散漫に分布している。出土層位はⅣa 層中部である。

〈母岩別資料〉（第51図）

保有石材はチャート４点、石英１点、蛇紋岩１点で４母岩が認定された。母岩の共有関係と接合関係は15号ブロックとの間に認められる。各母岩の分布に偏在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器は剥片１点、砕片５点のみで製品類は出土していない。

〈接合資料〉

Ⅰａ類１例である。接合資料65（第119図287）が得られたが15号ブロックとの接合なので、15号ブロックの項で記載した。

23号ブロック

〈出土状況〉（第35図）

２区北側の LT－49～50グリッドを中心に位置し、合計59点の石器が長径9.5m 短径６m の不整円形状の広がりをもって分布している。密集部から約３m 北東に小規模なまとまりが認められる。出土層位はⅣa 層下部である。剥片砕片は少なくブロック全体にナイフ形石器を中心とする製品類が密集して分布している。本ブロックは、20号礫群と重複して分布する。

〈母岩別資料〉（第51、52図）

保有石材は頁岩１点、珪質頁岩６点、硬質頁岩44点、黒色頁岩１点、チャート１点、ガラス質黒色安山岩１点、黒曜石１点、ホルンフェルス２点、ガラス質流紋岩１点、閃緑岩１点で19母岩が認定された。主体となるのは良質の硬質頁岩で、その中でも HSh１、HSh３を中心として剥片剥離が行われている。HSh１は小形で単設打面の石核から寸詰まりの縦長剥片が剥離されている。本ブロックの最大の特徴は搬入されたナイフ形石器の点数の多さである。本ブロック出土のナイフ形石器の19点すべてがブロック外から搬入されたものと考えられる。そして後述するように先端部を再加工したものも数点含まれている。またこ

れらのナイフ形石器は、他のブロックのナイフ形石器が３cm 前後であるのに対して４～５cm と一様に大形である。また良質の硬質頁岩製の石刃も多く搬入されている。ブロック全体にわたってナイフ形石器を中心とする製品類が密度濃く一様に分布している。母岩の共有関係は10、11、12、15、17、19、21、24号ブロックとの間に認められるが、とりわけ17、21号ブロックとの関係が密接である。他ブロックとの接合関係は認められない。各母岩の分布には遍在は認められない。

〈出土石器〉

出土石器はナイフ形石器19点（第63図59～70、第64図71～77）、削器１点（第69図112）、二次加工のある剥片３点（第81図181、185、186）、石核１点（第79図165）、剥片25点、砕片９点、磨石１点（第89図245）である。

59（第63図）はナイフ形石器。背面には、主要剥離面と対向する剥離をもつ石刃を素材にし打面を下に用い二側縁にブランティングを施している。右側縁の先端部は裏面側から厚い調整が、表面側からは微弱な調整が加えられている。裏面基部には平坦な剥離が２枚加えられている。素材の段階から凹形を呈する刃部には、表面に刃こぼれ状に不連続な剥離が認められる。

60（第63図）はナイフ形石器。分厚い石刃を素材にし打面を上に用い二側縁にブランティングを施している。刃部には先端部の方向から２枚の剥離が認められる。右側縁の調整は表裏両面から厚く施されている。基部には折れ面を残置させている。

61（第63図）はナイフ形石器。背面には、主要剥離面と対向する剥離をもつ石刃を素材にし、打面を下に用い二側縁にブランティングを施している。先端部は表面からの力により折損した後、折れ面にブランティングを施すという再加工の痕跡が認められる。

62（第63図）はナイフ形石器。薄手の石刃を素材にし右側縁の基部の裏面と左側縁の基部の表面に微弱なブランティングを施している。打面は下に用い表面からの打撃で除去されている。

63（第63図）はナイフ形石器。薄手の石刃を素材にし打面を下に用い二側縁にブランティングを施している。６cm を越える大形品である。基部の調整は両側縁とも裏面に角度の低い剥離を施し、左側縁の先端部から下半部にかけては表面側へブランティングを施している。中央よりやや下で折損している。

64（第63図）はナイフ形石器。極めて良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を下に用い右側縁にブランティングを施している。調整は裏面側からは厚く表面からは微弱に加えられている。刃部は素材の段階からくの字形を呈し上半部の裏面には不連続ながら微細な剥離痕が認められる。

65（第63図）はナイフ形石器。極めて良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。基部の調整は両側縁とも角度が低いが左側縁の上半部は垂直に加えられている。先端部の調整は、表面の稜上から加えられている。

66（第63図）はナイフ形石器。厚手の剥片を素材にし、打面を下に用い基部に折れ面を残置して左側縁の基部にブランティングを施している。平刃の刃部をもち平面形態が撥形を呈する。

67（第63図）はナイフ形石器。小形の剥片を素材にし、打面を上に用い二側縁にブランティングを施している。左側縁の調整は先端部付近にまで達し刃部はほんの先端部付近のみである。裏面基部には基部方向からの１枚の剥離が加えられている。

68（第63図）はナイフ形石器。厚手の石刃を素材にし、打面を下に用い二側縁にブランティングを施している。右側縁の調整はまず表面側から施し、その剥離面を打面として表面側へ平坦に施されている。左側縁の調整は下半部は裏面側から、上半部は表面側から施されている。先端部は刃部側からの力により折

損している。

69（第63図）はナイフ形石器。背面には、主要剥離面と対向する剥離をもつ分厚い石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。右側縁は表裏両面に角度の低い調整が施されている。左側縁の下半部には節理面を残置し、ブランティングの代用としている。先端部は折れ面に、表面の稜上から樋状の剥離が２条加えられ、彫刀面が作出され、彫器へ再加工されている。

70（第63図）はナイフ形石器。良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。右側縁の裏面基部には平坦な加工が施されている。刃部は刃こぼれ状に不連続な剥離が認められ中央部は凹形を呈している。

71（第64図）はナイフ形石器。良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を下に用いて両側縁の裏面基部と左側縁上半部に調整を加えている。裏面基部の調整は平坦で特に左側縁の基部の加工は反対側にまで達している。

72（第64図）はナイフ形石器。良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。刃部は先端部に微細ながらも調整が加えられている。

73（第64図）はナイフ形石器。良質の硬質頁岩の石刃を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。左側縁の基部には調整は施されていない。刃部の上半部には刃こぼれ状に不連続な剥離痕が認められる。長さ５cm を越える大形品である。

74（第64図）はナイフ形石器。背面に１本の稜が通る黒曜石の大形の縦長剥片を素材にし、打面を基部に残置して両側縁の基部と右側縁の先端部に調整を施している。左側縁基部の調整は垂直に施されているが、右側縁の調整は基部先端部共に平坦である。刃部の先端部には主に裏面に平坦な刃こぼれ状の剥離が認められる。

75（第64図）はナイフ形石器。背面に礫面を残す縦長剥片を素材にし、打面を下に用いて二側縁にブランティングを施している。右側縁は裏面に調整が加えられ基部は両側縁から平坦な剥離が加えられている。左側縁は表面側からも微弱な調整が加えられている。

76（第64図）はナイフ形石器。石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。先端部のみ表面側からも調整が加えられている。

77（第64図）はナイフ形石器。分厚い石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。基部は裏面からの力により折損している。

112（第69図）は削器。先細りする縦長剥片を素材にし、左側縁の上半部と先端部付近に連続する剥離が加えられ刃部が作出されている。右側縁の中央部には不連続な剥離が認められる。

181（第81図）は二次加工のある剥片。石刃を素材にし、右側縁上部から折れ面にかけて急角度の剥離が加えられている。

185（第81図）は二次加工のある剥片。石刃を素材にし、左側縁の基部に連続する角度の高い剥離が認められるが末端部の折れ面によって切られている。打面部は欠損している。

186（第81図）は二次加工のある剥片。末端がプランジングを起こした縦長剥片の右側縁にノッチ状に角度の高い剥離を施している。打面部は欠損している。

165（第79図）は石核。本ブロックで中心的に剥片剥離が行われた SSh１の石核である。単剥離面である単設打面から寸詰まりの縦長剥片が剥離されている。正面図にみられる大きな２枚の剥離面からは裏面へ向かって湾曲した剥片が剥離されている。

209（第84図）は縦長剥片。背面には、主要剥離面と対向する剥離面をもち調整打面から剥離されている。右側縁に微細な剥離痕が不連続ながら認められる。

210（第84図）は縦長剥片。打面は点状で末端は欠損している。

213（第84図）は石刃。背面には主要剥離面と同方向に連続して石刃が剥離された痕跡が認められる。打面部は欠損している。

215（第84図）は石刃。打面部は折損し右側面には石核の側面調整の剥離痕が認められる。

217（第84図）は石刃。調整打面から剥離され背面には主要剥離面と同方向に連続して、石刃が剥離された痕跡が認められる。末端は裏面側へやや湾曲している。

218（第84図）は石刃。良質の硬質頁岩製で背面に一部礫面を残している。打面部は折損している。

219（第84図）は大形の縦長剥片。良質の硬質頁岩製で背面には主要剥離面と同方向に連続して、石刃が剥離された痕跡が認められる。末端部は中央の稜線が高く立ちつつ細くなっており石核の形状に規制されていると考えられる。

223（第85図）は石刃。背面には主要剥離面と同方向に連続して、石刃が剥離された痕跡が認められる。末端部は石核の底面を取り込んでおり礫面を残している。打面部は折損している。

224（第85図）は石刃。調整打面から剥離され背面には主要剥離面と同方向からの剥離が観察される。右側縁の末端部付近には礫面を残置している。

245（第89図）は磨石。全面が滑らかに丸みを帯びているが明確な磨痕は認められない。一端に顕著な敲打痕が認められ敲石としての機能も有していたと考えられる。また上端部には237の下端部と同様に表裏両面から研ぎだしたような稜が形成されている。

〈接合資料〉

Ⅲ類１例である。

接合資料39（第110図**269**）はHSh１でⅢ類。剥片が主要剥離面からの力により中央で２つに折損した接合である。

ブロック群Ⅱc（第22図）

ブロック群Ⅱｃは１区北端に分布する24、25号ブロックから成る。出土層位はⅢa層からⅣa層上部にかけてに求められる。礫群は共伴しない。石材構成はチャートが72%で最も多く次に黒曜石が17%で、珪質頁岩、石英がそれぞれ６％である。特徴的な製品類は黒曜石製の有樋尖頭器である。

24号ブロック

〈出土状況〉（第36図）

１区北側のLT～MC－98、LT～MB－99、LT－101、MB－101グリッドに位置し、合計10点の石器が長径６m、短径５mの不整円形状の広がりをもつ。出土層位はⅢa層からⅣa層上部にかけてである。尖頭器とナイフ形石器が４～５mの距離をおいて散漫に分布している。黒曜石製の有樋尖頭器はブロックの中心から出土している。尖頭器89はブロックの南端で出土し、出土層位もⅢb層と高く本ブロックとの共伴は検討を要する。

〈母岩別資料〉（第52図）

保有石材は珪質頁岩１点、チャート５点、黒曜石３点、石英１点であり７母岩が認定された。どれも１

点ずつであり剥片剥離の痕跡は認められない。本ブロックの特徴は黒曜石製の有樋尖頭器が出土していることである。本ブロックへは単品で搬入されている。他に基部が舌状に細くなる尖頭器も出土しているがブロックの外縁に分布しており、出土層位も高く本ブロックとは共伴しないものと考えられる。母岩の共有関係は10、23、25号ブロックとの間に認められるが１点ずつであり密接な関係は認めがたい。

〈出土石器〉

出土石器は尖頭器２点（第65図88、89）、ナイフ形石器（第65図86）、剥片３点、砕片４点である。

88（第65図）は尖頭器。黒曜石製の有樋尖頭器である。先端部から左側縁に施された樋状剥離によって、左側縁が弧状に抉れて、器体が左右非対称形になっている。器体に残された剥離面の切り合い関係から調整の順序を推定すると、次のようになる。右側縁の表面の先端部に残された剥離面が最も古く、それらを切って樋状剥離が施されている。その後、樋状剥離面の末端より下の左側縁下半部を調整し、次に表面の右側縁中程から下半部にかけて調整される。その後、右側縁の裏面が弧状に調整され、次に左側縁の裏面の先端部に樋状剥離面を切って、先端部を尖らすためと考えられる調整が施される。その後左側縁の裏面側に調整が施されるが、樋状剥離によって弧状に抉れた部分は調整されずに、下半部が直線状に調整される。

89（第65図）は尖頭器。両面に丁寧な平坦剥離を施し左右対称で断面凸レンズ形に加工している。基部は細かい剥離によって舌部が作出され、とりわけ左側縁の表面側と右側縁の裏面側に、わずかに抉りが入っている。本石器は先述したような出土層位や出土位置、また形態や加工から本ブロックには共伴しないものと考えられる。

86（第65図）はナイフ形石器。幅広の剥片を素材に打面を基部に残置させて左側縁と右側縁の基部にブランティングを施している。刃部の先端部にみられる剥離は二次加工ではなく、素材剥離以前の石核末端部からの先行剥離である。

25号ブロック

〈出土状況〉（第36図）

１区北側のLT～LJ－100、LJ－99グリッドに位置し、合計９点の石器が長径2.5m、短径1.5mの不整円形状の広がりをもって散漫に分布する。出土層位はⅣa層下部である。

〈母岩別資料〉（第52図）

保有石材はチャート９点で３母岩が認定された。そのうちCh19において剥片剥離が行われている。Ch19では平坦打面から厚手の横長剥片や不定形な剥片が剥離されている。母岩の共有関係は10、24号ブロックとの間に認められるが１点ずつであり、密接な関係は認めがたい。

〈出土石器〉

出土石器は剥片７点、砕片２点である。

ブロック外出土石器（第37図）

第２文化層でブロック外から出土した石器はナイフ形石器８点（第64図78～82、第65図83～85）、尖頭器２点（第65図90、91）、削器２点（第69図113、114）、掻器３点（第71図129、73図142、143）、二次加工のある剥片２点（第80図178、第81図188）、石核２点（79図164、第109図268a）、剥片19点、砕片３点、磨石１点（第90図246）である。

78（第64図）はナイフ形石器。LE－76グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。黒曜石の厚手の縦長剥片を素材にし、右側縁に厚いブランティングを施し、左側縁にノッチ状に調整を施している。基部には折れ面を残置している。

79（第64図）はナイフ形石器。LF－76グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。裏面は基部から中央部にかけて両側縁からの平坦な剥離に覆われている。両側縁は基部を除いた下半部にブランティングが施され、左側縁の折れ面に接した部分に刃部の一部が残存している。

80（第64図）はナイフ形石器。LG－76グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面には、主要剥離面と対向する剥離面をもつ石刃を素材にし、打面を基部に残置している。右側縁の基部と左側縁の下半部にブランティングを施している。右側縁上半部の表面と左側縁上半部の裏面側には不連続ながらも平坦な剥離が認められる。

81（第64図）はナイフ形石器。LJ－72グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面には、主要剥離面と対向する剥離をもつ石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。裏面基部には左側縁から平坦な剥離が加えられている。先端部は表面からの力により折損している。

82（第64図）はナイフ形石器。LM－69グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。厚手の石刃を素材にし、打面を上に用い二側縁にブランティングを施している。右側縁には表裏両面から調整が行われている。裏面基部には左側縁から平坦な加工が施されている。

83（第65図）はナイフ形石器。LT－61グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。調整打面から剥離された縦長剥片を素材にし、打面を基部に残置し右側縁の下半部にブランティングが施されている。母岩の Ob10はブロック群Ⅱa の11、12号ブロックにおいて集中的に剥片剥離が行われている。また11、12号ブロックには先述したとおり、打面を基部に残置させるナイフ形石器が特徴的に多く検出されており、ブロック群Ⅱa との関連が予想される。

84（第65図）はナイフ形石器。MF－95グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。厚手の石刃を素材にし打面を上に用いて二側縁にブランティングを施している。裏面基部には左側縁から平坦な加工が施されて基部は尖鋭に加工されている。左側縁の先端部は表面からも調整が加えられている。

85（第65図）はナイフ形石器。調査区の南端の HO－79グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。石刃を素材にし、打面を上に用いて二側縁にブランティングが施されている。先端部は表面からの力により折損している。

90（第65図）は尖頭器。JL－57グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。厚手の黒曜石の縦長剥片を素材にし、表面に甲高な調整を加えて成形した片面加工の尖頭器である。先端部には尖鋭な尖頭部が作出されていないため実測図は上下逆の可能性が高い。裏面にみられる平坦な剥離は調査時の破損である。形態や加工からナイフ形石器終末期にしばしば出土する尖頭器であるが、本文化層のブロックとの共時性については単独出土や単独母岩であることから不明である。

91（第65図）は尖頭器。KM－47グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。両面にわたって丁寧な平坦加工が施された断面凸レンズ形の両面加工の尖頭器である。平面形態は最大幅が中央よりやや下に位置し、側面形態は基部がとりわけ薄く加工されている。先端部は右側縁の裏面に僅かだが素材面を残し、主要剥離面と対向する剥離により中央に高い稜を形成している。形態や加工からナイフ形石器終末期に特徴的に出土する尖頭器であるが、本文化層のブロックとの共時性については単独出土や単独

母岩であることから不明である。

113（第69図）は削器。MN－73グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面に礫面を残す剥片が縦割れを起こし、その折れ面に表面側から連続する剥離を施し刃部を作出している。

114（第69図）は削器。MN－73グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。113と同様に縦割れを起こした剥片の折れ面に、背面側から連続する剥離を加えて刃部を作出している。

129（第71図）は掻器。NE－41グリッドから出土し、14号ブロックの約10m 東に分布する。母岩の SSh 10は16号ブロックに分布している。寸詰まりの剥片の末端の一部に連続する剥離を加え刃部を作出している。

142（第73図）は掻器。MH－54グリッドから出土し、17号ブロックの10m 南に分布する。石英の小形の剥片の打面部に表裏両面から角度の低い剥離を加えて刃部を作出している。素材剥片の縁辺部にも微細ながら連続する剥離痕が認められる。

143（第73図）は掻器。MN－75グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面に礫面を残す厚手の横長剥片を素材にし、縁辺に微細ながら連続する剥離を加え刃部を作出している。

178（第80図）は二次加工のある剥片。JK－58グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。打面を厚く残し中央に１本の稜が通り先細りする剥片の左側縁に、角度の低い不規則な剥離が加えられている。

188（第81図）は二次加工のある剥片。LK－77グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。母岩の Ch７は１号ブロックに分布している。石刃を素材にし左側縁に連続する剥離を加えている。先端部は垂直な剥離が加えられるがそれ以外の部分は比較的角度の低い剥離が加えられている。ナイフ形石器の一部と考えられる。

164（第79図）は石核。LK－71グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面に節理面を残す厚手の剥片を素材にし、はじめ素材の主要剥離面を打面として横長の剥片を剥離したが、その後打面を正面の剥離面に移して剥片剥離を行いその後廃棄された。

227（第85図）は石刃。MG－94グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。背面には主要剥離面と同方向に、石刃が連続的に剥離された痕跡をもち、中央に１本の高い稜が通る。打面付近で右側縁側にややねじれている。

166（第79図）は剥片。KI－59グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。厚手の縦長剥片で背面には、主要剥離面と対向する剥離面をもち末端部はフェザーエッジになっている。

246（第90図）は磨石。NA－47グリッドから出土し、14号ブロックの５m 南に分布する。長さ29cm、幅18cm を測る楕円形の平たい礫で全面に丸みを帯びて滑らかであるが正面図の中央にとりわけ磨痕を伴う平らな面が確認される。左側縁の上部は破損している。

２）礫（第21図）

礫群は第２文化層のブロックと平面分布と垂直分布が重なり合って分布している。ブロック群Ⅱａとブロック群Ⅱｂの範囲には比較的集中する礫群が認められる。しかしブロック群Ⅰの範囲には礫が散在している程度で、ブロック群Ⅱａ、Ⅱｂと重なる礫群とは異なる分布の傾向を示す。また、接合関係はそれぞれの共伴するブロック群の範囲内で完結し、ブロック群間にまたがった範囲では礫の接合は認められない（第148図、第149図）。

１号礫群（第129図、図版11－１）

４区東側の、MQ－45～46グリッドを中心に位置し、長径３m、短径２m の楕円状の広がりをもつ。構成礫34点で、うち６割が焼け礫で、２割に付着物がみられる。石材は砂岩23点、頁岩７点、ホルンフェルス２点、チャート２点である。本礫群は、21号ブロックの分布範囲の北西側に分布する。

２号礫群（第130図、図版８－２）

４区東側の、MP－46グリッドを中心に位置し、径４m の円形の広がりをもつ。構成礫90点で、うち５割が焼け礫で、３割に付着物がみられる。石材は砂岩83点、ホルンフェルス２点、チャート３点、片状砂岩２点である。本礫群は、21号ブロックの分布範囲の西側に分布する。

３号礫群（第146、147図、図版９－１）

４区北東側の、NI～NK－50、NI～NK－51グリッドを中心に位置し、長径14m、短径９m の楕円状の広がりをもつ。構成礫236点で、うち４割が焼け礫で、１割に付着物がみられる。石材は砂岩178点、ホルンフェルス15点、チャート20点、頁岩17点、礫岩４点、珪質頁岩１点、石英１点である。本礫群は、11号ブロックと重複して分布する。

４号礫群（第131図、図版11－２）

４区南東側の、MM～MN－47グリッドに位置し、長径３m、短径２m の楕円状の広がりをもつ。構成礫47点で、うち５割が焼け礫で、４割に付着物がみられる。石材は砂岩28点、チャート２点、頁岩17点である。本礫群は、18号ブロックと重複して分布する。

５号礫群（第132、133図、図版10－２）

４区南東側の、MM－50～52グリッドを中心に位置し、長径８m、短径４m の楕円状の広がりをもつ。構成礫23点で、うち５割が焼け礫で、４割に付着物がみられる。石材は砂岩21点、ホルンフェルス２点である。本礫群は、17号ブロックの分布範囲の東側に分布する。

６号礫群（第132、133図、図版10－３、４）

４区南東側の、MN－51～52グリッドを中心に位置し、長径3.5m、短径２m の楕円状の広がりをもつ。構成礫32点で、うち８割が焼け礫で、６割に付着物がみられる。石材は砂岩27点、チャート３点、頁岩２点である。本礫群は、17号ブロックの分布範囲の中央部に分布する。

７号礫群（第134図、図版10－５）

４区南東側の、MM－53グリッドに位置し、長径３m、短径２m の不整円形状の広がりをもつ。構成礫27点で、うち６割が焼け礫で、３割に付着物がみられる。石材は砂岩23点、チャート３点、ホルンフェルス１点である。本礫群は、17号ブロックの中心部から９m ほど隔てた MM－53グリッドに分布するナイフ形石器２点と重複して分布する。

８号礫群（第134図、図版11－３）

４区南側の、MJ～MK－50グリッドに位置する。ブロックはMJ－50グリッドを中心とした長径1.5m、短径１ｍの楕円状の広がりとMK－50グリッドを中心とした長径0.7m、短径0.5mの楕円状の広がりをもつ。構成礫24点で、うち９割が焼け礫で、４割に付着物がみられる。石材は砂岩20点、チャート３点、結晶片岩１点である。

９号礫群（第135図、図版９）

４区南東側の、MQ～MR－49グリッドを中心に位置し、長径６ｍ、短径3.5mの楕円状の広がりをもつ。構成礫31点で、うち４割が焼け礫で、３割に付着物がみられる。石材は砂岩16点、チャート11点、ホルンフェルス１点、頁岩３点である。本礫群は、15号ブロックと重複して分布する。

10号礫群（第136図、図版11－４）

４区東側の、NC－45～46グリッドを中心に位置し、長径8.5m、短径６ｍの楕円状の広がりをもつ。構成礫28点で、うち１点が焼け礫で、１点に付着物がみられる。石材は砂岩26点、チャート２点である。本礫群は、14号ブロックの分布範囲の南側に分布する。

11号礫群（第137図、図版11－５）

４区東側の、MP～MQ－44グリッドを中心に位置し、長径５ｍ、短径2.5mの楕円状の広がりをもち、中心部は、径1.5mの円形状の広がりをもつ。構成礫66点で、うち７割が焼け礫で、２割に付着物がみられる。石材は砂岩40点、チャート10点、ホルンフェルス５点、頁岩10点、閃緑岩１点である。本礫群は、21号ブロックの分布範囲の北側に分布する。

12号礫群（第137図、図版11－６）

４区南側の、MG－44～45グリッドを中心に位置し、長径３ｍ、短径１ｍの楕円状の広がりをもつ。構成礫40点で、うち８割が焼け礫で、２割に付着物がみられる。石材は砂岩18点、チャート６点、ホルンフェルス３点、頁岩４点、片状砂岩７点、結晶片岩１点、礫岩１点である。本礫群は、20号ブロックの分布範囲の南側に分布する。

13号礫群（第137図、図版11－７）

４区南側の、MI－46グリッドに位置し、径１ｍの円形状の広がりをもつ。構成礫20点で、うち８割が焼け礫で、４割に付着物がみられる。石材は砂岩16点、チャート１点、ホルンフェルス３点である。本礫群は、20号ブロックの分布範囲の西側に分布する。

14号礫群（第138図）

４区北東側の、NH～NI－45グリッドを中心に位置し、長径６ｍ、短径3.5mの楕円状の広がりをもつ。構成礫57点で、うち７割が焼け礫で、１割に付着物がみられる。石材は砂岩49点、チャート３点、ホルンフェルス１点、頁岩２点、硬質砂岩１点、輝緑岩１点である。本礫群は、13号ブロックと重複して分布する。

15号礫群（第139、140図）

４区北東側の、NK－47～46グリッドを中心に位置し、長径８m、短径4.5m の楕円状の広がりをもつ。構成礫69点で、うち５割が焼け礫で、１割に付着物がみられる。石材は砂岩61点、チャート２点、ホルンフェルス４点、頁岩２点である。本礫群は、12号ブロックと重複して分布する。

16号礫群（第141図）

４区北東側の、NJ－46～47グリッドを中心に位置し、長径４m、短径2.5m の楕円状の広がりをもつ。構成礫13点で、うち焼け礫が１点にみられる。石材は砂岩７点、チャート２点、ホルンフェルス４点である。礫群は、12号ブロックの分布範囲の南側に分布する。

17号礫群（第147図）

４区北東側の、NL－49～50グリッドを中心に位置し、長径６m、短径３m の楕円状の広がりをもつ。構成礫40点で、うち７割が焼け礫で、３割に付着物がみられる。石材は砂岩25点、チャート12点、頁岩３点である。本礫群は、11号ブロックの分布範囲の北側に分布する。

18号礫群（第141図）

４区北側の、NO～NP－53グリッドを中心に位置し、径1.5m の円形状の広がりをもつ。構成礫17点で、うち５割が焼け礫で、３割に付着物がみられる。石材は砂岩15点、チャート１点、ホルンフェルス１点である。礫群は、９号ブロックと重複して分布する。

19号礫群（第141図）

４区中央の、MO－74グリッドに位置し、長径2.4m、短径１m の楕円状の広がりをもつ。構成礫８点で、焼け礫などはみられない。石材は砂岩６点、チャート２点である。

20号礫群（第142、143図、図版11－８）

２区北側の、LS－49・LT49～50グリッドに位置し、長径8.5m、短径４m の楕円状の広がりをもつ。構成礫70点で、うち５割が焼け礫で、４割に付着物がみられる。石材は砂岩48点、チャート19点、頁岩２点、閃緑岩１点である。礫群は、23号ブロックと重複して分布する。

21号礫群（第144、145図、図版12－21）

４区北側に位置し、長径13.5m、短径11.5m の不整円形状の広がりをもつ。構成礫67点で、うち３割が焼け礫で、２割に付着物がみられる。石材は砂岩43点、ホルンフェルス５点、チャート11点、頁岩４点、泥岩１点、安山岩１点、凝灰質砂岩１点である。礫が広範囲に分散して分布しており、これをまとめて１つの礫群とした。礫群は、１～８号ブロックと重複して分布する。

Ⅱ－表７　第２文化層　母岩別器種一覧表

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT 1											3						3
HFT 2		1									1						2
HFT単		3		1							5						9
Sh 1											9	18					27
Sh 2											4	3					7
Sh 3							1				5						6
Sh 4											1	2					3
Sh 5											3						3
Sh 6							1					1					2
Sh 7										1	1						2
Sh 8		2															2
Sh 9							1				1						2
Sh10											1	1					2
Sh11		1									1						2
Sh12											1	1					2
Sh13								1			1						2
Sh14											2						2
Sh単		1		1							4	6					12
SSh 1		2		1			1	2			21	11					38
SSh 2		1		1			2				3	9					16
SSh 3							1				11	2					14
SSh 4							1				7	5					13
SSh 5							1				8	1					10
SSh 6		1		1			1				5	1					9
SSh 7											4	3					7
SSh 8							2				5						7
SSh 9					1		1				2	2					6
SSh10				1							1	1					3
SSh11			1								3						4
SSh12				3					1		2						6
SSh13				1		1						2					4
SSh14								1			1	3					5
SSh15				1							2	1					4
SSh16				1							3						4
SSh17				1								4					5
SSh18		2										1					3
SSh19											3						3
SSh20		1									1	1					3
SSh21							1					1					2
SSh22												2					2
SSh23			1									1					2
SSh24											2						2
SSh25		1		1								1					3
SSh26		1									1						2
SSh27												2					2
SSh単		13	4						3		7	6					33
HSh 1							1	1			8	6					16
HSh 2			2		3						4	7					16
HSh 3		1		1					1		8	2					13
HSh 4			1				1				3	3					8
HSh 5		3	1					1			2	1					8
HSh 6				1			1				3						5
HSh 7		2					1				1						4
HSh 8											3	1					4
HSh 9											2						2
HSh10		2									1						3
HSh11											2	1					3
HSh12											2						2
HSh13											1	1					2
HSh14											1	1					2
HSh15								1			1						2
HSh単		7	3	2	2		1	1	2		7	2					27
BSh 1		1		1			1				15	9					27
BSh 2											4						4
BSh 3							1				1	2					4
BSh 4				1								3					4
BSH 5		1									1	1					3
BSh単		3		1			1			1	6						12
Ch 1		1	2	1			2	1	1		13	41					62
Ch 2		3									7	5					15
Ch 3											5	4					9
Ch 4	1										2	5					8
Ch 5									1		3	6					10
Ch 6		1		1			1				1	6					10
Ch 7		1						1				3					5
Ch 8											6	3					9
Ch 9			1						1		3	3					8
Ch10							1				5	1					7
Ch11		1									2	3					6
Ch12							1				2	1					4
Ch13		1		1							1						3
Ch14		1									3						4
Ch15												4					4
Ch16			2		1												3
Ch17												1					1
Ch18		1		1							1						3
Ch19											6	1					7
Ch20											2	1					3
Ch21												3					3
Ch22											1	1					2
Ch23							1				1						2
Ch24										1	1						2
Ch25									1		1						2
Ch26											1	1					2
Ch27			2														2
Ch28		1									1						2
Ch29							1				1						2
Ch31											2						2
Ch単	1	4		1			1		1		15	6					29
GBA 2											8	1					9
GBA単		1										1					2

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ob 2								1			3	5					9
Ob 3		1	1		1						7						10
Ob 4					1			1	1		4	2					9
Ob 5		1									1	3					5
Ob 6		1									3						4
Ob 7											5						5
Ob 8								1	1		2						4
Ob 9		1									2						3
Ob10		2		1				4	1		71	42					121
Ob11		1									3						4
Ob12												2					2
Ob13											2						2
Ob単	3	5							2		6	4					20
Ho 1							1				12	1					14
Ho 2				1					1		4	5					11
Ho 3											8	2					10
Ho 4											9						9
Ho 5										1	2	5					8
Ho 6		2									2						4
Ho 7											3	1					4
Ho 8											3	1					4
Ho 9											1	1					2
Ho10		1										2					3
Ho11												4					4
Ho14			2									1					3
Ho15											1		1				2
Ho単		3						1			6	3	2				15
Mb 1											2	2					4
Mb 2		1									1	3					5
Mb 3											1	1					2
Mb 4				1													1
Jsp 1											1						1
Jsp単												1					1
MT												1					1
HMT											1						1
GR											1						1
QT				1							1	1					3
Ag											1						1
Gn											1						1
SP												1					1
Dio																1	1
Ss														1	4	2	7
Da																1	1
不明												1					1
合計	5	85	23	30	9	1	31	19	18	3	475	328	3	1	4	4	1039

Ⅱ－表8　第２文化層　母岩別器種一覧表（１号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh 6							1										1
SSh11											1						1
SSh19											2						2
SSh単												1					1
Ch 2		2									3	5					10
Ch 3											2	3					5
Ch 6												2					2
Ch 7												3					3
Ch12												1					1
Ch14		1									2						3
Ch単		1															1
Ob 5		1										2					3
合計		5					1				10	17					33

Ⅱ－表9　第２文化層　母岩別器種一覧表（２号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh16											1						1
BSh単											1						1
Ch 6				1			1				1	1					4
合計				1			1				3	1					6

Ⅱ－表10　第２文化層　母岩別器種一覧表（３号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh 4											1	2					3
Sh 6												1					1
SSh16											1						1
SSh22												2					2
SSh27												2					2
SSh単		1									1						2
Ch 6		1										3					4
Ch単												1					1
Ob 5												1					1
Ho11												3					3
合計		2									3	15					20

Ⅱ－表11　第２文化層　母岩別器種一覧表（４号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単											1						1
SSh14								1									1
SSh19											1						1
SSh25		1															1
SSh単		1															1
BSh単											2						2
Ch８											6	3					9
Ch12							1				2						3
Ch単		1									1						2
Ho２											1						1
Ho単											1						1
合計		3					1	1			15	3					23

Ⅱ－表12　第２文化層　母岩別器種一覧表（５号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT２		1															1
Sh２											1						1
Sh３											3						3
SSh11			1								1						2
SSh16											1						1
BSh５											1	1					2
BSh単				1													1
Ch２		1									3						4
Ch３											3	1					4
Ch単									1								1
Ob５											1						1
Ob11		1															1
Ho単								1			2						3
合計		3	1	1				1	1		16	2					25

Ⅱ－表13　第２文化層　母岩別器種一覧表（６号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT２											1						1
HFT単		1															1
Sh11		1															1
SSh２		1		1			2				3	9					16
SSh14											1	3					4
SSh25				1								1					2
SSh単		1										1					2
HSh単				1			1										2
Ch11		1									2	3					6
Ch20											2	1					3
Ch25								1			1						2
Ob11											2						2
Ho２				1								3					4
Ho単												1					1
Gn											1						1
合計		5		4			3	1			13	22					48

Ⅱ－表14　第２文化層　母岩別器種一覧表（７号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT１											1						1
HFT単				1													1
Sh２											2	3					5
Sh３							1				2						3
SSh単		1							1								2
HSh単					1												1
BSh５		1															1
Ch２											1						1
Ob９		1															1
Ho２											3	1					4
Ho11												1					1
Ho単											1						1
Jsp１											1						1
Jsp単												1					1
合計		3		1	1		1		1		11	6					24

Ⅱ－表15　第２文化層　母岩別器種一覧表（８号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT１											2						2
Sh２											1						1
Sh10											1	1					2
SSh11											1						1
Ch14											1						1
Ob９											2						2
Ob11											1						1
Ho２									1			1					2
Ho10		1															1
HMT											1						1
合計		1							1		10	2					14

Ⅱ－表16　第２文化層　母岩別器種一覧表（９号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh単												1					1
HSh15											1						1
HSh単											1						1
Ob10								1			1						2
Mb４				1													1
合計				1				1			3	1					6

Ⅱ－表17　第２文化層　母岩別器種一覧表（10号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh７											4	2					6
SSh８							2				5						7
SSh９												1					1
SSh単											1	1					2
Ch４											2	4					6
Ch５									1		3	6					10
Ch９											1						1
Ch13				1							1						2
Ch単							1				1	3					5
GBA２											6	1					7
Ob４									1								1
Ob単									1								1
Ho１							1				9						10
Ho４											1						1
合計				1			4		3		34	18					60

Ⅱ－表18　第２文化層　母岩別器種一覧表（11号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単											1						1
Sh12											1	1					2
Sh単												1					1
SSh５											1						1
SSh９											1						1
SSh15												1					1
HSh２			1		1						1	2					5
HSh３											1						1
HSh４			1				1					2					4
HSh６											1						1
HSh８												1					1
HSh11											2	1					3
HSh単		1	1														2
BSh単											1						1
Ch１		1					2	1			9	38					51
Ch９			1						1		2	3					7
Ch15												3					3
Ch16			1														1
Ch22												1					1
Ch26											1	1					2
Ch単	1										2						3
Ob２								1			2	5					8
Ob３		1															1
Ob４					1												1
Ob８											1						1
Ob10								2	1		49	27					79
Ob12												2					2
Ob13											2						2
Ob単											2	1					3
Ho１											2						2
Ho15											1		1				2
Ho単		1										1					2
Mb１											2	1					3
Mb３											1						1
MT												1					1
Ss															1		1
合計	1	4	5		2		3	4	2		86	93	1		1		202

Ⅱ－表19　第２文化層　母岩別器種一覧表（12号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh９							1										1
SSh15											1						1
HSh２			1		2						3	5					11
HSh４											3	1					4
HSh６				1													1
HSh14											1	1					2
HSh15								1									1
HSh単												1					1
Ch１			2	1					1		4	2					10
Ch15												1					1
Ch16			1														1
GBA単												1					1
Ob２											1						1
Ob３			1		1						7						9
Ob４								1			3	2					6
Ob６		1									1						2
Ob７											5						5
Ob８									1								1
Ob10				1				1			21	15					38
Ob単									1		2	1					4
Mb１												1					1
Mb２		1									1	2					4
Mb３												1					1
合計		2	5	3	3		1	3	3		53	34					107

Ⅱ－表20　第２文化層　母岩別器種一覧表（13号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh９					1												1
SSh15				1													1
HSh単					1				2		1						4
Ch16					1												1
Ob４											1						1
Ob６											2						2
Ob８								1			1						2
Ob単											1						1
合計				1	3			1	2		6						13

Ⅱ－表21　第２文化層　母岩別器種一覧表（14号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh単											1						1
SSh５							1				7	1					9
SSh７												1					1
SSh９											1						1
SSh20											1	1					2
SSh21							1										1
SSh単		1	2														3
Ch10							1				5	1					7
Ch22											1						1
Ch単				1							2						3
GBA単		1															1
Ss															1		1
合計		2	2	1			3				18	5			1		31

Ⅱ－表22　第２文化層　母岩別器種一覧表（15号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh１											2	4					6
SSh１							1	2			21	11					35
SSh15											1						1
SSh単		1															1
HSh７		2					1										3
BSh１		1									11	6					18
BSh３							1				1	2					4
BSh単		1									1						2
Ch23							1										1
Ch24									1		1						2
Ch27			1														1
Ch31											2						2
Ob単		1															1
Ho６		1															1
Ho単												1	2				3
Mb２												1					1
Ss															1		1
合計		7	1				4	2	1		40	25	2		1		83

Ⅱ－表23　第２文化層　母岩別器種一覧表（16号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1									1						2
SSh10											1	1					2
SSh21												1					1
SSh単		2									1	1					4
BSh４				1								3					4
Ch単		1										1					2
合計		4		1							3	7					15

Ⅱ－表24　第２文化層　母岩別器種一覧表（17号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh１											7	14					21
Sh５											3						3
Sh８		1															1
Sh14											2						2
Sh単											1	3					4
SSh６		1		1			1				5	1					9
SSh17				1								4					5
SSh26		1															1
SSh単		3	1						1		1						6
HSh３				1							2						3
HSh５											1						1
HSh７											1						1
HSh８											1						1
HSh９											2						2
HSh12											1						1
HSh単			1														1
BSh１				1							1	1					3
BSh２											3						3
BSh単		2								1							3
Ch１												1					1
Ch単											2	1					3
Ob10		1															1
Ho３											7	2					9
Ho５										1	2	5					8
Ho６											2						2
Ho７											1	1					2
Ho８												1					1
Ho９											1	1					2
Ho単		1															1
Ag											1						1
Ss															1		1
不明												1					1
合計		10	2	4			1		1	2	47	36			1		104

Ⅱ－表25　第２文化層　母岩別器種一覧表（18号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単											1						1
SSh１		2		1													3
SSh３							1				11	2					14
SSh12				3					1		2						6
SSh24											2						2
HSh12											1						1
Ho１												1					1
Ho４											8						8
Ss														1			1
合計		2		4			1		1		25	3		1			37

Ⅱ－表26　第２文化層　母岩別器種一覧表（19号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh９											1						1
SSh４							1				6	5					12
SSh13				1		1						2					4
SSh単												1					1
HSh５			1									1					2
HSh単				1							1						2
合計			1	2		1	1				8	9					22

Ⅱ－表27　第２文化層　母岩別器種一覧表（20号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh９							1										1
Sh単											1						1
SSh９												1					1
SSh20		1															1
SSh単									1		1						2
BSh１							1				1	2					4
Ch単		1															1
Ho３											1						1
Ho７											2						2
合計		2					2		1		6	3					14

Ⅱ－表28　第２文化層　母岩別器種一覧表（21号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh７										1	1						2
Sh単		1		1								1					3
SSh４											1						1
SSh23			1									1					2
SSh26											1						1
HSh３									1								1
HSh６											1						1
HSh単			1														1
BSh１											2						2
BSh２											1						1
BSh単							1										1
Ch18				1							1						2
Ch27			1														1
GBA２											1						1
Ho10												2					2
Ho単		1									1						2
Ss																2	2
合計		2	3	2			1		1	1	10	4				2	26

Ⅱ－表29　第２文化層　母岩別器種一覧表（22号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ch21												3					3
Ch23											1						1
Qt												1					1
SP												1					1
合計											1	5					6

Ⅱ－表30　第２文化層　母岩別器種一覧表（23号ブロック）

	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh８		1															1
SSh18		2															2
SSh単		2	1								1						4
HSh１							1	1			7	6					15
HSh３		1									5	1					7
HSh５		3						1			1						5
HSh６											1						1
HSh８											2						2
HSh10		2									1						3
HSh13											1	1					2
HSh単		5						1			2	1					9
BSh単											1						1
Ch18		1															1
GBA２											1						1
Ob単		1															1
Ho６		1															1
Ho単											1						1
GR											1						1
Dio																1	1
合計		19	1				1	3			25	9				1	59

Ⅱ－表31　第２文化層　母岩別器種一覧表（24号ブロック）

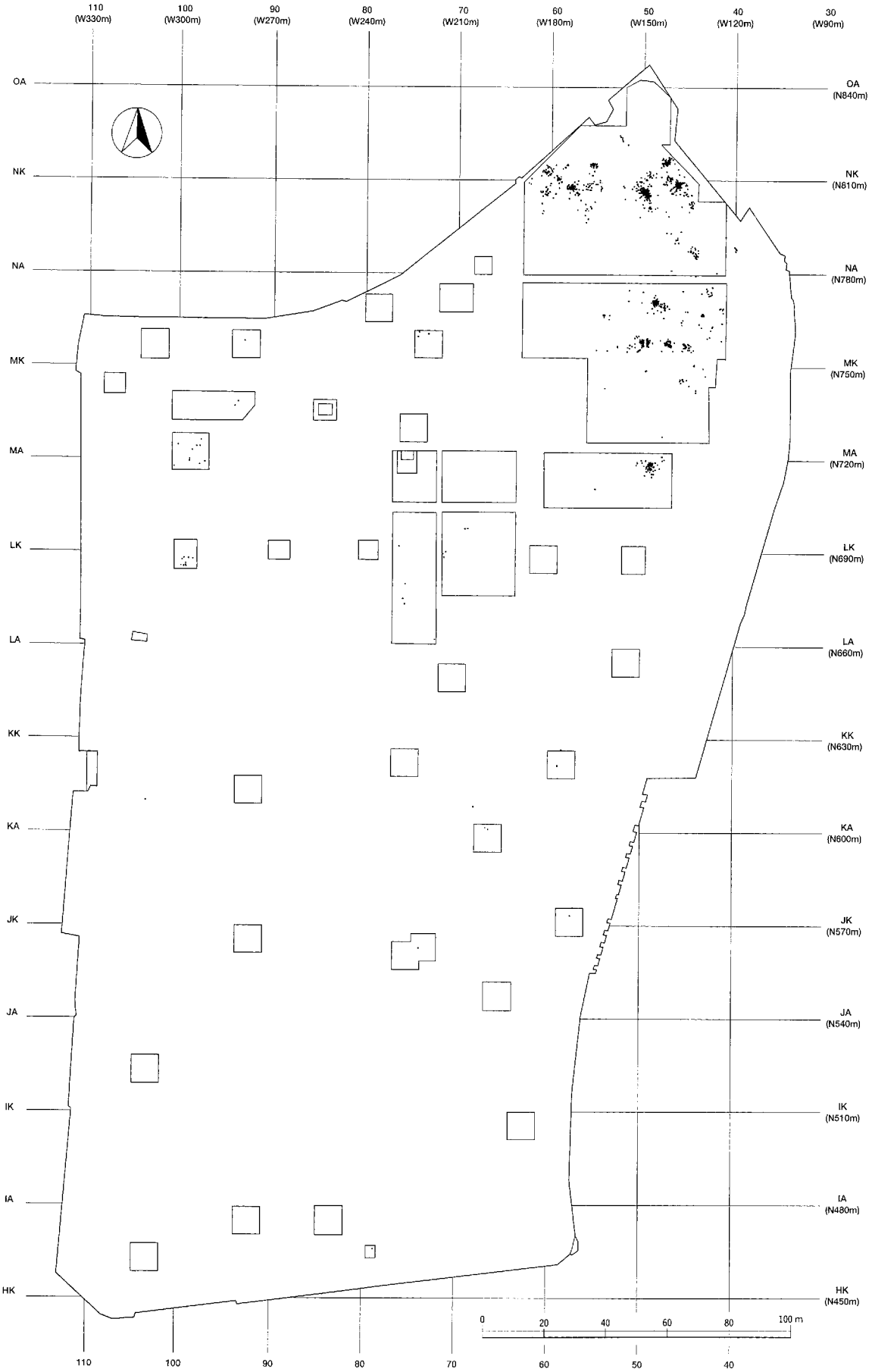
	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
SSh18												1					1
Ch４	1																1
Ch17												1					1
Ch28		1															1
Ch単											2						2
Ob単	1											2					3
Qt											1						1
合計	2	1									3	4					10

Ⅱ－表32　第２文化層　母岩別器種一覧表（25号ブロック）

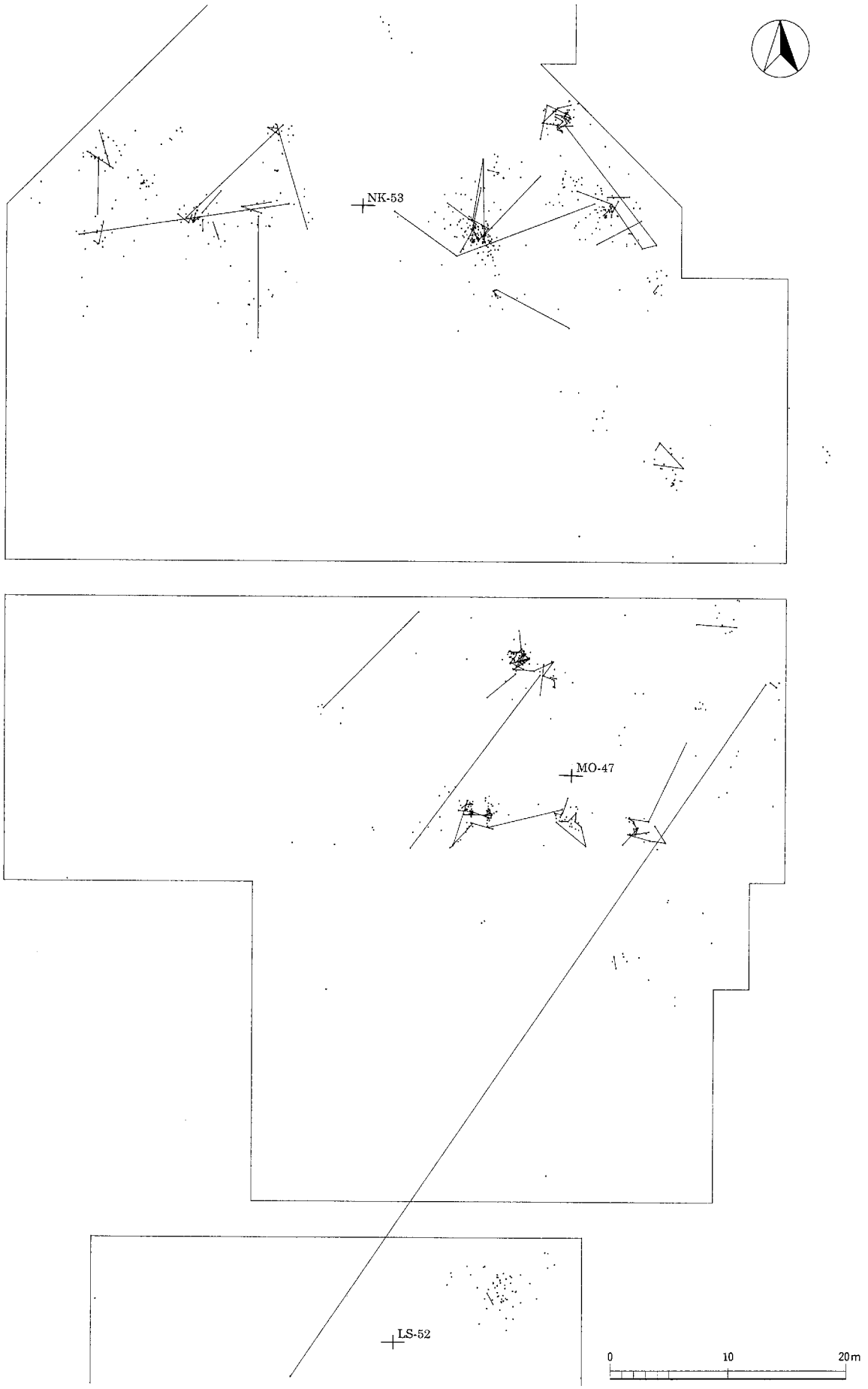
	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ch４												1					1
Ch19											6	1					7
Ch28											1						1
合計											7	2					9

Ⅱ－表33　第２文化層　母岩別器種一覧表（ブロック外）

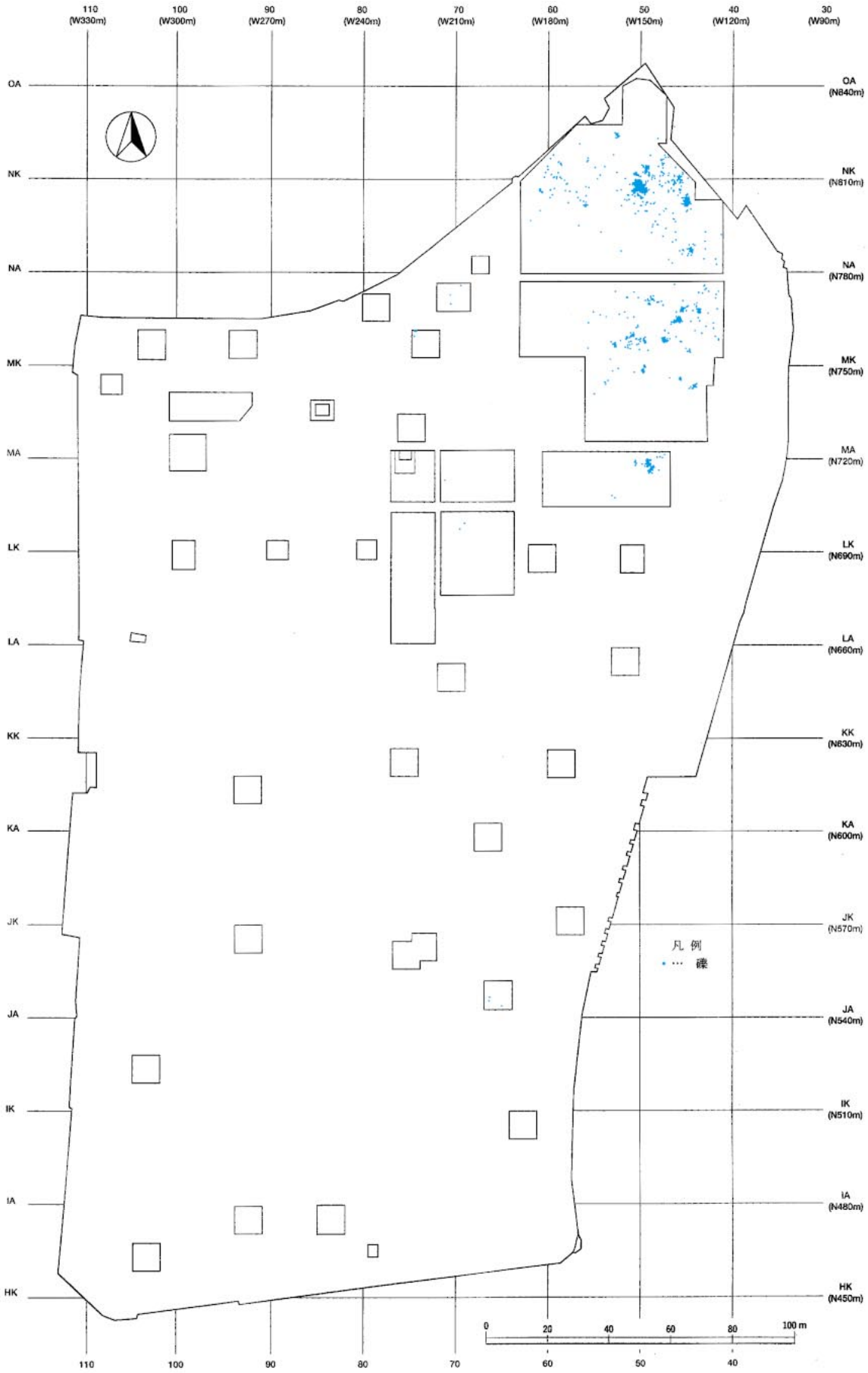
	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1									1						2
Sh11											1						1
Sh13								1			1						2
Sh単											1	1					2
SSh10				1													1
SSh16				1													1
SSh単											1						1
HSh１											1						1
HSh３												1					1
HSh６							1										1
HSh単		1									2						3
Ch７		1						1									2
Ch13		1															1
Ch29							1				1						2
Ch単											5						5
Ob10		1															1
Ob単	2	3									1						6
Ho１											1						1
Ho８											3						3
Ho14			2									1					3
Qt				1													1
Da																1	1
合計	2	8	2	3			2	2			19	3				1	42



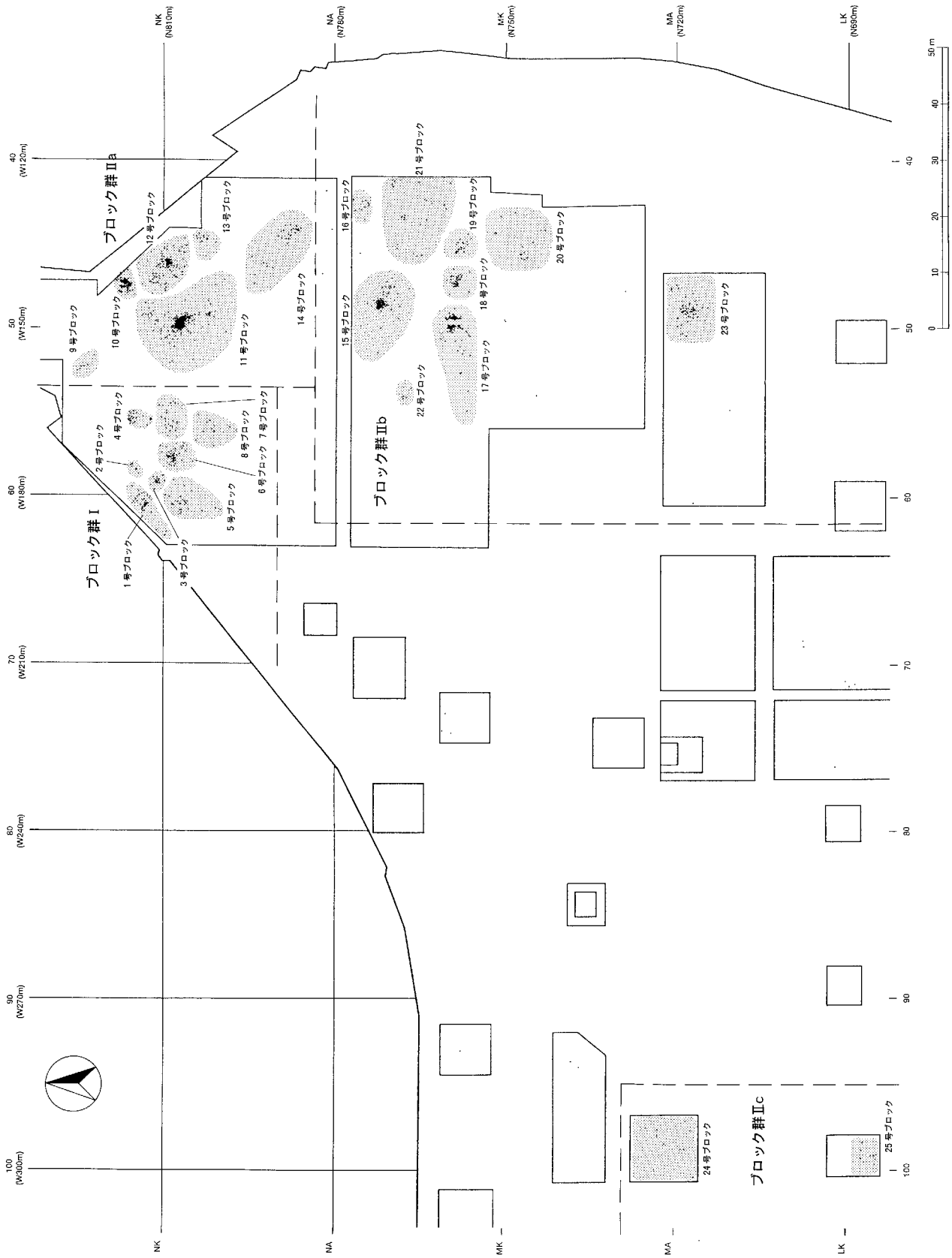
第19図　第２文化層　石器分布図



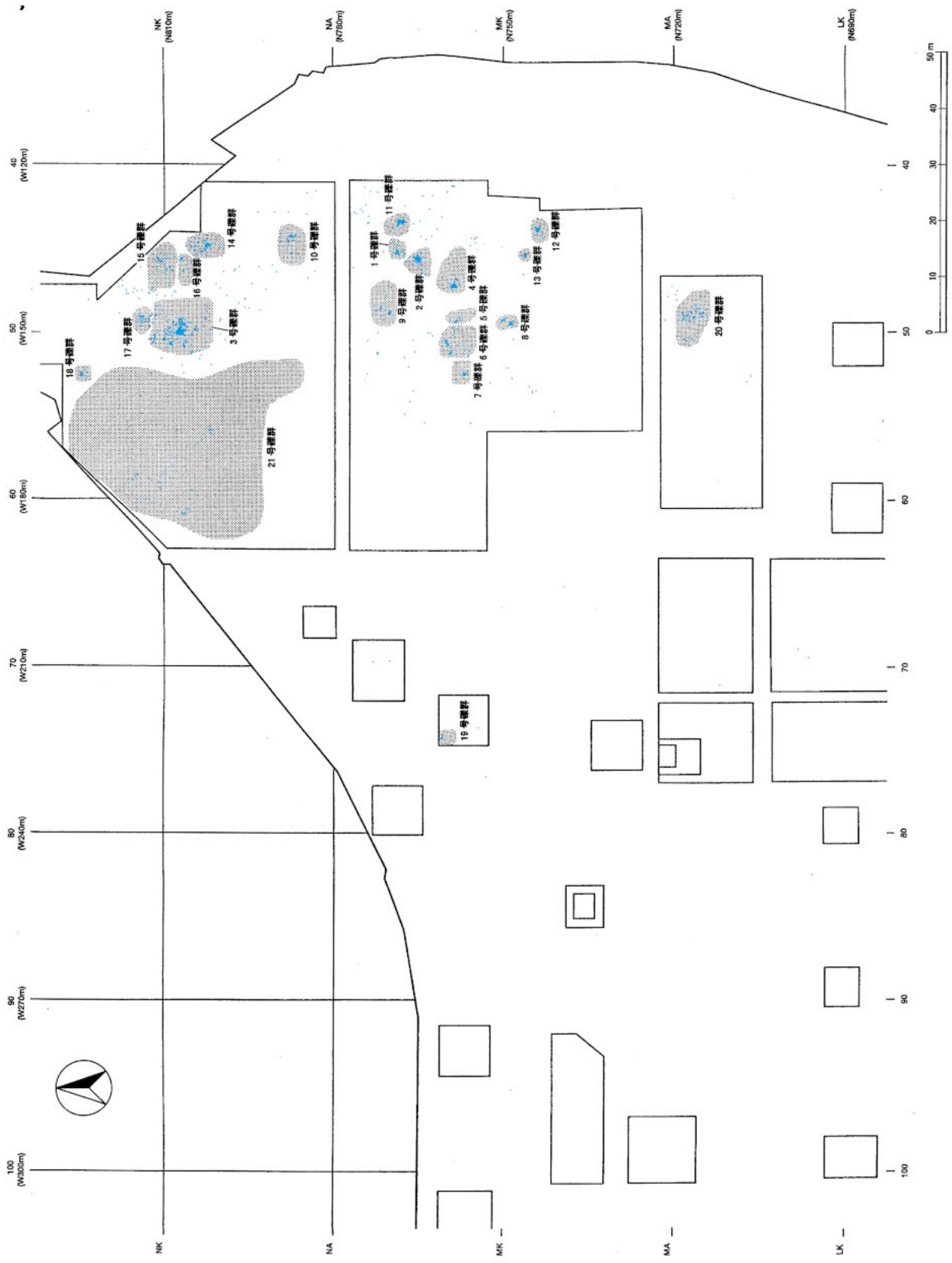
第20図　第２文化層　接合関係図



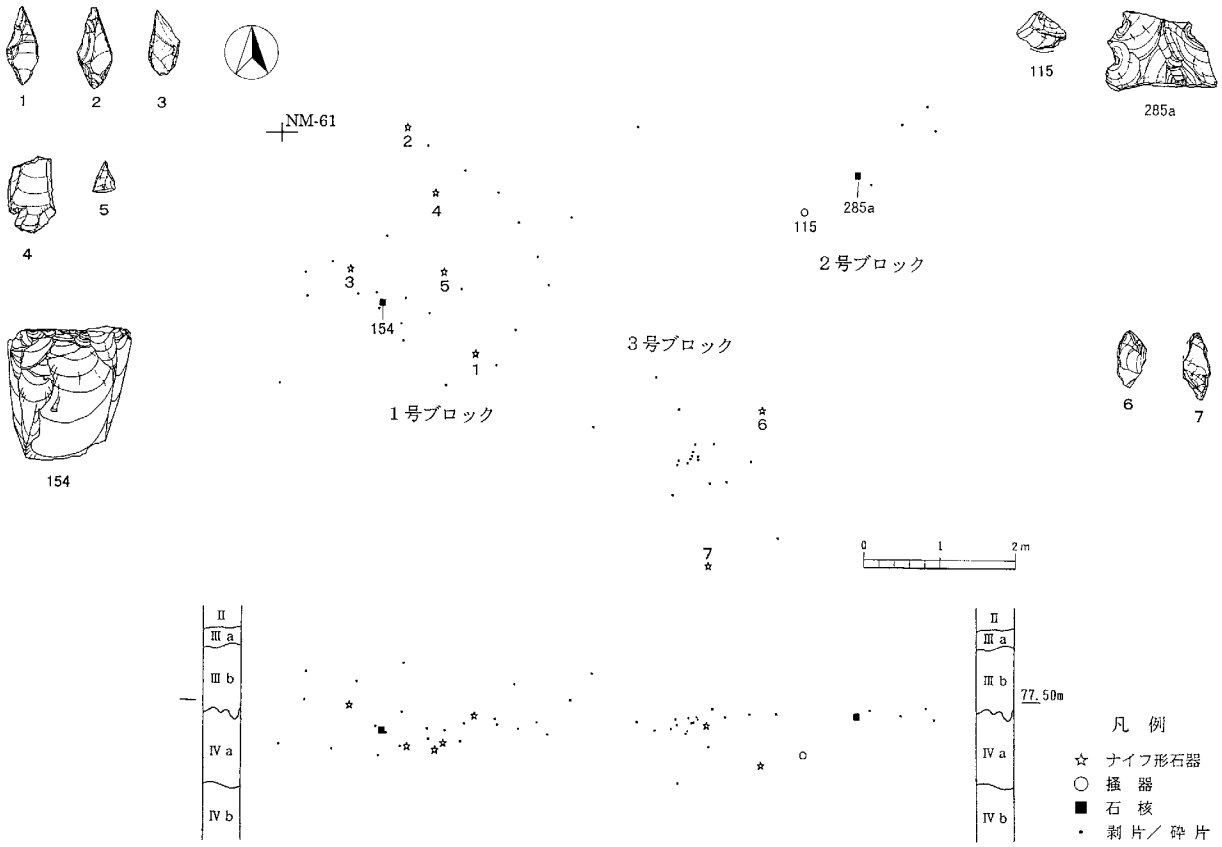
第21図　第２文化層　礫分布図



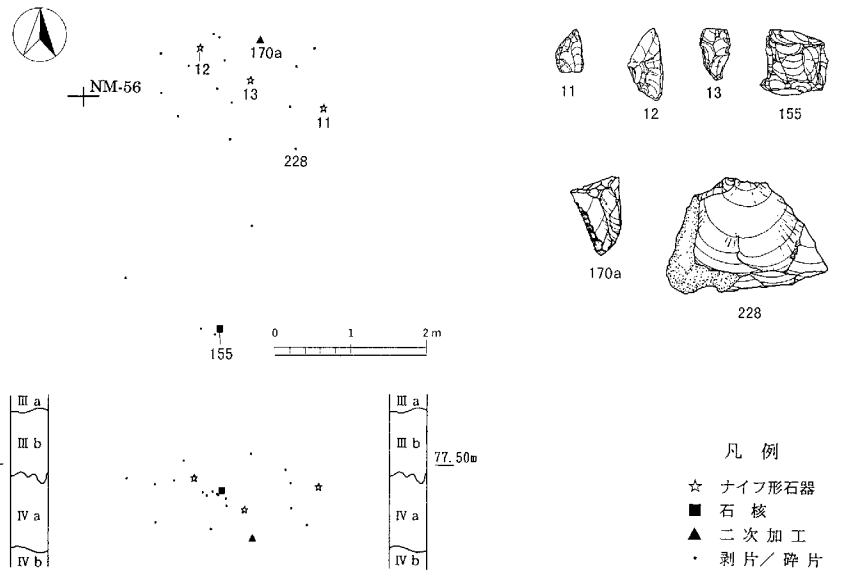
第22図　第２文化層　ブロック概念図



第23図　第２文化層　礫群概念図

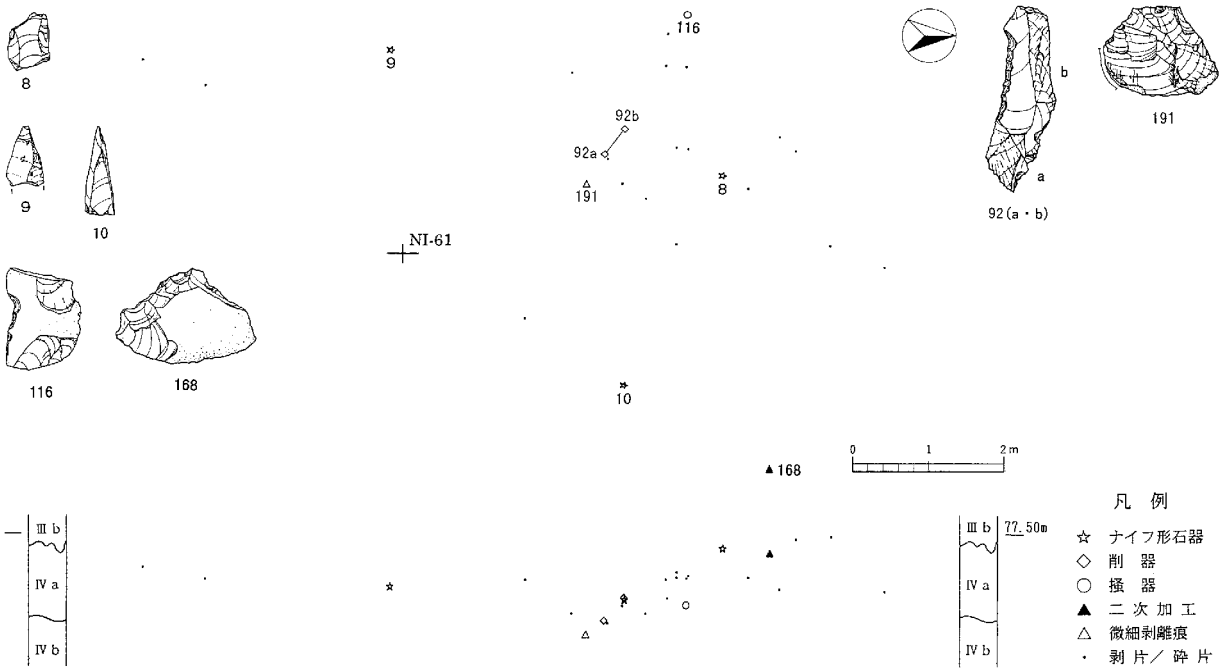


1・2・3号ブロック遺物分布

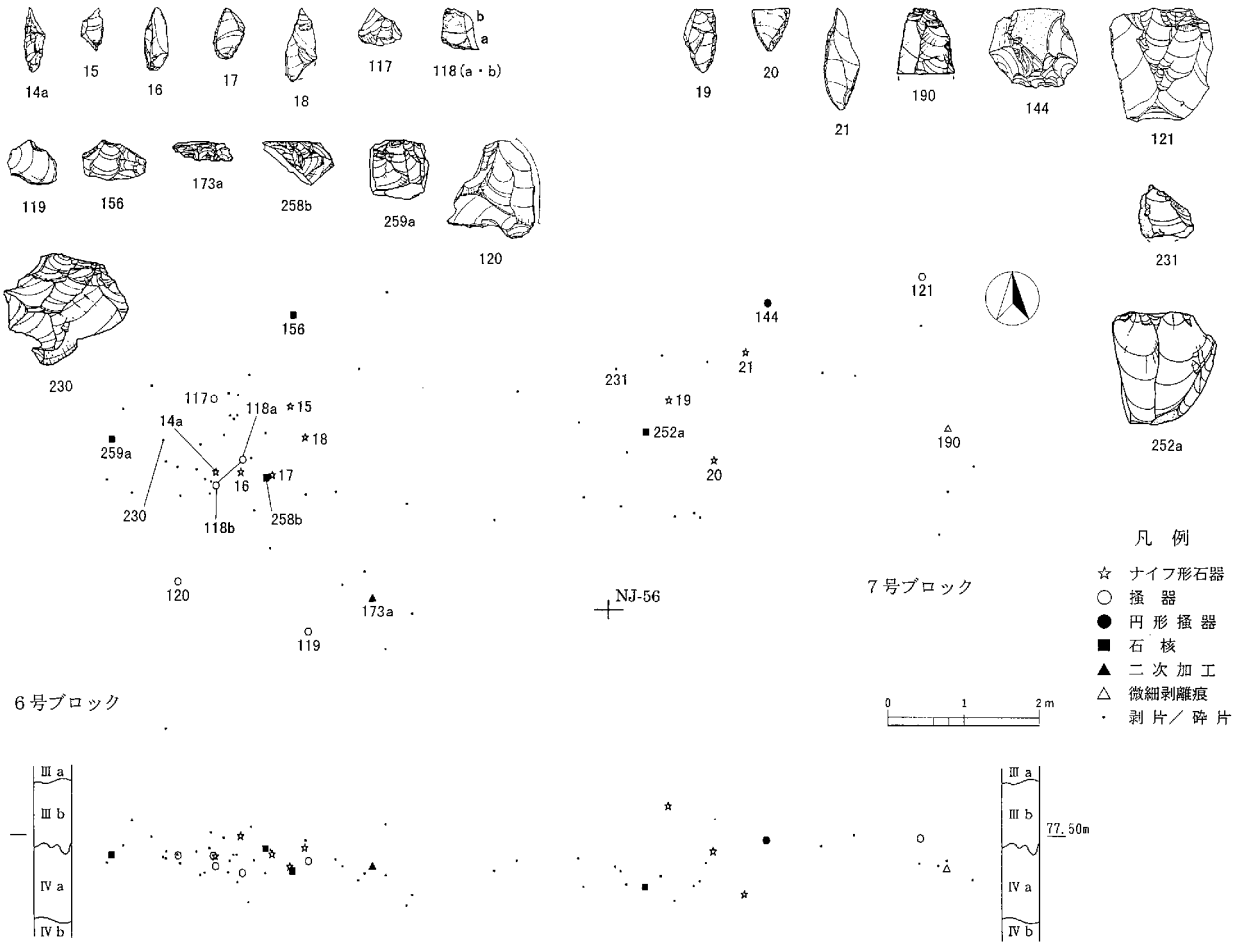


4号ブロック遺物分布

第24図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（１）

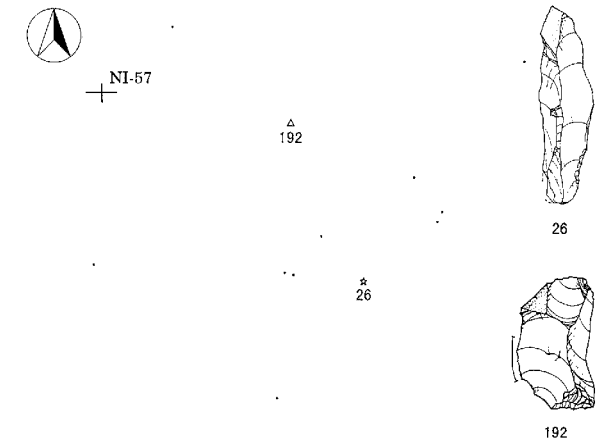


5号ブロック遺物分布

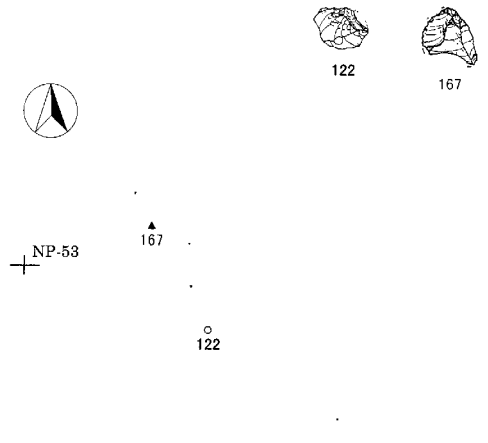


6・7号ブロック遺物分布

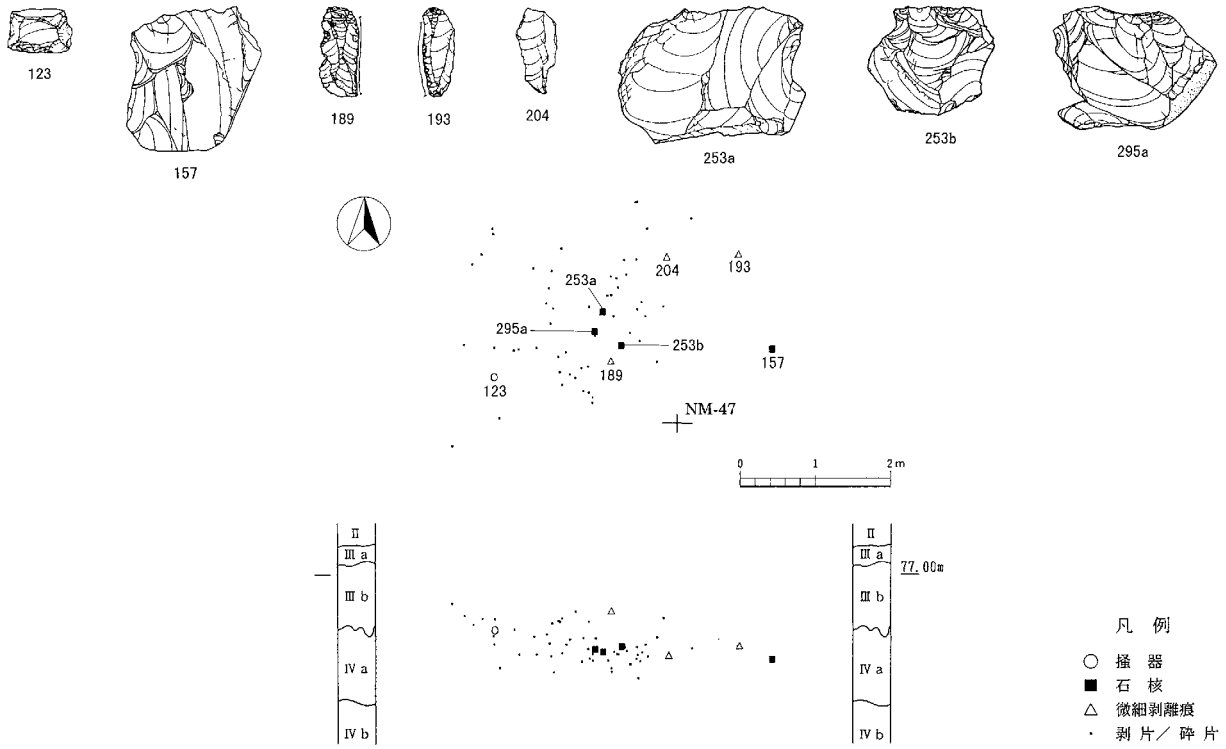
第25図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（２）



8号ブロック遺物分布

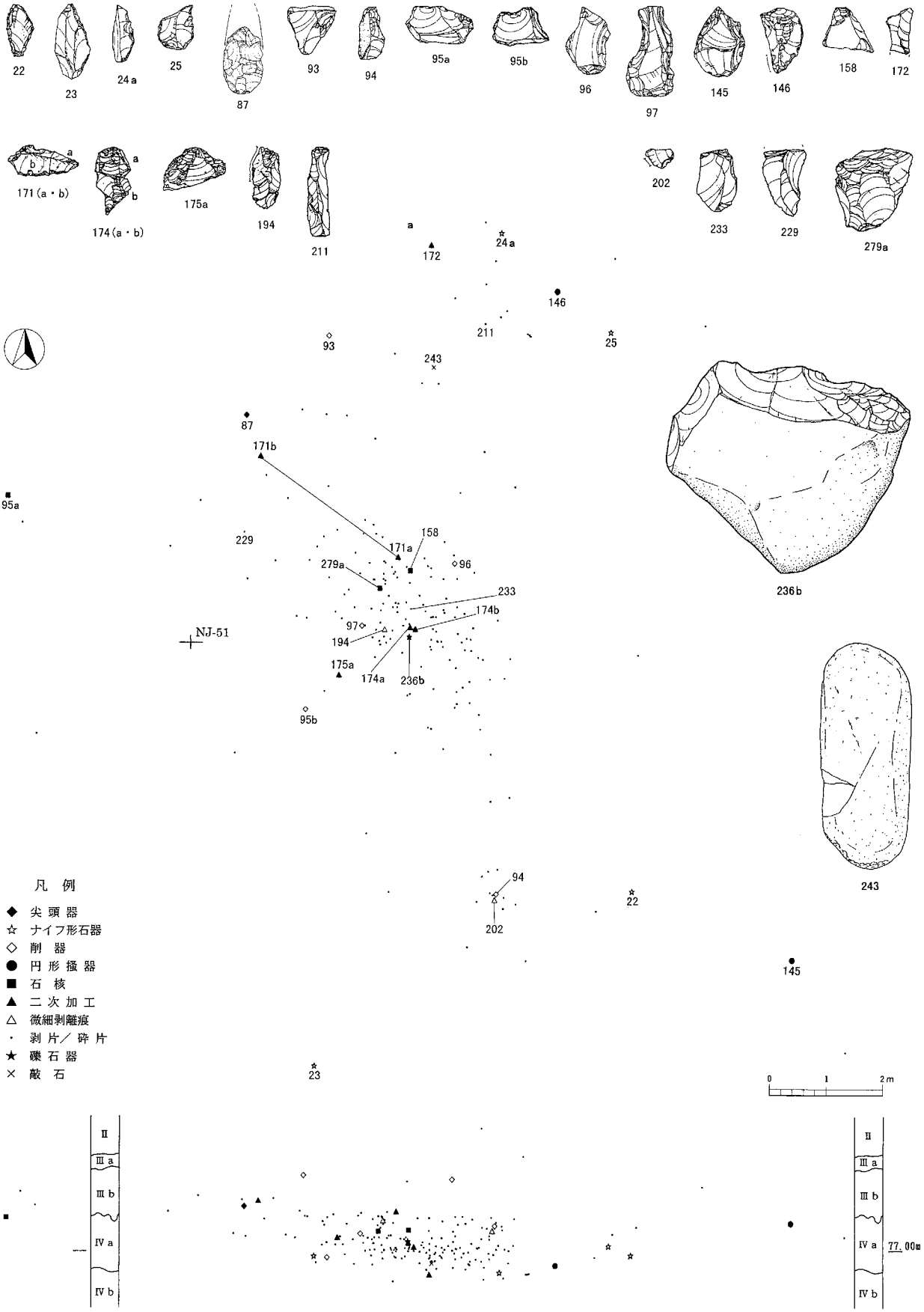


9号ブロック遺物分布



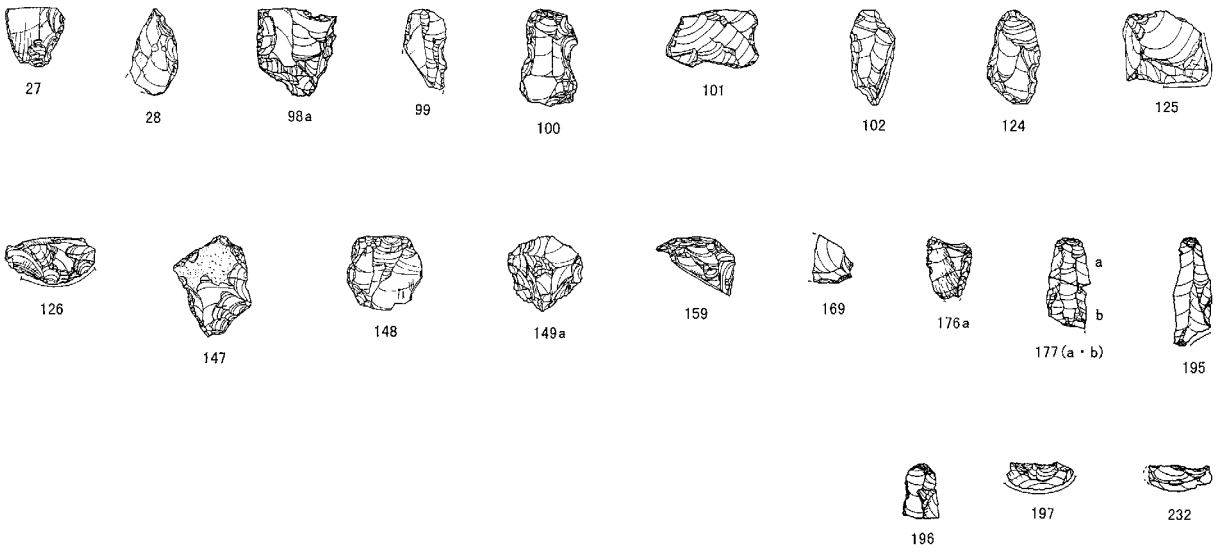
10号ブロック遺物分布

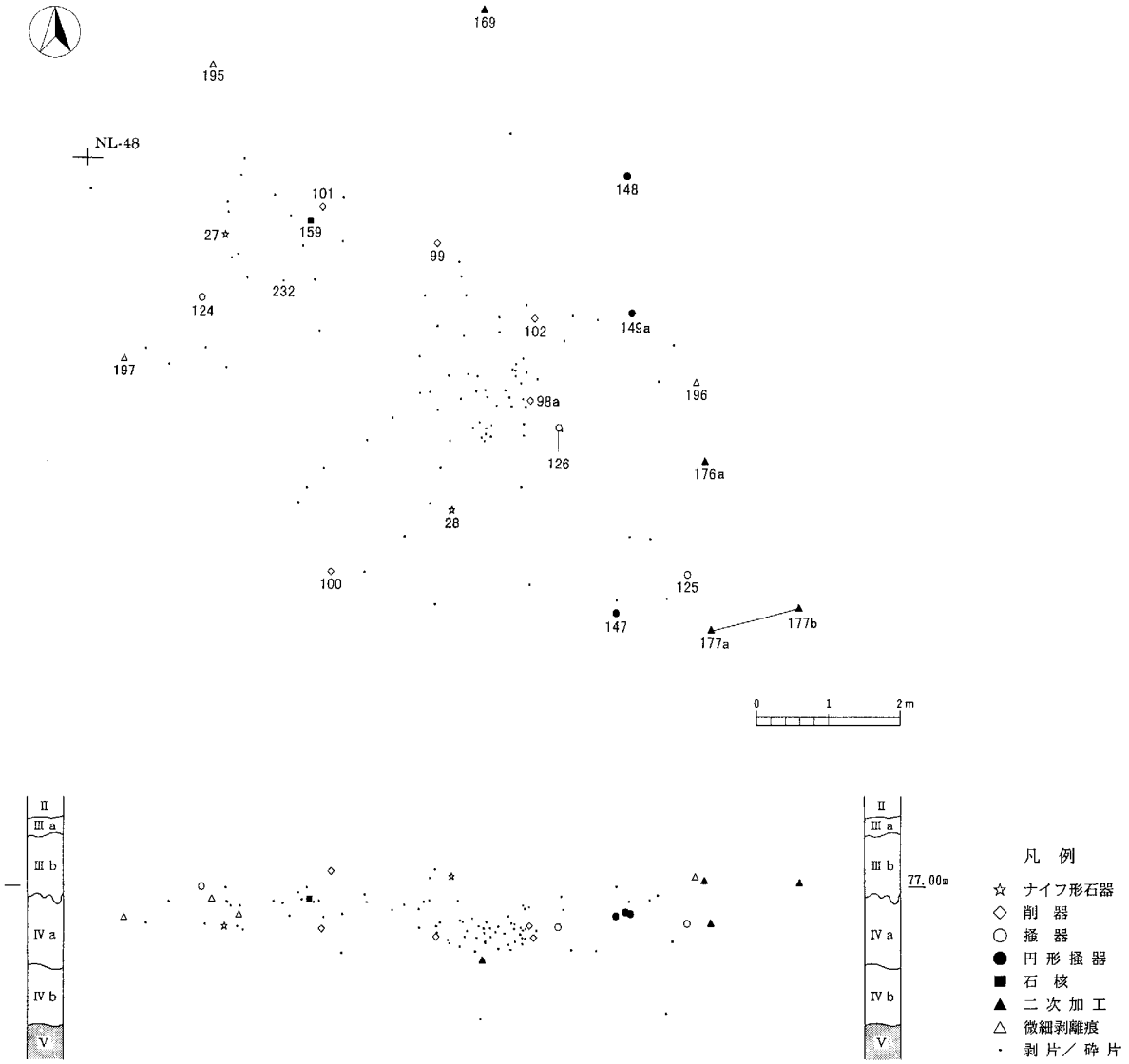
第26図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（３）



11 号ブロック遺物分布

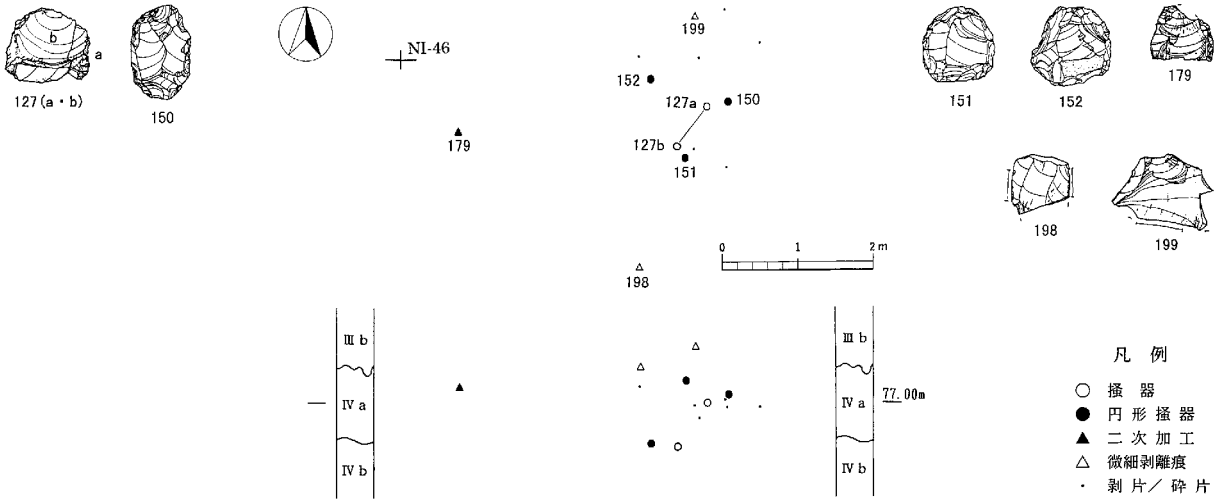
第27図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（４）



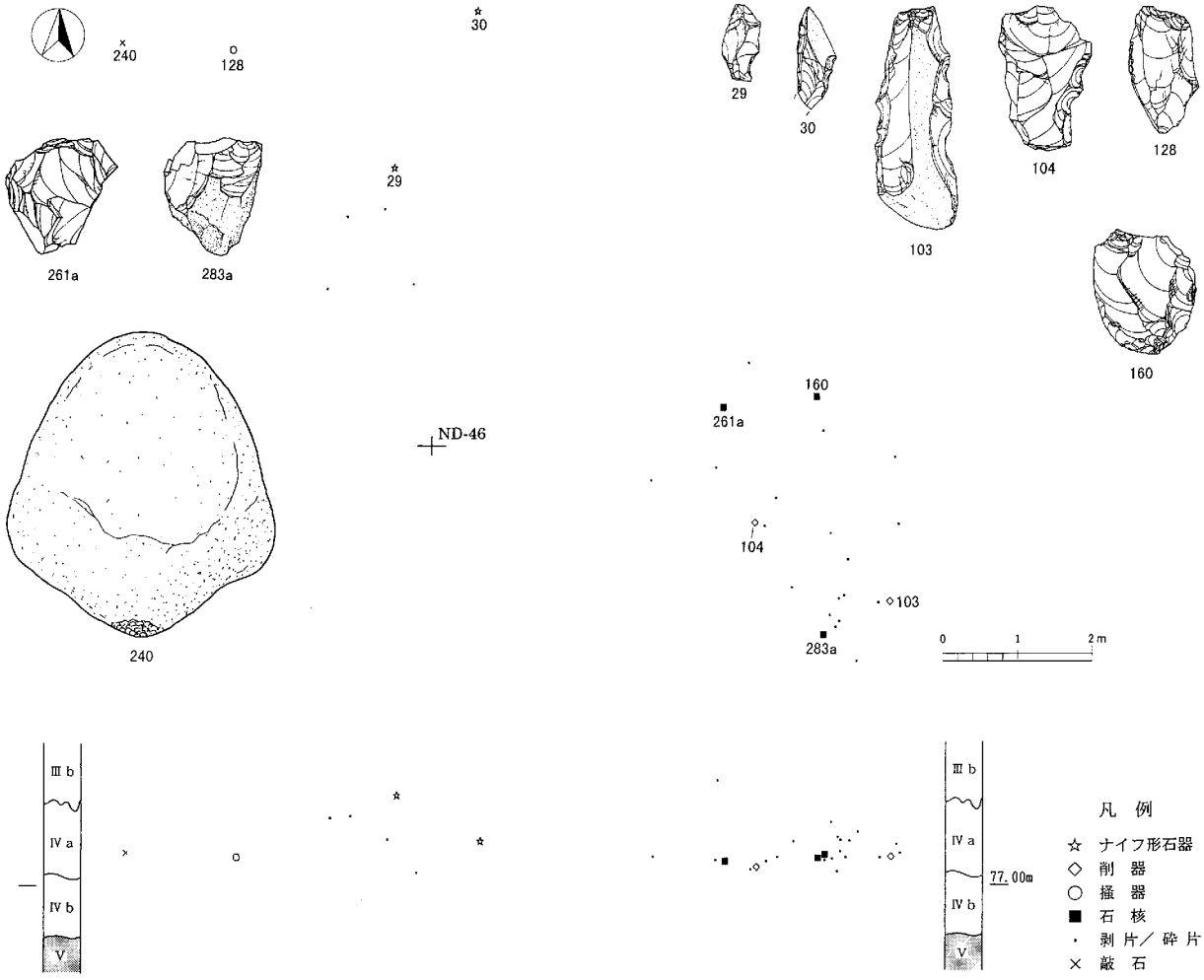


12 号ブロック遺物分布

第28図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（５）

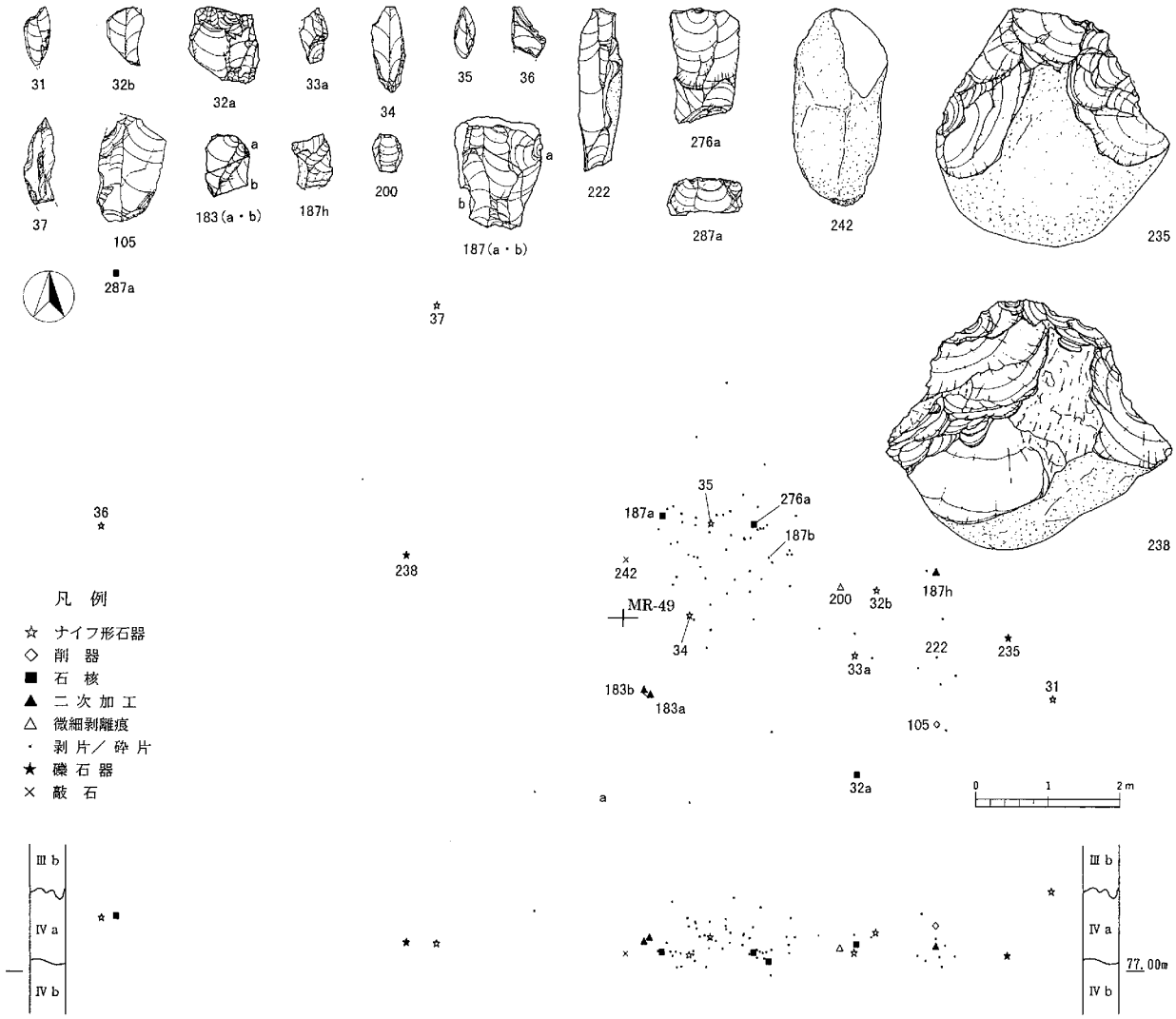


13 号ブロック遺物分布

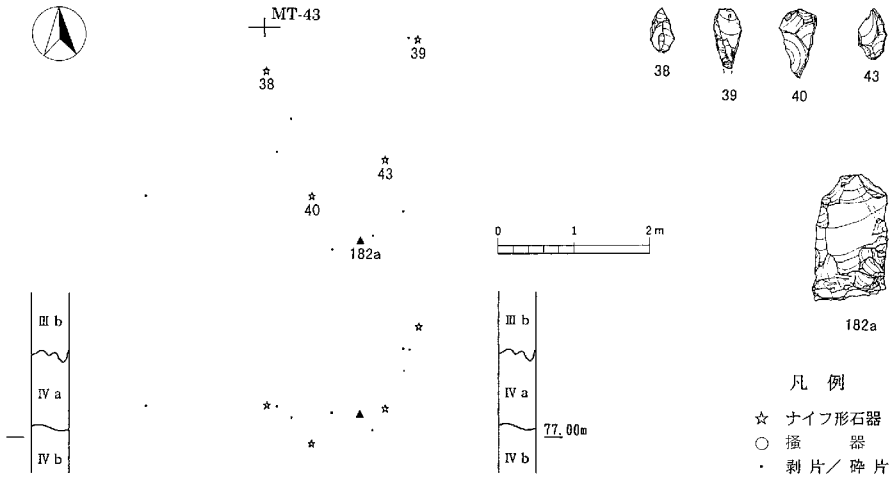


14 号ブロック遺物分布

第29図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（６）

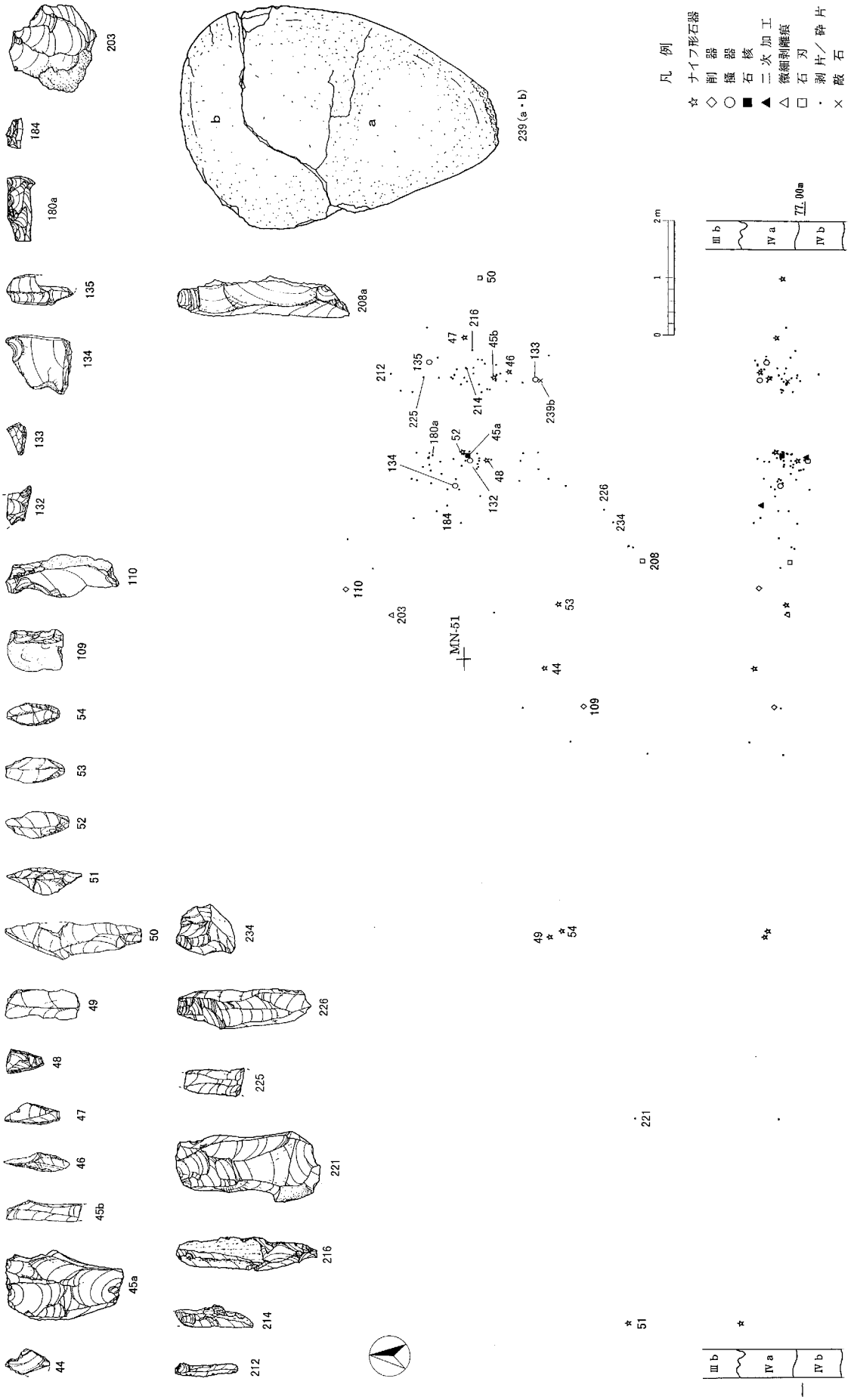


15 号ブロック遺物分布



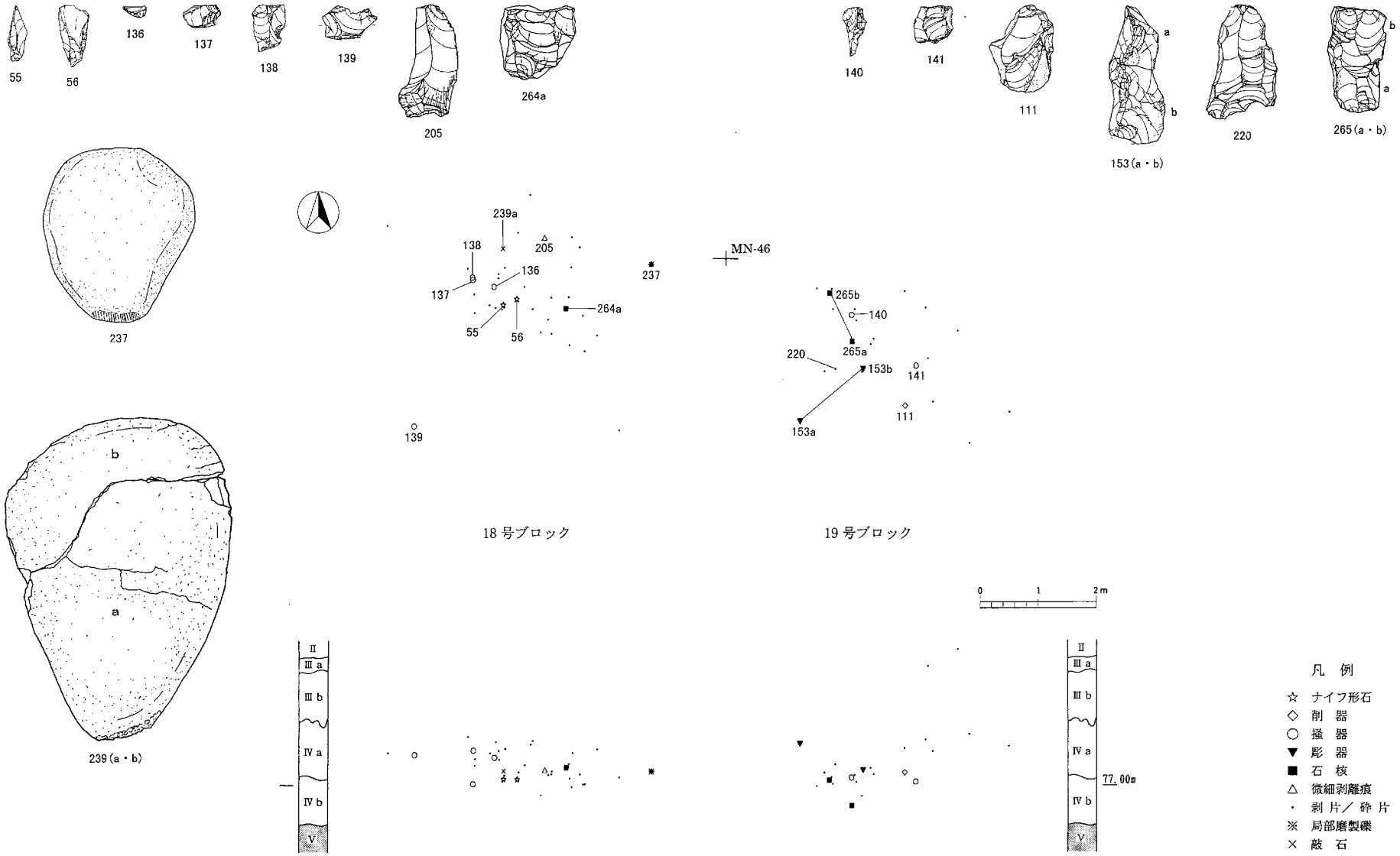
16 号ブロック遺物分布

第30図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（７）



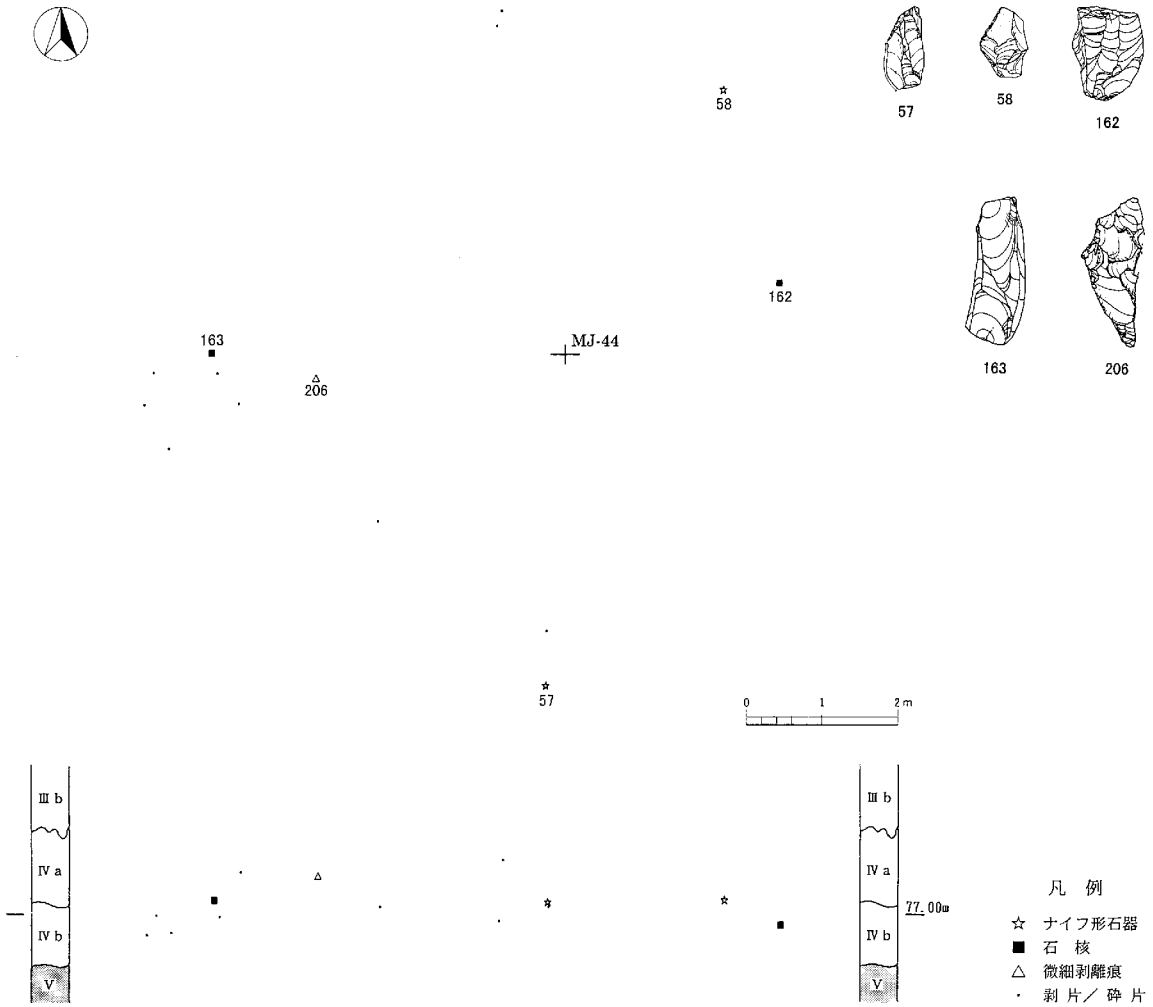
17号ブロック遺物分布

第31図　第2文化層　ブロック別遺物分布図（8）

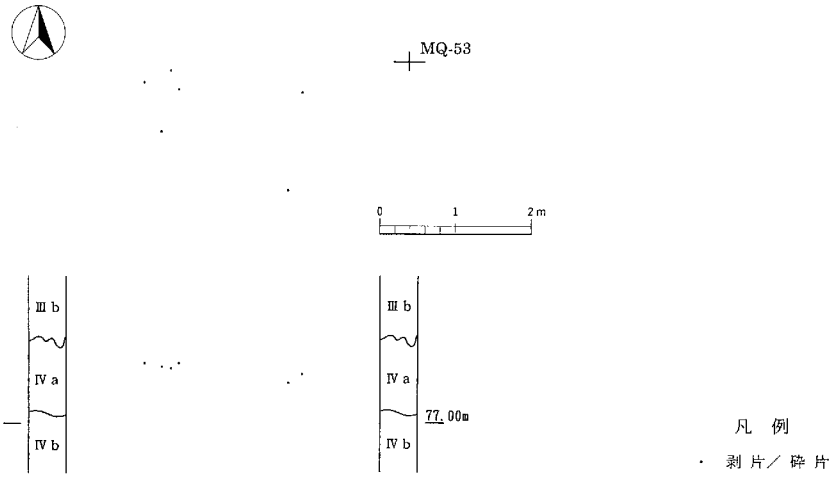


18・19 号ブロック遺物分布

第32図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（９）

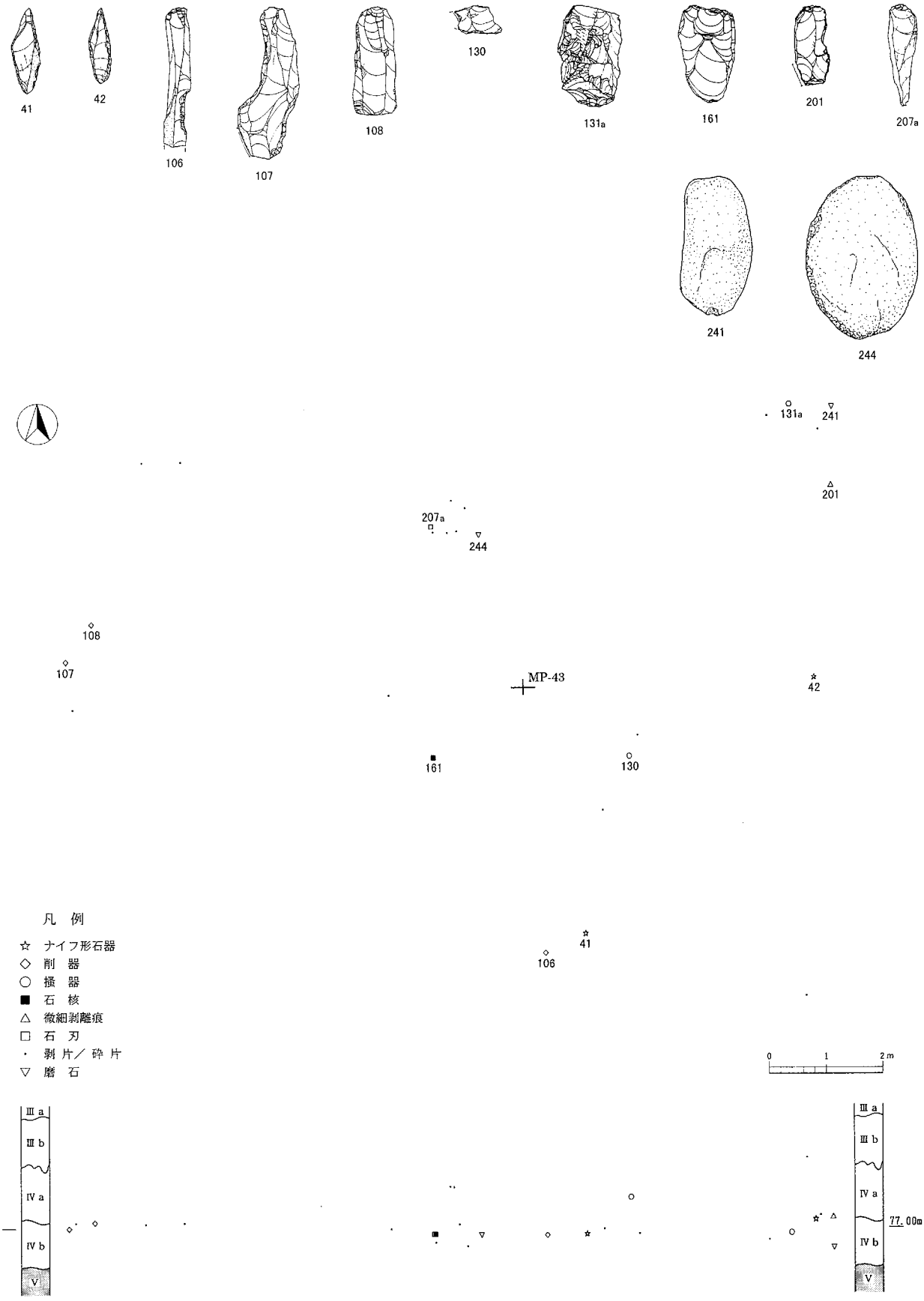


20 号ブロック遺物分布



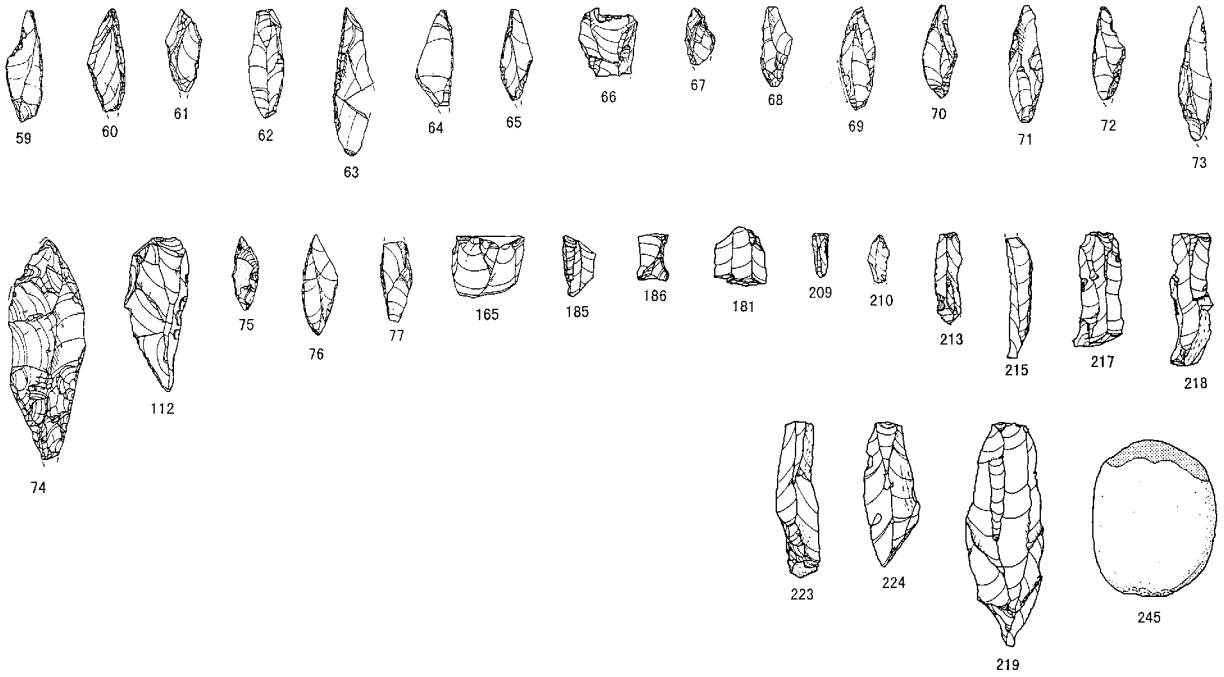
22 号ブロック遺物分布

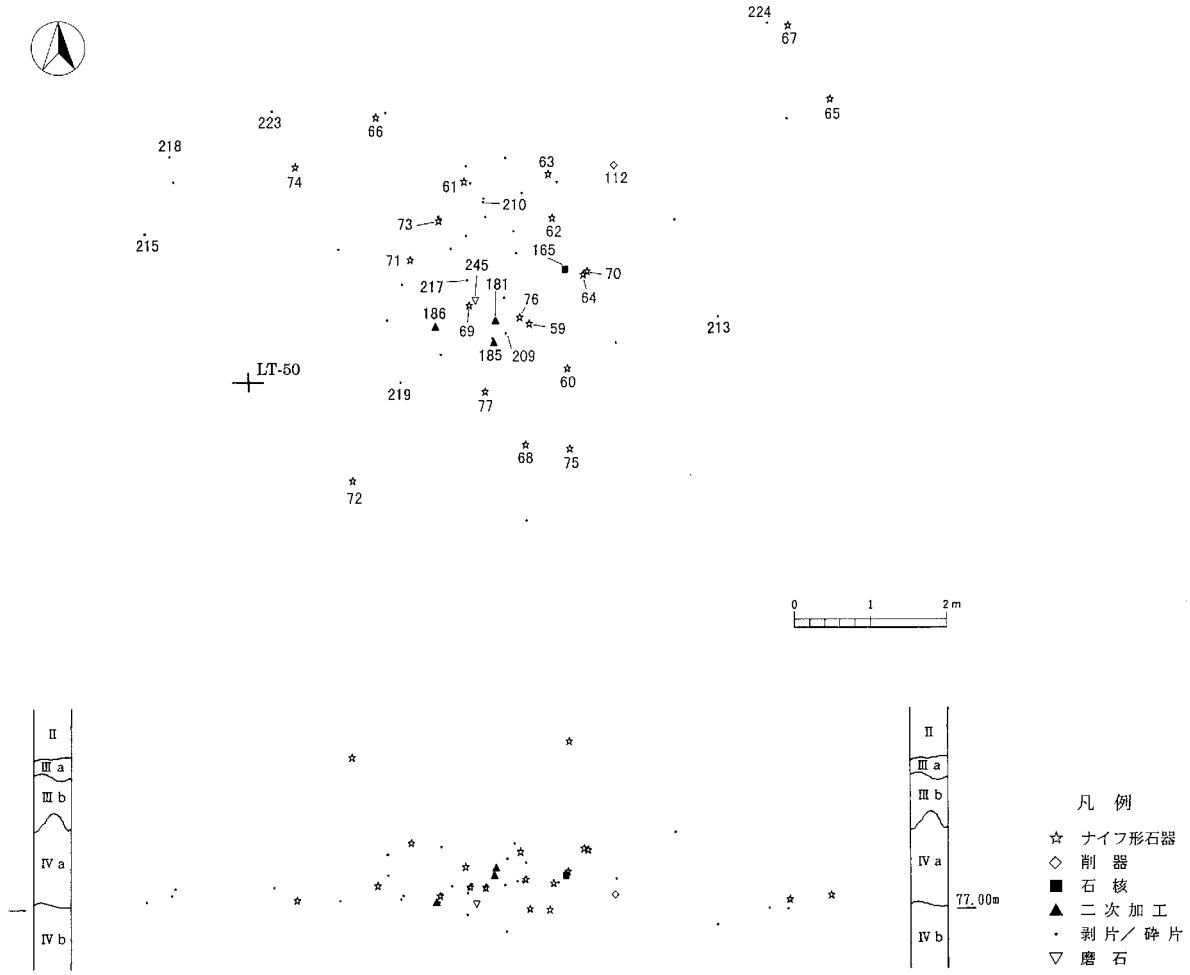
第33図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（10）



21 号ブロック遺物分布

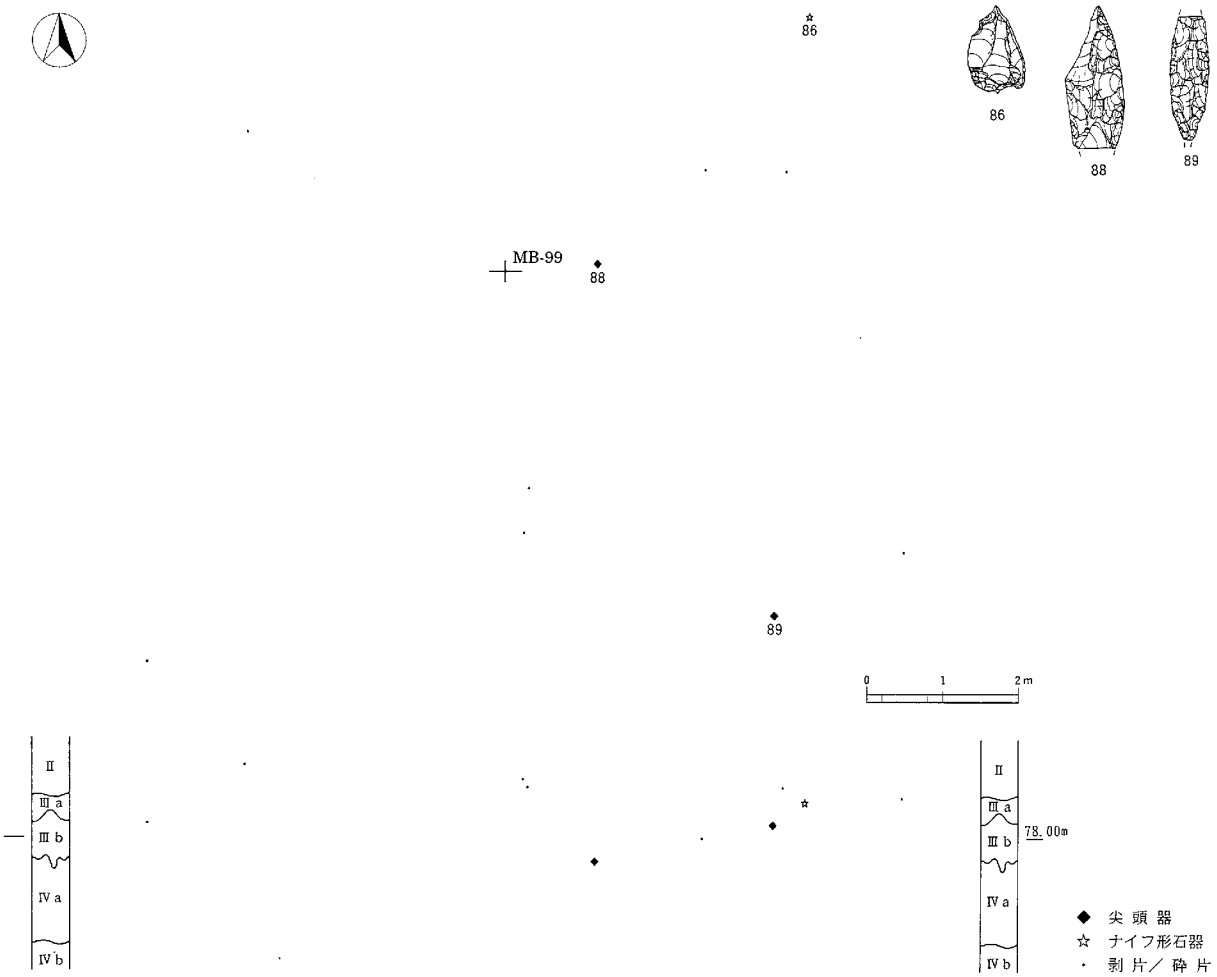
第34図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（11）



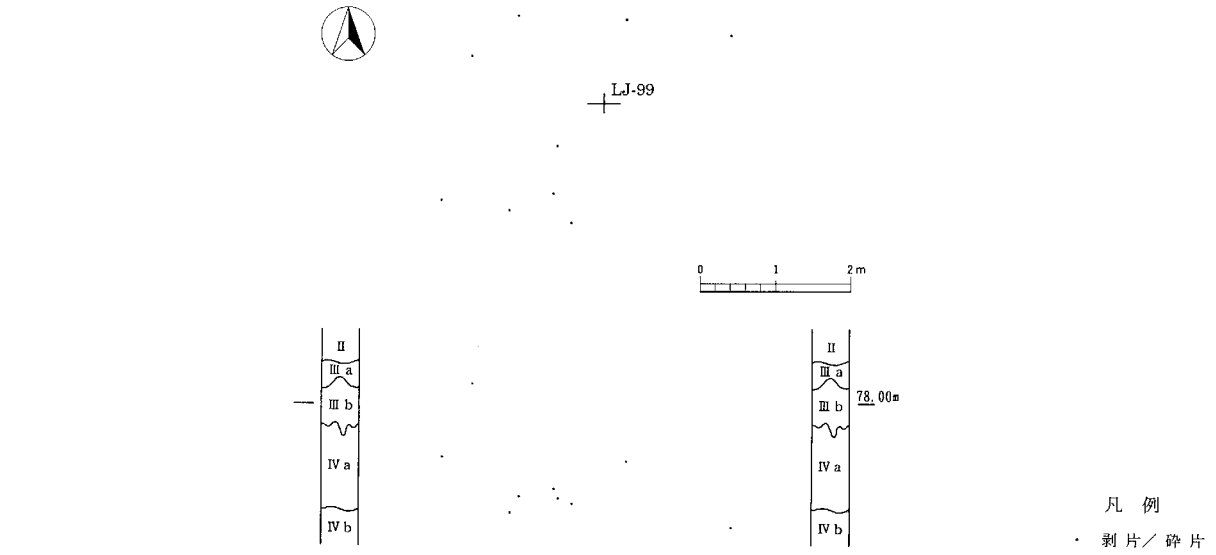


23 号ブロック遺物分布

第35図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（12）

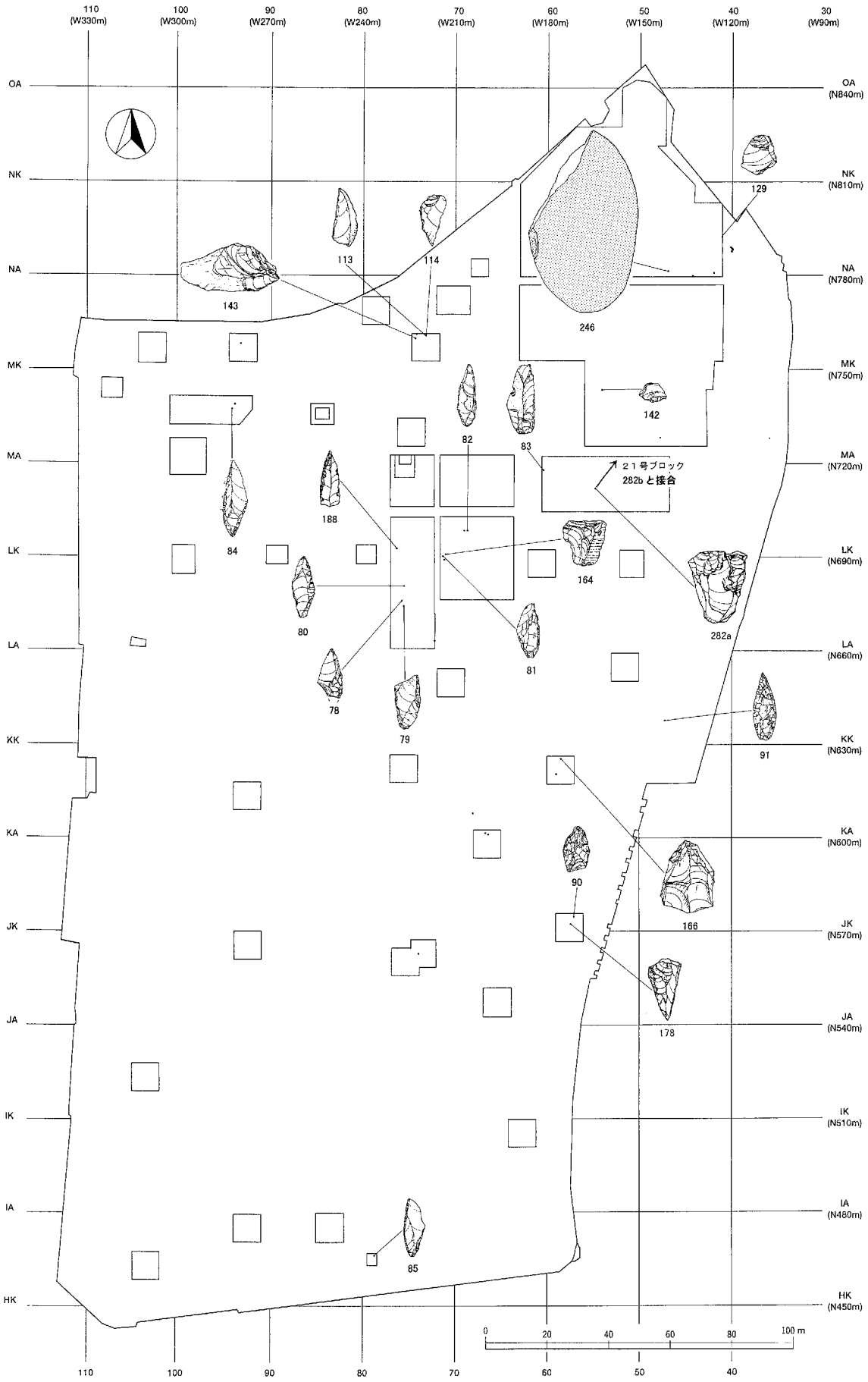


24 号ブロック遺物分布

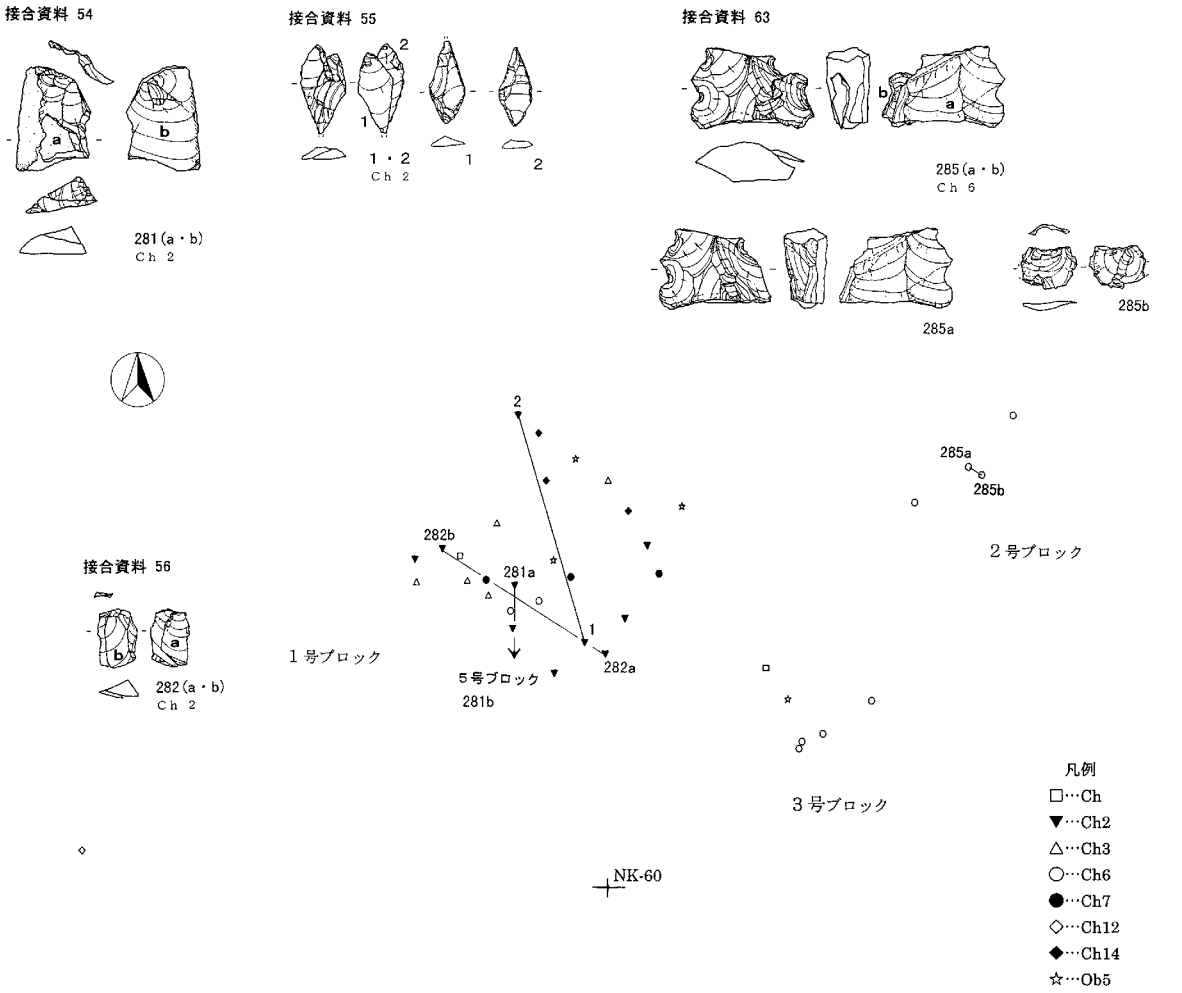


25 号ブロック遺物分布

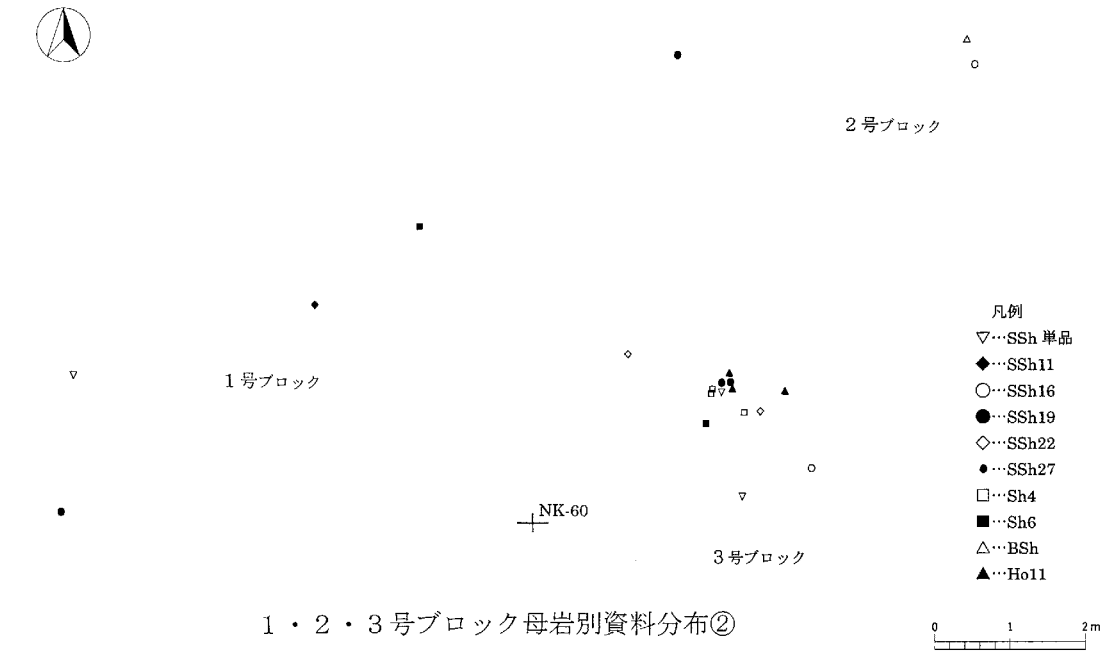
第36図　第２文化層　ブロック別遺物分布図（13）



第37図　第２文化層　ブロック外出土遺物分布図

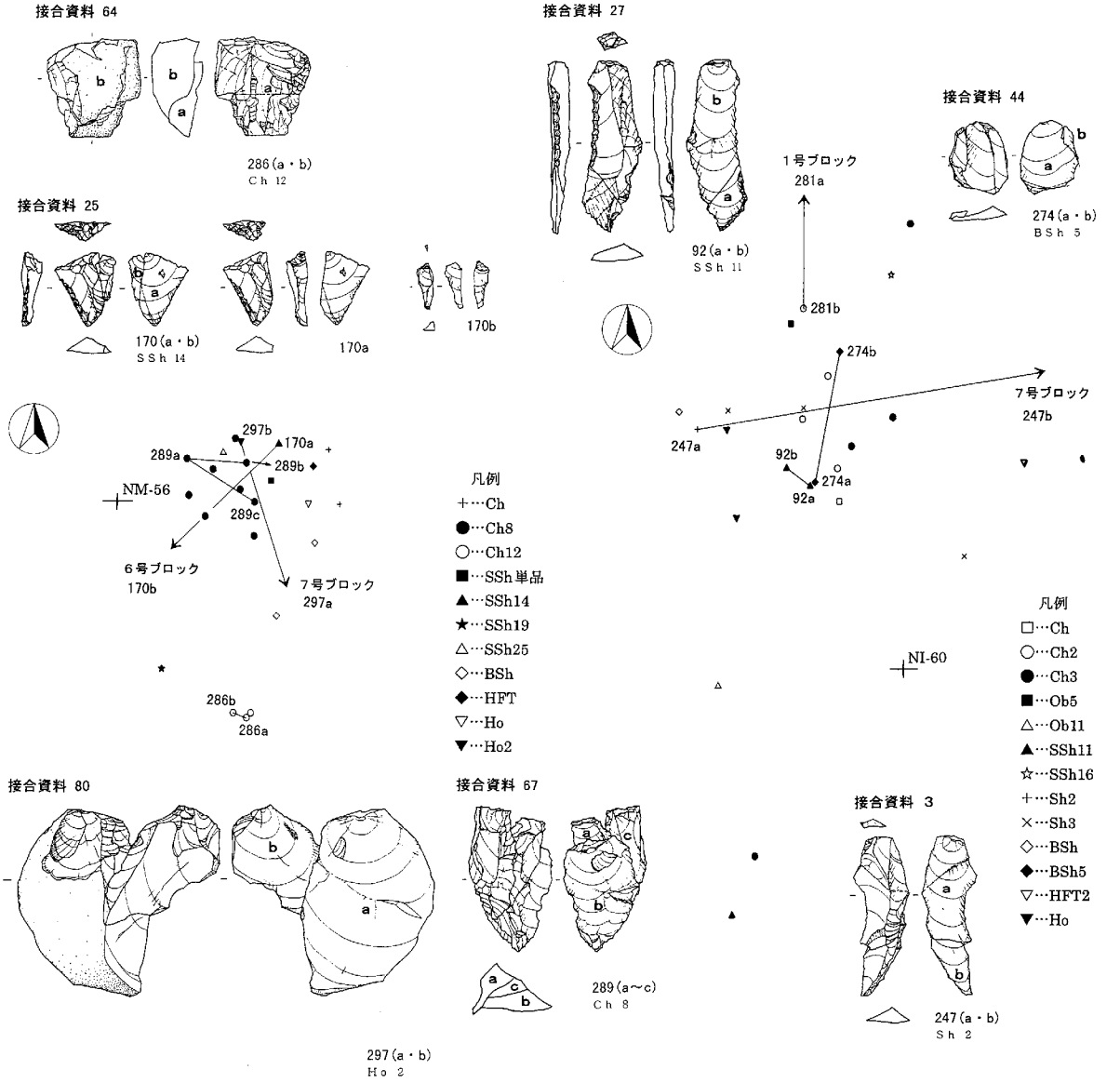


１・２・３号ブロック母岩別資料分布①



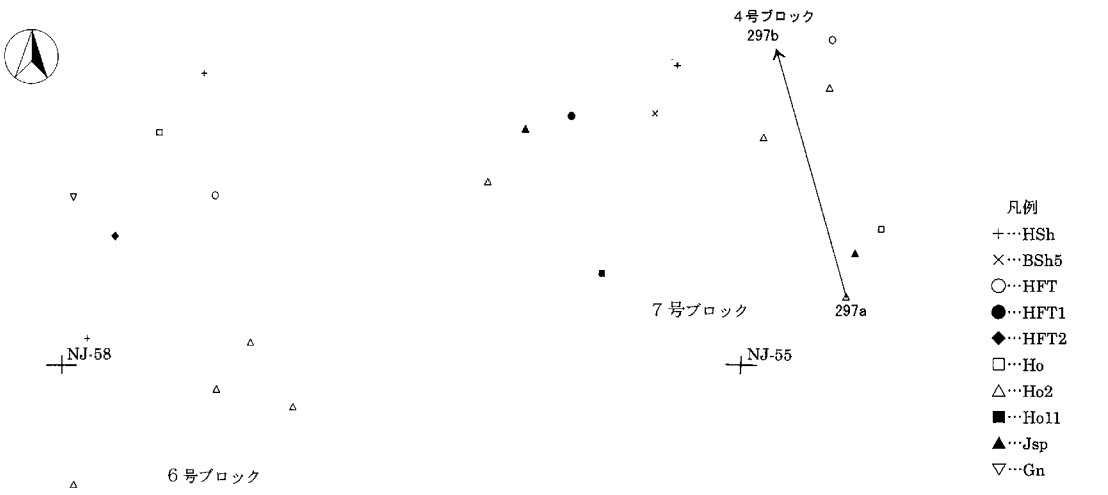
１・２・３号ブロック母岩別資料分布②

第38図　第２文化層　母岩別資料分布図（１）



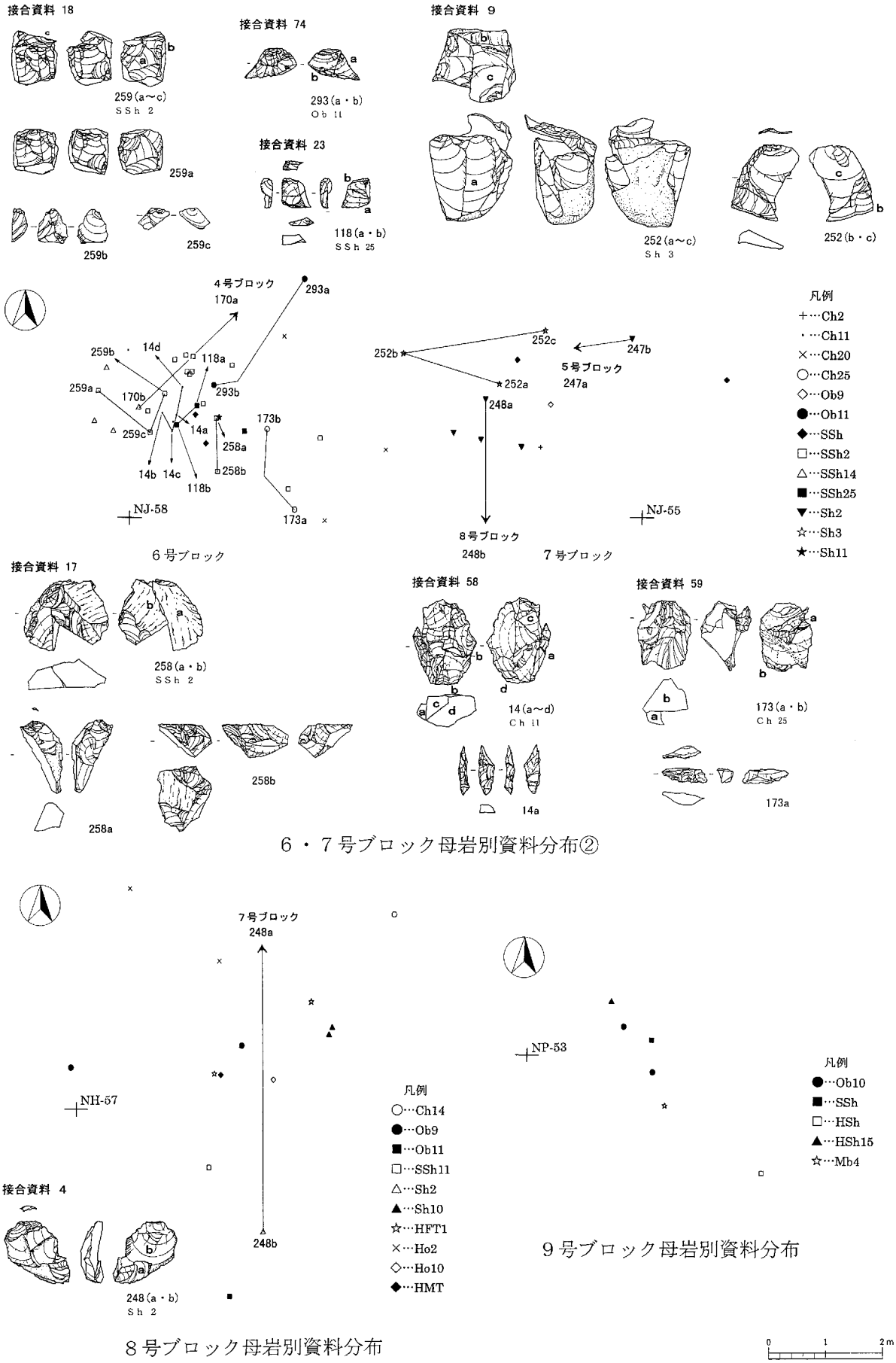
4号ブロック母岩別資料分布

5号ブロック母岩別資料分布



6・7号ブロック母岩別資料分布①

第39図　第２文化層　母岩別資料分布図（２）

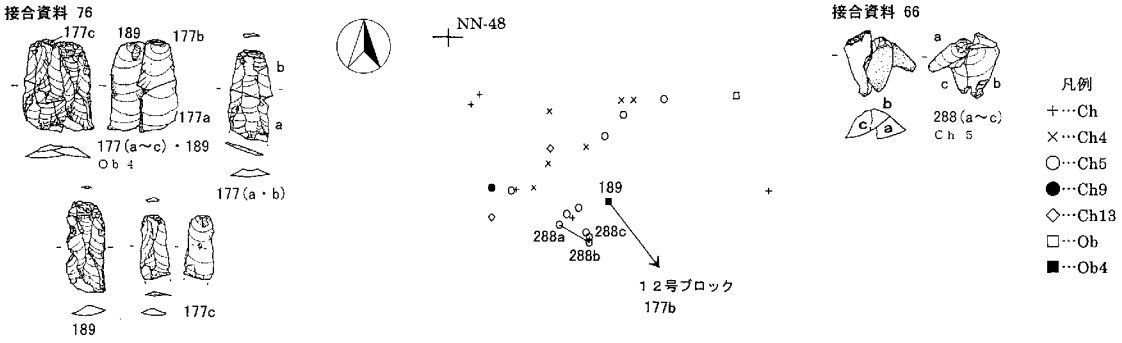


6・7号ブロック母岩別資料分布②

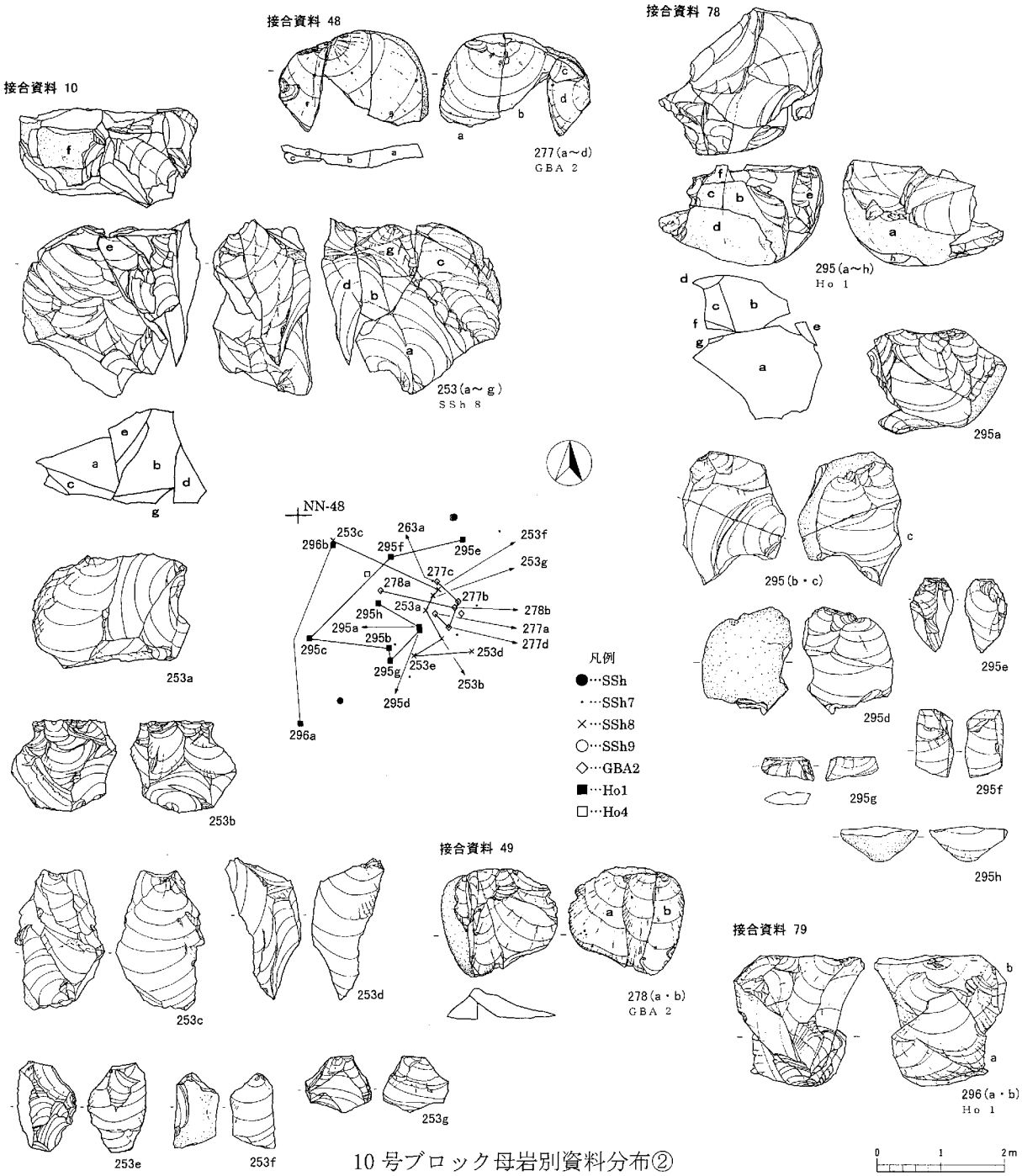
8号ブロック母岩別資料分布

9号ブロック母岩別資料分布

第40図　第２文化層　母岩別資料分布図（３）

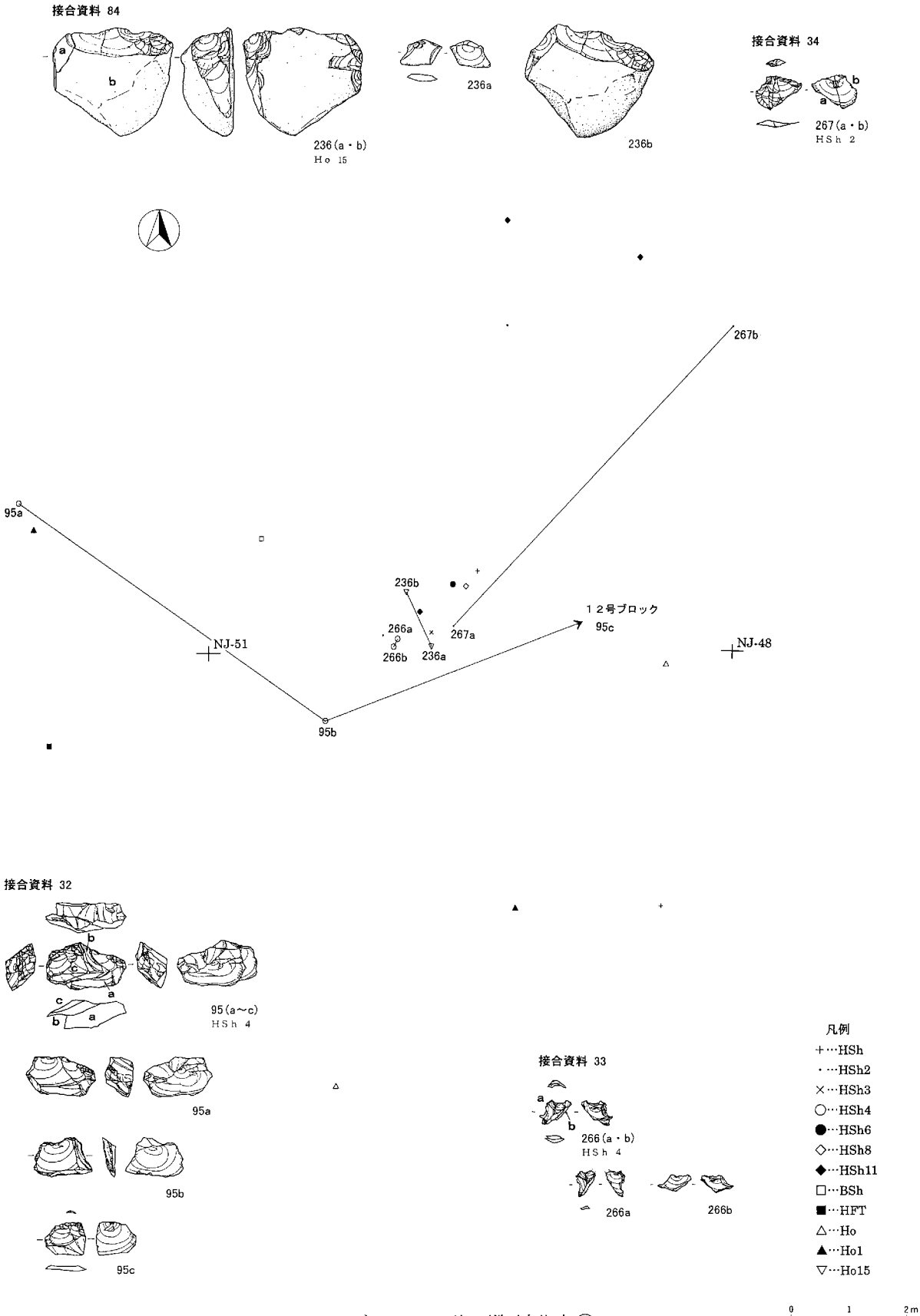


10 号ブロック母岩別資料分布①



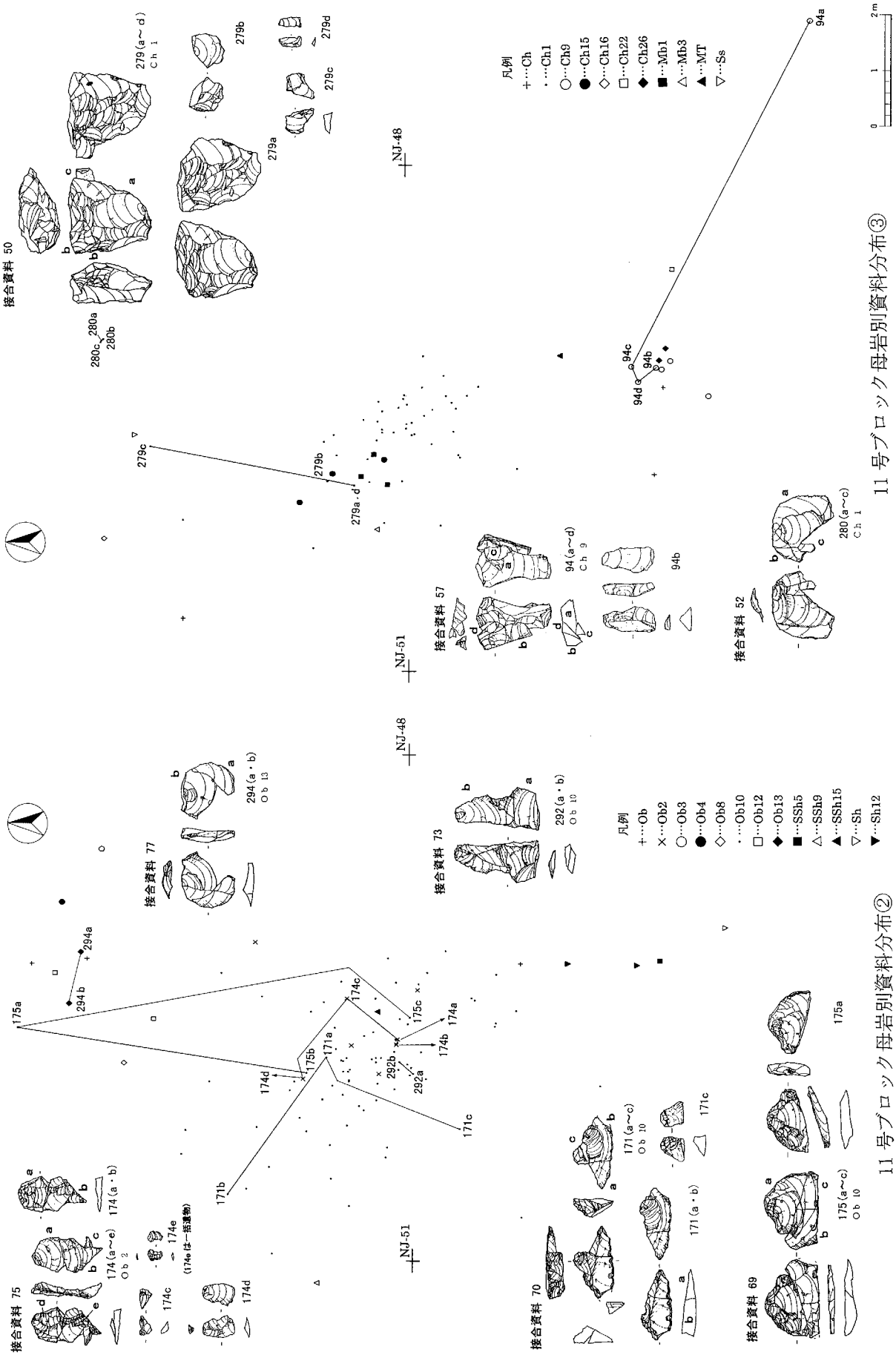
10 号ブロック母岩別資料分布②

第41図　第２文化層　母岩別資料分布図（４）

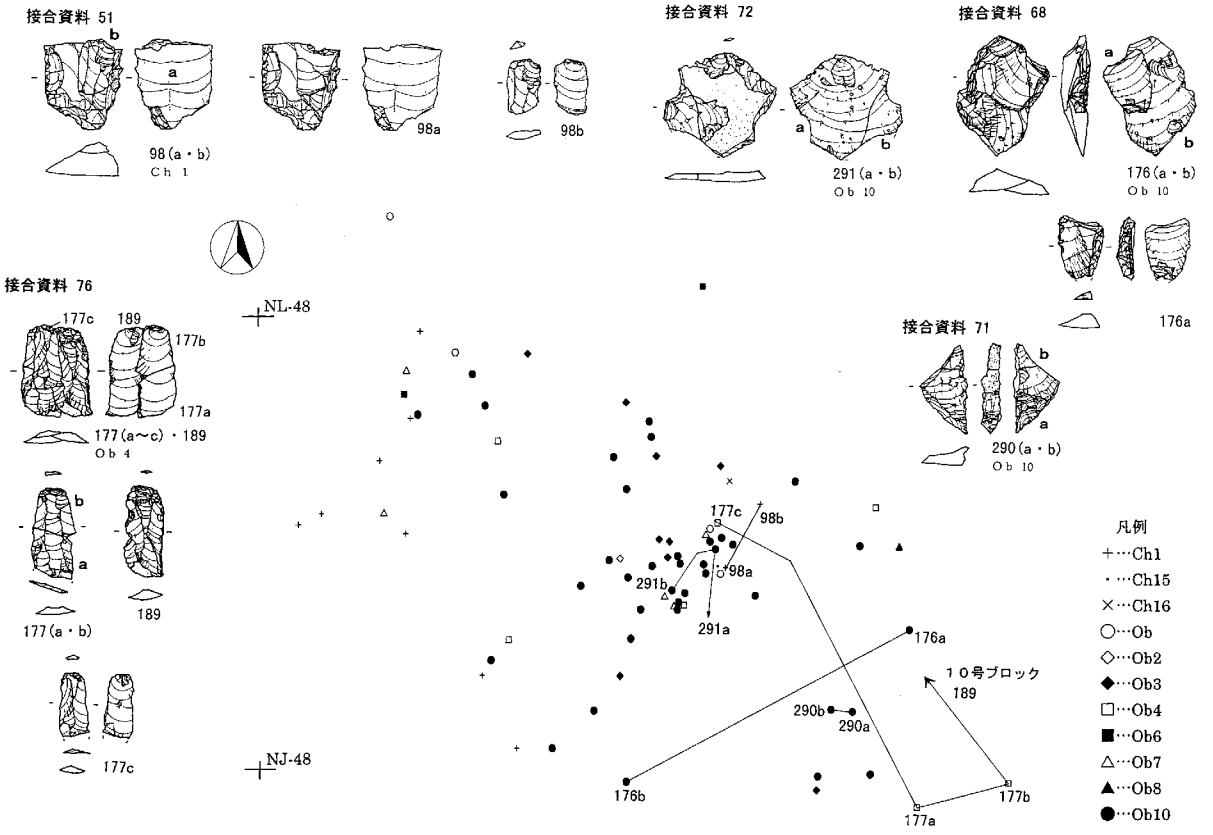


11 号ブロック母岩別資料分布①

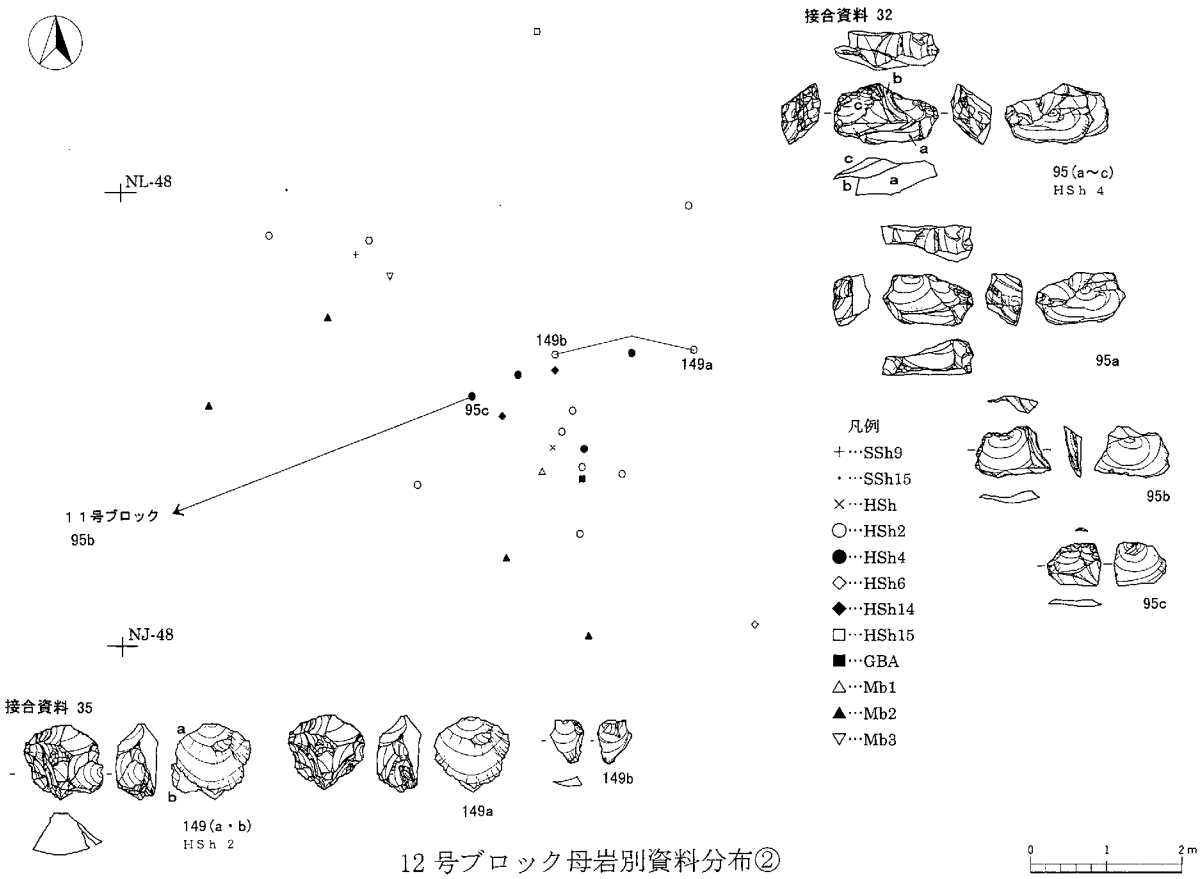
第42図　第２文化層　母岩別資料分布図（５）



第43図　第２文化層　母岩別資料分布図（６）

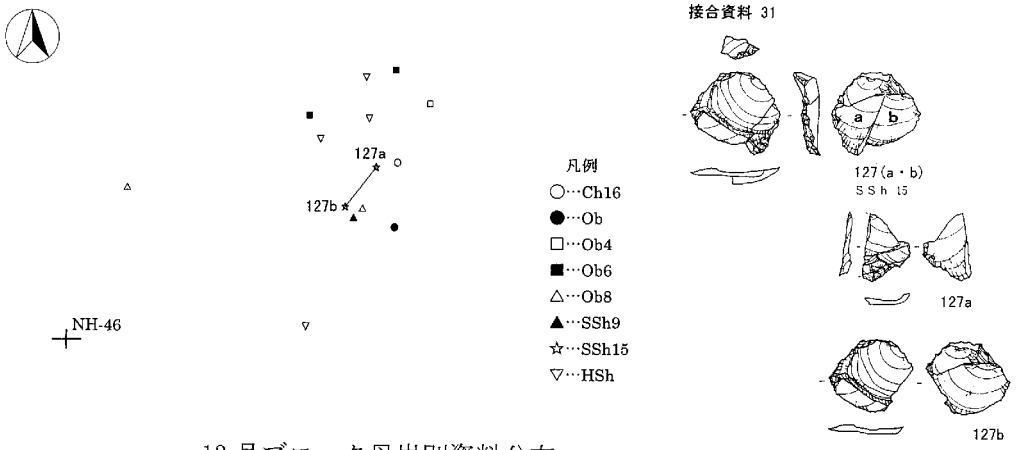


12 号ブロック母岩別資料分布①

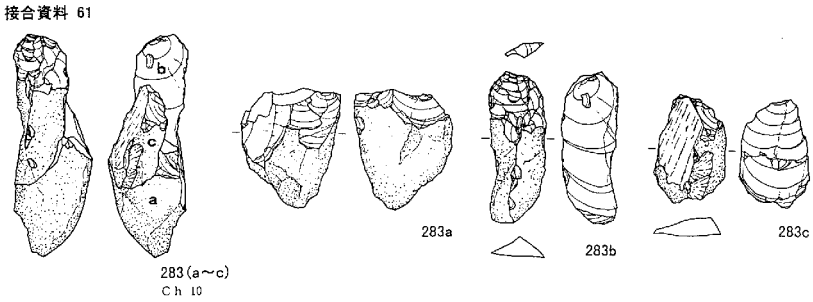


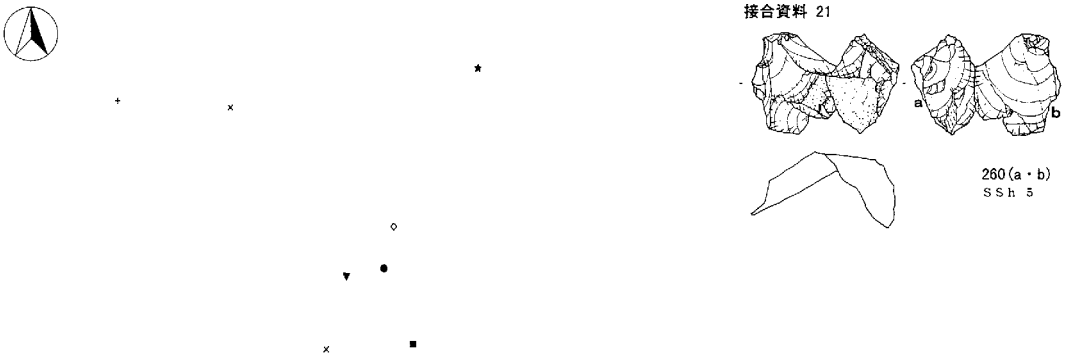
12 号ブロック母岩別資料分布②

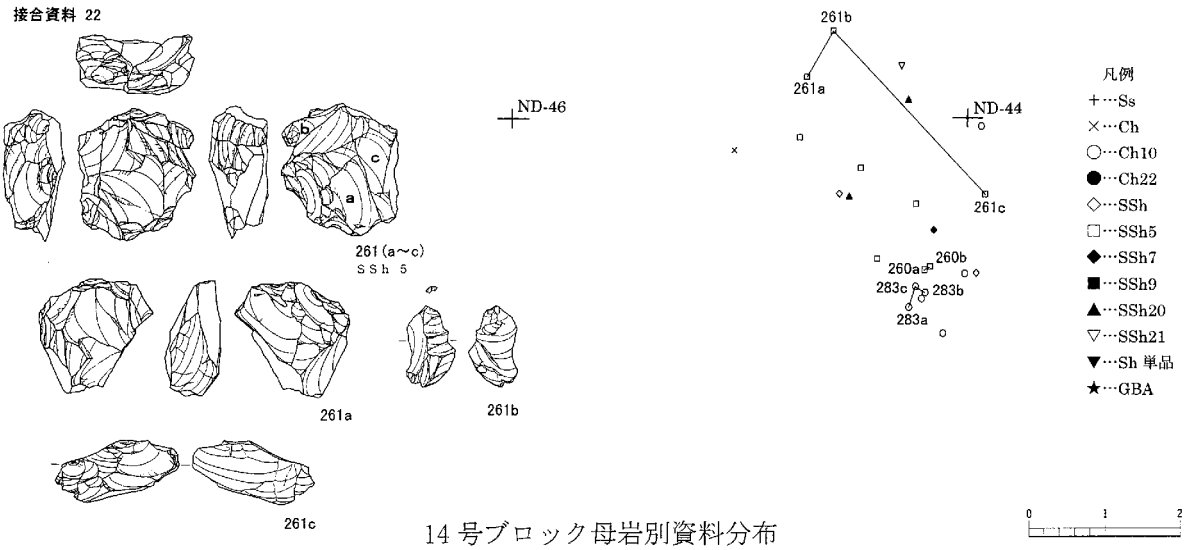
第44図　第２文化層　母岩別資料分布図（７）



13 号ブロック母岩別資料分布

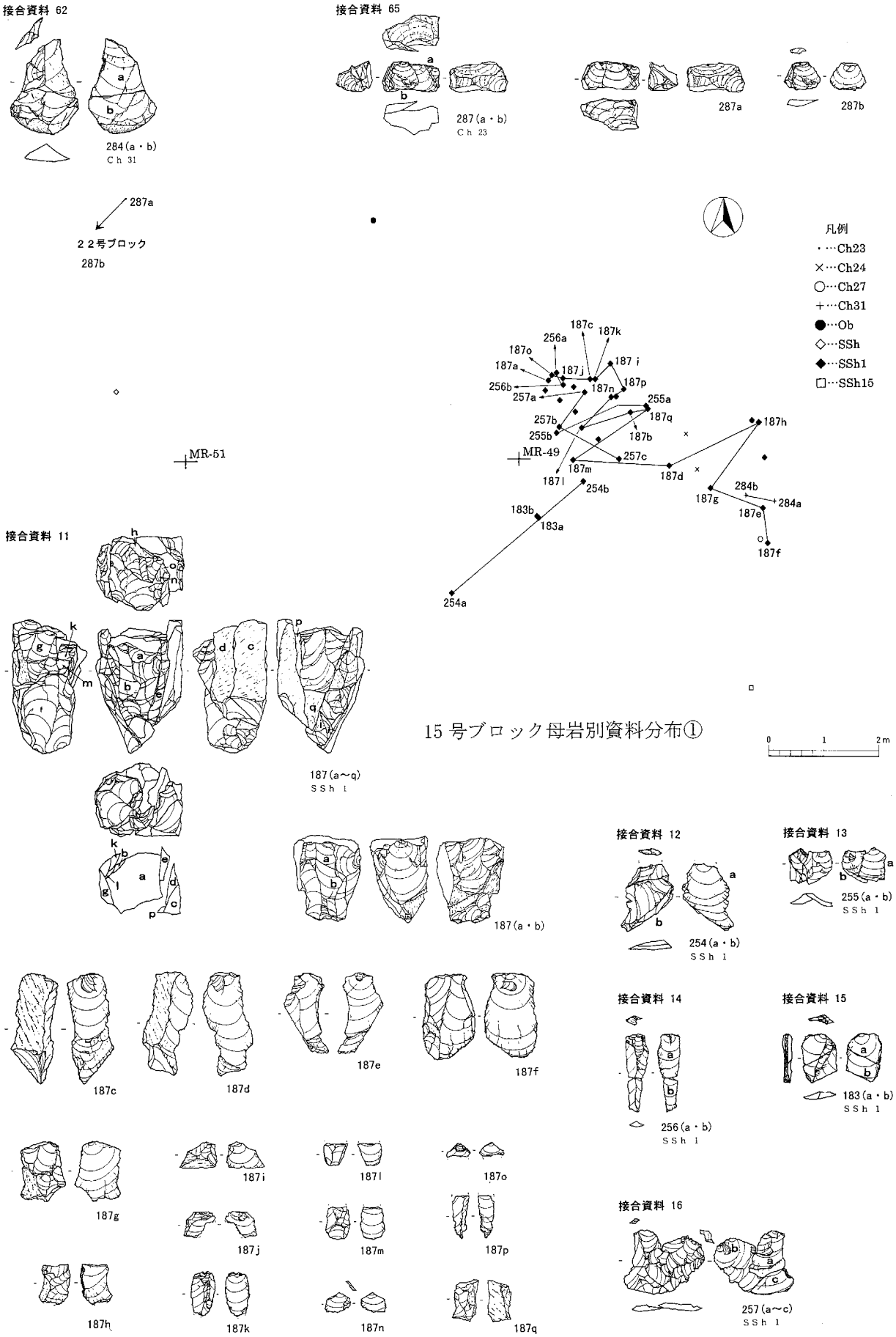




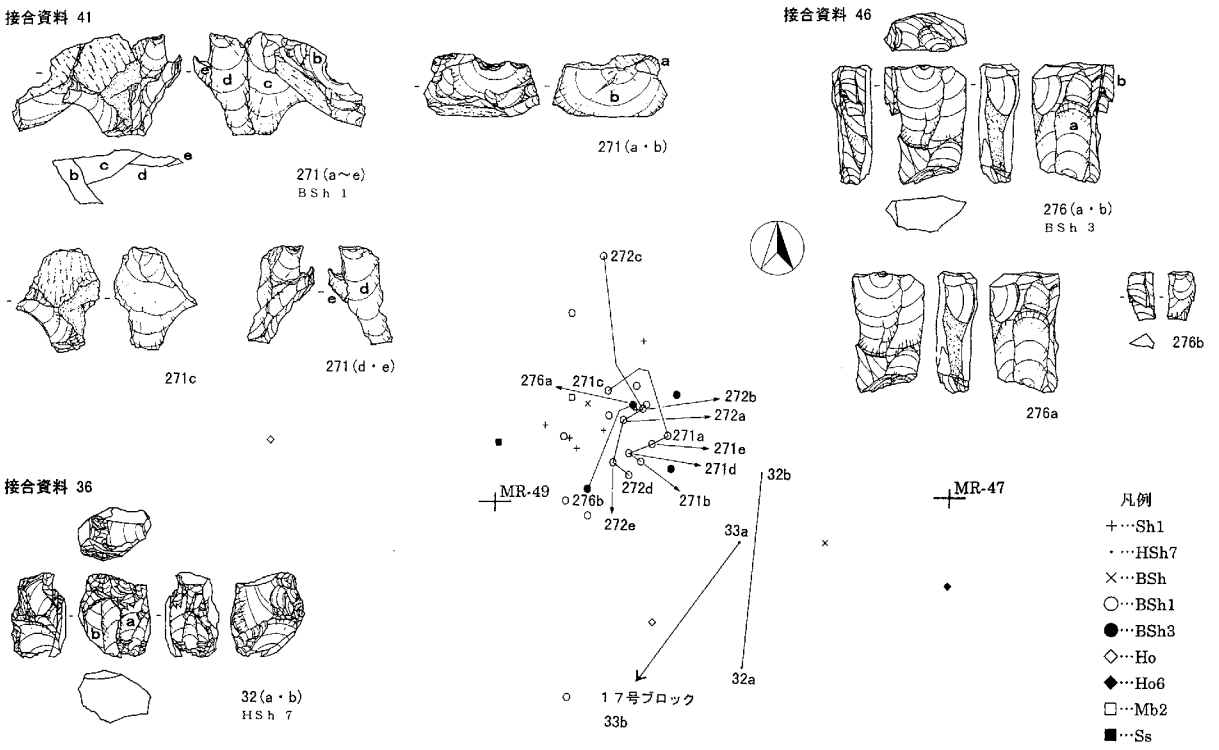


14 号ブロック母岩別資料分布

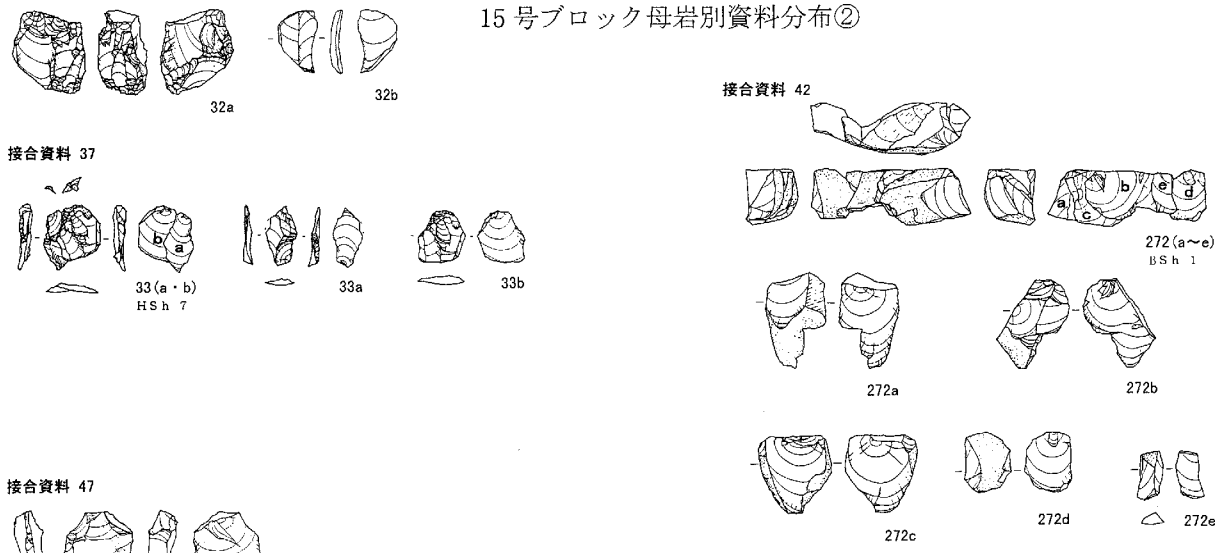
第45図　第２文化層　母岩別資料分布図（８）

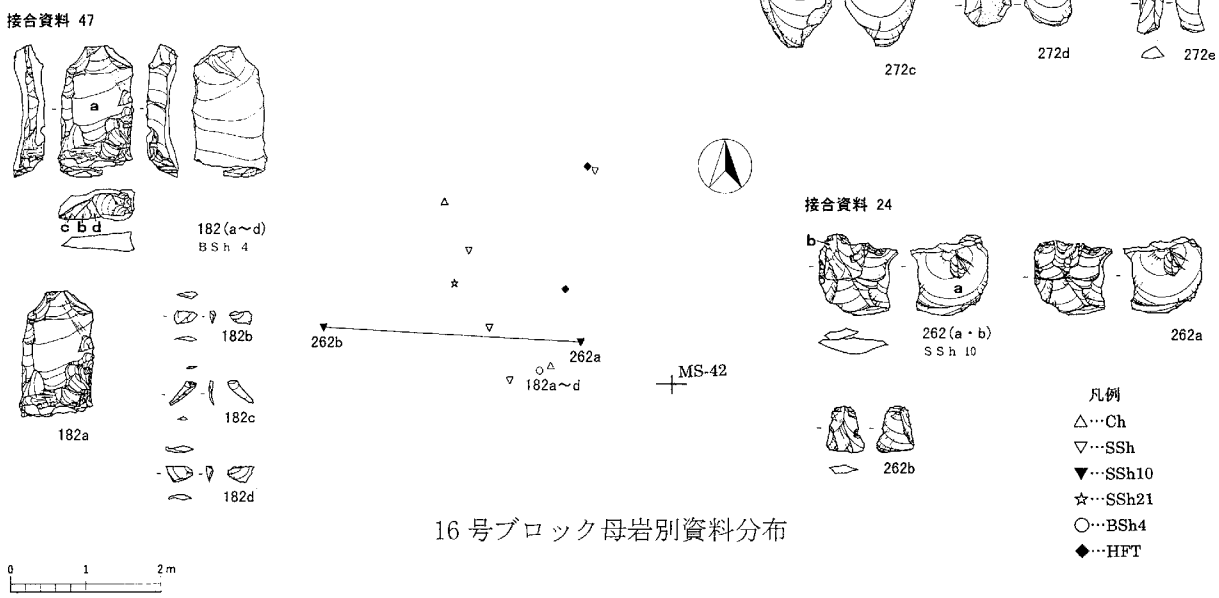


第46図　第２文化層　母岩別資料分布図（９）



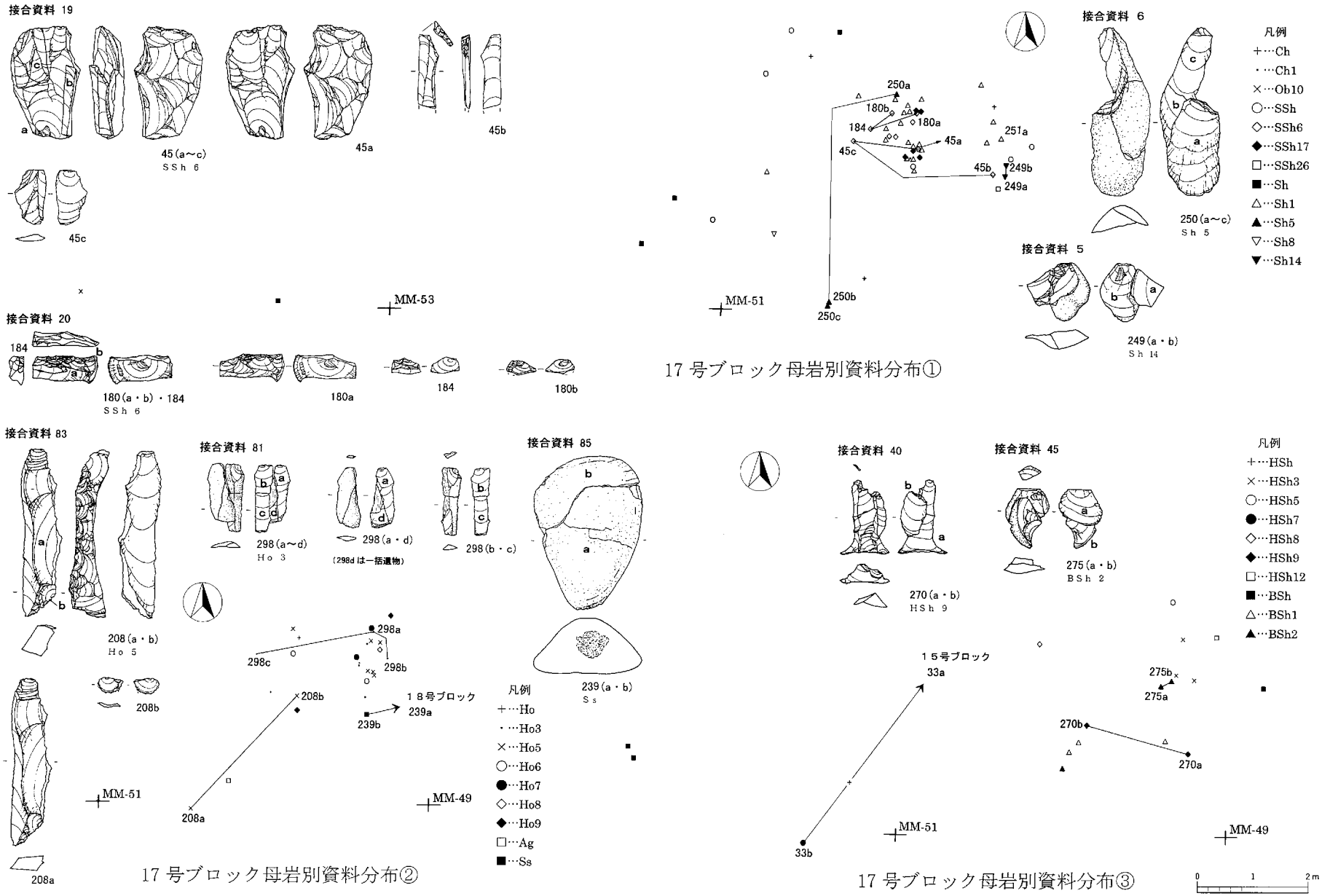
15 号ブロック母岩別資料分布②



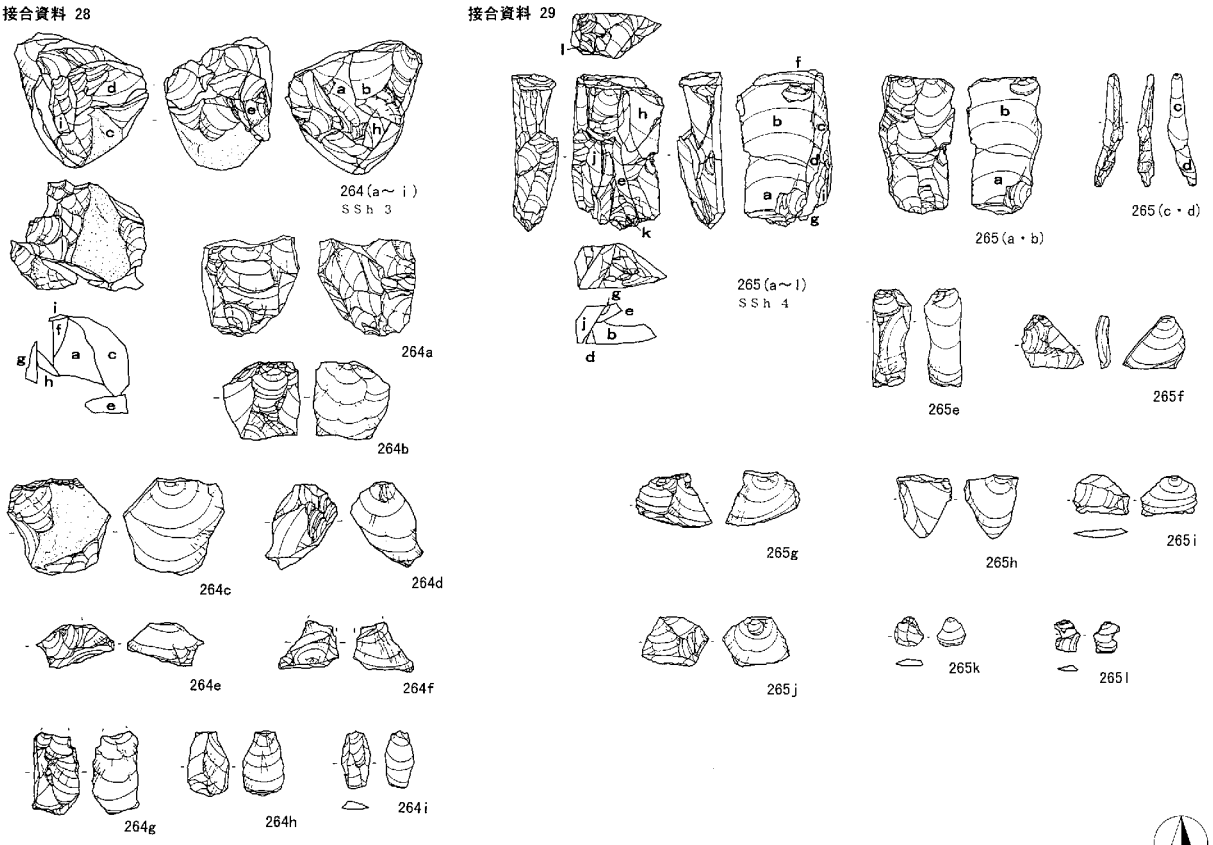


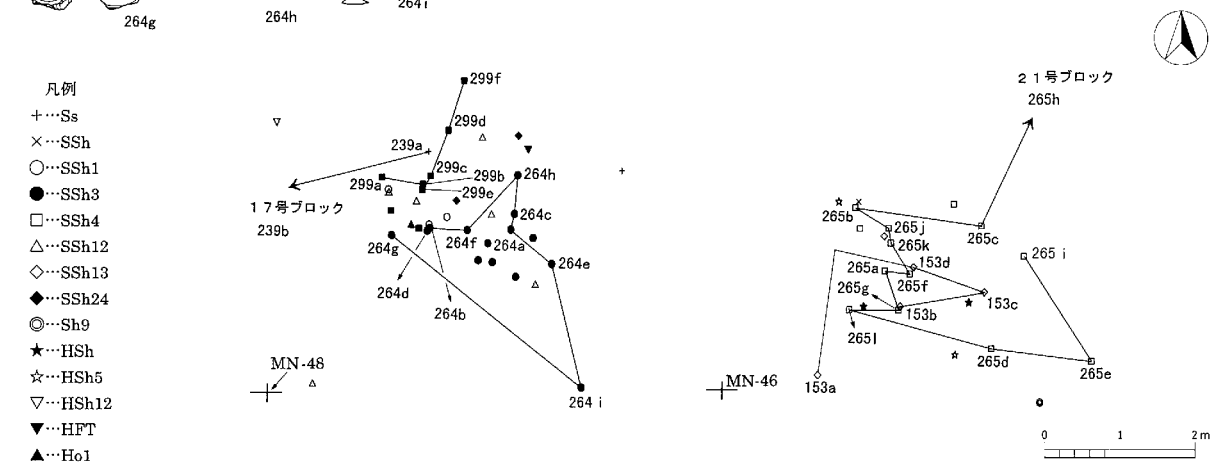
16 号ブロック母岩別資料分布

第47図　第２文化層　母岩別資料分布図（10）

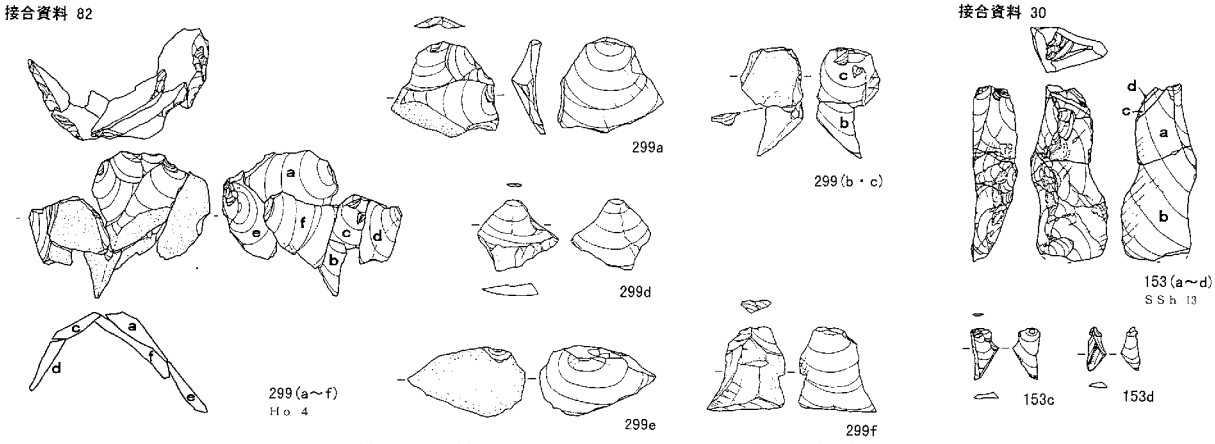


第48図　第２文化層　母岩別資料分布図（11）

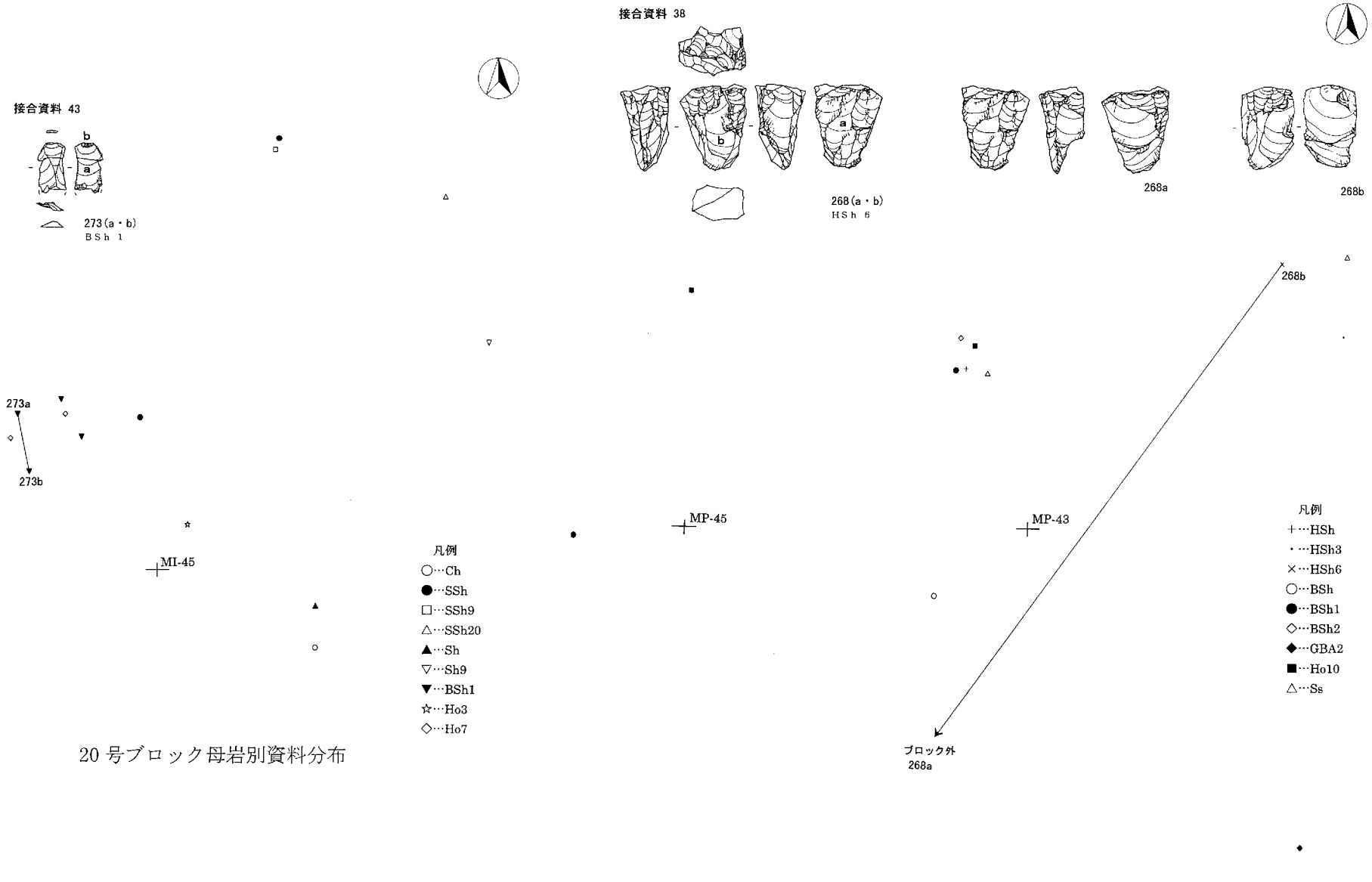




18 号ブロック母岩別資料分布　　19 号ブロック母岩別資料分布



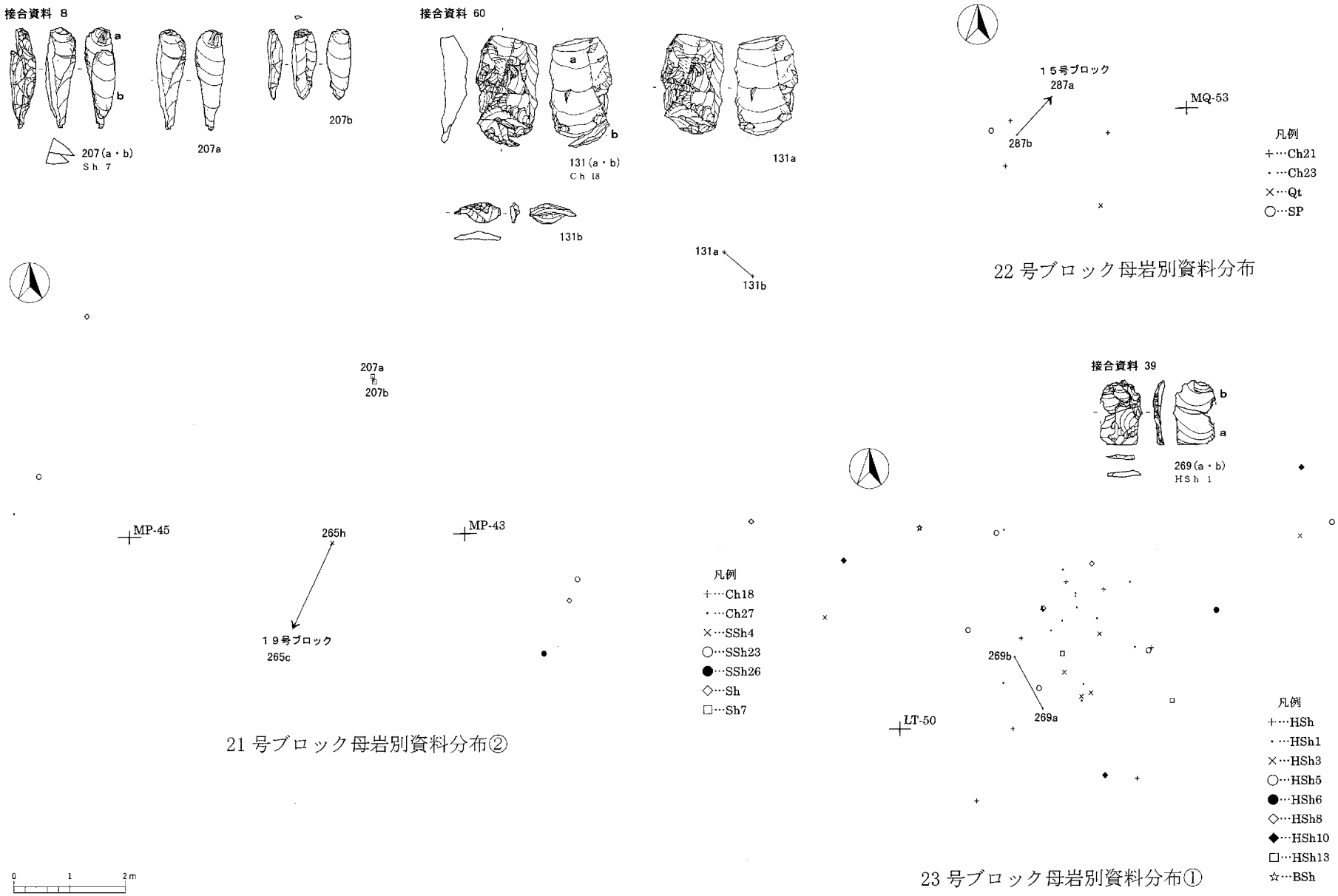
第49図　第２文化層　母岩別資料分布図（12）



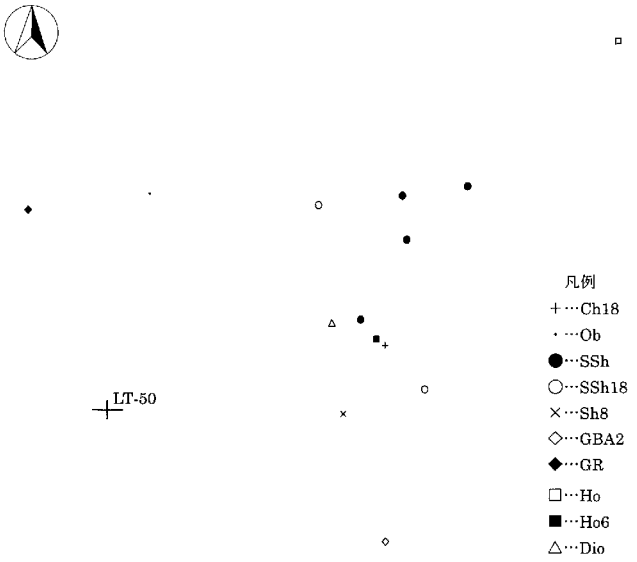
20 号ブロック母岩別資料分布

21 号ブロック母岩別資料分布①

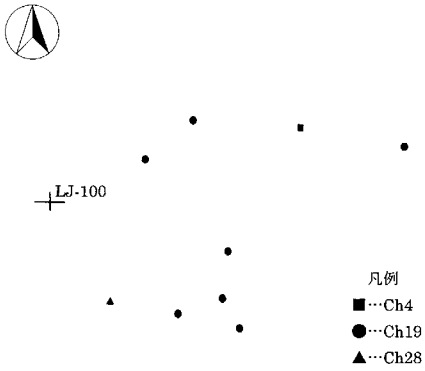
第50図　第２文化層　母岩別資料分布図（13）



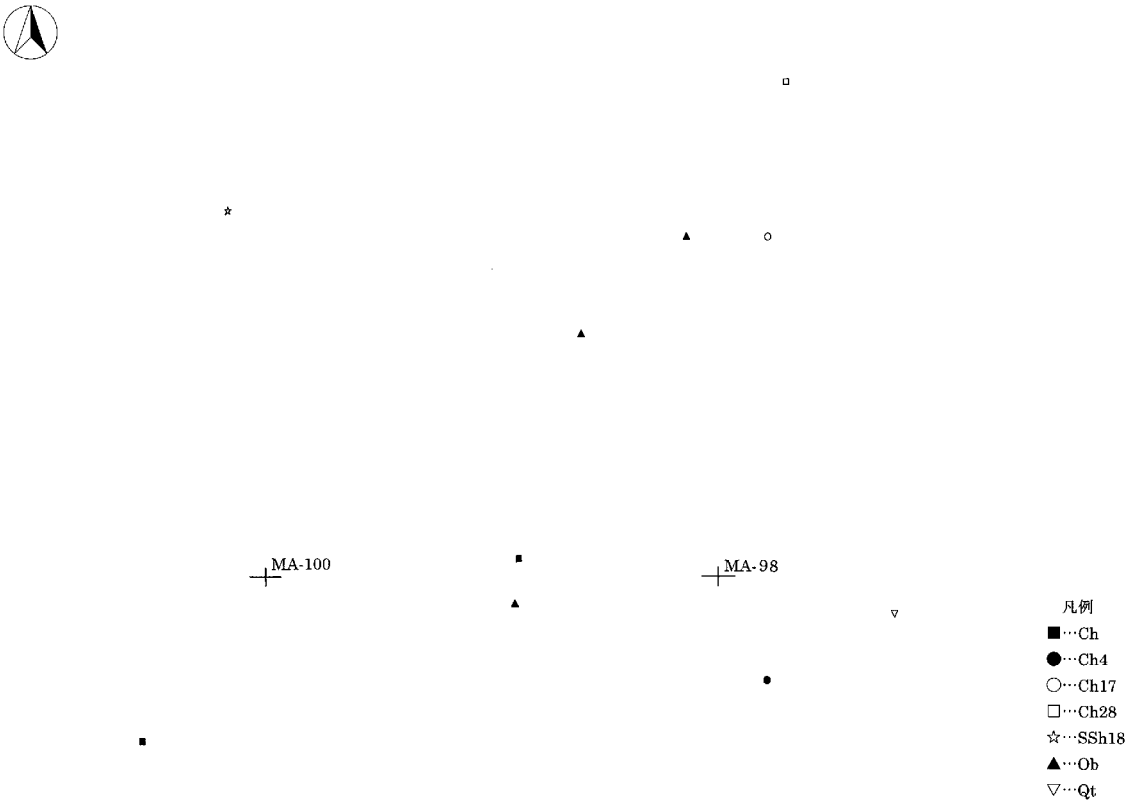
第51図　第２文化層　母岩別資料分布図（14）



23 号ブロック母岩別資料分布②

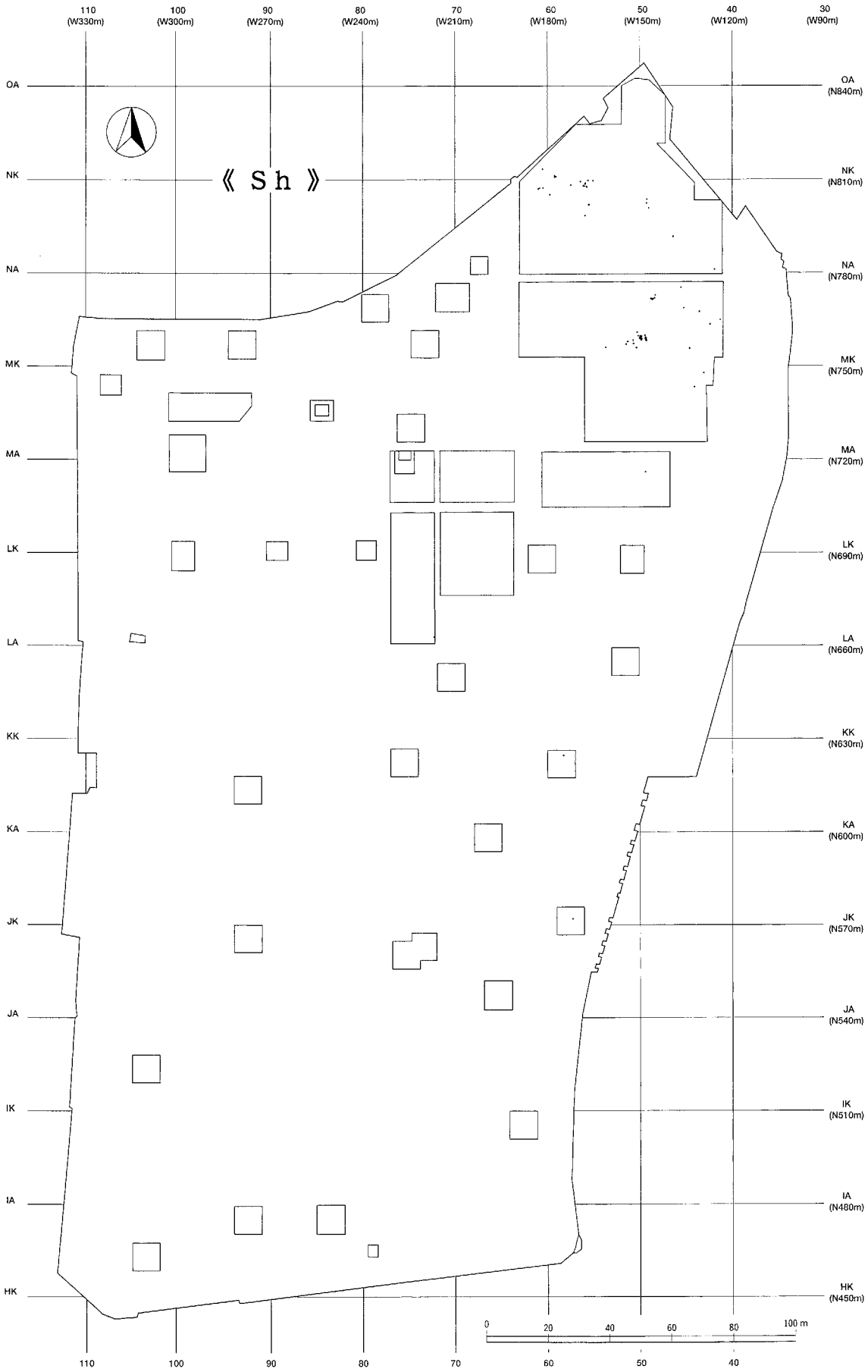


25 号ブロック母岩別資料分布

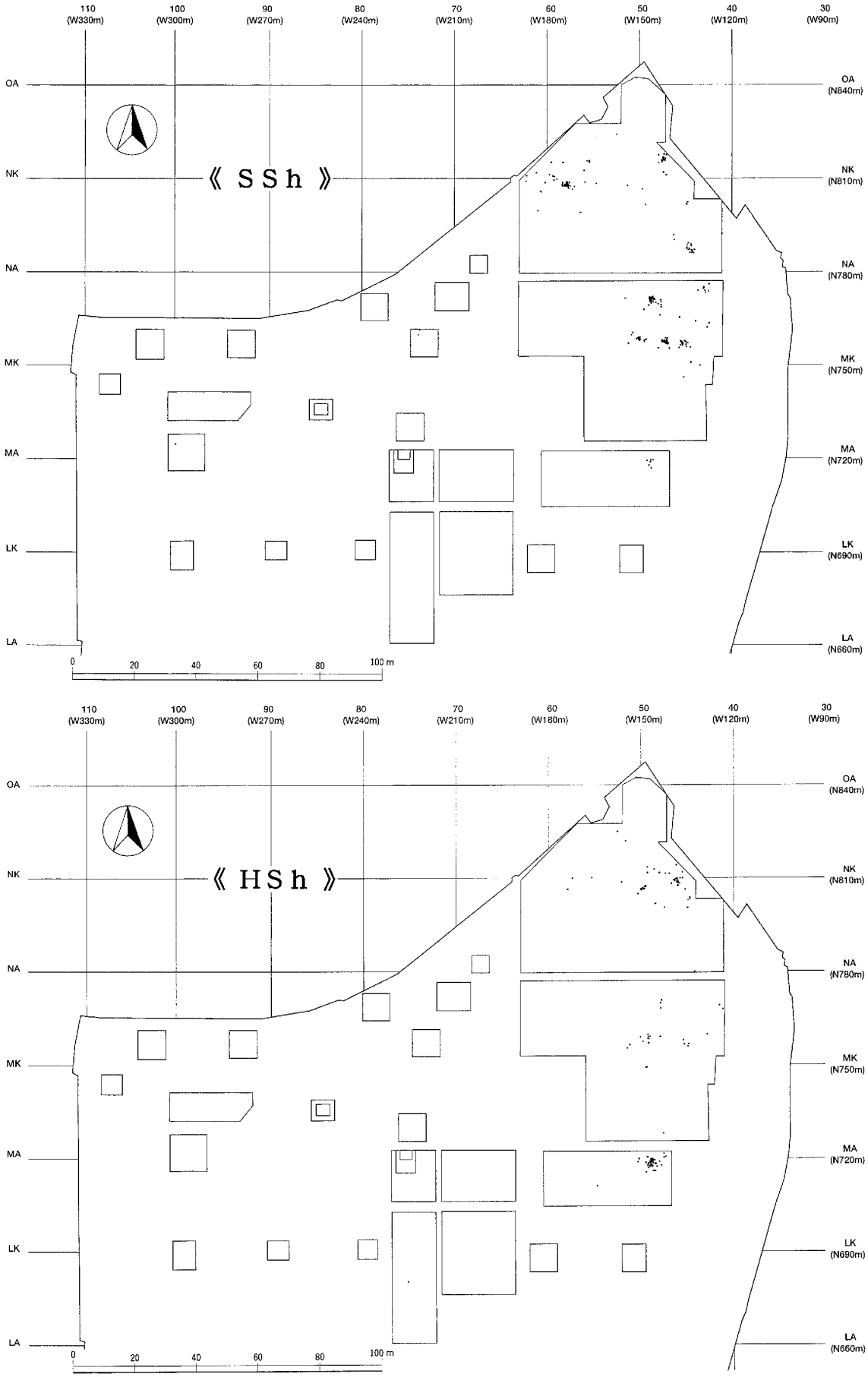


24 号ブロック母岩別資料分布

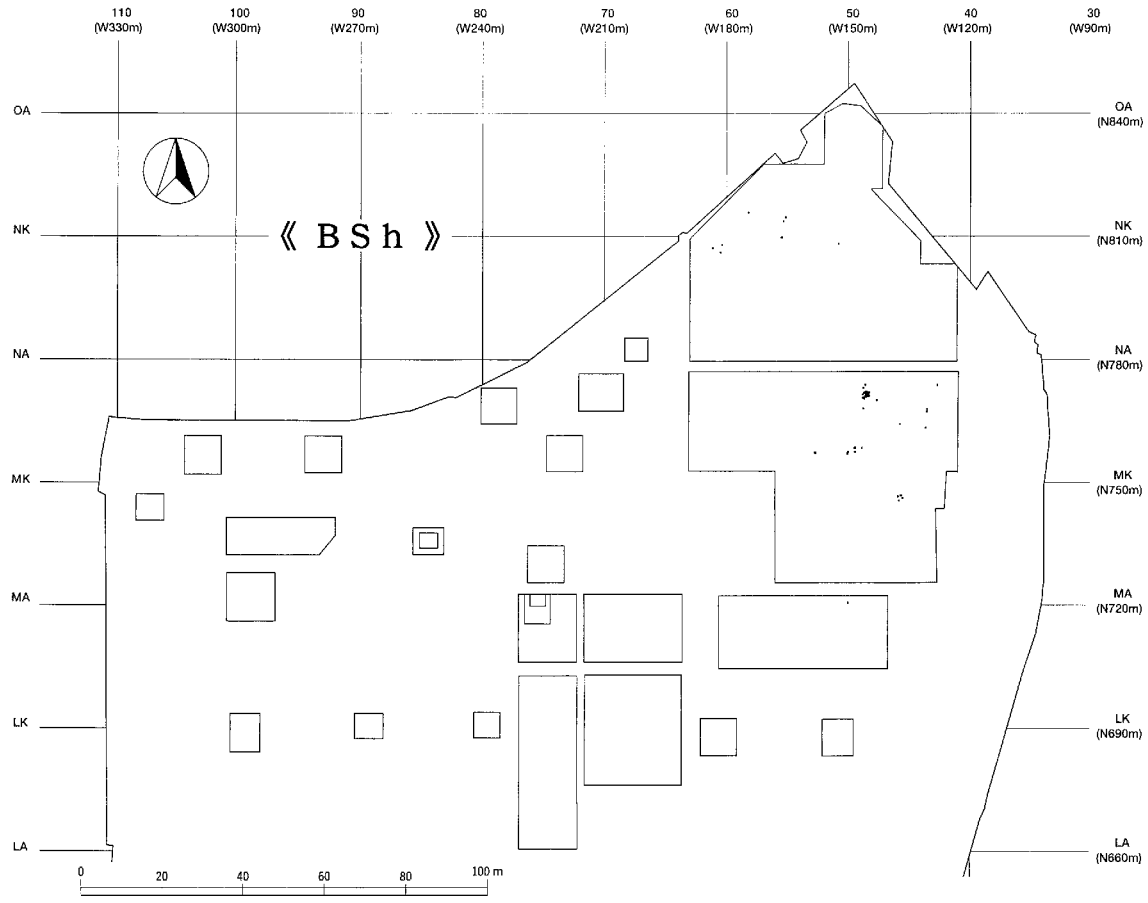
第52図　第２文化層　母岩別資料分布図（15）

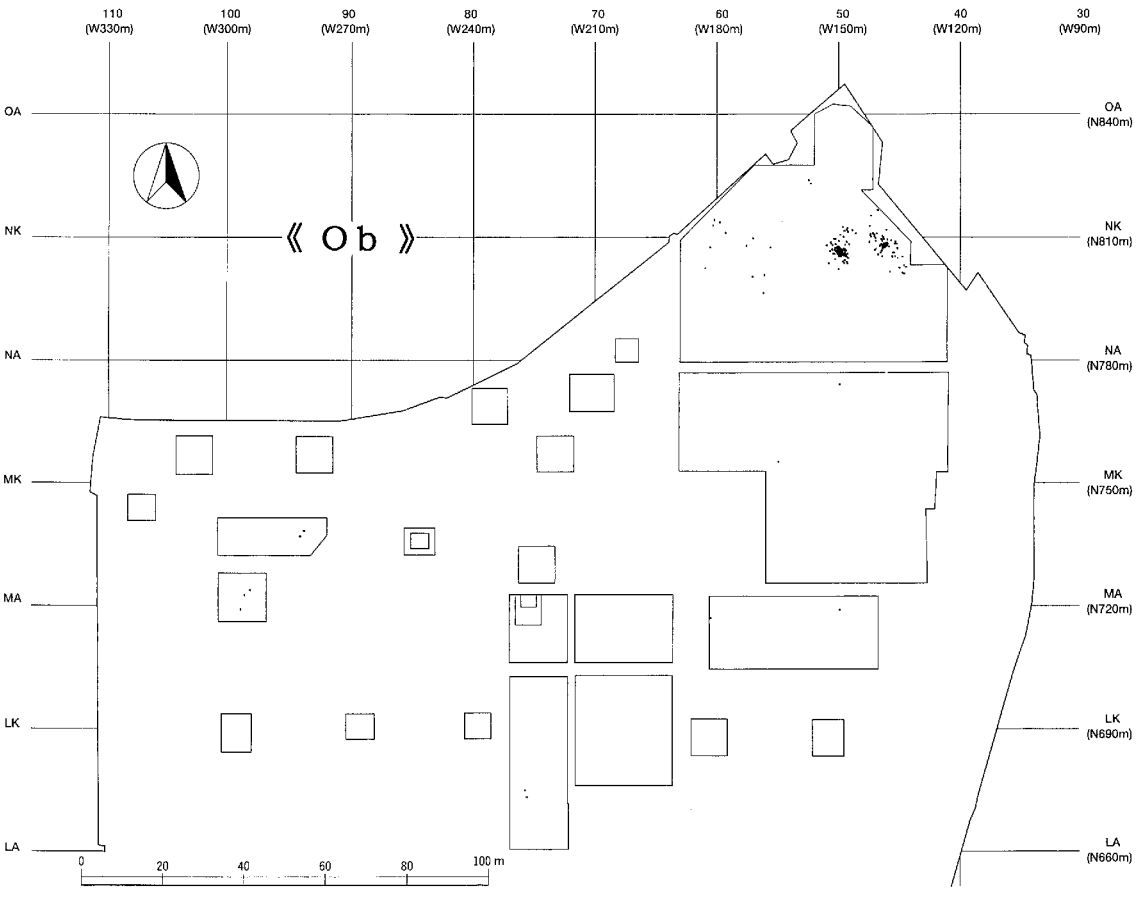


第53図　第２文化層　石材別分布図（Sh）

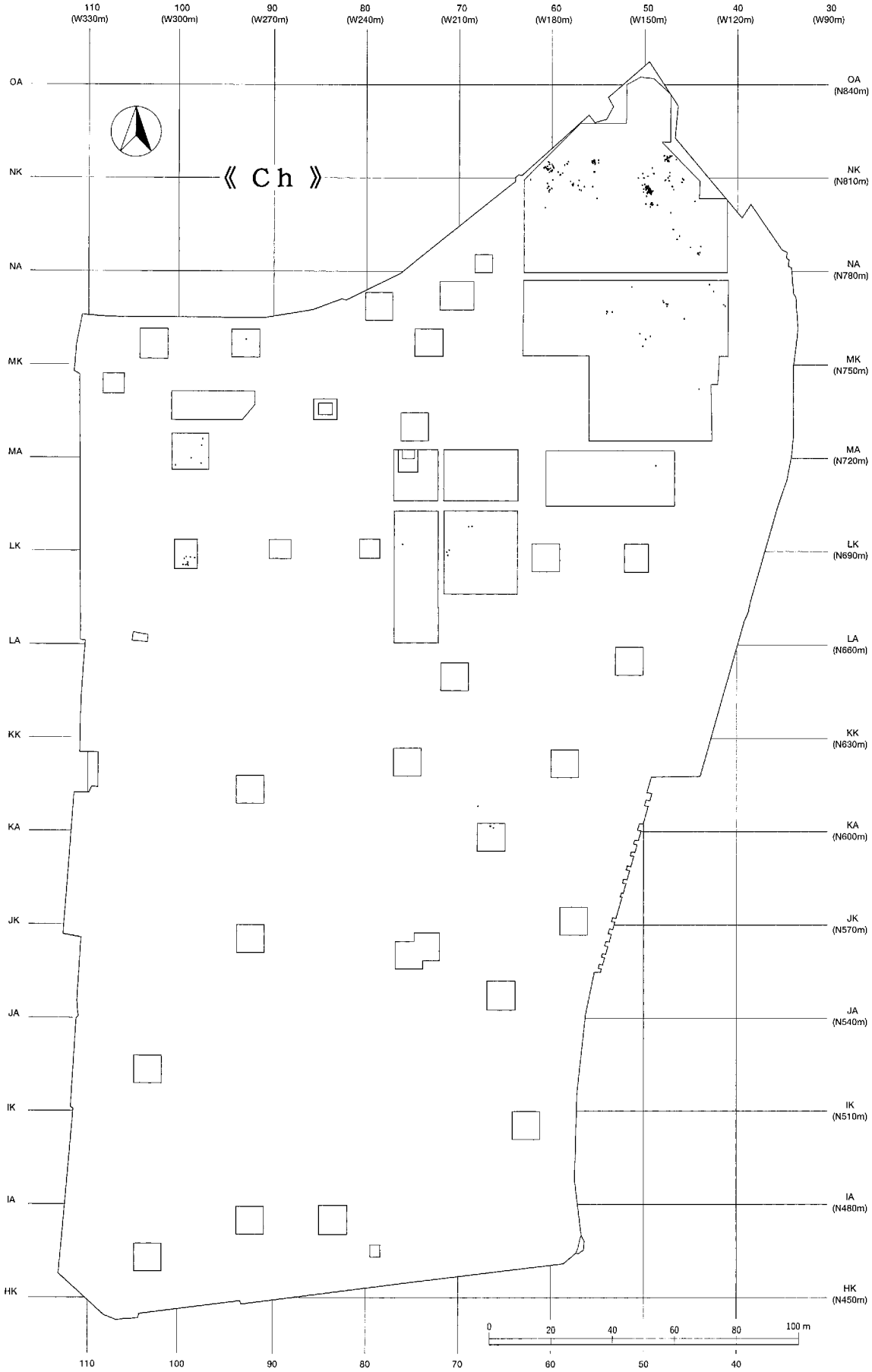


第54図　第２文化層　石材別分布図（SSh/HSh）

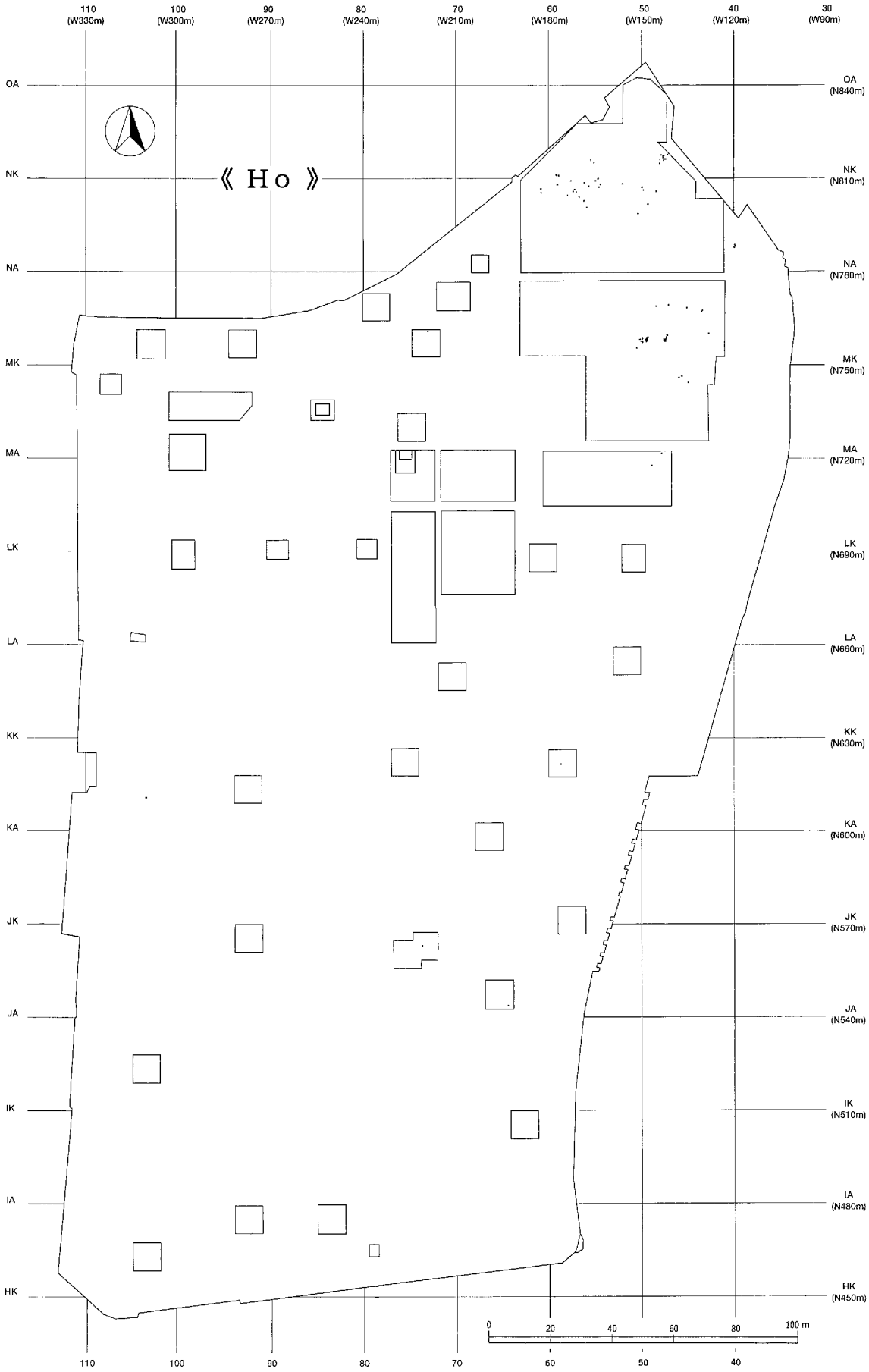




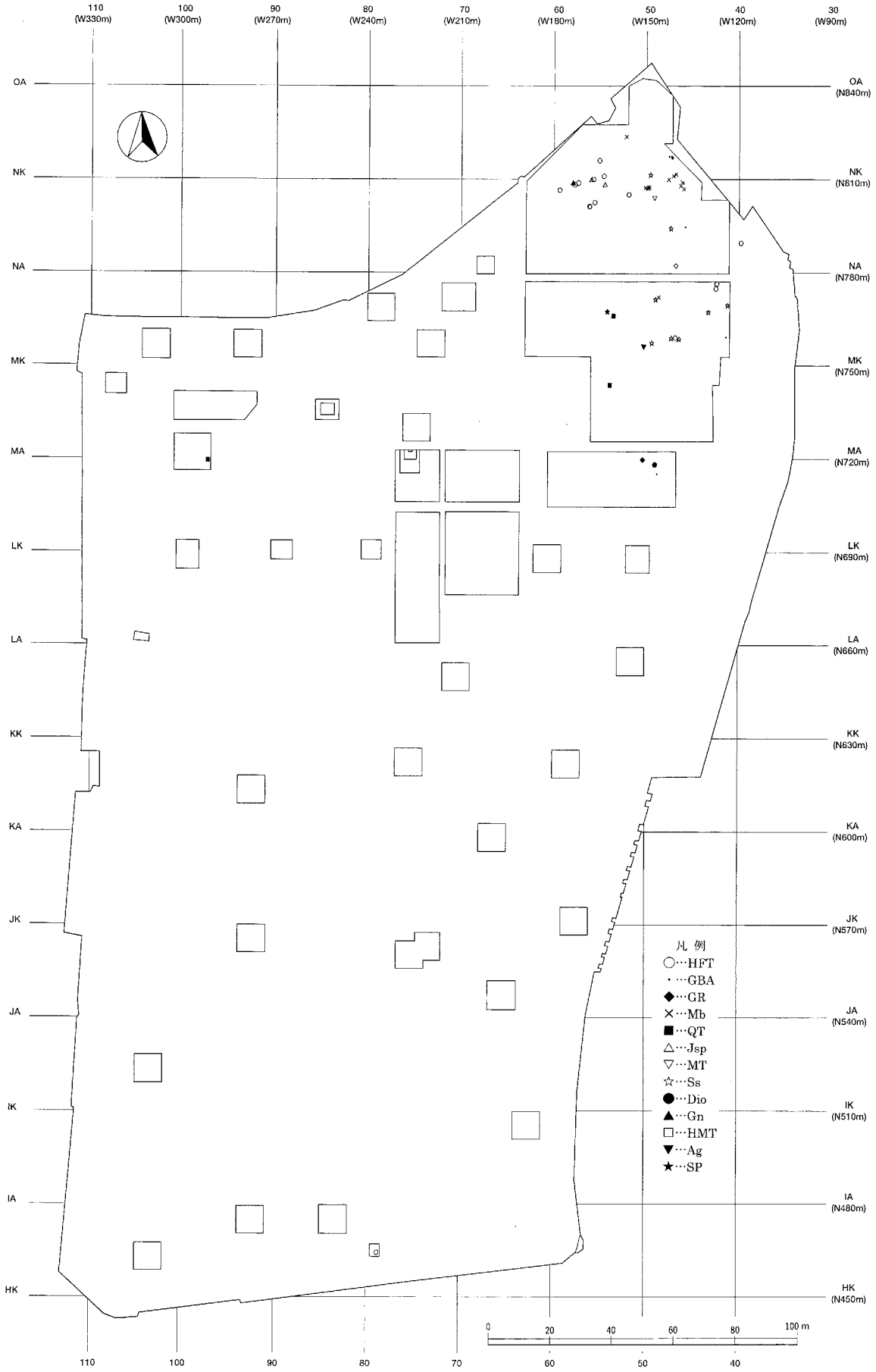
第55図　第２文化層　石材別分布図（BSh/Ob）



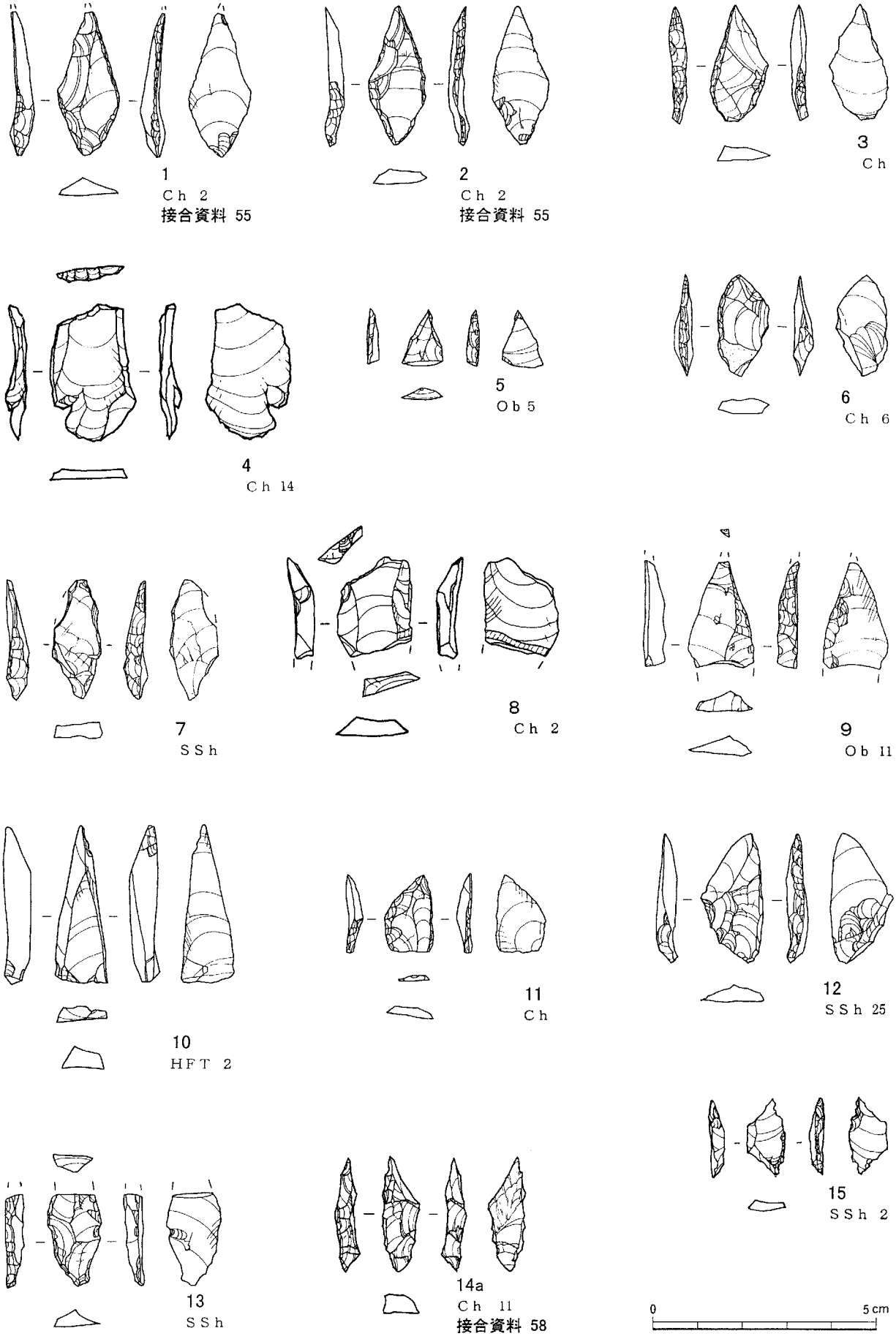
第56図　第２文化層　石材別分布図（Ch）



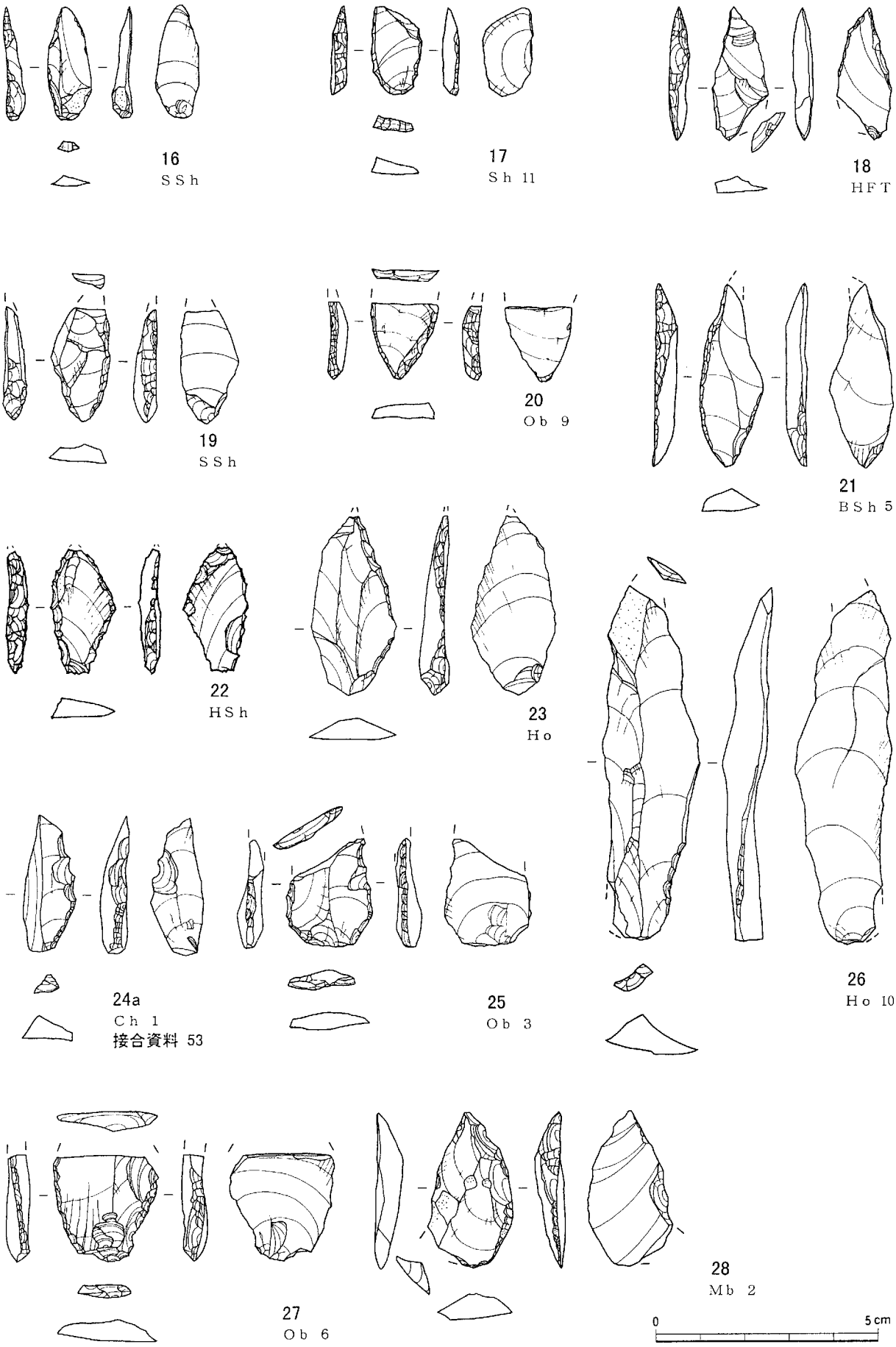
第57図　第２文化層　石材別分布図（Ho）



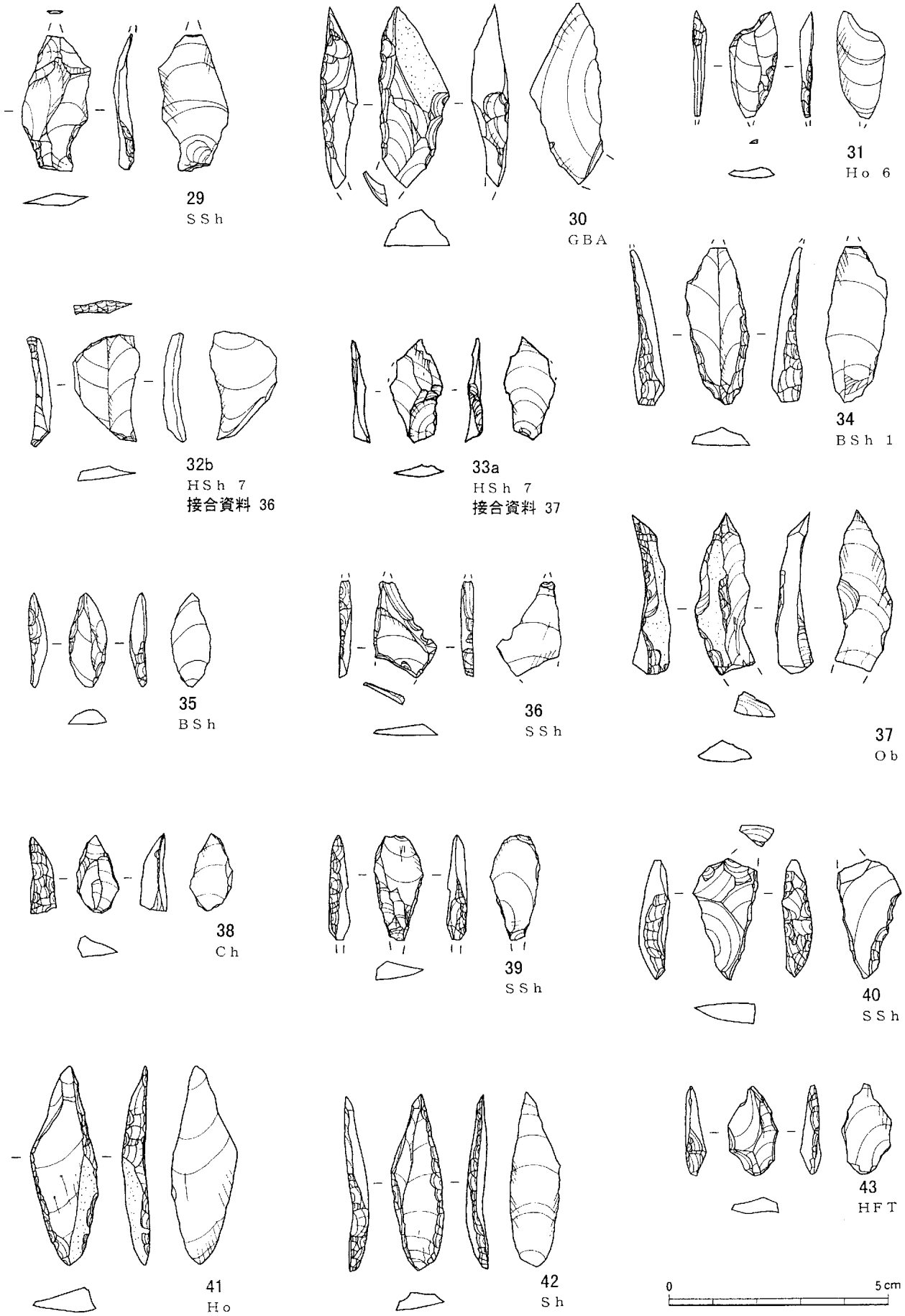
第58図　第２文化層　石材別分布図（単独石材／その他の石材）



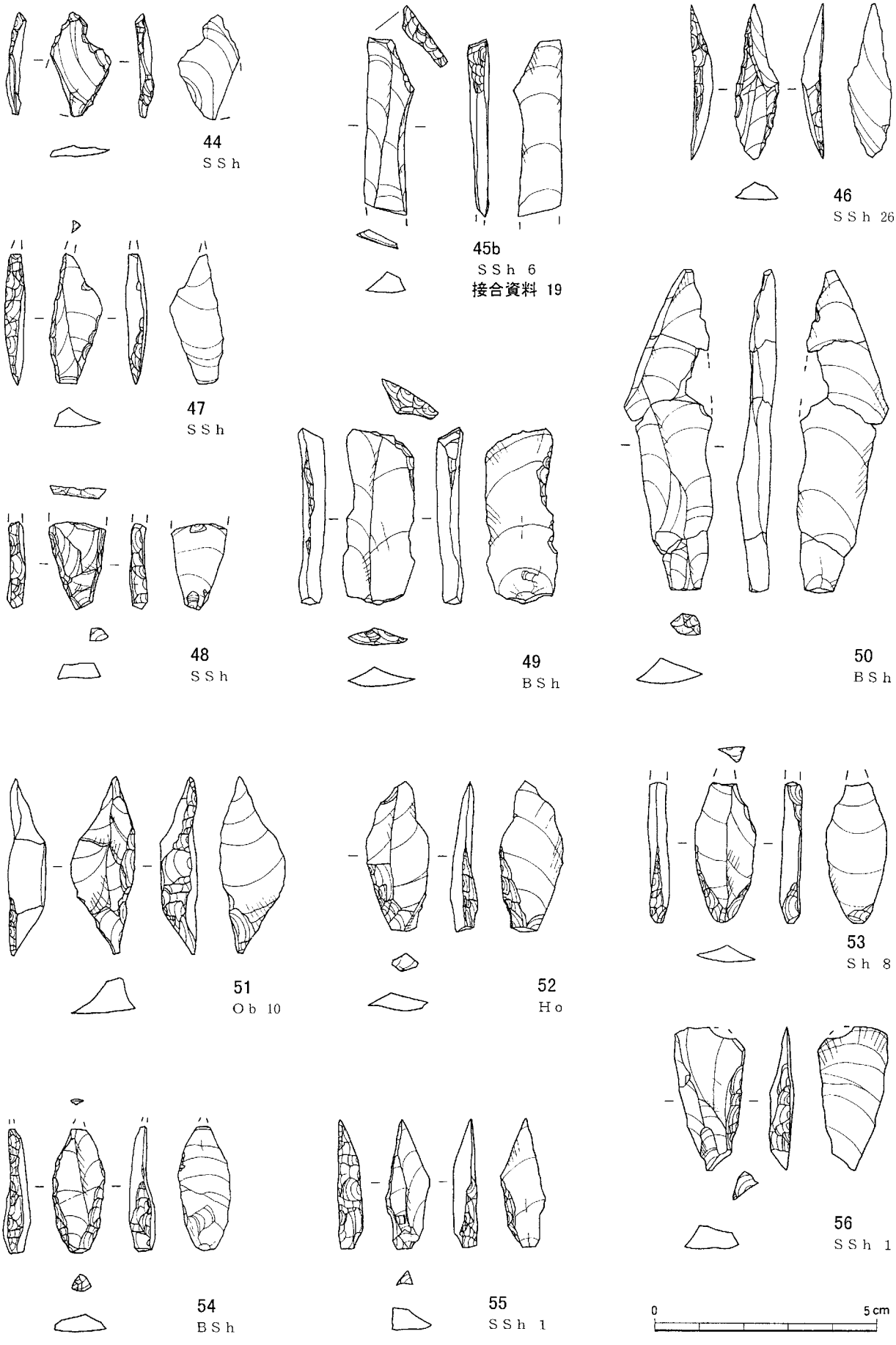
第59図　第２文化層　石器実測図（１）－ナイフ形石器



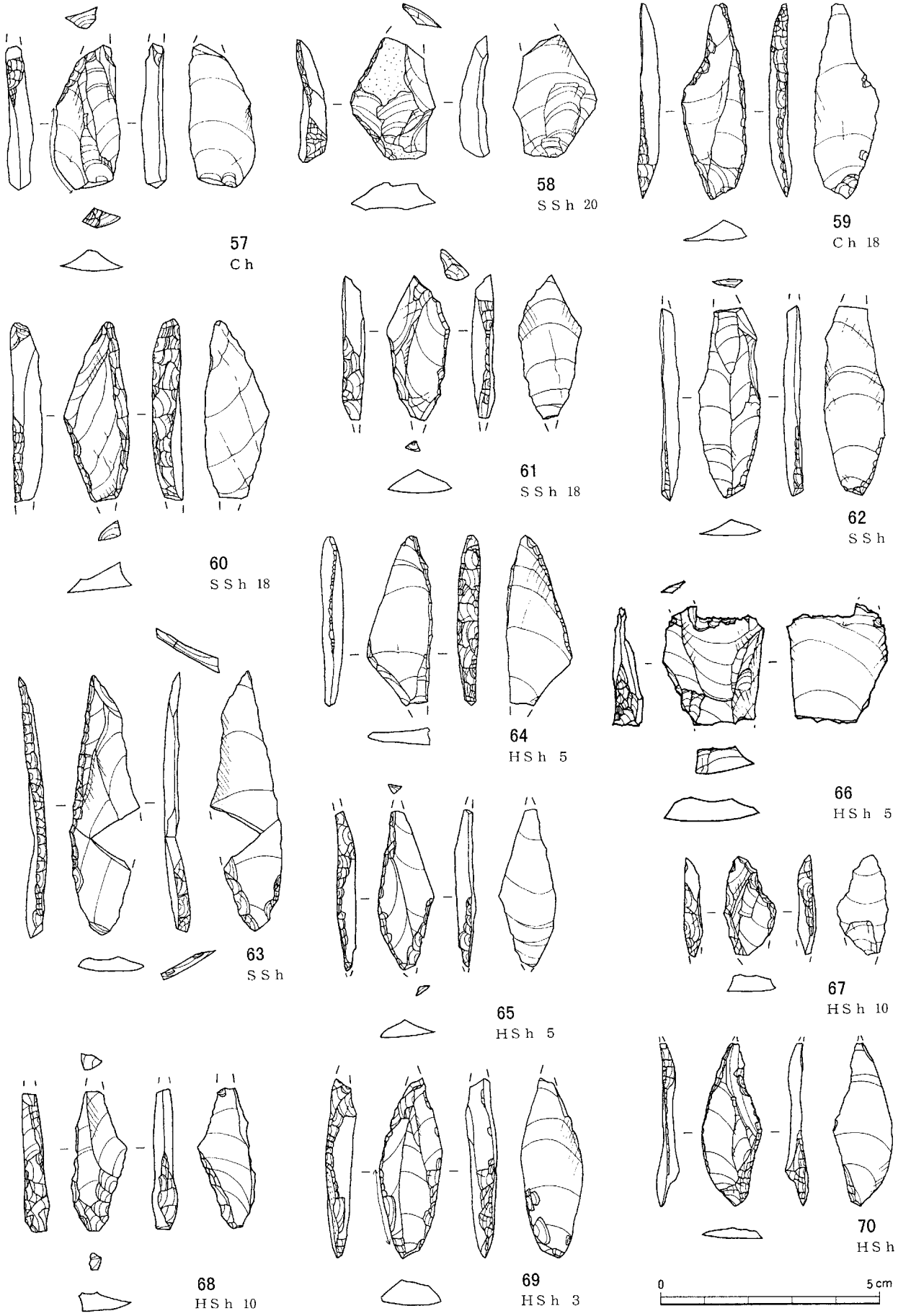
第60図　第２文化層　石器実測図（２）－ナイフ形石器



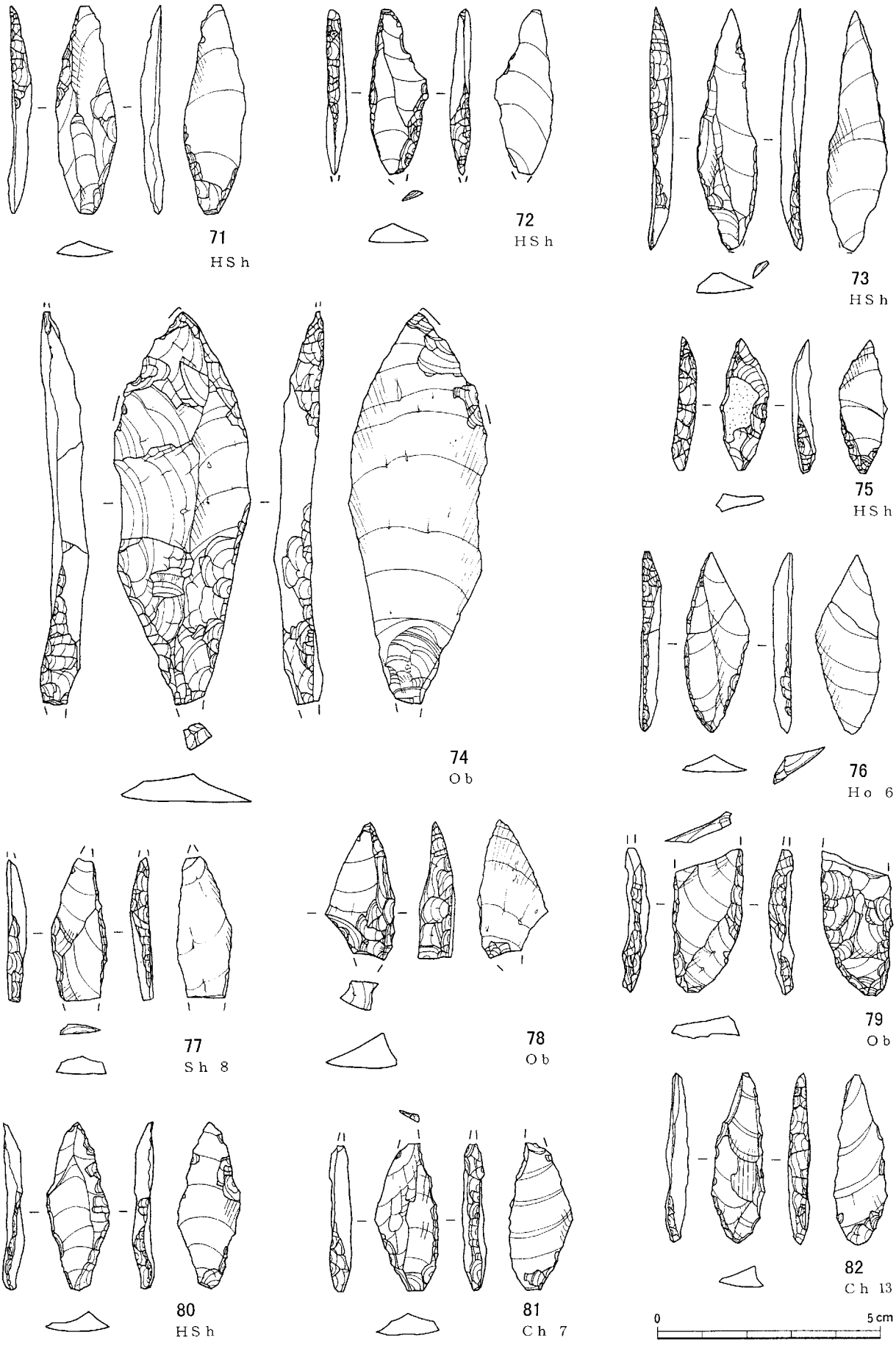
第61図　第２文化層　石器実測図（３）－ナイフ形石器



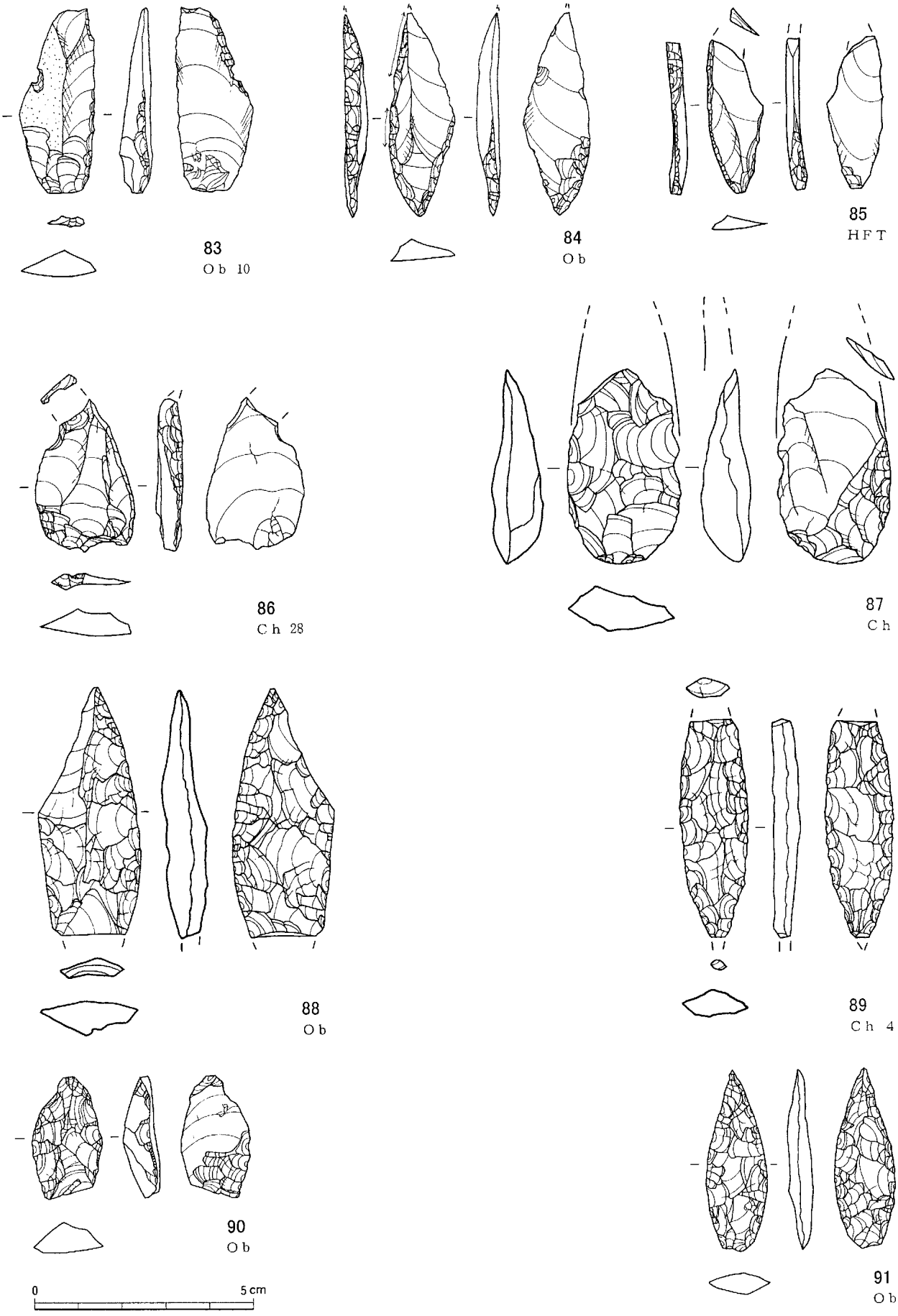
第62図　第２文化層　石器実測図（４）－ナイフ形石器



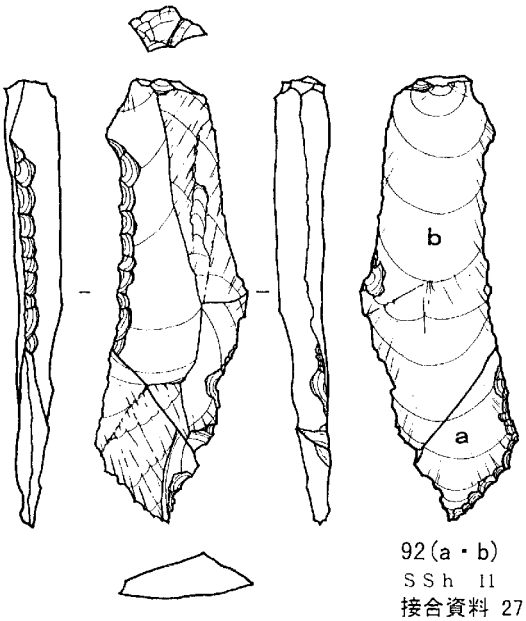
第63図　第２文化層　石器実測図（５）－ナイフ形石器



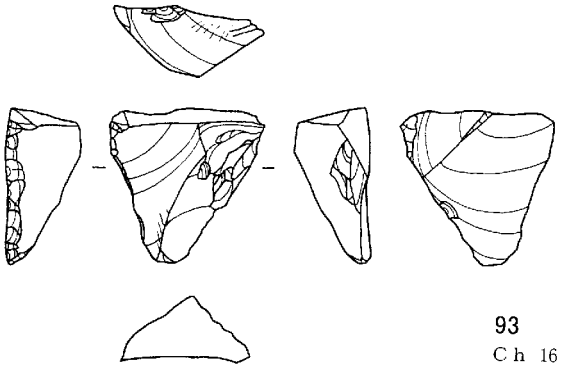
第64図　第２文化層　石器実測図（６）－ナイフ形石器



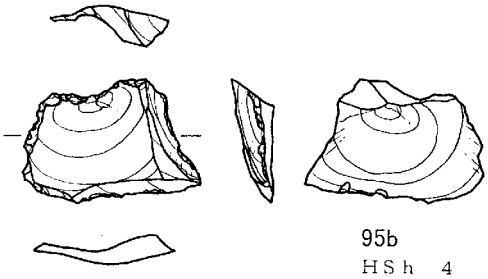
第65図　第２文化層　石器実測図（７）－ナイフ形石器／尖頭器



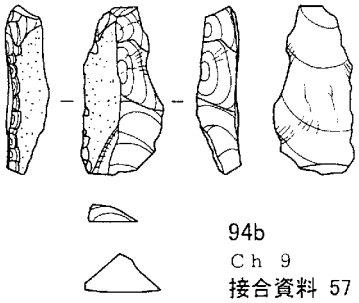
92(a・b)
ＳＳｈ　11
接合資料 27



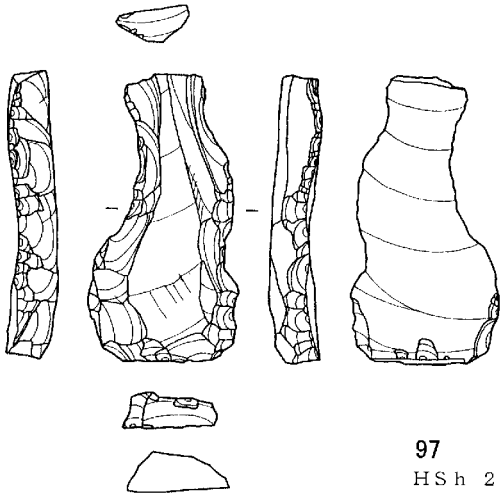
93
Ｃｈ 16



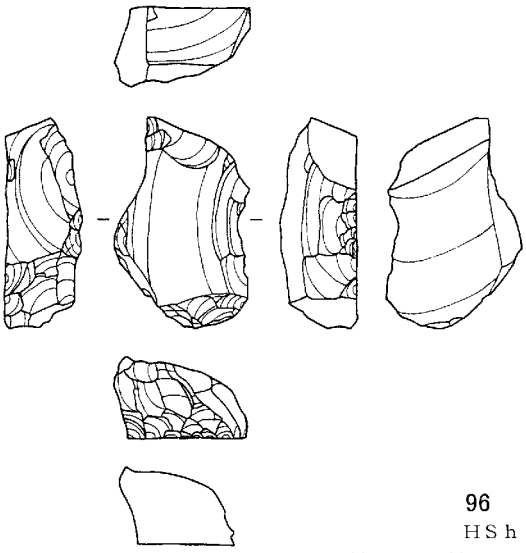
95b
ＨＳｈ　4
接合資料 32



94b
Ｃｈ 9
接合資料 57



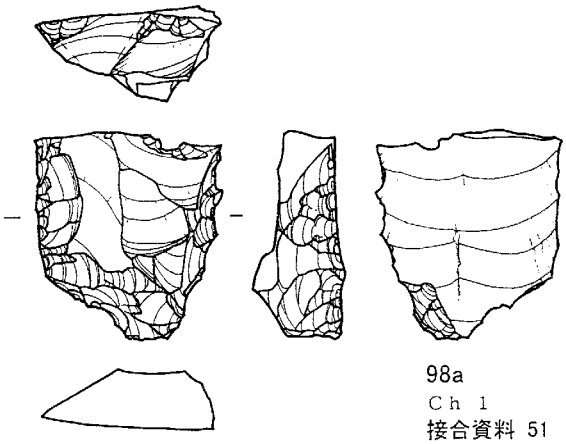
97
ＨＳｈ 2



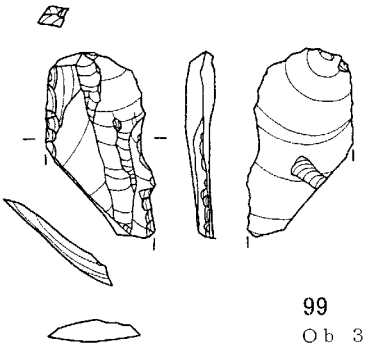
96
ＨＳｈ

0　5cm

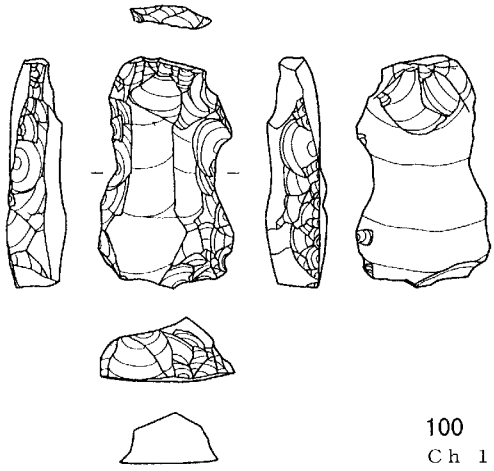
第66図　第２文化層　石器実測図（８）－削器



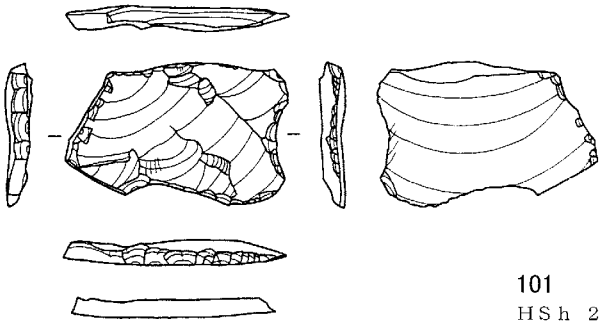
98a
Ch 1
接合資料 51



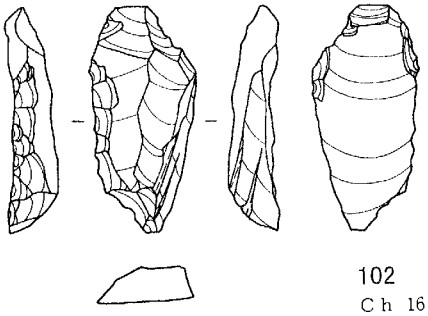
99
Ob 3



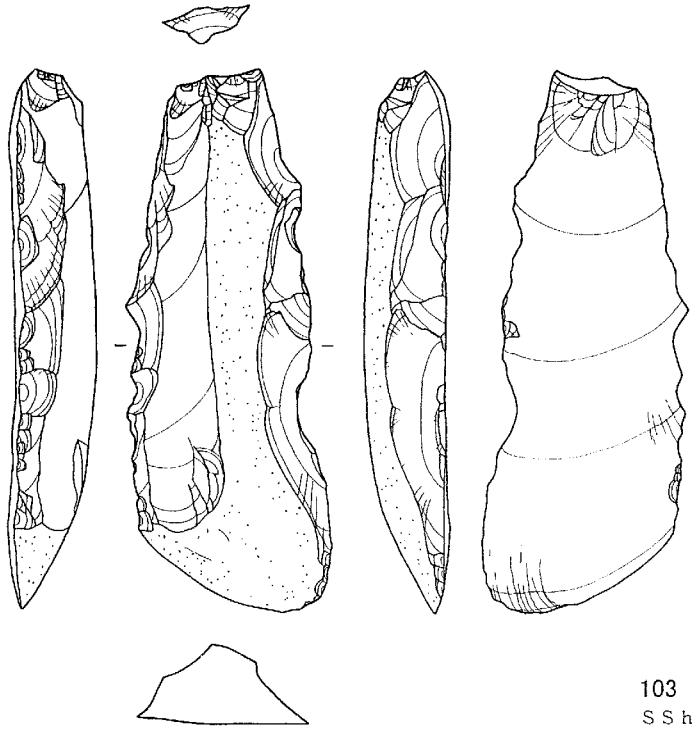
100
Ch 1



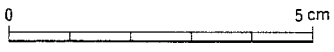
101
HSh 2



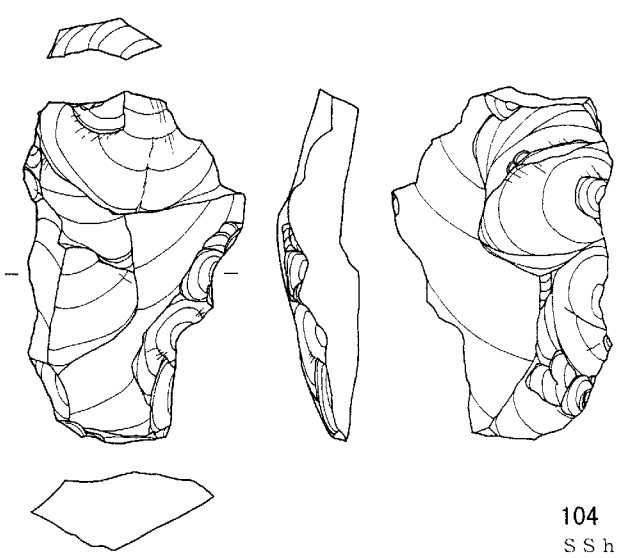
102
Ch 16



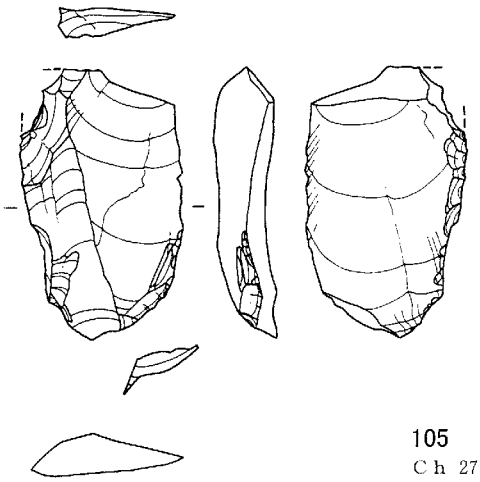
103
SSh



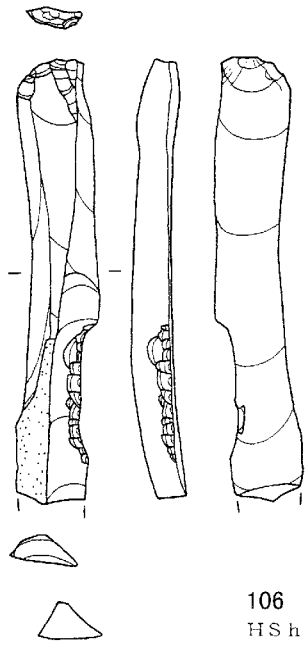
第67図　第２文化層　石器実測図（９）－削器



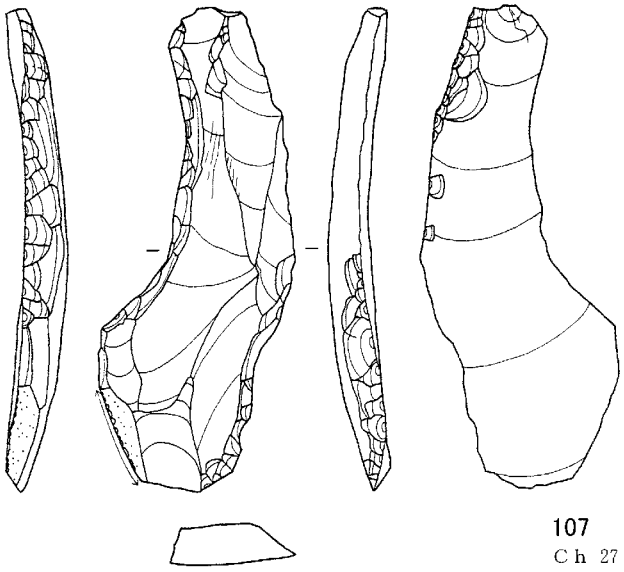
104
S S h



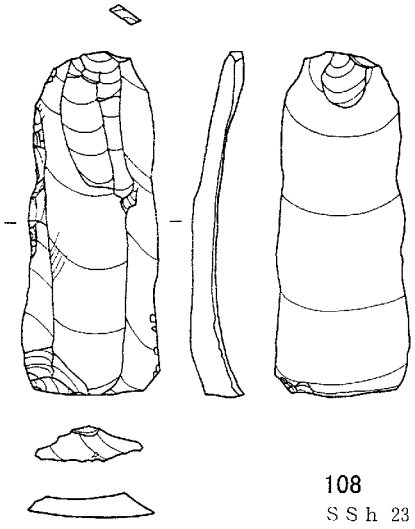
105
C h 27



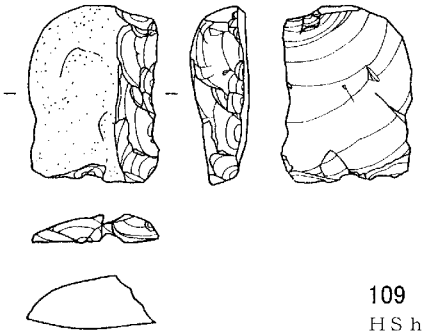
106
H S h



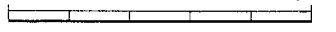
107
C h 27



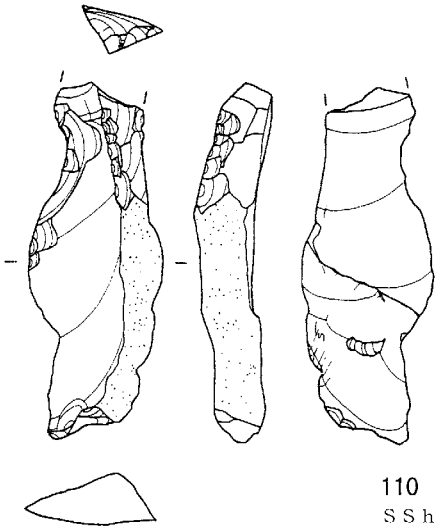
108
S S h 23

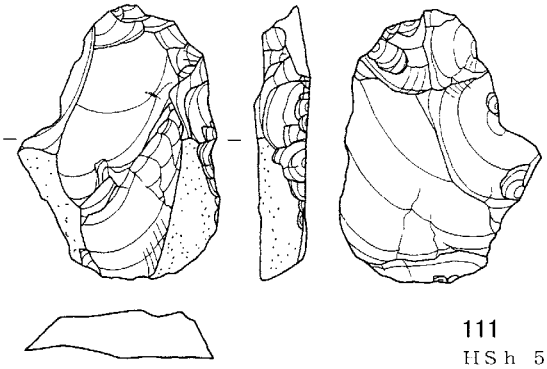


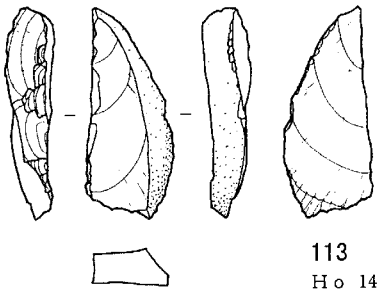
109
H S h

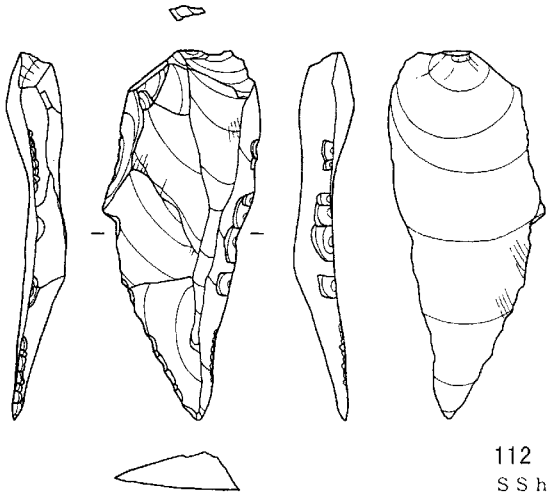


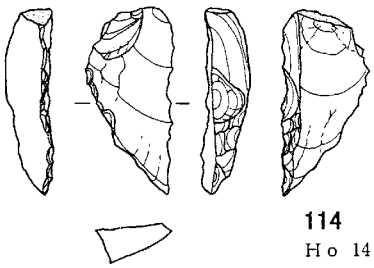
第68図　第２文化層　石器実測図（10）－削器

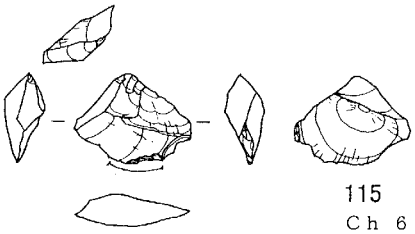


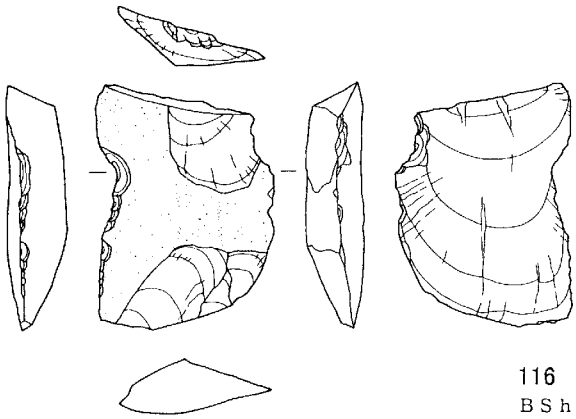




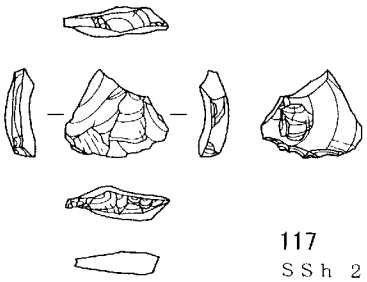




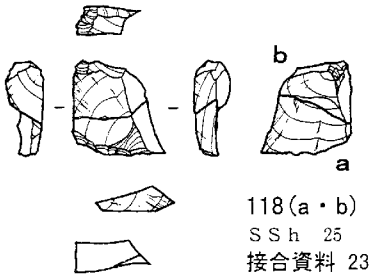




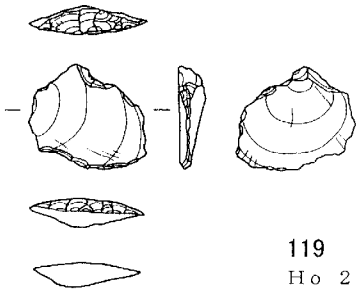
第69図　第２文化層　石器実測図（11）－削器／掻器



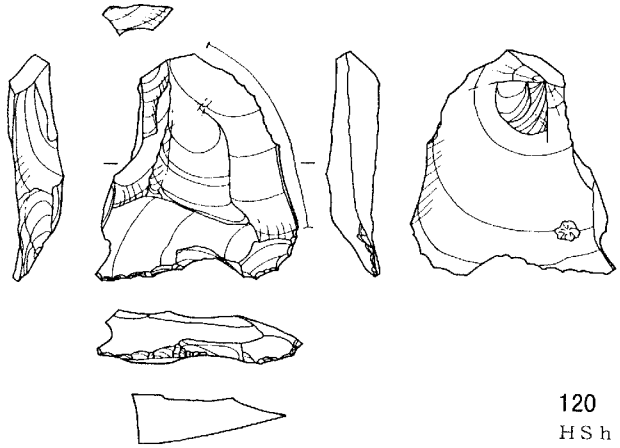
117
SSh 2



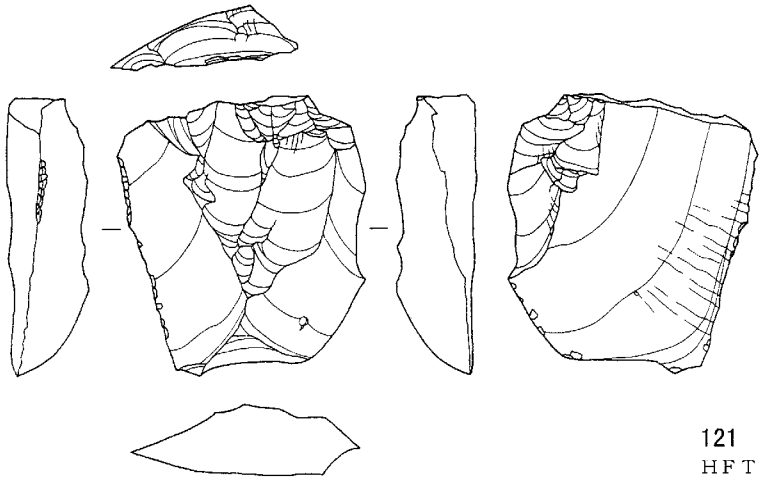
118(a・b)
SSh 25
接合資料 23



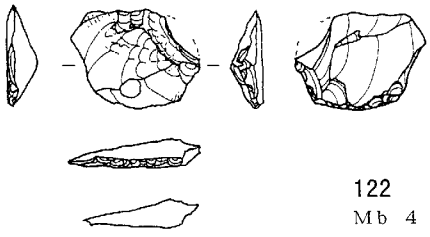
119
Ho 2



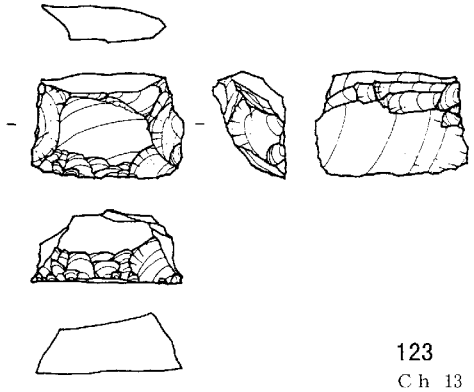
120
HSh



121
HFT



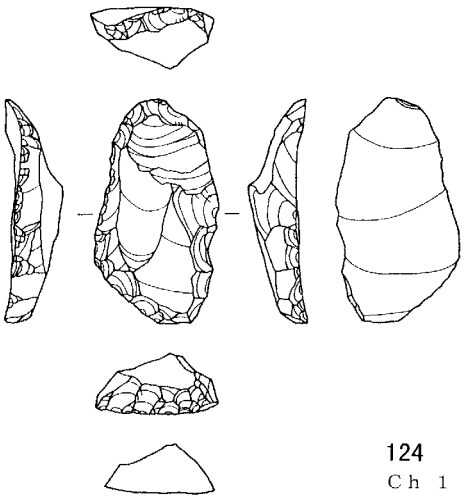
122
Mb 4



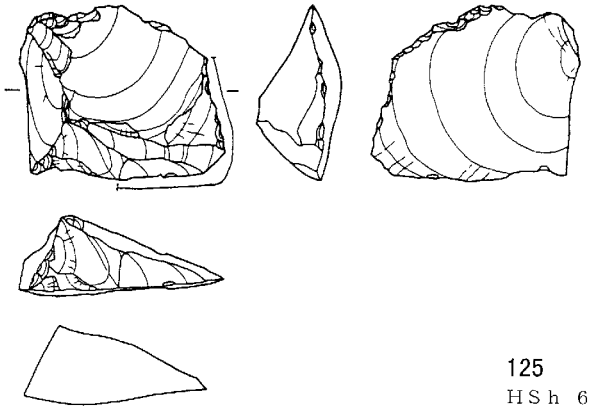
123
Ch 13

0 5cm

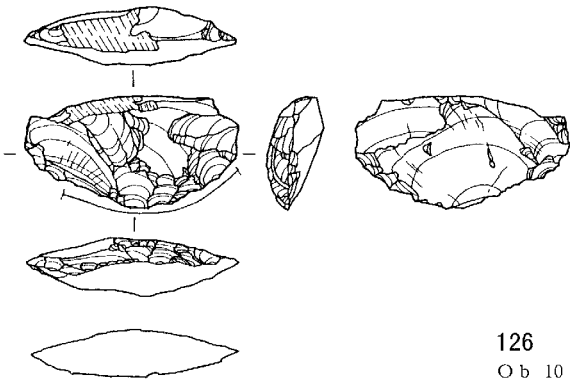
第70図　第２文化層　石器実測図（12）－掻器



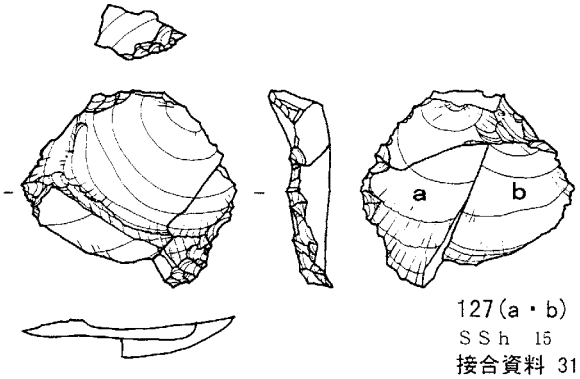
124
Ch 1



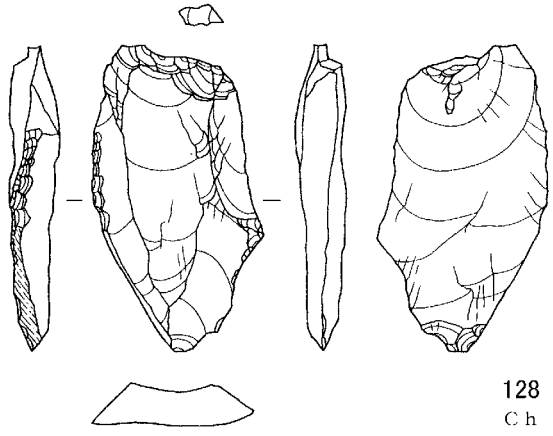
125
HSh 6



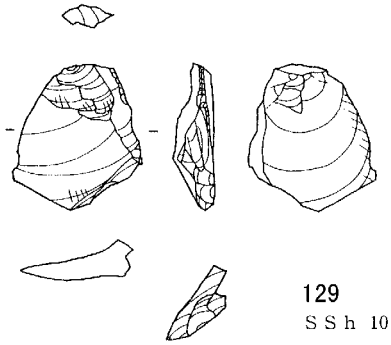
126
Ob 10



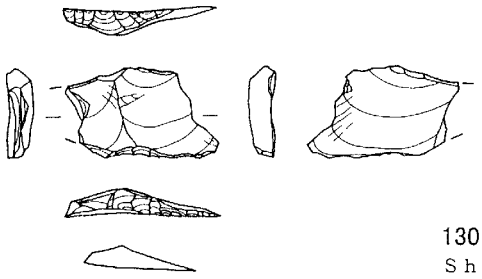
127(a・b)
SSh 15
接合資料 31



128
Ch



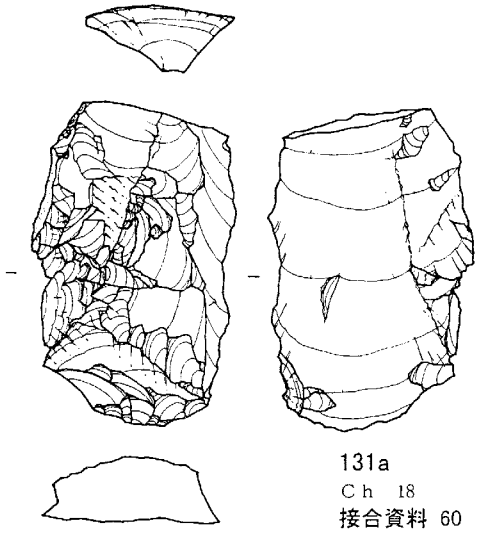
129
SSh 10



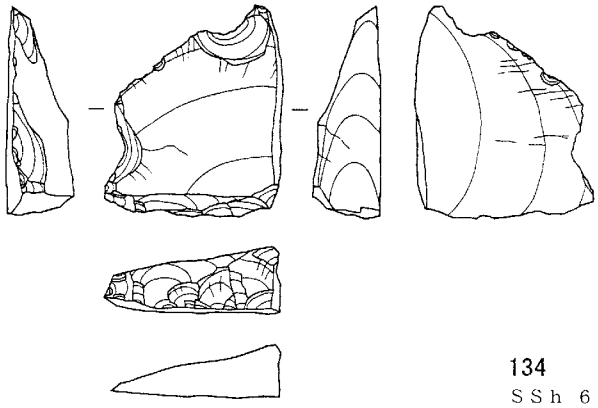
130
Sh

0 5cm

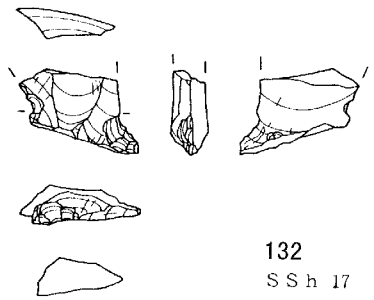
第71図　第２文化層　石器実測図（13）－掻器



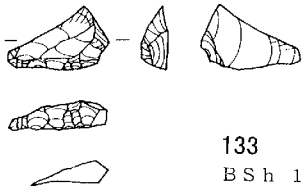
131a
Ch 18
接合資料 60



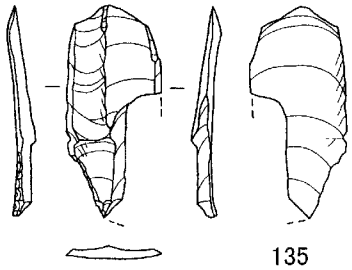
134
SSh 6



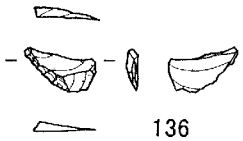
132
SSh 17



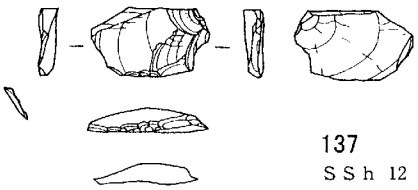
133
BSh 1



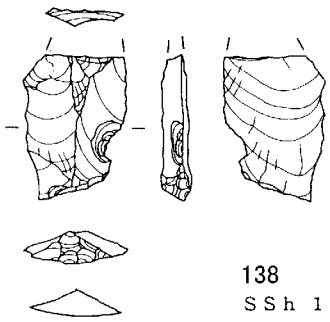
135
HSh 3



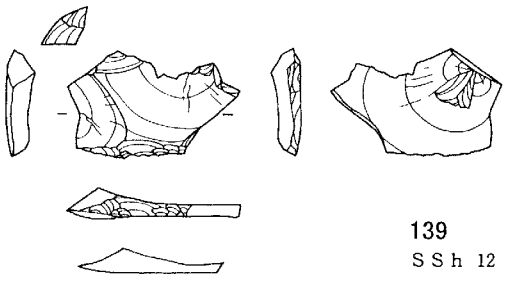
136
SSh 12



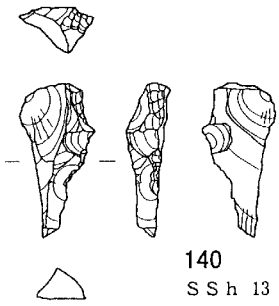
137
SSh 12



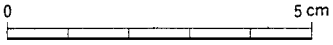
138
SSh 1



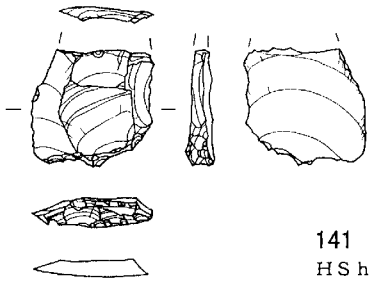
139
SSh 12



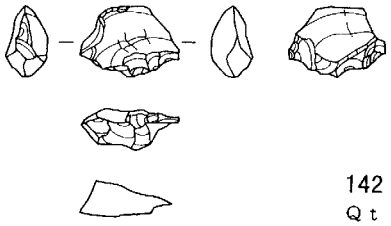
140
SSh 13



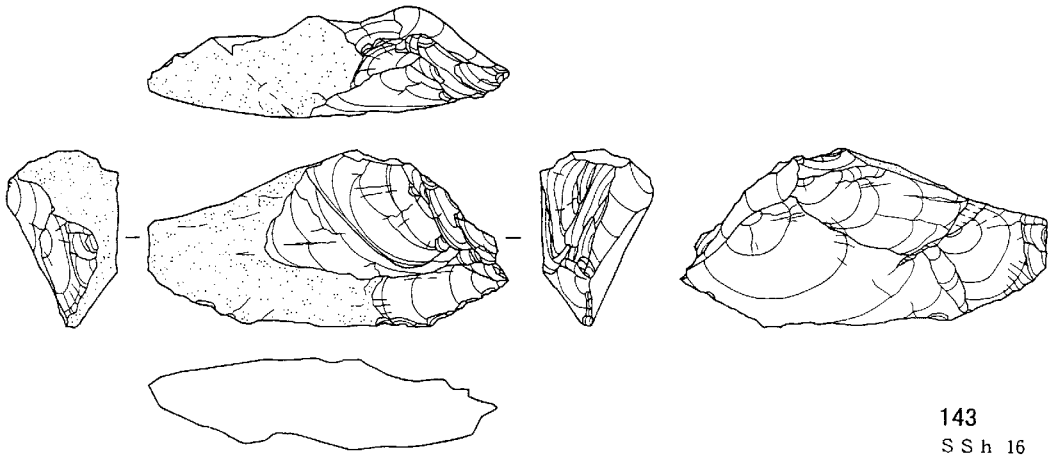
第72図　第２文化層　石器実測図（14）－掻器



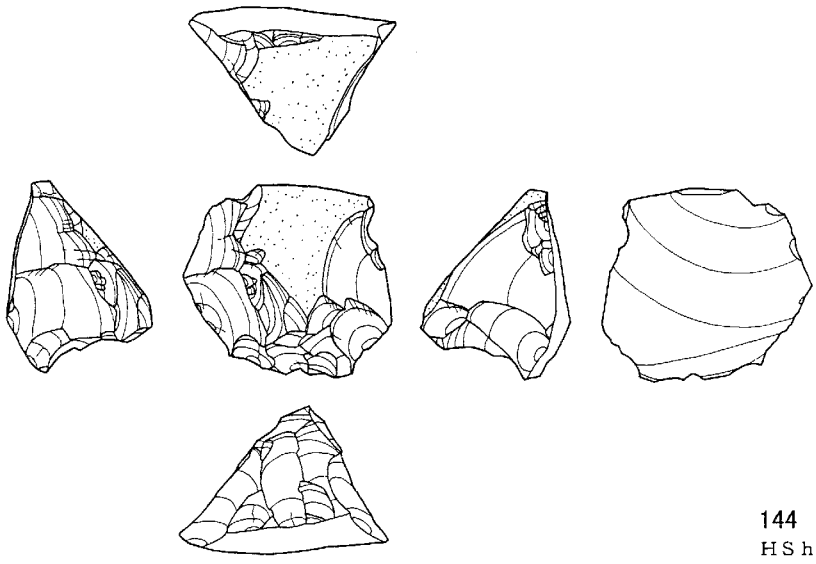
141
HSh



142
Qt



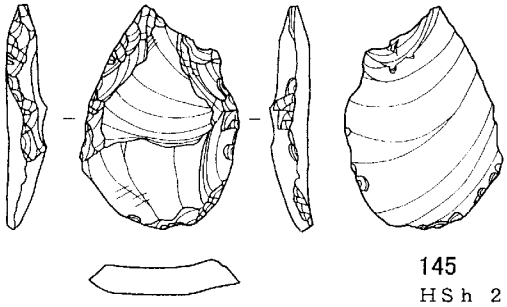
143
SSh 16



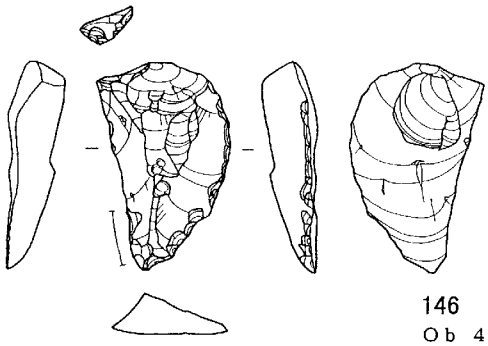
144
HSh

0 5cm

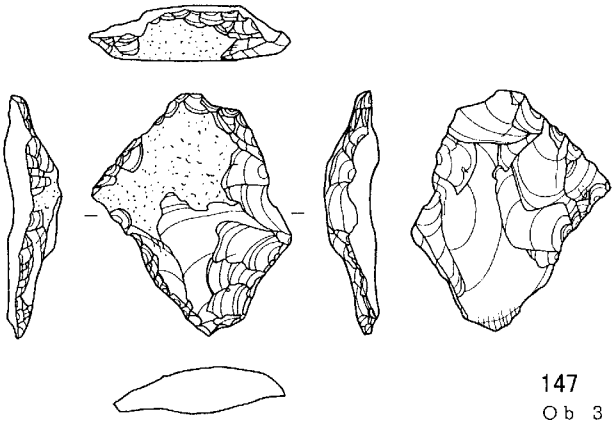
第73図　第２文化層　石器実測図（15）－掻器／円形掻器



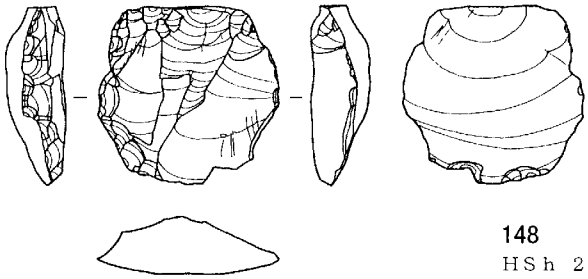
145
HSh 2



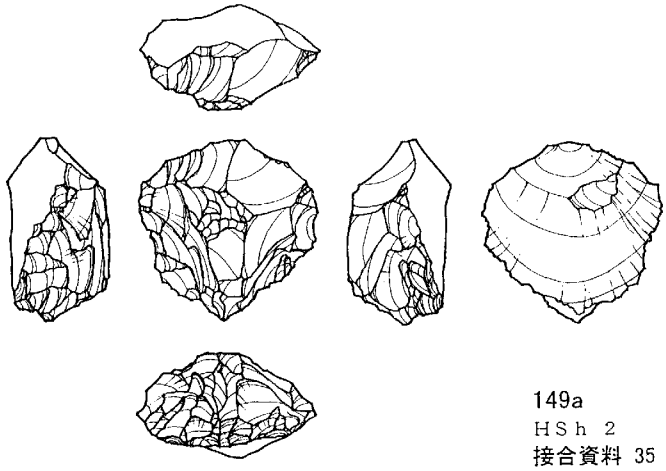
146
Ob 4



147
Ob 3



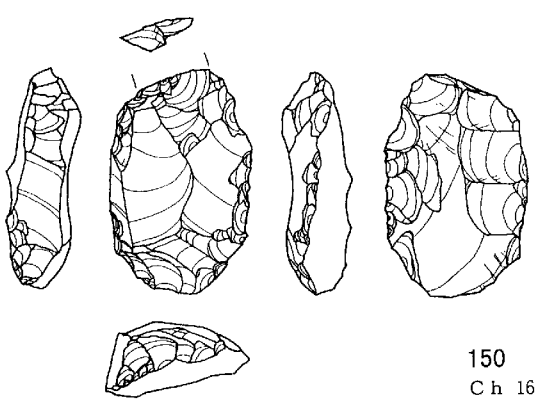
148
HSh 2



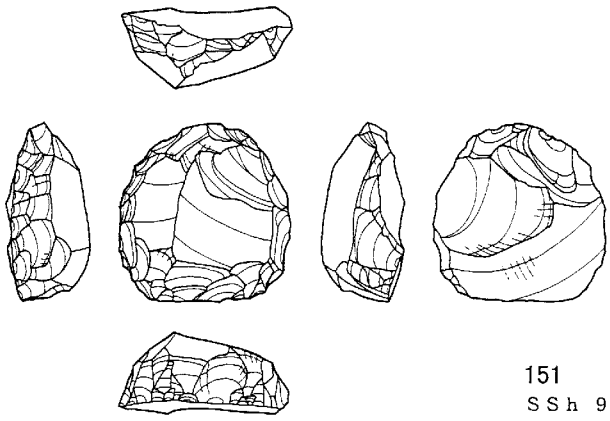
149a
HSh 2
接合資料 35

0 5cm

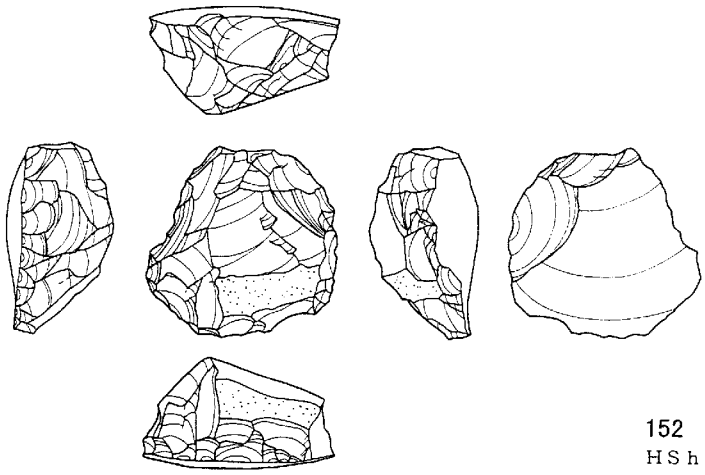
第74図　第２文化層　石器実測図（16）－円形掻器



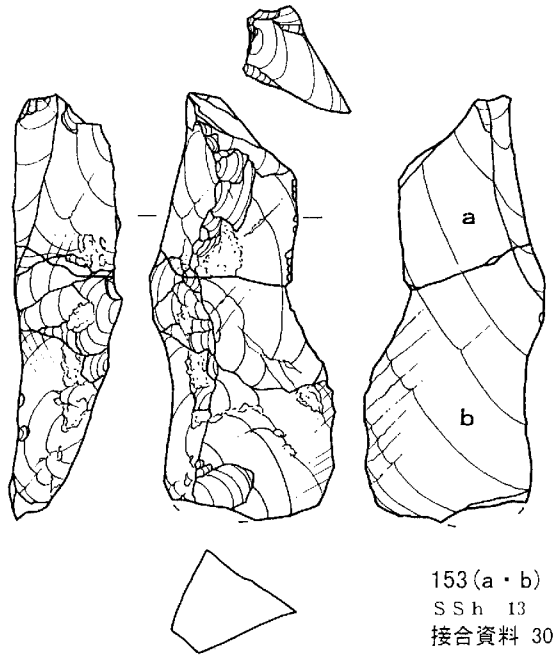
150
Ｃｈ 16



151
ＳＳｈ 9



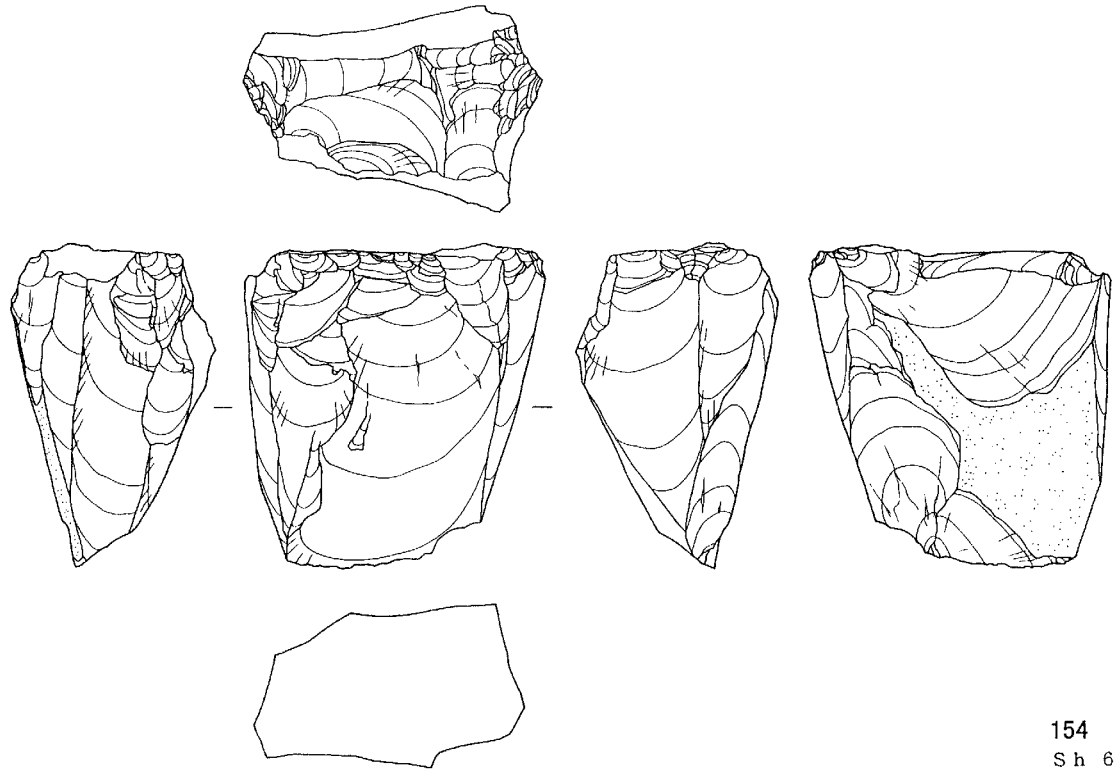
152
ＨＳｈ

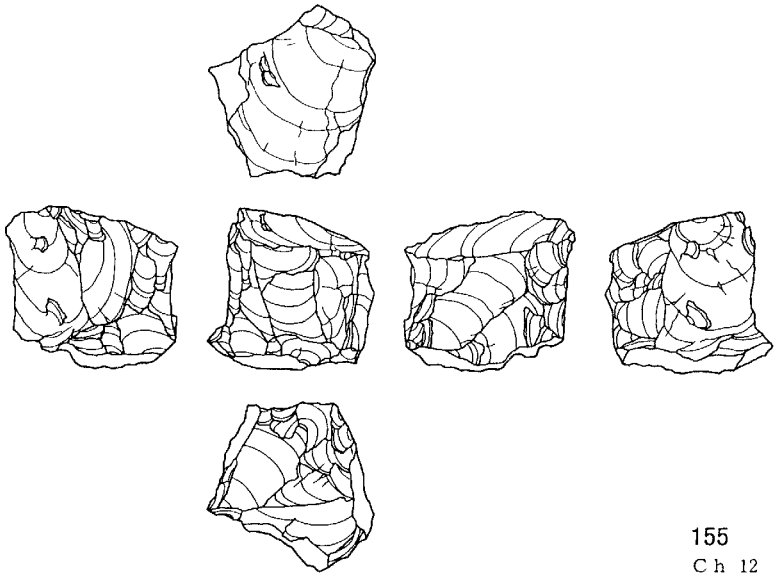


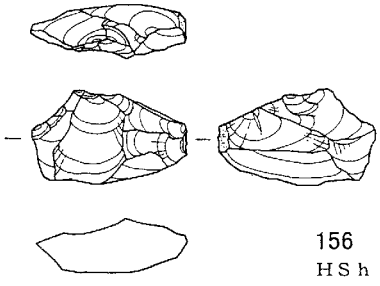
153(a・b)
ＳＳｈ 13
接合資料 30

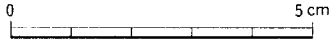
0 5cm

第75図　第２文化層　石器実測図（17）－円形掻器／彫器

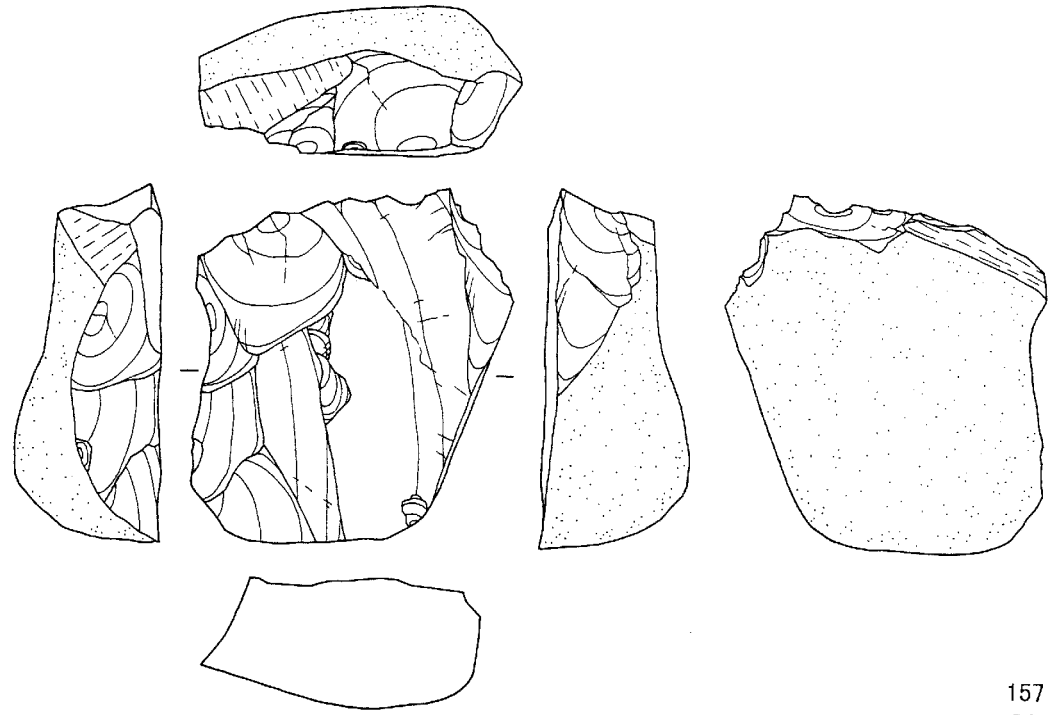




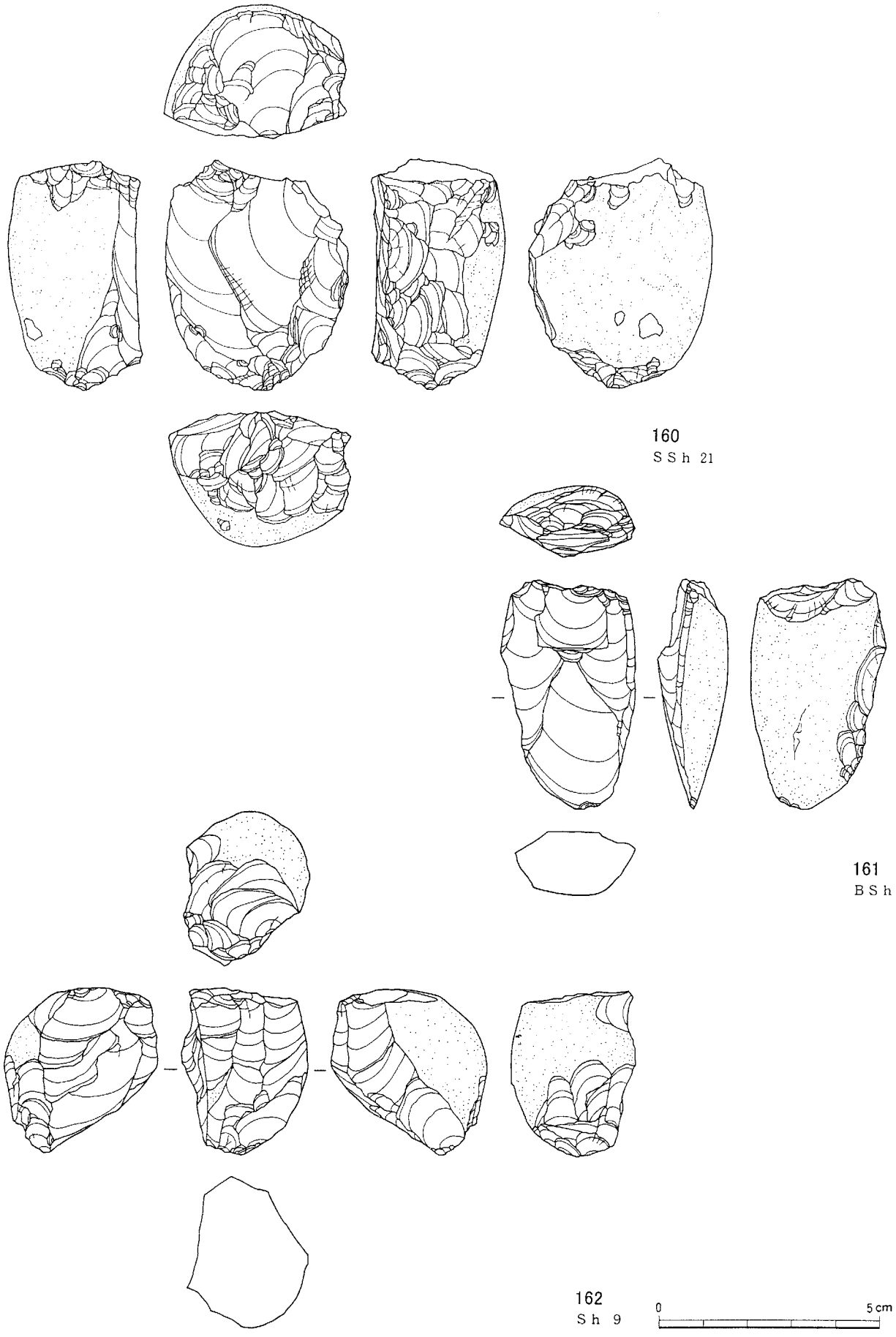




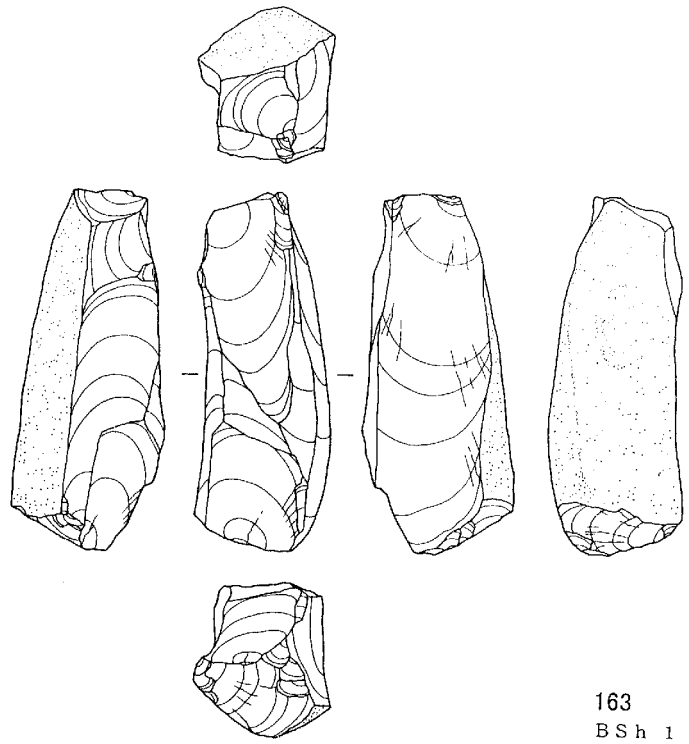
第76図　第２文化層　石器実測図（18）－石核



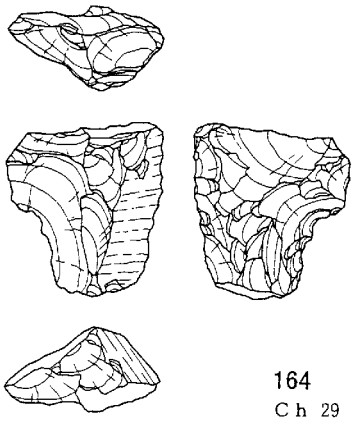
第77図　第２文化層　石器実測図（19）－石核



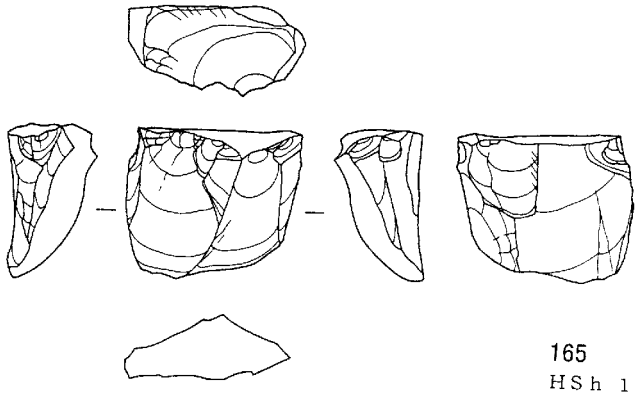
第78図　第２文化層　石器実測図（20）－石核



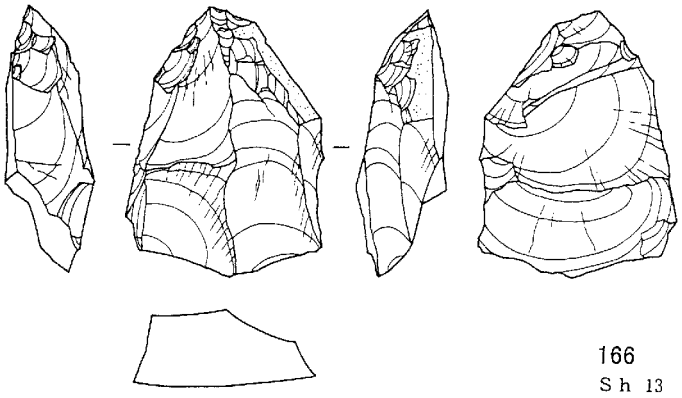
163
BSh 1



164
Ch 29



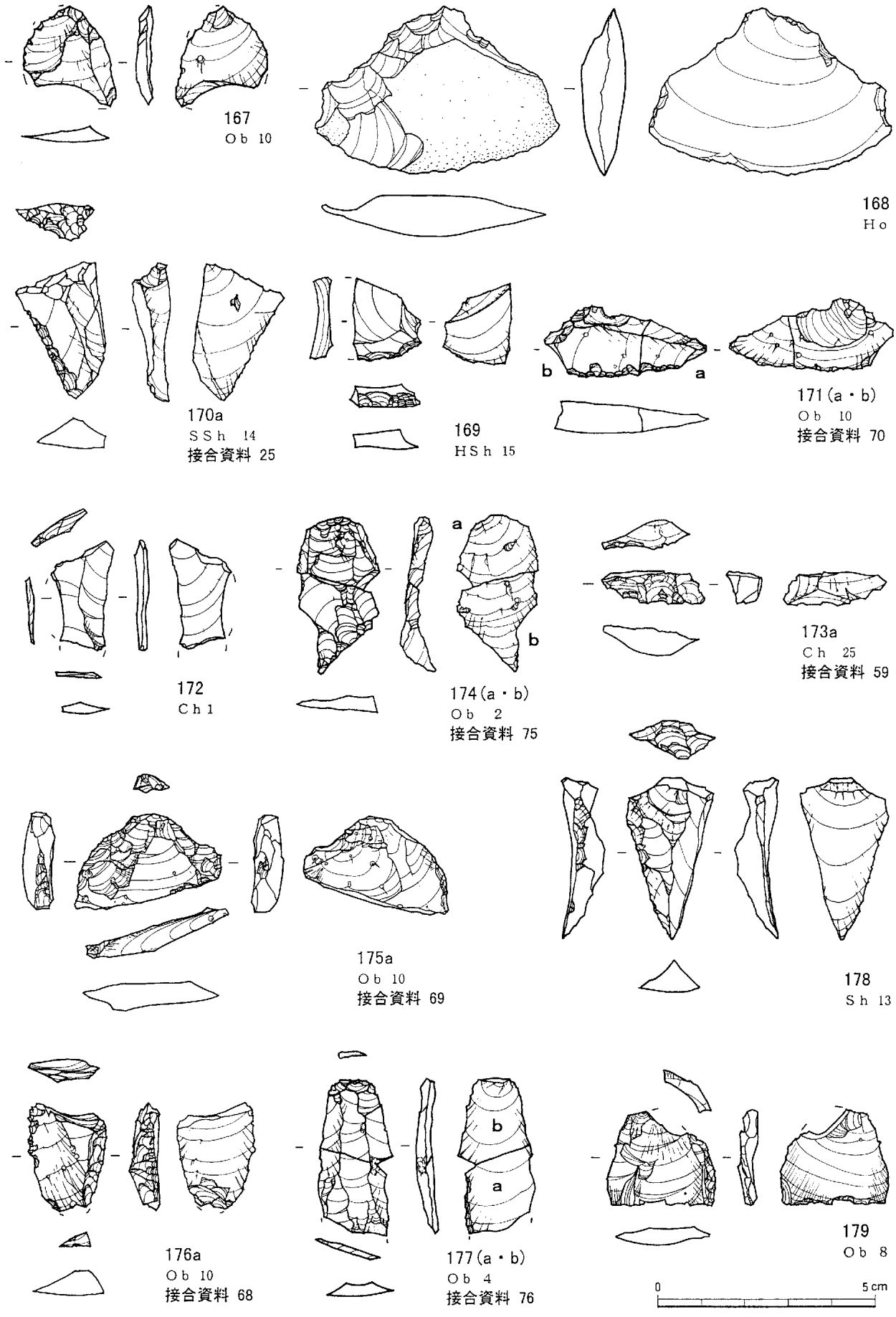
165
HSh 1



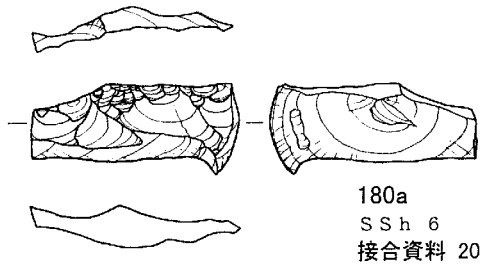
166
Sh 13

0 5cm

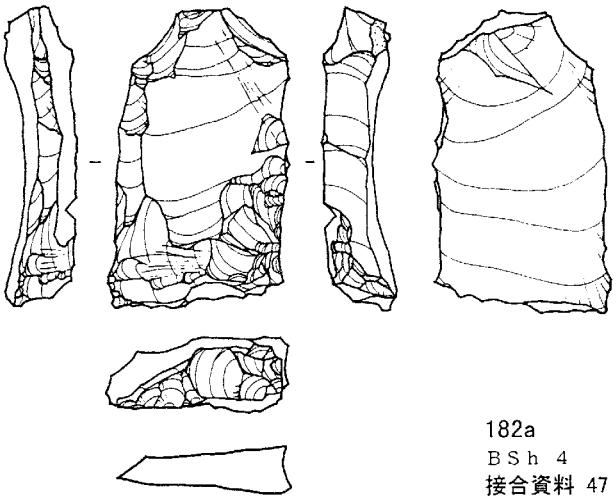
第79図　第２文化層　石器実測図（21）－石核／剥片



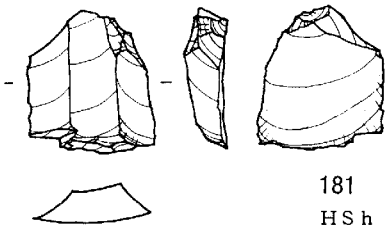
第80図　第２文化層　石器実測図（22）－二次加工



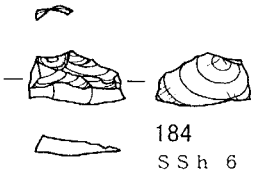
180a
SSh 6
接合資料 20



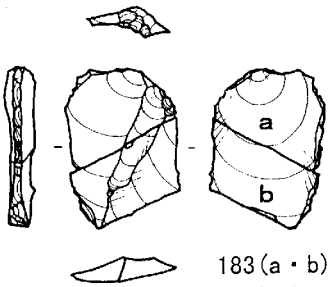
182a
BSh 4
接合資料 47



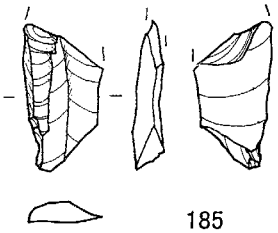
181
HSh



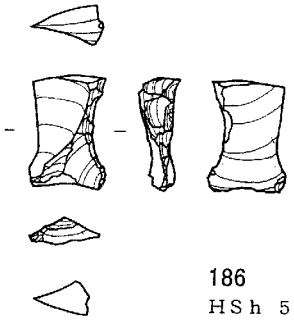
184
SSh 6
接合資料 20



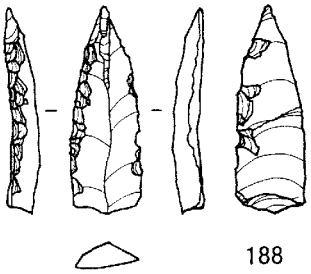
183(a・b)
SSh 1
接合資料 15



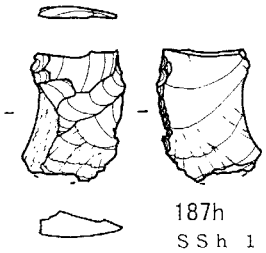
185
HSh 1



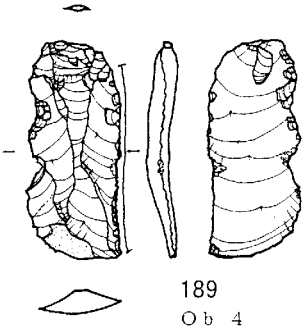
186
HSh 5



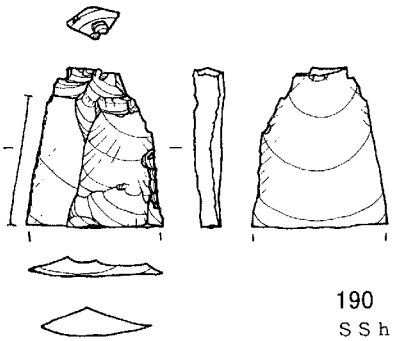
188
Ch 7



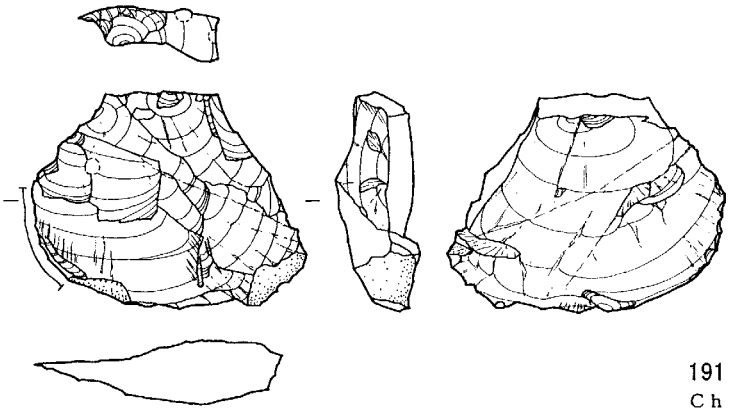
187h
SSh 1
接合資料 11



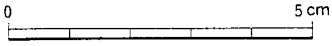
189
Ob 4
接合資料 76



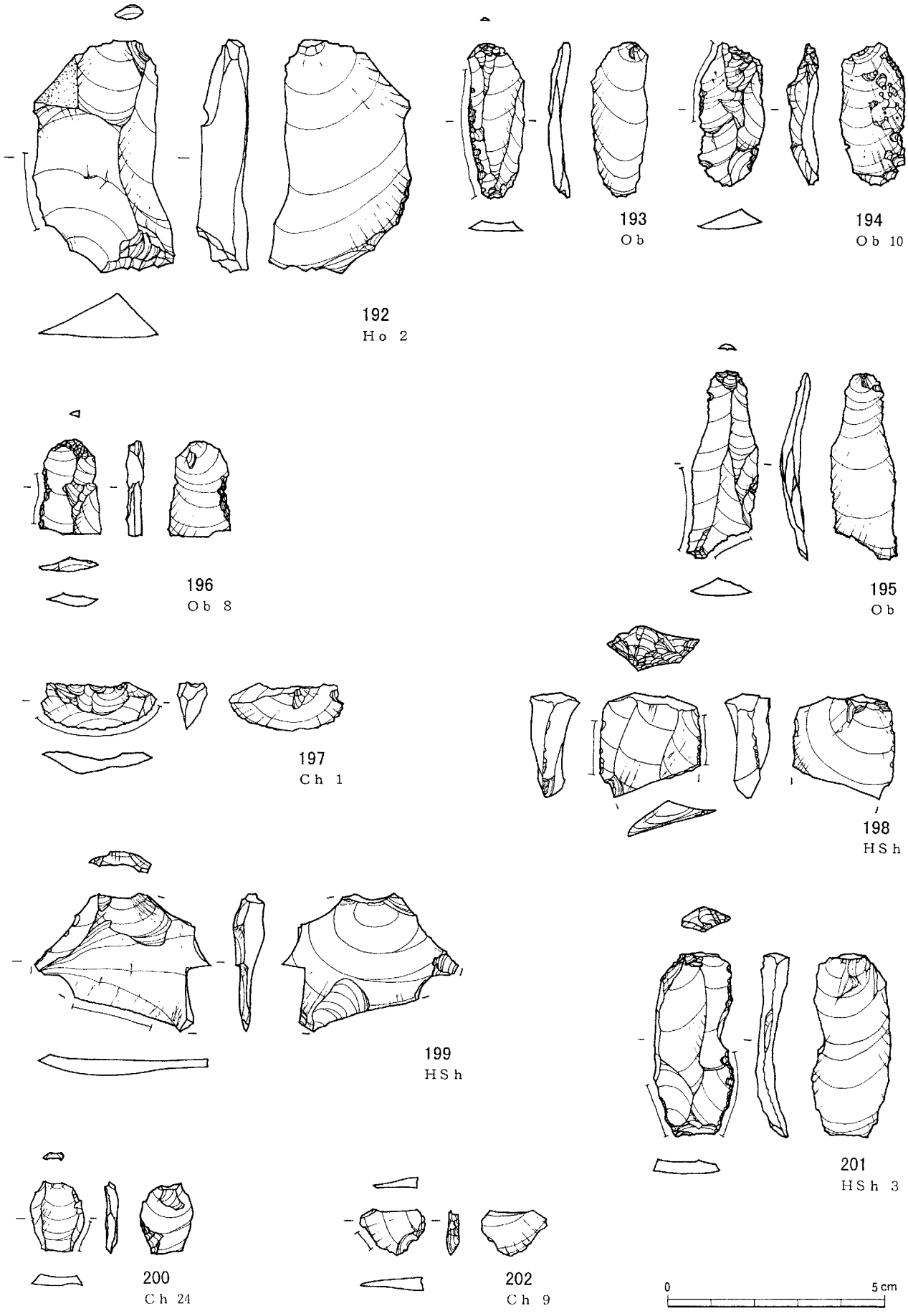
190
SSh



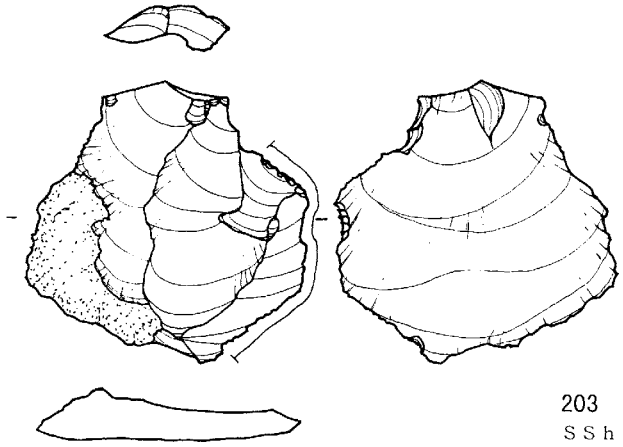
191
Ch



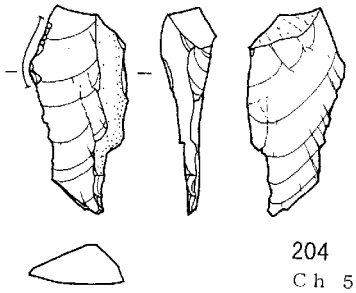
第81図　第２文化層　石器実測図（23）－掻器／二次加工／微細剥離痕／剥片



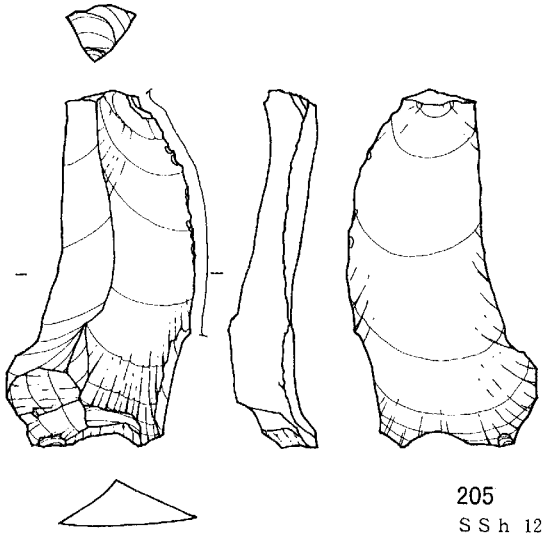
第82図　第２文化層　石器実測図（24）－微細剥離痕



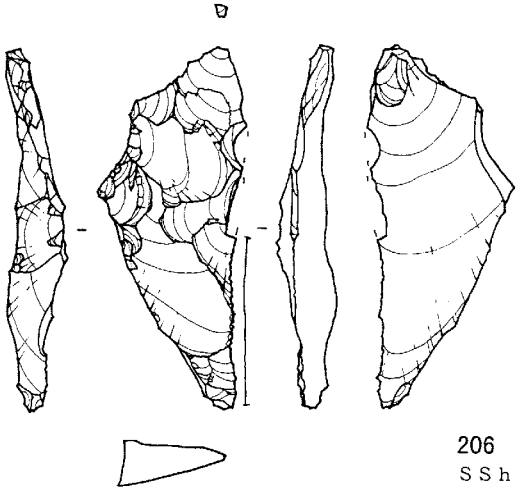
203
ＳＳｈ



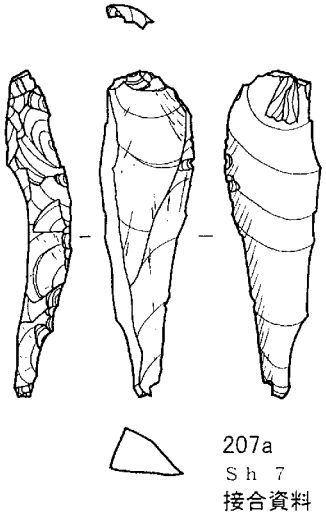
204
Ｃｈ 5



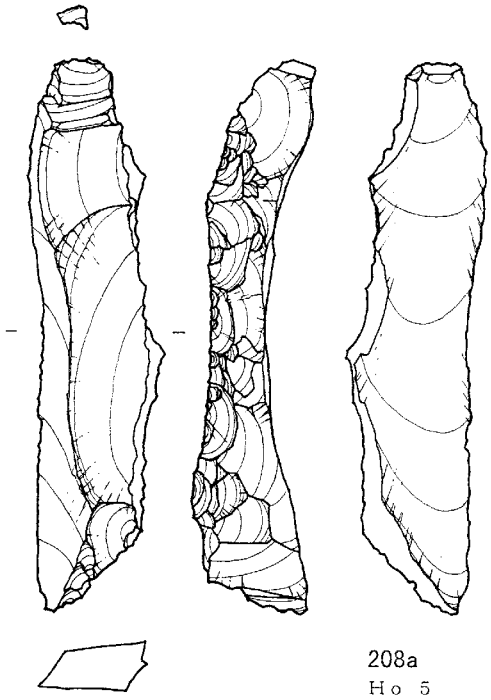
205
ＳＳｈ 12



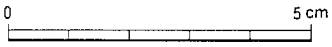
206
ＳＳｈ



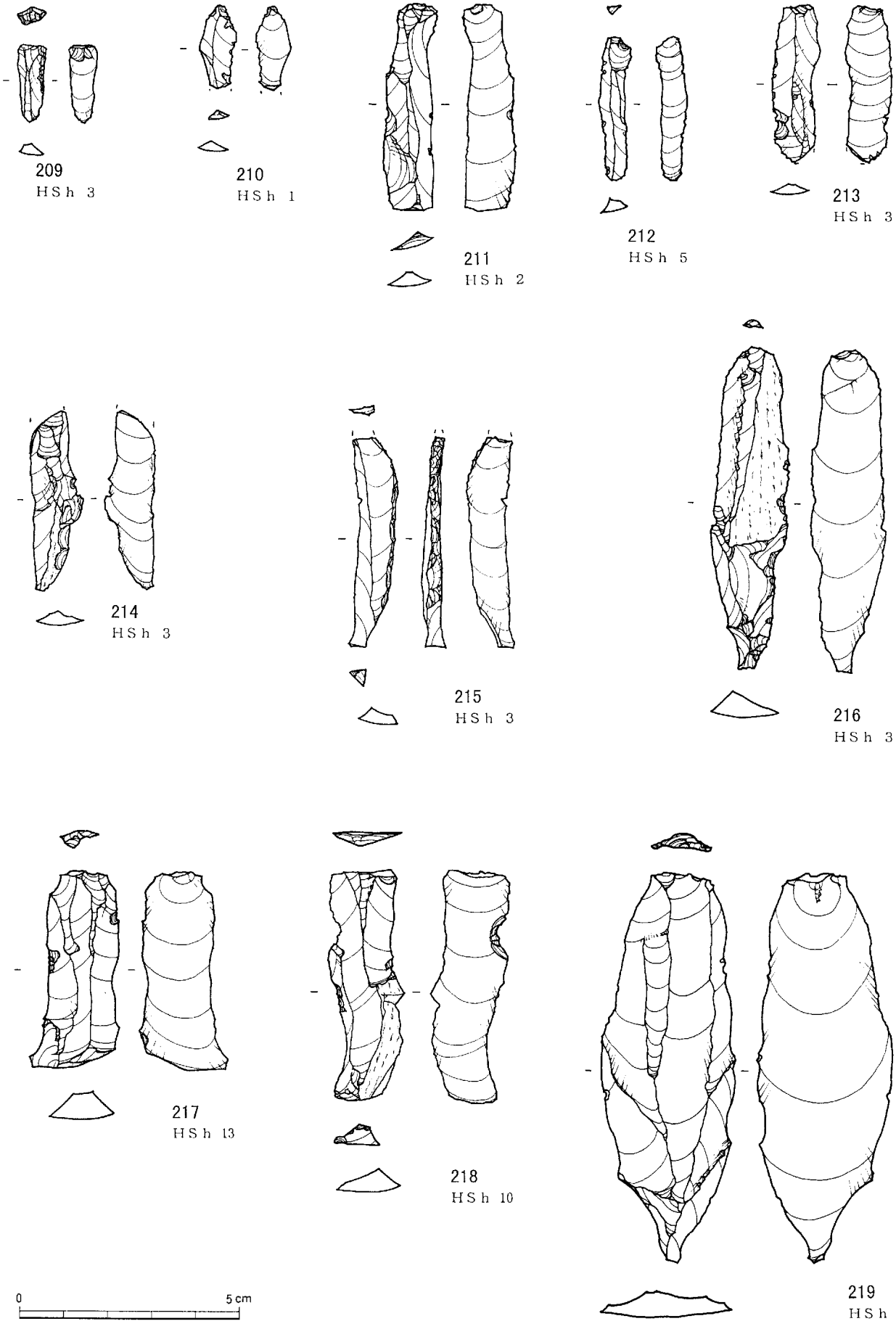
207a
Ｓｈ 7
接合資料 8



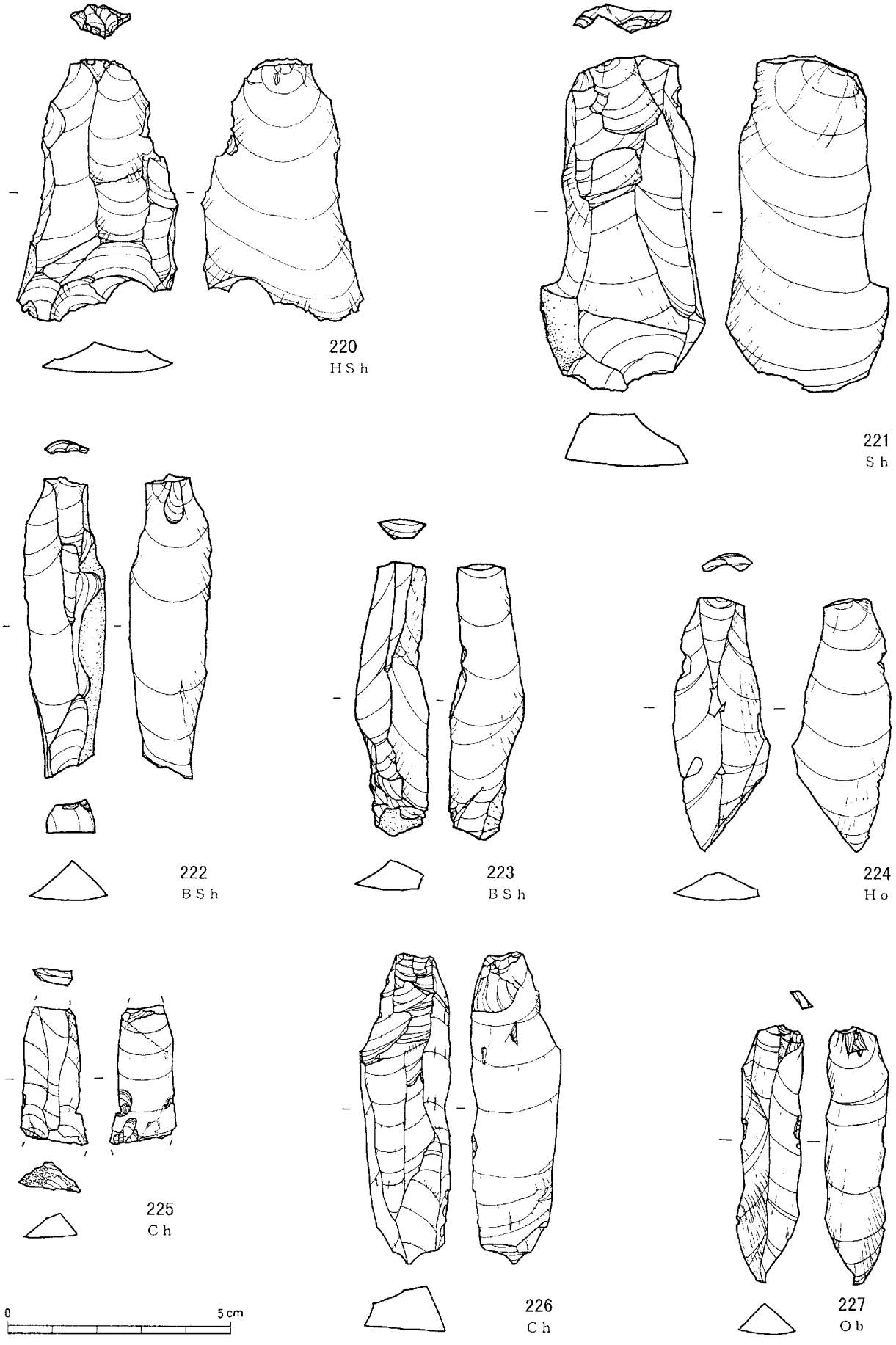
208a
Ｈｏ 5
接合資料 83



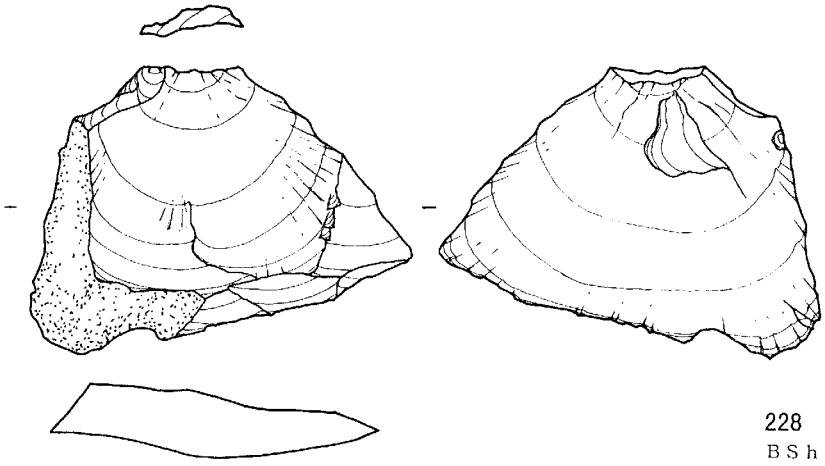
第83図　第２文化層　石器実測図（25）－微細剥離痕／石刃

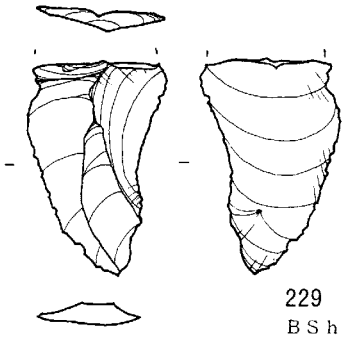


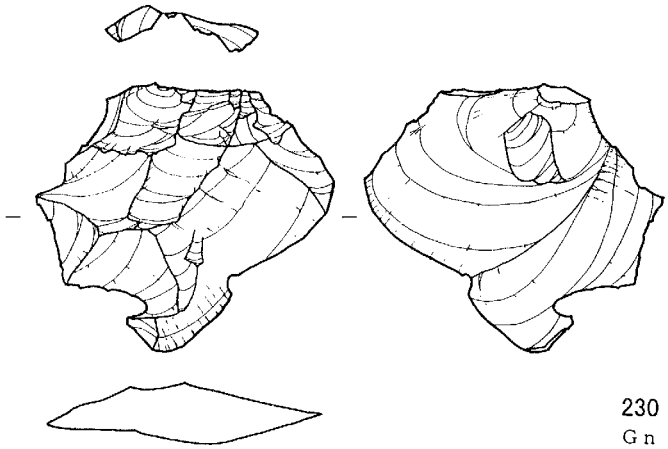
第84図　第２文化層　石器実測図（26）－縦長剥片

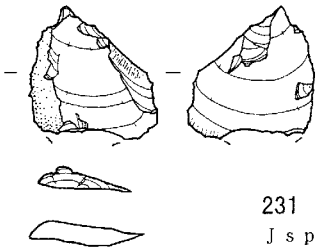


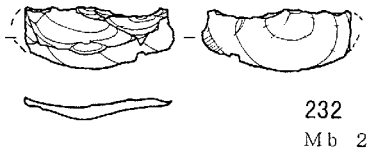
第85図　第２文化層　石器実測図（27）－縦長剥片

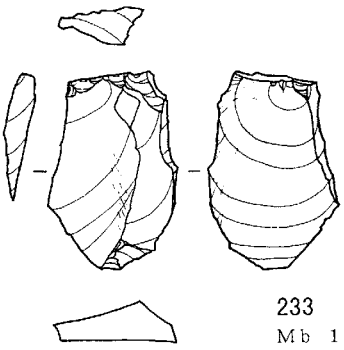


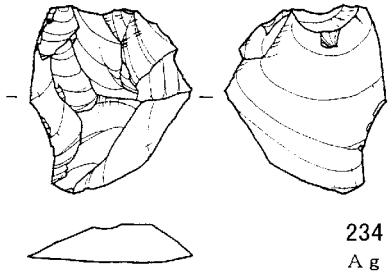


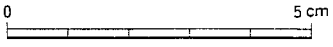




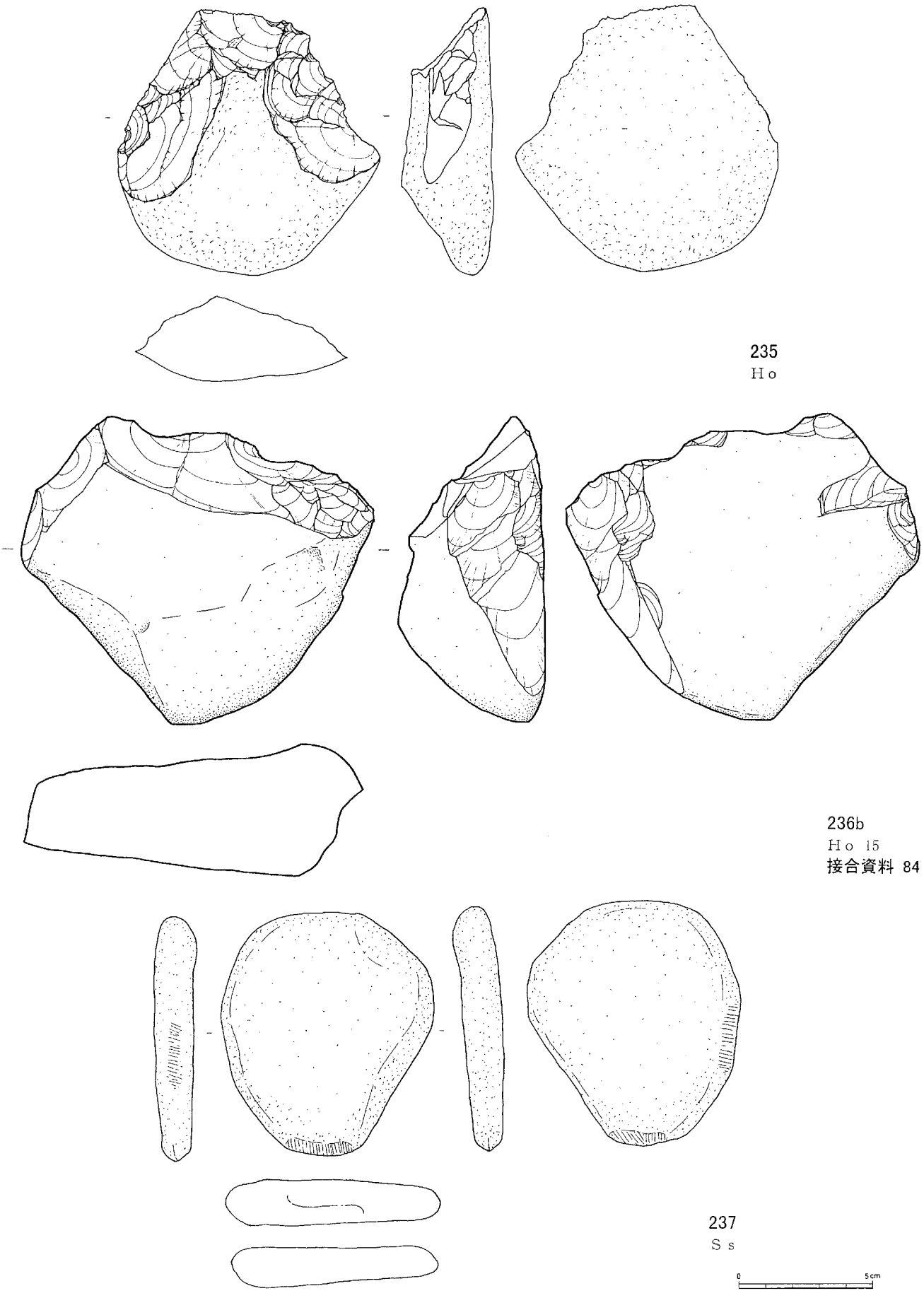




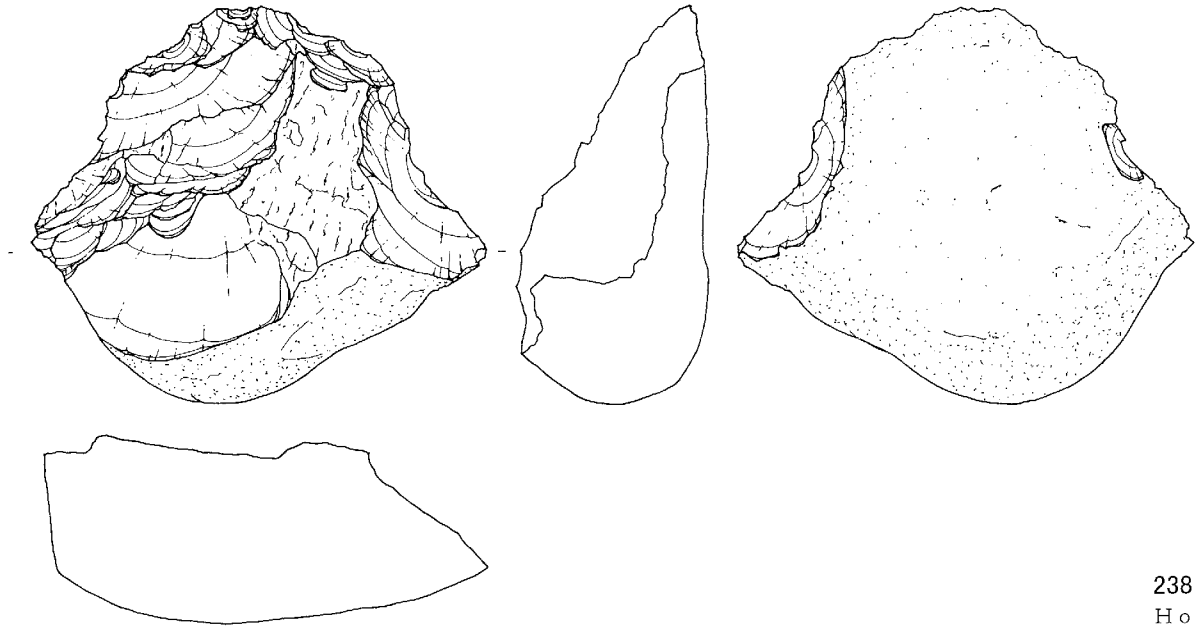




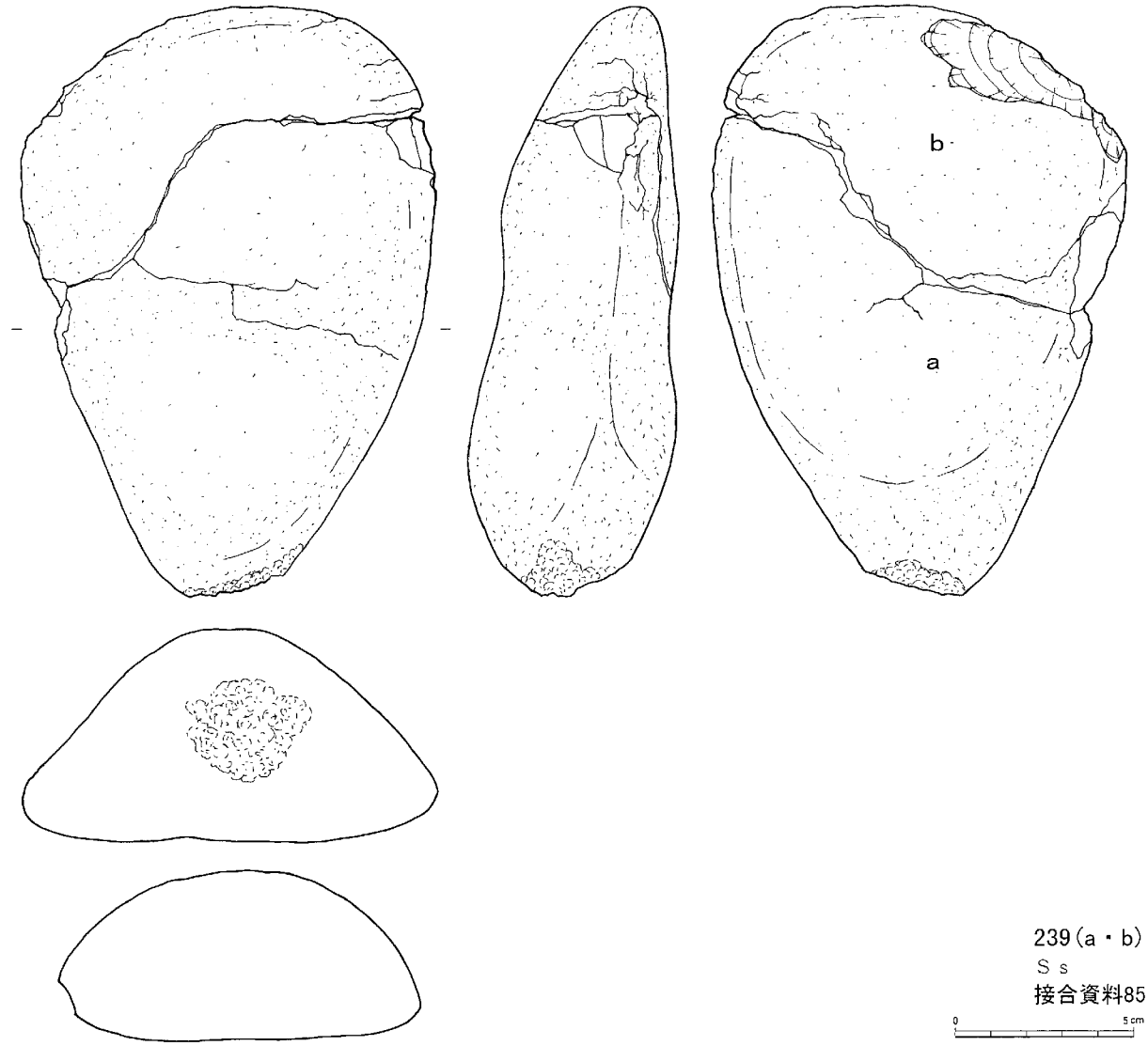
第86図　第２文化層　石器実測図（28）－その他の剥片



第87図　第２文化層　石器実測図（29）－礫石器／局部磨製礫



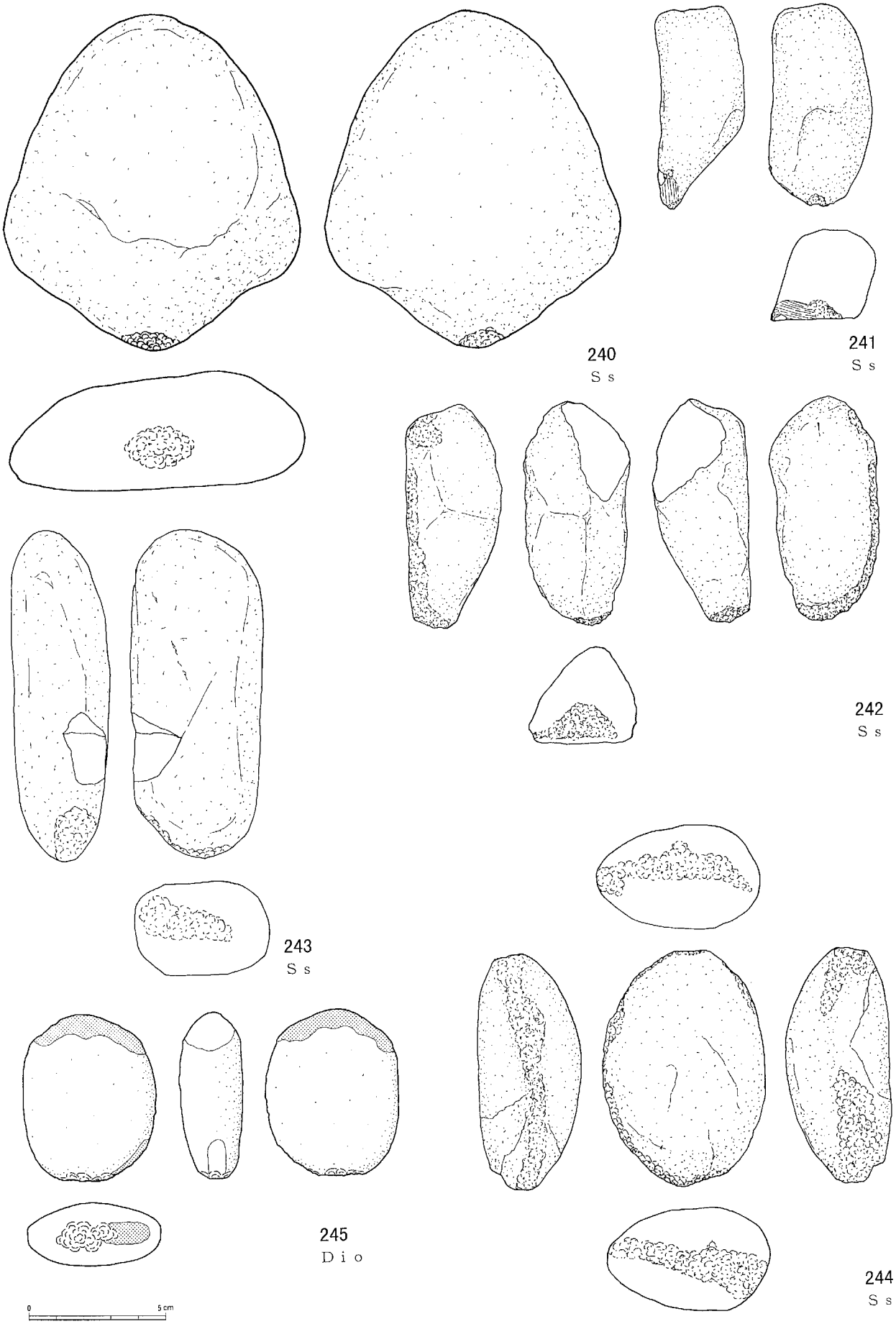
238
Ｈｏ



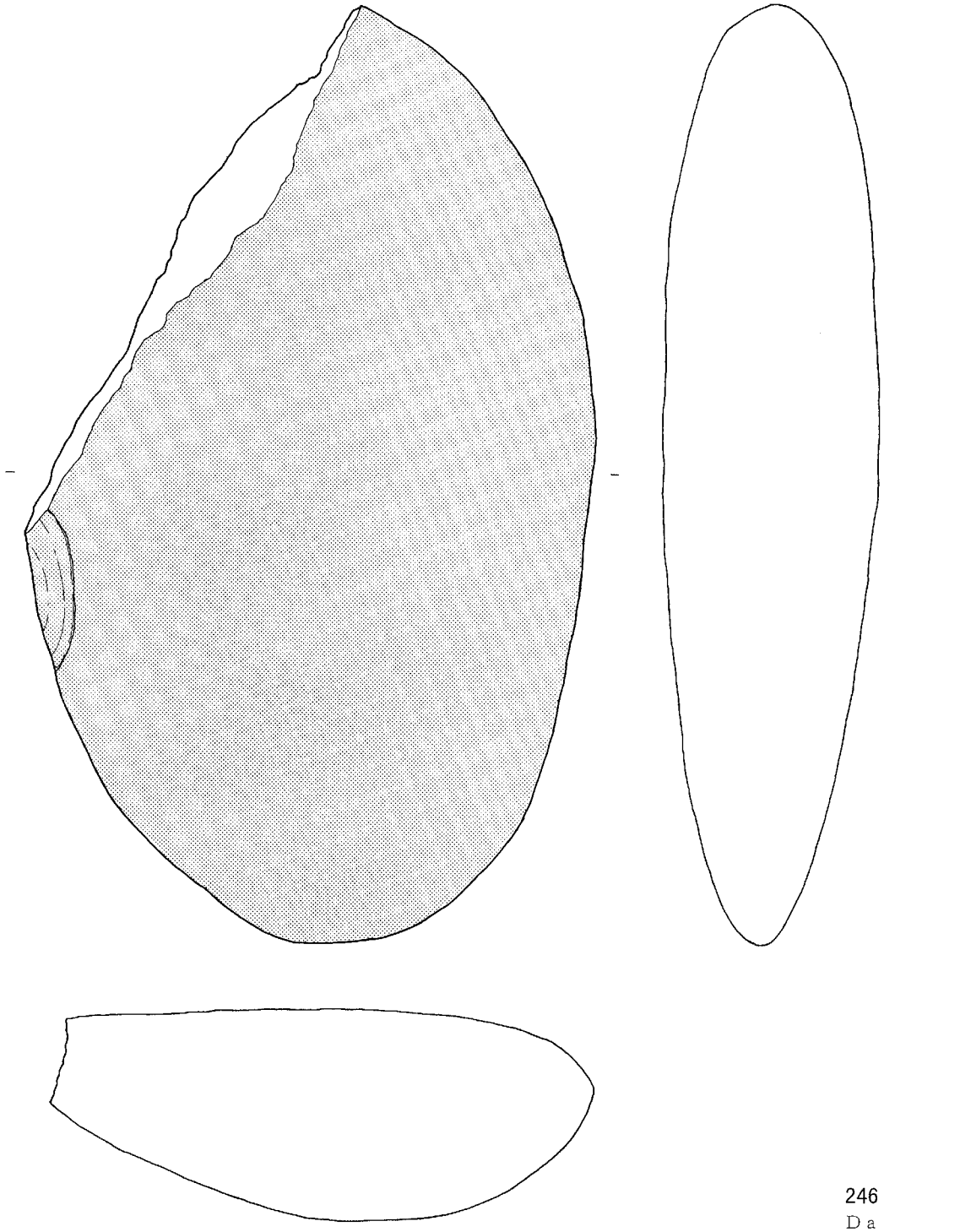
239（a・b）
Ｓｓ
接合資料85

0　5cm

第88図　第２文化層　石器実測図（30）－礫石器／敲石

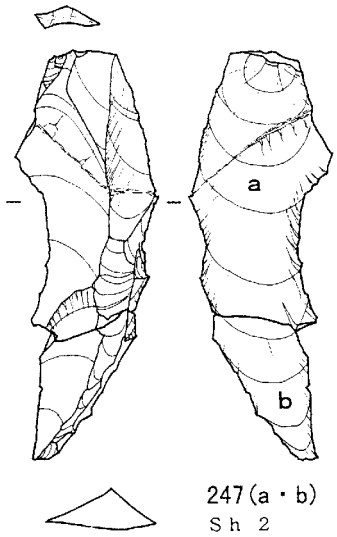


第89図　第２文化層　石器実測図（31）－敲石／磨石



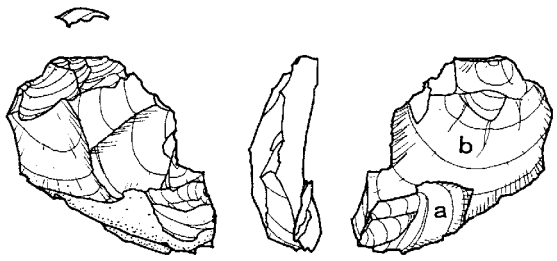
第90図　第２文化層　石器実測図（32）－磨石

接合資料 3



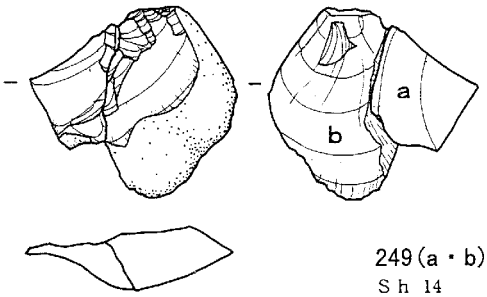
247(a・b)
Sh 2

接合資料 4



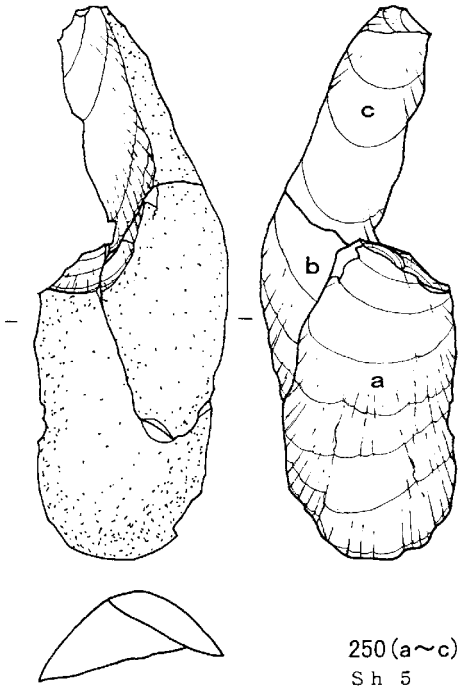
248(a・b)
Sh 2

接合資料 5



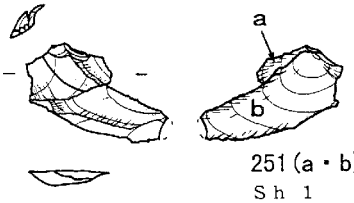
249(a・b)
Sh 14

接合資料 6



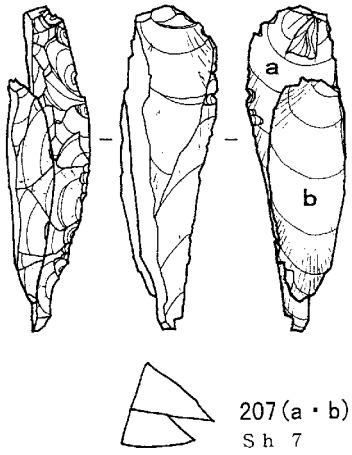
250(a～c)
Sh 5

接合資料 7

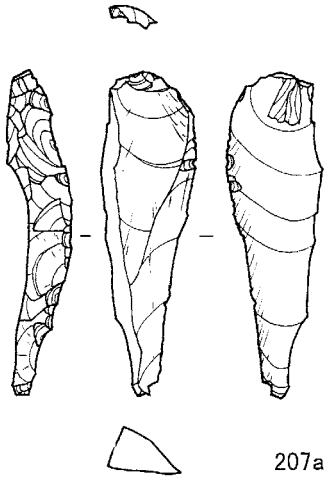


251(a・b)
Sh 1

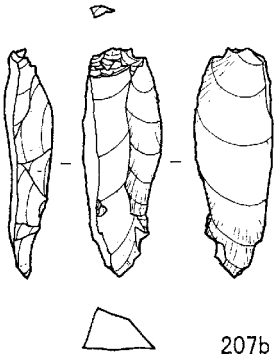
接合資料 8



207(a・b)
Sh 7



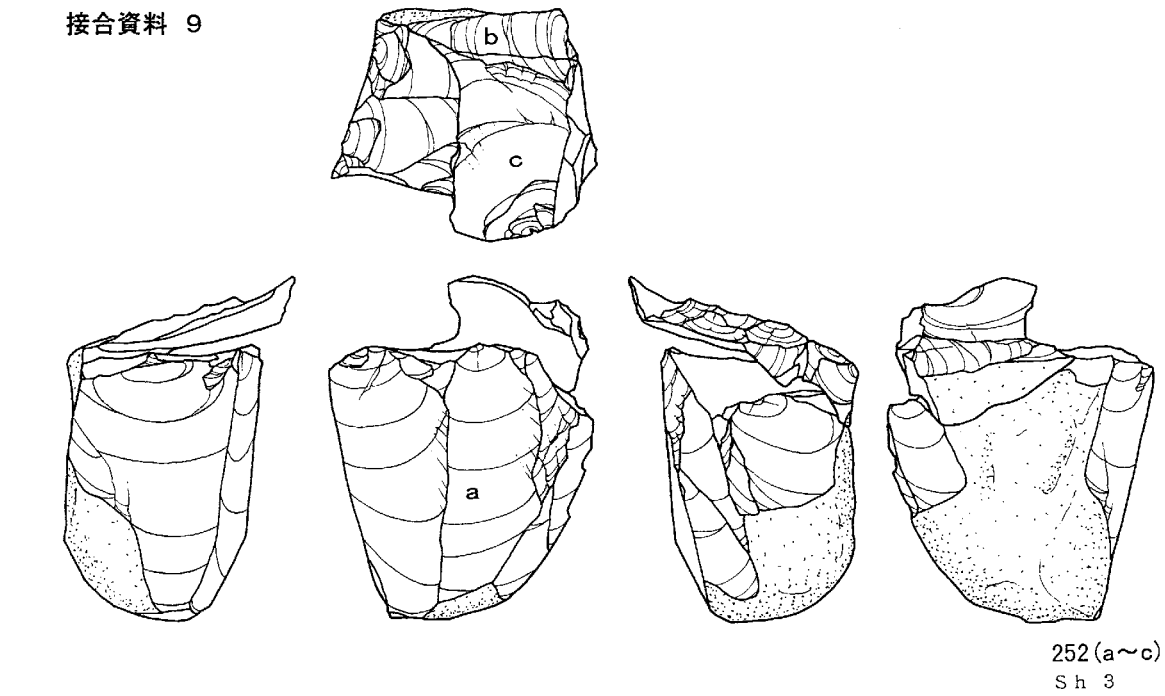
207a



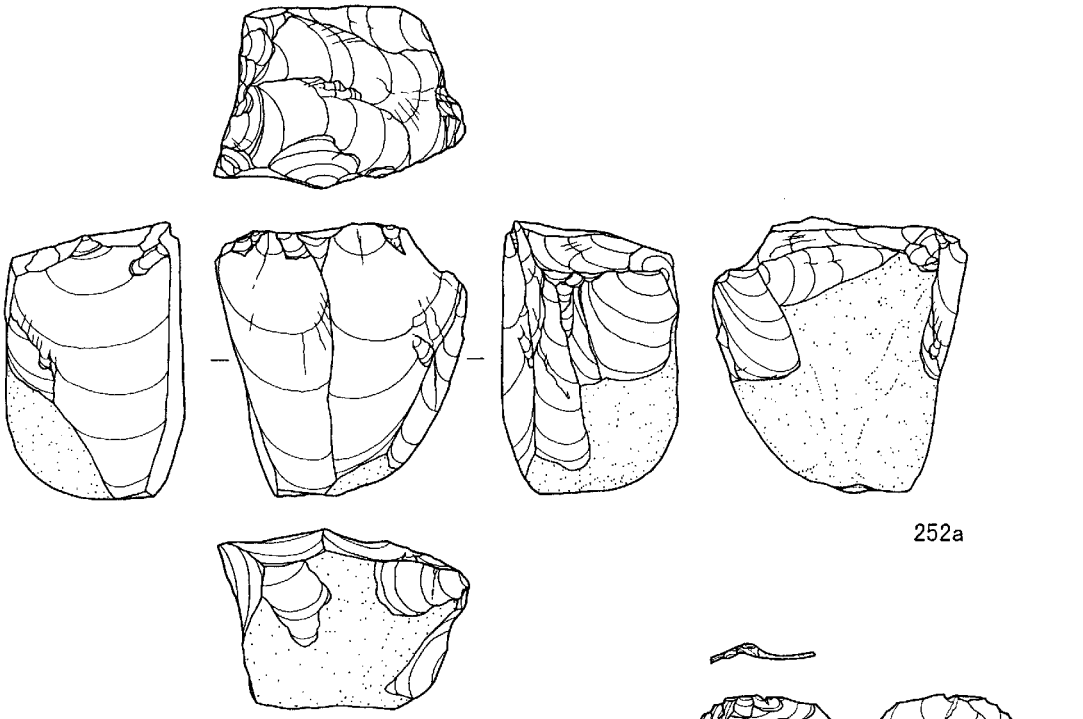
207b

第91図　第２文化層　接合資料実測図（１）

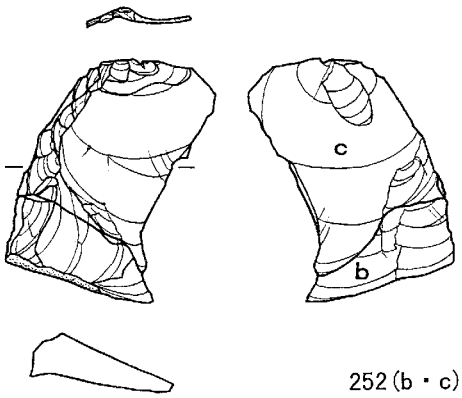
接合資料 ９



252(a～c)
Sh 3



252a

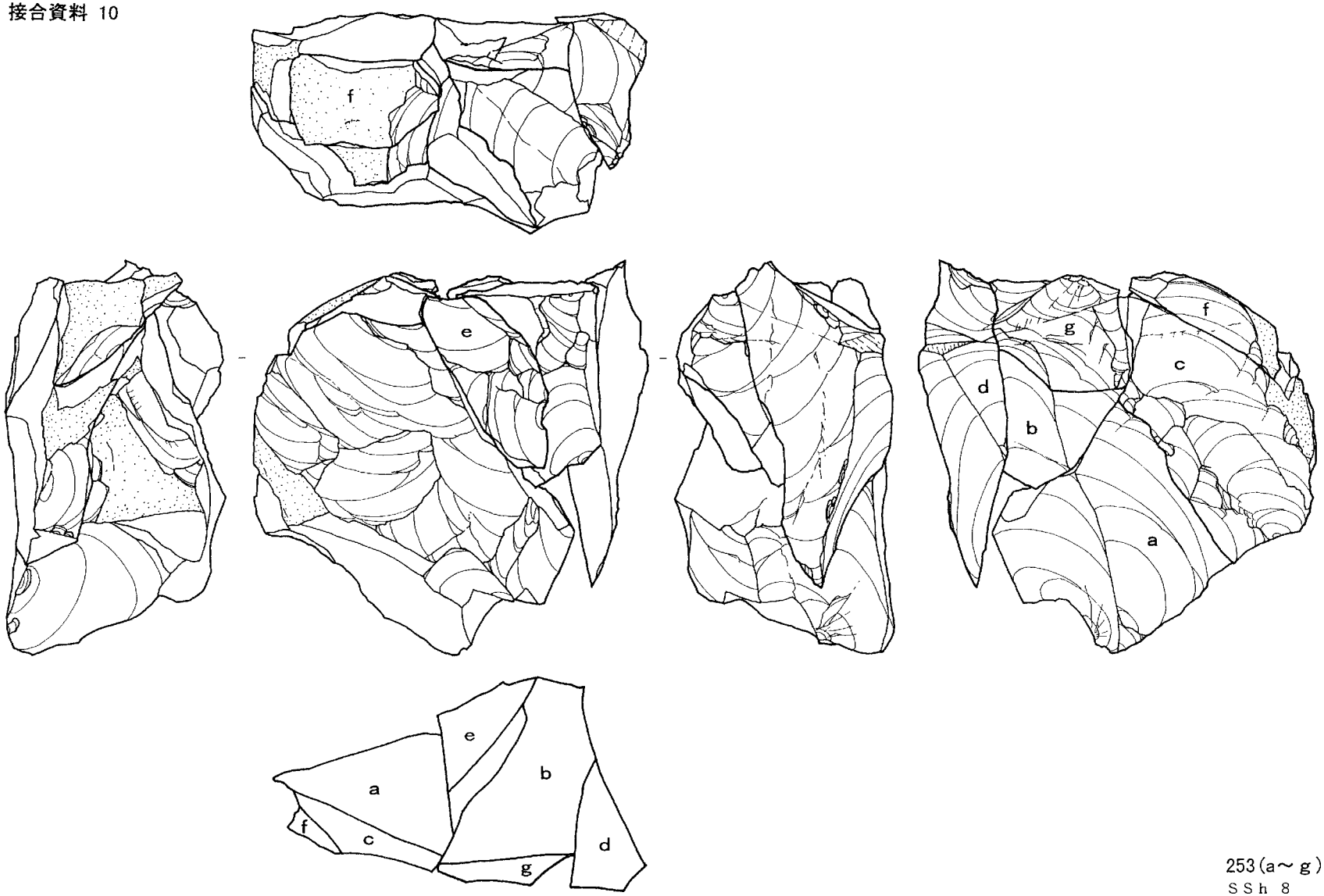


252(b・c)

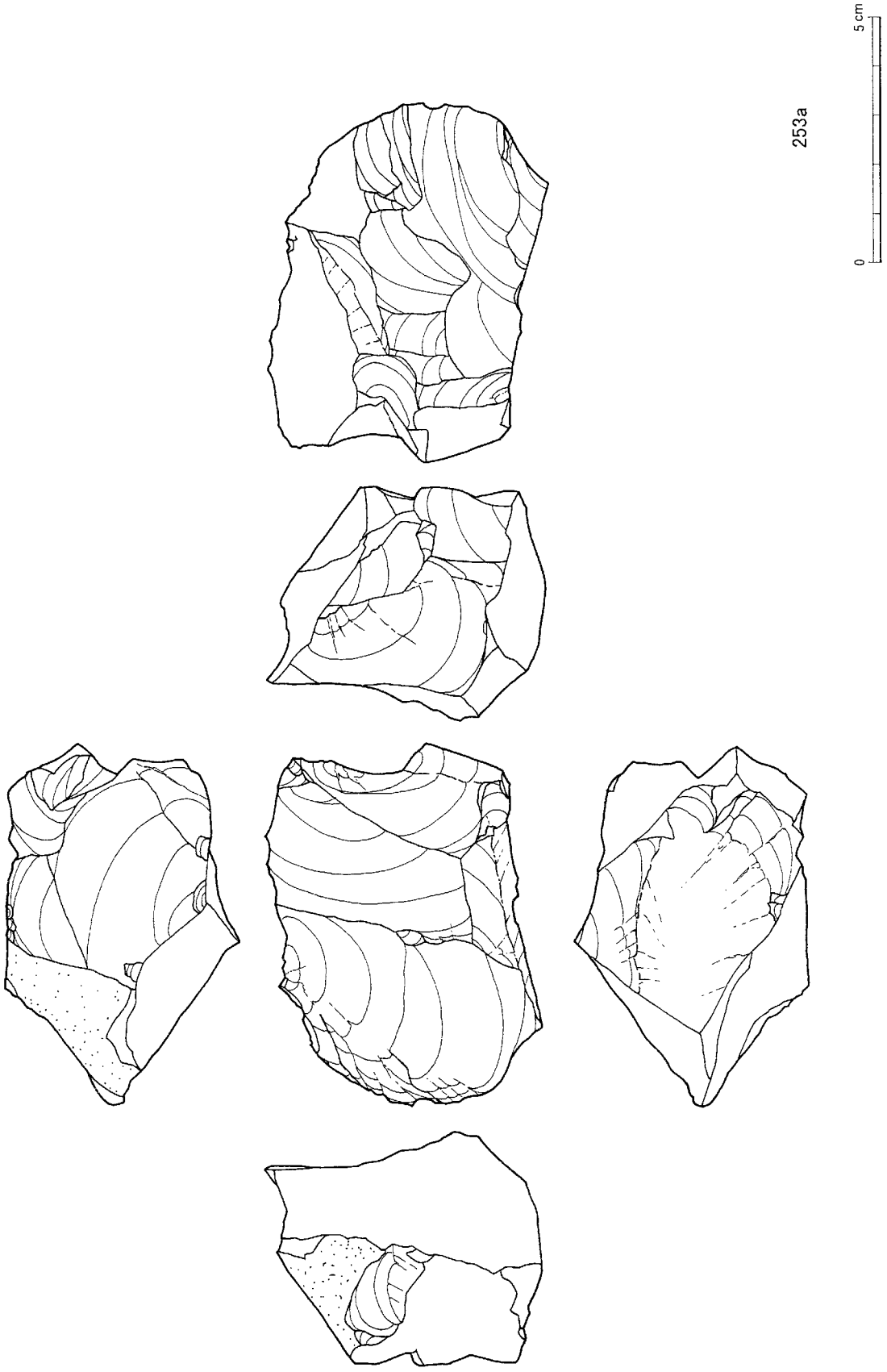
0 5cm

第92図　第２文化層　接合資料実測図（２）

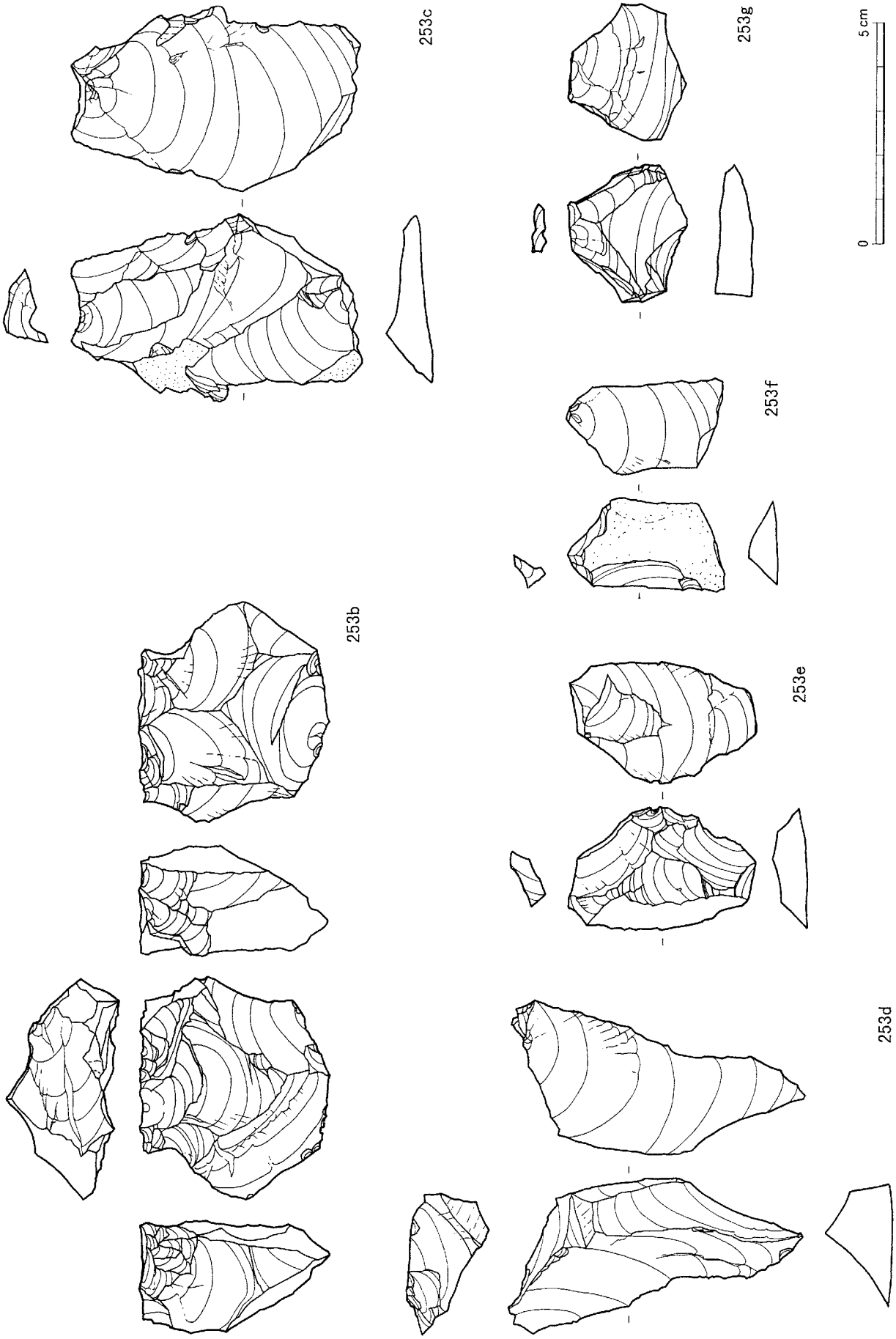
接合資料 10



第93図　第２文化層　接合資料実測図（３）

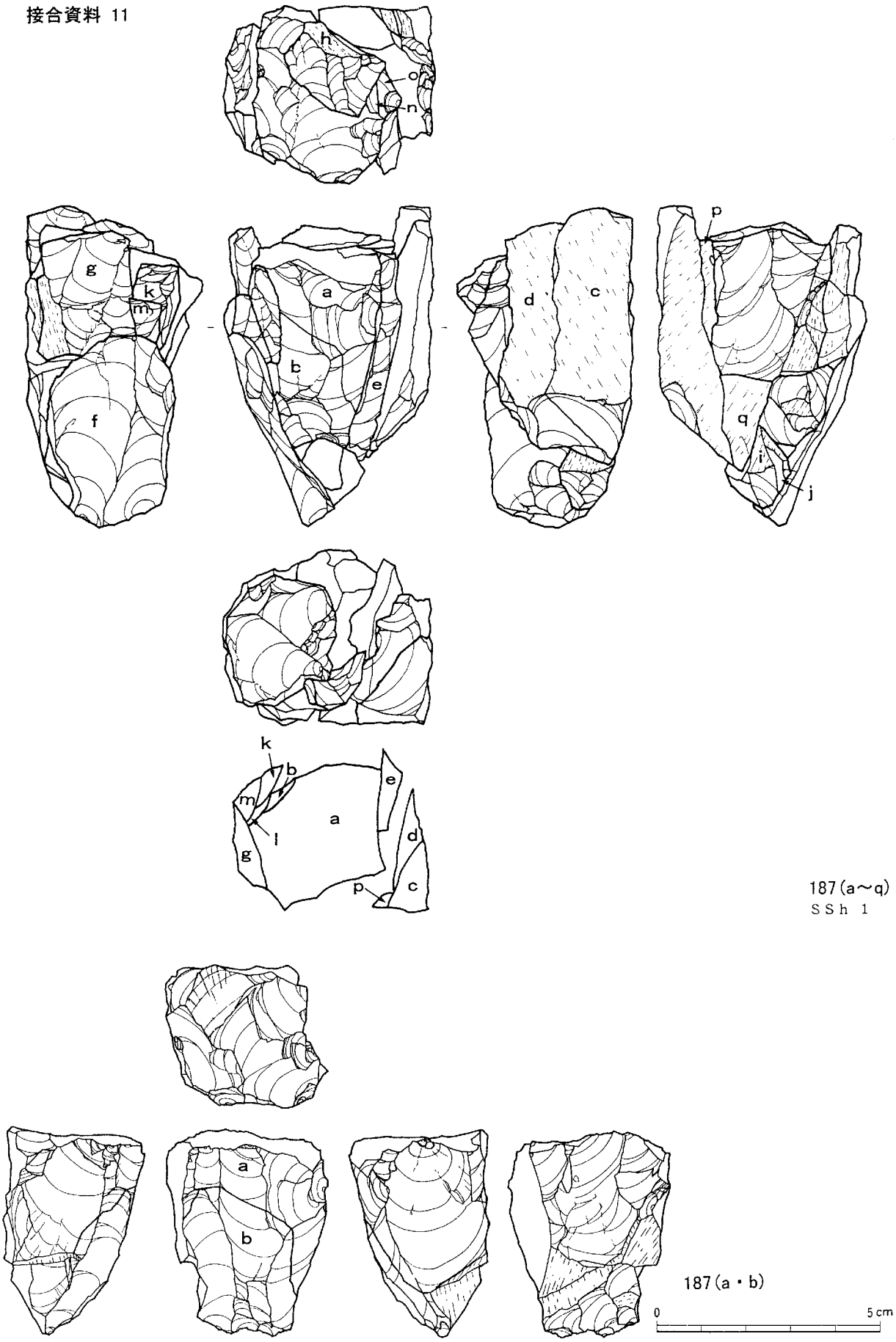


第94図　第２文化層　接合資料実測図（４）

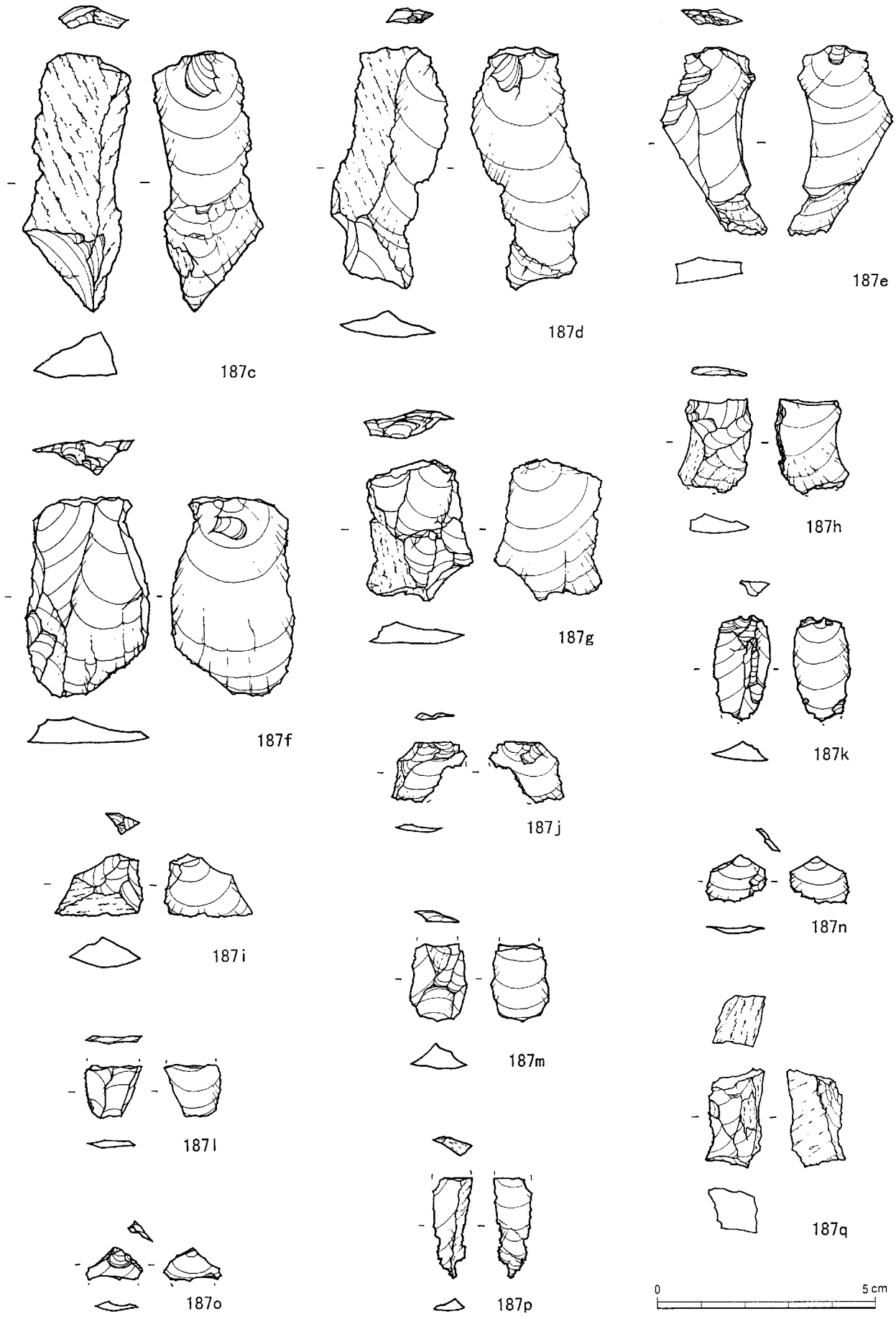


第95図　第２文化層　接合資料実測図（５）

接合資料 11

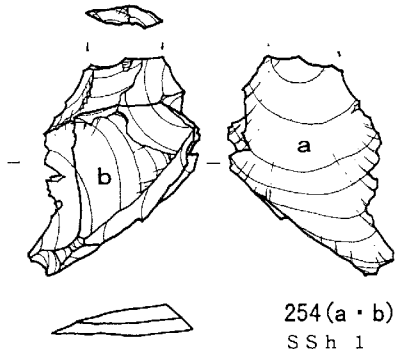


第96図　第２文化層　接合資料実測図（６）



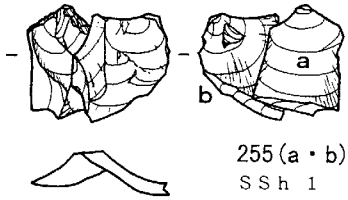
第97図　第２文化層　接合資料実測図（７）

接合資料 12



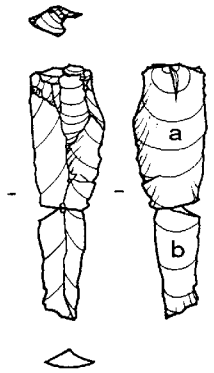
254(a・b)
SSh 1

接合資料 13



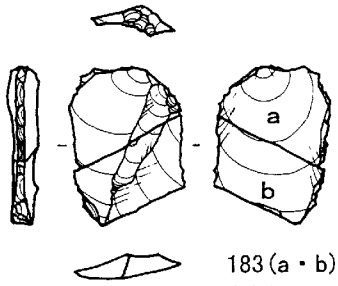
255(a・b)
SSh 1

接合資料 14



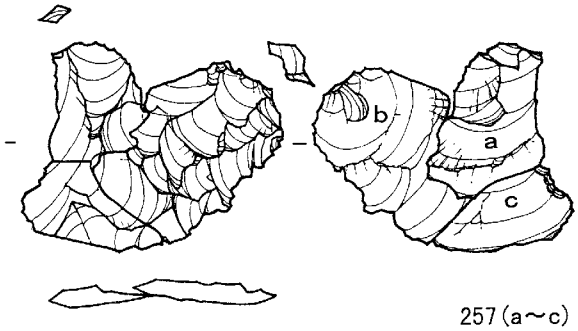
256(a・b)
SSh 1

接合資料 15



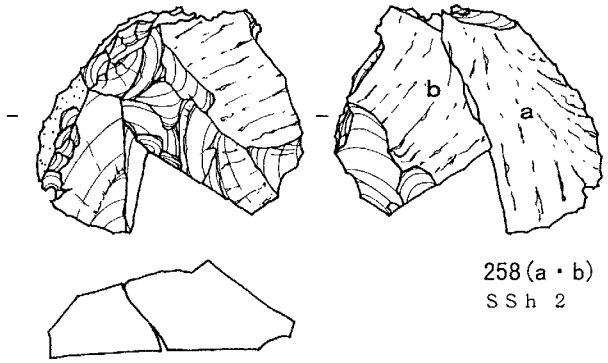
183(a・b)
SSh 1

接合資料 16

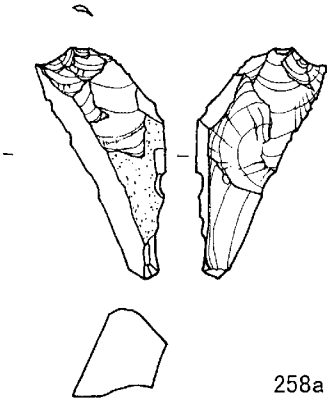


257(a～c)
SSh 1

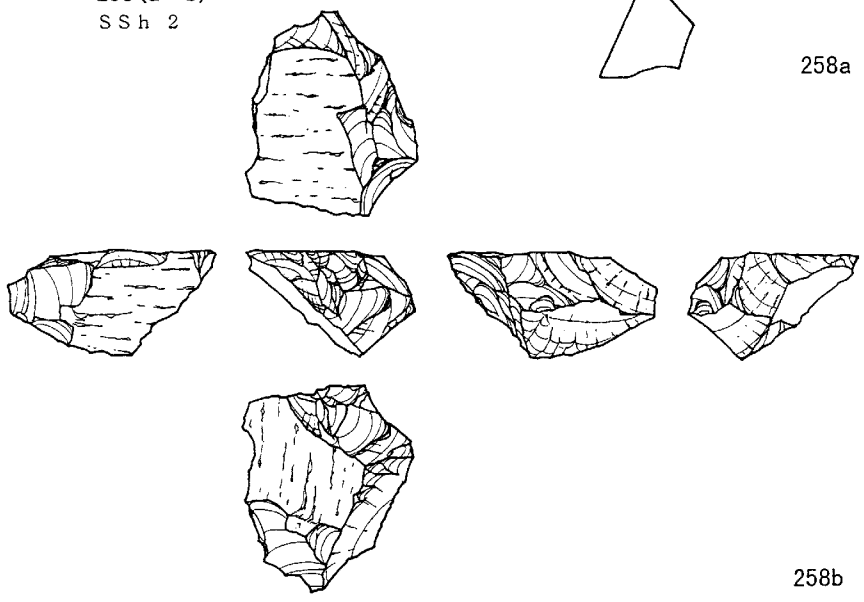
接合資料 17



258(a・b)
SSh 2



258a

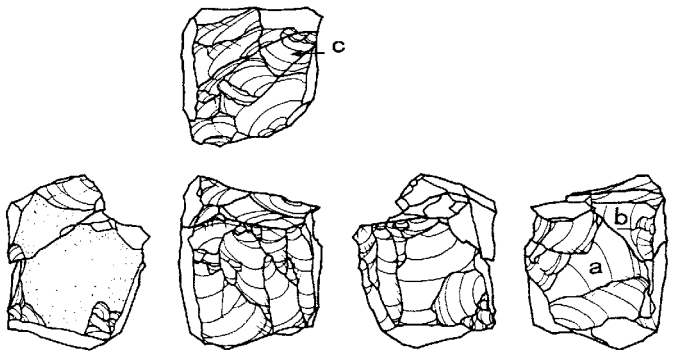


0 5cm

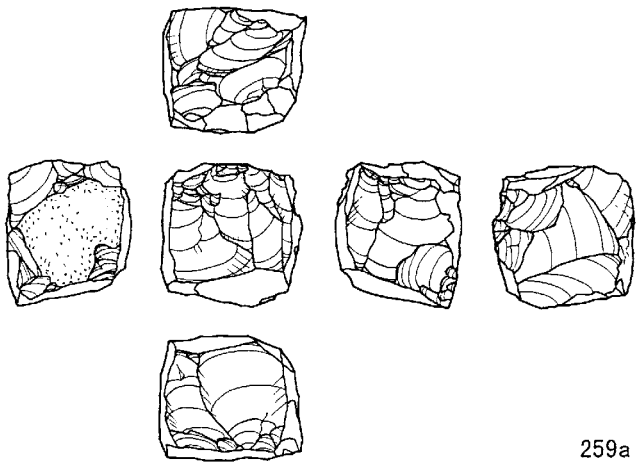
258b

第98図　第２文化層　接合資料実測図（８）

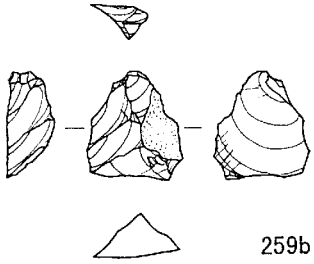
接合資料 18



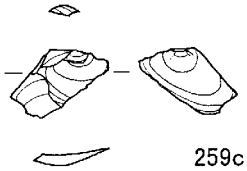
259(a～c)
SSh 2



259a

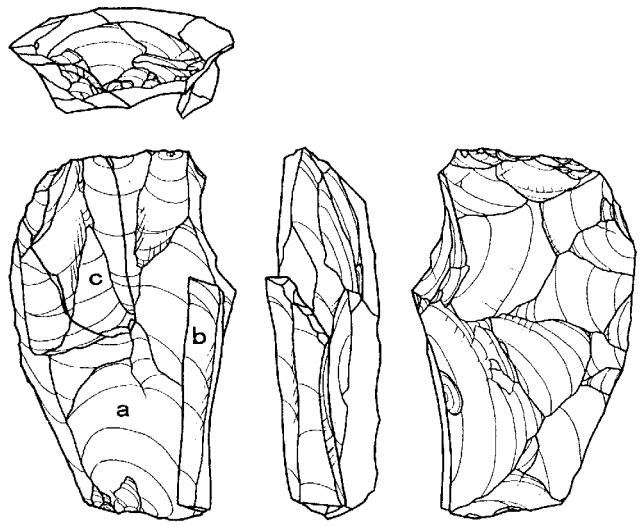


259b

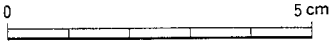


259c

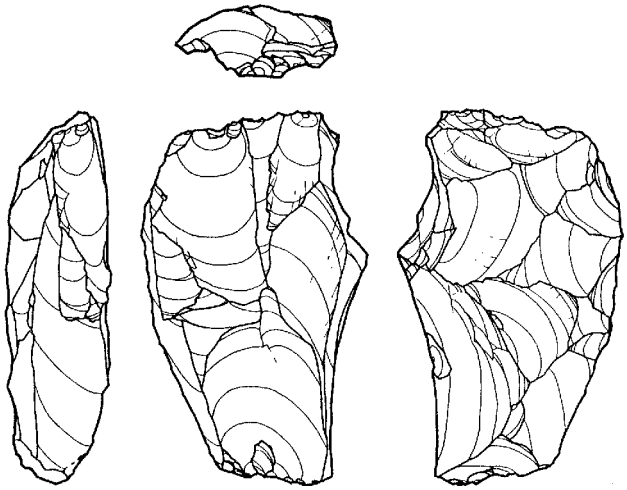
接合資料 19



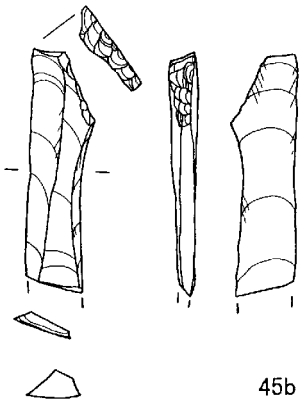
45(a～c)
SSh 6



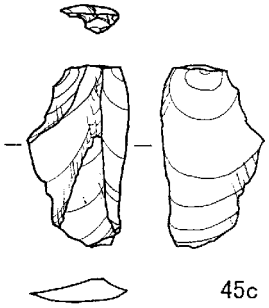
第99図　第２文化層　接合資料実測図（９）



45a

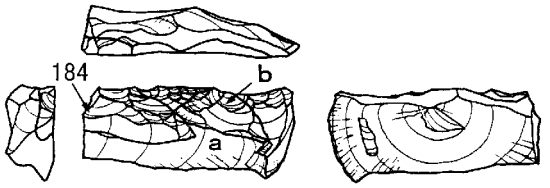


45b

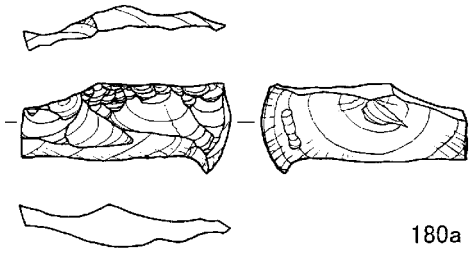


45c

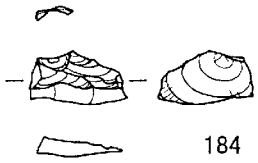
接合資料 20



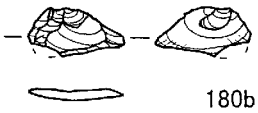
180(a・b)・184
ＳＳｈ 6



180a

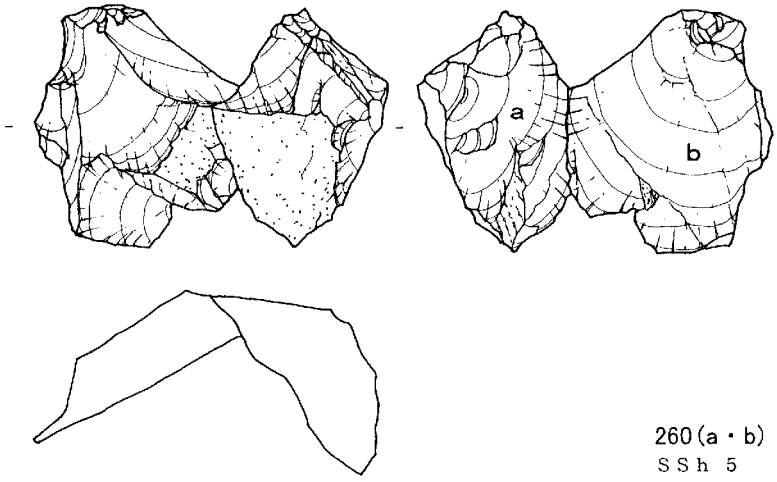


184



180b

接合資料 21

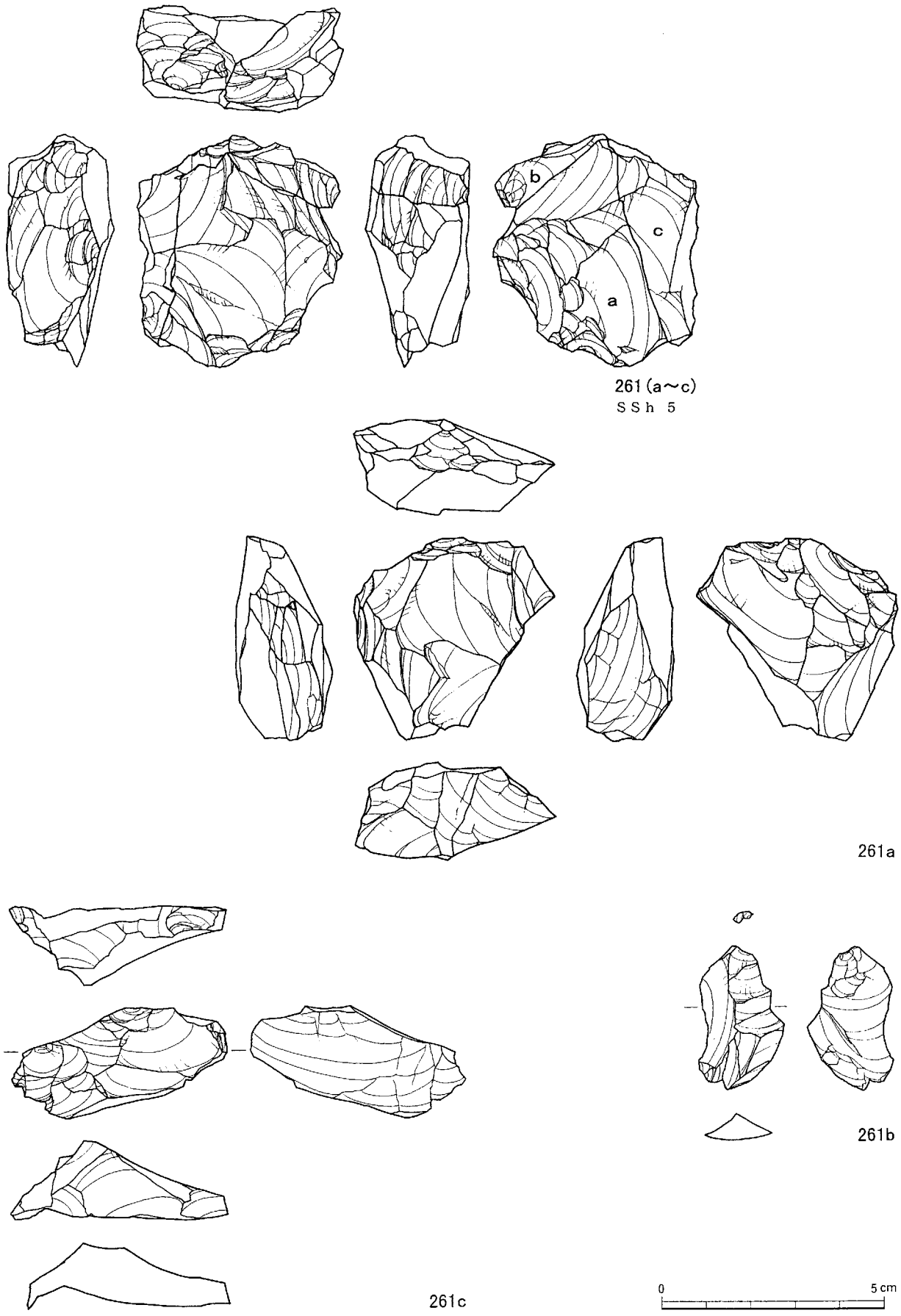


260(a・b)
ＳＳｈ 5

0 5cm

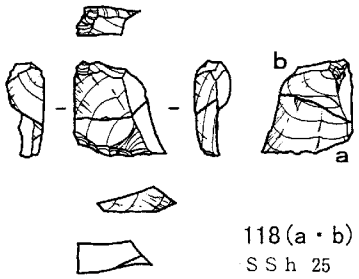
第100図　第２文化層　接合資料実測図（10）

接合資料 22



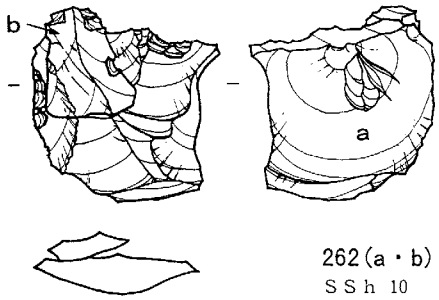
第101図　第２文化層　接合資料実測図（11）

接合資料 23

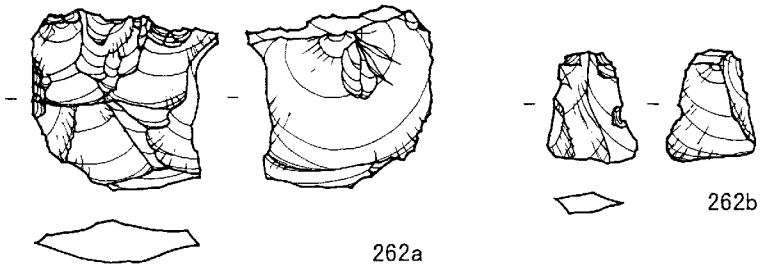


118(a・b)
ＳＳｈ 25

接合資料 24



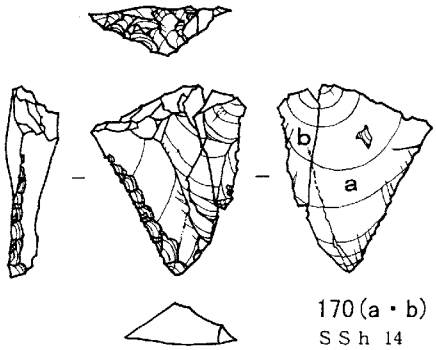
262(a・b)
ＳＳｈ 10



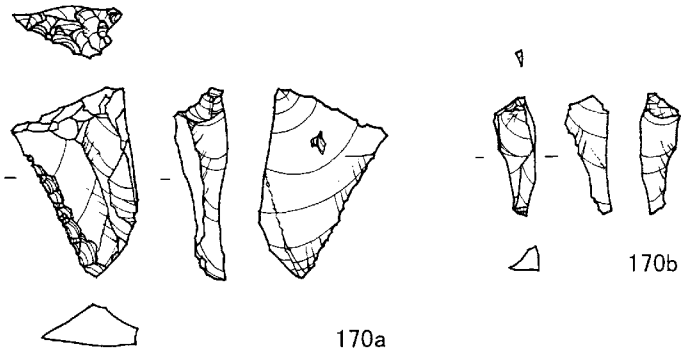
262a

262b

接合資料 25



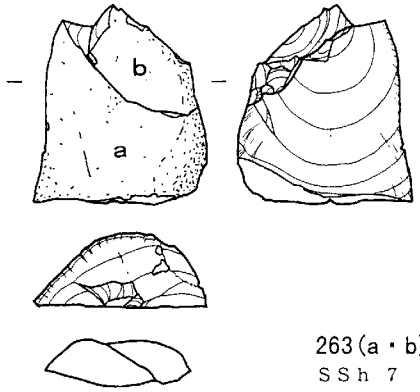
170(a・b)
ＳＳｈ 14



170a

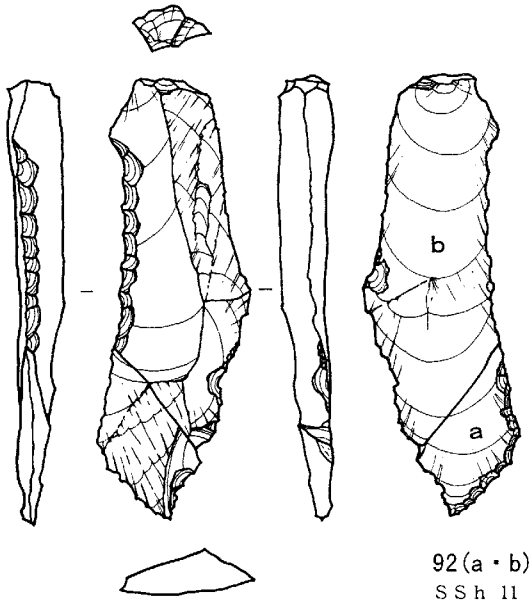
170b

接合資料 26



263(a・b)
ＳＳｈ 7

接合資料 27

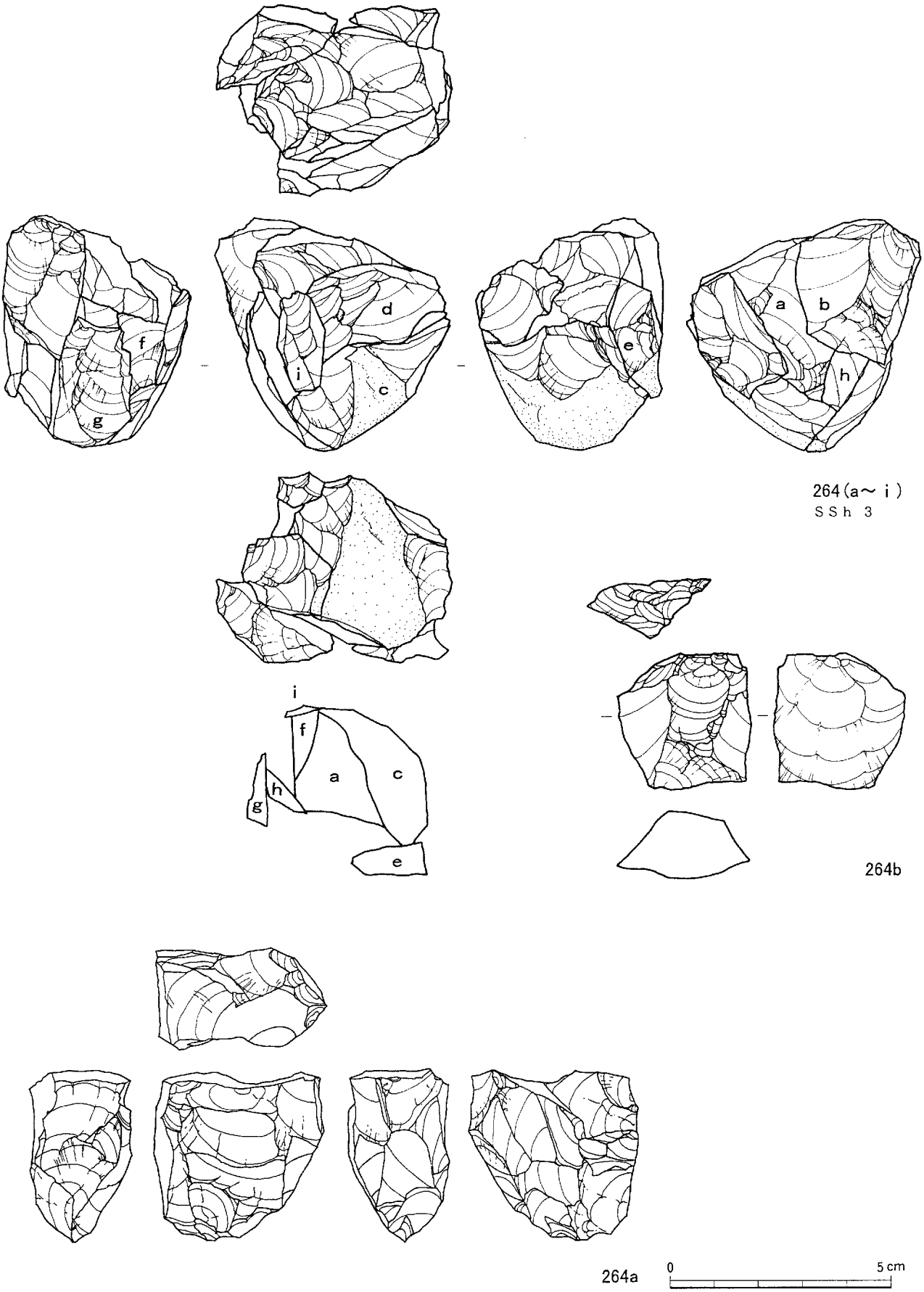


92(a・b)
ＳＳｈ 11

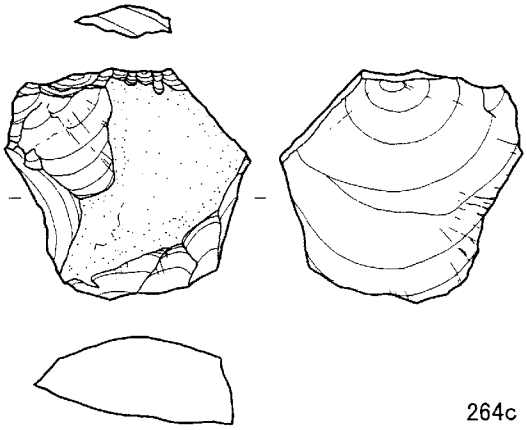
0 5cm

第102図　第２文化層　接合資料実測図（12）

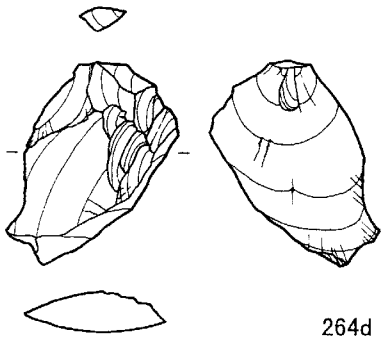
接合資料 28



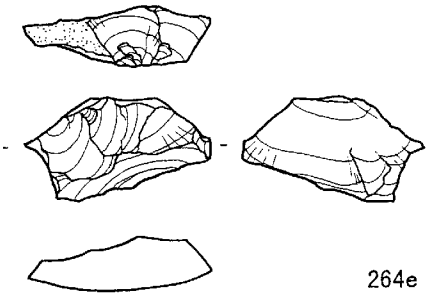
第103図　第２文化層　接合資料実測図（13）



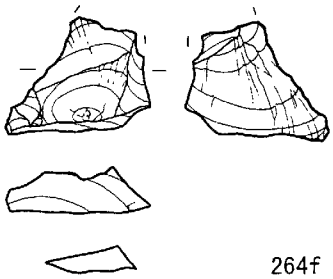
264c



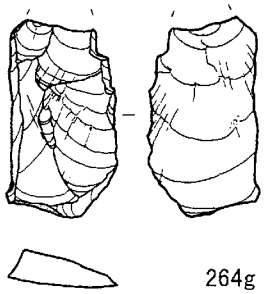
264d



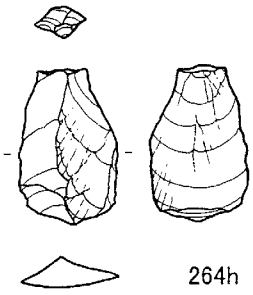
264e



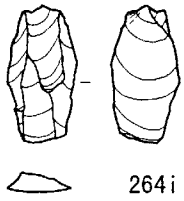
264f



264g

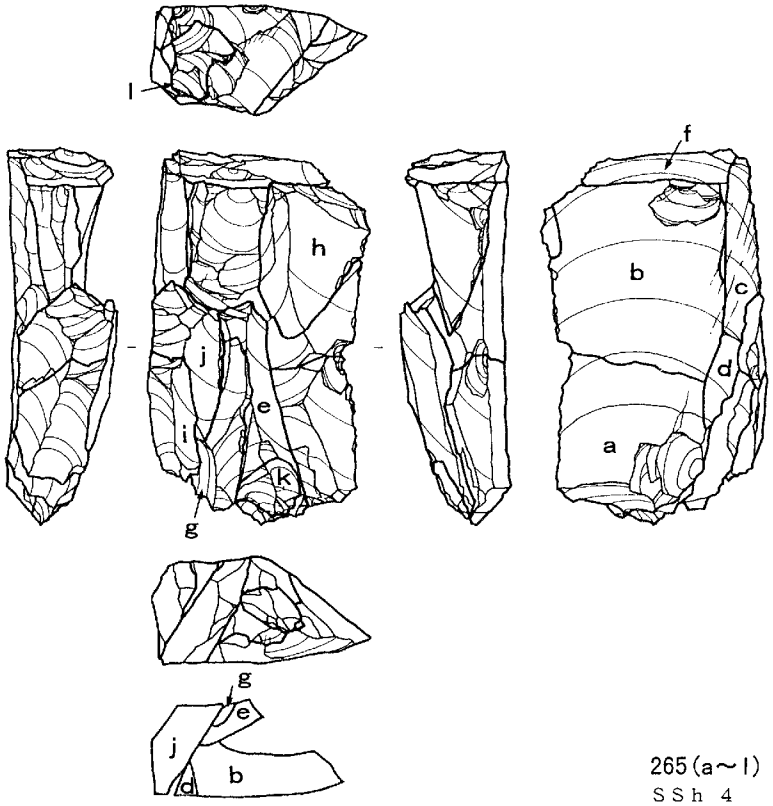


264h



264i

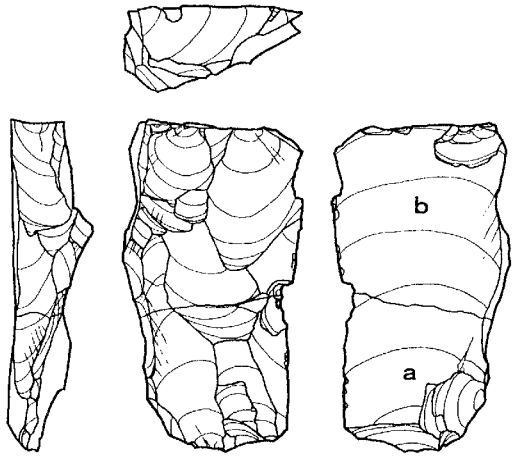
接合資料 29



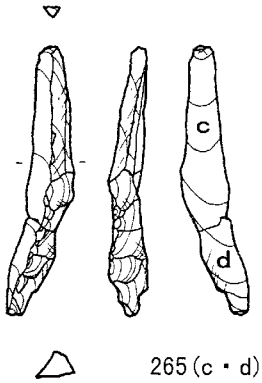
265(a～l)
SSh 4

0 5cm

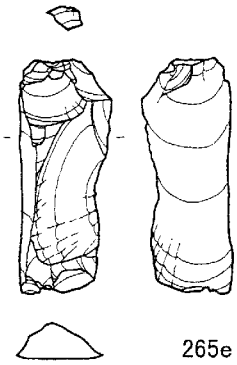
第104図　第２文化層　接合資料実測図（14）



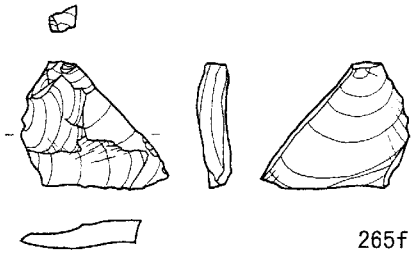
265(a・b)



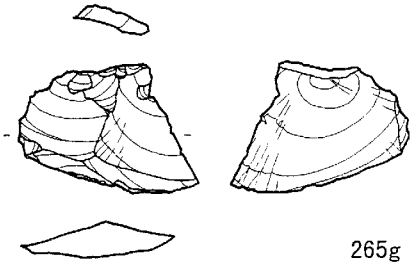
265(c・d)



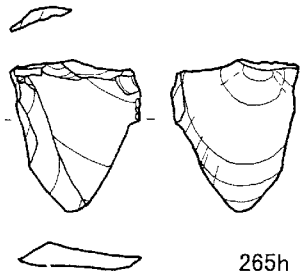
265e



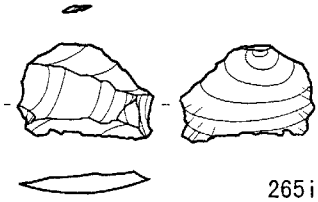
265f



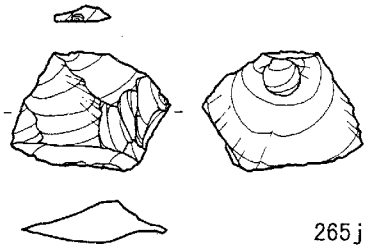
265g



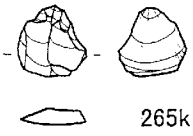
265h



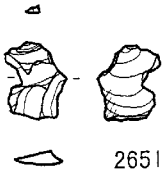
265i



265j



265k

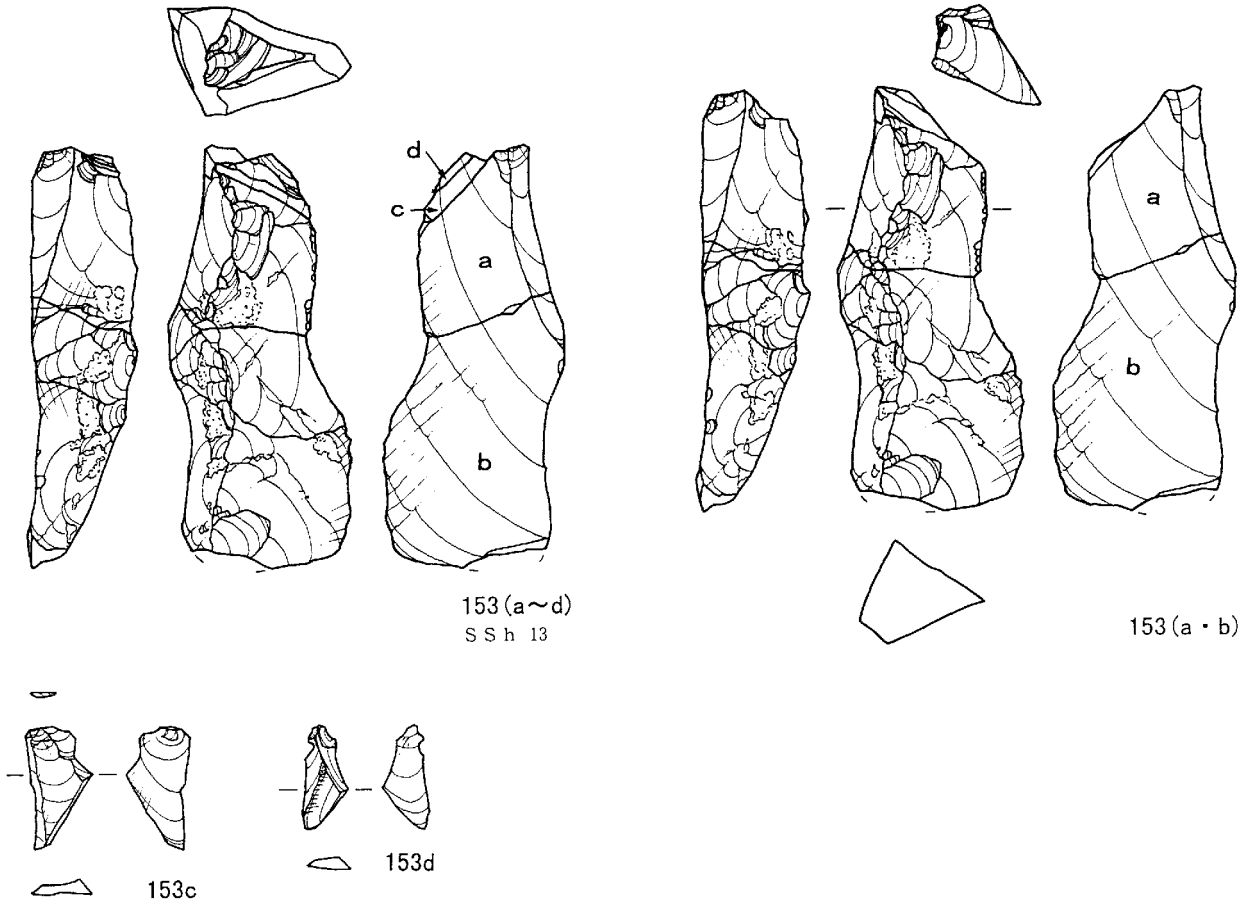


265l

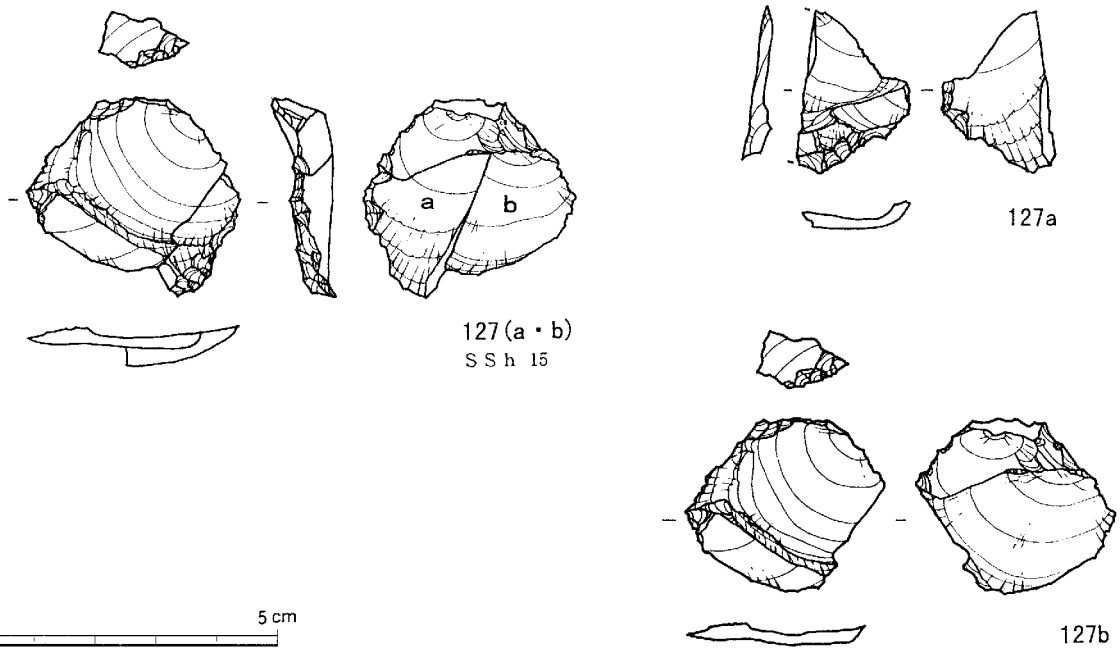
0　5cm

第105図　第２文化層　接合資料実測図（15）

接合資料 30

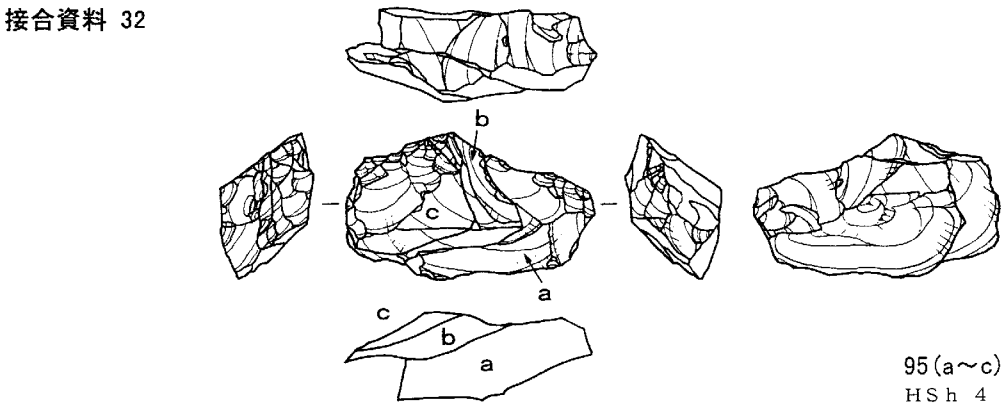


接合資料 31

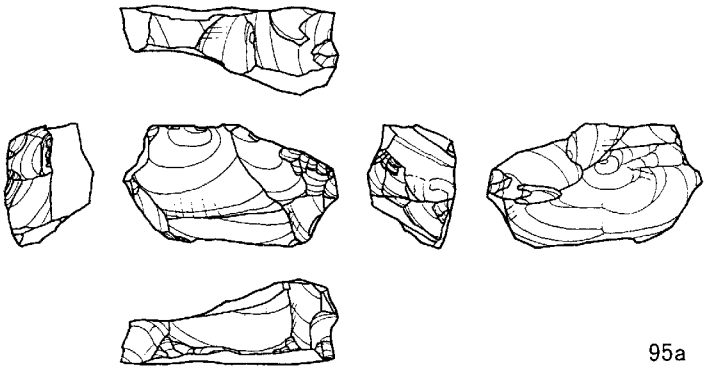


第106図　第２文化層　接合資料実測図（16）

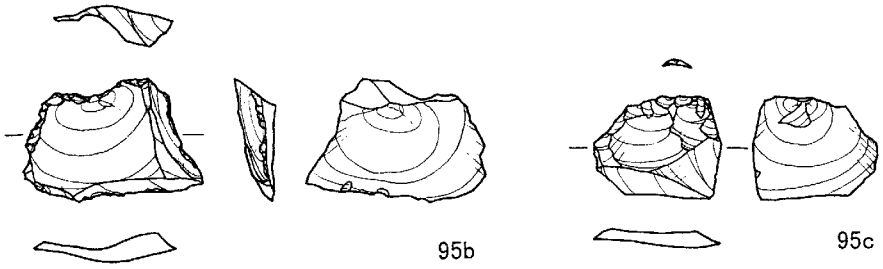
接合資料 32



95(a～c)
HSh 4



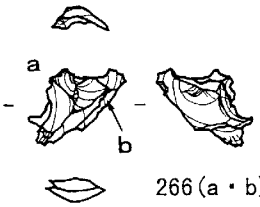
95a



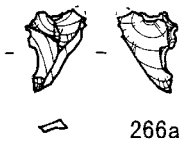
95b

95c

接合資料 33



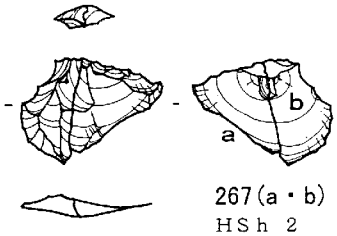
266(a・b)
HSh 4



266a

266b

接合資料 34

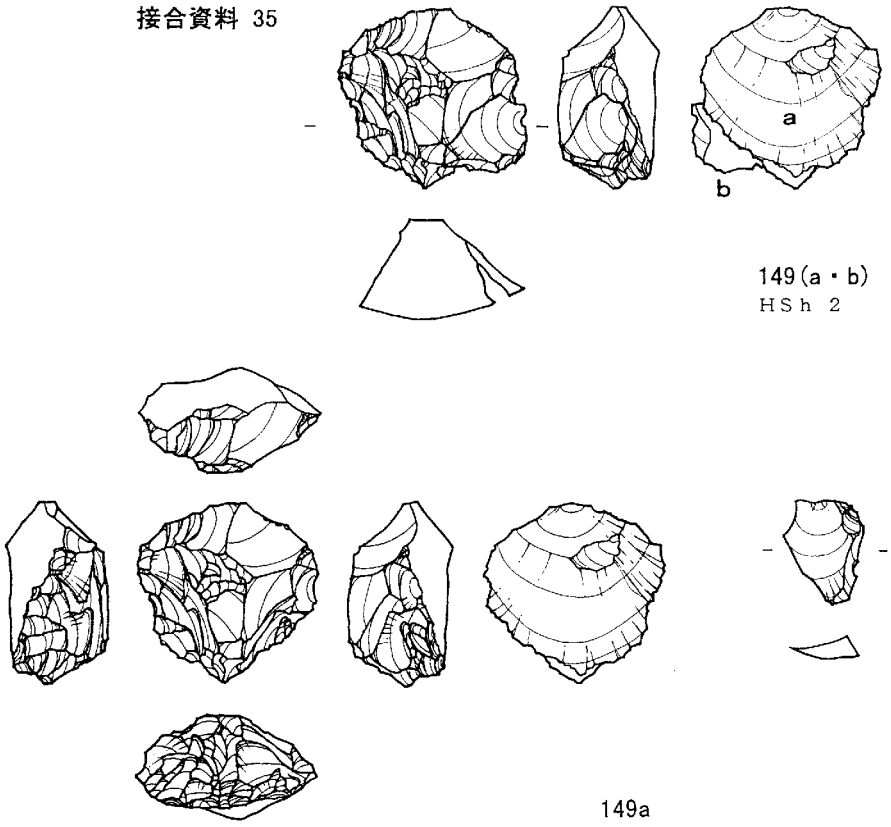


267(a・b)
HSh 2

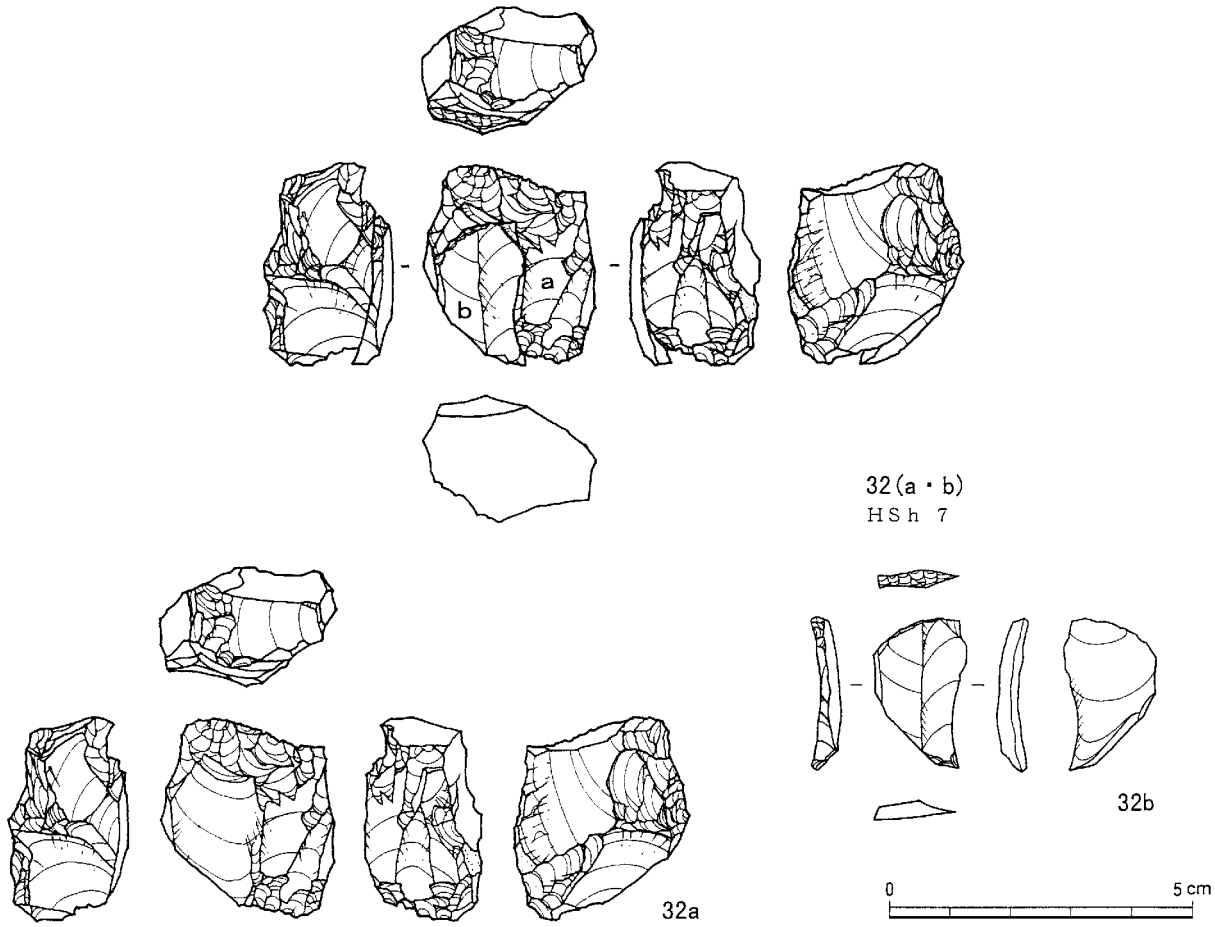
0 5cm

第107図　第２文化層　接合資料実測図（17）

接合資料 35

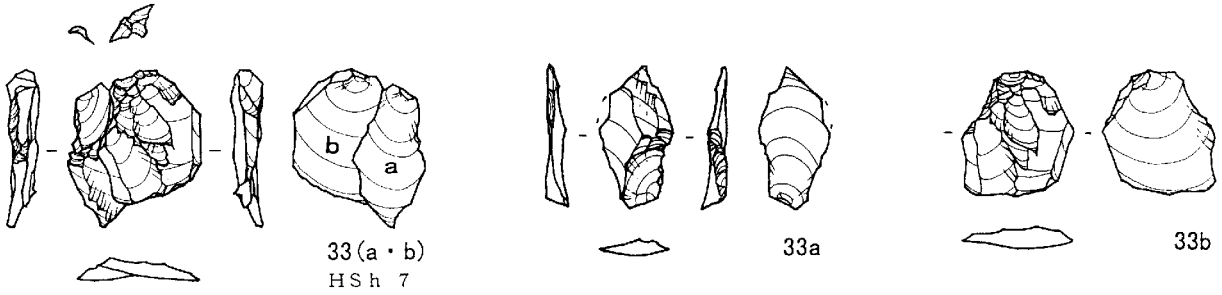


接合資料 36

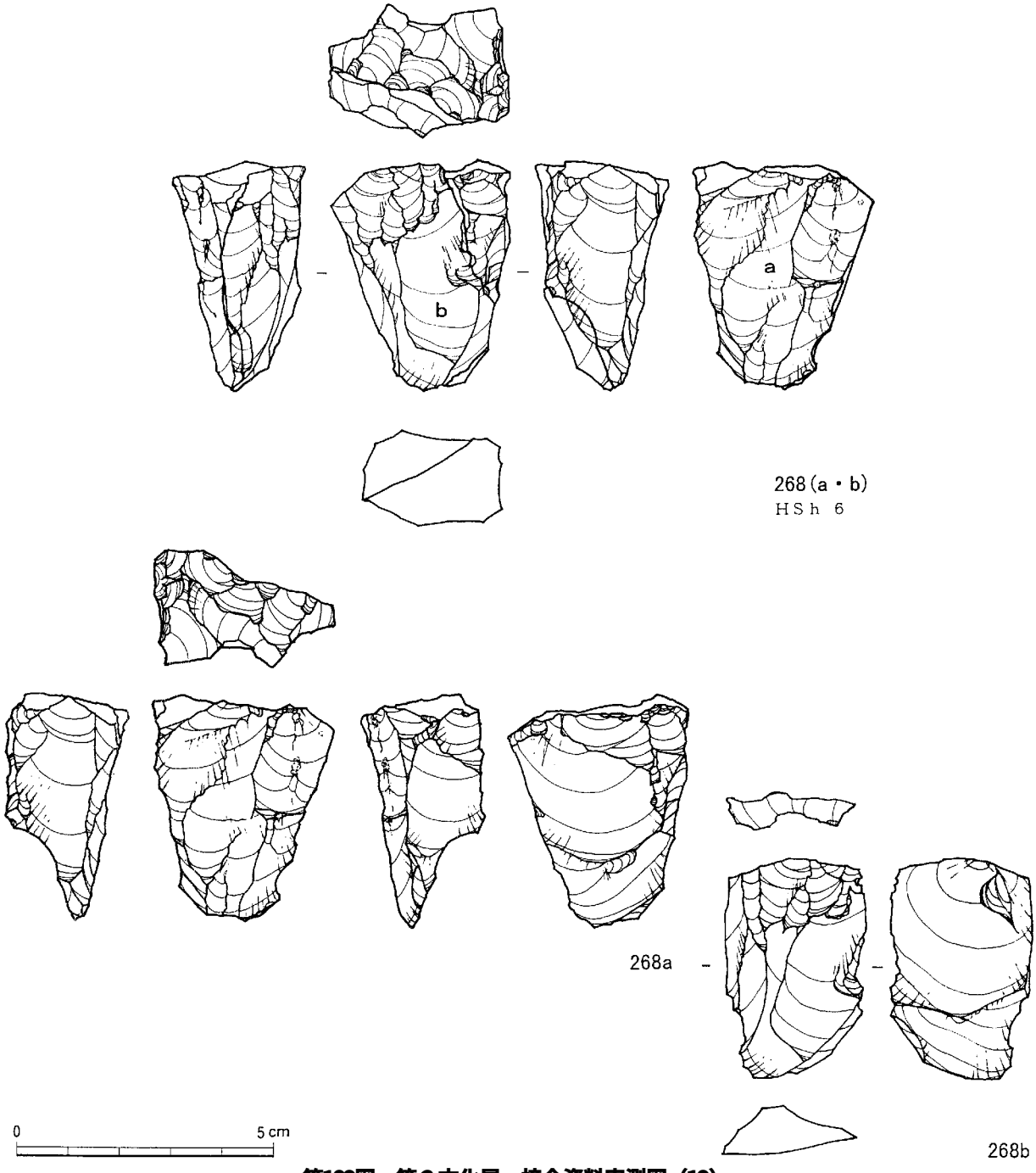


第108図　第２文化層　接合資料実測図（18）

接合資料 37

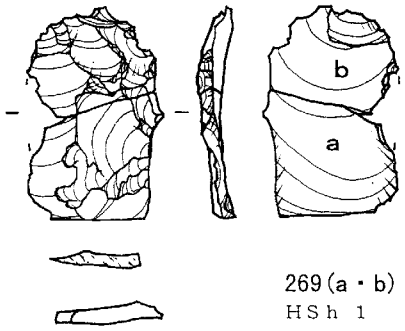


接合資料 38



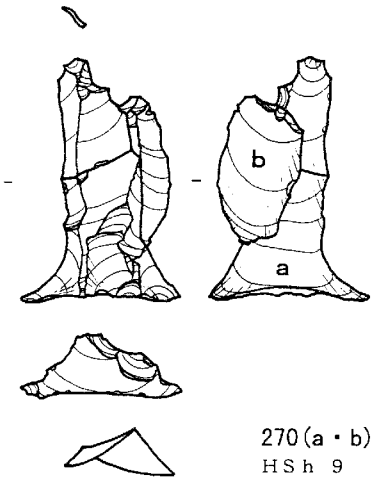
第109図　第２文化層　接合資料実測図（19）

接合資料 39



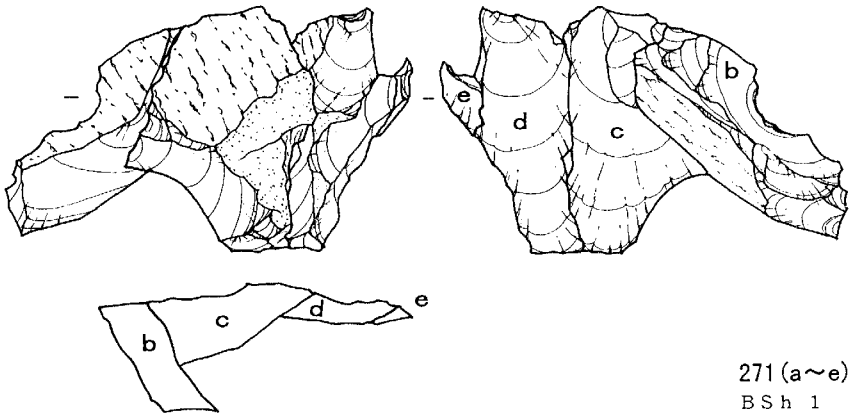
269(a・b)
HSh 1

接合資料 40

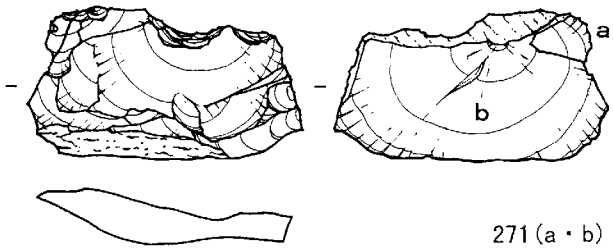


270(a・b)
HSh 9

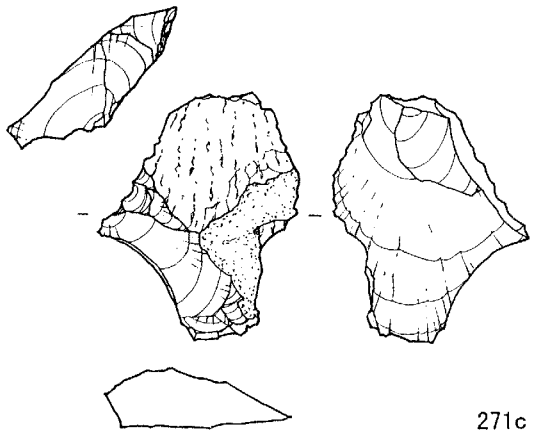
接合資料 41



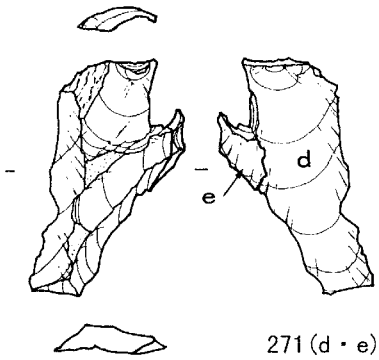
271(a～e)
BSh 1



271(a・b)



271c

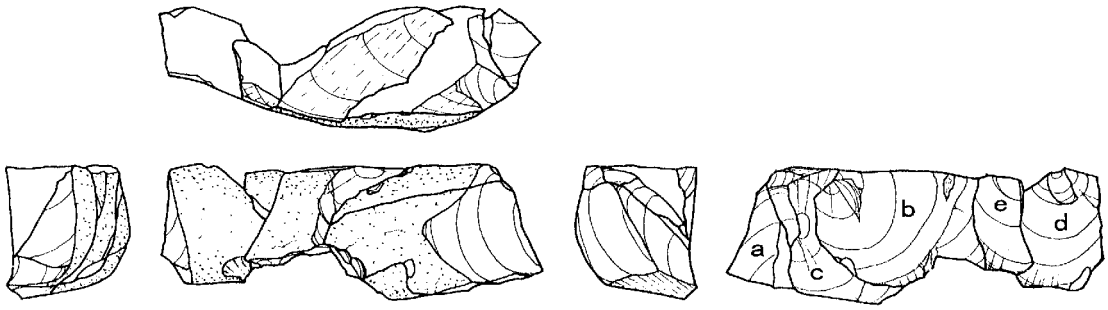


271(d・e)

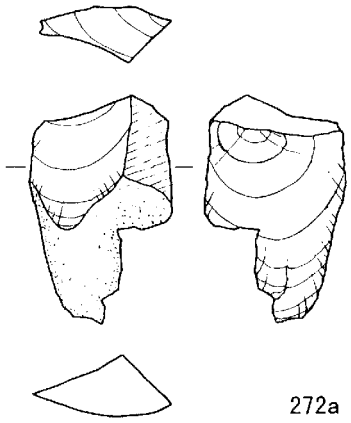
0 5cm

第110図　第２文化層　接合資料実測図（20）

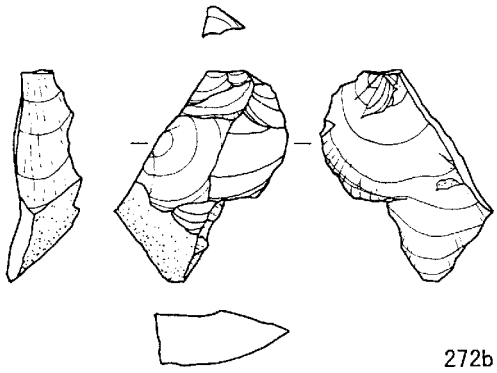
接合資料 42



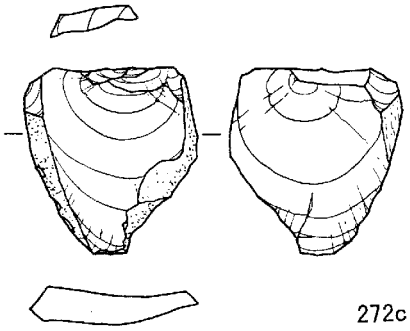
272(a～e)
BSh 1



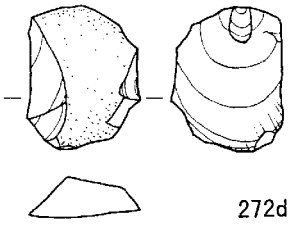
272a



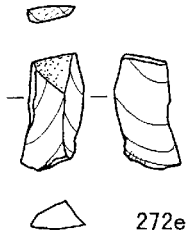
272b



272c



272d

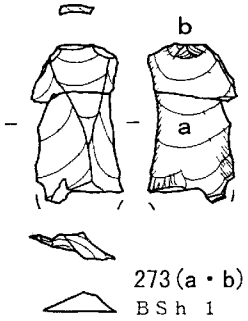


272e

0 5cm

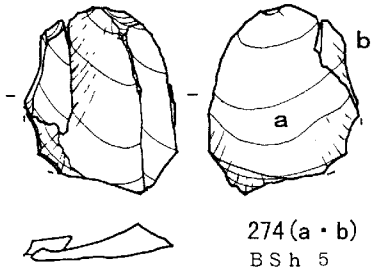
第111図　第２文化層　接合資料実測図（21）

接合資料 43



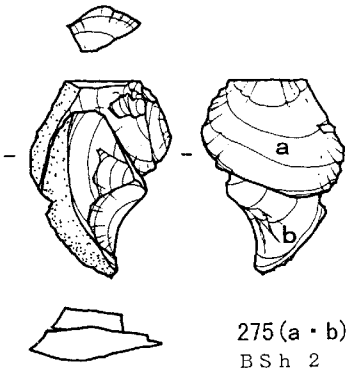
273(a・b)
BSh 1

接合資料 44



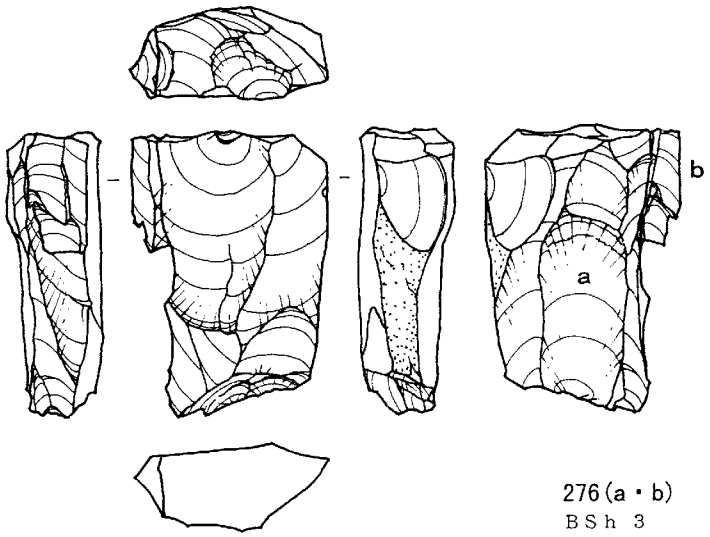
274(a・b)
BSh 5

接合資料 45

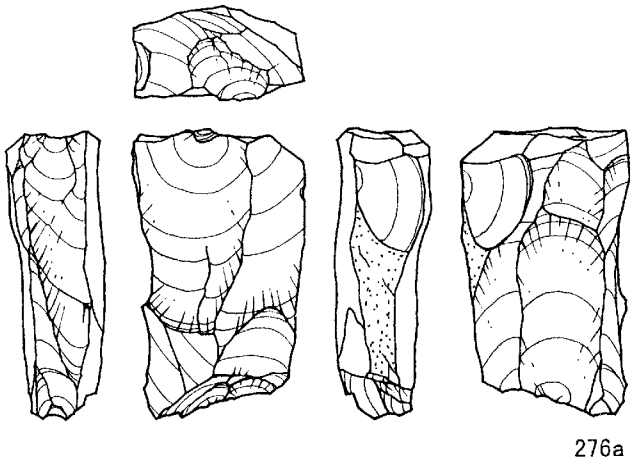


275(a・b)
BSh 2

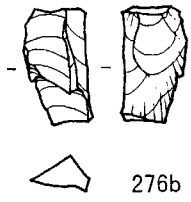
接合資料 46



276(a・b)
BSh 3



276a

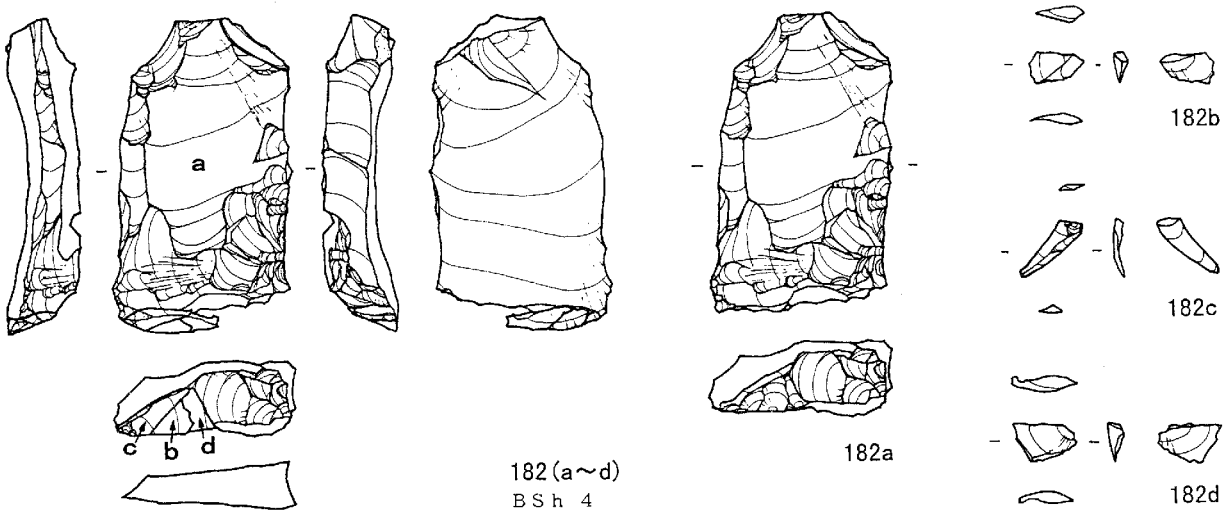


276b

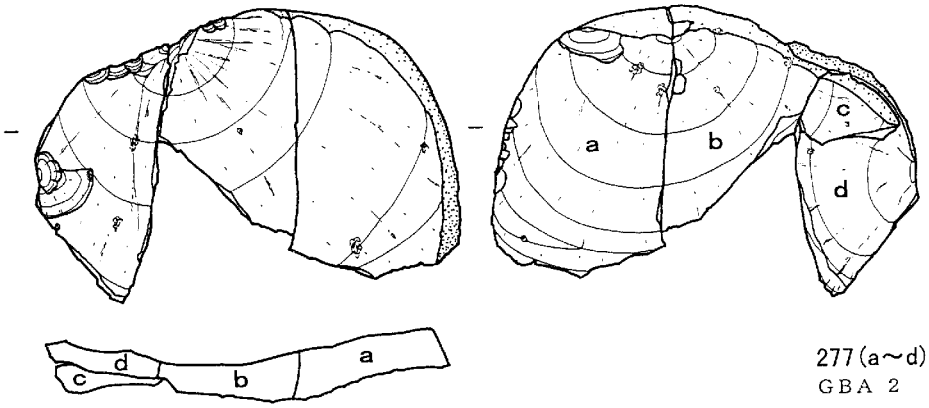
0 5 cm

第112図　第２文化層　接合資料実測図（22）

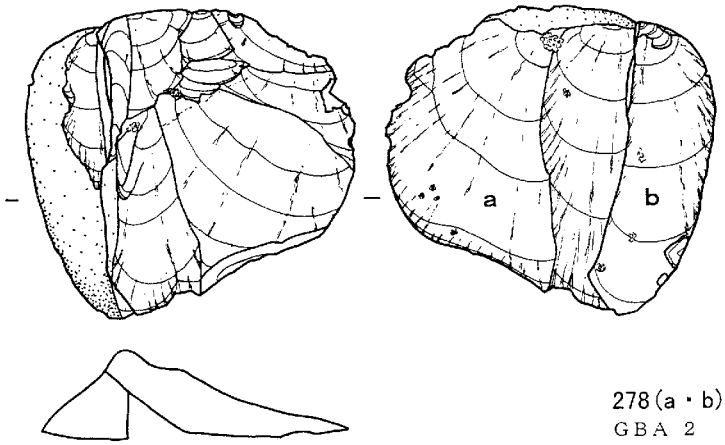
接合資料 47



接合資料 48

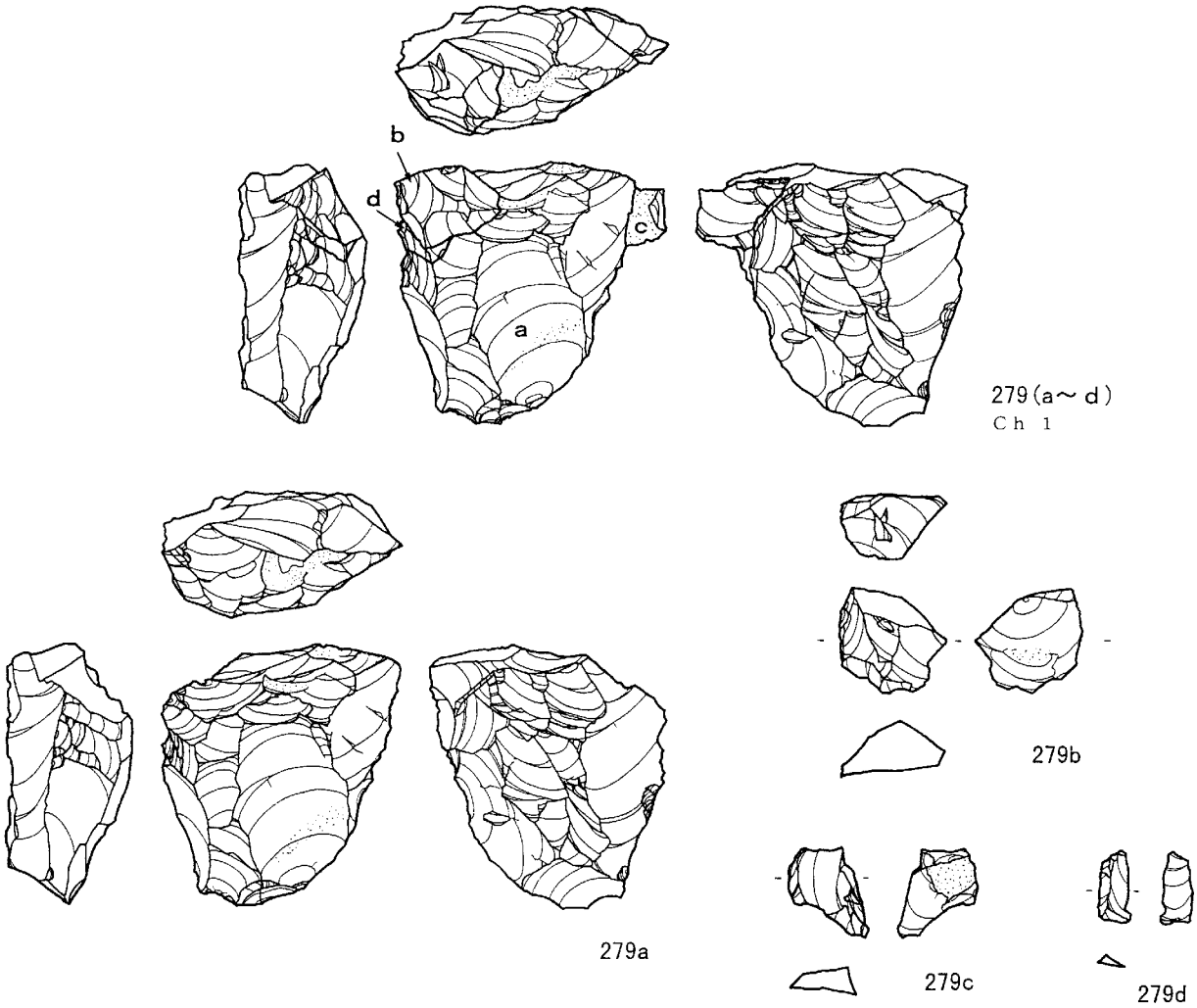


接合資料 49

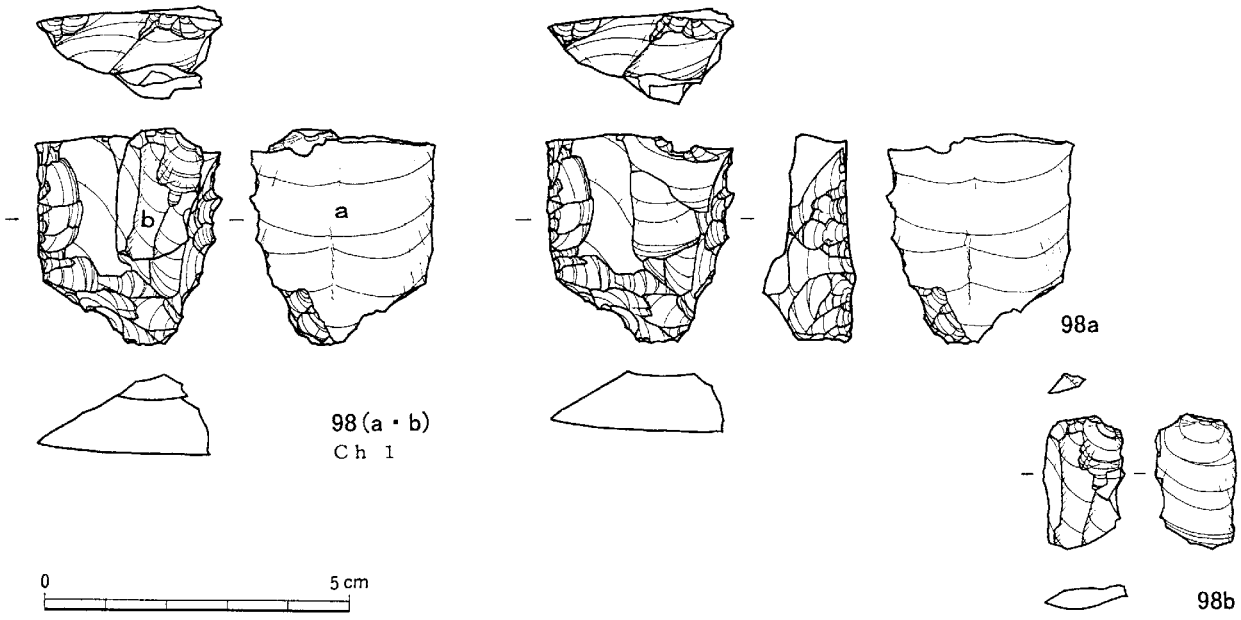


第113図　第２文化層　接合資料実測図（23）

接合資料 50

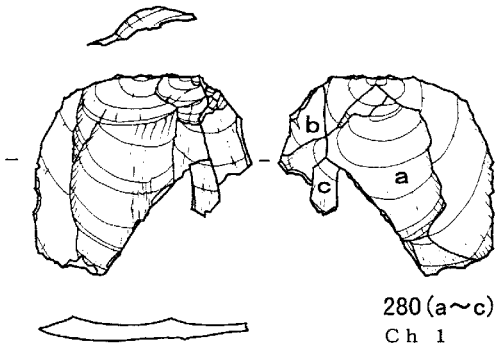


接合資料 51



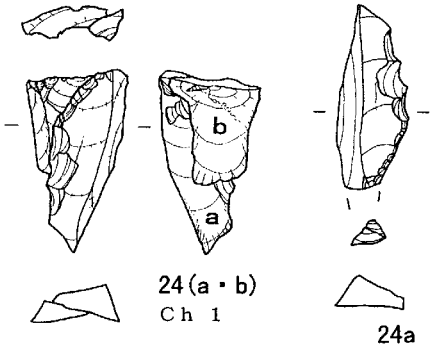
第114図　第２文化層　接合資料実測図（24）

接合資料 52



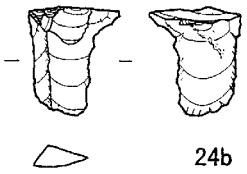
280(a～c)
Ch 1

接合資料 53



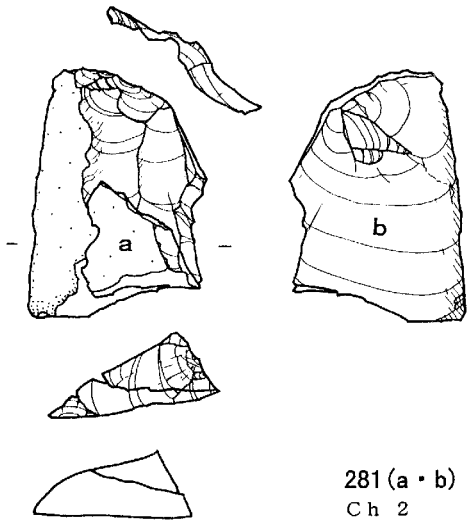
24(a・b)
Ch 1

24a



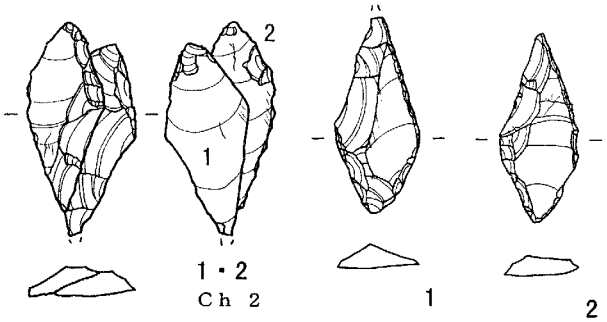
24b

接合資料 54



281(a・b)
Ch 2

接合資料 55

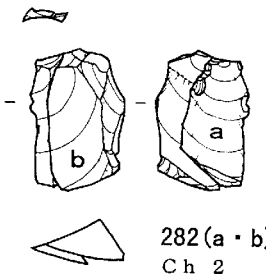


1・2
Ch 2

1

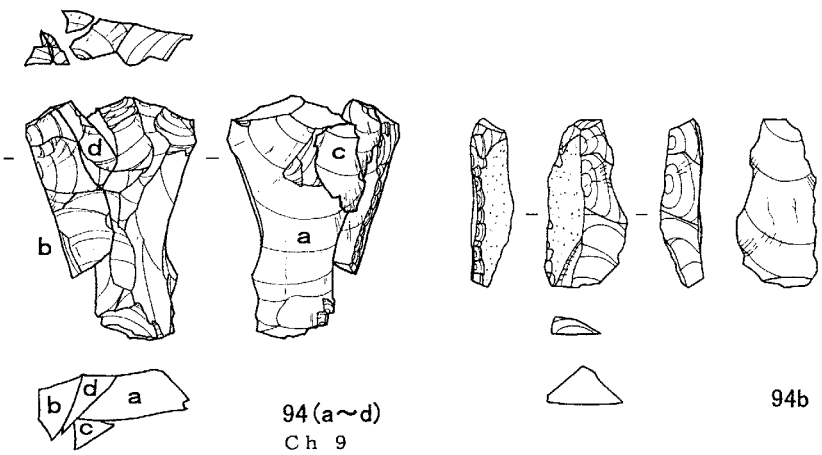
2

接合資料 56



282(a・b)
Ch 2

接合資料 57



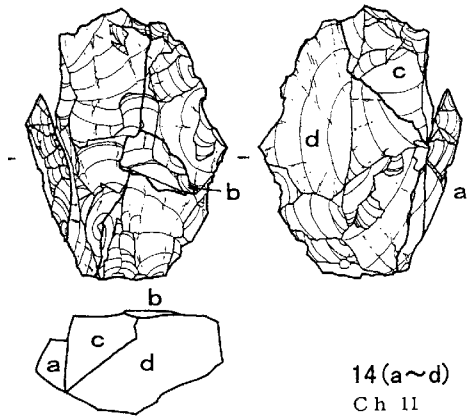
94(a～d)
Ch 9

94b

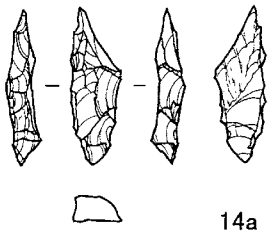
0 5cm

第115図　第２文化層　接合資料実測図（25）

接合資料 58

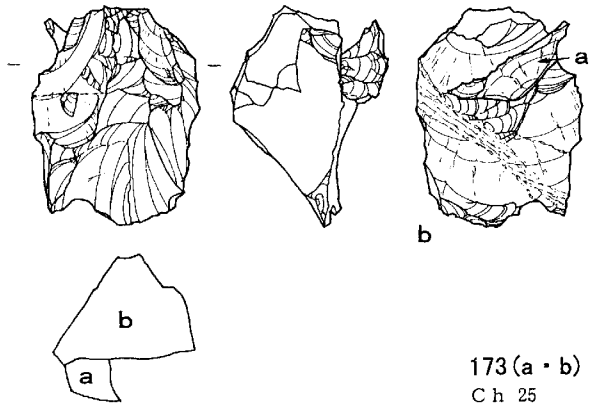


14(a～d)
Ch 11

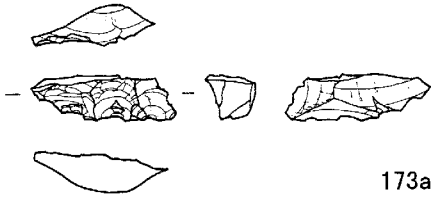


14a

接合資料 59

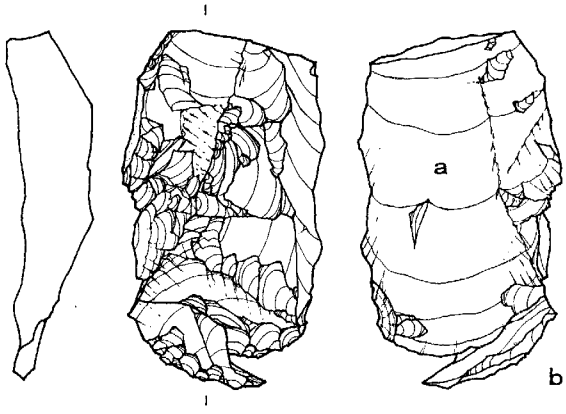


173(a・b)
Ch 25

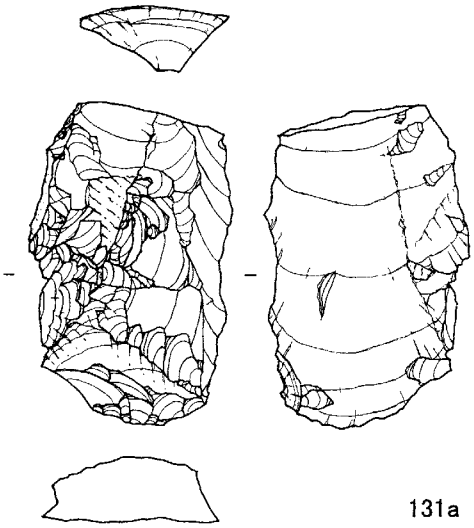


173a

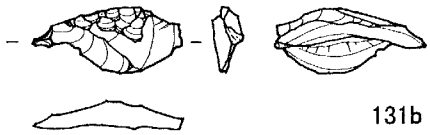
接合資料 60



131(a・b)
Ch 18



131a

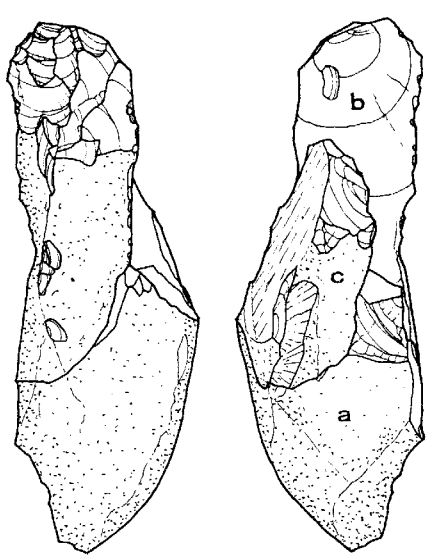


131b

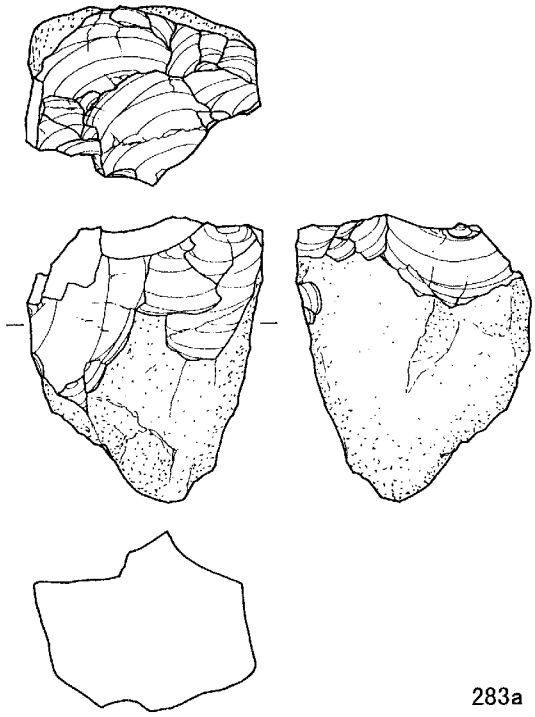
0 5 cm

第116図　第２文化層　接合資料実測図（26）

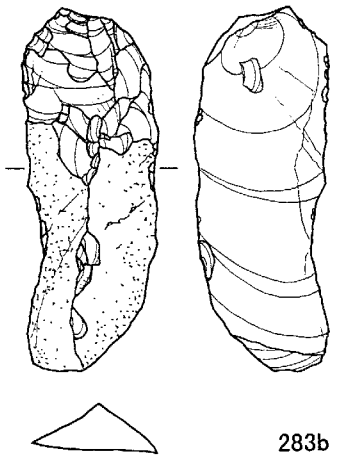
接合資料 61



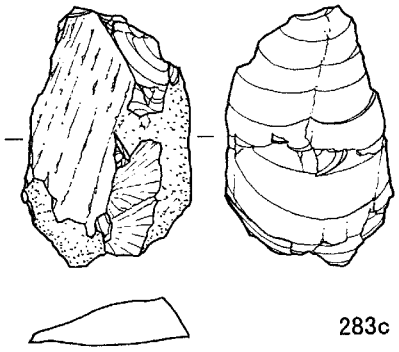
283(a～c)
Ch 10



283a

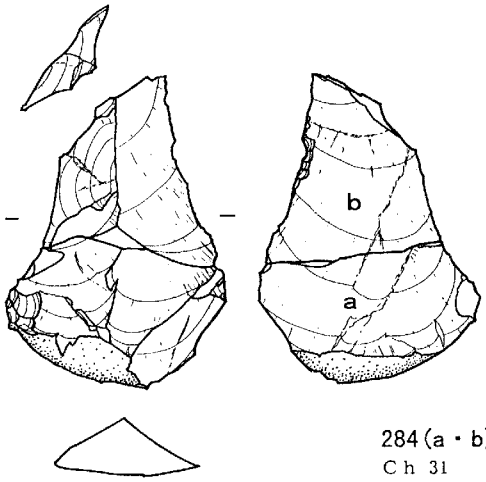


283b



283c

接合資料 62

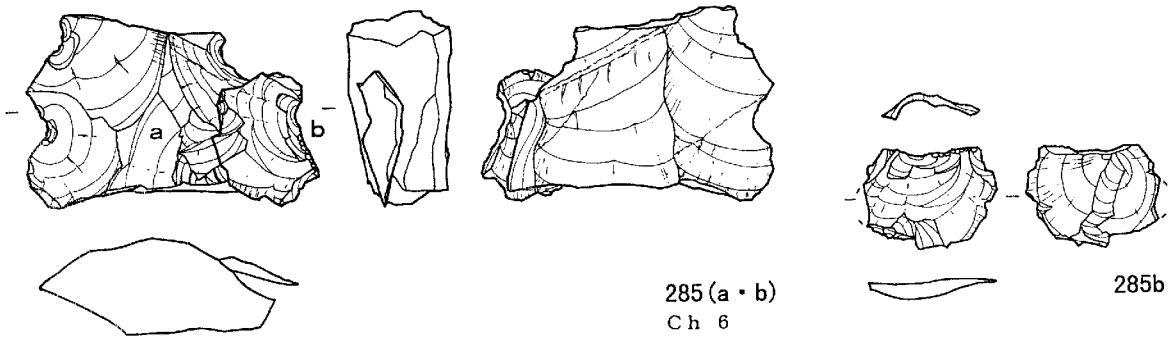


284(a・b)
Ch 31

0 5cm

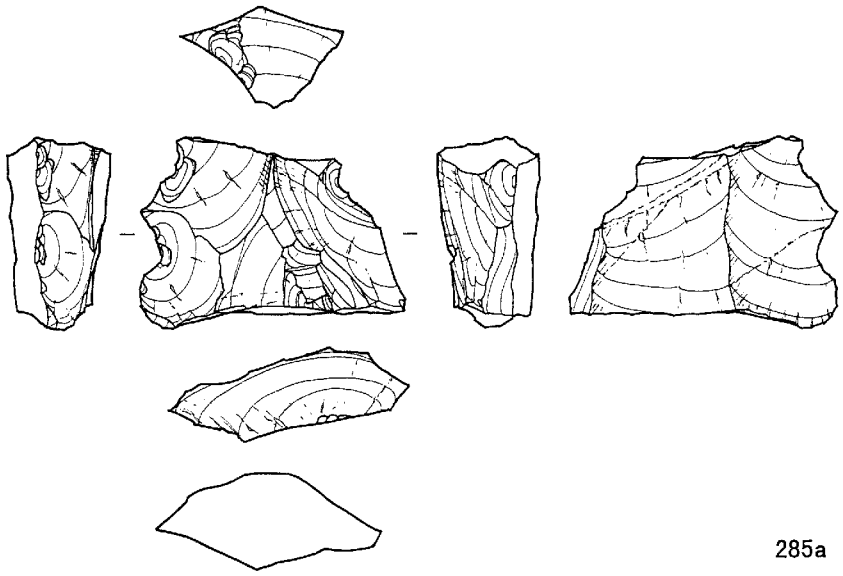
第117図　第２文化層　接合資料実測図（27）

接合資料 63



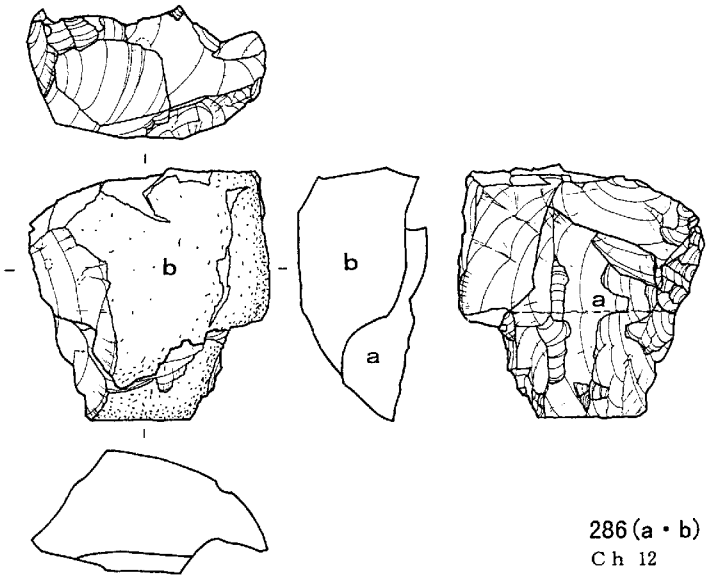
285(a・b)
Ch 6

285b



285a

接合資料 64

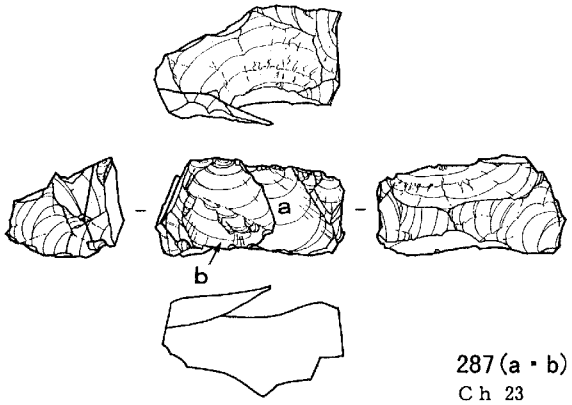


286(a・b)
Ch 12

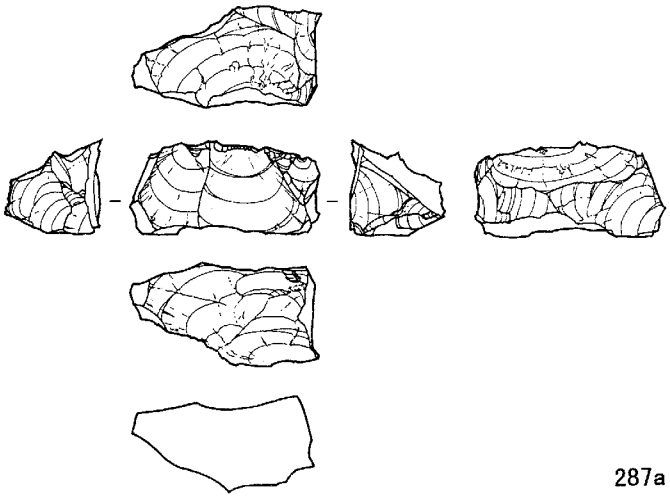
0 5 cm

第118図　第２文化層　接合資料実測図（28）

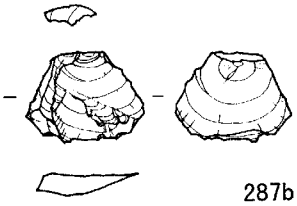
接合資料 65



287(a・b)
Ch 23

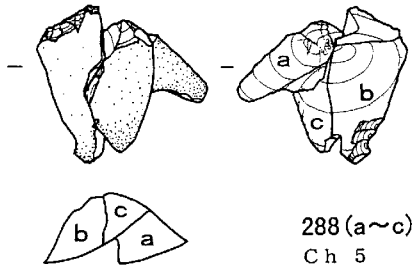


287a



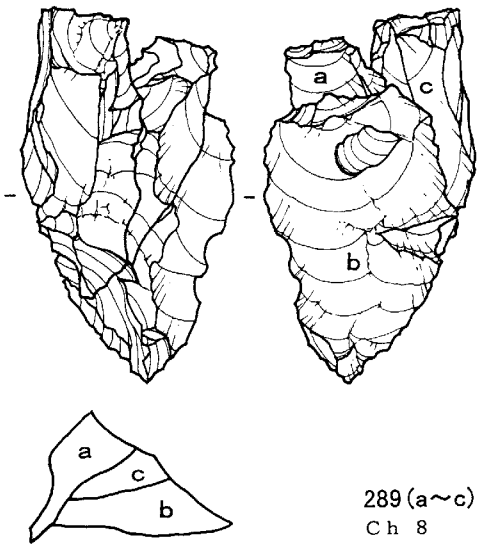
287b

接合資料 66



288(a～c)
Ch 5

接合資料 67

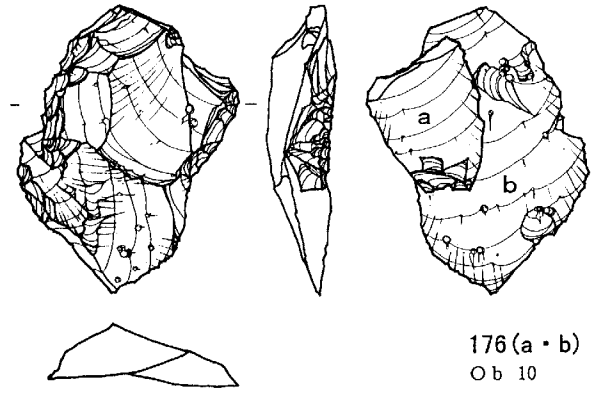


289(a～c)
Ch 8

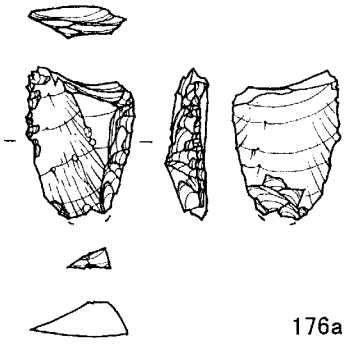
0 5cm

第119図　第２文化層　接合資料実測図（29）

接合資料 68

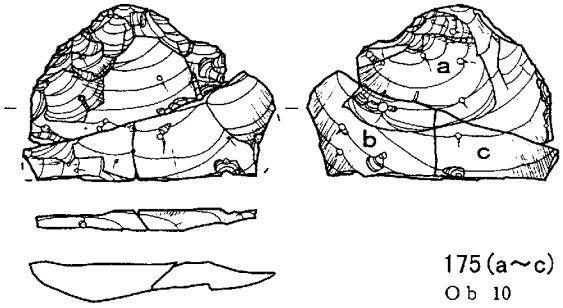


176(a・b)
Ob 10

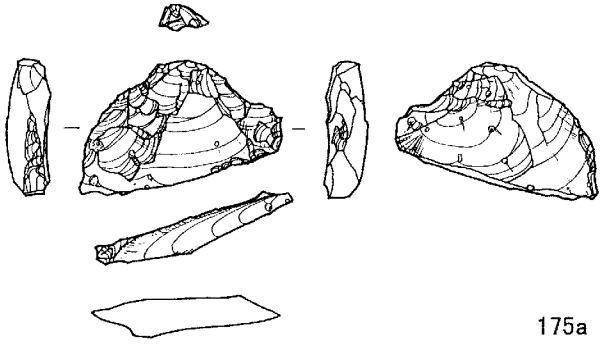


176a

接合資料 69

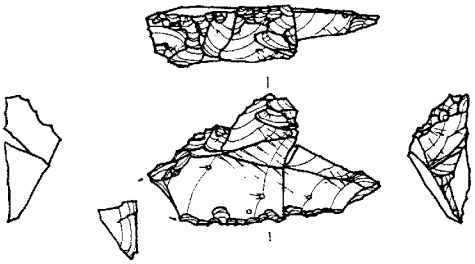


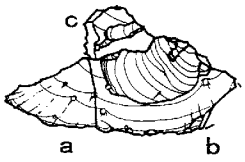
175(a～c)
Ob 10



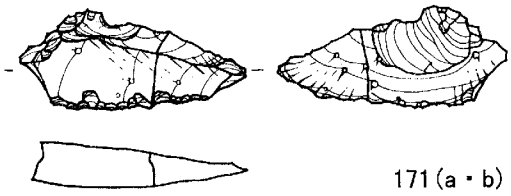
175a

接合資料 70

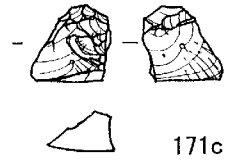




171(a～c)
Ob 10

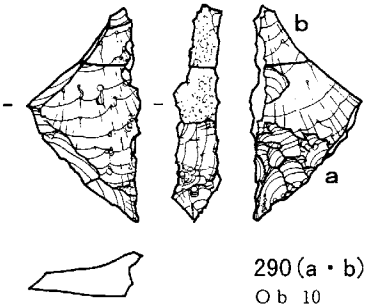


171(a・b)



171c

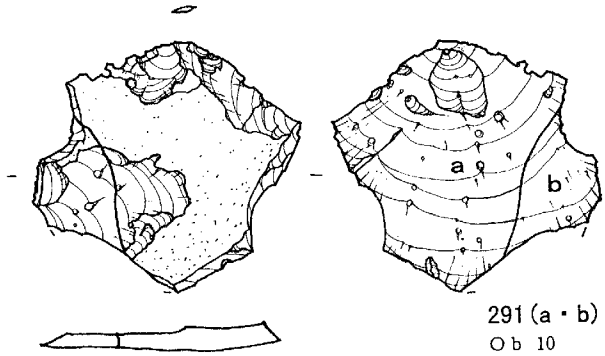
接合資料 71



290(a・b)
Ob 10

0 5cm

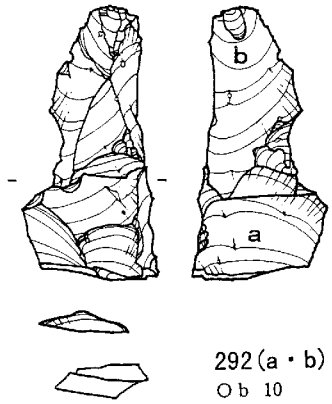
接合資料 72



291(a・b)
Ob 10

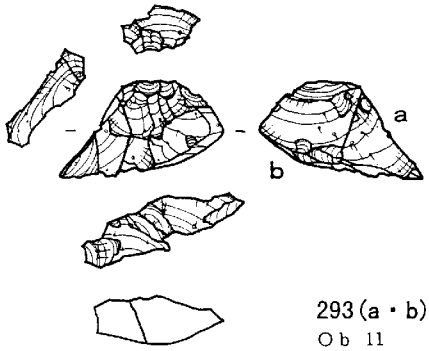
第120図　第２文化層　接合資料実測図（30）

接合資料 73



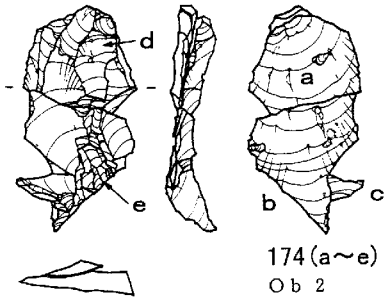
292(a・b)
Ob 10

接合資料 74

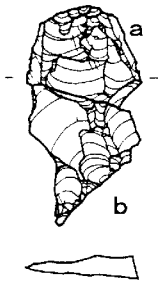


293(a・b)
Ob 11

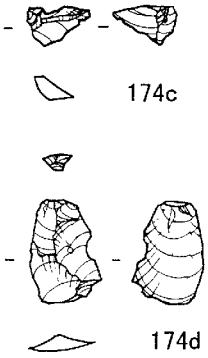
接合資料 75



174(a～e)
Ob 2



174(a・b)

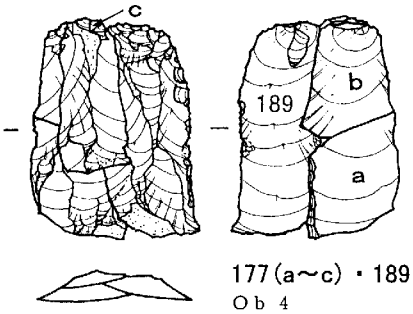


174c

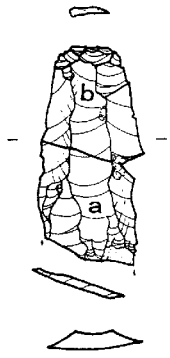
174d

174e

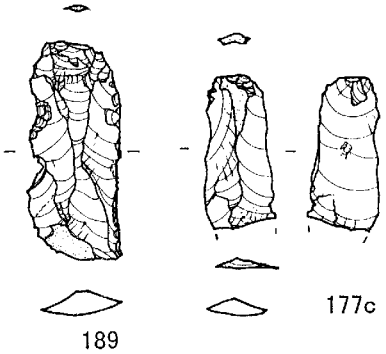
接合資料 76



177(a～c)・189
Ob 4



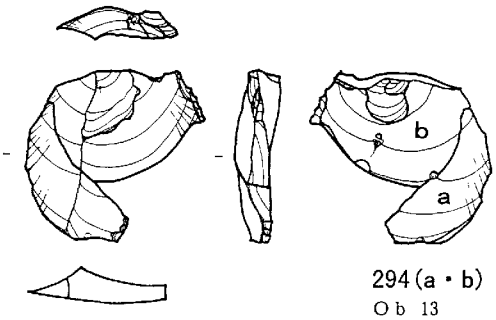
177(a・b)



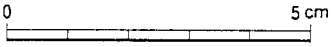
189

177c

接合資料 77

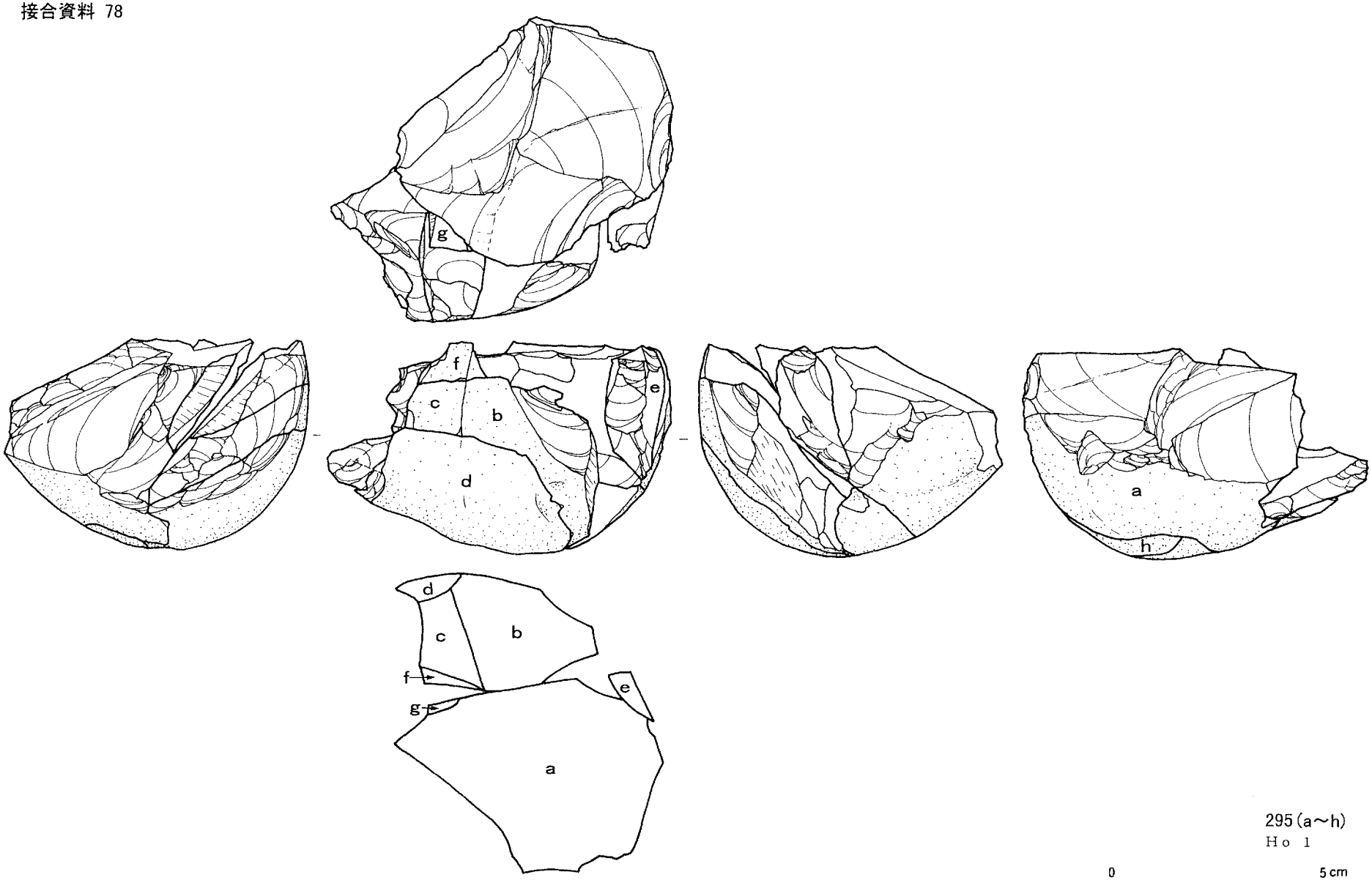


294(a・b)
Ob 13

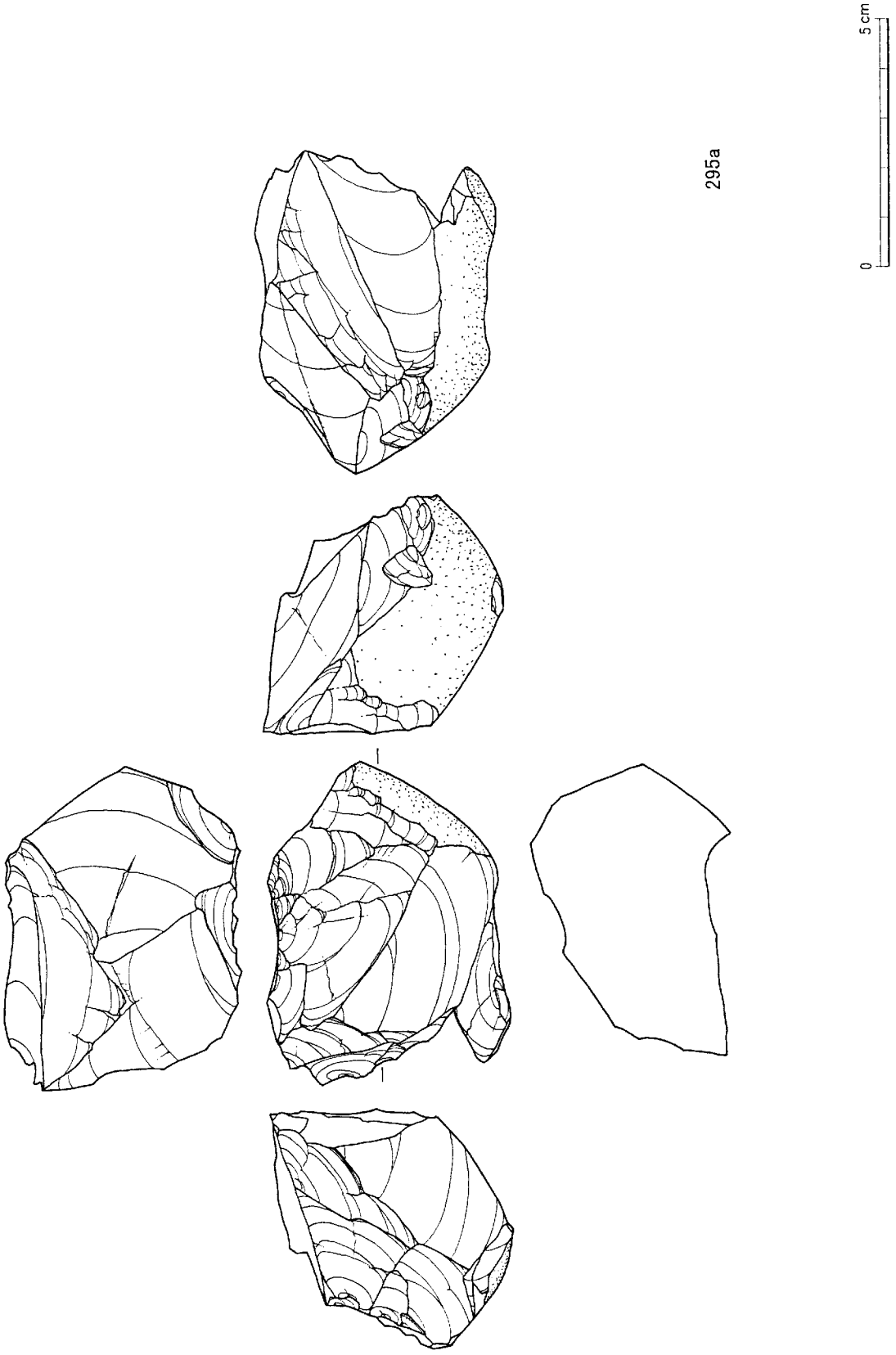


第121図　第２文化層　接合資料実測図（31）

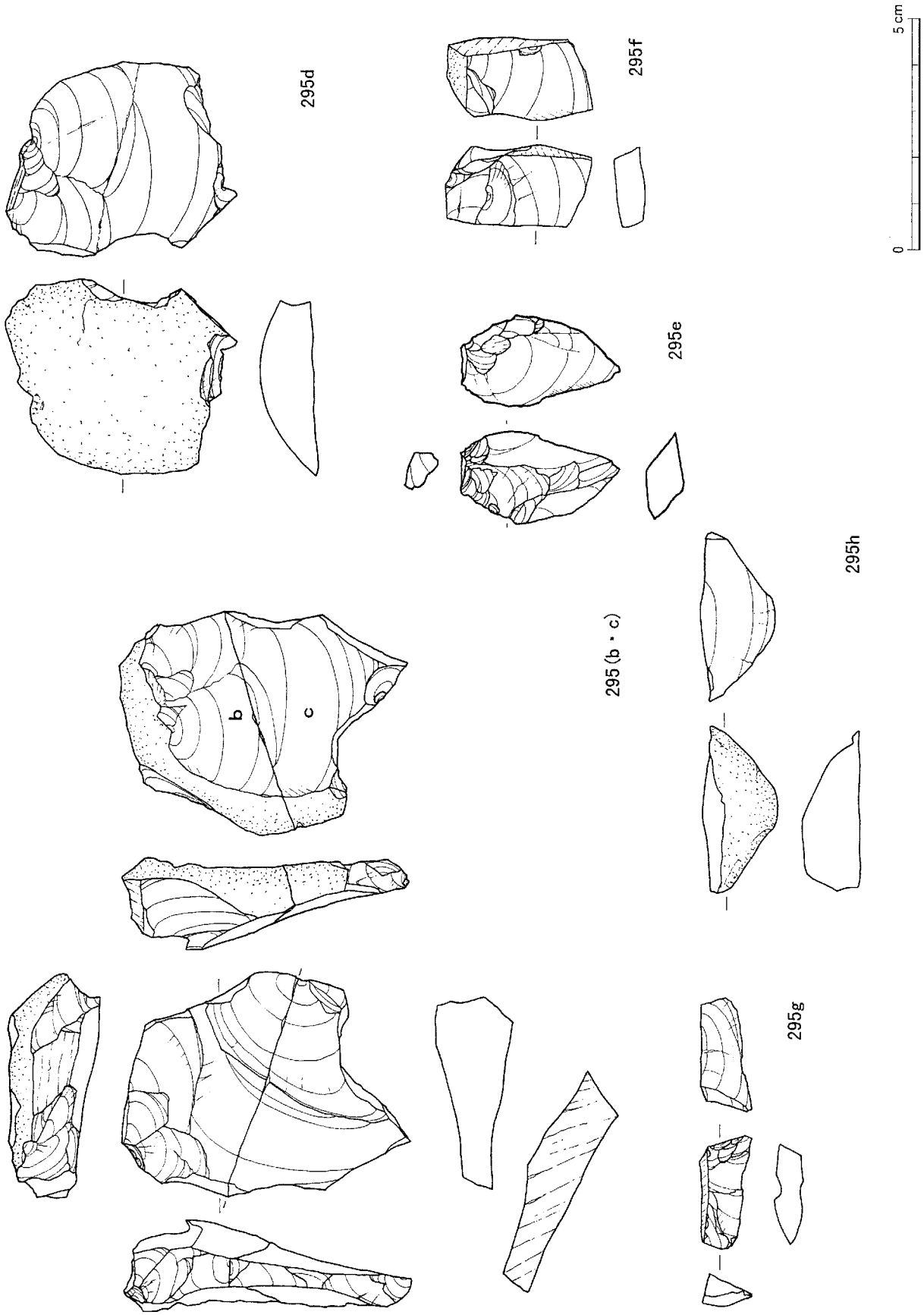
接合資料 78



第122図　第２文化層　接合資料実測図（32）

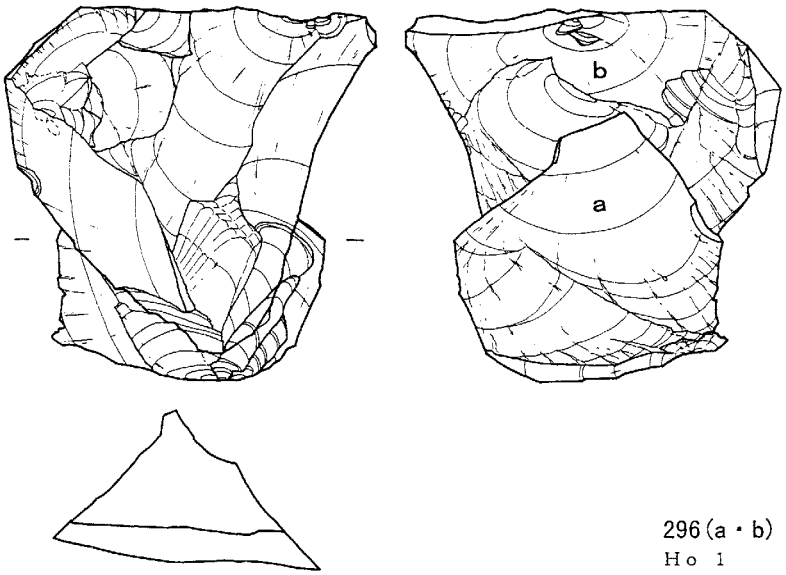


第123図　第２文化層　接合資料実測図（33）



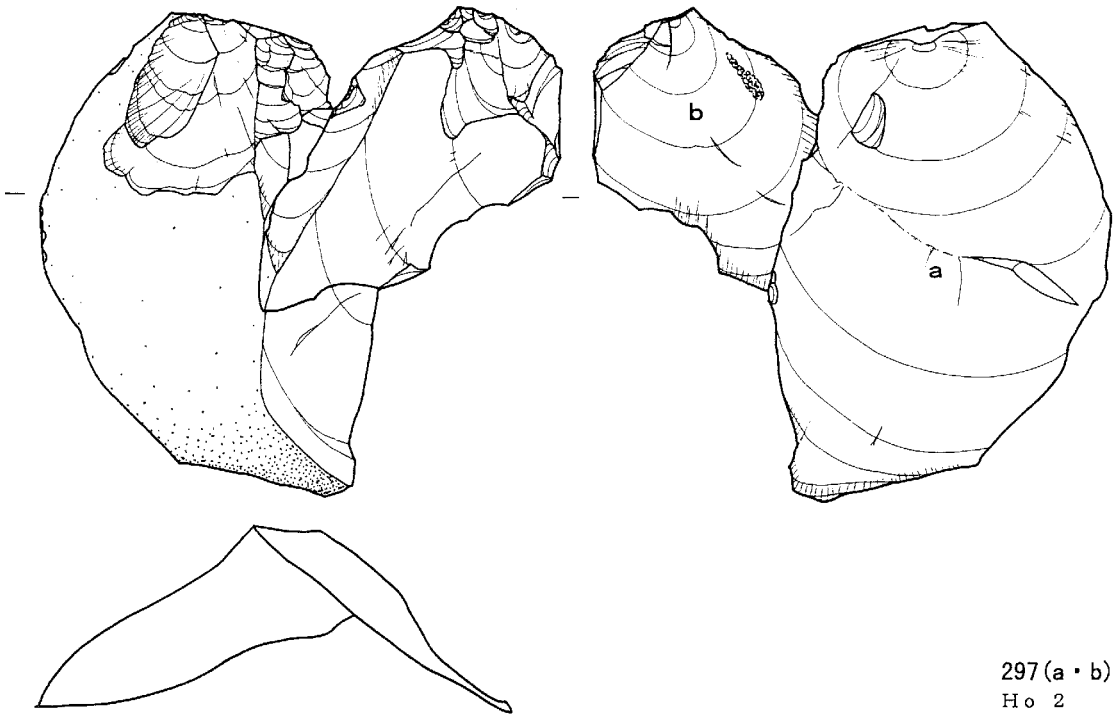
第124図　第２文化層　接合資料実測図（34）

接合資料 79



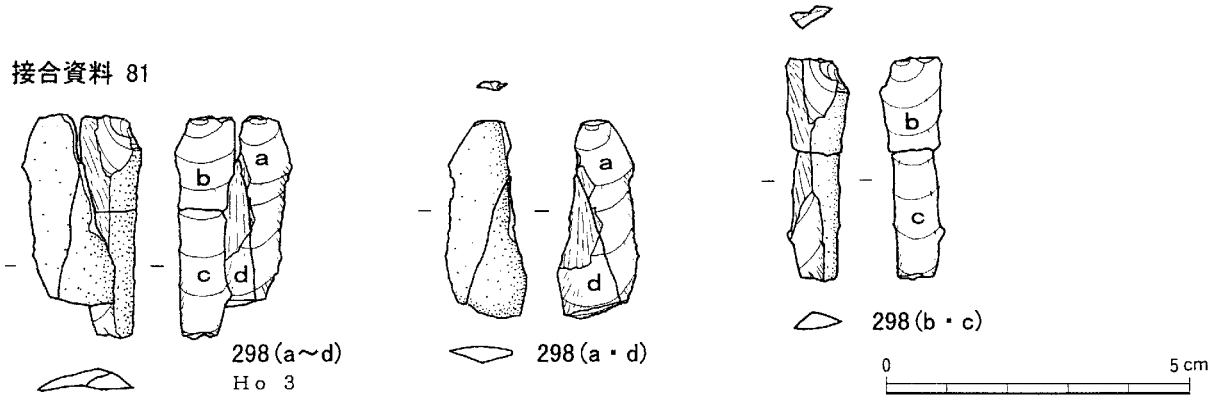
296(a・b)
Ho 1

接合資料 80



297(a・b)
Ho 2

接合資料 81



298(a～d)
Ho 3

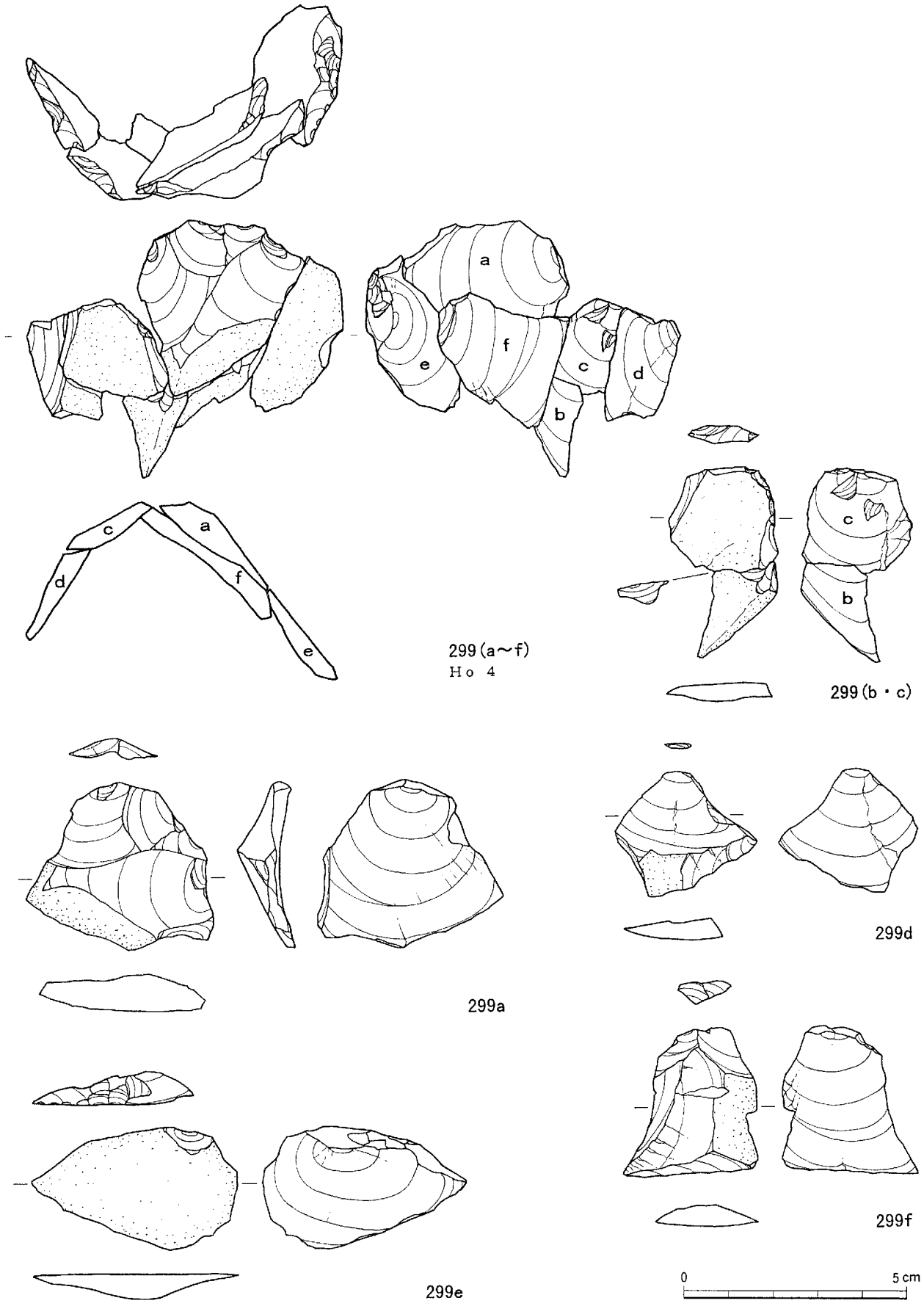
298(a・d)

298(b・c)

0 5cm

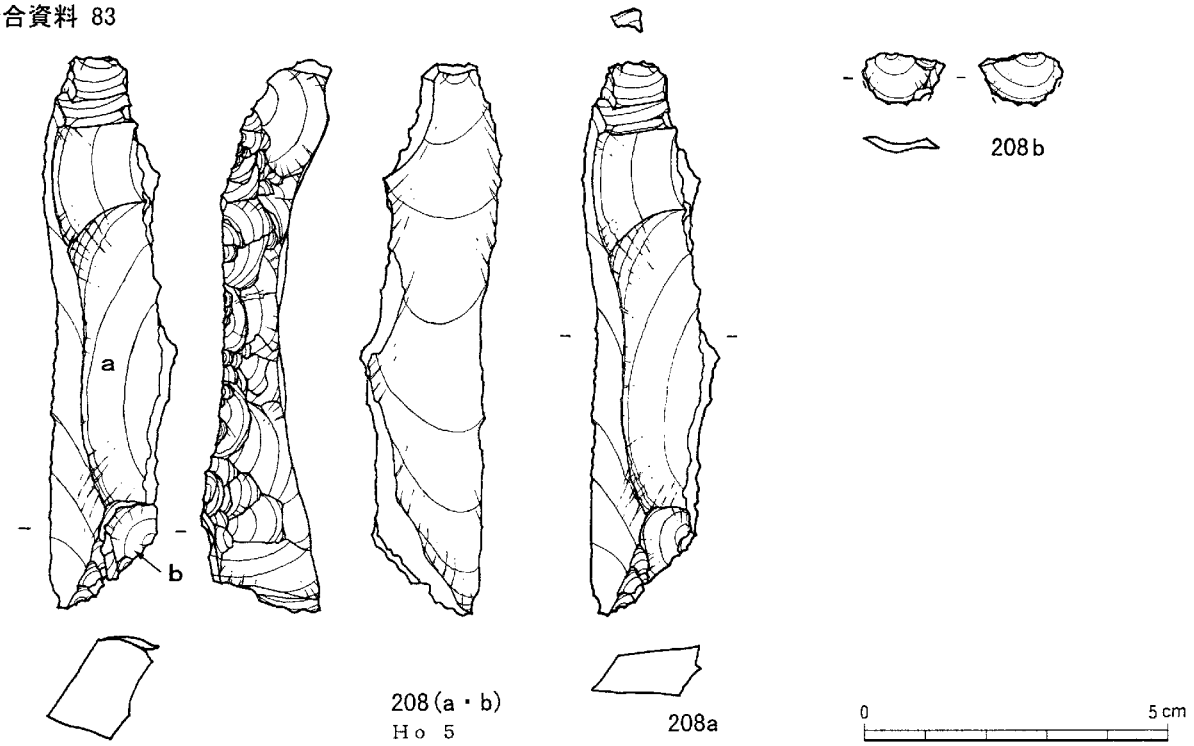
第125図　第２文化層　接合資料実測図（35）

接合資料 82

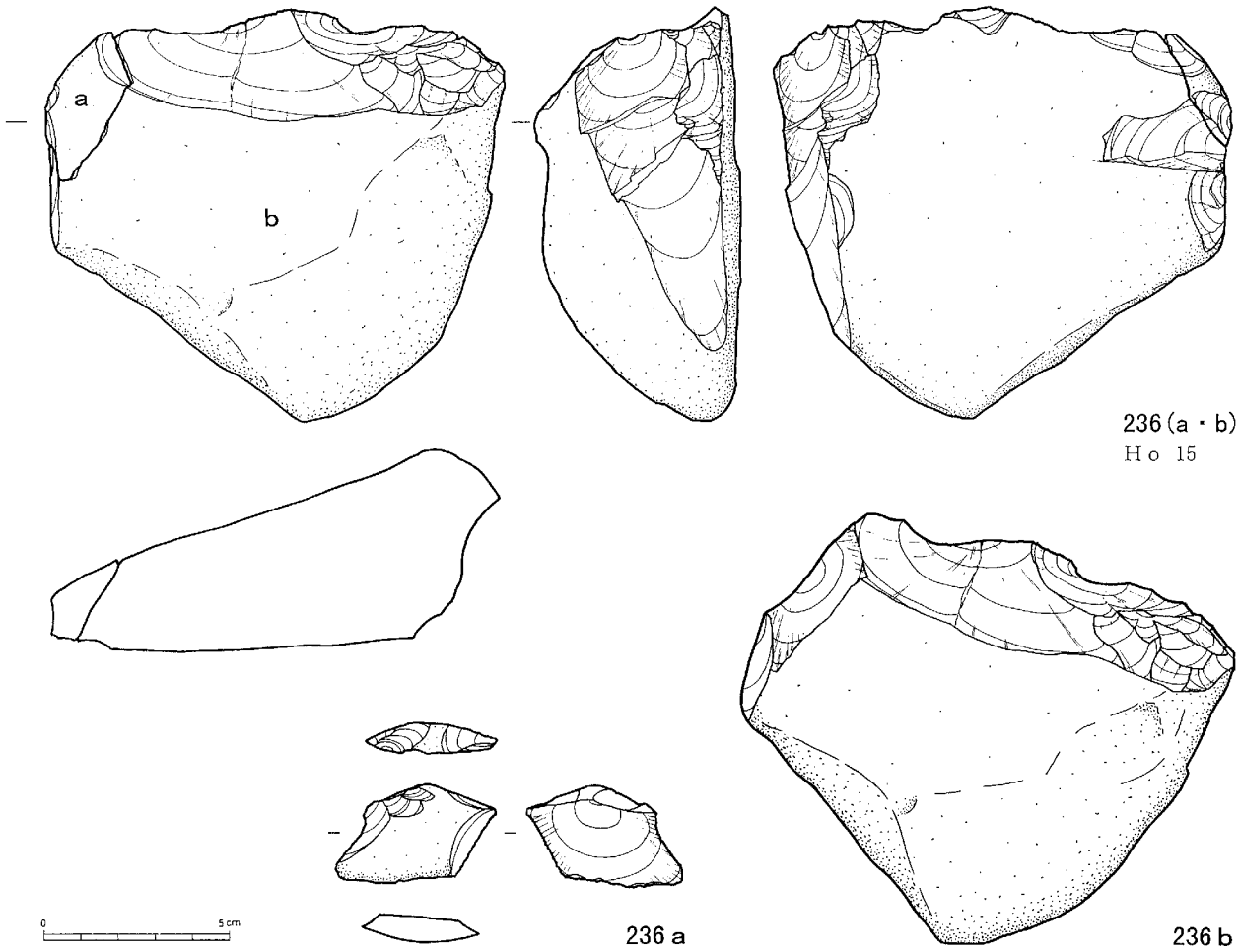


第126図　第２文化層　接合資料実測図（36）

接合資料 83

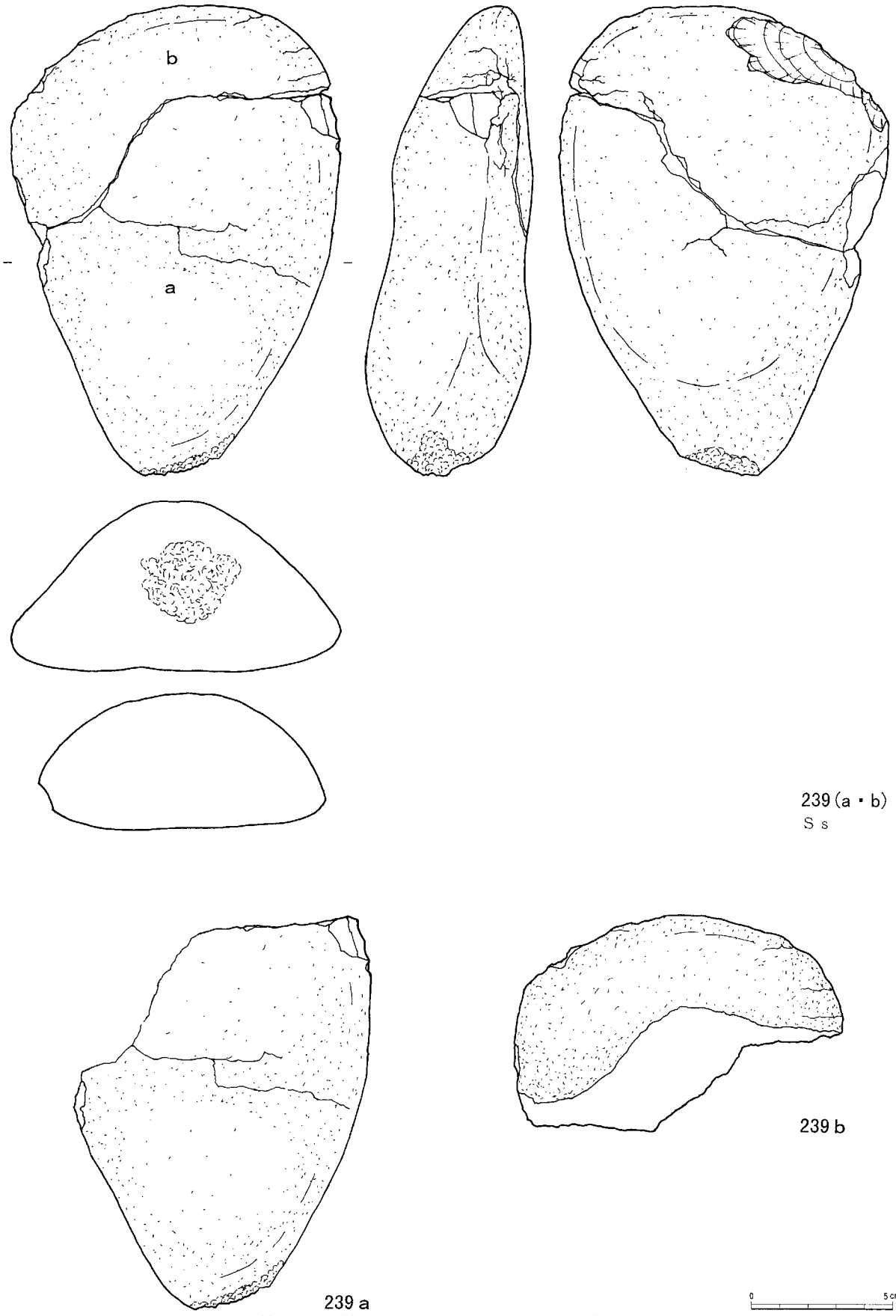


接合資料 84



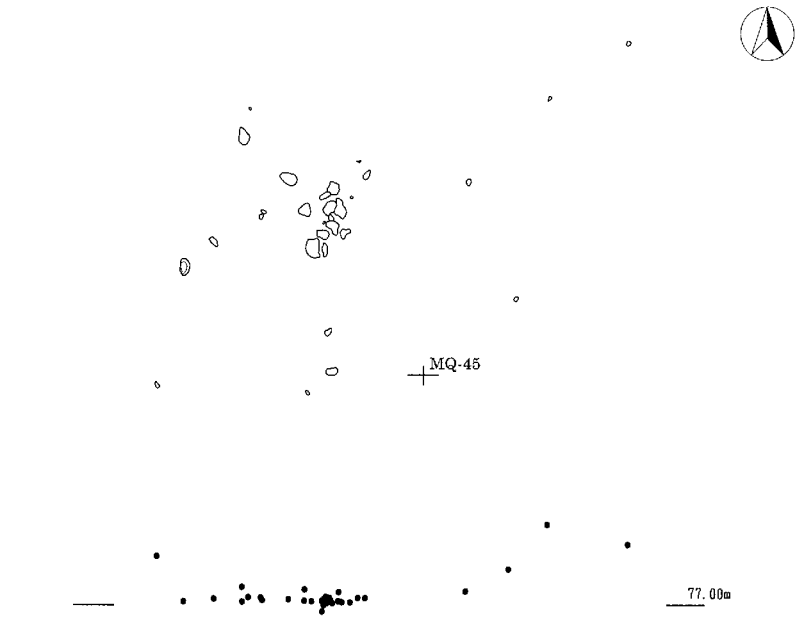
第127図　第２文化層　接合資料実測図（37）

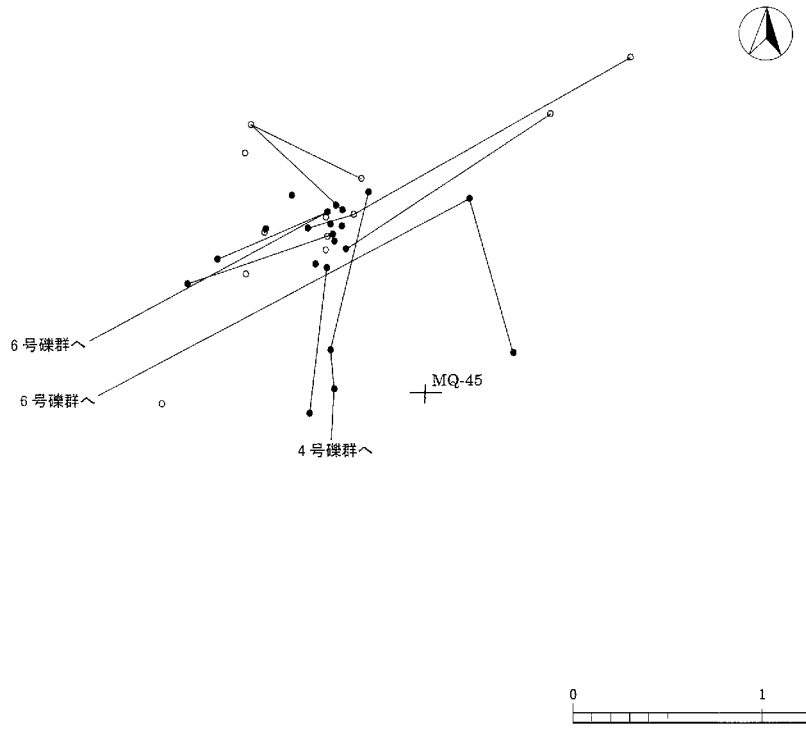
接合資料85



第128図　第２文化層　接合資料実測図（38）

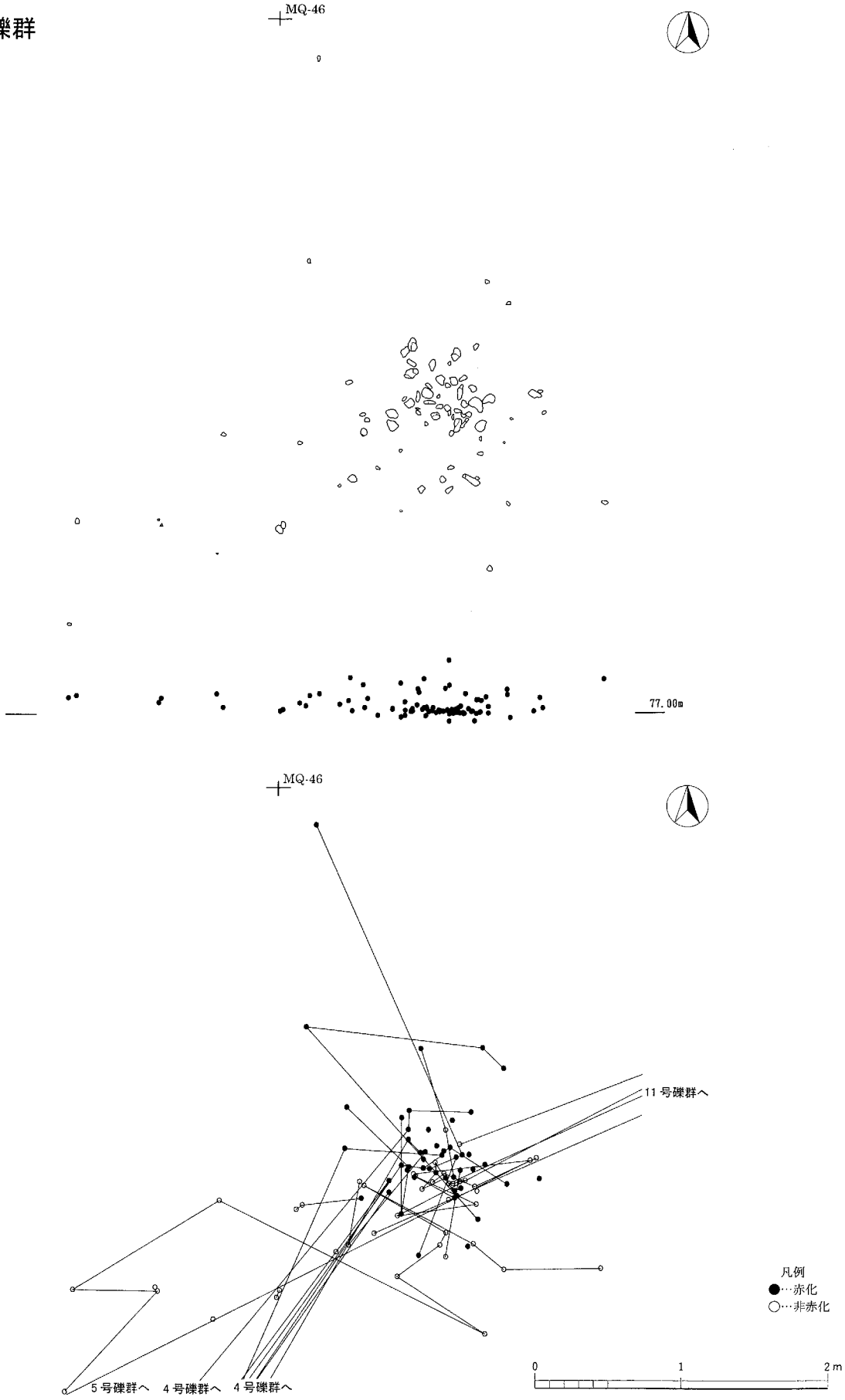
1号礫群





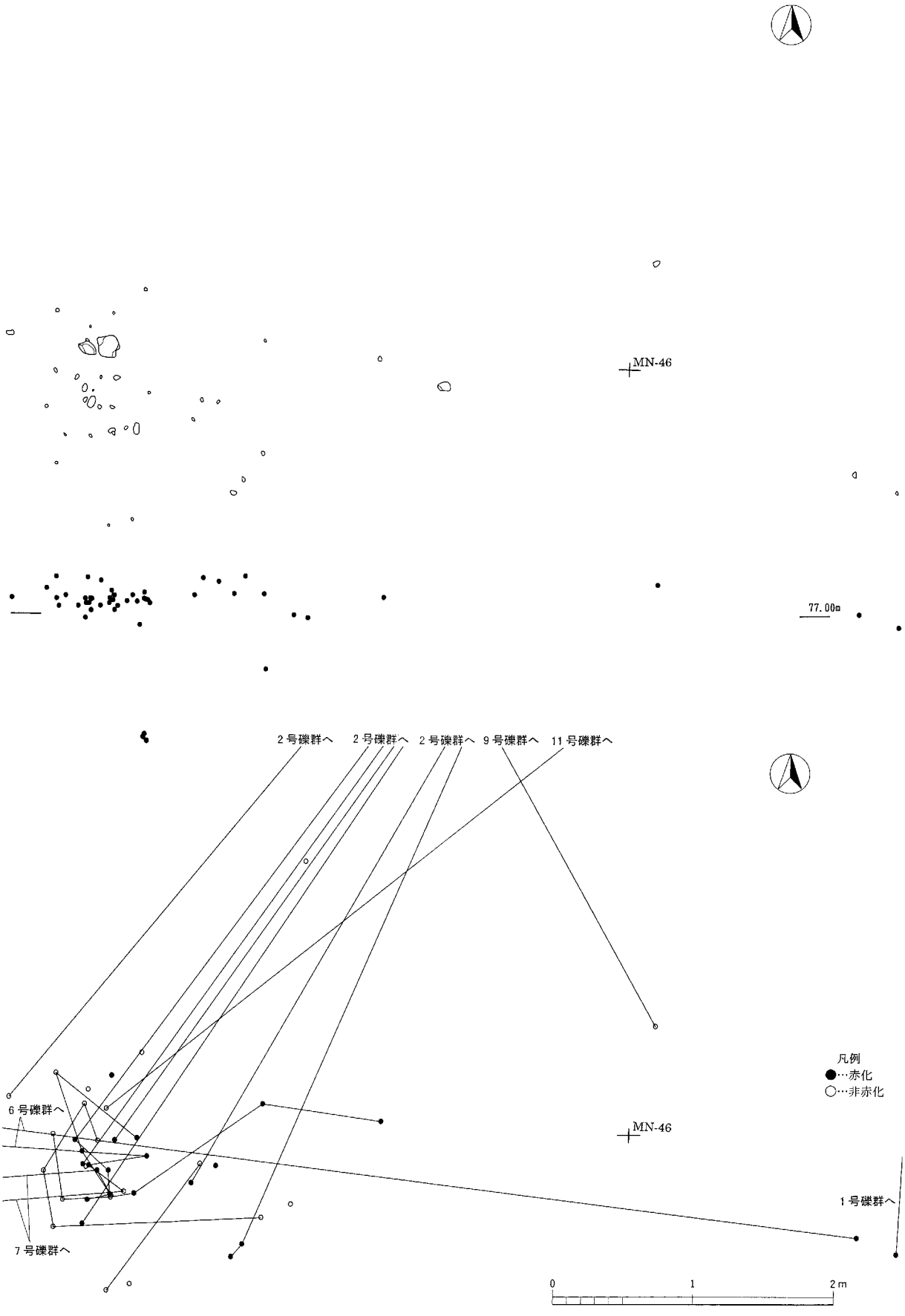
第129図　第２文化層　礫群実測図（１）／礫群接合関係図（１）

2号礫群



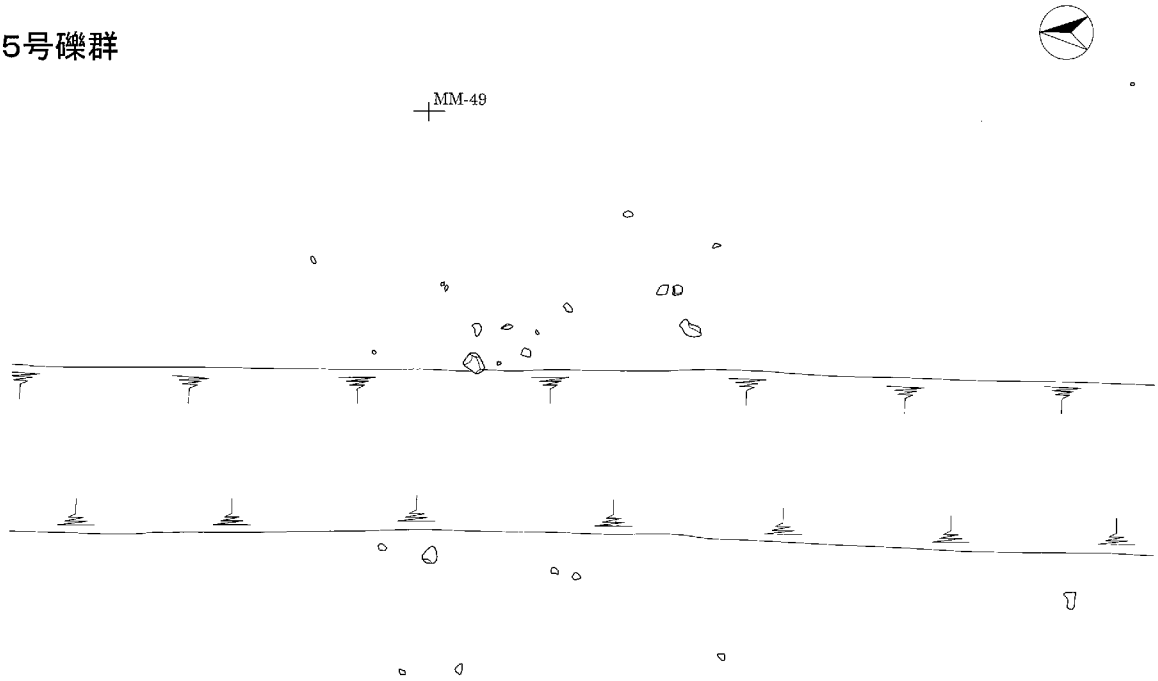
第130図　第２文化層　礫群実測図（２）／礫群接合関係図（２）

4号礫群

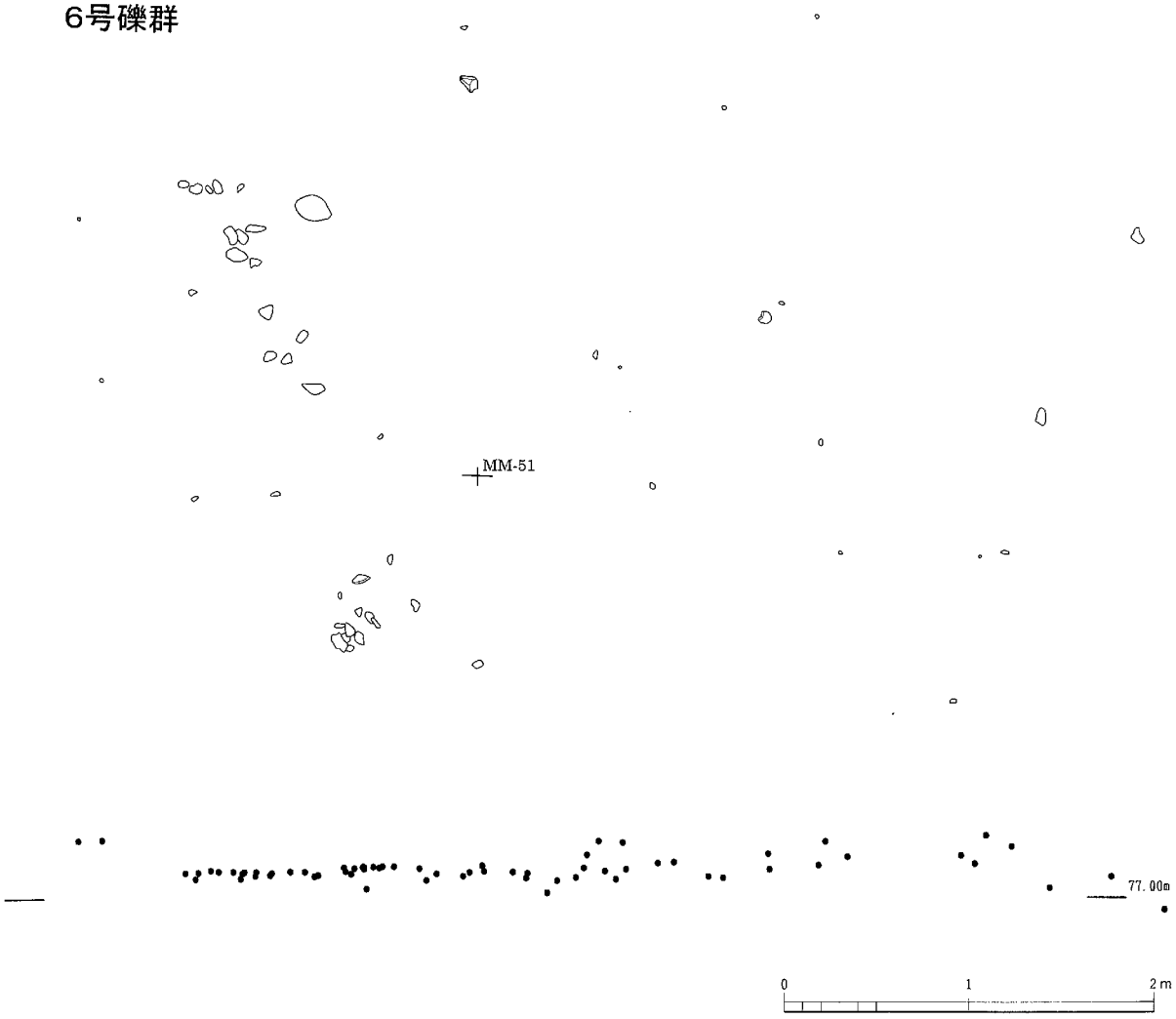


第131図　第２文化層　礫群実測図（３）／礫群接合関係図（３）

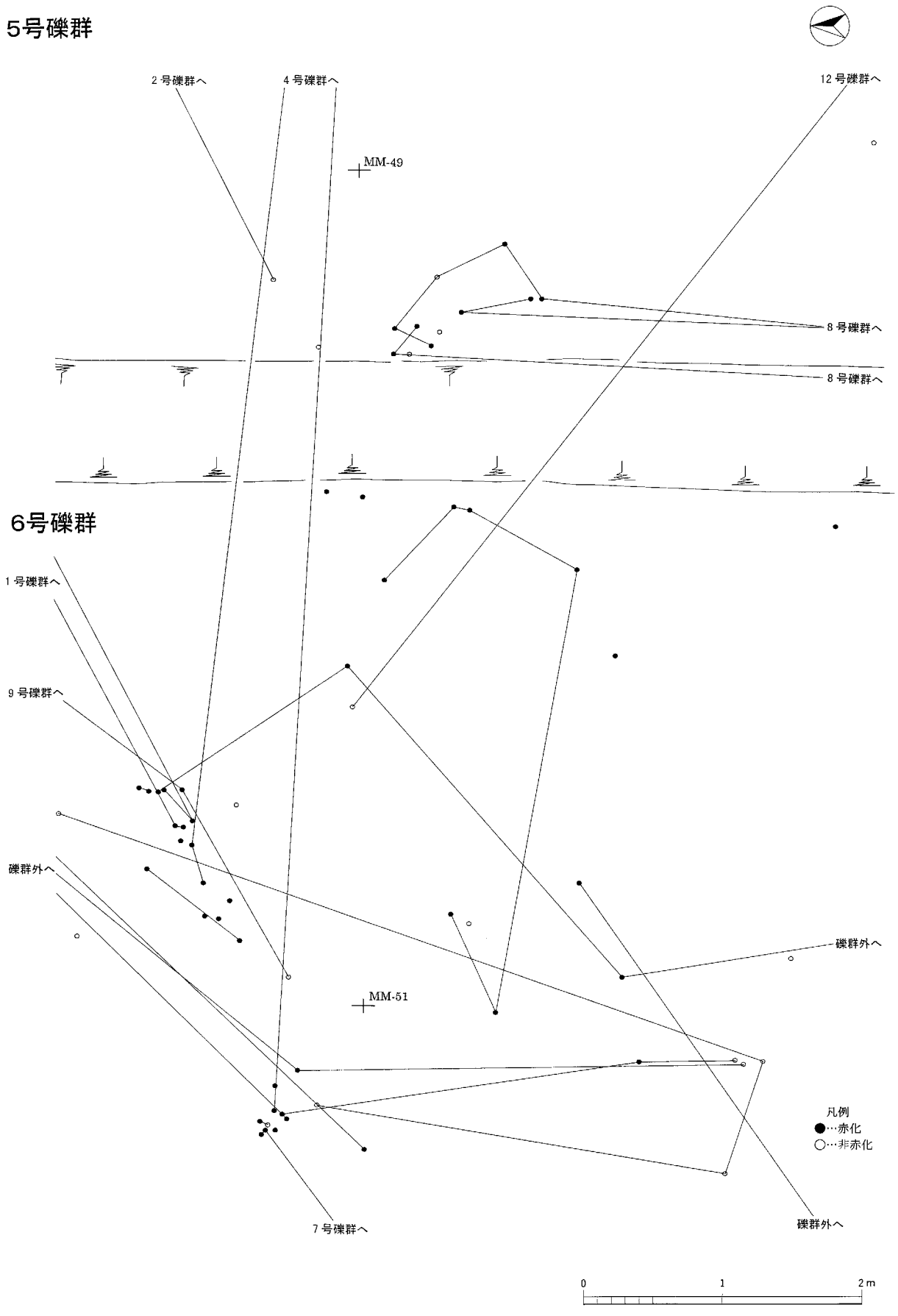
5号礫群



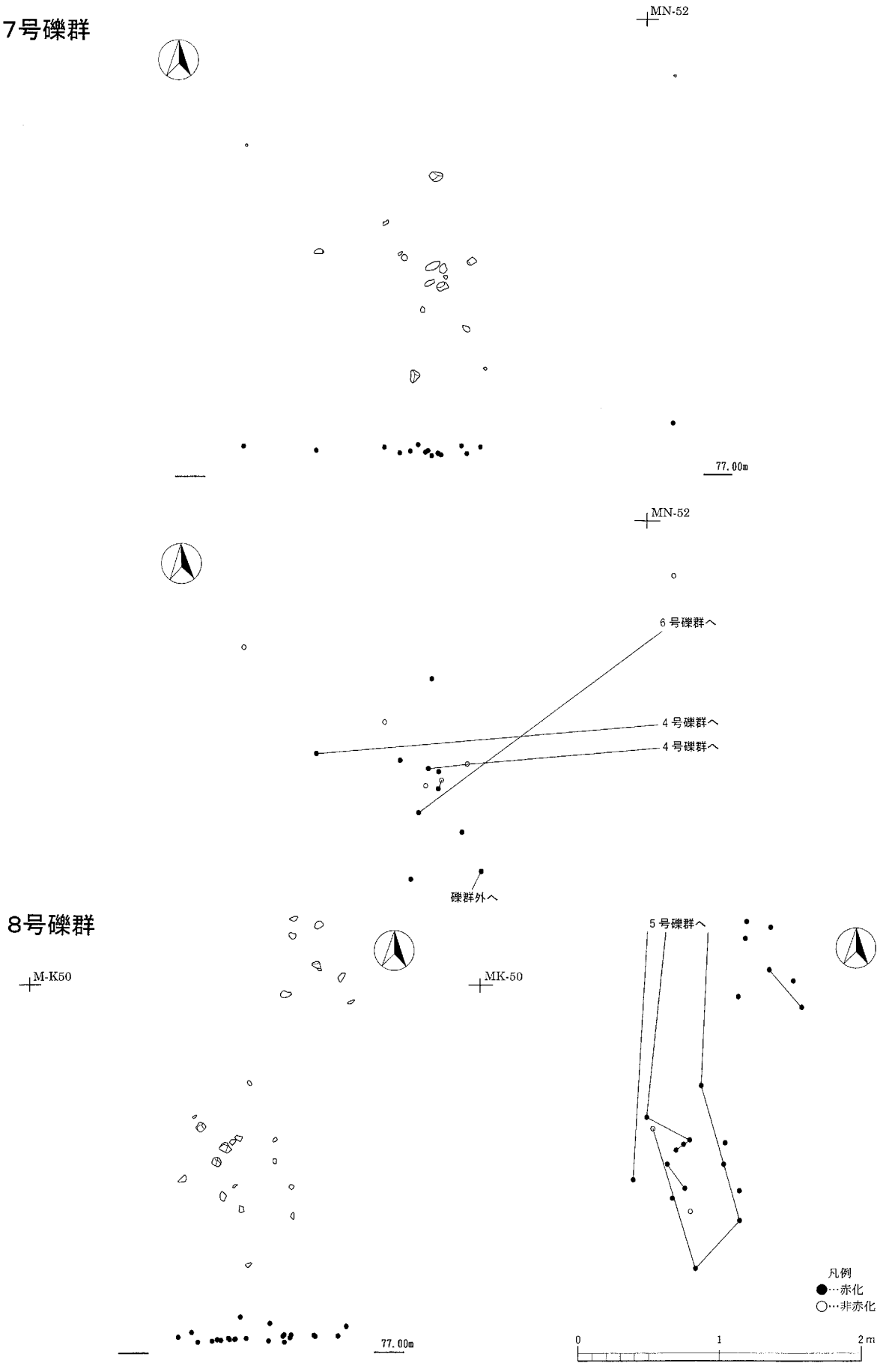
6号礫群



第132図　第２文化層　礫群実測図（４）

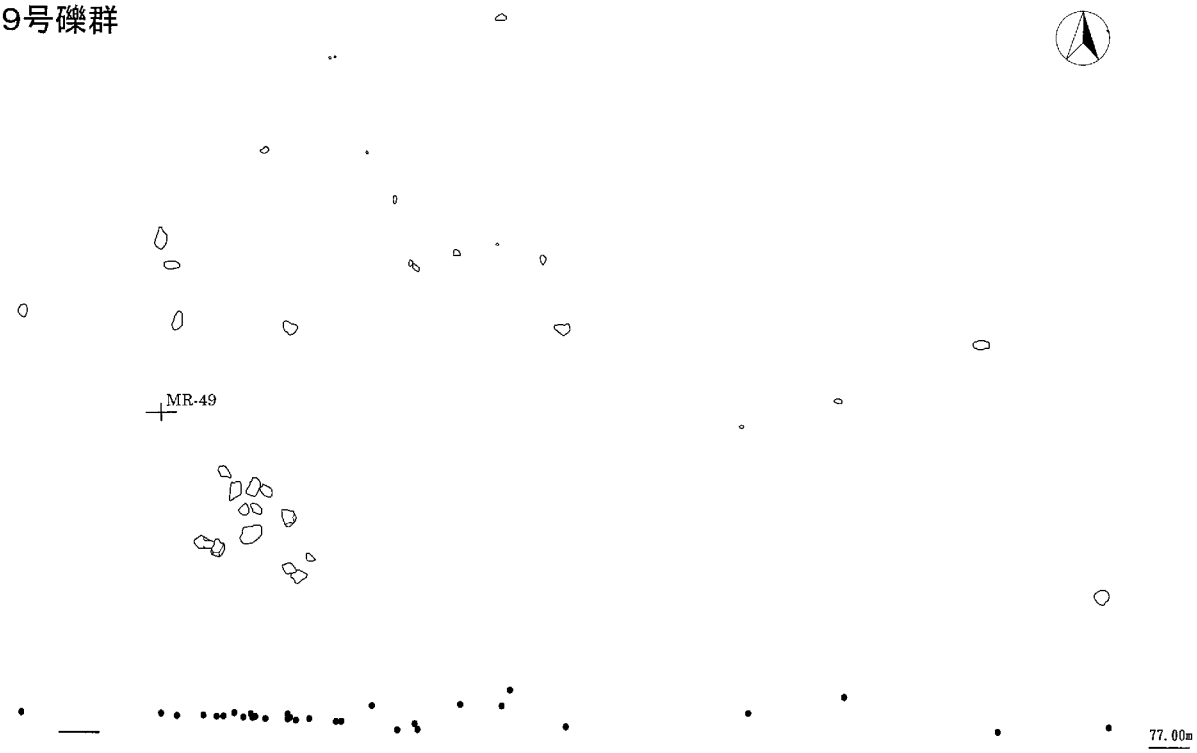


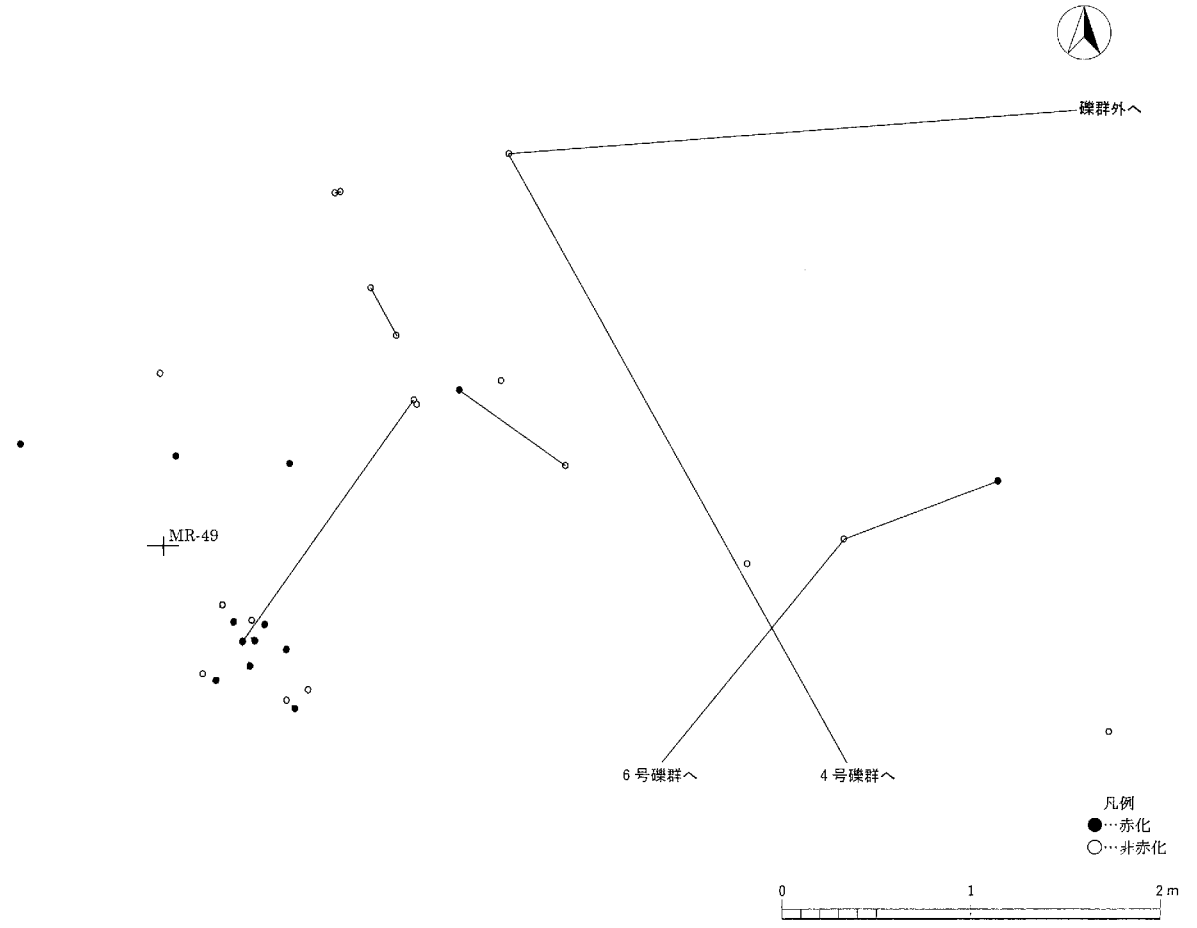
第133図　第２文化層　礫群接合関係図（４）



第134図　第２文化層　礫群実測図（５）／礫群接合関係図（５）

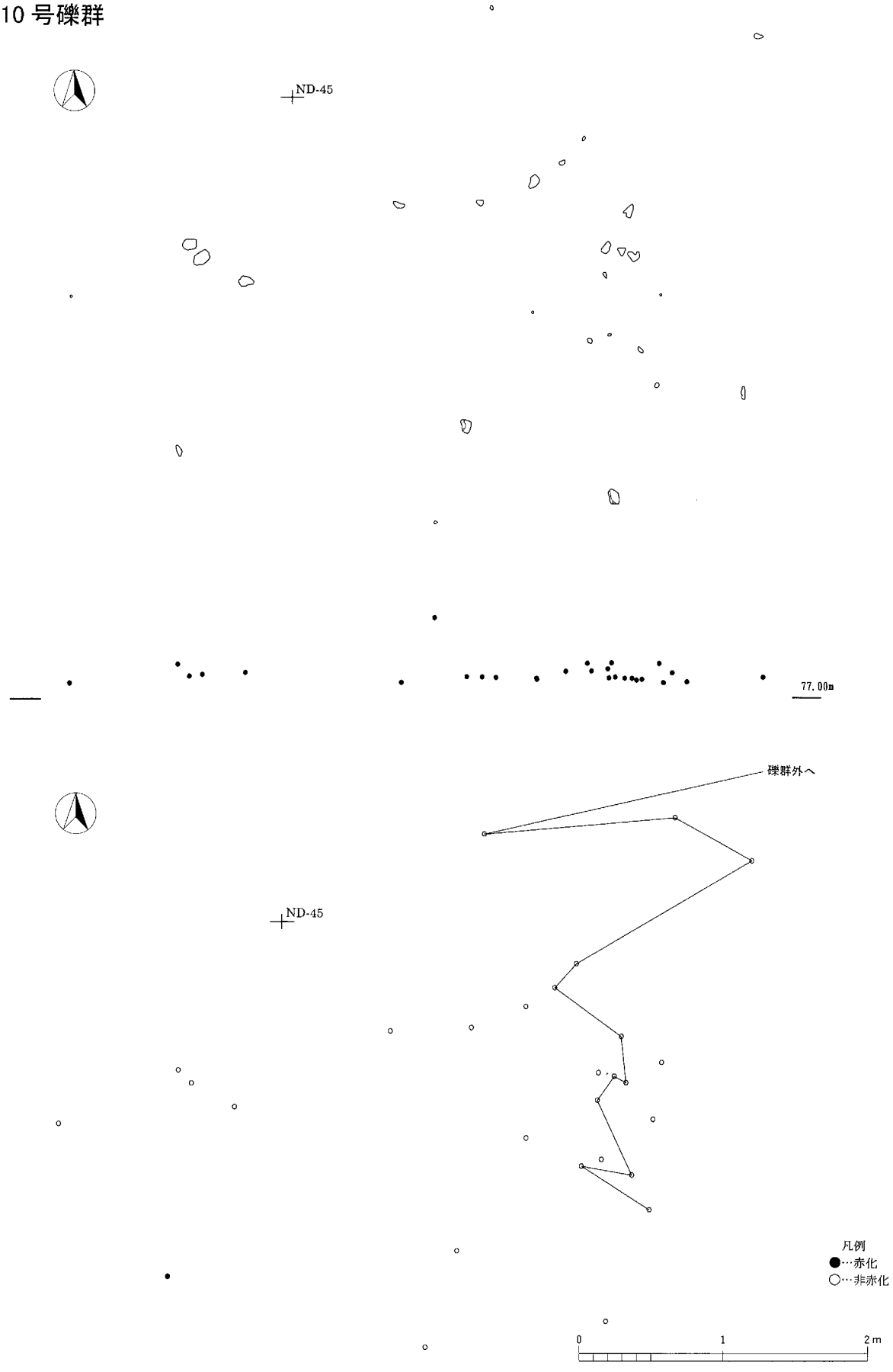
9号礫群



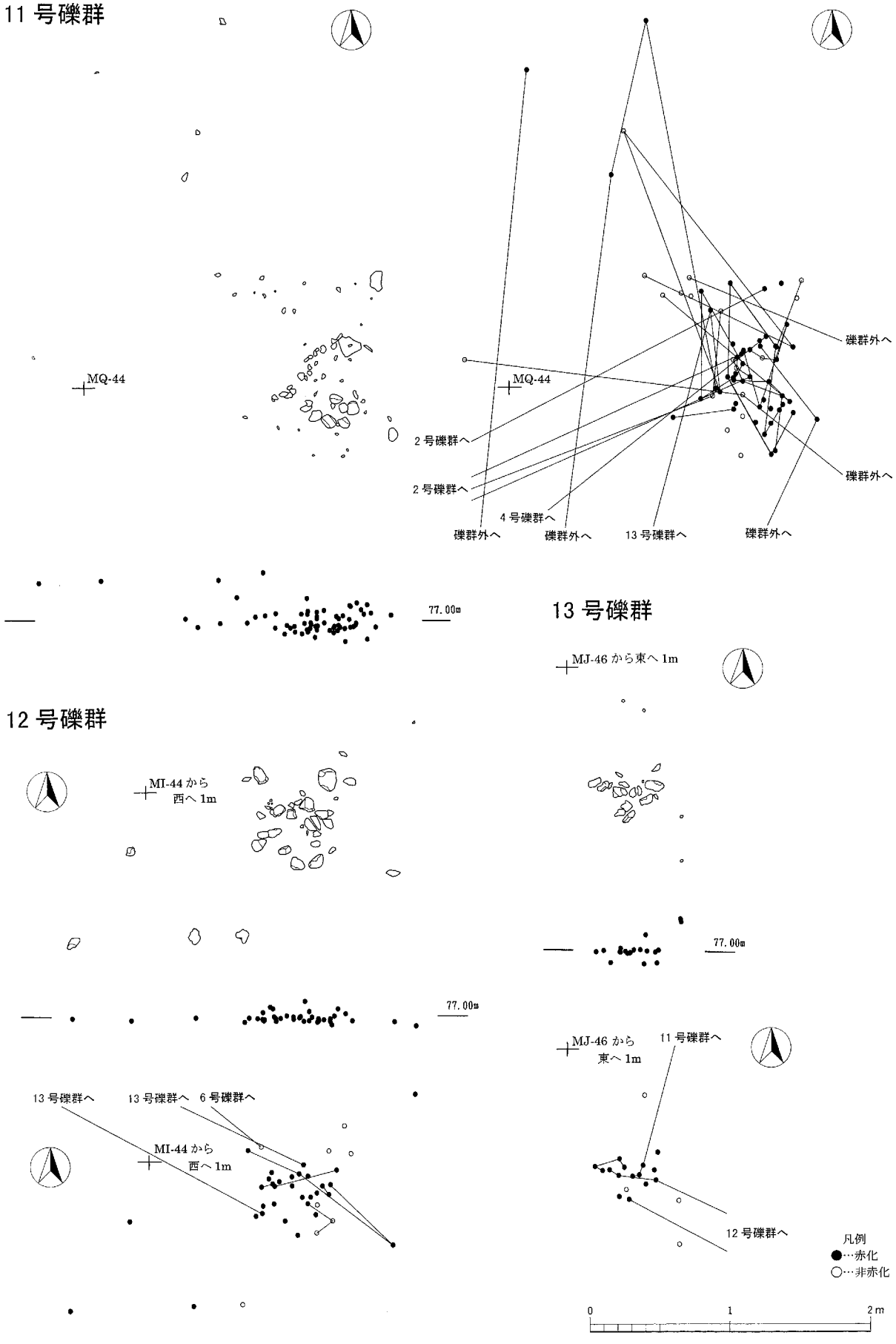


第135図　第２文化層　礫群実測図（６）／礫群接合関係図（６）

10 号礫群



第136図　第２文化層　礫群実測図（７）／礫群接合関係図（７）

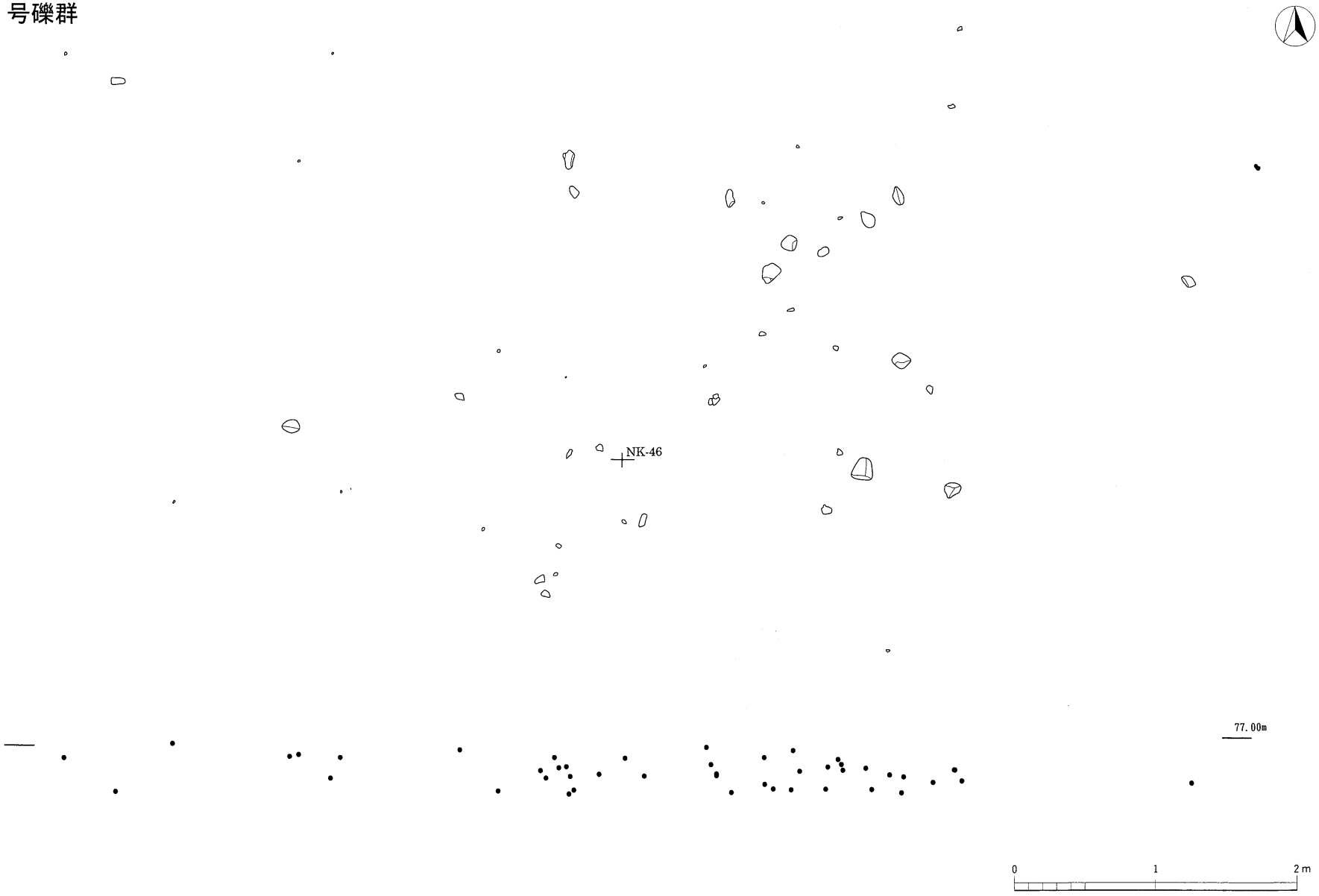


第137図　第２文化層　礫群実測図（８）／礫群接合関係図（８）

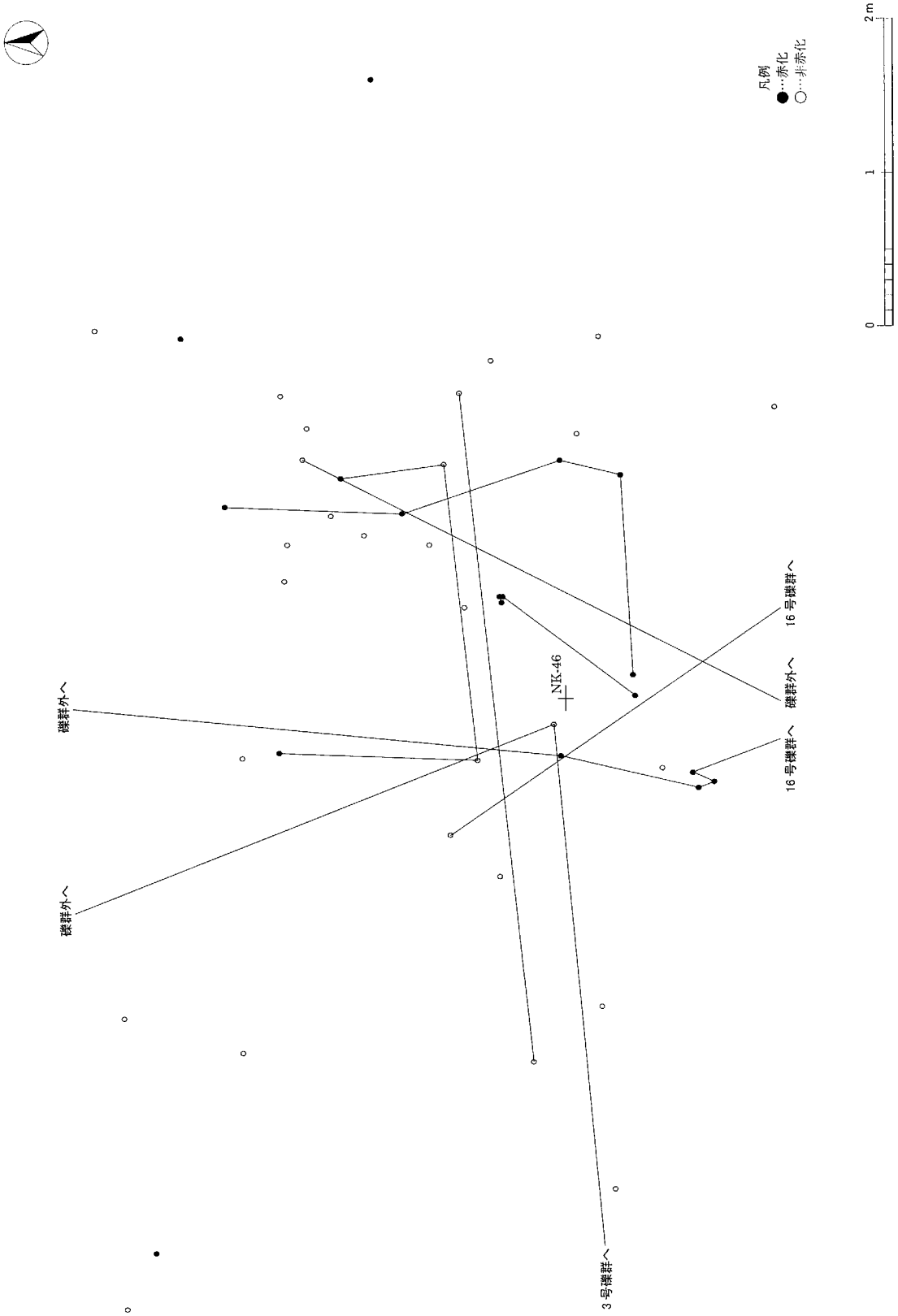
14 号礫群

第138図　第２文化層　礫群実測図（９）／礫群接合関係図（９）

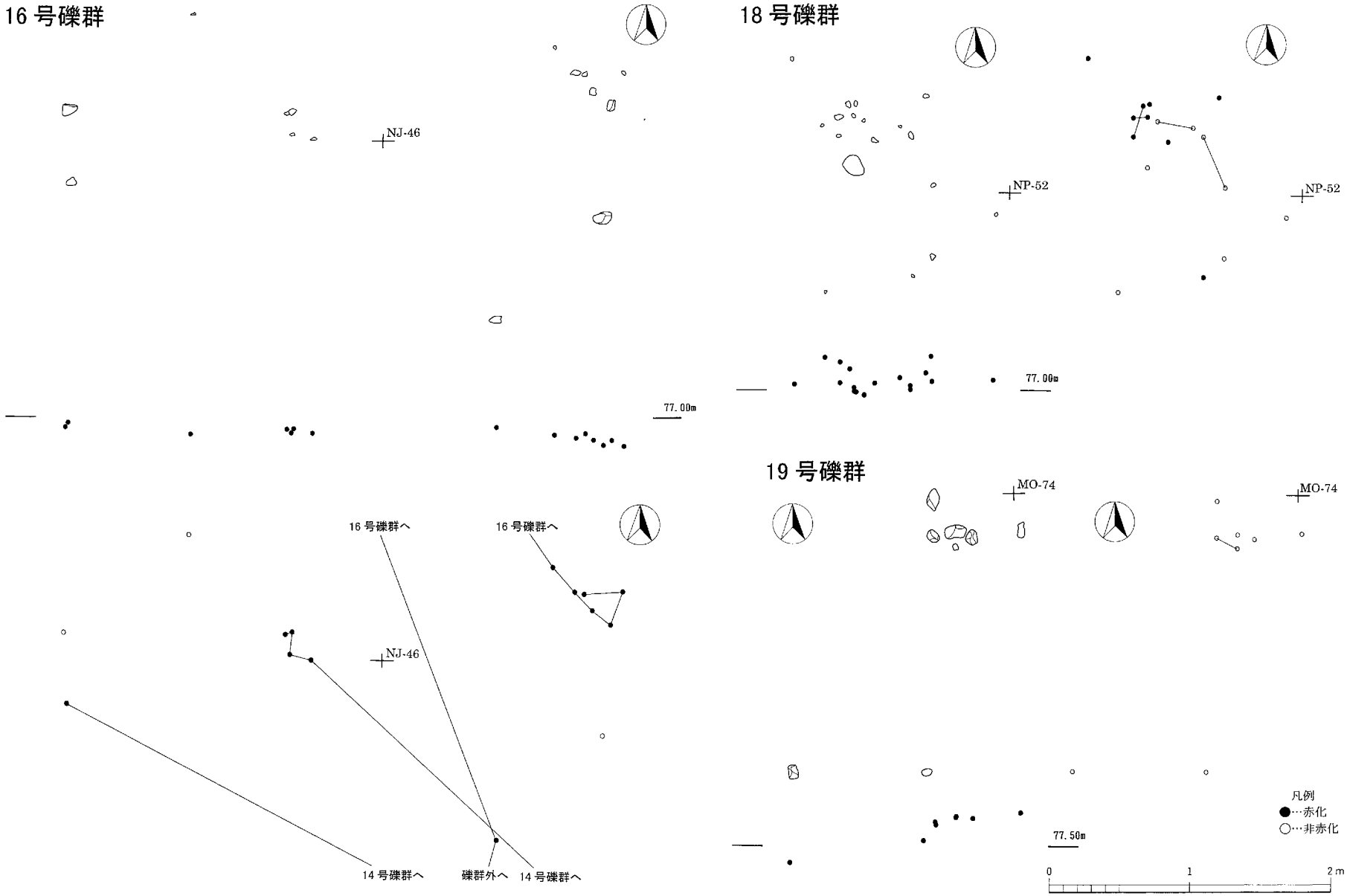
15 号礫群



第139図　第２文化層　礫群実測図（10）



第140図　第２文化層　礫群接合関係図（10）

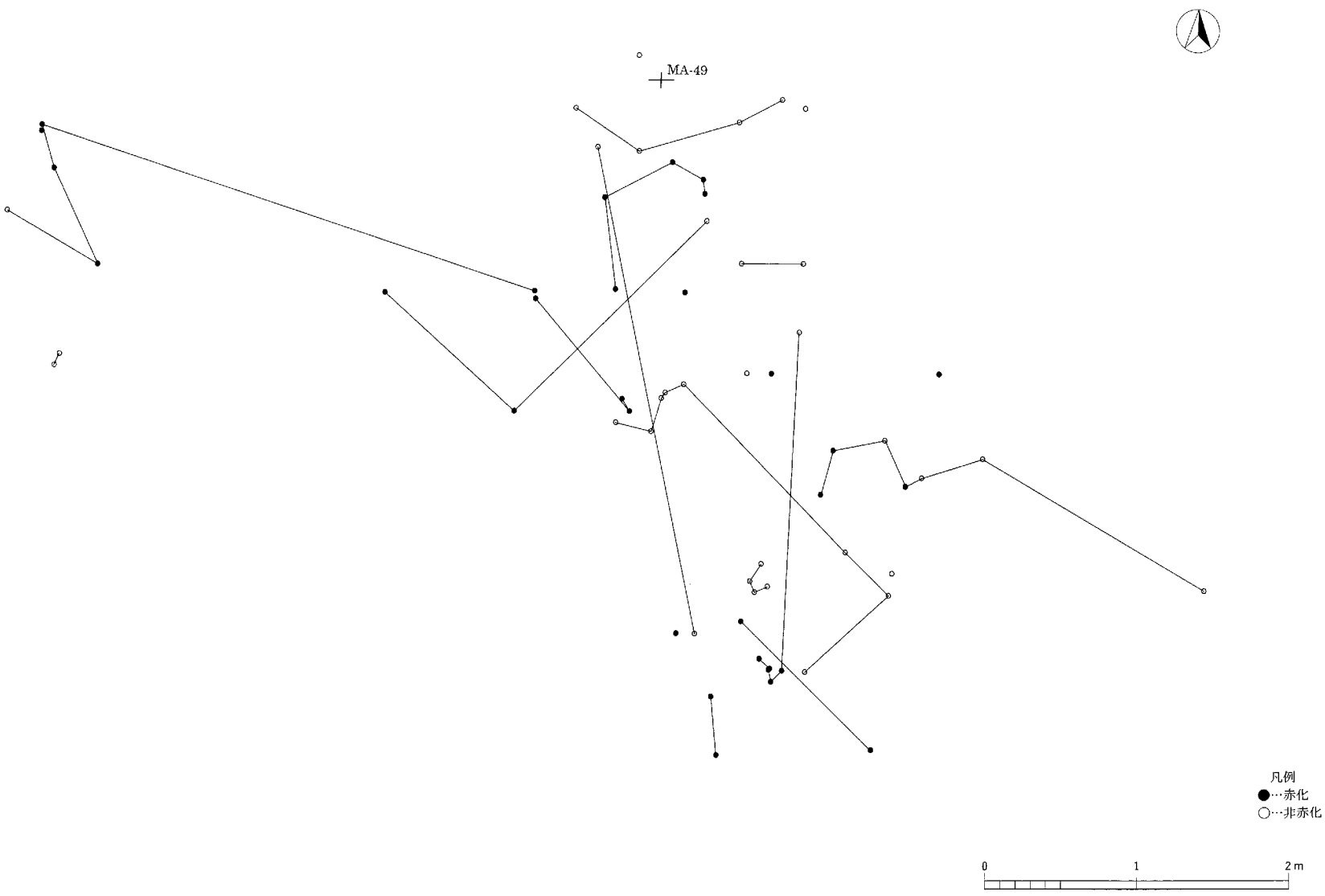


第141図　第２文化層　礫群実測図（11）／礫群接合関係図（11）

20 号礫群

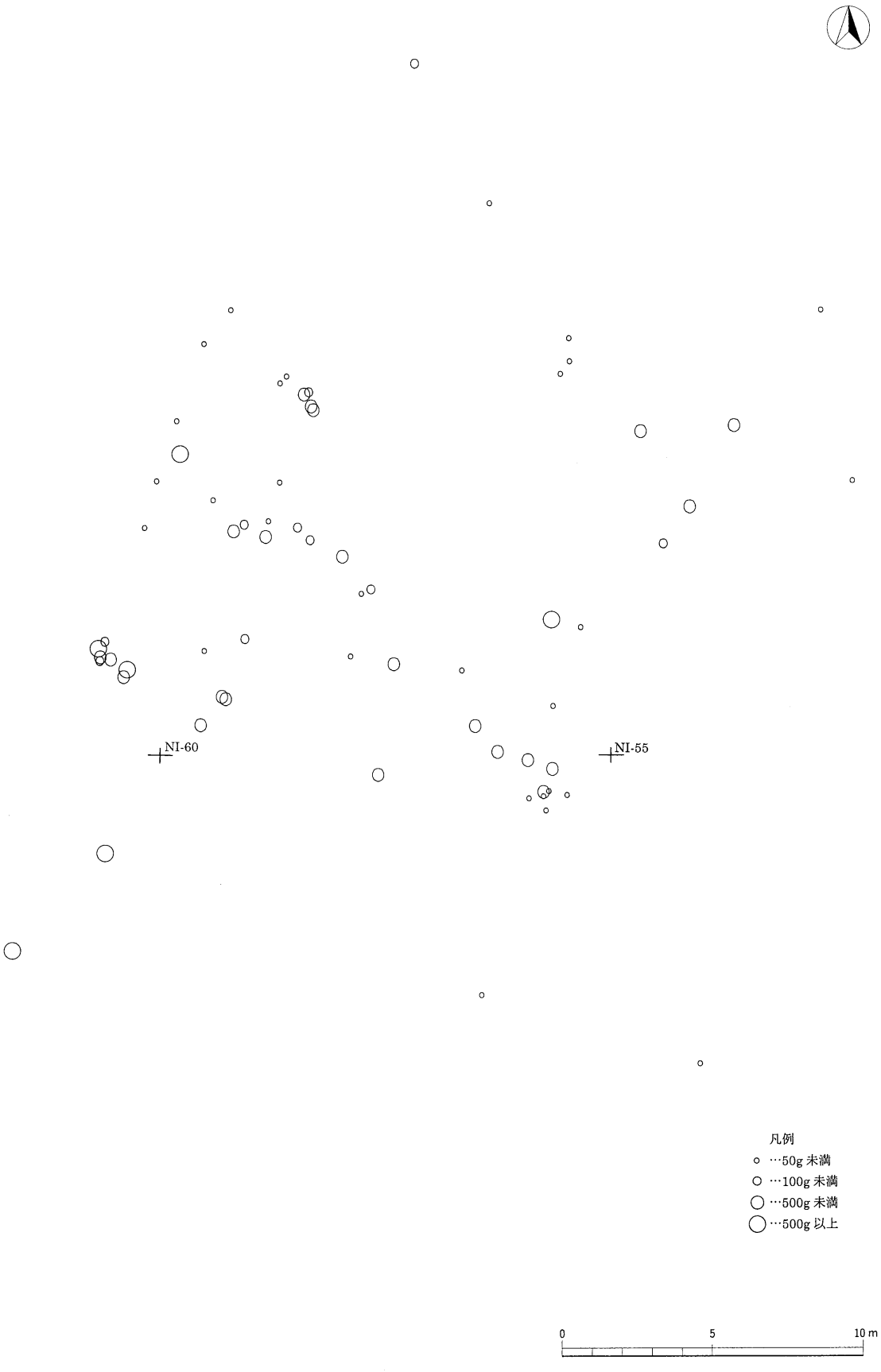
第142図　第２文化層　礫群実測図（12）

20 号礫群



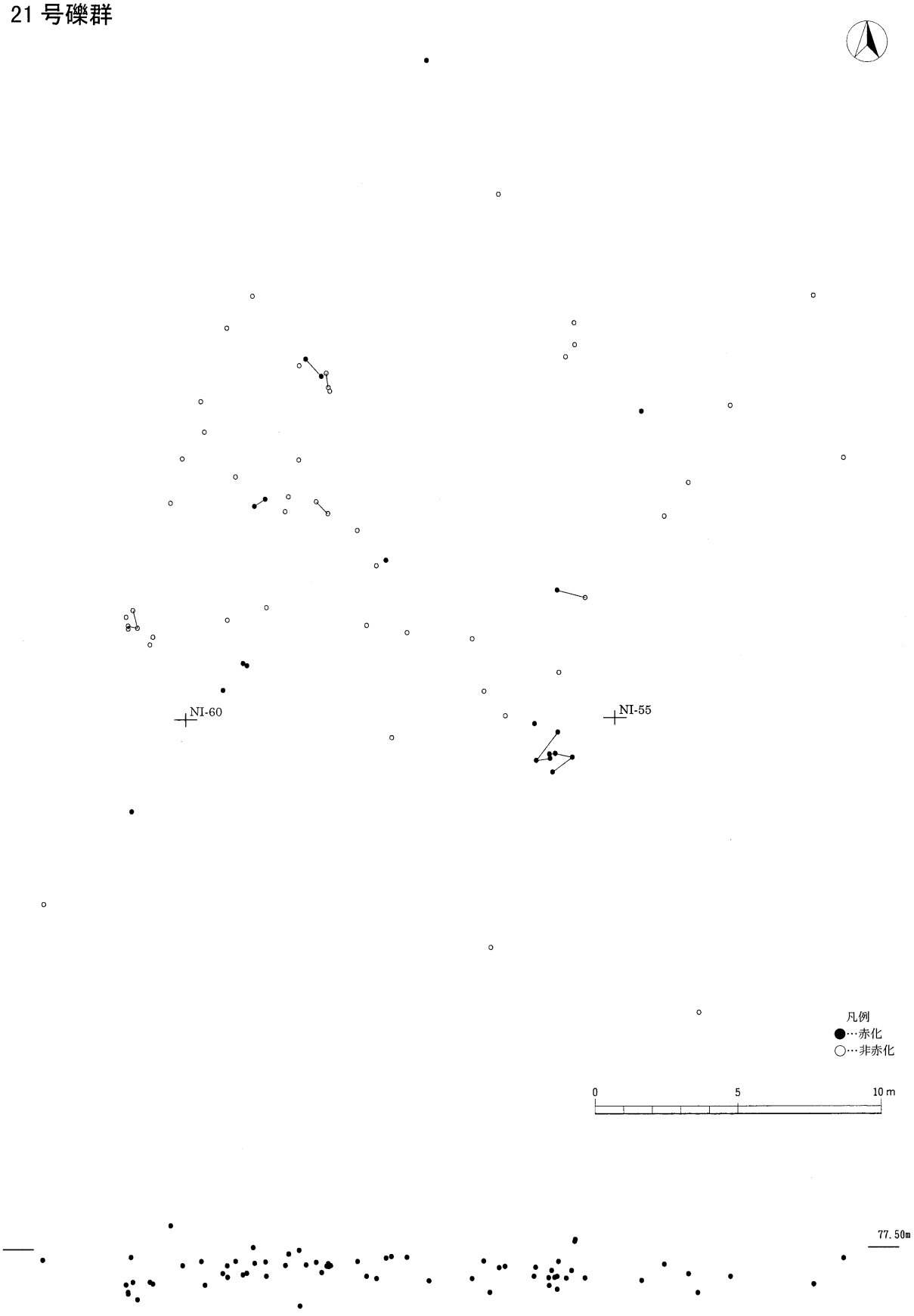
第143図　第２文化層　礫群接合関係図（12）

21 号礫群



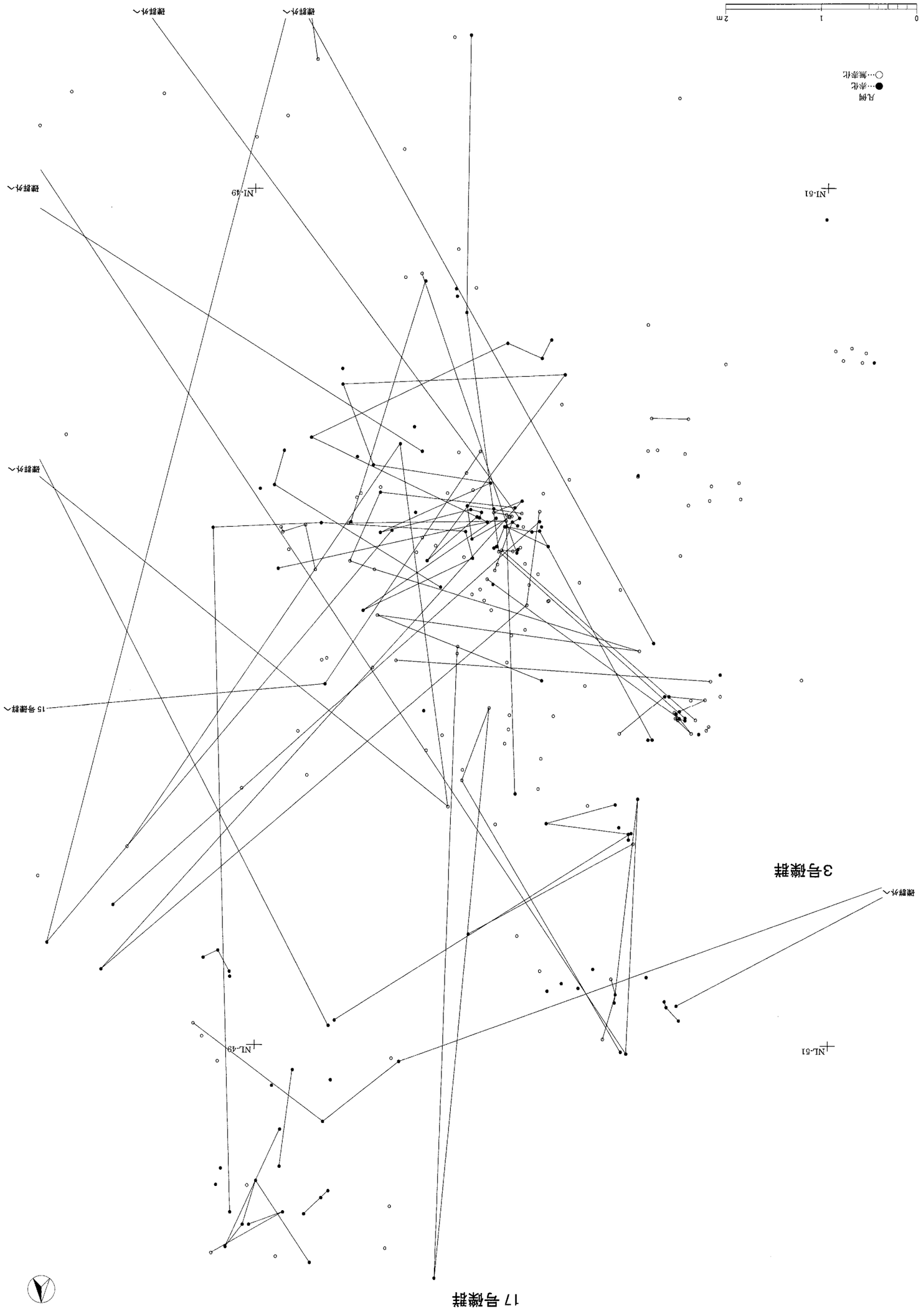
第144図　第２文化層　礫群重量別分布図

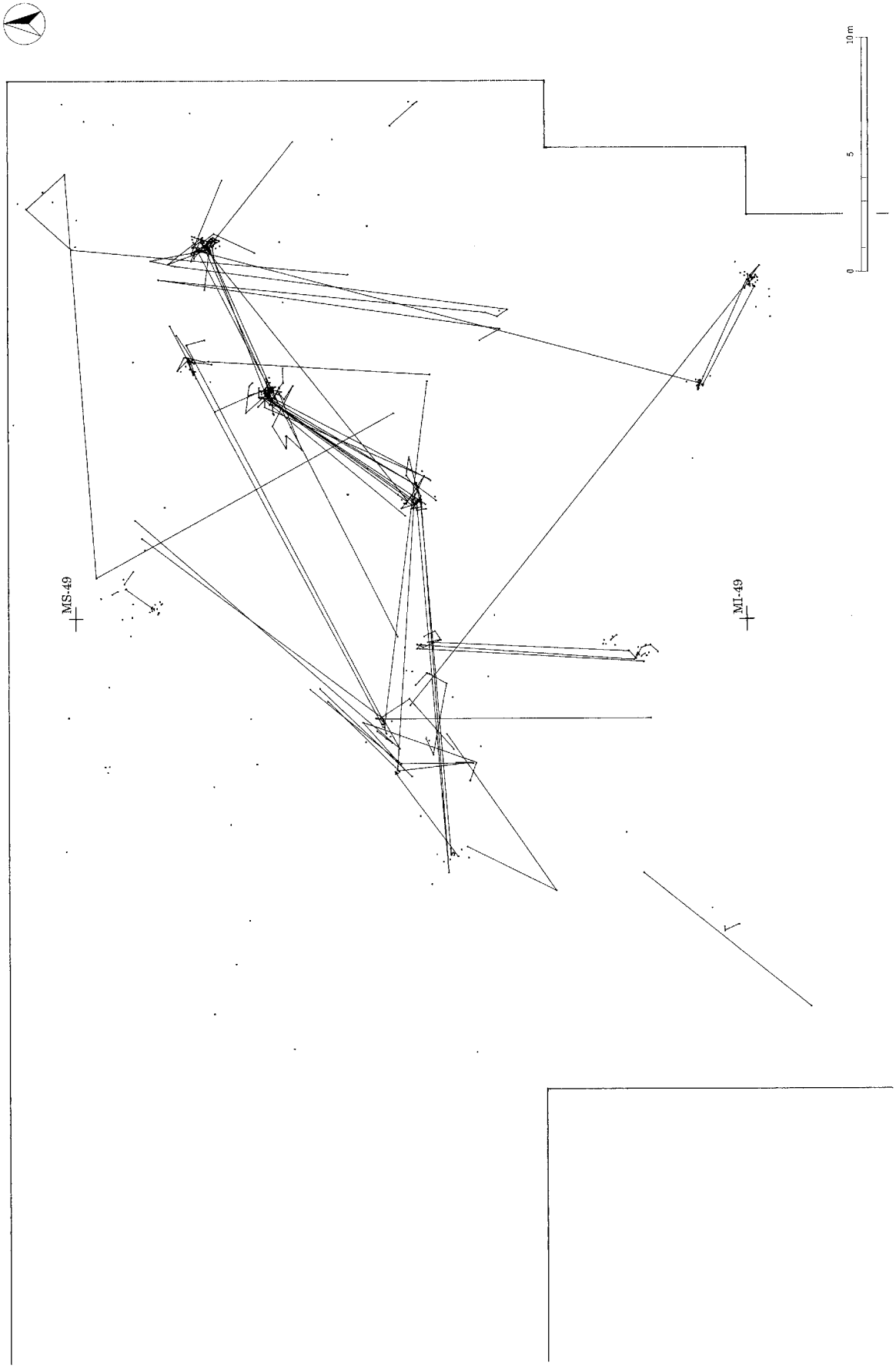
21 号礫群



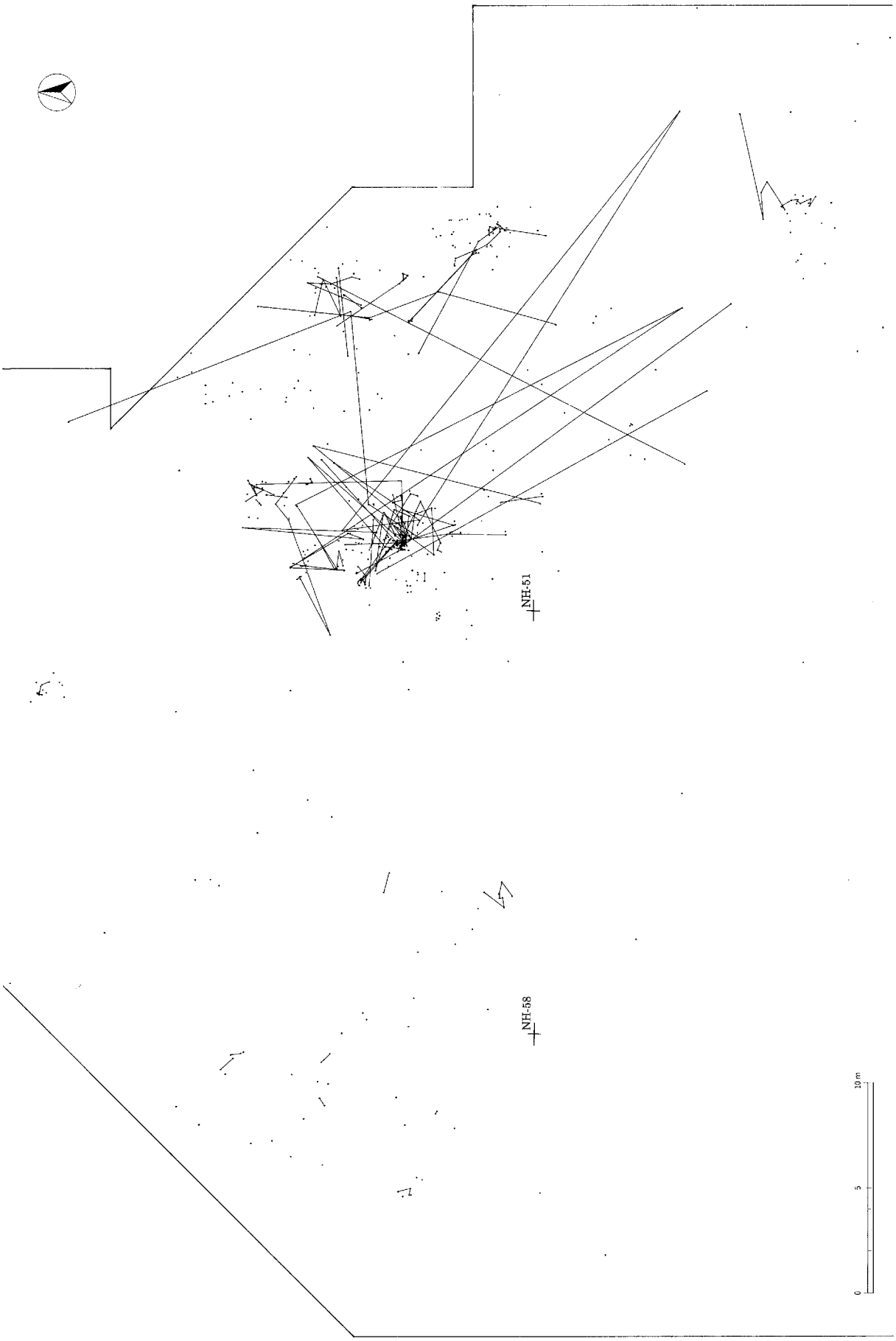
第145図　第２文化層　礫群接合関係図（13）

第146図　第２文化層　礫群実測図（14）


礫群外へ
礫群外へ
礫群外へ
礫群外へ
礫群外へ
礫群外へ
15 号礫群へ
NL-49
NL-51
NL-49
NL-51
17 号礫群
3号礫群
凡例
●…赤化
○…黒赤化
0
1
2m



第148図　第２文化層　礫群間接合関係図（１）



第149図　第２文化層　礫群間接合関係図（２）

Ⅱ－34表　遺物番号出土ブロック対照表②

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第59図	1	2	1号
	2	2	1号
	3	2	1号
	4	2	1号
	5	2	1号
	6	2	3号
	7	2	3号
	8	2	5号
	9	2	5号
	10	2	5号
	11	2	4号
	12	2	4号
	13	2	4号
	14a	2	6号
	15	2	6号
第60図	16	2	6号
	17	2	6号
	18	2	6号
	19	2	7号
	20	2	7号
	21	2	7号
	22	2	11号
	23	2	11号
	24a	2	11号
	25	2	11号
	26	2	8号
	27	2	12号
	28	2	12号
第61図	29	2	14号
	30	2	14号
	31	2	15号
	32b	2	15号
	33a	2	17号
	34	2	15号
	36	2	15号
	37	2	15号
	38	2	16号
	39	2	16号
	40	2	16号
	41	2	21号
	42	2	21号
	43	2	16号
第62図	44	2	17号
	45b	2	17号
	46	2	17号
	47	2	17号
	48	2	17号
	49	2	17号
	50	2	17号
	51	2	17号
	52	2	17号
	53	2	17号
	54	2	17号
	55	2	18号
	56	2	18号
第63図	57	2	20号
	58	2	20号
	59	2	23号
	60	2	23号
	61	2	23号
	62	2	23号
	63	2	23号

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第63図	64	2	23号
	65	2	23号
	66	2	23号
	67	2	23号
	68	2	23号
	69	2	23号
	70	2	23号
第64図	71	2	23号
	72	2	23号
	73	2	23号
	74	2	23号
	75	2	23号
	76	2	23号
	77	2	23号
	78	2	外
	79	2	外
	80	2	外
	81	2	外
	82	2	外
第65図	83	2	外
	84	2	外
	85	2	外
	86	2	24号
	87	2	11号
	88	2	24号
	89	2	24号
	90	2	外
	91	2	外
第66図	92	2	5号
	93	2	11号
	94b	2	11号
	95b	2	11号
	96	2	11号
	97	2	11号
第67図	98a	2	12号
	99	2	12号
	100	2	12号
	101	2	12号
	102	2	12号
	103	2	14号
第68図	104	2	14号
	105	2	15号
	106	2	21号
	107	2	21号
	108	2	21号
	109	2	17号
第69図	110	2	17号
	111	2	19号
	112	2	23号
	113	2	外
	114	2	外
	115	2	2号
	116	2	5号
第70図	117	2	6号
	118	2	6号
	119	2	6号
	120	2	6号
	121	2	7号
	122	2	9号
	123	2	10号
第71図	124	2	12号
	125	2	12号

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第71図	126	2	12号
	127	2	13号
	128	2	14号
	129	2	外
	130	2	21号
第72図	131a	2	21号
	132	2	17号
	133	2	17号
	134	2	17号
	135	2	17号
	136	2	18号
	137	2	18号
	138	2	18号
	139	2	18号
	140	2	19号
第73図	141	2	19号
	142	2	外
	143	2	外
	144	2	7号
第74図	145	2	11号
	146	2	11号
	147	2	12号
	148	2	12号
	149a	2	12号
第75図	150	2	13号
	151	2	13号
	152	2	13号
	153(a､b)	2	19号
第76図	154	2	1号
	155	2	4号
	156	2	6号
第77図	157	2	10号
	158	2	11号
	159	2	12号
第78図	160	2	14号
	161	2	21号
	162	2	20号
第79図	163	2	20号
	164	2	外
	165	2	23号
	166	2	外
第80図	167	2	9号
	168	2	5号
	169	2	12号
	170a	2	4号
	171(a､b)	2	11号
	172	2	11号
	173a	2	6号
	174(a､b)	2	11号
	175a	2	11号
	176a	2	12号
	177(a､b)	2	12号
	178	2	外
	179	2	13号
第81図	180a	2	17号
	181	2	23号
	182a	2	16号
	183	2	15号
	184	2	17号
	185	2	23号
	186	2	23号
	187h	2	15号

挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第81図	188	2	外
	189	2	10号
	190	2	7号
	191	2	5号
第82図	192	2	8号
	193	2	10号
	194	2	11号
	195	2	12号
	196	2	12号
	197	2	12号
	198	2	13号
	199	2	13号
	200	2	15号
	201	2	21号
	202	2	11号
第83図	203	2	17号
	204	2	10号
	205	2	18号
	206	2	20号
	207a	2	21号
	208a	2	17号
第84図	209	2	23号
	210	2	23号
	211	2	11号
	212	2	17号
	213	2	23号
	214	2	17号
	215	2	23号
	216	2	17号
	217	2	23号
	218	2	23号
	219	2	23号
第85図	220	2	19号
	221	2	17号
	222	2	15号
	223	2	23号
	224	2	23号
	225	2	17号
	226	2	17号
	227	2	外
第86図	228	2	4号
	229	2	11号
	230	2	6号
	231	2	7号
	232	2	12号
	233	2	11号
	234	2	17号
第87図	235	2	15号
	236b	2	11号
	237	2	18号
第88図	238	2	15号
	239	2	17・18号
第89図	240	2	14号
	241	2	21号
	242	2	15号
	243	2	11号
	244	2	21号
	245	2	23号
第90図	246	2	外

Ⅱ－表35　接合資料番号出土ブロック対照表

接合資料番号	挿図番号	遺物番号	文化層	ブロック
接合資料３	第91図	247	2	５号・７号
接合資料４		248	2	７号・８号
接合資料５		249	2	17号
接合資料６		250	2	17号
接合資料７		251	2	17号・一括
接合資料８		207	2	21号
接合資料９	第92図	252	2	７号
接合資料10	第93図	253	2	10号
接合資料11	第96図	187	2	15号
接合資料12	第98図	254	2	15号
接合資料13		255	2	15号
接合資料14		256	2	15号
接合資料15		183	2	15号
接合資料16		257	2	15号
接合資料17		258	2	６号
接合資料18	第99図	259	2	６号
接合資料19		45	2	17号
接合資料20	第100図	180・184	2	17号
接合資料21		260	2	14号
接合資料22	第101図	261	2	14号
接合資料23	第102図	118	2	６号
接合資料24		262	2	16号
接合資料25		170	2	４号・６号
接合資料26		263	2	10号・一括
接合資料27		92	2	５号
接合資料28	第103図	264	2	18号
接合資料29	第104図	265	2	19号・21号
接合資料30	第106図	153	2	19号
接合資料31		127	2	13号
接合資料32	第107図	95	2	11号・12号
接合資料33		266	2	11号
接合資料34		267	2	11号
接合資料35	第108図	149	2	12号
接合資料36		32	2	15号
接合資料37	第109図	33	2	15号・17号
接合資料38		268	2	21号・外
接合資料39	第110図	269	2	23号
接合資料40		270	2	17号
接合資料41		271	2	15号
接合資料42	第111図	272	2	15号
接合資料43	第112図	273	2	20号
接合資料44		274	2	５号

接合資料番号	挿図番号	遺物番号	文化層	ブロック
接合資料45	第112図	275	2	17号
接合資料46		276	2	15号
接合資料47	第113図	182	2	16号
接合資料48		277	2	10号
接合資料49		278	2	10号
接合資料50	第114図	279	2	11号
接合資料51		98	2	12号
接合資料52	第115図	280	2	11号
接合資料53		24	2	11号・一括
接合資料54		281	2	１号・５号
接合資料55		１・２	2	１号
接合資料56		282	2	１号
接合資料57		94	2	11号
接合資料58	第116図	14	2	６号
接合資料59		173	2	６号
接合資料60		131	2	21号
接合資料61	第117図	283	2	14号
接合資料62		284	2	15号
接合資料63	第118図	285	2	２号
接合資料64		286	2	４号
接合資料65	第119図	287	2	15号・22号
接合資料66		288	2	10号
接合資料67		289	2	４号
接合資料68	第120図	176	2	12号
接合資料69		175	2	11号
接合資料70		171	2	11号
接合資料71		290	2	12号
接合資料72		291	2	12号
接合資料73	第121図	292	2	11号
接合資料74		293	2	６号
接合資料75		174	2	11号・一括
接合資料76		177・189	2	10号・12号
接合資料77		294	2	11号
接合資料78	第122図	295	2	10号
接合資料79	第125図	296	2	10号
接合資料80		297	2	４号・７号
接合資料81		298	2	17号・一括
接合資料82	第126図	299	2	18号
接合資料83	第127図	208	2	17号
接合資料84	第127図	236	2	11号
接合資料85	第128図	239	2	17号・18号

５．第３文化層

Ⅳb 下部から検出された。検出された遺構は、調査区南東の２区 JB－66付近に１号ブロック、調査区南端の13区 HS－94付近に２号ブロックの合計２基のブロックである。調査区北端の４区からも石器と礫が散在して検出された。出土石器は角錐状石器１点、ナイフ形石器３点、二次加工のある剥片２点、石核１点、剥片11点、砕片１点で、合計19点ある。礫は９点出土した。

１）石 器

１号ブロック

〈出土状況〉（第151図）

２区南側の JB－65～66、JA－65グリッドに位置し、合計７点の石器が長径５m、短径１m の楕円状の広がりをもって散漫に分布している。出土層位はⅣb 層下部からⅤ層にわたっている。

〈母岩別資料〉（第151図）

保有石材はチャート１点、黒曜石５点、ホルンフェルス１点であり５母岩が認定されたが剥片剥離の痕跡は認められない。角錐状石器の基部と大形のナイフ形石器が単品で搬入されている。

〈出土石器〉

出土石器は角錐状石器１点（第152図４）、ナイフ形石器１点（第152図２）、二次加工のある剥片１点（第152図６）剥片３点、砕片１点である。

4（第152図）は角錐状石器。厚手の剥片を素材にし両側縁に甲高の調整を加えている。両側縁には大きな剥離を加えた後、微細ながらも連続する剥離を加えている。上半部は裏面からの力により折損し、基部にはヒンジフラクチャーになった素材の末端を残置している。

2（第152図）はナイフ形石器。厚さ２cm を測る分厚い剥片を素材にし、二側縁にブランティングを施している。左側縁にはノッチ状に加工を施し、切り出し形を呈する。刃部の表面には風化した素材面を残している。刃部の先端部にみられる剥離は素材剥離以前の先行剥離である。左側縁の調整は稜上からも微細ながら行われている。右側の裏面には連続する平坦な剥離が認められる。基部は左側縁からの力によりわずかに欠損している。

6（第152図）は二次加工のある剥片。厚手の剥片を素材にし左側縁にブランティングを施している。上半部は左側面からの力により折損している。ナイフ形石器の一部であると考えられる。

２号ブロック

〈出土状況〉（第151図）

３区南側の HS－92～94グリッドに位置し、合計５点の石器が長径3.5m、短径1.5m の楕円状の広がりをもって分布している。出土層位はⅣb 層上部から下部にわたっているが、主にⅣb 層下部で出土している。接合資料86の３点の剥片は互いに近接して出土している。

〈母岩別資料〉（第151図）

保有石材はチャート５点で２母岩が認定された。そのうち Ch30で剥片剥離の痕跡が認められる。

〈出土石器〉

出土石器は剥片５点である。

〈接合資料〉

Ｉｂ類１例である。

接合資料86（第152図**8**）はCh30でＩｂ類。平坦打面から小形の横長剥片が８b、８a、８ｃの順で剥離されている。

ブロック外出土遺物（第150図）

第３文化層のブロック外からはナイフ形石器２点（第152図１、３）、二次加工のある剥片１点（第152図５点）、石核１点（第152図７）、剥片３点、礫１点が出土している。

1（第152図）はナイフ形石器。NQ－53グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。良質の硬質細粒凝灰岩の厚手の縦長剥片を素材にし、基部に打面を残置して左側縁にブランティングを施している。

3（第152図）はナイフ形石器。MS－70グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。横長剥片を素材にし、打面を横に用い両側縁の基部にブランティングを施している。左側縁の調整はやや鋸歯状に施されている。刃部の裏面にみられる剥離は調査時の欠損である。

5（第153図）は二次加工のある剥片。NT－52グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。剥片の折れ面に低い角度で鋸歯状に連続する剥離が加えられている。

7（第153図）は石核。NT－52グリッドから出土し、付近にブロックは検出されていない。左側面図にみられる面を打面とし裏面図にみられる面を作業面として、小形の横長剥片が剥離されている。右側面図にみられる面は石核の底面であり、この面を打面とした細かい剥離が正面図に認められる。

Ⅱ－表36　第３文化層　母岩別器種一覧表

	角錐	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1															1
Ch30											3						3
Ch単		1									3						4
Ob14											2						2
Ob15		1						1									2
Ob16								1			1						2
Ob単	1						1										2
Ho12											1	1					2
Ho単											1						1
合計	1	3					1	2			11	1					19

Ⅱ－表37　第３文化層　母岩別器種一覧表（１号ブロック）

	角錐	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ch単											1						1
Ob14											2						2
Ob15		1						1									2
Ob単	1																1
Ho12												1					1
合計	1	1						1			3	1					7

Ⅱ－表38　第３文化層　母岩別器種一覧表（２号ブロック）

	角錐	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ch30											3						3
Ch単											2						2
合計											5						5

Ⅱ－表39　第３文化層　母岩別器種一覧表（ブロック外）

	角錐	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単		1															1
Ch単		1															1
Ob16								1			1						2
Ob単							1										1
Ho12											1						1
Ho単											1						1
合計		2					1	1			3						7

6．第４文化層

Ⅵ層下部から出土した３点の石器を第４文化層とした（第153図）。ブロックや礫群は形成されていない。出土石器は石核１点（第154図１）、剥片２点（第155図２、３）で、合計３点である。礫は出土していない。

１）石 器

1（第154図）は石核。母岩はHo13。NC－49グリッドからの出土である。裏面と両側面に礫面を残す厚手の板状の石核で、打面と底面は、節理面を介在とする２枚の大きな剥離により作出されている。約60度という小さな剥離角で、３枚の幅広の剥片が剥離されている。左側面の上部には原石の段階で既に段があり、この段に10数回の剥離が妨げられてヒンジフラクチャーを起こしている。

2（第155図）は剥片。NC－49グリッドからの出土で１と約30cm離れて出土した。１と同母岩であるHo13の剥片で、打面と右側面と底面に礫面を残す。背面には主要剥離面と同方向の剥離がみられる。

3（第155図）はHo単体の剥片。JH－74グリッドからの出土である。平坦打面から剥離された厚手の剥片で、背面は礫面に覆われており、左側縁の上半部は縦割れを起こしている。主要剥離面の下半部には節理により段ができている。

Ⅱ－表40　第４文化層　母岩別器種一覧表

	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Ho13						1				1						2
Ho単										1						1
合計						1				2						3

7．第５文化層

Ⅹa層から出土した４点の石器を第５文化層とした（第156図）。出土石器は二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、石刃２点で、合計４点である。礫は４点出土している。硬質細粒凝灰岩、頁岩、ホルンフェルスを石材としている。ブロックや礫群は形成されていない。

１）石 器

出土石器は二次加工のある剥片１点（第157図３）、微細剥離痕のある剥片１点（第157図４）、石刃２点（第157図１、２）である。

3（第157図）は二次加工のある剥片。OA－50グリッドからの出土である。平坦打面から剥離された、末端に礫面を残す厚手の剥片を使用し、右側縁の主要剥離面側に連続する剥離が加えられている。これらの剥離による稜線は顕著に磨耗している。

4（第157図）は微細剥離痕のある剥片。NT－49グリッドからの出土である。きわめて良質の硬質細粒凝灰岩を使用し、礫面を打面として剥離された縦長剥片の左側縁に微細な剥離痕が認められる。背面には、主要剥離面と対向する剥離面が認められ、末端はフェザーエッジとなっている。

1（第157図）は石刃。NT－49グリッドからの出土である。きわめて良質の硬質細粒凝灰岩を使用し、礫面を打面としている。背面には中央に高い稜が通り主要剥離面と同方向の剥離も認められる。

2（第157図）は石刃。NT－49グリッドからの出土である。平坦打面から剥離され背面には主要剥離面と同方向の剥離が認められる。末端には礫面を残している。打面付近ではヒンジフラクチャーが続けて起きており段ができている。

Ⅱ－表41　第５文化層　母岩別器種一覧表

＼	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
HFT単								1	1							2
Sh単							1									1
Ho単									1							1
合計							1	1	2							4

８．一括取り上げ石器

表土、撹乱層、縄文時代包含層から出土したためその帰属する層位が不明で、かつ出土した平面的な位置も不明の遺物を、一括取り上げ石器として第158図に示した。出土位置や層位は不明であるが母岩の検討から単品以外の石器についてはすべて第２文化層に帰属するものである。

出土石器はナイフ形石器１点（第158図１）、削器２点（第158図２、３）、二次加工のある剥片２点（第158図４、５）、微細剥離痕のある剥片４点（第158図６、７、10、11）、剥片14点、砕片８点である。

1（第158図）はナイフ形石器。縦長剥片を素材にし一側縁にブランティングを施している。実測図は上下逆の可能性が高い。

2（第158図）は削器。第２文化層23号ブロックに分布する Ch17を母岩とし、打面を厚く残す寸詰まりの剥片の左側縁の表裏に、連続する剥離を加えて刃部を作出している。

3（第158図）は削器。第２文化層23号ブロックに分布する Ch17を母岩とし、打面を折損した小形の剥片の右側縁に連続した角度の高い剥離を加えて刃部を作出している。

4（第158図）は二次加工のある剥片。第２文化層11、12号ブロックに分布する HSh４を母岩とし、縦割れを起こした厚手の剥片の右側縁に連続する剥離が加えられている。

5（第158図）は二次加工のある剥片。第２文化層７号ブロックに分布する赤玉石を母岩とした小形の縦長剥片の右側縁の主要剥離面側に、不連続ながら剥離が認められる。

6（第158図）は微細剥離痕のある剥片。調整打面から剥離された石刃の両側縁に、微細ながら連続した剥離痕が認められる。

7（第158図）は微細剥離痕のある剥片。平坦打面から剥離された寸詰まりの剥片の末端に、微細な剥離痕が認められる。

10（第158図）は微細剥離痕のある剥片。調整打面から剥離された石刃の右側縁の末端部を中心として、不連続ながら微細な剥離痕が認められる。

11（第158図）は微細剥離痕のある剥片。第２文化層17、19、23号ブロックに分布する HSh５を母岩とする石刃の左側縁に、微細な剥離痕が認められる。

8（第158図）は縦長剥片。第２文化層の15、16、17号ブロックに分布する Sh１を母岩にした小形の縦

長剥片である。

9（第158図）は縦長剥片。第２文化層９号ブロックに分布するMb４を母岩にした小形の縦長剥片である。左側縁側へややねじれている。

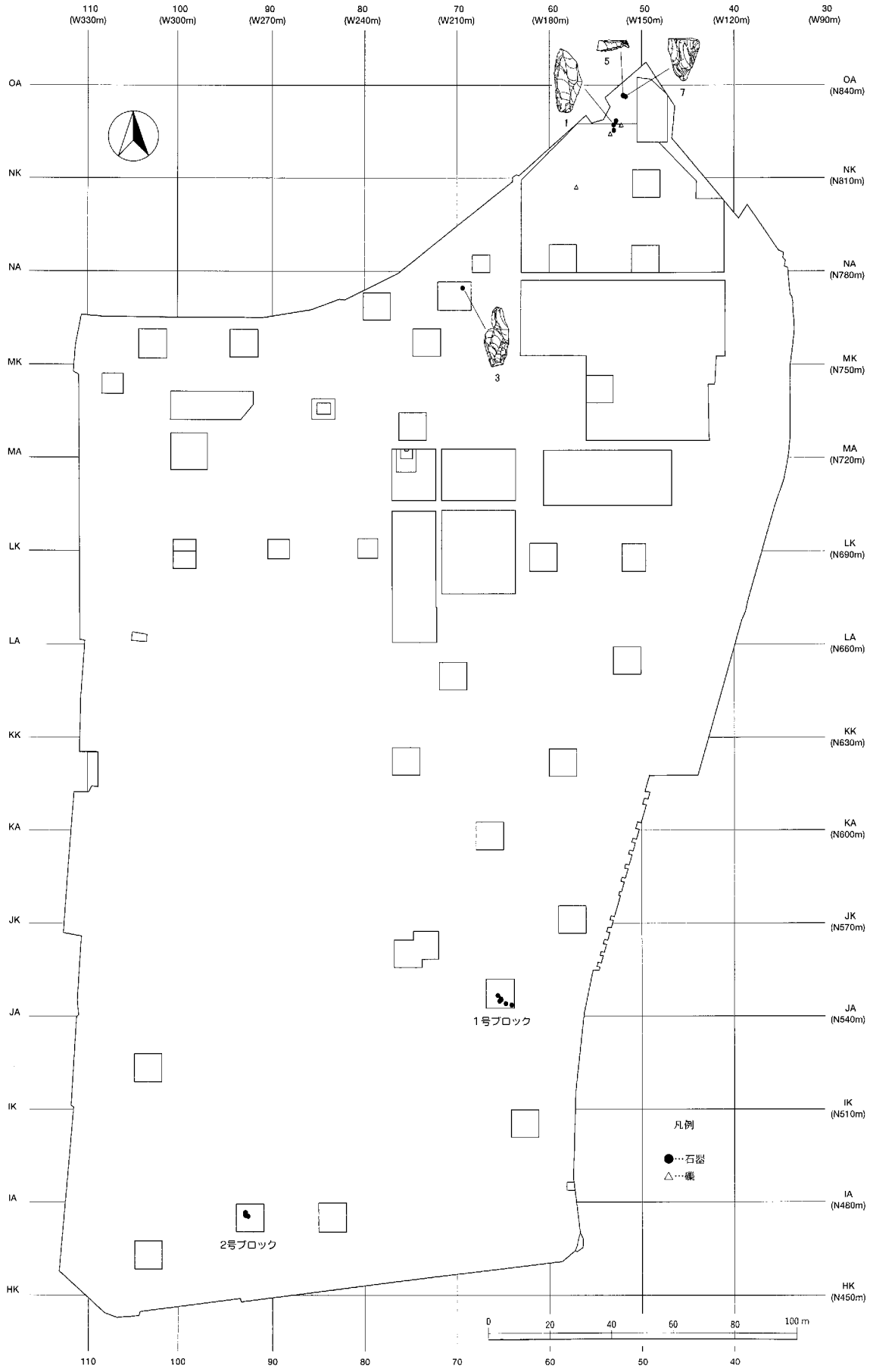
12（第158図）は縦長剥片。第２文化層11、12号ブロックに分布するCh１を母岩にした小形の縦長剥片である。入念な打面調整が施され、背面には連続して主要剥離面と同方向の剥離が行われた痕跡が認められる。

Ⅱ－表42　一括取り上げ遺物　母岩別器種一覧表

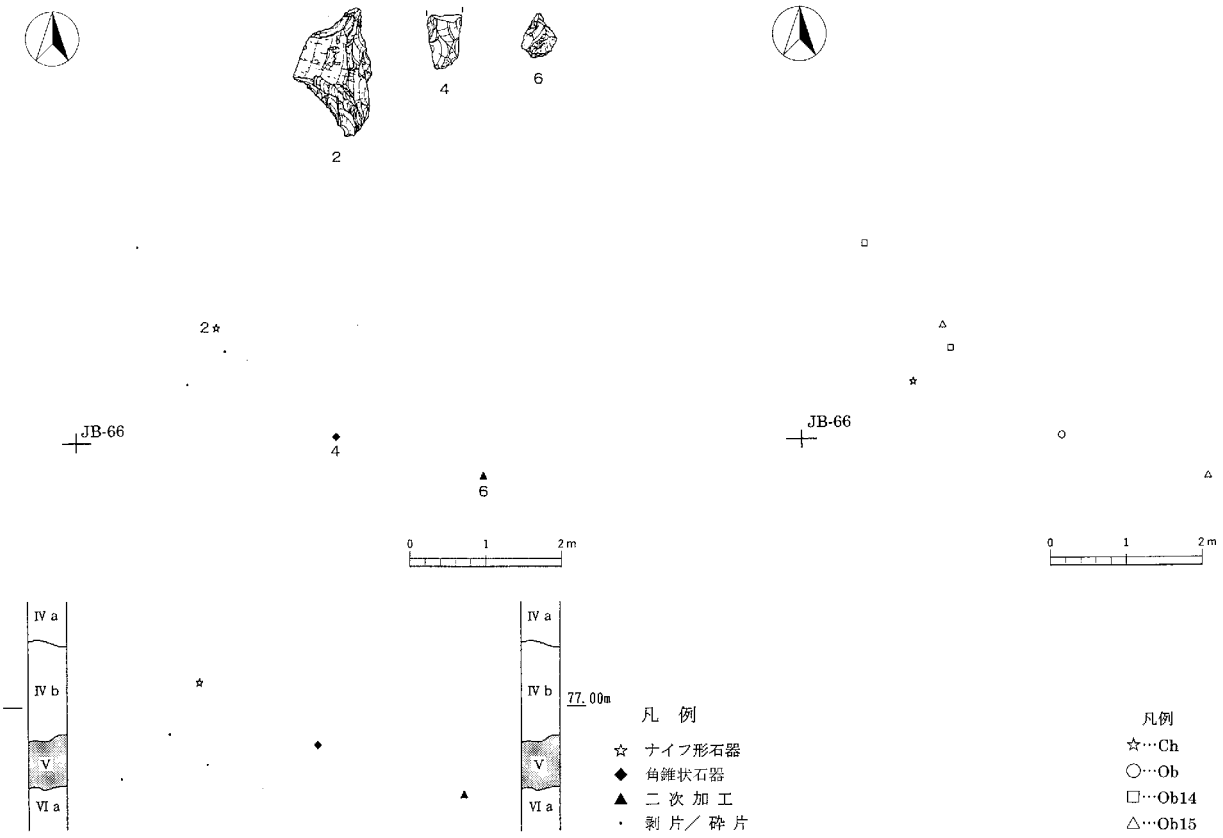
	尖頭器	ナイフ	削器	掻器	円掻	彫器	石核	二次	微細	石刃	剥片	砕片	礫器	局部	敲石	磨石	合計
Sh１											4						4
SSh７												2					2
SSh単									2								2
HSh４								1				1					2
HSh５									1								1
HSh単											1						1
BSh１												1					1
BSh３											1	1					2
Ch１											3						3
Ch17			2														2
Ch単		1							1		1						3
Ob２												1					1
Ob10												1					1
Ho３											1						1
Ho５											1						1
Ho９											1						1
Mb１												1					1
Mb４											1						1
Jsp								1									1
合計		1	2					2	4		14	8					31

Ⅱ－表43　遺物番号出土ブロック対照表③

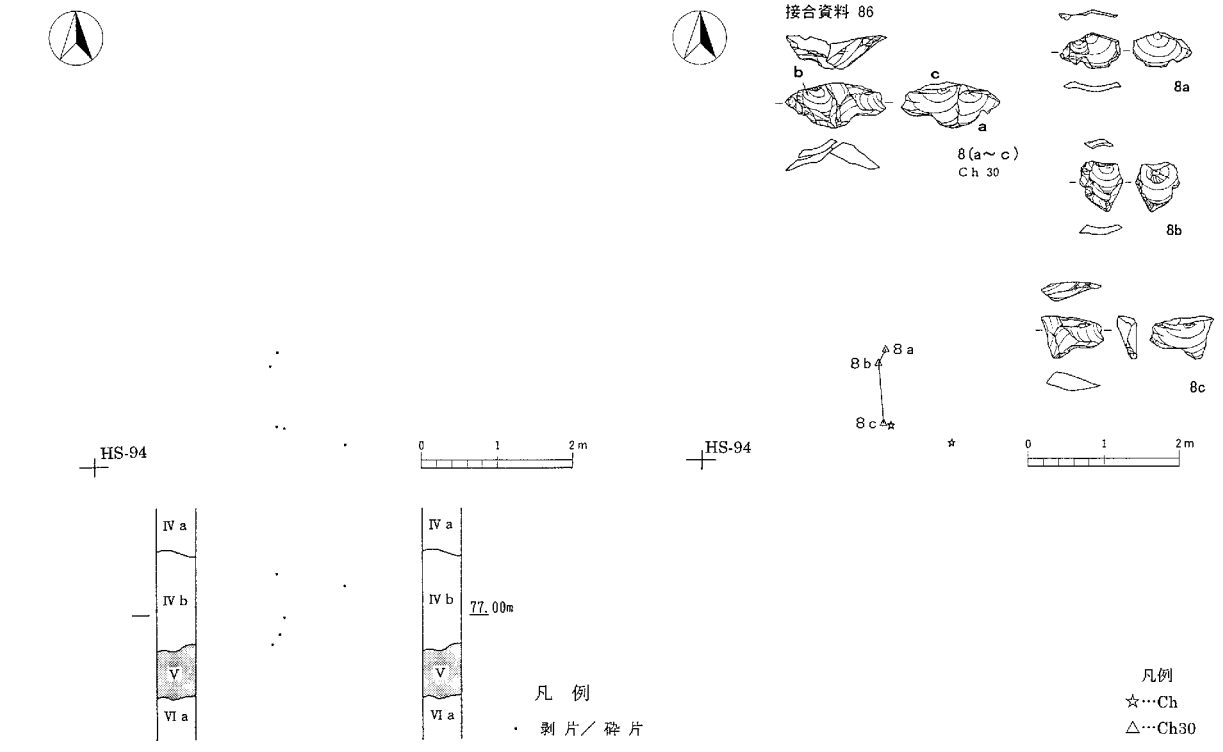
挿図番号	遺物番号	文 化 層	ブロック
第152図	1	3	外
	2	3	１号
	3	3	外
	4	3	１号
	5	3	外
	6	3	１号
	7	3	外
	8ａ	3	２号
	8ｂ	3	２号
	8ｃ	3	２号
第154図	1	4	外
第155図	2	4	外
	3	4	外
第157図	1	5	外
	2	5	外
	3	5	外
	4	5	外
第158図	1	一括	外
	2	一括	外
	3	一括	外
	4	一括	外
	5	一括	外
	6	一括	外
	7	一括	外
	8	一括	外
	9	一括	外
	10	一括	外
	11	一括	外
	12	一括	外
第121図	174e	一括	外
第115図	24b	一括	外
第91図	251b	一括	外
第102図	263b	一括	外
第125図	298d	一括	外



第150図　第３文化層　遺物分布図

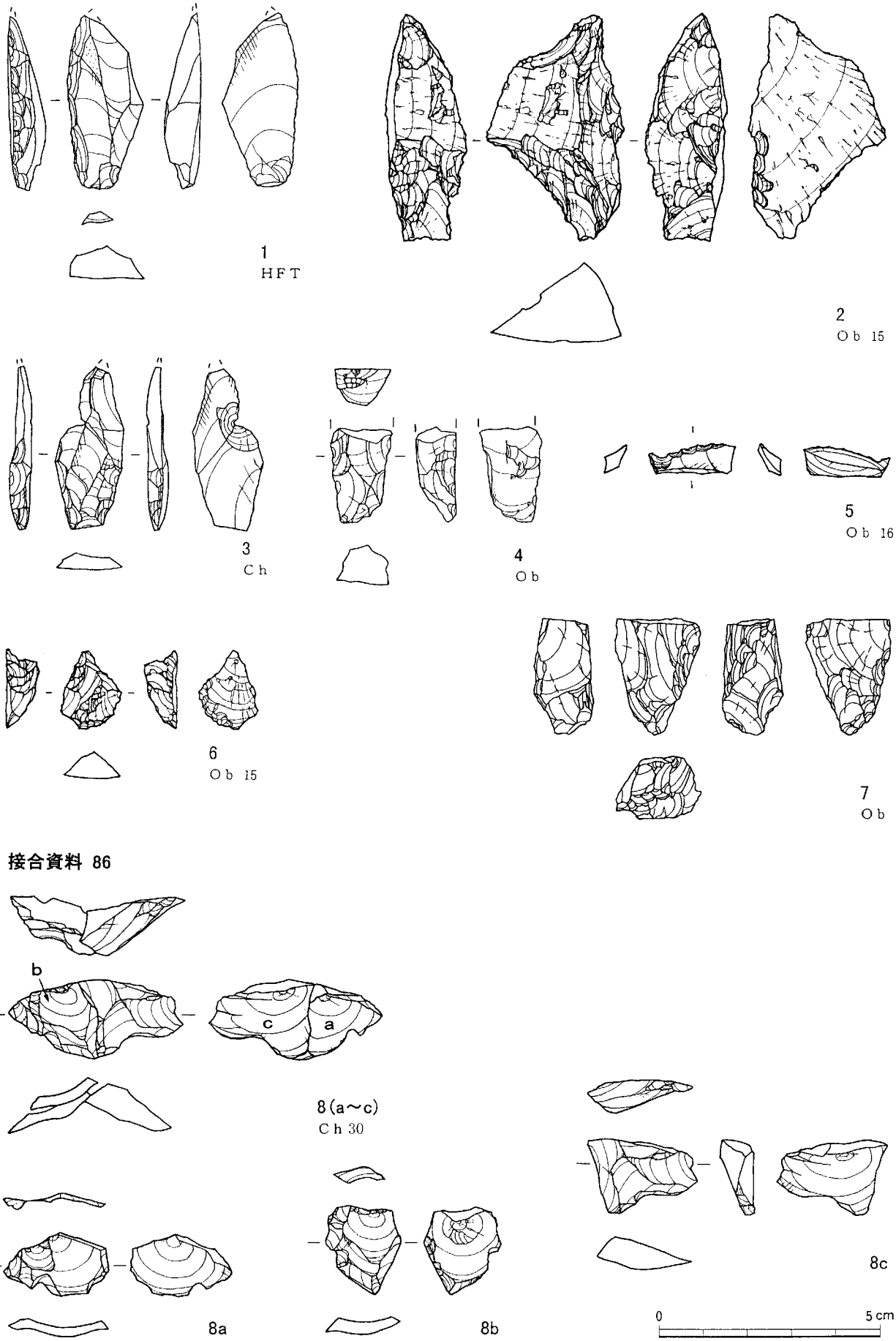


1号ブロック遺物分布　　母岩別資料分布

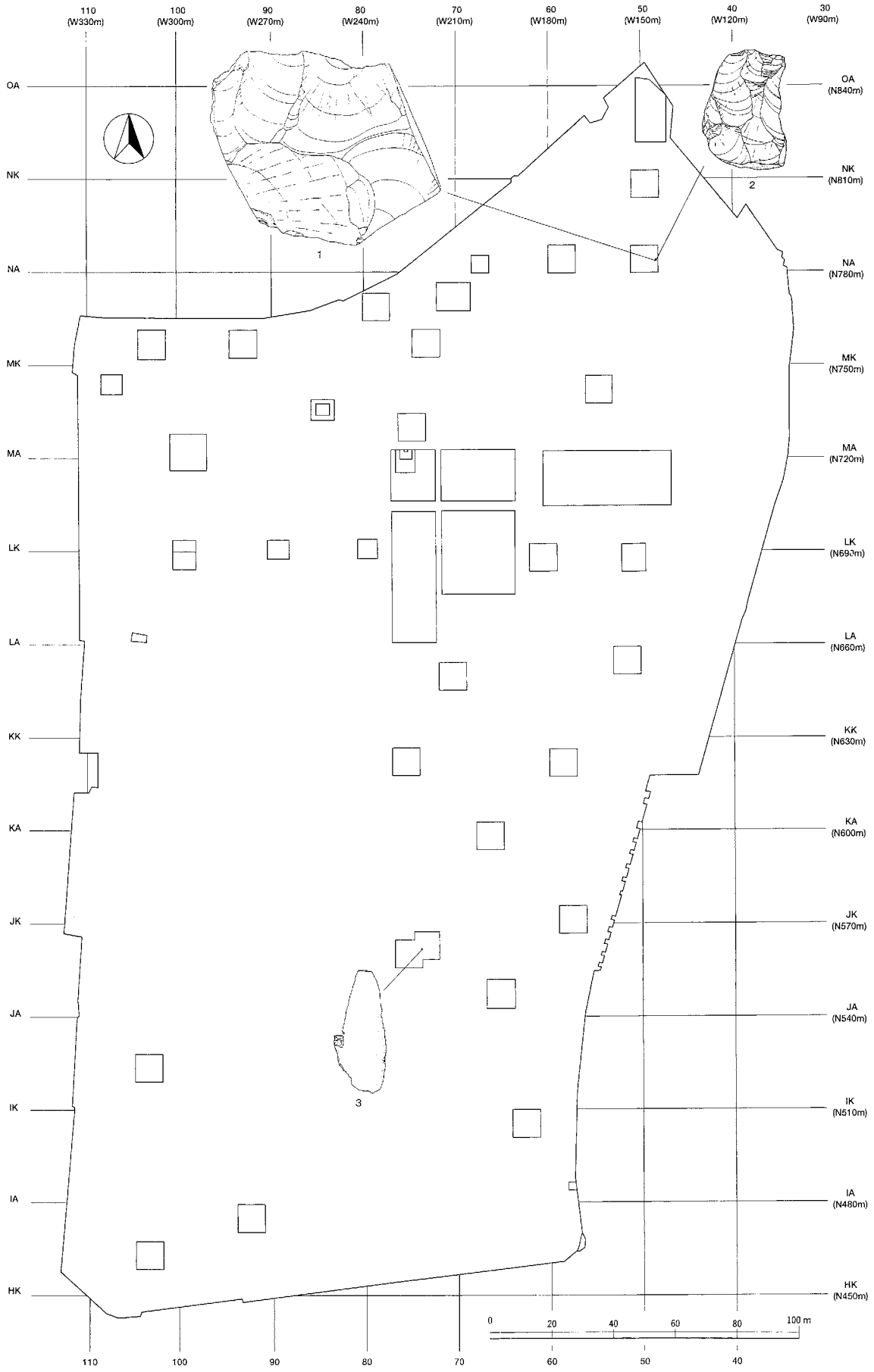


2号ブロック遺物分布　　母岩別資料分布

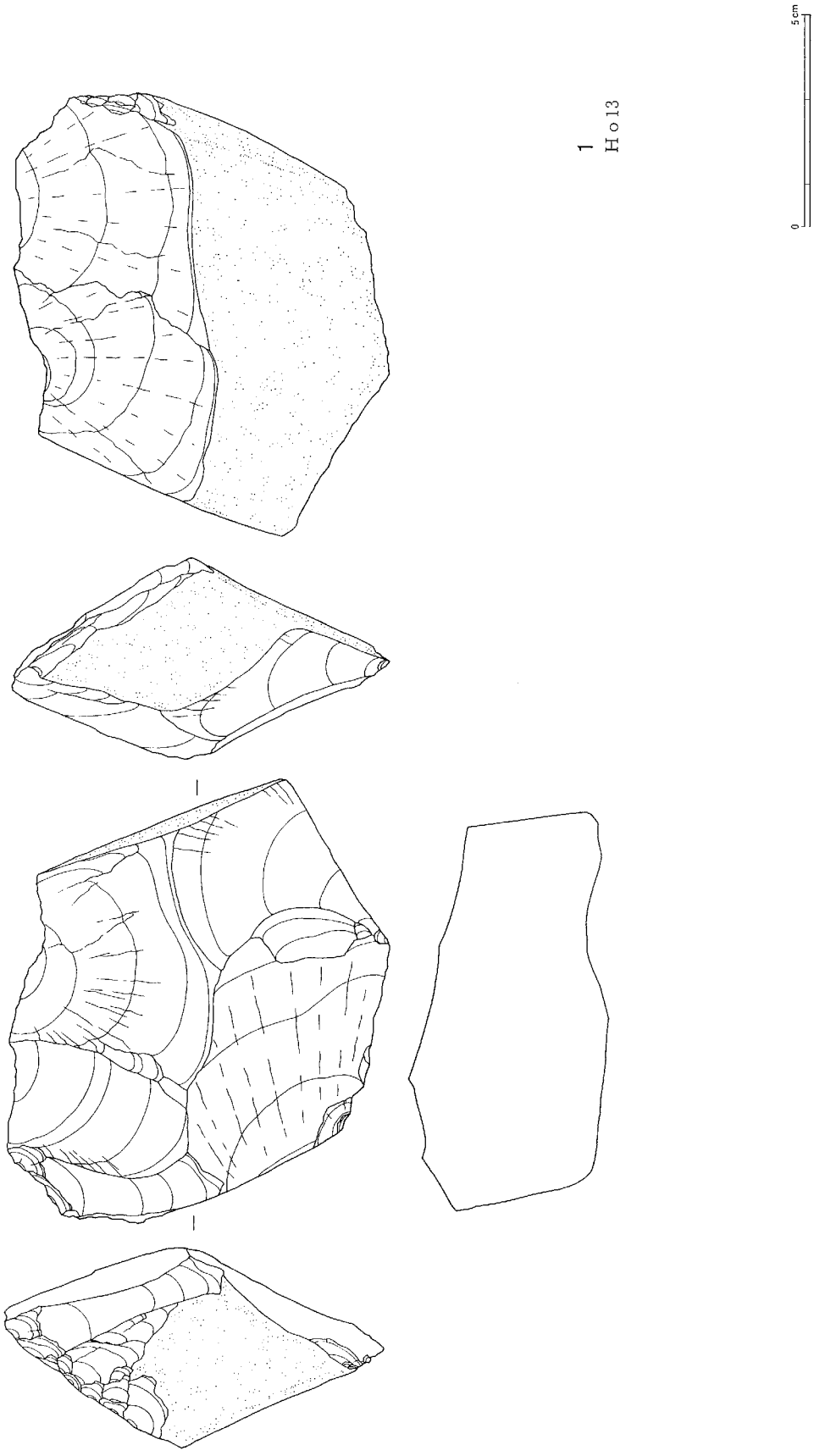
第151図　第３文化層　ブロック別・母岩別資料分布図



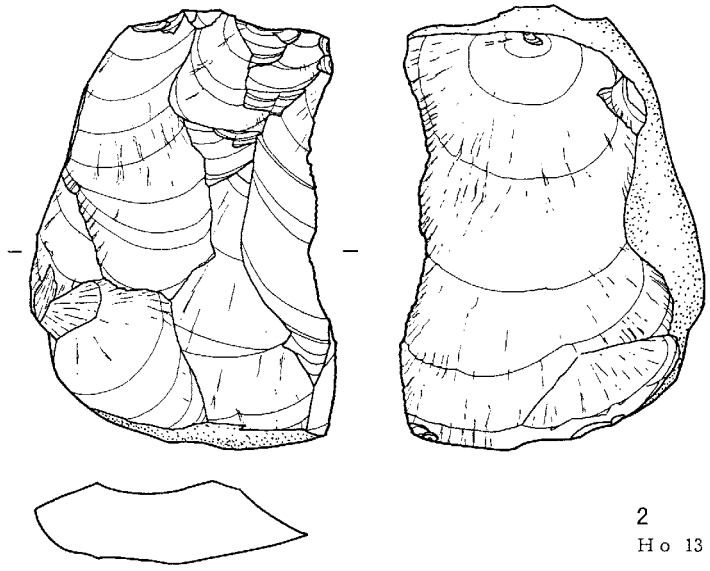
第152図　第３文化層　石器実測図／接合資料実測図

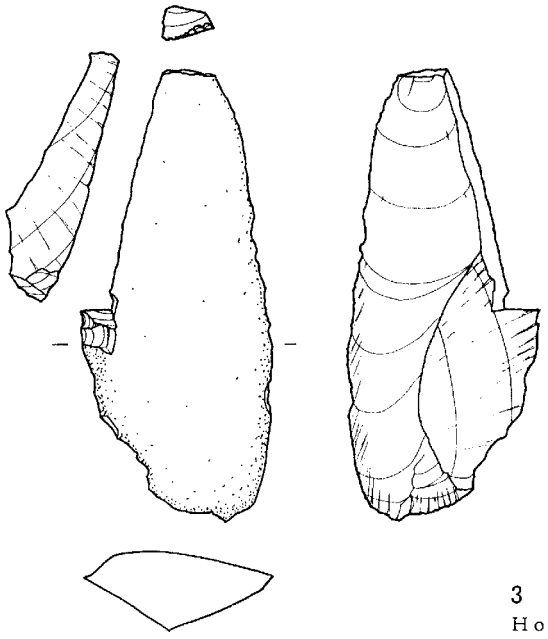


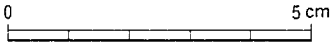
第153図　第４文化層　遺物分布図



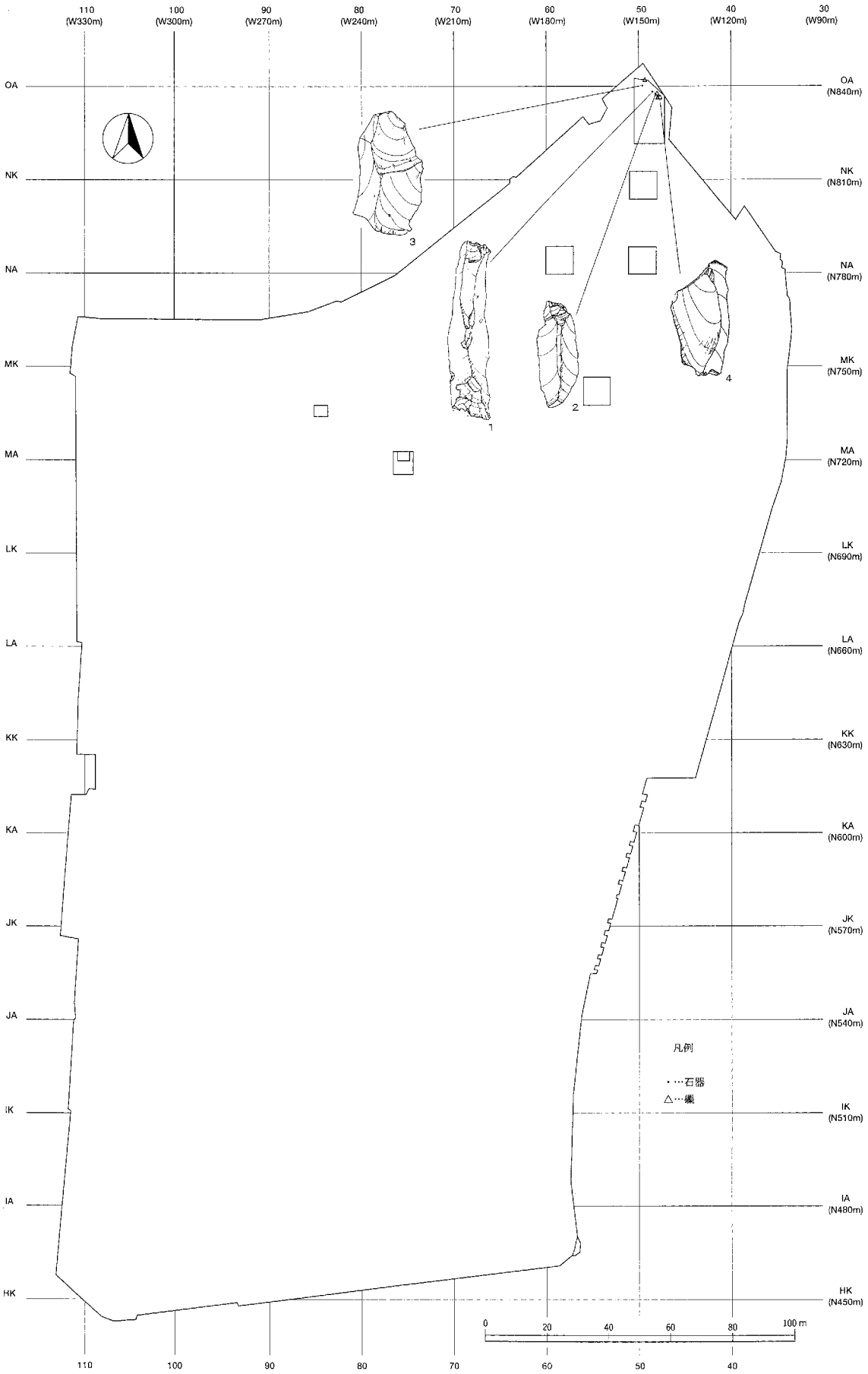
第154図　第４文化層石器実測図（１）



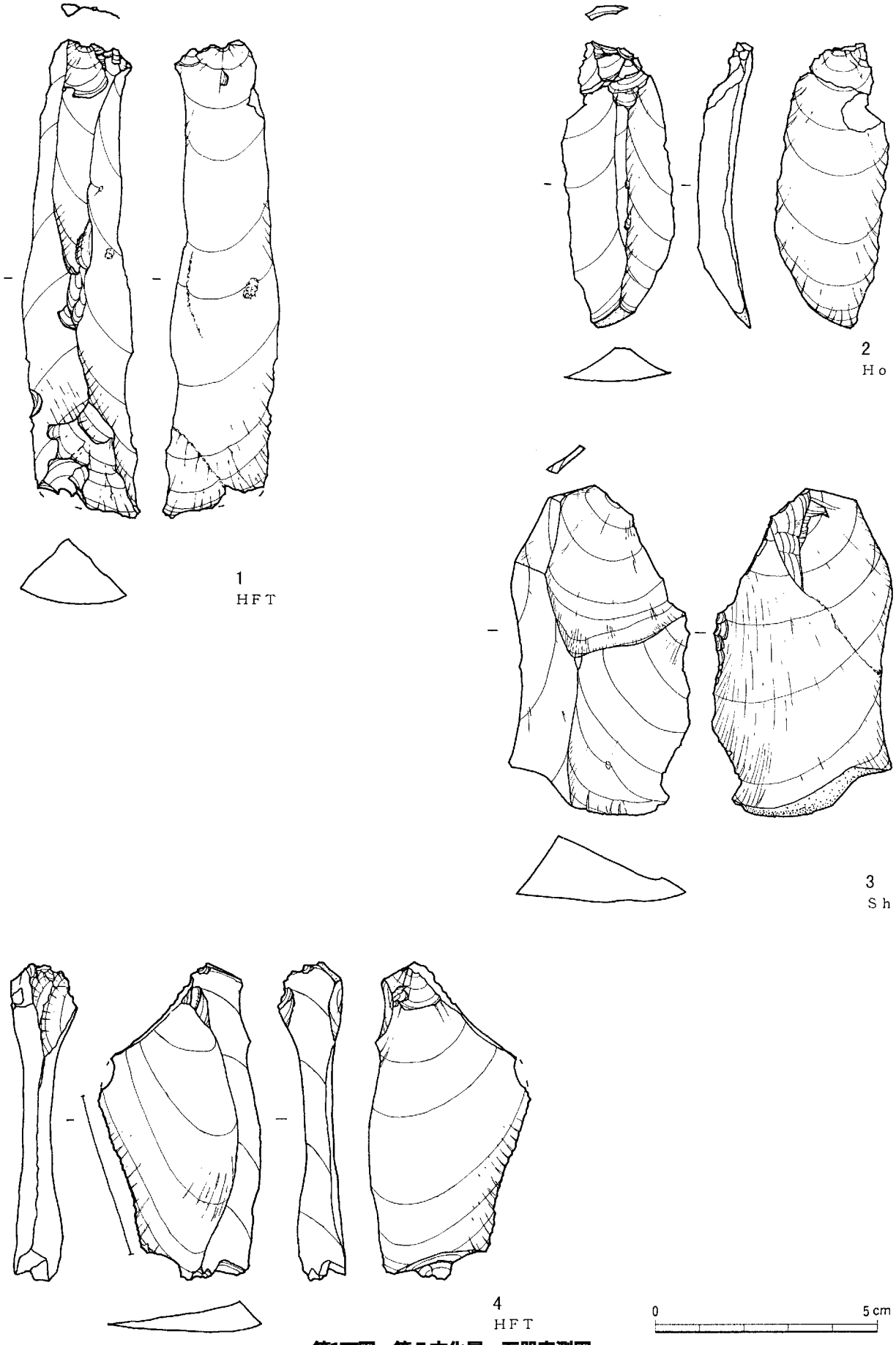




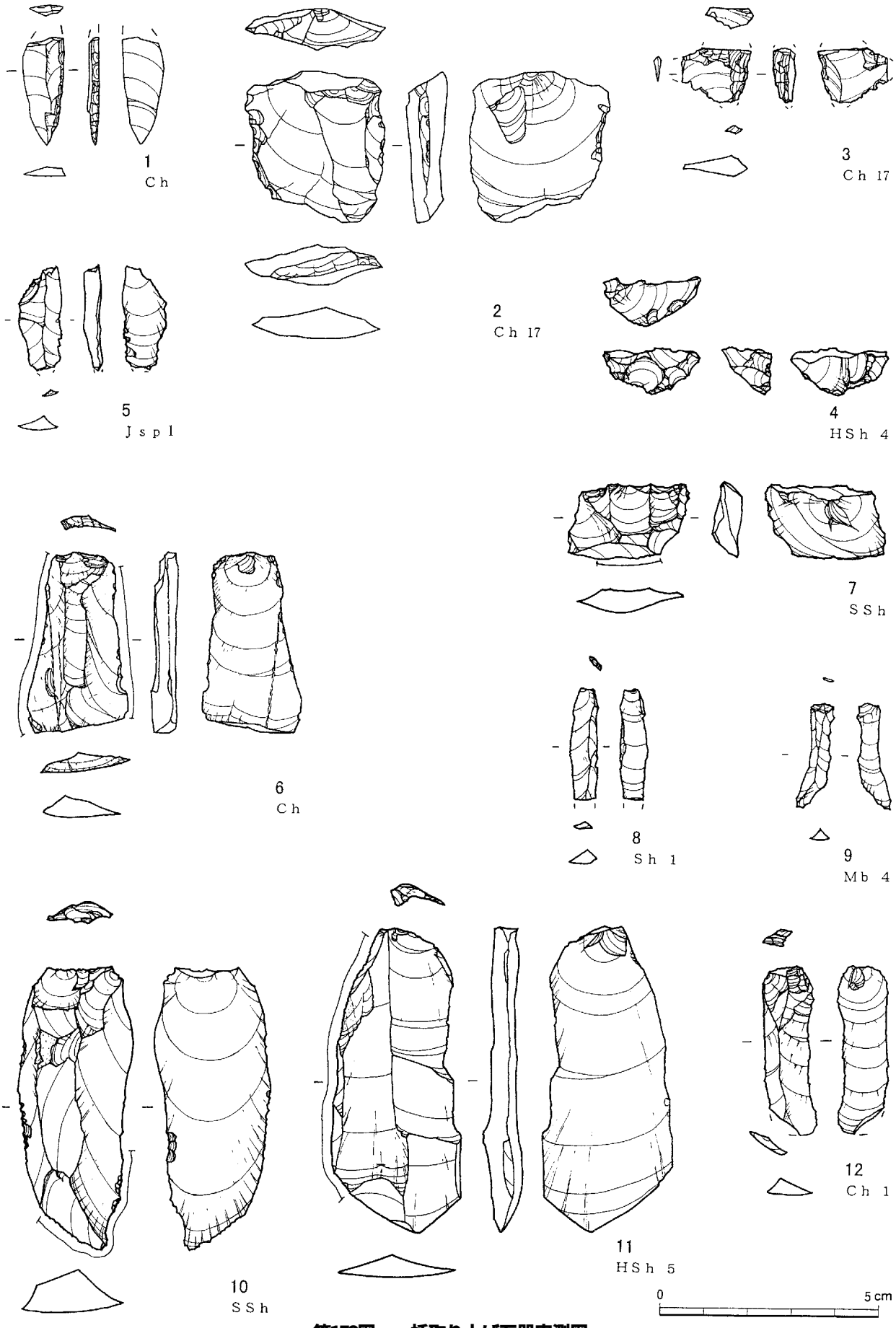
第155図　第４文化層　石器実測図（２）



第156図　第５文化層　遺物分布図



第157図　第５文化層　石器実測図



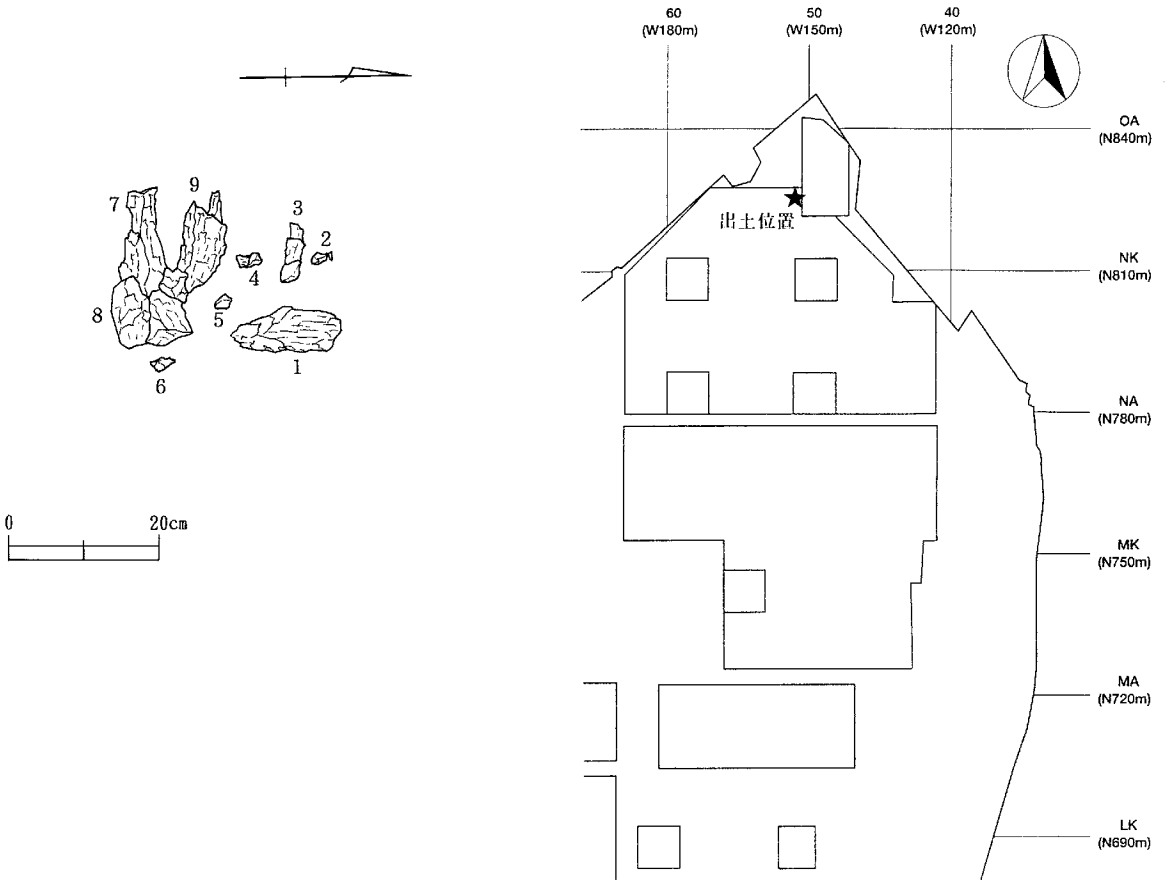
第158図　一括取り上げ石器実測図

9．出土炭化物（Ⅱ－図１、図版13）

平成７年度に実施した該期の調査において、NO－52グリッド（４区北東隅）のIVa 中～下層にかけて、９点の炭化材がまとまって発見された。その出土状況はⅡ－図１（下図）と図版13に示したが、中心部の３点（№７～９）は垂直に立った状態で検出され、その周りに他の小破片（№１～６）が点在する状況であった。これらの炭化材については、「用田バイパス関連遺跡群」での出土事例もあり、人為的な遺構の可能性が考えられる事や、出土層位が本遺跡での第２文化層に該当する事などを考慮に入れ、掘り込みの有無の確認や石器の分布状況などを確認しながら慎重に調査を進めていった。しかし、調査時には掘り込みは確認する事が出来ず、また、出土位置が石器集中部（ブロック）からやや離れている事など、人為的な遺物とするだけの確証は得られなかった。このため、本報告では、この炭化物を「自然遺物」として位置づけ、第２文化層の遺物とは別項として記載した。

また、この炭化材については、放射性炭素年代測定と樹種同定を行っている。分析結果は、VI－3.4. を参照されたい。

（国武）



Ⅱ－１図　旧石器時代出土炭化物実測図

III. 縄文時代

1．概　要

「遺跡の位置と環境」（Ⅰ－2.）でも述べたように、本調査区の北西部は縄文時代中期前半の遺跡、日影山遺跡と重複している。日影山遺跡は、「国分寺市史上巻第二章」によれば、遺跡内の数箇所の地点から中期初頭五領ケ台式から勝坂式にかけての土器片が採集されてはいるが、本格的な発掘調査は実施されていない。このため、同遺跡の内容や広がりなどを知る上で本調査に期待されるものは大きかった。ただ、結果から云えば、残念ながら遺構が存在するであろう調査区北側は旧鉄道学園の陸上競技場造成工事によりⅢ層からⅣ層までもが大きく削平されていたため、期待された成果は得られなかった。しかし、そうした中でも、かろうじて削平を免れたSI－１J（早期撚糸文期に比定される）とSI－２J（中期前半阿玉台期に比定される）の２軒の「竪穴住居跡」が検出されたことは、せめてもの救いといえよう。また、それに加え、阿玉台期の住居跡（SI－２J）から北へ約40mの付近で、竪穴住居跡またはそれに類する遺構の柱穴跡を感じさせる形のいい小穴が多数検出されている。本書では「小穴群」として報告したが、これらの小穴群の配置には何らかの規則性が看取できる事や、陸上競技場の外周の盛土層中から多量の阿玉台式の土器片が採取されている事などから推察すると、同位置にはおそらく最低１～２軒の竪穴住居跡の存在の可能性が窺える。この事は、２軒の住居跡の検出を含め「日影山遺跡」の全容を把握する上で、貴重な資料となり得るであろう。

また、本調査では、上記の２軒の住居跡や小穴群の他に、「集石」17基、「陥穴」38基、「土坑」80基、「炉跡」２基が検出されている。

集石は、調査区の北から南西にかけて分布しているが、土坑を伴うものと伴わないものに二分できる。それぞれの検出数の内訳は、前者が11基、後者が６基である。遺構の構築時期は、共伴する土器をその構築時期とするならば、前期諸磯期のものが１基、中期初頭～前半のものが10基、中期中～後半のものが６基である。

陥穴については、その断面形状及び底部施設の有無から次のように分類を試みた。

Ⅰ類－長軸が短軸の約10倍以上のもの。所謂早期T-Pitとされるもの。

Ⅱ類－Ⅰ類以外で底部に小穴があるもの。

Ⅲ類－　〃　〃　底部に小穴がないもの。

また、Ⅱ類については底部の小穴の配置などから次のように細分した。

Ⅱ類Ａ－底面の小穴が５個以下で、長軸壁に平行して並ぶもの。

Ⅱ類Ｂ－　　〃　　〃　　配置が不規則なもの。

Ⅱ類Ｃ－底面の小穴が５個以上のもの。

分類ごとの検出数は、Ⅰ類が６基、Ⅱ類Ａが22基、Ⅱ類Ｂが３基、Ⅱ類Ｃが３基、Ⅲ類が４基である。尚、陥穴については下部施設をより顕著に確認する為に地山ごと断ち割って調査を行った。

2．遺　構

1）竪 穴 住 居 跡

住居跡は２軒検出されており、２区北側において検出された早期撚糸文期のSI－１Jと４区中央南側において検出された中期阿玉台期のSI－２Jである。尚、住居の小穴の径及び深さは一覧表にまとめた。

SI－１J（第161・162図、図版31・32）。

〈検出位置〉 ２区北側 LT－63・64グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北47度西を指向する。 〈規　　模〉 長軸4.8m×短軸3.5m×深さ0.3m。

〈遺存状態〉 良好。 〈小　　穴〉 25個。

〈出土遺物〉 土器片14点。（第212図**１～３**、図版91）

〈覆　　土〉 暗褐色土と茶褐色土を主体とする土層で、３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は全体に平坦でほぼ均一な固さである。壁は急角度で立ち上がる。中央南側には平面が方形、断面形が皿状を呈する掘り込みが検出されている。この掘り込みの規模は、長軸0.9m×短軸0.75m×深さ0.1m を測る。壁際には小穴が25個検出されているが、配列・形状等に規則性は看取できない。規模は径が６cm～18cm、深さが６cm～36cm を測る。出土遺物は、掘り込みより早期撚糸文系の稲荷原式の土器が出土している。このことから、本住居跡の構築時期は早期撚糸文期に比定される。

SI－２J（第163～165図、図版33～35）

本遺構は、最初に検出された遺構の使用面の調査を終了し、その掘り方の調査を行っている途中で最初の遺構の柱穴より一回り内側で建替え以前のものと思われる柱穴及び炉跡のプランが新たに検出された。このため、本遺構は、《建替え拡張された住居跡》と考えられる事から、本書ではそれぞれを**《拡張前》**・**《拡張後》**として報告する。

〈検出位置〉 ４区中央南側 MH－55・56。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈出土遺物〉 土器片32点。（第212図**４～７**、図版32）石器２点。（第243図**２・３**、図版110）

《拡張後》

〈主　　軸〉 北82度西を指向する。（柱穴方向）〈規　　模〉 長軸５m×短軸4.6m×深さ0.1m。

〈遺存状態〉 グランドの造成工事によりⅢ層上面まで削平され、床面までの残存は、約10cm 程であった。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする単一層。

〈　炉　〉 長軸0.9m×短軸0.65m×深さ0.1m を測る。埋設土器（第212図**７**、図版32）をともなう。

〈柱　　穴〉 ５個。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、削平されているため壁の残存は少ないため、確認面からの掘り込みは浅く、残存部での断面形状は皿状を呈する。床面は南側がやや低いほかは全体的にほぼ平坦で、炉の周囲には東側と南側に広がる硬化面が検出された。壁は全面とも大きく削平され、特に東壁はほとんど残存していないが、残存部では緩やかに立ち上がる。炉は床面の中心よりやや西側で検出された。炉の平面形状は東西方向に長軸をもつ楕円形で、断面形状は皿状を呈する。炉の西側には口縁部と底部を欠く径18cm 高さ19cm の深鉢形土器が埋設されており、埋設土器中及び周囲には焼土が確認された。柱穴は北側の１本以外の主柱穴と思われる４本は径30～60cm 深さ45～70cm を測り、ほぼ対をなした状態で壁際から検出された。床面下には約10cm 前後の掘り方があり、その下面において拡張以前の柱穴４本と炉と思われる掘り込みが１基確認された。

《拡張前》

〈主　　軸〉 北80度西を指向する。（柱穴方向）

〈規　　模〉 長軸４ｍ×短軸3.6m×深さ0.12m。（想定）

〈遺存状態〉 拡張により床面、壁は壊されている。

〈柱　　穴〉 ４個

〈形状・特徴〉 拡張後の掘り方の調査時に検出された。床面及び壁は残存しないが、これは、拡張後の住居跡に壊されていると考えられ、柱穴と掘り込みが残存するのみである。炉跡と思われる掘り込みは、拡張後の炉に北西側が壊されているが、東西方向に長軸をもつ楕円形で、規模は長軸60cm×短軸50cm×深さ30cm を測る。柱穴は、拡張後の４本柱穴の内側約20cm 程の位置で検出され、規模は径30～40cm・深さ60～80cm を測る。

以上のことから本住居跡は後に一回り大きく立て替えられたと考えられる。また、本住居跡の構築時期は出土遺物から中期阿玉台期に比定される。

2）竪 穴 状 遺 構

検出された遺構は１区中央に位置する SX－７J と２区北側に位置する SX－61J である。これらは、遺構の用途・性格がはっきりしていないもので「小竪穴」・「竪穴状遺構」と呼ばれたりするが、本書では「竪穴状遺構」として報告する。

SX－７J（第166図、図版36・37）

〈検出位置〉 １区中央 LO－100グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北56度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.8m×短軸2.35m×深さ0.15m。

〈遺存状態〉 良好。　　〈小　　穴〉 ９個。

〈出土遺物〉 土器片１点。（第212図**８**、図版91）、石器４点。（第244図**12**、図版110）

〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とし、２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。確認面からの掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦で、壁は底面より緩やかな角度で立ち上がる。小穴は平面径20～30cm で、深さ12～34cm を測る。出土している土器等から判断すると早期撚糸文期の構築と考えられる。

SX－61J（第167～169図、図版38・39）

〈検出位置〉 ２区北側 MI－99グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸3.14m（5.8m）×短軸３m（4.5m）×深さ0.16m。　＊（　）は外周小穴間。

〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 土器片７点。（第212図**９**、図版91）

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とし、４層に分かれる。

〈小　　穴〉 21個。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな角度で立ち上がる。小穴は底面に４個、壁際に10個、壁から0.6～１m 程の周囲に７個検出された。規模は底面中央

が径30cm、深さ50cm を測り、その他の小穴は、東西壁際の２個を除くと径20cm 前後、深さ８～20cm を測る。周囲の小穴は径約20cm、深さ８～16cm を測る。本遺構の構築時期は出土遺物から判断すると中期前半と考えられる。

３）集　石

集石は、下面に土坑を有する《集石土坑》11基、土坑を伴わない《集石址》６基が検出されている。時期については集石中から出土する土器から判断すると、前期が１基で、その他はすべて中期に該当すると思われる。

《 集 石 土 坑 》

SS－１J（第170図、図版40）

〈検出位置〉 １区南西側 LE－107グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈規　　模〉 径4.4m のほぼ円形に破砕礫が集中。

〈出土遺物〉 集石中から土器片50点（第212図**10～15**、図版91）、石器８点（第244図**15**、図版110）。

〈特　　徴〉 西側と南側の一部に撹乱を受けているほかは遺存状況が良好で、破砕礫は検出面より約20cm に上下分布しており、礫の大半は破砕礫で被熱して赤化しているものもある。掘り下げた面のほぼ中央に SS－１Ja、南西に SS－１Jb の土坑２基を確認した。構築時期は、集石中から出土する土器から考えると中期阿玉台期と思われる。土坑については以下の通りである。

SS－１Ja

〈検出位置〉 LE－107グリッド。　〈遺存状態〉 良好。

〈規　　模〉 長軸1.45m×短軸1.35m×深さ0.38m。

〈覆　　土〉 暗褐色土、黄褐色土を主体とする５層に分かれる。１～３層には炭化物粒子を含み、下層の２・３層には焼土粒子を含む。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形はすり鉢状を呈する。礫は底面から約５cm まで被熱によって赤化した破砕礫が充填されている。被熱面は確認できなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－１Jb

〈検出位置〉 LD－108グリッド。　〈遺存状態〉 良好。

〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸0.65m×深さ0.16m。〈主　　軸〉 北62度西を指向する。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする６層に分かれる。東側の２・３層には炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 平面形は２基の円形土坑が重複している不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。礫は上層から中層に充填されている。被熱面は確認できなかった。土坑内からの遺物出土はない。

SS－６J・９J（第171図、図版41）

〈検出位置〉 ４区西側 MI－99グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈規　　模〉 東西約７m×南北約10m に分布する。

〈出土遺物〉 集石中から土器片49点（第213図**18～26**、図版91）、石器２点。

〈特　　徴〉 遺存状況は一部撹乱を受けているがほぼ良好で、礫は大半が被熱した破砕礫で、北西から南

東にかけて散らばる分布を示す。その南東にSS－６J、北西にSS－９Jの土坑プランが２基確認された。構築時期は、集石中から出土する土器から考えると中期阿玉台期と思われる。土坑については以下の通りである。

SS－６J

〈検出位置〉 MN－94グリッド。　　〈遺存状態〉 良好。

〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸1.5m×深さ0.42m。

〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれ、１層は炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 遺存状況は良好である。平面形は円形で、断面形はすり鉢状を呈する。礫は拳大の被熱によって赤化した破砕礫が大半を占め、底面から約５cm上まで充填されている。１層下面から約10cm大の炭化物が出土しているが、被熱面・焼土等は確認されなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－９J

〈検出位置〉 MN－95グリッド。　　〈規　　模〉 長軸0.9m×短軸0.76m×深さ0.41m。

〈主　　軸〉 北47度西を指向する。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれ、炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 東側一部に撹乱を受ける。平面形は楕円形で、断面形は半円形を呈する。礫は５cm以下の破砕礫が土坑底面に集中する。被熱面は確認されなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－８J（第172図、図版42）

〈検出位置〉 ３区南西側IO－108グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層中面。

〈規　　模〉 径６mの範囲に約５cm以下の破砕礫が分布。

〈出土遺物〉 集石中から土器片16点（第213図**31～37**、図版92）、石器３点。（第244図**16**、図版110）

〈特　　徴〉 上面を耕作により削平されている。礫は約５cm以下の破砕礫で、上下の幅約10cmの円形状に散らばる。礫分布の中心部分に土坑が検出された。構築時期は、集石中から出土する土器から考えると前期諸磯期と思われる。土坑については以下の通りである。

〈検出位置〉 IP－109グリッド。　　〈規　　模〉 長軸1.1m×短軸１m×深さ0.45m。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする３層に分かれ、炭化物粒子・焼土粒子を含む。

〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形はすり鉢状を呈する。上面から約30cmまでを５～10cm大の被熱によって赤化した破砕礫で充填されている。１層の下面には10cm大の炭化物が出土しているが、被熱面は確認されなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－16J（第173図、図版43）

〈検出位置〉 ３区北側KT－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈規　　模〉 南北約10m×東西約16mに分布し、東寄りの約５m四方に集中する。

〈出土遺物〉 集石中から土器片73点（第214図**51～53**、図版92）、石器４点（第243図**９**・第244図**18**、図版110）。

〈特　　徴〉 礫は５cm大の破砕礫を中心に、検出面より約20cmの幅で広範囲に分布しており、礫の一部は被熱により赤化している。集中部周辺は大きく撹乱を受けており、その東寄りの位置で土坑を検出した。構築時期は、集石中から出土する土器から考えると中期阿玉台期と思われる。土坑については以下の

通りである。

〈検出位置〉 KT－102グリッド。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸1.2m×深さ0.33m。

〈主　　軸〉 北12度西を指向する。

〈覆　　土〉 暗褐色土と黄褐色土を主体とする２層に分かれ、炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 東側の一部に撹乱を受ける。平面形は楕円形で、断面形は中段から上が外に広がるすり鉢状を呈する。底面は明瞭ではないが淡い朱褐色をしていた。礫は拳大以下の被熱により赤化した破砕礫で、土坑中央部分を中心に充填されている。土坑内から遺物は出土していない。

SS－10J（第174図、図版44）

〈検出位置〉 ４区北側 NL－59グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 径約１m の円形に礫が分布。

〈出土遺物〉 集石中から土器片15点。（第213図**40**、図版92）

〈特　　徴〉 小規模のもので、礫分布の下に土坑が検出された。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期勝坂期と思われる。土坑については以下の通りである。

〈検出位置〉 NL－59グリッド。　　〈規　　模〉 長軸0.9m×短軸0.79m×深さ0.16m。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする単一土層で、炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は皿状を呈する。礫は５cm 以下の破砕礫で覆土上面に集中する。被熱面は確認されなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－13J（第174図、図版44）

〈検出位置〉 ４区北側 NK－58グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 南北1.5m×東西1.12m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片19点（第214図**40～42**、図版92）、石器１点。（第244図**17**、図版110）。

〈特　　徴〉 SS－10J に類似した集石で、位置的にも南東約６m の距離にあり、土器の接合関係もあることから同時期（中期勝坂期）の構築であろう。土坑については以下の通りである。

〈検出位置〉 NK－58グリッド。　　〈規　　模〉 長軸1.25m×短軸0.66m×深さ0.17m。

〈主　　軸〉 ほぼ東西方向を指向する。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする単一土層で、炭化物粒子を含む。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。礫は５cm 以下の破砕礫で覆土上面中央に集中する。被熱面は確認されなかった。土坑内から遺物は出土していない。

SS－17J（第174図、図版44）

〈検出位置〉 ３区中央西側 JD－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈規　　模〉 南北約5.5m×東西約５m に分布する。

〈出土遺物〉 集石中から土器片１点。（第214図**46**、図版92）

〈特　　徴〉 東側に溝状の撹乱を受ける。礫は約10cm 以下の破砕礫が散在する分布を示している。その東側に土坑を検出した。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期と思われる。土坑については以下の通りである。

〈検出位置〉 JD－103グリッド。　　〈規　　模〉 長軸0.9m×短軸0.5m×深さ0.47m。
〈主　　軸〉 北34度西を指向する。
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする３層に分かれ、炭化物粒子を含む。
〈形状・特徴〉 東側と南側の一部に撹乱を受ける。平面形は楕円形で、断面形は底がやや箱形をするすり鉢状を呈する。礫は拳大の破砕礫を中心に充填されており被熱により赤化しているが、被熱面は確認できなかった。土坑内から遺物は出土してない。

SS－18J（第174図、図版45）
〈検出位置〉 ３区中央 JP－106グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈規　　模〉 径約１m の範囲に分布。
〈出土遺物〉 集石中から土器片16点（第214図**47・48**、図版92）、石器２点。（第243図**7・8**、図版110）
〈特　　徴〉 検出面から下約10cm の幅で礫が分布し、下面において土坑のプランを検出した。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期と思われる。土坑については以下の通りである。
〈検出位置〉 JP－106グリッド。　　〈規　　模〉 長軸1.16m×短軸0.93m×深さ0.37m。
〈主　　軸〉 北61度東を指向する。
〈覆　　土〉 暗褐色土と黄褐色土を主体とする２層に分かれ、炭化物粒子を含む。
〈形状・特徴〉 北側の一部に撹乱を受けている。平面形は不整な楕円形で、断面形はすり鉢状を呈する。礫は10cm 以下の被熱により赤化した破砕礫が底面より５cm 上まで充填されている。被熱面は確認されなかった。土坑内から遺物は出土してない。

SS－19J（第174図、図版45）
〈検出位置〉 ３区中央 JP－105グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈規　　模〉 径0.8m の円形に分布する。
〈出土遺物〉 集石中から土器片７点。（第214図**49・50**、図版92）
〈特　　徴〉 礫は５cm 以下の破砕礫で、散在する。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期と思われる。土坑については以下の通りである。
〈検出位置〉 JP－105グリッド。　　〈規　　模〉 長軸1.12×短軸0.88m×深さ0.17m。
〈主　　軸〉 ほぼ東西方向を指向する。
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれ、炭化物粒子を含む。
〈形状・特徴〉 遺存状況は良好である。平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。礫は平面分布と同様で上面から下面までまばらな入り方をしている。

《 集 石 址 》
SS－３J（第175図、図版46）
〈検出位置〉 ２区北側 IG－58グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 中央に歴史時代の土坑による撹乱を受ける。
〈規　　模〉 南北3.5m×東西４m。
〈出土遺物〉 土器片13点。（第212図**16・17**、図版91）

〈特　　徴〉 礫は20cm 以下のものが８点その他は10cm 以下のもので、大半が被熱により赤化した破砕礫である。平面分布は、西側に集中する部分があるもののまばらな感じである。上下分布は、約15cm である。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期阿玉台期と思われる。

SS－４J（第175図、図版46）

〈検出位置〉 ２区北側 LM－49グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 南北約0.8m×東西約0.9m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片１点。

〈特　　徴〉 集中部は径約30cm の小規模の集石で、礫は５cm 以下のものが主体で赤化・黒色化した破砕礫である。集石中から出土している土器は細片のため型式は不明である。しかし、周辺から出土している遺物から考えると構築時期は、中期と思われる。

SS－７J（第175図、図版46）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－104グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 南北約4.2m×東西約３m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片６点。（第213図**27～30**、図版91）

〈特　　徴〉 礫は20cm 以下のものが10点、その他は10cm 以下で破砕礫が大半を占める。礫の集中はみられず散在する。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期阿玉台期と思われる。

SS－14J（第176図、図版46）

〈検出位置〉 ４区北側 NI－46グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 西側を溝状の掘り込みにより撹乱されている。

〈規　　模〉 南北3.5m×東西2.8m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片20点。（第214図**43**、図版92）

〈特　　徴〉 礫は10cm 以下の破砕礫が主体である。約２m の範囲に集中する。また検出位置は北西方向に傾斜して下がる。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期阿玉台期と思われる。

SS－12J（第176図、図版46）

〈検出位置〉 ３区南側 HP－97グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 南北1.7m×東西2.6m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片１点。（第213図**39**、図版92）

〈特　　徴〉 礫は10cm 以下の破砕礫で南西隅にやや集中する他は散在している。構築時期は、集石中及び周辺から出土している土器から考えると中期と思われる。

SS－15J（第176図、図版46）

〈検出位置〉 ４区北側 NJ－50グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好。　　〈規　　模〉 南北1.6m×東西２m。

〈出土遺物〉 集石中から土器片30点。（第214図**44・45**、図版92）

〈特　　徴〉 礫は５cm 以下の破砕礫が主体で、約1.5m の範囲に集中する。構築時期は、集石中から出土している土器から考えると中期五領ヶ台期と思われる。

４）陥　穴

概要でも述べたが、陥穴については、その断面形状及び底部施設の有無から次のように分類した。

Ⅰ類－長軸が短軸の約10倍以上のもの。所謂早期 T-Pit とされるもの。

Ⅱ類－Ⅰ類以外で底部に小穴があるもの。

Ⅲ類－　〃　〃　底部に小穴がないもの。

また、Ⅱ類については底部の小穴の配置などから次のように細分した。

Ⅱ類Ａ－底面の小穴が５個以下で、長軸壁に平行して並ぶもの。

Ⅱ類Ｂ－　　〃　　〃　　配置が不規則なもの。

Ⅱ類Ｃ－底面の小穴が５個以上のもの。

以下に、分類ごとに各遺構の説明を述べるが、陥穴の分布状況は第160図に示した。また、基本層序（Ⅰ－５）でも述べたように調査地区の北東から中央部にかけては旧鉄道学園の運動場施設でⅢ層上面からⅣ層上面までが大きく削平されていた。そのため、この場所で検出された遺構は上面が削平されているものが多く、各遺構ごとの断面形状をより明確に比較する為、当時の生活面を想定し、その面までの立ち上がりを実測図に点線で示した。想定生活面は、それぞれの地区での集石遺構のレベルや、土器・石器の出土レベルなどを参考に設定した。尚、遺構説明の文中にある比率は、底面の長軸の長さを短軸の長さで割った数値（小数点以下２桁で四捨五入）であり、数値が大きいほど縦長の遺構になる。

《 Ⅰ 類 》

SK－35J（第177図、図版47）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈検出位置〉 １区北壁沿い、MJ－95グリッドに位置する。

〈主　　軸〉 北85度西を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸3.00m×短軸0.87m。　　（想定生活面の標高） 78.50m。

（底面）長軸3.15m×短軸0.22m。　　（比　　率） 14.3。

（確認面からの深さ）1.28m。　　（想定生活面からの深さ）1.46m。

〈遺存状態〉 北壁の一部、南壁の約１/２が撹乱によって壊されている。

〈出土遺物〉 土器片１点。小片のため型式は不明である。

〈覆　　土〉 基本的には大きく２層にわかれる。上層は、暗褐色土が主体で自然堆積層。下層は、明褐色土、暗褐色土、黄褐色土の混合土で、遺構の肩や側壁の崩落土と思われる。

〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。長軸壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.7m の所からロート状に傾斜し立ち上がる。短軸壁は、内側にオバーハングしながら急角度で立ち上がり、約0.7m の所からほぼ垂直に立ちあがる。底面は、平坦でⅤ層まで掘り込まれている。

SK－913J（第177図、図版47）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈検出位置〉 ４区西の中央部、MM－104グリッドに位置する。〈主　　軸〉 ほぼ東西方向。

〈規　　模〉 （上面）長軸2.46m×短軸1.26m。　（想定生活面の標高） 78.50m。

（底面）長軸3.31m×短軸0.16m。　（比　　率） 20.7。

（確認面からの深さ）1.05m。　（想定生活面からの深さ）1.16m。

〈遺存状態〉 良好。

〈覆　　土〉 基本的には大きく２層にわかれる。上層は、暗褐色土主体で自然堆積層。下層は、明褐色土、暗褐色土、黄褐色土の混合土で、肩部や側壁の崩落土と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。長軸壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.5m の所からロート状に約45度の傾斜で立ち上がる。短軸壁は、内側にオバーハングしながら急角度で立ち上がり、約1.1m の所から垂直に立ちあがる。底面は、ほぼ平坦でⅤ層まで掘り込まれている。南東約28m の距離にはSK－35J（前述）があり、両遺構は、主軸方向、形状ともに類似しており、同時期に構築された可能性が高い。

SK－274J（第178図、図版48）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　〈検 出 面〉 Ⅲ層。

〈検出位置〉 ２区北側、LG－67グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北11度東を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸2.68m×短軸0.35m。　（想定生活面の標高） 78.10m。

（底面）長軸2.30m×短軸0.16m。　（比　　率） 14.4。

（確認面からの深さ）0.54m。　（想定生活面からの深さ）1.16m。

〈遺存状態〉 グランド部にあたるため、遺構上部約１/２と南壁の一部が削平されている。

〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 基本的には明褐色土、暗褐色土、黄褐色土の混合土が主体で、４層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。長軸壁は底面から急角度で立ち上がる。短軸壁は、長軸壁よりはやや緩い角度で立ち上がる。底面は、中央部から短軸壁に向かって丸みを帯びながら緩やかに傾斜する。断面形状は丸みを帯び皿状を呈す。

SK－1019J（第178図、図版48）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。

〈検出位置〉 ４区東側、MQ－49グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北33度東を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸2.70m×短軸0.40m。　（想定生活面の標高） 77.90m。

（底面）長軸1.90m×短軸0.16m。　（比　　率） 11.9。

（確認面からの深さ）0.60m。　（想定生活面からの深さ）1.04m。

〈遺存状態〉 グランド部にあたり、遺構上部約１/２が大きく削平されている。

〈出土遺物〉 土器片６点。（第215図**67**、図版93）

〈覆　　土〉 基本的にはロームブロックを多く含む暗褐色土が主体で、５層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。東西長軸壁は底面から急角度で立ち上がる。短軸壁は、長軸壁よりはやや緩い角度で立ち上がる。底面は、中央部から南北短軸壁に向かって丸みを帯びながら緩やかに傾斜する。断面は丸みを帯び皿状を呈す。SK－274J（前述）と規模・形状が類似しており、両遺構は、同時期に構築された可能性が高い。

SK－252J（第178図、図版48）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層。
〈検出位置〉 2区北側、LT－61グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北43度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.93m×短軸0.50m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.60m×短軸0.16m。　　（比　　率） 10.0。
（確認面からの深さ）0.62m。　　（想定生活面からの深さ）0.92m。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり、遺構上部が削平されている。
〈覆　　土〉 基本的には2層に分かれ、上層は暗褐色土主体。下層は、暗褐色土と黄褐色土との混合土。
〈出土遺物〉 なし。
〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。長短軸壁とも底面から急角度で立ち上がる。底面中央部は、ほぼ平坦だが、短軸壁際は、やや丸みを帯びる。断面形状は鍋底状を呈す。

SK－273J（第178図、図版48）

〈分　　類〉 Ⅰ類。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。
〈検出位置〉 2区北側、LC－69グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北18度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.80m×短軸0.34m。　　（想定生活面の標高） 78.10m。
（底面）長軸1.55m×短軸0.16m。　　（比　　率） 9.7。
（確認面からの深さ）0.52m。　　（想定生活面からの深さ）1.14m。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり、遺構上部が削平されている。
〈覆　　土〉 基本的には褐色土と暗褐色土の混合土で、4層に分かれる。
〈出土遺物〉 なし。
〈形状・特徴〉 平面形状は、長楕円形を呈す。長短軸壁とも底面から垂直に近い急角度で立ち上がる。底面中央部はほぼ平坦だが、短軸壁際はやや丸みを帯び、断面形状は鍋底状を呈す。
SK－252J（前述）と規模・形状とも類似しており、両遺構は、同時期に構築された可能性が窺える。

《 Ⅱ 類 A 》

SK－277J（第179図、図版49）

〈分　　類〉 Ⅱ類A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 2区北側、LT－69グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北47度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸2.31m×短軸1.75m。　　（想定生活面の標高） 78.20m。
（底面）長軸1.98m×短軸1.13m。　　（比　　率） 1.8。
（確認面からの深さ）0.6m。　　（想定生活面からの深さ）0.81m。
〈底部の小穴〉（数）3個。（掘り方の径）12～20cm。（杭痕の径）7～13cm。（深さ）45～60cm。

〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土主体で、底面には明茶褐色土が薄く堆積している。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面からやや開きぎみに立ち上がっていき、長軸壁の肩部はより広く傾斜し立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央には長軸壁と平行して３本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直に地山に深く突き刺さるように延び、先端は尖っている。３本とも掘り方または地山の崩れらしき痕跡がある。

SK－791J（第179図、図版50）
〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ３区中央西側、JK－108グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北82度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.15m×短軸0.82m。　（想定生活面の標高） 78.50m。
（底面）長軸0.85m×短軸0.5m。　（比　　率） 1.7。
（確認面からの深さ）0.90m。　（想定生活面からの深さ）1.06m。
〈底部の小穴〉（数）２個。（掘り方の径）16cm。　（杭痕の径）６cm。　（深さ）22～24cm。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面から垂直に近い急角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央には長軸壁と平行して２本の小穴が並ぶ。両杭痕ともほぼ垂直で、径が杭痕の約３倍程の掘り方が確認される。先端は、やや丸みを帯びる。

SK－653J（第179図、図版50）
〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ３区南側、IL－101グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北84度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸2.13m×短軸1.36m。　（想定生活面の標高） 78.50m。
（底面）長軸1.58m×短軸0.8m。　（比　　率） 2.0。
（確認面からの深さ）0.65m。　（想定生活面からの深さ）0.81m。
〈底部の小穴〉（数）３個。（掘り方の径）14～19cm。（杭痕の径）７～９cm。　（深さ）47～52cm。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土主体で、下層はロームブロックを多く含む。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面から急角度で立ち上がり、約0.4m の所から開き気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央には、中央小穴はややずれるが、３本の小穴が長軸壁と平行してが並ぶ。杭痕はほぼ垂直で、先端部は不明だが、掘り方または地山の崩れらしき痕跡がある。

SK－980J（第180図、図版51）
〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区中央南側、MD－65グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北77度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.37m×短軸0.8m。　（想定生活面の標高） 78.20m。

（底面）長軸1.06m×短軸0.36m。　（比　率） 2.9。
（確認面からの深さ）0.93m。　（想定生活面からの深さ）1.36m。
〈底部の小穴〉（数）２個。（掘り方の径）12cm。　（杭痕の径）７cm。　（深さ）32cm。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土主体。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が隅丸長方形を呈し、下面は一方がやや歪な隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面からほぼ垂直に立ち上がっていき、約0.6m の所から開き気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央よりやや南壁寄りには長軸壁と平行して２本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で片方の小穴には掘り方または別の杭痕らしき痕跡が認められる。

SK－1024J（第180図、図版51）
〈分　類〉 Ⅱ類 A。　〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。
〈検出位置〉 ４区北側、NE－53グリッドに位置する。　〈主　軸〉 北12度西を指向する。
〈規　模〉 （上面）長軸1.36m×短軸0.56m。　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.20m×短軸0.4m。　（比　率） 3.0。
（確認面からの深さ）0.60m。　（想定生活面からの深さ）1.32m。
〈底部の小穴〉（数）２個。（掘り方の径）９～12cm。　（杭痕の径）６cm。　（深さ）15～18cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり、上部の約１／２を削平されている。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で４層に分かれる。最下層はロームブロックを多く含む。
〈形状・特徴〉 平面形状は上面・底面とも長方形を呈し、底面の四隅はほぼ直角を呈す。壁は、長短軸壁とも底面からほぼ垂直に近い急角度で立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で壁際は直角に近い。底面中央には長軸壁と平行して２本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。先端は、やや尖る。

SK－789J（第180図、図版52）
〈分　類〉 Ⅱ類 A。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ３区北西側、KG－109グリッドに位置する。　〈主　軸〉 北79度西を指向する。
〈規　模〉 （上面）長軸1.90m×短軸1.08m。　（想定生活面の標高） 78.55m。
（底面）長軸1.67m×短軸0.49m。　（比　率） 3.4。
（確認面からの深さ）1.08m。　（想定生活面からの深さ）1.31m。
〈底部の小穴〉（数）２個。（掘り方の径）16cm。　（杭痕の径）６cm。　（深さ）45～50cm。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で６層に分かれる。最下層はやや黒味を帯びる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面は隅丸長方形、下面は中央がややくびれた隅丸長方形を呈す。長軸壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.4m の所からロート状に傾斜し立ち上がる。短軸壁は、ほぼ垂直に近い急角度で真っ直ぐに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で壁際は直角に近い。底面中央には長軸壁と平行して２本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、径が杭痕の約３倍程の掘り方らしき痕跡が認められる。先

端は、掘り方より約16cm ほど深く地山に入る。

SK－1022J（第181図、図版52）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区北側、NM－61グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北42度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸2.37m×短軸0.97m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.65m×短軸0.26m。　　（比　　率） 6.3。
（確認面からの深さ）0.93m。　　（想定生活面からの深さ）1.13m。
〈底部の小穴〉（数）２個。（掘り方の径）11～17cm。（杭痕の径）６cm。（深さ）31～40cm。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で６層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が隅丸長方形で下面は中央がややくびれた長方形を呈す。壁は、長短軸壁とも底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.4m の所からロート状に傾斜し立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南壁側に長軸壁と平行して２本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。先端は、やや丸味を帯び掘り方（地山の崩れ）より約15cm ほど深く地山に入る。

SK－32J（第181図、図版53）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 １区東側、ME－80グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北54度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.52m×短軸1.05m。　　（想定生活面の標高） 78.30m。
（底面）長軸1.90m×短軸0.40m。　　（比　　率） 4.8。
（確認面からの深さ）0.94m。　　（想定生活面からの深さ）1.34m。
〈底部の小穴〉（数）３個。（掘り方の径）12～14cm。（杭痕の径）６cm。　　（深さ）34～53cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平されている。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には大きく２層に分かれ、上層は自然堆積の暗褐色土が主体。下層はロームブロックを多く含んだ明褐色土主体で２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が不正形な楕円形を呈し、下面は隅丸長方形を呈す。壁は、長軸壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.6m の所から段状に外湾しやや開き気味に傾斜し立ち上がる。短軸壁は内側にオーバーハングし急角度に立ちあがる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して３本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。先端は、尖っており掘り方（地山の崩れ）より10～20cm ほど深く地山に入る。

SK－1027J（第181図、図版53）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ４区北側、NF－65グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北46度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.47m×短軸0.68m。　　（想定生活面の標高）78.00m。
（底面）長軸1.38m×短軸0.57m。　　（比　　率）2.4。
（確認面からの深さ）0.34m。　　（想定生活面からの深さ）1.03m。

〈底部の小穴〉（数）３個。（掘り方の径）12～14cm。（杭痕の径）７～８cm。　（深さ）56～67cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が大きく削平されている。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で４層に分かれる。　〈出土遺物〉 なし。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも長方形を呈す。壁は、長短軸壁とも垂直に立ち上がる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して３本の小穴が等間隔に並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で先端が尖り、掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。

SK－985J（第182図、図版54）

〈分　　類〉 Ⅱ類Ａ。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区中央南側、MC－61グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北71度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.52m×短軸0.89m。　（想定生活面の標高）78.20m。
（底面）長軸1.00m×短軸0.39m。　（比　　率）2.6。
（確認面からの深さ）1.04m。　（想定生活面からの深さ）1.42m。
〈底部の小穴〉（数）３個。　（杭痕の径）８cm。　（深さ）24～29cm。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で６層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも隅丸長方形を呈す。壁は、長軸壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.6m の所からロート状に傾斜し立ち上がる。短軸壁はほぼ垂直に立ちあがり、肩部はやや外側に開く。また、東壁は底面から約0.7m の所で段状にになる。底面は平坦で壁際は丸みを帯び、中央に長軸壁と平行して３本の小穴が並ぶ。杭痕はほぼ垂直で、先端は断面形が「V」字状を呈する。

SK－282J（第182図、図版54）

〈分　　類〉 Ⅱ類Ａ。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ２区北側、LR－66グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北８度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.70m×短軸0.75m。　（想定生活面の標高）　78.20m。
（底面）長軸1.50m×短軸0.28m。　（比　　率）　5.4。
（確認面からの深さ）0.69m。　（想定生活面からの深さ）1.07m。
〈底部の小穴〉（数）３個。　（杭痕の径）５～７cm。　（深さ）24～54cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平され、北壁は倒木痕により撹乱されている。
〈出土遺物〉 土器片１点。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で４層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が隅丸長方形で、下面は中央がくびれた不整長方形を呈す。壁は、長軸壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.4m の所から開き気味に傾斜し立ち上がる。短軸壁は垂直に近い急角度で立ちあがる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して３本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、中央の小穴は他の２本より短い。先端は、中央の短い杭痕が断面形で「V」字状を呈し、他の２本は先が細くやや丸みを帯びる。

SK－403J（第182図、図版54・55）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ２区北東側、LB－46グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北79度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.42m×短軸0.48m。　　（想定生活面の標高）78.00m。
（底面）長軸1.33m×短軸0.35m。　　（比　　率） 3.8。
（確認面からの深さ）0.42m。　　（想定生活面からの深さ）1.40m。
〈底部の小穴〉（数） ３個。　（杭痕の径） ５cm。　　（深さ）44～54cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平され、北東壁の上部も撹乱を受けている。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で５層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面ともに長方形を呈する。壁は、長短軸壁ともにほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して３本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、先端が尖り深く地山に入る。

SK－1026J（第182図、図版55）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ４区北側、NG－60グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北61度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.71m×短軸0.4m。　　（想定生活面の標高）78.00m。
（底面）長軸1.65m×短軸0.33m。　　（比　　率） 5.0。
（確認面からの深さ）0.24m。　　（想定生活面からの深さ）0.84m。
〈底部の小穴〉（数） ３個。　（杭痕の径） ６cm。　　（深さ）28～32cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が大きく削平され、南東角も撹乱により破壊されている。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 ２層に分かれ、下層はローム主体。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも長方形を呈し、北西角は鋭角に張り出している。壁は、長短軸壁ともほぼ垂直に立ちあがる。底面は平坦で壁際は直角に近い。中央に長軸壁と平行して３本の小穴がほぼ等間隔に並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直。先端は、やや丸みを帯びる。

SK－1021J（第183図、図版56）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ４区中央、MR－56グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北45度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.31m×短軸0.38m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.25m×短軸0.24m。　　（比　　率） 5.2。
（確認面からの深さ）0.23m。　　（想定生活面からの深さ）0.85m。
〈底部の小穴〉（数） ４個。　（杭痕の径） ５cm。　　（深さ）18～25cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が大きく削平されている。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 ３層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも長方形を呈す。壁は、長短軸壁とも底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で壁際はやや丸みを帯びる。中央に長軸壁と平行して４本の小穴が並ぶ。杭痕は、西壁に

近い１本はやや壁寄りに傾き、それ以外はほぼ垂直に近い。先端は尖っている。

SK－785J（第183図、図版56）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ３区北東側、KT－78グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北15度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.95m×短軸0.6m。　　（想定生活面の標高） 78.30m。
（底面）長軸2.01m×短軸0.45m。　　（比　　率） 4.5。
（確認面からの深さ）0.5m。　　（想定生活面からの深さ）1.37m。
〈底部の小穴〉（数）４個。 （杭痕の径）４～８cm。　　（深さ）16～41cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平されている。 〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には暗褐色土と黄褐色土が主体で６層に分かれ、最下層はやや黒味を帯びる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも四隅が鋭角に張った長方形を呈す。壁は、長軸壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、短軸壁は内側にオーバーハングし立ちあがる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して４本の小穴が並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、南から順に浅く、細くなっている様子が窺える。先端は細く尖っている。

SK－927J（第183図、図版57）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。
〈検出位置〉 ４区中央側、MJ－77グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北77度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.80m×短軸0.80m。　　（想定生活面の標高） 78.30m。
（底面）長軸1.45m×短軸0.48m。　　（比　　率） 3.0。
（確認面からの深さ）0.44m。　　（想定生活面からの深さ）1.01m。
〈底部の小穴〉（数）４個。（掘り方の径）８～15cm。 （杭痕の径）４～６cm。 （深さ）20～47cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平されている。 〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で４層に分かれる。下層はロームブロックを多く含む。
〈形状・特徴〉 平面形状は、南東角が円形に張り出した不整な長方形を呈し、下面は長方形を呈す。壁は、長軸壁が底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.3m の所から外側に開き気味に傾斜し立ち上がる。短軸壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、約0.3m の所から外側に大きく開き立ちあがる。底面は平坦で中央に長軸壁と平行して４本の小穴が並ぶ。小穴は２本ずつが対になるように両サイドに別れ配置される。杭痕は、ほぼ垂直で、掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。先端は尖り、掘り方（地山の崩れ）より４～40cm ほど深く地山に入る。

SK－270J（第183図、図版57）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。
〈検出位置〉 ２区北側、LT－54グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北34度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.42m×短軸0.58m。　　（想定生活面の標高） 78.10m。
（底面）長軸1.34m×短軸0.5m。　　（比　　率） 2.7。
（確認面からの深さ）0.68m。　　（想定生活面からの深さ）1.31m。

〈底部の小穴〉（数）５個。　（杭痕の径）６～８cm。　（深さ）17～27cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平されている。 〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で５層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面ともに長方形に近い台形を呈す。壁は、長短軸壁とも底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、中央に長軸壁と平行して５本の小穴が３本・２本で２列にの並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、先端は尖っている。

SK－244J（第184図、図版58）

〈分　　類〉 Ⅱ類Ａ。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ２区南側、IG－70グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北25度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.93m×短軸1.50m。　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.76m×短軸0.78m。　（比　　率） 2.3。
（確認面からの深さ）1.18m。　（想定生活面からの深さ）1.26m。
〈底部の小穴〉（数）４個。　（杭痕の径）４～７cm。　（深さ）10～12cm。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で６層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が円形に近い楕円形、下面が隅丸長方形を呈す。壁は、長軸壁の一方がややオーバーハングしながら、もう一方はほぼ垂直に立ち上り、約0.7m の所から外側に大きく開き緩やかに傾斜し立ち上がる。短軸壁は、内側にオーバーハングし立ち上がり約0.7m の所から大きく開き立ち上がる。底面は平坦で、壁際は丸みを帯びる。中央に長軸壁と平行して浅い小穴が４本並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、先端は尖っている。

SK－342J（第184図、図版58）

〈分　　類〉 Ⅱ類Ａ。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ２区中央東側、JH－57グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北61度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.75m×短軸1.05m。　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.53m×短軸0.38m。　（比　　率） 4.0。
（確認面からの深さ）0.76m。　（想定生活面からの深さ）1.23m。
〈底部の小穴〉（数）５個。　（杭痕の径）５～７cm。　（深さ）８～33cm。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 基本的には自然堆積の暗褐色土が主体で６層に分かれる。最下層はローム主体。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が歪な不整楕円形で、下面は長軸壁がややくびれた隅丸長方形を呈す。長短軸壁は、底面から垂直に立ちあがり約0.3m の所から外側に開き傾斜し立ちあがる。底面は、平坦で中央部に２個、北壁際に３個、計５個の小穴が長軸壁に平行して並ぶ。北壁際の小穴は図のように一方にかたよって位置する。杭痕は、北壁の一番西側の１本が東壁方向に傾斜する他はほぼ垂直である。先端は丸みを帯びている。

SK－417J（第184図、図版59）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 2区北側、LI－52グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北28度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.64m×短軸0.83m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.25m×短軸0.54m。　　（比　　率） 2.3。
（確認面からの深さ）0.70m。　　（想定生活面からの深さ）1.08m。
〈底部の小穴〉（数） 4個。　（杭痕の径） 4～9cm。　　（深さ） 6～34cm。
〈遺存状態〉 上面中央部が撹乱により壊されている。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体でで基本的に5層にわかれる。最下層にはロームが多く含まれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上下面とも隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面からほぼ垂直に立ちあがり約0.4m の所から外側に開き傾斜し立ちあがる。底面は平坦で中央部に1個、東壁際に3個の小穴が長軸壁に平行して並ぶ。杭痕は、中央の1本が深く地山に入る他は10cm 以下と浅く、ほぼ垂直に立っている。先端は丸みを帯びている。

SK－405J（第185図、図版59）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層下。
〈検出位置〉 2区北西側、KQ－77グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北74度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.80m×短軸0.87m。　　（想定生活面の標高） 78.30m。
（底面）長軸1.67m×短軸0.50m。　　（比　　率） 3.3。
（確認面からの深さ）0.45m。　　（想定生活面からの深さ）1.05m。
〈底部の小穴〉（数） 5個。　（杭痕の径） 4cm。　　（深さ）15～20cm。
〈遺存状態〉 グランド部にあたり上部が削平されている。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体でで基本的に5層にわかれる。最下層は黒味を帯び粘性が強い。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が長楕円形、下面が隅丸長方形を呈す。長軸壁は底面から丸みを帯び立ち上がり約0.2m の所から外側に開き傾斜し立ちあがる。短軸壁は底面からやや開き気味に立ち上がる。底面は中央部が鍋底状にわずかに窪み、壁際は丸みを帯びる。底面中央に3個、南壁際に2個の小穴が長軸壁に平行して並ぶ。杭痕は、中央の1本が他のに比べやや深く地山に入る。先端は尖っている。

SK－1031J（第185図、図版60）

〈分　　類〉 Ⅱ類 A。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 4区北側、NI－48グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北54度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸2.36m×短軸0.65m。　　（想定生活面の標高） 77.90m。
（底面）長軸2.30m×短軸0.34m。　　（比　　率） 6.8。
（確認面からの深さ）0.45m。　　（想定生活面からの深さ）1.12m。
〈底部の小穴〉（数） 3個。（掘り方の径）10cm。　　（杭痕の径） 4～6cm。　（深さ）20～43cm。
〈遺存状態〉 上部が削平されている。
〈出土遺物〉 大型礫の片面に磨痕の認められる石器が底面から約0.4m の地点から1点出土したが、出土位置を考えるとおそらく埋没時に流れ込んだものと考えられる。（第245図**20**、図版111）
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に5層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形状は、上面は縦長な長楕円形を呈し、下面は縦長な長方形を呈す。長軸壁は底面から約0.2m の所から外側に開き気味に傾斜し立ちあがる。短軸壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面はほぼ水平で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央に２個、壁際に１個の小穴が長軸壁に平行して並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直に立っており、西側の１本が深く地山に入り掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。先端は尖っている。

《 Ⅱ 類 B 》

SK－459J（第185図、図版60）

〈分　　類〉 Ⅱ類 B。
〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ２区北側 LF－57グリッドに位置する。
〈主　　軸〉 北４度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.60m×短軸1.13m。
（想定生活面の標高） 78.10m。
（底面）長軸1.29m×短軸0.41m。
（比　　率） 3.1。
（確認面からの深さ）0.87m。
（想定生活面からの深さ）1.21m。
〈底部の小穴〉（数） ２個。 （杭痕の径） ６cm。
（深さ）14～22cm。
〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で６層にわかれる。最下層はローム粒子を多量に含む。
〈形状・特徴〉 平面形状は、上面が歪んだ長方形を呈し、下面は一端が外側に丸みを帯び抉れた長方形を呈す。長軸壁は、底面から垂直に立ちあがり約0. 4m の所から外側に傾斜し立ち上がる。東壁中央は約0. 5m の所が棚状に抉れる。短軸壁は垂直に近い急角度で立ちあがり、北壁の底面から約0.5m 付近に0.15m程の抉れがある。南西角の壁にも棚状の抉れがある。横木等の施設の可能性がある。底面は、ほぼ平坦で壁際は丸みを帯びる。底面の南壁沿いに１個、西壁沿いに１個、計２個の小穴がある。杭痕は、ほぼ垂直で、先端は尖っている。

SK－23J（第186図、図版60）

〈分　　類〉 Ⅱ類 B。
〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 １区北側 MI－105グリッドに位置する。
〈主　　軸〉 北46度東を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.65m×短軸1.09m。
（想定生活面の標高） 78.60m。
（底面）長軸1.22m×短軸0.51m。
（比　　率） 2.4。
（確認面からの深さ）1.01m。
（想定生活面からの深さ）1.26m。
〈底部の小穴〉（数） ３個。（掘り方の径） ８～10cm。 （杭痕の径） ８～10cm。（深さ） ８～40cm。
〈遺存状態〉 南壁の上部が現代の撹乱により壊されている。
〈出土遺物〉 早期撚糸文系東山式の土器片が４点（第215図**54～56**、図版93）、覆土中程から出土している。出土位置等から考えると埋没過程での流れ込み遺物と思われる。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は上面が不整な長方形を呈し。下面は形の整った隅丸長方形を呈す。長短軸壁とも底面から急角度で立ち上がり約0.5m の部分からロート状に外側に開き立ち上がる。底面は平坦で壁際は丸みを帯びる。底面中央には３個の小穴が不規則に並ぶ。杭痕は、中央の１本が浅く先端が丸い。他の２本はほぼ同規模で、先端は尖っている。

SK－130J（第186図、図版61）

〈分　　類〉 Ⅱ類 B。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈検出位置〉 ２区南側 IA－68グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北39度西を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸1.68m×短軸0.90m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。

（底面）長軸1.29m×短軸0.34m。　　（比　　率） 3.8。

（確認面からの深さ）0.71m。　　（想定生活面からの深さ）0.87m。

〈底部の小穴〉（数） ５個。　（杭痕の径） ５～７cm。　　（深さ）12～36cm。

〈遺存状態〉 北壁の一部が現代の撹乱により壊されている。

〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。　　〈出土遺物〉 なし。

〈形状・特徴〉 平面形状は、上面長軸が外側に張った隅丸長方形を呈し、下面は、長軸が内湾した隅丸長方形を呈す。長軸壁は底面から0.15m の部分が棚状に抉れ外側に開き立ち上がる。短軸壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面は、ほぼ平坦で壁際は丸みを帯びる。底面には５個の小穴が不規則に並ぶ。杭痕は、ほぼ垂直で、先端は丸みを帯びている。

《 Ⅱ 類 C 》

SK－651J（第186図、図版61）

〈分　　類〉 Ⅱ類 C。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈検出位置〉 ３区南側 HS－94グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北３度東を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸2.00m×短軸1.28m。　　（想定生活面の標高） 78.50m。

（底面）長軸1.74m×短軸0.82m。　　（比　　率） 2.1。

（確認面からの深さ）0.81m。　　（想定生活面からの深さ）1.38m。

〈底部の小穴〉（数） ７個。（掘り方の径） ４～６cm。　　（杭痕の径） ４～６cm。（深さ）16～30cm。

〈遺存状態〉 北壁が底部近くまで撹乱される。　　〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。最下層は色調がやや黒味を帯び炭化物・炭化粒子を多く含む。

〈形状・特徴〉 平面形状は上面が削平された部分を推定すればやや不整な隅丸長方形を呈す。下面は長方形を呈し四隅は鋭角にややオーバーハングする。長軸壁は直角よりやや内側方向に立ち上がり0.6m 部分からは外側に開き立ち上がる。短軸南壁はほぼ垂直に立ちあがる。底面はほぼ水平で壁際は直角に近い。底面中央には７個の小穴が並ぶが、規則性は窺えない。杭痕は、ほぼ垂直で、先端はやや丸みを帯びる。

SK－650J（第187図、図版62）

〈分　　類〉 Ⅱ類 C。　　〈検 出 面〉 Ⅳ層。

〈検出位置〉 ３区南側 IA－89グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北４度西を指向する。

〈規　　模〉 （上面）長軸1.80m×短軸1.04m。　　（想定生活面の標高） 78.50m。

（底面）長軸1.65m×短軸0.58m。　　（比　　率） 2.8。

（確認面からの深さ）0.80m。　　（想定生活面からの深さ）1.50m。

〈底部の小穴〉（数）16個。　（掘り方の径） ８cm。　（杭痕の径） ４～６cm。　（深さ）16～24cm。

〈遺存状態〉 上面が現代の撹乱により削平されている。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。最下層は色調が黒味を帯びる。
〈形状・特徴〉 平面形状は上下面とも隅丸長方形を呈す。長短軸壁ともに底面からやや外側にむかって急角度で立ち上がる。底面は平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面中央には計16個の小穴が長軸壁と並行して３列に並ぶ。杭痕は、中央の１本に掘り方または地山の崩れらしき痕跡が認められる。また中央列の北から２本目が北壁方向に傾斜する他はほぼ垂直に立つ。先端は尖っている。

SK－127J（第187図、図版63）

〈分　　類〉 Ⅱ類 C。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ２区南側、HR－61グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北20度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸2.00m×短軸1.37m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.04m×短軸0.34m。　　（比　　率） 3.1。
（確認面からの深さ）1.17m。　　（想定生活面からの深さ）1.51m。
〈底部の小穴〉（数） ９個。　（杭痕の径） ３cm。　　（深さ）28～36cm。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形状は上面が楕円形を呈し、下面は幅狭の隅丸長方形を呈す。長短軸壁ともに底面から外側にむかって急角度で立ち上がり、約0.5m の所からはロート状に外側に開き立ち上がる。底面は平坦で壁際はやや丸みを帯びる。底面の中央部にはロームを充填した長軸50cm×短軸20cm 程の楕円形を呈す小穴が検出され、更にその中には計９個の逆茂木痕と思われる小穴が西側に偏って検出された。杭痕は、ほぼ垂直に立ち、小穴より４～10cm ほど深く地山に入る。先端は、やや丸みを帯びる。

《 Ⅲ 類 》

SK－969J（第188図、図版64）

〈分　　類〉 Ⅲ類。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区東側 MQ－45グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北16度西を指向する。
〈規　　模〉 （上面）長軸1.28m×短軸0.73m。　　（想定生活面の標高） 78.00m。
（底面）長軸1.00m×短軸0.49m。　　（比　　率） 2.0。
（確認面からの深さ）0.60m。　　（想定生活面からの深さ）0.84m。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 土器片１点。小片のため型式は不明である。
〈覆　　土〉 ロームを含む暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれる。最下層は色調がやや黒味を帯びる。
〈形状・特徴〉 上面は楕円形を呈し、下面は隅丸長方形を呈す。長軸壁短軸壁ともやや外湾しながら急角度で立ち上がる。底面は中央がやや窪んでおり、壁際は丸みを帯びる。底部施設については断面を断ち割って調査したが検出されなかった。

SK－950J（第188図、図版64）

〈分　　類〉 Ⅲ類。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区中央 MP－64グリッドに位置する。　　〈主　　軸〉 北62度西を指向する。

〈規　　模〉（上面）長軸1.60m×短軸0.93m。　（想定生活面の標高）　78.20m。
（底面）長軸1.23m×短軸0.47m。　（比　　率）　2.6。
（確認面からの深さ）0.77m。　（想定生活面からの深さ）1.14m。
〈遺存状態〉 北壁側が一部縄文小穴により壊される。
〈出土遺物〉 土器片４点。小片のため型式は不明である。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に３層に分かれる。
〈形状・特徴〉 上面はやや不整な長方形を呈し、下面は、長軸が内側に抉れた長方形を呈す。長軸壁は、底面からほぼ垂直に立ちあがり約0.4m の所からは外湾し立ち上がる。短軸壁は急角度に直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際は丸みを帯びる。断面を断ち割って調査したが底部施設は検出されなかった。

SK－952J（第188図、図版64）

〈分　　類〉 Ⅲ類。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区北側 NJ－54グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北57度東を指向する。
〈規　　模〉（上面）長軸1.86m×短軸1.17m。　（想定生活面の標高）　78.00m。
（底面）長軸1.57m×短軸0.53m。　（比　　率）　3.0。
（確認面からの深さ）0.62m。　（想定生活面からの深さ）0.74m。
〈遺存状態〉 西壁と南壁が撹乱により破壊される。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に４層に分かれる。最下層はロームブロック主体。
〈形状・特徴〉 上面下面とも隅丸長方形を呈す。長軸壁はやや外側方向に急角度で立ち上がり約0.3m の所からは大きく外湾し立ち上がる。短軸壁は急角度に直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦で壁際は丸みを帯びる。断面を断ち割って調査したが底部施設は検出されなかった。本遺構は、形状から陥穴ではない可能性も考えられるが、本遺跡で検出された土坑では陥穴以外には同様な遺構がないことから、陥穴とした。

SK－992J（第184図、図版64）

〈分　　類〉 Ⅲ類。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈検出位置〉 ４区東側、MR－46グリッドに位置する。　〈主　　軸〉 北13度東を指向する。
〈規　　模〉（上面）長軸1.92m×短軸1.05m。　（想定生活面の標高）　78.00m。
（底面）長軸1.63m×短軸0.54m。　（比　　率）　3.0。
（確認面からの深さ）0.69m。　（想定生活面からの深さ）1.02m。
〈遺存状態〉 良好。　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 自然堆積の暗褐色土が主体で基本的に６層に分かれるが、最下層は明褐色土。
〈形状・特徴〉 上面下面とも隅丸長方形を呈す。長軸壁はやや外側に向かって直線的に立ち上がる。短軸壁はほぼ垂直に立ちあがり、約0.3m の所からやや外湾し立ち上がる。底面は平坦で壁際は丸みを帯びる。断面を断ち割って調査したが底部施設は検出されなかった。

5）土　坑

該期の土坑は、80基検出した。検出位置が４区西側に集中している以外は調査区全体に散らばり、配列・分布等の規則性はみられない。また構築時期は不明なものが多い。本書では、整理の段階で倒木痕として調査したものをすべて欠番とし、平面形状・断面形状の類似しているものをまとめて図示した。

SK－246J（第189図、図版65）

〈検出位置〉　２区南側 IF－73グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸1.33m×短軸1.2m×深さ0.77m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色土を主体とする５層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形は盃状を呈する。底面は南北方向の楕円形でほぼ平坦で、壁は中段までが直線的にそれより上は外側にひらきながら緩やかな角度で立ち上がる。

SK－954J（第189図、図版65）

〈検出位置〉　４区北側 NK－63グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸1.43m×短軸1.25m×深さ0.58m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 褐色土と暗褐色土を主体とする４層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は盃状を呈する。底面はほぼ円形で概ね平坦である。壁は中段までがやや傾斜しそれより上は外側にひらきながら緩やかな角度で立ち上がる。

SK－790J（第189図、図版65）

〈検出位置〉　３区中央西側 JO－110グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北31度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.84m×短軸1.58m×深さ0.82m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 土器片９点（第215図**59・60**、図版93）、石器１点（第245図**19**、図版111）。
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は盃状を呈する。底面は円形でほぼ平坦である。壁は中段まで直線的に立ち上がりそれより上は外にひらきながら緩やかな角度で立ち上がる。

SK－1060J（第189図、図版65）

〈検出位置〉　４区北東側 MD－40グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸1.18m×短軸1.1m×深さ0.42m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 土器片１点。（第215図**68**、図版93）
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は円形でほぼ平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。

SK－788J（第189図、図版66）

〈検出位置〉　３区北側西寄り KP－106グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸0.87m×短軸0.82m×深さ0.27m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は円形でほぼ平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。

SK－937J（第190図、図版66）
〈検出位置〉 ４区中央南寄り MB－70グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸1.86m×短軸1.77m×深さ0.5m。
〈遺存状態〉 南側の一部が削平されている。
〈出土遺物〉 土器片12点。（第215図**64・65**、図版93）
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする４層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ円形で平坦で、壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。

SK－467J（第190図、図版66）
〈検出位置〉 ２区北側 LF－62グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北36度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.15m×短軸1.07m×深さ0.23m。
〈遺存状態〉 良好。　　〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は不整な円形でほぼ平坦で、壁は東壁が垂直に近い傾斜で立ち上がり、その他の壁は、緩やかな傾斜で立ち上がる。

SK－38J（第190図、図版66）
〈検出位置〉 １区北側 MH－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.89m×短軸0.82m×深さ0.16m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする単一土層である。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形に近い皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は中段までは急角度で立ち上がり、さらに上面までは緩やかに立ち上がる。

SK－129J（第190図、図版67）
〈検出位置〉 ２区南側 HN－69グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北46度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸１m×短軸0.95m×深さ0.25m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は北寄りに小穴状に窪んでおり、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

SK－654J（第190図、図版67）

〈検出位置〉 ３区南西側 IE－108グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.67m×短軸1.67m×深さ0.32m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色土を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ円形を呈し、やや東側が低くなる。壁は北側が傾斜して立ち上がり他面は底面から中段までが外反して立ち上がり、それより上は外側にひらきながら緩やかに立ち上がる。

SK－854J（第190図、図版67）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－89グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.84m×短軸1.7m×深さ0.46m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 石器１点。（第244図**14**、図版110）

〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色土を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は東西方向の楕円形でほぼ平坦である。壁は中段までが緩やかに傾斜し、それより上はやや急角度で立ち上がる。

SK－912J（第190図、図版67）

〈検出位置〉 ４区西側 MP－91グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北79度西を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.76m×短軸1.5m×深さ0.36m。　〈遺存状態〉 溝状の撹乱を受けている。

〈出土遺物〉 土器片16点。

〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色土を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は不整な楕円形でほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。出土している土器は小片で型式は不明である。

SK－42J（第191図、図版68）

〈検出位置〉 １区西側 LT－102グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北48度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.18m×短軸1.18m×深さ0.36m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と明褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面は南側にやや凹凸がある、壁は急角度で立ち上がる。

SK－170J（第191図、図版68）

〈検出位置〉 ２区南側 IB－68グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.07m×短軸0.9m×深さ0.23m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に別れ、下層は褐色ロームを含む混合土である。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は南側に小穴状の掘り込みをもつ、壁は急角度で立ち上がる。

SK－1054J（第191図、図版68）

〈検出位置〉 ４区北側 NG－47グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北15度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸0.95m×短軸0.8m×深さ0.24m。 〈遺存状態〉 北側の一部に撹乱を受ける。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は半円形？を呈する。底面は楕円形で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－167J（第191図、図版68）

〈検出位置〉 ２区南側 HT－66グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸1.25m×深さ0.49m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれ、下層は褐色ロームを含む混合土である。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は半円形を呈する。底面は楕円形で、壁は中段まで緩やかに立ち上がり、さらにその上は急角度で立ち上がる。

SK－168J（第191図、図版69）

〈検出位置〉 ２区南側 IB－65グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.13m×短軸1.07m×深さ0.48m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は半円形？を呈する。底面は小さな窪み状で、壁は中段まで緩やかに立ち上がり、さらにその上は急角度で立ち上がる。

SK－921J（第191図、図版69）

〈検出位置〉 ４区西側 ML－92グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸1.24m×深さ0.51m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、横褐色土を主体とする４層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は円形で、断面形は半円形を呈する。底面は楕円形で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－1010J（第191図、図版69）

〈検出位置〉 ４区北側 NO－52グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北42度西を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.35m×短軸1.12m×深さ0.4m。

〈遺存状態〉 良好。 〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 褐色土、明褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は半円形を呈する。底面は楕円形で、壁は南壁が緩やかに立ち上がり、他は急角度で立ち上がる。

SK－24J（第191図、図版69）

〈検出位置〉 1区中央北側MD－101グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北76度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸2.17m×短軸1.48m×深さ0.15m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土と明褐色土を主体とする2層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

SK－938J（第191図、図版70）

〈検出位置〉 4区中央ME－70グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北32度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸2.34m×短軸1.6m×深さ0.23m。

〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されている。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土と黄褐色土主体とする2層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－173J（第192図、図版70）

〈検出位置〉 2区南側IC－73グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北87度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.84m×短軸1.08m×深さ0.4m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。

〈覆　　土〉 暗褐色土とロームブロックの混合土を主体とする2層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は東西方向の楕円形でやや東側が低くなる。壁は急角度で立ち上がる。

SK－443J（第192図、図版70）

〈検出位置〉 2区北側MA－47グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北44度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.87m×短軸1.22m×深さ0.5m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする2層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は半円形を呈する。底面は南側に寄り、壁は北側が緩やかになる他は急角度で立ち上がる。

SK－22J（第192図、図版70）

〈検出位置〉 1区北側MI－99グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北43度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.14m×短軸0.83m×深さ0.22m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と明褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は北・東壁が緩やかに立ち上がり、他は急角度で立ち上がる。

SK－33J（第192図、図版71）
〈検出位置〉 １区中央 MB－96グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北58度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸0.93m×深さ0.42m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と明褐色土を主体とする３層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや西側に寄り、壁は西壁が急角度で立ち上がり他は緩やかな傾斜で立ち上がる。

SK－271J（第192図、図版71）
〈検出位置〉 ２区北側 LJ－70グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北48度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.12m×短軸0.95m×深さ0.28m。
〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されている。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 明褐色土を主体とする２層に分かれ、下層はロームブロックを含む混合土である。
〈形状・特徴〉 平面形は不正な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや凹凸があり、壁は中段までが緩やかに立ち上がり、さらにその上は急角度で立ち上がる。

SK－496J（第192図、図版71）
〈検出位置〉 ２区北側 LL－52グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北４度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.42m×短軸1.15m×深さ0.34m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色土、黄褐色土を主体とする４層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は北側に一面あり中央に一段下がる平坦な面がある。壁は急角度で立ち上がる。

SK－943J（第192図、図版71）
〈検出位置〉 ４区中央南寄り MD－72グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北72度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.43m×短軸0.92m×深さ0.2m。
〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されている。

〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は円形でほぼ平坦で、壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。

SK－979J（第192図、図版72）
〈検出位置〉 ４区中央 MN－58グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北84度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.96m×短軸0.85m×深さ0.3m。
〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されている。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする３層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形はすり鉢状を呈する。底面は西に寄る小穴状で、壁は中段までがやや外側にひらき緩やかに立ち上がり、それより上は急角度で立ち上がる。

SK－133J（第192図、図版72）
〈検出位置〉 ２区南側 IB－71グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 ほぼ東西方向。
〈規　　模〉 長軸1.42m×短軸1.15m×深さ0.26m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする３層に分かれ、下層は褐色ロームを含む混合土である。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は中段でくびれる皿状を呈する。底面は円形でやや中央が窪む、壁は中段までは急角度で立ち上がり、その上は緩やかに立ち上がる。

SK－136J（第192図、図版72）
〈検出位置〉 ２区南側 IB－59グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北45度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.06m×短軸0.82m×深さ0.24m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれ、下層はロームブロックを多く含む。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦な円形で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－652J（第192図、図版72）
〈検出位置〉 ３区南側東寄り HT－77グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北84度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸１m×深さ0.29m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は楕円形でやや凹凸がみられ、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－28J（第193図、図版73）

〈検出位置〉 １区中央北寄り ME－94グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.62m×短軸1.34m×深さ0.49m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 褐色土と明褐色土を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はやや東に寄り、壁は東面が垂直に近い立ち上がりをする他は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－29J（第193図、図版73）

〈検出位置〉 １区中央北寄り MD－97グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸0.74m×深さ0.38m。

〈遺存状態〉 東側の約半分が撹乱を受ける。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土、明褐色土を主体とする４層に分かれる。

〈形状・特徴〉 残存部の平面形は円形または楕円形、断面形はすり鉢状を呈する。底面はほぼ中央に位置して窪んでおり、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－45J（第193図、図版73）

〈検出位置〉 １区南側 LN－103グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 ほぼ東西方向。

〈規　　模〉 長軸1.01m×短軸0.88m×深さ0.32m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と明褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は隅丸の方形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は東側と西側に小穴状の窪みがあり、壁は急角度で立ち上がる。

SK－46J（第193図、図版73）

〈検出位置〉 １区南側 LK－103グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 ほぼ東西方向。

〈規　　模〉 長軸1.36m×短軸1.12m×深さ0.4m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は丸みのある方形で、断面形は深い皿状を呈する。底面は西にやや傾き、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－317J（第193図、図版74）

〈検出位置〉 ２区中央 IS－77グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北80度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.68m×短軸1.05m×深さ0.42m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土、褐色土、明褐色を主体とする３層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は隅丸の長方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は西側に平らな一面と東側に下

がって一面ある。壁は急角度で立ち上がる。

SK－1029J（第193図、図版74）

〈検出位置〉 ４区中央 NF－68グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸0.63m×短軸0.5m×深さ1.2m。

〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されており、東側は撹乱を受けている。

〈出土遺物〉 土器片１点、石器１点（第243図**6**、図版110）。

〈覆　　土〉 褐色土、暗褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は撹乱により明瞭ではないが円形または隅丸の方形で、断面形は半円形を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は急角度で立ち上がる。

SK－955J（第193図、図版74）

〈検出位置〉 ４区中央 MK－63グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北57度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.35m×短軸1.13m×深さ0.25m。

〈遺存状態〉 グランド造成工事によりⅢ層上面まで削平されている。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は隅丸の方形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－1004J（第193図、図版74）

〈検出位置〉 ４区北側 NN－48グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北54度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.04m×短軸0.92m×深さ0.45m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ方形で、断面形は逆台形を呈する。底面は凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。

《４区西側の土坑集中部》

土坑についての概略は前述しているが、４区西側において土坑が41基集中して検出された。形状は不整形のものが多く、平面形状・覆土の堆積状況の類似から同時期構築の土坑であると思われるが構築時期については不明である。北側は調査区外のため全容は不明だが、炉跡の項目にて後述する SX－88J を囲む半円状の分布を示している。

SK－817J（第194図、図版75）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－104グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北17度西を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.16m×短軸0.52m×深さ0.23m。　〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形、断面形は二つの凹みを持つ皿状を呈する。底面は２箇所あり覆土の堆積状態から同時期の掘り込みと考えらる。壁は底面より急角度で立ち上がる。

SK－818J（第194図、図版75）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－104グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北74度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.9m×短軸0.72m×深さ0.17m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 土器片１点。（第215図**63**、図版93）
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は西側が深く東に浅くなる他はほぼ平坦で、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－819J（第194図、図版76）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－104グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北87度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.85m×短軸0.64m×深さ0.24m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

SK－820J（第194図、図版76）
〈検出位置〉 ４区西側 MP－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北25度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.8m×短軸0.38m×深さ0.21m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－821J（第194図、図版76）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北11度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.12m×短軸0.75m×深さ0.25m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦である、壁は北壁が急角度で立ち上がり、他は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－822J（第194図、図版76）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北84度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.06m×短軸0.74m×深さ0.26m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 土器片２点。小片のため型式は不明である。
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に別れる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は西側に一面あり、東に一段下がった面がある。壁は西側が緩やかに傾斜して立ち上がり、他は急角度で立ち上がる。

SK－823J（第195図、図版77）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸1.14m×短軸0.83m×深さ0.22m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 土器片28点。（第215図**62**、図版93）
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形はは円形で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。壁南側では SX－88J を切る。

SK－824J（第195図、図版77）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.76m×短軸0.7m×深さ0.19m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は傾斜して立ち上がる。

SK－825J（第195図、図版77）
〈検出位置〉 ４区西側 MO－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北81度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸0.6m×深さ0.22m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は西側に小穴状の浅い掘り込みがあり、壁は急角度で立ち上がる。

SK－826J（第195図、図版77）
〈検出位置〉 ４区西側 MN－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北86度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.1m×短軸0.74m×深さ0.16m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－827J（第195図、図版78）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－103グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北６度西を指向する。

〈規　　模〉 長軸１ｍ×短軸0.82m×深さ0.25m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 石器１点。（第243図**11**、図版110）

〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁は西壁が緩やかな角度で立ち上がる他は垂直に近い角度で立ち上がる。

SK－828J（第195図、図版78）

〈検出位置〉 ４区西側 MM－103グリッド 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面

〈主　　軸〉 北57度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸0.82m×短軸0.61m×深さ0.13m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

SK－829J（第195図、図版78）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－103グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸１ｍ×短軸0.87m×深さ0.28m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は北側が低くなり、壁は急角度で立ち上がる。

SK－830J（第195図、図版79）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北20度西を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.04m×短軸0.58m×深さ0.23m。

〈遺存状態〉 南東の一部に撹乱を受けるがほぼ良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は南側に寄り多少凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁は北壁が緩やかな角度で立ち上がり、他は急角度で立ち上がる。

SK－831J（第195図、図版79）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北７度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸1.05m×短軸0.73m×深さ0.28m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は南側に小穴状の掘り込みがある。壁は急角度で立ち上がる。

SK－832J（第195図、図版79）
〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北33度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.02m×短軸0.77m×深さ0.17m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

SK－833J（第195図、図版79）
〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北４度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.98m×短軸0.63m×深さ0.17m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は不整な皿状を呈する。底面は南東寄りに楕円形の浅い掘り込みがあり、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－834J（第196図、図版80）
〈検出位置〉 ４区西側 MM－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北２度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.77m×短軸0.45m×深さ0.22m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は不整な皿状を呈する。底面はやや凹凸があり、壁は底面から中段までが急角度で立ち上がり、それより上は緩やかに立ち上がる。

SK－835J（第196図、図版80）
〈検出位置〉 ４区西側 MN－101グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北76度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.88m×短軸0.63m×深さ0.25m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。

SK－836J（第196図、図版80）
〈検出位置〉 ４区西側 MN－100グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北29度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.83m×短軸0.54m×深さ0.29m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形はすり鉢状を呈する。底面は中央が窪み、壁は底面から中段まで緩やかに立ち上がり、その上は急角度で立ち上がる。

SK－841J（第196図、図版80）
〈検出位置〉 ４区西側ML－101グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北６度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.05m×短軸0.8m×深さ0.24m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦で、壁は南側が垂直に近い立ち上がりで、他は急角度で立ち上がる。

SK－842J（第196図、図版81）
〈検出位置〉 ４区西側MM－99グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北59度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.47m×短軸0.86m×深さ0.25m。
〈遺存状態〉 北側の一部に撹乱を受ける。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－843J（第196図、図版81）
〈検出位置〉 ４区西側MN－99グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北59度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸0.72m×深さ0.32m。
〈遺存状態〉 東側の一部に撹乱を受ける。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は不整な逆台形を呈する。底面は西側に一面あり、東寄りに下がってもう一面ある。壁は急角度で立ち上がる。

SK－844J（第196図、図版81）
〈検出位置〉 ４区西側MO－99グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北83度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.6m×短軸0.48m×深さ0.17m。
〈遺存状態〉 南側の一部に撹乱を受ける。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－845J（第196図、図版81）

〈検出位置〉 ４区西側 MP－99グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規 模〉 長軸0.63m×短軸0.6m×深さ0.16m。

〈遺存状態〉 北側は調査区外のため未調査。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆 土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 調査部分での形状は平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。底面は多少凹凸はあるもののほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－846J（第196図、図版82）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－99グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規 模〉 長軸0.6m×短軸0.58m×深さ0.16m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆 土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－847J（第196図、図版82）

〈検出位置〉 ４区西側 MP－98グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規 模〉 長軸0.55m×短軸0.34m×深さ0.15m。

〈遺存状態〉 北側は調査区外のため未調査。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆 土〉 暗褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 調査部分での形状は平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－848J（第196図、図版82）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－97グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規 模〉 長軸0.5m×短軸0.46m×深さ0.14m。 〈遺存状態〉 良好。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆 土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

SK－849J（第196図、図版82）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－98グリッド。 〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規 模〉 長軸0.8m×短軸0.94m×深さ0.25m。

〈遺存状態〉 北側の一部に撹乱を受けている。

〈出土遺物〉 なし。 〈覆 土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形はほぼ円形で、断面形は皿状を呈する。底面は凹凸があり、壁は西側が垂直に近い角度で立ち上がる他は急角度で立ち上がる。

SK－886J（第197図、図版83）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北15度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.64m×短軸0.36m×深さ0.15m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや中央が窪み、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－887J（第197図、図版83）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－102グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北83度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.82m×短軸0.63m×深さ0.2m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は東側に寄り、壁は急角度で立ち上がる。

SK－888J（第197図、図版83）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－102グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.57m×短軸0.57m×深さ0.16m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は傾斜して立ち上がる。

SK－889J（第197図、図版83）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－101グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北60度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.94m×短軸0.63m×深さ0.15m。　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－890J（第197図、図版84）

〈検出位置〉 ４区西側 MN－101グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.53m×短軸0.62m×深さ0.18m。
〈遺存状態〉 SK－835J と切り合う。

〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。プランの切り合いよりSK－835Jの方が新しいとしたが、覆土からみるとほぼ同時期の構築と考えられる。

SK－891J（第197図、図版84）
〈検出位置〉 ４区西側MM－100グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北66度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.57m×短軸0.35m×深さ0.15m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

SK－892J（第197図、図版84）
〈検出位置〉 ４区西側MN－100グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北10度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.63m×短軸0.58m×深さ0.19m。
〈遺存状態〉 北側の一部に撹乱を受ける。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－893J（第197図、図版84）
〈検出位置〉 ４区西側MO－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.65m×短軸0.6m×深さ0.2m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや丸みを帯び西側に寄り、壁は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－894J（第197図、図版85）
〈検出位置〉 ４区西側MO－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北61度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.67m×短軸0.34m×深さ0.15m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は不整な楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面は東側が低く、壁は急角度で立ち上がる。

SK－911J（第197図、図版85）
〈検出位置〉 ４区西側MO－102グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈主　　軸〉 北81度東を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.75m×短軸0.64m×深さ0.32m。
〈遺存状態〉 SK－837J と切り合う。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は東側に寄りほぼ平坦で、壁は東壁が急角度で立ち上がり、他は緩やかな角度で立ち上がる。

SK－1139J（第197図、図版85）
〈検出位置〉 ４区西側 MM－104グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈主　　軸〉 北14度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸0.5m×短軸0.42m×深さ0.16m。　　〈遺存状態〉 良好。
〈出土遺物〉 なし。　　〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 小穴として調査したが周辺の土坑と比べ規模・形状が類似しているため土坑として報告する。平面形は不整な円形で、断面形は皿状を呈する。底面は丸みを帯び、壁は急角度で立ち上がる。

SK－1141J（第197図、図版85）
〈検出位置〉 ４区西側 MP－103グリッド。　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。
〈規　　模〉 長軸0.42m×短軸0.3m×深さ0.16m。
〈遺存状態〉 北側は調査区外のため未調査。
〈出土遺物〉 石器１点。（第243図**1**、図版110）
〈覆　　土〉 暗褐色土と褐色土を主体とする２層に分かれる。
〈形状・特徴〉 SK－1139J と同じく小穴として調査したが土坑として報告する。調査部分での形状は平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

６）炉　穴

検出された炉跡は、３区北側において検出された１基と４区西側において検出された石囲い炉１基である。

SK－786J（第198図、図版85）
〈検出位置〉 ３区北側 KQ－94グリッド　　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面
〈主　　軸〉 北18度西を指向する。
〈規　　模〉 長軸2.35m×短軸1.5m×深さ0.5m
〈遺存状態〉 西側を撹乱により壊されている。　　〈出土遺物〉 なし
〈覆　　土〉 暗褐色土を主体とする８層に分かれ、焼土粒・炭化物粒をふくむ。
〈形状・特徴〉 残存している部分で東西に重複する２箇所の掘り込みが検出された。平面形は南北に長軸をもつ楕円形で、断面形は丸みを帯びる逆台形を呈する。底面は北寄りに比熱した円形の平坦な面があり南側にやや上がる傾斜を示す。壁は急角度で立ち上がる。

SX－88J（第198図、図版85）

〈検出位置〉 ４区西側 MO－102グリッド。　〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈規　　模〉 長軸0.85m×短軸0.85m×深さ0.2m

〈遺存状態〉 北側を SK－823J と切合う。　〈出土遺物〉 礫９点。

〈覆　　土〉 褐色土を主体とする２層に分かれる。

〈形状・特徴〉 平面形は楕円形で、断面形は皿状を呈する。底面はやや北西に寄り一段下がる。北西側上面に10～20cm 大の破砕礫が５個配置され、対する南西側には２個の礫が約30cm の間を空けて検出された。底面下には、確認面より0.35m を測る掘り方が確認された。また、覆土下層で炭化粒子を微量含む淡橙色を帯びた薄い焼土層が確認されたが、顕著な被熱面が認められなかった。本土坑は形状及び焼土層等から判断して石囲い炉とした。

７）小　穴（第199～206図、図版87～90）

該期の小穴の大半は、分布が点在する様相を呈し、時期・性格等も不明である。ただし４区中央部において小穴が103個集中して検出された。これらはグランドの造成工事により、Ⅲ層上面まで削平されていたため遺存状況は良好とはいえないが、その配置には何らかの規則性が看取されることから、これらの小穴は床面を削平された住居跡の柱穴の可能性が考えられる。このため、本書では、これらの小穴を「小穴群」として報告する。また、この「小穴群」を竪穴住居跡やその他の建物跡の可能性及び配列、形状の類似性などを考慮に入れ、第200図に示した通り、Ⅰ群～Ⅴ群に分類した。

それぞれの配置は、Ⅰ群は南東に、Ⅱ群は北側に、Ⅲ群は南側に、Ⅳ群は中央に、Ⅴ群は西側に位置する。またそれぞれの距離は、Ⅰ群とⅡ群は約７m、Ⅰ群とⅣ群は約３m、Ⅰ群とⅢ群は約２m、Ⅱ群とⅣ群は約１m、Ⅲ群とⅣ群は約１m、Ⅲ群とⅤ群は約３m、Ⅳ群とⅤ群は約３m である。

遺物は、P－９J、P－29J、P－85J から土器片（第215・216図、図版93）が、P－11J から石鏃が、P－98J から打製石斧が出土している（第243図、図版110）。小穴群の規模については以下の通りである。

〈 Ⅰ 群 〉

長軸7.5m×短軸６m の方形に分布する。小穴の平面径20～80cm，確認面からの深さ10～50cm を測る。

〈 Ⅱ 群 〉

長軸３m×短軸1.5m の方形に分布する。小穴の平面径35～50cm、確認面からの深さ20～45cm を測る。

〈 Ⅲ 群 〉

径約９m の円形に分布する。小穴の平面径20～35cm、確認面からの深さ10～30cm を測る。

〈 Ⅳ 群 〉

径約６m の円形に分布する。小穴の平面径20～47cm、確認面からの深さ10～50cm を測る。

〈 Ⅴ 群 〉

長軸11m×短軸７m の楕円形に分布する。小穴の平面径18～34cm、確認面からの深さ10～30cm を測る。

3．遺物

該期の遺物は、遺構内出土および遺物包含層（Ⅱ層）から出土したものは基本的に全点出土位置を記録して取り上げる方法をとったが、土坑・小穴の遺物については覆土内一括取り上げしているものもある。また、縄文遺物包含層（Ⅱ層）より上層から出土した該期の遺物についてはグリッド毎に、歴史時代遺構出土の遺物は遺構毎に一括取り上げしている。

1）土　器

該期出土の土器は、出土地点を記録したものが約12,000点、一括取り上げのものが約6,500点である。これらは、小片のものが多く分類が不可能なものが大半を占めるが、時期・型式が判別したものについては、以下のように分類した。尚、出土地点、その他詳細については「縄文土器観察表」にまとめ巻末添付の CD-ROM に収録した。ファイル名は、「**31JDKH.xls**」である。

《早期～前期の土器》－　1．撚糸文系土器。
2．押型文系土器。
3．貝殻沈線文系土器。
4．条痕文系土器。
5．羽状縄文系土器。
6．諸磯式土器。

《中期の土器》－　1．五領ヶ台式土器。
2．阿玉台式土器。
3．狢沢式土器。
4．勝坂式土器。
5．加曽利Ｅ式土器。
6．曽利式土器。

《後期～晩期の土器》－　1．称名寺式土器。
2．堀之内式土器。
3．晩　期。

《そ　の　他》－　1．底部圧痕。
2．土製品。

① 遺構出土の土器（第212～216図**1～73**、図版91～93）

1～3は SI－1J の掘り込みから出土しているもので、器面に撚糸 R を施文する早期撚糸文系の稲荷原式である。

4～7は SI－2J で出土しており、**7**は炉に埋設されていた土器で口縁部から胴部上部までと底部を欠

損する顕著な輪積痕を残す深鉢形の胴部である。**4～6**は隆帯に沿う一列の角押文を施す口縁、胴部の破片である。出土土器の型式は阿玉台Ⅰa～Ⅰb式。

8はSX－7Jから出土している口縁下に一条の沈線が巡る早期撚糸文系東山式のものである。

9はSX－61Jから出土している阿玉台Ⅰa～Ⅰb式のもので隆帯に沿って一列の角押文による連続押引きが施される。

10～15はSS－1Jの集石中から出土しているもので、**10～13・15**が阿玉台Ⅰa～Ⅰb式、**14**は加曽利E式の広口壷の口縁である。

16・17はSS－3Jの集石中から出土している五領ヶ台式である。

18～26はSS－6J・9Jの集石中から出土している。**18～21**が早期撚糸文系無文土器、**22**が五領ヶ台式、**23**が阿玉台Ⅰa式、**24～26**が阿玉台Ⅰa～Ⅰb式である。

27～30はSS－7Jの集石中から出土している。**27・28**が早期撚糸文系無文土器で、**29**が五領ヶ台式、**30**が阿玉台Ⅰa～Ⅰb式である。

31～37はSS－8Jの集石中から出土している諸磯式の胴部片である。

39はSS－12Jの集石中から出土している加曽利E式に伴う棒状把手である。

40はSS－10Jから出土のものとSS－13Jから出土したものの接合関係にある勝坂式の底部で、幅広の連続爪形文による抽象文が施文されている。

41・42はSS－13Jから出土している五領ヶ台式のものである。

43はSS－14Jの集石中から出土している阿玉台Ⅰa～Ⅰb式の口縁部で、角押文による押引きが口唇部・口縁に沿って施文される。

44・45はSS－15Jの集石中から出土している五領ヶ台式の外反する口縁部で交互刺突、渦巻文が施される。

46はSS－17Jから出土している勝坂式である。

47・48はSS－18Jから出土している。47が撚糸文が施文された勝坂式の胴部片で、48は連弧文式である。

49・50はSS－19Jから出土している勝坂式である。

51～53はSS－16Jから出土している。**51**は阿玉台Ⅰa～Ⅰb式の口縁部、**52**は阿玉台Ⅰa式の口縁部、**53**は阿玉台Ⅰb式の甕形土器である。

54～56はSK－23Jから出土している早期撚糸文系東山式である。**54**は口縁下に一条の沈線が巡る口縁部、**55・56**は胴部の破片である。

57・58はSK－36Jから出土の早期撚糸文系の無文土器。

59～61はSK－790J覆土内から出土している土器で加曽利E式の口縁部と胴部である。

62はSK－823J覆土より出土している加曽利E式の口縁部と底部を欠損する胴部で、胴部中央位置に横位に巡る2条の沈線間をペン先状の工具による刺突が一周巡り、それ以下を沈線により縦位に区画した磨り消し部分をもつ。地文はRLの縄文である。

63はSK－812Jから出土しているもので、早期撚糸文系東山式の口縁部である。口縁下には一条の沈線が巡る。

64・65はSK－937Jから出土している。**64**は五領ヶ台式の口縁部、**65**は輪積痕が残る胴部片で阿玉台Ⅰa～Ⅰb式のものである。

67はSK－1019Jから出土している阿玉台Ⅰａ式の外反する波状口縁である。

68はSK－1060Jから出土しているもので中期後半期に伴う把手である。

69はP－29Jから出土している阿玉台Ⅰａ式の橋状把手がつく一列の角押文が施文される口縁部から頸部の破片である。把手には紐状の隆帯による渦巻きが貼りつけられ、把手部分の器面側と内面側には三角の印刻が施される。

70はP－85Jから出土している阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ式の胴部片。

71はP－９Ｊから出土している五領ヶ台式の口縁部。

72はＰ４－196Jから出土している口縁に沿って一列の角押文が施文される阿玉台Ⅰａ式の波状口縁である。

73はＰ４－374Jから出土している半截竹管状工具による複数列の角押文による楕円区画が施文される阿玉台Ⅱ式の浅鉢である。

② 遺 構 外 出 土 の 土 器

《 早 期 ～ 前 期 の 土 器 》

１．撚糸文系土器（第216図**74～92**、図版93・94）

74・75はやや外反する口縁で撚糸Ｒを施文する。**76～86**は無文の土器で口縁下に１条の沈線が巡る。**83**は口唇部から屈曲部までが他に比べやや長い、**87～89**は同じく無文の胴部。型式は稲荷原式から東山式に比定される。**90～92**は胎土が軽しょうでスコリアを含む無文の土器である。

２．押型文系土器（第216図**93**、図版94）

器面に山形押型文が施文される。他にも６点小片が出土しており同一個体である。

３．貝殻沈線文系土器（第217図**94・95**、図版94）

外反する口縁部で口縁に４条の沈線が上下に巡りその間を斜行する格子状のモチーフが横位に展開する。型式は三戸式に比定される。

４．条痕文系土器（第217図**96～100**、図版94）

96～99は胎土に繊維を多く含む。**100**は貝殻背圧痕を外面、内面に施す。

５．羽状縄文系土器（第217図**101**、図版94）

底部片で底面がやや内側に反る。地文にはRLとLRの羽状縄文が施文され、底部にも施される。胎土には繊維が多く含まれる。型式は関山式に比定される。

６．諸磯式土器（第217・218図**102～115**、図版94）

102は胴部片で半截竹管状工具による平行沈線を４条の菱形状に施文し、平行沈線上に連続した爪形文を施文する。型式は、諸磯ａ式としたが、文様・器形から前期羽状縄文系土器の黒浜式の可能性も考えられる。**104・105**は平行沈線による直線、波状線の組合わせを器面に充填している。器厚は比較的薄手であ

る。**106～109**は同一個体で直線、波状の沈線が施文されており、ペン先状の工具による刺突もみられる。106からみると波状の口縁であると思われる。**110～113**は弧状の平行沈線が縦位に走る。半截竹管状工具の幅は狭い。**114**は幅の狭い半截竹管状工具による平行沈線が口縁下を巡り、その下に２条の平行沈線による三角形状の区画が施される。**115**は幅広の平行沈線による直線、弧線の組み合わせによる文様が施される。

《 中 期 の 土 器 》

１．五領ヶ台式土器（第218～220図**116～166**、図版95～97）

116はキャリパー形に広がる波状口縁の集合沈線文系の土器である。口縁に沿って３本の沈線を配し、波頂下には楕円形が左下がりに施文される。その楕円形脇には三角形状の印刻が施される。さらにそれ以下は縦方向に沈線を充填する。**117・118**は口唇部に縄文が施文される平縁の土器。**119・122～124**は波頂下に環状の突起を配し、「U」字状等の沈線で囲い両脇に印刻・交互刺突が施される。囲っている沈線は口縁に沿う沈線とは連続していない。**126**は人面か？。**128～129**は弧状・「Y」字状の沈線と印刻の組み合わせによるもので、地文には縄文が施される。**131～135**は沈線による連続する「Y」字・「U」字状のモチーフが横位に施されるもの。**136**は結節状縄文を胴部器面縦位方向に施文される。**137～140・143**は角押文・交互刺突を施文する土器で、**139**集合沈線文系の土器である。**150～151**は抉りによる「Y」字状文を連続させるもの。**155～163・165・166**は浅鉢で、**155～160**は外面に文様があるもので、交互刺突・角押文が施文される。**161～163、165・166**は内面に連続する爪形文が施文される。外面は無文である。

164は器壁が薄く硬質なもので色調・文様等から、東海地方の北裏ＣⅠ式土器である。

２．阿玉台式土器

本型式の土器はまとまった資料が出土しているため細分を試みた。ただ阿玉台式直前に該当する土器を器形・文様等から判断し「雷八類」（西村1972）を使用し分類した。

a．雷八類（西村1972）（第221・222図**167～190**、図版97）

167～181は口唇部内側の稜が比較的長く、外反する口縁部で形状は波状縁・平縁があり、口縁内側に印刻・刺突・角押文を施す。また口縁部文様帯が狭く口縁に沿う一列の角押文が施文されるものが多く、その他棒状の隆帯による突起がつけられるもの、渦巻文が施されるもの、無文のもの等がある。**182～190**は内面に印刻がないもので、器形等よりここに含めた。口縁部の文様は内側に印刻をもつものと同様である。

b．阿玉台Ⅰa式（第222～225図**191～239**、図版98～100）

191は波状口縁の樽形（甕形）を呈し、口縁部から胴部下部の一部が残存している。波頂上部は平坦で刻みがある。波頂下には薄い隆帯による単体の渦巻文が施文され、渦巻きをはさみ左右に非対称の一列の角押文による楕円区画が配される。頸部から胴部上位は角押文と沈線により「U」字状・波状の文様が施文される。張り出している胴部中位には、隆帯による渦巻きを薄い隆帯の貼付けではさみこむ文様が上下に配され、その間に一列の角押文が施文され横位に展開する。胴部下位は輪積み痕が明瞭に残

り中位より隆帯が続き「L」字状、「Y」字状に懸垂する。

192は小波状の深鉢形土器で、波状部は「U」字状を呈し波頂下には紐帯をつまんだ突起がつく。一列の角押文が口縁・隆帯に沿って施され、また角押文による楕円区画、逆「U」字状のモチーフが配される。胴部上位から続く隆帯が「Y」字状・「L」字状に変化して底部方向に懸垂する。底部には２本越え２本潜り１本送りの網代痕が確認された。

193は口縁が外反してひらく深鉢形土器で口縁の残りが僅かなため波状縁か平縁かは不明である。口縁下には一列の角押文による押し引きが２本引かれ、頸部下に「U」字状、隆帯に沿う角押文が施される。それ以下は輪積み痕による胴部が続き、底部から約４cm は粗く磨きがかけられる。底部には２本越え２本潜り１本送りの網代痕が確認された。

194～216は波状口縁で断面形は内湾しつつ外反するものが多い。波頂部は平坦で刻みのあるものもある。文様は口縁に沿う一列の角押文が展開し楕円区画を形成するもの、突起がつくもの、隆帯がクランクしながら懸垂するもがある。**207・208**は同一個体と思われるもので色調は暗褐色土で、胎土はきめの細かい砂のようである。

217～237は平縁の口縁になるもの。**225～242**は口縁内側に印刻・角押文が施されるもので、口縁形状・口縁部文様等から阿玉台Ⅰａ式とした。

c．阿玉台Ⅰｂ式（第225・226図**240～268**、図版100）

口縁部の稜が長くなり角押文による楕円区画が施される。隆帯もⅠａ式に比べ太くなる。

241は波状縁になる樽形（甕形）のもので、口縁文様体に隆帯による楕円区画が配され、隆帯内側に一列の角押文が押引きされる。区画の接する部分には薄い紐帯が張り付けられる。頸部は上下に隆帯と角押文が巡りその間を４本の一列の角押文による押引きが斜行する。

240・242～265は口縁部で太めの隆帯による楕円区画は一周し、隆帯に沿い角押文が施される。Ⅰａ式に比べ施文される角押文はやや雑になる。

d．阿玉台Ⅰａ～Ⅰｂ式（第226～230図**269～380**、図版100～103）

破片のため文様の展開が不明なもの、モチーフ的にⅠａ式・Ⅰｂ式どちらにも該当するものをここにまとめた。

269～288は波状縁で、口縁に沿う一列の角押文が施されるもの。**292～316**は平縁で、一列の角押文が口縁に沿うもの、横位方向から垂下するもの、波状になるもの等がある。**317～330**は、突起を有するもので、棒状芯の回りに紐状の隆帯を巻き付けたもの、隆帯区画の接合部で「X」字状を呈するもの、軽くつまんだ程度のもの等がある。**331～365**は胴部片で、輪積み痕や一列の角押文が施文されるもの隆帯がクランクして垂下するものである。**366～380**は無文のもので器面を粗く調整しているものが多く口縁に小さな突起がつけられるものもある。

e．阿玉台Ⅱ式（第230図**381～386・389**、図版104）

381～385は複数列の角押文、沈線文が施文される。

386・389は浅鉢で、半截竹管状の工具により平行沈線の文様を施す。

f．阿玉台Ⅲ式（第230図**387・388**、図版104）

２点の出土で、幅広の爪形文が施文される。

３．狢沢式土器（第231・232図**390～429**、図版104・105）

390～417・419は横帯区画や横楕円区画を配し区画内を角押文により充填させたり、波状になる角押文を施すものがある。**418・420～423**は懸垂する角押文を施した胴部・底部で、**421**は底部に２本越え２本潜り１本送りの網代痕を確認する。

424～429は浅鉢で、やや幅広の角押文が施文される。

４．勝坂式土器（第232・234図**430～470**、図版105～107）

430～439は三角押文・キャタピラ文を施文するもので、幅広の隆帯にキャタピラ文を施す区画を構成する。区画内はキャタピラ文に沿うように三角押文・波状沈線を施す。**440～454**は抽象文系のもので、キャタピラ文・三角押文・隆帯・沈線の組み合わせにより意匠する。**451**は、口縁部から胴部上部が残るもので、外反する口縁下４cm までは無文でその下に幅広の隆帯による楕円区画文が横位に展開し、隆帯上には爪形文が施される。頸部以下は縄文 RL が施文される。**452**は、口縁部から胴部のもので、口縁がやや内湾する深鉢形土器。口縁には爪形文が施文された隆帯により渦巻状のモチーフが施され、橋状の把手が付く。頸部には隆帯が一周巡り、胴部には隆帯による波状の区画が横位に展開し、区画内は沈線により縦位に施文されたり、楕円区画されるほか、交互刺突・三叉文が加えられる。**453**は、撚糸 R が施文される深鉢形土器の胴部から底部。**454**は、キャリパー形深鉢土器の口縁から胴部のもので口縁部は隆帯の貼り付けが施され、頸部に続き、波状になり横位に巡る。**457～459**は２本または３本の隆帯が口縁に施される円筒形土器の口縁片。**460～468**は区画内に沈線文・半隆帯文・交互刺突文が施されるパネル文系のものである。**469・470**は把手。

5.加曽利Ｅ式土器（第235図**471～483**、図版107・108）

471は口縁片で隆帯により波状のモチーフが施される。**472・473**は口縁下に沈線が巡る。**473**は沈線下は縦位に条線が施される。**475・476**は櫛状工具による条線が縦位方向に施文される。**477・478**は広口壷で口縁部は無文で頸部に隆帯が一条横位に巡り胴部には RL の縄文が施文される。**479・480**は終末期の胴部片で沈線による縦位方向の楕円状の区画が交互に施される。**481～483**は３本の沈線が横位に巡る連弧文式土器である。

6.曽利式土器（第235・236図**484～486**、図版108）

484・485はペン先状工具による刺突が施された胴部片。**486**は半截竹管による半隆帯文が施文された口縁部から胴部上部のもので、口縁は弧状に、頸部以下は縦位方向に施文される。

《 後 期 ～ 晩 期 の 土 器 》

１．称名寺式土器

26点出土しているが、小片のため図示していない。

２．堀之内式土器（第236図**487～489**、図版108）

個体数は３点で、**487**は３本の沈線文が縦位に施される深鉢形土器の胴部から底部。**488**は深鉢形土器の外反する口縁部で、内面側の一部内湾する部分に渦巻文を配し、両脇にペン先状工具による刺突を施し、そこから横位に沈線を施文する。器面は口縁から頸部は無文で、頸部以下には浅い縄文が施される。**489**は深鉢形土器の口縁部から胴部のもので、口縁には隆帯が一条巡りペン先状工具による刺突、８の字状の貼付文が施される。胴部上部には沈線による三角文が横位に展開する。

３．晩期（第236図**490**、図版108）

４区西側の該期遺物包含層より１点出土している。器形は小波状の口縁になると思われる鉢形土器を呈し、口縁部は欠損しているもののその下部から底部約１／３遺存している。文様は後期から継承される東関東的なモチーフで、器面調整後口縁部下と胴部下に２条の沈線が横位に巡り、その間を沈線による「し」字を横にしたもの、逆「の」字状の弧線が横位に展開する。また逆「の」字の楕円中には擬似縄文（？）が施文される。底面は幅の狭い素材による圧痕（１本越え１本潜り１本送り）が刻されている。色調は器面が灰色がかる褐色土で内面が黒褐色。型式は晩期前葉の安行Ⅲa 式に比定した。

《 そ の 他 》

１．底部圧痕（第236・237図**491～502**、図版108・109）

型式が比定できなかったものの中で底部に圧痕を残すものを図示した。圧痕は網代編みによるもので、**491～496・498～501**は２本越え２本潜り１本送り。**497**は１本越え１本潜り１本送り。**502**は１本越え２本潜り１本送りである。

2.土製品（第237－503～517図、図版109）

503は対する２箇所を抉り込む土器片錘で、側縁は磨痕がある。重さは12.6g。**504～517**は土製円板。側縁に磨痕が観察できたのは８点（実測図に実線で範囲を示した。）で、**504・516**は全周に磨痕がある。利用部位は、すべて胴部である。重さは以下の通りである。

504＝7.5g、505＝17.6g、506＝4.1g、507＝11.2g、508＝7.1g、509＝12.8g、510＝14.8g、
511＝11.9g、512＝13.2g、513＝12.7g、514＝9.6g、515＝12.2g、516＝5.8g、517＝14.5g。

２）石　器

本調査において出土した該期の石器は、小片を含め合計883点を数える。その内、該期の遺構から出土したものは20点、遺構外の包含層（Ⅱ層）から出土したものは641点、その他（撹乱・盛土・表土等）一括取り上げのものは222点である。器種別の内訳は、尖頭器９点、石匙２点、石鏃77点、スクレイパー６点、二次加工剥片21点、磨製石斧16点、打製石斧337点、礫器26点、スタンプ形石器131点、敲石22点、磨石111点、石皿12点、凹石６点、石錘２点、その他の石器105点である。

本書では、このうち完形に近いものを中心に543点の石器を選出し、遺構出土の石器、遺構外出土の石器の順に器種ごとに図示した。また、包含層（Ⅱ層）から出土したものについては、器種ごとの分布状況

を第239～242図に示した。

以下、器種ごとの概略を述べるが、石質・座標・計測値などの詳細については「縄文石器観察表」にまとめ、巻末添付の CD-ROM に収録した。ファイル名は「**32JSTKH.Exl**」である。

① 遺 構 出 土 の 石 器（第243～245図**1～20**、図版110・111）

1は SK－1141J から出土した有舌尖頭器で、石質はホルンフェルス（Ho）である。

2・3は SI－２J から出土した石鏃で凹基無茎鏃（Ⅱ類）で、石質は共に黒曜石（Ob）である。

4は小穴群 P－11J から出土した石鏃で凹基無茎鏃（Ⅱ類）で、石質は黒曜石（Ob）である。

5は小穴群 P－65J から出土した石匙で石質は黒曜石（Ob）である。

6は SK－1029J から出土した石匙で、石質は硬質砂岩（HSs）である。

7・8は SS－18J の集石中から出土した短冊形（Ⅰ類）の打製石斧で、石質は**7**がホルンフェルス（Ho）**8**が硬質砂岩（HSs）である。

9は SS－16J の集石中から出土した短冊形（Ⅰ類）の打製石斧で､石質はホルンフェルス（Ho）である。

10は小穴群 P－98J から出土した短冊形（Ⅰ類）の打製石斧で、石質はホルンフェルス（Ho）である。

11は SK－827J から出土した分銅形（Ⅲ類）の打製石斧で、石質はホルンフェルス（Ho）である。

12は SX－７J から出土した扁平礫を素材とする（Ⅱ類）スタンプ形石器で、石質は閃緑岩（Dio）である。

13は SS－６J の集石中から出土した扁平礫を素材とする（Ⅱ類）スタンプ形石器で、石質は閃緑岩（Dio）である。

14は SK－854J から出土した扁平礫を素材とする（Ⅱ類）スタンプ形石器で、石質は硬質砂岩（HSs）である。

15は SS－１J の集石中から出土した磨石で、石質は閃緑岩（Dio）である。

16は SS－８J の集石中から出土した表裏面に敲打痕の有る磨石で、石質は閃緑岩（Dio）である。

17は SS－11J の集石中から出土した大型の礫器で、石質は砂岩（Ss）である。

18は SS－16J から出土の凹石で、石質は礫岩（Cm）である。

19は SK－790J から出土した凹石で裏面は磨痕がある。石質は砂岩（Ss）である。

20は SK－1031J から出土した磨痕がある大型の石器で、石質は閃緑岩（Dio）である。

② 遺 構 外 出 土 の 石 器

尖頭器（第245・246図**21～28**、図版111）分布図－第239図

21と**28**は表採されたもので、**22～27**はⅡ層の最下部から出土したものである。**21～26**は木葉形尖頭器**27・28**は有舌尖頭器。石質は、チャート（Ch）が２点、ガラス質黒色安山岩（GBA）が２点、ホルンフェルス（Ho）・硬質頁岩（HSh）・珪質頁岩（SSh）・黒色頁岩（BSh）がそれぞれ１点づつである。また、いずれの石器も草創期に比定されるものであるが、該期に属する土器は出土していない。

石 鏃（第246～249図**29～95**、図版111～113）分布図－第239図

石鏃については、その形状からⅠ類～Ⅴ類に分類し図示した。

Ⅰ類は（平基無茎鏃）。Ⅱ類は（凹基無茎鏃）。Ⅲ類は（凸基有茎鏃）。Ⅳ類は（尖基鏃）。Ⅴ類は（細・破片）。

29～31はⅠ類である。**32～89**はⅡ類で、**32～42**は基部の抉りが浅く、両脚が尖っているもの。**43～64**は基部の抉りが深く、両脚が尖っているもの。**65～87**は基部の抉りが深く、両脚が丸いものである。**90～92**はⅢ類である。**93**はⅣ類で、**94・95**はⅤ類である。

石質は、黒曜石（Ob）製のものが37点、チャート（Ch）が26点、その他、珪質頁岩（SSh）・片状砂岩（SSs）・結晶片岩（Sch）が各１点づつである。

スクレイパー（第249・250図**96～101**、図版113・114）

96～100は包含層（Ⅱ層）、**101**は撹乱から出土している。石質は、頁岩（Sh）・ホルンフェルス（Ho）が２点、その他チャート（Ch）・粘板岩（Sl）が各１点づつである。

二次加工剥片（第250～253図**102～117**、図版102～115）分布図－第239図

二次加工剥片は、Ⅰ類は（小形）、Ⅱ類は（大形）に分類し図示した。

102～108はⅠ類で、**109～117**はⅡ類である。石質は、ホルンフェルス（Ho）が８点、硬質砂岩（HSs）が４点、その他結晶片岩（Sch）・硬質中粒凝灰岩（HMT）・片状砂岩（SSs）・斑糲岩（Gb）・が各１点である。

磨製石斧（第253～254図**118～131**、図版115・116）分布図－第241図、

磨製石斧は、Ⅰ類が（乳棒状）、Ⅱ類が（定角式）、Ⅲ類が（破片）、Ⅳ類が（局部磨製）に分類し図示した。

118～124はⅠ類、**125～127**はⅡ類、**128～130**Ⅲ類、**131**はⅣ類である。

石質は、結晶片岩（SCh）が４点、硬質中粒凝灰岩（HMT）・ホルンフェルス（Ho）が３点、緑泥片岩（GMS）が２点、その他雲母片岩（MiS）・凝灰角礫岩（Tb）が各１点である。

打製石斧（第254～270図**132～290**、図版116～125）分布図－第242図

打製石斧は、その形態から、Ⅰ類が（短冊形）、Ⅱ類が（撥形）、Ⅲ類が（分銅形）、Ⅳ類が（特殊形）、Ⅴ類が（１/３以下の小片）の５種に分類した。

分類別の分布状況は、Ⅰ類（短冊形）が全体に分散する分布を示す。Ⅱ類（撥形）は点在する分布を示す。Ⅲ類（分銅形）は北西側が少なく南東側にやや多い分布を示す。Ⅳ類（特殊形）は最北寄りに多く中央に少ない分布を示す。

132～203はⅠ類で、**132～180**は基部と刃部の幅がほぼ同じもの、**181～203**は基部の幅が刃部の幅より細いものである。**204～223**はⅡ類である。**224～256**はⅢ類で、**224～248**は両側縁に抉りがあるもの、**249～256**は側縁の片側に抉りがあるものである。**257～270**はⅣ類で、Ⅰ～Ⅲ類以外の特殊な形のものである。Ⅴ類は小片のため掲載していない。

石質は、分類別にまとめると、

Ⅰ類はホルンフェルス（Ho）が25点、硬質砂岩（HSs）が20点、片状砂岩（SSs）が19点、硬質中粒凝灰岩（HMT）・粘板岩（Sl）が２点、その他結晶片岩（Sch）・礫岩（Cm）・流紋岩（Ry）・閃緑岩（Dio）

が各１点づつである。

Ⅱ類はホルンフェルス（Ho）が12点、硬質砂岩（HSs）が８点である。

Ⅲ類は硬質砂岩（HSs）が12点、片状砂岩（SSs）が８点、ホルンフェルス（Ho）が７点、粘板岩（Sl）が４点、その他結晶片岩（Sch）・硬質中粒凝灰岩（HMT）が各１点である。

Ⅳ類はホルンフェルス（Ho）が20点、硬質砂岩（HSs）が７点、粘板岩（Sl）が４点、その他珪質頁岩（SSh）・流紋岩（Ry）・片状砂岩（SSs）が各１点づつである。

礫 器（第271～274図**291～313**、図版125・126）分布図－第240図

礫器は、Ⅰ類が（小形）、Ⅱ類が（大形）に分類し図示した。

291～293はⅠ類で、**294～313**はⅡ類である。石質は、硬質砂岩（HSs）が９点、ホルンフェルス（Ho）が８点、硬質中粒凝灰岩（HMT）・粘板岩（Sl）が各２点、礫岩（Cm）が１点である。

スタンプ形石器（第274～295図**314～429**、図版126～131）分布図－第241図

スタンプ形石器は、形状からⅠ類が（棒状礫）、Ⅱ類が（扁平礫）に分類し図示した。

分類別の分布状況は、Ⅰ類が北東から最北部で出土していない他は点在する分布を示す。Ⅱ類は北西にやや集中する他は全体に散在する分布を示す。

314～336はⅠ類で、**314～327**は側縁に抉りの無いもの、**328～334**は側縁の片側に抉りのあるもの、**335・336**は両側縁に抉りのあるものである。337～429はⅡ類で、**337～352**は側縁に抉りの無いもの、**353～364**は側縁の片側に抉りのあるもの、**365～429**は両側縁に抉りのあるものである。

底面に磨痕（実測図にスクリントーンで図示している。）があるものは、Ⅰ類で４点、Ⅱ類で39点である。またⅠ類の**322**とⅡ類の**420**には、側縁に磨痕が観察された。

石質は、分類別でまとめると、

Ⅰ類は硬質砂岩（HSs）が16点、礫岩（Cm）・ホルンフェルス（Ho）・閃緑岩（Dio）が各２点づつ、安山岩（An）が１点である。

Ⅱ類は硬質砂岩（HSs）が46点、閃緑岩（Dio）が41点、ホルンフェルス（Ho）・輝緑岩（Db）が各２点づつ、礫岩（Cm）・安山岩（An）が各１点づつである。

敲 石（第295・296図**430～448**、図版131・132）分布図－第242図

430～448は敲石で、底面が敲打されている。**447**は側縁にも敲打痕がある。**448**は扁平礫を使用したものである。

石質は、硬質砂岩（HSs）が７点、片状砂岩（SSs）が５点、結晶片岩（Sch）・ホルンフェルス（Ho）が各３点づつ、砂岩（Ss）が１点である。

磨 石（第296～303図**449～525**、図版132～135）分布図－第242図

磨石は、形態よりⅠ類が（丸形礫）、Ⅱ類が（扁平礫）、Ⅲ類が（特殊磨石）、Ⅳ類が（抉入磨石）に分類し図示した。

449～499はⅠ類で、**472～499**は敲打痕があるものである。**500～510**はⅡ類で、**508～510**は敲打痕がある。**511～524**はⅢ類で、側縁部分に磨痕が観られるものが多い。また**521・522**は角状に磨痕がある。**523・524**

はスタンプ形石器の転用か？。**525**は調査区南東で１点出土しているもので、短軸両側縁を抉り上面と下面に磨痕がありⅣ類とした。

石質は、閃緑岩（Dio）が40点、斑糲岩（Gb）12点、砂岩（Ss）10点、硬質砂岩（HSs）８点、石英閃緑岩（Qd）２点、その他玄武岩（Ba）・安山岩（An）が各１づつ点である。

石 皿（第303・304図**526～528**、図版135）分布図－第242図

石皿は、完形のものはなく**526**が表採で**527・528**は包含層（Ⅱ層）より出土している。**526・528**は正面が磨痕によりくぼんでいる。**527**は敲打痕がある。

石質は、閃緑岩（Dio）２点、安山岩（An）１点である。

凹 石（第304図**529～532**、図版135）分布図－第242図

凹石は、**530**が撹乱から、その他は包含層（Ⅱ層）から出土している。**531**は破片であるが、２カ所の凹みがある。

石質は、閃緑岩（Dio）３点、砂岩（Ss）が２点、安山岩（An）・斑糲岩（Gb）が各１づつ点である。

石 錘（第304図**533・534**、図版135）

石錘は、包含層（Ⅱ層）から２点出土している。２点とも両端に抉り込みが施される。重さは、**533**が25.0g、**534**が34.0g である。

石質は、砂岩（Ss）・頁岩（Sh）各１点づつである。

その他の石器（第304・305図**535～543**、図版135・136）分布図－第242図

上記の分類に含めることが形態的に出来なかったものを「その他の石器」としてまとめた。

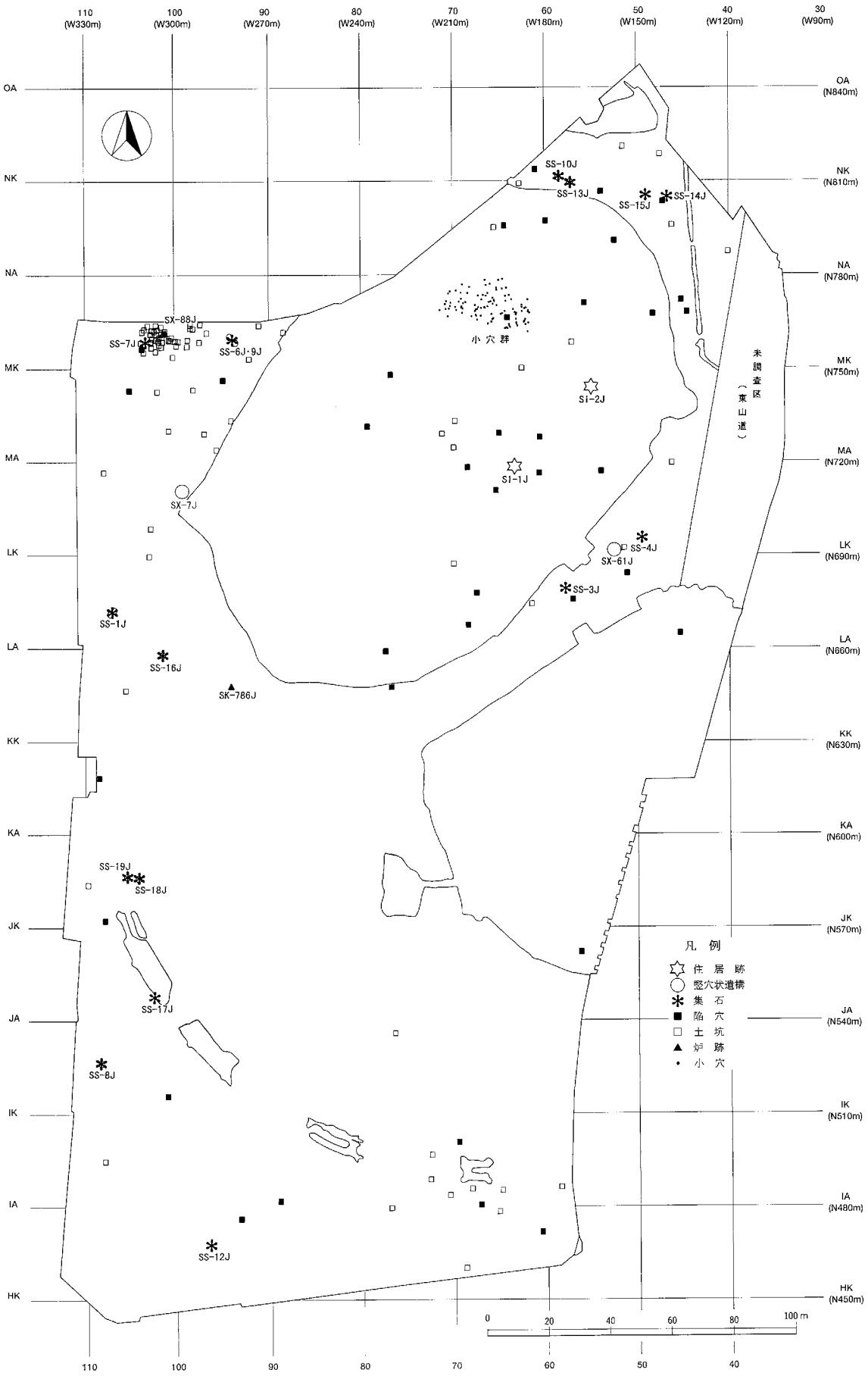
535は丸みを帯びる三角柱状の礫で、各面に凹みがあり、石質は硬質砂岩（HSs）である。**536・537**は剥片の一部に磨りによる抉りが施されるもので、石質は硬質砂岩（HSs）・片状砂岩（SSs）各１点づつである。**538**は剥片の下面に調整が加えられたもので、石質は片状砂岩（SSs）である。**539**は下面片側を打ち欠き、裏側は全面に磨痕があるもので、石質は閃緑岩（Dio）である。**540**は扁平な礫の側縁に磨痕があるもので、石質は斑糲岩（Gb）である。**541**は扁平礫の側縁の一部に敲打痕があるもので、石質は閃緑岩（Dio）である。**542・543**は円板状の礫で片面に磨痕のあるもので、石質は２点とも閃緑岩（Dio）である。

（小林定之）

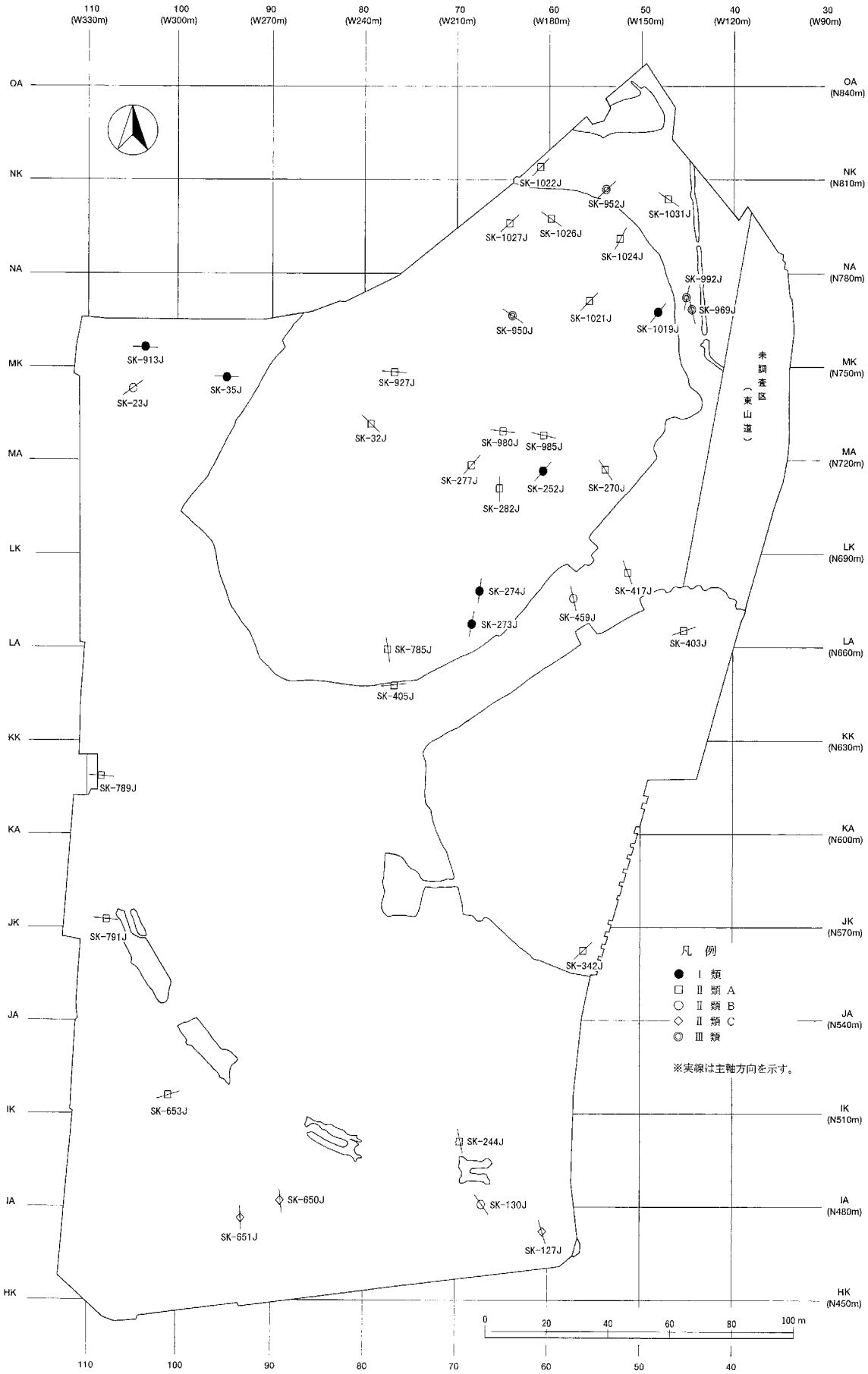
引用・参考文献

・麻生　優・白石浩之　考古学シリーズ14『縄文土器の知識（Ⅰ）』　東京美術　1993
・今村啓爾　「五領ヶ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』　東京大学文学部考古学研究室　1985
・江坂輝彌・芹沢長介・坂誥秀一編　『日本考古学小事典』　ニュー・サイエンス社　1983

・大村　裕　「所謂「角押文」と「キャタピラー文」の違いについて」『下総考古学』７　下総考古学研究会　1984
・大村　裕　「所謂「五領ヶ台式直後型式」研究の現状について」『下総考古学』９　下総考古学研究会　1987
・加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』２　生業　雄山閣　1994
・加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』３　縄文土器Ⅰ　雄山閣　1994
・加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣　1994
・加藤晋平・小林達雄・藤本強編　『縄文文化の研究』５　縄文土器Ⅲ　雄山閣　1994
・霧ヶ丘遺跡調査団　『霧ヶ丘』　武蔵野美術大学考古学研究会　1973
・『野川遺跡（２）』　国際基督教大学考古学研究センター　1995
・『国分寺市史』　上巻国分寺市史編さん委員会　1986
・小林謙一　「中部・関東地方における勝坂・阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』第19号　神奈川考古同人会　1984
・小林達雄編　『縄文土器大観』１　草創期 早期 前期　小学館　1991
・小林達雄編　『縄文土器大観』２　中期Ⅰ　小学館　1991
・小林達雄編　『縄文土器大観』３　中期Ⅱ　小学館　1991
・小林達雄編　『縄文土器大観』４　後期 晩期 続縄文　小学館　1991
・『西の原遺跡』　埼玉県大井町遺跡調査会　1996
・塚本師也　「坊山遺跡出土の阿玉台Ⅰａ式土器（前編）」『栃木県考古学会誌』第10集　1988
・塚本師也　「坊山遺跡出土の阿玉台Ⅰａ式土器（後編）」『栃木県考古学会誌』第12集　1990
・寺内隆夫　「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』７　下総考古学研究会　1984
・寺内隆夫　「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化」－隣接型式との関係阿玉台式土器その１－『下総考古学』９　下総考古学研究会　1987
・寺内隆夫　「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」－型式変遷における一視点－『長野県埋蔵文化財センター紀要Ⅰ』　1988
・戸沢充則編　『縄文時代研究辞典』　東京堂出版　1996
・都立府中病院内遺跡調査団　『武蔵台遺跡Ⅱ』－資料編２－　都立府中病院内遺跡調査会　1994
・中山谷遺跡遺跡調査団　『中山谷遺跡』－第９次～11次調査（1981～1983）－　小金井市中山谷遺跡調査会　1987
・安斎正人編　『縄文式生活構造』－土俗考古学からのアプローチ－　同成社　1998
・西村正衛　「阿玉台式土器編年的研究の概要」－利根川下流域を中心として－『早稲田大学院文学研究科紀要』第18輯　1972
・西村正衛　『石器時代における利根川下流域の研究』－貝塚を中心として－　早稲田大学出版部　1984
・『神谷原Ⅱ』　八王子市椚田遺跡調査会　1982
・藤村東男　考古学シリーズ15「縄文土器の知識（Ⅱ）」　東京美術　1992



第159図　縄文時代遺構配置図



第160図　陥穴形態別配置図

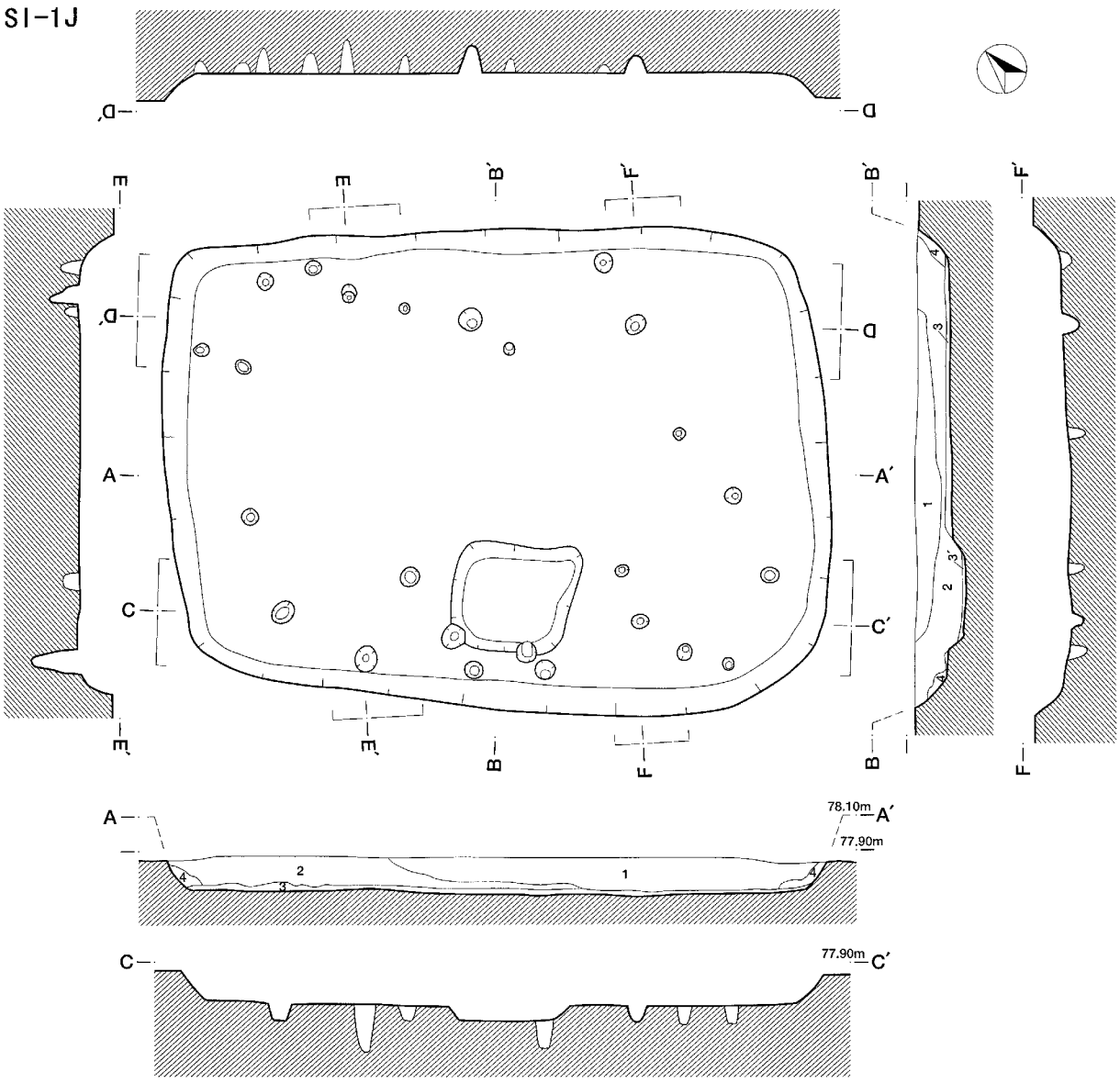
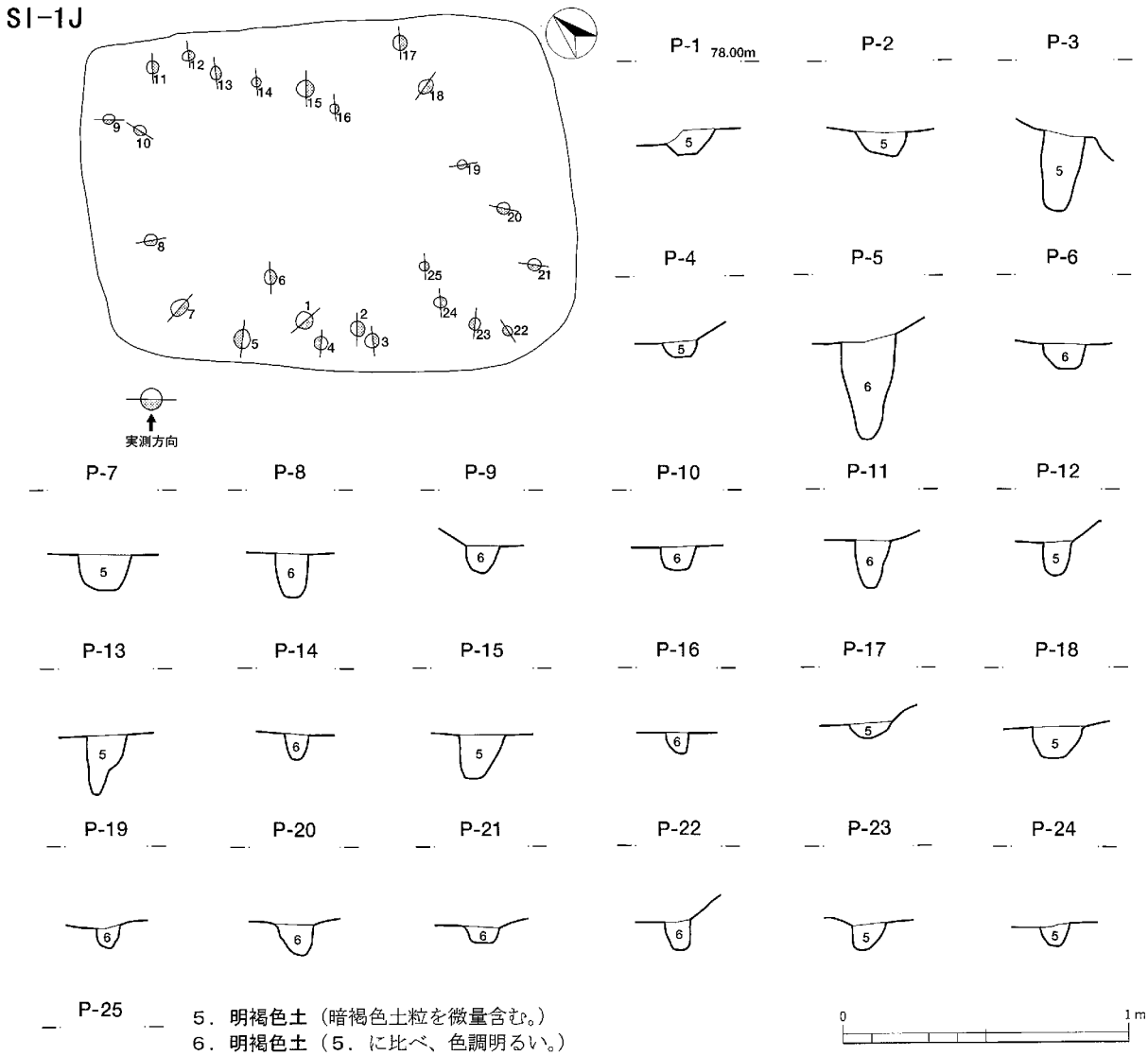
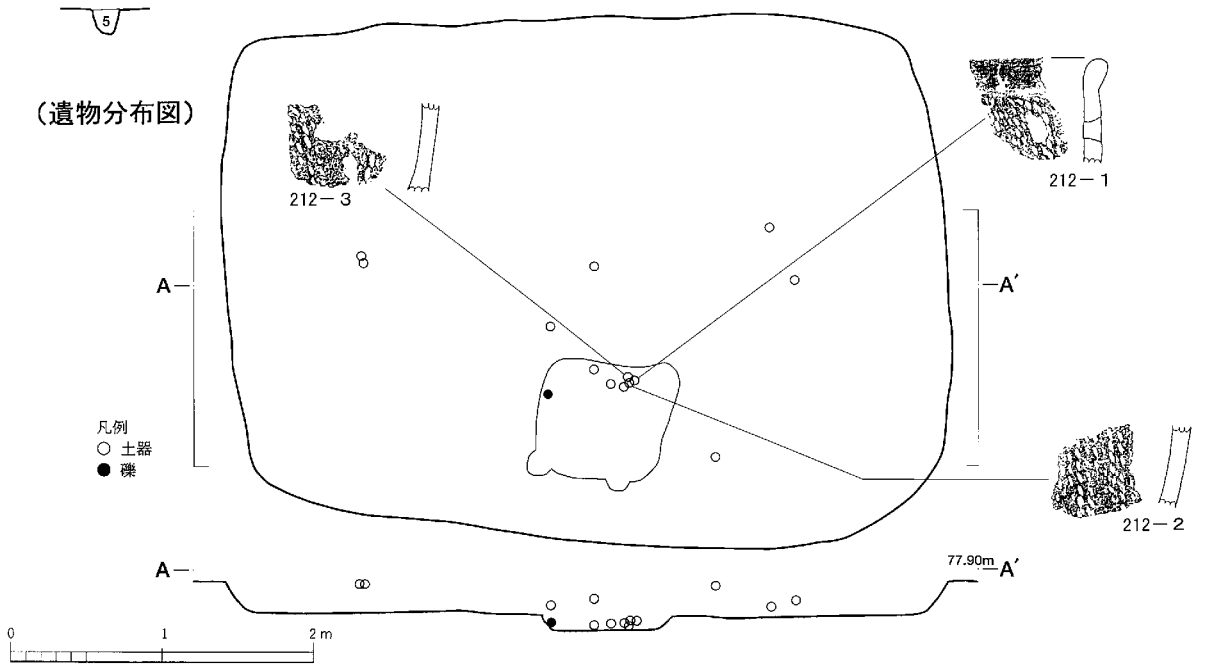


表 Ⅲ－1　SI－1J ピット一覧

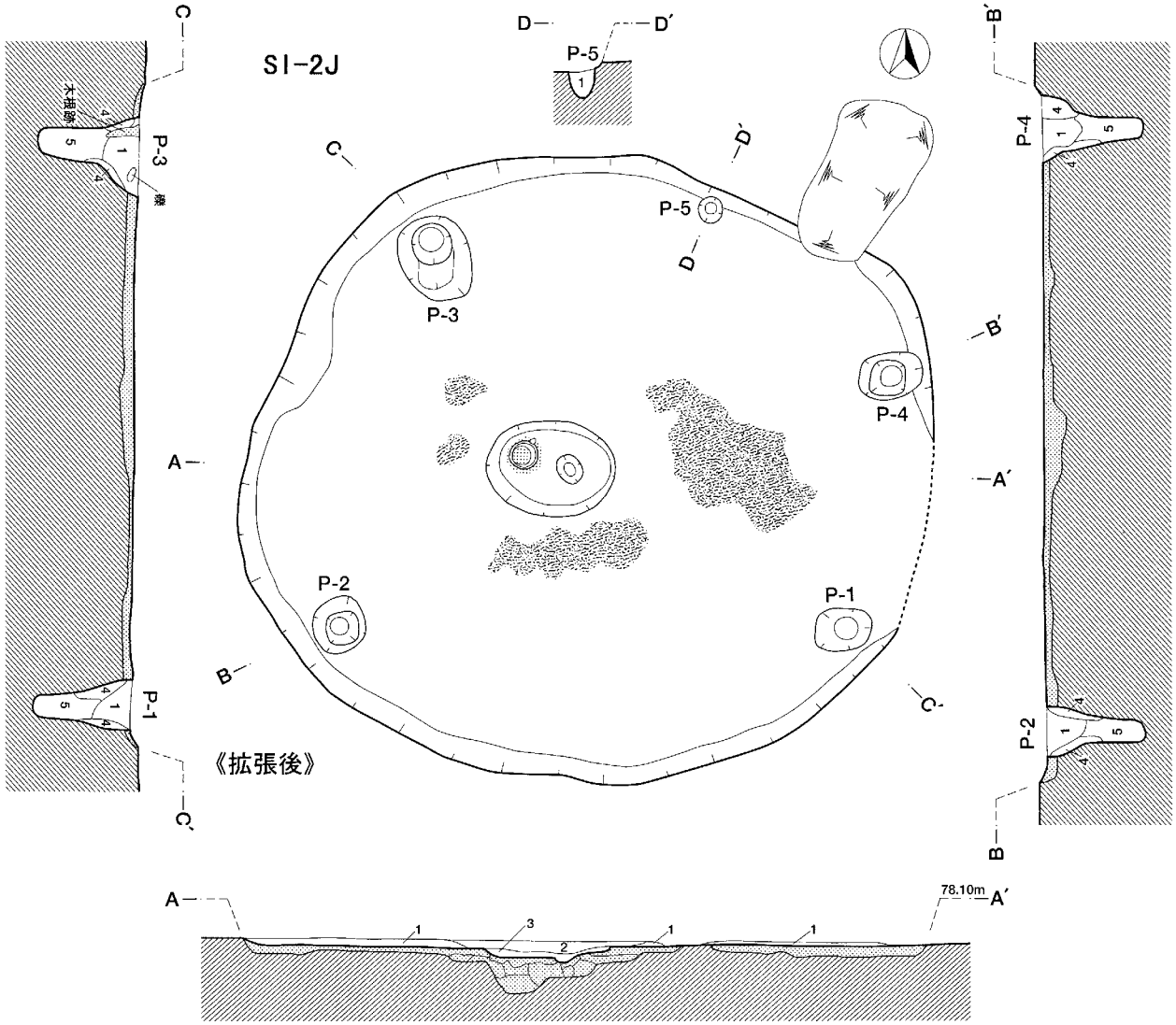
ピット番号	深さ Cm	底面標高 m	ピット番号	深さ Cm	底面標高 m	ピット番号	深さ Cm	底面標高 m
P－1	- 9.00	77.680	P－10	- 8.00	77.720	P－19	- 8.00	77.650
P－2	- 9.00	77.670	P－11	-16.00	77.620	P－20	-10.00	77.620
P－3	-28.00	77.470	P－12	-12.00	77.660	P－21	- 5.00	77.660
P－4	- 6.00	77.710	P－13	-21.00	77.570	P－22	-11.00	77.630
P－5	-36.00	77.420	P－14	- 9.00	77.680	P－23	- 9.00	77.630
P－6	- 9.00	77.660	P－15	-15.00	77.620	P－24	- 8.00	77.650
P－7	-13.00	77.650	P－16	- 7.00	77.700	P－25	- 8.00	77.650
P－8	-15.00	77.630	P－17	- 5.00	77.750			
P－9	- 9.00	77.710	P－18	-11.00	77.690			

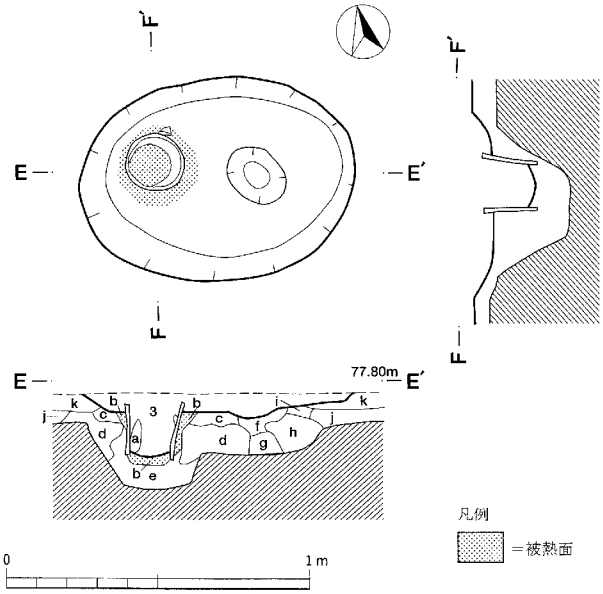
第161図　住居跡（SI－1 J）実測図（1）





第162図　住居跡（SI－１J）実測図（２）／遺物分布図



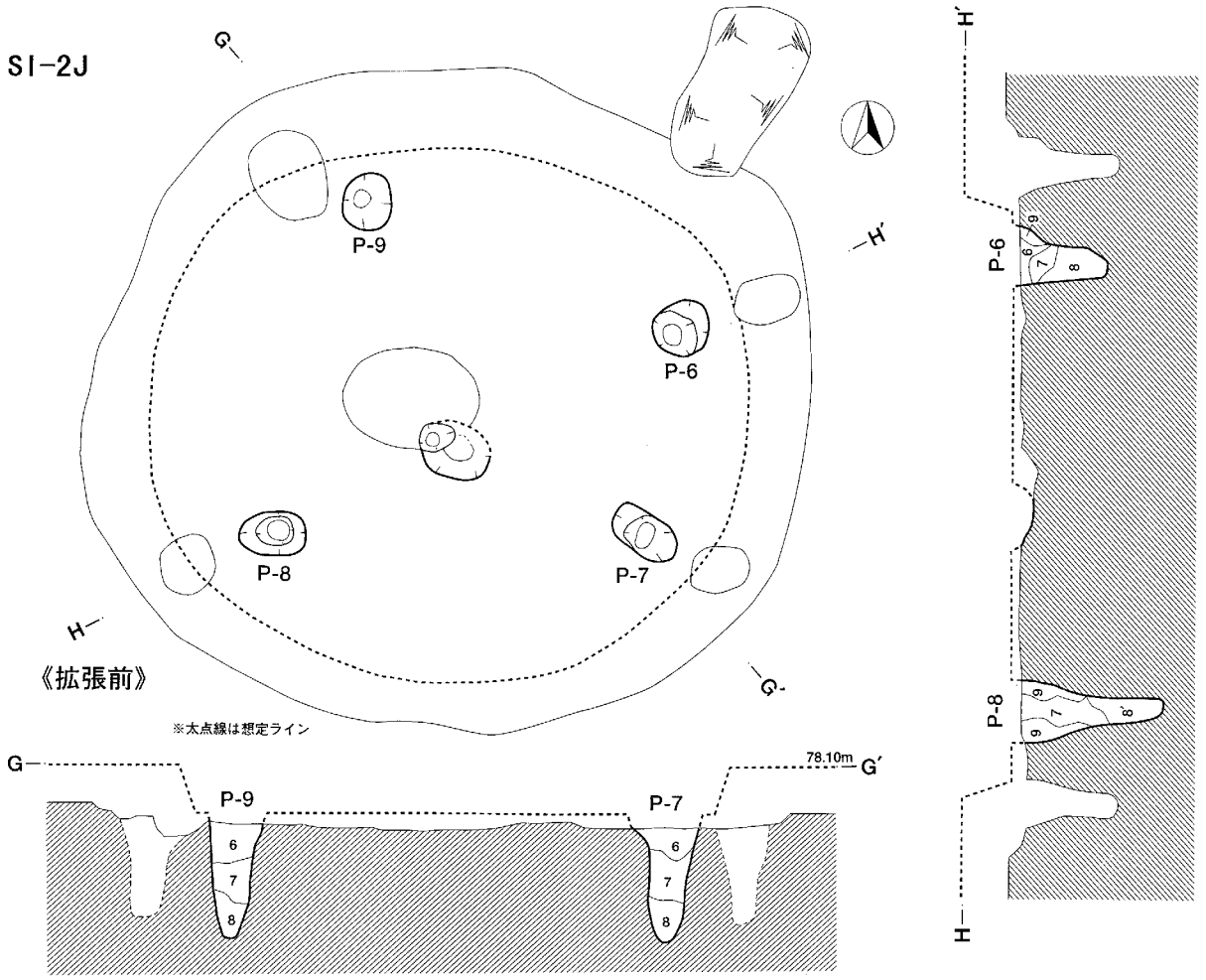


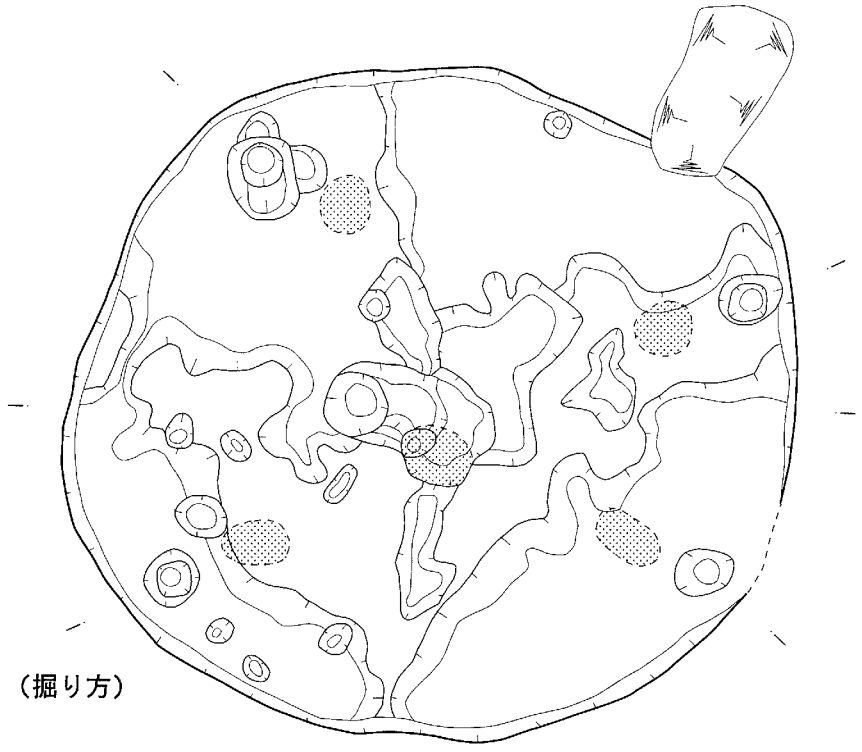
1．暗褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
2．暗褐色土（焼土粒を少量含む、炭化物を微量含み、色調黒味をおびている。）
3．暗褐色土（2．より焼土粒の混入少ない。）
4．黄褐色土（明褐色ロームに暗褐色土を少量混入。）
5．暗黄褐色土（明褐色ロームと暗褐色土の混合土、褐色土を少量含む。）

a．暗黄褐色土（暗褐色土とローム混合土、焼土粒を微量含む。）
b．暗赤褐色土（多量の焼土粒に暗褐色土を少量含む。）
c．暗褐色土（褐色土、焼土粒を少量含む。）
d．暗黄褐色土（Ⅱ層土粒・焼土粒を微量含む。）
e．褐色土（多量のⅡ層土粒と焼土粒を微量含む。）
f．暗褐色土（c．より色調暗い。）
g．暗黄褐色土（暗褐色土を微量含む。）
h．暗黄褐色土（g．に比べ、しまり強い。）
i．ロームブロック
j．黄褐色土（褐色土と明褐色ロームの混合土。）
k．褐色土（暗褐色土と明褐色ロームを少量含む、しまり強い。）

※小穴一覧は巻末添付のCD-ROMに収録

第163図　住居跡（SI－2 J）実測図（1）





6．**暗黄褐色土**（褐色土と明褐色ロームの混合土に暗褐色土を少量混入。）
7．**褐色土**（暗褐色土を少量、ロームブロックをまばらに含む。）
8．**褐色土**（7．よりロームの混入多い。）
8′ **褐色土**（8．に類似、暗褐色土の混入多い。）
9．**黄褐色土**（明褐色ロームに、暗褐色土、褐色土を微量含む。）

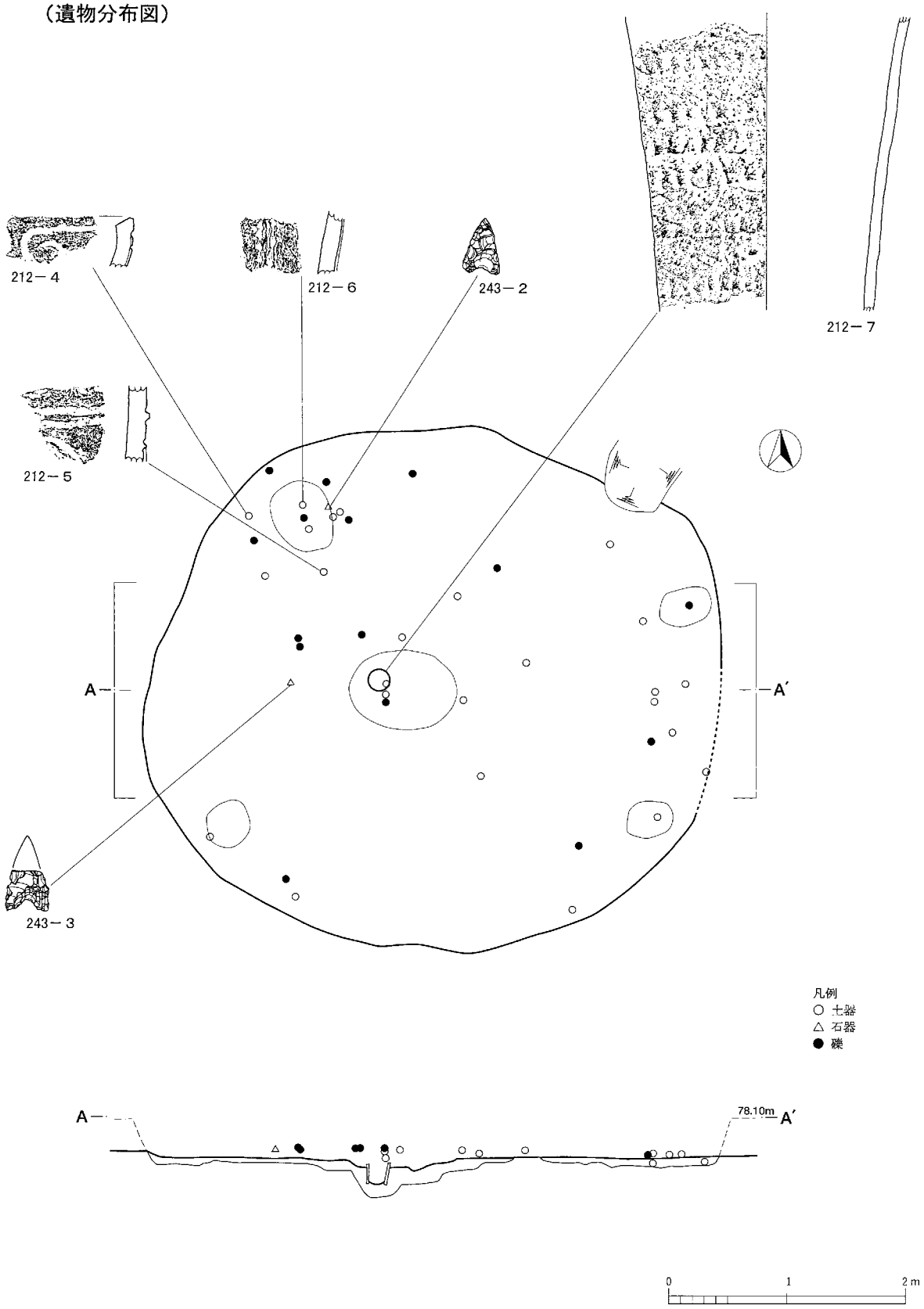
凡例
＝拡張前の柱穴跡

0　1　2m

第164図　住居跡（SI－２J）実測図（２）

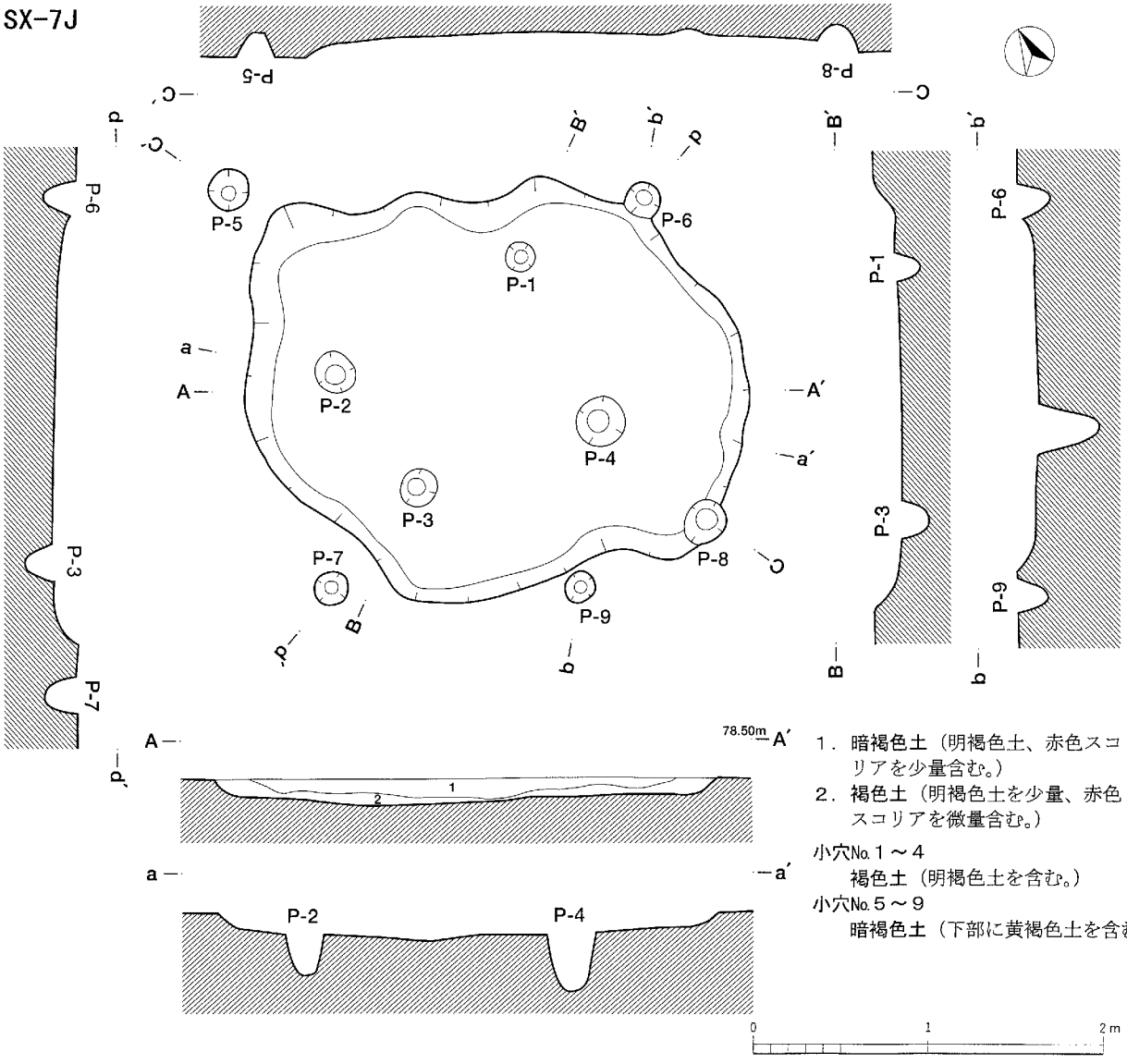
SI-2J

（遺物分布図）



第165図　住居跡（SI－２Ｊ）遺物分布図

SX-7J



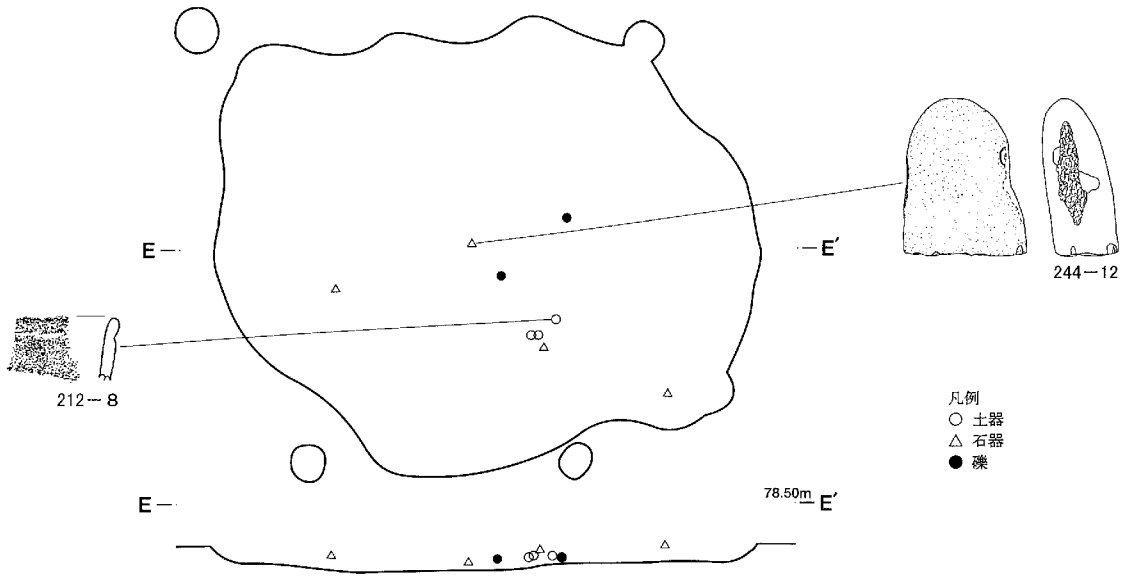
1．暗褐色土（明褐色土、赤色スコリアを少量含む。）
2．褐色土（明褐色土を少量、赤色スコリアを微量含む。）

小穴No.１～４
褐色土（明褐色土を含む。）

小穴No.５～９
暗褐色土（下部に黄褐色土を含む。）

0　1　2m

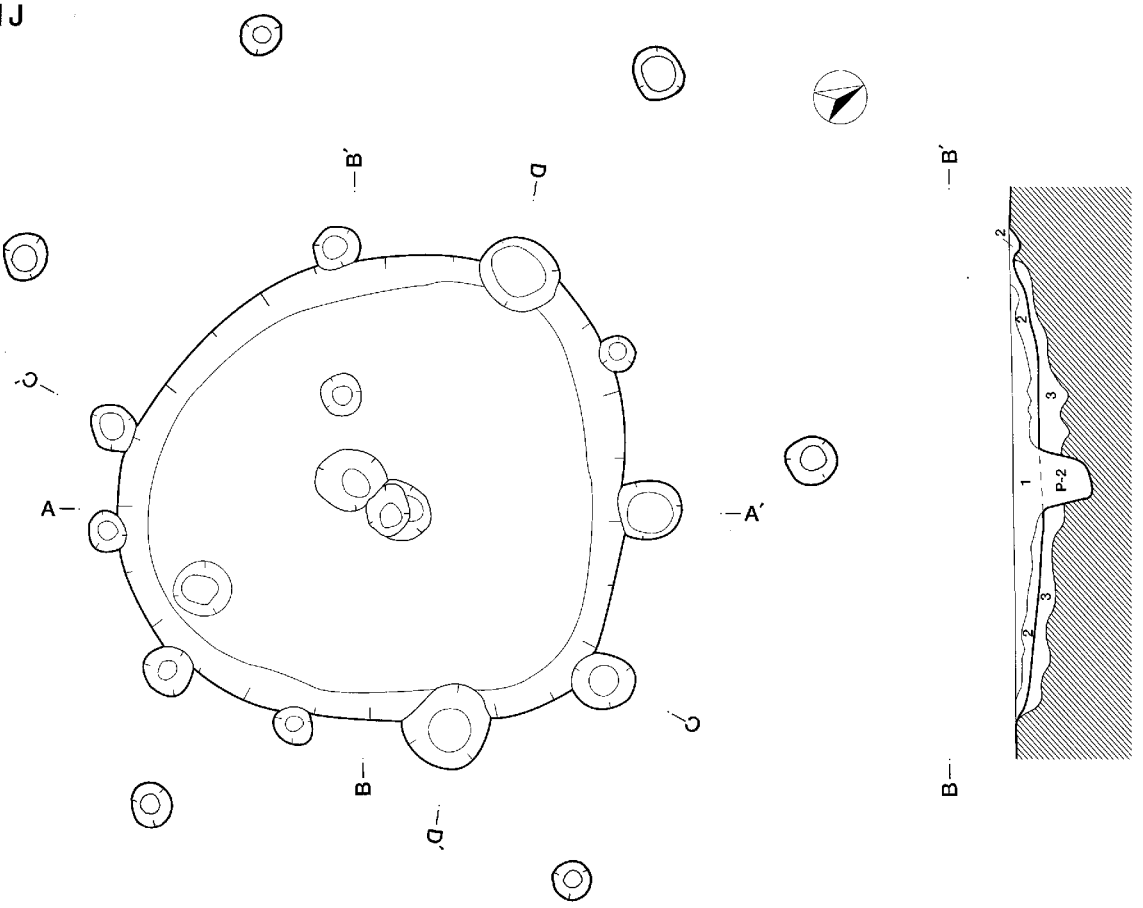
（遺物分布図）



※小穴一覧は巻末添付のCD-ROMに収録

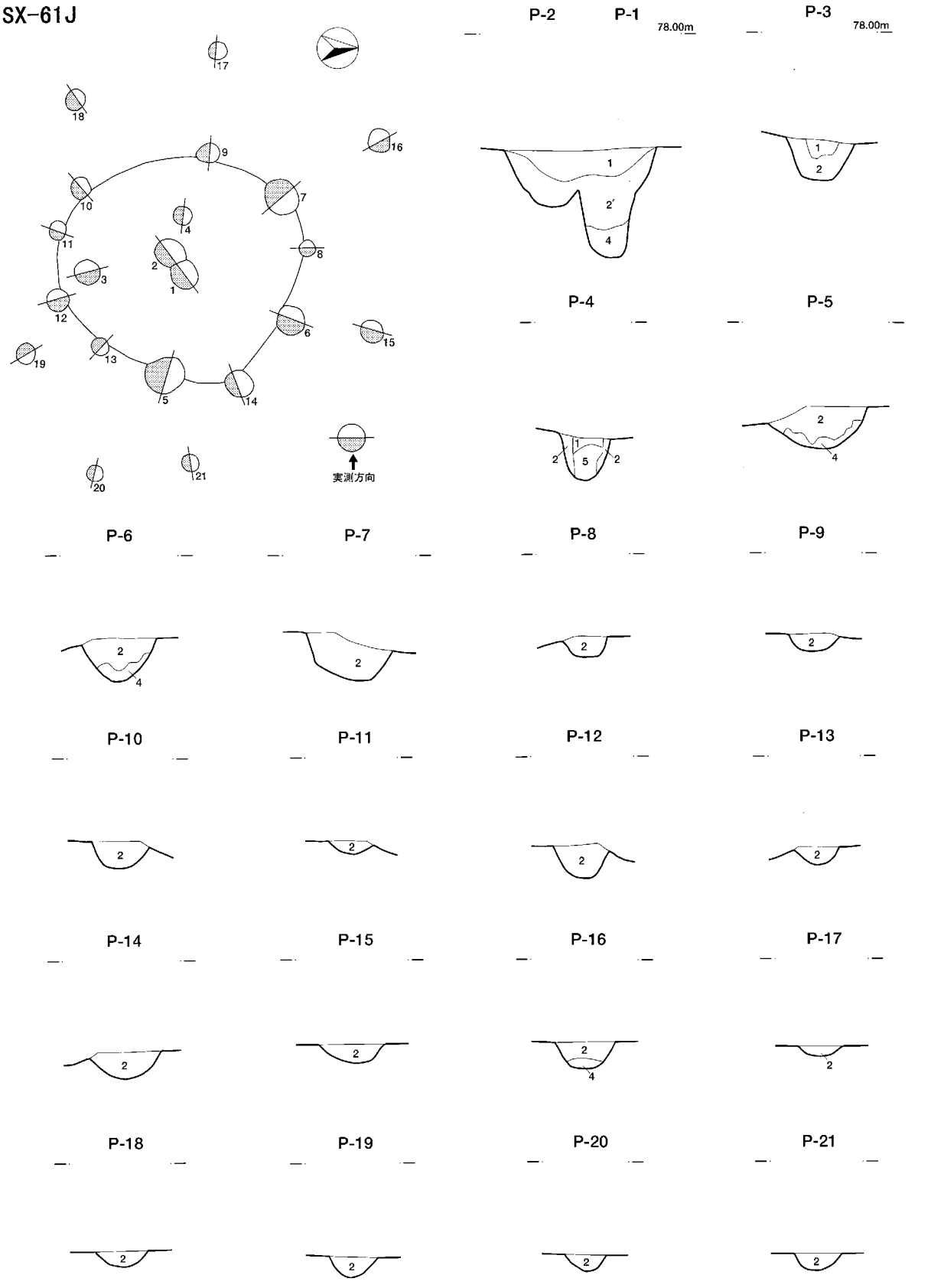
第166図　竪穴状遺構（SX－７Ｊ）実測図／遺物分布図

SX-61J



1．暗褐色土（ローム粒を少量含む。）
2．褐色土（明褐色土を少量、暗褐色土を微量含む。）
3．明褐色土（暗褐色土を少量含む。）
4．黄褐色土（暗褐色土を少量含む。）

第167図　竪穴状遺構（SX－61J）実測図（1）

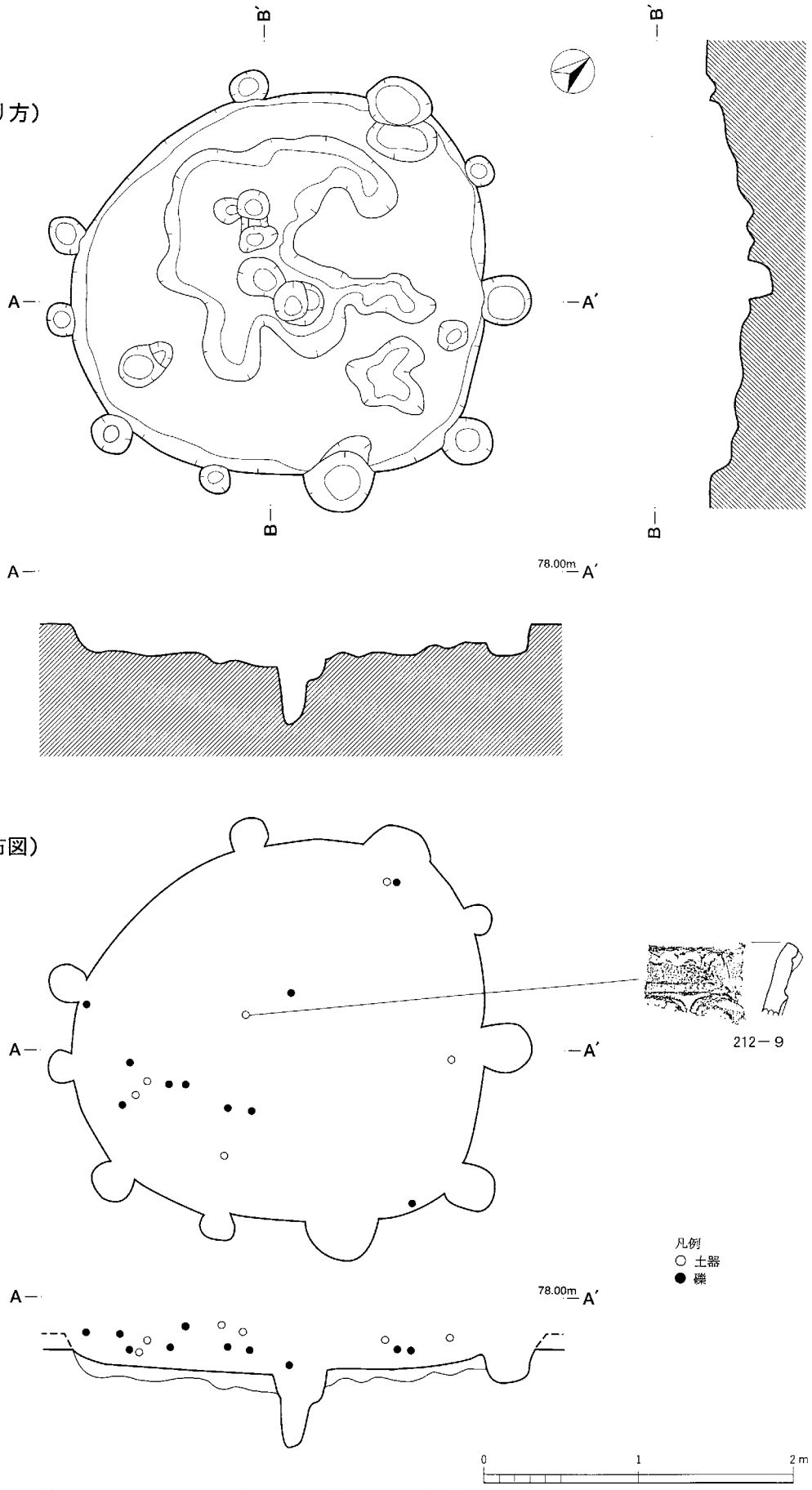


1．暗褐色土（ローム粒を少量含む。）
2．褐色土（明褐色土を少量、暗褐色土を微量含む。）
2′ 2．に準ずる。
4．黄褐色土（暗褐色土を少量含む。）
5．暗黄褐色土

※小穴一覧は巻末添付のCD-ROMに収録

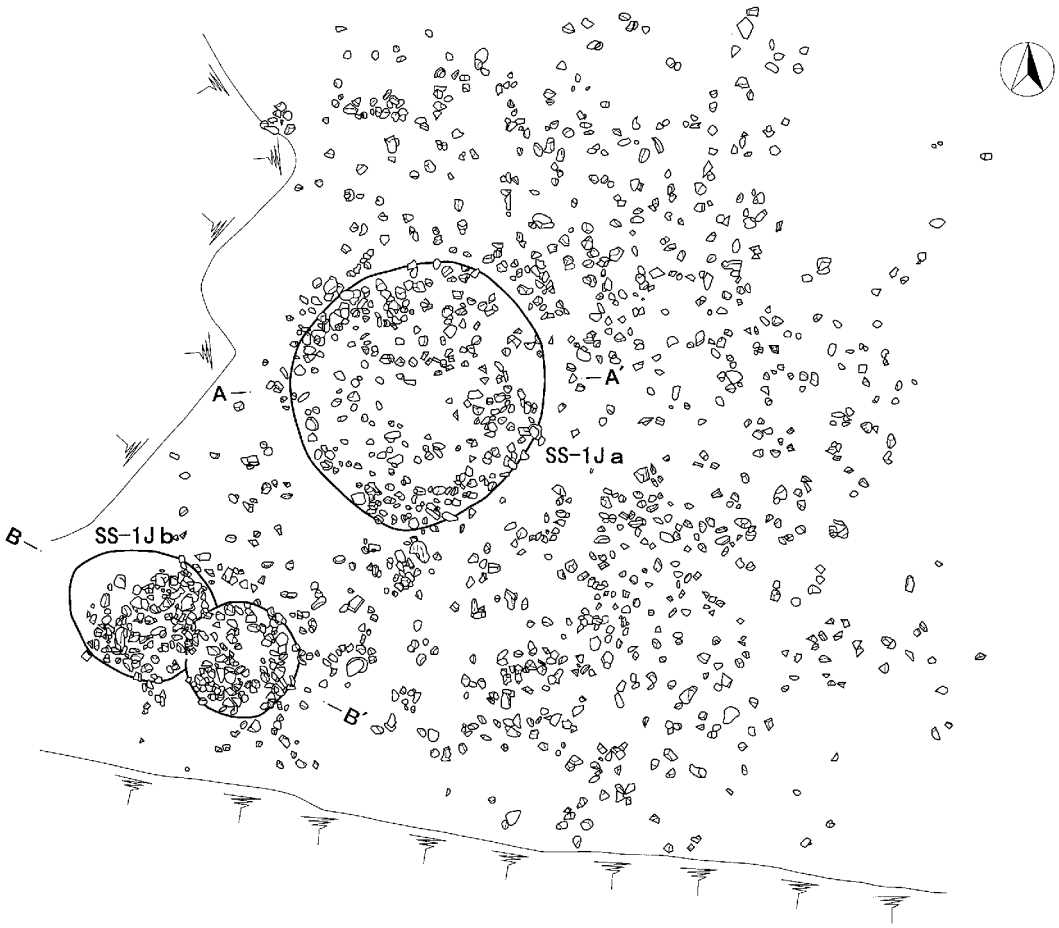
第168図　竪穴状遺構（SX－61J）実測図（2）

SX-61J

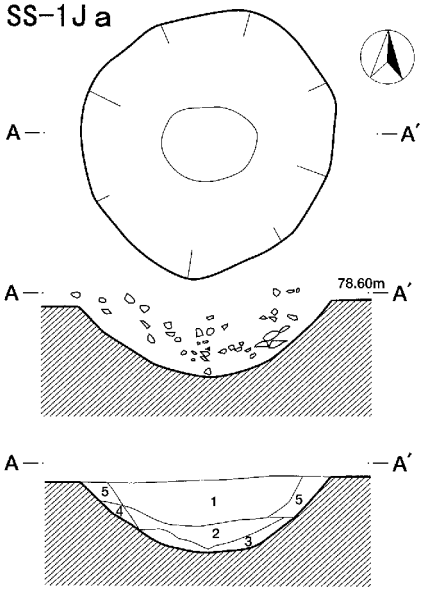


第169図　竪穴状遺構（SX－61J）実測図（3）／遺物分布図

SS-1J

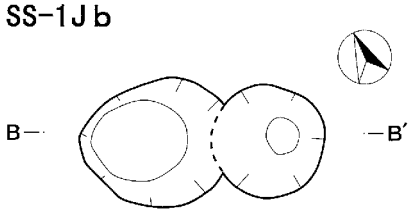


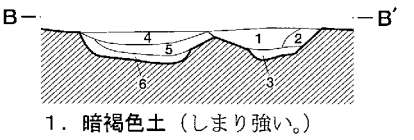
SS-1Ja



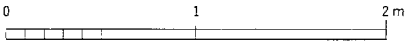
1．暗褐色土（炭化粒子・赤色スコリアを少量含む。しまり強い。）
2．暗褐色土（炭化粒子・焼土粒子を多量含む。色調黒味をおびる。しまり弱くボソボソしている。）
3．黄褐色土（炭化粒子・焼土粒子を少量、ローム粒子を多量含む。）
4．明茶褐色土（ローム粒子を少量含む。）
5．茶褐色土（赤色スコリアを少量含む。しまり強い。）

SS-1Jb

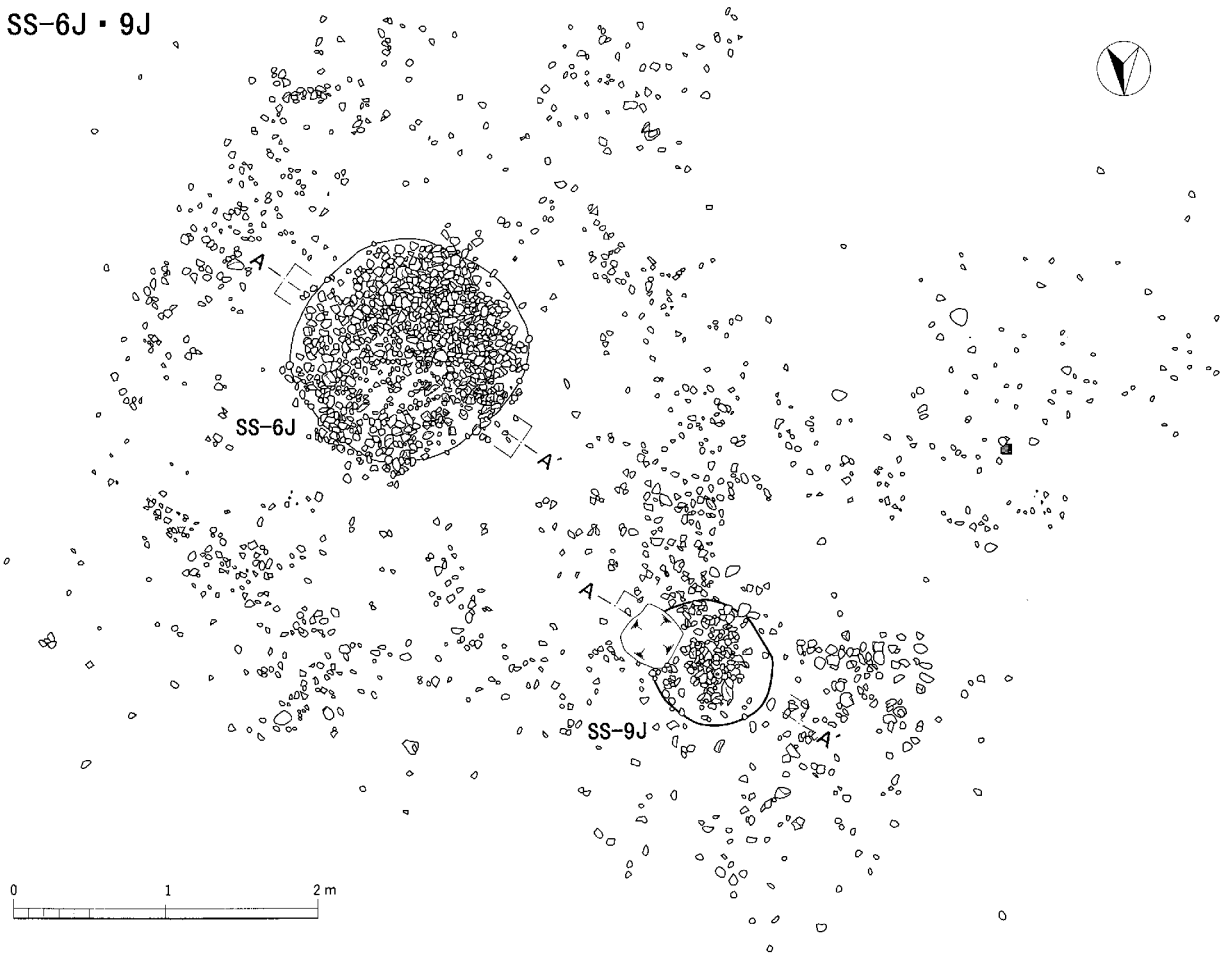


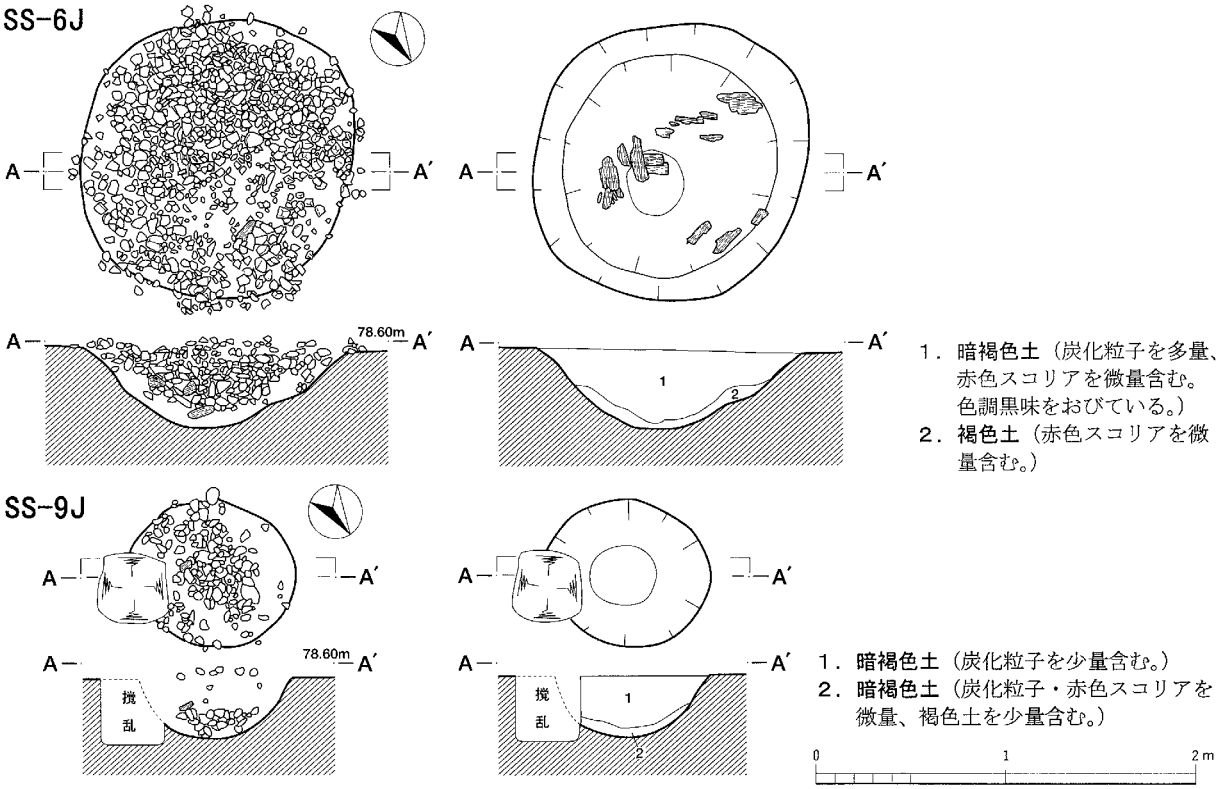


1．暗褐色土（しまり強い。）
2．褐色土（赤色スコリアを少量、炭化粒子を微量含む。）
3．明茶褐色土（赤色スコリア・炭化粒子を微量、ローム粒子を少量含む。）
4．暗褐色土
5．暗褐色土（ローム粒子を多く含む。）
6．黄褐色土



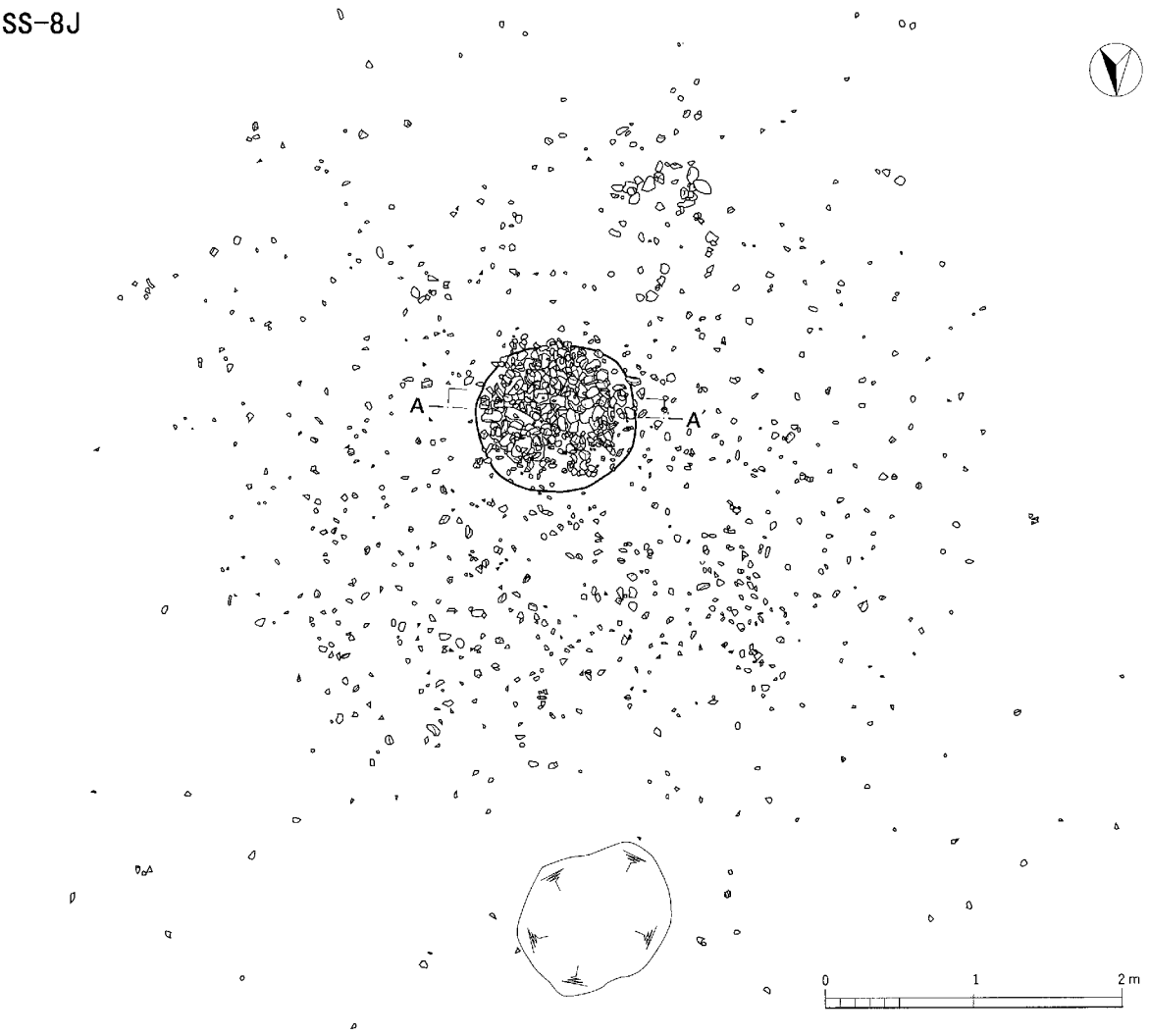
第170図　集石（SS－１J）実測図

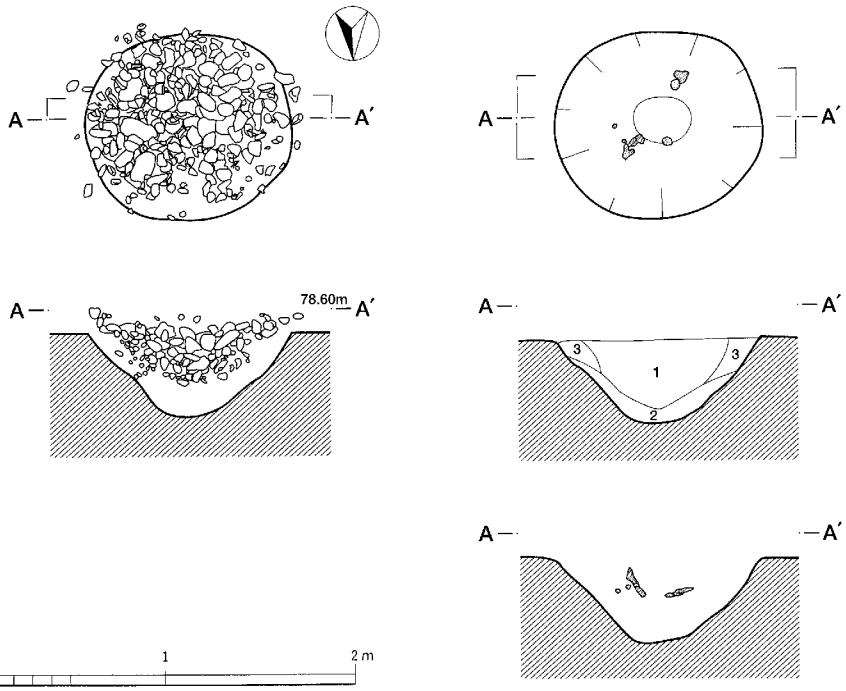




第171図　集石（SS－６J・９J）実測図

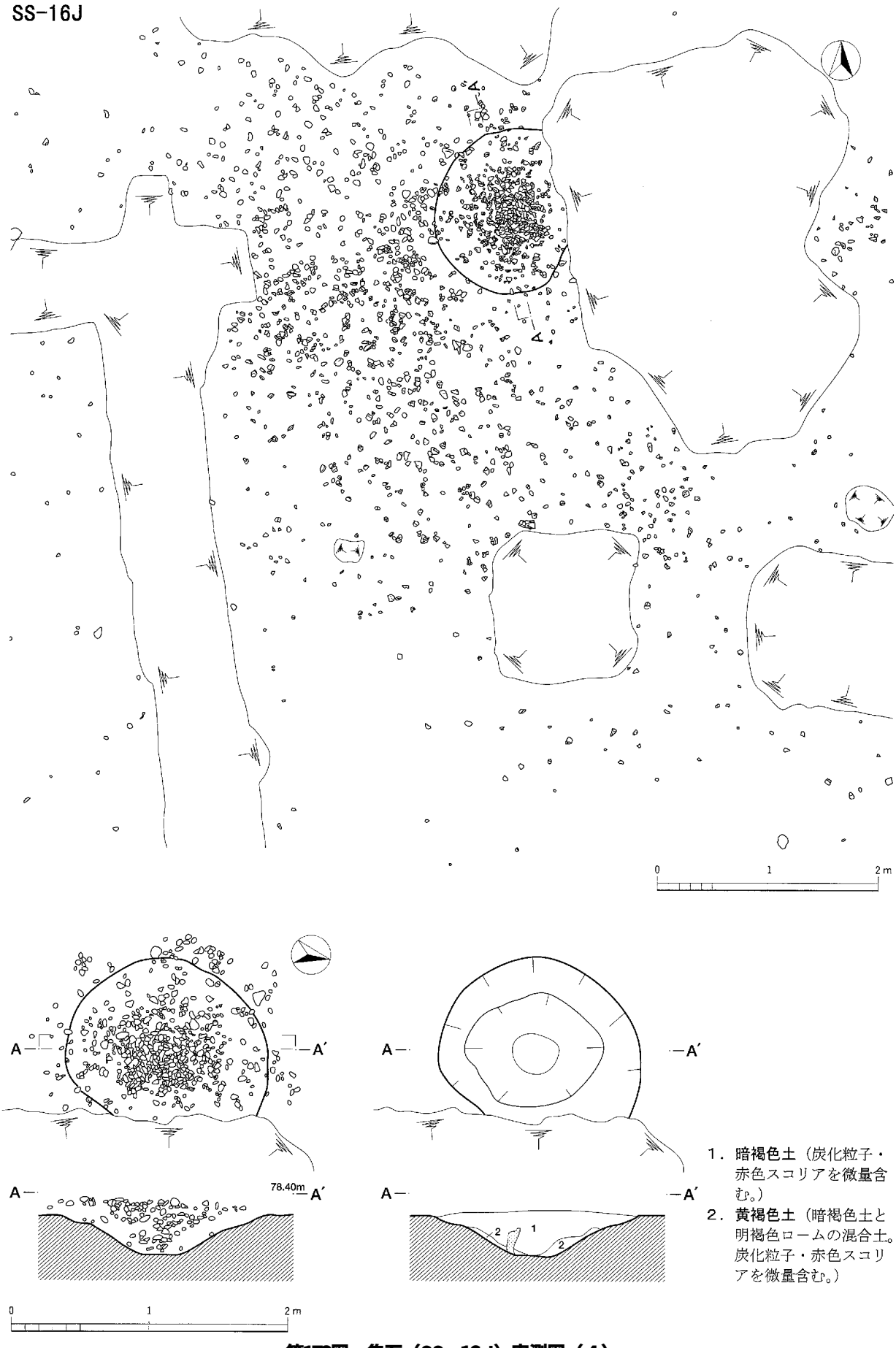
SS-8J





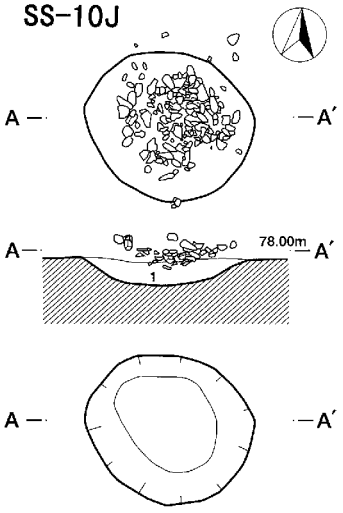
1．暗褐色土（炭化材・炭化粒子を少量、焼土粒子を微量含む。色調黒味をおびている。）
2．暗黄褐色土（暗褐色土とロームの混合土。炭化粒子・焼土粒子を微量含む。）
3．暗茶褐色土（炭化粒子・焼土粒子を微量含む。）

第172図　集石（SS－8 J）実測図



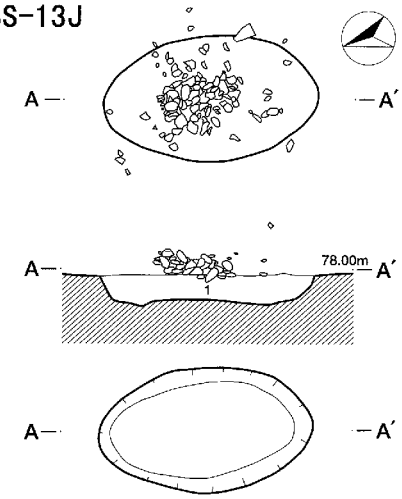
第173図　集石（SS－16 J）実測図（4）

SS-10J



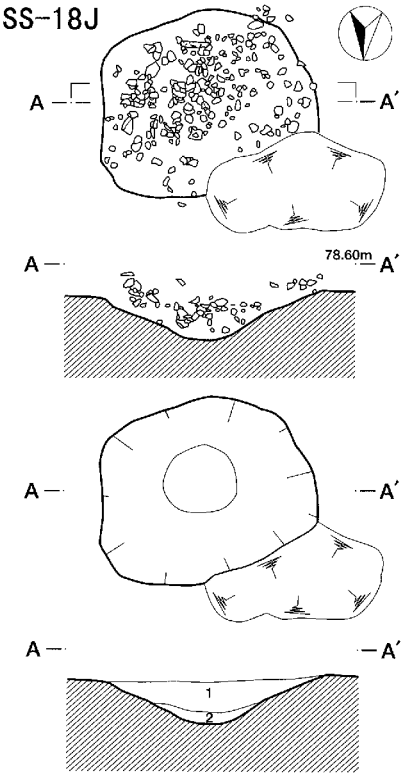
1．**暗褐色土**（褐色土・ローム粒子を少量、赤色スコリア・炭化粒子を微量含む。）

SS-13J



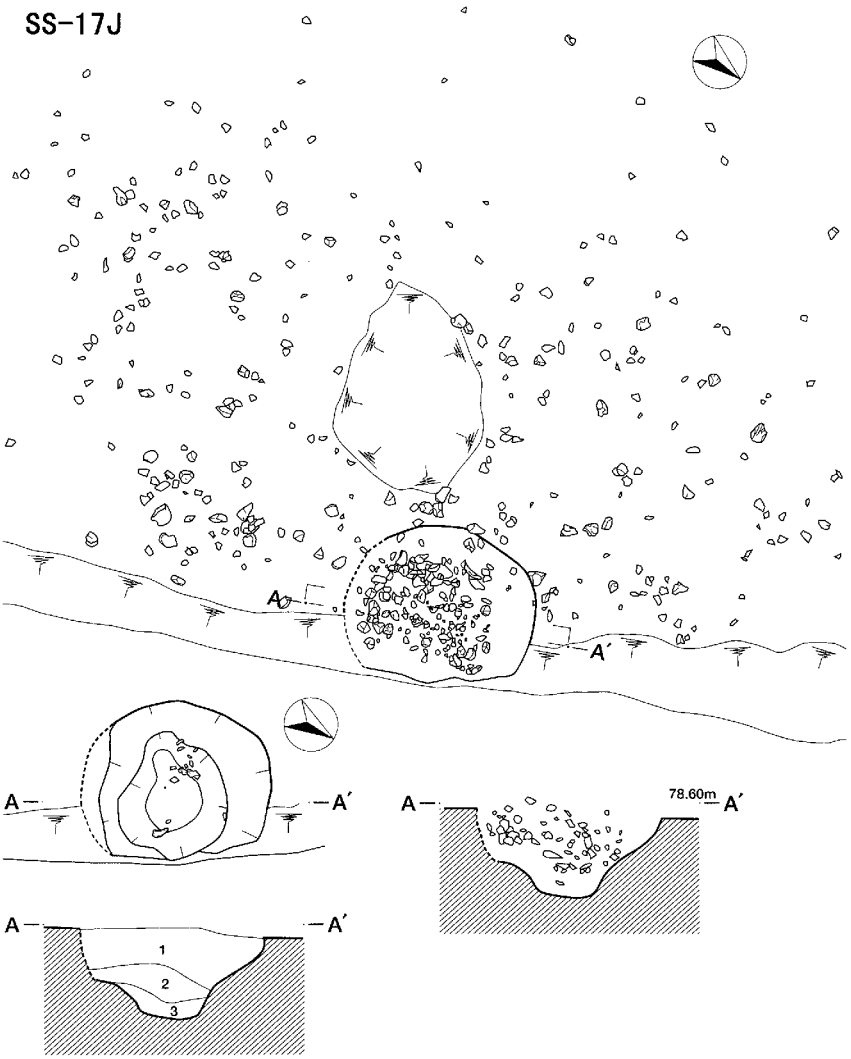
1．**暗褐色土**（褐色土・ローム粒子を少量、赤色スコリア・炭化粒子を微量含む。）

SS-18J



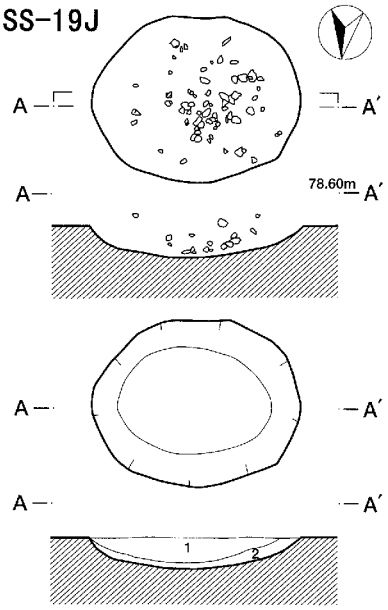
1．**暗褐色土**（炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。中央部分色調やや暗い。）
2．**黄褐色土**（明褐色ロームを少量、炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。）

SS-17J

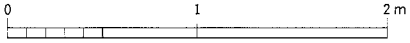


1．**暗褐色土**（炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。）
2．**暗褐色土**（炭化物を少量、赤色スコリアを微量含む。色調黒味をおびる。）
3．**暗黄褐色土**（暗褐色土・ローム粒子を少量、炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。）

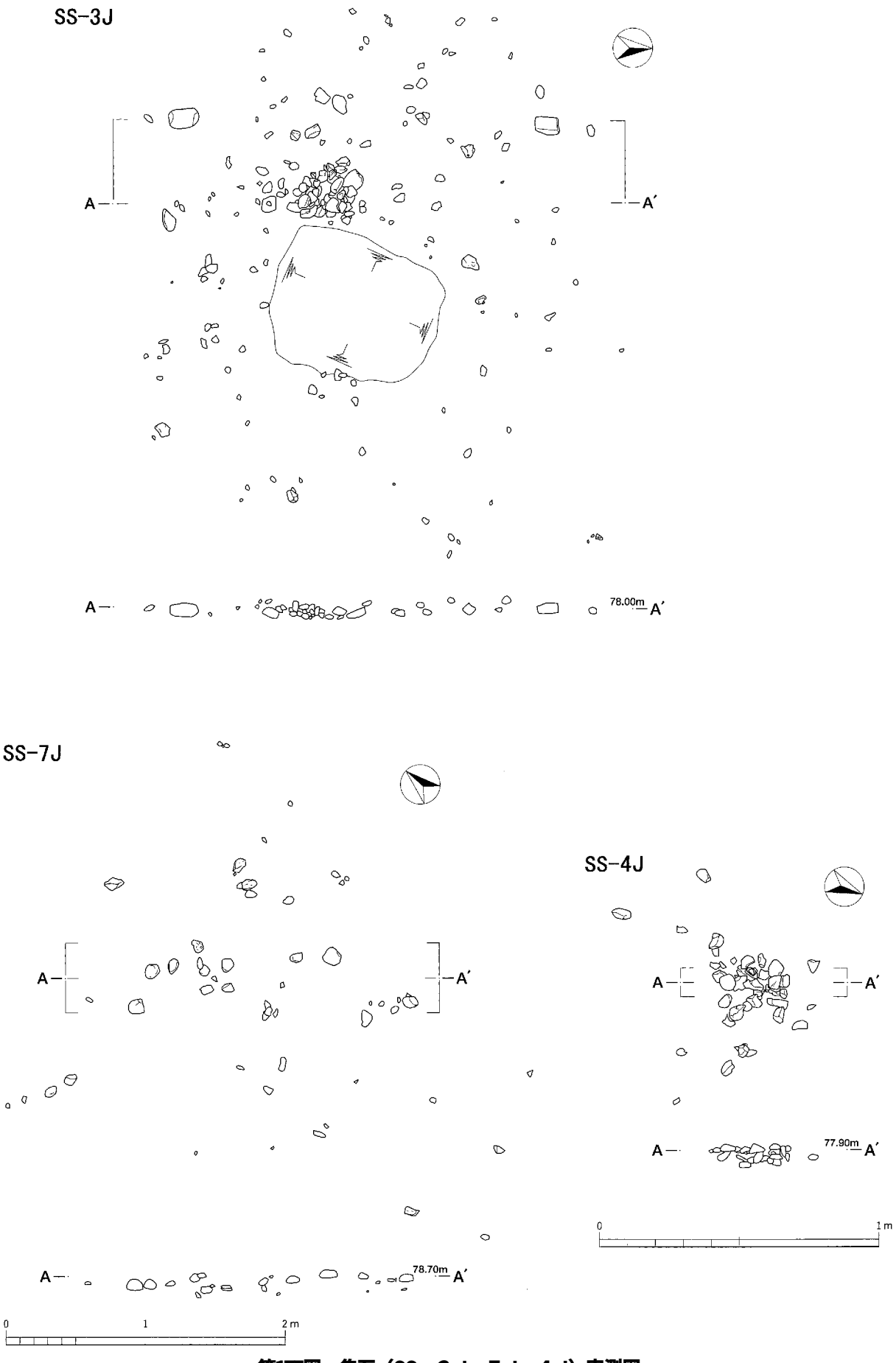
SS-19J



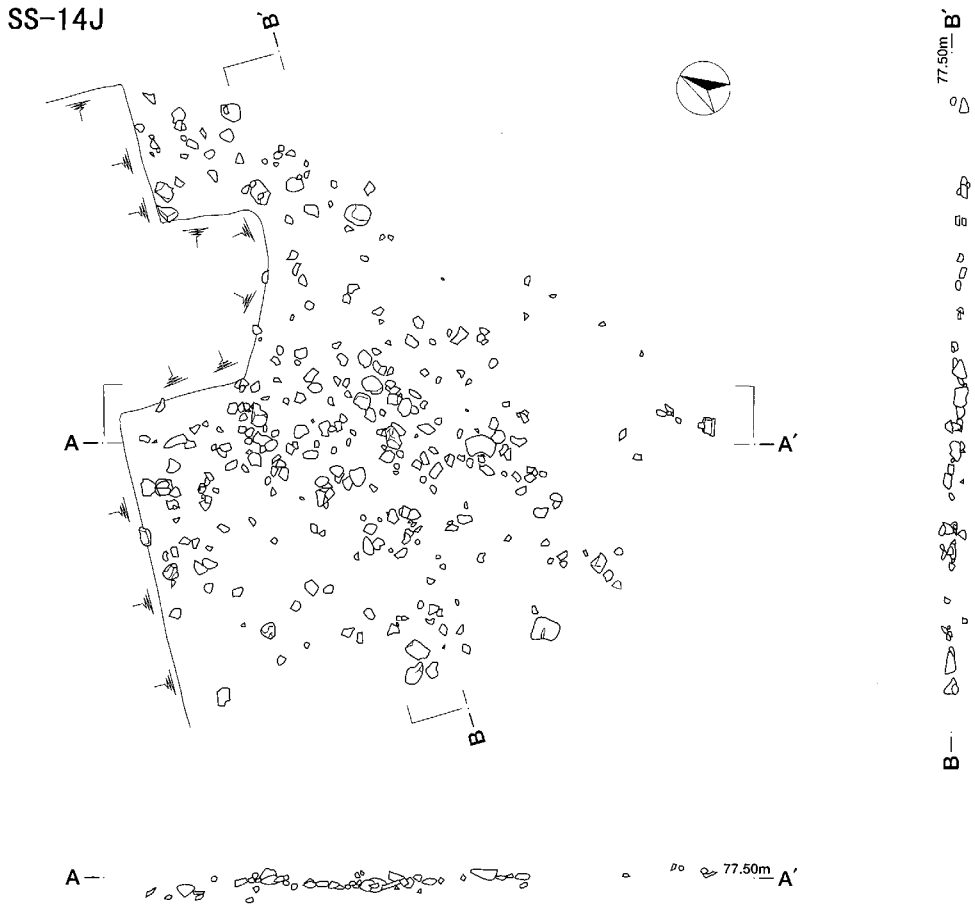
1．**暗褐色土**（炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。色調やや明るい。）
2．**褐色土**（暗褐色土・ローム ブロックを少量、炭化粒子・赤色スコリアを微量含む。）



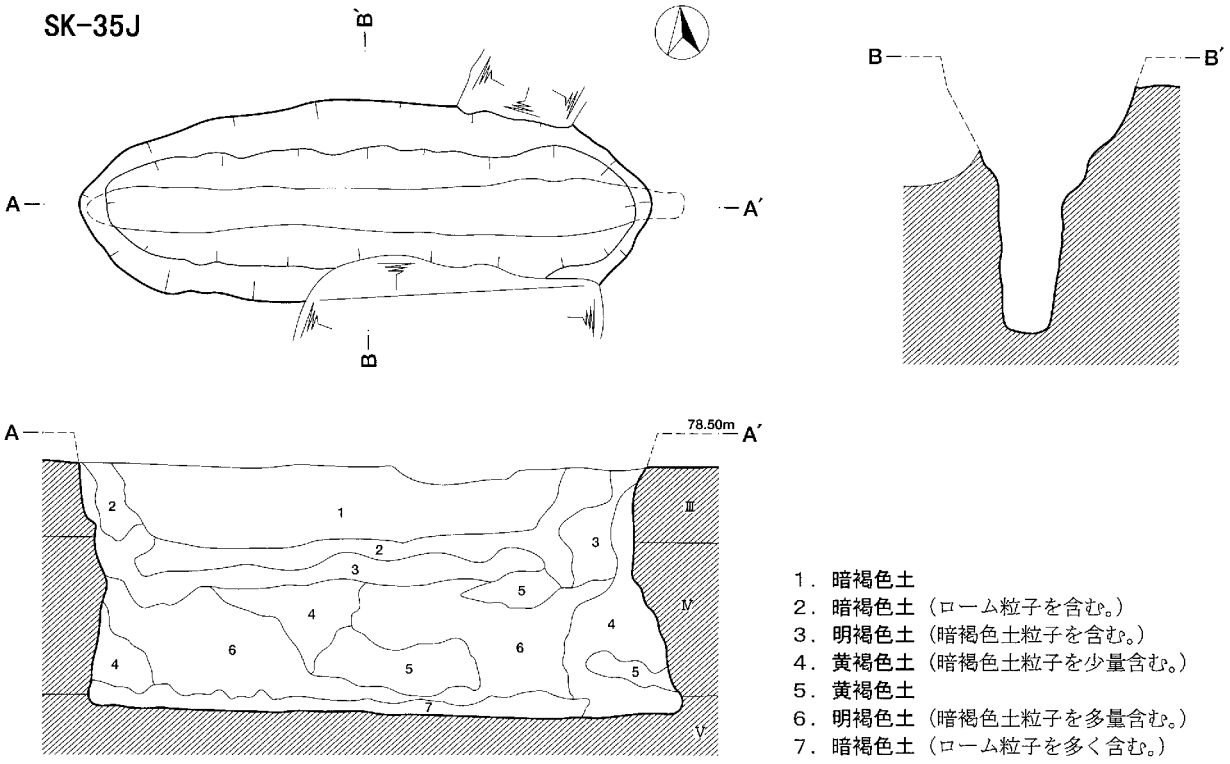
第174図　集石（SS－10J・13J・18J・17J・19J）実測図

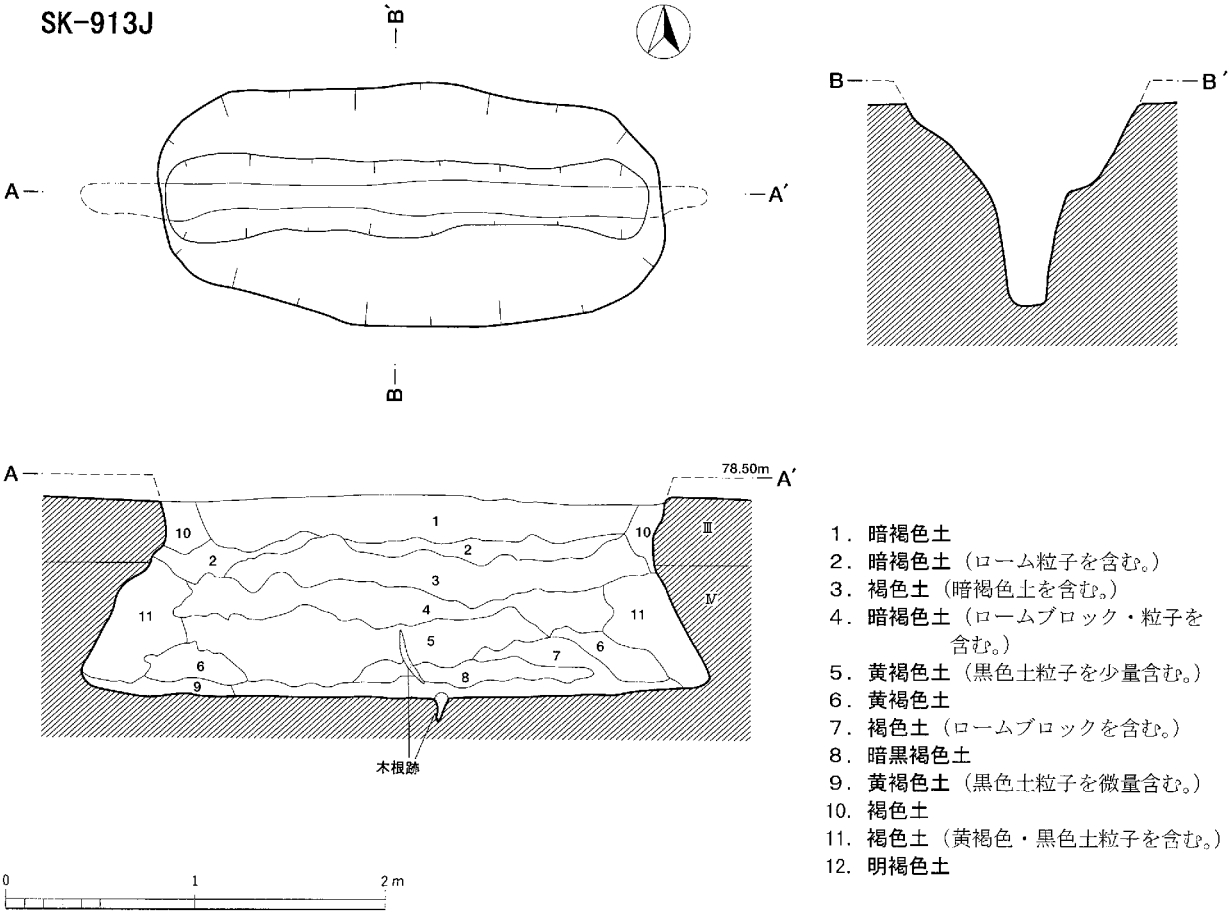


第175図　集石（SS－３Ｊ・７Ｊ・４Ｊ）実測図

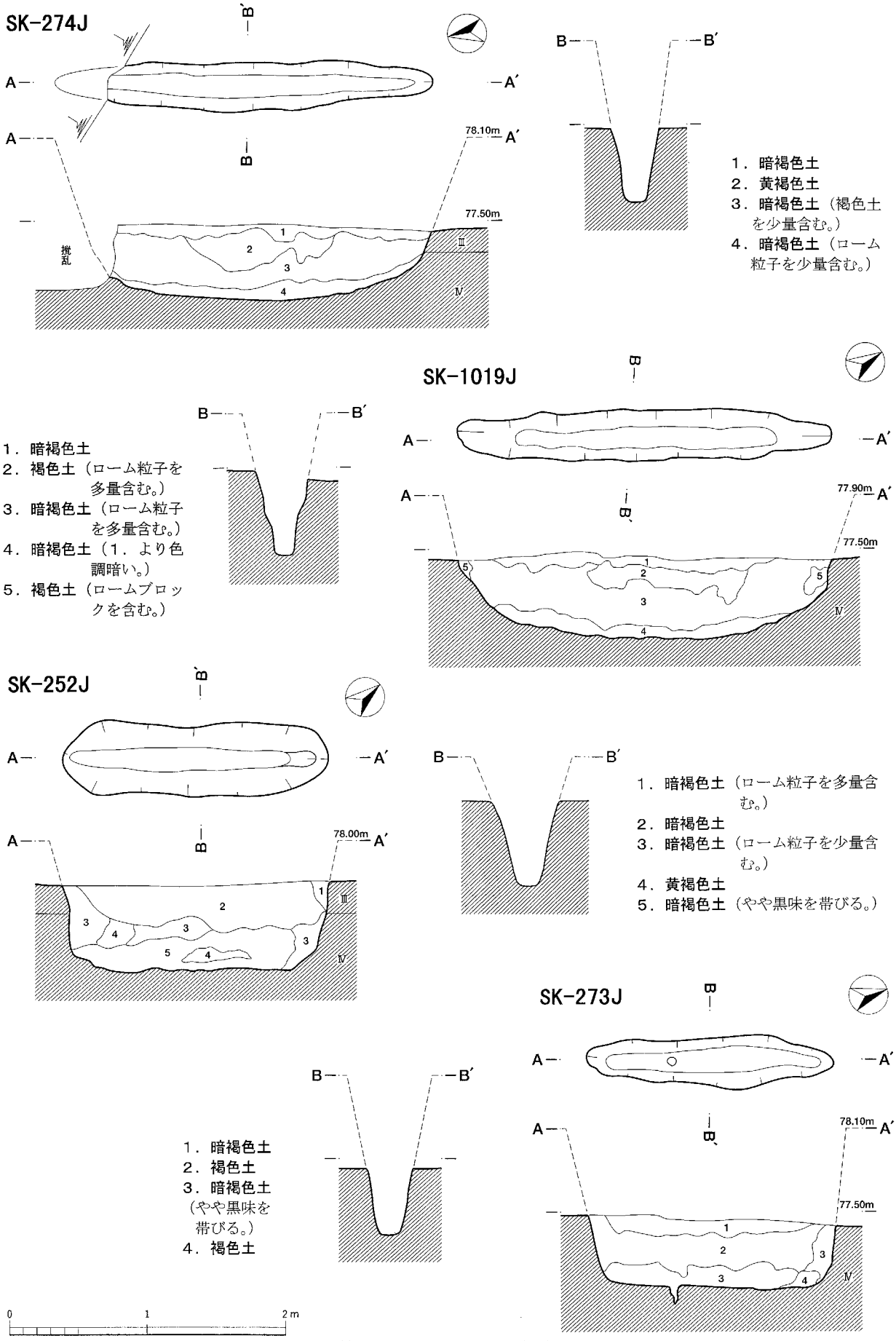


第176図　集石（SS−14J・12J・15J）実測図

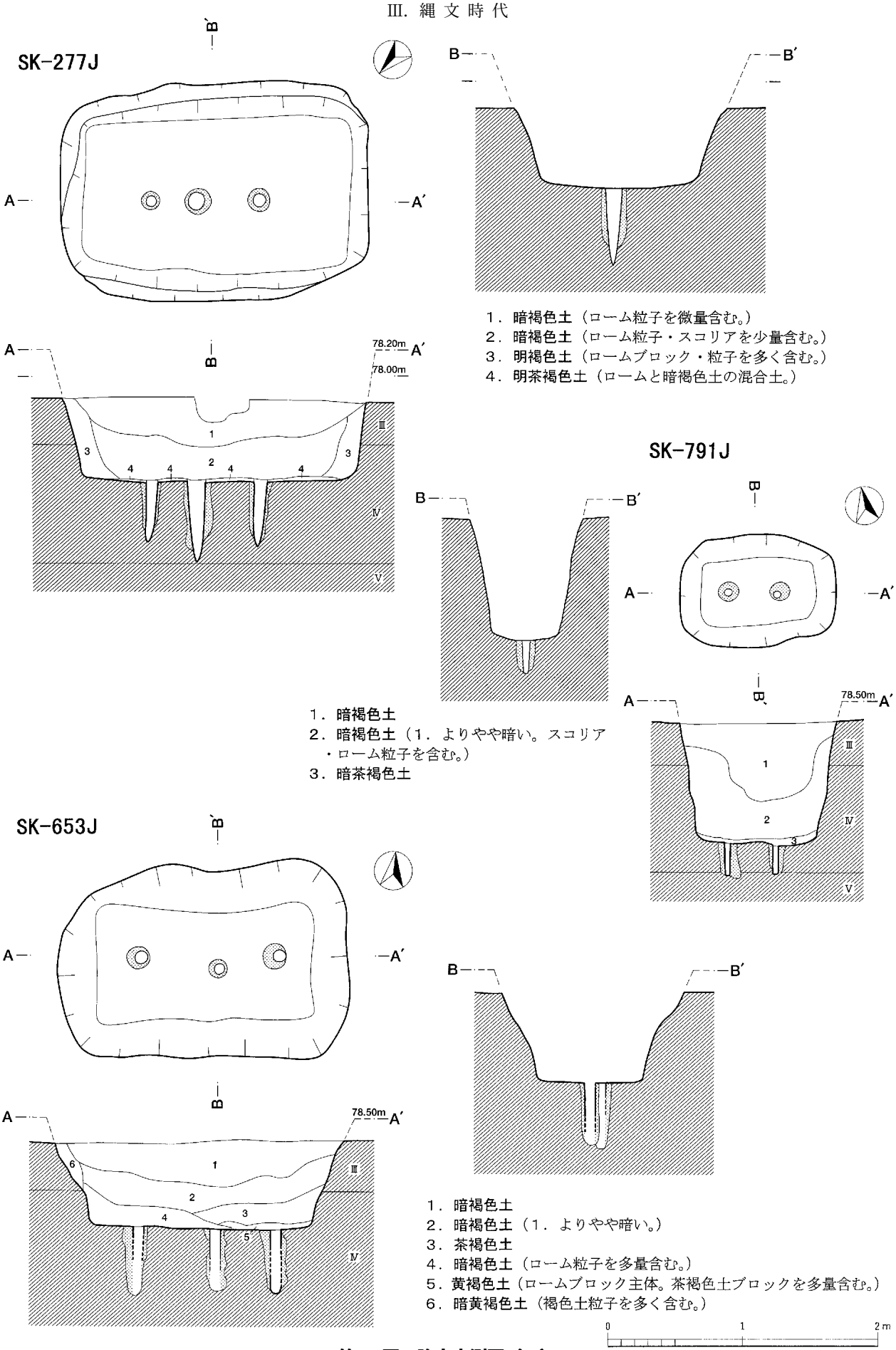




第177図　陥穴実測図（1）

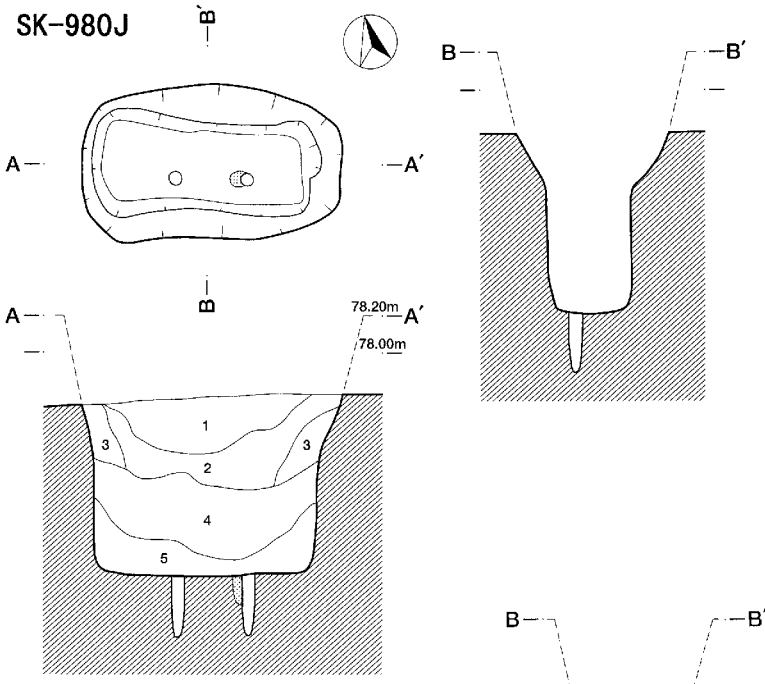


第178図　陥穴実測図（2）



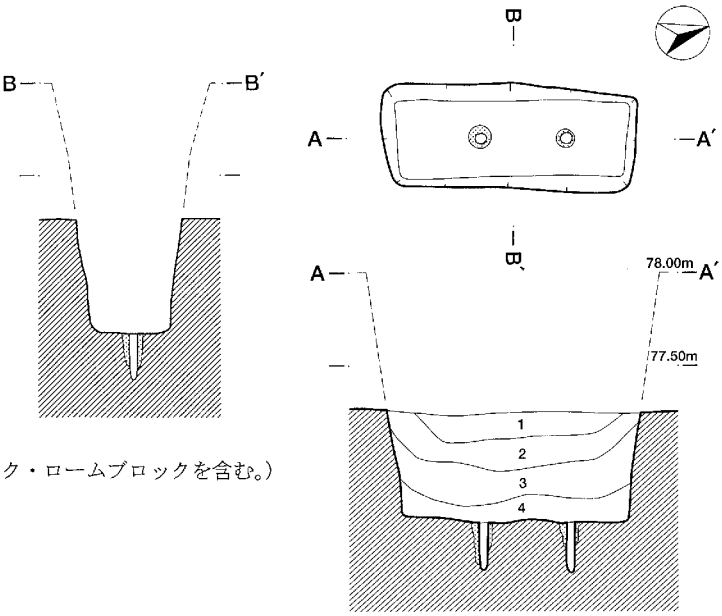
第179図　陥穴実測図（3）

SK-980J



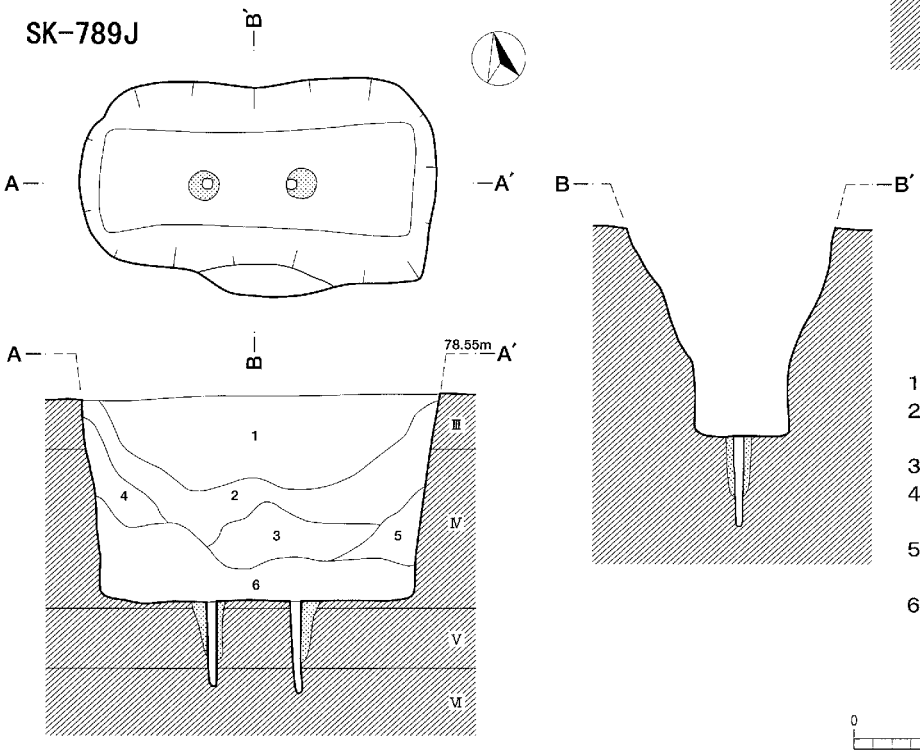
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや明るい。）
3．茶褐色土
4．暗茶褐色土
5．明茶褐色土（ロームブロックを含む。）

SK-1024J

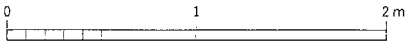


1．暗褐色土
2．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．茶褐色土
4．暗茶褐色土（褐色土ブロック・ロームブロックを含む。）

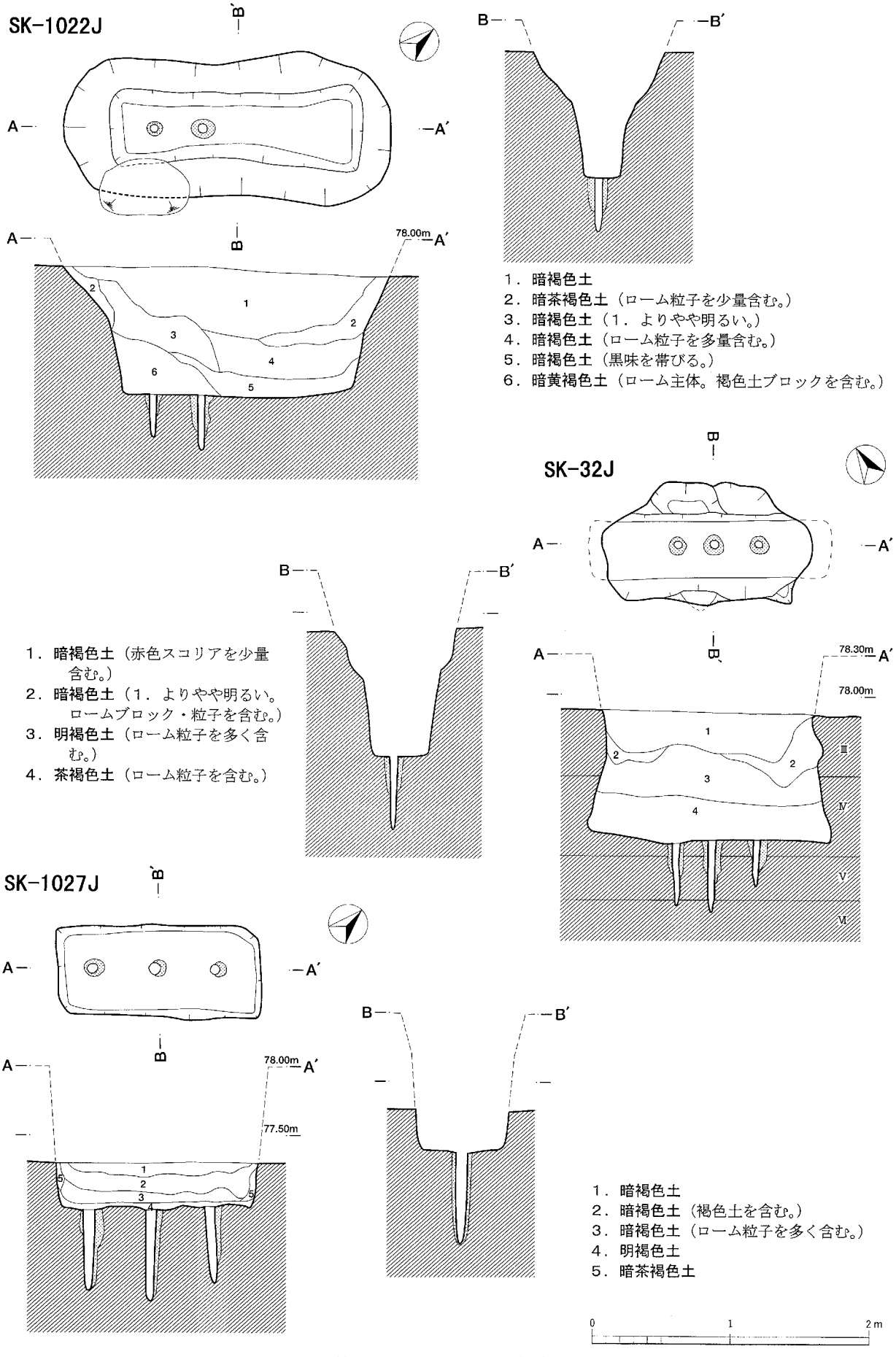
SK-789J



1．暗褐色土
2．暗茶褐色土（スコリアを多く含む。）
3．暗褐色土
4．暗黄褐色土（ローム粒子を多量含む。）
5．茶褐色土（ロームブロック・粒子を多く含む。）
6．暗褐色土（黒味を帯びる。）

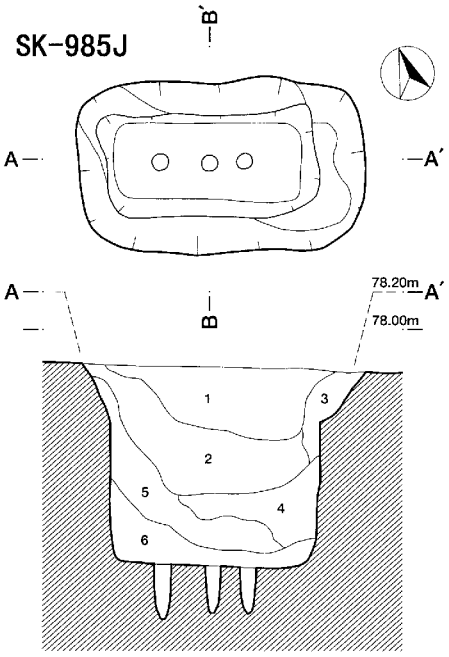


第180図　陥穴実測図（4）



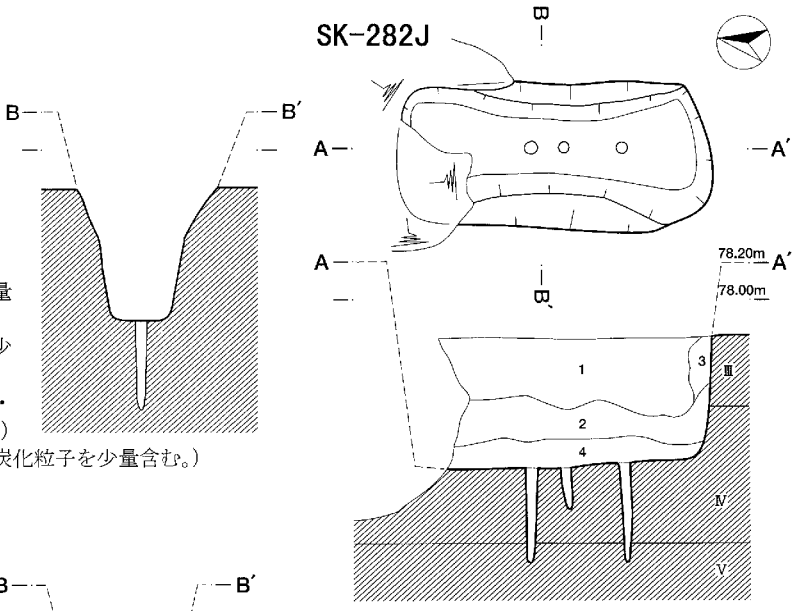
第181図　陥穴実測図（5）

SK-985J



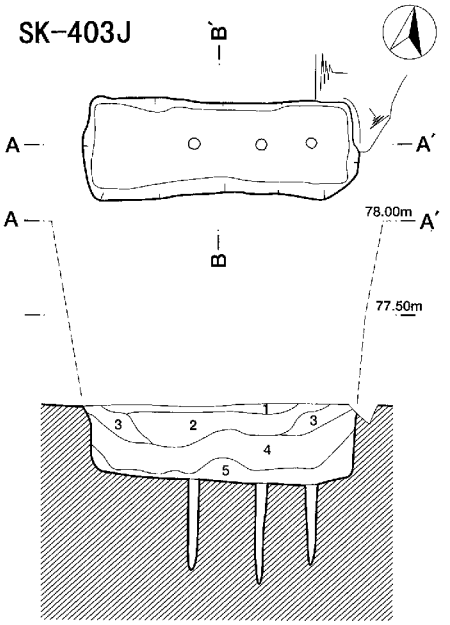
1．暗褐色土
2．暗褐色土（スコリアを多量含む。）
3．明茶褐色土（ローム粒子を多く含む。）
4．暗茶褐色土（ローム粒子を多量含む。）
5．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
6．暗褐色土（黒味を帯びる。）

SK-282J



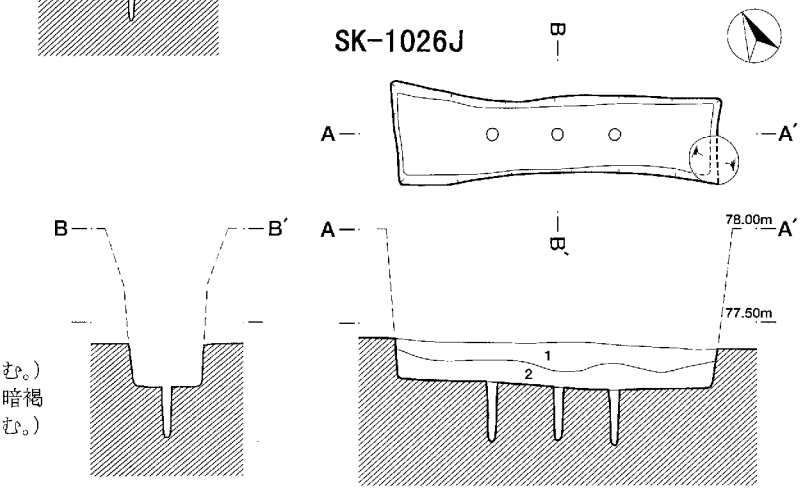
1．暗褐色土（スコリアを多量含む。）
2．明褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．褐色土（ロームブロック・粒子を多量含む。）
4．暗褐色土（ローム粒子・炭化粒子を少量含む。）

SK-403J



1．暗褐色土
2．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．褐色土（ローム粒子を多く含む。）
4．暗褐色土（2．よりやや明るい。）
5．暗茶褐色土（ローム粒子を多く含む。）

SK-1026J

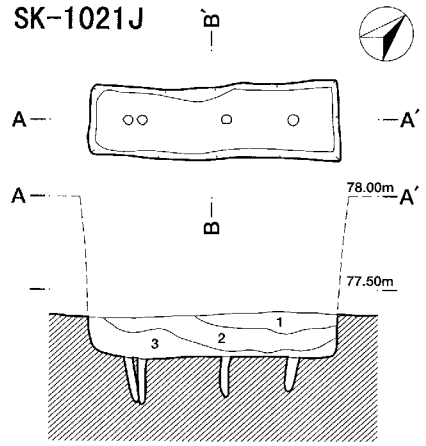


1．暗褐色土（ローム粒子を含む。）
2．暗茶褐色土（ローム主体。暗褐色土粒子・ブロックを含む。）

0　1　2m

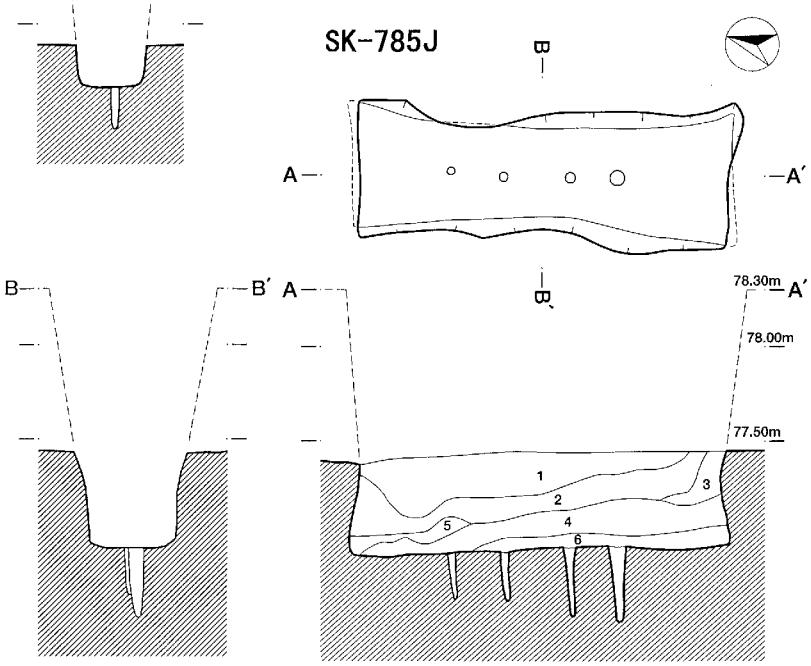
第182図　陥穴実測図（6）

SK-1021J



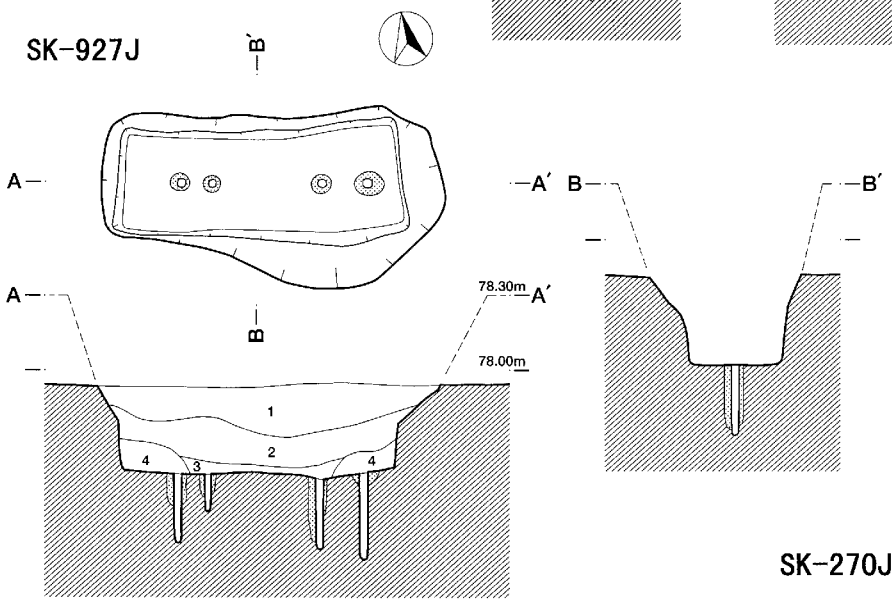
1．明褐色土
2．暗褐色土
3．明茶褐色土
（ローム ブロックを含む。）

SK-785J



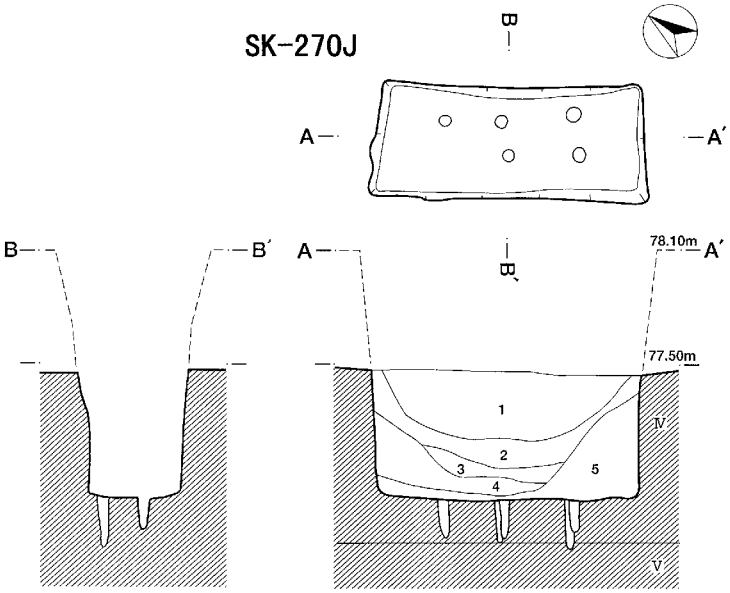
1．暗褐色土（スコリア・ローム粒子を微量含む。）
2．暗褐色土（1．より明るい。ローム粒子を少量含む。）
3．茶褐色土（ローム粒子を少量含む。）
4．黄褐色土（ローム主体。褐色土粒子を少量含む。）
5．暗茶褐色土（ローム粒子を少量含む。）
6．暗褐色土（黒味を帯びる。ロームブロック・粒子を少量含む。）

SK-927J



1．暗褐色土
2．茶褐色土
3．暗茶褐色土（ローム粒子を少量含む。）
4．明茶褐色土（ローム ブロックを含む。）

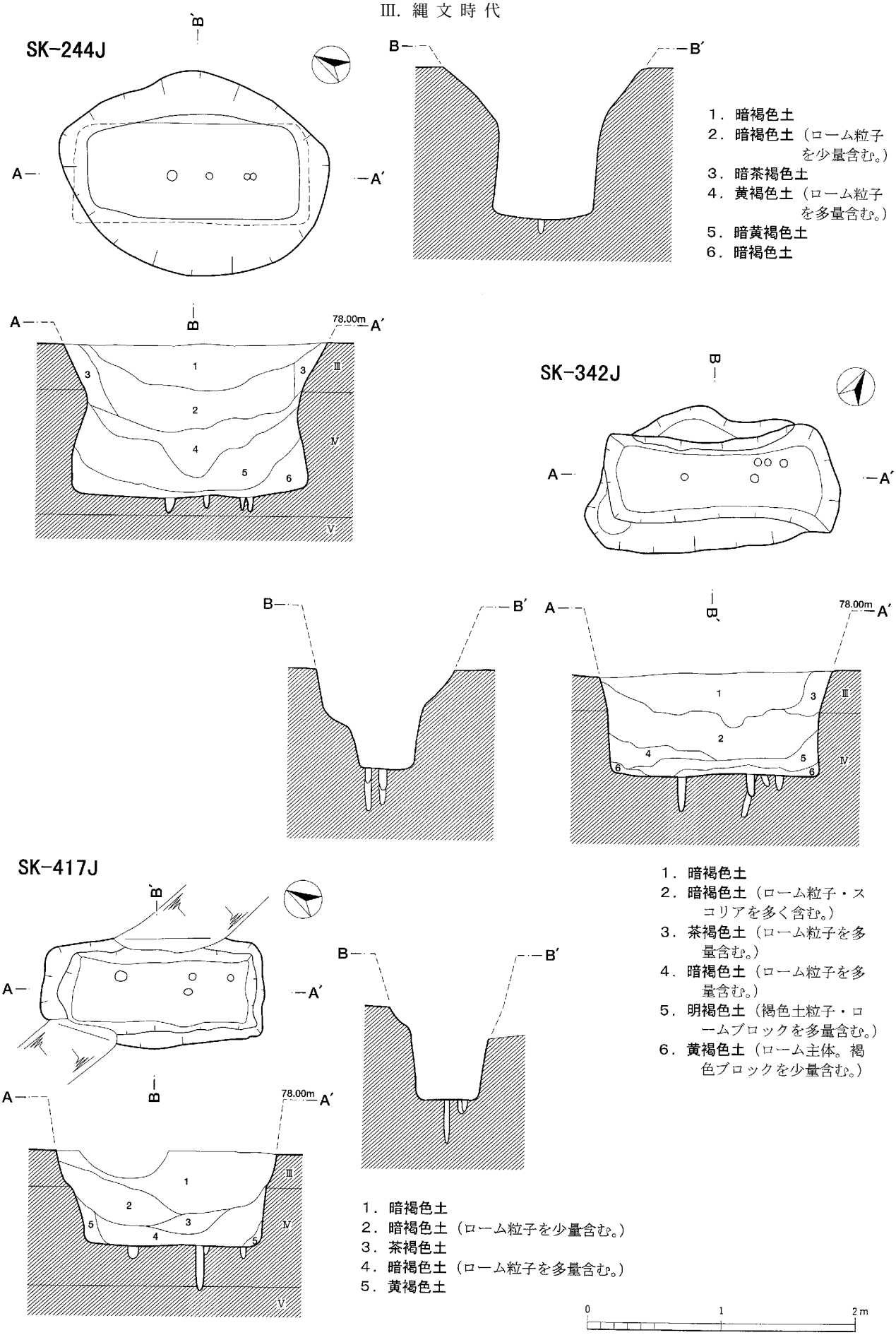
SK-270J



1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや明るい。ローム粒子を少量含む。）
3．茶褐色土（ロームブロック・粒子を少量含む。）
4．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
5．暗茶褐色土（ローム粒子を少量、褐色土ブロックを含む。）

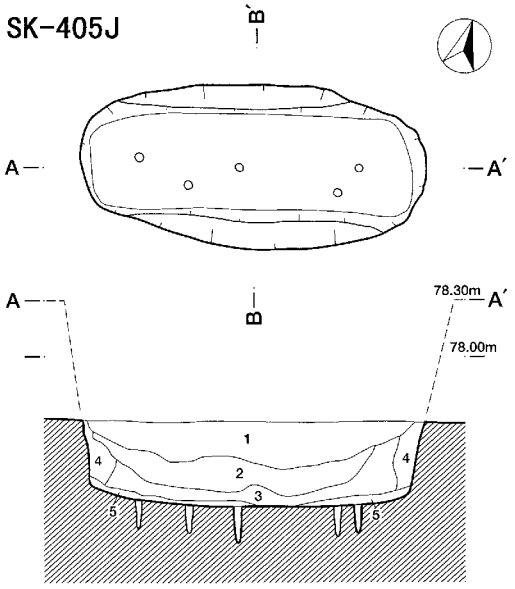
0　1　2m

第183図　陥穴実測図（7）



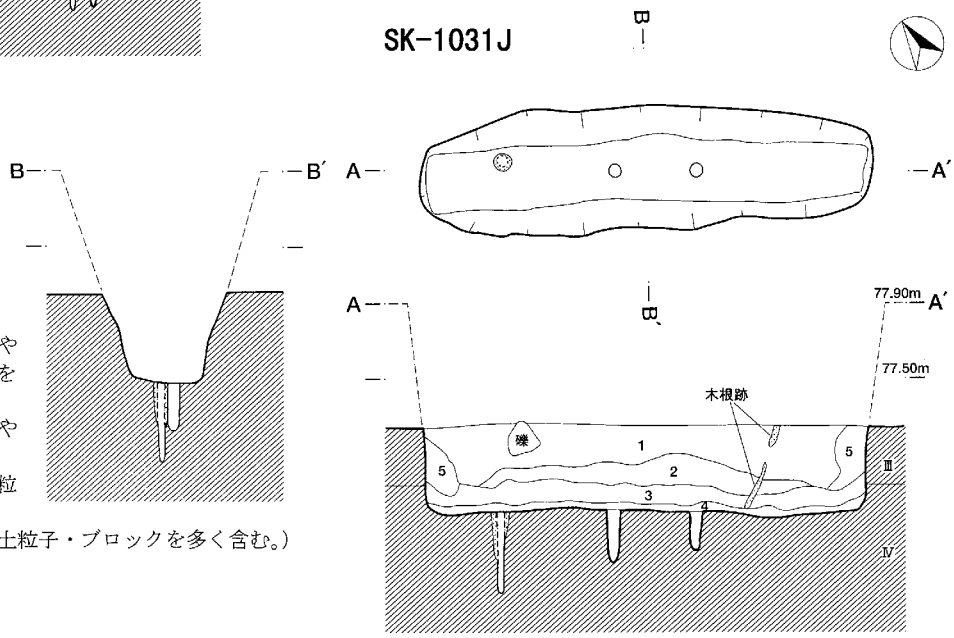
第184図　陥穴実測図（8）

SK-405J



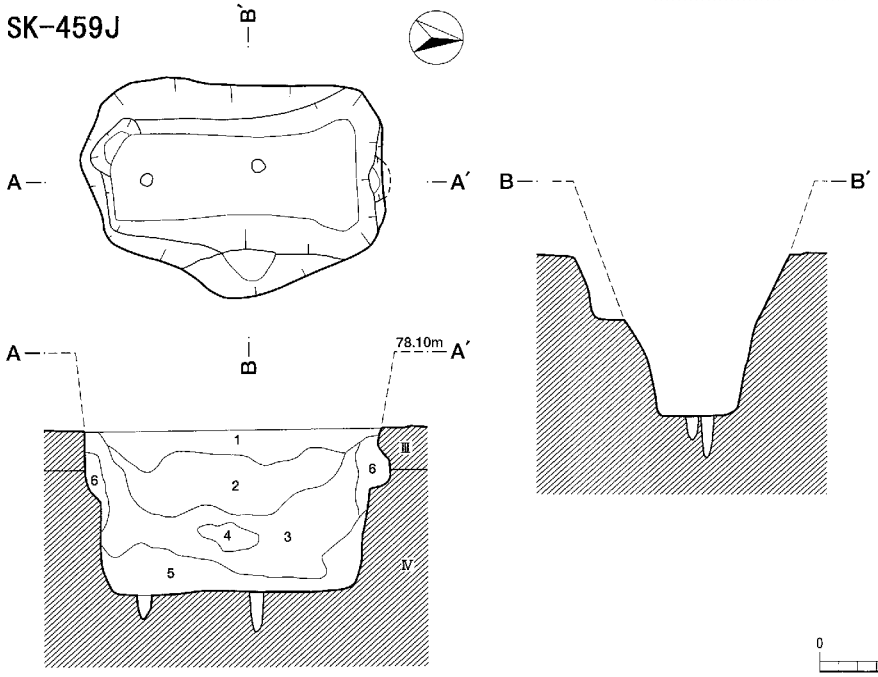
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや明るい。）
3．暗褐色土（やや黒味を帯びる。）
4．褐色土（ロームブロック・粒子を多く含む。）
5．暗褐色土（黒味を帯びる。粘性が強い。）

SK-1031J

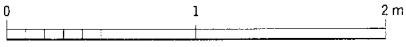


1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや暗い。褐色土粒子を多量含む。）
3．暗褐色土（2．よりやや明るい。）
4．茶褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
5．暗茶褐色土（明褐色土粒子・ブロックを多く含む。）

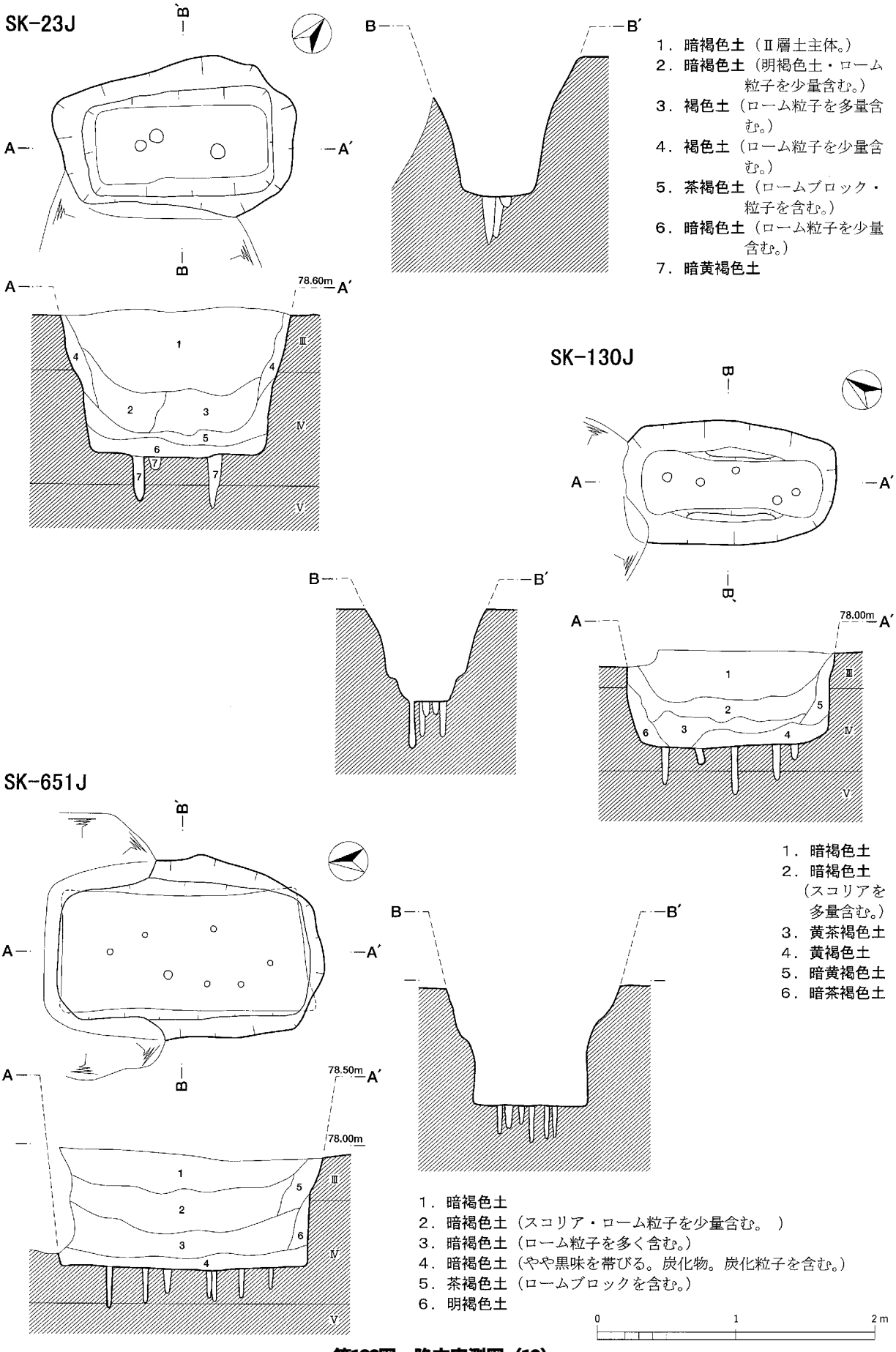
SK-459J



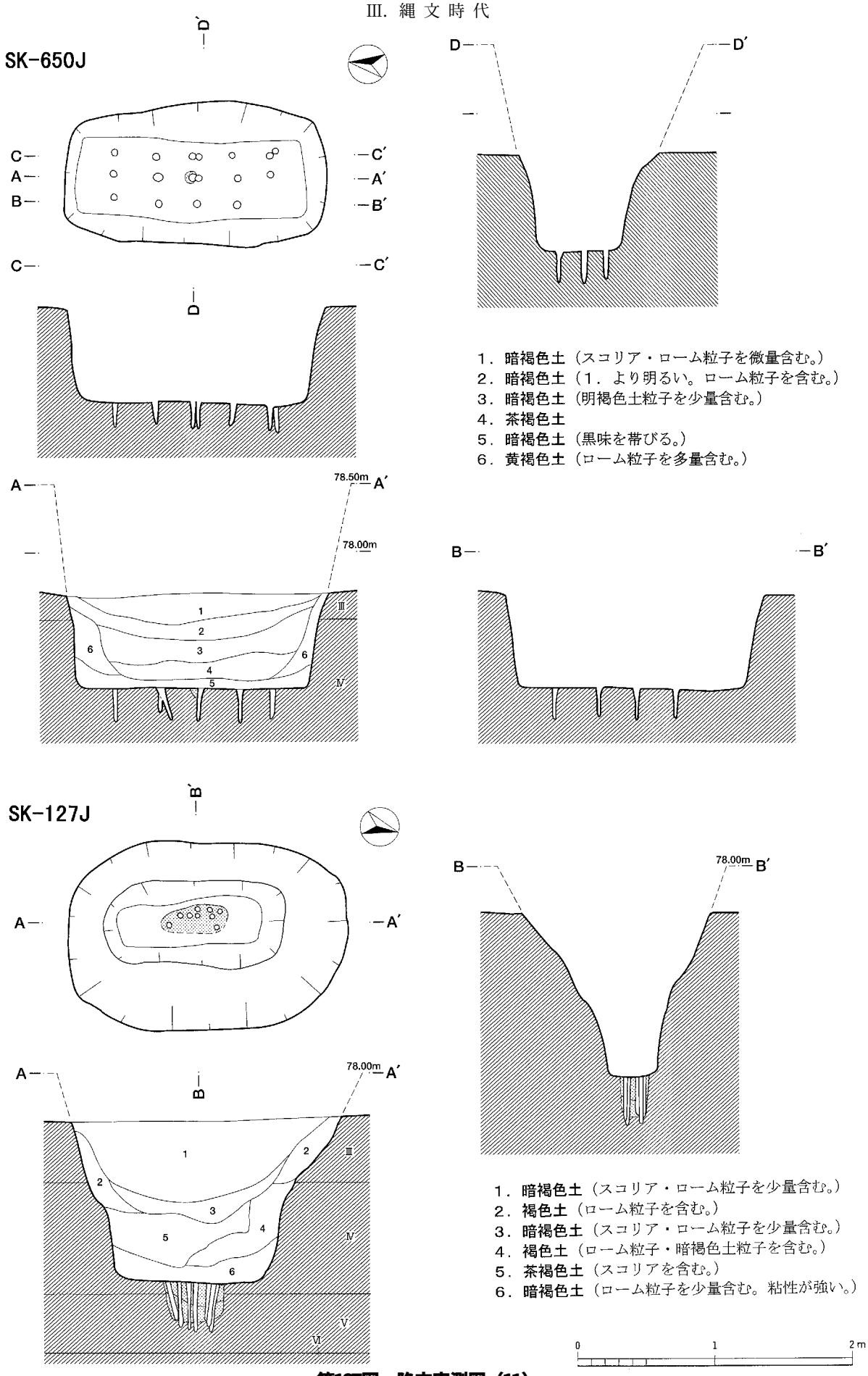
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より明るい。）
3．暗褐色土（黒味を帯びる。）
4．茶褐色土（ロームブロック・粒子を多量含む。）
5．暗茶褐色土（ロームブロックを多く含む。）
6．黄褐色土（ローム粒子を多量含む。）



第185図　陥穴実測図（9）



第186図　陥穴実測図（10）

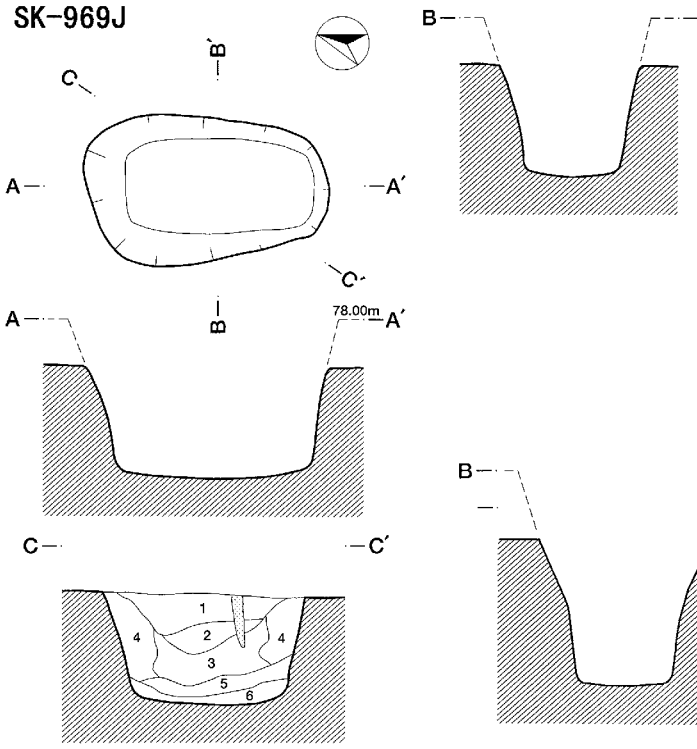


1．暗褐色土（スコリア・ローム粒子を微量含む。）
2．暗褐色土（1．より明るい。ローム粒子を含む。）
3．暗褐色土（明褐色土粒子を少量含む。）
4．茶褐色土
5．暗褐色土（黒味を帯びる。）
6．黄褐色土（ローム粒子を多量含む。）

1．暗褐色土（スコリア・ローム粒子を少量含む。）
2．褐色土（ローム粒子を含む。）
3．暗褐色土（スコリア・ローム粒子を少量含む。）
4．褐色土（ローム粒子・暗褐色土粒子を含む。）
5．茶褐色土（スコリアを含む。）
6．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。粘性が強い。）

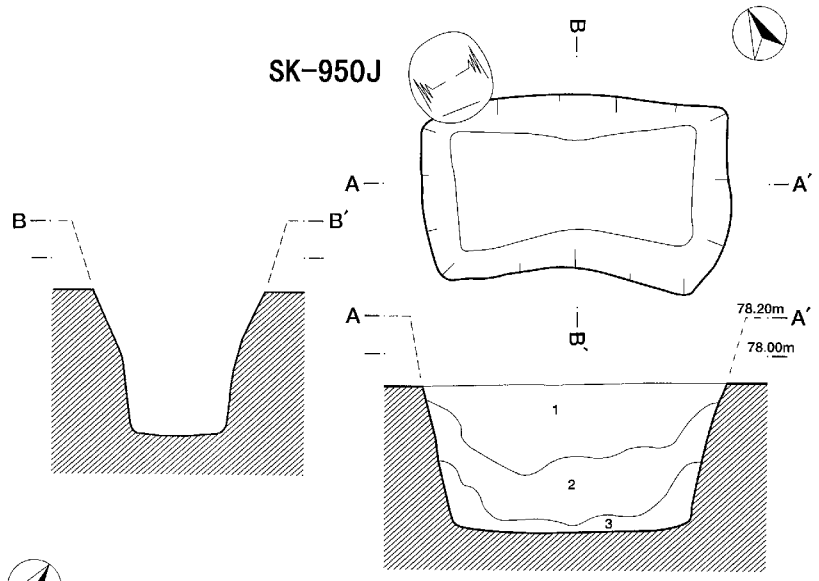
第187図　陥穴実測図（11）

SK-969J



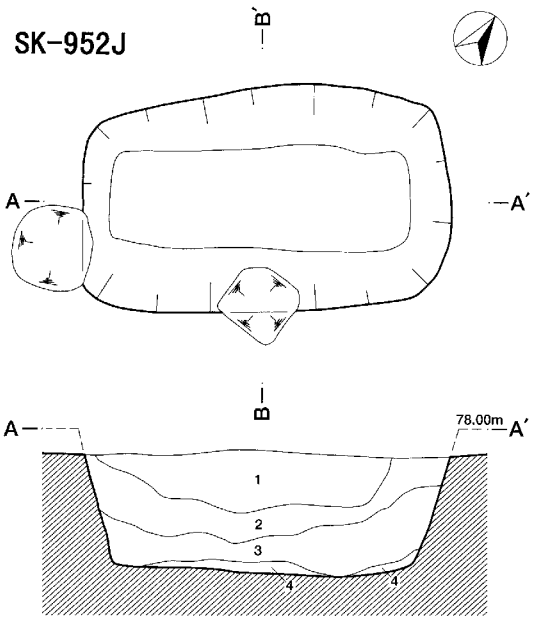
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや暗い。）
3．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
4．暗茶褐色土（ロームブロック・粒子を多く含む。）
5．暗褐色土（ローム粒子を多量含む。）
6．暗褐色土（黒味を帯びる。ローム粒子を含む。）

SK-950J



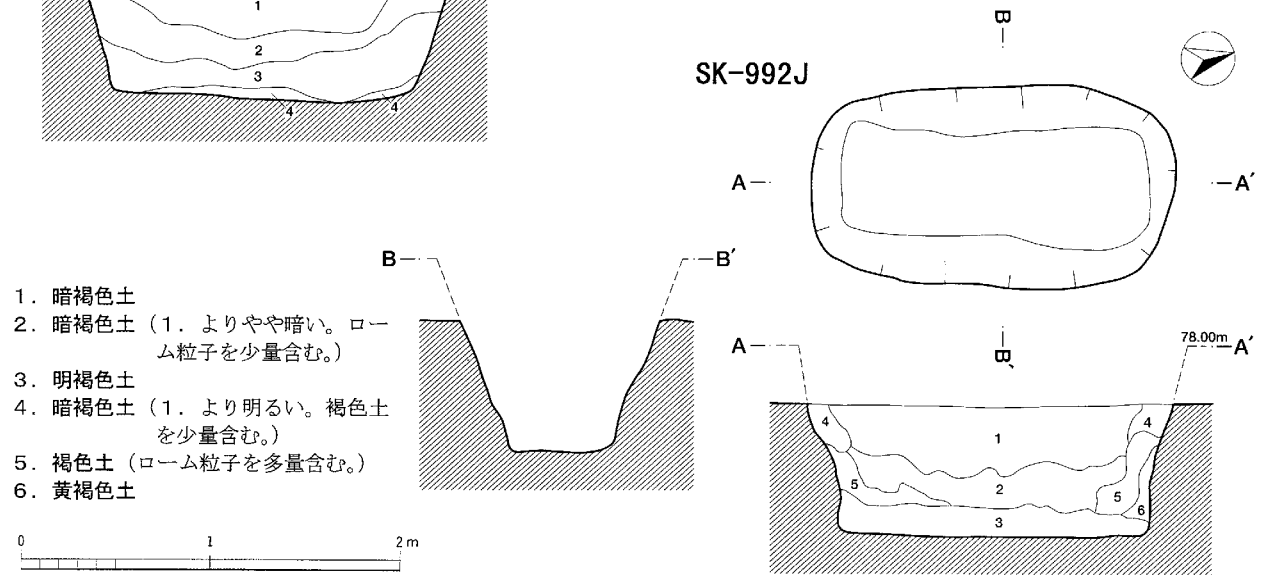
1．暗褐色土
2．暗褐色土（スコリア・ローム粒子を少量含む。）
3．暗茶褐色土（ロームブロック・粒子を少量含む。）

SK-952J



1．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）
2．暗褐色土（ローム粒子を多量含む。）
3．暗茶褐色土
4．明褐色土（ロームブロック・粒子を多量含む。）

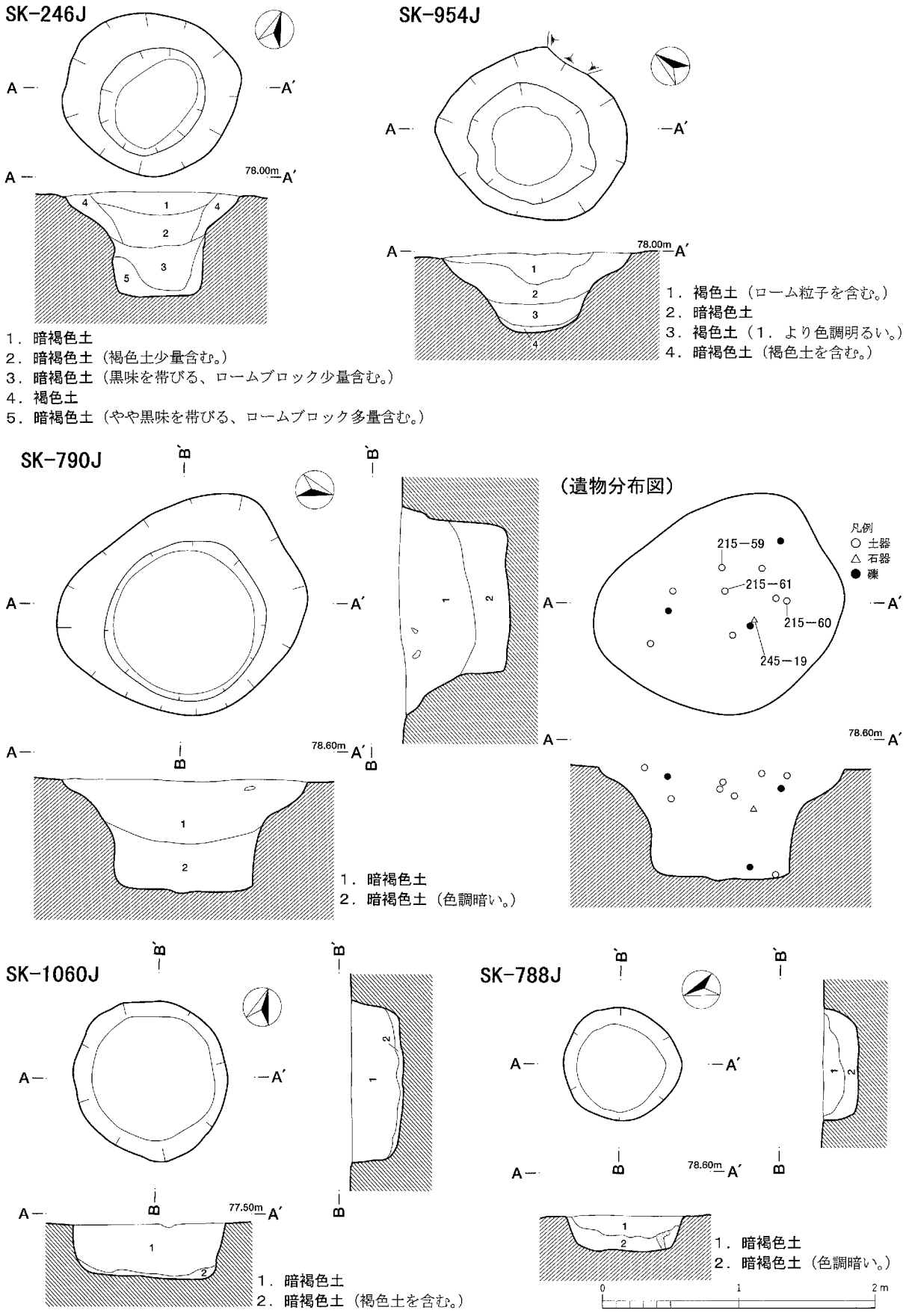
SK-992J



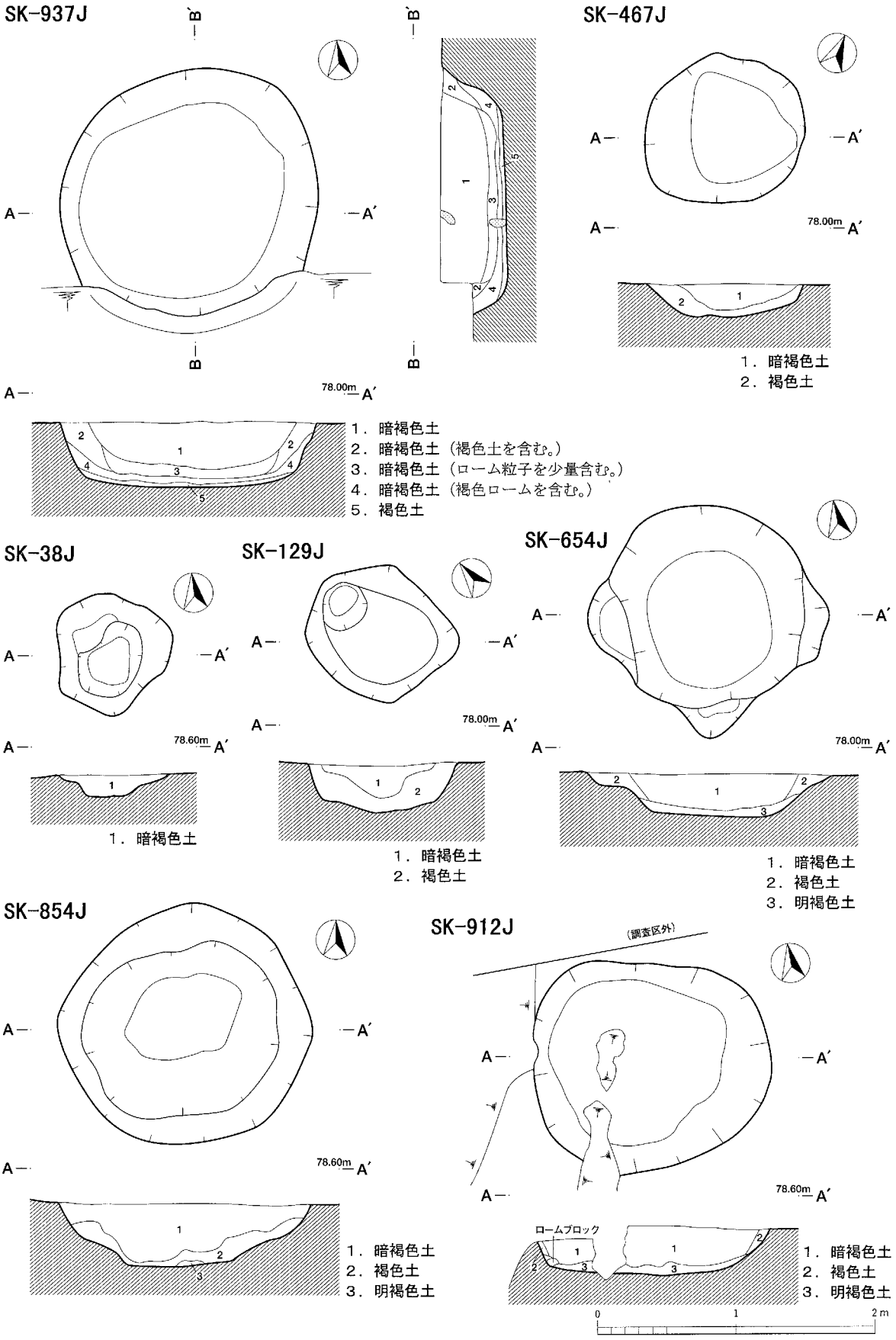
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりやや暗い。ローム粒子を少量含む。）
3．明褐色土
4．暗褐色土（1．より明るい。褐色土を少量含む。）
5．褐色土（ローム粒子を多量含む。）
6．黄褐色土

0　1　2m

第188図　陥穴実測図（12）

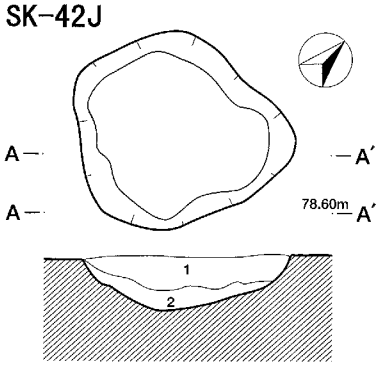


第189図　土坑実測図（1）



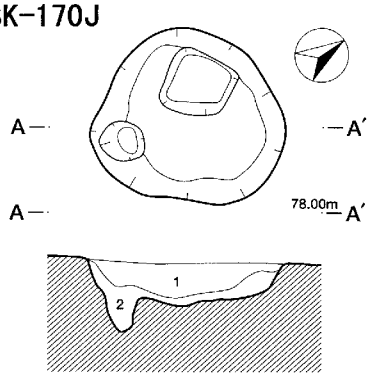
第190図　土坑実測図（2）

SK-42J



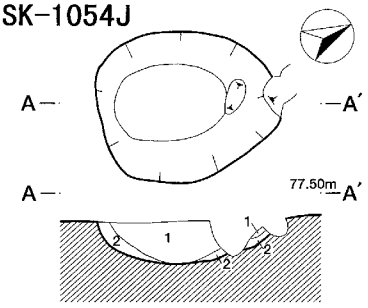
1．暗褐色土
2．明褐色土

SK-170J



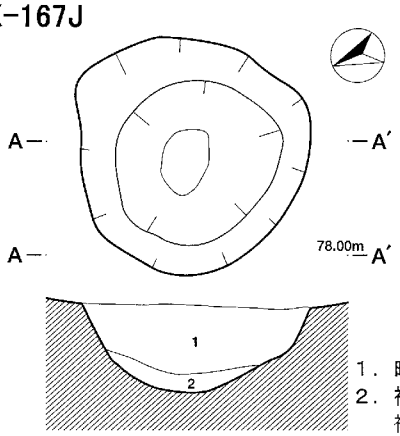
1．暗褐色土
2．褐色土（明褐色土と褐色ロームの混合土。）

SK-1054J



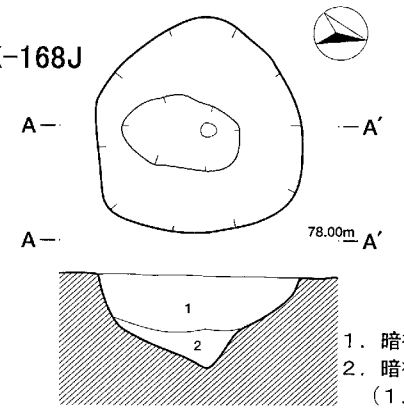
1．褐色土
2．褐色土（ロームを少量含む。）

SK-167J



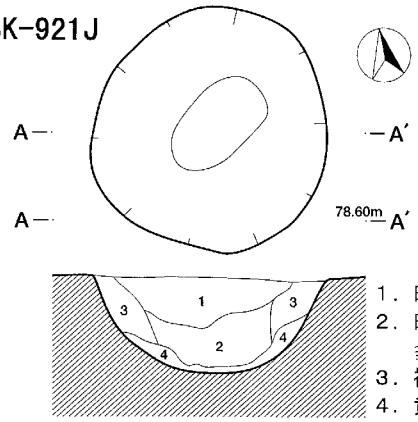
1．暗褐色土
2．褐色土（明褐色土と褐色ロームの混合土。）

SK-168J



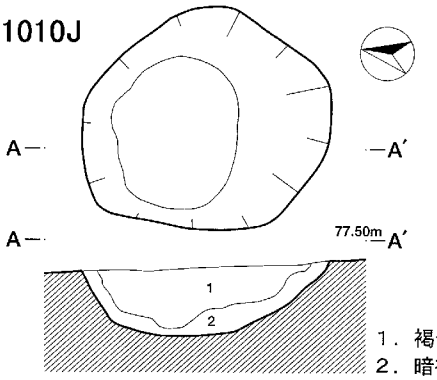
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より色調暗い。）

SK-921J



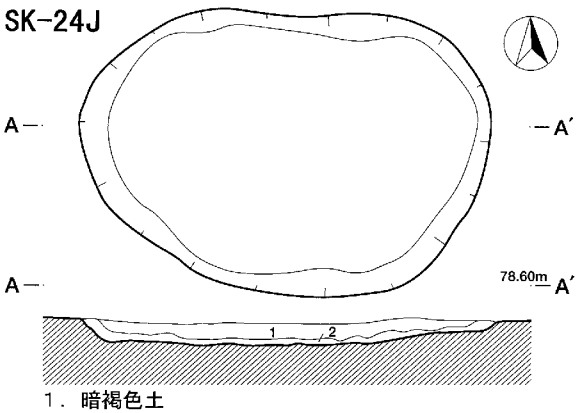
1．暗褐色土
2．暗褐色土（褐色土を多く含む。）
3．褐色土
4．黄褐色土

SK-1010J



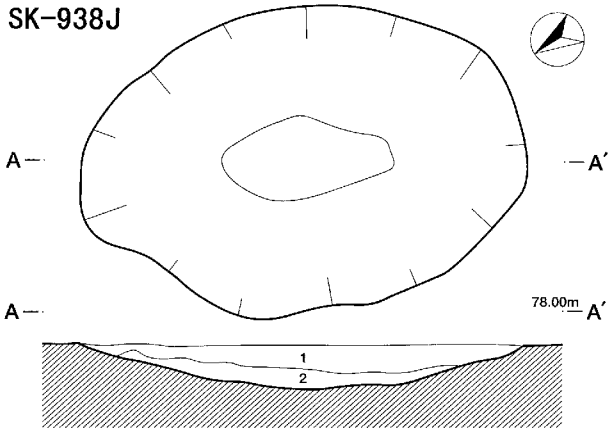
1．褐色土
2．暗褐色土

SK-24J

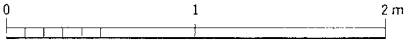


1．暗褐色土
2．明褐色土

SK-938J

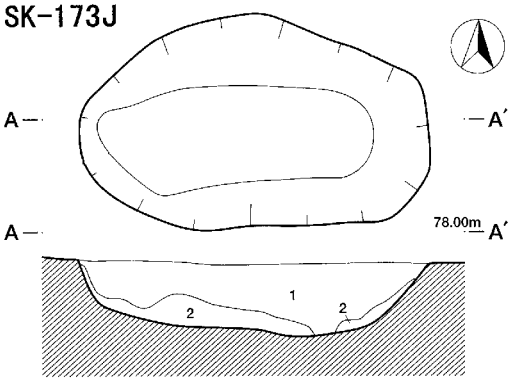


1．暗褐色土
2．黄褐色土



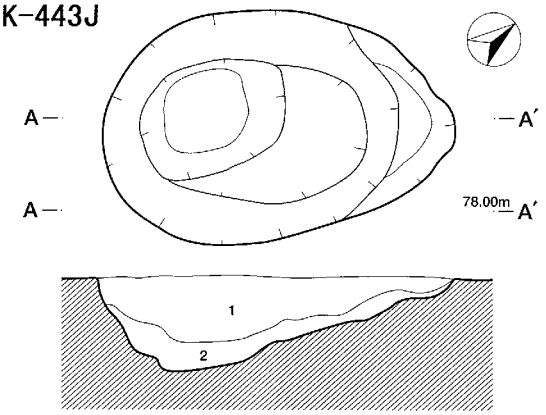
第191図　土坑実測図（3）

SK-173J



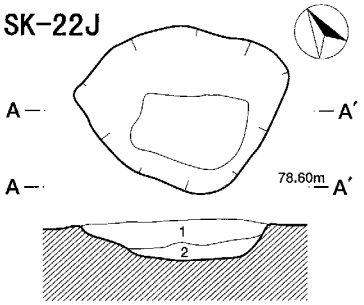
1．褐色土（明褐色土と褐色ロームの混合土。）
2．暗褐色土（ロームブロックを少量含む。）

SK-443J



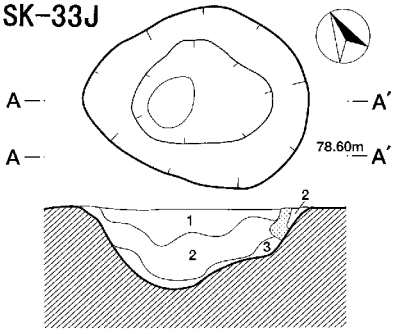
1．暗褐色土
2．暗褐色土（ローム粒を多く含む。）

SK-22J



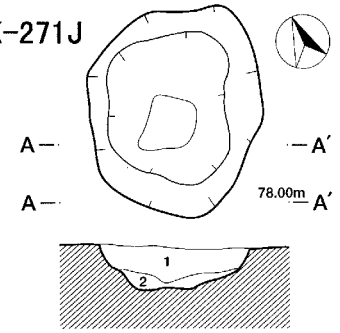
1．暗褐色土
2．明褐色土

SK-33J



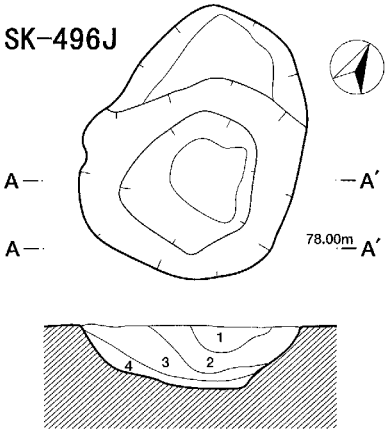
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より明るい。）
3．明褐色土

SK-271J



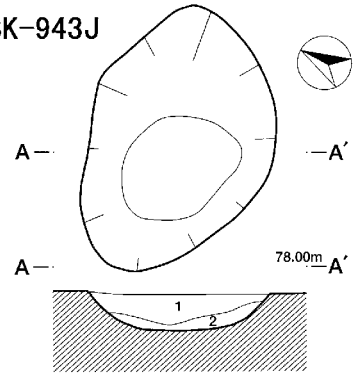
1．明褐色土
2．褐色土（明褐色土と褐色ロームの混合土。）

SK-496J



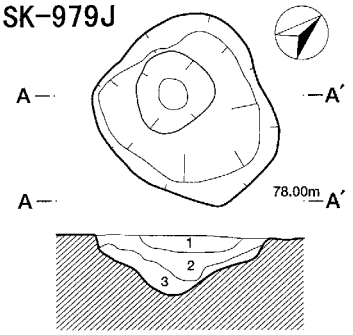
1．暗褐色土
2．褐色土
3．明褐色土
4．黄褐色土

SK-943J



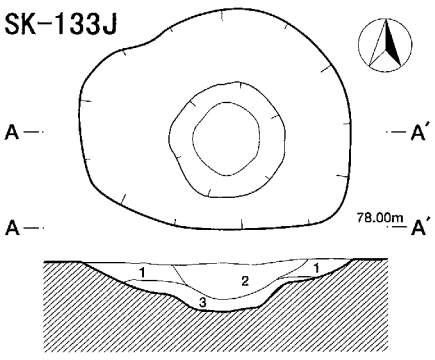
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-979J



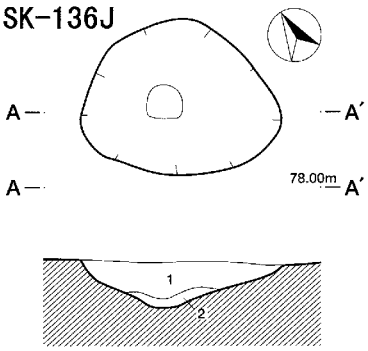
1．暗褐色土
2．暗褐色土（ロームを少量含む。）
3．暗褐色土（ロームを多く含む。）

SK-133J



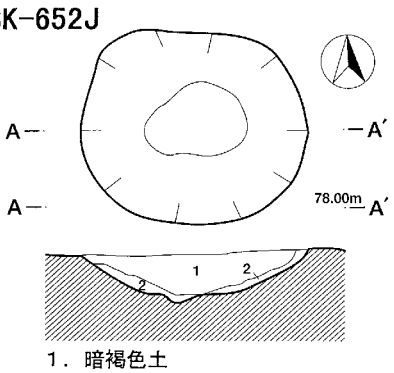
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より粘性弱い。）
3．褐色土（明褐色土と褐色ロームの混合土。）

SK-136J

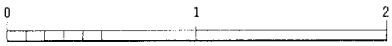


1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．よりローム粒子を多く含む。）

SK-652J

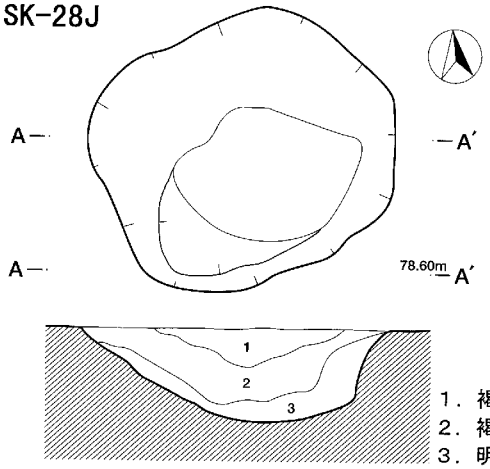


1．暗褐色土
2．褐色土



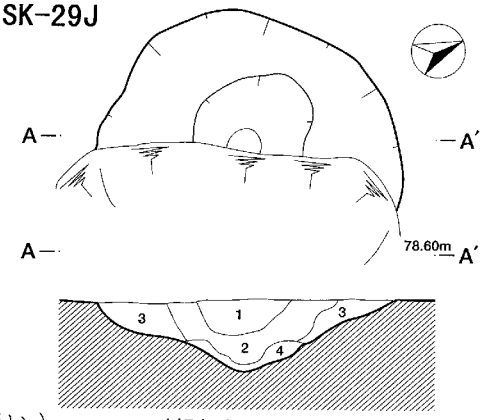
第192図　土坑実測図（4）

SK-28J



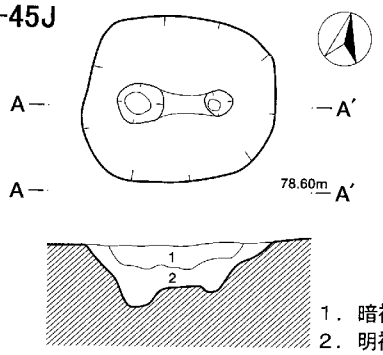
1．褐色土
2．褐色土（1．より明るい。）
3．明褐色土

SK-29J



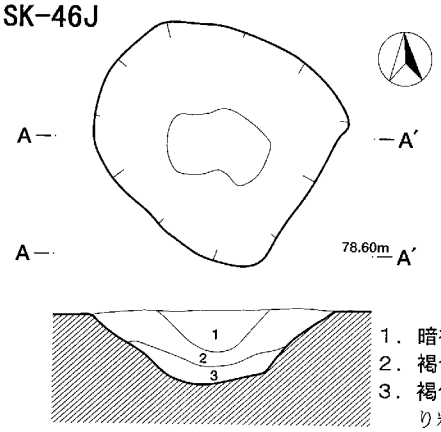
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より明るい。）
3．明褐色土
4．明褐色土（ロームブロックを少量含む。）

SK-45J



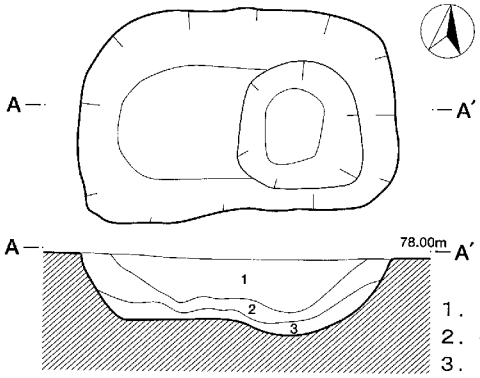
1．暗褐色土
2．明褐色土

SK-46J



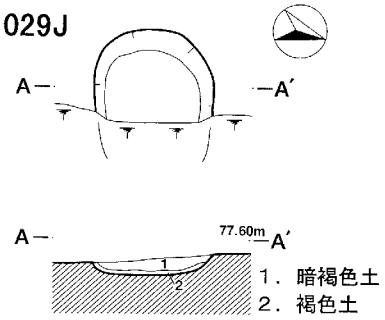
1．暗褐色土
2．褐色土
3．褐色土（2．より粘性強い。）

SK-317J



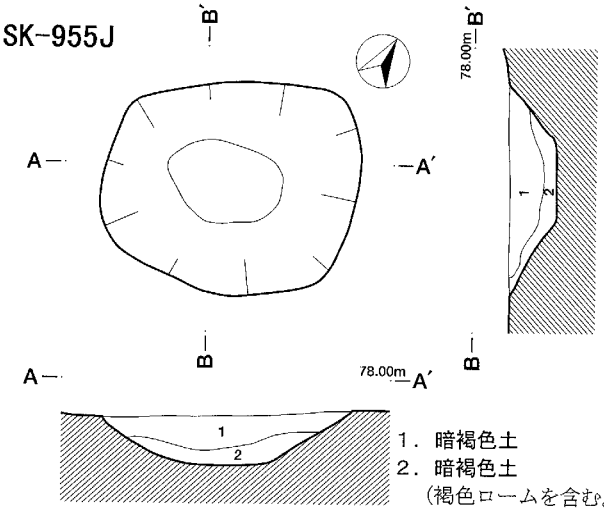
1．暗褐色土
2．褐色土
3．明褐色土

SK-1029J



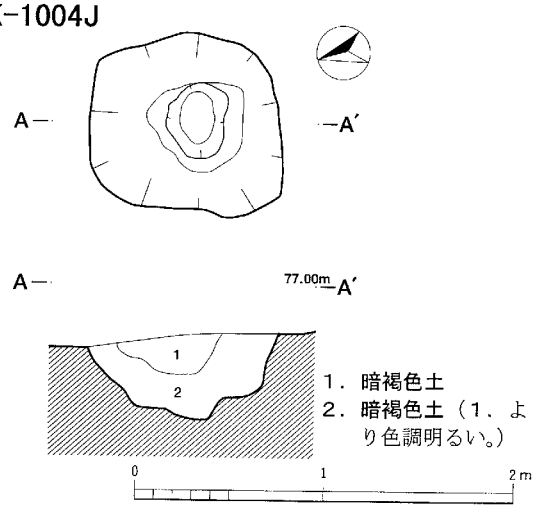
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-955J

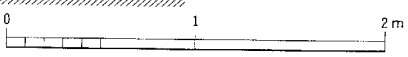


1．暗褐色土
2．暗褐色土
（褐色ロームを含む。）

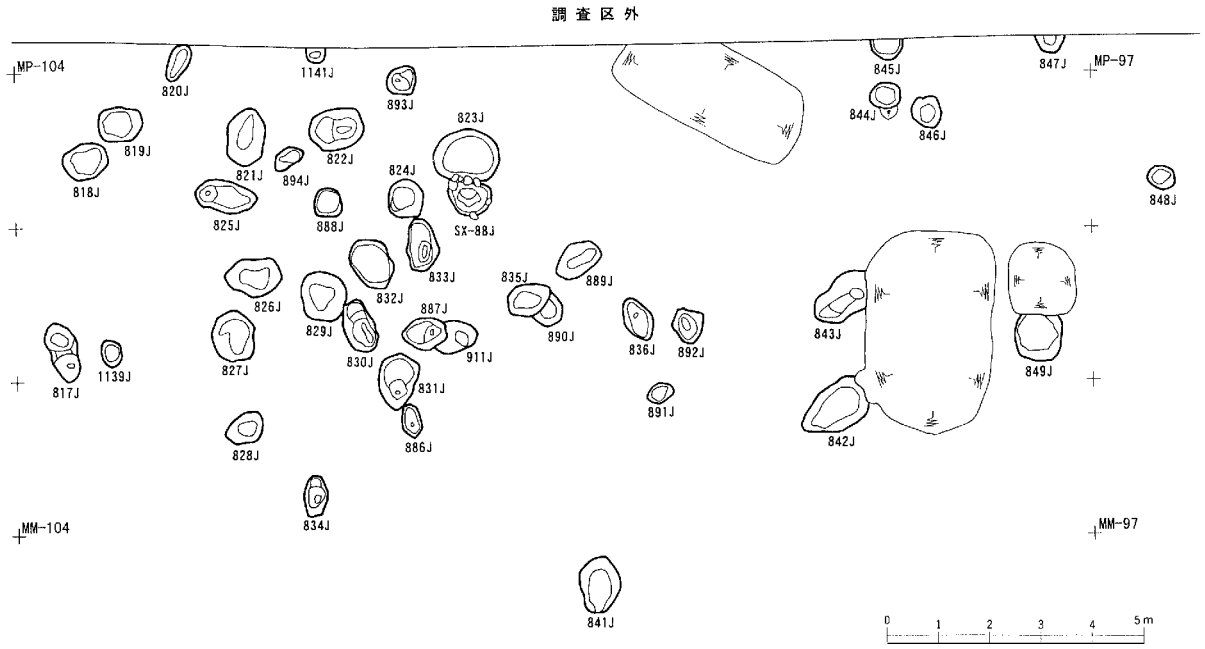
SK-1004J



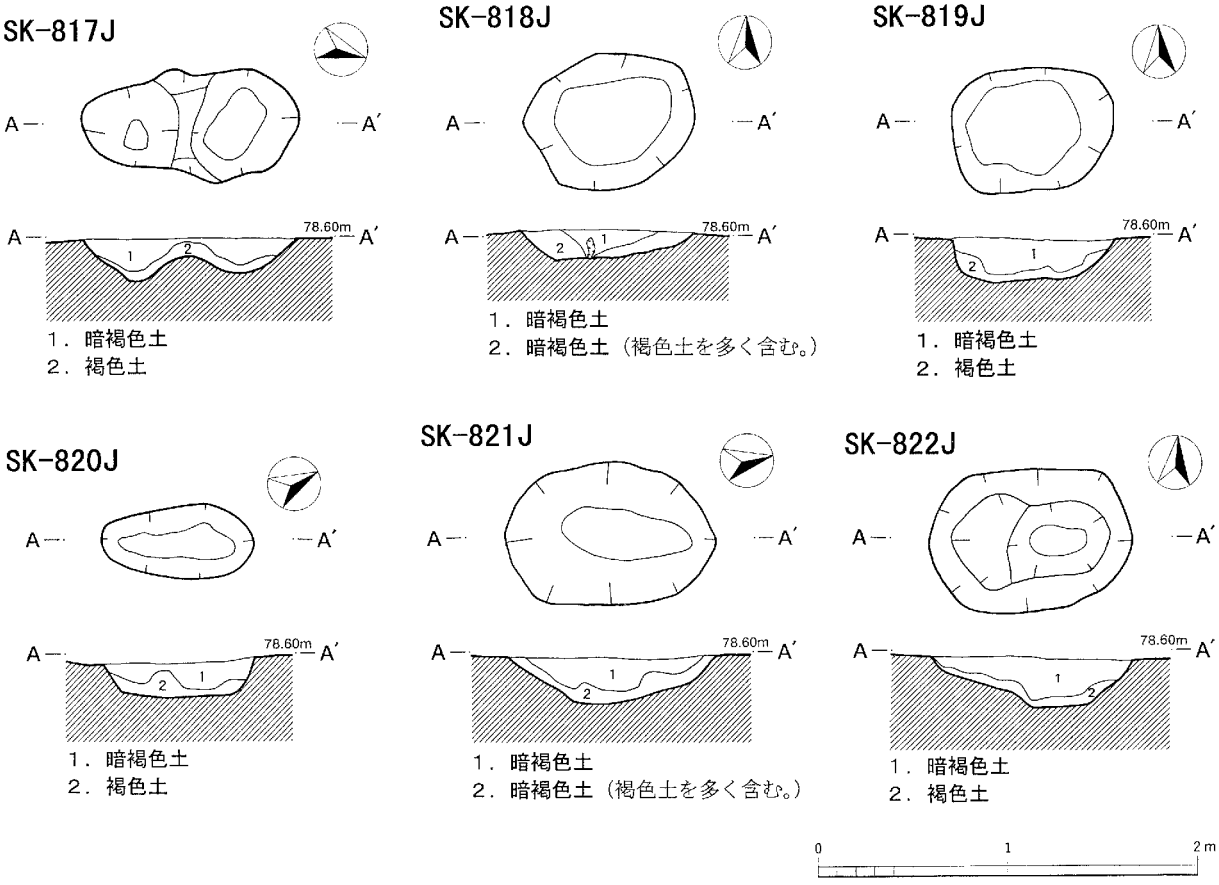
1．暗褐色土
2．暗褐色土（1．より色調明るい。）



第193図　土坑実測図（5）

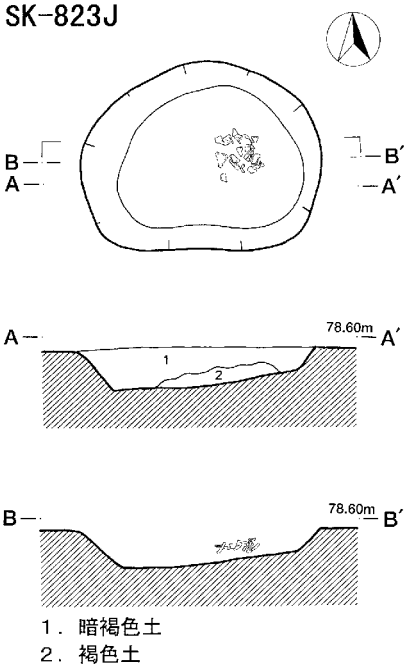


4区西側 土坑分布図

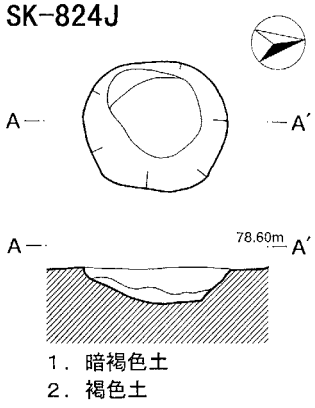


第194図　土坑実測図（6）

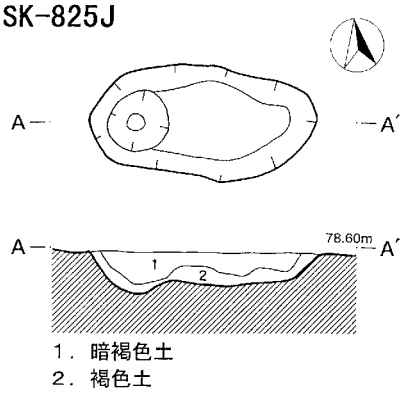
SK-823J



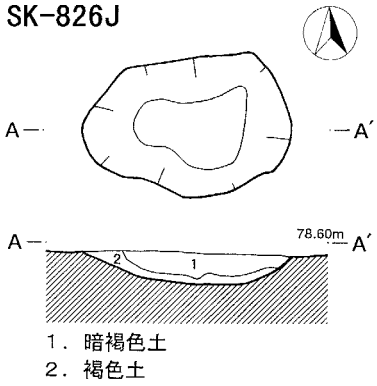
SK-824J



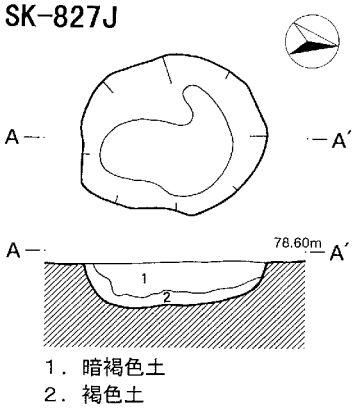
SK-825J



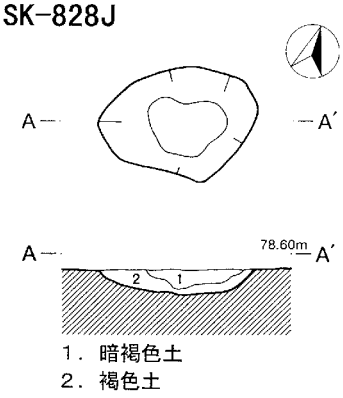
SK-826J



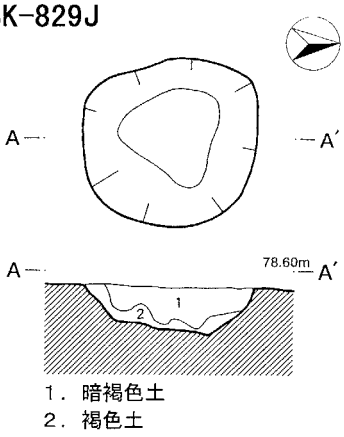
SK-827J



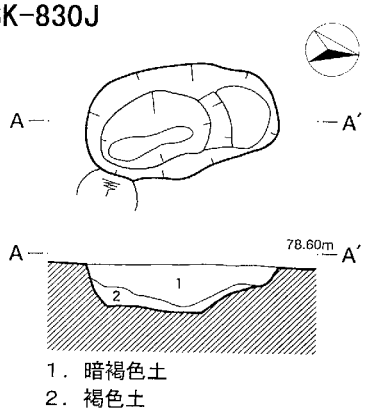
SK-828J



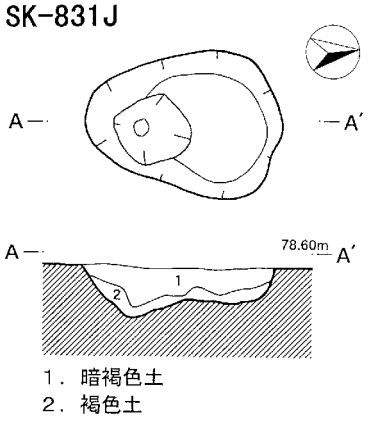
SK-829J



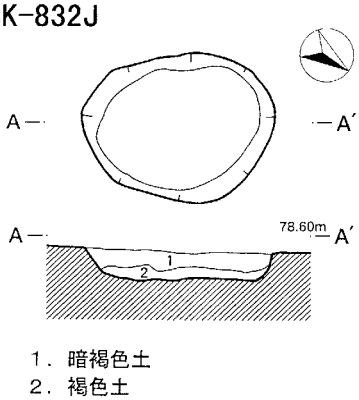
SK-830J



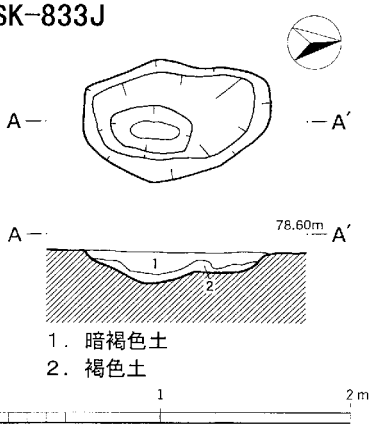
SK-831J



SK-832J

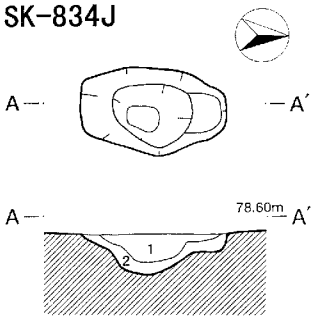


SK-833J



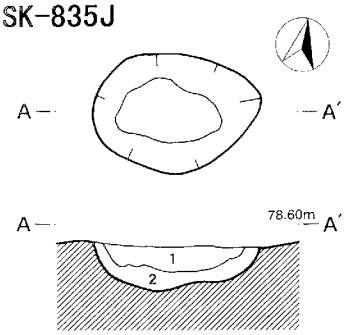
第195図　土坑実測図（7）

SK-834J



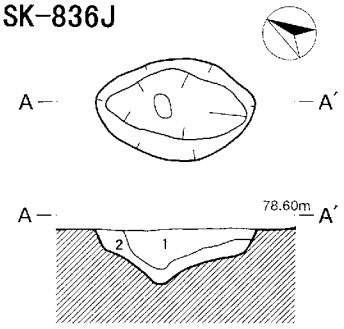
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-835J



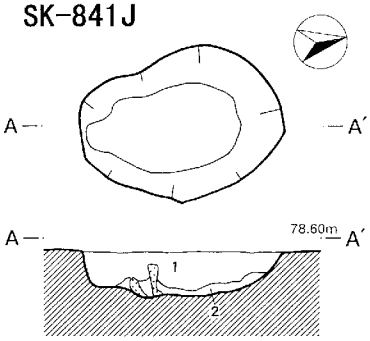
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-836J



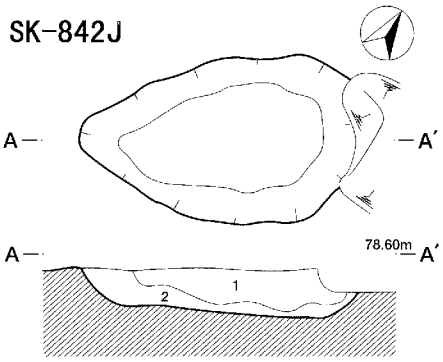
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-841J



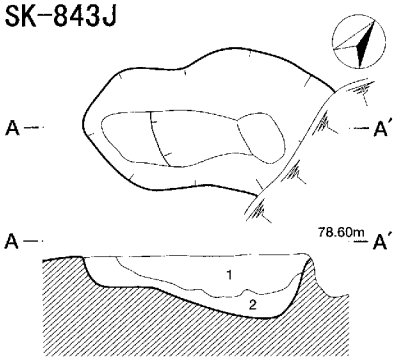
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-842J



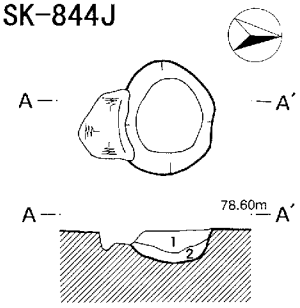
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-843J



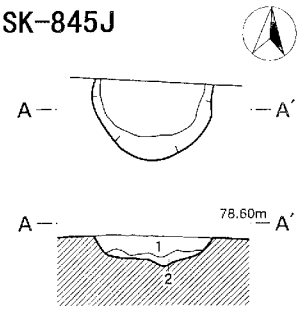
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-844J



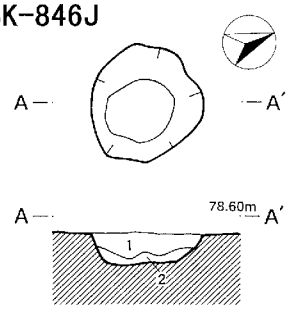
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-845J



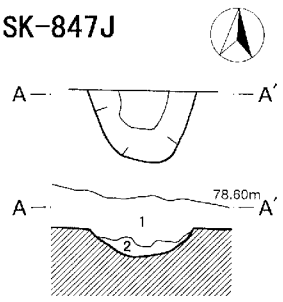
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-846J



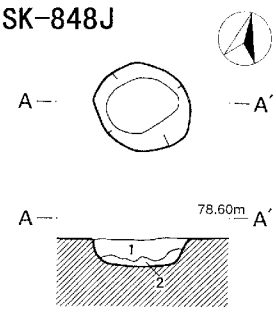
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-847J



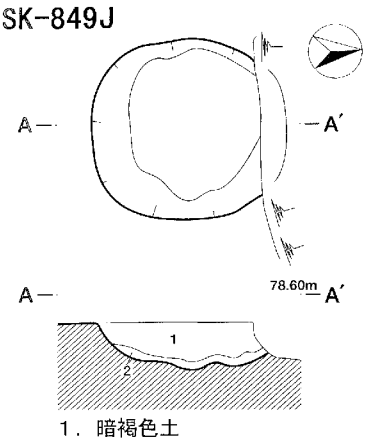
1．暗褐色土
2．褐色土（褐色土を多く含む。）

SK-848J

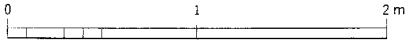


1．暗褐色土
2．褐色土

SK-849J

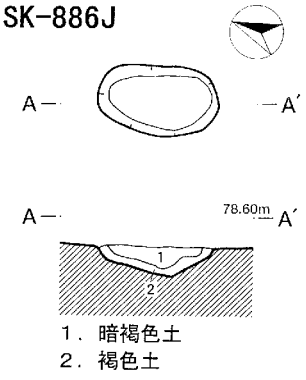


1．暗褐色土
2．褐色土



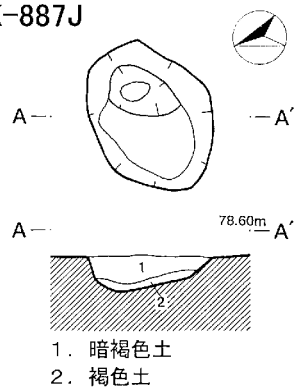
第196図　土坑実測図（8）

SK-886J



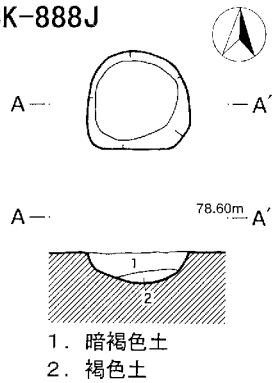
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-887J



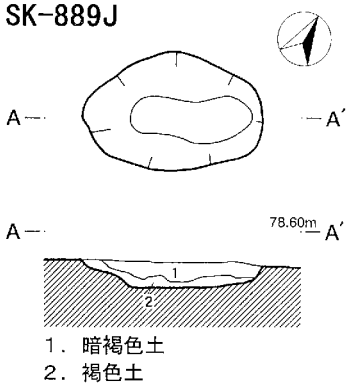
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-888J



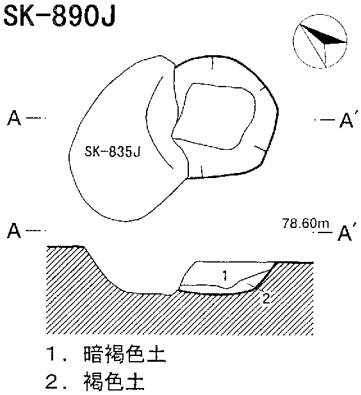
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-889J



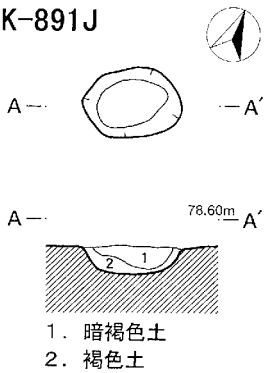
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-890J



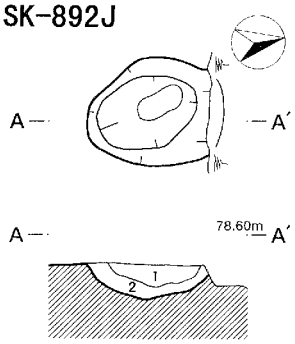
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-891J



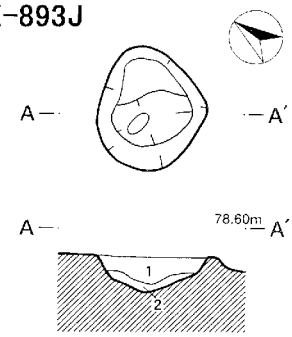
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-892J



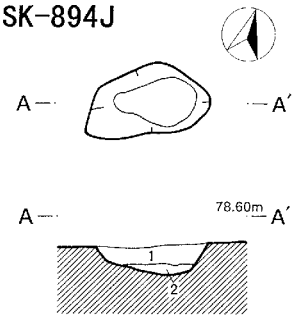
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-893J



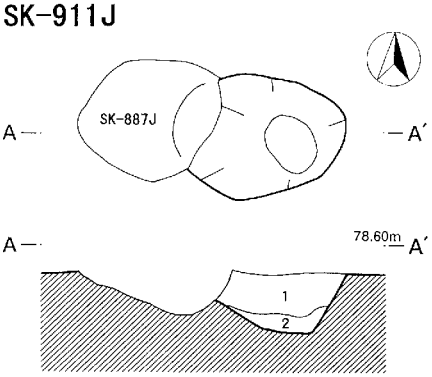
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-894J



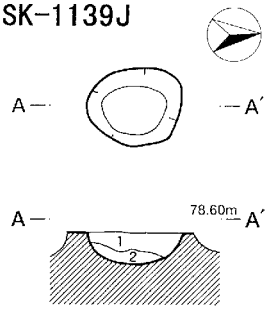
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-911J



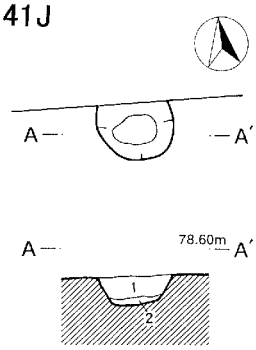
1．暗褐色土
2．褐色土

SK-1139J

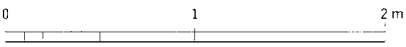


1．暗褐色土
2．褐色土

SK-1141J

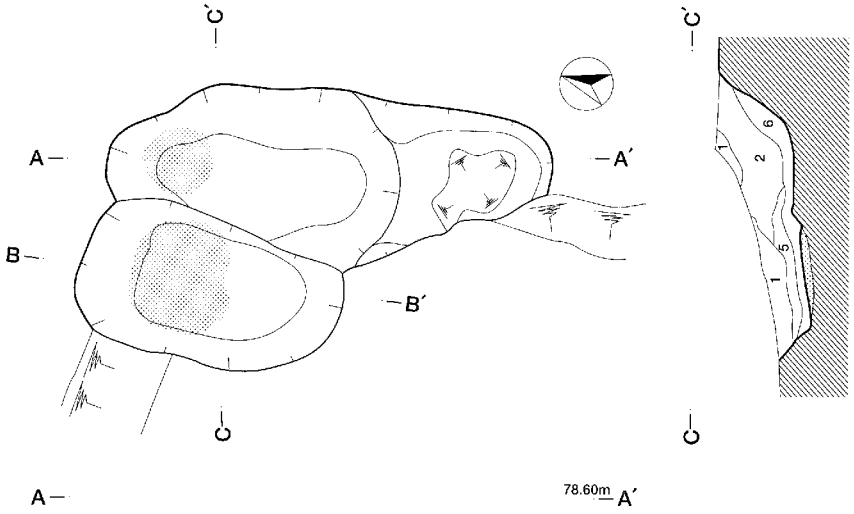


1．暗褐色土
2．褐色土



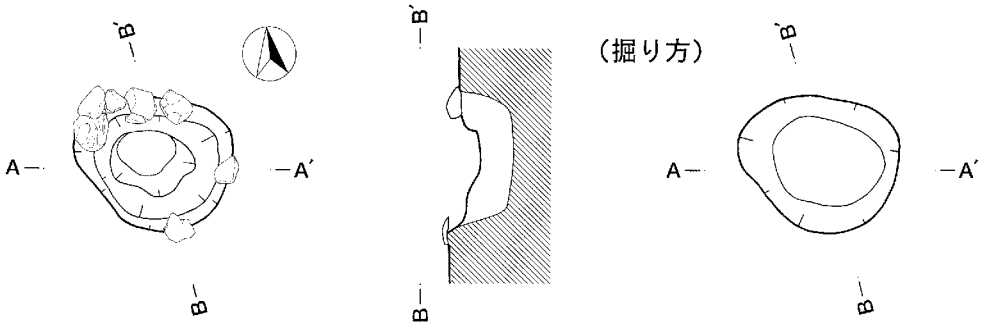
第197図　土坑実測図（9）

SK-786J



1．暗褐色土（焼土粒･炭化物を微量含む。）
2．暗褐色土（焼土粒を微量含む。）
3．茶褐色土（黒色粒を少量含む。）
4．茶褐色土
5．暗褐色土（ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。）
6．褐色土（焼土粒を微量含む。）
7．褐色土
8．暗褐色土

SX-88J

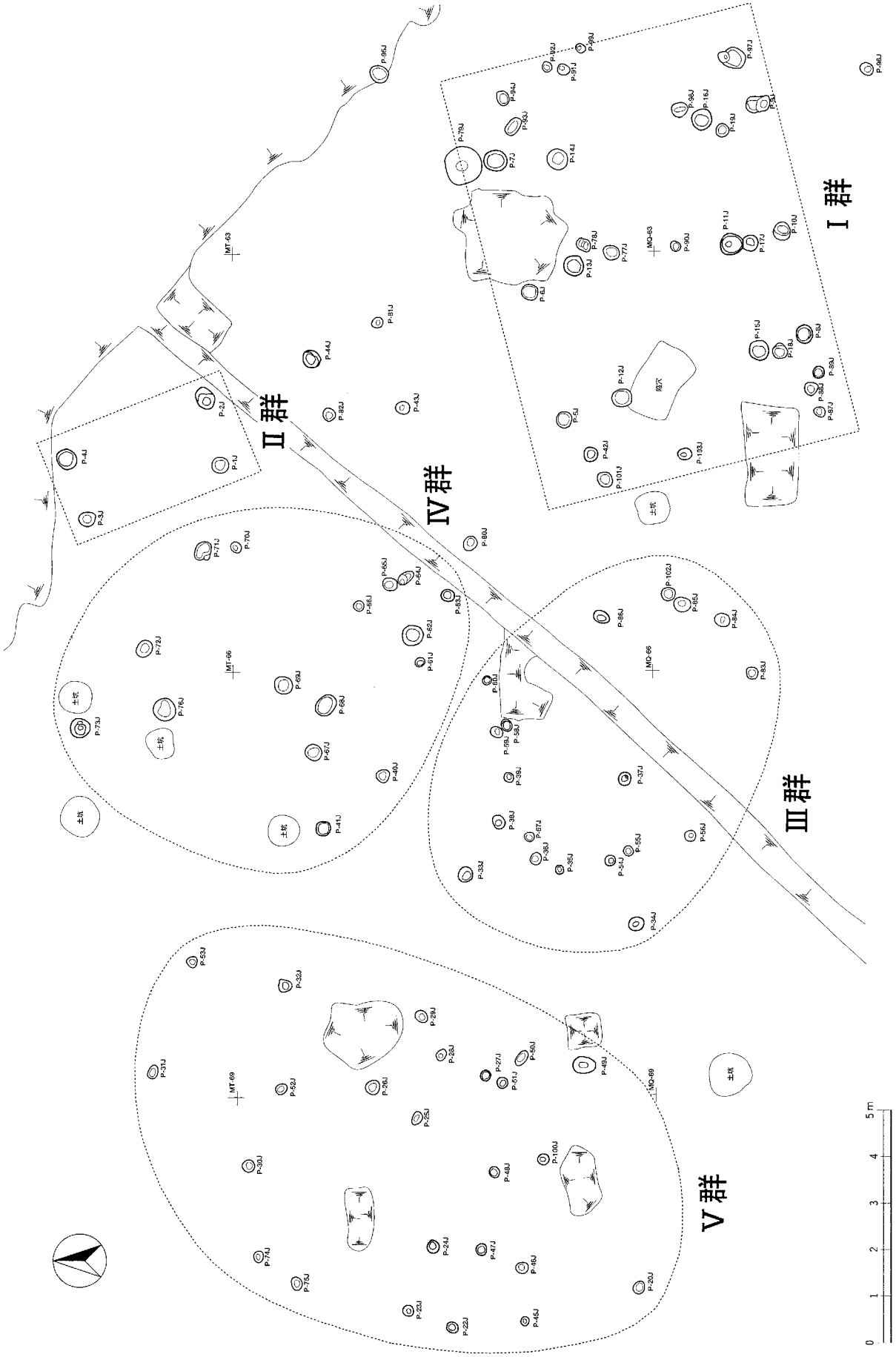


1．褐色土（暗褐色土を少量、赤色スコリアを微量含む。）
2．褐色土（明褐色土を少量、赤色スコリアを少量含む。）
3．褐色土（ローム粒を少量含む。）
4．明褐色土（褐色土を多量含む。）

0　1　2m

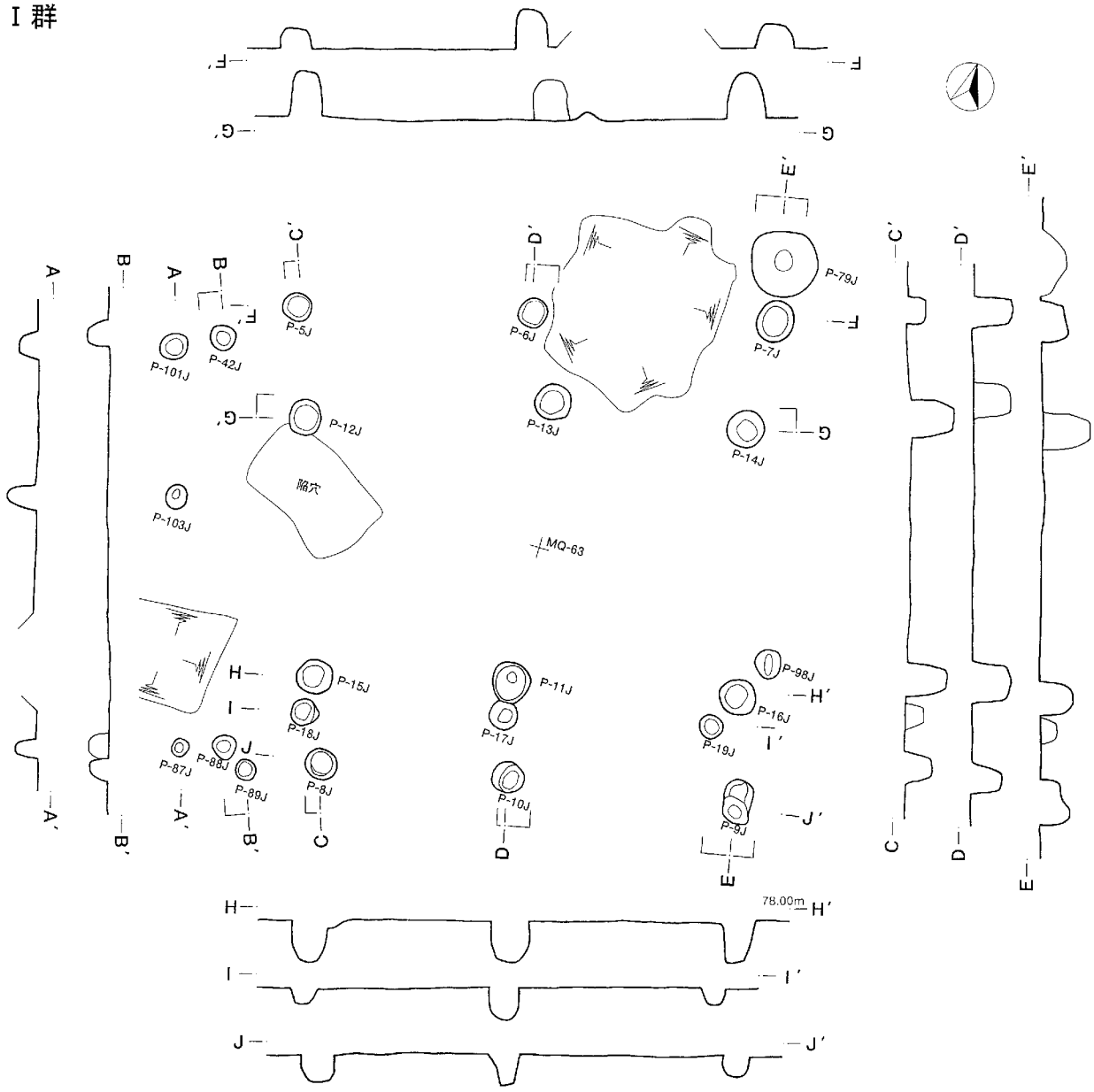
第198図　炉跡実測図

第199図　小穴群配置図

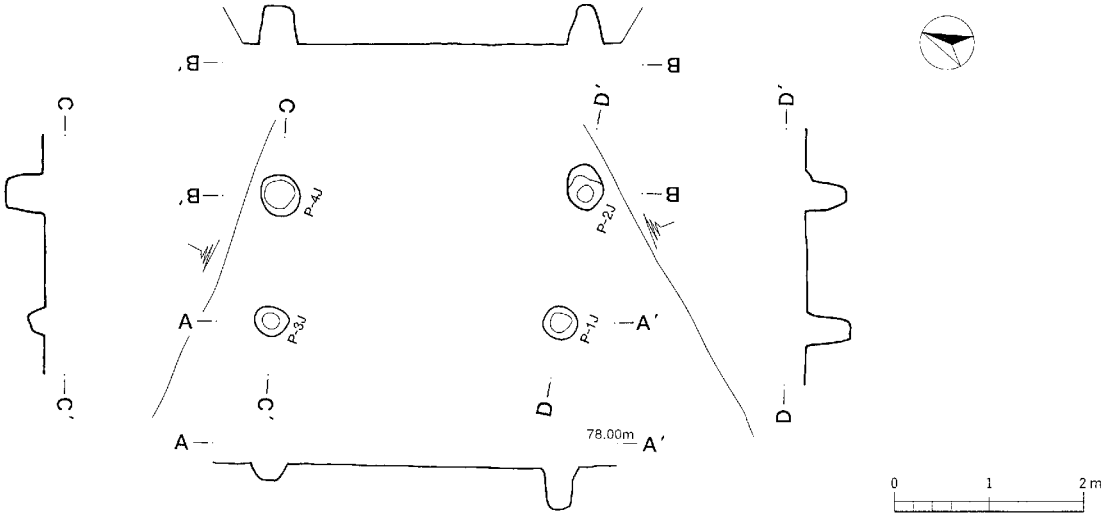


第200図　小穴群範囲想定図

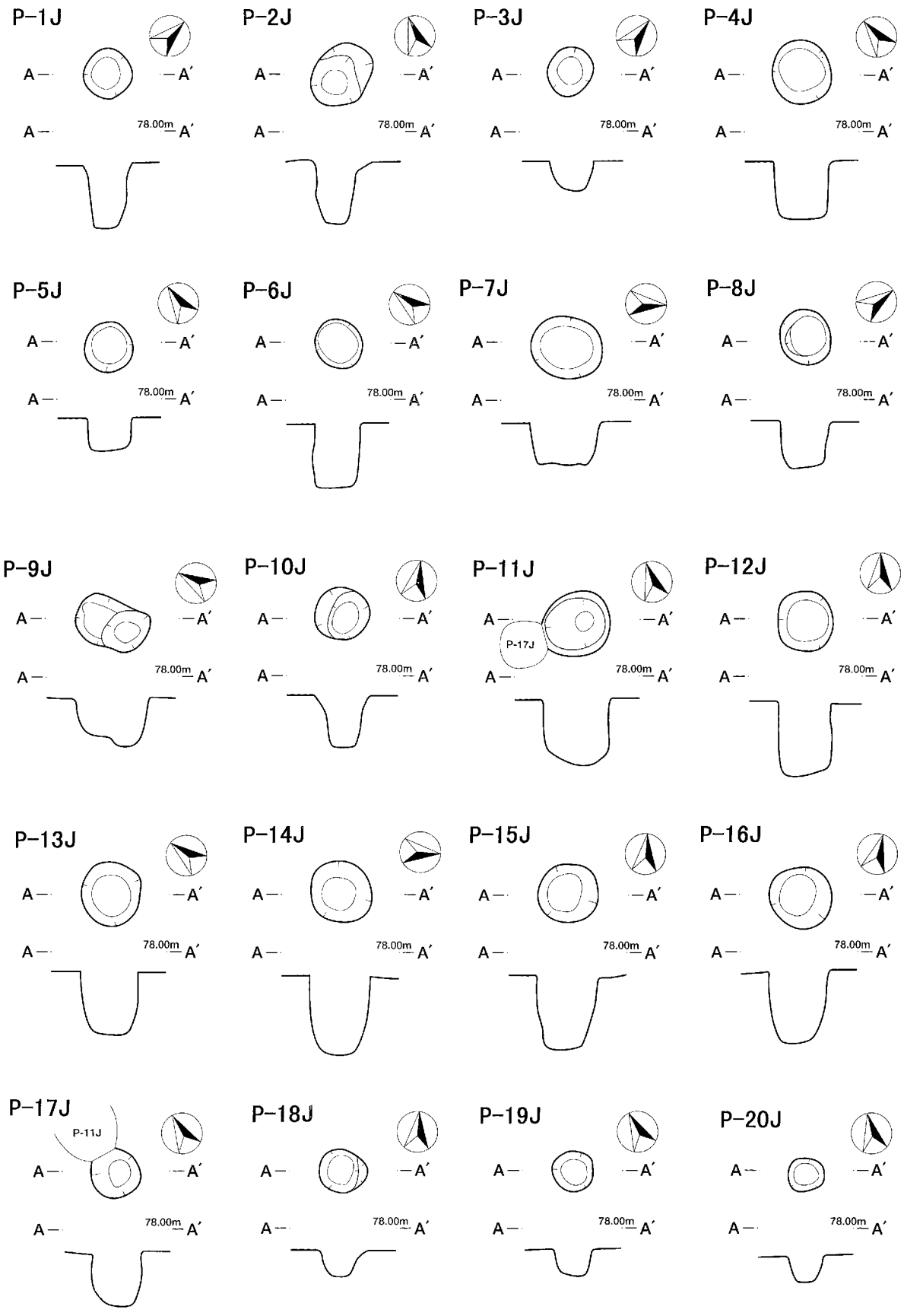
Ⅰ群



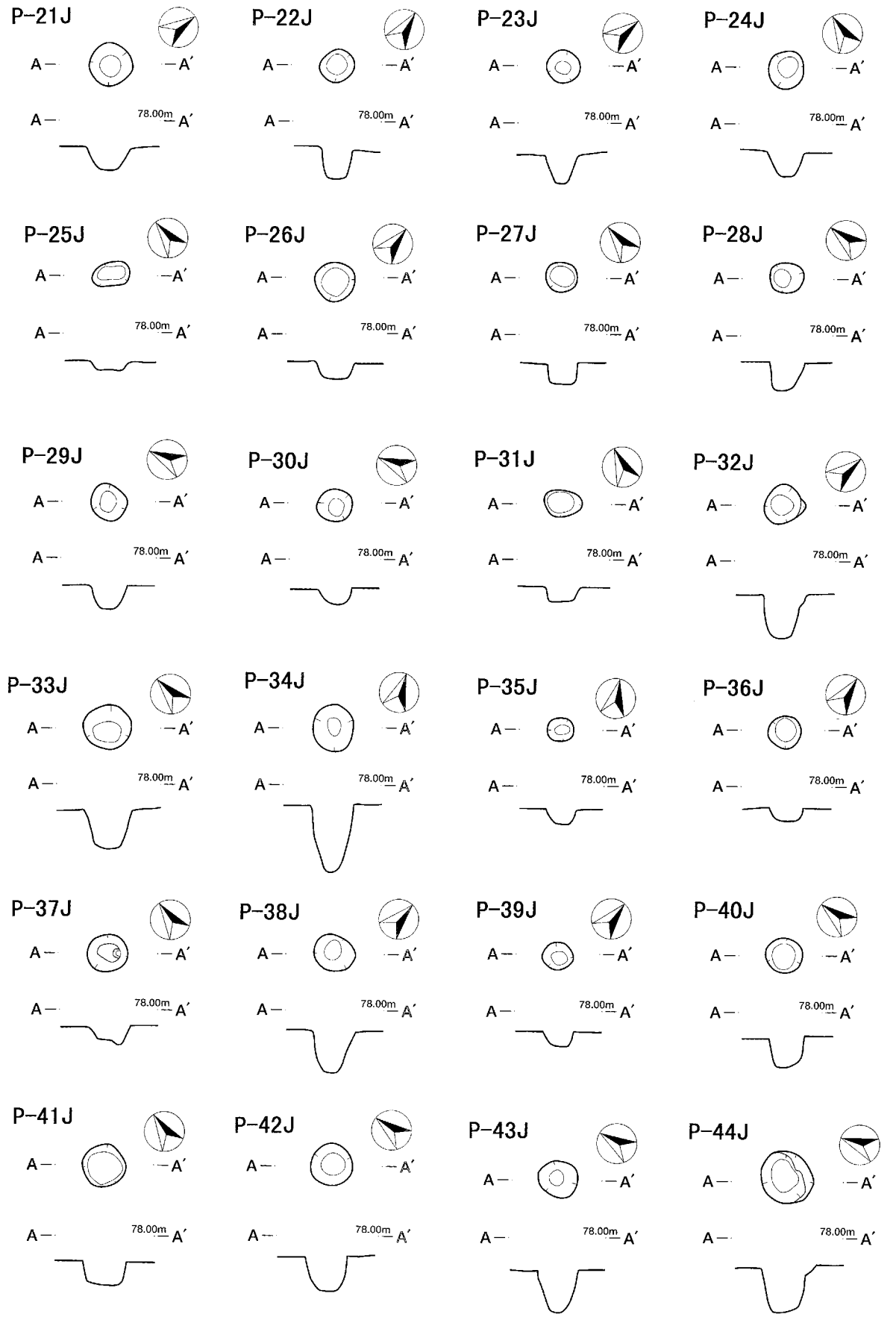
Ⅱ群



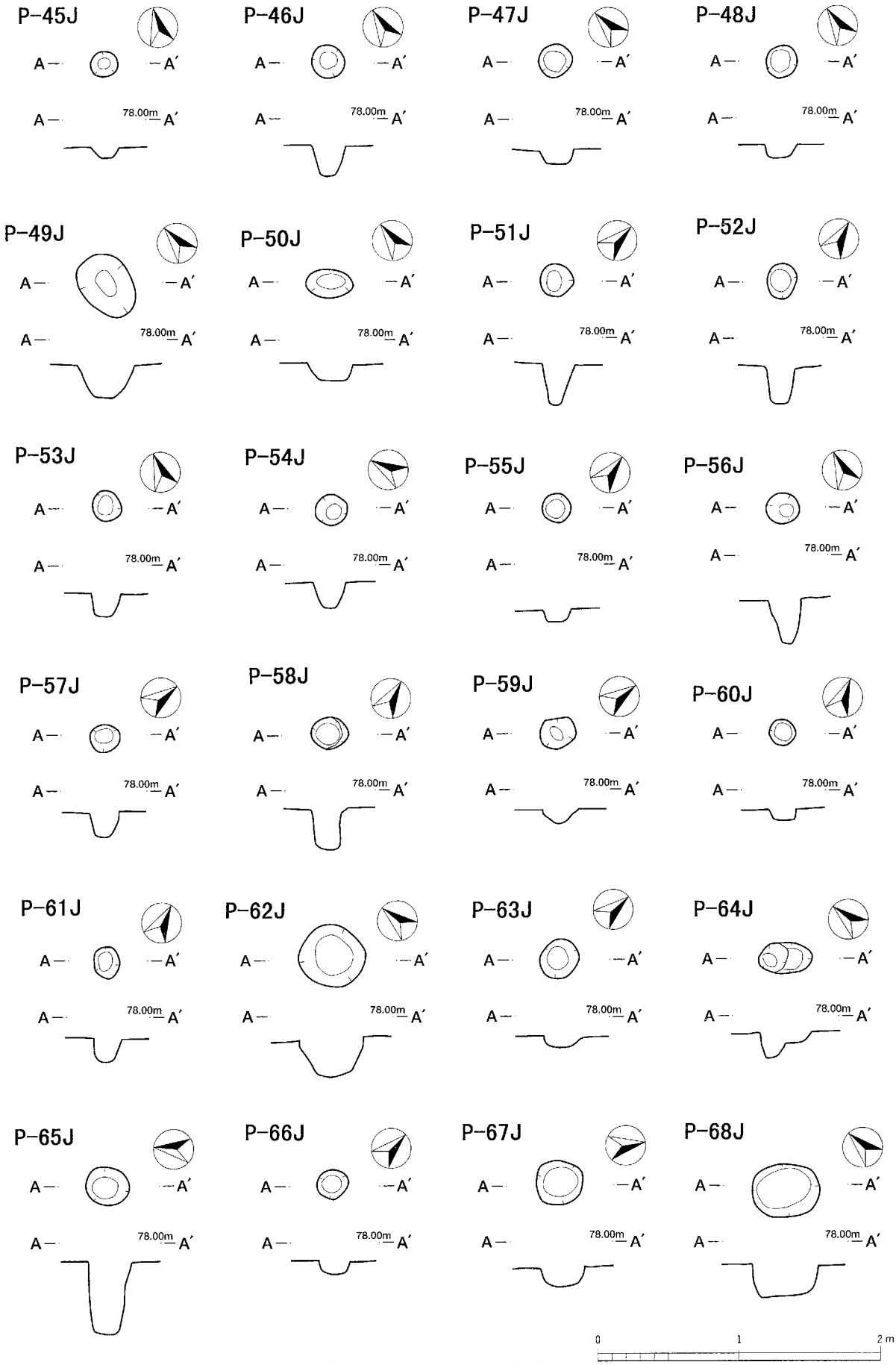
第201図　小穴実測図（1）



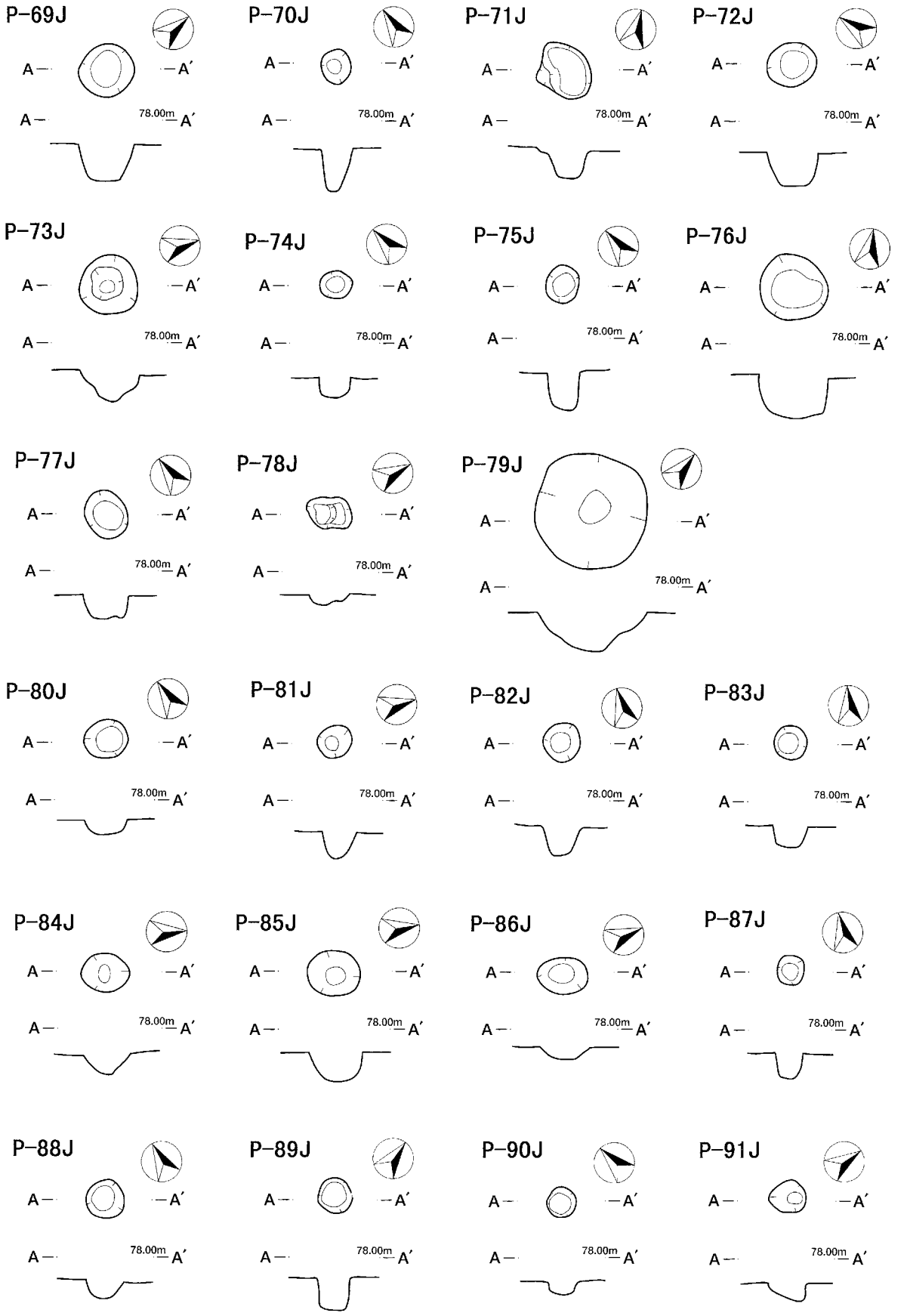
第202図　小穴実測図（2）



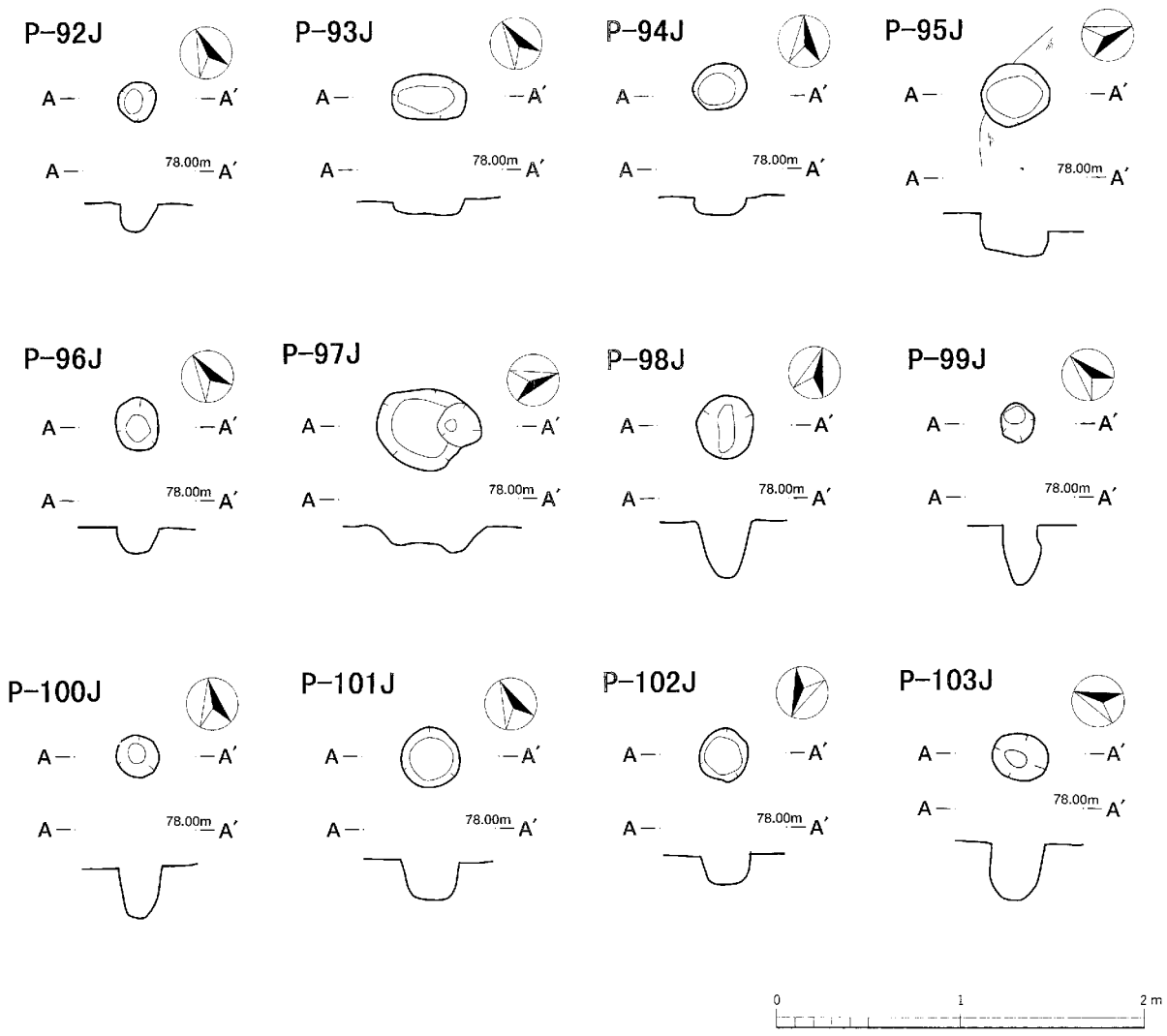
第203図　小穴実測図（3）



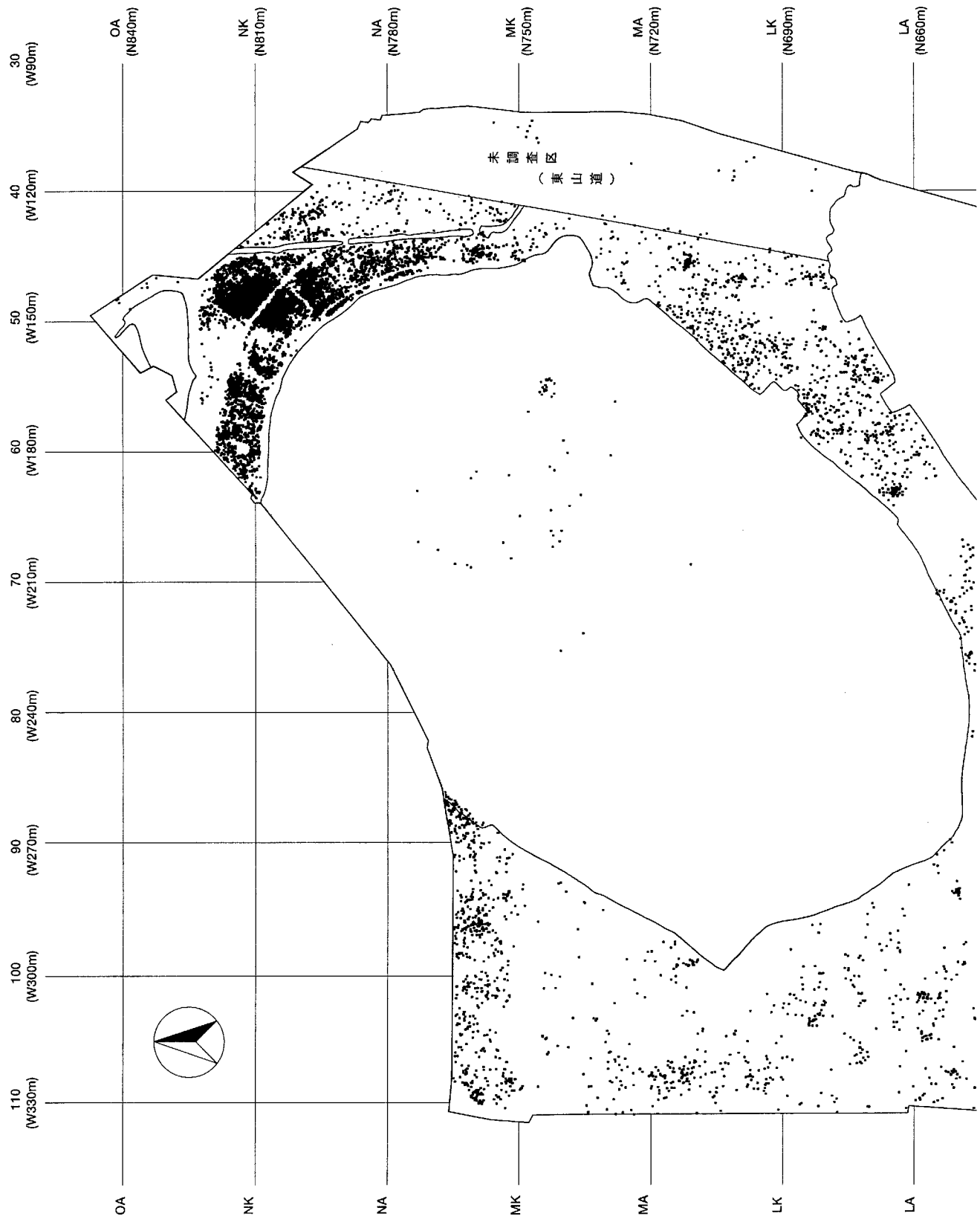
第204図　小穴実測図（4）

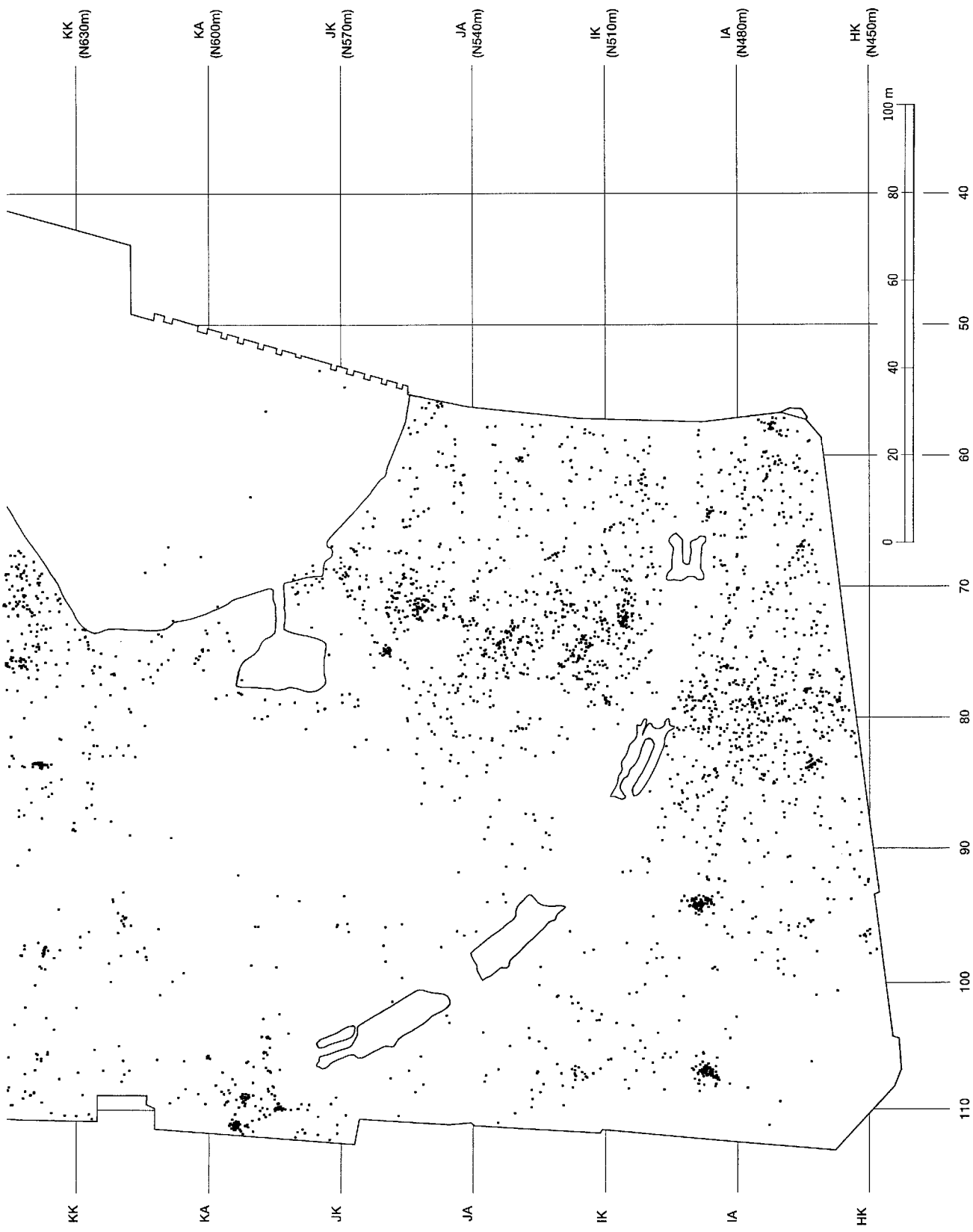


第205図　小穴実測図（5）

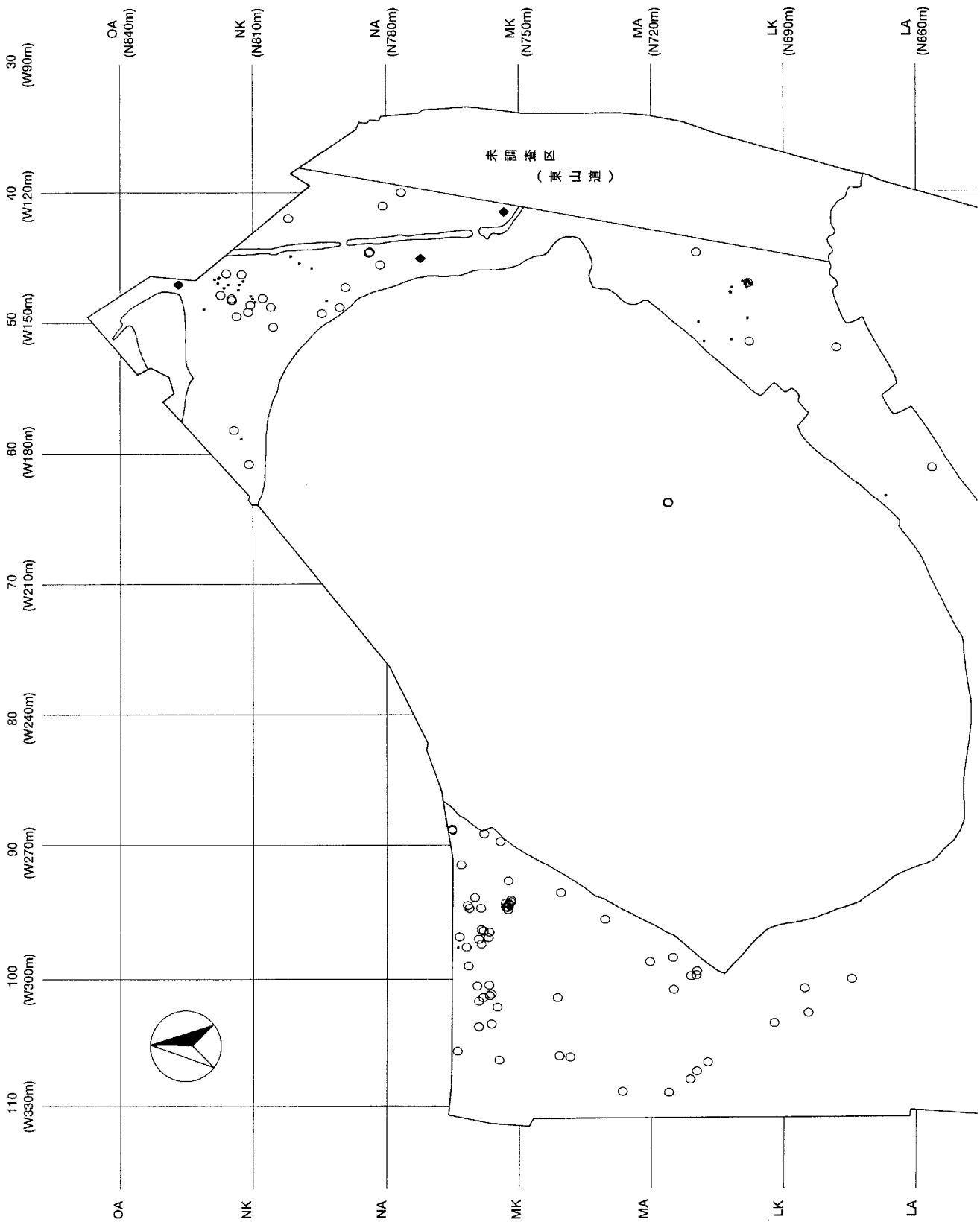


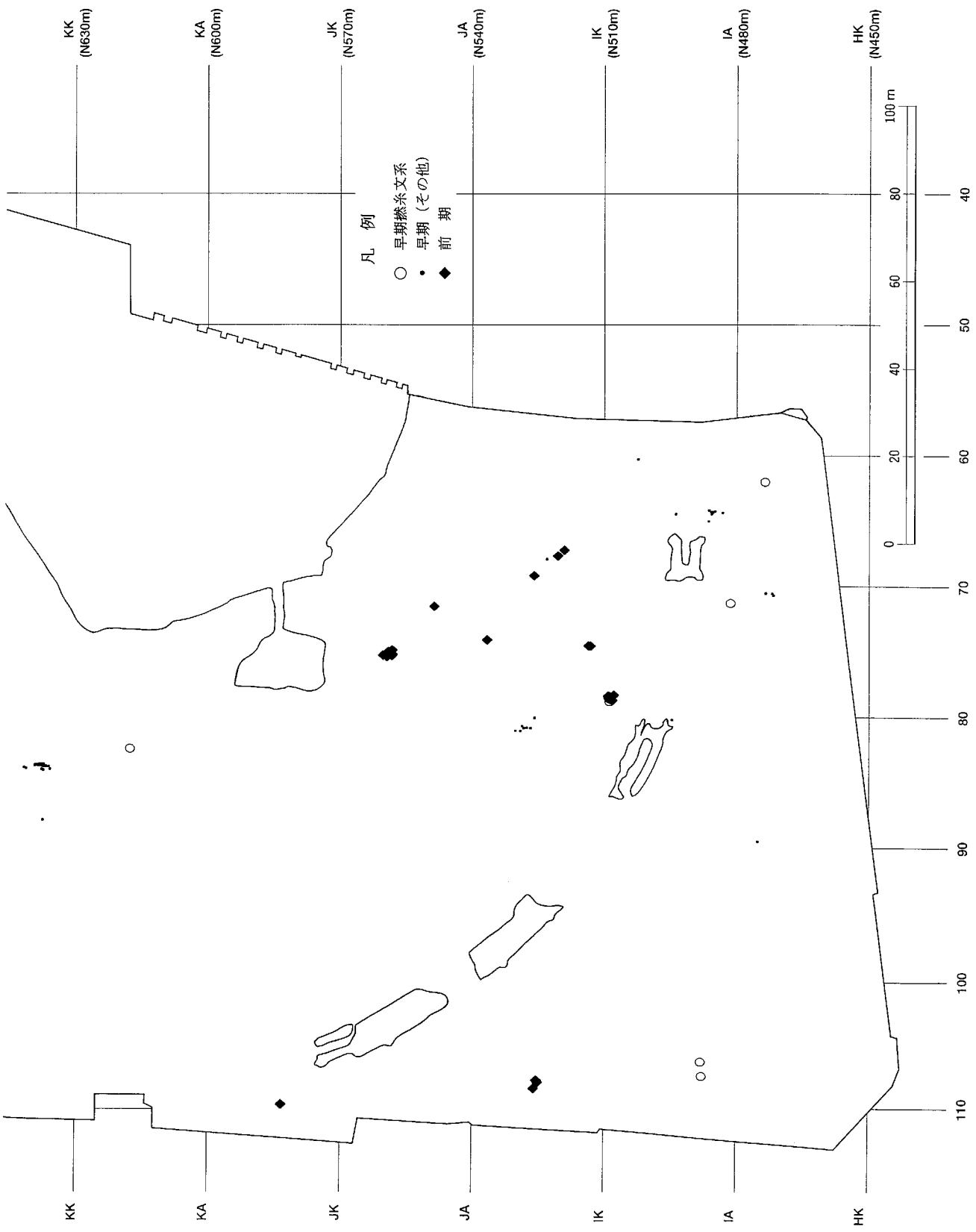
第206図　小穴実測図（6）


OA (N840m)
NK (N810m)
NA (N780m)
MK (N750m)
MA (N720m)
LK (N690m)
LA (N660m)
30 (W90m)
40 (W120m)
50 (W150m)
60 (W180m)
70 (W210m)
80 (W240m)
90 (W270m)
100 (W300m)
110 (W330m)
未調査区
（東山道）

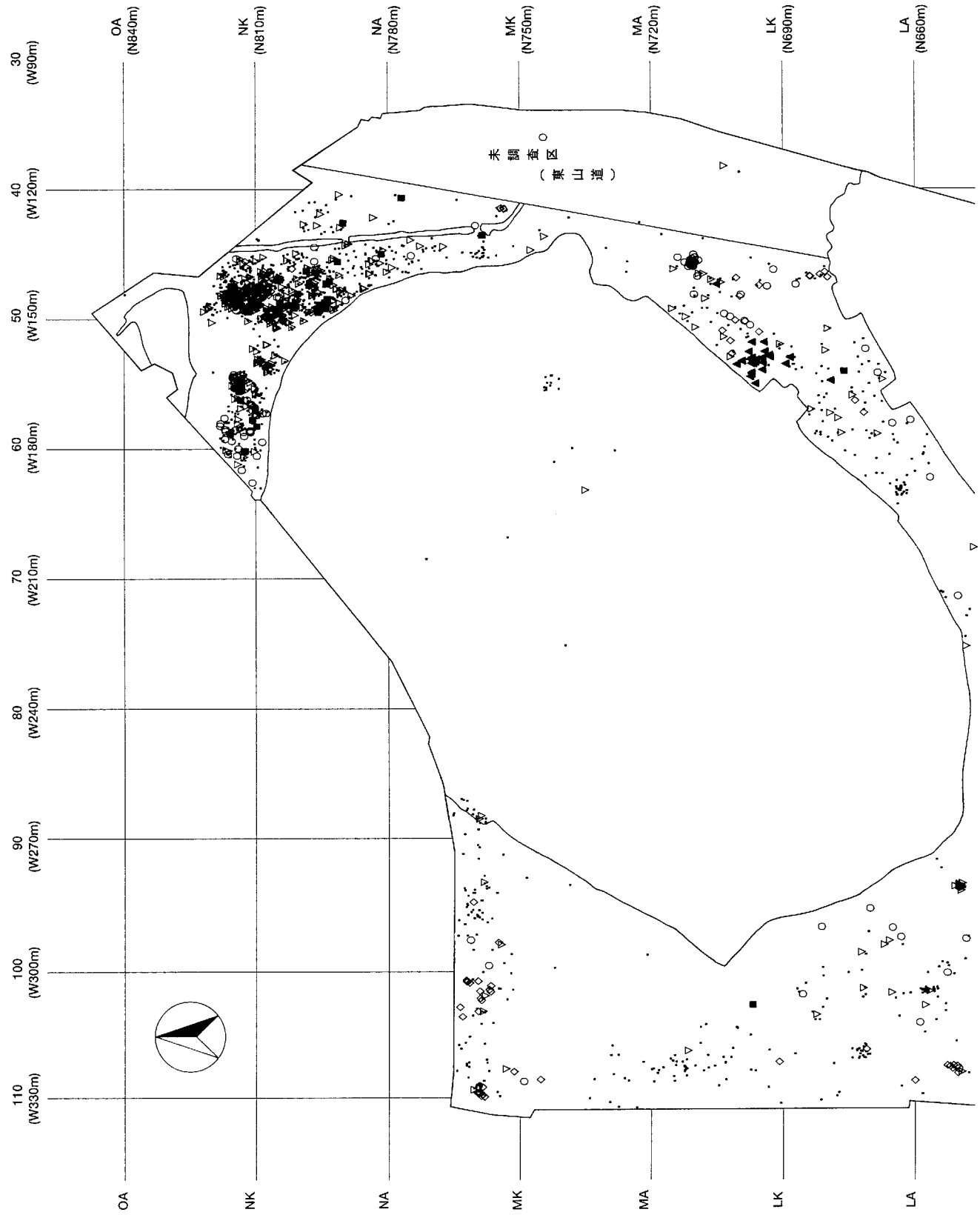


第207図　土器分布図（1）

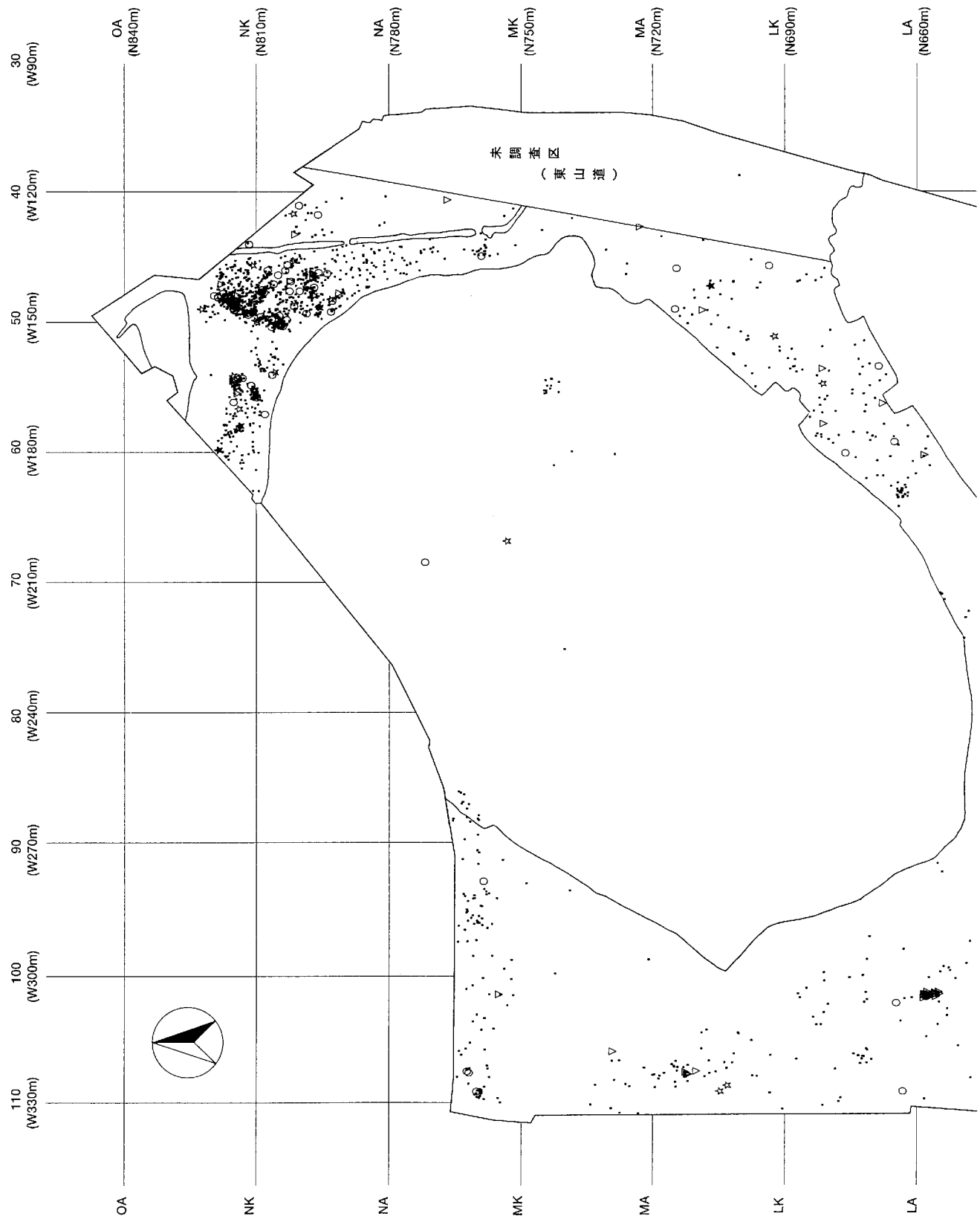

OA (N840m)
NK (N810m)
NA (N780m)
MK (N750m)
MA (N720m)
LK (N690m)
LA (N660m)
30 (W90m)
40 (W120m)
50 (W150m)
60 (W180m)
70 (W210m)
80 (W240m)
90 (W270m)
100 (W300m)
110 (W330m)
未調査区
（東日流）

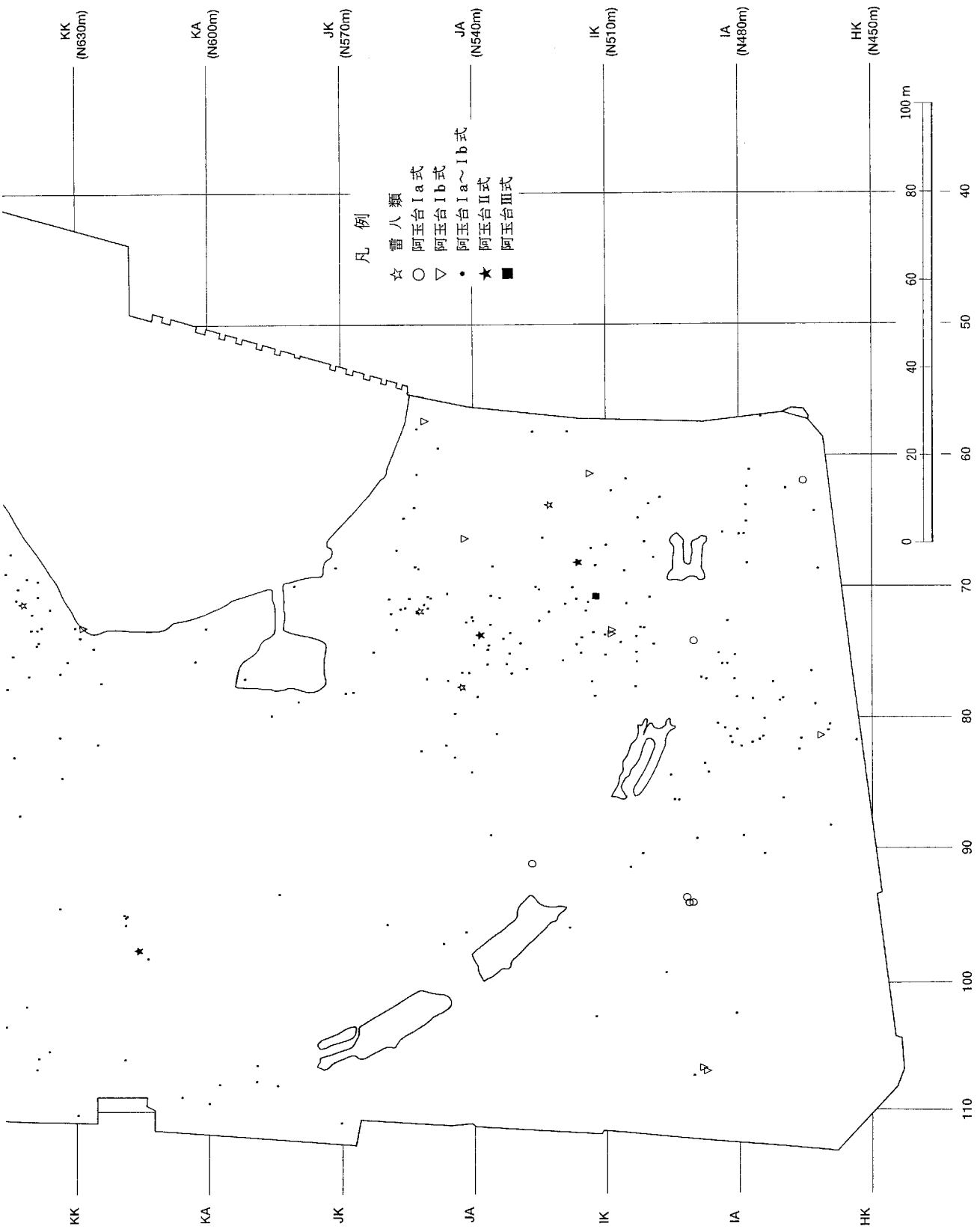


第208図　土器分布図（2）－早期／前期

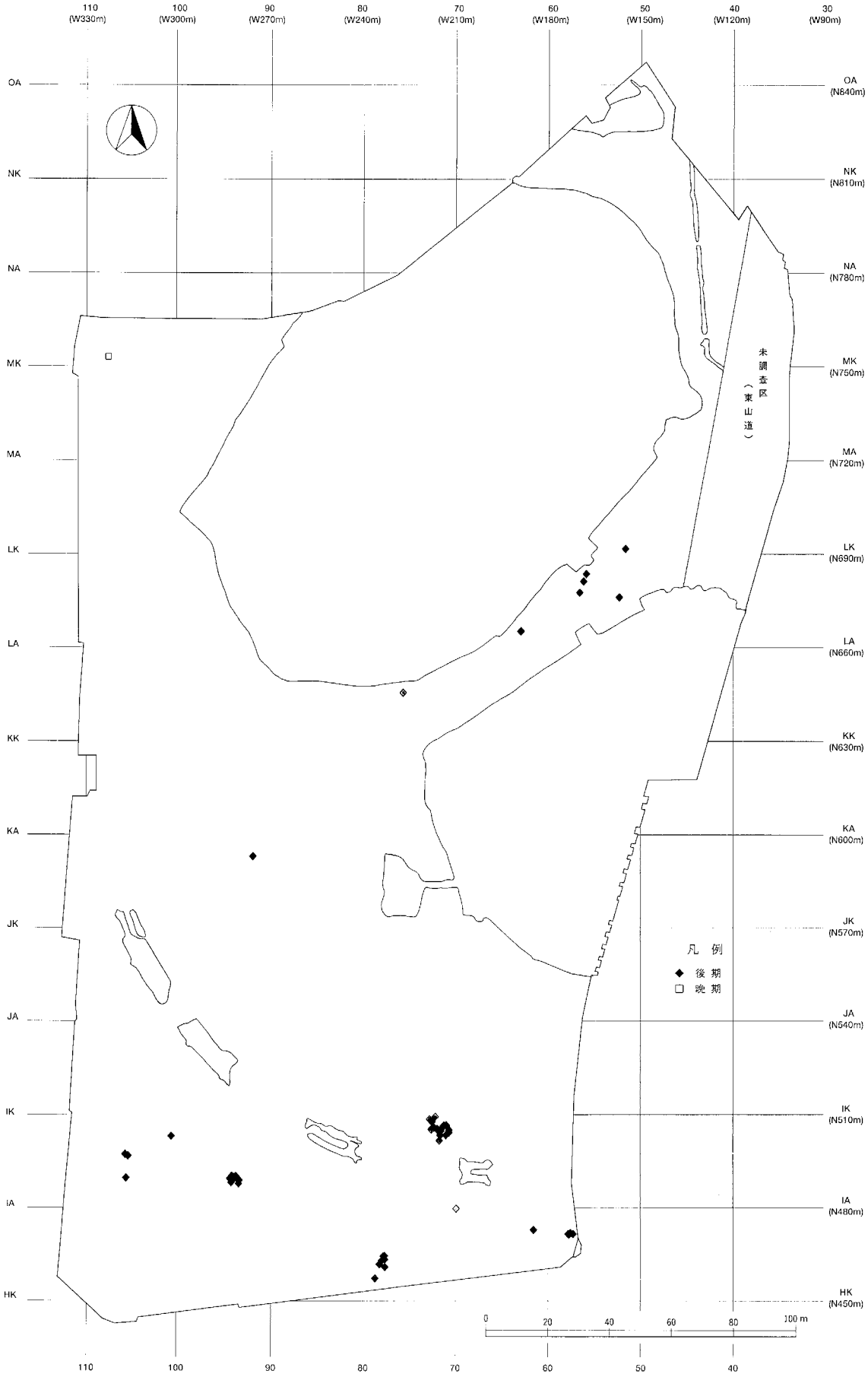

OA (N840m)
NK (N810m)
NA (N780m)
MK (N750m)
MA (N720m)
LK (N690m)
LA (N660m)
30 (W90m)
40 (W120m)
50 (W150m)
60 (W180m)
70 (W210m)
80 (W240m)
90 (W270m)
100 (W300m)
110 (W330m)
未調査区
（東山道）

第209図 土器分布図（3）－中期


OA (N840m)
NK (N810m)
NA (N780m)
MK (N750m)
MA (N720m)
LK (N690m)
LA (N660m)
30 (W90m)
40 (W120m)
50 (W150m)
60 (W180m)
70 (W210m)
80 (W240m)
90 (W270m)
100 (W300m)
110 (W330m)
未調査区
（東山道）



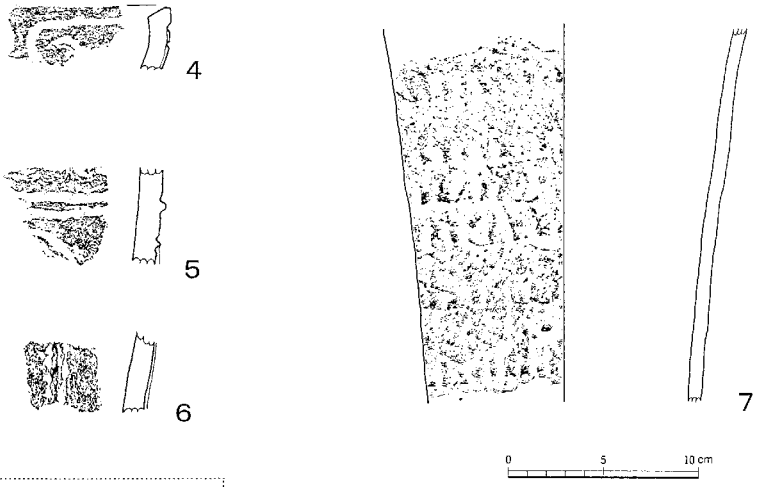
第210図　土器分布図（4）－阿玉台式



第211図　土器分布図（５）－後期／晩期

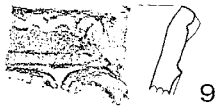
SI-1J

SI-2J

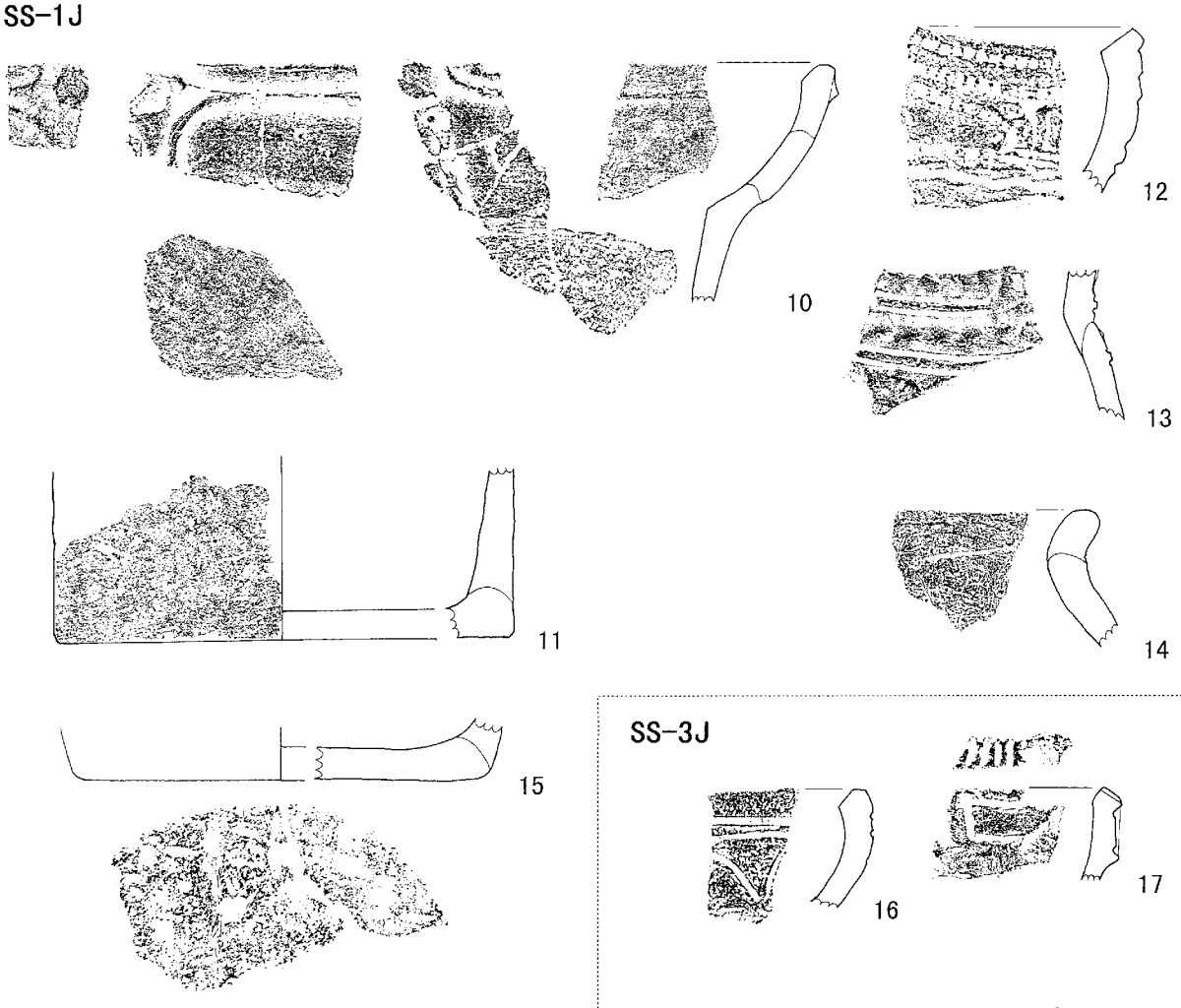


SX-7J

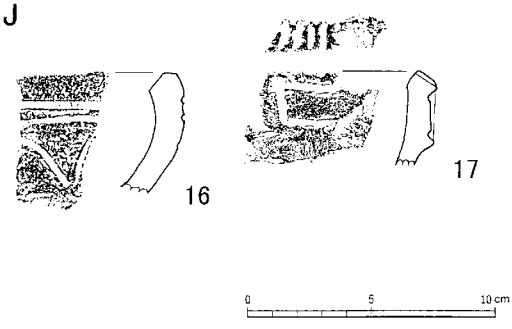
SX-61J



SS-1J

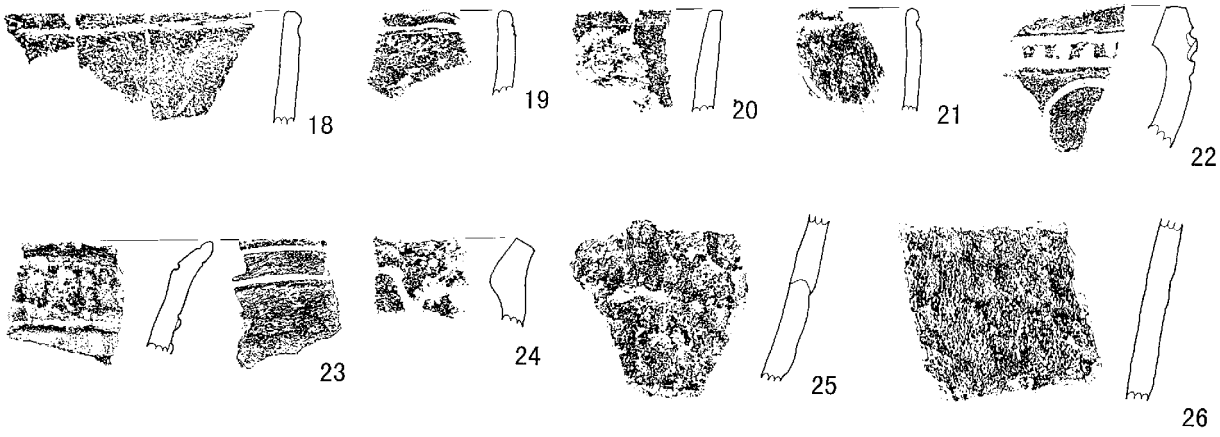


SS-3J



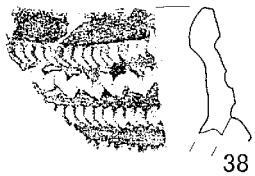
第212図　遺構出土土器（1）

SS-6J・9J

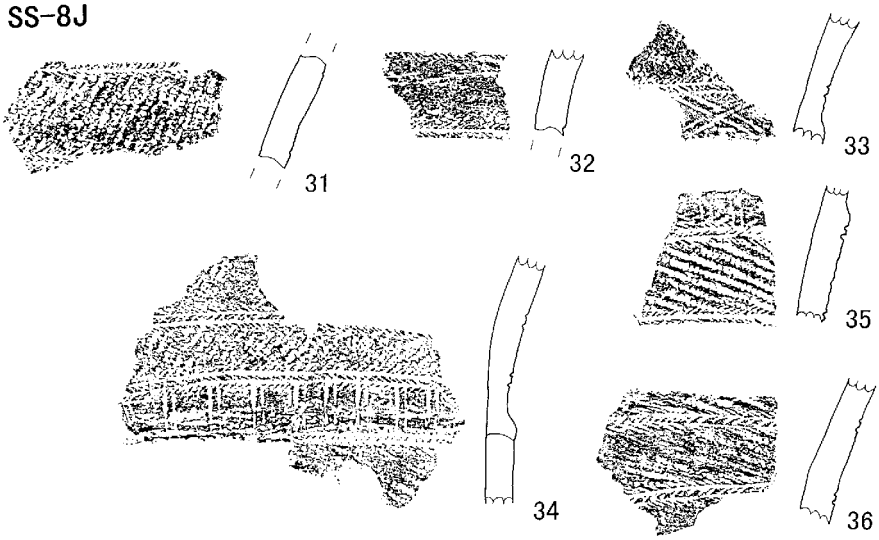


SS-7J

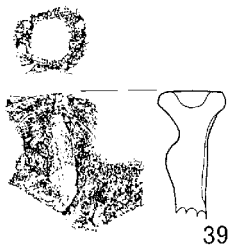
SS-11J

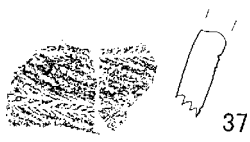


SS-8J

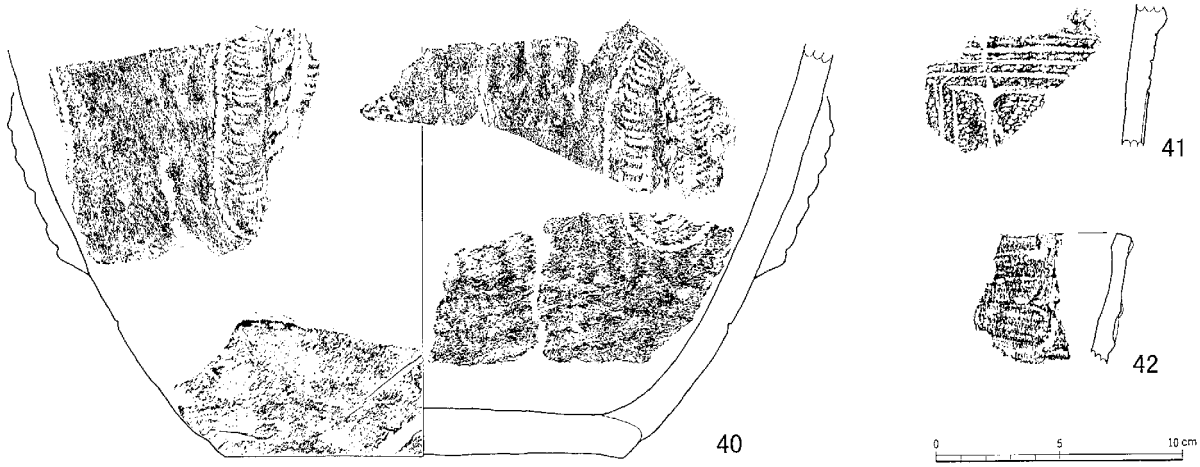


SS-12J





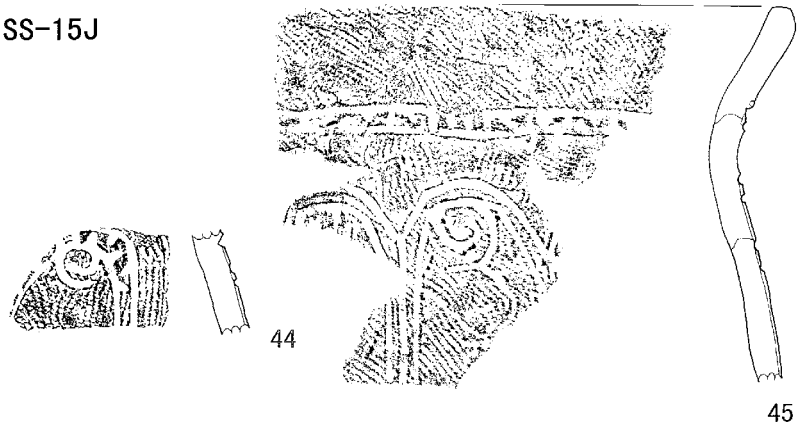
SS-10J・13J



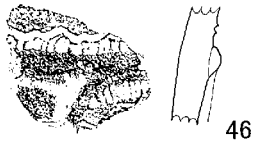
第213図　遺構出土土器（2）

SS-14J

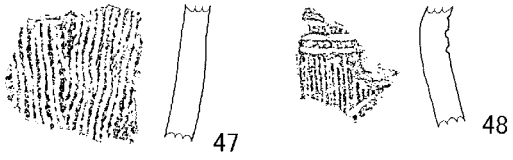
SS-15J



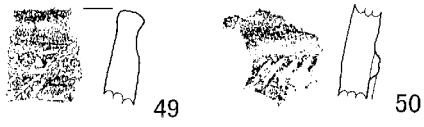
SS-17J



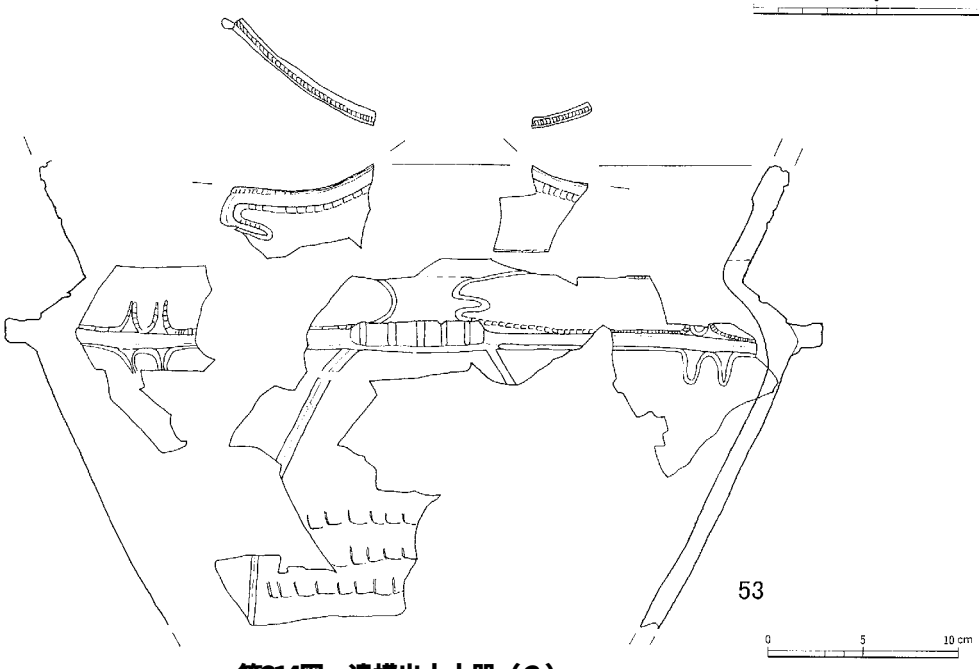
SS-18J



SS-19J

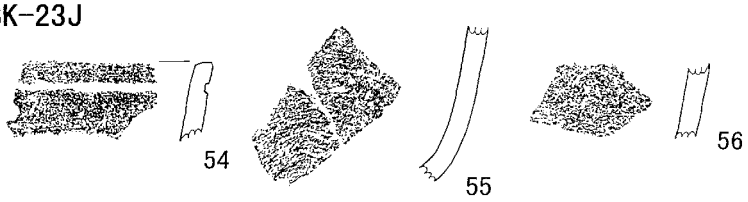


SS-16J

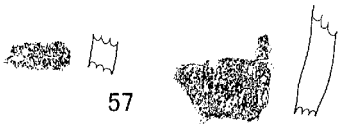


第214図　遺構出土土器（3）

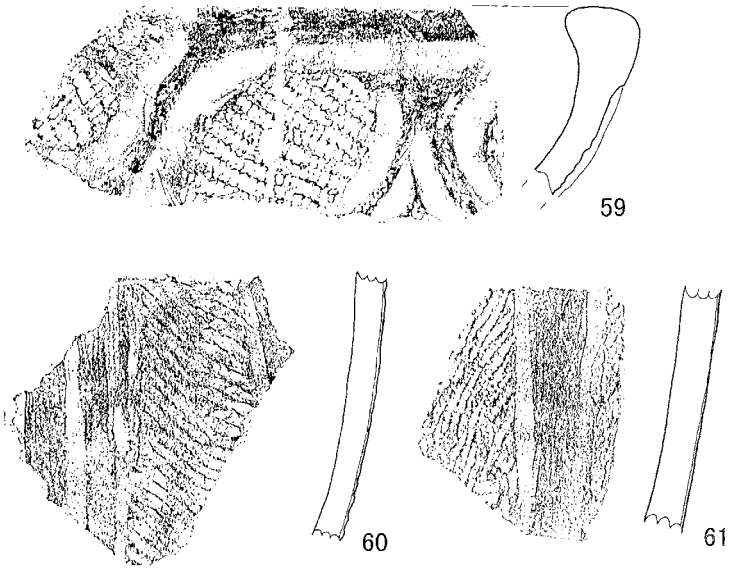
SK-23J



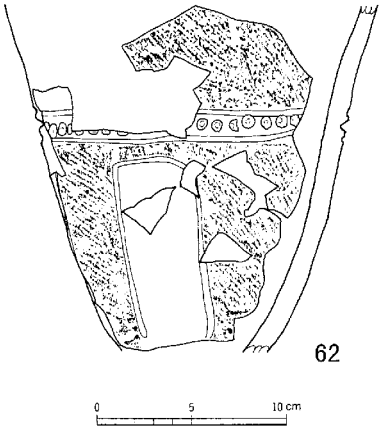
SK-36J



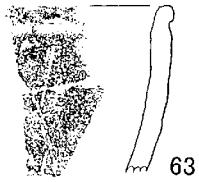
SK-790J



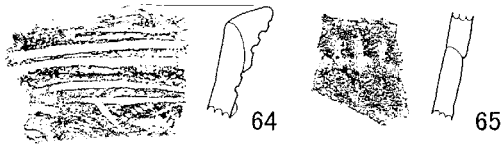
SK-823J



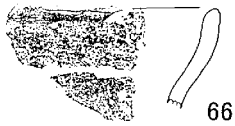
SK-818J



SK-937J

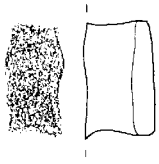


SK-1012J

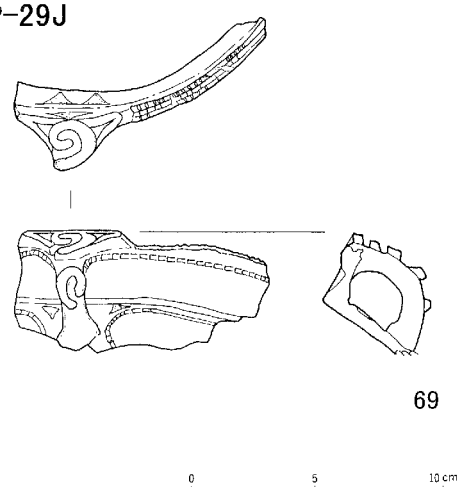


SK-1019J

SK-1060J



P-29J

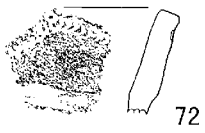


第215図　遺構出土土器（4）

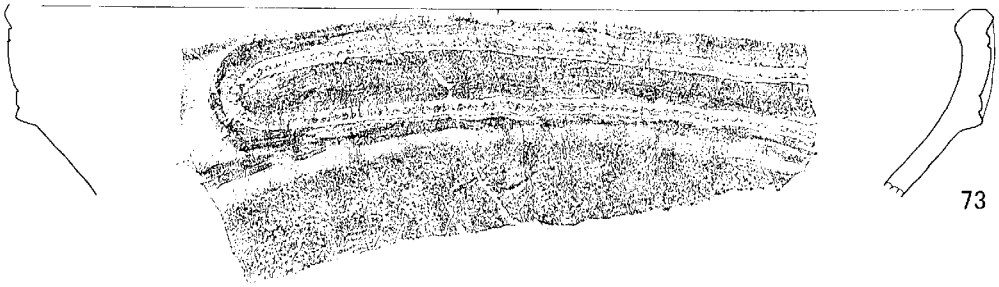
P-85J

P-9J

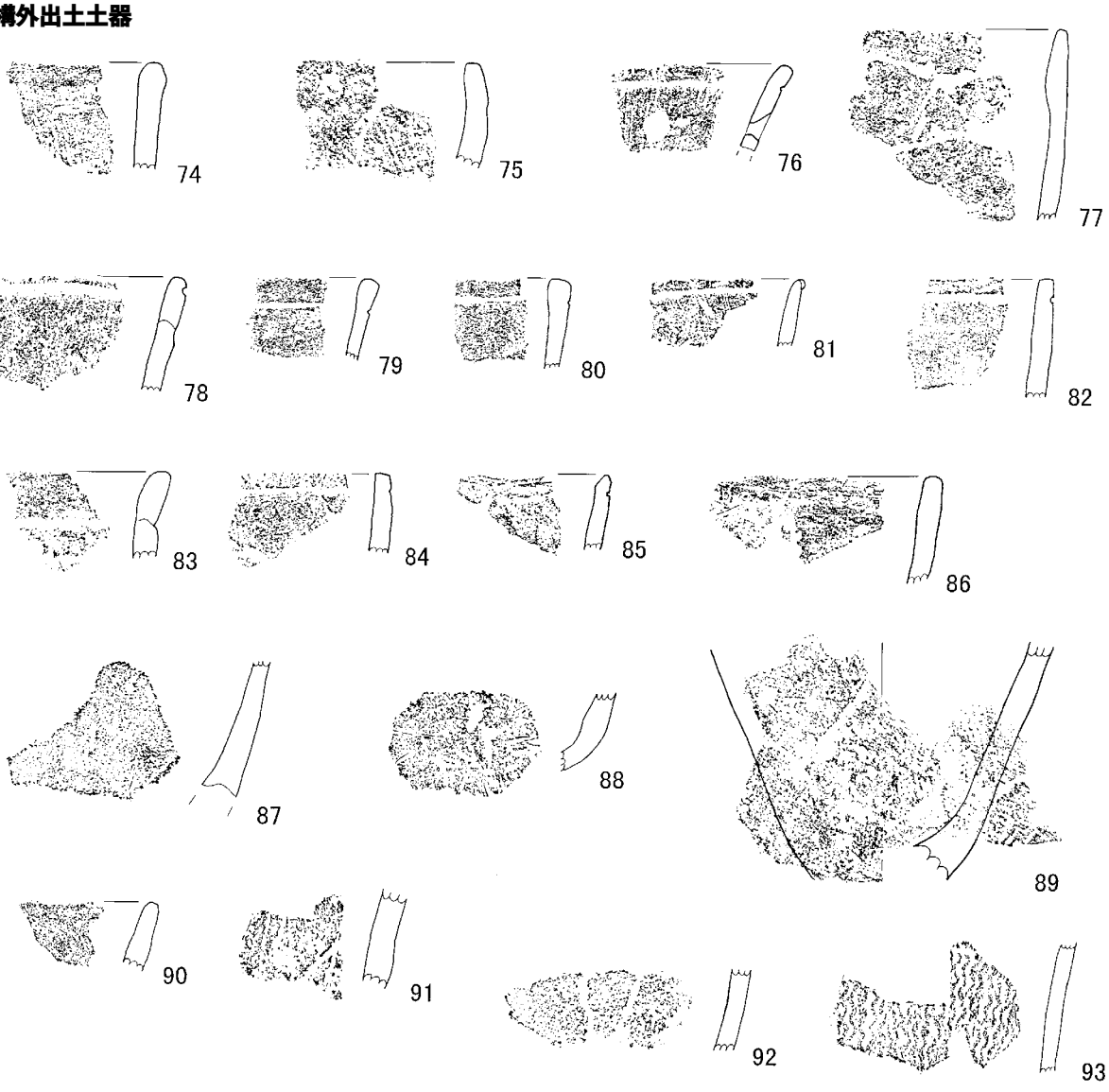
P4-196J



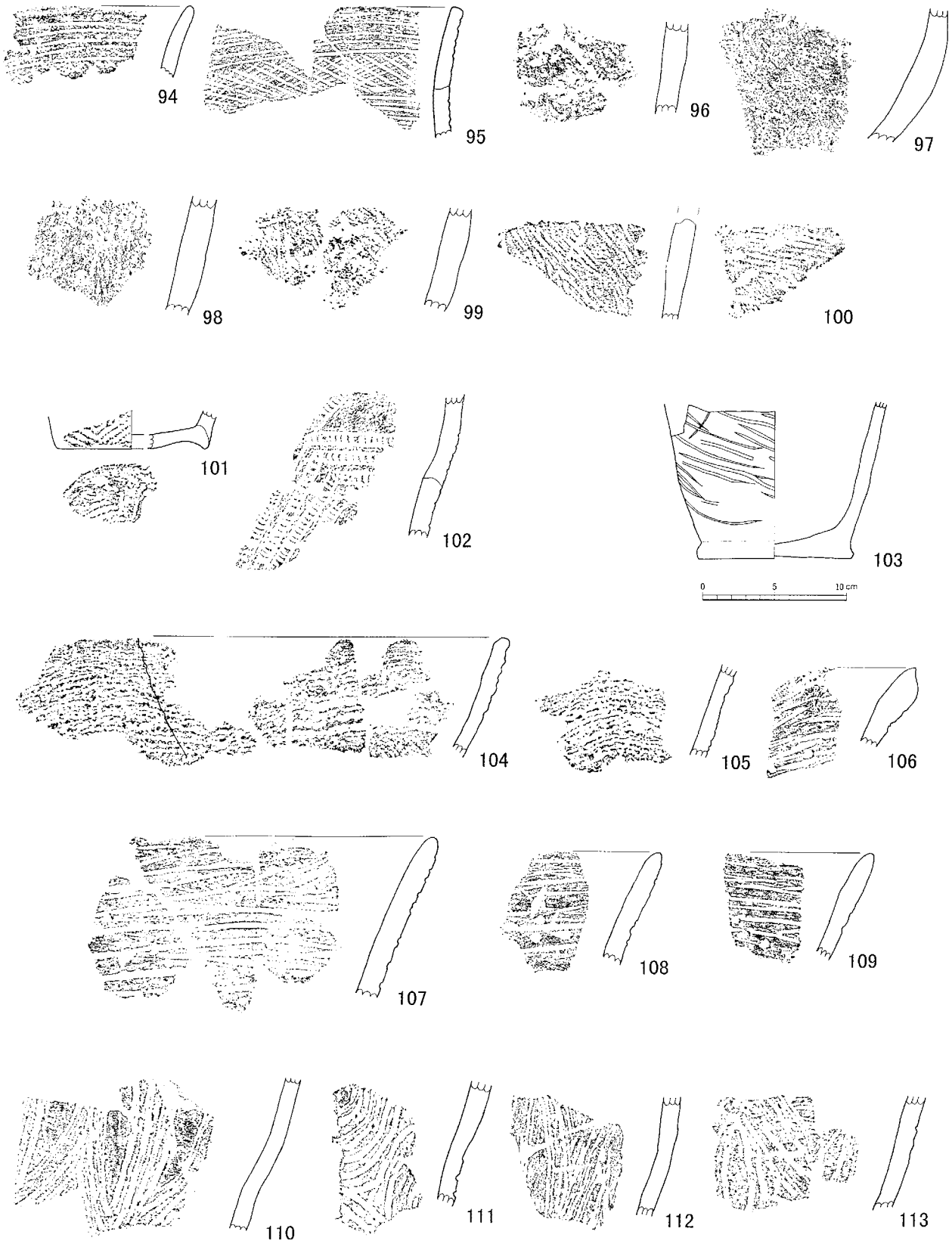
P4-374J



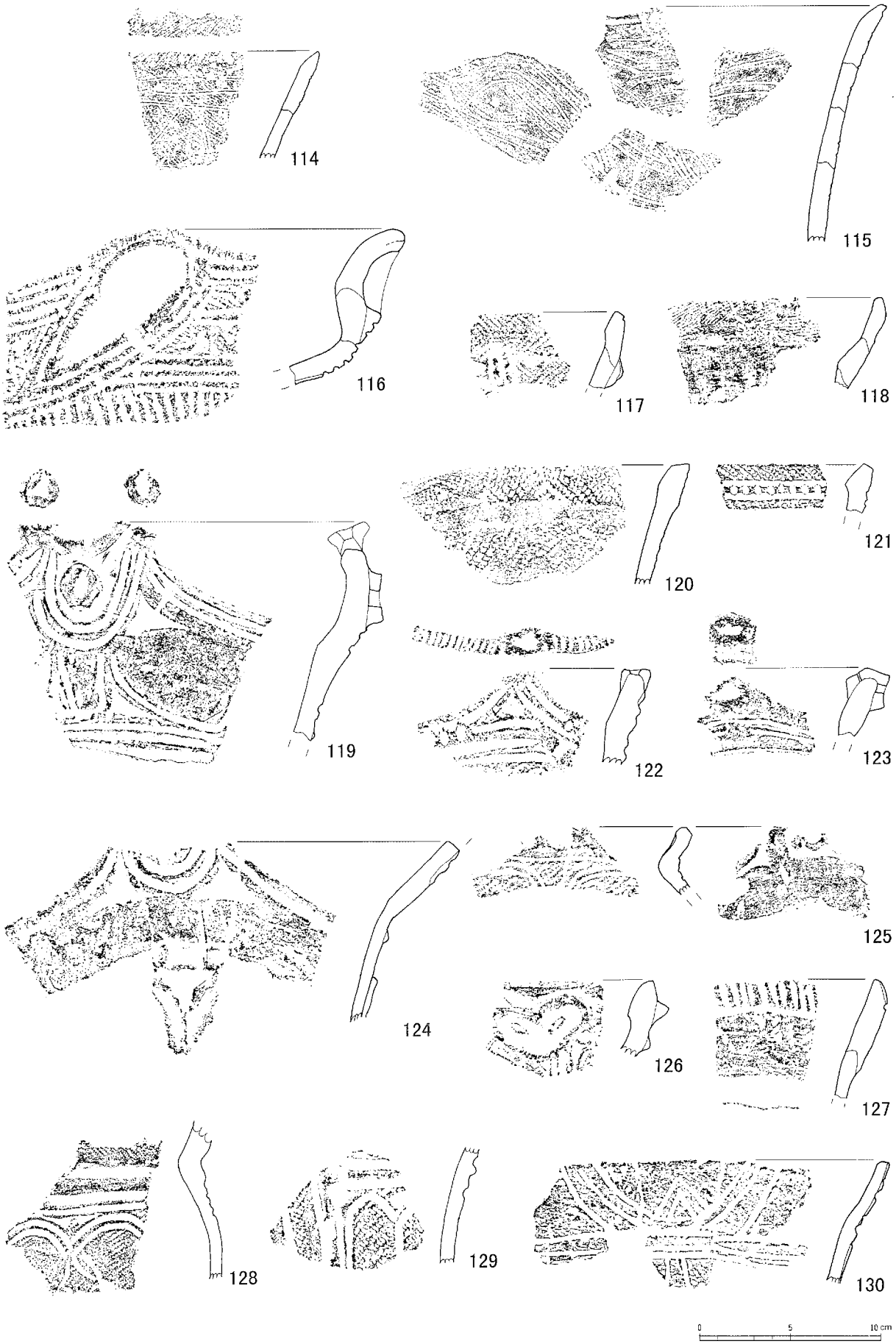
遺構外出土土器



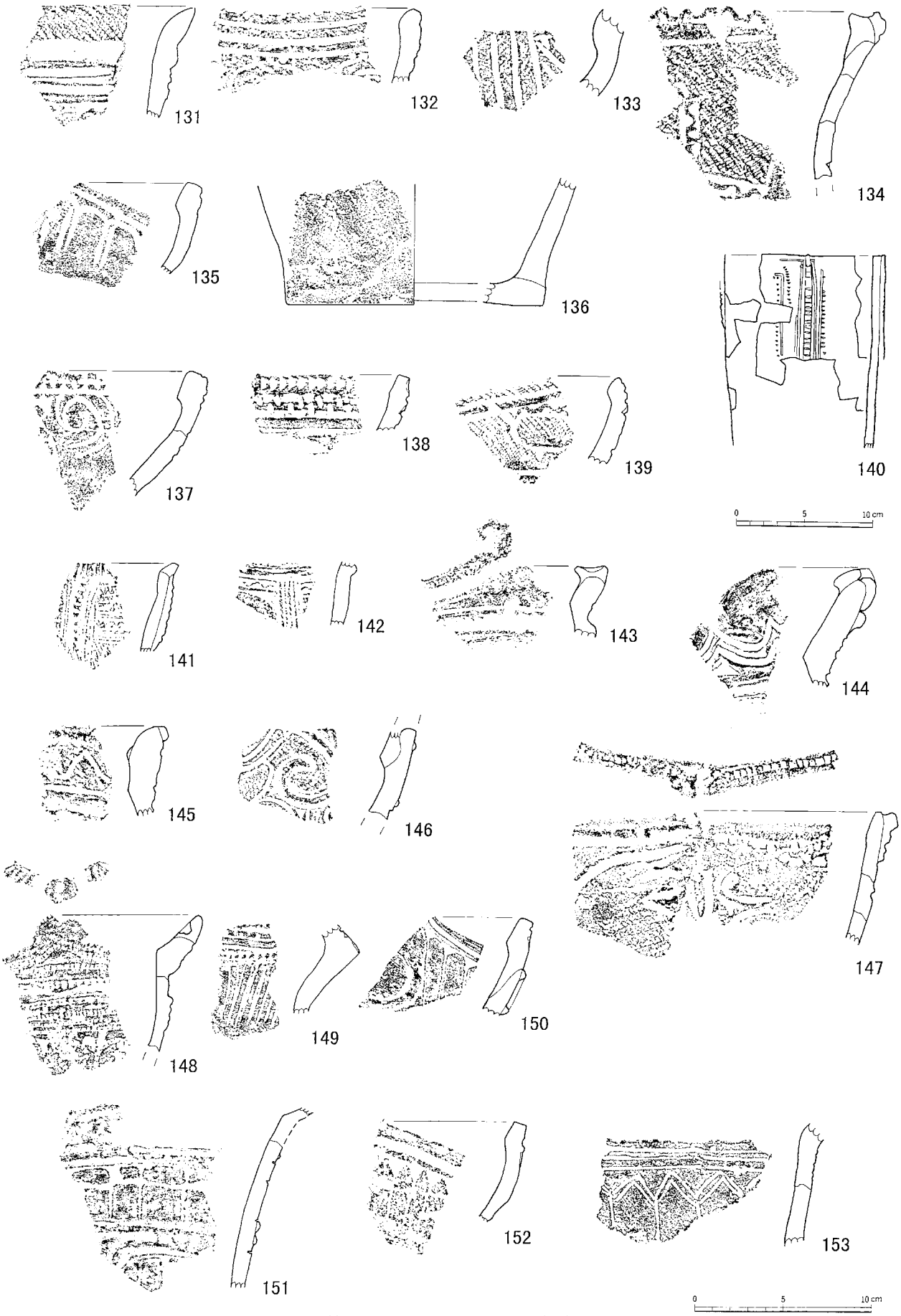
第216図　遺構出土土器（5）／遺構外出土土器（1）



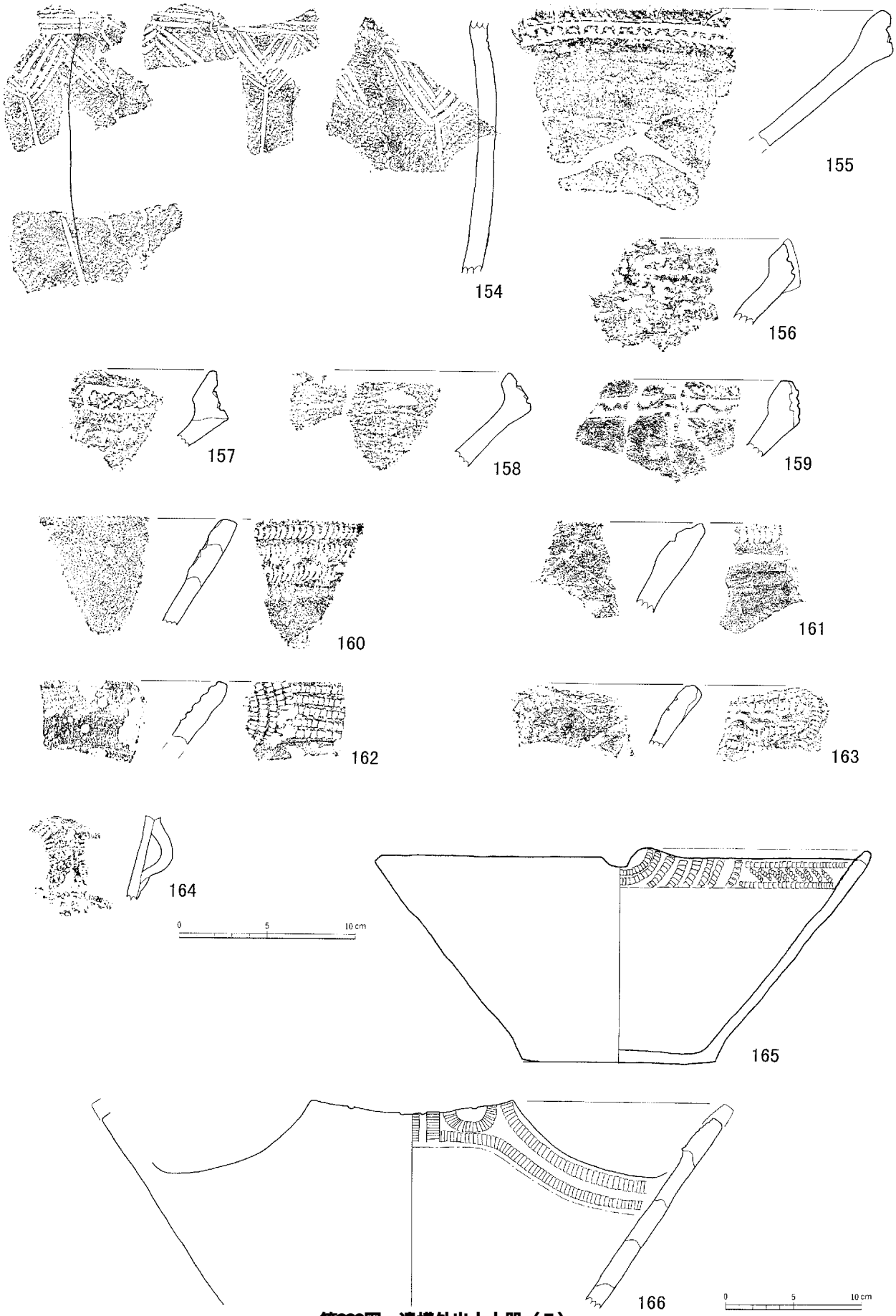
第217図　遺構外出土土器（2）



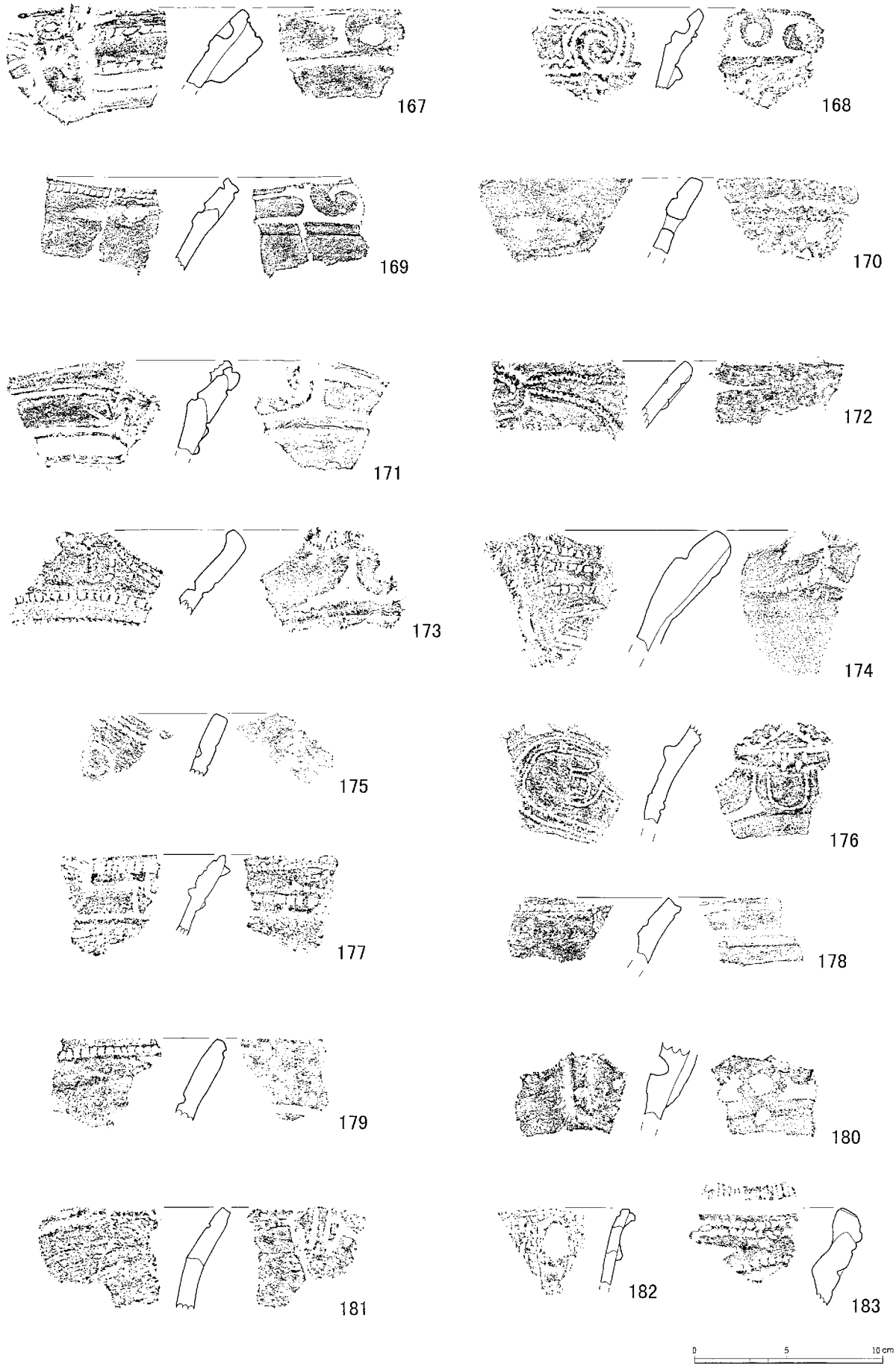
第218図　遺構外出土土器（3）



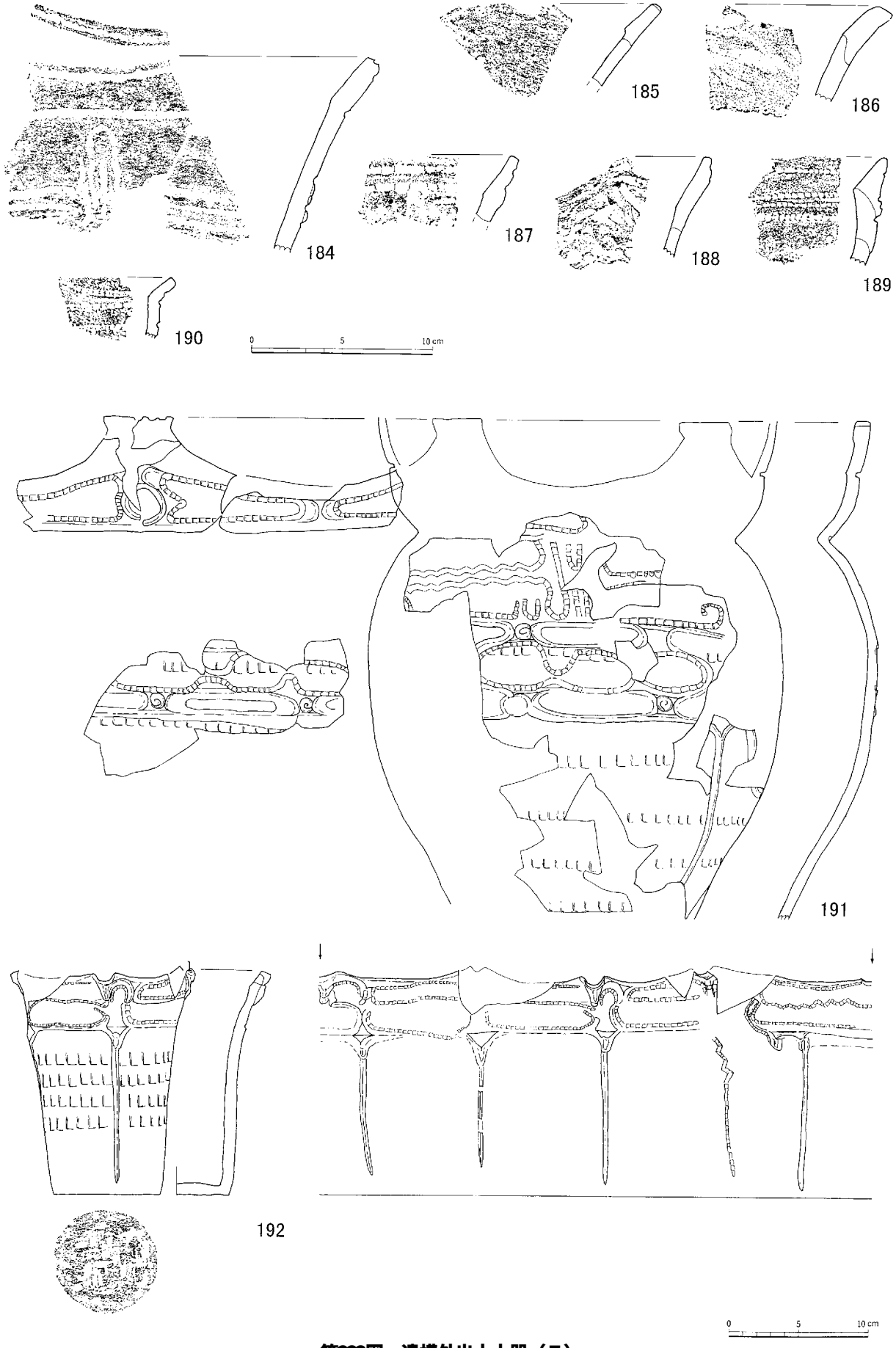
第219図　遺構外出土土器（4）



第220図　遺構外出土土器（5）

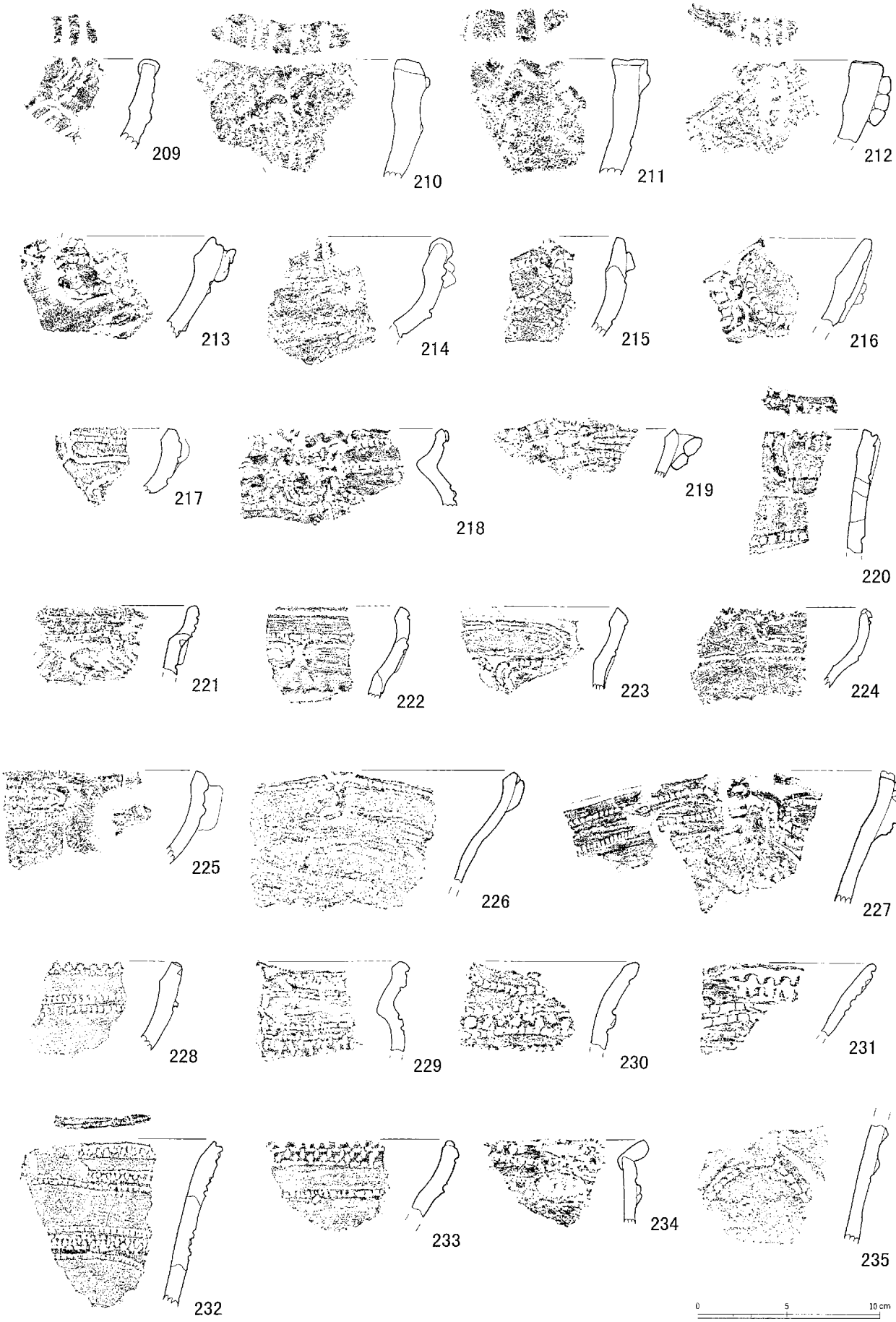


第221図　遺構外出土土器（6）

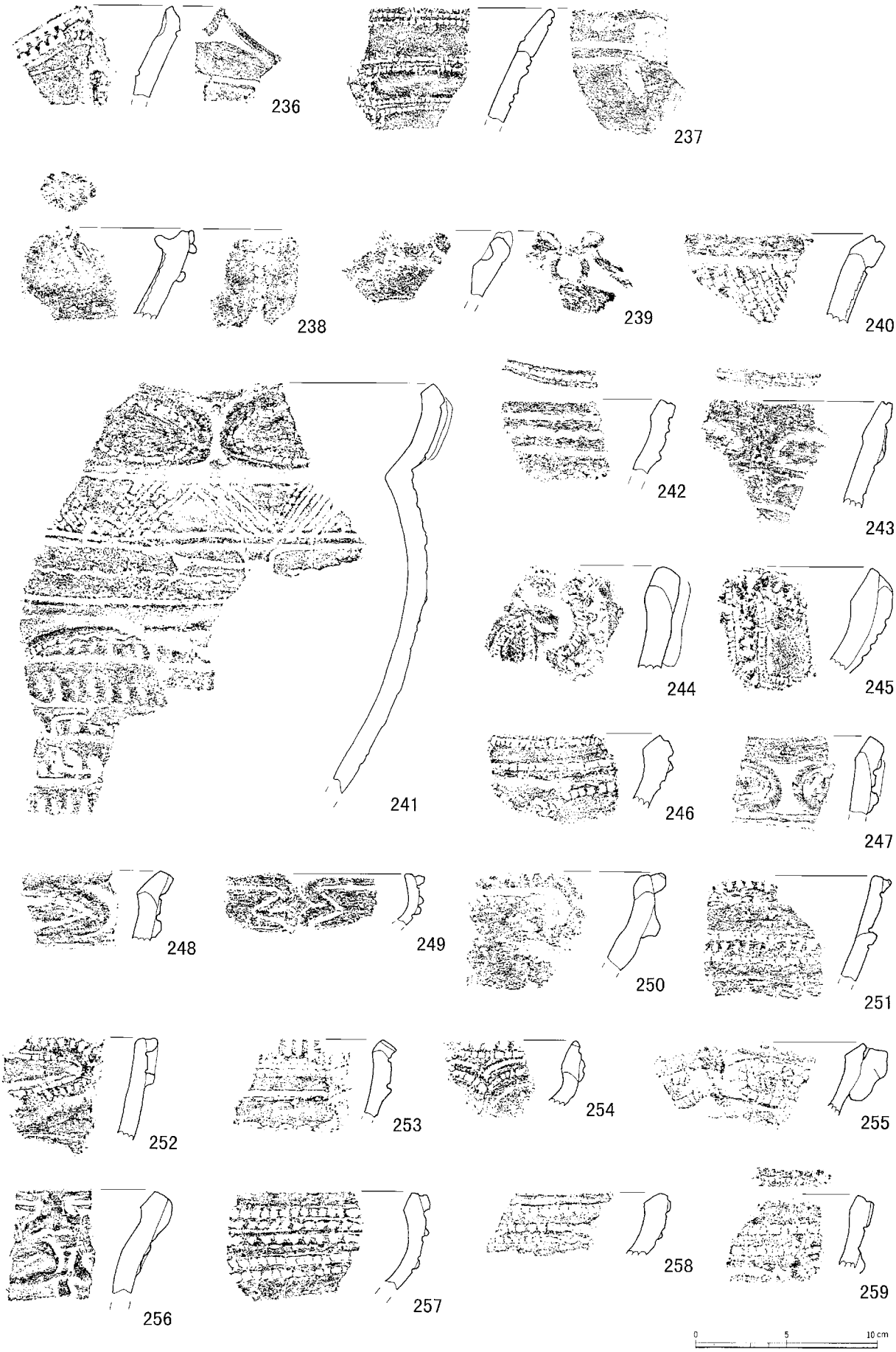


第222図　遺構外出土土器（7）

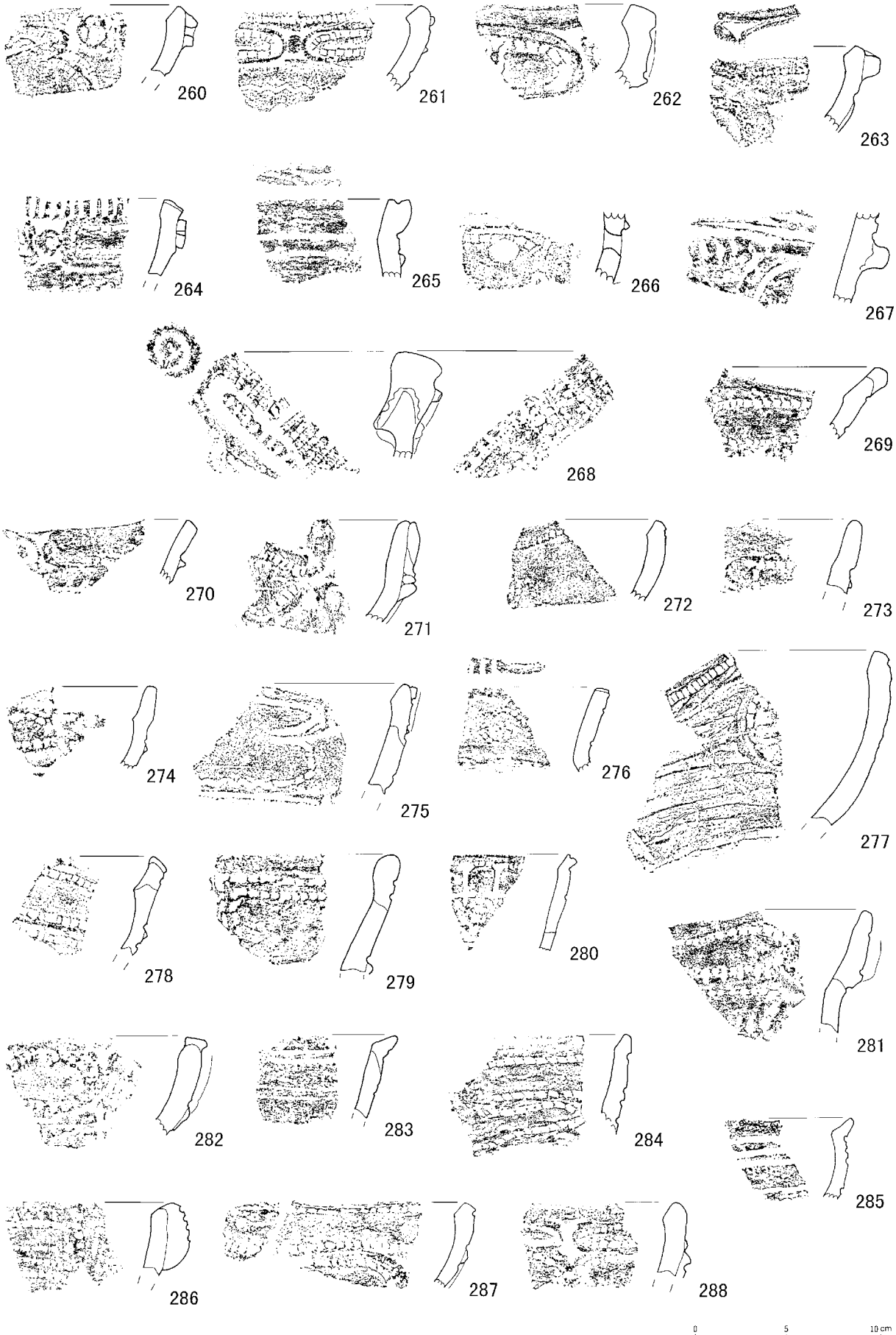
第223図　遺構外出土土器（8）



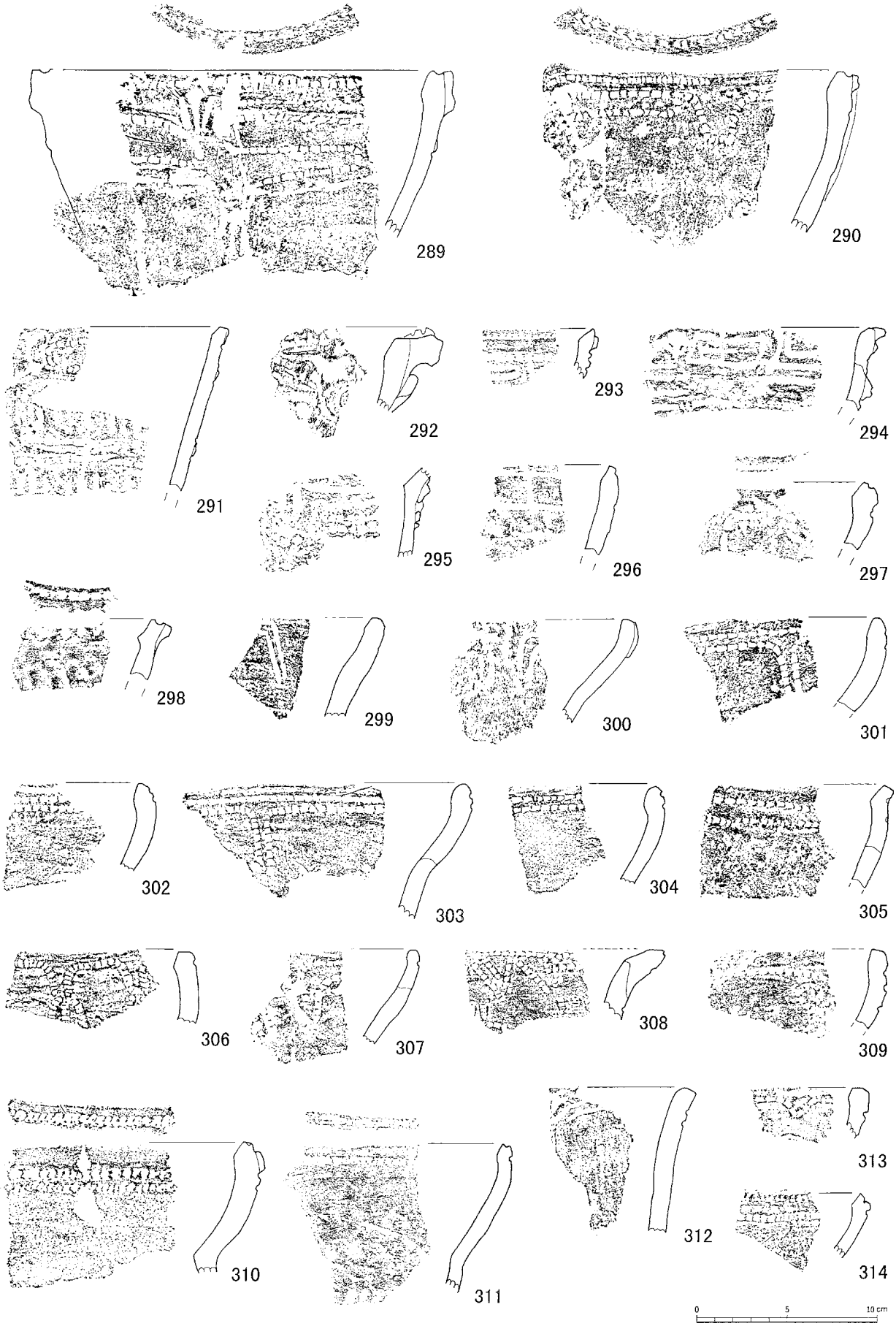
第224図　遺構外出土土器（9）



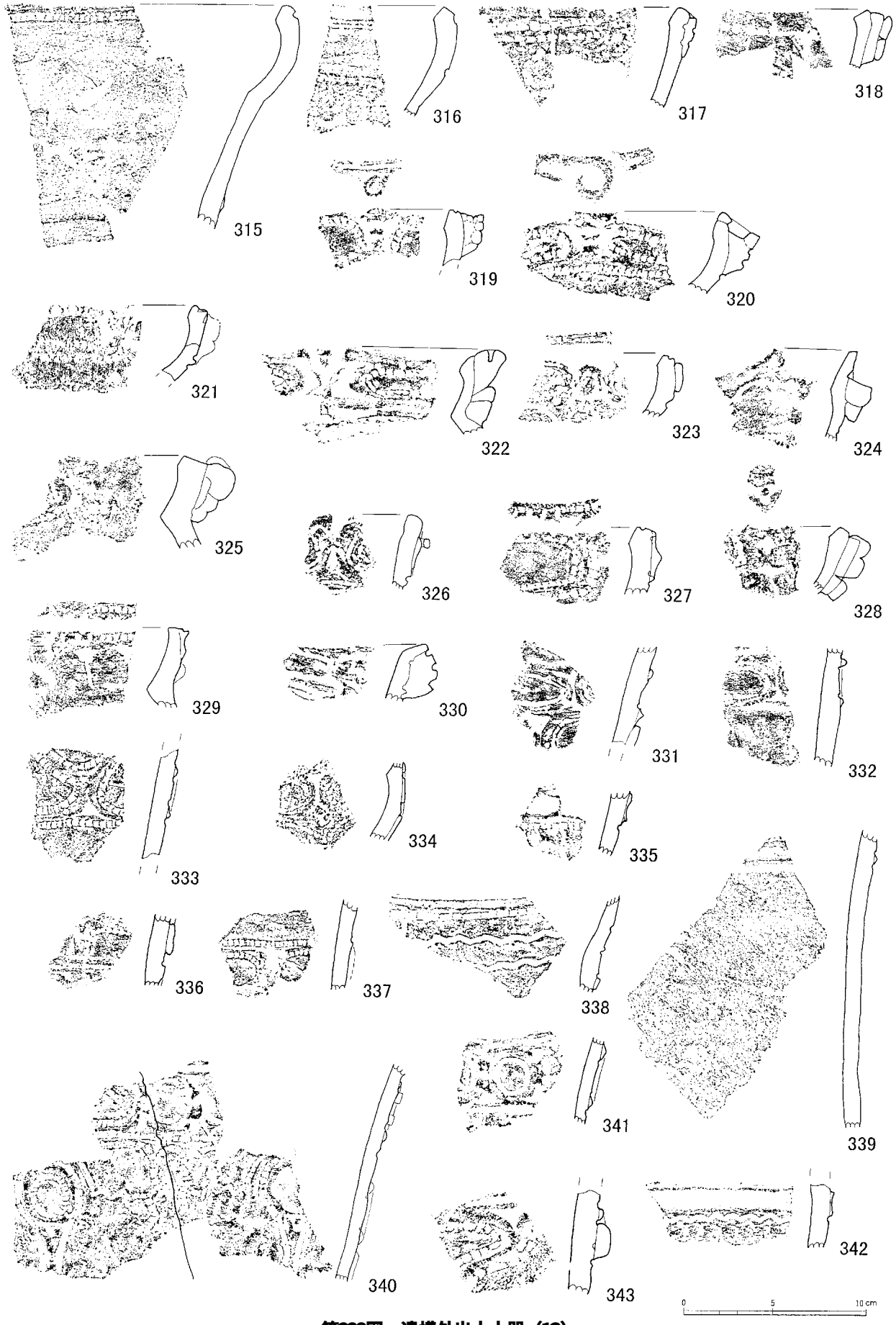
第225図　遺構外出土土器（10）



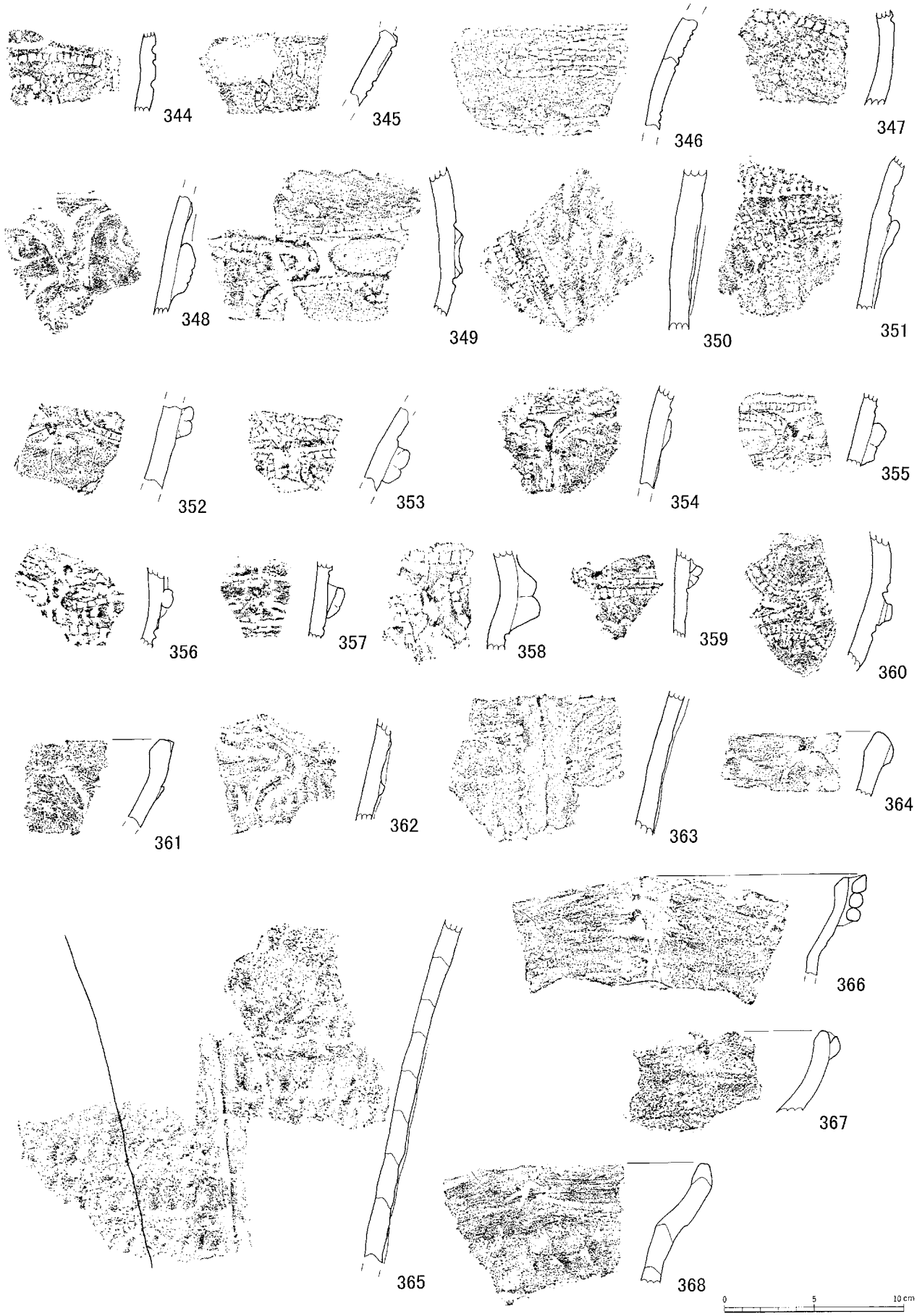
第226図　遺構外出土土器（11）



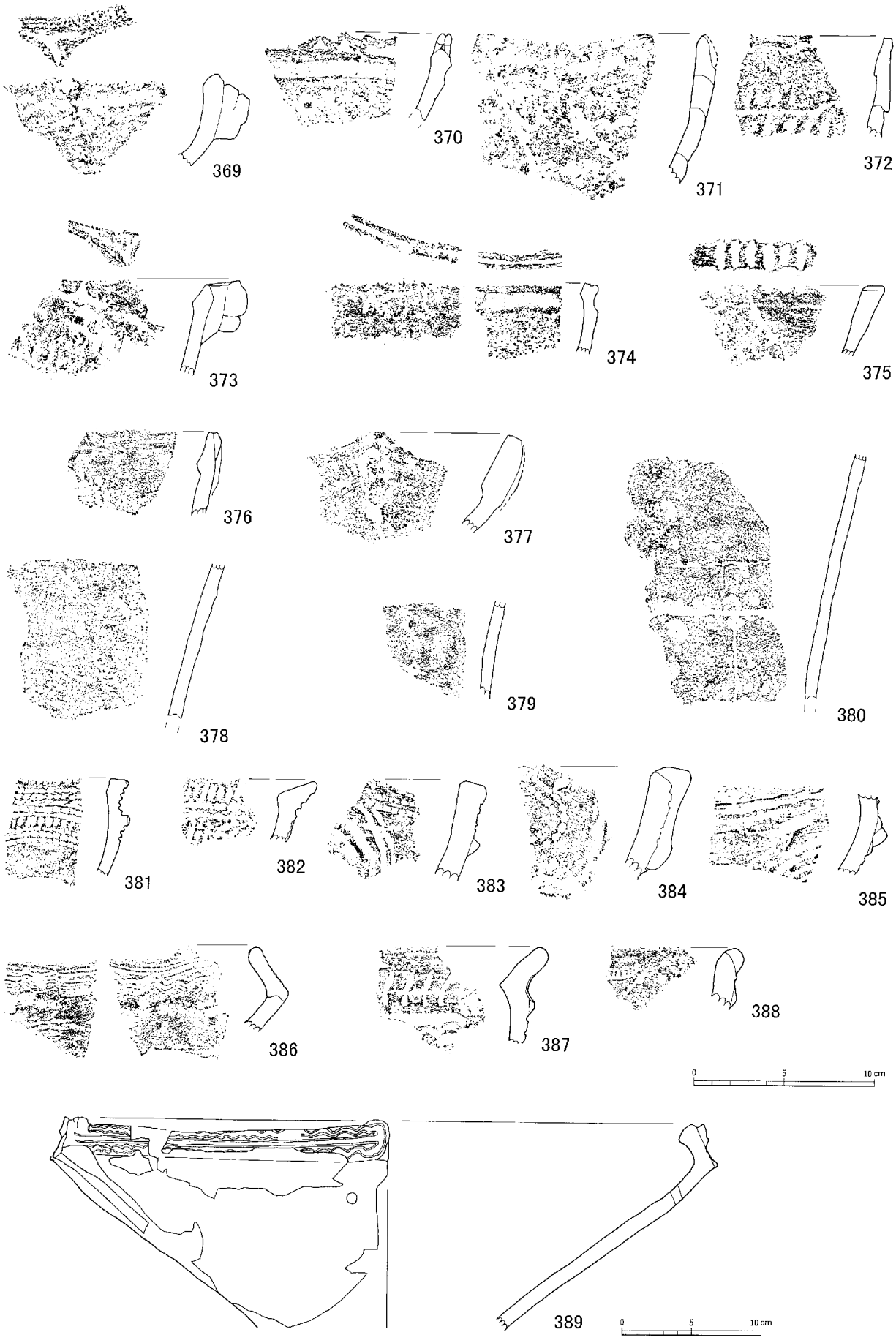
第227図　遺構外出土土器（12）



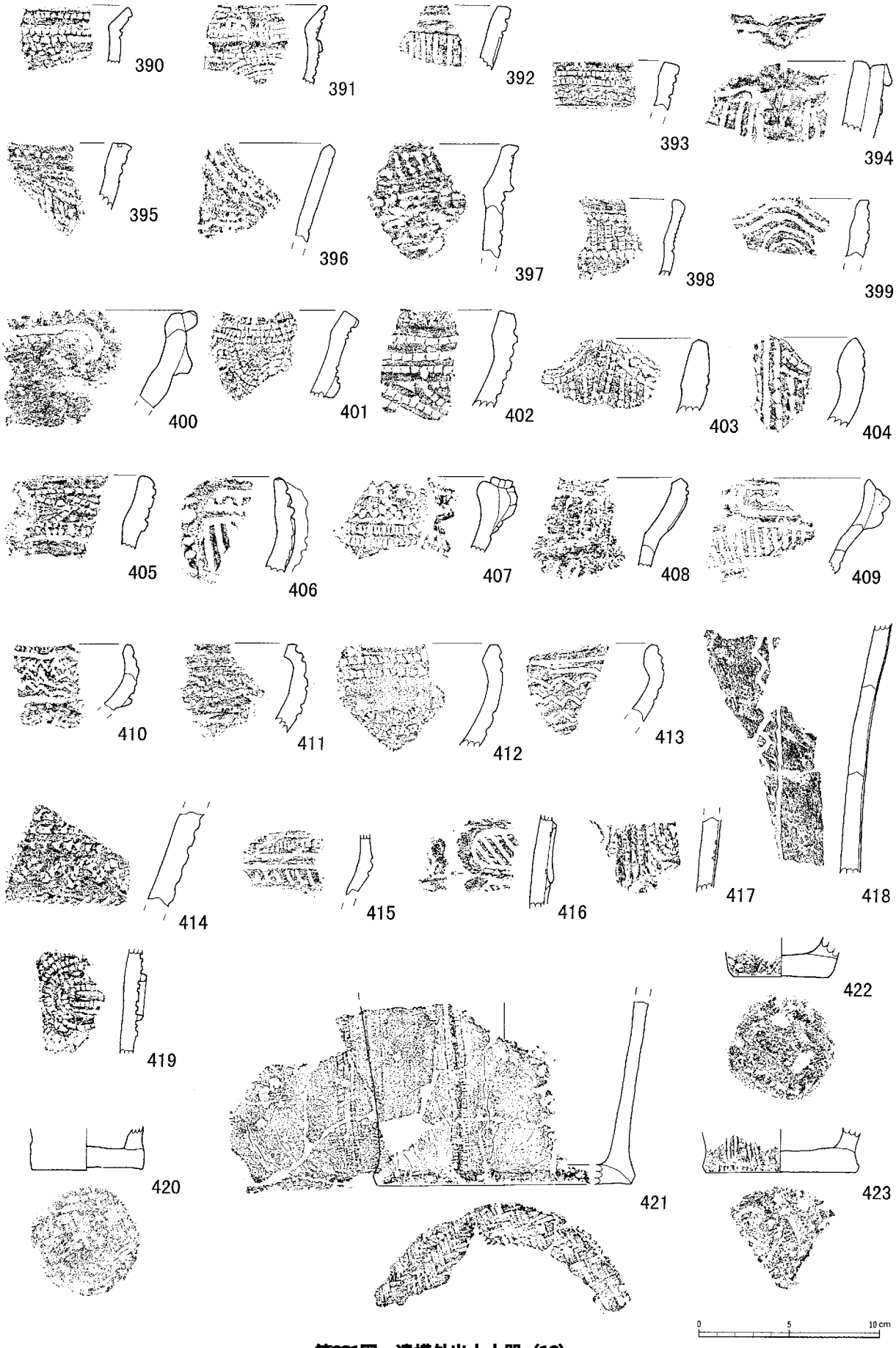
第228図　遺構外出土土器（13）



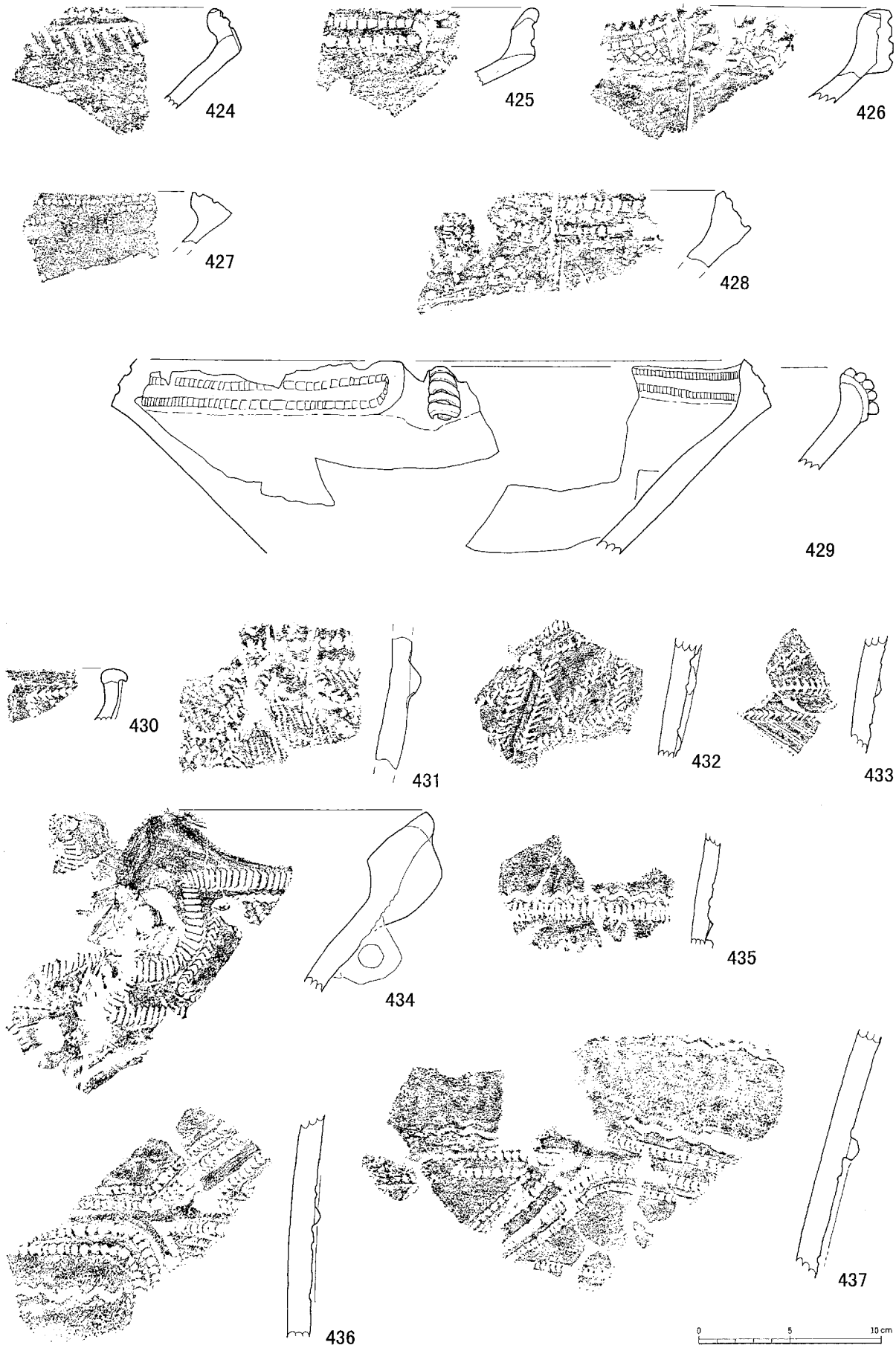
第229図　遺構外出土土器（14）



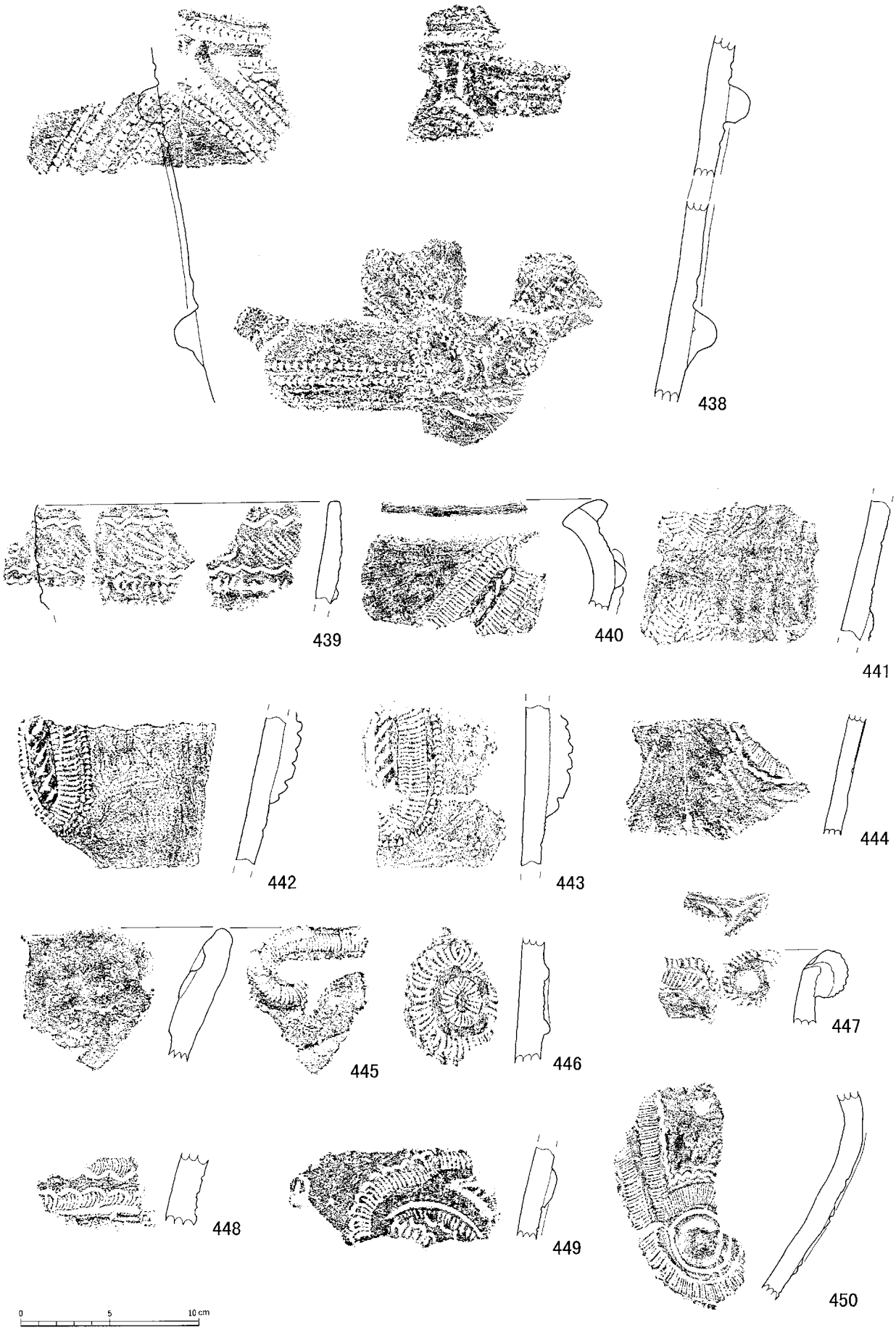
第230図　遺構外出土土器（15）



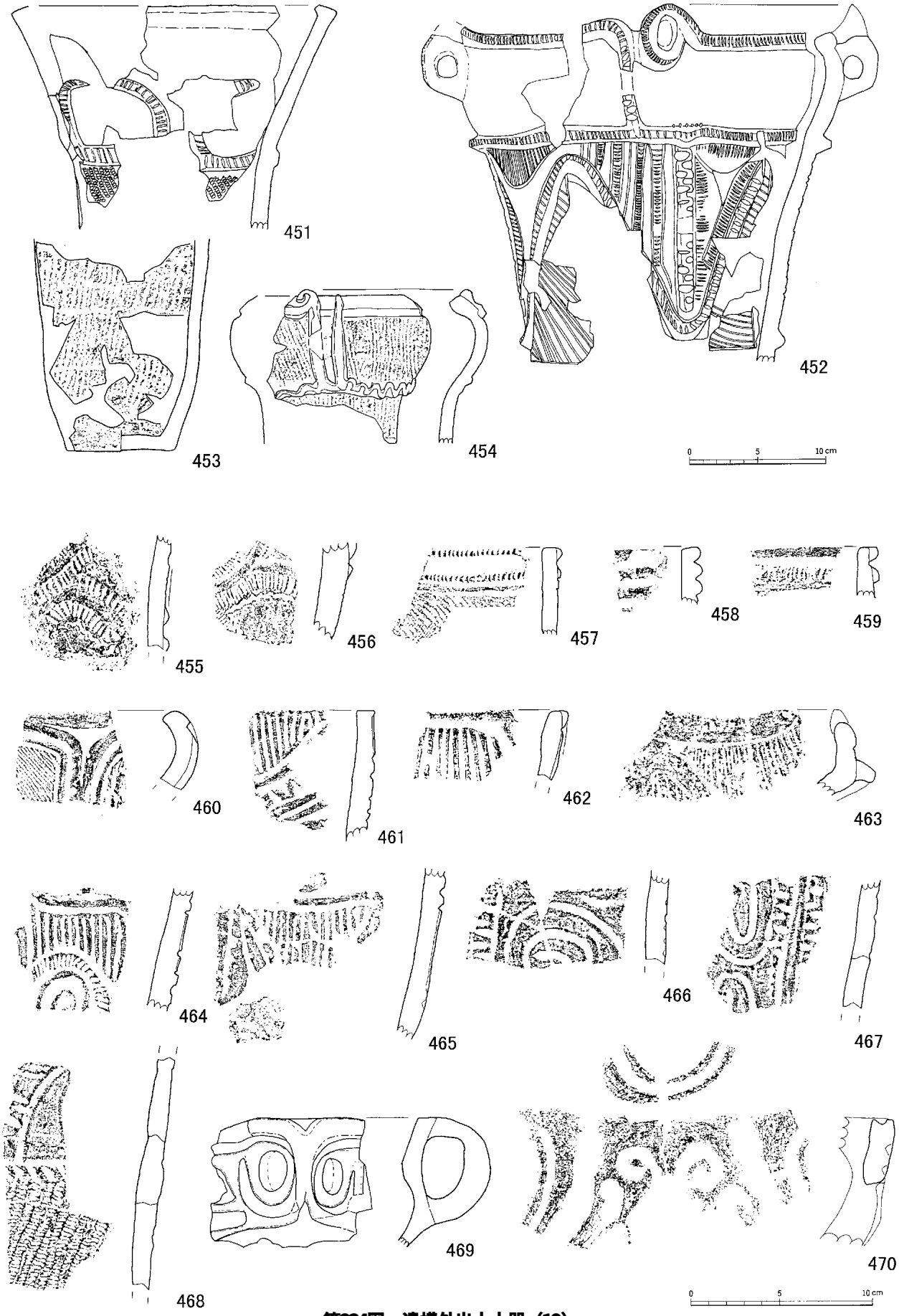
第231図　遺構外出土土器（16）



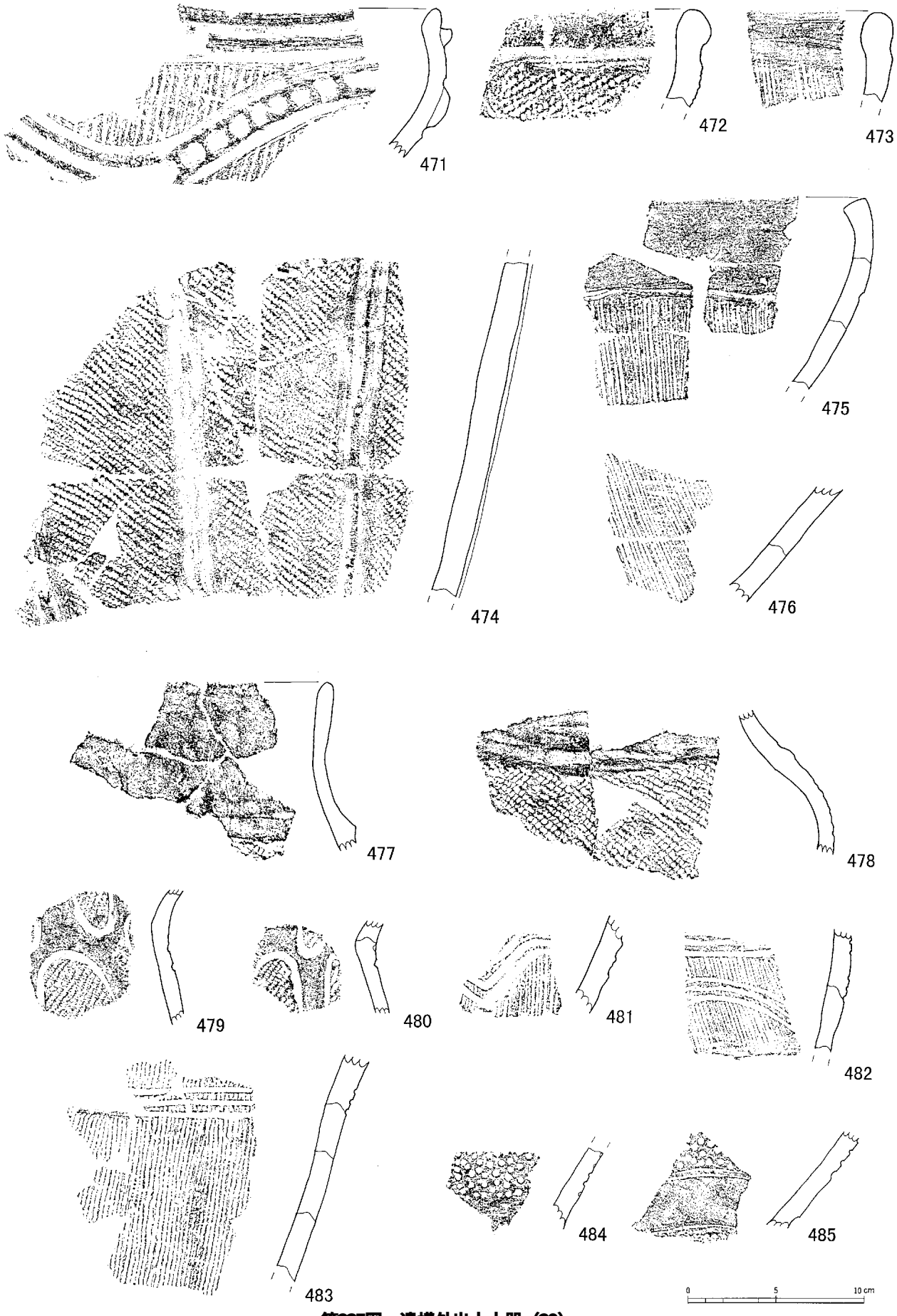
第232図　遺構外出土土器（17）



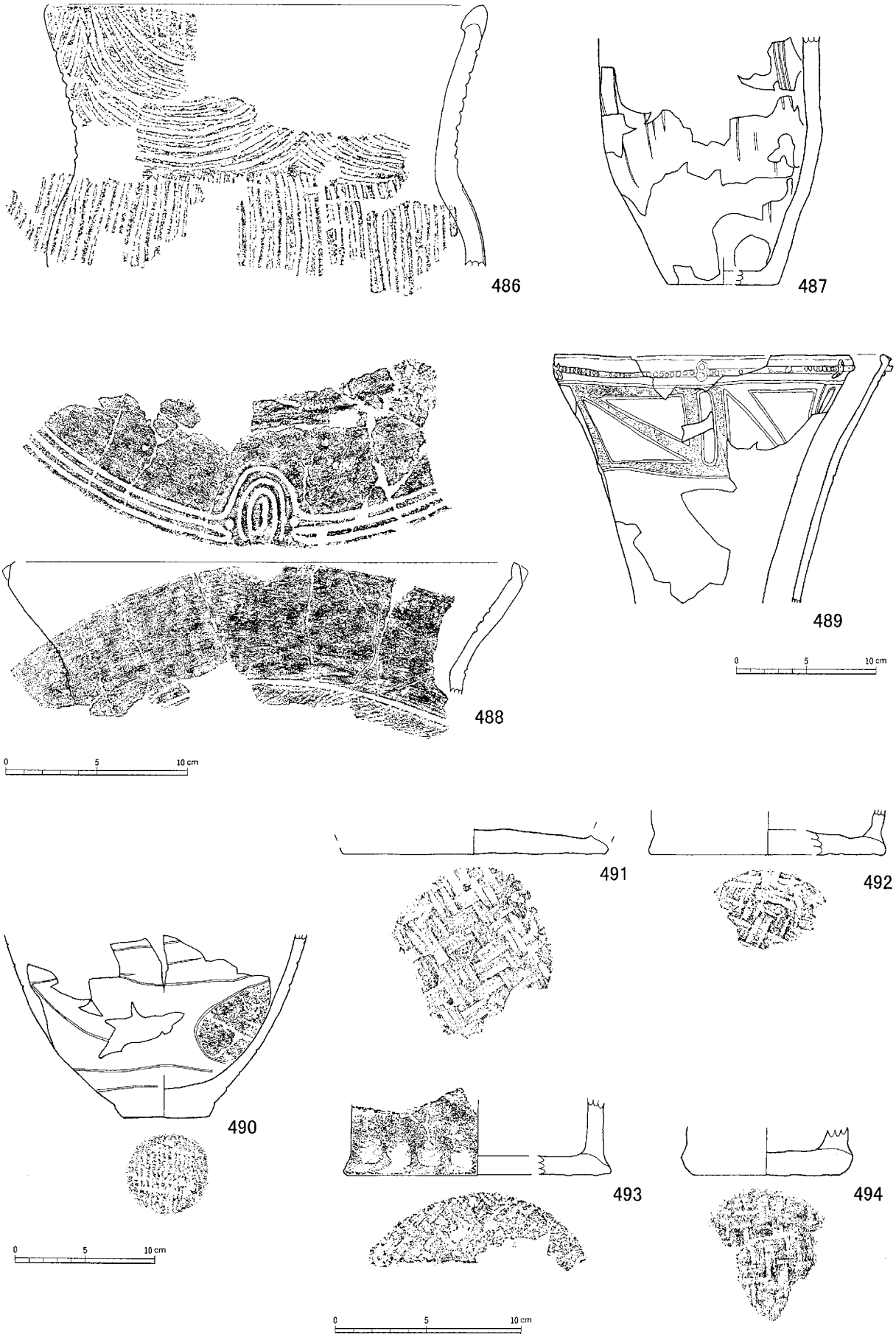
第233図　遺構外出土土器（18）



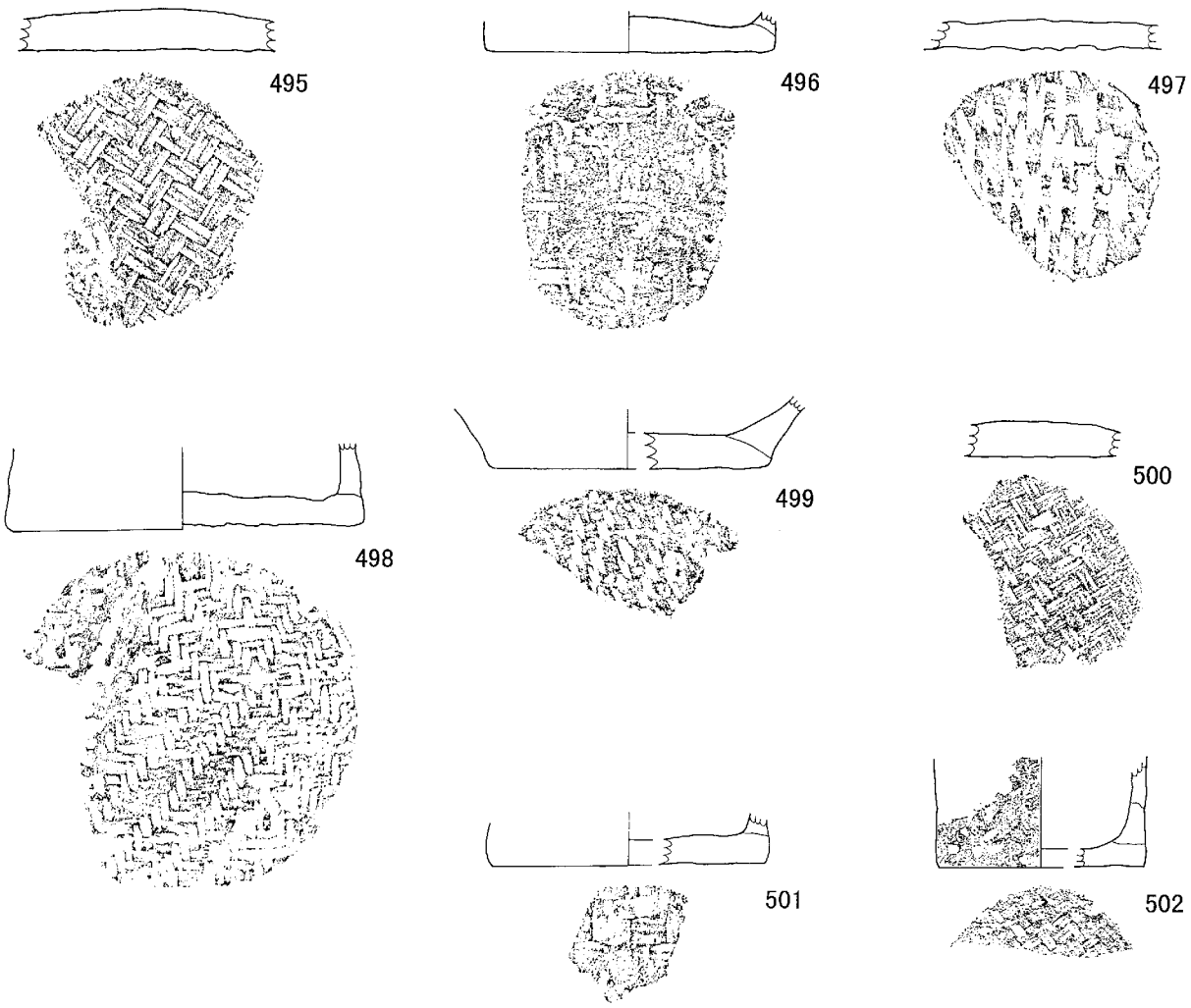
第234図　遺構外出土土器（19）



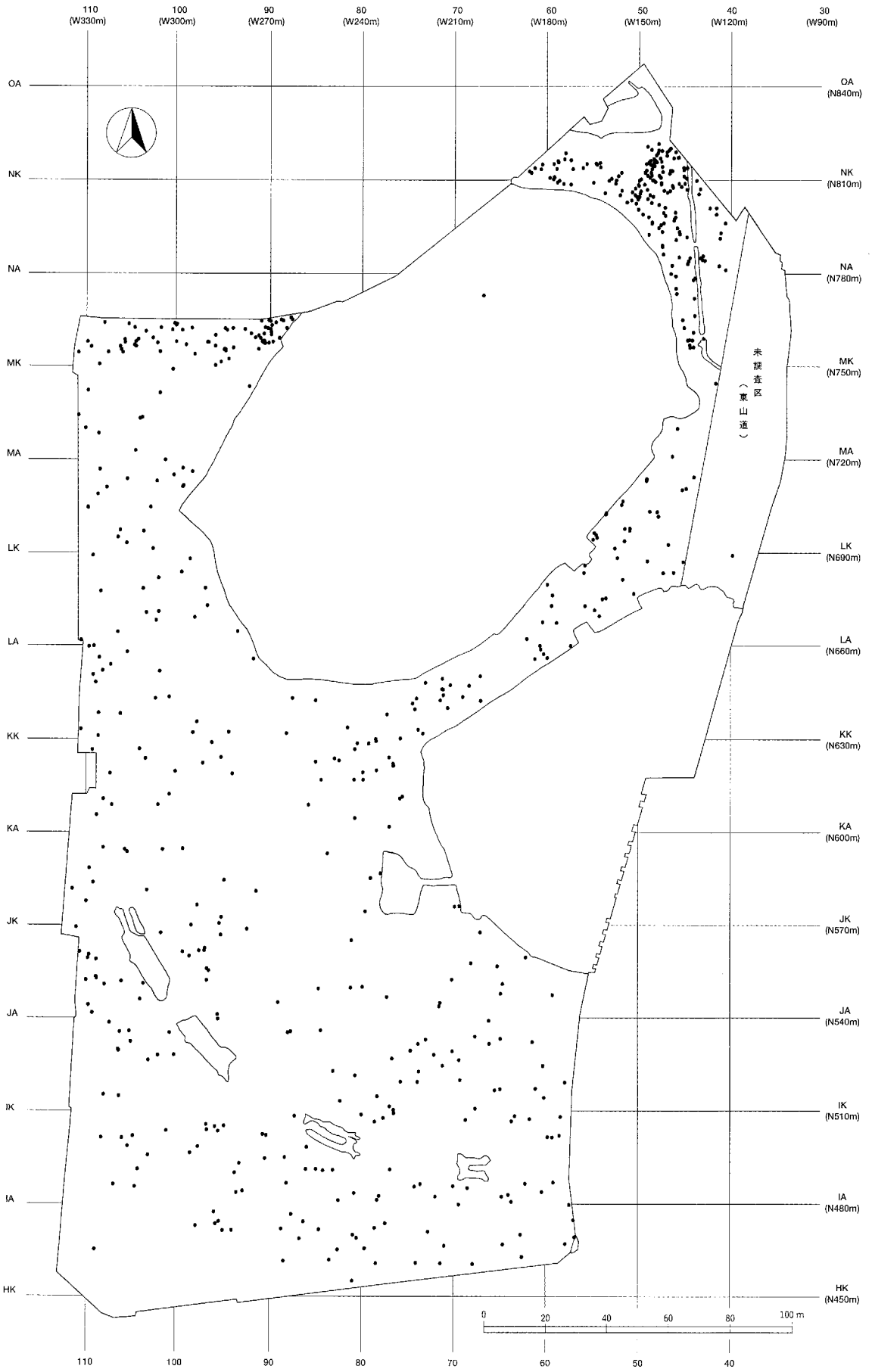
第235図　遺構外出土土器（20）



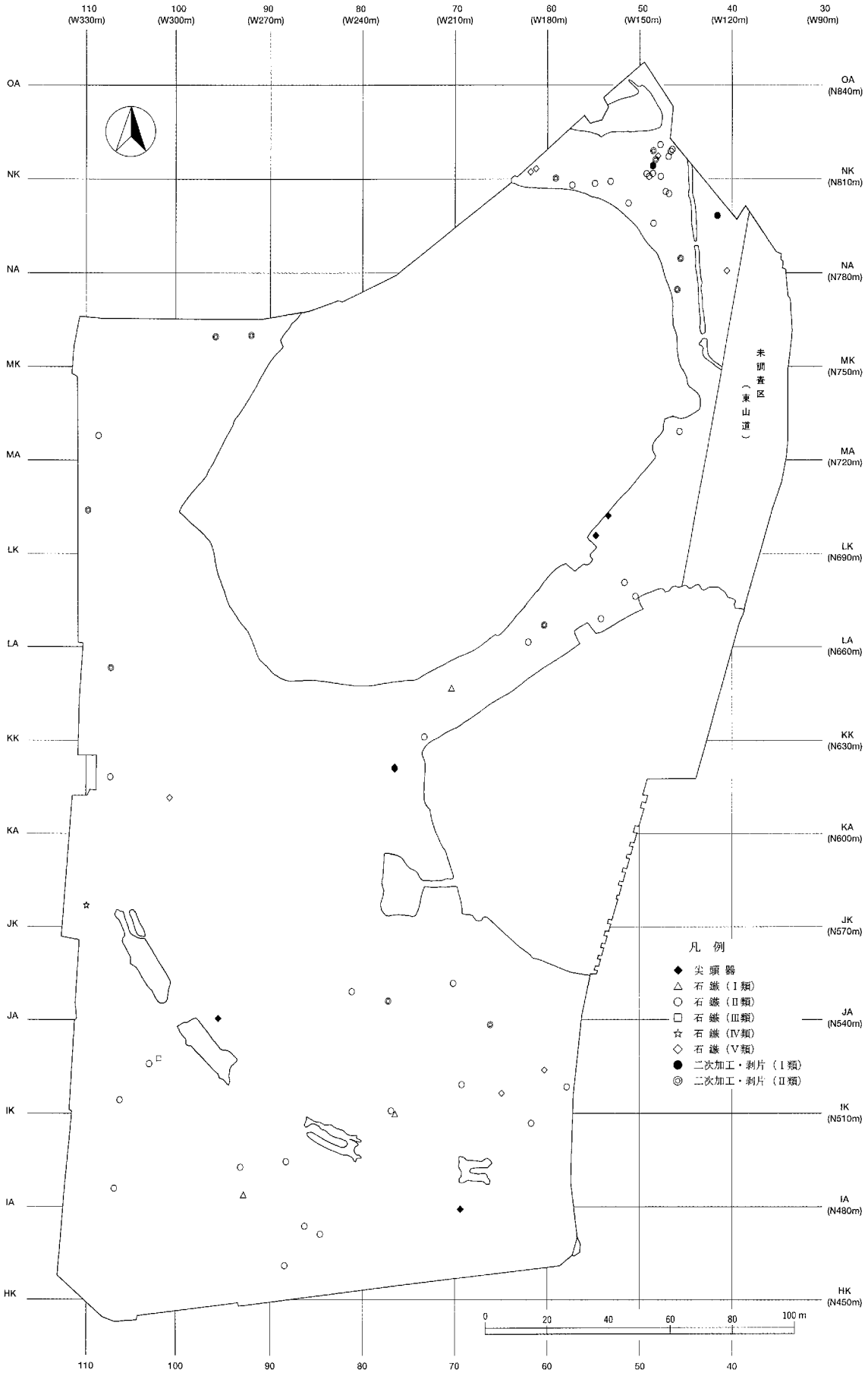
第236図　遺構外出土土器（21）



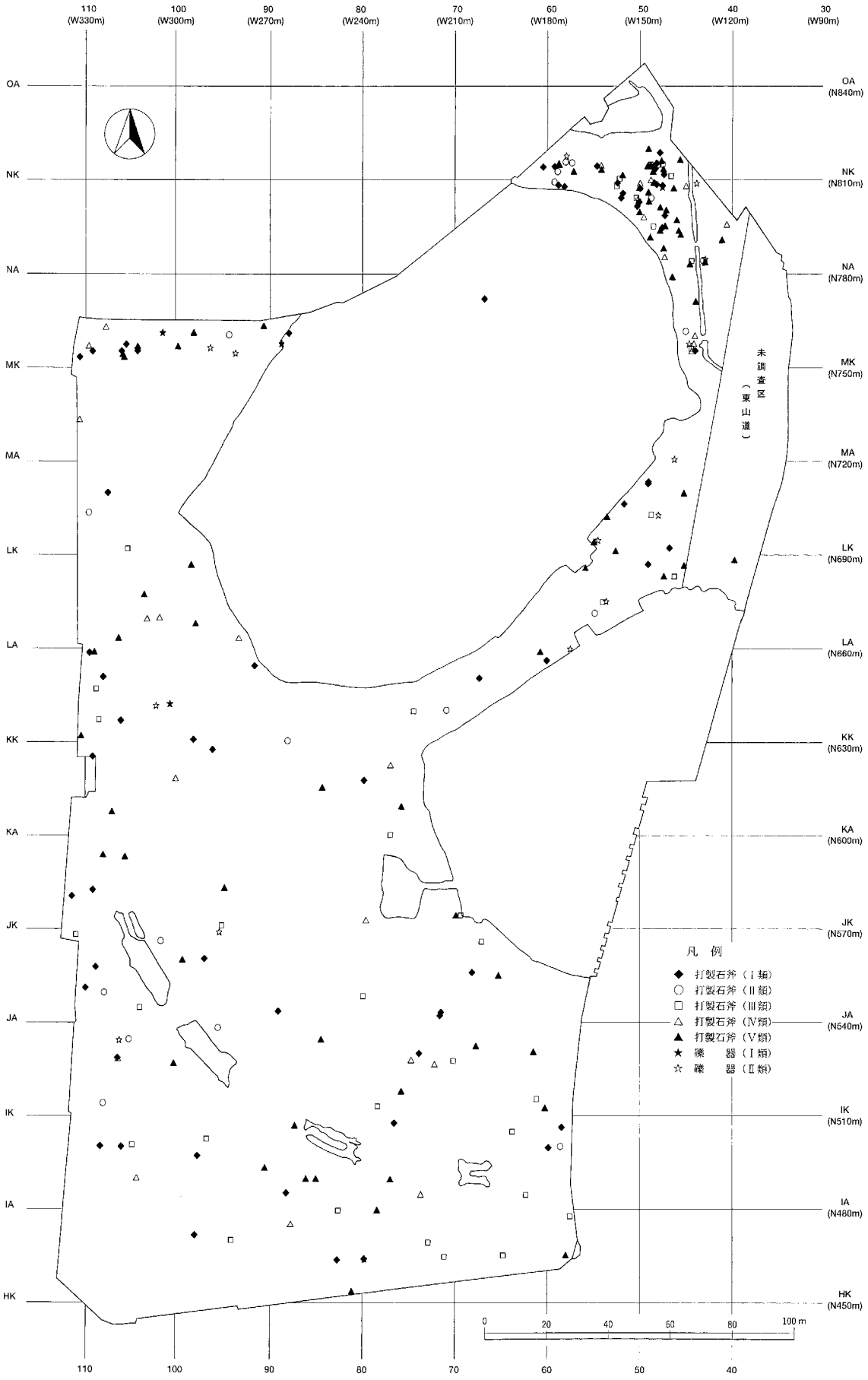
第237図　遺構外出土土器（22）



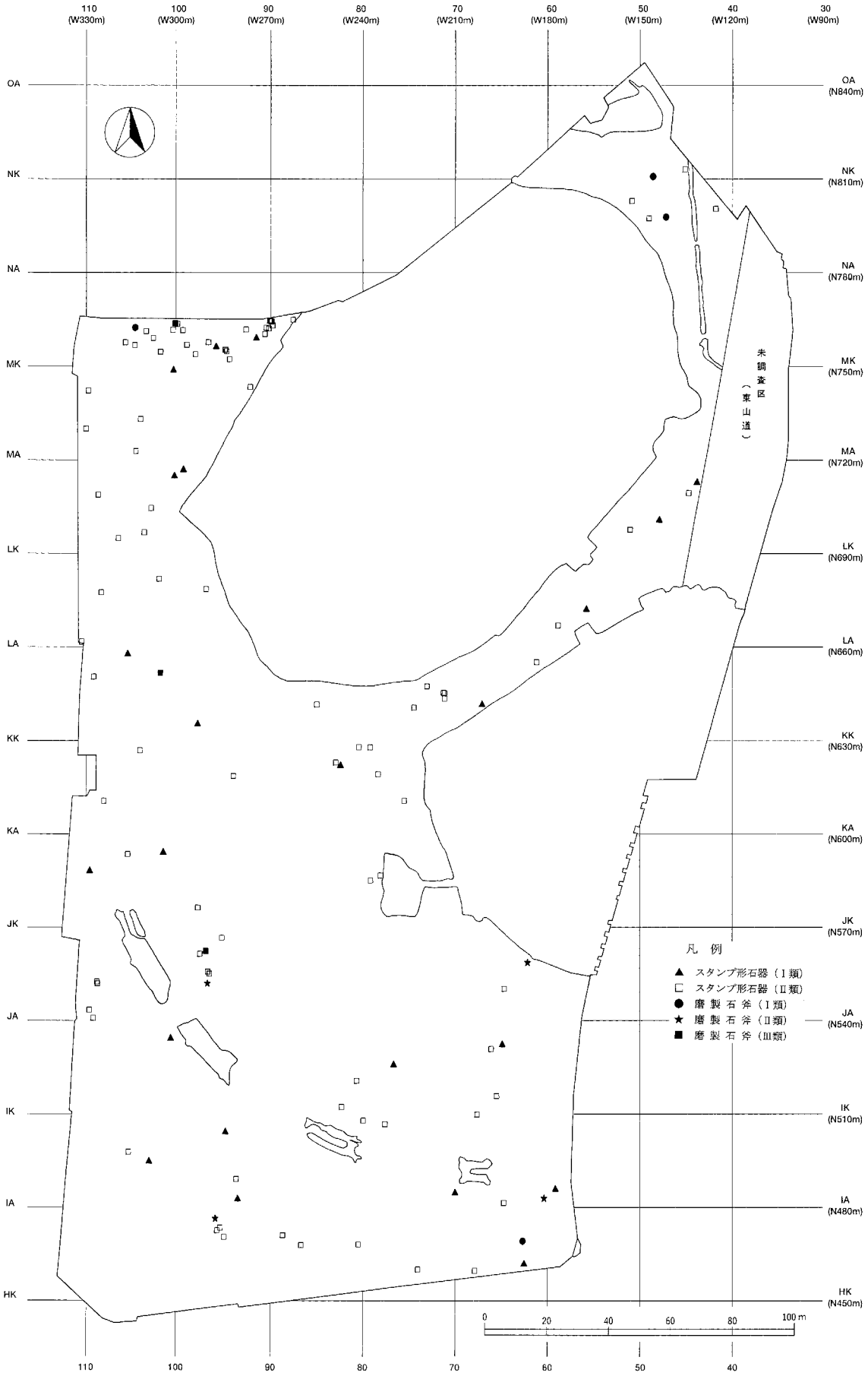
第238図　石器分布図（1）



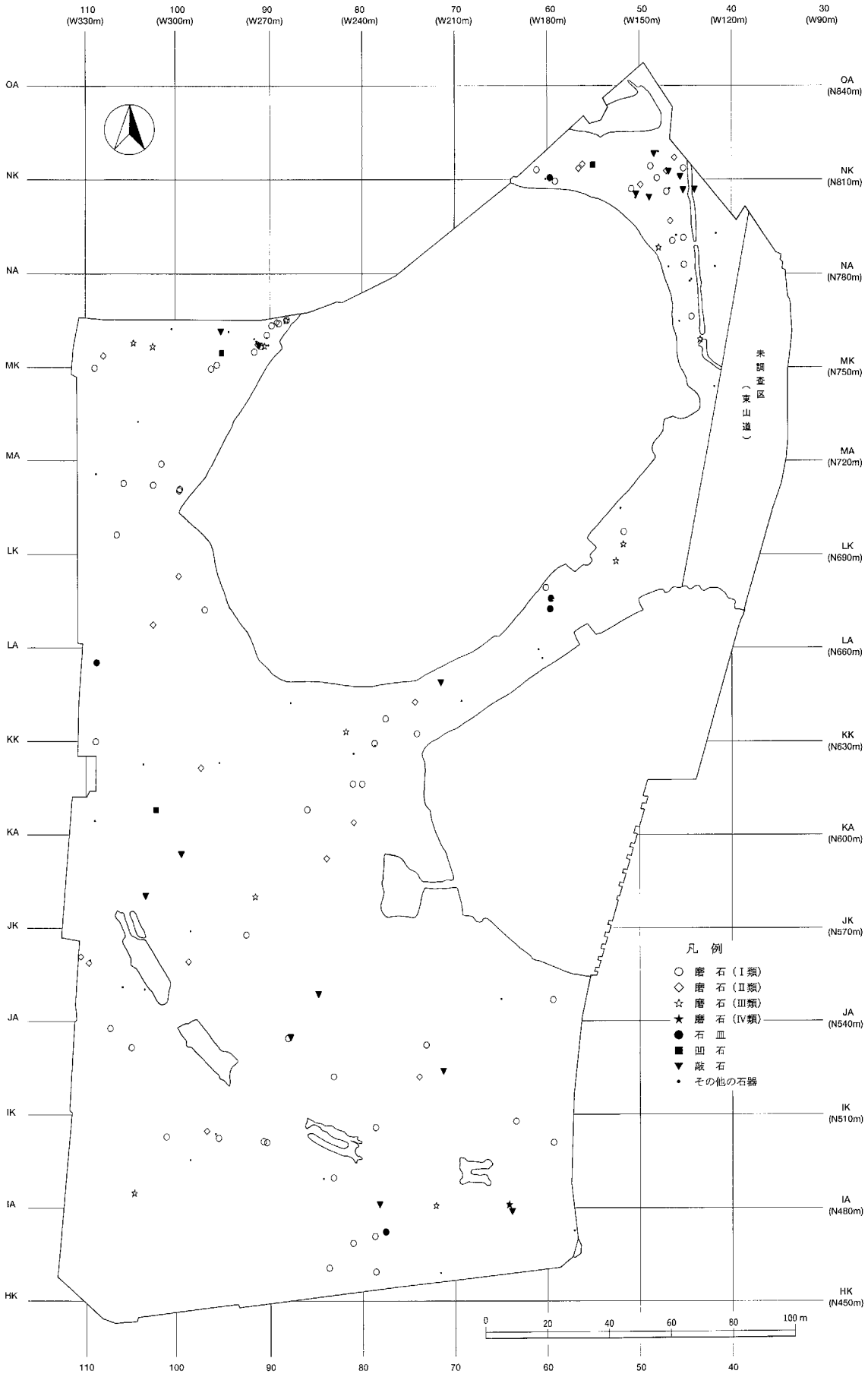
第239図　石器分布図（２）－尖頭器／石鏃／二次加工剥片



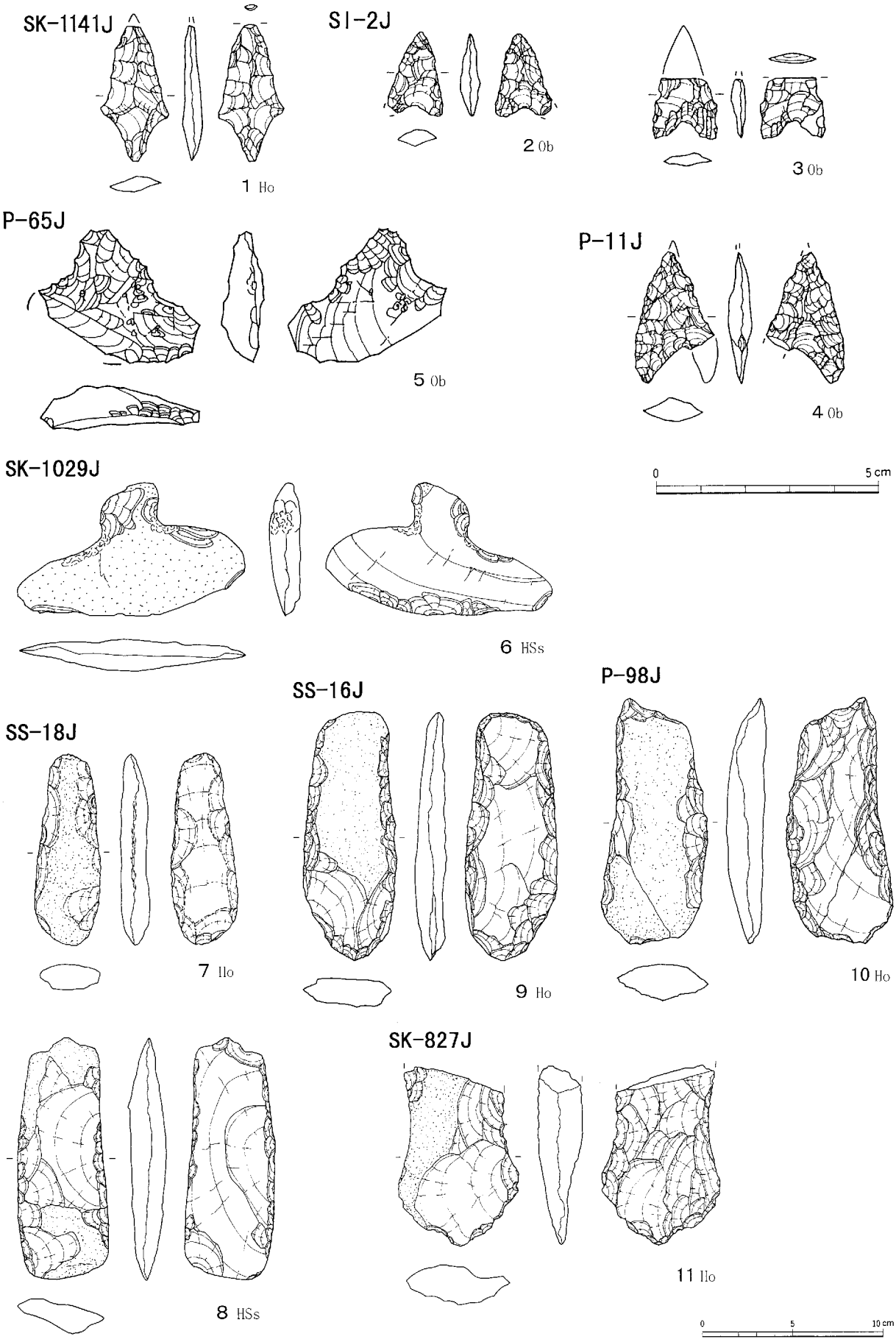
第240図　石器分布図（3）－打製石斧／礫器



第241図　石器分布図（4）－磨製石斧／スタンプ形石器



第242図　石器分布図（５）－磨石／石皿／凹石／敲石／その他の石器



第243図　遺構出土石器（1）

SX-7J

12 Dio

SS-1J

15 Dio

SS-6J

13 Dio

SS-8J

16 Dio

SK-854J

14 HSs

SS-16J

18 Cm

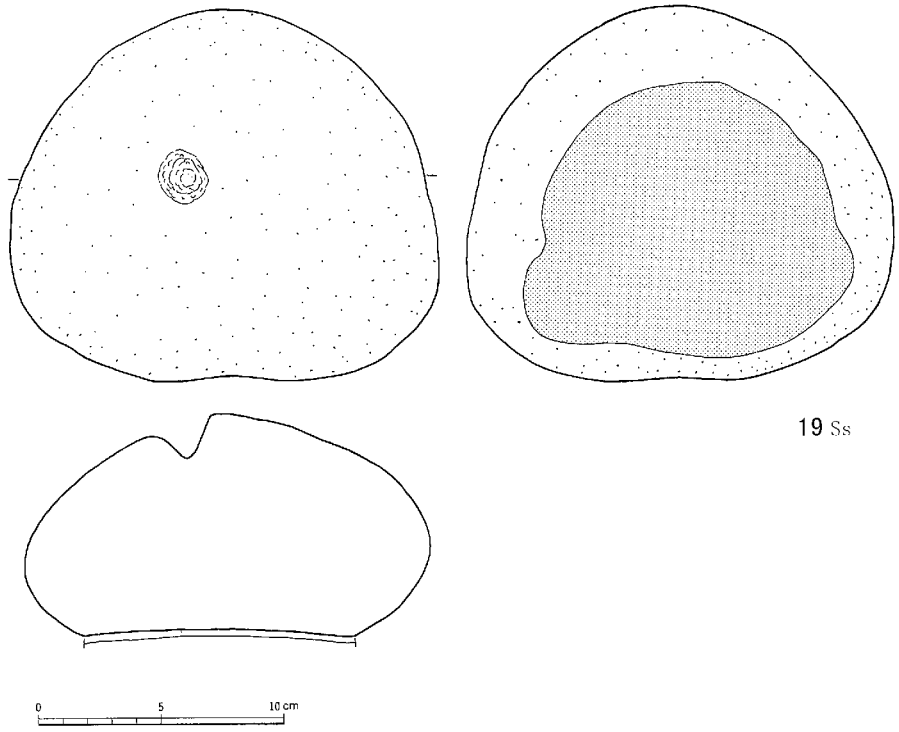
SS-13J

17 Ss

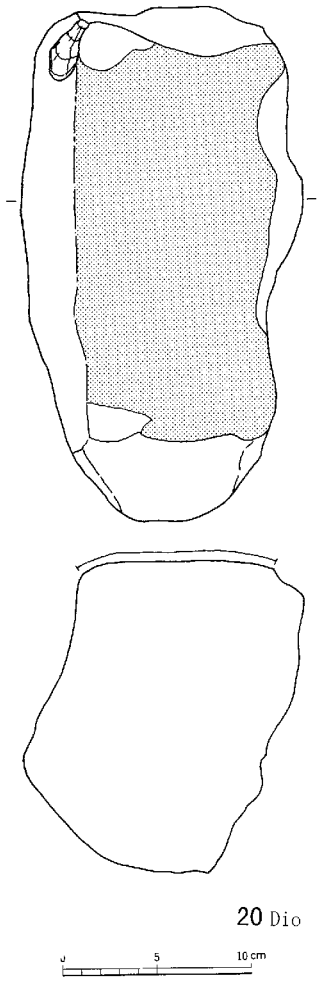
0 5 10cm

第244図　遺構出土石器（2）

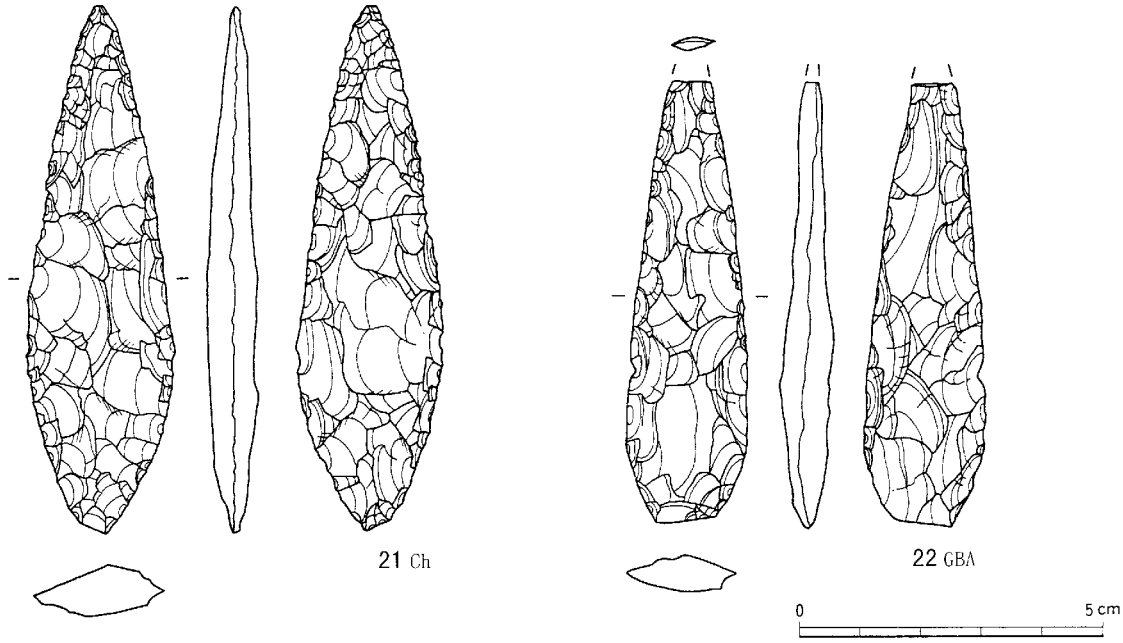
SK-790J



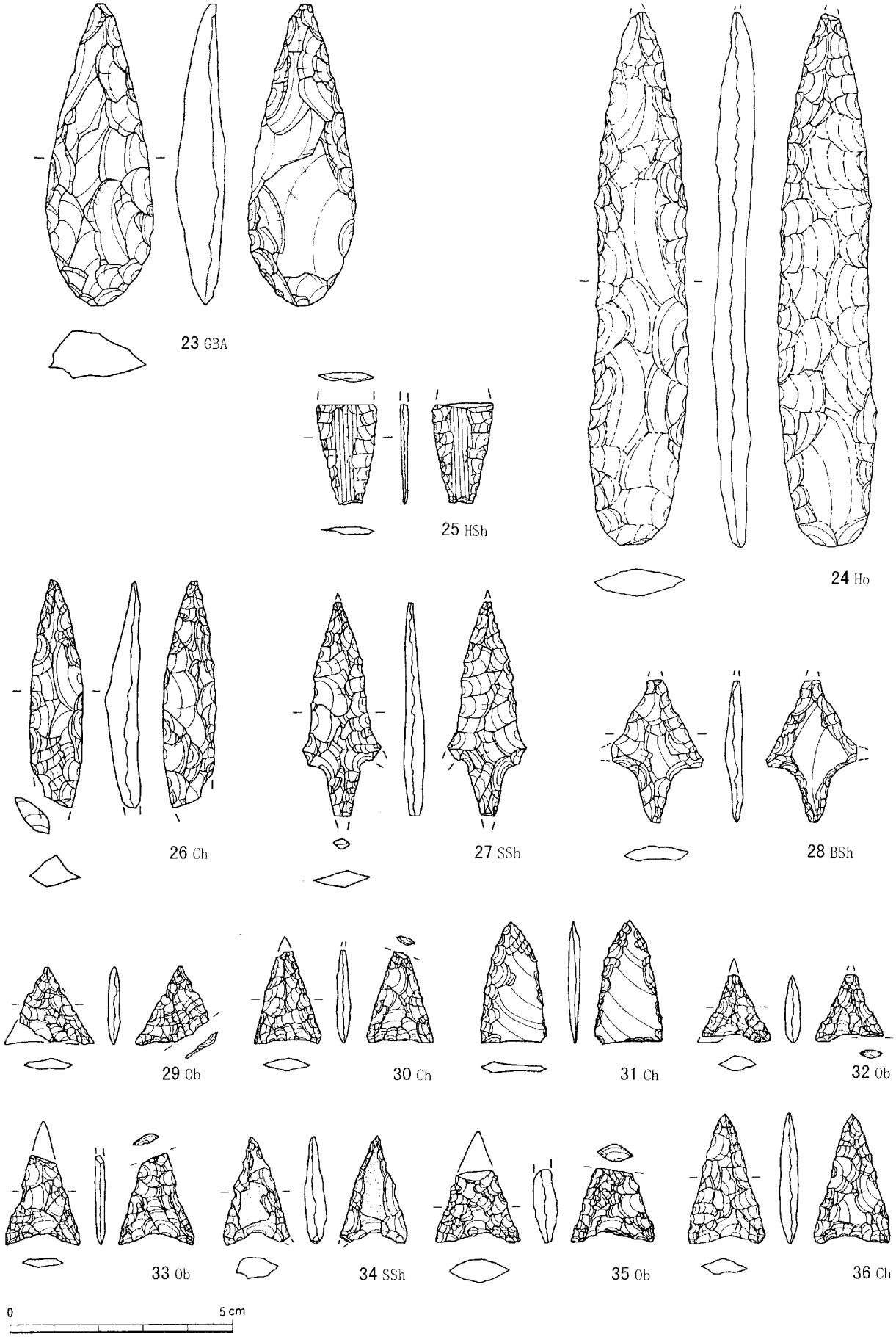
SK-1031J



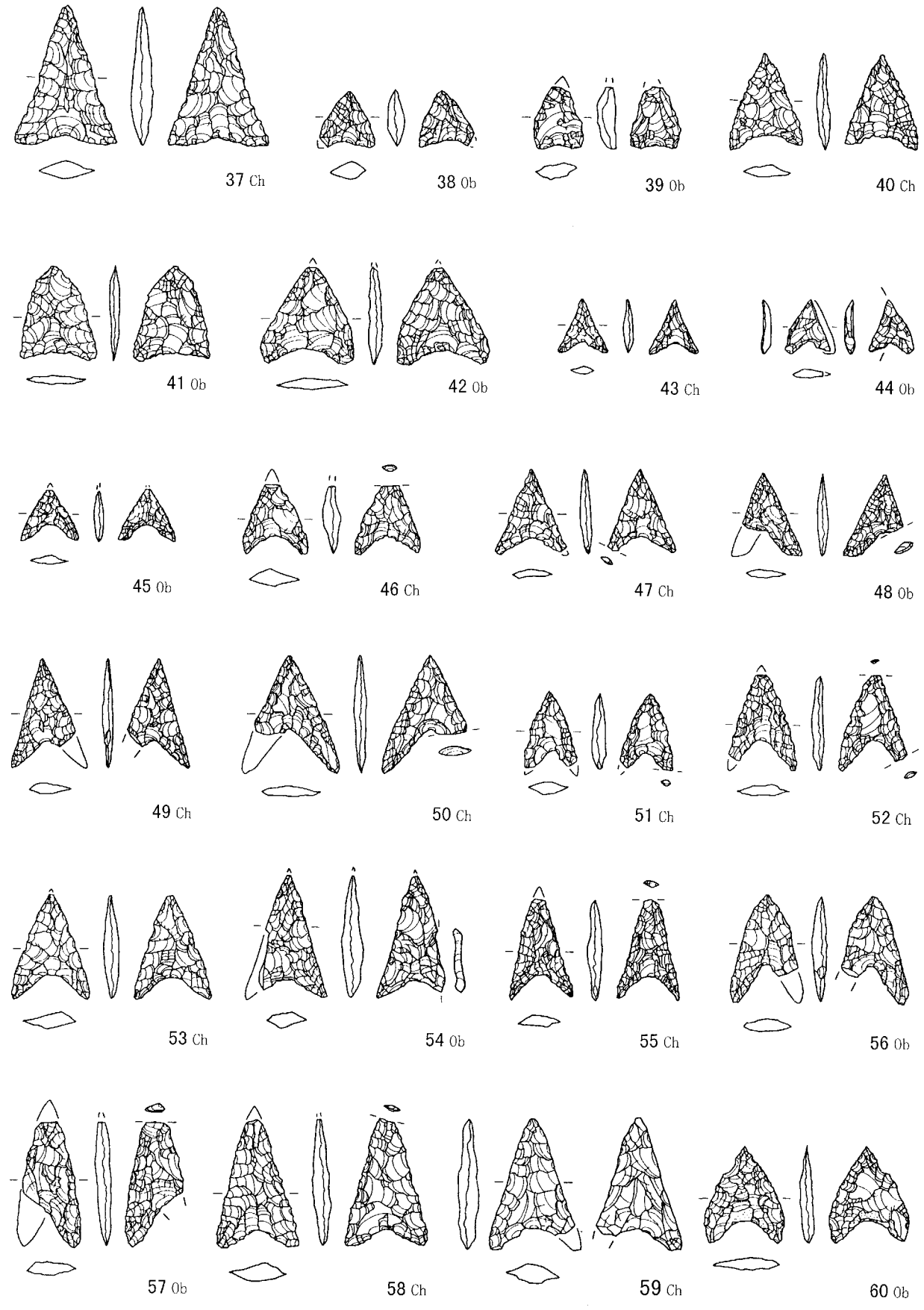
遺構外出土石器



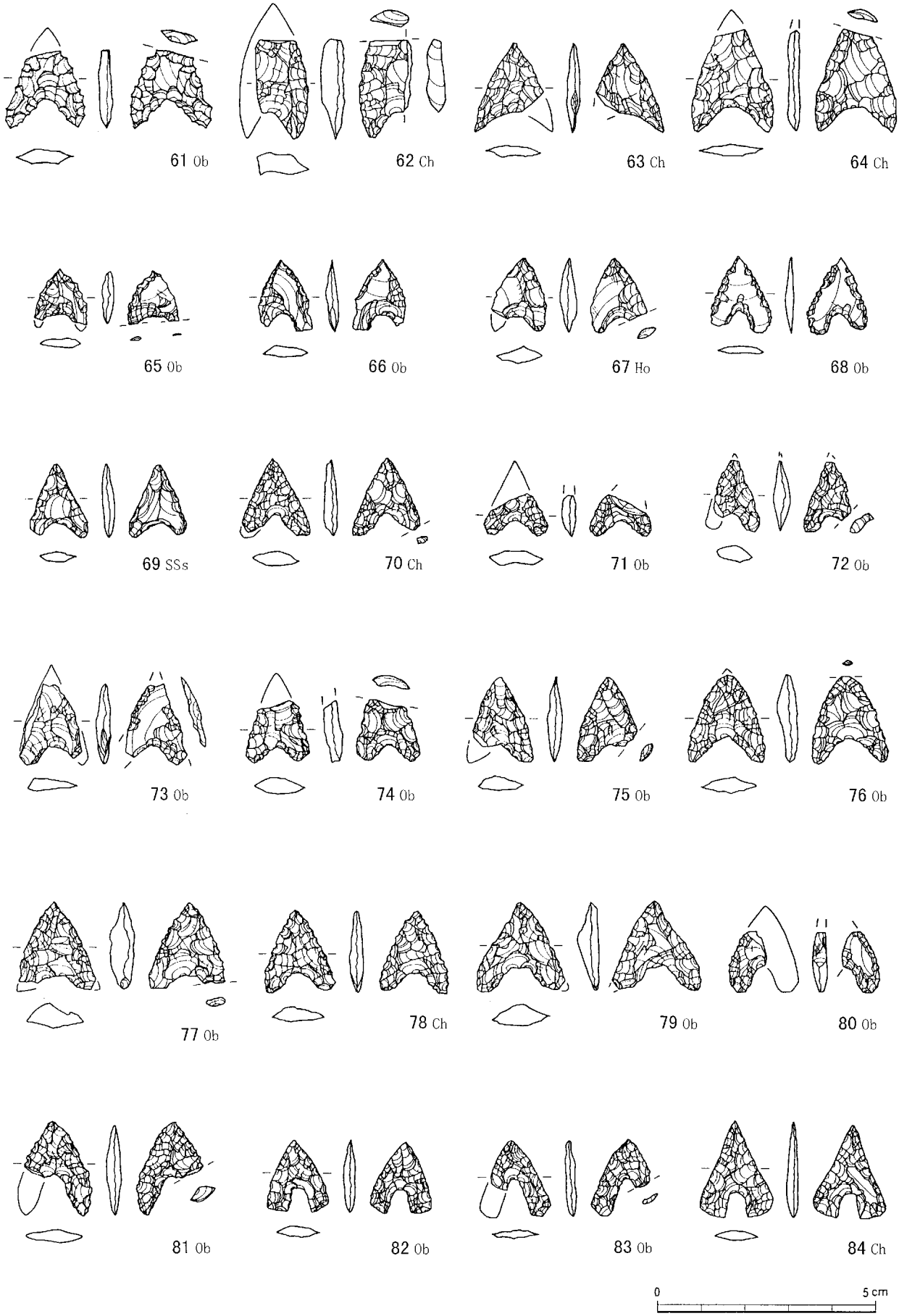
第245図　遺構出土石器（3）／遺構外出土石器（1）－尖頭器



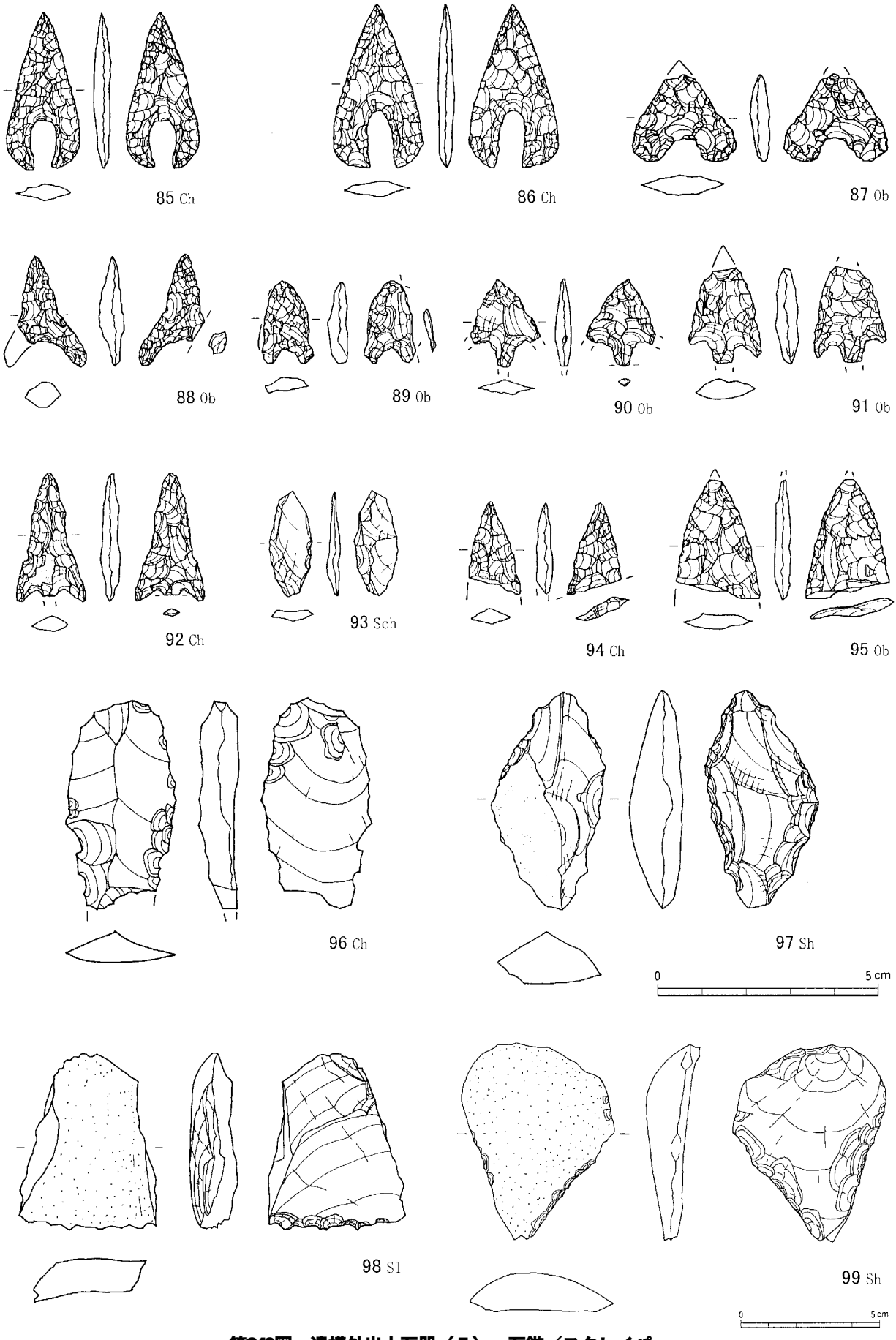
第246図　遺構外出土石器（2）－尖頭器／石鏃



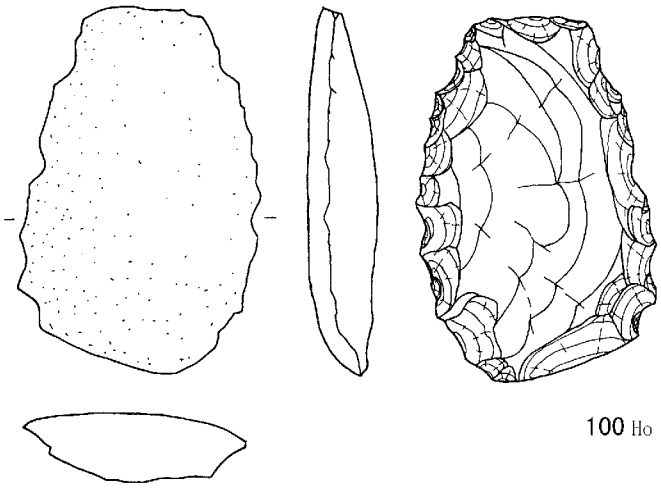
第247図　遺構外出土石器（3）－石鏃



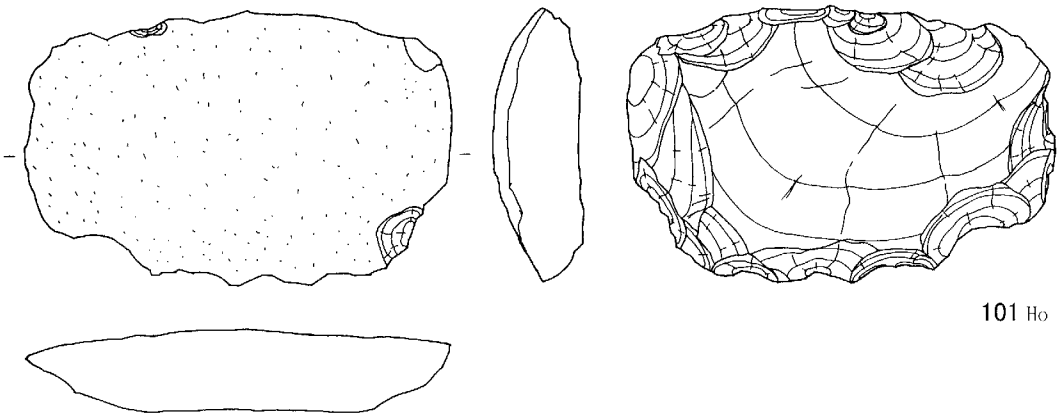
第248図　遺構外出土石器（4）－石鏃



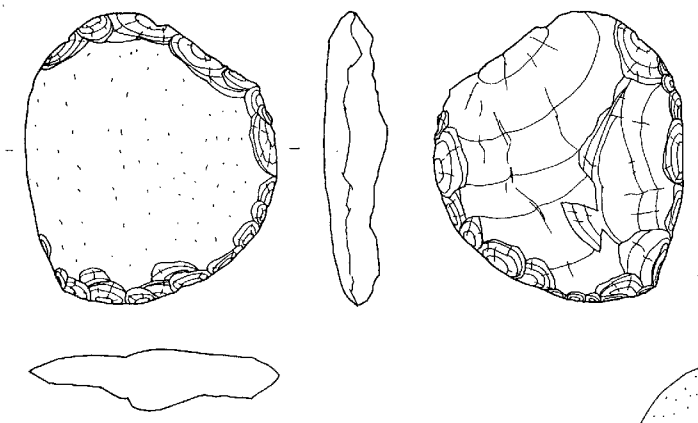
第249図　遺構外出土石器（5）－石鏃／スクレイパー



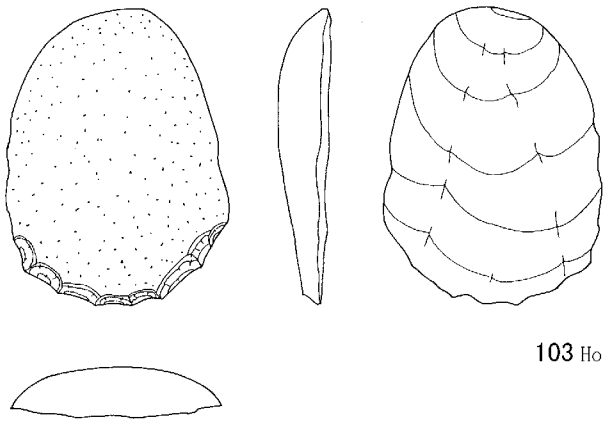
100 Ho



101 Ho



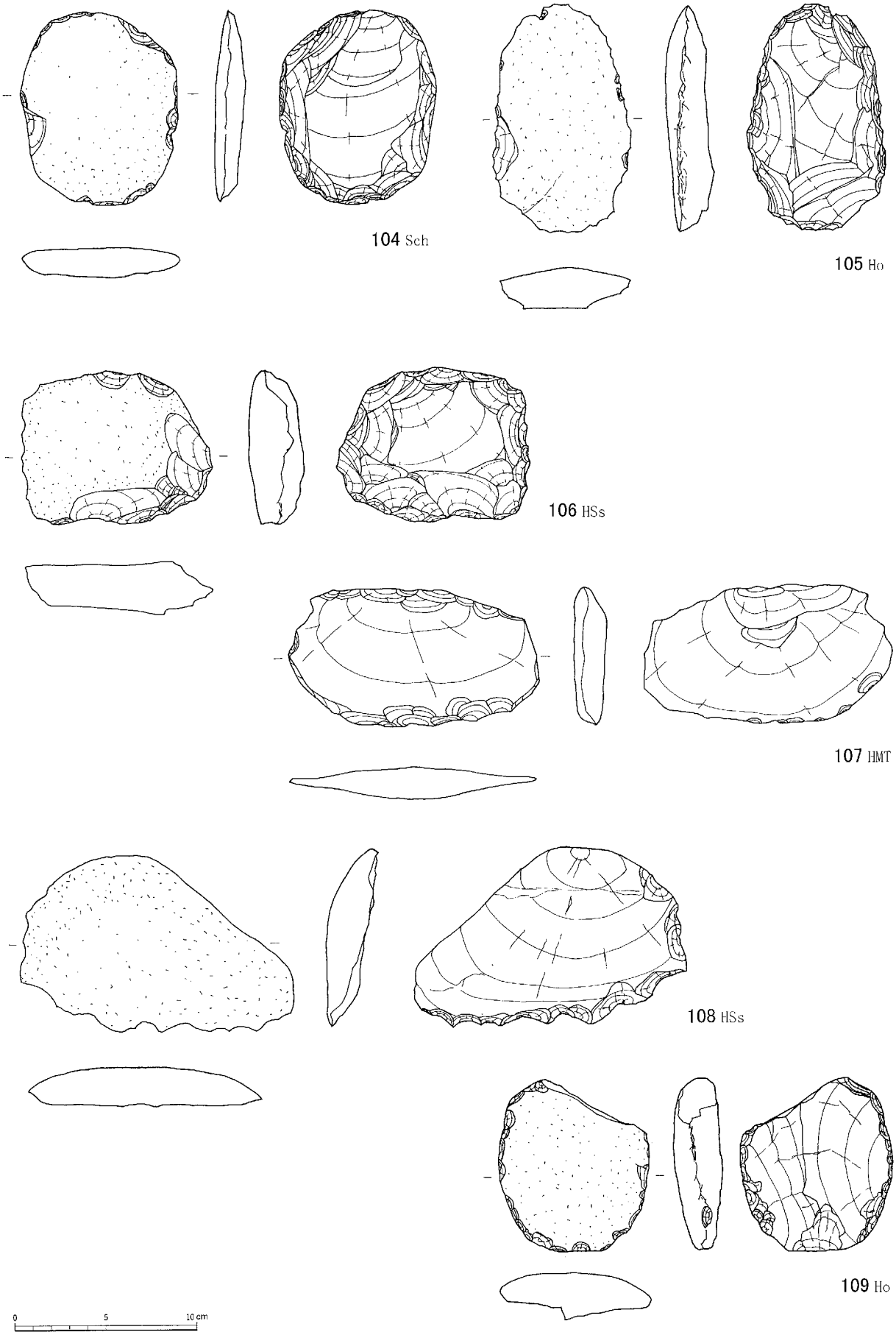
102 HSs



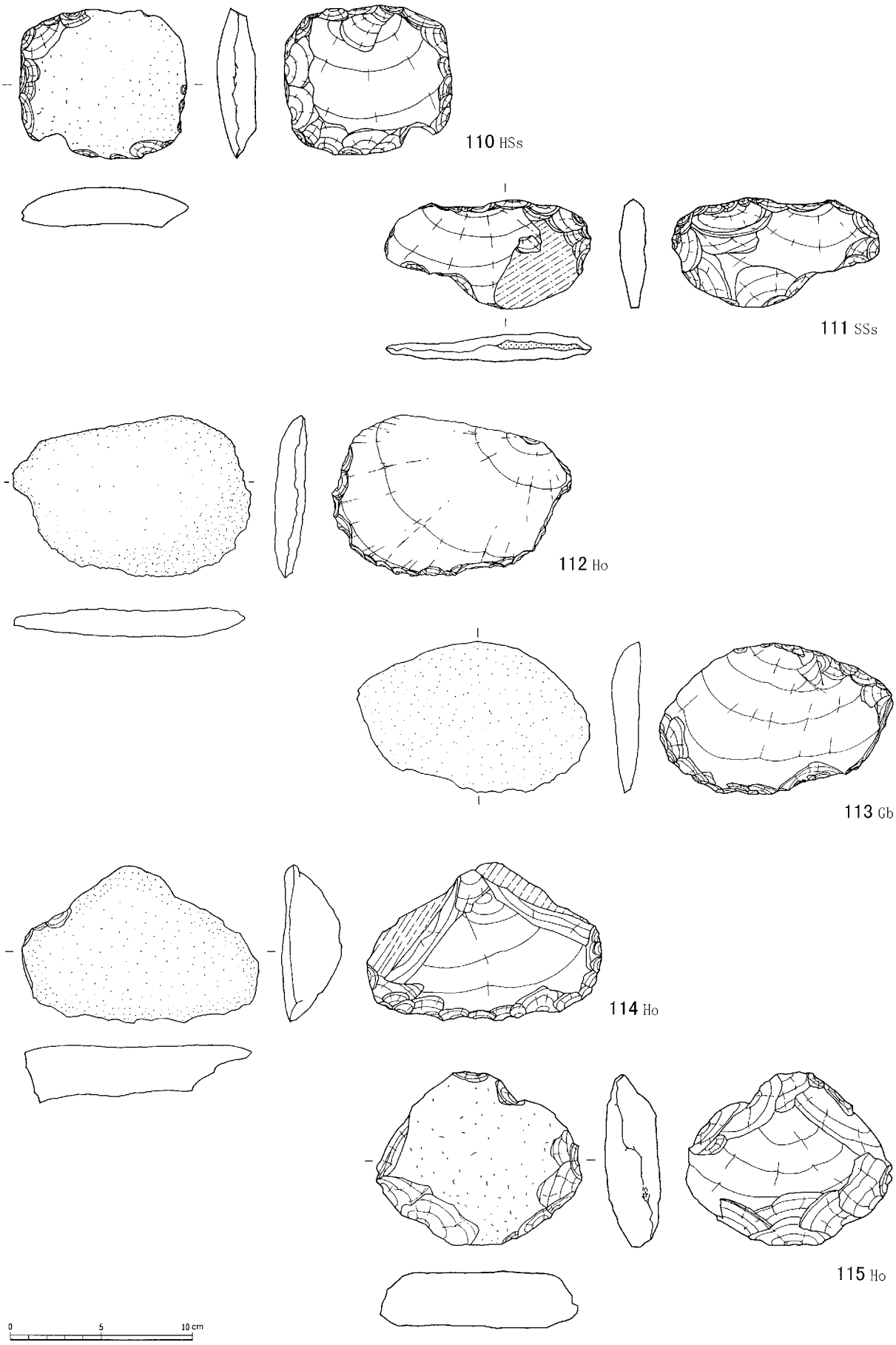
103 Ho

0 5 cm

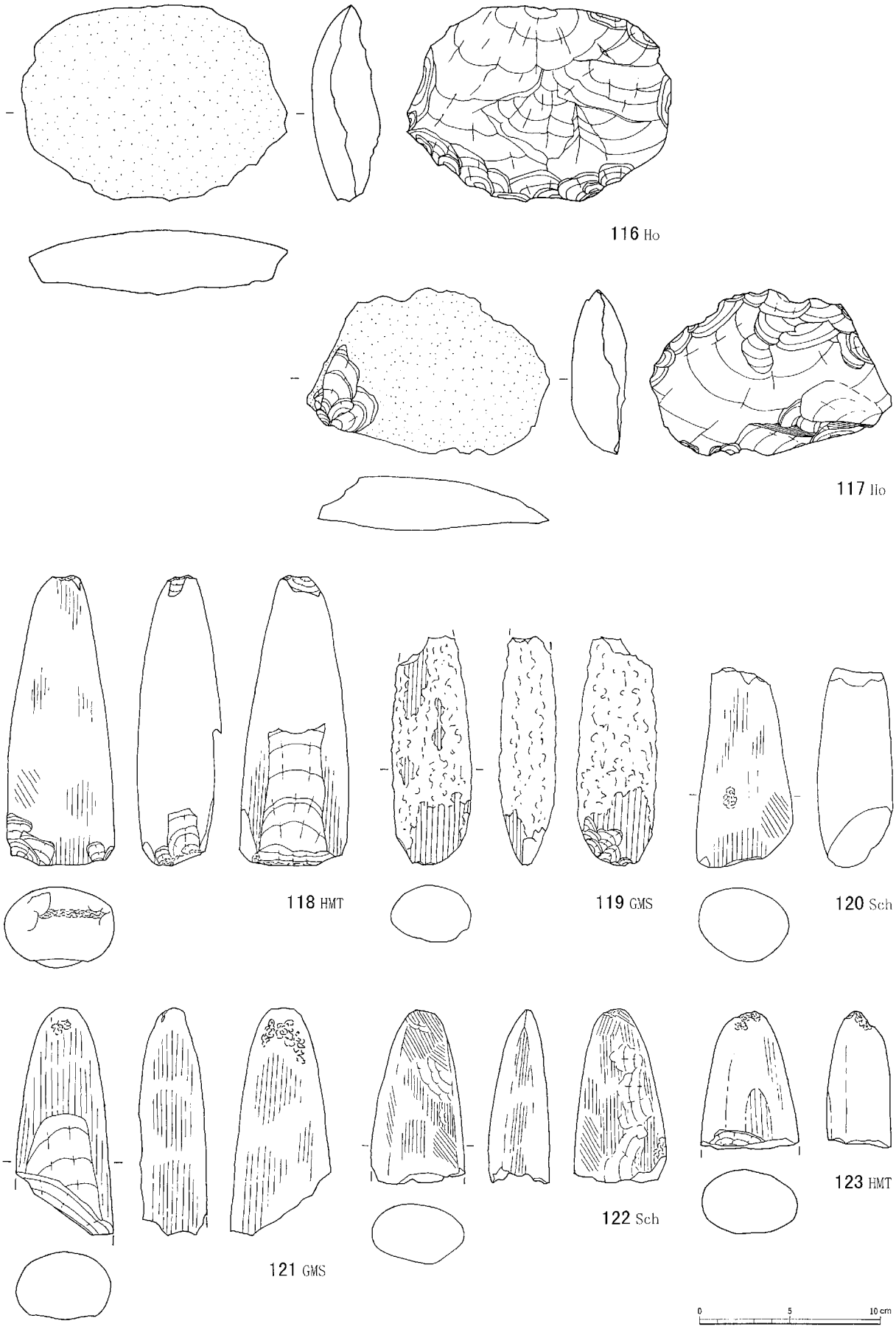
第250図　遺構外出土石器（6）－スクレイパー／二次加工剥片



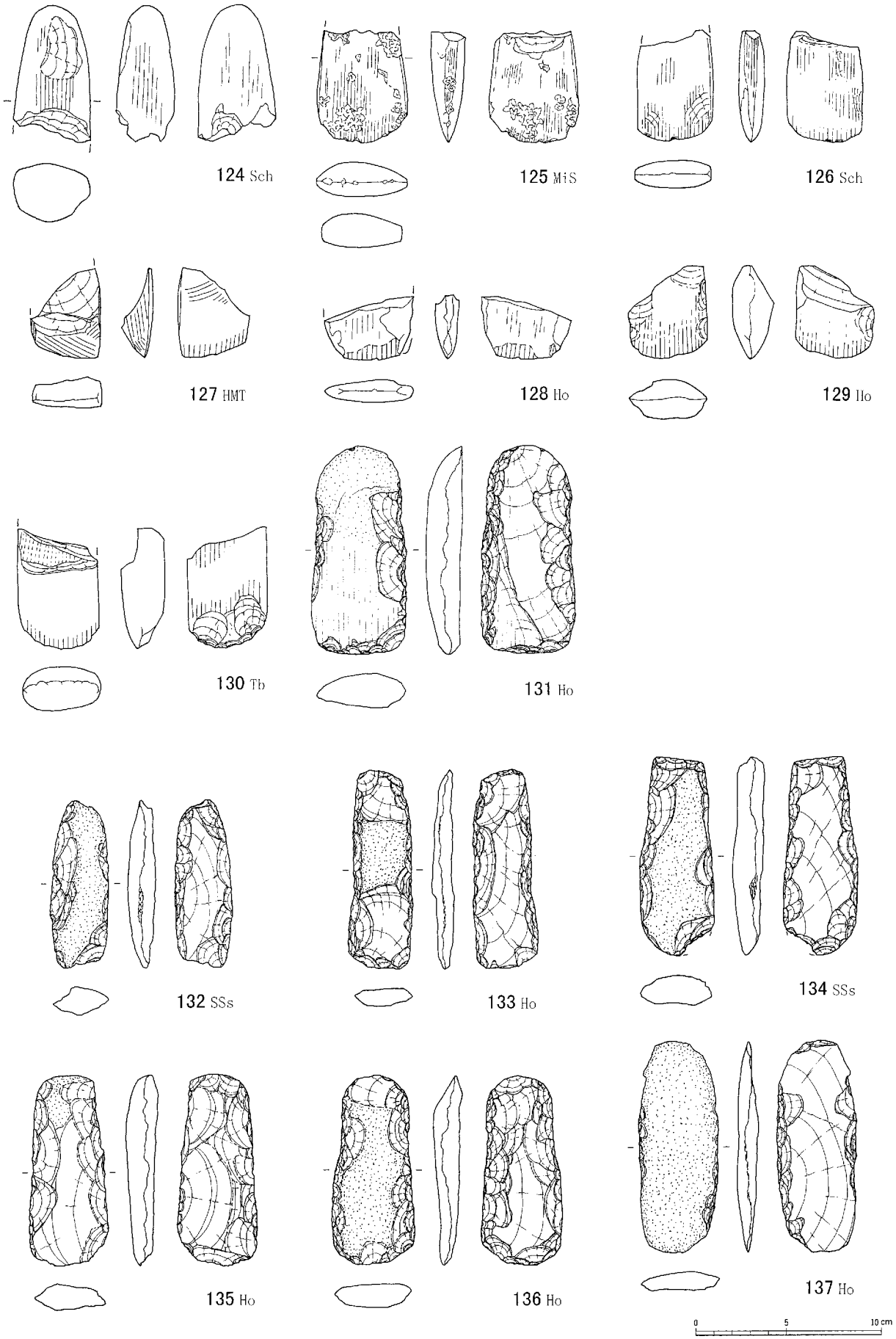
第251図　遺構外出土石器（7）－二次加工剥片



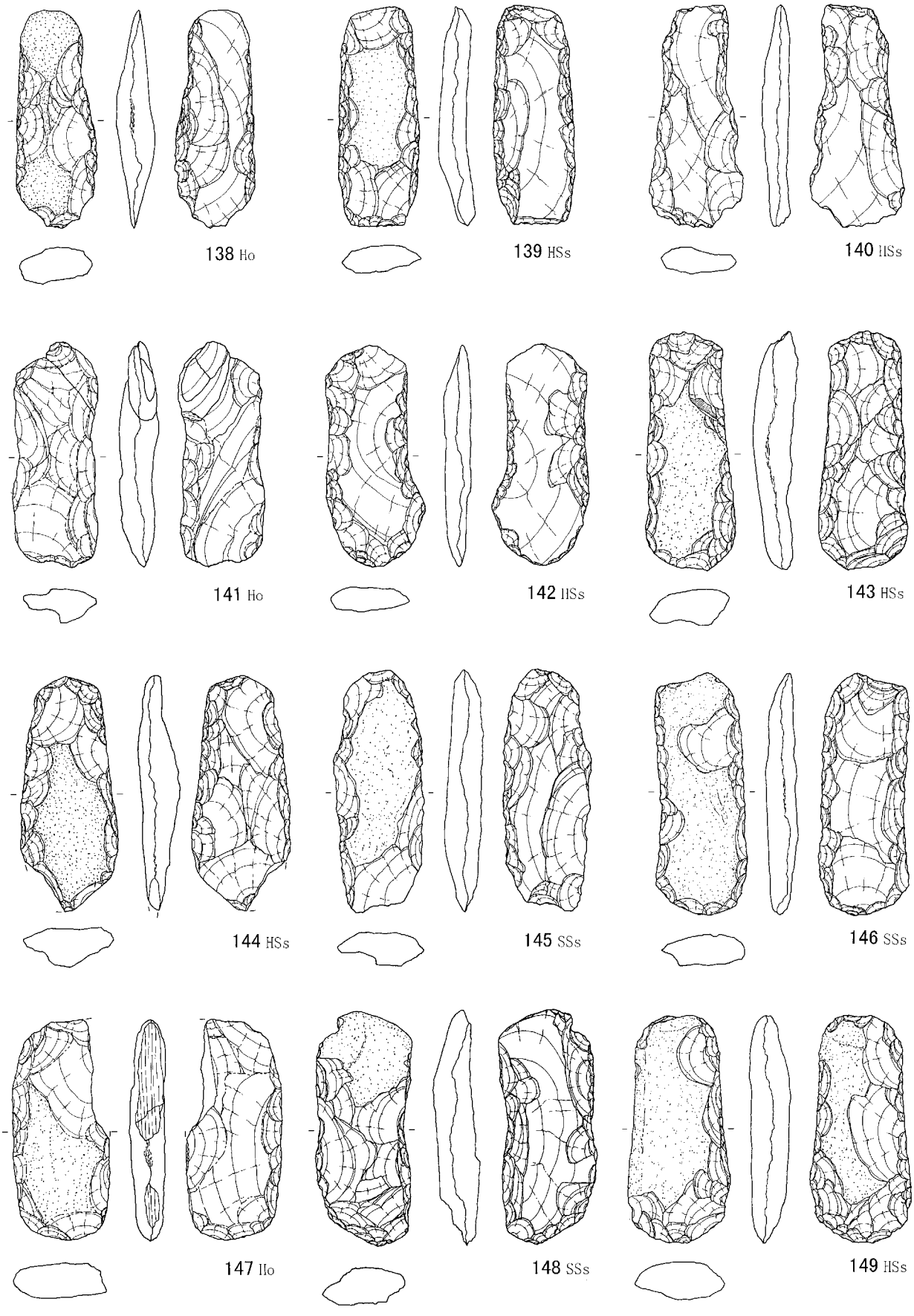
第252図　遺構外出土石器（8）－二次加工剥片



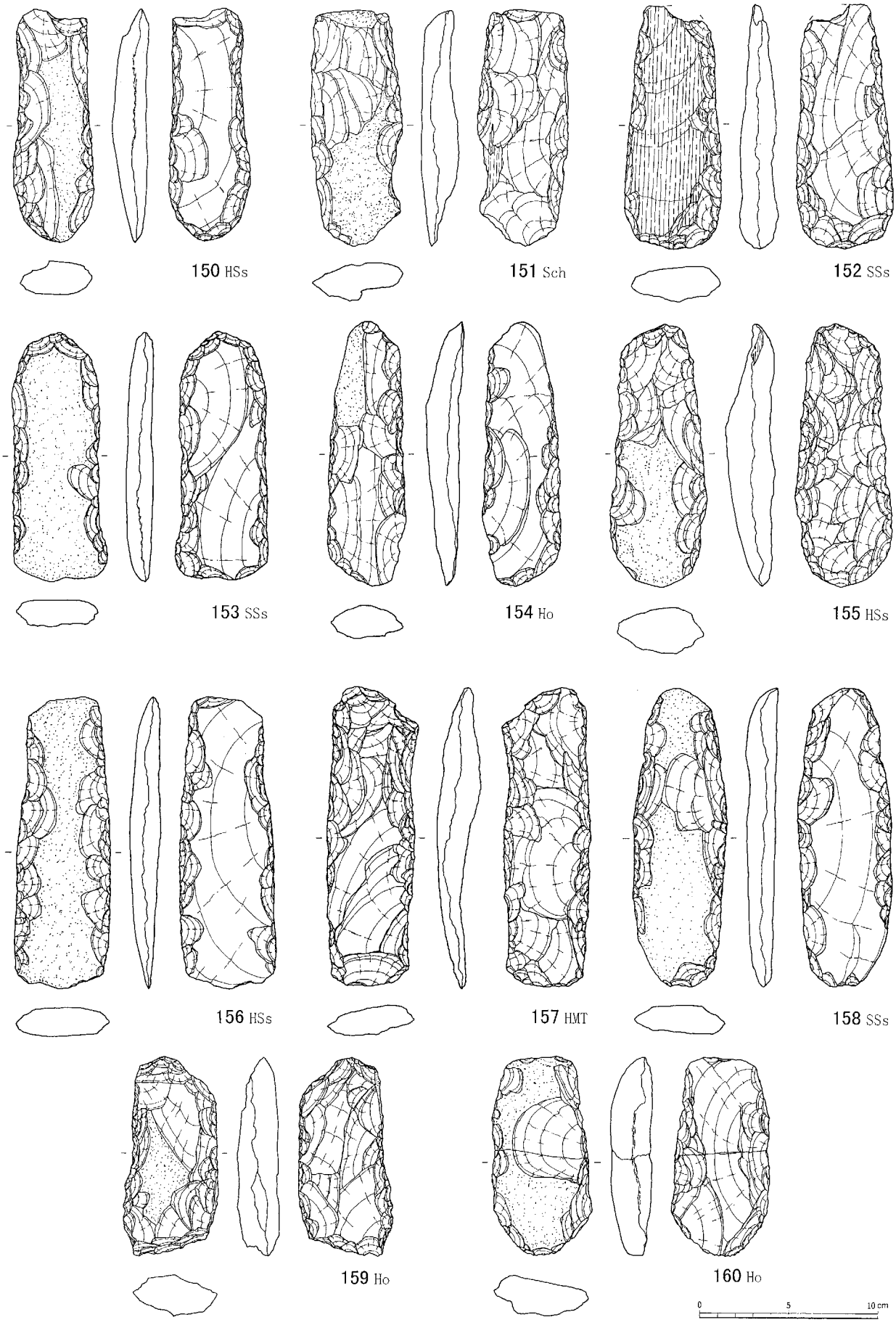
第253図　遺構外出土石器（9）－二次加工剥片／磨製石斧



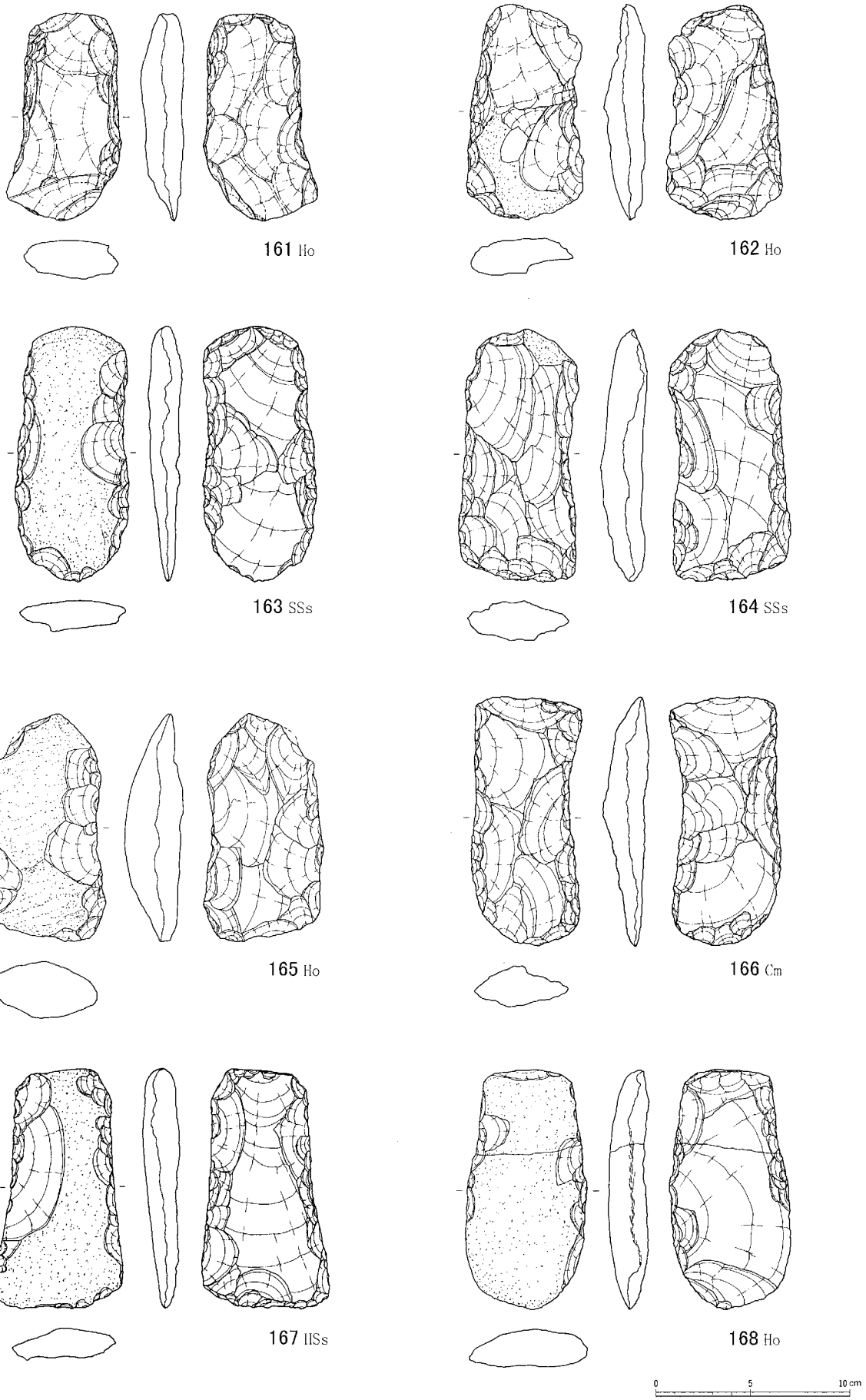
第254図　遺構外出土石器（10）－磨製石斧／打製石斧



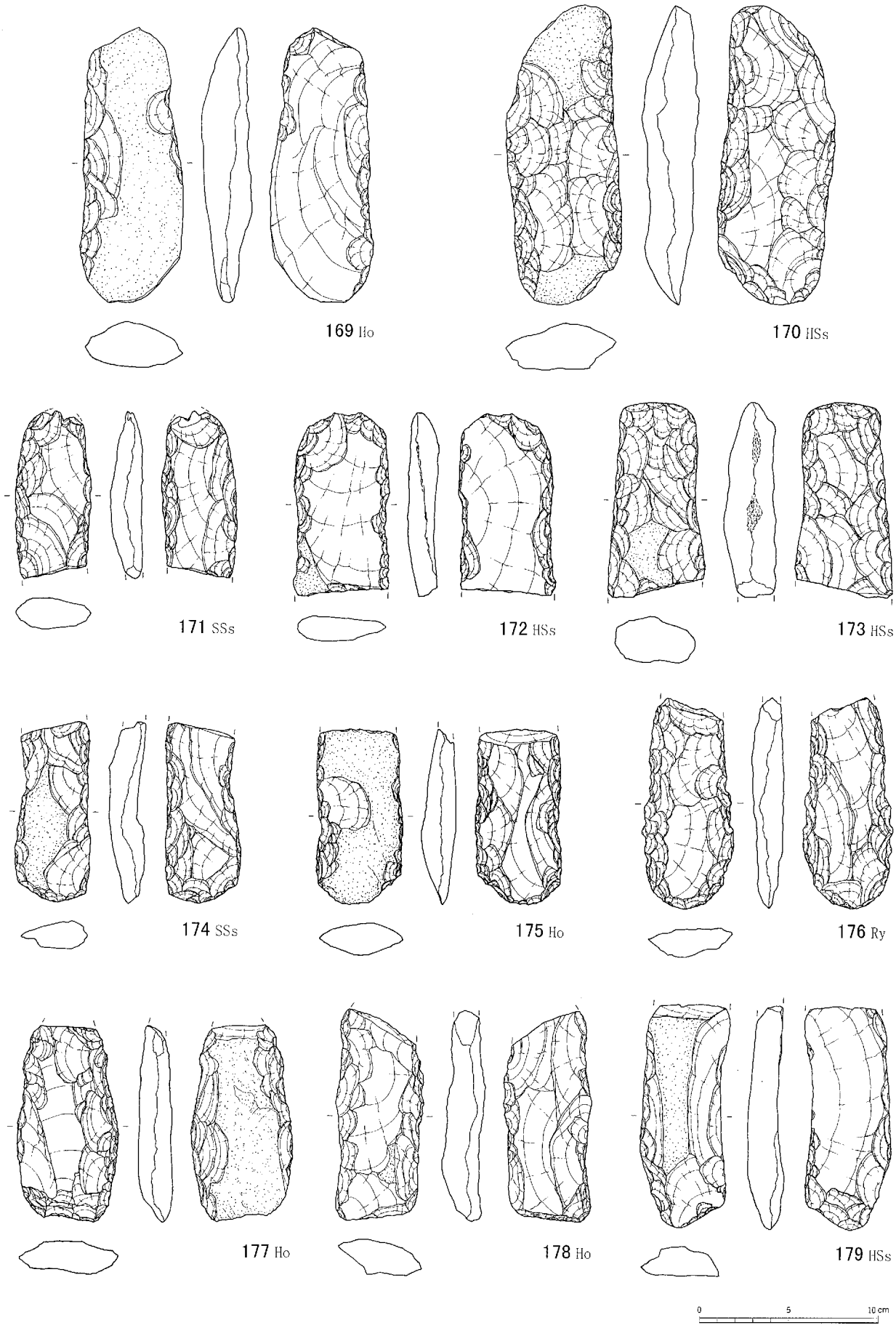
第255図　遺構外出土石器（11）－打製石斧



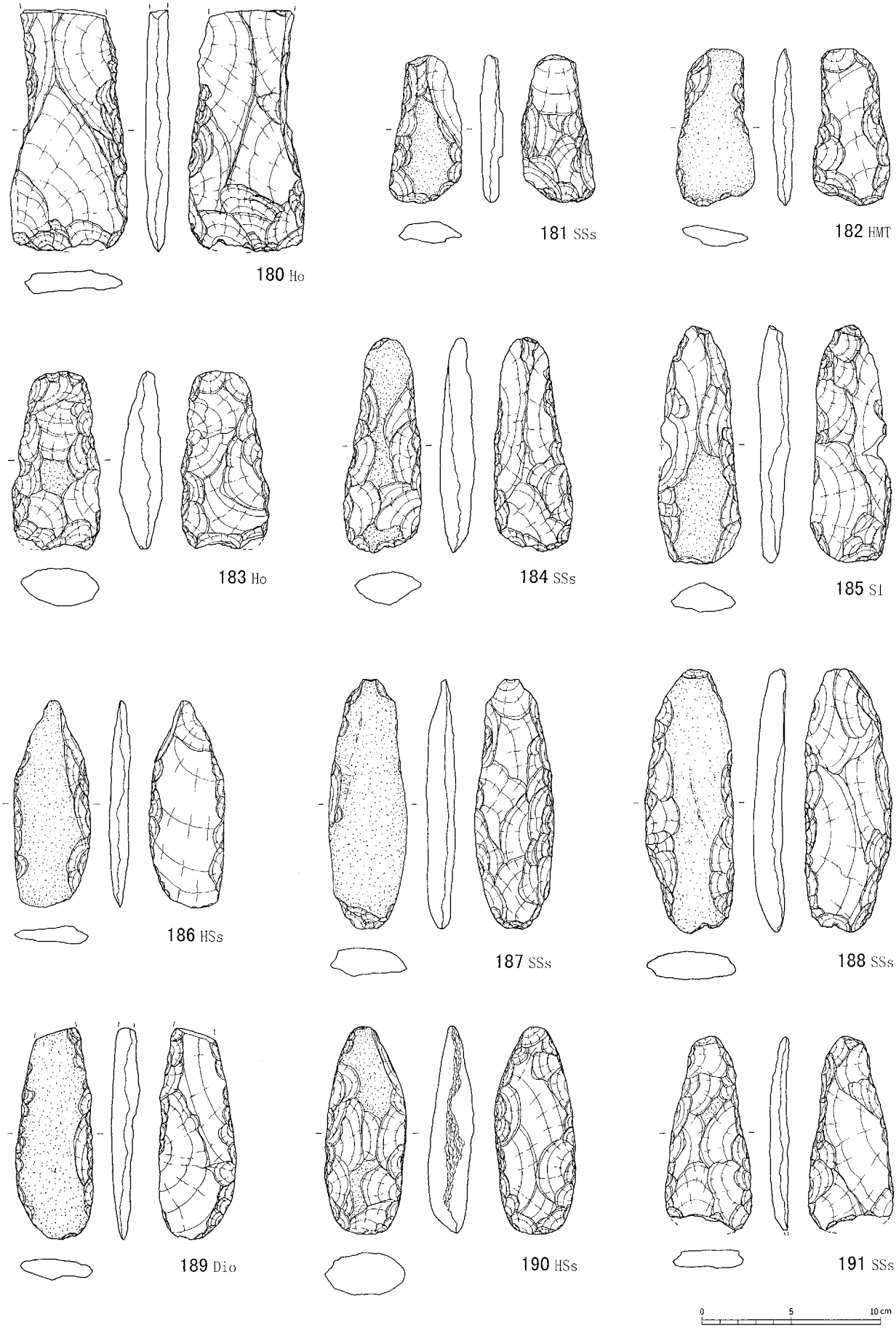
第256図　遺構外出土石器（12）－打製石斧



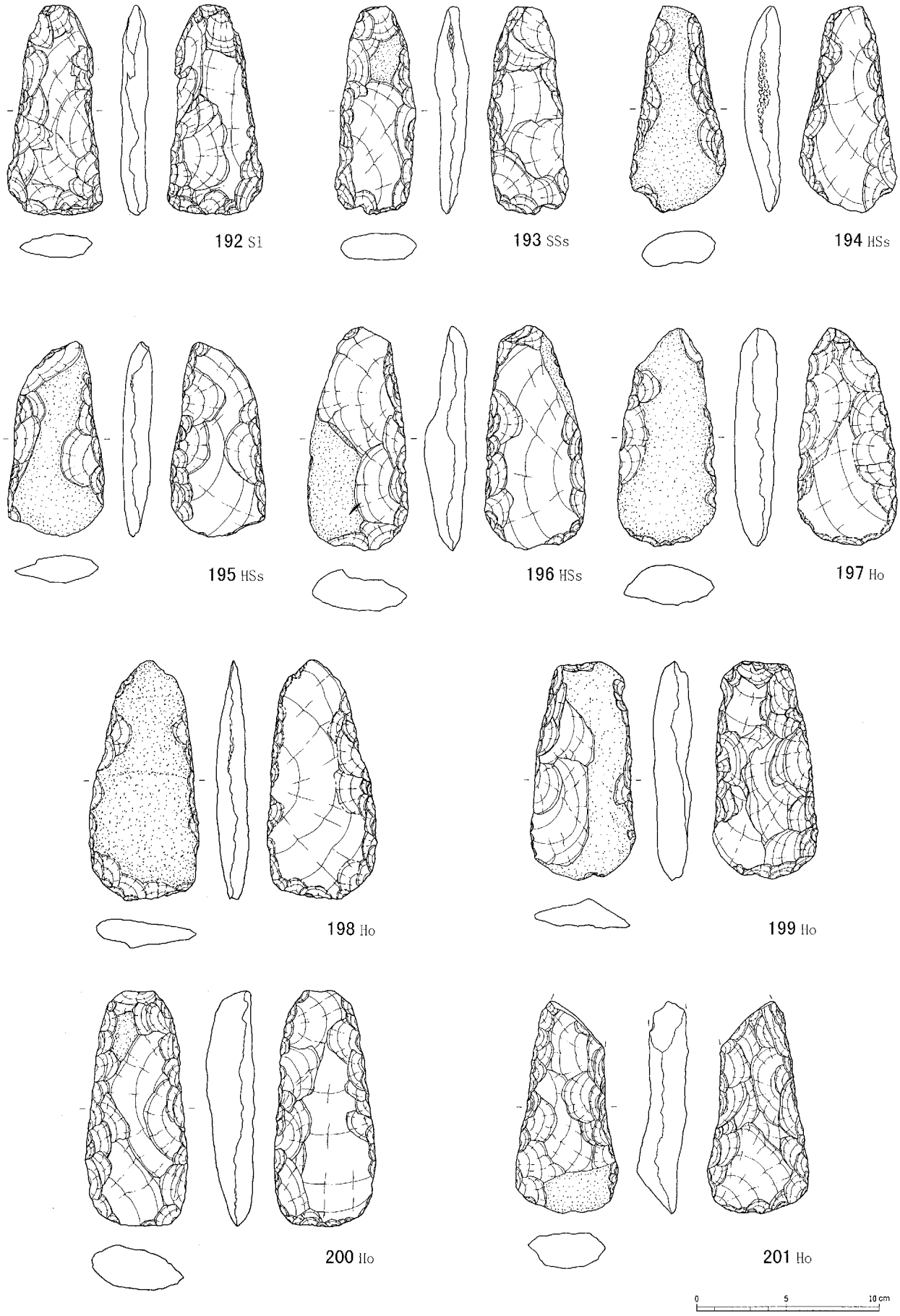
第257図　遺構外出土石器（13）－打製石斧



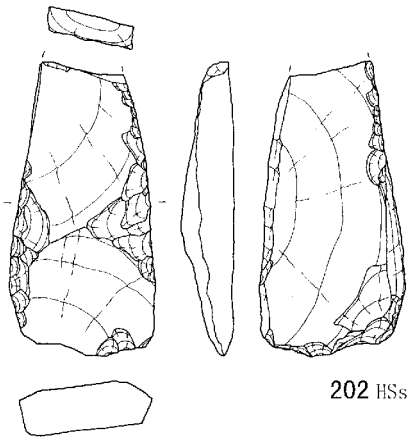
第258図　遺構外出土石器（14）－打製石斧

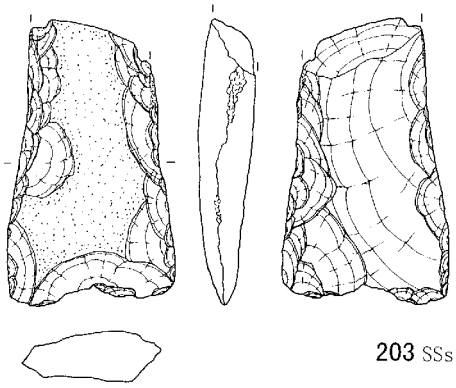


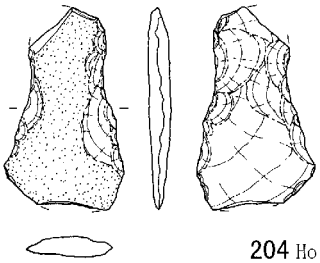
第259図　遺構外出土石器（15）－打製石斧

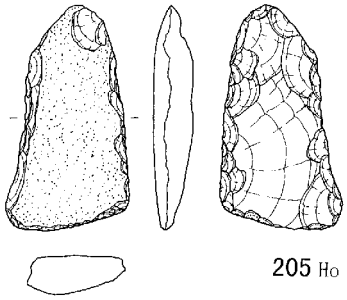


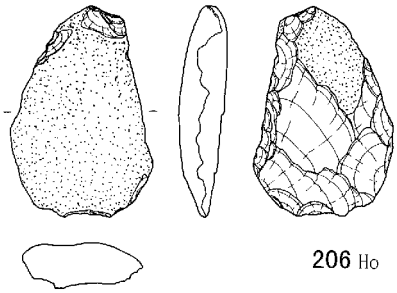
第260図　遺構外出土石器（16）－打製石斧

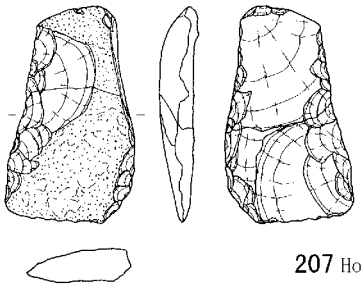

202 HSs

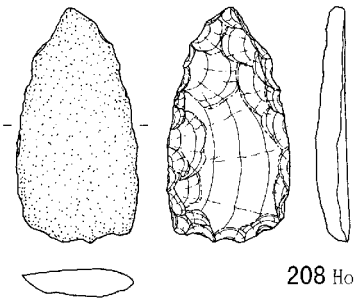

203 SSs

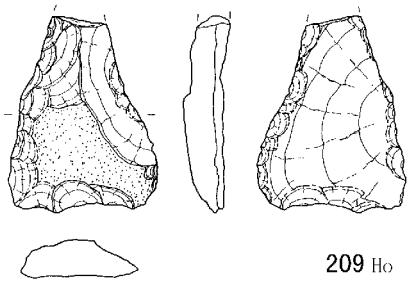

204 Ho

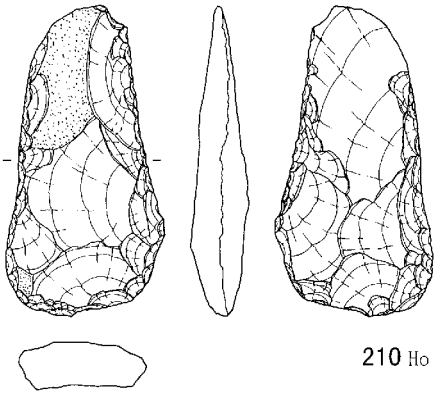

205 Ho

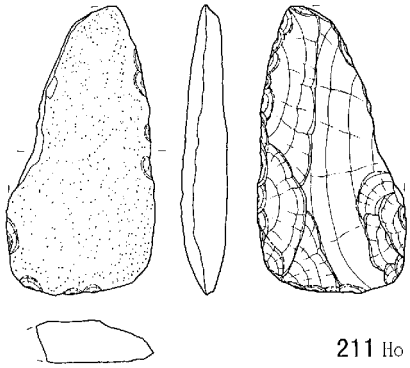

206 Ho

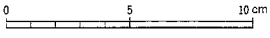

207 Ho


208 Ho

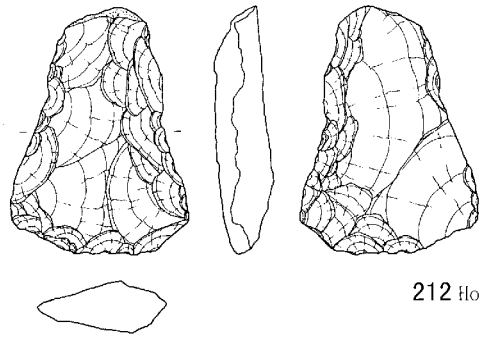

209 Ho

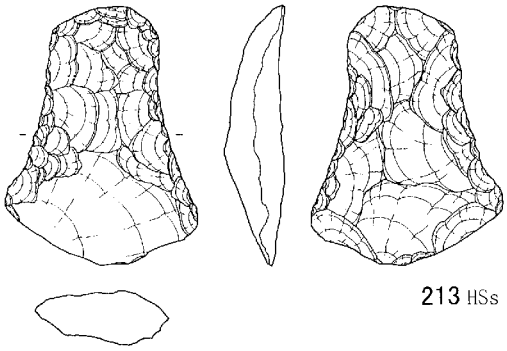

210 Ho

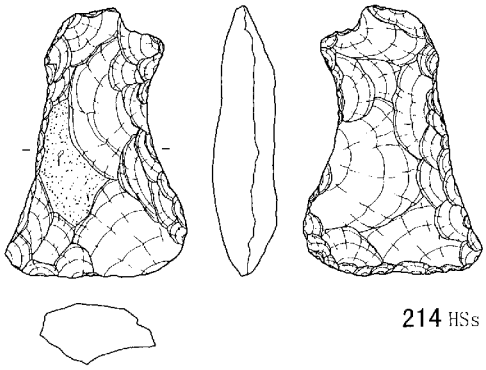

211 Ho

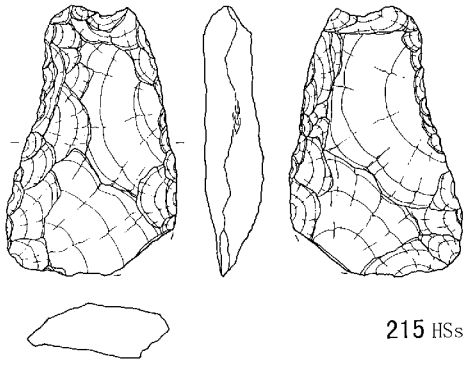


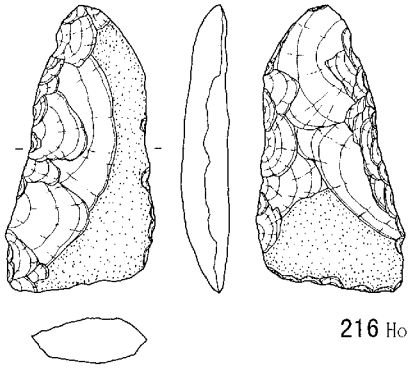
第261図　遺構外出土石器（17）－打製石斧

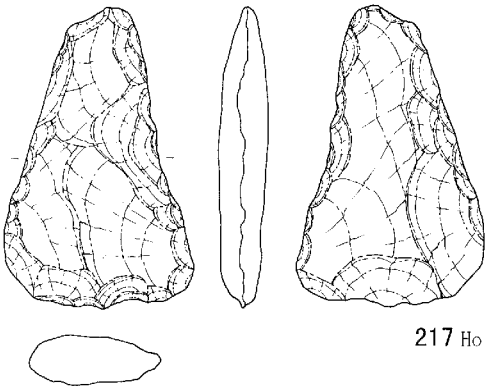

212 Ho

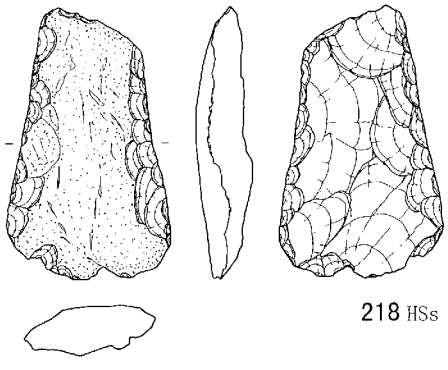

213 HSs

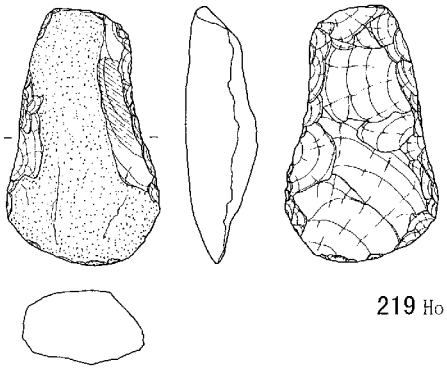

214 HSs

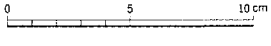

215 HSs


216 Ho

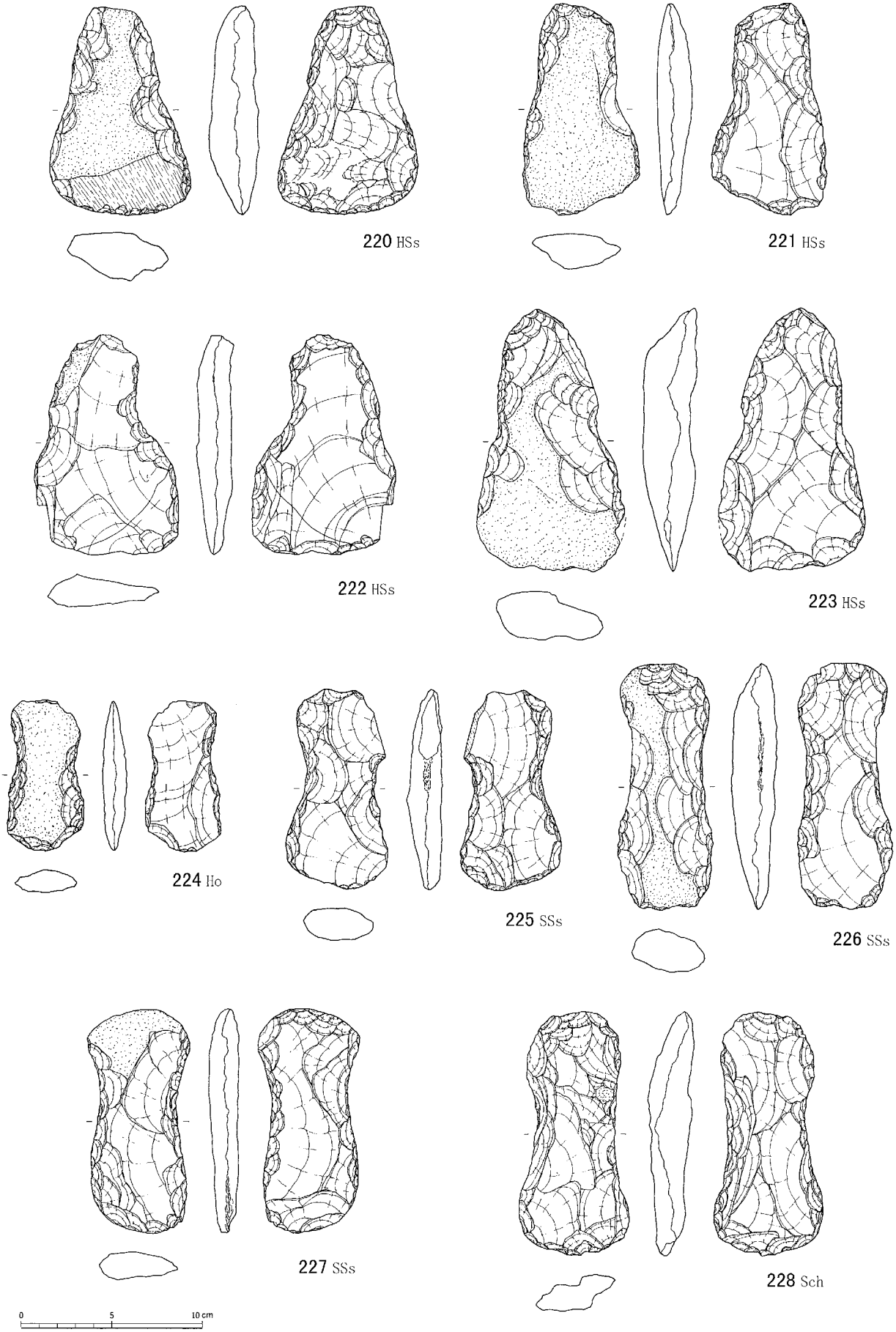

217 Ho


218 HSs

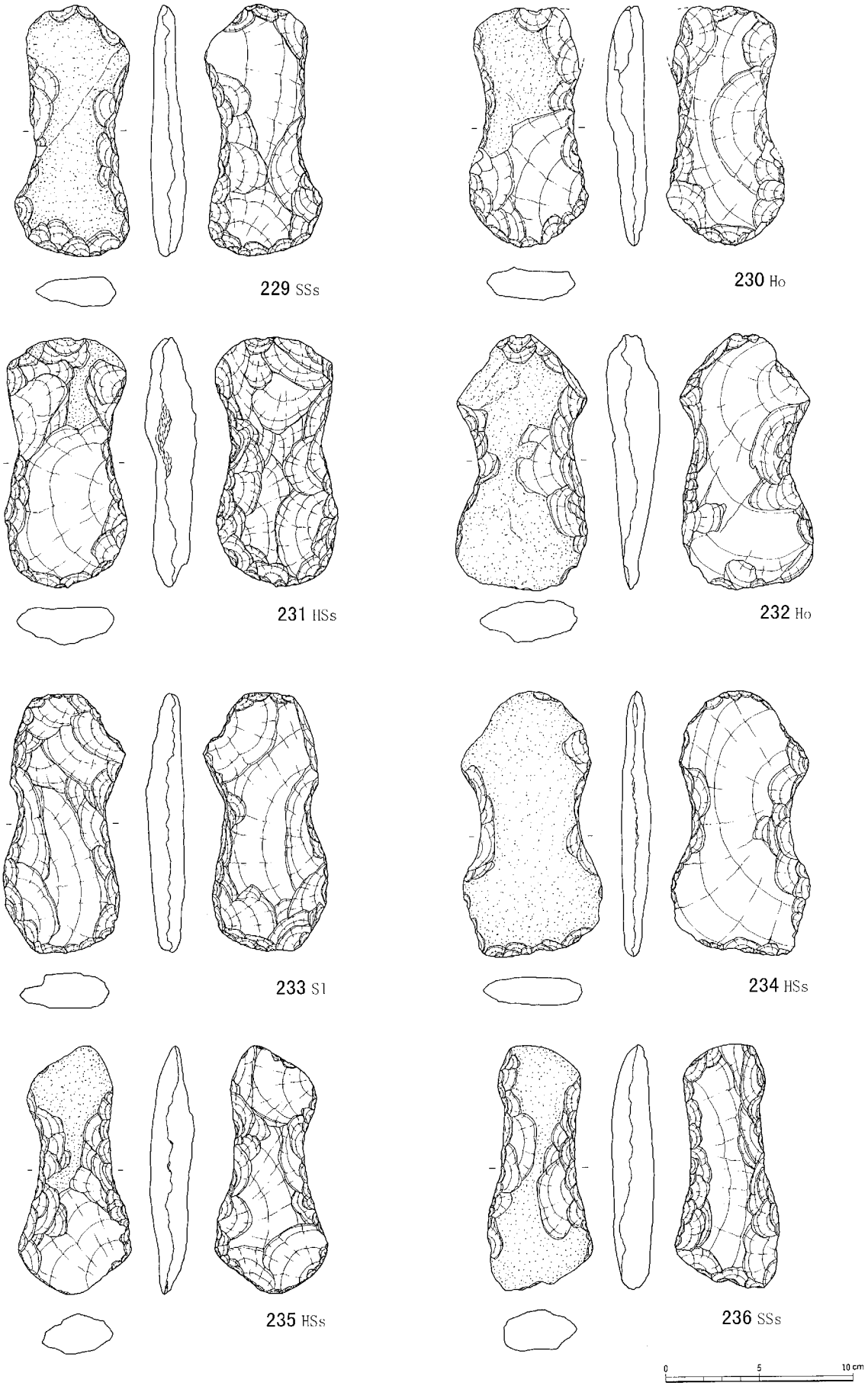

219 Ho



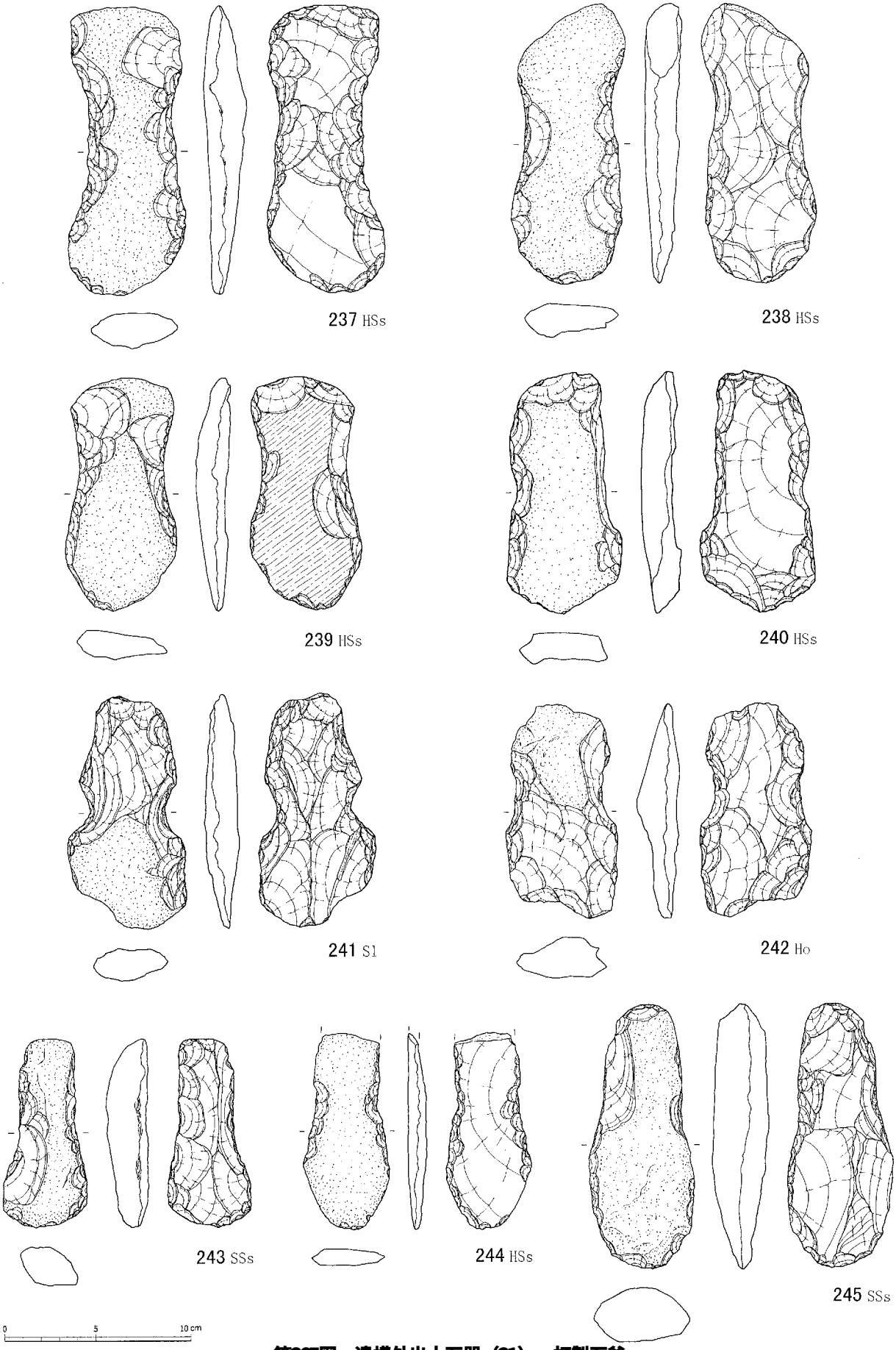
第262図　遺構外出土石器（18）－打製石斧



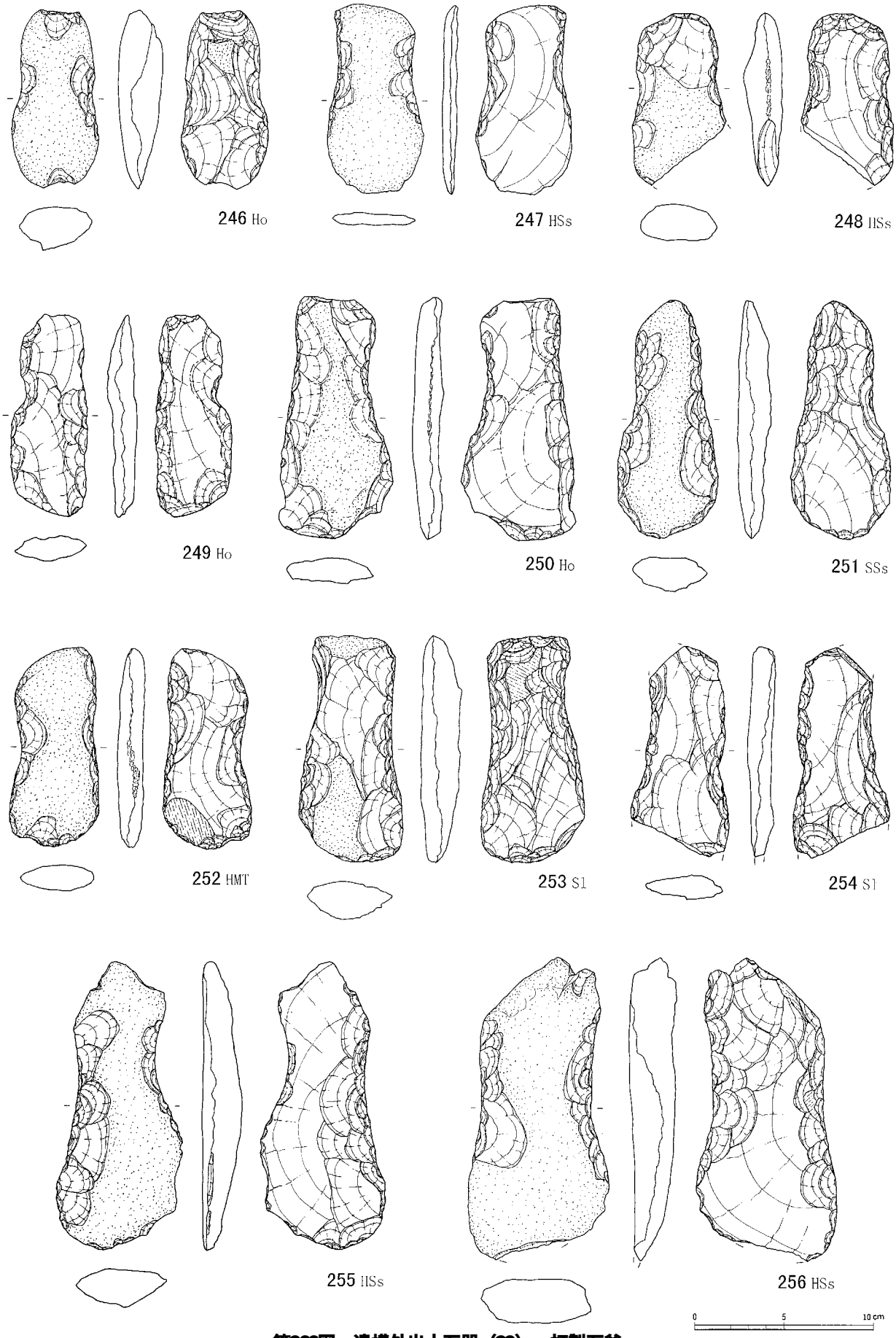
第263図　遺構外出土石器（19）－打製石斧



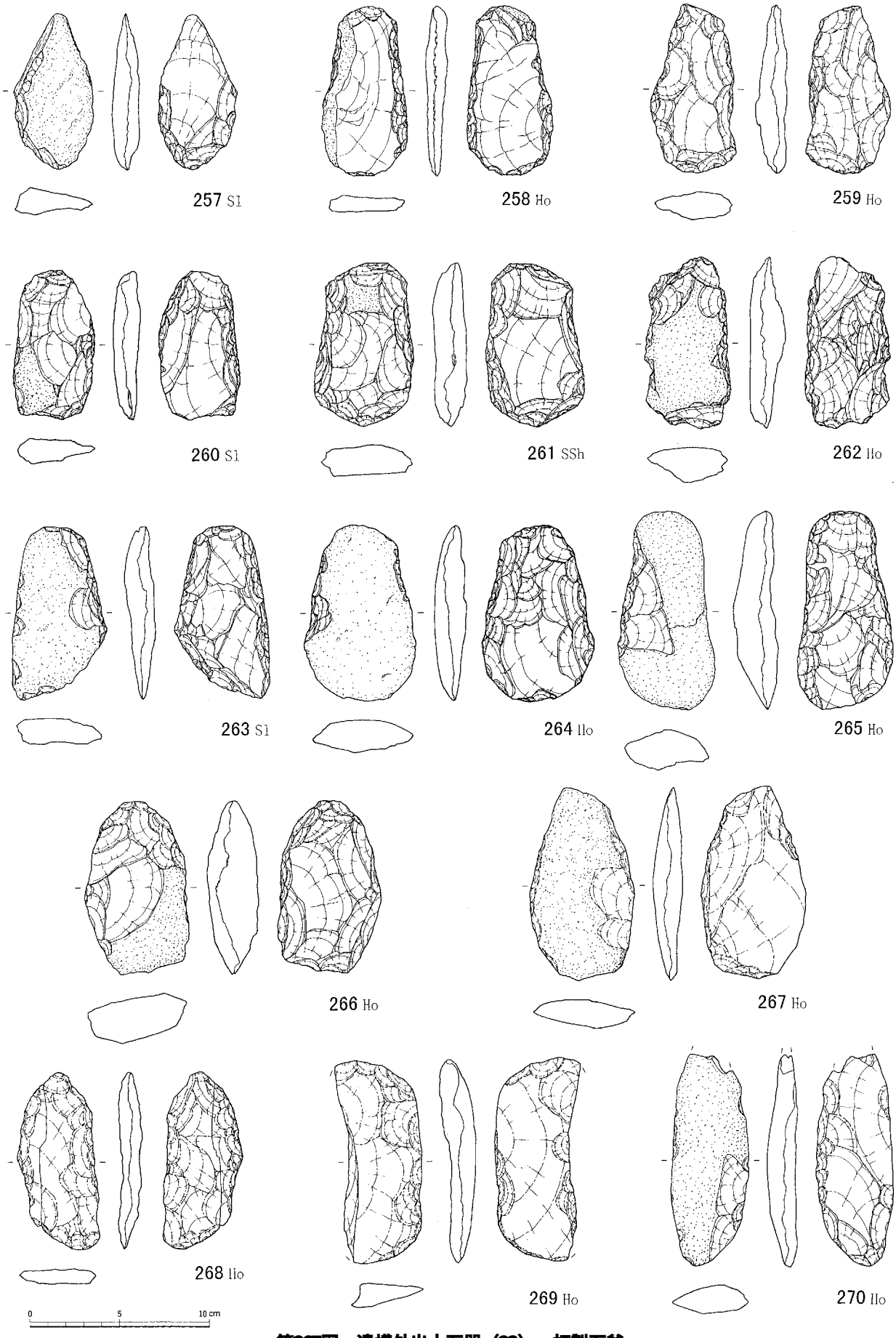
第264図　遺構外出土石器（20）－打製石斧



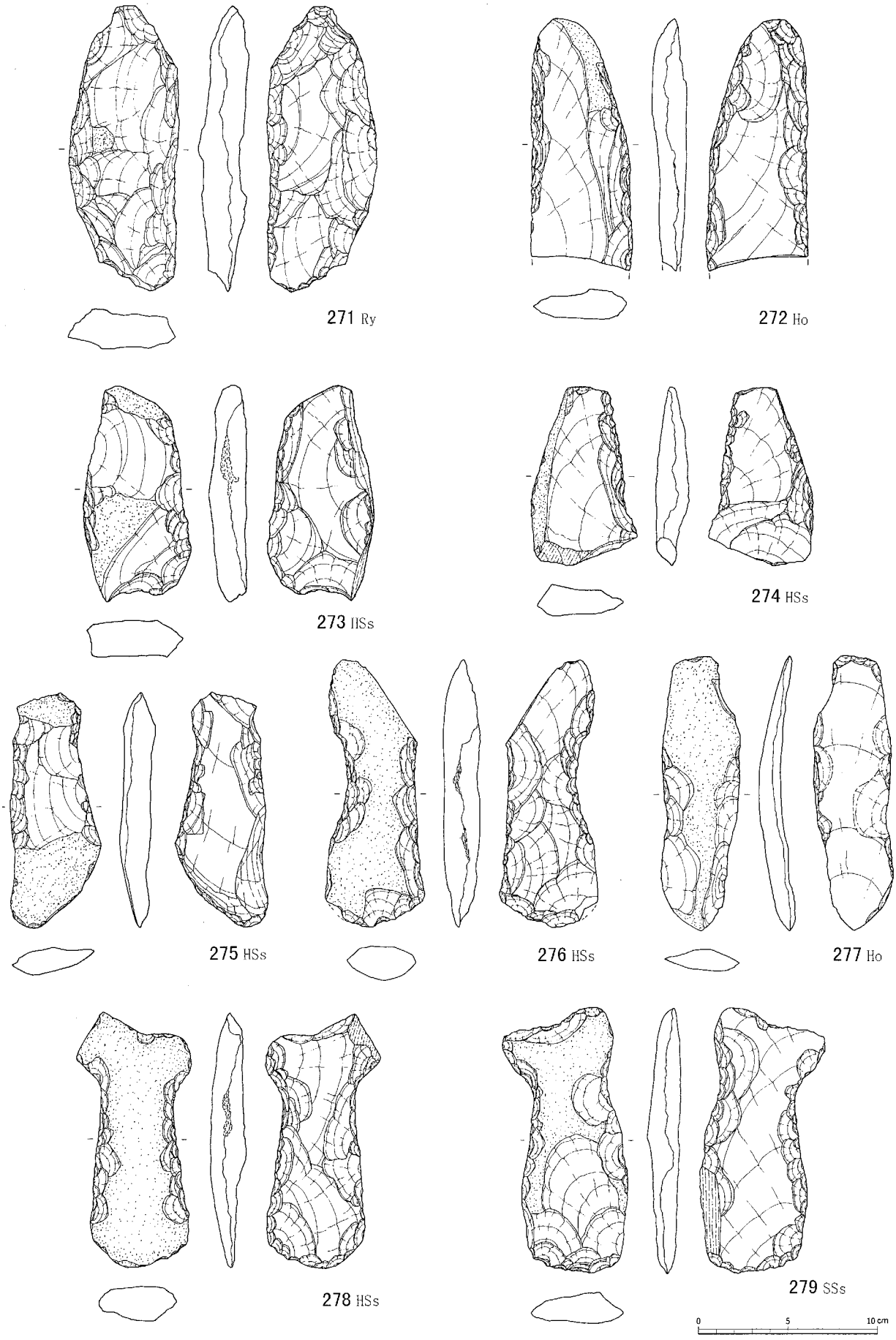
第265図　遺構外出土石器（21）－打製石斧



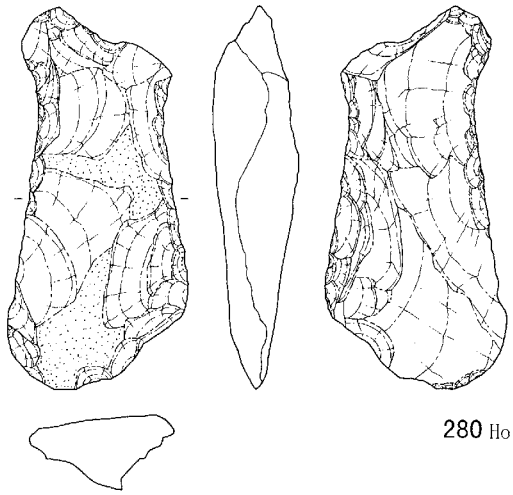
第266図　遺構外出土石器（22）－打製石斧

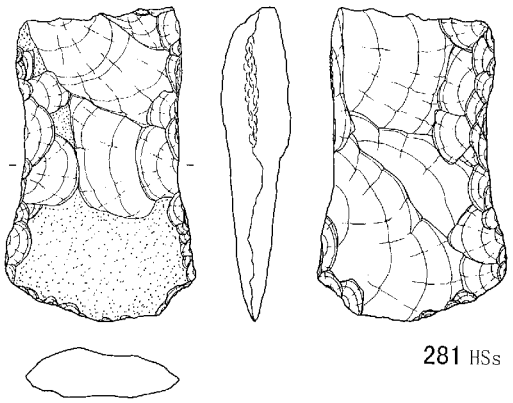


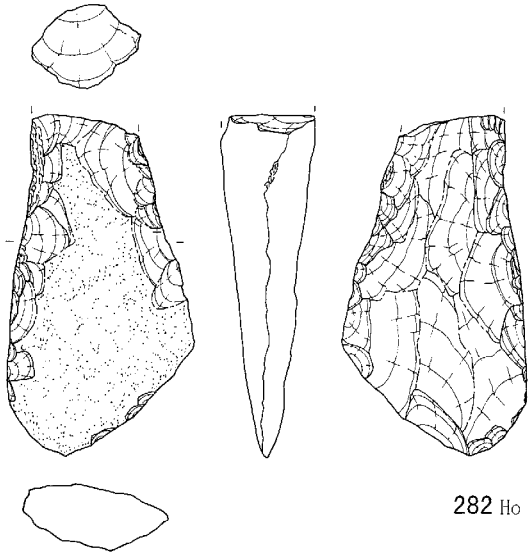
第267図　遺構外出土石器（23）－打製石斧

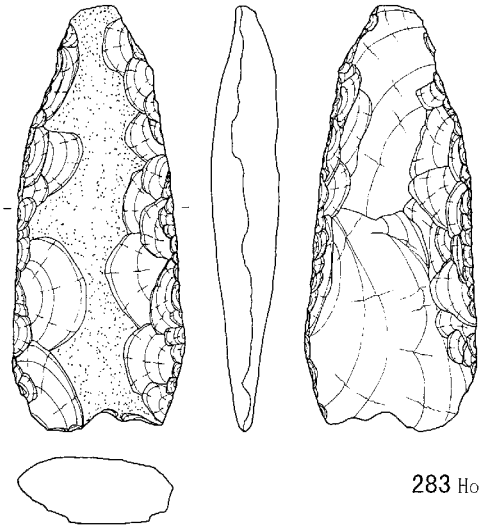


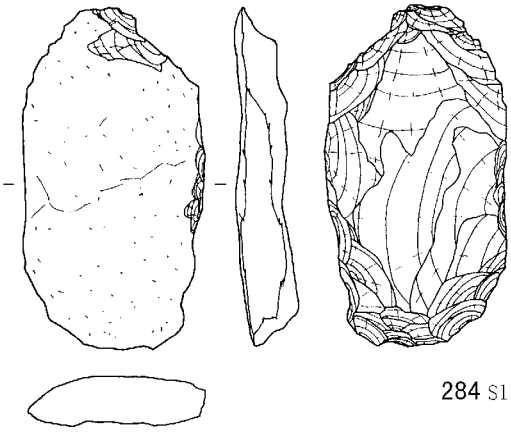
第268図　遺構外出土石器（24）－打製石斧

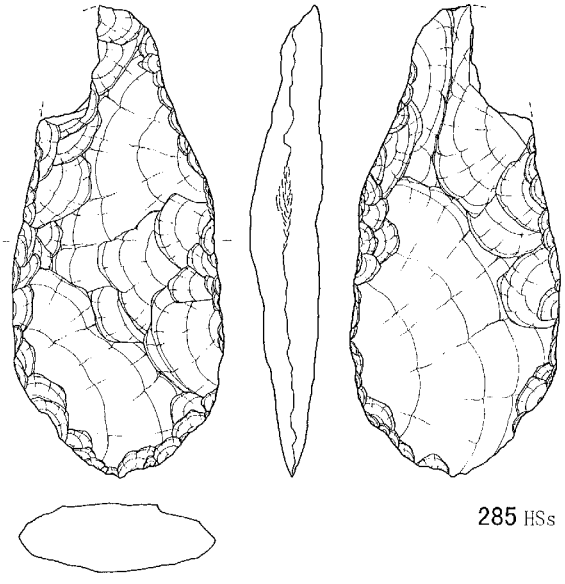

280 Ho

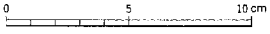

281 HSs


282 Ho

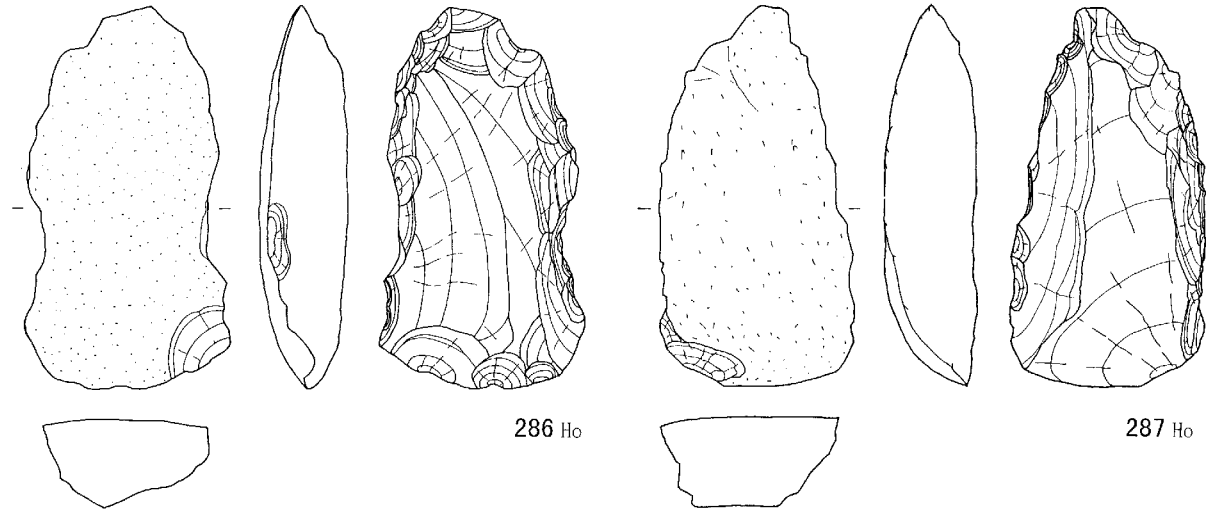

283 Ho

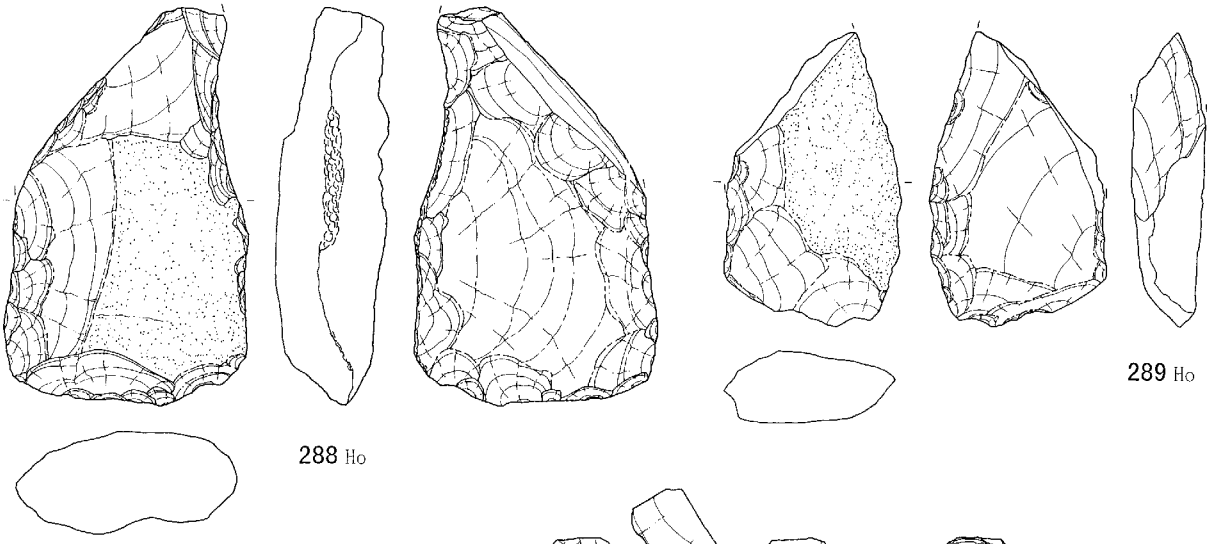

284 S1

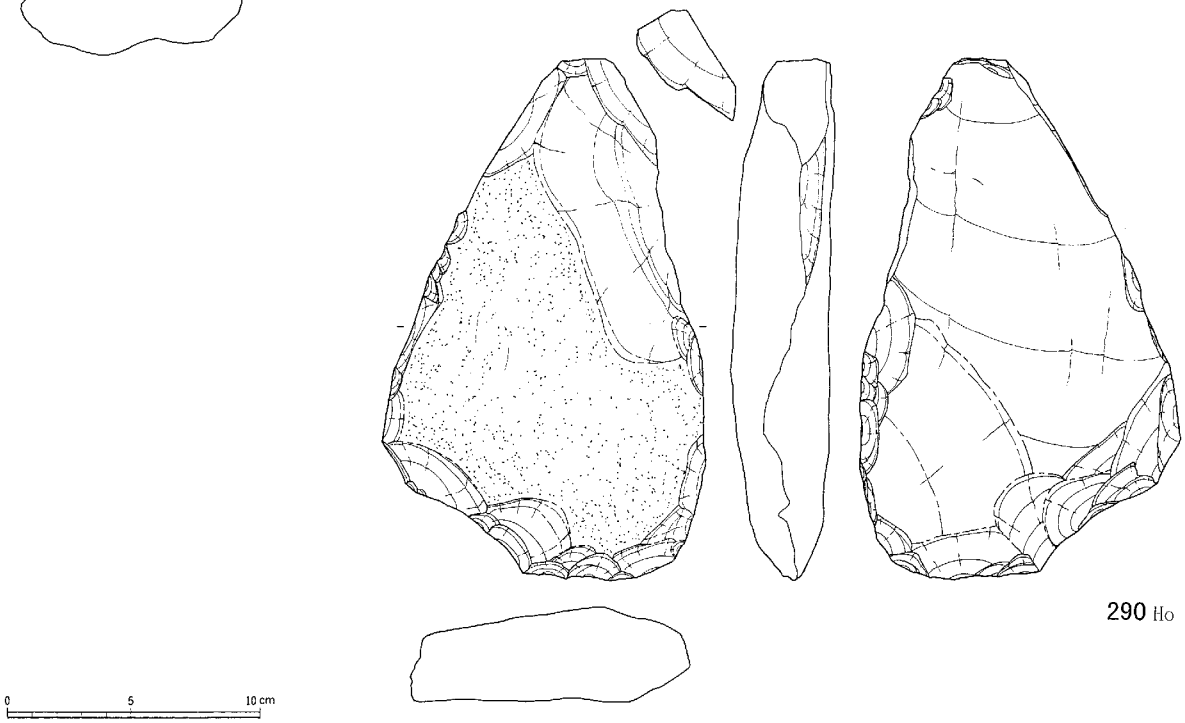

285 HSs



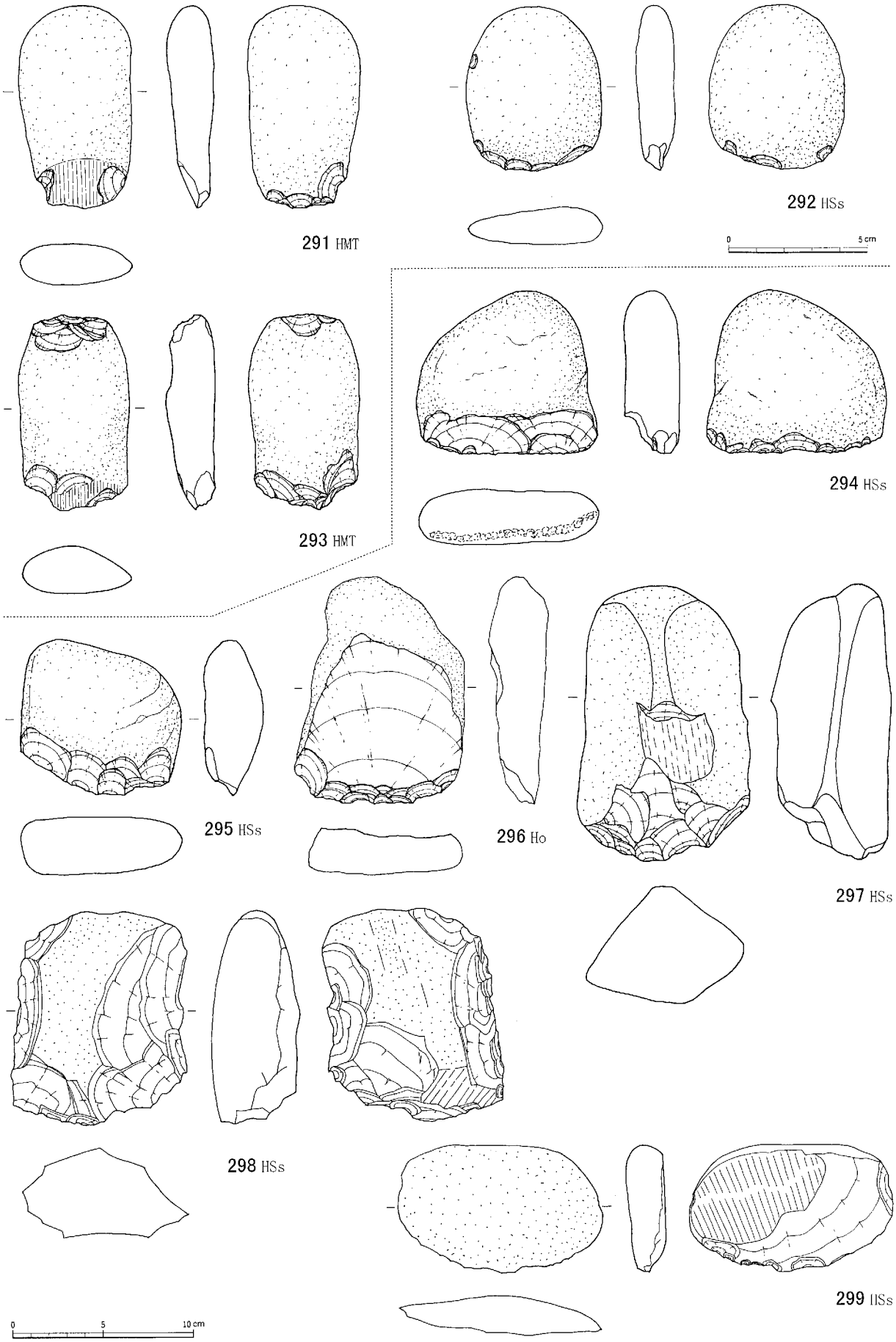
第269図　遺構外出土石器（25）－打製石斧



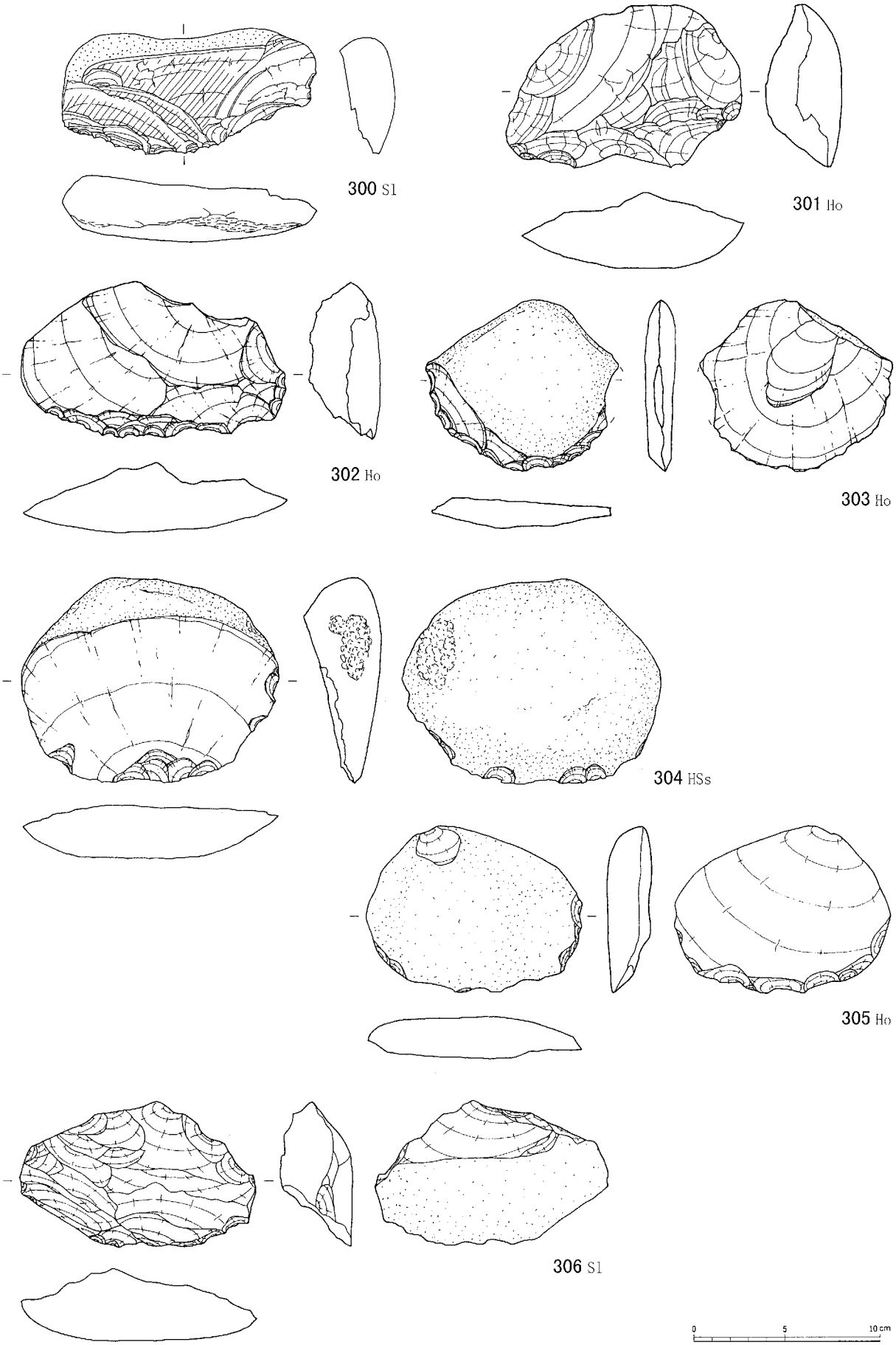




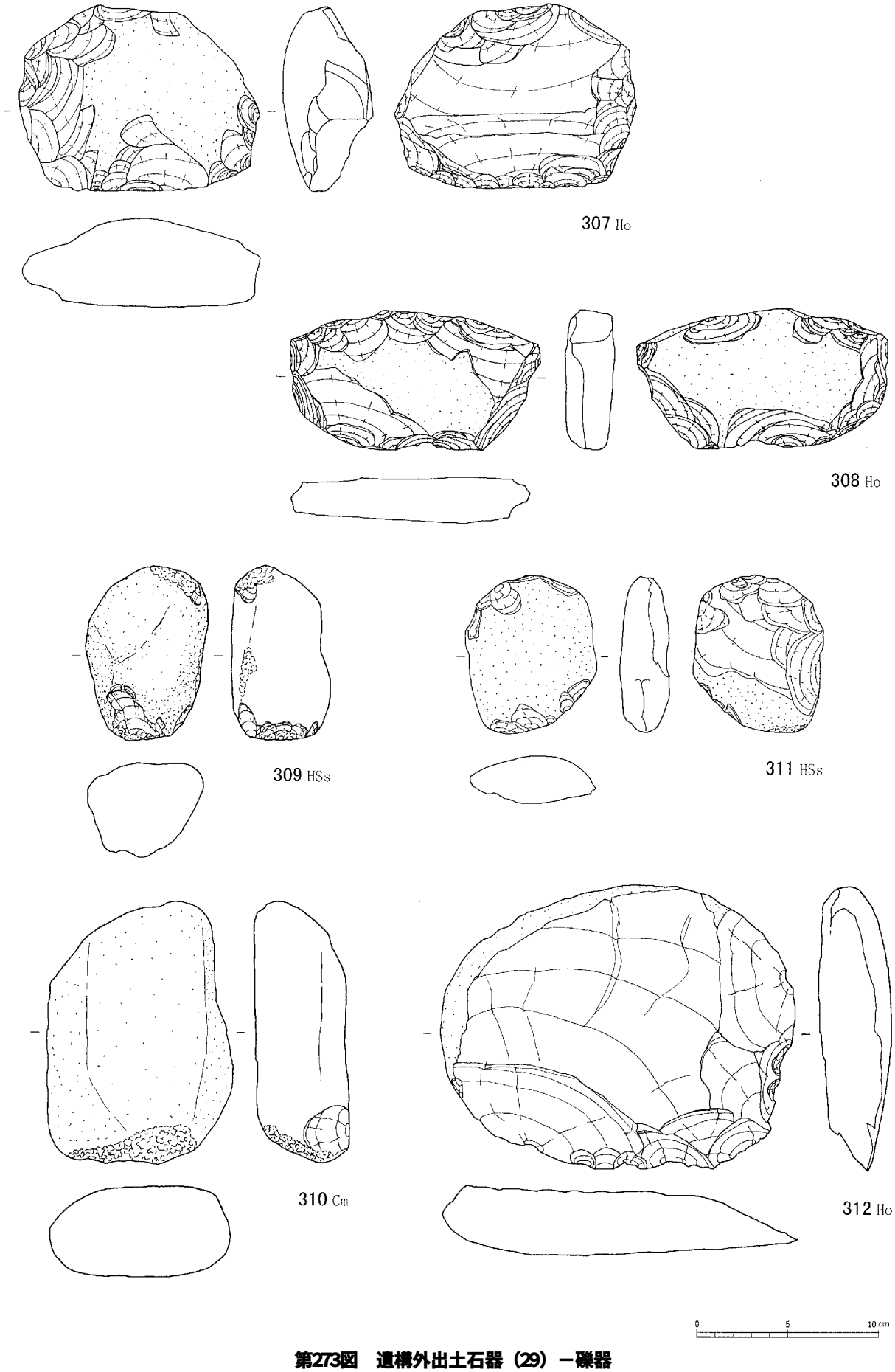
第270図　遺構外出土石器（26）－打製石斧



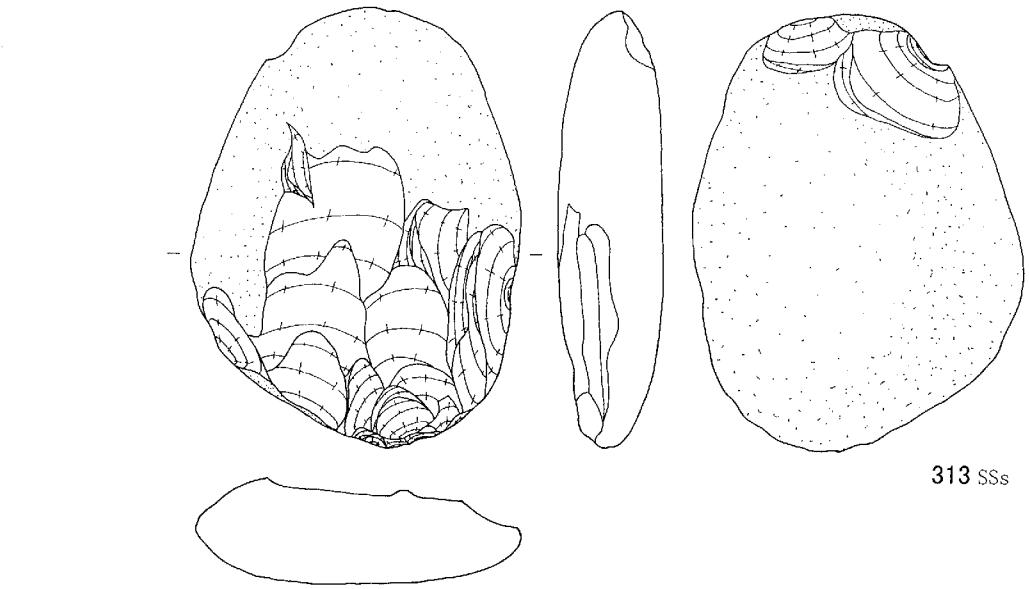
第271図　遺構外出土石器（27）－礫器

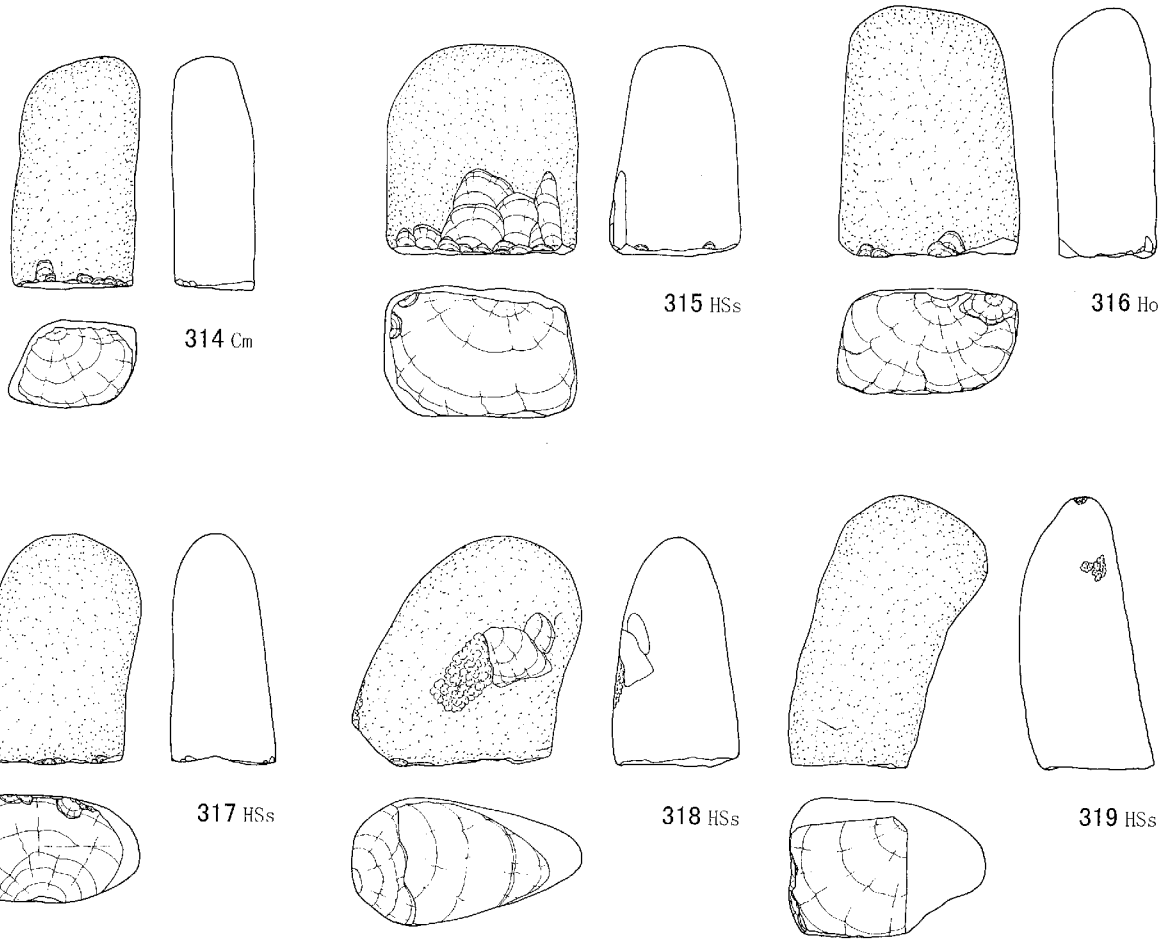


第272図　遺構外出土石器（28）－礫器

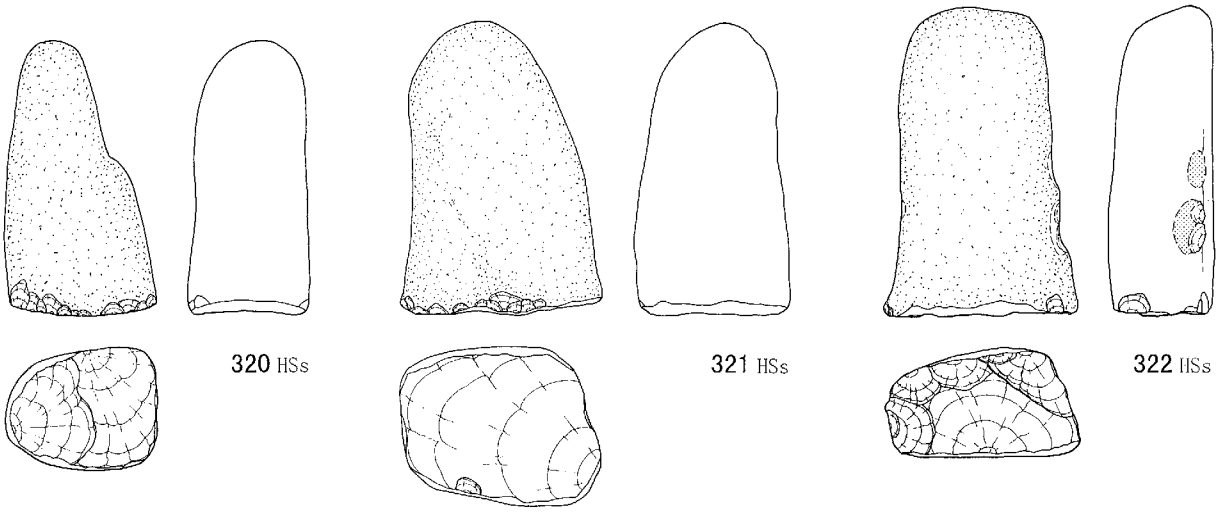


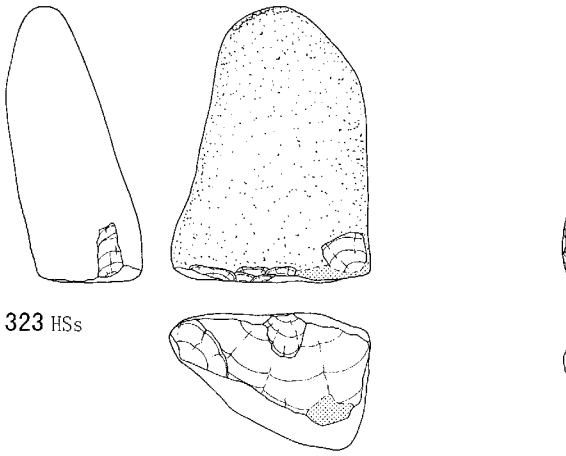
第273図　遺構外出土石器（29）－礫器

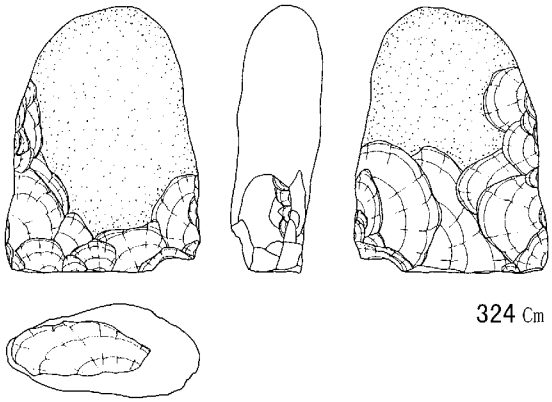


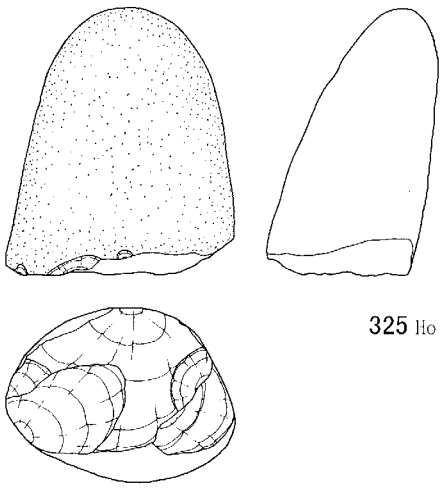


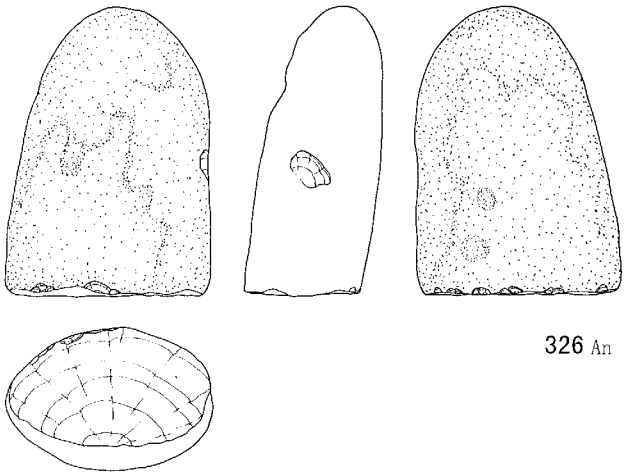
第274図　遺構外出土石器（30）－礫器／スタンプ形石器

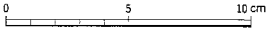




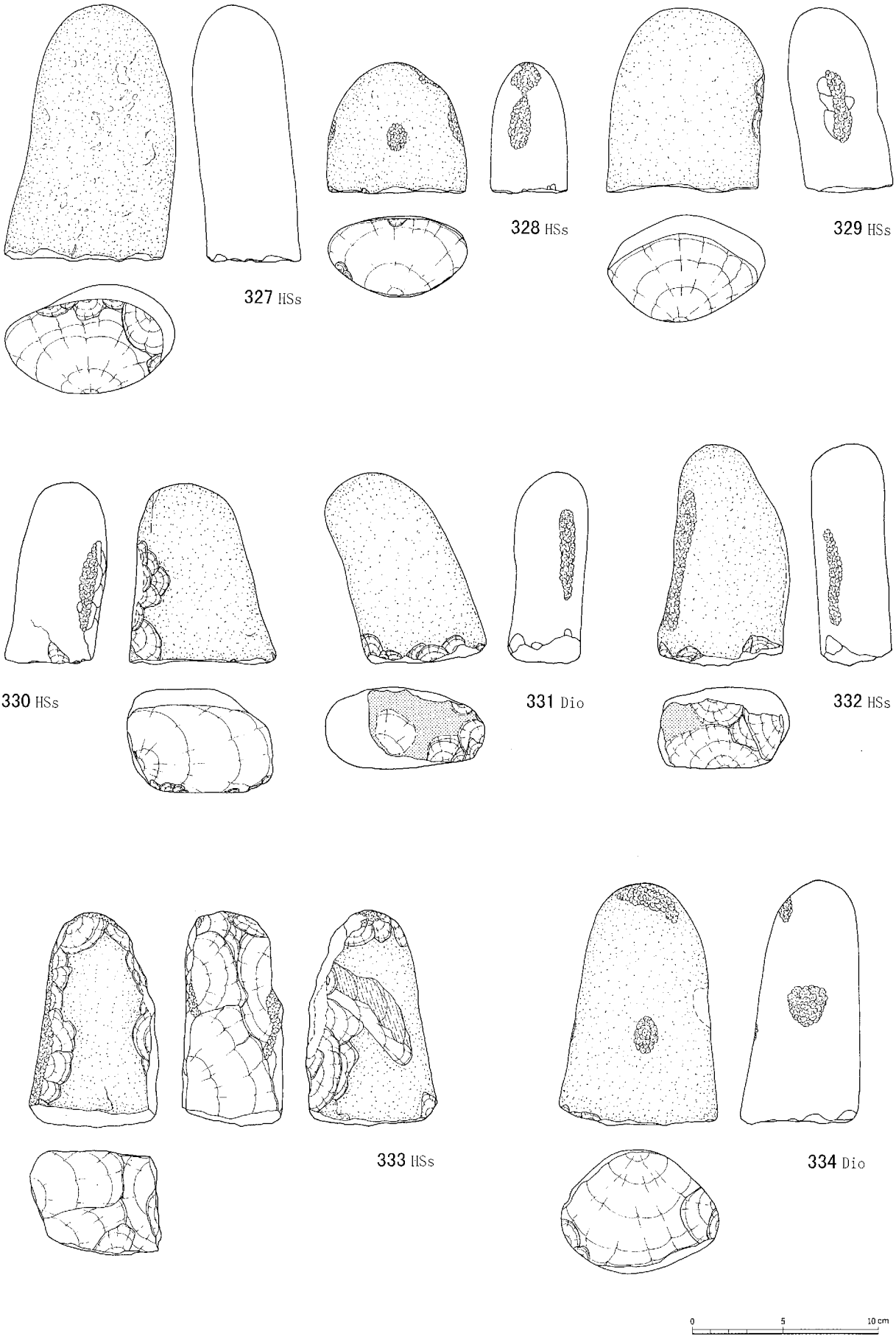




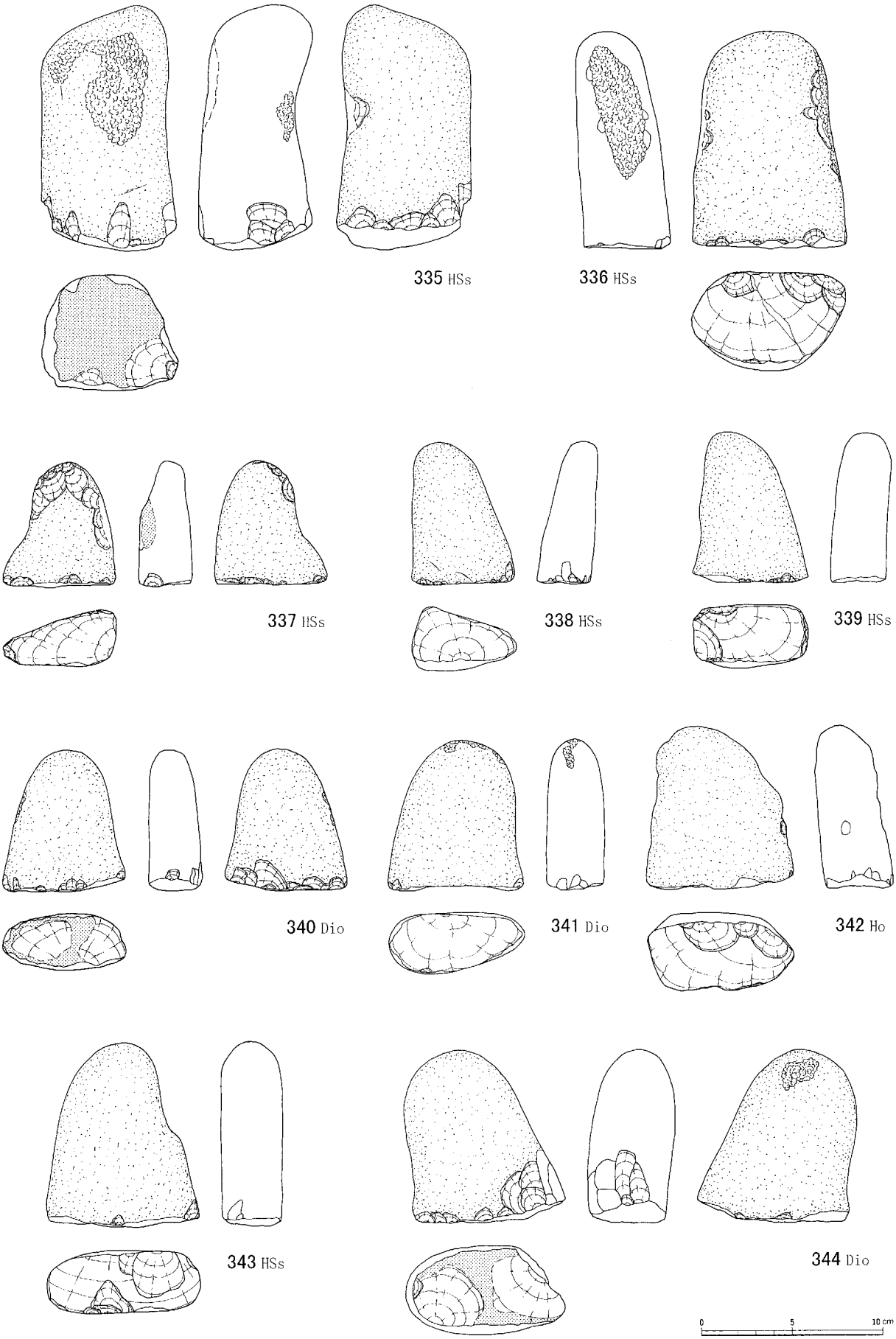




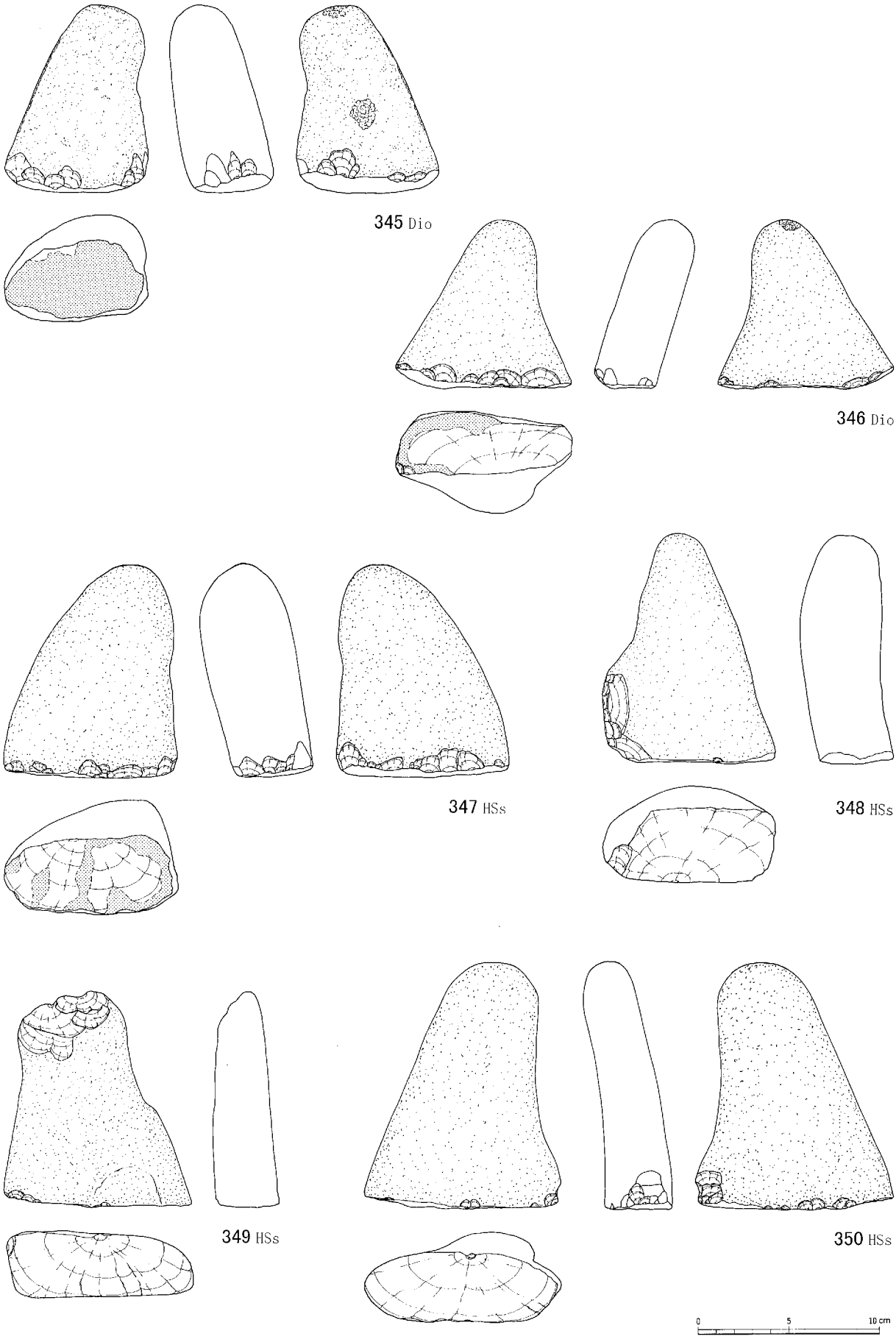
第275図　遺構外出土石器（31）－スタンプ形石器



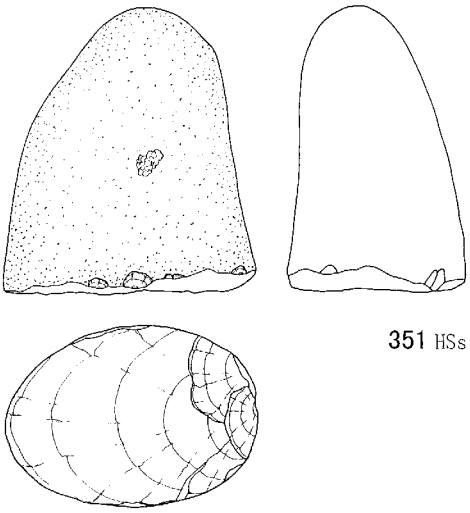
第276図　遺構外出土石器（32）－スタンプ形石器

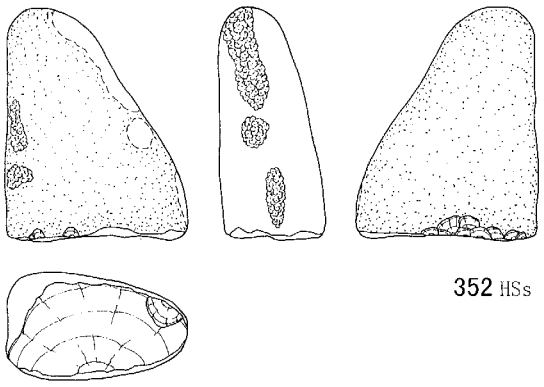


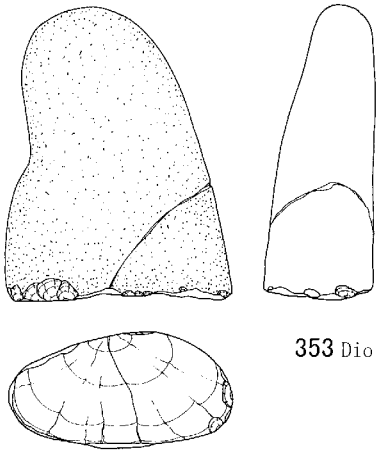
第277図　遺構外出土石器（33）－スタンプ形石器

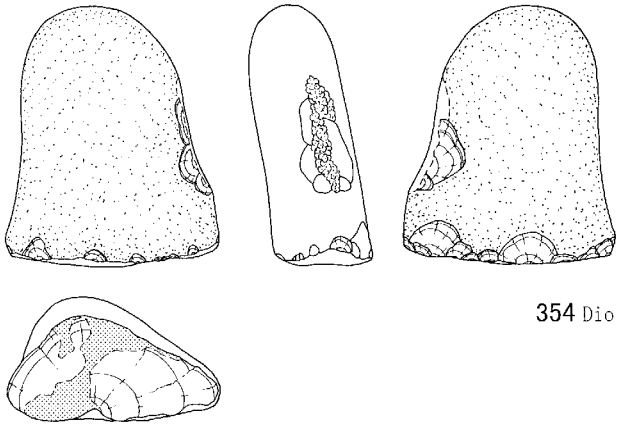


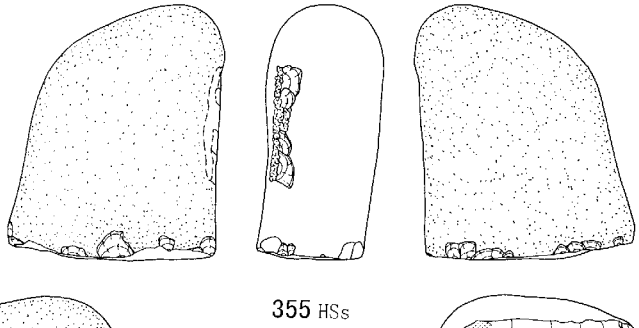
第278図　遺構外出土石器（34）－スタンプ形石器

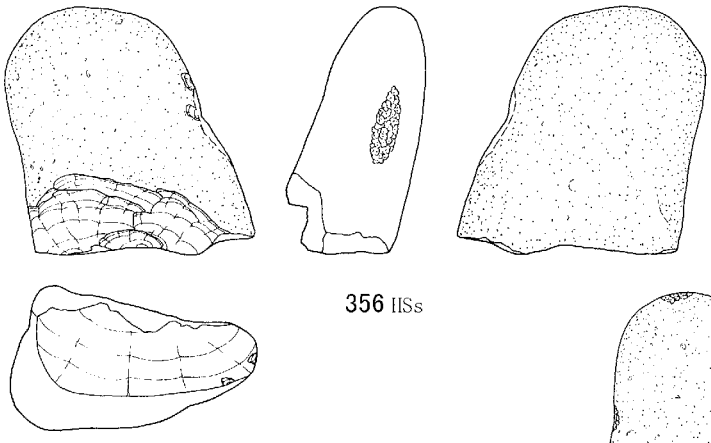


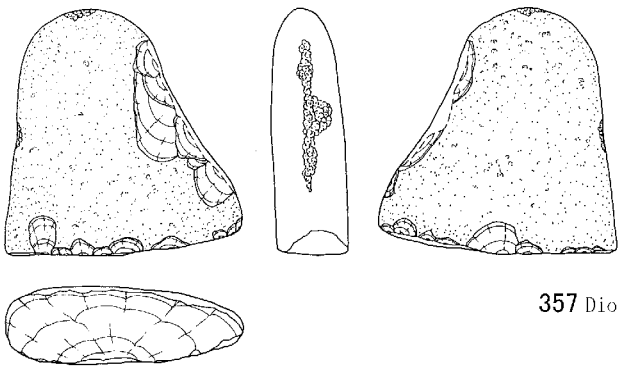


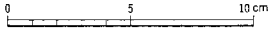




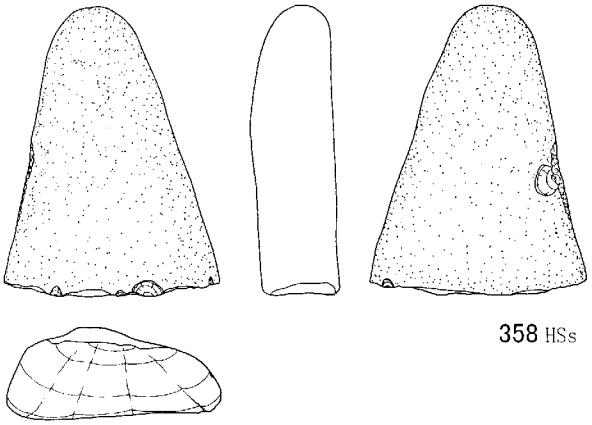


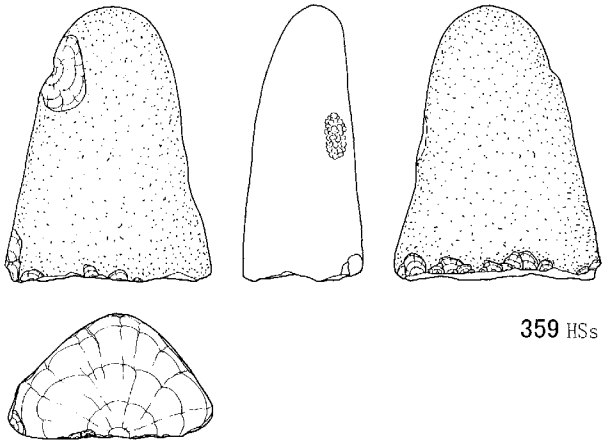


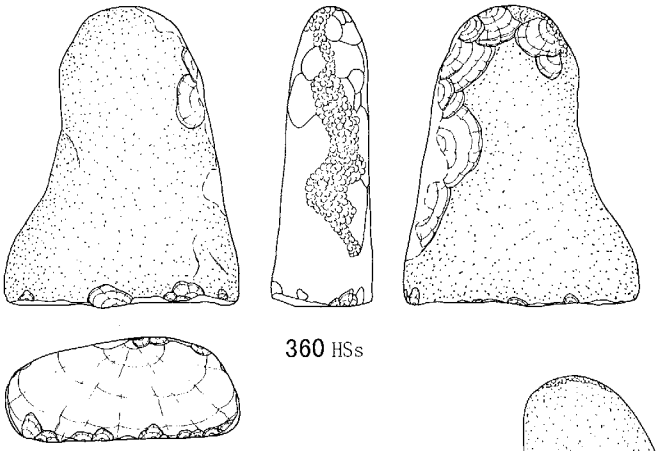


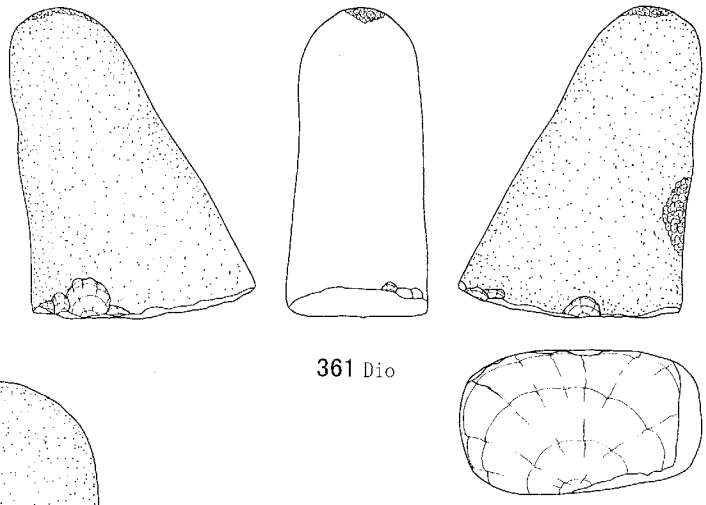


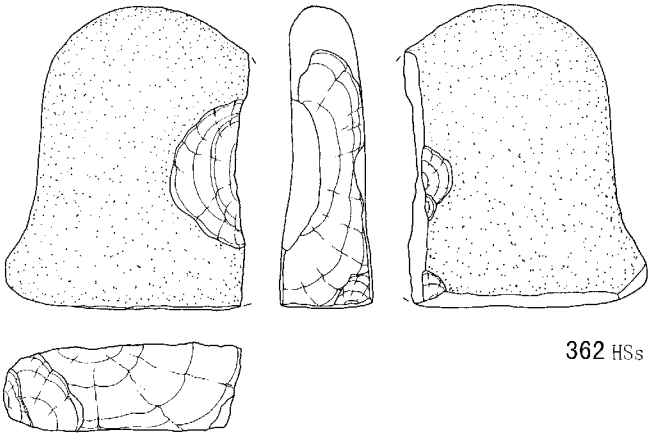
第279図　遺構外出土石器（35）－スタンプ形石器

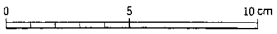




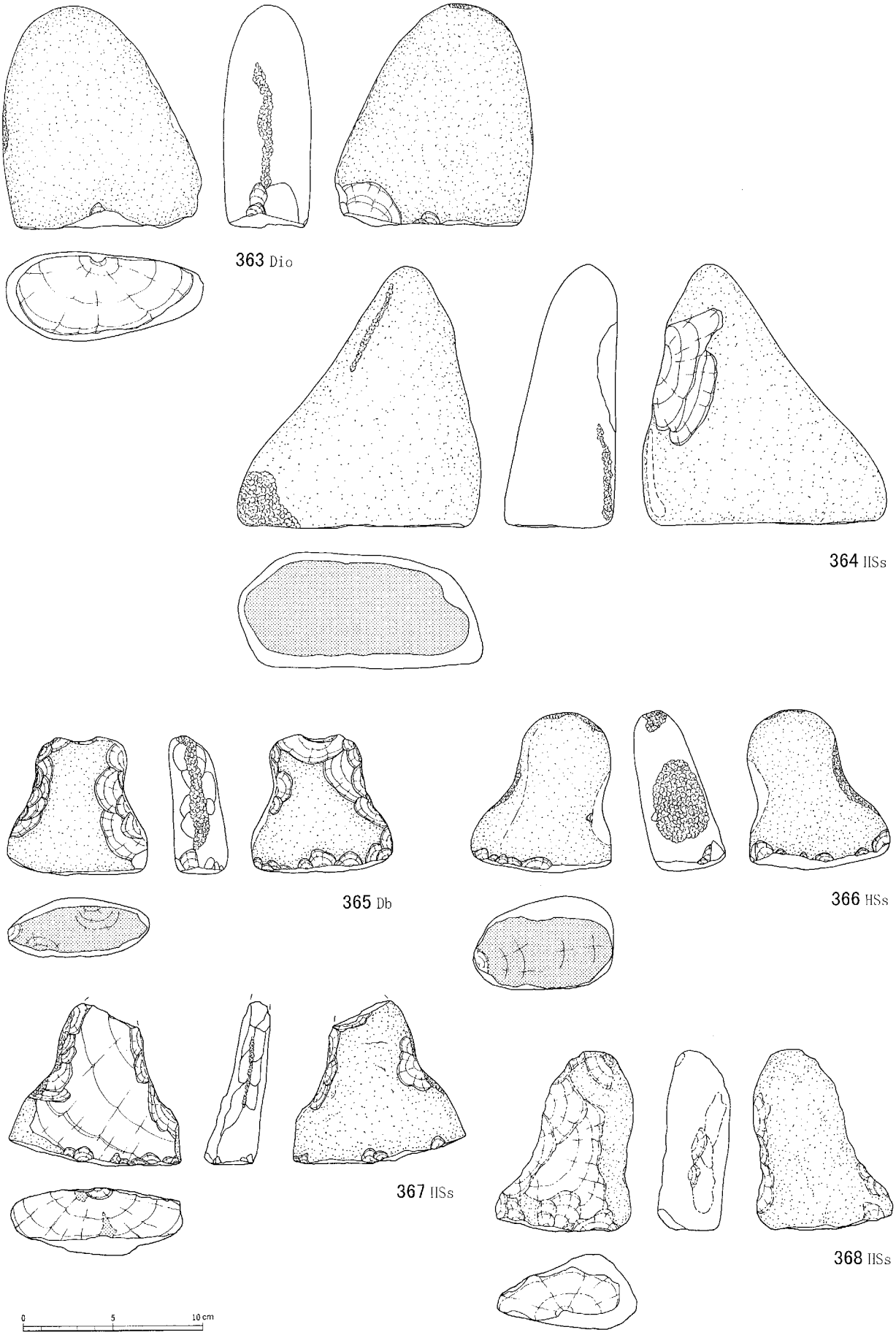




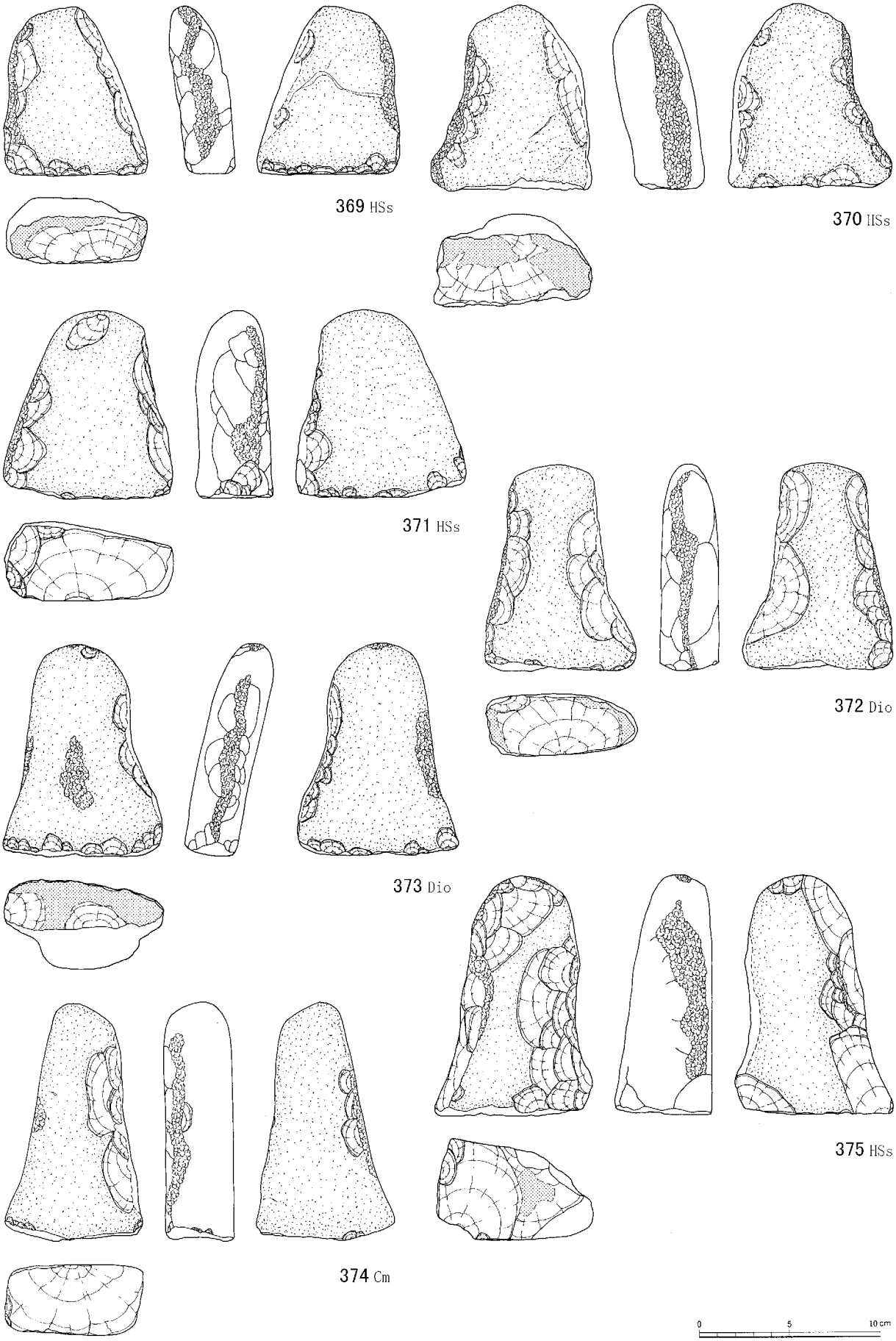




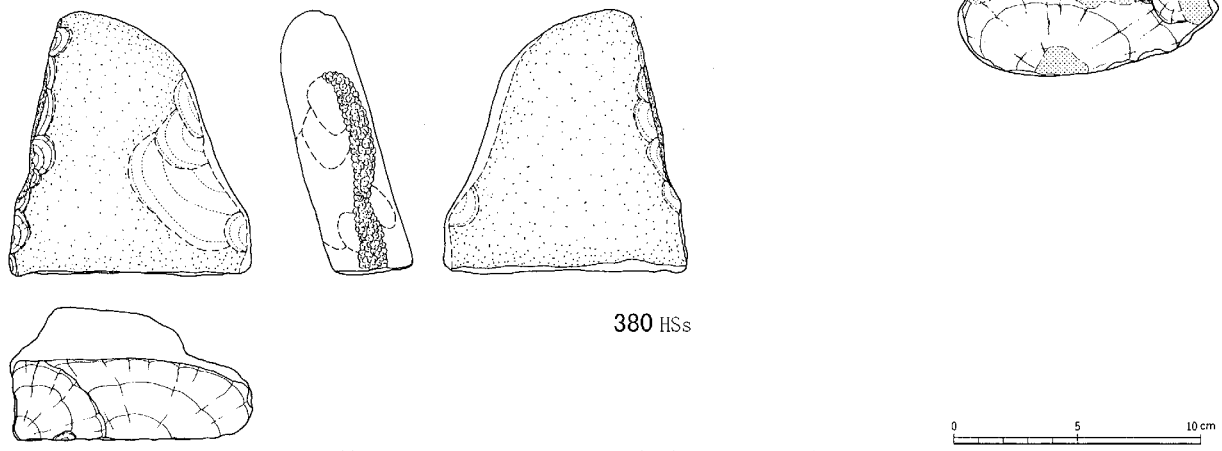
第280図　遺構外出土石器（36）－スタンプ形石器



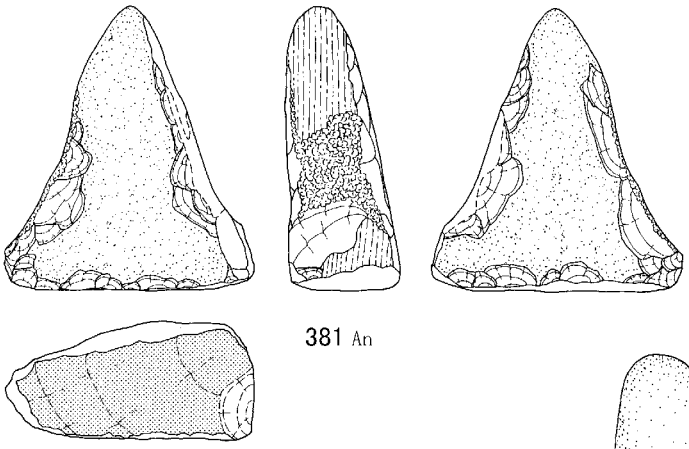
第281図　遺構外出土石器（37）－スタンプ形石器



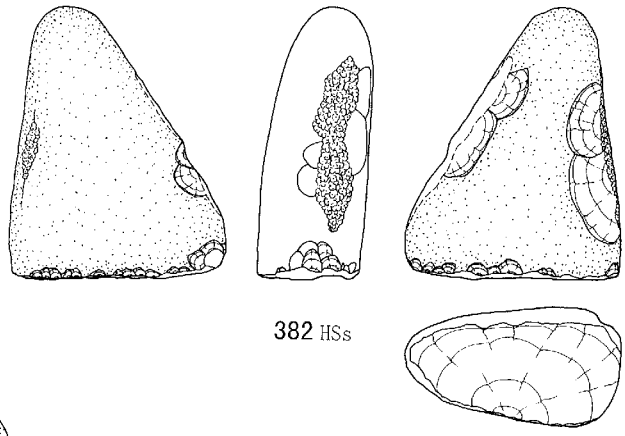
第282図　遺構外出土石器（38）－スタンプ形石器



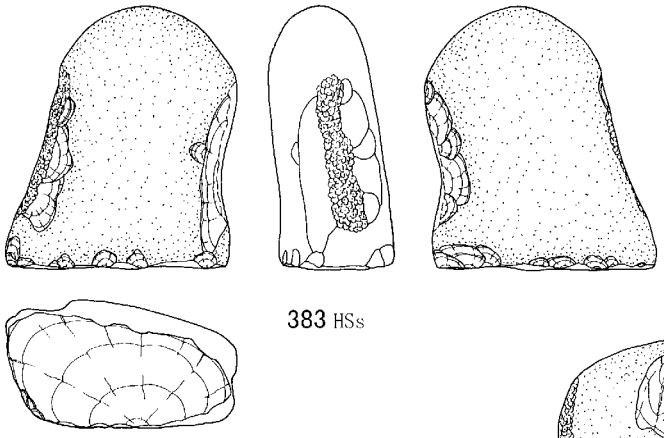
第283図　遺構外出土石器（39）－スタンプ形石器



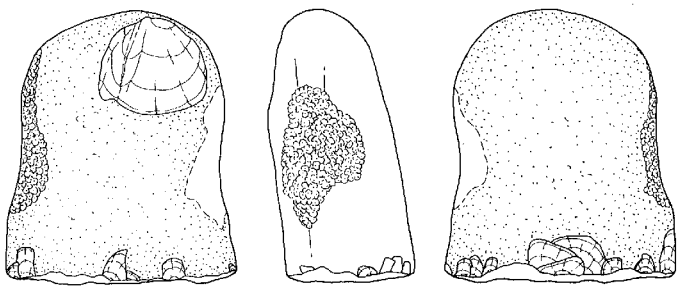
381 An



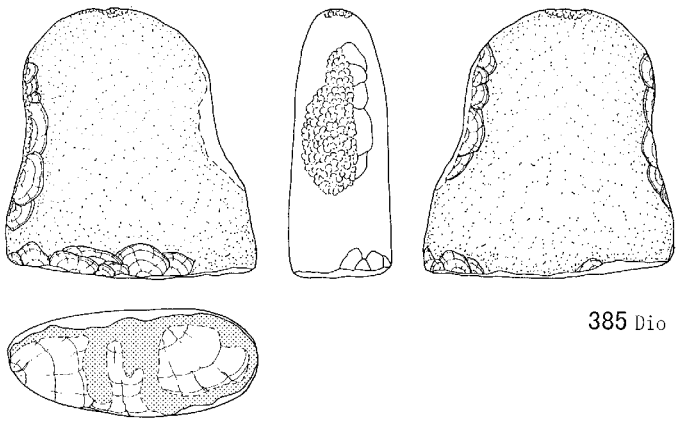
382 HSs



383 HSs



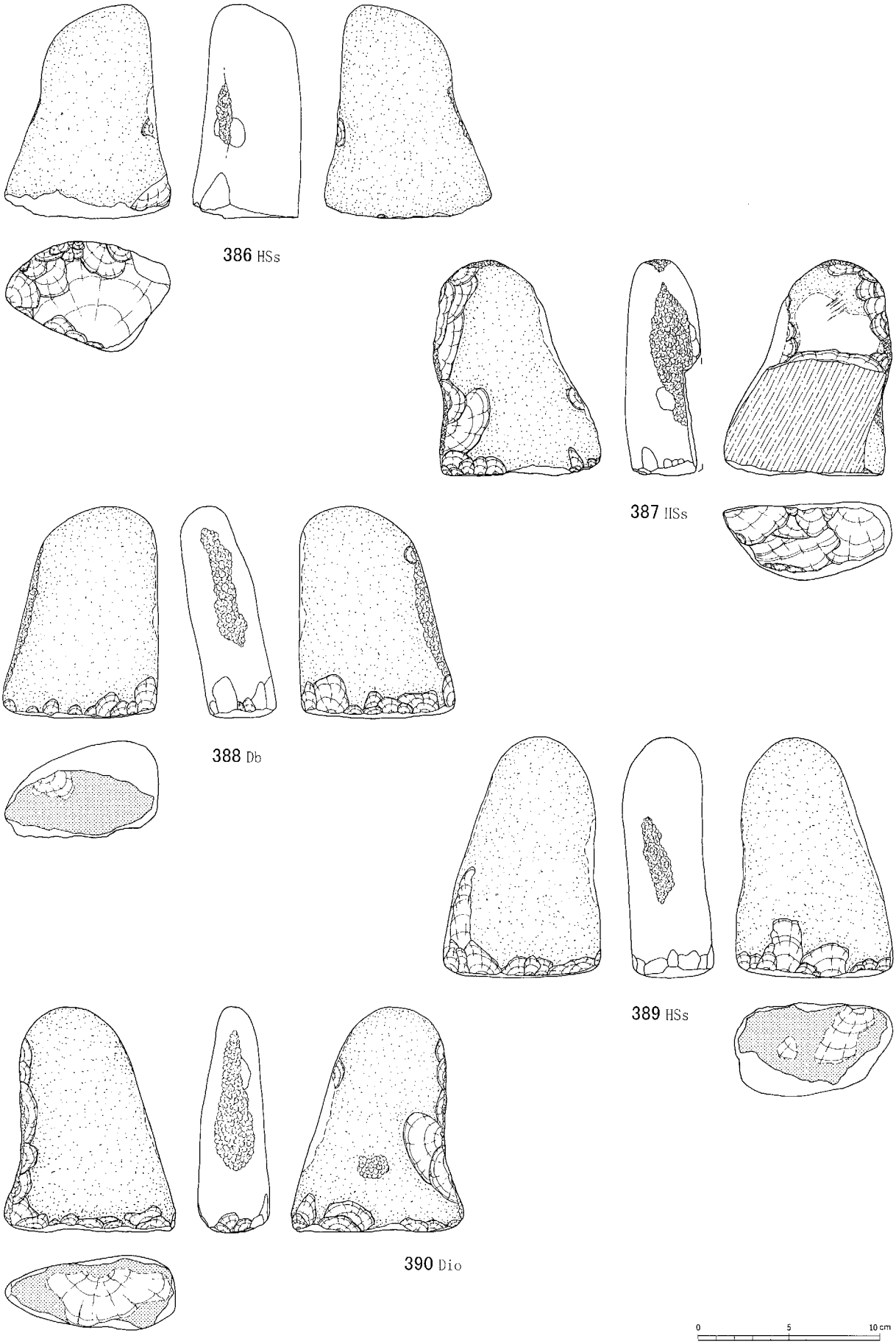
384 HSs



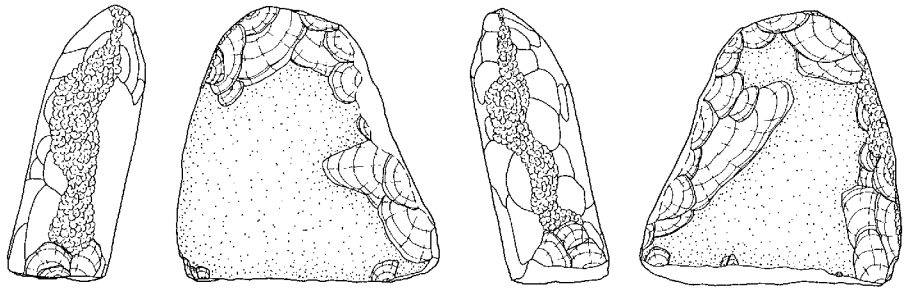
385 Dio

0 5 10 cm

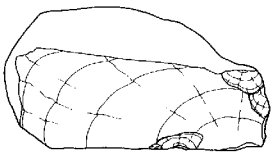
第284図　遺構外出土石器（40）－スタンプ形石器

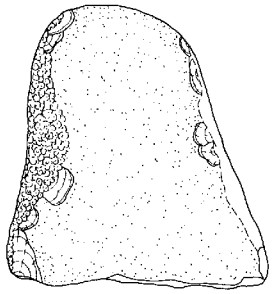


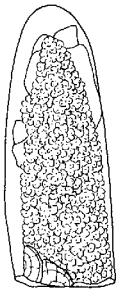
第285図　遺構外出土石器（41）－スタンプ形石器

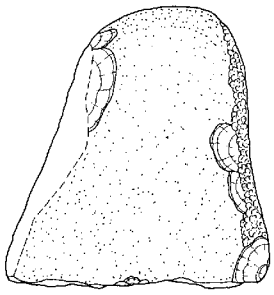


391 HSs

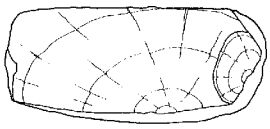


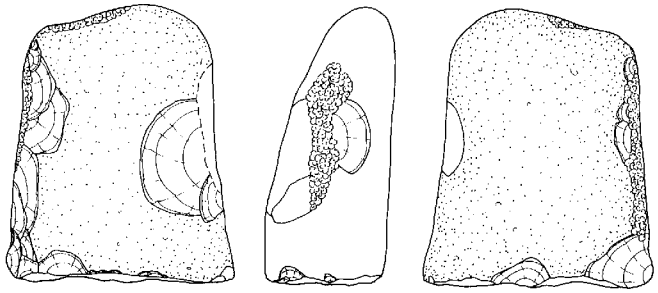




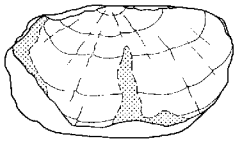


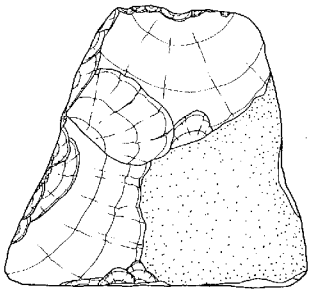
392 HSs

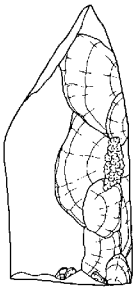


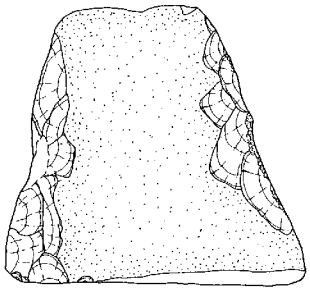


393 HSs

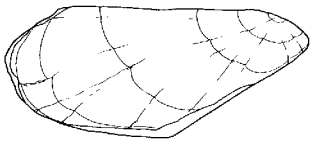


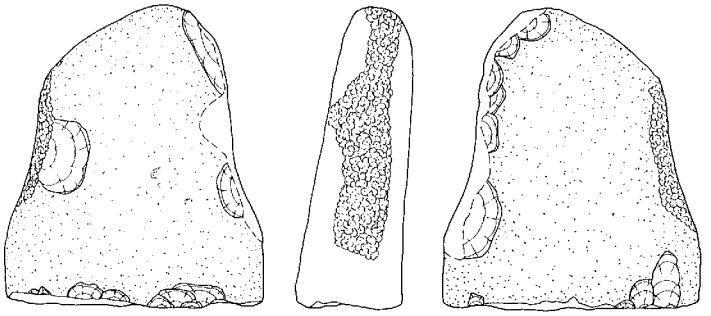




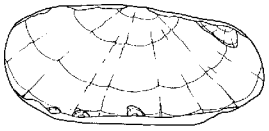


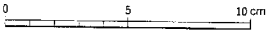
394 HSs



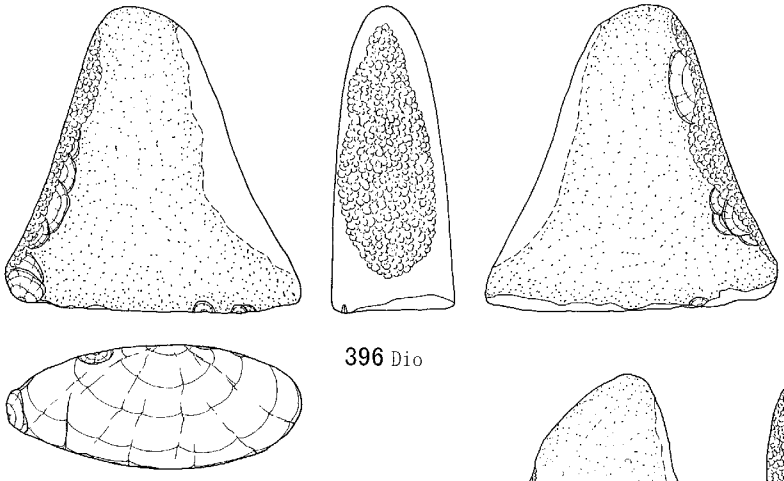


395 Dio

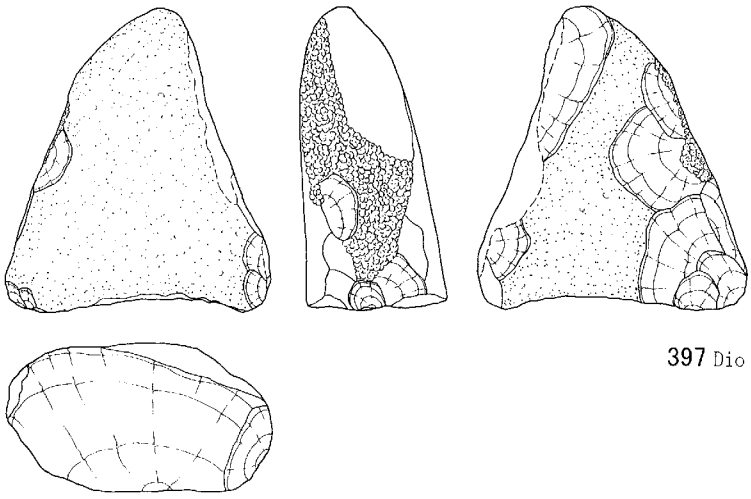




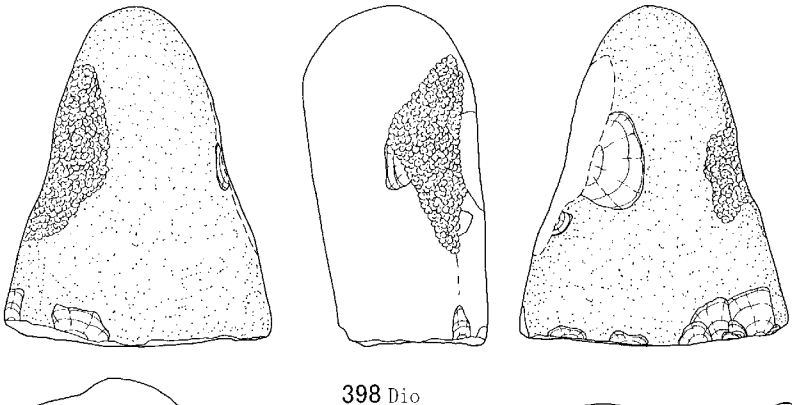
第286図　遺構外出土石器（42）－スタンプ形石器



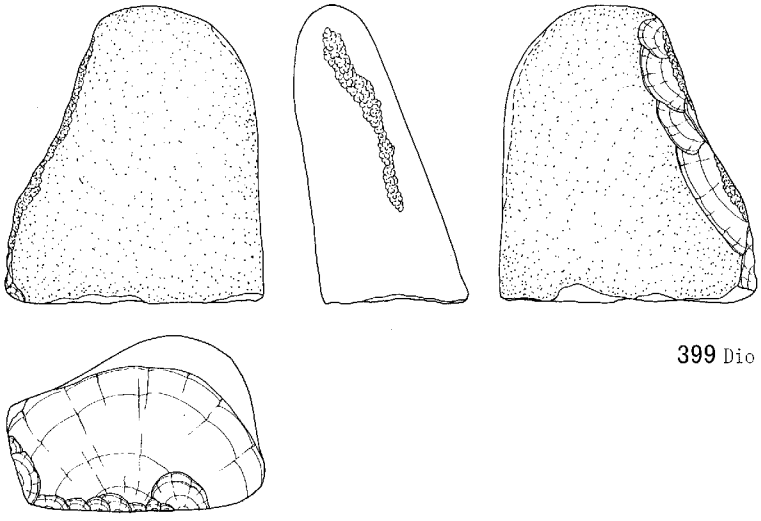
396 Dio



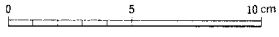
397 Dio



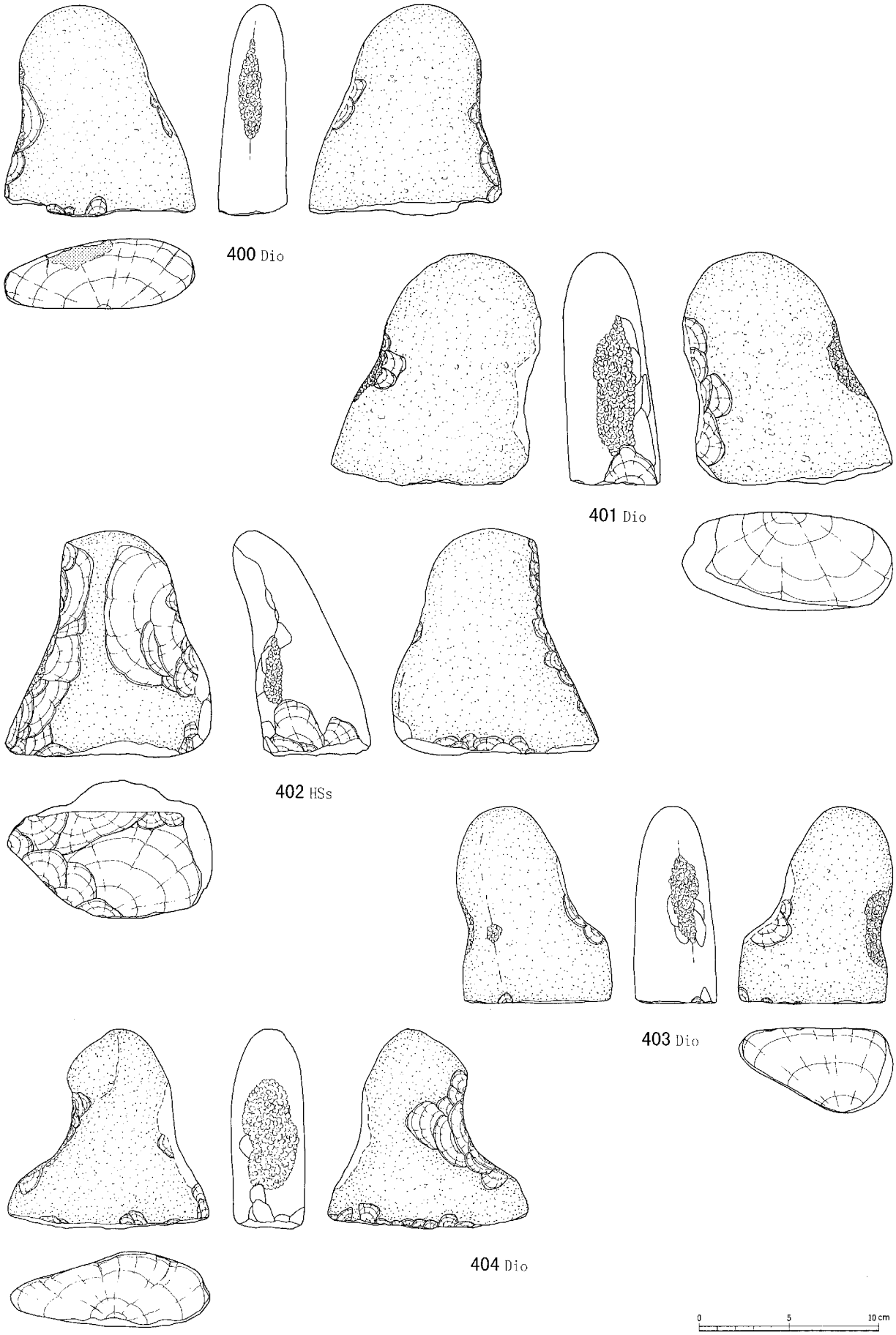
398 Dio



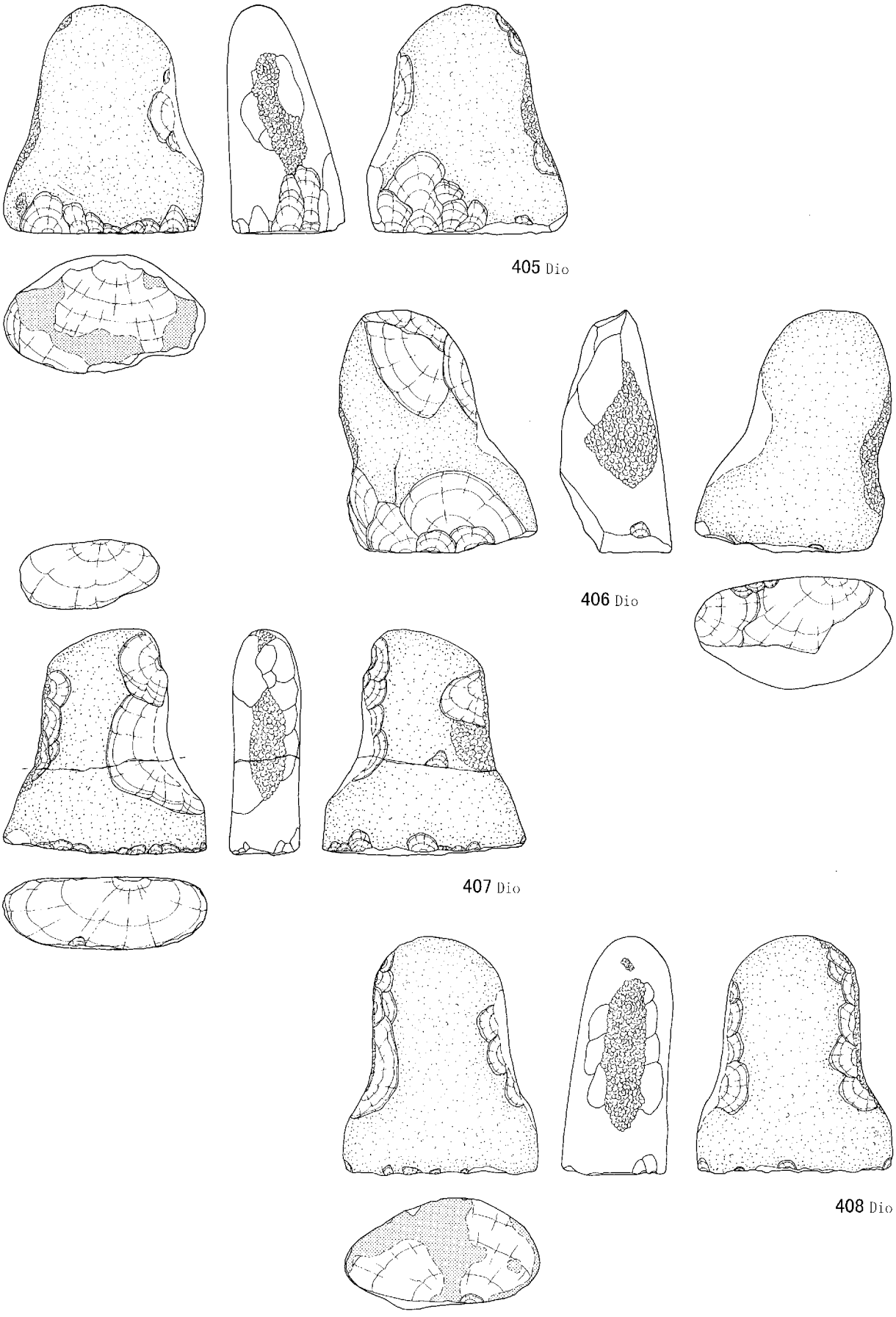
399 Dio



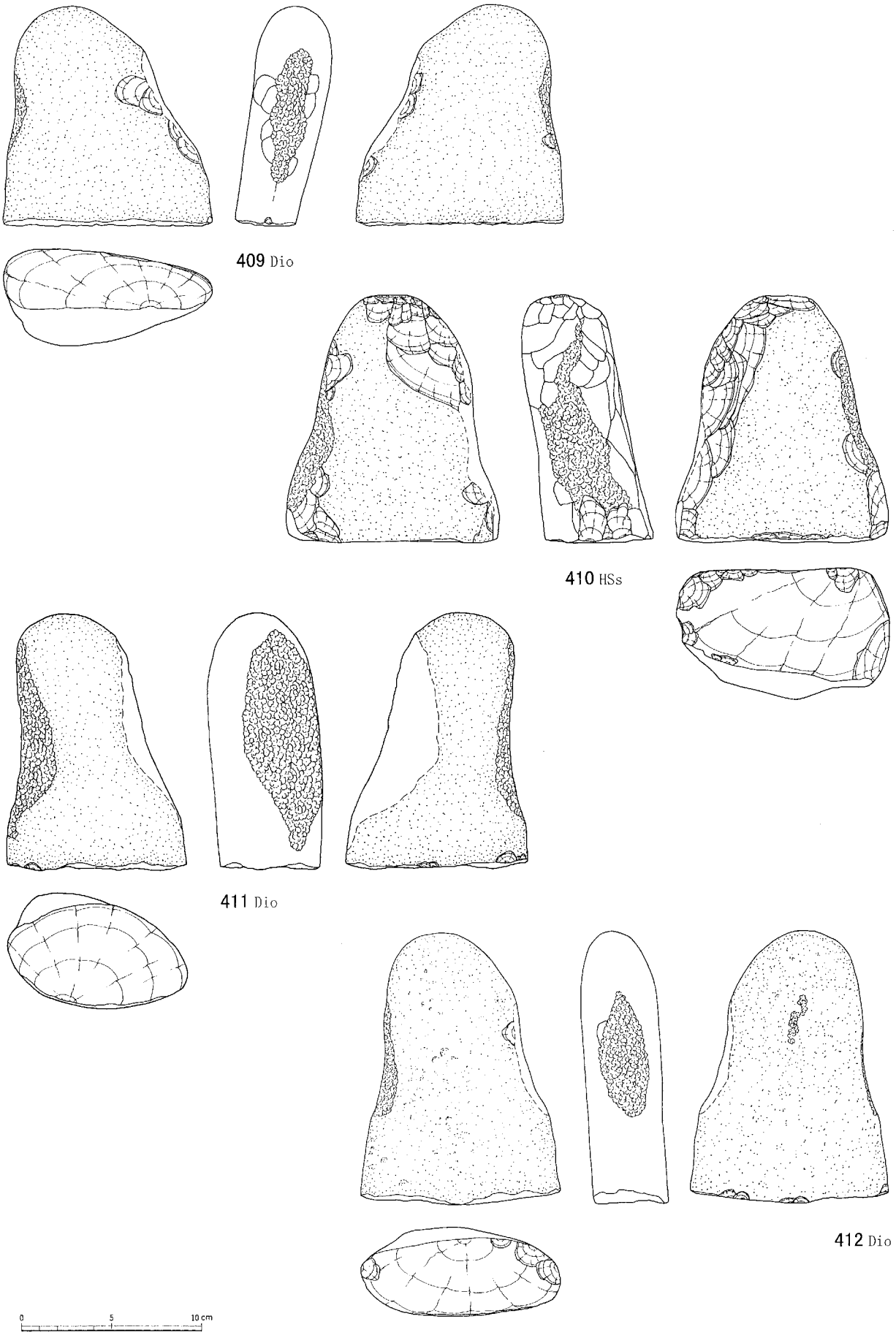
第287図　遺構外出土石器（43）－スタンプ形石器



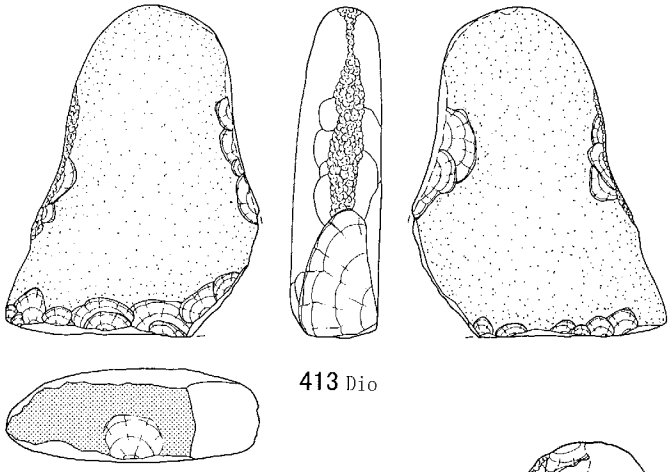
第288図　遺構外出土石器（44）－スタンプ形石器



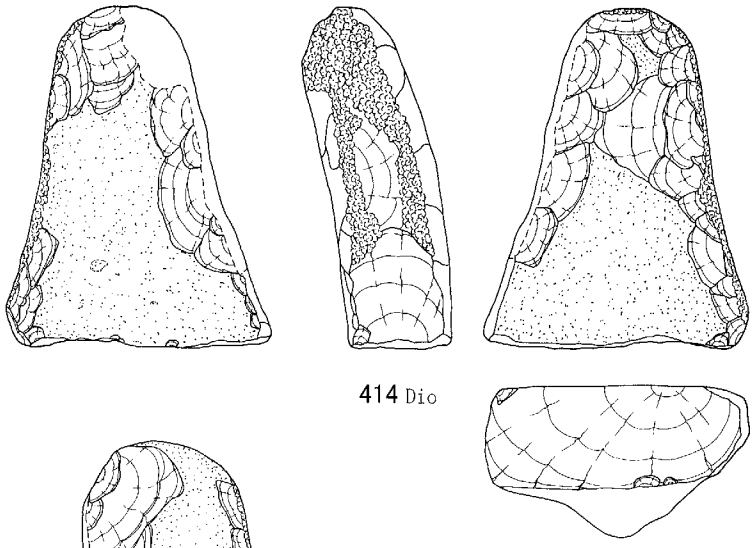
第289図　遺構外出土石器（45）－スタンプ形石器



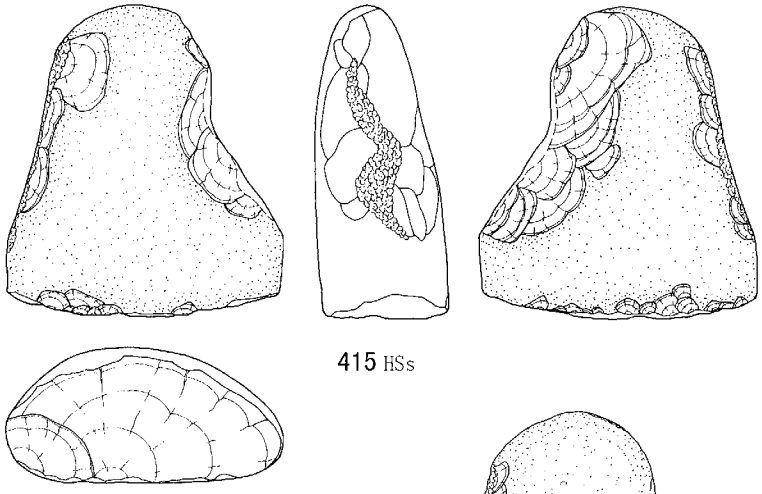
第290図　遺構外出土石器（46）－スタンプ形石器



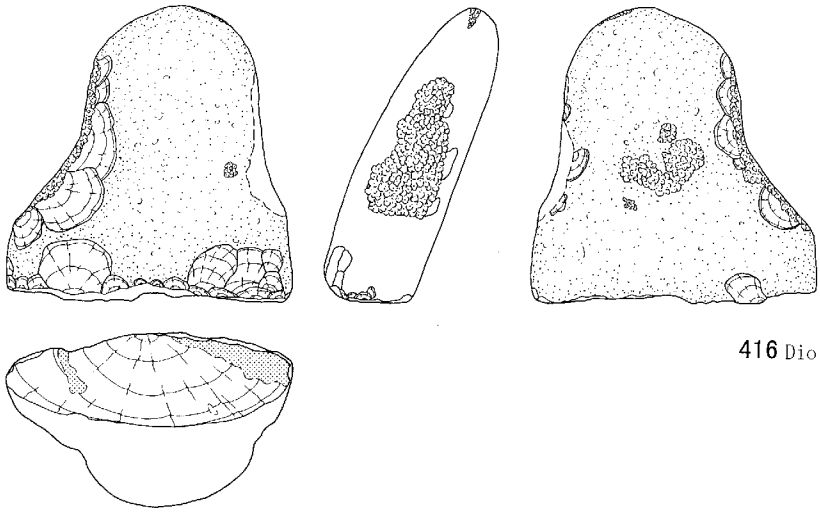
413 Dio



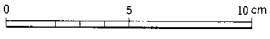
414 Dio



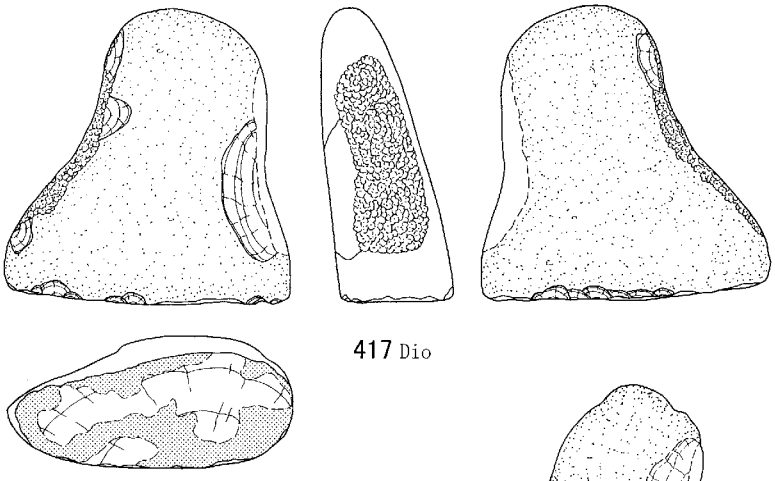
415 HSs



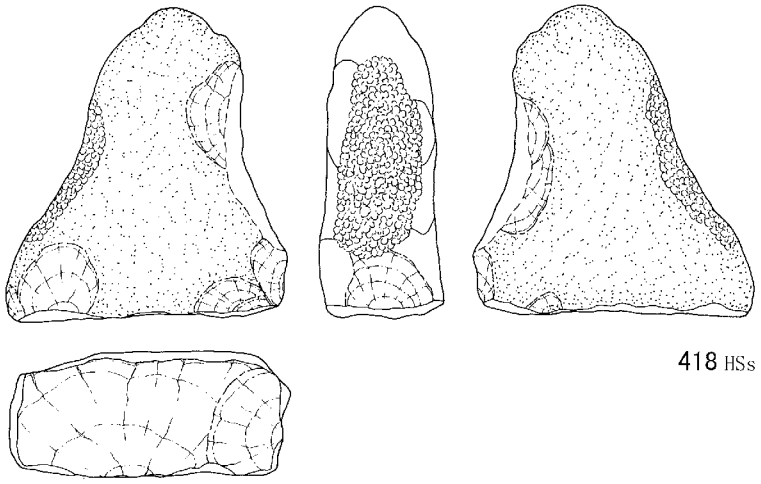
416 Dio



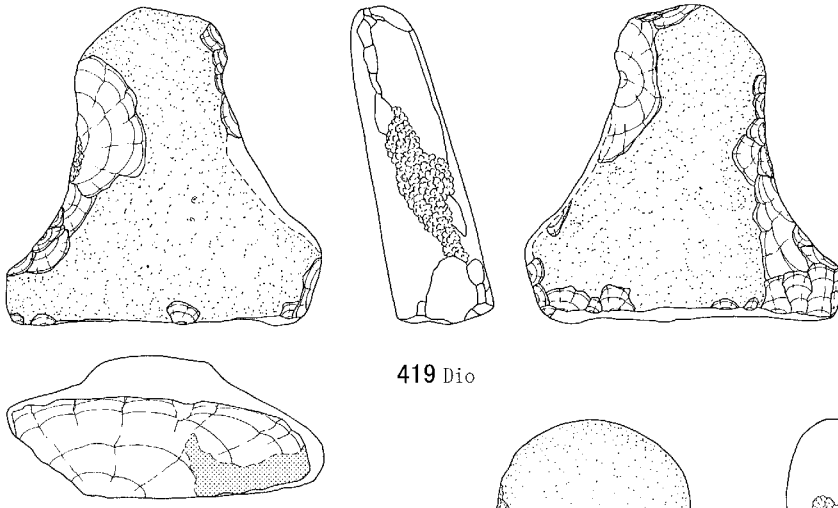
第291図　遺構外出土石器（47）－スタンプ形石器



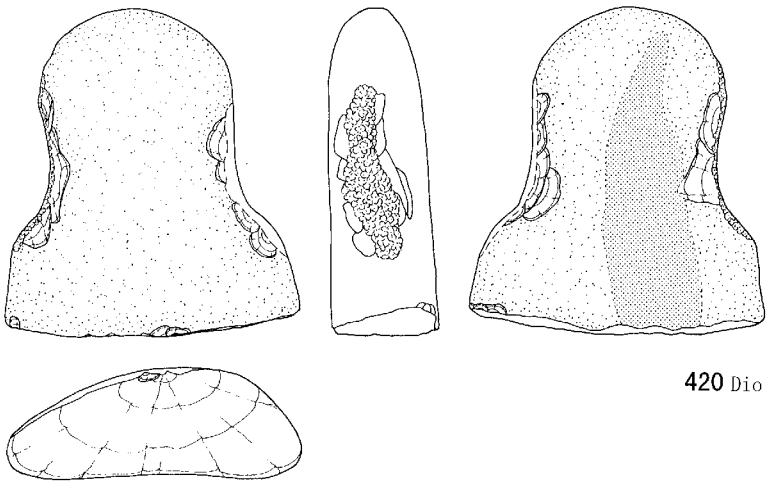
417 Dio



418 HSs



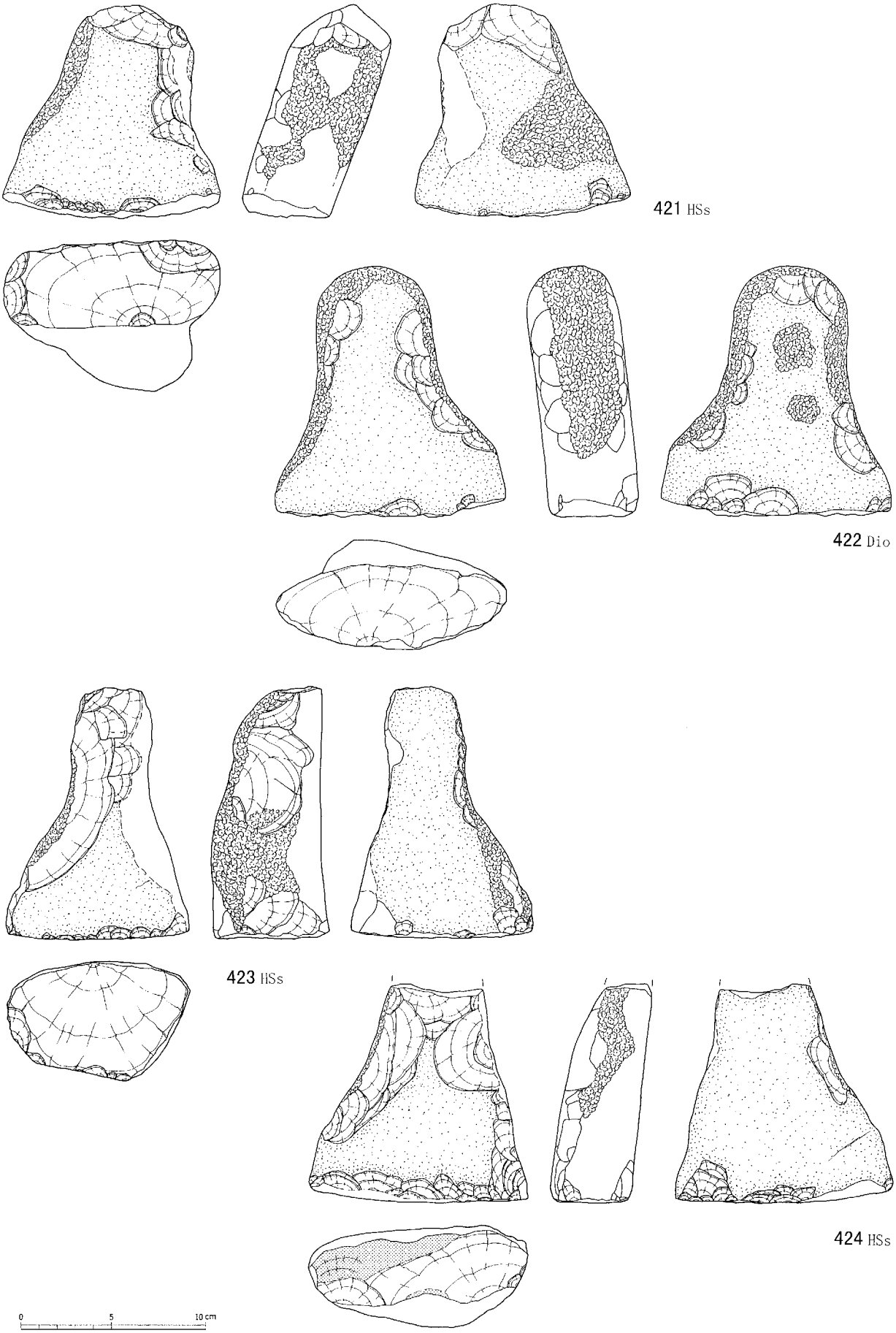
419 Dio



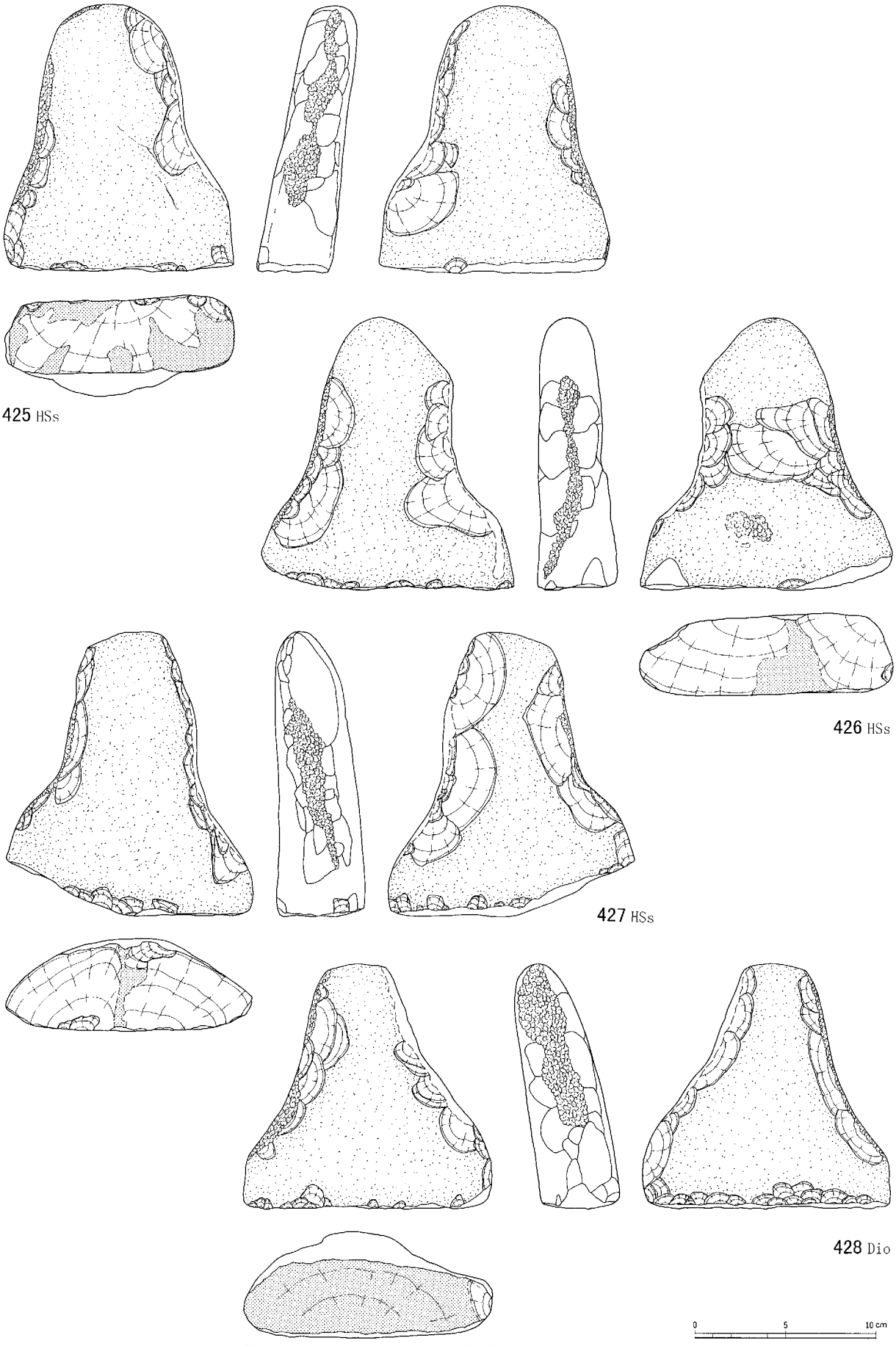
420 Dio

0 5 10 cm

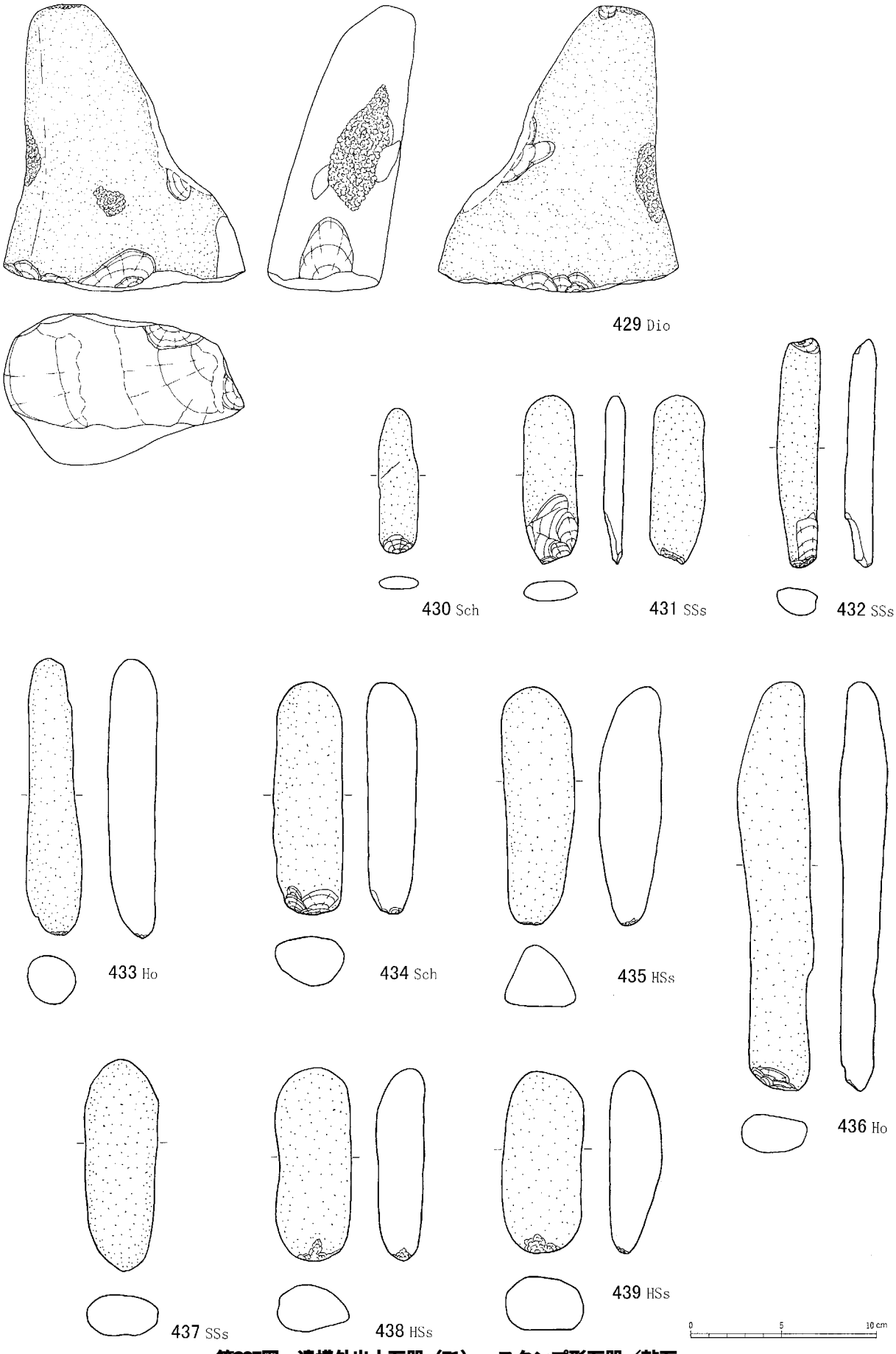
第292図　遺構外出土石器（48）－スタンプ形石器



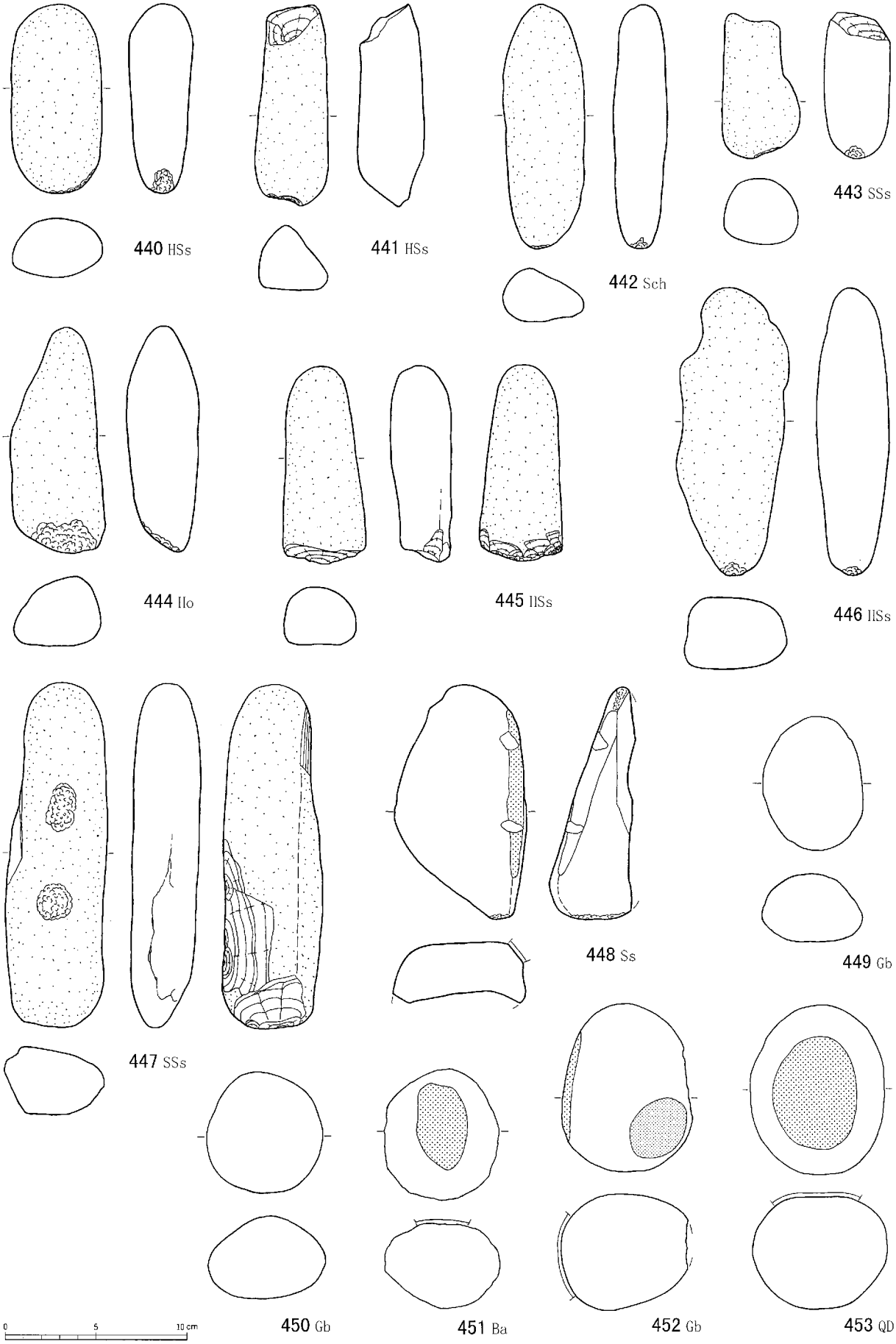
第293図　遺構外出土石器（49）－スタンプ形石器



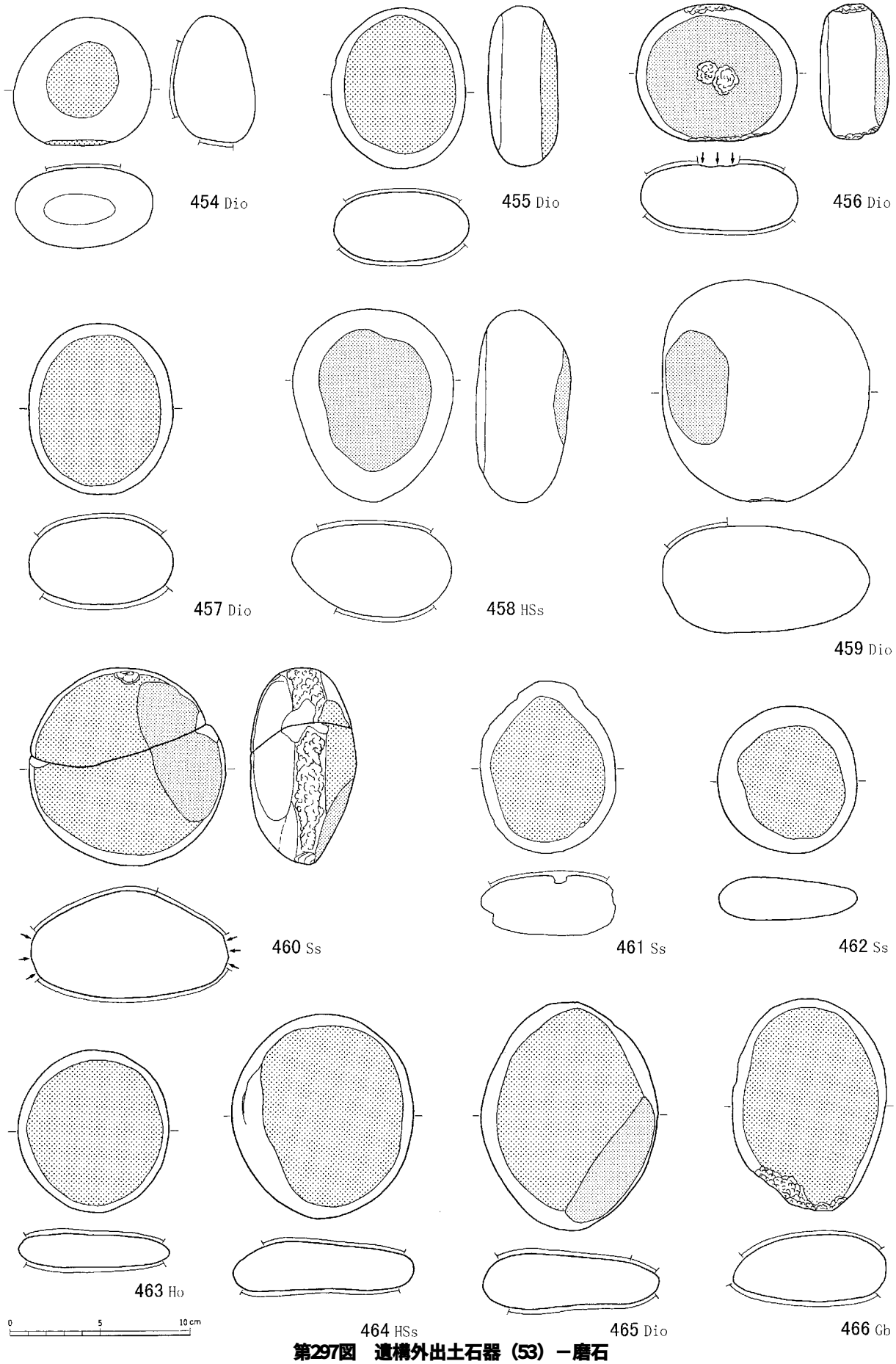
第294図　遺構外出土石器（50）－スタンプ形石器



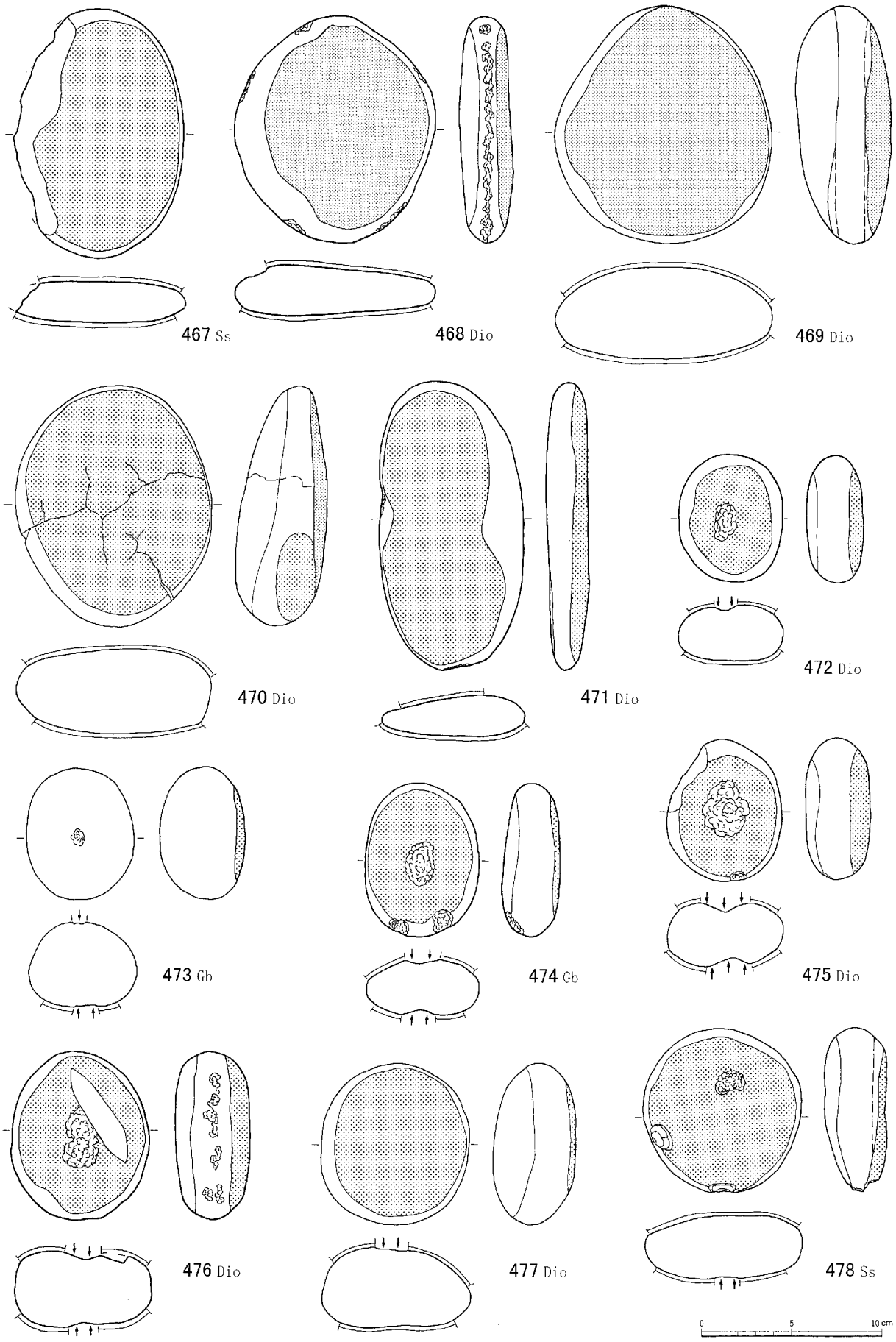
第295図　遺構外出土石器（51）－スタンプ形石器／敲石



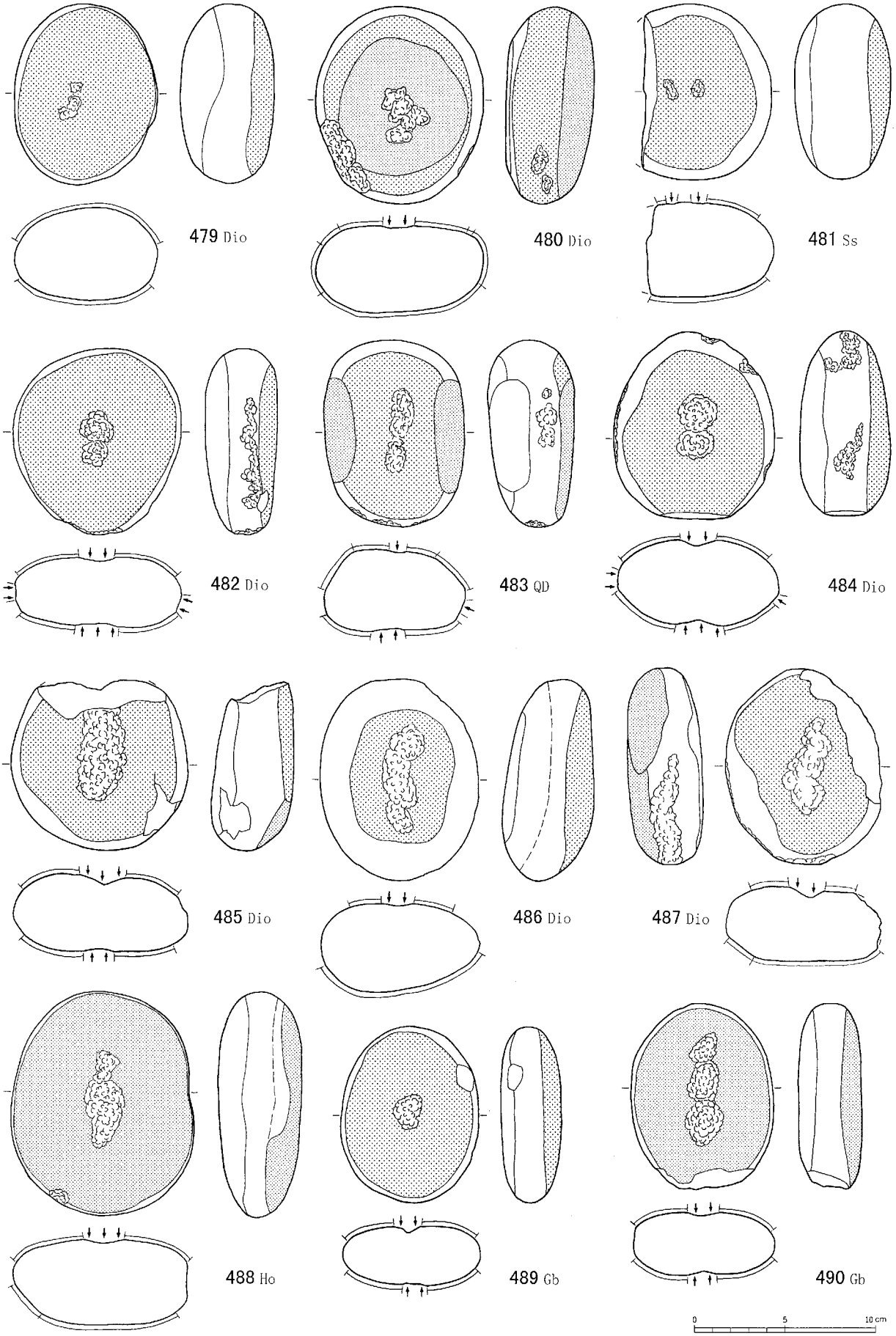
第296図　遺構外出土石器（52）－敲石／磨石



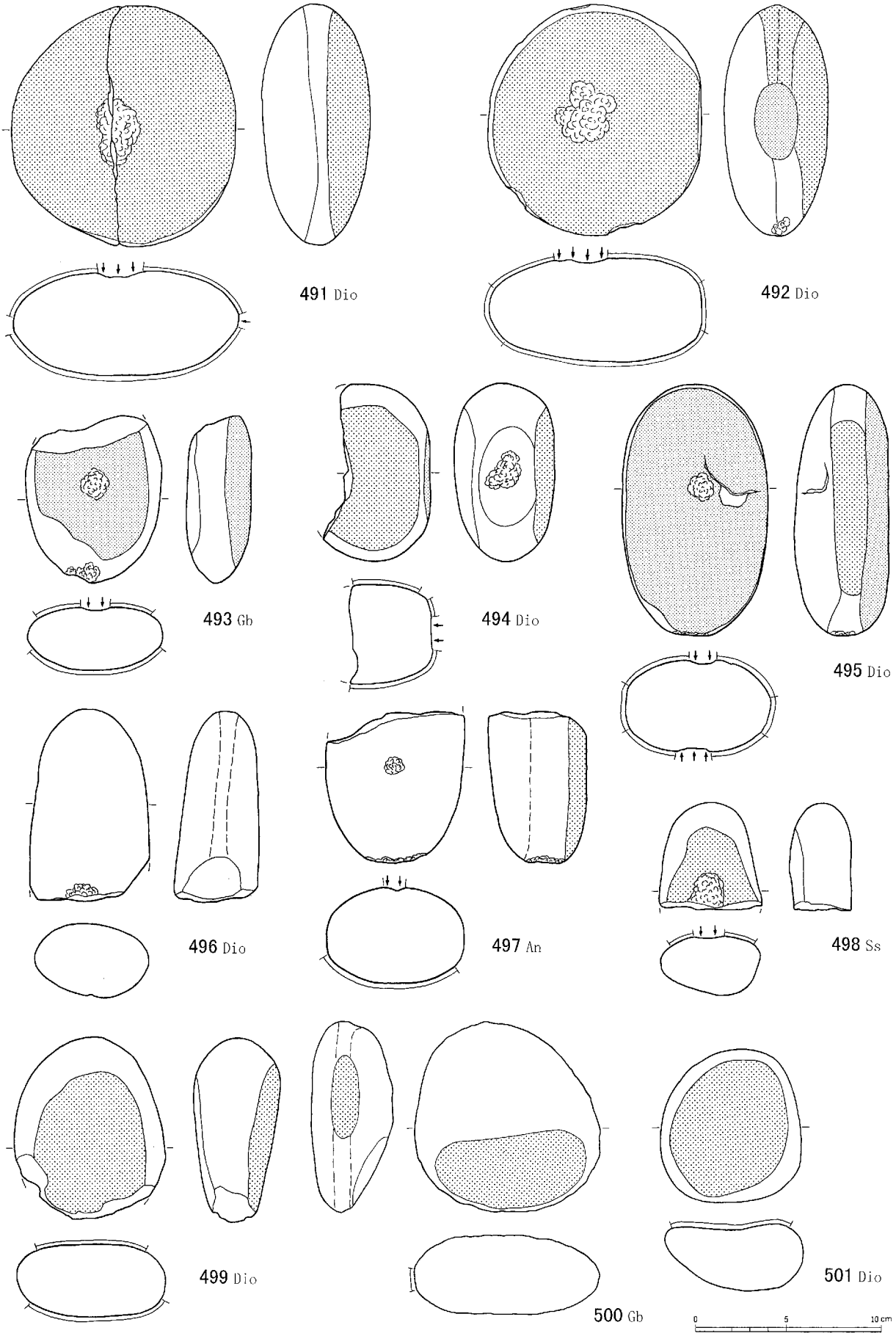
第297図　遺構外出土石器（53）－磨石



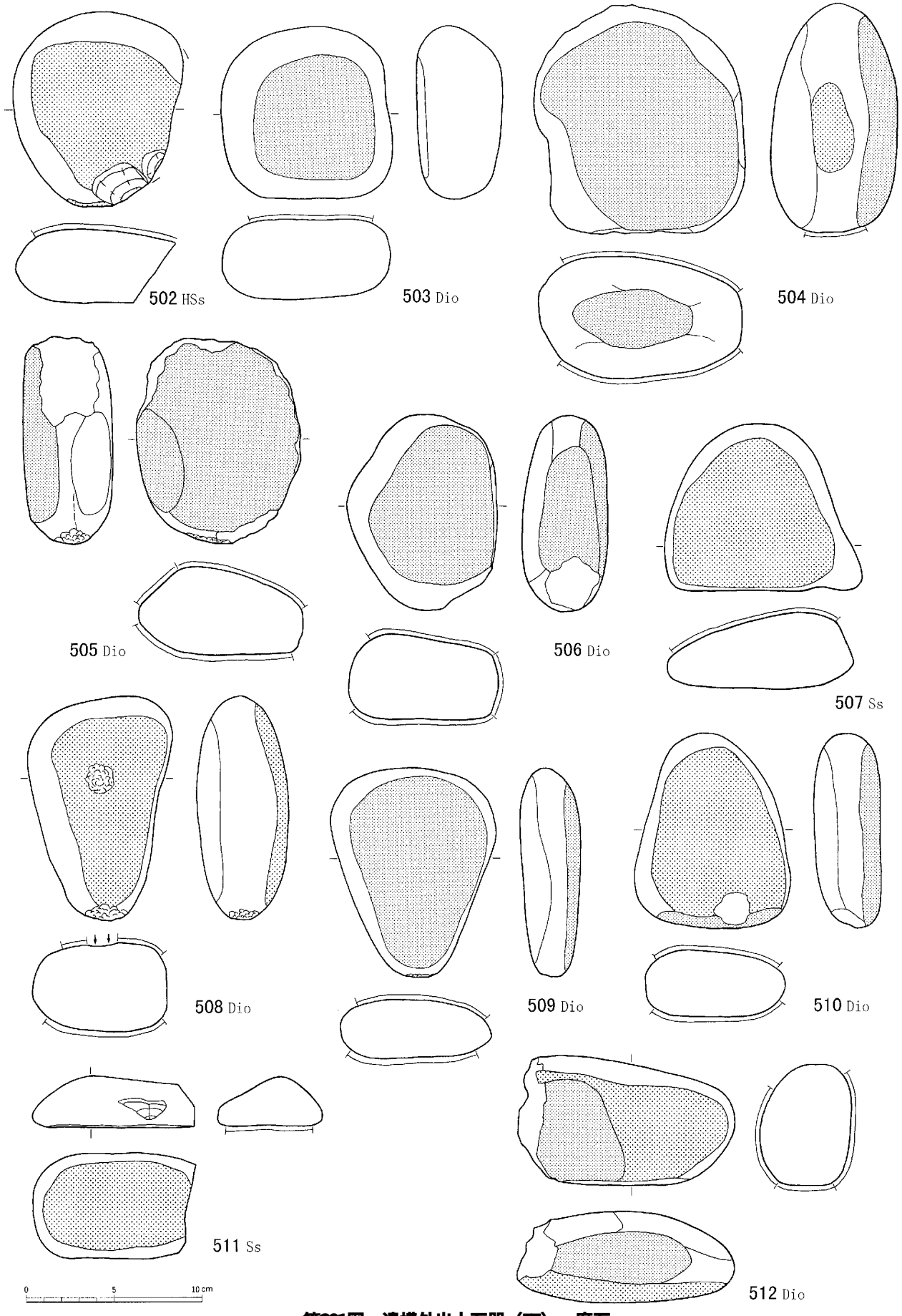
第298図　遺構外出土石器（54）－磨石



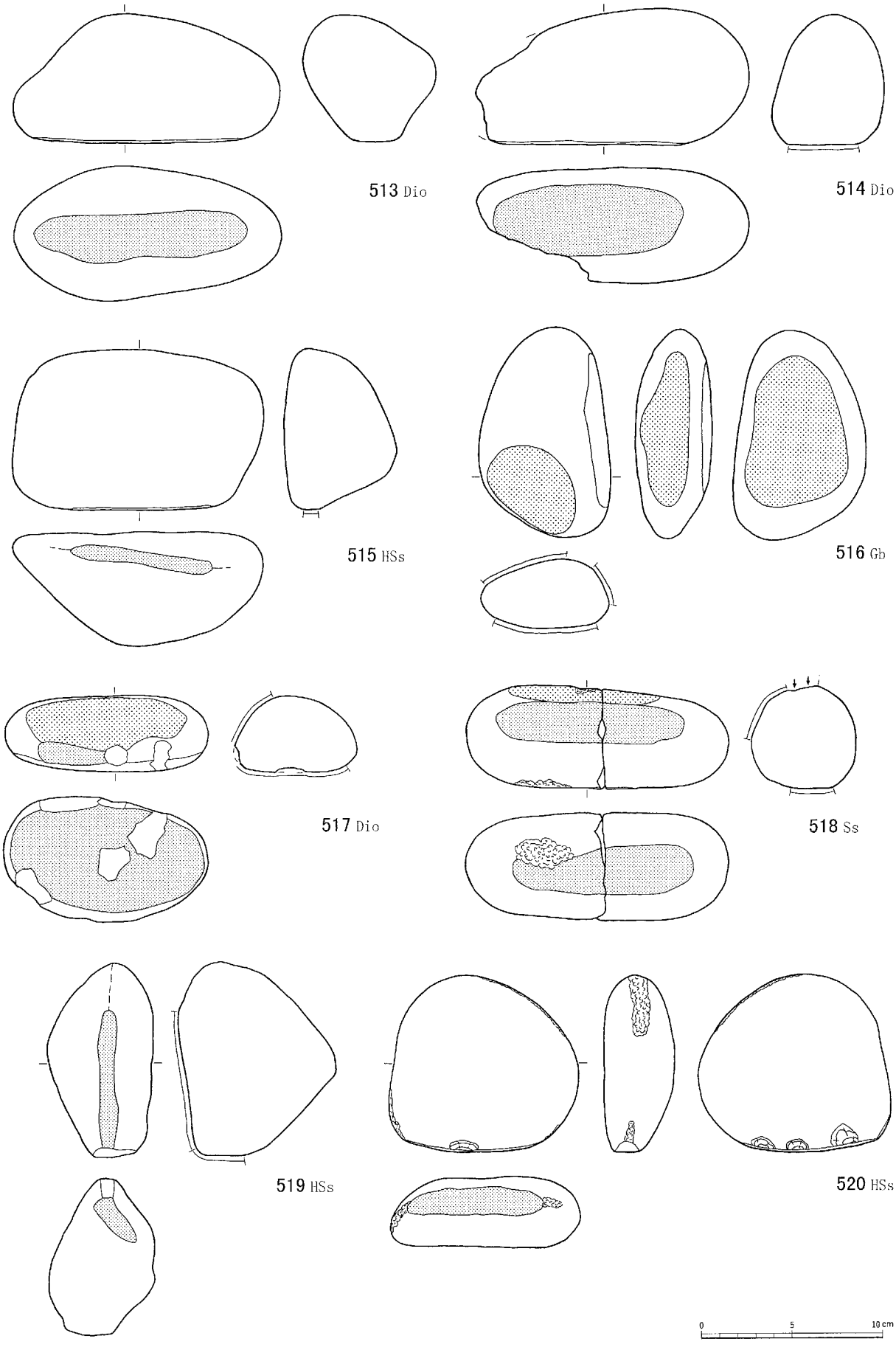
第299図　遺構外出土石器（55）－磨石



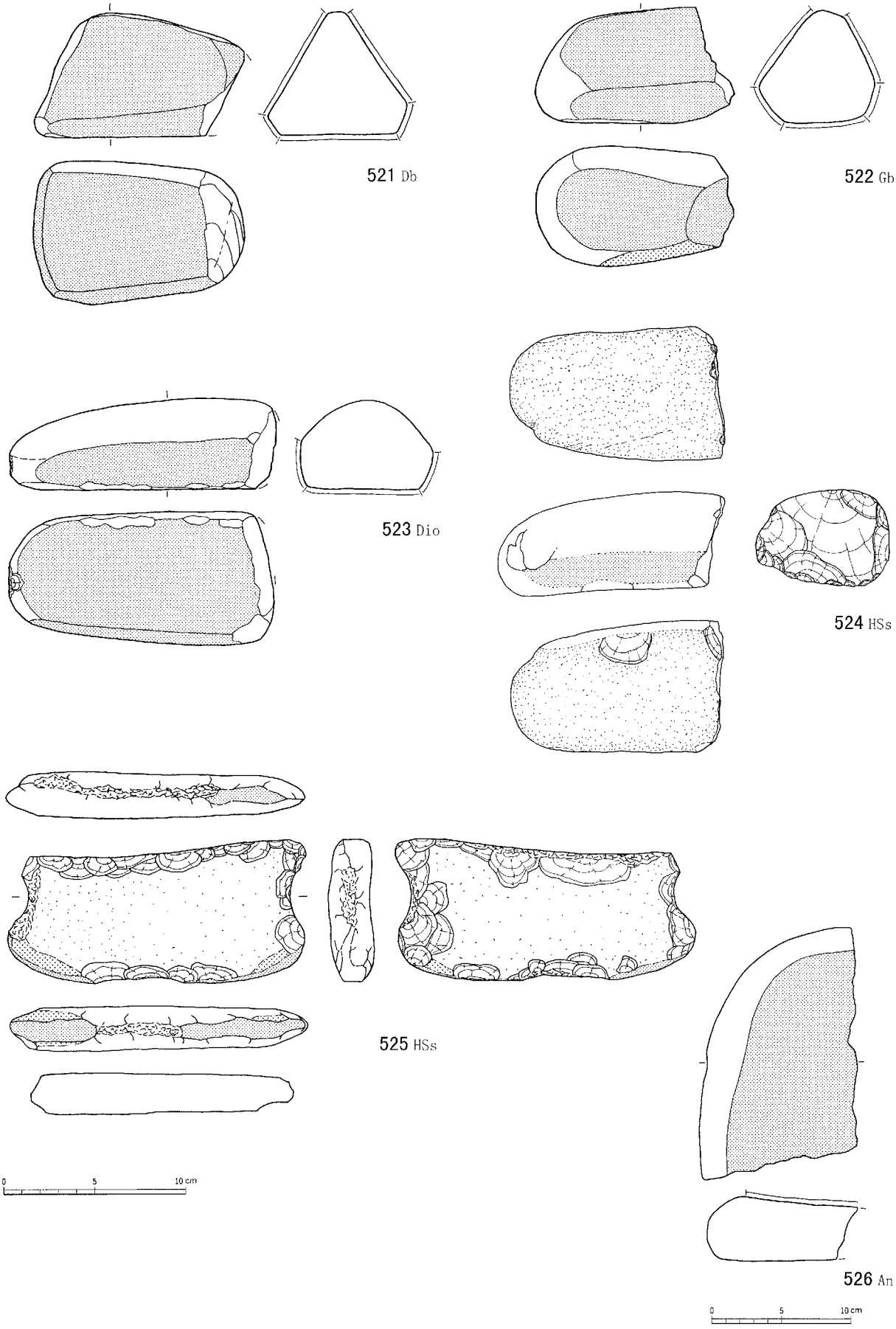
第300図　遺構外出土石器（56）－磨石



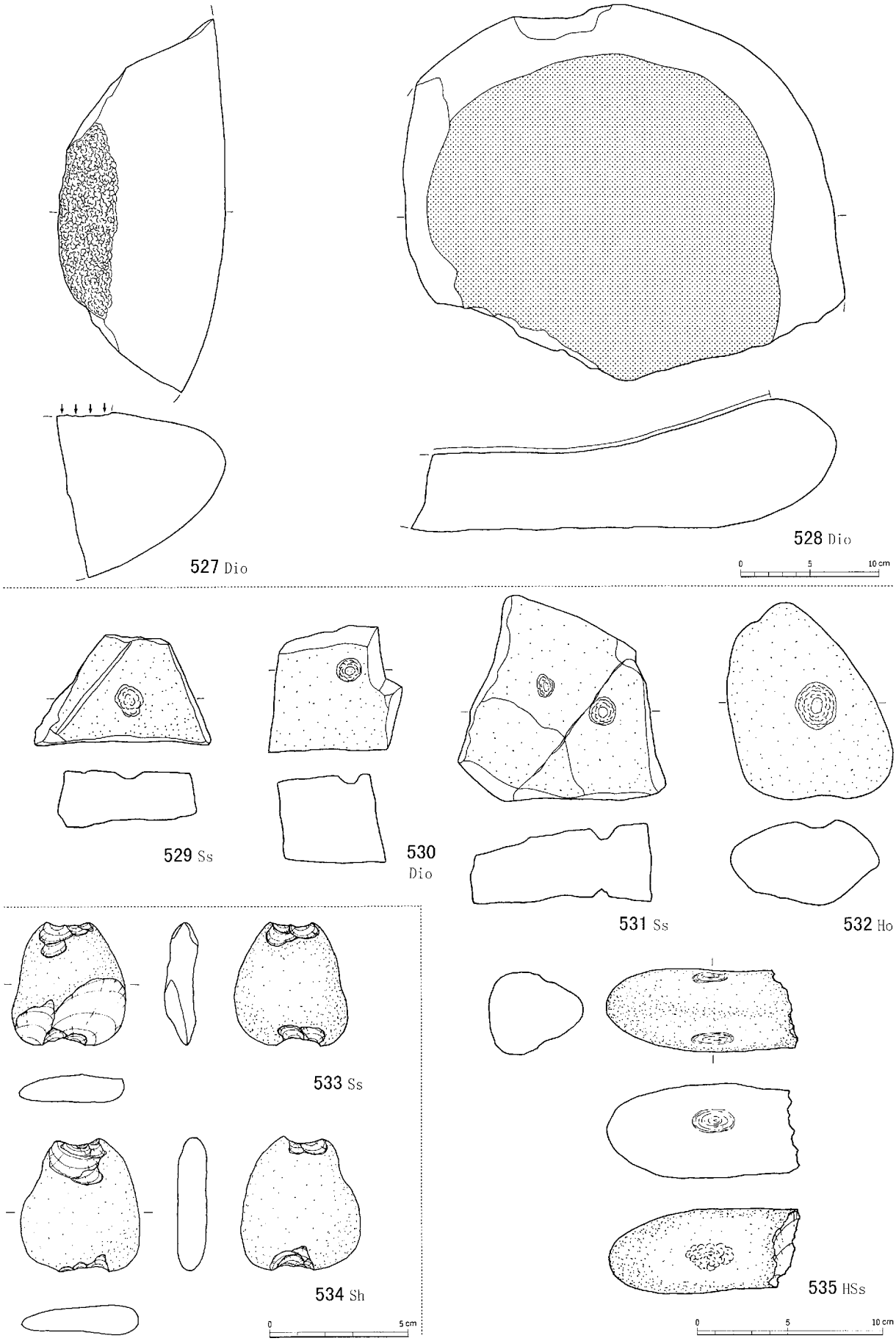
第301図　遺構外出土石器（57）－磨石



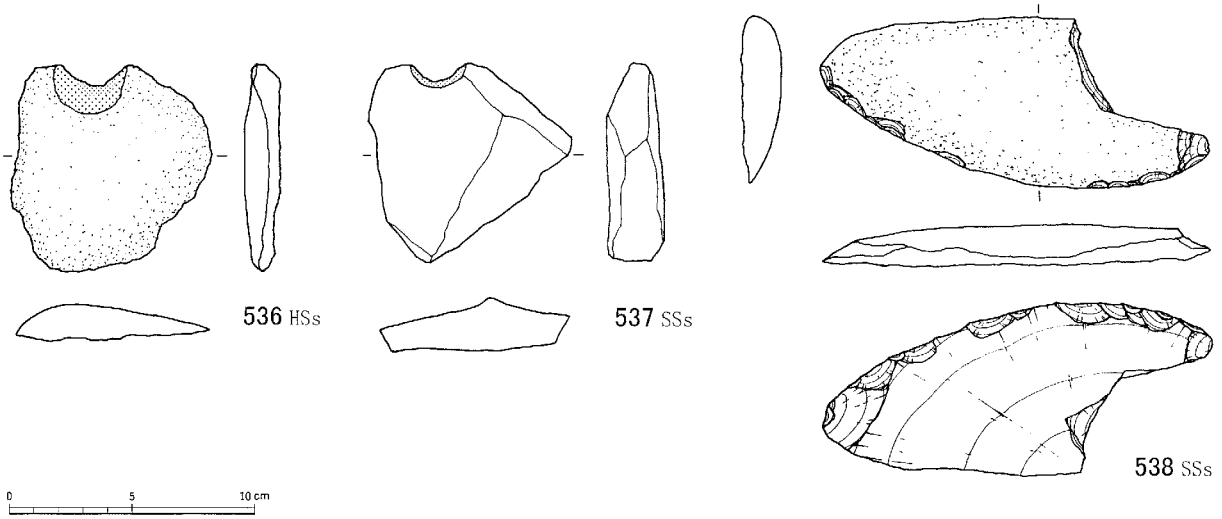
第302図　遺構外出土石器（58）－磨石

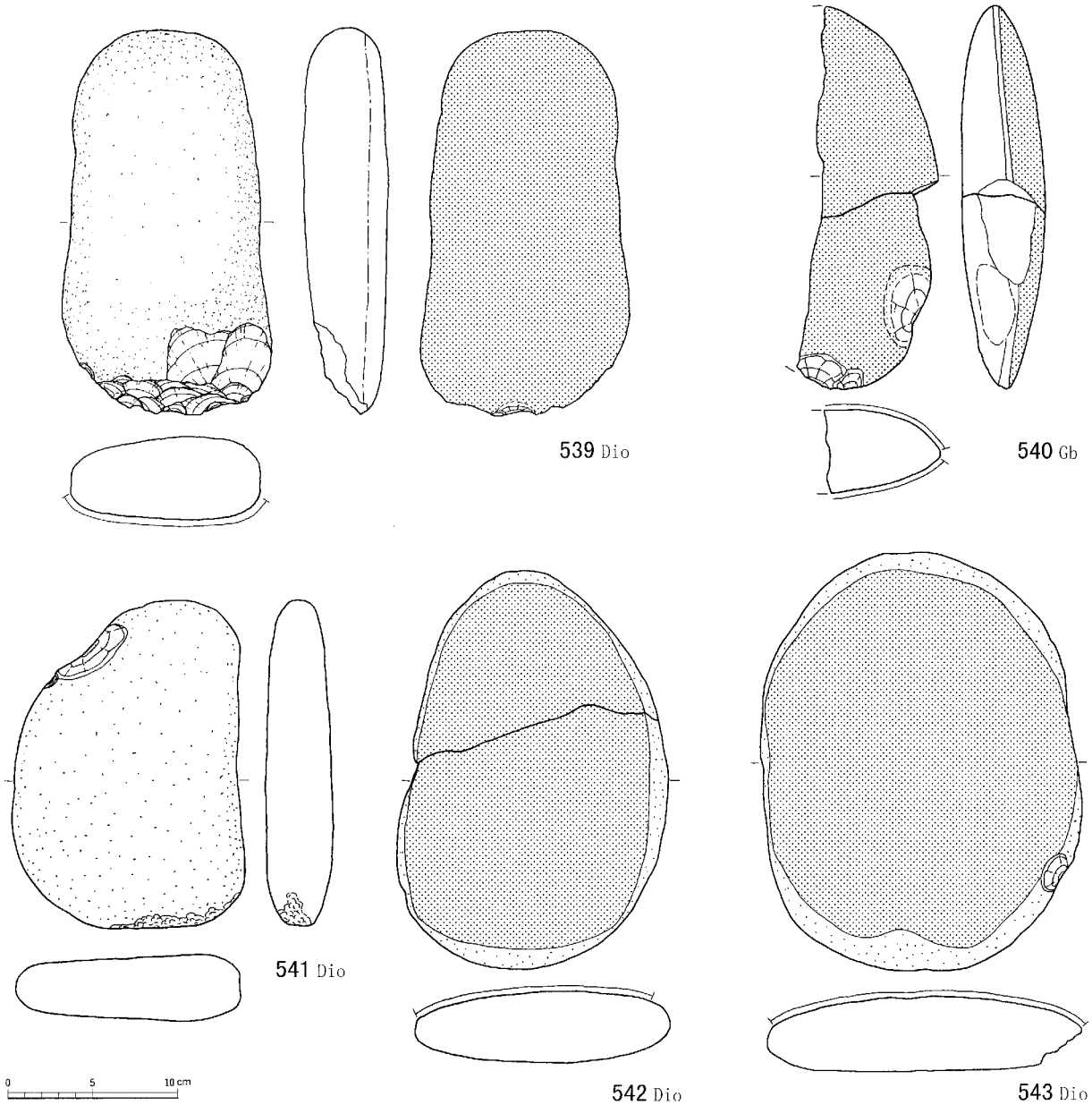


第303図　遺構外出土石器（59）－磨石／石皿



第304図　遺構外出土石器（60）－石皿／凹石／石錘／その他の石器





第305図　遺構外出土石器（61）－その他の石器

Ⅳ. 歴史時代

1．概　要

基本層序（Ⅰ－5.）でも述べたように、本調査区では奈良・平安時代の遺物包含層とされるⅠ層が後世の耕作などにより削平されて単層として認識される個所が全体的に少なかった。この点や調査期間の関係などから該期の遺構検出面は概ねⅡ層上面としたが、検出された多くの遺構は、出土遺物が非常に少なく、各遺構の遺物による時期の分類・判別は困難を極めた。このため、遺構の時期分類（区分）は切り合いによる相対的な判別を拠り所とし、また、数少ない年代が判別できる遺物が出土した遺構の覆土などを考慮した上で、以下のように、「古代（奈良平安時代）」・「中世以降」・「近代以降」に区分した。

※　「**古代**（奈良平安時代）」－覆土が**Ⅰc**層と思われる黒褐色土が主体の遺構。または、本調査区周辺の遺跡で検出されている奈良平安時代の竪穴住居跡の覆土（色調・土質）に類似する覆土が主体の遺構。

※　「**中世以降**」－古代の遺構としたもの以外で、覆土が明灰褐色土（**Ⅰa**・**Ⅰb**層に類似）が主体の遺構。

※　「**近代以降**」－中世以降の遺構としたものの内、近代以降の遺物が出土したもの。

尚、「中世以降」の遺構としたものの中には、遺物が出土していないため該期の遺構とはしたが、覆土などから見ると溝跡や特殊遺構、不整形土坑の中には「近代以降」の所産と思われる遺構なども含まれている。

出土の遺物は、全時期を通じて全体的に非常に少なかった。このため編集の都合上、実測図や遺物の説明などは、「遺構出土遺物」、「遺構外出土遺物」の順に、時期毎にまとめて掲載した。また、出土遺物の詳細（法量、計測値等）については、「歴史時代土遺物観察表」にまとめ、巻末添付の CD-ROM に収録した。ファイル名は、「**41RDKH.xls**」である。

2．古　代（奈良・平安時代）

1）概　要

本調査で検出された古代（奈良・平安時代）とした遺構は、「道路状遺構」５条、「溝跡」３条、「土坑」62基、「特殊遺構」１基を数え、その他に「小穴」が多数検出されている。

５条の道路状遺構の内、SF－１とした遺構は古代の官道「東山道武蔵路」と推定される道路跡である。遺構は、芯々距離12m 乃至９m の両側溝を伴い調査区東端を約340m にわたって一直線に貫通しており、古代の官道が12m もの幅員を保った「直線道路」であったことが、あらためて視覚的に認識・実感することができた。また、遺構の切り合いによる新旧関係からは「４時期の変遷」が認められ、道路の使用が築造・修復を重ねながら長期にわたっていたことが確認された。その他にも、特徴的な側溝の形態、良好な状態で検出された硬化面など、調査の結果、幾つかの新知見が得られている。

SF－１以外では、他に４条の道路遺構が検出されている。そのうち SF－１の４時期目遺構内で検出さ

れたSF－６とした遺構以外の道路跡は、いずれもSF－１の西側に位置し、距離的にも近接しているが同道路跡との切り合い関係などは確認されなかった。

計３条検出され溝跡の内、SD－５・SD－33とした２条の遺構は規模が大きく、特にSD－５は調査区東壁から西壁までを横断しており、途中撹乱により分断される部分もあるが、総距離は約210mにおよぶ。また、SD－33も大規模な溝跡で、SF－１の東を南北に走っており、途中分断されるが、検出された総距離は約120mを測る。SD－５・SD－33の両溝は、方向こそ違うが規模・形状・覆土などが酷似しており、同一溝と考えられる遺構である。

計62基検出された土坑については、その平面形状を基に幾つかに分類し掲載した。分類内容は、まず平面形から《円形土坑》・《方形土坑》・《不整形土坑》に分類し、更に《円形土坑》の中でも正円に近いものを〈円形土坑〉、楕円形のものを〈楕円形土坑〉に、《方形土坑》の中でも正方形に近いものを〈正方形土坑〉、長方形のものを〈長方形Ａ土坑〉、細長い長方形のものを〈長方形Ｂ土坑〉に細分し、撹乱などで破壊され形状が不明確なものを《不整形土坑》とした。以上の分類を基に全体的な分布状況を概観すると、既存のグランドおよび野球場造成工事による撹乱部分を除けば、調査区南西部分（３区）ではほとんど検出されておらず、主に調査区の東側、特に北東部に偏在している状況が看取できる。これを形状毎に詳しく観ると、円形土坑はほとんどが北東部に集中している。理由は判然としないが、SF－１西側溝に沿って分布している気配も窺えるので、同道路跡に関連した遺構群であった可能性も考えられる。楕円形土坑は、１区西壁際に若干集中するものの配置に規則性は見られない。また方形土坑については、正方形土坑が主に調査区北側に、長方形Ａ土坑は南北を通じ主に東側に分布している。長方形Ｂ土坑は数も少なく、中央部と北東部に散在するのみである。また、検出された土坑は遺物を伴わないものが多く、詳細な帰属時期の不明なものが大半を占めている。尚、現場調査時には特殊遺構（SX）としていたものも、整理段階ではSX－13以外の遺構はすべて土坑の範疇に含め分類している。

特殊遺構とした掲載した遺構は、SF－１のすぐ脇で検出されたSX－13の１基だけである。この遺構の性格などは不明のままだが、SD－33に壊されている事や出土遺物等を含め、SF－１の廃絶時期を考える上での意義は大きい。

小穴は多数検出されたが、その配列等に規則性は看取できなかったため、典型的なもの15個を選出し掲載した。

出土遺物は、概要（Ⅳ－1.）でも述べたように包含層が削平されていたことや竪穴住居跡が検出されなかったことなどから、全体的に少なく、特に遺構から出土した遺物は合計しても数十点を数える程度であり、大半が小破片のものであった。その中でも特筆すべきものは、SF－１の４時期目の道路跡の路面覆土中から出土した10世紀初頭の須恵器の坏と灰釉陶器の碗、その脇で検出されたSX－13の底面近くから出土した10世紀中葉の須恵器の坏と碗などであろう。

２）遺　構

① 道 路 状 遺 構

SF－１（第306～310図、図版137～149、巻頭図版１～７）

〈調 査 経 過 〉 SF－１（推定東山道武蔵路）は、昭和50年代後半から武蔵国府・国分寺域での発掘調査で認識されはじめた芯々距離約12mの両側溝を伴う直線道路遺構である。遺構は、国府西域（府中市

美好町３丁目）から国分僧寺と尼寺の中間を通り、恋ヶ窪谷の北方（国分寺市東恋ヶ窪４丁目）までの約4.2kmが、断片的ではあるが確認されている。本調査区の所在する鉄道学園跡地はその通過路線上に当たるため、以前から道路遺構が存在する可能性が予測されていた。また、調査に先立つ平成３年に国分寺市教育委員会によって実施された試掘調査でも路線上に設定された３本の試掘坑から東西両側溝の一部が検出されており、その結果、遺構が鉄道学園の中央部を２度東偏し（国家座標系）、南北に一直線に通過することが確認されていた。

その後、学園跡地は開発事業に伴い発掘調査が実施されることとなり、平成５年11月から西側跡地を当調査会が、平成７年度からは東京都埋蔵文化財センター（以下、都埋文）が東側跡地を調査する事となった。SF－１（推定東山道武蔵路）の調査については、遺構がそれぞれの調査区の境界に予定されている都市計画道路上に位置するため、北側半分を当調査会が、南側半分を都埋文がそれぞれ分担して調査した。

遺構の調査は、年度毎に設定された調査区の関係もあり平成６年度に２区の範囲内の西側溝の一部について実施したが、遺構全体の本格的な調査は、平成７年５月から開始した。調査は南側都埋文調査区と同時進行するように適時打ち合わせを行いながら進められていき、10月、幅12mの直線道路遺構完掘状態の空中写真撮影が行われ、総距離340mにわたるSF－１（推定東山道武蔵路）の全容が明らかとなった。

その後、遺構検出の新聞報道などとあいまって古代道路の研究者や市民団体などから保存を望む声が多数寄せられ、平成８年２月、遺構の全面保存が決定された。このため、３月初旬に一般対象の現地説明会を実施し、３月末日をもって遺構は保存のため砂により埋め戻された。

〈検 出 遺 構〉 検出された遺構は、SD－29から32までの溝跡４条とSD－31・32の覆土上面で検出された硬化面、切り通し状に掘込まれた硬化面を伴う道路遺構１基である。溝跡はいずれも南北方向の溝で、その形状・規模・埋没土の観察等からSD－29と30、SD－31と32は共に対応しており、それぞれ道路の東西両側溝であると推定される。切り通し状の遺構は、道路の最北部で検出され、路面中央部から東方向にそれながら東側溝のSD－30・32を壊し、北東に向かって徐々に掘り込まれ調査区外に続いている。これらの遺構の切り合いによる新旧関係から推察すると、道路跡には次のように最低「４時期の変遷」が想定される。

１時期目の道路跡（第306図）

１時期目の道路跡は、SD－31とSD－32を両側溝とする約12m幅（両側溝の心々距離は11.3m前後）の道路跡で、構築時の「東山道武蔵路」と推定される。遺構は約12mの幅を保ち南側都埋文調査区の南端から北側西国分寺地区遺跡調査会調査区の北端まで約340mにわたってほぼ一直線に検出されている。中央部は旧鉄道学園の野球場の造成で一部削平され溝底を残すのみであるが、その他の部分の遺存状態は非常に良好である。

両側溝は共に、溝とはいっても底は平坦には繋がってはおらず、途中所々掘り残されたように分断されていた。また、場所によっては長土坑が連続している状態の所もあり、その間隔や深さも一定ではなかった。溝の上面幅は、西側溝が40～80㎝、東側溝が45㎝～最大１mを測り、深さは56～76cmを測る。最深部はハードローム層まで掘り込まれ、溝底には幅15cm程の工具痕が多数検出されている。また、溝の壁や肩は崩れが少なく、オーバーハングした部分も崩落していないことから、溝は比較的短期間で埋没したと思われ、その後掘り返しを行った痕跡も認められない。

覆土（埋土）は、基本的に３層に分かれる。最下層はロームブロックが主体で黒色土を多量に含み締ま

りは弱く、人為的な埋め土層か、あるいは、溝底の残土を意図的に掘り出さなかったものと思われる。中間層は自然堆積層と思われる黒色土が主体で粒子が粗くボソボソしており締まりが乏しい。上層は黄褐色粘質土が主体で粒子が細かく非常に硬く締まっており、特に上面は踏み跡と思われる硬化面となっている。

両側溝間の路面にあたる部分は中央が皿状に窪んでいるが、１時期に属する顕著な踏み跡は検出されていない。と云うよりはむしろ、該期の路面はその後の３時期目の道路跡や４時期目の道路跡によって壊され削平されていると云った方が妥当である。中央の皿状に窪んだ部分も、道幅の問題もあるが、大きく見て４時期目の道路の路面であると考えられる。このことは、両側溝の中央部で４時期目に属する硬化面が検出されたことや、路面全体が４時期目の掘り込み遺構の覆土と同じ土層で覆われていることからも確認できる。

２時期目の道路跡（第307図）

２時期目の道路跡は、１時期目の道路跡の両側溝の上面で検出された硬化面である。南側都埋文調査区でも同様の踏み固められたと思われる黄褐色粘質土層の硬化面が検出されていることから、側溝が埋没した後に使用された道路跡の一部だと考えられる。硬化面は溝の検出面からやや下がった位置で検出されており、中央部は皿状に窪んでいる部分もある。層の厚みは10～15cm を測り、下層黒色土との境界はかなり明確に区分される。この黄褐色の色調を持つ土層は、基本層序（Ⅰ－4.）でも記したように調査区の周辺では本来縄文時代の遺物包含層（Ⅱ層）より下位（ⅢIa～ⅢIb 層）に堆積している。このため、溝が埋没する過程で黄褐色土が自然堆積するのことは考えにくく、水などの影響で色調が変化したとも考えられるが、下層との区分が明確なことや上面が踏み跡により固く硬化していることなどを考えると、溝が埋没した後に側溝の周辺を道路として使用するために人為的に黄褐色土を投げ込み、路面の整備や補修を行った可能性が窺える。

３時期目の道路跡（第307図）

３時期目の道路跡は、１時期目の道路跡の上に重複して構築された SD－29と SD－30を両側溝とする幅約９m（両側溝の芯々距離は8.5～9.5m）の道路跡である。調査区の南側は既存の野球場跡で削平されているが、南側都埋文センター調査区でも同様の規模と位置関係を持つ２条の溝跡が検出されており、本調査区の溝跡と繋がるものと推定される。

西側溝（SD－29）は本調査区北側の南端部（野球場の北側）では１時期目の道路跡の西側溝（SD－31）の東よりの部分と重複しており、図版138の状況写真に示したように２時期目の道路とした溝上硬化面の約２/３を壊し掘られている。溝は北に行くにつれ徐々に東方向にそれていき途中からは SD－31と分かれ、すぐ東を並行して掘られているが、途中で途切れ、以北では検出されていない。東側溝(SD－30)は西側溝（SD－29）から約９m の位置に１時期目の旧路面部を壊して掘られており、西側溝(SD－29)と同様に北に行くにつれ徐々に東方向に逸れながら進んでゆき１時期目の道路跡の東側溝（SD－32）にぶつかった所からは溝の脇を併走するように続いていくが、最北部では４時期目の道路跡とした切り通し状遺構に壊されている。両側溝の心々距離は北にゆくにつれ次第に広くなってゆき、最大距離は9.5m を測る。

覆土（埋土）は基本的に２層に分かれ、上層は粒子の細かい黒みを帯びた暗灰褐色土の自然堆積層。下層は黒褐色土と暗黄褐色土との混合土で人為的に埋め戻され硬く締まっており、所謂、掘り方の層であると思われる。溝の断面形状は、両側溝ともに箱形を呈し、幅は約50cm、深さは約30cm を測る。完掘状態

（掘り方）での溝底は、土坑状に途切れる部分もあるが、使用面での溝底は、１時期目の側溝とは違い平坦に繋がって掘られている。ただ、東側溝（SD－30）は１時期目の東側溝（SD－32）にぶつかった所でなぜか一度途切れている部分がある。その理由については不明だが、溝がこの部分から西に曲がっている点や反対側の西側溝が終わる部分と相対する点などを考えると、単なる「掘り残し」と云うより何か意図的なものを感じる。

４時期目の道路跡（第307図）

４時期目とした道路跡は、路面中央から北東壁際にかけて検出された幅約50cm 程の蛇行する２条の硬化面と、それに続く波板状の硬化面を伴う切り通し状に掘り込まれた遺構である。

中央２条の硬化面のうち、東側の硬化面は、中央やや南側の SD－30際から始まり、緩やかに S 字を描きながら北へ進み、途中からは中央部が皿状に窪み、今度は逆 S 字を描きながら緩やかな下り勾配で SD－30の脇をかすめ、掘り込み遺構の中央に向かって進んでゆく。窪み部の覆土は、粒子の粗い明茶褐色土が主体で黒褐色土粒子を多く含んでいる。西側の硬化面は、東側の硬化面の皿状の窪みが始まるあたりから始まり、途中幅広になる部分もあるが、緩やかな S 字を描きながら北方向へ進み、掘り込み遺構の西側肩部へと続き途切れる。また、南側の路面中央部でも、これらの硬化面に続くと思われる硬化面が途切れ途切れではあるがブロック状に検出されている。

掘り込み状の遺構は、旧路面の東寄りの位置から SD－30・32沿いに北に向かって傾斜しながら皿状に掘り込まれいき、途中から大きく東に逸れ、SD－30・32を完全に壊し、傾斜もやや急勾配になりながら北東に向かって調査区外に続いている。遺構上面の最大幅は約7.5m、東壁際での確認面からの深さは約１m を測る。遺構の傾斜が始まった部分では、波板状を呈する硬化面が幅約２m、長さ約7.5m にわたって検出されている。また、その先でも途中途切れる部分はあるが、幅約50cm 前後の硬化面が遺構の底部に３条、西の肩部に１条、東壁際まで連続して検出されている。遺構の覆土は大きく見て２層に分かれる。上層は明茶褐色土が主体で、下層は灰褐色土が主体だが、下層は色調の違いから更に２層に区分でき、その下層（硬化面の直上）は明灰茶褐色土でローム粒子や黒褐色土粒子をを多く含んでいる。上層は、灰褐色土が主体で土層断面図（第308・309図）の「d」とした層であり、SF－１の両側溝間の路面全体を覆っている。

硬化面（硬化した層）の土質は場所により多少の違いはあるが、基本的にやや明るめの黒褐色土が主体で、ローム粒子や暗褐色土を多く含む。また、硬化の度合いは、該期の竪穴住居の貼り床と同等かそれ以上である。

以上のように、４時期目とした道路跡では中央部の蛇行する硬化面や掘り込み遺構の硬化面など、複数の硬化面が顕著に検出されており、それぞれの硬化面の新旧こそ看取できなかったが、遺構が埋没する過程の中で路面として長期間にわたって使用された様子が窺えた。

尚、この遺構の延長部分は、平成10年度に都埋文によって調査されており、この結果、同遺構は〈１時期目〉の道路跡から東に逸れたあと、またすぐに西に曲がり、〈１時期目〉の道路跡と並行しながら北の恋ヶ窪谷の方向に下っていることが確認されている。

〈出 土 遺 物〉（第325図**１～６**）

SF－１からの出土遺物は、道路という遺構の性格からであろうが、非常に少なかった。特に側溝内か

らは、流れ込みによる縄文土器が数点出土したのみである。それ以外の遺物は、すべて４時期目の遺構の覆土中からの出土である。総数は、縄文土器を除くと469点で、主な内訳は灰釉陶器19点、須恵器の坏86点、須恵器の甕31点、土師器の坏21点、土師器の甕278点、土師質土器の坏26点、瓦類14点、その他に古銭と土錘が各１点である。灰釉陶器と須恵器の坏片は接合・復元するとそれぞれ１個体となったが、これらは、いずれも10世初頭の所産であり、その垂直分布は第310図に示したように路面直上とはいえないが、かなり路面に近い位置からの出土であり、両遺物とも転石化していない。その他、図示した遺物の説明は、「遺構出土遺物」（３）－①）の頁に記した。

SF－３（第311図、図版150・151）

SF－３とした遺構は２区の南東隅東壁際、HO－60からIT－57グリッドにかけて検出された南北方向の道路跡である。〈遺存状態〉は、北側及び途中所々撹乱により削平されているが概ね良好といえる。また遺構の南端は調査区外へ延び、北側部分も路面の東側半分程が調査区壁の外に延びる。

〈形　　状〉 遺構の路肩部（上場）が波打つが大きく見ればほぼ直線的に南北に延びており、主軸は北10度（国家座標系では２度）東を指向する。断面形状は路面が路肩部分より低くなっているため浅い皿状を呈し、確認面からの深さは平均0.3m 程である。調査区内での全長は約80m、路幅は、北側部分は東が調査区外であるためはっきりしないが南側では約4.4m 程を測る。もっともIB－59グリッド付近では上部が削平されているため0.4m 程と狭くなっている。

〈覆　　土〉 褐色土ブロックを多く含む黒褐色土が主体で粒子の違いから２層に分けられる部分もあるが、基本的にはほぼ単一層に近い。

〈出土遺物〉 道路遺構という性格からいずれも流れ込みの遺物であろうが、土師器の甕の破片、須恵器・坏の破片、男瓦の破片などが数点出土している。いずれも小片のため時期判別は無理であったが、かろうじて判別が可能な遺物として底部に糸きり痕を残す平安末頃と思われる須恵器（酸化焔焼成）の坏または皿の底部の破片が１点出土している。

〈特　　徴〉 路面は全体的に凹凸が多く、南側部分ではブロック状に硬化面が検出されたが踏み跡と思われる顕著な硬化面は検出されていない。このため、当初、この遺構を道路跡と認定するには無理があるのではないかと思われたが、後述する硬化面が顕著に検出されたSF－４道路遺構に覆土が酷似していることやSF－１がすぐ東を南北に併走する点などを考慮し、整理段階において道路遺構であると認定した。

SF－４（第311図、図版151・152、巻頭図版８）

SF－４は、４区北東部のNE－42からNK－44グリッドにかけて検出された、主軸が10度（国家座標系では18度）西を指向する南北方向の道路跡である。全長は約21m を測るが、遺構の南側は撹乱により破壊され、それ以南では検出されていない。また、北側は調査区の外へ続いている。

〈形　　状〉 北側部分が西へ、南側部分が東へ僅かに振れており全体的には緩やかな逆Ｓ字形を呈し、中央部には幅約0.4～0.7m、厚さ約３㎝程の踏み跡と思われる硬化面が良好に残る。遺構の両肩の幅は1.3～2.6m を測り、北へ進むにつれ徐々に狭くなり、傾斜もやや下り勾配になっている。検出面から路面までの深さは0.14～0.20m を測り、断面形状は浅い皿状を呈し、路肩部には木根などの侵食と思われる凹凸が多く残る。

〈覆　　土〉 暗褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体で粒子の違いから２層に分けられる部分も有るが、基本的にはほぼ単一層に近い。硬化面部分は暗褐色土が主体である。
〈出土遺物〉 埋没過程での流れ込みによるであろうが、須恵器・坏の体部の小片が１点出土しているのみである。
〈特　　徴〉 本遺構の使用時期については、覆土から判断して奈良・平安期のものとしたが、硬化面が極めて良好に検出されたことから長期にわたって使用された可能性が窺える。

SF－５（第312図、図版152、巻頭図版８）

SF－５は、４区北東部のNA－41からNH－42グリッドにかけて検出されたSF－４の東側を併走する道路遺構である。中央部は、所々撹乱により破壊されているが、特に南側はSF－４と同様大きく削平され、それ以南では検出されていない。南側では途中で直角に東へ分岐する部分があるが、全体としては主軸が５度（国家座標系では13度）西を指向する南北方向の道路跡である。全長は、南北が約22m、分岐した枝路にあたる部分は約５mを測る。
〈形　　状〉 歪で凹凸が激しいが、これはおそらく木根などの侵食によるものと思われる。路幅は北側が約1.2m、分岐部分では2.7mを測り、南端では0.7mと狭くなっている。また、東西方向の枝路も分岐部分では2.5m程だが東側ではこれより狭くなっている。断面形状は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは約0.12mを測る。路面にあたる部分は、全体的に凹凸が激しく（これもおそらく木根などの侵食によるものであろう）、顕著な硬化面は検出されていないが、かろうじて南側部分において硬化した面がブロック状に数箇所検出された。
〈覆　　土〉 SF－４に酷似した暗褐色土ブロックを含む黒褐色土が主体の単一層である。
〈出土遺物〉 いずれも埋没過程での流れ込みによるであろうが、須恵器の坏の破片が５点、須恵器の瓶の胴部と口縁部の破片が１点づつ、北武蔵型の土師器の坏の口縁部の小破片１点が出土している。
〈特　　徴〉 この遺構は、プラン検出時から掘削途中までは、道路遺構と認定する根拠が乏しかったが、覆土が酷似するSF－４で顕著な硬化面が検出された点や、調査区北側に向かって同遺構と併走する点、わずかでは有るが硬質面が検出されたことなどから、新旧関係は不明だがSF－４と関連する（対を成す）道路跡とした。

SF－６（第312図、図版150）

この遺構は、SF－１の４時期目道路跡の覆土中段で検出された幅約30cm、長さ2.8m、東西方向の硬化面のみの遺構である。硬化層は黒褐色土が主体で、層厚は７cmを測る。この遺構は、当初SF－１の４時期目遺構の一部として認識していたが、同遺構の埋没がかなり進んだ後に踏み跡状に硬化していること、周辺にはSF－４・SF－５といった道路遺構があり、これらの遺構と何らかの関連がある可能性が窺えることなどを考慮し、SF－１（４時期目）とは別遺構とした。

（板野）

② 溝 跡

SD－５（第314図、図版153・154、巻頭図版８）

〈検出位置〉 ４区東壁のKN－42グリッドから１区西壁のLI－111グリッドにかけて調査区を東西に横断

している。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。(西側)

〈遺存状態〉 西側は比較的良好だが中央部及び東側は上部を削平されている。特に東側は既存の野球場造成工事により底面近くまで削られており、底の部分が土坑状に連なって残っている様な状況である。東端および西端は調査区外へ延びている。

〈形 状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向しつつ東西方向に走行している。断面形は場所によってばらつきがあるものの全体としては逆台形状を呈している。

〈規 模〉 調査区内での全長は、途中撹乱等により途切れている部分もあるが、これも含めて測れば213mに及ぶ。溝幅は遺存状態の良い西側では1.0～2.0mだが、中央部は上面の削平があるため0.5～1.5m程で、東側は更に大きく削平されているため0.3～0.9m程度である。また、確認面からの深さも西側では0.4～0.6mだが、中央部では0.1～0.4m程で、東側は深い所でも0.25m程である。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されている。幅は0.2～0.4m程で所々凹凸があるものの全体としては平坦で、東へ進むにつれ下り勾配になっている。壁は場所によっては段差があるが全般的に底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 西側では黒褐色土が主体で３～５層に分層できるが、最上層が覆土の２/３程を占めている部分が多い。中央部も主に黒褐色土が主体で２～４層に分層できる。東側は野球場造成工事の影響と思われるが硬く締まった黒色土が主体で、浅い部分は単一層だが他は２～４層に分層できる。全体的な堆積状況からは自然埋没の可能性が高いと思われる。

〈出土遺物〉 覆土から土師器の甕の破片、須恵器の坏や甕の破片、男瓦・女瓦の破片等が出土している。

〈特徴・性格〉 SD－33参照。

SD－33(第313図、図版155～157)

〈検出位置〉 ４区東壁際のLE－40からND－37グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南側と中央部は撹乱により大きく壊されている。また北端は調査区外へ延びている。北側部分ではSF－１およびSX－13と重複しており、これらを壊して構築されている。

〈形 状〉 調査区東壁沿いを南北に走行しており、南端からMP－35グリッド付近までは直線状で主軸は北約10度程東を指向しているが、それより先、SF－１(４時期目の遺構)と交差するあたりからは緩やかな弓なりを呈し西へ振れている。断面形は場所によりばらつきがあるものの全体としては逆台形状を呈する。

〈規 模〉 全長は南側検出部分では約41m、北側では約49mで中央部の撹乱による壊されている部分も含めて測れば約120mに及ぶ。溝幅は1.5～2.0mで確認面から底面までの深さは0.4～0.5m程だが、切り通し状道路遺構と交差している部分では、幅は最大2.6m深さは0.8mを測る。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されており、所々凹凸があるものの全体としては平坦で、北へ進むにつれ若干下り勾配になっている。SF－１(４時期目の遺構)と交差するあたりではⅣ層中段まで掘削されており、一段下がった様な状態になっている。またこの部分の底面及び壁面からは多くの工具痕跡が確認できた。なお、底面幅は南北を通じて平均0.4m程である。壁は東西両面とも底面から急角度で立ち上がっているが、壁面は全体的にやや凸凹しており、特に上部には崩落と思われる窪みが多い。

〈覆　　土〉 大きく３ないし５層に分けられるが、堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質はほぼ全層にわたり黒褐色土が主体だが褐色土粒子を含んだ層が多い。

〈出土遺物〉 覆土内からは多くの遺物が出土している。内訳は、土師器片38点、須恵器片５点、瓦片３点、常滑と思われる陶器片４点、及び縄文土器片等が多数出土したが小片のものが多く埋没過程で混入したものと思われる。

〈特徴・性格〉 本溝跡は調査区を東西に横断して検出されたSD－５と酷似しているが、交差部分が調査区外であること及びその手前部分が撹乱により大きく壊されていることから両溝の関連性は確認できなかった。だが、もし同一遺構であるとすれば規模・形状からして区画溝の可能性が高いと思われる。また、時期的にはSF－１およびSX－13（出土遺物から10世紀中頃と思われる）を壊して構築されているので、これよりも新しいことは確かだが覆土土質から判断すればさほどへだたりない時期に構築された溝であると推測される。

SD－37（第313図、図版157）

〈検出位置〉 ４区北東隅のNT－50からOA－52グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈遺存状態〉 上部は撹乱によりⅢ層上面まで削平され、南北両端は底面まで削り取られている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で北約45度程西に振れており、両端は削平されているものの調査区外へ延びていると思われる。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 遺存部全長は4.2mで幅は0.45m、確認面からの深さは0.12mを測る。

〈底面・壁〉 底面はやや凹凸がある。壁は全般的に底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土を主体とした単一層だがローム粒を多量に含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝跡はSF－１の東側に並んで検出されたSD－33の延長線上に位置しており、この一部分である可能性が高いと思われる。

③ 土 坑

《 円 形 土 坑 》

SK－８（第316図、図版158）

〈検出位置〉 １区西側のLO－104・105グリッド。（僧寺中軸線から北へ704.4m、西へ311.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 中央部上面は撹乱により若干壊されている。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.2m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面は北側が壁面にかけて若干窪んでいるものの全体としては平坦に構築されている。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが、上層は南壁際から底面中央やや北側にかけて流れ込んだ様に堆積している。土質はともに黒褐色土を主体とするが、上層にはロームブロックが少量混入する。

〈出土遺物〉 なし。

SK－9（第316図、図版158）

〈検出位置〉 １区西側の LN－104・105グリッド。（僧寺中軸線から北へ700m、西へ312.4m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。 〈規　　模〉 径約0.9m×深さ0.06m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹しており、壁は全面とも底面から急な角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－120（第316図、図版158）

〈検出位置〉 ２区中央西壁際の JH･JI－77グリッド。（僧寺中軸線から北へ564m、西へ228.5m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。 〈規　　模〉 長径1.14m×短径0.95m×深さ0.10m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、北東隅に径30cm 深さ８cm 程のピット状の窪みがある。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－183（第316図、図版158）

〈検出位置〉 ２区北側の LE－55・56グリッド。（僧寺中軸線から北へ672.8m、西へ164.7m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。 〈規　　模〉 径約1.04m×深さ0.16m。

〈底面・壁〉 底面は所々凹凸が見られるものの全体としては平坦に構築されている。壁の南西面はほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁は急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－185（第316図、図版159）

〈検出位置〉 ２区北東寄りの LE－54グリッド。（僧寺中軸線から北へ673.7m、西へ159.7m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。 〈規　　模〉 径約1.20m×深さ0.30m

〈底面・壁〉 底面は平坦で、北西壁際には壁面を穿った様な状態で径約15cm 深さ８cm 程のピット状の窪みがある。壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土と暗褐色土の２層に分かれるが、上層の黒褐色土が３／４程を占める。堆積状態は、壁際は流れ込み状の様相を呈するが全体的には平坦に堆積している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は SK－120と類似した形態だが位置的には離れており、両者の関連性は確認できなかった。

SK－189（第316図、図版159）

〈検出位置〉 ２区北側の LP･LQ－51・52グリッド。（僧寺中軸線から北へ708.2m、西へ153.2m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北側上部１/３程はSX－26と重複しておりこれに壊されている。
〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.1m×深さ0.4m。
〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 上部に部分的に明灰褐色土がある他は黒褐色土が主体で大きく２層に分けられるが、上層が２/３程を占めている。堆積状態は、壁面から中心に向かってやや窪んだ感はあるが大きくみれば平坦な堆積であり自然埋没か否かは断定できない。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑は上部に部分的に明灰褐色土が入り込むものの主体土から判断して奈良・平安時代に構築された遺構であると思われる。

SK－205（第316図、図版159）
〈検出位置〉 ２区北東SF－１沿いのLN－45グリッド。（僧寺中軸線から北へ704m、西へ133.5m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。
〈遺存状態〉 上部が壊されている。また西側１/３程は撹乱により底面まで壊されている。
〈形　　状〉 円形。（残存部より推測）　　〈規　　模〉 径0.94m×深さ0.14m
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑はSF－１の西側溝近くに位置しているため、同道路跡に関連した遺構であった可能性も考えられるが確認はできなかった。ただ覆土土質から判断すれば奈良平安期の土坑であると推測されるので時期的には近似していると思われる。

SK－206（第316図、図版159）
〈検出位置〉 ２区北東部のLL･LM－46グリッド。（僧寺中軸線から北へ696m、西へ136.1m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 東側部分は撹乱により底面まで壊されている。
〈形　　状〉 円形。（残存部分より推定）　〈規　　模〉 径約1.2m×深さ0.4m。
〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁も垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ３層に分けられ、上層は確認面から８cm程の厚さで平坦に堆積しているが、下２層は中層が中心付近から北壁に向かって底面近くまで流れ込んだ様な堆積状態になっている。土質はともに黒褐色土主体だが下層ほどロームブロックが多く混入している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－207（第316図、図版160）
〈検出位置〉 ２区北東部のLK－46グリッド。（僧寺中軸線から北へ690.8m、西へ135.6m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.1m×深さ0.2m。
〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるものの全体的には平坦である。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ４層に分けられるが、中央部は上層と下層の２層で周辺部に中層が分布した堆積状態である。

土質は４層とも黒褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑北約４m 程の所に規模・形状が類似した SK－206があるがこれとの関連は確認できなかった。

SK－209（第316図、図版160）

〈検出位置〉 ２区北東部の LN－50グリッド。（僧寺中軸線から北へ700.5m、西へ148.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径約1.1m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面は緩やかな凹凸があるもののほぼ平坦に構築されている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土主体の単一層だが灰褐色土ブロックが多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は覆土中に灰褐色土が含まれているものの周囲に検出された SK－206・207・210等と規模・形状が酷似しており同一時期に構築されたものと推測される。

SK－210（第316図、図版160）

〈検出位置〉 ２区北東寄りの LJ－52グリッド。（僧寺中軸線から北へ688.9m、西へ153.7m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径1.2m×深さ0.36m

〈底面・壁〉 底面は、中央部分は平坦だが壁に向かって若干傾斜する。また中心よりやや東寄りに径25cm 深さ７cm 程のピット状の窪みがある。壁は全面とも垂直に立ち上がる。

〈覆 土〉 ４層に分けられ、上層には暗灰褐色土が含まれるものの全体としては黒褐色土主体で、堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は SK－206・207・209と関連した同一時期の遺構と思われるが、これらと同様その性格は確認できなかった。

SK－230（第316図、図版160）

〈検出位置〉 ２区北東隅の LT－44グリッド。（僧寺中軸線から北へ717.3m、西へ131.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径約1.0m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されているが北壁下にはピット状の窪みがある。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土を主体とした単一層で炭化物粒及びローム粒を微量含む。

〈出土遺物〉 土師器・甕の胴部の破片が１点出土した。

SK－303（第317図、図版161）

〈検出位置〉 ２区北壁近くの LQ－51グリッド。（僧寺中軸線から北へ709m、西へ152.3m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 円形。　〈規　　模〉 径約0.95m×深さ0.16m。
〈底面・壁〉 底面中央部はほぼ平坦だが、壁際はやや盛り上がっている。壁は全面ともほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑の西１m 程の所には良く似た形態の SK－189があり、また南側、東側にも類似した円形土坑が散在していることから見て、本土坑もこれらと同一の性格を有した遺構であったと思われる。

SK－865（第317図、図版161）
〈検出位置〉 ４区北側の NJ－53グリッド。（僧寺中軸線から北へ807.4m、西へ156.4m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 円形。　〈規　　模〉 径0.9m×深さ0.3m。
〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されているが、北側は若干深くなっている。壁は北面が僅かにオーバーハングしているものの、他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられ共に黒褐色土主体で平坦に堆積している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－871（第317図、図版161）
〈検出位置〉 ４区北東寄りの NE－46・47グリッド。（僧寺中軸線から北へ794.2m、西へ137.5m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 東側上面は SD－42と重複しており、これに壊されている。
〈形　　状〉 円形。　〈規　　模〉 径約1.4m×深さ0.26m。
〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており、ほぼ平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられ堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は２層とも黒褐色土が主体だが、暗褐色土粒子が混入しており、特に上層には多く含まれている。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑は、すぐ南側に SK－873・872等の同様の円形土坑があることから、これらと関連した遺構であったと考えられる。

SK－872（第317図、図版161）
〈検出位置〉 ４区北東寄りの NC･ND－45グリッド。（僧寺中軸線から北へ788.8m、西へ134.4m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 東半分は SD－42と重複しているため、上部が約20cm ほど削り取られている。
〈形　　状〉 円形。残存部平面形は不整形だが、本来の形状は円形であると思われる。
〈規　　模〉 径1.1m×深さ0.36m。
〈底面・壁〉 底面は東側がやや窪んでいるものの全体としては平坦に構築されている。壁は西側はほぼ垂

直に近い立ち上がりだが、他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑はすぐ北側に検出されたSK－871・873との位置関係および形状、土質の類似性から考えて、同一時期に構築された関連性のある土坑であると思われる。

SK－873（第317図、図版162）

〈検出位置〉 ４区北東寄りのND－46グリッド。（僧寺中軸線から北へ791.4m、西へ137.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.3m×深さ0.08m

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 単一層で黒褐色土を主体とするが暗褐色土粒子を多く含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は同一形態のSK－871・872の間に位置しており、土質も類似していることから同一時期に構築された同一の性格を有した土坑であったと推測される。

SK－875（第317図、図版162）

〈検出位置〉 ４区北東のNJ－47グリッド。（僧寺中軸線から北へ807.9m、西へ139.3m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約0.7m×深さ0.12m

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で径約0.6m程のやや歪んだ円形を呈する。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑の西側４m程に規模・形状の類似したSK－865があり、これとの関連性ははっきりしないが同一の性格を有していたと考えられる。

SK－876（第317図、図版162）

〈検出位置〉 ４区北東部のNM・NN－49グリッド。（僧寺中軸線から北へ819m、西へ146m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径1.0m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるもののほぼ平坦に構築されている。壁は西面は垂直に立ち上がっており、他も底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが下層が大半を占めており、上層は東側部分に堆積しているにすぎない。土質はともに黒褐色土を主体とするが、上層には明灰褐色土が若干含まれている。また下層は褐色土粒子を少量含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は覆土中に若干の明灰褐色土が含まれているものの南側に奈良・平安期の同類型の円形土坑が多数散在しており、検出面から判断しても同一時期に構築されたものである可能性が高いと思われる。

SK－882（挿図317、図版162）

〈検出位置〉 ４区東寄りの MT－44グリッド。（僧寺中軸線から北へ779.1m、西へ146.2m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 平面形はほぼ円形だが、底面がやや小さく断面形はすり鉢型を呈する。

〈規 模〉 径約0.8m×深さ0.26m。

〈底面・壁〉 底面は径約0.4m の円形で、ほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも底面からやや緩やかな角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられるが上層が２/３程を占めており、堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は共に黒褐色土を主体とするが、下層は褐色土粒子を多量に含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑北側および南側には多くの円形土坑が散在しており、本土坑は断面形態に若干の相違はあるものの、検出面及び位置関係から判断して、これらと同時期に構築された同種の機能・性格をもった遺構であったと考えられる。

SK－883（第317図、図版163）

〈検出位置〉 ４区東寄りの MP－45グリッド。（僧寺中軸線から北へ765.5m、西へ134.3m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径約1.0m×深さ0.34m。

〈底面・壁〉 底面は中央部にかけてやや湾曲しており、いわゆる鍋底型を呈する。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土を主体とした単一層だが、暗褐色土粒子等が少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑の性格ははっきりしないが、南側および北側に同規模の円形土坑が分布していることから、これらと関連のあった遺構であったと考えられる。

SK－909（第317図、図版163）

〈検出位置〉 ４区南東寄りの MB･MC－46グリッド。（僧寺中軸線から北へ726.1m、西へ136.2m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 南側１/４程は底面まで壊されている。

〈形 状〉 円形。（残存部分から推定） 〈規 模〉 径約1.4m×深さ0.3m。

〈底面・壁〉 底面も径1.2m 程のほぼ円形で、所々凹凸があるものの全体としては平坦に構築されている。残存部壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 東西に傾斜して２層に分けられるが、重複しているのは中央部のみで西側が下層になっている。土質はともに黒褐色土主体だが下層にはより多くの細かなロームブロックが含まれている。

〈出土遺物〉 坑内より縄文土器片が２点出土したが埋没時に混入したものと思われる。

SK－６（第317図、図版163）

〈検出位置〉 １区中央やや西寄りの LP－105グリッド。（僧寺中軸線から北へ525.6m、西へ313m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 楕円形。

〈主　　軸〉 北75度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.39m×短軸1.1m×深さ0.08m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面ともやや緩やかな角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層　　〈出土遺物〉 なし。

SK－506（挿図318）

〈検出位置〉 ３区東壁近くの IO－83・84グリッド。（僧寺中軸線から北へ522.4m、西へ248.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 楕円形。

〈主　　軸〉 北89度東を指向する　　〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸0.68m×深さ0.1m。

〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるものの全体としては平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっているが、長軸方向の東西壁は南北壁に比してやや緩やかである。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 南壁近くの底面上から拳大の礫が１点出土した。

SK－898（第318図、図版163）

〈検出位置〉 ４区東側（SF－１内）の MR－39グリッド。（僧寺中軸線から北へ772.7m、西へ116m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面

〈遺存状態〉 東側部分は撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 楕円形。（残存部分から推定。）

〈主　　軸〉 北77度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸1.4m×深さ0.38m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁はやや急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられるが中層が大半を占めており、堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は全層とも黒褐色土主体だが、中層にはロームブロック等が多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は SF－１の西側溝（SD－31）のすぐ東側に位置するが同道路跡との関連性等については確認できなかった。

SK－262（第318図、図版164）

〈検出位置〉 ２区北東部の LR・LS－45グリッド。（僧寺中軸線から北へ714.4m、西へ134.3m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 楕円形。（細長い楕円形。）

〈主　　軸〉 北19度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.5m×短軸0.8m×深さ0.2m

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面より急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は長軸2.5m 短軸0.8m とかなり細長い土坑であり、調査区内でも類例の少ない形態に属するが、遺物の出土もなく遺構としての性格は不明である。

SK－14（第318図、図版164）

〈検出位置〉 １区南西隅の LC･LD－110グリッド。（僧寺中軸線から北へ669m、西へ327.3m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 北西、中央及び南東部分を撹乱により底面まで壊されている。
〈形　　状〉 不整楕円形。
〈主　　軸〉 北30度程東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.76m×短軸0.86m×深さ0.1m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかな角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

SK－15（第318図、図版164）
〈検出位置〉 １区西壁近くの LM－107・108グリッド。（僧寺中軸線から北へ697.0m、西へ320.7m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 西壁中央上部は撹乱により若干壊されている。
〈形　　状〉 不整楕円形。
〈主　　軸〉 北20度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.9m×短軸0.96m×深さ0.36m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられほぼ平坦に堆積している。土質はともに黒褐色土を主体とするが上層にはロームブロックが少量混入している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－214（第318図、図版164）
〈検出位置〉 ２区中央東寄りの JO－58グリッド。（僧寺中軸線から北へ583.1m、西へ172.3m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。　　〈遺存状態〉 上部を壊されている。
〈形　　状〉 楕円形。
〈主　　軸〉 北17度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.48m×短軸0.55m×深さ0.18m。
〈底面・壁〉 底面は平坦だが南側は一段上がった状態になっている。壁は南面が緩やかな角度で立ち上がっているが、他は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分かれほぼ平坦に堆積している。土質は上層が黒褐色土、下層は褐色土が主体である。
〈出土遺物〉 底面近くから刀子が出土した。（第327図）
〈特徴・性格〉 本土坑は底面近くから刀子が出土したこと、及び形状からしてやや小規模ながら土坑墓の可能性が考えられたため、土壌サンプルを採取し、リン酸分析を業者委託としたが確証を得るには至らなかった。

《 方 形 土 坑 》

SK－7（第319図、図版165）
〈検出位置〉 １区西側の LP－107・108グリッド。（僧寺中軸線から北へ706.2m、西へ321.3m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 正方形。

〈主　　軸〉 北20度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.25m×短軸1.05m×深さ0.14m。
〈底面・壁〉 底面は所々凸凹があるものの全体としては平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられるが、上層は中央部から南壁にかけて堆積しているのみで下層が３/４程を占めている。土質はともに黒褐色土を主体とするが上層には褐色土粒子が少量混入している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－219（第319図、図版165）
〈検出位置〉 ２区北寄りの LH－59・60グリッド。（僧寺中軸線から北へ681.7m、西へ177.5m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 正方形。南東隅がやや張り出している。
〈主　　軸〉 北15度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.32m×短軸1.28m×深さ0.4m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦な正方形を呈する。壁の南東隅は急角度に立ち上がっているが、他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられるが下層は底面から５cm 程しかなく上層が大半を占めている。土質は下層は黒褐色土主体で、上層は暗褐色土主体だがロームブロックを多量に含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑は調査区内では類例が少ない正方形に近い形態の遺構だが、出土遺物等もなく遺構としての性格は確認できなかった。

SK－549（第319図、図版165）
〈検出位置〉 ３区南側の HP・HQ－94グリッド。（僧寺中軸線から北へ467.9m、西へ279.9m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 正方形。やや歪んでいる。
〈主　　軸〉 北10度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.20m×短軸1.18m×深さ0.1m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 東壁下に暗褐色土の流れ込みがある他は黒褐色土を主体としたほぼ単一層である。
〈出土遺物〉 なし。

SK－877（第319図、図版165）
〈検出位置〉 ４区東寄りの NA・NB－46グリッド（僧寺中軸線から北へ782.9m、西へ136.5m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 正方形。平面形は楕円形に近い。
〈主　　軸〉 北75度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸1.1m×深さ0.18m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられるが上層が３/４程を占めており、堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層が黒褐色土、下層は褐色土が主体である。
〈出土遺物〉 なし。

SK－75（第319図、図版166）

〈検出位置〉 ２区南壁寄りの HO－72、HP－72グリッド（僧寺中軸線から北へ465.1m、西へ215.7m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北10度東を指向する。

〈規 模〉 長軸1.87m×短軸は北側1.00m 南側1.30m×深さ0.20m。

〈底面・壁〉 底面は全体的には平坦だが中心より南側は４cm 程窪んでおり、そこに硬化面が検出された。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 下層の硬質面を含めると暗褐色土主体の土が３層に分かれ平坦に堆積しているが、中層の土が大半を占めている。

〈出土遺物〉 須恵器・坏の口縁部片が１点出土した。

〈特徴・性格〉 本土坑は規模が大きく、また底面に硬化面が検出されたこと等を考えると住居に類した遺構である可能性もあるが、底面や周囲に柱穴と思われる様なピット等の検出はなく遺構としての性格は不明である。

SK－76（第319図、図版166）

〈検出位置〉 ２区南壁際の HM－72グリッド。（僧寺中軸線から北へ457.7m、西へ214.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 底面に一部木根による撹乱をうけるが、比較的良好である。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北87度西を指向する。 〈規 模〉 長軸2.05m×短軸1.4m×深さ0.57m。

〈底面・壁〉 底面は全体的に平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ３層に分かれ中層が半分程を占める。堆積状況からは自然埋没と思われる。土質は上層が黒褐色土、下２層は暗褐色土が主体で中層は特にロームブロックが多量に混入している。

〈出土遺物〉 坑内底面からは３点の遺物が出土している。内訳は土師器の甕１点、須恵器の坏１点、瓦１点だがいずれも小片である。

〈特徴・性格〉 本土坑は底面に硬化面こそ分布していなかったものの、規模・形状が SK－75と類似しており、また位置的にも近いことを考えると同一の機能・目的を有した遺構であったと思われる。

SK－152（第319図、図版166）

〈検出位置〉 ２区西壁際の KL－76・77グリッド。（僧寺中軸線から北へ634.4m、西へ228.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。やや丸みを帯びる。

〈主 軸〉 北５度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.60m×短軸0.90m×深さ0.30m。

〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるものの全体としては平坦である。壁は底面より急角度で立ち上がっているが、南東隅部分は多少崩落した気配が窺える。

〈覆 土〉 単一層で黒褐色土を主体するがロームブロック等を多量に含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－241（第319図、図版166）

〈検出位置〉 ２区北東部の LL－49グリッド。（僧寺中軸線から北へ693.5m、西へ146.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東側１/３程は SK－231に壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北82度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.35m×短軸0.95m×深さ0.4m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は底面より急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ４層に分けられるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質はともに黒褐色土が主体だがローム粒、ブロックを多く含み特に中層ほど顕著である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は同時期の SK－231と重複していること、および壁面の崩れが少ないこと等を考えると堆積状態こそ自然埋没的ではあるが構築後比較的短期間のうちに埋没したものと思われる。

SK－231（第320図、図版167）

〈検出位置〉 ２区北東部の LK･LL－49グリッド。（僧寺中軸線から北へ693.9m、西へ145.2m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北３度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.04m×短軸1.22m×深さ0.36m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は東面はほぼ垂直だが他は底面より急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒褐色土を主体とした土が６層に分けられ、堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 覆土中より鉄片が数点出土し、刀子または釘の破片かと思われるがいずれも小片であるため確定はできなかった。

SK－259（第320図、図版167）

〈検出位置〉 ２区北西部北壁近くの LN－69グリッド。（僧寺中軸線から北へ699.8m、西へ206.4m）

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈遺存状態〉 上部を（グランド造成工事により）削平されている。また北側部分には東西に幅20cm 程の撹乱が走っており底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。やや丸みを帯びている。

〈主　　軸〉 北16度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.86m×短軸1.06m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが下層は底面から２cm 程の堆積である。土質は上層が黒褐色土、下層は褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－263（第320図、図版167）

〈検出位置〉 ２区北西寄りの KM－70グリッド。（僧寺中軸線から北へ637.3m、西へ207.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南東隅を底面まで、南壁は中段まで撹乱により壊されている。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北30度東を指向する。　〈規　　模〉 長軸2.4m×短軸1.3m×深さ0.24m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体で３層に分けられ堆積状態からは自然埋没と思われる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－498（第320図、図版167）
〈検出位置〉 ３区中央東寄りの IQ･IR－82グリッド。（僧寺中軸線から北へ531.2m、西へ244.1m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北77度西を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.38m×短軸0.92m×深さ0.1m。
〈底面・壁〉 底面は壁際を中心に緩やかな凹凸があり全体的にやや波立っている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 暗褐色土主体の単一層　〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑は、調査区内において多く検出されたタイプの土坑に属するが、出土遺物等もなく遺構としての性格は不明である。

SK－523（第320図、図版168）
〈検出位置〉 ３区南東寄りの IF－86・87グリッド。（僧寺中軸線から北へ496.1m、西へ257.6m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 上面東側が僅かに壊されているもののほぼ良好である。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北80度西を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.75m×短軸1.15m×深さ0.25m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されている。壁は長軸方向の南北面はほぼ垂直に立ち上がっているが、東西面はやや急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 単一層で黒褐色土を主体とするがローム粒を多く含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－547（第320図、図版168）
〈検出位置〉 ３区南東隅の HL･HM－81グリッド。（僧寺中軸線から北へ456.7m、西へ241.7m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。　〈遺存状態〉 上面が壊されている。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北７度西を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸0.8m×深さ0.18m。
〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されている。長軸辺たる東西壁面は中央部がオーバーハングしているが他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　〈出土遺物〉 なし。

SK－556（第320図、図版168）

〈検出位置〉 ３区南壁近くの HN－94グリッド。（僧寺中軸線から北へ460.5m、西へ280.5m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。やや丸みを帯びている。

〈主 軸〉 北15度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.6m×短軸0.8m×深さ0.14m。

〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるものの全体としては平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－798（第321図、図版168）

〈検出位置〉 ４区西側の MN－89・90グリッド。（僧寺中軸線から北へ760.7m、西へ266.7m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 南壁が外側に湾曲しているものの全体としては長方形を呈する。

〈主 軸〉 北８度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.2m×短軸0.6m×深さ0.46m

〈底面・壁〉 底面は壁際から中心に向かってやや窪んだ状態で、壁は南面は傾斜した立ち上がりだが他はほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土が主体で３層に分けられる。堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑の性格は不明だが、近くで検出された SK－800と規模・形状及び覆土土質が類似していることを考えると、同一時期の同じ機能目的をもった土坑であったと思われる。

SK－800（第321図、図版169）

〈検出位置〉 ４区西側の MO－91グリッド。（僧寺中軸線から北へ763m、西へ271.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。やや丸みを帯びている。

〈主 軸〉 北82度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.4m×短軸0.6m×深さ0.5m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層中段まで掘削して構築されており、中央部がやや深くなったいわゆる鍋底型を呈している。壁の東西面は傾斜した立ち上がりだが、南北面は垂直な立ち上がりで部分的にはややオーバーハングしている。

〈覆 土〉 黒褐色土が主体で３層に分けられる。堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は、東側４m 程離れた所に検出された SK－798と規模・形状が酷似しており同一の性格をもった遺構であると思われる。

SK－857（第321図、図版169）

〈検出位置〉 ４区北側の NM－52・53グリッド。（僧寺中軸線から北へ819m、西へ155.6m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 北側上部を若干壊されているが比較的良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北23度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸1.1m×深さ0.3m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は西面が僅かにオーバーハングしている他は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ほぼ単一層で黒色土主体だが暗褐色土ブロック、ロームブロック等を含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－858（第321図、図版169）
〈検出位置〉 ４区北壁際の NK－63・64グリッド。（僧寺中軸線から北へ810.8m、西へ189.8m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 北西隅は撹乱により底面まで壊されている。また、東壁上部は土坑状の別遺構が絡んでいるものと思われる。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北77度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.8m×短軸1.2m×深さ0.6m。
〈底面・壁〉 底面はⅣ層中段まで掘削して構築されており、全体としては平坦だがやや凹凸がある。南壁近くには径60cm 深さ20cm 程の不整形な窪みがある。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体土が大きく２層に分けられるが上層が全体の４/５程を占めており、堆積状態から人為的埋め戻しか否かを判断するのはむずかしい。
〈出土遺物〉 なし。

SK－869（第320図、図版169）
〈検出位置〉 ４区北東寄りの NC･ND－47グリッド。（僧寺中軸線から北へ789.1m、西へ140.3m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北75度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.4m×短軸0.8m×深さ0.3m。
〈底面・壁〉 底面は壁際から中央部に向かってやや窪んだ状態だが全体的にはほぼ平坦である。壁は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 単一層で黒褐色土を主体とするがローム粒等が多く混入している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－897（第321図、図版170）
〈検出位置〉 ４区北東壁近くの NI－43・44グリッド。（僧寺中軸線から北へ805.5m、西へ129m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形 A。
〈主　　軸〉 北60度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸1.0m×深さ0.22m。
〈底面・壁〉 底面はやや凹凸があるものの全体的には平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑東脇には SF－４が南北に走っているが、これとの関連性および新旧関係は確認で

きなかった。また、西壁上段は別遺構との絡みと思われるが、プラン及び断面調査では確認出来なかった。

SK－905（第321図、図版170）

〈検出位置〉 ４区東側の MO･MP－41・42グリッド。（僧寺中軸線から北へ764.8m、西へ122.9m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 ほぼ良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北９度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.6m×短軸1.0m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 単一層で黒褐色土を主体とするがローム粒等を多く含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－922（第321図、図版170）

〈検出位置〉 ４区南東部の LI－41グリッド。（僧寺中軸線から北へ685.3m、西へ121.9m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北14度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.5m×短軸1.0m×深さ0.16m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は東壁部分が SF－１の東側溝と重複しており、これを壊して構築されている事から、同道路跡の存続時期等を考察する上で本土坑の意義は大きいと思われるが、詳細な時期認定ができる様な遺物等の出土はなかった。

SK－924（第321図、図版170）

〈検出位置〉 ４区東壁近くの MK－37グリッド。（僧寺中軸線から北へ751m、西へ108.8m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 ほぼ良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北77度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.8m×短軸1.0m×深さ0.14m。

〈底面・壁〉 底面はやや凹凸があるものの全体としては平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は SF－１（４時期目）の切り通し状遺構の東肩部分に僅かに接して検出されたが、両遺構の関連性等については確認出来なかった。

SK－1067（第322図、図版171）

〈検出位置〉 ４区東壁近くの MN･MO－35グリッド。（僧寺中軸線から北へ762.4m、西へ103.1m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 西側は SD－33と重複しておりこれに底面まで壊されている。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北62度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸0.9m×深さ0.26m。
〈底面・壁〉 底面は多少波打っているもののほぼ平坦に構築されている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 2層に分けられるが上層はSD－33埋没後に堆積している。土質はともに黒褐色土を主体とするが上層には褐色土粒が多く混入している。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑西側2m程の所にSD－32（SF－1の東側溝）が南北に走っており、ともにSD－33と重複し、これに壊されている。それゆえ同道路跡の存続時期等を考察するうえで本土坑の意義は大きいと思われるが、出土遺物もなく構築時期を明確に確定することはできなかった。また両者の関連性および新旧関係についても確認することはできなかった。

SK－150（第322図、図版171）
〈検出位置〉 2区西寄りのKJ－74グリッド。（僧寺中軸線から北へ627.8m、西へ219.9m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 南東隅は底面近くまで撹乱により壊されている。
〈形　　状〉 長方形B。
〈主　　軸〉 北16度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.64m×短軸0.62m×深さ0.40m。
〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ほぼ均一に2層に分かれ壁際は流れ込み状だが全体としては平坦に堆積している。土質は共に黒褐色土主体だが、上層はローム粒を多量に含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑の北側長軸延長線上8m程の所にSK－158が位置しており、規模・形状が酷似している。土質等も類似していることを考えると同一時期に構築され、同様の性格をもった遺構であったと思われる。

SK－155（第322図、図版171）
〈検出位置〉 2区北西寄りのKN－75グリッド。（僧寺中軸線から北へ640.6m、西へ224m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形B。
〈主　　軸〉 北3度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.90m×短軸0.87m×深さ0.28m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は東壁は急角度だが他は底面よりほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土主体の単一層だがロームブロック、ローム粒を多量に含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－158（第322図、図版171）
〈検出位置〉 2区北西寄りのKM－72・73グリッド。（僧寺中軸線から北へ636.8m、西へ215.7m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形B。南側はやや楕円状だが、全体的には細長い長方形。
〈主　　軸〉 北25度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.60m×短軸0.58m×深さ0.30m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、中央南寄りに径６cm 程の浅い窪みがある。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 黒褐色土が主体の単一層で暗褐色土ブロック等を少量含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑はSK－150の北延長線上に位置し、規模・形状等が類似していることから、これと関連した土坑であったと考えられる。

SK－217（第322図、図版172）
〈検出位置〉 ２区北東部北壁際のLT－45グリッド。（僧寺中軸線から北へ717.9m、西へ133.2m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形 B。
〈主　　軸〉 北１度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.62m×短軸0.72m×深さ0.32m。
〈底面・壁〉 底面は所々緩やかな凹凸があるものの全体的には平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 大きく２層に分けられるが、下層は南壁中段あたりから底面中央付近にかけて堆積しているのみでほぼ単一層に近い。土質は上層が黒褐色土で、下層は暗褐色土が主体だが黒褐色土粒子を多量に含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－851（第322図、図版172）
〈検出位置〉 ４区南壁近くのMF－47・48グリッド。（僧寺中軸線から北へ736m、西へ141.1m）
〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。　　〈遺存状態〉 上部をグランド造成工事により削平されている。
〈形　　状〉 長方形 B。南壁はやや外側に湾曲している。
〈主　　軸〉 北７度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.6m×短軸1.0m×深さ0.2m。
〈底面・壁〉 底面は凹凸があり、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ３層に分けられるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は全層とも黒褐色土が主体でロームブロックを多く含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。
〈特徴・性格〉 本土坑は、調査区内で検出された他のやや細長い長方形土坑と比べて規模が大きいが、遺構としての性格は確認できなかった。

《 不 整 形 土 坑 》

SK－10（第323図、図版172）
〈検出位置〉 １区西側のJM－106グリッド。（僧寺中軸線から北へ698.2m、西へ317.1m）
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 東側部分は底面まで撹乱により大きく壊されている。
〈形　　状〉 残存部より推測すれば東西方向に長軸をもったやや楕円形に近い長方形。
〈規　　模〉 長軸（残存部分）約0.9m×短軸1.1m×深さ0.32m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されておりほぼ平坦である。残存壁面は垂直に近い角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられるが、南壁下にローム粒を少量含んだ黒褐色土の堆積がある他は、ブロック状の暗褐色土が混入した黒褐色土主体の単一層に近い。

〈出土遺物〉 なし。

SK－242（第323図、図版172）

〈検出位置〉 ２区西壁寄りの KQ－75グリッド。（僧寺中軸線から北へ649.3m、西へ223.5m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北側は底面まで、南西部分も底面近くまで撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 残存部分は南北方向に長軸をもった長方形。

〈主　　軸〉 北16度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.80m×短軸1.55m×深さ0.4m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は底面より急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられ、ともに黒褐色土主体でほぼ平坦な堆積状態である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は長軸部分が底面まで壊されているため正確な規模は分からないが、南東18m 程の所に位置する SK－263と残存部分の形状・規模等が類似しており、これと関連性のある遺構と思われる。

④ 特 殊 遺 構

SX－13（第323図、図版173）

〈検出位置〉 ４区東壁際の MT－35・36グリッド（僧寺中軸線から北へ778.8m、西へ104.5m）

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北側は撹乱により底面まで壊されている。また中央部を南北に SD－33が走っておりこれに底面近くまで覆土を削り取られている。

〈形　　状〉 やや歪んだ台形

〈主　　軸〉 北35度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.0m×短軸1.4～1.8m×深さ0.9m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層中段まで掘削して構築されており平坦であるが、南西壁下には周溝状の窪みが、また北壁下には幅40cm 深さ26cm 程の土坑状の掘り込みが確認された。壁の南面および西面は底面から40cm 位までは垂直に近いが、それより上は急角度な立ち上がり方を呈する。また東面は垂直的なのは底面から15cm 程で、それより上は外側に向かって緩やかな角度で立ち上がる。

〈覆　　土〉 SD－33に壊されている部分が大きいため正確な堆積状態は把握できなかったが、残存覆土は黒褐色土が主体で８層程に分けられ自然埋没の様相を呈している。

〈出土遺物〉 底面近くから10世紀中葉の須恵器の坏と須恵器（酸化焔焼成）高台碗が、また性格不明の環状鉄製品および須恵器の甕の破片等が出土した。（第325図、図版175）

〈特徴・性格〉 本土坑状遺構は SF－１切り通し状遺構（４時期目）の北肩部分と重複する状態で検出されたが、丁度その部分を共に SD－33溝に大きく壊されているため両遺構の新旧関係等は確認できなかった。しかし、位置関係及び残存覆土土質の類似性から判断すれば同一時期に構築された何らかの関連性を

有する遺構であった可能性が高いと思われる。

3）遺　物

出土遺物は、住居跡が検出されなかったこともあり全体的にすくない。遺物の多くは遺構外出土であり、完形品は少なく、破片、小片が大半を占めている。遺構に伴うものも完形乃至それに近いものは少なかった。それゆえ重要なもののみ掲載することとし、小片等は割愛した。尚、概要（Ⅳ－1.）にも記したように、掲載遺物の詳細は種別ごとに遺物観察表にまとめ、巻末添付の CD-ROM に収録している。

以下に遺構出土遺物、遺構外出土遺物の順に概要を記す。

① 遺 構 出 土 遺 物（第325～327図**1～26**、図版175～177）

挿図中**1～6**は SF－１の出土遺物で、**1**は須恵器の坏で南多摩窯祉群Ｇ５古（10世紀初頭）に比定される。残存は約１/３程度だが底部に切り離しの回転糸切り痕が残る。**2**は灰釉陶器の碗で静岡系灰釉折戸53号窯式（10世紀初頭）に比定される。残存は約１/３程度だが、胴部下半にやや張りを持ち、底部には糸切り痕が無調整で残存する。灰釉は、漬け掛けで施釉されている。**3**の古銭は「皇宋通宝」で北宋時代の渡来銭。**4**は土錘で調査区内では唯一の出土である。**5**は男瓦で狭端部のみ残存していた。**6**は女瓦の破片。

7～10は SX－13の出土遺物で、**7**は須恵器の坏、**8**は須恵器（酸化焔焼成）の高台碗で、いずれも南多摩窯祉群Ｇ５（10世紀中葉）に比定される。残存は共にほぼ完形に近い。**9**は須恵器甕の破片。**10**は性格不明の環状鉄製品。

11～14は SD－５からの出土遺物で、**11**は須恵器の甕の破片。**12**は男瓦の広端部の破片。**13、14**は女瓦の破片である。

15～21は SD－33の出土遺物で、**15**は須恵器の坏の底部～体部で残存は１/５程度だが底部には切り離しの回転糸きり痕を残す。**16**は土師質土器で底部のみ残存していたため器種は不明だが、回転糸きり痕が残る。**17、18**は共に須恵器の甕の胴部で外面に叩き締め痕を残す。**19**と**21**は女瓦の破片。**20**は宇瓦で唐草模様が施されている。

22は SK－214出土の刀子。

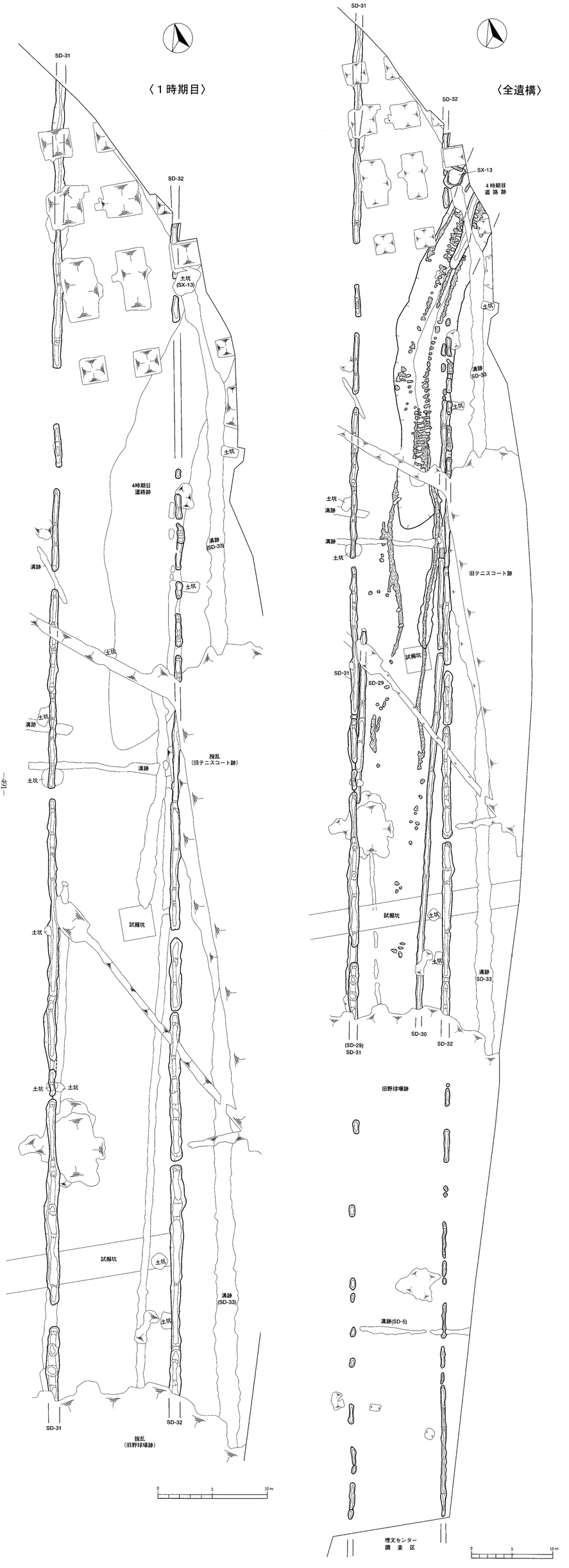
23は SK－76出土の女瓦の破片。

24、25は P－14の出土遺物で、**24**は土師器の甕の口縁部～胴部で残存は１/５弱程度。最大径を胴部に有し、口縁部は「コ」の字状を呈し横ナデで、外面胴部は横方向のヘラ削り調整。**25**は須恵器の甕の胴部で外面に横方向の叩き締め痕を残す。

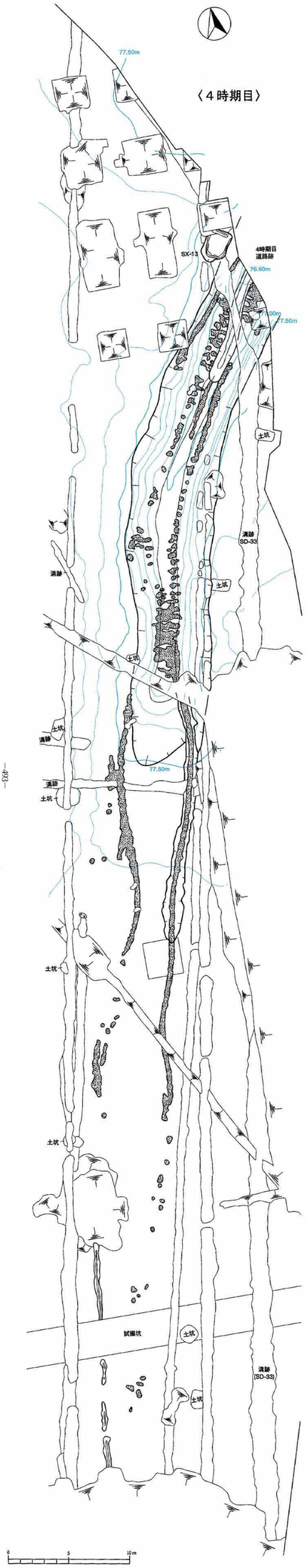
26は P－15出土の女瓦。

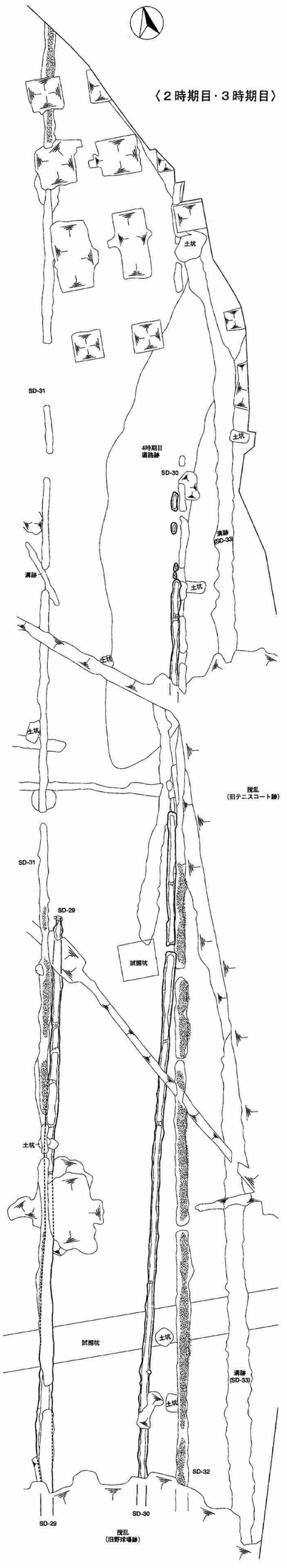
② 遺 構 外 出 土 遺 物（第327～329図**27～50**、図版177・178）

27～30は須恵器の坏でいずれも底部に切り離しの回転糸きり痕を残す。**31**は須恵器の甕の胴部。**32～34**は土師器の燈明皿。**35**は土師器で底部のみであるため器種は不明。**36、37**は鐙瓦で、**36**は１/２強残存している。**38～40**は男瓦の破片。**41～48**までは女瓦の破片。**49、50**は古銭で、**49**は「皇宋通宝」、**50**は文字不鮮明で種別不明だが下の文字は「元」と読める。

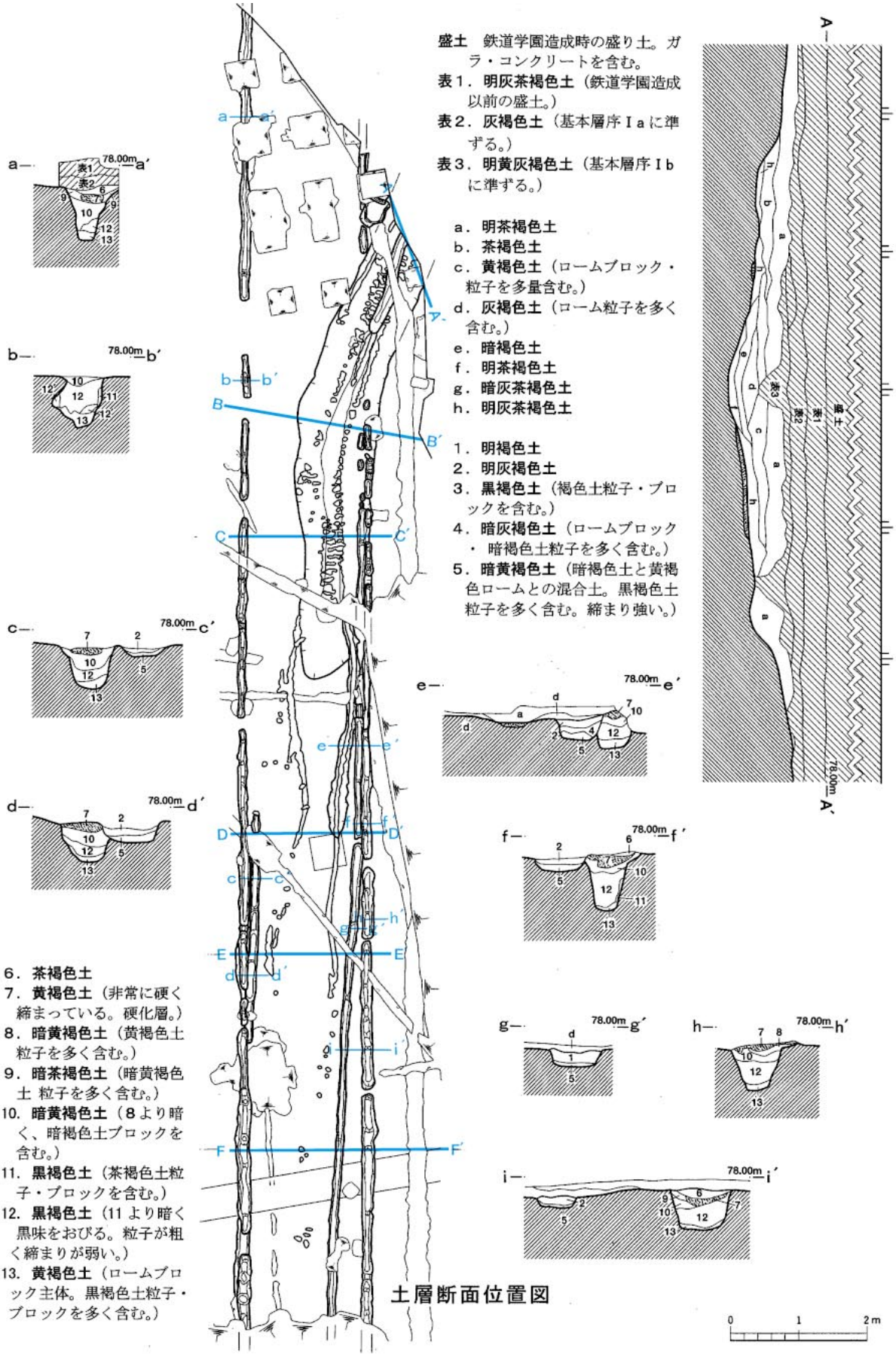


第306図　古代 道路状遺構実測図（1）－（SF－1）

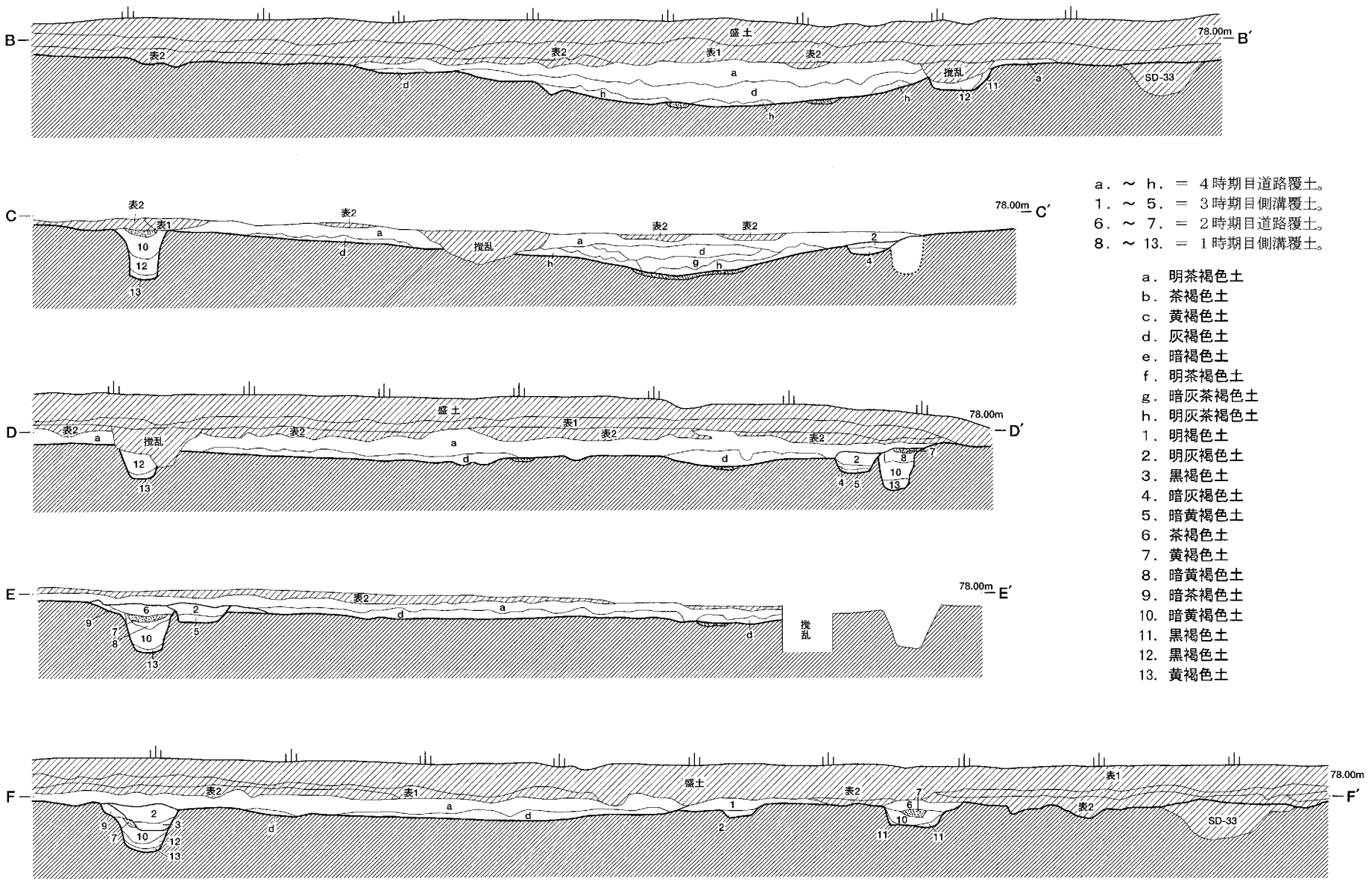




第307図　古代 道路状遺構実測図（２）－（SF－１）



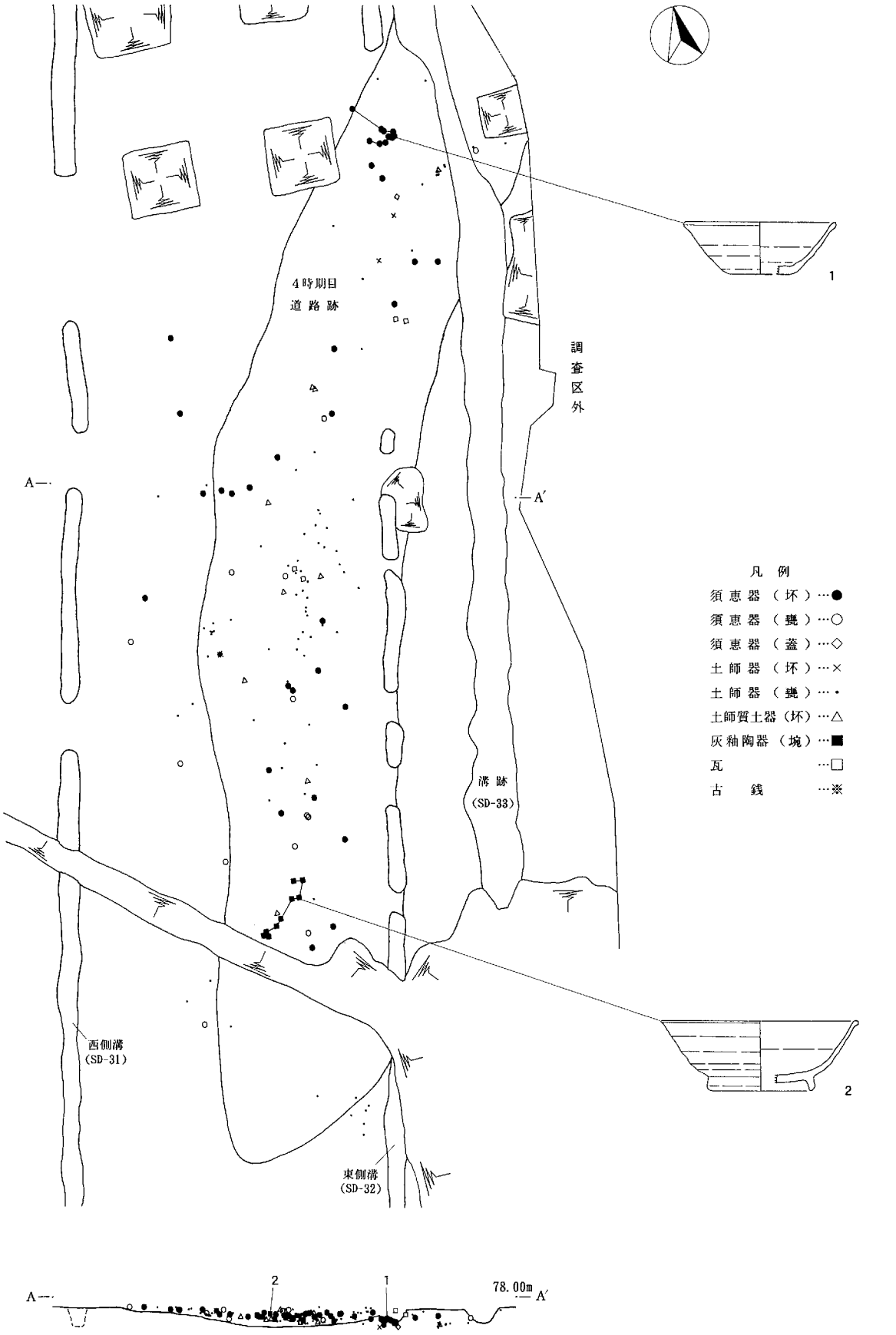
第308図　古代 道路状遺構実測図（3）－（SF－1）



a．～ h．＝ 4時期目道路覆土。
1．～ 5．＝ 3時期目側溝覆土。
6．～ 7．＝ 2時期目道路覆土。
8．～ 13．＝ 1時期目側溝覆土。

a．明茶褐色土
b．茶褐色土
c．黄褐色土
d．灰褐色土
e．暗褐色土
f．明茶褐色土
g．暗灰茶褐色土
h．明灰茶褐色土
1．明褐色土
2．明灰褐色土
3．黒褐色土
4．暗灰褐色土
5．暗黄褐色土
6．茶褐色土
7．黄褐色土
8．暗黄褐色土
9．暗茶褐色土
10．暗黄褐色土
11．黒褐色土
12．黒褐色土
13．黄褐色土

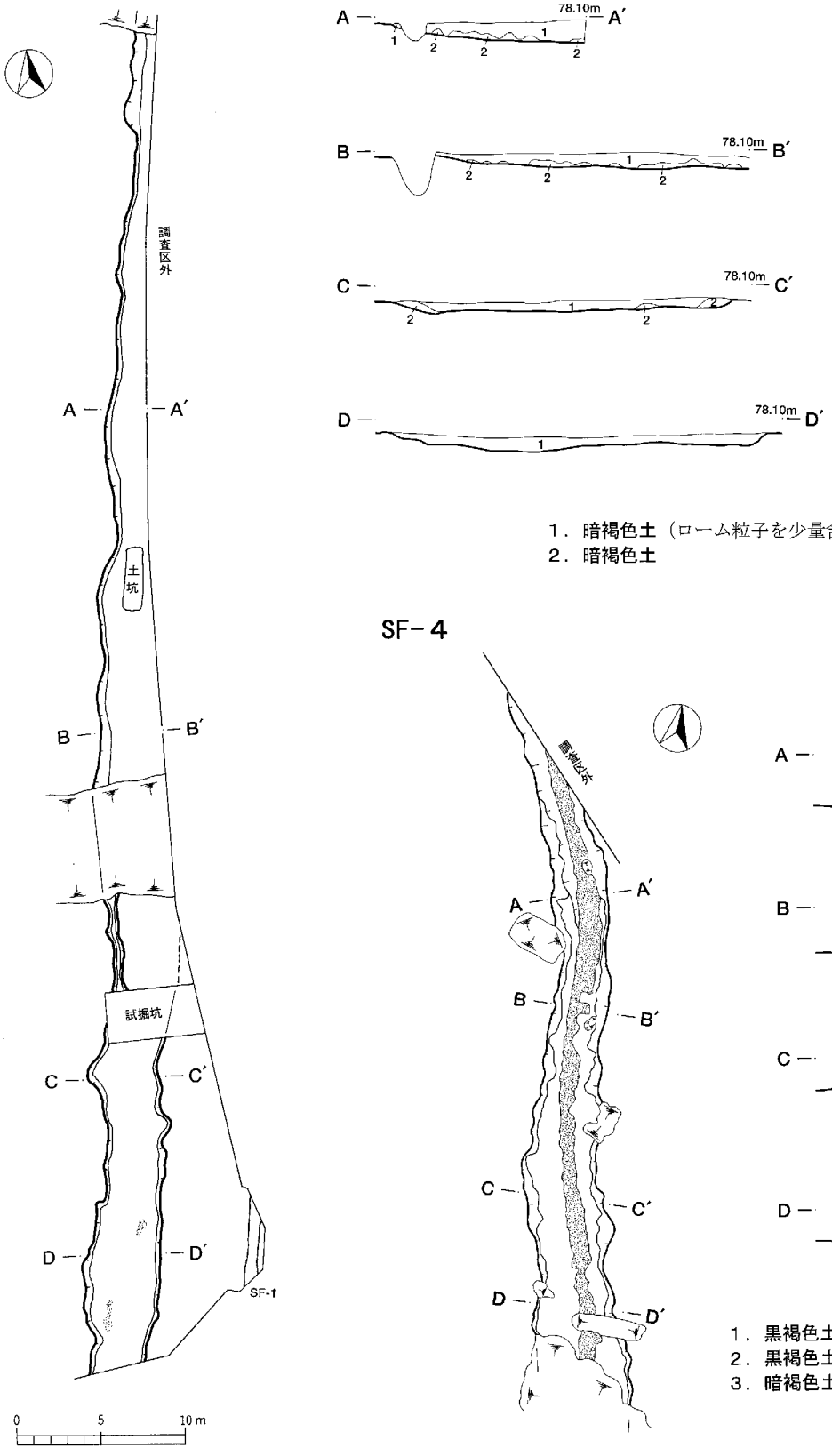
第309図　古代 道路状遺構実測図（4）－（SF－1）



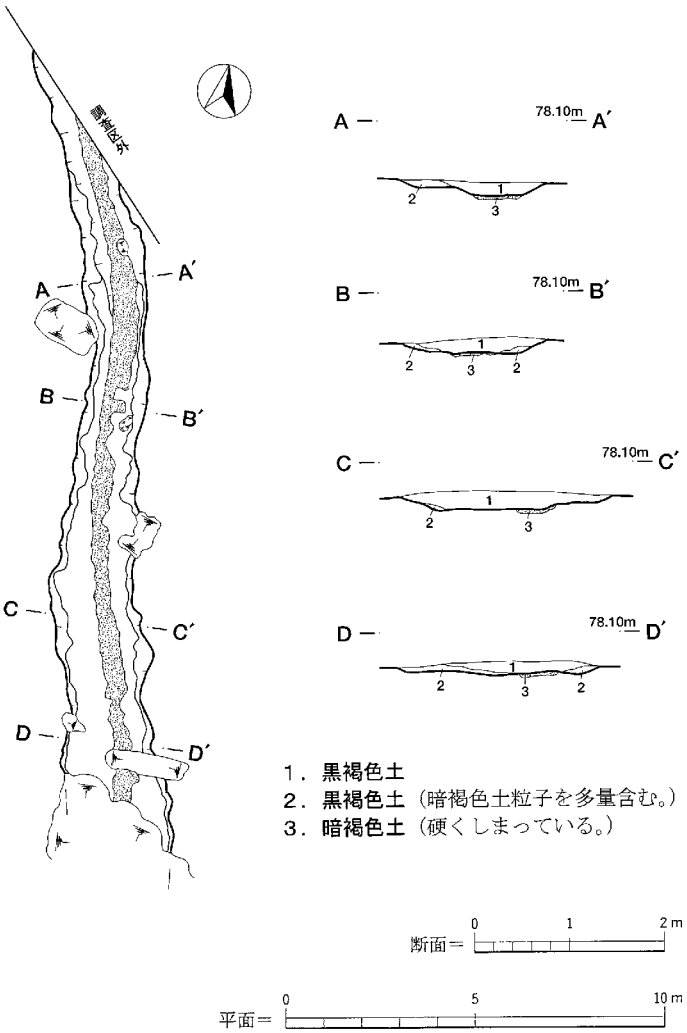
※垂直分布の遺物はすべて投影した。

第310図　古代 道路状遺構遺物分布図－（SF－1）

SF－3

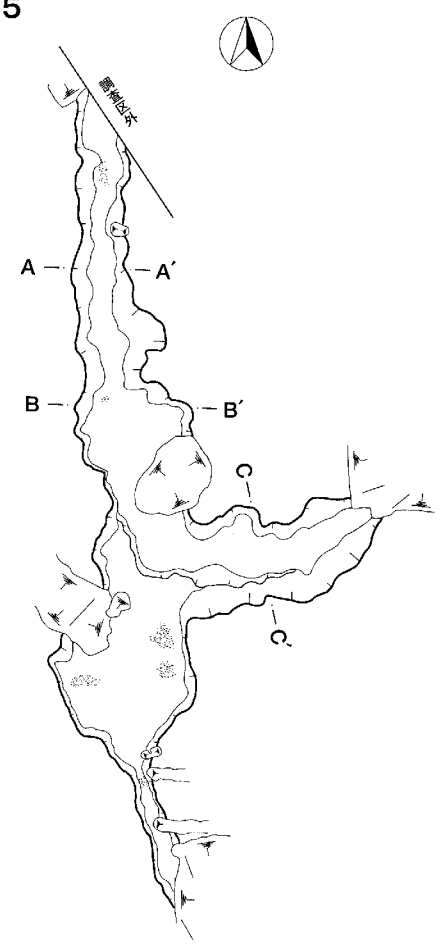


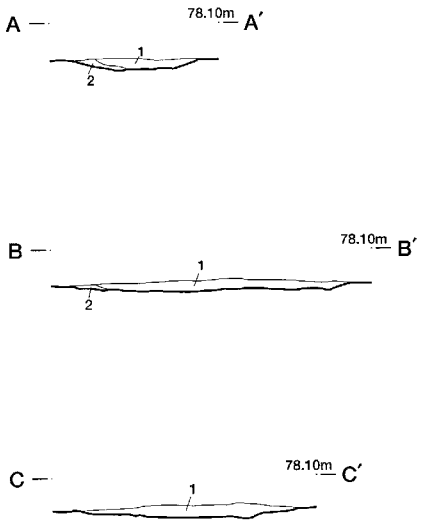
SF－4



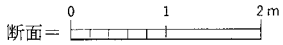
第311図　古代 道路状遺構実測図（5）－（SF－3・4）

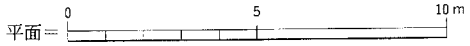
SF－5



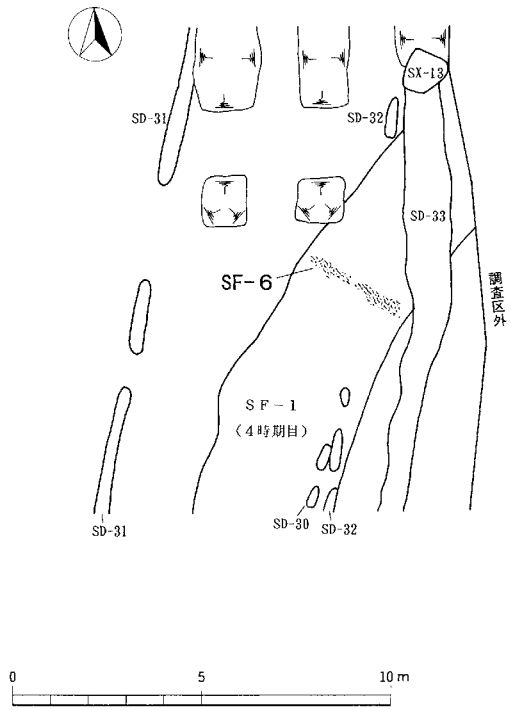


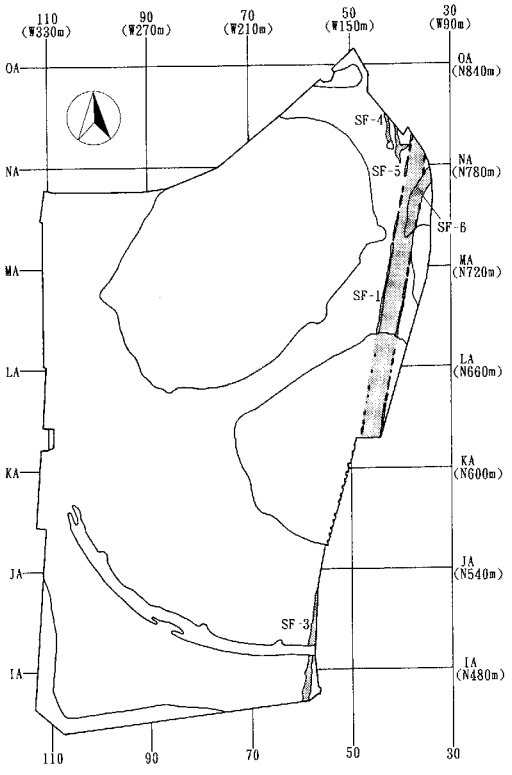
1．**黒褐色土**（暗褐色土粒子を少量含む。）
2．**暗褐色土**





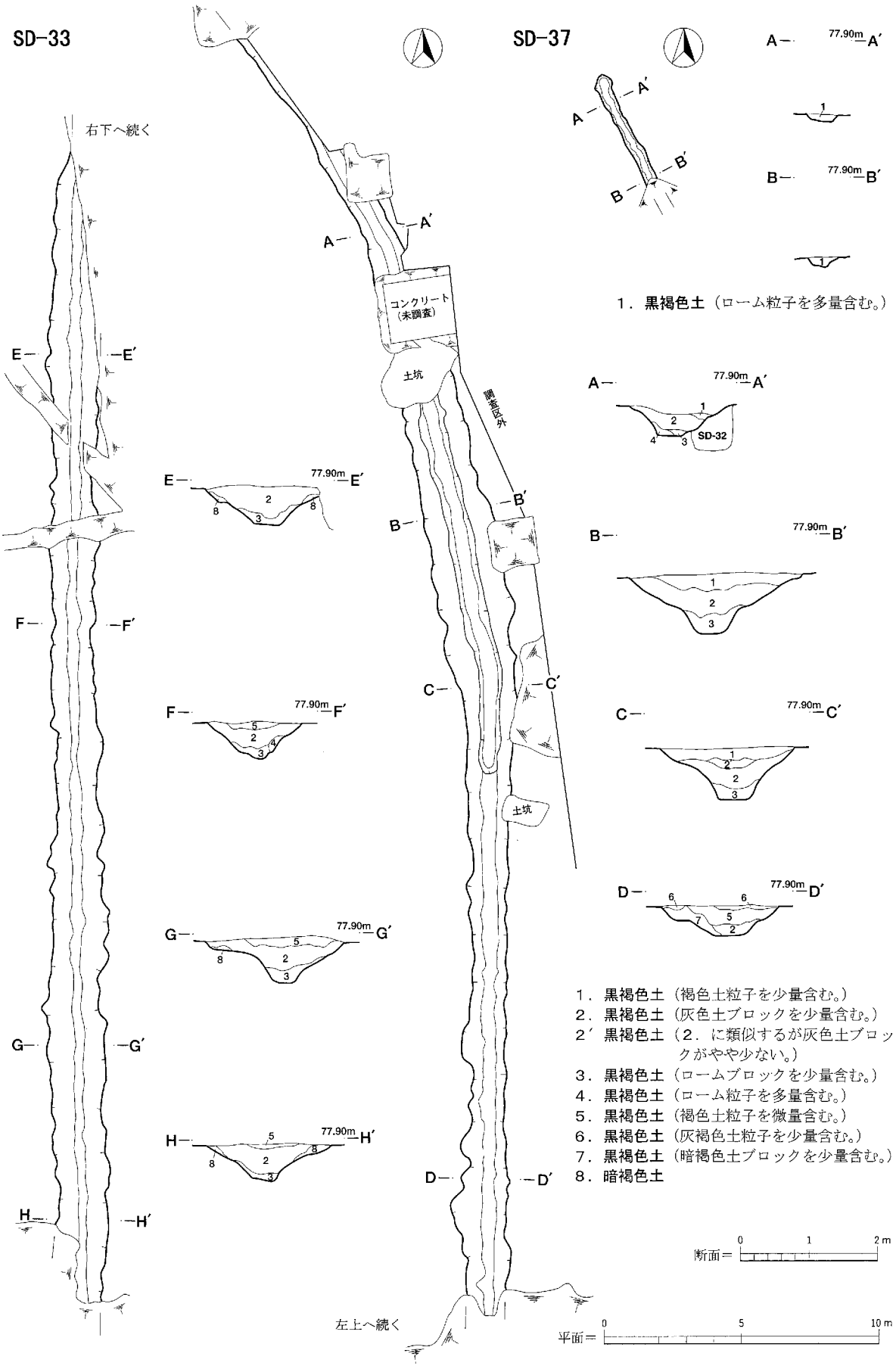
SF－6





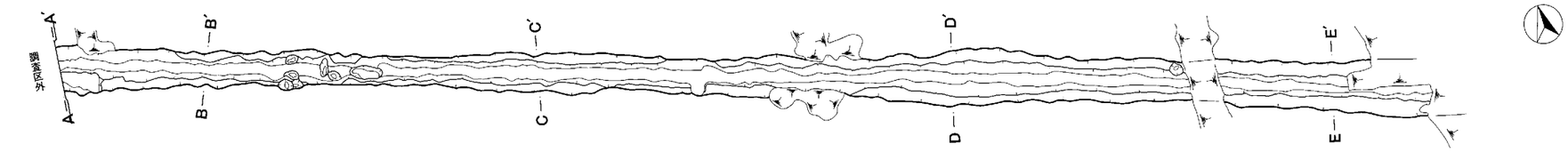
道 路 状 遺 構 配 置 図

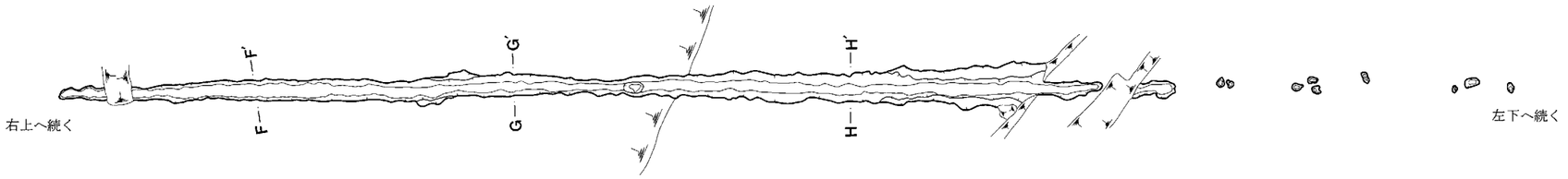
第312図　古代 道路状遺構実測図（6）－（SF－5・6）

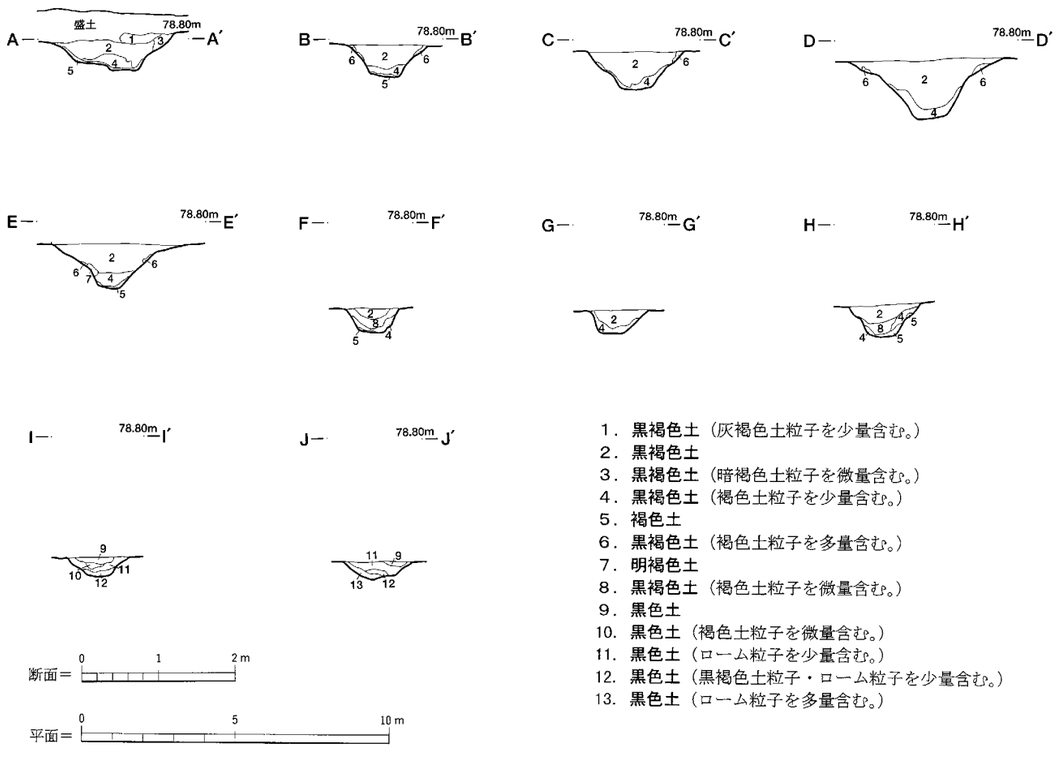


第313図　古代 溝跡実測図（1）

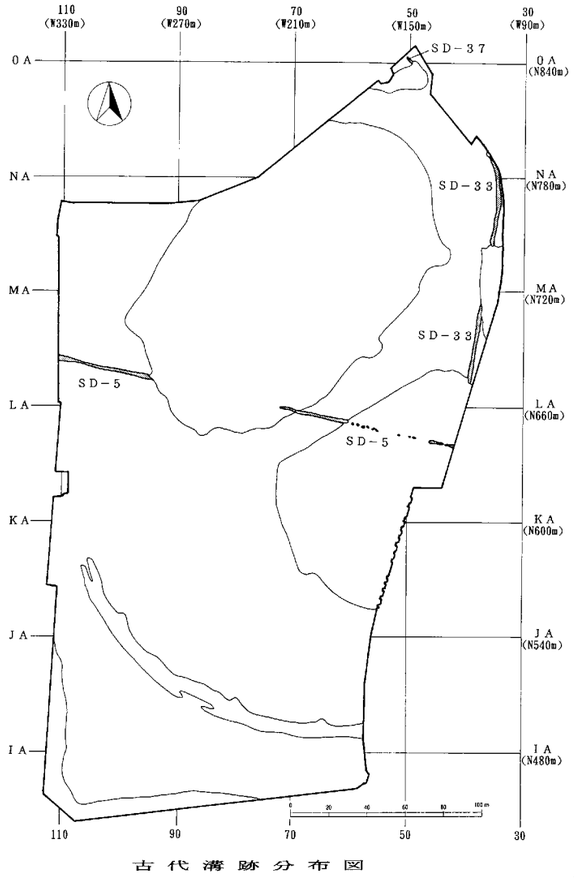
SD－5



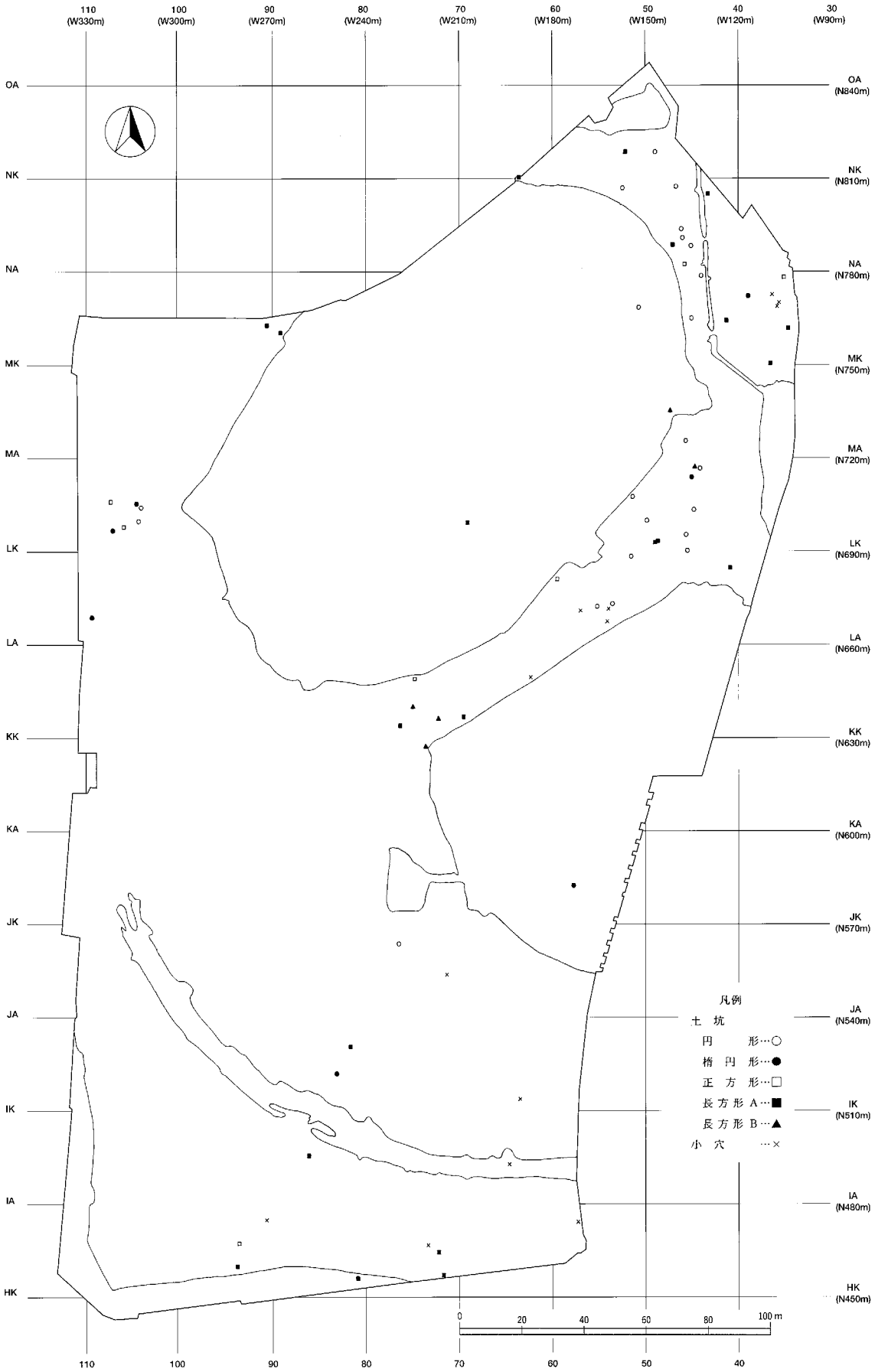




1．黒褐色土（灰褐色土粒子を少量含む。）
2．黒褐色土
3．黒褐色土（暗褐色土粒子を微量含む。）
4．黒褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
5．褐色土
6．黒褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
7．明褐色土
8．黒褐色土（褐色土粒子を微量含む。）
9．黒色土
10．黒色土（褐色土粒子を微量含む。）
11．黒色土（ローム粒子を少量含む。）
12．黒色土（黒褐色土粒子・ローム粒子を少量含む。）
13．黒色土（ローム粒子を多量含む。）

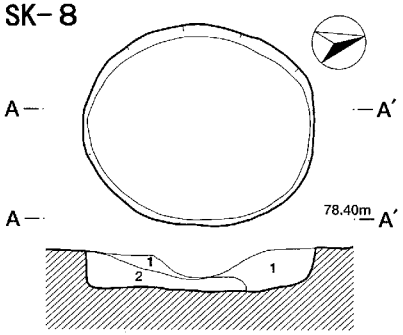


第314図　古代 溝跡実測図（2）



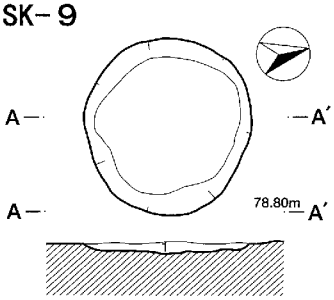
第315図　古代 遺構配置図－土坑・特殊遺構・小穴

SK-8



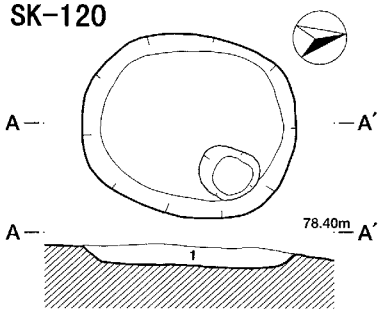
1．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．黒褐色土

SK-9



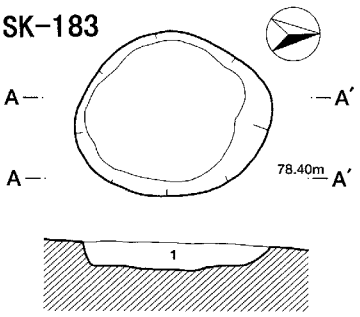
1．黒褐色土

SK-120



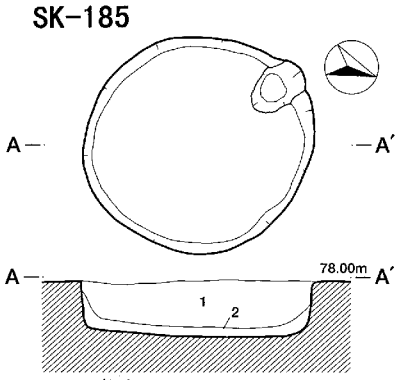
1．黒褐色土

SK-183



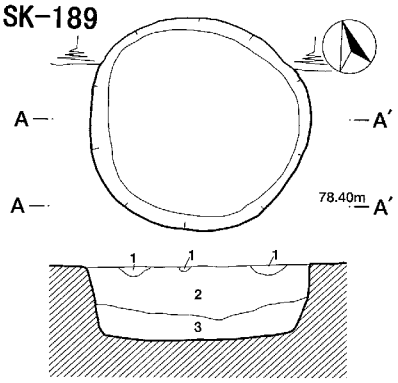
1．黒褐色土

SK-185



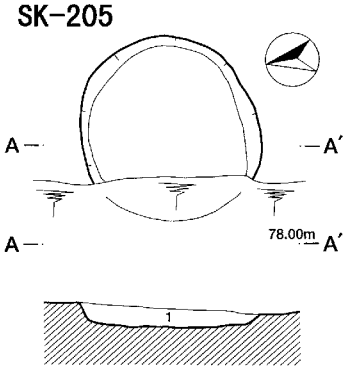
1．黒褐色土
2．暗褐色土

SK-189



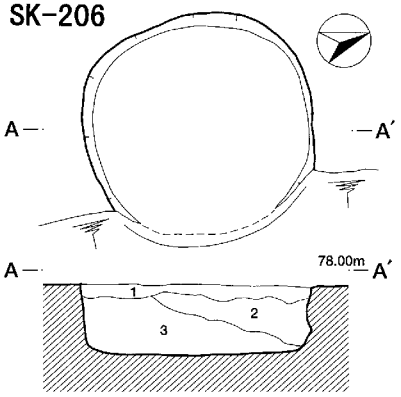
1．黒褐色土（灰褐色土粒子を少量含む。）
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を多量含む。）
3．黒褐色土

SK-205



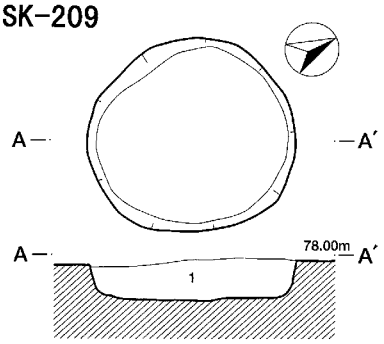
1．黒褐色土

SK-206



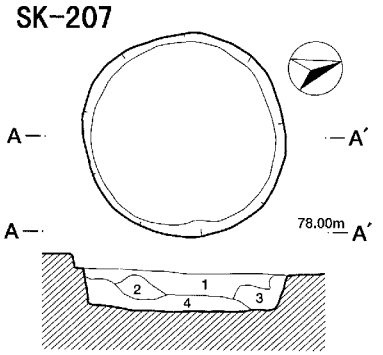
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ローム粒子を微量含む。）
3．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）

SK-209



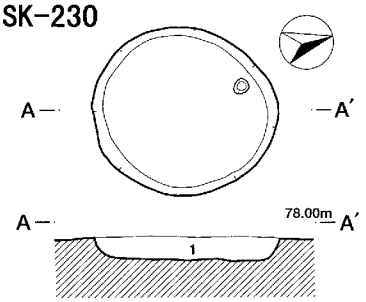
1．黒褐色土

SK-207



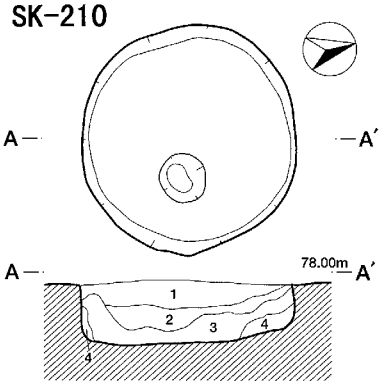
1．黒褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．黒褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
4．黒褐色土（ローム粒子を微量含む。）

SK-230

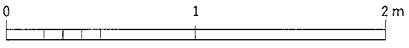


1．黒褐色土

SK-210

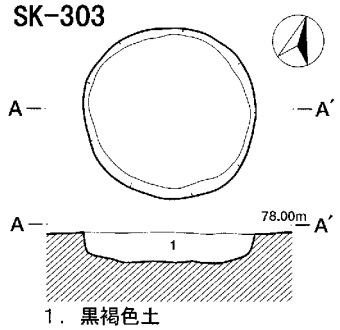


1．黒褐色土（暗褐色土粒子を多量含む。）
2．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．黒褐色土
4．黒褐色土（しまり弱い。）



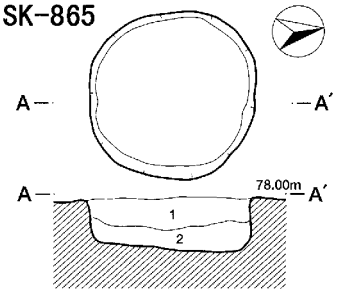
第316図　古代 土坑実測図（1）

SK-303



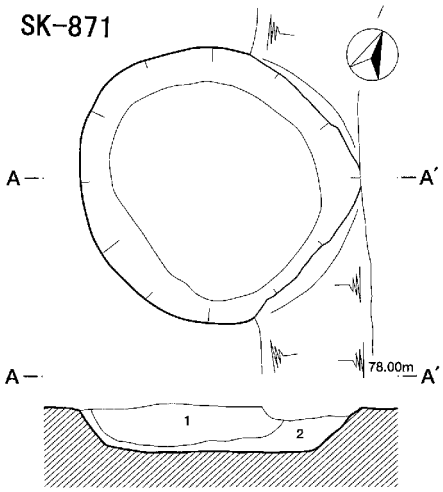
1．黒褐色土

SK-865



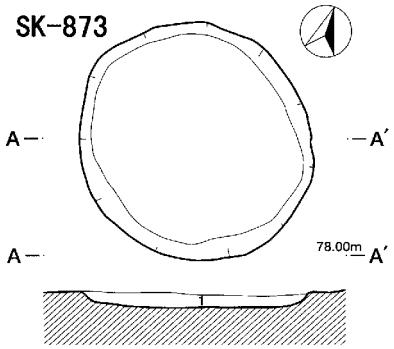
1．黒褐色土（灰褐色土粒子を少量含む。）
2．黒褐色土

SK-871



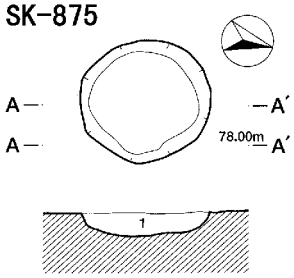
1．黒褐色土（暗褐色土粒子を多量含む。）
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

SK-873



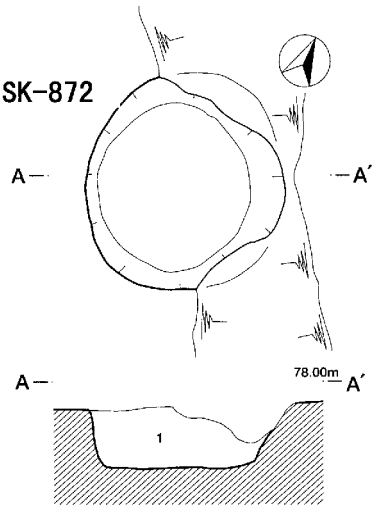
1．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

SK-875



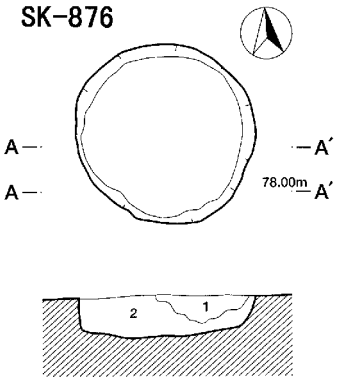
1．黒褐色土

SK-872



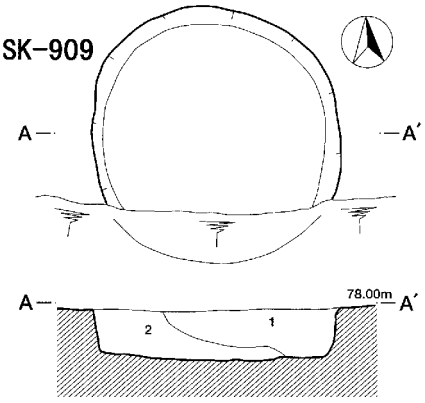
1．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

SK-876



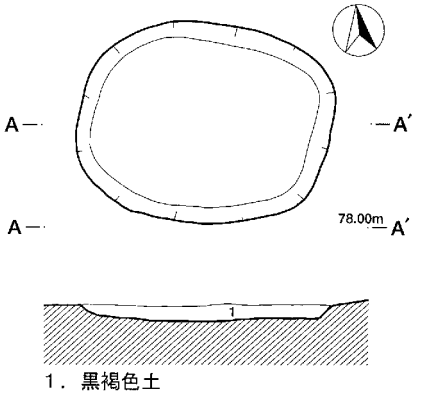
1．黒褐色土
2．黒褐色土（褐色土粒子を少量含む。）

SK-909



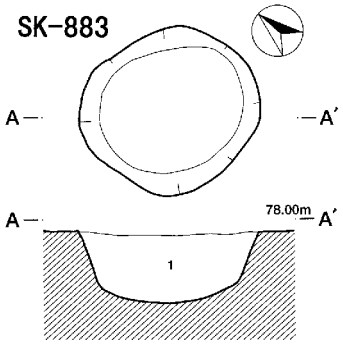
1．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．黒褐色土（ロームブロックを多量含む。）

SK-6



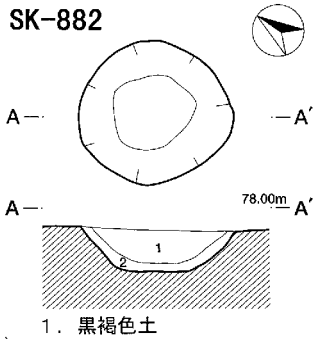
1．黒褐色土

SK-883

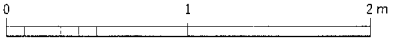


1．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

SK-882

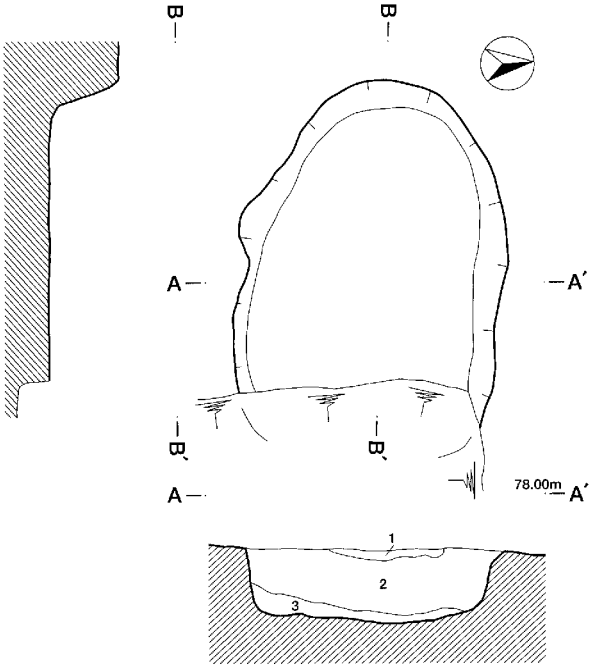


1．黒褐色土
2．黒褐色土（褐色土粒子を多量含む。）



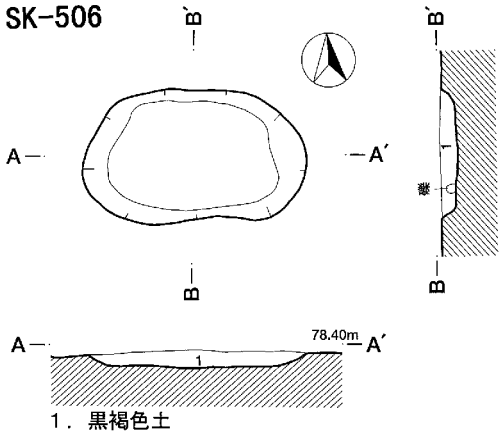
第317図　古代 土坑実測図（2）

SK-898



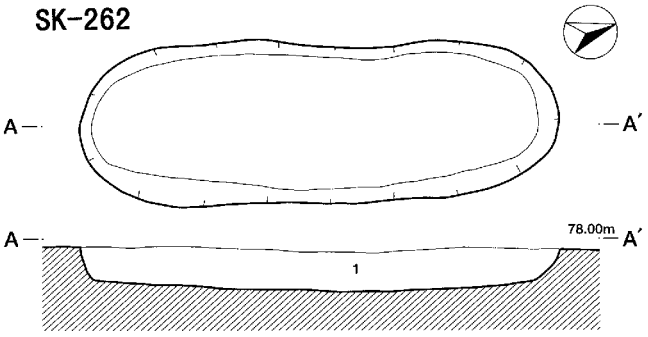
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
3．黒褐色土（暗褐色土粒子を微量含む。）

SK-506



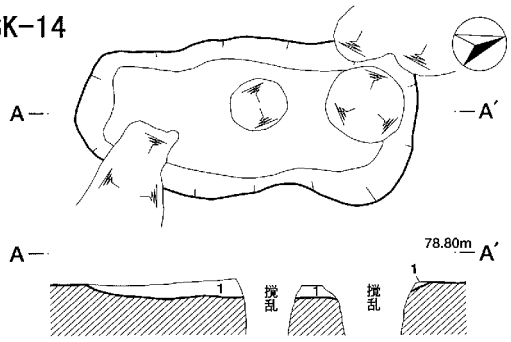
1．黒褐色土

SK-262



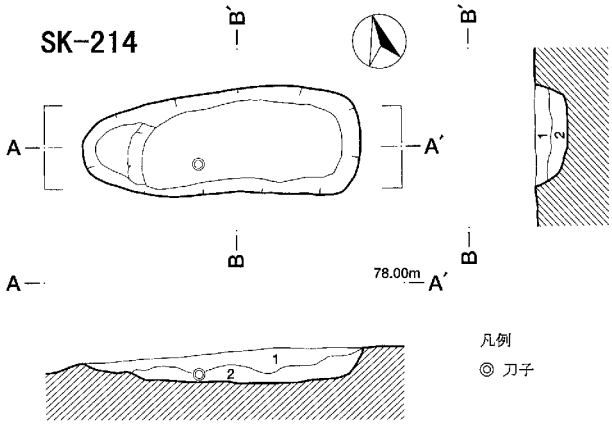
1．黒褐色土

SK-14



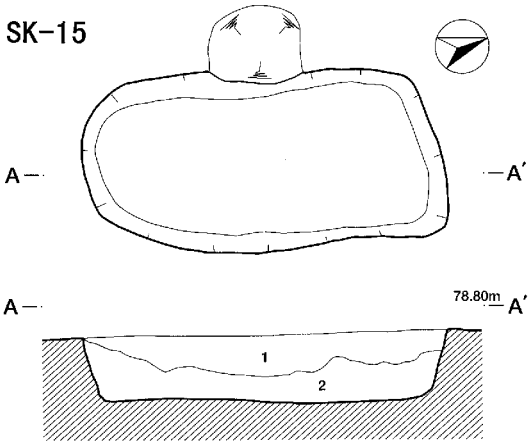
1．黒褐色土

SK-214

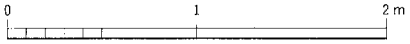


1．黒褐色土
2．褐色土

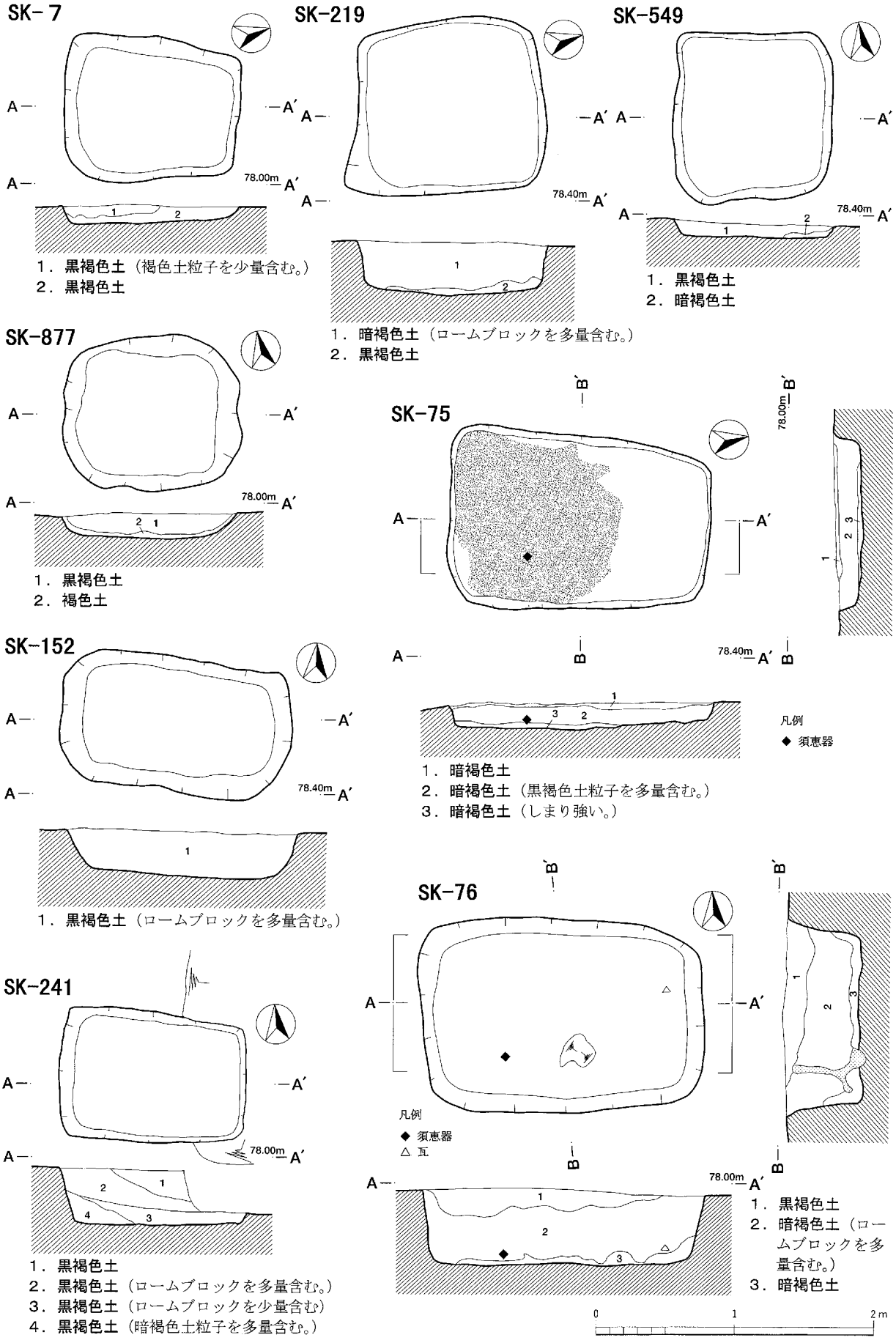
SK-15



1．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．黒褐色土

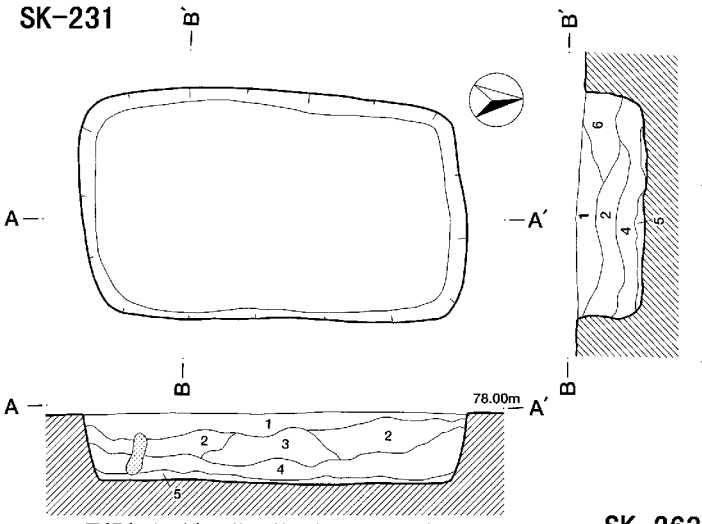


第318図　古代 土坑実測図（3）



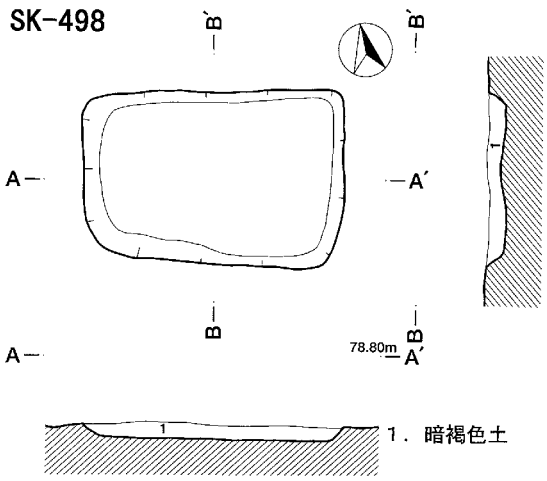
第319図　古代 土坑実測図（4）

SK-231



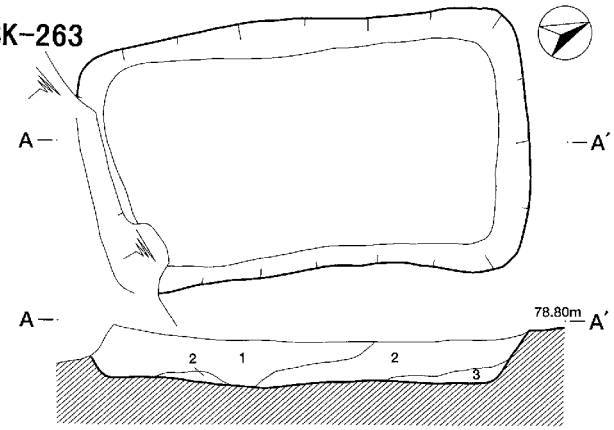
1．黒褐色土（炭化物・焼土粒子を微量含む。）
2．黒褐色土（褐色土ブロックを少量含む。）
3．黒褐色土（ローム粒子を多量含む。）
4．黒褐色土
5．黒褐色土（しまり強い。）
6．黒褐色土（黒味が強い。）

SK-498



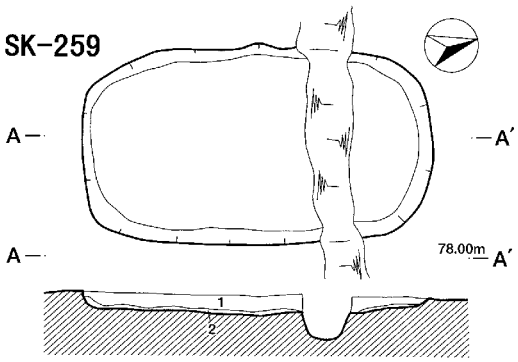
1．暗褐色土

SK-263



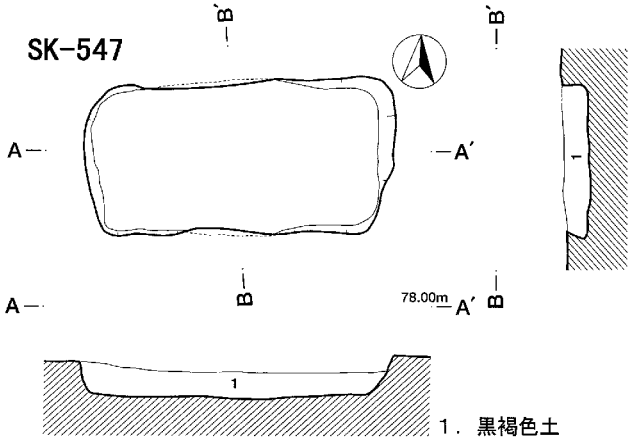
1．黒褐色土
2．黒褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む。）
3．黒褐色土（ローム粒子を微量含む。）

SK-259



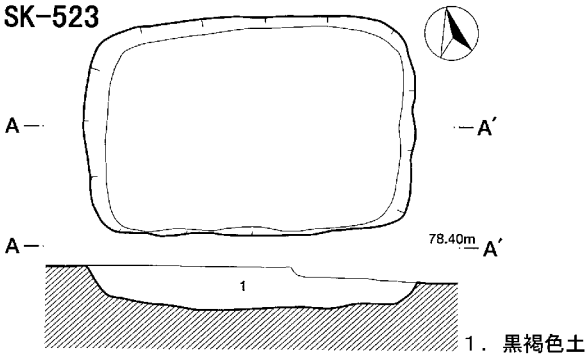
1．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
2．褐色土（黒褐色土粒子を少量含む。）

SK-547



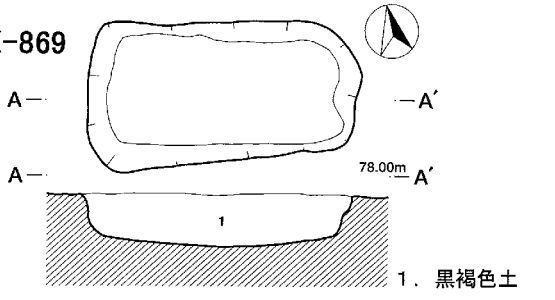
1．黒褐色土

SK-523



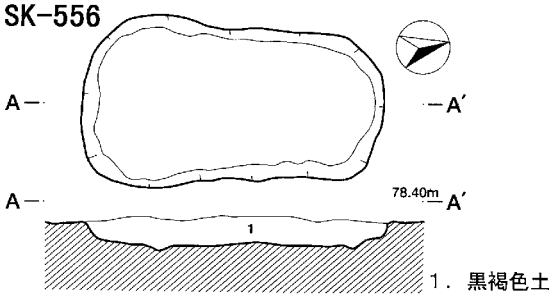
1．黒褐色土

SK-869

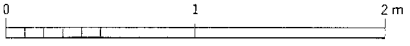


1．黒褐色土

SK-556

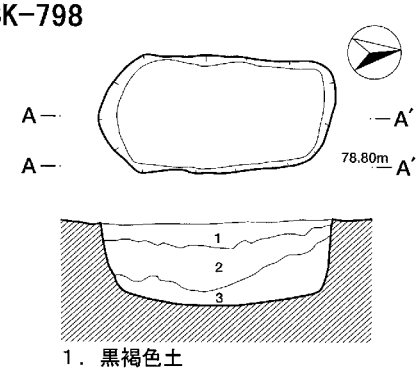


1．黒褐色土



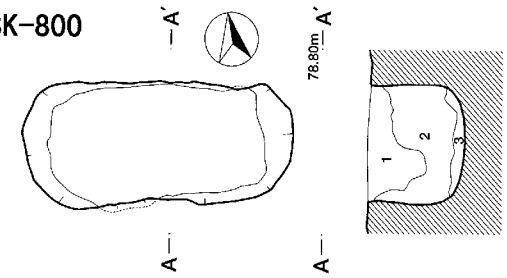
第320図　古代 土坑実測図（5）

SK-798



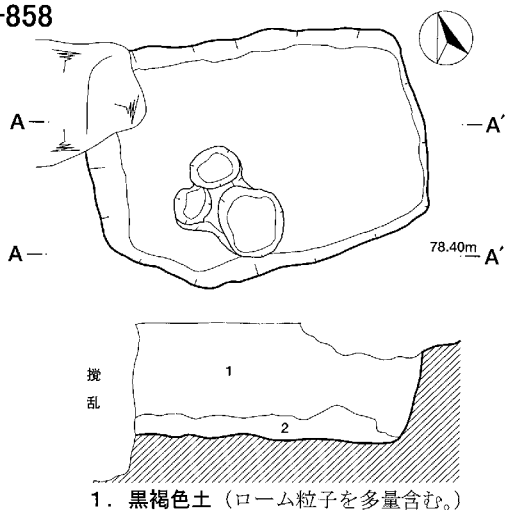
1．黒褐色土
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
3．黒褐色土（しまりやや弱い。）

SK-800



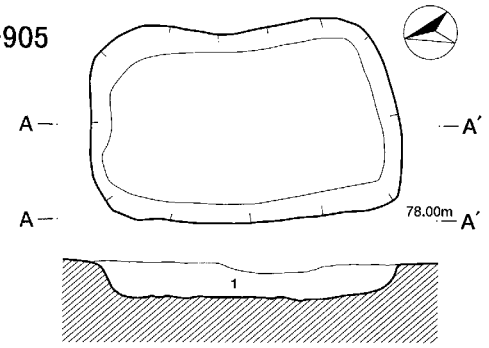
1．黒褐色土
2．黒褐色土（しまり弱い。）
3．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）

SK-858



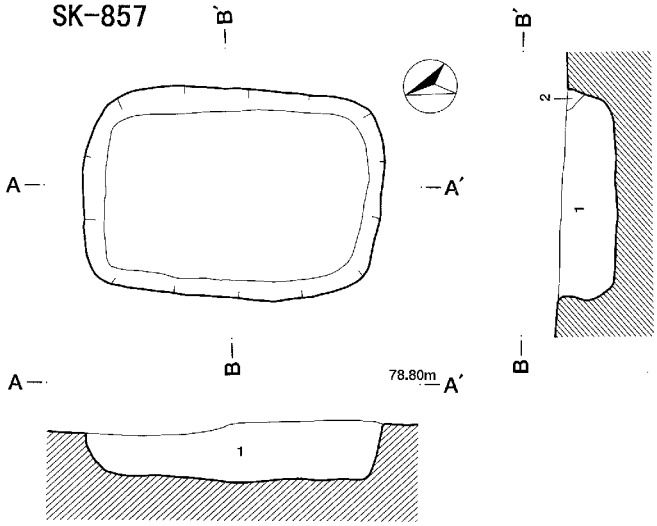
1．黒褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒褐色土

SK-905



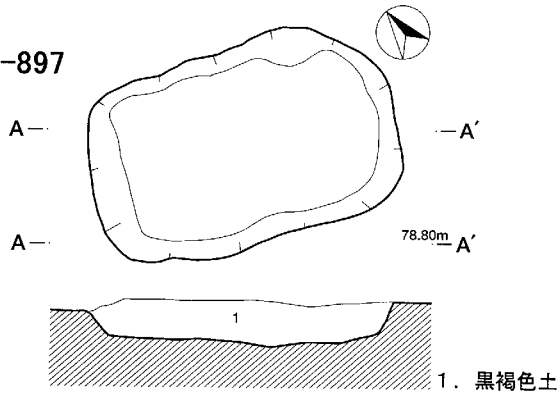
1．黒褐色土

SK-857



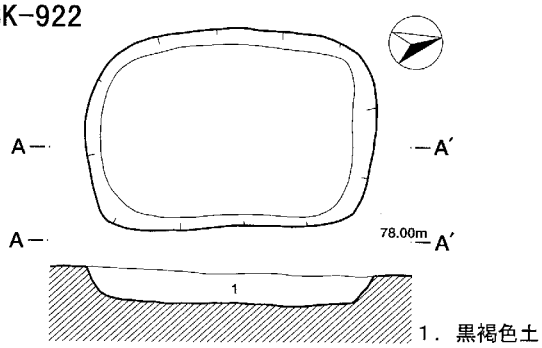
1．黒色土（暗褐色土ブロック・ロームブロックを少量含む。）
2．褐色ローム

SK-897



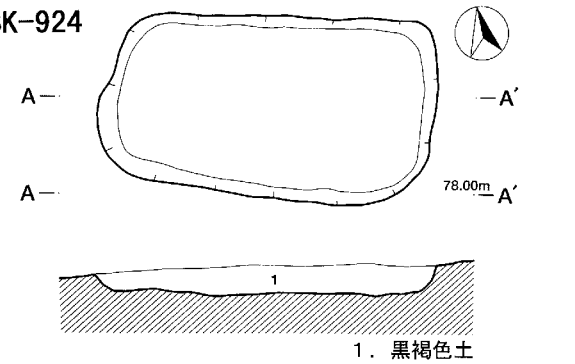
1．黒褐色土

SK-922

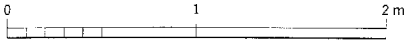


1．黒褐色土

SK-924

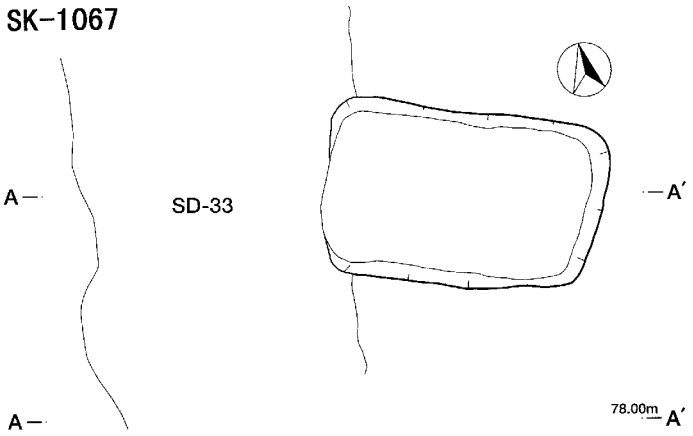


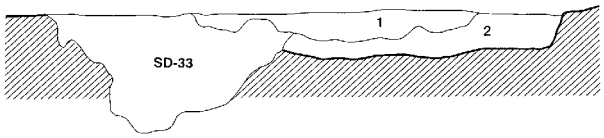
1．黒褐色土



第321図　古代 土坑実測図（6）

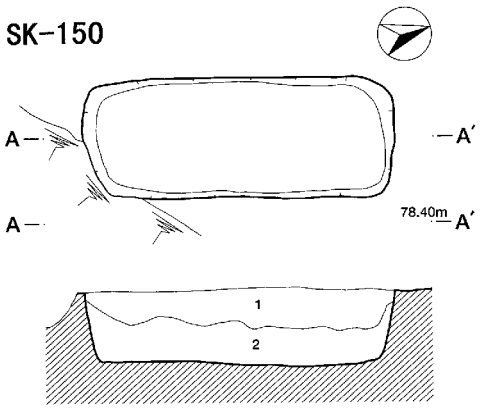
SK-1067





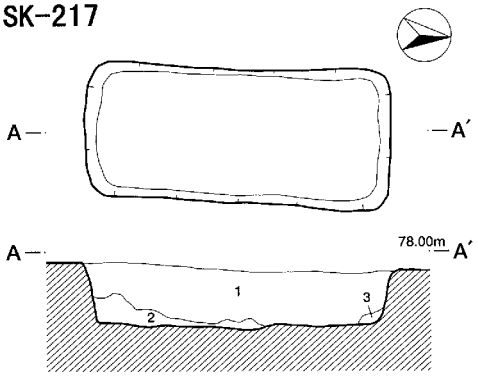
1．黒褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
2．黒褐色土

SK-150



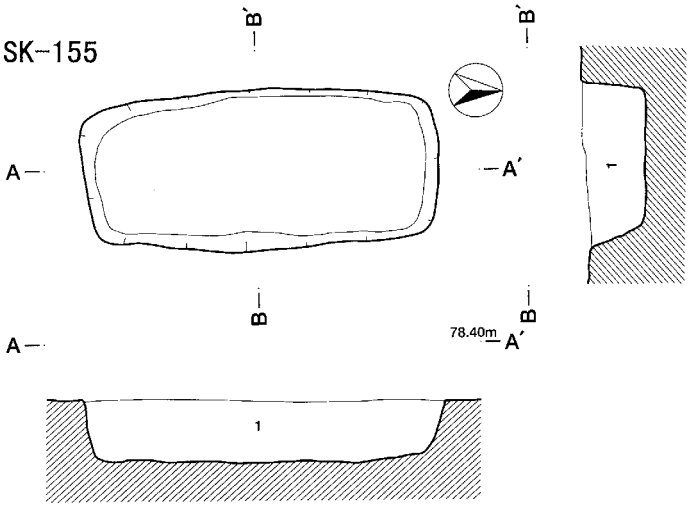
1．黒褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒褐色土

SK-217



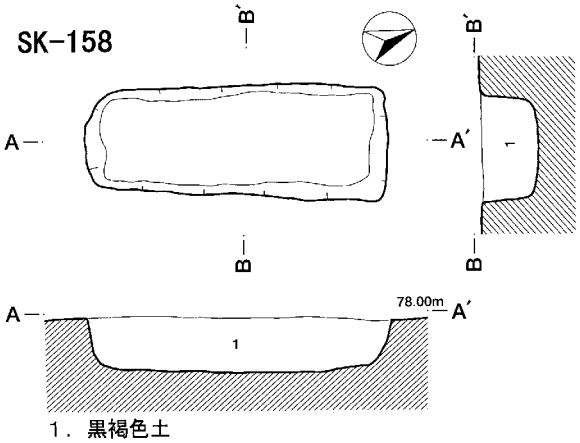
1．黒褐色土
2．暗褐色土（黒褐色土粒子を多量含む。）
3．褐色土

SK-155



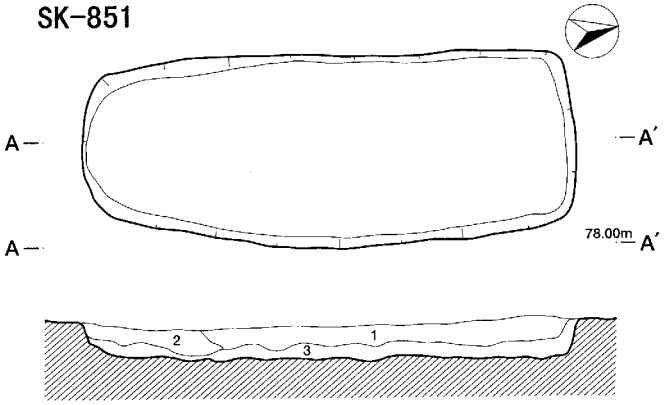
1．黒褐色土（ロームブロックを多量含む。）

SK-158

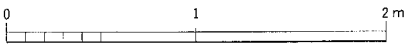


1．黒褐色土

SK-851

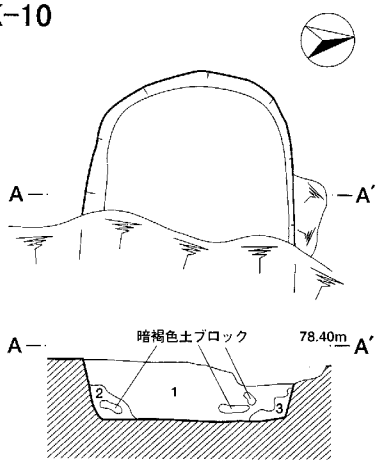


1．黒褐色土
2．黒褐色土（ロームブロックを多量含む。）
3．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）



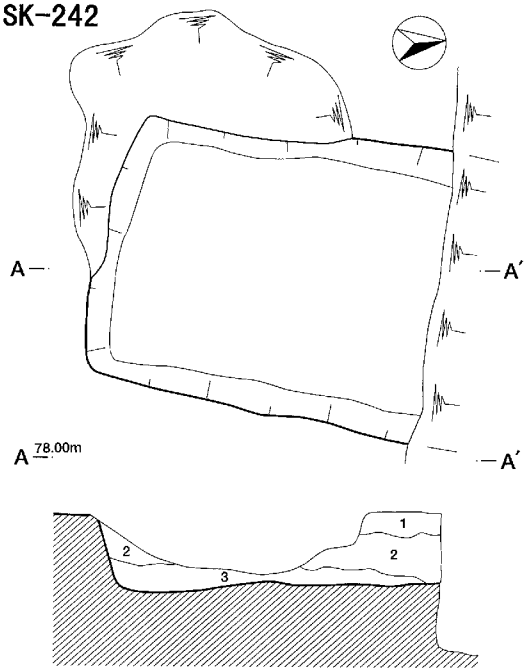
第322図　古代 土坑実測図（7）

SK-10



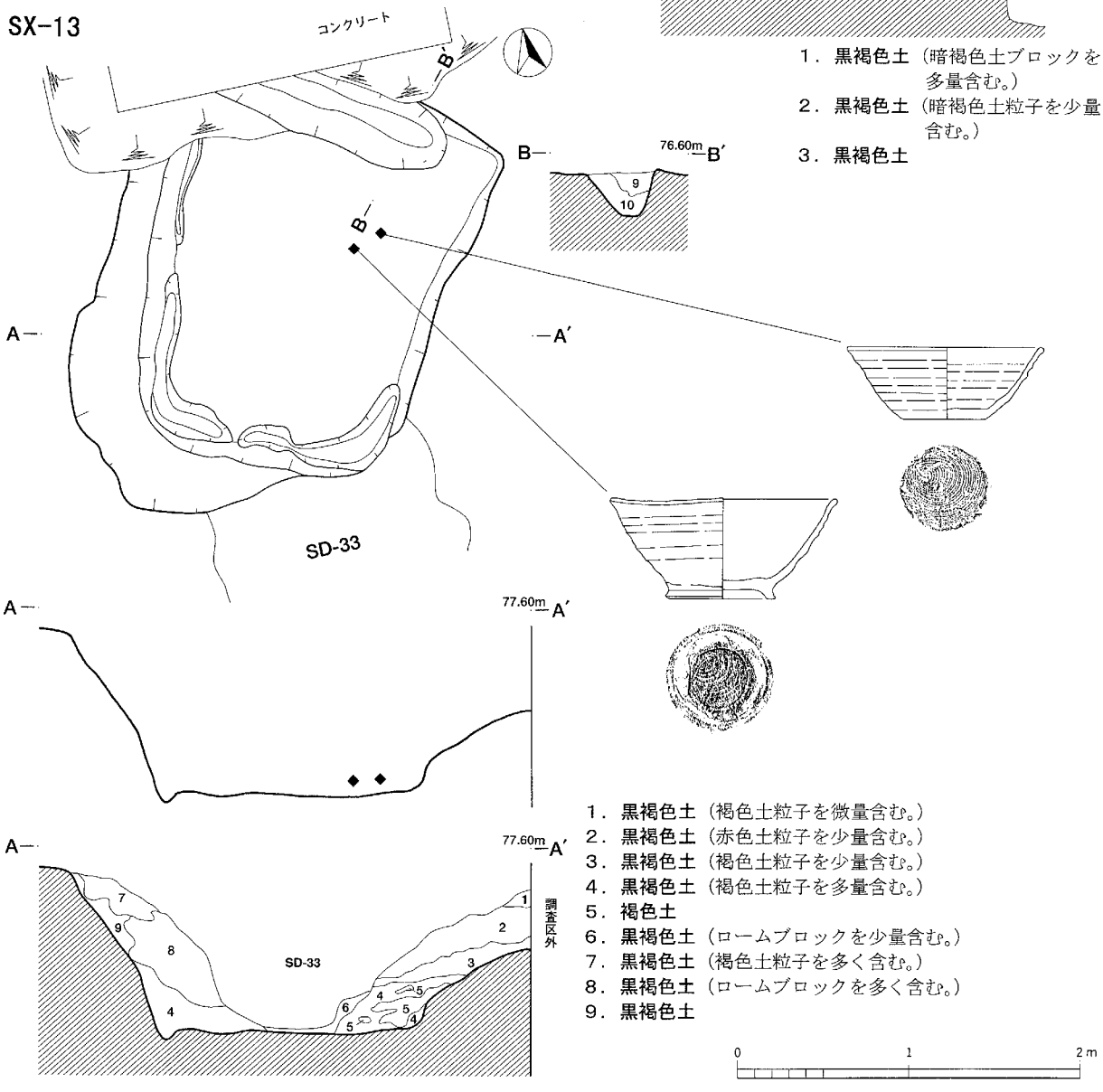
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．暗褐色土（ローム粒子を多量含む。）

SK-242



1．黒褐色土（暗褐色土ブロックを多量含む。）
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
3．黒褐色土

SX-13

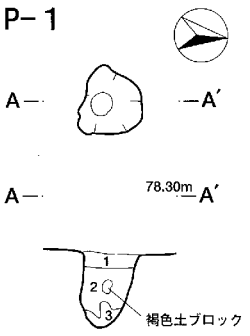


1．黒褐色土（褐色土粒子を微量含む。）
2．黒褐色土（赤色土粒子を少量含む。）
3．黒褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
4．黒褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
5．褐色土
6．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
7．黒褐色土（褐色土粒子を多く含む。）
8．黒褐色土（ロームブロックを多く含む。）
9．黒褐色土

0　1　2m

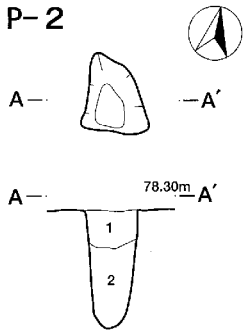
第323図　古代 土坑実測図（8）／特殊遺構実測図

P-1



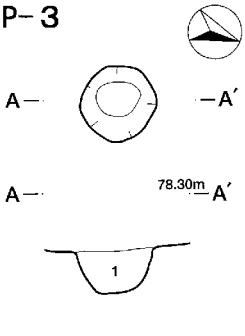
1．黒褐色土
2．黒褐色土（1．より色調黒い。）
3．褐色土

P-2



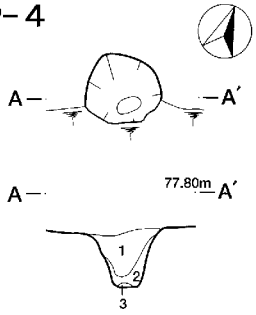
1．黒褐色土
2．暗褐色土

P-3



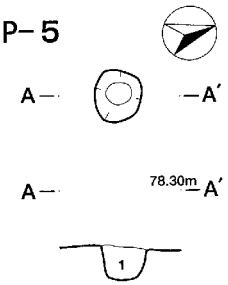
1．黒褐色土

P-4



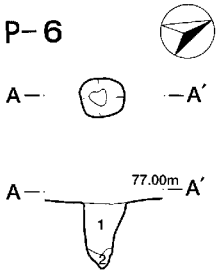
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）
3．褐色土

P-5



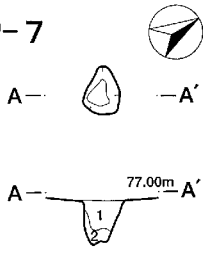
1．黒褐色土

P-6



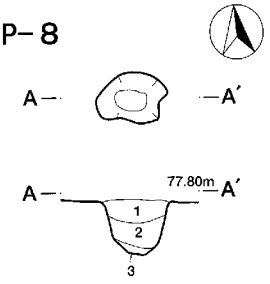
1．黒褐色土
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

P-7



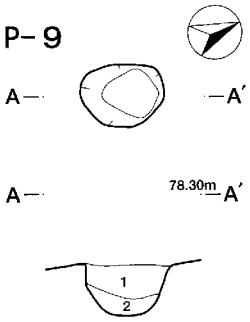
1．黒褐色土
2．黒褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）

P-8



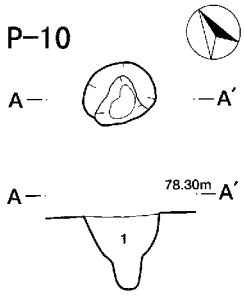
1．黒褐色土
2．黒褐色土
（褐色土粒子を多量含む。）
3．黒褐色土
（ローム粒子を多量含む。）

P-9



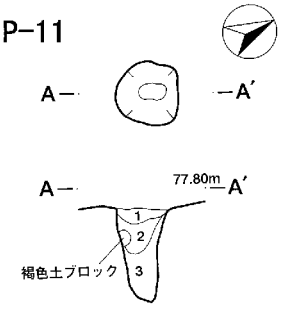
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ロームブロックを少量含む。）

P-10



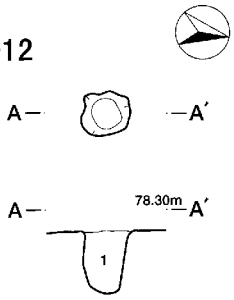
1．黒褐色土

P-11



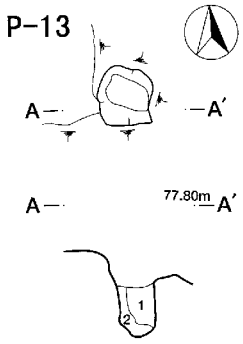
1．黒褐色土（ロームブロックを多量含む。）
2．黒褐色土
3．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）

P-12



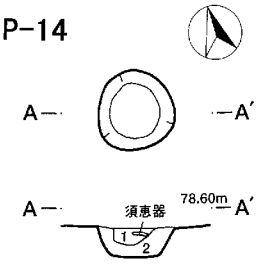
1．黒褐色土

P-13



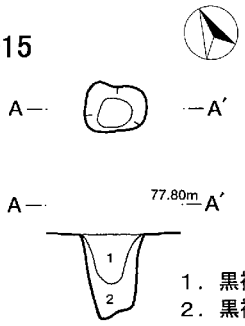
1．黒褐色土
2．黒褐色土（ローム粒子を少量含む。）

P-14

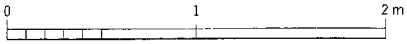


1．黒褐色土
2．暗褐色土

P-15

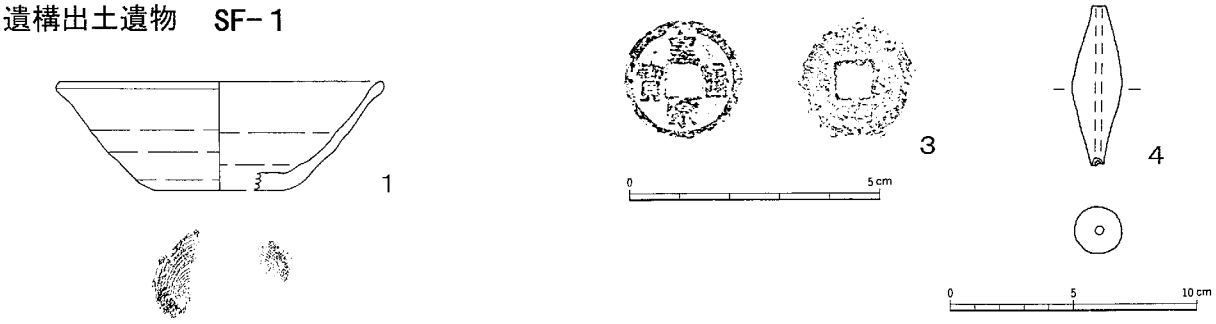


1．黒褐色土
2．黒褐色土（ロームブロックを多量含む。）

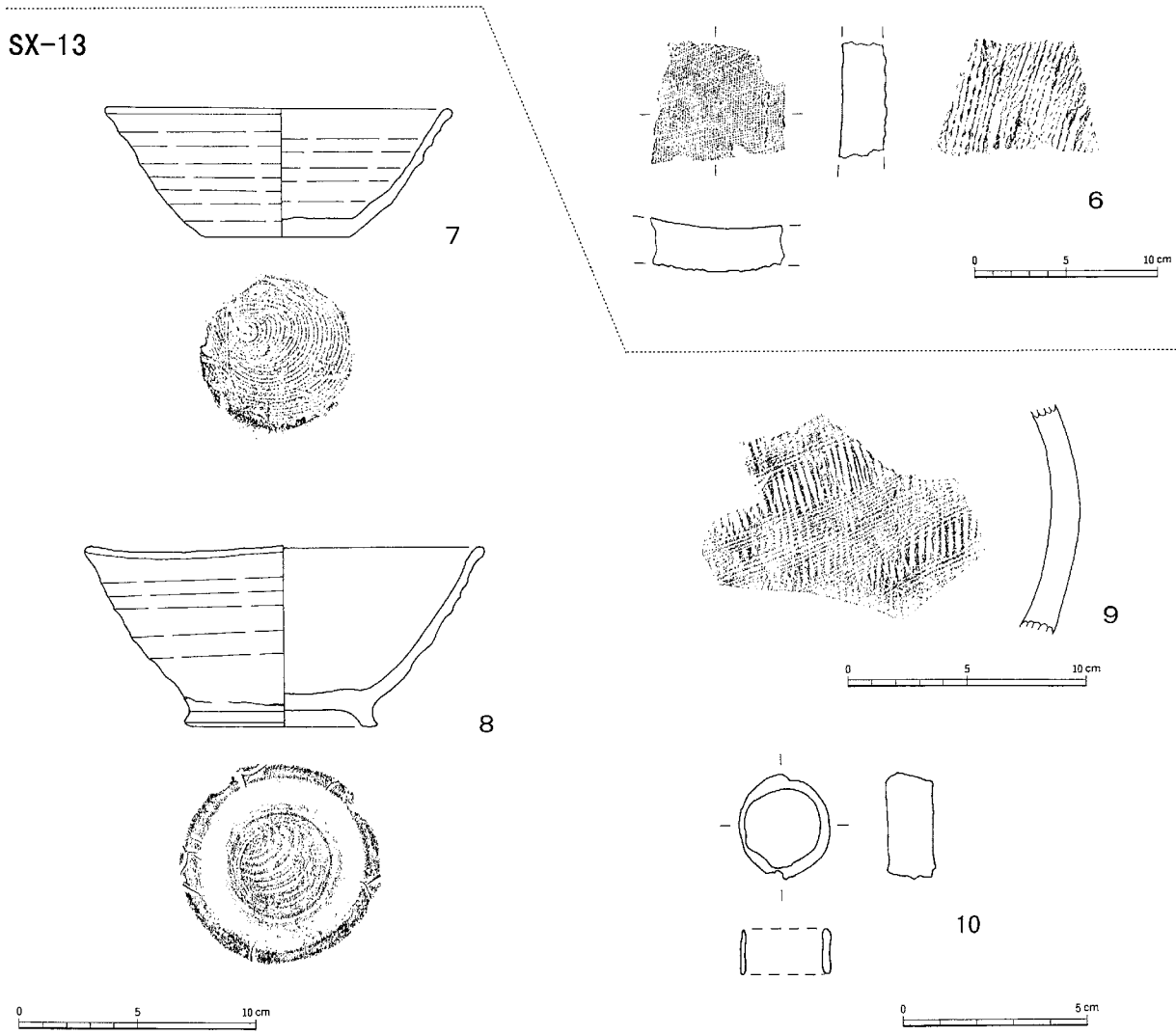


第324図　古代 小穴実測図

遺構出土遺物　SF－1

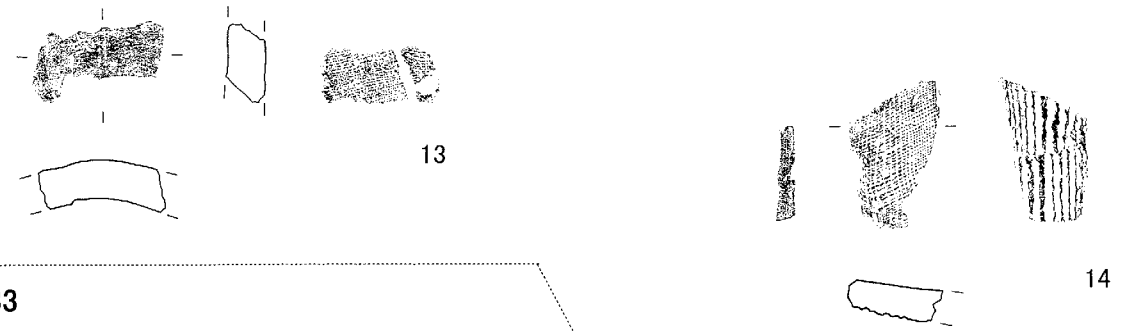


SX-13

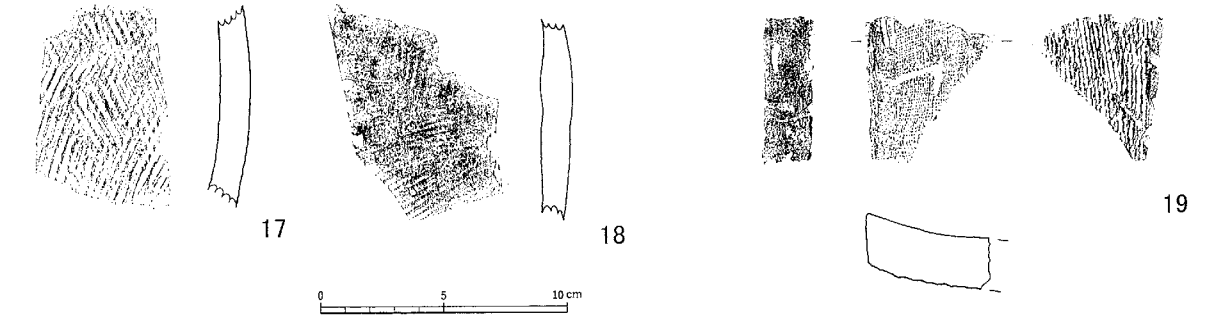


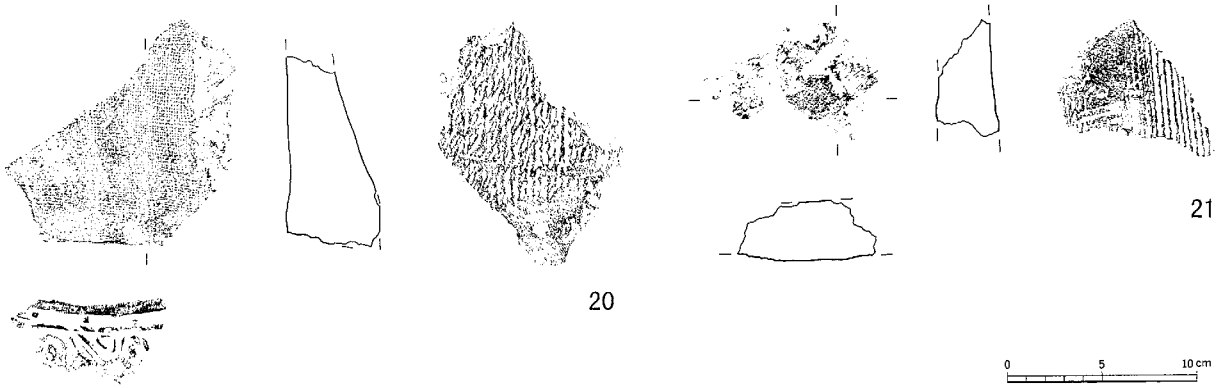
第325図　古代 遺構出土遺物実測図（1）

SD-5



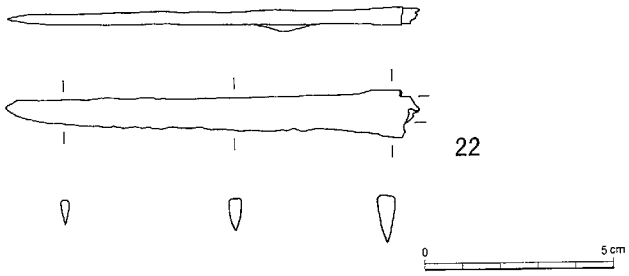
SD-33





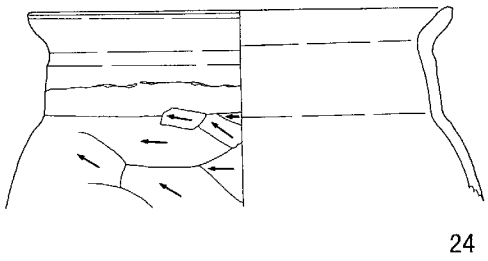
第326図　古代 遺構出土遺物実測図（2）

SK-214

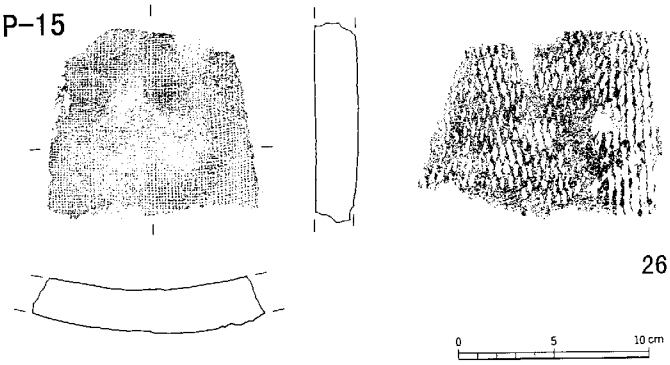


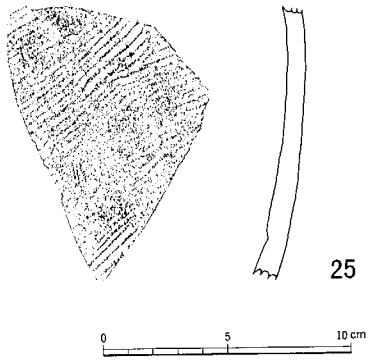
SK-76

P-14

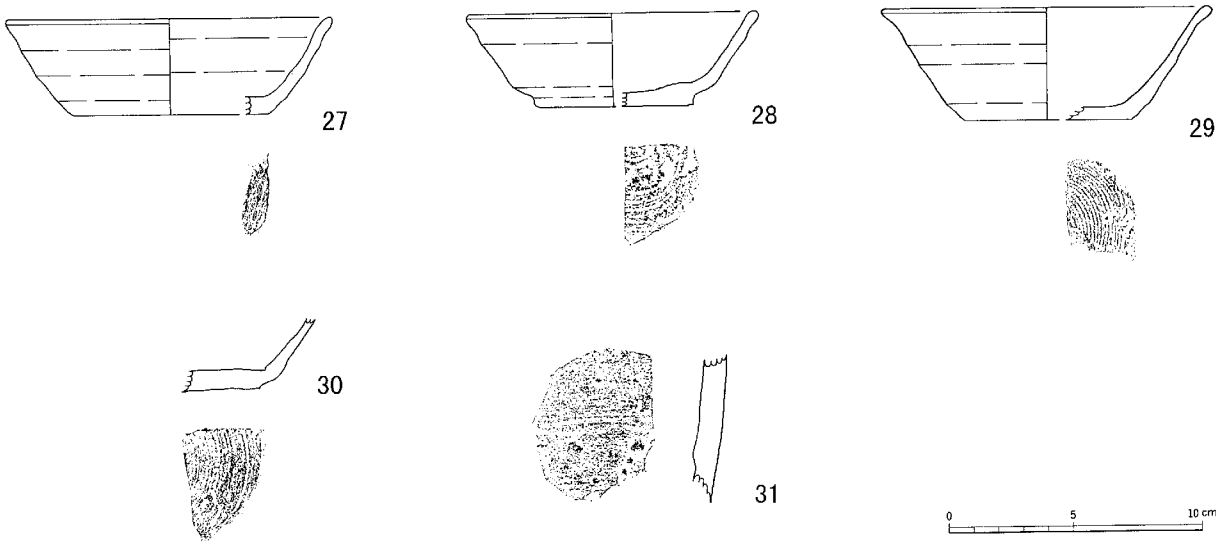


P-15

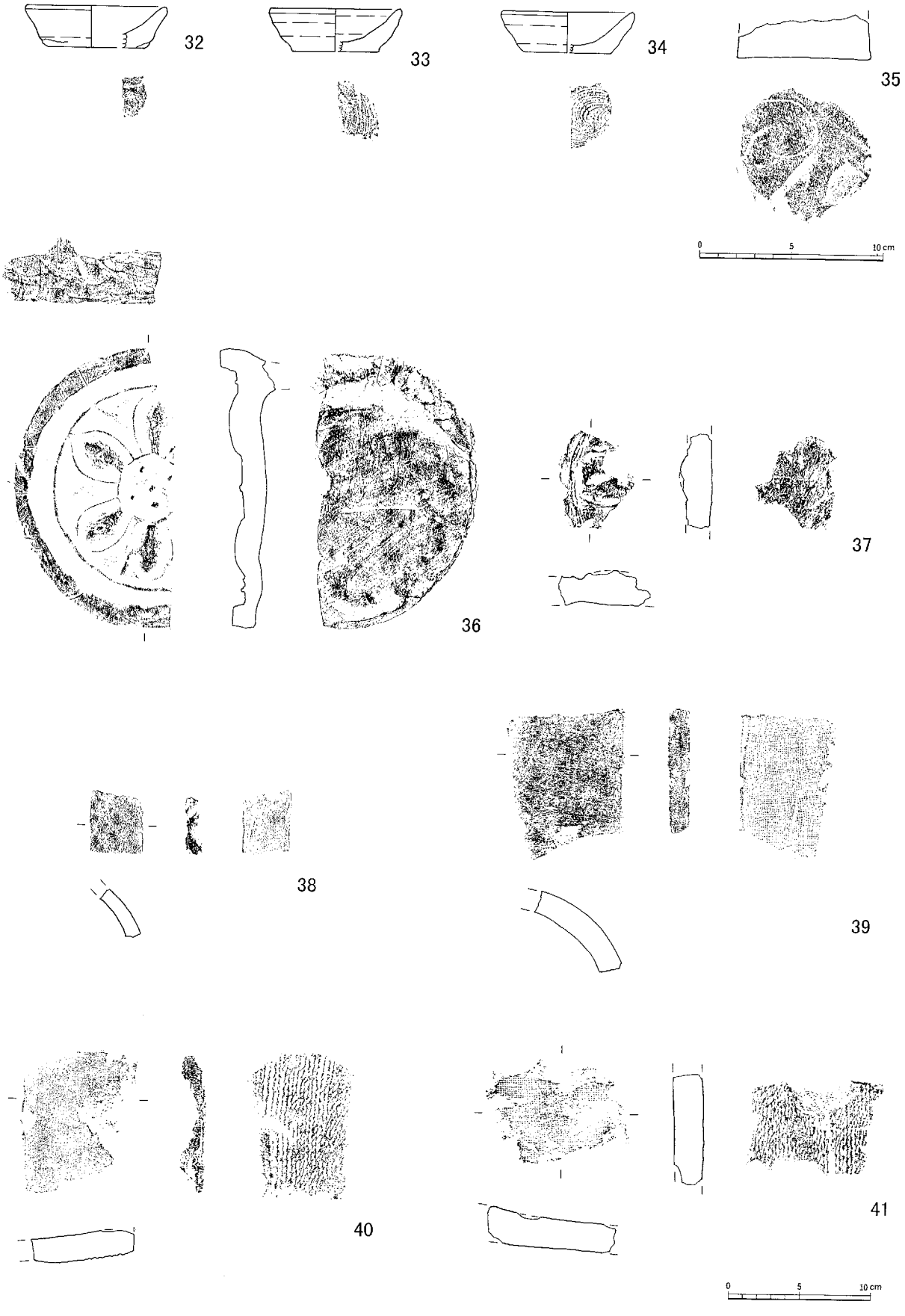




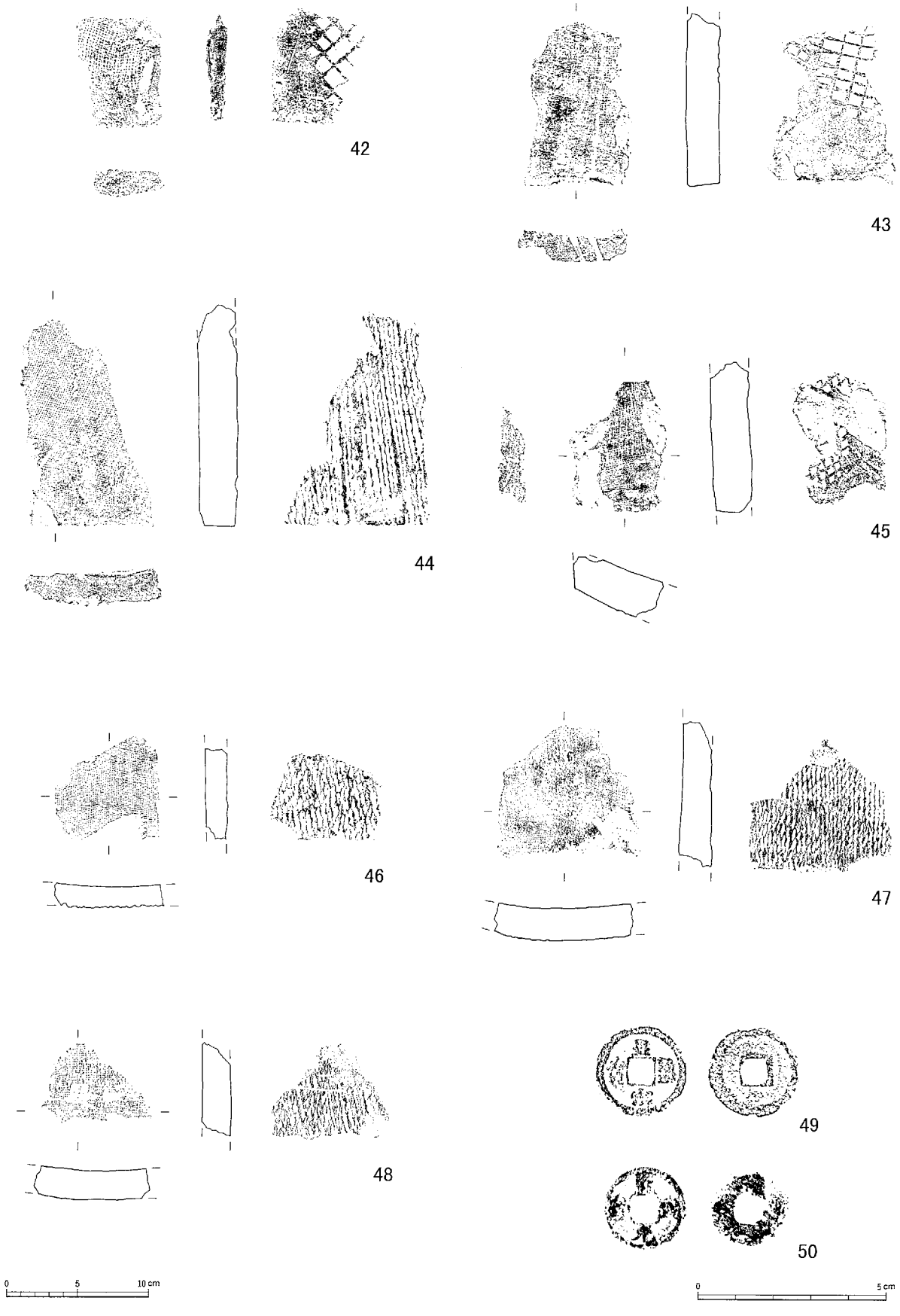
遺構外出土遺物



第327図　古代 遺構出土遺物実測図（3）



第328図　古代 遺構外出土遺物実測図（1）



第329図　古代 遺構外出土遺物実測図（2）

3. 中 世 以 降

1）概　要

中世以降とした遺構は、「溝跡」26条、「土坑」368基、「特殊遺構」８基、「集石」２基の他、「小穴」が多数検出された。古代（奈良・平安時代）と比較して遺構数は総体的に多いが、住居跡等生活の痕跡が窺える遺構はほとんど検出されなかった。

溝跡は上記の様に26条を数える。分布状況を概観すれば調査区北東部、北西部、中央部および南東部に集中して検出されていることが看取できる。調査区外へ延びているものや撹乱により大きく壊されているものがほとんどであるため全容を把握でないものが多いが、総じて奈良・平安時代の SD－５、SD－33と異なり比較的小規模なものが多い。形状は大半が直線状で主に東西方向に走行している。L 字状を呈するものもあるが主軸は東西方向を指向するものが多い。溝跡の中には SD－11と SD－12の様に対をなして併走しているものや、配置状況から何らかの関連性を有していたと考えられるものもある。また各々延長線上に位置しているため同一遺構である可能性のあるものも散見される。また遺構としての機能・性格は、調査区北壁際に検出された SD－28の様に規模、形状から根切り溝と想定されうるものもあるが、大半の溝跡は調査結果からは如何なる機能・性格を有していたかを確定することはできなかった。

土坑は368基検出され、調査区内では小穴に次いで数量が多い。規模・形状もまちまちで明確に分類するのは難しいが、主に平面形を基に《円形土坑》《方形土坑》《不整形土坑》に区分し、更に円形土坑は正円に近いものを〈円形土坑〉、楕円形のものを〈楕円形土坑〉に、また《方形土坑》は正方形に近いものを〈正方形土坑〉、長方形のものを〈長方形 A 土坑〉、細長い長方形のものを〈長方形 B 土坑〉に分類した。なお《方形土坑》のうち芋穴と思われるものや、《不整形土坑》のうちで植栽痕と考えられるものはその旨区分した。数量的には円形土坑よりも方形土坑の方が多く、また方形土坑の中でも長方形 A 土坑が多く検出されている。土坑全体の分布状況を概観すれば、グランドや野球場による撹乱部分を除いてほぼ満遍なく分布している状況が看取できる。また形状毎に個別的に見ても、植栽痕と思われる不整形土坑が調査区南側に集中している以外は特に配置や分布に規則性は看取できない。

なお、土坑は数量が多いため頁数の関係上重要かつ典型的なもののみ掲載し、他の遺構については、「歴史時代中世以降土坑一覧表」にまとめ、巻末添付の CD-ROM に収録した。ファイル名は、「**42RCDH.Exl**」である。

特殊遺構として掲載したものは８基だが、このうち特筆すべき遺構としては調査区北壁近くで検出された SX－86があげられる。特異な形態で調査区内では他に類例をみないが、調査結果からは遺構としての機能、性格を確認することはできなかった。また SK－１からは11枚の寛永通宝が出土しており近世の土坑墓と思われる。なお、SX－73とした遺構は、当初、規模や構築上の特徴等から第二次世界大戦中の高射砲設置跡ではないかと云う意見もあったが、時期を特定する遺物が出土していないため、分類は中世以降の遺構として掲載した。

集石は２基検出されたのみで、１基は調査区北西部（１区）からで集石下に土坑を伴っている。もう１基は、北東部で検出された SX－13のプラン上に位置していた。

小穴は調査区内に満遍なく多数検出された。他の遺構に伴っていたと思われるものや、配置に規則性があるものはなかったので、平面形状を基に方形、円形に分類し、典型的なもののみ本書に掲載し、他は割愛した。また古代小穴と同様、遺構番号は整理調査段階で振り換えた。

尚、掲載した遺構の分類と遺構記号（SK、SX 等）が一致しないものがあるが、これは現場調査時の遺構番号をそのまま使用しているためであり、種別は整理調査段階で検討のうえ変更している。

2）遺　構

① 溝 跡

SD－1（第331図、図版179）

〈検出位置〉 1区北西寄りの MA－105から MA－109グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 西端は撹乱により大きく壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向する。断面形は全体的に浅い皿状を呈す。

〈規　　模〉 全長6.55m×幅0.45～0.6m×深さ0.05～0.1m。

〈底面・壁〉 底面は所々窪んだ部分もありやや凸凹しているが、全体としてはほぼ平坦に近く、西へ向かって若干下り勾配になっている。壁は全面とも底面から垂直に近い傾斜で立ち上がる。

〈覆　　土〉 東側及び中央部ではローム粒を少量含んだ明灰褐色土の単一層だが、西側では2層に分けられ、上層は他と同じだが下層にはよりローム粒の少ない明灰褐色土が堆積している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 構内から遺物等の出土はなかったが、覆土土質から判断して中世以降に構築されたものと推測される。

SD－2（第331図、図版179）

〈検出位置〉 1区西側の LP－105から LS－108グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東側は SD－3と重複しておりこれに壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長9.5m×幅0.6m×深さ0.08m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 明灰褐色土を主体とした単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝跡は前述のように SD－3と重複するが SK－5とも重複している。調査段階では新旧を確定するため同時に調査し、その結果断面より本溝跡は SK－5埋没後にこの上部を壊して構築されていることが確認できた。したがって、先の SD－3を含め3者の新旧関係ははっきりしているが、覆土土質の類似性から判断すれば構築時期にあまり差はないと思われる。

SD－3（第331図、図版180）

〈検出位置〉 1区西側の LR－104・105グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北5度東を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長3.6m×幅0.5m×深さ0.08m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦だが北東隅はピット状に窪んでいる。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 2層に分けられ、堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質は上層が明灰褐色土、下層は暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝跡はSD－2を壊して構築されていることから新旧関係は明らかだが、本溝跡の北端がSD－2東端と直交する状態で重複していること、及び規模・形状の類似性に鑑みれば、ほぼ同時期の関連性ある遺構であると思われる。

SD－4（第332図、図版180）

〈検出位置〉 1区西側のLQ－106からLR－111グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 所々撹乱等が絡んでいる。また西側は調査区外へ延びている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長15.2m×幅0.7m×深さ0.08m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 明灰褐色土を主体とする単一層だがローム粒を多く含んでいる。

〈出土遺物〉 溝内からは炭化物の小片が一点出土した。また縄文石器等も出土したが埋没過程で流入したものと思われる。

〈特徴・性格〉 本溝跡の性格は不明だが北約3m程の位置にSD－2が併走しており、これと規模・形状・土質等が酷似していることを考えると同時期に同一の機能を有した溝であったと推測される。

SD－6（第334図、図版181）

〈検出位置〉 1区南西のLC－99からLE－111グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 所々撹乱により大きく壊されている。西壁以降は調査区外のため未調査である。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向する。断面形は西壁近くは2条の溝が絡んだ様な状態で不整形だが、他は幅広のU字形を呈する。

〈規　　模〉 全長は途中の撹乱部分も含めて測れば約35mに及び幅は0.7～1.5mで確認面からの深さは0.12～0.2mを測る。

〈底面・壁〉 底面は全体的にやや凸凹しており、西に向かって若干下り勾配になっている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 西壁近くで2層に分層できるものの全体的にほぼ単一層である。土質は西側は暗灰褐色土、東側は褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝跡東側延長線上にはSD－24が位置しており、距離こそ80m程離れてはいるが、規模・形状の類似性および走行方向から判断して両溝跡は同一遺構である可能性も考えられる。

SD－8（第333図、図版181）

〈検出位置〉 １区北西寄りの MC－100から MC－103グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 中央部には撹乱が絡んでおり底面まで壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北85度西を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長10m×幅0.7～0.9m×深さ0.04～0.08m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 明灰褐色土を主体とした単一層である。

〈出土遺物〉 溝内からは塊状と棒状の鉄が各１点出土したが錆が著しく遺物としての性格は確認できなかった。

〈特徴・性格〉 本溝跡は走行方向および規模・形状・土質等が南側で検出された SD－２、SD－４と類似している。それゆえ、これらの溝跡と時期的にも性格的にも近似した遺構であったと推測される。

SD－11（第332図、図版182）

〈検出位置〉 ２区南西から３区南東の ID－75から ID－79グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 東側は撹乱により大きく壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度東を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長14m×幅0.5～0.9m×深さ0.1～0.2m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹しており、壁は全体的に底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 東側は暗灰褐色土を主体とした単一層だが、中央付近から西は２層に分けられ下層に暗褐色土が堆積している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝１ｍ程南を SD－12が併走しており両溝は対をなしている。

SD－12（第332図、図版182）

〈検出位置〉 ２区南西から３区南東の ID－72から IC－80グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 東西両端を撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状だが、東へ行くほど幅が狭くなっている。主軸は北80度東を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長22.5m×幅0.3～0.9m×深さ0.1m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹しており、壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土を主体とするが単一層部分と２層に分けられる部分とがあり斉一性がない。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝の北側を SD－11が１ｍ程の間隔で併走しており、両溝は一対のものと思われる。

SD－13（第334図、図版182）

〈検出位置〉 ２区南西の HS－72から３区南東の ID－85グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 所々撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 平面形はＬ字状を呈し、HS－72グリッドからHR－82グリッドまでは東西に走行するが、そこからほぼ直角に折れて北へ延びており、途中中断するものの先端はID－85グリッドに達している。東西軸は北80度東を指向し、南北軸は北20度西を指向する。断面形は全体的に浅い皿状を呈している。

〈規　　模〉 東西走行部分31m、南北走行部分23mで全長約54mを測る。幅は0.2～0.8mで確認面からの深さは0.1～0.2m程である。

〈底面・壁〉 底面は全体的に凸凹しており、壁は底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 部分的に２層に分けられ下層に暗褐色土が確認されるものの全体としては暗灰褐色土を主体とした単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝から南へ３m程の間隔でSD－14が東西方向に併走しているがHP－81グリッド付近で本溝とは逆に南へ延びている。

SD－14（第331図、図版182）

〈検出位置〉 ２区南西のHS－66から３区南東のHL－80グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 所々後世の土坑及び撹乱が絡んでおり、これらに底面まで壊されている。また、南端は調査区外へ延びている。

〈形　　状〉 平面形はＬ字状を呈し、HS－66からHP－81グリッドまでは東西方向に走行するが、そこからはほぼ直角に折れて南下しており調査区南壁に至っている。東西軸は北80度東を指向し、南北軸は北20度西を指向する。断面形は全体的に浅い皿状を呈している。

〈規　　模〉 全長62.5m×幅0.2～1.1m×深さ0.1～0.2m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹しており、所々ピット状の窪みがある。壁は部分的に垂直に近い所もあるが全体としては底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 場所により単一層であったり、２～３層に分層できたりと均一ではない。土質は単一層も含め上層は暗灰褐色土が、下層は暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝北側３m程のところをSD－13が東西方向に併走しているが途中で本溝とは逆に北へ折れて行く。

SD－18（第334図、図版183）

〈検出位置〉 ２区西側のJJ－72からJO－72グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北側は撹乱により大きく壊されている。また残存部も壁際に後世の土坑等が絡んでおり、これに一部壊されている。

〈形　　状〉 平面形はほぼ直線状だが、南側は溝幅がやや細くなっている。主軸はほぼ南北を指向する。断面形は、覆土確認部分では不整形だが全体としては皿状を呈している。

〈規　　模〉 全長14m×幅0.6～2.0m×深さ0.2～0.5m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されている。壁は、西側中央部は中段位から緩やかな立ち上がりだが、

他は底面から45度位の傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土が主体で４層に分けられるが、堆積状態からは自然埋没であると思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝北延長線上にSD－20の南北軸が走っており、これと繋がっていた可能性も考えられるが確認はできなかった。

SD－20（第332図、図版184）

〈検出位置〉 ２区北西のJT－71から３区北東のKD－81グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 所々撹乱により壊されている。また東側は上部全体を大きく削り取られている。

〈形　　状〉 平面形はＬ字状を呈し、JT－71からKB－70グリッドまでは南北方向に走行するが、そこから先はほぼ直角に折れて、やや北偏しながらも西へ向かって延びている。東西軸は北85度西を指向し、南北軸は北５度東を指向する。断面形は不整形な皿状になっている。

〈規　　模〉 全長42m、幅は上部を壊されている東側では0.5m程だが遺存状態の良い西側では最大2.2m程あり、そこでの確認面からの深さは0.6mを測る。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層中段まで掘削して構築されている。全体的に凸凹しており、東へ向かって若干下り勾配になっている。壁は中央部南面は緩やかな傾斜だが他は45度程の傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 遺存状態の良い場所では３～４層に分層でき堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は主に暗灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 SD－18参照。

SD－22（第333図、図版185）

〈検出位置〉 ２区北西のKE－74から３区北東部のKP－80グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 所々撹乱が絡んでおり、また両先端はそれより先が撹乱により大きく壊されている。

〈形　　状〉 平面形はＬ字状を呈し、KE－74からKH－82グリッドまではやや北偏しながら東西方向に走行するが、そこから先はほぼ直角に折れてやや東に振れながら北へ延びている。東西軸は北70度西を指向し、南北軸は北20度東を指向する。断面形は全般的に浅い皿状になっている。

〈規　　模〉 全長55m×幅1.1～2.0m×深さ0.1～0.3m。

〈底面・壁〉 底面は凸凹しておりピット状の窪みがたくさんある。また、北へ進むにつれ下り勾配になっている。壁は南面から西面にかけては底面から45度程の傾斜で立ち上がっているが、北面から東面にかけてはかなり緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土を主体とした２層に分けられるが、浅い部分では下層のみの単一層である。堆積状態からは自然埋没であると思われる。

〈出土遺物〉 古銭（寛永通宝）および瓦片が各１点北側覆土中より出土した。

〈特徴・性格〉 本溝の東西軸と平行する状況で北30m程にSD－24が走行しており、両溝を鳥瞰すれば本溝の北端とSD－24西端が繋がっていた可能性が考えられるが、現場調査では確認できなかった。

SD－24（第333図、図版183）

〈検出位置〉 ２区北西寄りの KQ－67から KR－73グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 西側は撹乱により大きく壊されている。

〈形 状〉 平面形は直線状で、主軸は北75度西を指向する。断面形はやや不整形ながら浅い皿状を呈している。

〈規 模〉 全長20m×幅0.3～1.1m×深さ0.1～0.2m。

〈底面・壁〉 底面はかなり凸凹しており、東へ向かって下り勾配になっている。壁は全体的に北面は傾斜した立ち上がりだが南面はかなり緩やかな傾斜で立ち上がっている。そのため、底面中心軸はやや北寄りになっている。

〈覆 土〉 暗灰褐色土を主体とした単一層だが東側には褐色土粒が少量混入している。

〈出土遺物〉 北壁際から古銭（皇宋通宝）が１枚、他に瓦片が１点が出土した。

〈特徴・性格〉 SD－22参照

SD－28（第332図、図版186）

〈検出位置〉 ４区西側北壁際の NO－92から NP－94グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 西端近くに土坑状の撹乱が絡み、これに底面まで壊されている。

〈形 状〉 調査区内での平面形は「へ」の字状で両端は調査区北壁に至っている。断面形はＵ字状を呈する。

〈規 模〉 全長11m×幅0.5m×深さ0.5～0.8m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上段まで掘削して構築されておりやや凸凹している。また、東へ進むにつれ下り勾配になっている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっているが、北面では底面近くが若干オーバーハングしている部分がある。

〈覆 土〉 ４～５層に分層でき堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は主に黒色土を主体とするが多量の褐色土ブロックが混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝は調査区壁際に位置し、両端が調査区外であるため全容は把握できなかった。それゆえ遺構としての確かな性格は分からないが、溝幅に比してかなり深く掘削し構築されていることを考えると、所謂根切り溝である可能性が高いと思われる。

SD－34（第331図、図版186）

〈検出位置〉 ４区東側の MG－38から MG－43グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東西両端は撹乱により大きく壊されている。また中央部にも後世の土坑が２基絡んでおりこれに南壁を一部壊されている。

〈形 状〉 平面形は直線状で、主軸は北75度西を指向する。断面形は浅い逆台形状を呈する。

〈規 模〉 全長16.2m×幅0.52～1.04m×深さ0.2～0.32m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦だが東側北壁下はテラス状になっている。また、全体的に東へ向かって下り

勾配になっている。壁は底面からやや急な傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土が主体で場所により２～３層に分けられるが、堆積状態からは自然埋没であると思われる。

〈出土遺物〉 土師器片が９点出土したが、いずれも小片であり埋没過程で混入したものと思われる。

〈特徴・性格〉 本溝の北４m 程の位置に SD－35が併走している。全長こそ本溝の半分程だが、その他の形態は良く似ている。それゆえ、位置関係や形態からして両溝は関連性ある遺構であった可能性が高いと思われる。また、本溝は SF－１の路面を壊して構築されており、SF－１の存続時期を知るうえでの意義も大きい。

SD－35（第333図、図版187）

〈検出位置〉 ４区東側の MG－41から MH－44グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 西側は撹乱により大きく壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北75度西を指向する。断面形は浅い逆台形状を呈する。

〈規　　模〉 全長8.6m×幅0.8m×深さ0.24m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削し平坦に構築されているが、東へ向かって若干下り勾配になっている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 壁際に僅かに黒褐色土の堆積がある他は、明灰褐色土主体のほぼ単一層である。

〈出土遺物〉 溝内からは出土遺物が多く、内訳は土師器片12点、須恵器片２点、鉄片２点であるがいずれも小片であり埋没過程で混入した可能性が高い。

〈特徴・性格〉 SD－34参照。

SD－41（第334図、図版187）

〈検出位置〉 ４区北東隅の NT－49から０A－48グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。東側は調査区外へ延びている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北75度東を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長2.2m×幅0.5m×深さ0.06～0.12m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、東に向かって下り勾配になっている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土を主体とした単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

SD－42（第332図、図版188）

〈検出位置〉 ４区東側の MK－41から NF－47グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 中央やや北寄り部分を約4.5m にわたって撹乱により壊されている。また南側は検出面の下げすぎによるものかは不明だが約10m 近く途切れている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北25度西を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 途中の途切れている部分も含めて測れば全長49.5m におよび幅は0.4～0.9m で確認面から

の深さは約0.15m を測る。

〈底面・壁〉 底面は幅0.01～0.04m 程で所々凹凸があるものの全体としては平坦であり、長さの割に勾配差もほとんどない。壁は全般的に緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土を主体とした単一層だが北側部分では灰褐色土粒子が多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝の南方に SD－57が検出されており、距離は12m 程離れているが全体図を鳥瞰すれば同一溝の可能性も考えられる。

SD－49（第334図、図版188）

〈検出位置〉 ３区東側の JE－78から JE－81グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東側は撹乱により大きく壊されており、また西端も上面が壊され土坑状に途切れている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度東を指向する。断面形は皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長は西側の途切れた部分も含めて測れば約10.4m、幅0.2～0.3m 確認面からの深さは0.1m を測る。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SD－52（第333図、図版189）

〈検出位置〉 ３区東側の JR－78から KB－81グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東端は大きく壊され、また残存部も所々土坑状の撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 平面形は L 字状で JR－78から JS－82グリッドまでは東西に走行するが、そこからは、ほぼ直角に北進し KB－81グリッドに達している。東西軸は北70度西を指向し、南北軸は北10度東を指向する。断面形は皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長23.4m（このうち東西走行部分は14m）×幅1.2～2.2m×深さ0.15m

〈底面・壁〉 底面は全体的にほぼ平坦で、壁は底面からやや緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層である。

〈出土遺物〉 溝内からは土師器片、常滑片が各１点出土したがいずれも小片であり、埋没過程で流入したものと思われる。

〈特徴・性格〉 本溝跡北側には同規模、同形の SD－20が検出されたが、これとの関連性は確認できなかった。

SD－55（第331図、図版190）

〈検出位置〉 ３区北側の KD－82から KD－89グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 中央部を撹乱により壊されている。また西側は SD－56と重複しており、これに壊されてい

る。

〈形　　状〉 平面形は西端が１m 程南に折れているが、全体としては直線状で東西方向に走行している。主軸は北85度西を指向する。断面形は不整形な皿状を呈する。

〈規　　模〉 中央部の撹乱部分も含めて測れば全長22m で、溝幅は、西側は1.6m 程あるが東側は全体的に先細りで約0.8m 程である。確認面からの深さも西側では0.3m 程あるが東側は0.1m 位である。

〈底面・壁〉 底面は全体的に幅が狭く、東へ向かって下り勾配になっている。壁は、北側は45度程の立ち上がりだが、南側は全体的に緩やかな角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく２層に分けられる。土質は共に暗灰褐色土主体だが下層には褐色土粒が多く混入している。堆積状態からは自然埋没であると思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本溝跡の東側直線上２m 程に SD－20が検出されており、位置関係および規模・形状の類似性からすれば何らかの関連性を有していたと考えられる。

SD－56（第331図、図版190）

〈検出位置〉 ３区北側の KE－87から KE－92グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東側は撹乱により壊されているため全容は不明。また、他も所々壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北80度西を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長12.5m×幅1.5m×深さ0.15m

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は急角度で立ちあがっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

SD－57（第333図、図版189）

〈検出位置〉 ４区東側（SF－１路面内）の MD－40から MF－40グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 SD－34と交錯し、これに一部壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、主軸は北５度東を指向する。断面形は浅い皿状を呈する。

〈規　　模〉 全長９m×幅0.2～0.4m×深さ0.1m

〈底面・壁〉 底面は北半分程はやや凸凹しているが南側はほぼ平坦で、全体的として北へ向かって若干下り勾配になっている。壁は全般的に底面から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 北側では２層に分層できるが他は単一層で、土質は暗灰褐色土が主体となっている。

〈出土遺物〉 なし。　　〈特徴・性格〉 SD－42参照。

SD－58（第334図、図版190）

〈検出位置〉 ３区西壁際の JJ－113から JQ－112グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南側は調査区外へ延びている。また北側西半分程も調査区外で北端以北は撹乱により壊されている。また中間部も撹乱により所々壊されている。

〈形　　状〉 平面形は壁が全体的に波打っているものの主軸は直線的で北10度東を指向する。断面形は全体的に不整形で均一性がない。

〈規　　模〉 全長は途中１m 程途切れるもののこれも含めて測れば約25m に及ぶ。幅も0.8～1.5m 程あるが確認面からの深さは浅く0.1～0.2m 程である。

〈底面・壁〉 底面は凸凹しており、壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土が主体で２層に分けられるが、浅い部分では下層のみの単一層である。

〈出土遺物〉 女瓦片が１点出土した。

SX－26（第333図）

〈検出位置〉 ２区北壁近くの LQ－51から LQ－53グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 西側はグランド造成工事により、中央部は撹乱により大きく壊されている。

〈形　　状〉 平面形は直線状で、長楕円形に近い。主軸は北70度西を指向する。断面形は逆台形状ないし箱状を呈する。

〈規　　模〉 全長5.7m×幅0.7m×深さ0.16m。

〈底面・壁〉 底面は全体的に平坦に構築されており、壁は急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 明灰褐色土主体の単一層。　〈出土遺物〉 なし。

② 土 坑

《 円 形 土 坑 》

SK－17（第336図、図版191）

〈検出位置〉 １区中央やや北西寄りの ME－104・105グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　〈規　　模〉 径約0.9m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面は南側が壁面に向かってやや盛り上がっている他、全体として中央部がやや窪んだ状態で、いわゆる鍋底型を呈している。壁は南側がほぼ垂直に近い立ち上がりだが、他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられ堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は共に黒灰褐色土を主体とするが下層には暗褐色土ブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 坑内から鉄片が２点出土したが、小片であるため遺物としての性格は確認できなかった。

SK－18（第336図、図版191）

〈検出位置〉 １区中央付近の LS－99グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　〈規　　模〉 径0.92m×深さ0.26m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦だが、中央部から北壁にかけてやや傾斜して高くなっている。壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく２層に分けられるが、下層が２/３程を占めており堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は共に明褐色土主体だが、下層には暗褐色土ブロックが多く混入しており、特に北壁際には大きな塊がある。

〈出土遺物〉 なし。

SK－248（第336図、図版191）

〈検出位置〉 ２区北東部 SD－31上の LP･LQ－43グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径0.96m×深さ0.52m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層中段まで掘削して構築されており、ほぼ平坦である。壁は一部オーバーハングしている所もあるが、全体としては底面から垂直に近い傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ほぼ均一に４層に分けられるが、堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質は最下層は黒褐色土を主体とするが、他は暗灰褐色土が主体で中層には褐色土ブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は SF－１の西側溝（SD－31）を完全に壊して構築されている。それゆえ、同道路跡の存続時期を考察するうえで大きな意義のある遺構であるが、明確な時期認定は出来なかった。ただ覆土土質から判断すれば中世以降であると推測される。

SK－260（第336図、図版191）

〈検出位置〉 ２区北東部の LD･LE－60グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.6m×深さ0.6m。

〈底面・壁〉 底面も径約1.3m の円形で、Ⅳ層上面まで掘削して構築されておりほぼ平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ５層に分けられるが、堆積状態からは南側から埋没していった自然堆積と思われる。土質は全層とも黒灰褐色土が主体で、最下層以外はローム粒・ブロック、暗褐色土粒等を多量に含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は調査区内で検出された他の円形土坑に比して規模が大きい。それゆえ、他とは異なった機能・性格を有した土坑であった可能性も考えられるが、出土遺物等もなく確認するには至らなかった。

SK－670（第336図、図版192）

〈検出位置〉 ３区中央やや東寄りの JH－89・90、JI－89グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 西壁上部を僅かに撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 円形。　　〈規　　模〉 径約1.0m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面も径約0.75m 程の平坦な円形である。壁は全面とも底面より急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 明灰褐色土主体の単一層。　〈出土遺物〉 なし。

SK－686（第336図、図版192）

〈検出位置〉 ３区中央北寄りの KF－94グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径約0.9m×深さ0.25m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており平坦である。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 単一層で黒灰褐色土を主体とするが暗褐色土粒子等が多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－712（第336図、図版192）

〈検出位置〉 ３区北西部の KN･KO－88グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 西側上部が若干壊されている。

〈形 状〉 円形。 〈規 模〉 径約1.1m×深さ0.3m

〈底面・壁〉 底面は所々窪んでいるが全体としては平坦である。壁は全面とも底面からやや急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 暗灰褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－732（第336図、図版192）

〈検出位置〉 ３区ほぼ中央部の JF－96・97グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 円形。

〈規 模〉 径約1.0m×深さ0.22m

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒灰褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SK－115（第336図、図版193）

〈検出位置〉 ２区南寄り IN－72グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 楕円形。

〈主 軸〉 北５度西を指向する。 〈規 模〉 長軸2.20m×短軸1.25m×深さ0.14m。

〈底面・壁〉 底面はやや凹凸があるものの全体としては平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられるが下層は北壁下には堆積していない。土質は上層は黒灰褐色土、下層は暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－184（第336図、図版193）

〈検出位置〉 ２区北寄りの LC－56、LD－56グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好

〈形　　状〉 楕円形。

〈主　　軸〉 北９度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.34m×短軸0.94m×深さ0.20m

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は南側は垂直に立ち上がっているが、他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体の単一層で灰褐色土粒子等を少量含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

《 不 整 形 土 坑 》

SK－69（第337図、図版193）

〈検出位置〉 ２区南側の HQ－73グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。　　〈遺存状態〉 上部を壊されている。

〈形　　状〉 不整形。（植栽痕）　　〈規　　模〉 径約1.3m×深さ0.28m

〈底面・壁〉 底面には凹凸があり、壁は部分的に垂直であったり、緩やかな立ち上がりであったりと均一性がない。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は規模・形状からして所謂植栽痕であると思われる。

SK－77（第337図、図版193）

〈検出位置〉 ２区西側の JK－72グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。　　〈遺存状態〉 上部を壊されている。

〈形　　状〉 不整形。（植栽痕）　　〈規　　模〉 径約1.9m×深さ0.52m。

〈底面・壁〉 底面は凹凸が多く、特に中央部と南側は大きく窪んでいる。壁は全体的に底面からほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられる。土質は上層が暗灰褐色土、下層は褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 坑内からは土師器片２点、須恵器片１点が出土したが、いずれも流れ込みによるものと思われる。

SK－87（第337図、図版194）

〈検出位置〉 ２区西側の JN－70グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 不整形。（植栽痕）　　〈規　　模〉 径約2.3m×深さ0.78m。

〈底面・壁〉 底面は凸凹している。壁は均一性がなく、場所により平滑であったり、波打っていたりする。底面からの立ち上がりも、ほぼ垂直に近い傾斜であったり緩やかな傾斜であったりと様々である。

〈覆　　土〉 ４層に分けられ、西側は暗灰褐色土が、東側は暗褐色土が主体となっている。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 規模・形状からして植栽痕であると思われる。

SK－90（第337図、図版194）

〈検出位置〉 ２区西側の JH－73グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 不整形。（植栽痕）　〈規　　模〉 長径1.8m×短径1.4m×深さ0.8m。

〈底面・壁〉 底面は中央部がやや窪んだ状態で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ６層に分けられるが、下２層が１/２程を占めている。堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質は上層および下層は暗灰褐色土が主だが中層は黒色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は、底面形状等を考えると植栽痕であると思われる。

《 方 形 土 坑 》

SK－218（第338図、図版195）

〈検出位置〉 ２区北寄りの LG－58グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 正方形。

〈主　　軸〉 北29度東を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸0.97m×深さ0.34m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は南東面はほぼ垂直だが北西面はやや急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられ中層、下層はほぼ平坦な堆積だが上層は確認面中心付近から南壁下底面まで流れ込んだ様な堆積状態である。土質は中層が黒褐色土、他は暗灰褐色土主体だが下層には暗褐色土ブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－714（第338図、図版195）

〈検出位置〉 ３区北側の KN－91、KO－91グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 正方形。

〈主　　軸〉 北約60度西を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸1.0m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SK－740（第338図、図版195）

〈検出位置〉 ３区中央やや西寄りの JI･JJ－100グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　〈遺存状態〉 東側は底面近くまで撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 正方形。

〈主　　軸〉 北87度西を指向する。　〈規　　模〉 長軸1.3m×短軸1.2m×深さ0.18m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 単一層で黒灰褐色土を主体とするが暗褐色土ブロック等が少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－781（第338図、図版195）

〈検出位置〉 ３区北側の KO・KP－98グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 正方形。

〈主 軸〉 北約45度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.1m×短軸0.9m×深さ0.6m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層中段まで掘削して構築されており北側がやや窪んだ状態である。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 複雑な堆積状態で暗灰褐色土主体土の中に黒灰褐色土が２条入り込んだ様な状態である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－３（第338図、図版196）

〈検出位置〉 １区北西隅の ME－107・108グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。やや丸味を帯びている。

〈主 軸〉 北77度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.90m×短軸1.10m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 明褐色土主体の単一層だが暗褐色土ブロック等を多量に含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－12（第338図、図版196）

〈検出位置〉 １区北西の LG－105・106グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北14度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.8m×短軸1.06m×深さ0.34m。

〈底面・壁〉 底面は北西隅がやや湾曲するものの平面形と同じく長方形を呈し、平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられ共に明褐色土を主体とする。堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－81（第338図、図版196）

〈検出位置〉 ２区南寄りの IA－76グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北89度西を指向する。 〈規 模〉 長軸2.20m×短軸1.60m×深さ0.34m。

〈底面・壁〉 底面は全体的に平坦で、南に広く分布した状態で硬化面が検出された。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく３層に分かれるが上層が約半分程を占める。土質は上層が灰褐色土、中層が黒褐色土、下層は暗褐色土主体で堆積状態からは自然埋没と思われる。なお、底面に検出された硬化面も下層土と同じく暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は上層の土質から中世以降の遺構であると判断したが、本土坑南側で検出されたSK－75・76遺構と規模・形状が酷似しており奈良・平安時代の遺構である可能性も高いと思われる。

SK－118（第338図、図版196）

〈検出位置〉 ２区中央西寄りの JH－73グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 南西隅を撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北82度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.36m×短軸0.98m×深さ0.28m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗褐色土主体土が２層に分かれ、壁際は流れ込み状態だが中心部は平坦に堆積している。

〈出土遺物〉 坑内からは須恵器坏片が１点出土したが上層でもあり埋没時に混入したものと思われる。

SK－119（第339図、図版197）

〈検出位置〉 ２区中央西寄りの JG－75グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北88度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.58m×短軸0.88m×深さ0.44m。

〈底面・壁〉 底面は中心から西壁にかけてやや盛り上がっているが他は平坦である。壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられ東西壁際は流れ込み状態だが他は平坦に堆積している。土質は共に暗灰褐色土主体だが、上層は暗褐色土ブロックを多く含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－156（第339図、図版197）

〈検出位置〉 ２区西壁近くの KM－73グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南壁から西壁にかけて幅50cm 程の溝状撹乱によって底面近くまで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北15度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.44m×短軸1.4m×深さ0.38m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており、ほぼ平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土を主体とした単一層だが暗褐色土ブロックが多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は規模が大きく形状もしっかりしているが遺構としての性格は明らかでない。時期

的には覆土土質から判断して中世以降に構築されたものと思われる。

SK－193（第339図、図版197）

〈検出位置〉 ２区北東部北壁際の LP－45グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南東隅上部は SK－194と重複しているが切合関係は確認できなかった。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北10度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.40m×短軸0.94m×深さ0.37m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体で３層に分けられるが上層が半分程を占めている。堆積状態からは自然埋没と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－203（第339図、図版197）

〈検出位置〉 ２区北東部北壁近くの LO－48・49グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北78度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.50m×短軸0.80m×深さ0.68m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は東西面は傾斜した立ち上がりだが南北壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられ中層が１/２程を占めるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層が黒灰褐色土の他は暗灰褐色土が主体で、特に中層にはロームブロック等が多量に混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－204（第339図、図版198）

〈検出位置〉 ２区北東部北壁近くの LO－46・47グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北72度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.60m×短軸1.00m×深さ0.70m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層中段まで掘削して構築されており平坦である。壁は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 西壁下に黄褐色土の塊がある他は暗灰褐色土が主体で、大きく２層に分けられ平坦に堆積しているが、上層が全体の２/３程を占めている。

〈出土遺物〉 なし。

SK－215（第339図、図版198）

〈検出位置〉 ２区中央東壁際の JK－55・56グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 中央部分は底面まで撹乱により壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北13度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸1.0m×深さ0.22m。
〈底面・壁〉 底面は平坦だが短軸方向が傾斜しており西側がやや低い。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 2層に分けられるが南側は下層の単一層になっている。土質はともに暗灰褐色土主体だが下層にはロームブロックが多く混入している。
〈出土遺物〉 なし。

SK－266（第339図、図版198）
〈検出位置〉 2区北側のLB－61グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形A。やや丸味を帯びている。
〈主　　軸〉 北3度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.0m×短軸1.25m×深さ0.44m。
〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は南西隅及び北壁上部に崩落と思われる傾斜がある他は底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 2層に分けられるが、下層が2/3程を占めており堆積状態からは自然埋没と思われる。土質はともに暗灰褐色土主体だが、下層は特にローム粒等を多量に含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－267（第339図、図版198）
〈検出位置〉 2区北側のLE－59グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形A。
〈主　　軸〉 北10度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.7m×短軸1.4m×深さ0.42m。
〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており平坦である。壁は、東面北側上部に崩落と思われる緩やかな傾斜があるが、全体としては底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 2層に分けられるが上層が3/4程を占めている。堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層が暗灰褐色土、下層は黒灰褐色土を主体とするがともにローム粒等を多く含んでいる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－519（第340図、図版199）
〈検出位置〉 3区南東部のIA－82・83グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 南西部分の上部が若干壊されている。
〈形　　状〉 長方形A。やや歪んでいる。
〈主　　軸〉 北89度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.35m×短軸1.0m×深さ0.4m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦だが、中央部から南西壁際にかけて5cm程窪んでいる。壁は南面がオーバーハングし、西面は急角度で立ち上がっているが他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。
〈覆　　土〉 3層に分けられ平坦に堆積しているが、下層は底面から4cm程でややしまっている。土質は全層とも黒灰褐色土主体だが中層には暗褐色土ブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－591（第340図、図版199）

〈検出位置〉 ３区南側のIA－95・96グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形A。平面形は南面がやや外側に湾曲している。

〈主 軸〉 北３度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.5m×短軸0.7m×深さ0.3m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削し平坦に構築されている。壁は南面が急角度で立ち上がっている他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ３層に分けられ上層が１/２程を占めるが、堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は全層とも黒灰褐色土主体で上層には灰褐色土粒子が、下層には褐色土ブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 底面近くから須恵器の甕片１点が出土した。

SK－641（第340図、図版199）

〈検出位置〉 ３区南西寄りのIQ－108グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形A。東壁上部の突出部分は崩落跡と思われる。

〈主 軸〉 北２度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.14m×短軸0.58m×深さ0.28m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削し、ほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっているが、中段付近が部分的にオーバーハングしている所もある。

〈覆 土〉 ３層に分けられるが、中層は中央部より東側に部分的に堆積しているにすぎない。土質は下層は暗褐色土が主体だが、他は暗灰褐色土が主で、上層には褐色土粒が少量含まれている。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑の性格は不明だが、形状が比較的しっかりしていること、及び壁面のオーバーハング部分等の遺存状態が良いこと等を考えると構築後間もない時期に埋没したものと推測される。

SK－656（第340図、図版199）

〈検出位置〉 ３区中央東寄りのIT－86グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形A。

〈主 軸〉 北77度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.5m×短軸0.9m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面は東側にやや凹凸面があるものの全体としては平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒灰褐色土主体の単一層で灰褐色土粒子を少量含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑の性格は不明だが土質から判断すれば中世以降に構築されたものと思われる。

SK－674（第340図、図版200）

〈検出位置〉 ３区東壁近くの JH－79、JI－79グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 西側上面が僅かに壊されている。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北79度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.3m×短軸1.1m×深さ0.3m。

〈底面・壁〉 底面は多少凹凸があるものの全体としては平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられ短軸方向断面ではほぼ平坦だが、長軸方向断面からは上層が東壁にかけて流れ込んでいる様子がうかがえる。土質は上層が黒灰褐色土、下層は暗灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－688（第340図、図版200）

〈検出位置〉 ３区東壁近くの KA－78・79グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北76度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.4m×短軸0.76m×深さ0.36m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されているが、南西隅には径30cm 深さ10cm 程のピットが検出された。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ３層に分けられるが中層が２/３程を占めている。堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質は底面から４cm 程の最下層及びピット覆土は暗褐色土主体だが、覆土の大半を占める上２層は暗灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は平面形こそ平凡な長方形だが、底面南西隅にやや大型のピットが構築されており特異な形態の土坑である。調査区内においてもこれと同様の土坑は検出されておらず、遺構としての性格は不明である。

SK－696（第340図、図版200）

〈検出位置〉 ３区北東寄りの KG－89・90グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北81度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.8m×短軸1.0m×深さ0.26m

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられ、ほぼ平坦に堆積しているが下層が３/４程を占めている。土質は共に暗灰褐色土主体だが下層はやや締まりが弱い。

〈出土遺物〉 なし。

SK－700（第340図、図版200）

〈検出位置〉 ３区北東寄りの KI・KJ－88・89グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北１度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.4m×短軸0.9m×深さ0.46m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層中段まで掘削し、平坦に構築されている。壁は短軸辺たる南北面は傾斜した立ち上がりだが、東西面は底面からほぼ垂直に立ち上がっており部分的にややオーバーハングしているところもある。

〈覆　　土〉 単一層で暗灰褐色土主体だがロームブロック等が多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－710（第341図、図版201）

〈検出位置〉 ３区北東部の KN－87グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北10度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.9m×短軸1.0m×深さ0.3m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦だが中央付近から北壁、西壁にかけて若干窪んでいる。壁は西面はほぼ垂直に近い立ち上がりだが、他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SK－717（第341図、図版201）

〈検出位置〉 ３区北壁近くの KR－94・95グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 北側上部を若干壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北83度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸1.2m×深さ0.3m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが上層が２／３程を占めている。堆積状態は南西側からの自然埋没の様相を呈しており、特に北東壁際では上層が底面にまで達している。土質はともに暗灰褐色土主体だが下層は色調がやや暗い。

〈出土遺物〉 なし。

SK－730（第341図、図版201）

〈検出位置〉 ３区中央西寄りの IT－106・107グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。北東壁はやや外側に湾曲しており楕円に近い。

〈主　　軸〉 北17度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.1m×短軸0.8m×深さ0.44m。

〈底面・壁〉 底面は中央部は平坦だが壁際にかけてやや傾斜している。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は中層が黒灰褐色土、他は暗灰褐色土が主体で、上層にはロームブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－735（第341図、図版201）

〈検出位置〉 ３区中央やや西寄りの JH－101グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北６度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.4m×短軸0.9m×深さ0.28m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削し平坦に構築されている。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ３層に分けられるが上層が１/２程を占めほぼ平坦に堆積している。土質は下層が暗灰褐色土を主体とする他は黒灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－748（第341図、図版202）

〈検出位置〉 ３区北西寄りの KA－107グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北10度西を指向する。 〈規 模〉 長軸1.7m×短軸1.1m×深さ0.24m

〈底面・壁〉 底面は南側がやや窪んでいるものの全体としては平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 北壁下に僅かに褐色土の堆積がある他は、暗灰褐色土を主体としたほぼ単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－760（第341図、図版202）

〈検出位置〉 ３区北西寄りの KH－102グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。やや楕円がかっている。

〈主 軸〉 北17度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.7m×短軸0.9m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹している。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆 土〉 黒灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SK－763（第341図、図版202）

〈検出位置〉 ３区北側の KI－95・96グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 A。

〈主 軸〉 北10度東を指向する。 〈規 模〉 長軸1.8m×短軸1.0m×深さ0.38m。

〈底面・壁〉 底面は中央部がやや窪んでいるものの全体としては平坦で、壁は全面とも底面から急角度で

立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく２層に分けられるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質はともに暗灰褐色土主体だが下層には黒褐色土粒子が多量に混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－764（第341図、図版202）

〈検出位置〉 ３区北西寄りの KH－104・105グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 南側は撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。西壁部分が若干外側に湾曲している。

〈主　　軸〉 北78度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸0.9m×深さ0.2m

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削し平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 暗灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SK－906（第342図、図版203）

〈検出位置〉 ４区東側の ME－44グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 A。やや楕円形に近い。

〈主　　軸〉 北75度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.6m×短軸0.9m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面は、南壁際が一段盛り上がっているが他はほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土を主体とした単一層だが明灰褐色土粒子を少量含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

SK－863（第342図、図版203）

〈検出位置〉 ４区中央北寄りの NK－57グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南東隅は SK－874と重複しておりこれに壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。南壁はやや外側に湾曲している。

〈主　　軸〉 北30度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.55m×短軸1.0m×深さ1.2m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく２層に分けられるが、上層が２／３程を占めている。土質は上層は黒灰褐色土が、下層は暗灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SK－880（第342図、図版203）

〈検出位置〉 ４区中央北寄りの NI－53グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 南半分は上面が20cm 程壊され、また中央部には幅60cm 程の溝状の撹乱が横断しており、これに底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北40度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸1.0m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 南側は上部が壊されているため最下層のみの単一層だが、北側は大きく３層に分けられ、土質は共に黒灰褐色土が主体で、中層には暗褐色土粒子が少量、上層には黒褐色土粒子が多量含まれている。

〈出土遺物〉 なし。

SK－904（第342図、図版203）

〈検出位置〉 ４区東側の LH－43グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 覆土中央部上面が若干壊されている。

〈形　　状〉 長方形 A。

〈主　　軸〉 北20度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.15m×短軸0.8m×深さ0.15m

〈底面・壁〉 底面は所々凸凹があるものの全体としてはほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は覆土土質から判断して中世以降に構築されたものと推測されるが、SF－１の路面上に構築されていことを考えると同道路跡の存続時期を考察するうえで意義のある土坑であると思われる。

SK－212（第342図、図版204）

〈検出位置〉 ２区東壁際の JN－54グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。　　〈遺存状態〉 上面を少し壊されている。

〈形　　状〉 長方形 B。南北壁はやや外側に湾曲している。

〈主　　軸〉 北６度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.0m×短軸0.76m×深さ0.46m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されており、ほぼ平坦である。東西壁は底面から垂直に立ち上がっているが、南北壁は急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが上層が大半を占めており、特に南側では底面まで達している。土質はともに黒灰褐色土主体だが、上層にはより多くロームブロックが混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑南西７m 程の所に平面形の規模・形状が類似した SK－213が位置する。検出面からの深さこそ異なるものの覆土内土質等も似ていることから両土坑は同時期に同様の目的をもって構築された遺構であると推測される。

SK－213（第342図、図版204）

〈検出位置〉 ２区東壁際の JL･JM－56グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。　　〈遺存状態〉 上部を壊されている。

〈形　　状〉 長方形 B。南壁はやや外側に湾曲している。

〈主　　軸〉 北７度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.42m×短軸0.84m×深さ0.10m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体の単一層でロームブロックを少量含む。

〈出土遺物〉 なし。　　〈特徴・性格〉 SK－212参照。

SK－746A・B（第342図、図版204）

〈検出位置〉 ３区中央やや北西寄りの JM・JN－108・109グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 西壁中央部は撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形 B。長方形が２個重複している。

〈主　　軸〉 A は北７度、B は北10度東を指向する。

〈規　　模〉 長軸4.3m×短軸は南辺1.25m、北辺0.95m×深さは南側0.6m，北側0.5m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されており、中心部で10cm 程の段差になっている他は平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられるが下２層は南北に切り合っている。土質は共に暗灰褐色土主体だが、下２層にはロームブロックが多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は平面形及び規模からして２基の土坑が重複している可能性が高かったが、プラン検出時には明確に確定することはできなかった。そこで同一遺構として調査したが、断面調査により２基の重複であること、そして B が A の後に構築されていることがほぼ確認できた。ただ覆土土質の違いは非常に微妙であり、このことから両土坑の構築ないし存続時期、少なくとも埋没時期差はあまりないと考えられる。

SK－720（第343図、図版204）

〈検出位置〉 ３区東壁近くの KM－78グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好

〈形　　状〉 長方形 B。東壁以外はやや楕円がかっている。

〈主　　軸〉 北18度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.4m×短軸0.5m×深さ0.4m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており、南側は平坦だが北側はやや鍋底状に湾曲している。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ４層に分けられるが最下層が１／２程を占めている。下２層は中央が盛り上がった堆積状態で、上２層はその上を南北に分かれて堆積している。土質は全層とも暗灰褐色土主体で褐色土ブロックが中層には多量に、また最下層にも少量含まれている。

〈出土遺物〉 なし。

SK－759（第343図、図版205）

〈検出位置〉 ３区北西寄りの KF・KG－99・100グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 B。

〈主　　軸〉 北17度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.0m×短軸0.8m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面はやや凸凹している。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体の単一層。　　〈出土遺物〉 なし。

SK－778（第343図、図版205）

〈検出位置〉 ３区北西隅の KS･KT－110グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 B。

〈主　　軸〉 北10度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.4m×短軸1.0m×深さ0.26m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削しほぼ平坦に構築されている。底面中央付近から南壁にかけて厚さ２cm 程の硬化面が分布している。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 底面の硬質部分を除けば暗灰褐色土を主体とした単一層である。硬質部分も土質は暗灰褐色土が主体となっている。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑に規模・形状の類似した同時期のものと思われる土坑は調査区内でも何基か検出されたが、底面に硬化面が分布したものは本土坑だけである。それゆえ、同型の他の土坑の性格を考察する上で本土坑の意義は大きいと思われる。

SK－793（第343図、図版205）

〈検出位置〉 ４区中央西寄りの MM･MN－65グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。　　〈遺存状態〉 上部はグランド造成工事により削平されている。

〈形　　状〉 長方形 B。

〈主　　軸〉 北12度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.9m×短軸0.9m×深さ0.46m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層中段まで掘削して構築されておりほぼ平坦である。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ３層に分けられ下層は北壁から南壁にかけて満遍なく堆積しているが、上２層は中央付近で南北に分かれている。土質は全層とも暗灰褐色土を主体とするが、北側上層にはロームブロックが少量混入している。

〈出土遺物〉 なし。

SK－838（第343図、図版205）

〈検出位置〉 ４区南側の MG－53・54グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。　　〈遺存状態〉 上部をグランド造成工事により削平されている。

〈形　　状〉 長方形 B。

〈主　　軸〉 北70度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.4m×短軸0.7m×深さ0.38m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されているがやや凸凹している。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がるが壁面はやや波打っている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられるが下層が２/３程を占める。土質はともに黒色土主体だが下層にはロームブロック、暗褐色土粒子が多く含まれている。堆積状態からは自然埋没であると思われる。
〈出土遺物〉 なし。

SK－908（第343図、図版206）
〈検出位置〉 ４区南東隅の MG－43グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。
〈遺存状態〉 南壁部分は底面近くまで撹乱により壊されている。
〈形　　状〉 長方形 B。
〈主　　軸〉 北14度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.35m×短軸1.05m×深さ0.12m。
〈底面・壁〉 底面は所々凹凸があるもののほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ２層に分けられるが、下層は底面から４cm 程の厚さでまばらに堆積しているのみであり上層が大半を占めている。土質は上層が黒灰褐色土、下層は褐色土を主体とするが上層には明灰褐色土粒子が少量含まれている。
〈出土遺物〉 坑内からは土師器の坏片２点と甕片５点が出土したがいずれも小片である。

SK－910（第343図、図版206）
〈検出位置〉 ４区南寄りの ME－55、MF－55・56グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。　　〈遺存状態〉 上部をグランド造成工事により削平されている。
〈形　　状〉 長方形 B。
〈主　　軸〉 北65度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.5m×短軸0.7m×深さ0.28m。
〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面から急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 ３層に分けられ全層ともロームブロック混じりの黒灰褐色土を主体とするが、中層程ロームブロックの混入が多い。
〈出土遺物〉 なし。

SX－23（第343図、図版206）
〈検出位置〉 ２区北壁近くの LM－54・55グリッドに位置する。
〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。
〈形　　状〉 長方形 B。東西壁はやや丸味を帯びている。
〈主　　軸〉 北11度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.6m×短軸0.9m×深さ0.3m。
〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されており、所々凹凸があるものの全体としては平坦である。南北壁は底面近くがやや湾曲しているもののほぼ垂直に立ち上がっており、東西壁は底面からやや急角度で立ち上がっている。
〈覆　　土〉 大きく２層に分けられるが、下層が大半を占めており上層は中央部に堆積しているにすぎない。土質は共に黒灰褐色土主体だが下層はより締まっている。
〈出土遺物〉 なし。

SX－14（第344図、図版206）

〈検出位置〉 ２区東壁際の II･IJ－58グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 B。

〈主 軸〉 北８度東を指向する。 〈規 模〉 長軸3.7m×短軸1.2m×深さ0.12m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ２層に分けられ、上層が３/４程を占めている。堆積状態は北壁際が流れ込み状であるものの全体的にはほぼ平坦である。土質はともに黒灰褐色土を主体とするが下層は上層に比べより締まっている。

〈出土遺物〉 なし。

SX－48（第344図、図版207）

〈検出位置〉 ２区ほぼ中央の JP－62・63グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。 〈遺存状態〉 上部を既存の野球場により若干削平されている。

〈形 状〉 長方形 B。

〈主 軸〉 北89度西を指向する。 〈規 模〉 長軸2.2m×短軸0.6m×深さ0.14m。

〈底面・壁〉 底面は東西壁際がやや窪んだ状態になっており、壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 暗灰褐色土主体の単一層。 〈出土遺物〉 なし。

SX－95（第344図、図版207）

〈検出位置〉 ２区南側の IL･IM－66～68グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。 〈遺存状態〉 良好。

〈形 状〉 長方形 B。南壁中央西寄り部分は出張っており別遺構が絡んでいた可能性もある。

〈主 軸〉 北２度西を指向する。

〈規 模〉 長軸6.3m×短軸0.9m（中央出張り部分1.2m）×深さ0.18m。

〈底面・壁〉 底面は中央部の別遺構が絡んでいると思われる部分はかなり凸凹しているが、他は多少凹凸があるもののほぼ平坦に構築されている。壁は南壁出張り部は傾斜した立ち上がりだが、他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆 土〉 ３層に分けられるが下層が１/２程を占めており堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上２層は灰褐色土が下層は暗褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし

〈特徴・性格〉 本遺構は調査区内で検出された長方形 B 類の中でも特に規模が大きい。それゆえ、他とは異なった機能･性格を有した遺構であったと考えられるが､出土遺物等もなく確認するには至らなかった。

SK－867（第344図、図版207）

〈検出位置〉 ４区北壁近くの NL－58グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北壁上面に一部撹乱が絡むものの比較的良好である。また、西壁突出部分は断面より別遺構

と思われる。

〈形　　状〉 長方形 B。（芋穴）南壁はやや外側に湾曲している。

〈主　　軸〉 北13度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.9m×短軸0.9m×深さ0.48m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されており平坦である。南壁は傾斜した立ち上がりで上部に崩落と思われる傾斜があるが、他は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 南側が大きく３層に分けられるが北側は単一層でこれが南壁下まで達しており覆土の大半を占めている。土質は全層とも黒灰褐色土が主体であるが、上層には灰褐色土粒子が、下層には暗褐色土ブロックがそれぞれ少量含まれている。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は構築状態および規模・形状からして芋穴として利用されていたと思われる。

SK－745（第345図、図版207）

〈検出位置〉 ３区西寄りの JN－105、JO－105グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 B。（芋穴）

〈主　　軸〉 北１度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸3.0m×短軸1.0m×深さ0.46m。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層上面まで掘削して構築されており平坦である。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 中央部は３層に分けられるが南側は下層の単一層で、北側は上層・中層の２層が堆積しており南側から埋没していった自然堆積と思われる。土質は全層とも暗灰褐色土主体だが上層に少量、下層には多量にロームブロックが混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑も芋穴として利用されていたと思われる。

SX－20（第345図、図版208）

〈検出位置〉 ２区北東隅の LL･LM－48グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 B。（芋穴）

〈主　　軸〉 北３度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸3.0m×短軸0.9m×深さ0.5m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削しほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ５層に分けられ堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層に暗灰褐色土が最下層に暗褐色土がそれぞれ僅かに堆積しているが、覆土の大半は黒灰褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 なし。

SX－21（第345図、図版208）

〈検出位置〉 ２区北東の LM･LN－51グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 長方形 B。(芋穴)

〈主　　軸〉 北13度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸3.0m×短軸1.0m×深さ0.26m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ２層に分けられ南側は下層が大半を占めるが、北側は上層が底面近くまで達している。土質は共に黒灰褐色土を主体とするが下層はややしまりが弱い。

〈出土遺物〉 須恵器甕の底部片が１点出土した。

SX－35（第344図、図版208）

〈検出位置〉 ２区北西の LC･LD－71グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層中段。　　〈遺存状態〉 上部はグランド造成工事により削平されている。

〈形　　状〉 長方形 B。(芋穴)

〈主　　軸〉 北30度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.5m×短軸0.9m×深さ0.16m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦に構築されており、壁は部分的にオーバーハングしているが全体的には底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土が主体の単一層だがロームブロックを多く含んでいる。

〈出土遺物〉 なし。

③ 特 殊 遺 構

SK－1（第346図、図版209）

〈検出位置〉 １区北西の MC－106グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 良好だが、当初撹乱と思い掘削したため覆土上部を削ってしまった。

〈形　　状〉 不整楕円形。

〈主　　軸〉 北７度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.44m×短軸0.96m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は南壁・西壁は傾斜した立ち上がりだが、北壁・東壁は底面より10cm位上からは緩やかに傾斜して立ち上がっている。

〈覆　　土〉 残存覆土は２層に分けられ、土質は上層が黒灰褐色土、下層は茶褐色土が主体である。

〈出土遺物〉 底面近くから寛永通宝11枚とそれを包んでいたと思われる革の破片数点、および切羽１枚が出土した。

〈特徴・性格〉 本土坑は、やや小規模ながら出土遺物から判断して近世の土坑墓と思われる。

SK－2（第346図、図版209）

〈検出位置〉 １区北壁際の MI･MJ－97グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 全体としては不整形だが西壁以外はほぼ長方形を呈する。

〈主　　軸〉 北５度西を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.30m×短軸0.66m×深さ0.66m。

〈底面・壁〉 底面南側に径30cm 程のピットがあり、北側底面は壁下からこのピットにかけて大きく傾斜

して下がっている。ピット底面は径20cm 程の円形で、Ⅳ層中段まで掘削して構築されており平坦である。壁は西壁上部がテラス状になっている他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 大きく３層に分けられるが上層の明褐色土主体土が１/２程を占めている。

〈出土遺物〉 坑内より焙烙片が出土した。

SX－10（第346図、図版209）

〈検出位置〉 ２区中央やや西寄りの JN･JO－70・71グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 上部が若干壊されているもののほぼ良好である。

〈形　　状〉 長方形。

〈主　　軸〉 北88度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸1.2m×短軸0.9m×深さ1.3m。

〈底面・壁〉 底面はⅤ層上面近くまで掘削して構築されておりほぼ平坦だが、北東隅は僅かに円形状に窪んでいる。壁は全面とも底面から垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 底面に厚さ４cm 程の炭化物層がある他は暗灰褐色土主体の単一層である。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本遺構は底面に炭化物が堆積していることから考えれば、当時のゴミ等を焼却した穴とも思われるが、壁面に被熱の痕跡は確認されていないこと及び形状の規則性からして別の目的・機能を有した遺構であった可能性が高いと思われる。なお、壁面の遺存状態および覆土の堆積状態からして、構築後間もない時期に人為的に埋め戻されたものと推測される。

SK－744（第346図、図版209）

〈検出位置〉 ３区中央やや北寄りの JP－99・100グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 中央南寄り付近から東壁にかけて撹乱により底面まで壊されている。

〈形　　状〉 長方形。

〈主　　軸〉 北13度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸3.2m×短軸1.5m×深さ0.2m。

〈底面・壁〉 底面は平坦に構築されており、壁は全面とも底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

〈覆　　土〉 黒灰褐色土主体の単一層。

〈出土遺物〉 なし。

SK－691（第346図、図版210）

〈検出位置〉 ３区北側東壁近くの KD－80グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 東側は撹乱により底面近くまで壊されている。

〈形　　状〉 東側が壊されているため定かではないが、残存部平面形は北西隅が方形がかっているものの全体としては不整形である。

〈主　　軸〉 北13度東を指向する。

〈規　　模〉 南北軸1.7m×東西軸は残存部で1.2m×深さ1.0m。

〈底面・壁〉 底面は不整楕円形で、Ⅳ層中段まで掘削して構築されているがやや凸凹している。壁の東西

面は底面から20cm 位までは急角度で立ち上がるが、そこから上は撹乱部分まで緩やかに傾斜している。他の壁面は中段で１度外側に向かって屈折するものの全体としては底面から60度程の傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 ほぼ均一に３層に分けられるが堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層が暗灰褐色土、中層は黒灰褐色土、下層は褐色土主体だが全層にわたりロームブロックが多く混入している。

〈出土遺物〉 なし。

〈特徴・性格〉 本土坑は調査区内で検出された他の土坑に比してかなり深く掘削して構築されている。それゆえ、他とは異なった機能、性格を有していたものと思われるが出土遺物もなく確認するには至らなかった。

SK－907（第346図、図版210）

〈検出位置〉 ４区南東の MD･ME－43グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 柄鏡型。

〈主　　軸〉 北12度東を指向する。　　〈規　　模〉 長軸2.1m×主体部径1.5m×深さ0.22m。

〈底面・壁〉 底面はⅢ層上面まで掘削して構築されておりほぼ平坦だが、壁際はやや緩やかに盛り上がっている。また北壁下には外側にやや突出した状態の径約20cm，深さ５cm 程のピット状の窪みが検出された。壁は北面部分がやや緩やかな傾斜を呈するものの全体としては底面からほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 南壁部および北壁下に若干の褐色土層がある他は黒褐色土を主体とした単一層であるが、暗灰褐色土粒子が多く混入している。

〈出土遺物〉 遺構内からは土師器甕片が３点出土したがいずれも小片であり埋没時に混入したものと思われる。

〈特徴・性格〉 本土坑の性格は明らかでなく当初土坑（SK）として調査したがむしろ特殊遺構（SX）とすべきかもしれない。構築時期は土質から判断して中世以降と思われる。

SX－73（第347図、図版211・212）

〈検出位置〉 ３区南壁際の HK･HL－83～86、HM･HN－84・85、グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉 北東部は撹乱により底面まで壊されている。また、南側１／４程は調査区外のため未調査である。なお、本遺構は当初撹乱と思い掘削したため覆土上部をかなり壊してしまった。

〈形　　状〉 残存部分から推測される平面形は張出し部を北側にもった柄鏡型を呈する。張出し部は５段程の階段状になっている。

〈主　　軸〉 張り出し部はほぼ南北方向を指向する。

〈規　　模〉 主体部径8.2m×張出し部は長軸2.4m×短軸1.4m×主体部底面までの深さは1.8m を測る。

〈底面・壁〉 底面はⅣ層中段まで掘削して平坦に構築されているが、中央部は半円状に盛り上がっている。盛り上がり部分の規模は径約3.5m 中心の高さは約40cm を測り、上部に４基、周辺部に12基のピットが検出された。上部のピットは全てほぼ円形で、規模は径約40cm 深さは25～30cm、周辺部ピットは、ほと

んどがほぼ長方形で規模は長軸約40cm 短軸約20cm で深さは26～52cm を測る。また、北東壁下には幅30cm 深さ10cm 程の周溝状の溝が確認された。壁は全面とも底面から70cm 位まではほぼ垂直に立ち上がるが、それより上は外側に向かって急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉 上部を壊してしまったためはっきりしないが、残存覆土は４層に分けられ堆積状態からは人為的な埋め戻しか否か不明である。土質は黒色土、灰褐色土が主体でともにロームブロックを多く含んでいる。

〈出土遺物〉 ピット内から釘状の鉄片が１点出土した。その他底面及びピットからは、拳大よりやや小さめな自然礫が多数出土した。ピット内の礫は、支脚等の根固めのためと思われるが、底部に固く充填されていた。

〈特徴・性格〉 本遺構は、構造上の特徴および規模、形状からして第二次世界大戦中の高射砲設置跡ではないか云う意見もあったので、防衛研究所図書館や近隣在住の年配者などにも問い合わせてみたが確証を得ることはできなかった。ただ、高射砲設置跡ではなかったとしても、構造上の特徴からして、何らかの特殊な性格を有した遺構であったと推測される。

SX－86（第348図、図版210）

〈検出位置〉 ４区北壁近くの MS･MT－74グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉 Ⅳ層上面。

〈遺存状態〉 上部はグランド造成工事により削り取られており、また東側１/４位は更に１m 程深く壊されている。

〈形　　状〉 残存部分から推測される平面形は円形だが、確認面から90cm 程下では一辺が約80cm、底面では約30cm のやや歪んだ正方形を呈する。

〈規　　模〉 径約1.8m×深さ1.7m。

〈底面・壁〉 底面はⅦ層上面まで掘削して構築されておりほぼ平坦である。壁は全面とも底面から約45度位の傾斜で立ち上がっている。なお、底面から80cm 位までの壁面には工具痕と思われる深い筋状の溝が多数確認された。

〈覆　　土〉 大きく11層に分けられる。堆積状態は所謂レンズ状を呈しており、このことからすれば自然埋没とも思われるが、覆土の締まり具合等も考慮すれば人為的埋め戻しの可能性も否定できない。土質は全体的に黒色土が主体だが中層を中心にローム粒が多く混入した層が多い。

〈出土遺物〉 上層に集中して陶器片・瓦片が数点、礫が約70点程出土した。礫は拳大のものが大半だが径約30cm 程のものも含まれていた。また礫のなかには被熱によるものと思われるが部分的に赤化したものも数点含まれていた。

〈特徴・性格〉 本遺構は、調査区内でも特異な形態であり他に類似した遺構は検出されていない。規模も平面では一般的だが、深さは1.7m 程あり調査区内では最も深い。特に上部の削平を考えると構築時には2.0m 位の深さであったと思われる。それゆえ、本遺構がどのような機能・性格を有した遺構であったかは興味深いが、決め手となる様な遺物等の出土はなかった。また、遺構の性格を検討するためには周囲に検出された他の遺構との関連性等も考慮する必要があるが、本遺構の場合、調査区壁際に位置していること、および既存のグランド造成工事による削平によりほとんど周囲に遺構が検出されなかったこと、更にリン酸分析も行ったが遺構としての性格を確定するには至らなかった。

④ 集 石

SS－2（第348図、図版213）

〈検出位置〉 １区中央やや西寄りの LO－102グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅲ層上面。

〈遺存状態〉 東側半分程は掘り込み底部近くまで撹乱により壊されている

〈形　　状〉 残存部より推定される平面形は不整楕円形で、検出面プラン内には礫が集中していた。礫の下は土坑状に掘り込まれている。

〈主　　軸〉 北10度西を指向する。　　〈規　　模〉 長径1.16m×短径0.84m×深さ0.32m。

〈底面・壁〉 掘り込み底部は凸凹しており、壁は全面とも外側に向かってやや湾曲した様な状態で立ち上がっている。壁面には部分的に被熱の痕跡がみられた。

〈覆　　土〉 ５層に分けられるが、上層が１/２程を占めている。堆積状態からは自然埋没であると思われる。土質は北壁際に朱褐色土、黄褐色土の堆積がある他は、主に暗灰褐色土を主体とした層で焼土粒、ローム粒を多く含んでいる。

〈出土遺物〉 礫は坑内からも多数出土したが上層ほど密集していた。出土礫の総数は約130個に及ぶが、大半は破砕礫で拳大以下のものが多い。他に遺物として炭化物が少量出土した。

〈特徴・性格〉 本集石土坑は、覆土土質及びその締まり具合から判断して時期的にはさほど古くなく、中世ないし近世以降の遺構であると思われる。

SS－20（第349図、図版213）

〈検出位置〉 ４区北東部東壁近くの MT－35グリッドに位置する。

〈検 出 面〉 Ⅱ層上面。SD－33プラン確認時に検出された。

〈遺存状態〉 良好。

〈形　　状〉 礫は楕円状に密集していた。集石下に掘り込みはなかったが、中心部の石ほど深くに位置しており、中心に向かってやや窪んだ気配が窺えた。

〈規　　模〉 礫の密集範囲は長径0.9m×短径0.6m 程である。

〈出土遺物〉 礫の総数は18点だが比較的大きなものが多く、最も大きな礫で長径23cm 短径12cm 厚さ７cm 程ある。石質はチャート１個、ホルンフェルス２個の他は砂岩の自然礫で、半分程は割れていたが集石内での接合関係はなかった。また礫の大半は被熱によるものと思われるが赤化していた。遺物として礫の他に女瓦片が１点出土した。

〈特徴・性格〉 本集石の性格は明らかでない。礫が赤化していることから見れば、礫を集めて焼き調理等をした跡とも考えられるが、集石内に焼土、炭化物等が検出されなかったこと、及び全く被熱を受けた痕跡のない礫も数点含まれていたこと等を併せ考慮すれば一概には断定できないと思われる。

３）遺　物

中世以降の遺物も数は少ないが出土している。大半は遺構外出土で遺構に伴うものは少ない。また遺存状態も悪く、破片ないし小片のものが多い。それゆえ重要と思われるもののみ掲載し、小片等は割愛した。法量等詳細は遺物観察表（CD-ROM 収録）にまとめたので、以下には概要のみ記す。

① 遺 構 出 土 遺 物（第351図**51～62**、図版215）

挿図中**51～62**までは土坑墓と推測されるSK－１からの出土である。このうち**51～61**までは寛永通宝であり、残存は悪いが革成の袋状のものに包まれた状態で出土した。また、**62**の切羽は、これらの古銭から少し離れて出土した。

63はSX－86から出土した。陶器の壷と思われるが底部のみであるため断定できない。

64はSK－２から出土した焙烙の口縁部の破片である。

65はSD－20から出土した磁器の皿。

66と**67**は砥石であるが遺存状態があまり良くない。前者はSD－６から後者はSD－15から出土した。

68はSD－22出土の寛永通宝。

② 遺 構 外 出 土 遺 物（第352図**69～76**、図版215）

69～76までは遺構外出土遺物であり、このうち**69**は煙管の吸い口部分である。**70**は性格不明の金属製品。**71**から**76**までは古銭で、遺存状態が悪く種別不明な**76**以外はすべて「寛永通宝」である。

（伊藤俊治）

③ 表 採 遺 物（第352図**77**、図版216）

表採遺物として取り上げるのは道標銘のある地蔵碑である。この地蔵碑は調査地区西側の府中街道沿いのフェンスの内側に作られた植え込みの中に放置された状態で発見された。頭部および底部の一部が欠損しているが、現在高約50cm、幅24cm、厚さ16cmを測る硬砂岩製の石塔である。角柱型をしており、正面および左右の側面は表面を研磨して成形している。背面は中央をへこませてタガネで整えている。台座は発見されず、碑の底部が欠損しているので、台座に乗っていたか否かは判断できない。

（右側面）右ふちうミち（以下欠）
左こくぶんじ（以下欠）

（正面）
南無地蔵尊
文化十三丙子年
四月　日　国分寺

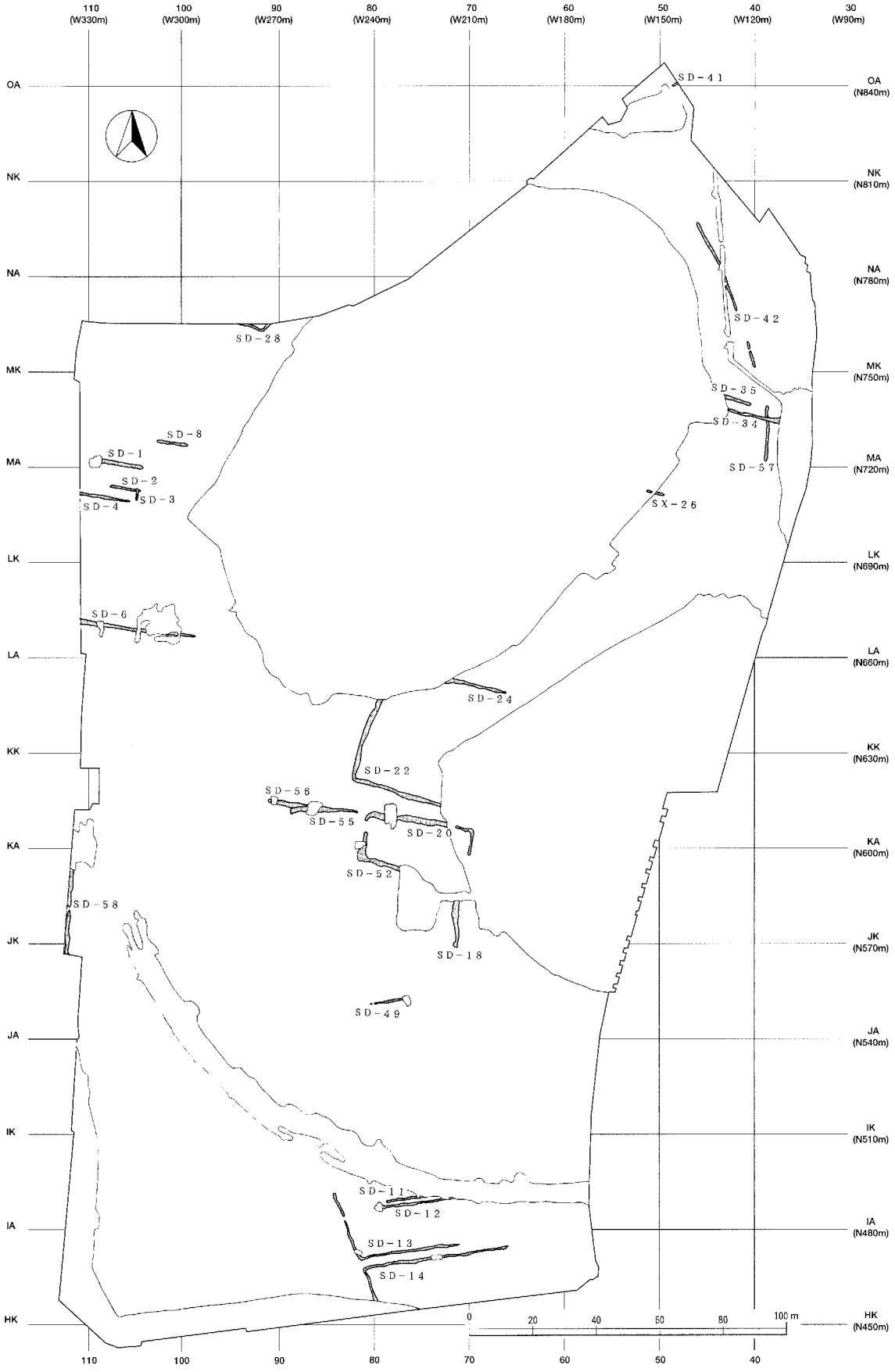
（左側面）村々志　多摩郡恋ヶ久保村（以下欠）
願主坂本重郎右ェ門

正面には大きく「南無地蔵尊」、右側には、「文化十三丙子年」、左側には、「四月　日　国分寺」とある。右側面には２行に分けて「右ふちうミち（以下欠）」（筆者注　府中道）「左こくぶんじ（以下欠）」と道案内の表示がある。左側面には、「村々志」「多摩郡恋ヶ久保村（以下欠）」「願主坂本重郎右エ門」と造立者名が記されている。文化十三年（1816）に建てられた道標を兼ねた地蔵菩薩を祀る文字塔である。

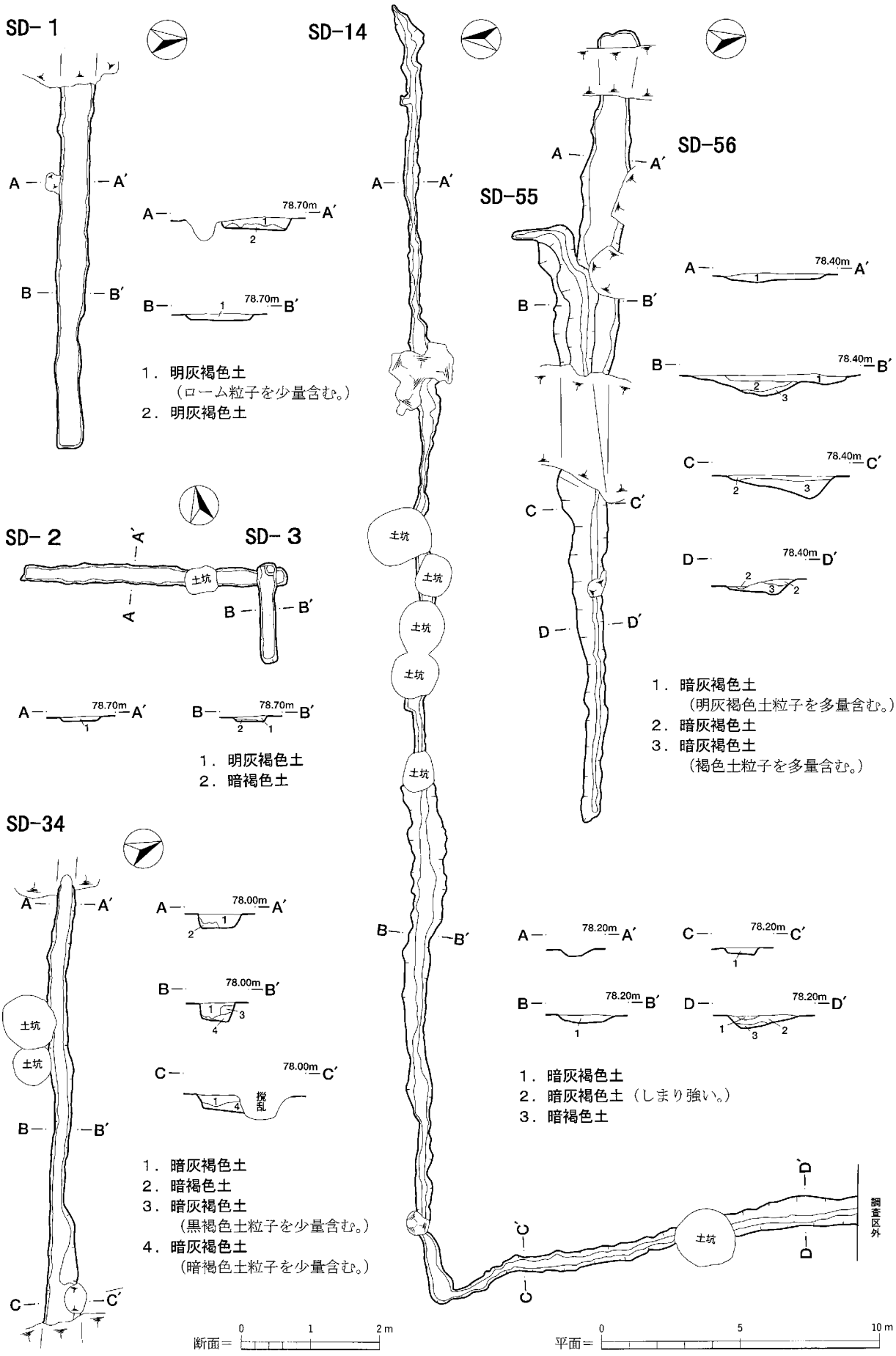
この地蔵碑が残されていた場所は、造立当初の場所ではなく、かつての鉄道学園の造成工事のために移動されているようである。しかし、大正10年測量の２万５千分の１地形図によると、本遺跡調査区内を斜めに横切るように、府中街道から分かれた道路が国分寺村に向かって通っており、その分岐点と本碑が発見された場所はさほど離れていない。この道路は鉄道学園の造成工事で消滅したらしく、今回の発

掘調査では確認できなかったので分岐点の正確な地点は不明である。地図によよればこの分岐点は恋ヶ久保村と国分寺村の境界近くである。本碑は恋ヶ久保村の村民の志をまとめて坂本重郎右エ門が願主となって建てたのであるから、碑の正面は恋ヶ久保村に向けて北向きに建てられたはずで、そうであれば道標銘は碑の東面にあって、国分寺村に通ずる道に面し、分岐点から正確にそれぞれの道の行き先を案内していることになる。したがって、本碑はこの分岐点に建てられていたものと考えてよかろう。

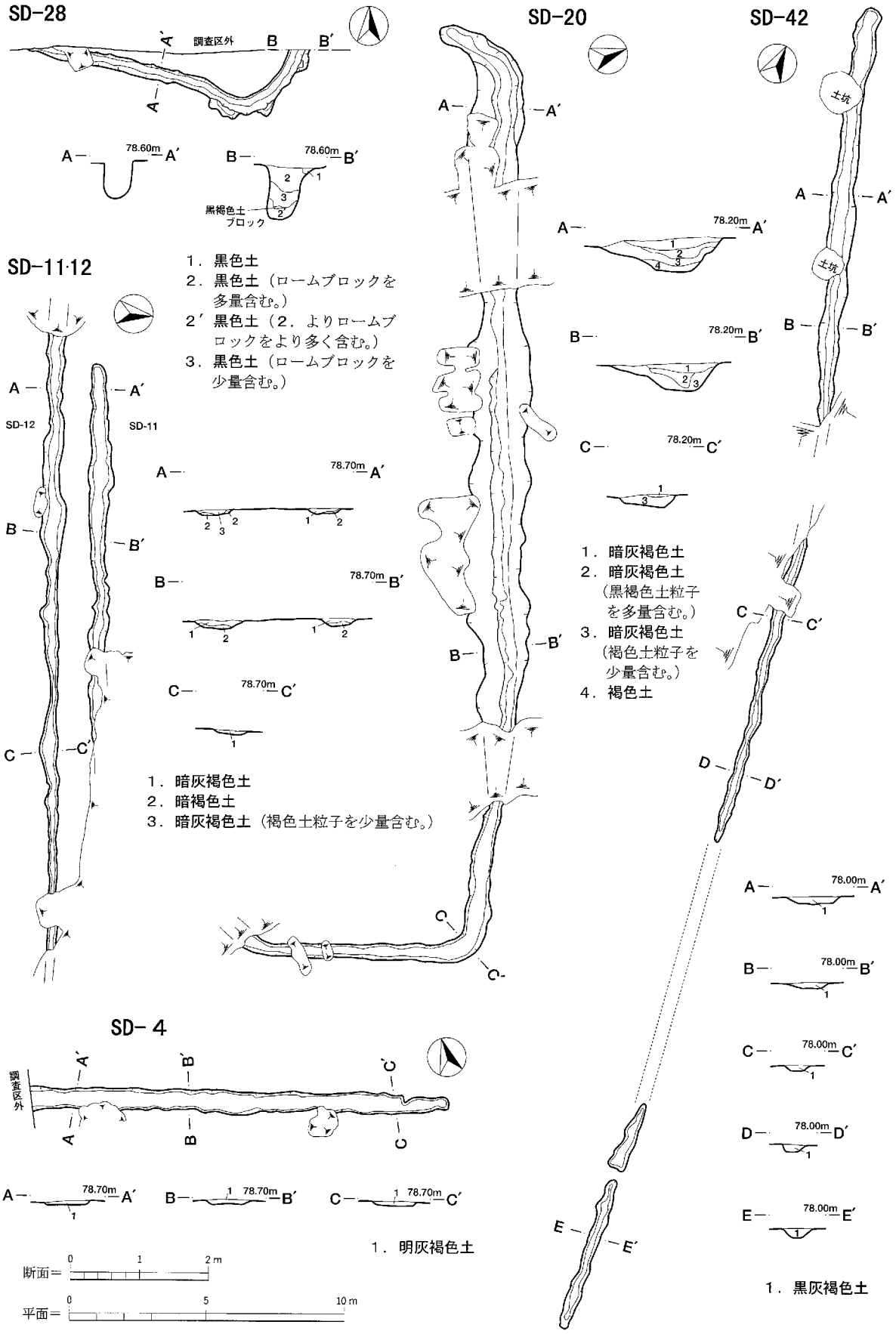
（持田友宏）



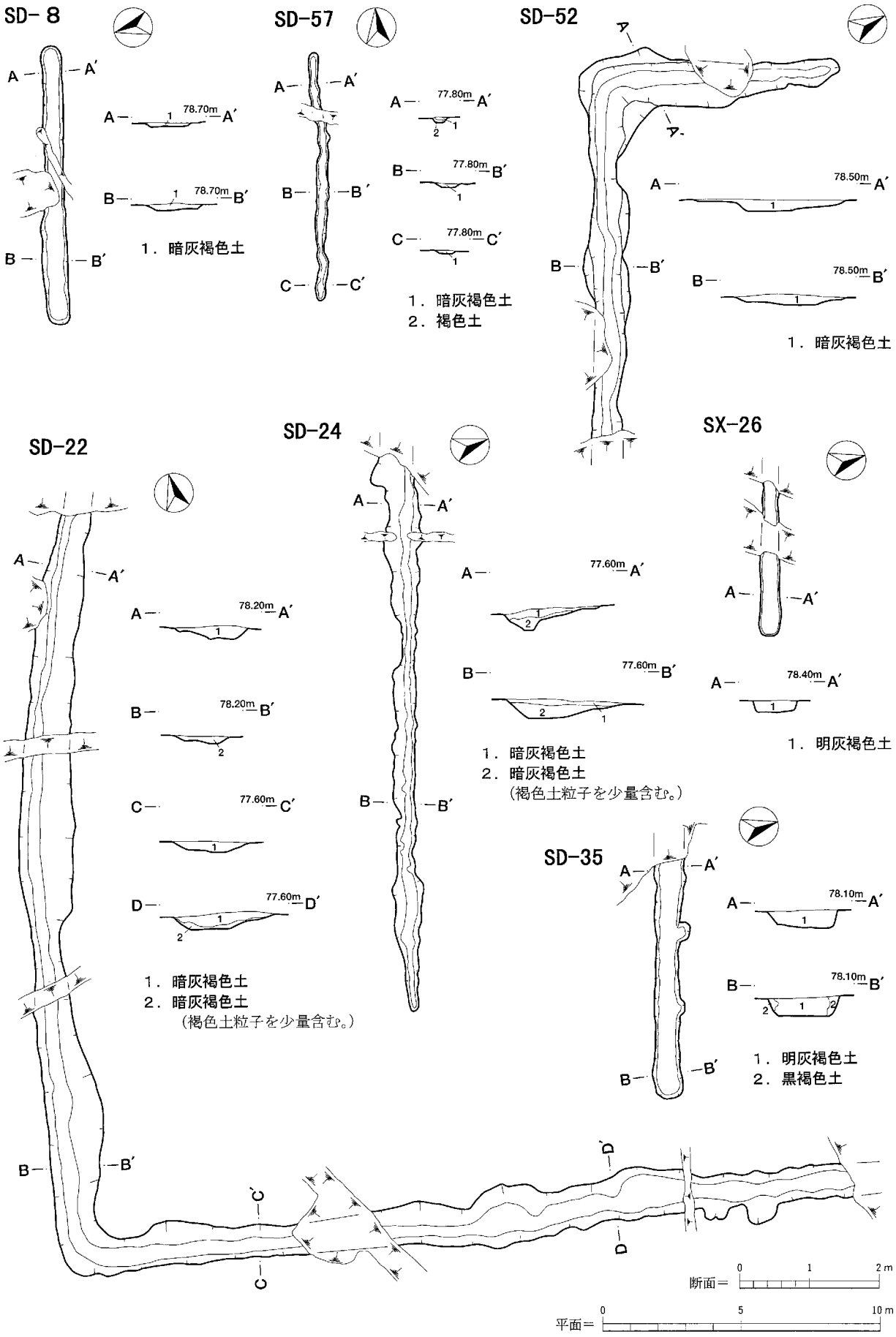
第330図　中世以降 溝跡配置図



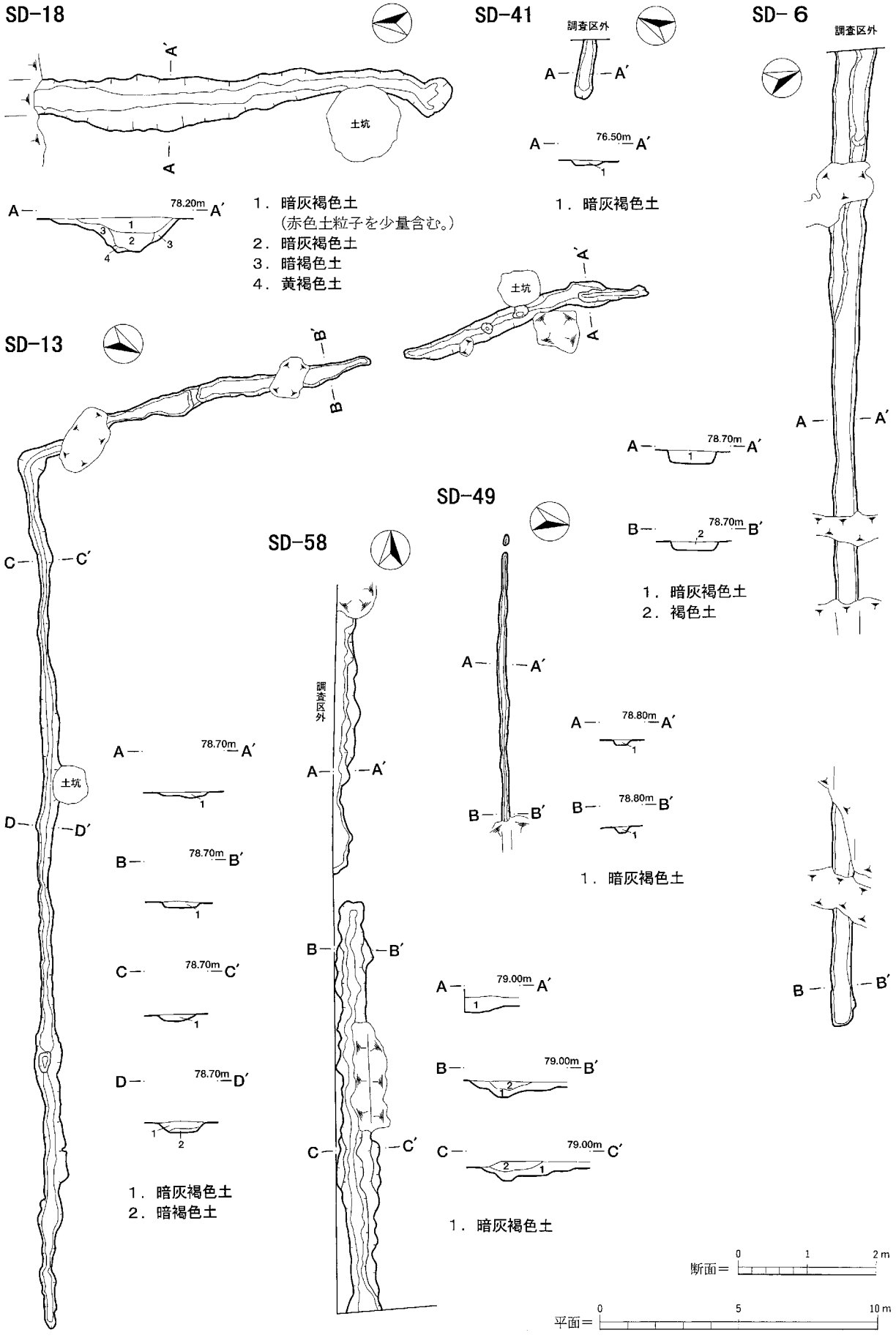
第331図　中世以降 溝跡実測図（1）



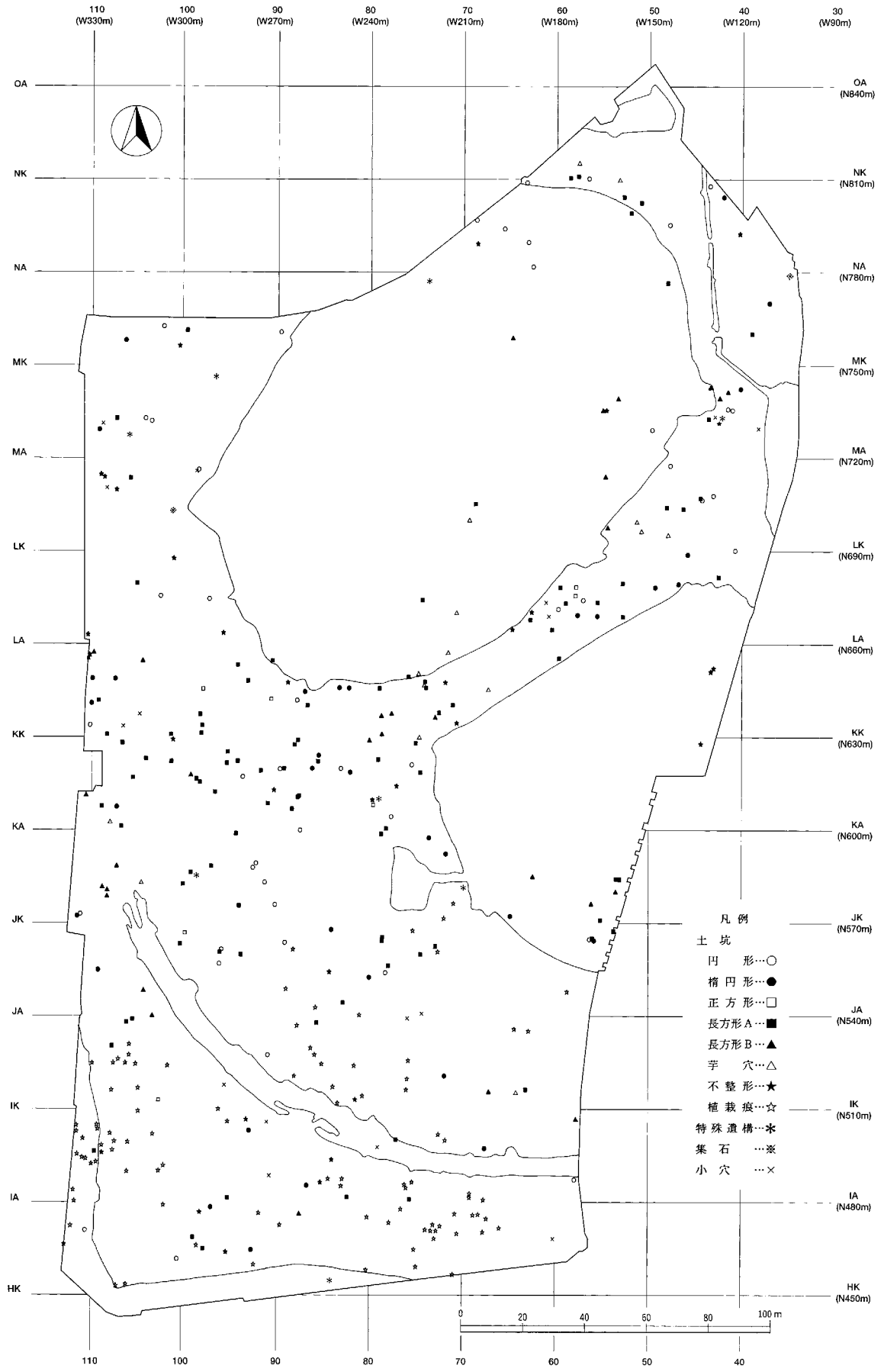
第332図　中世以降 溝跡実測図（2）



第333図　中世以降 溝跡実測図（3）

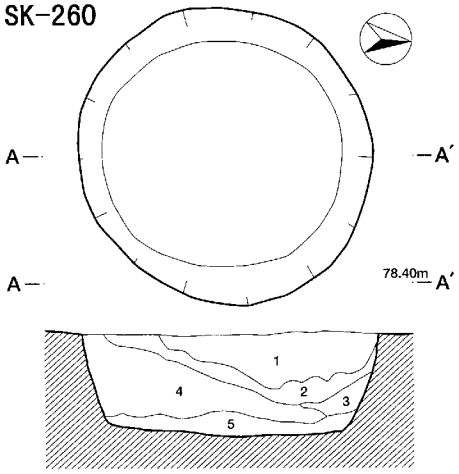


第334図　中世以降 溝跡実測図（4）



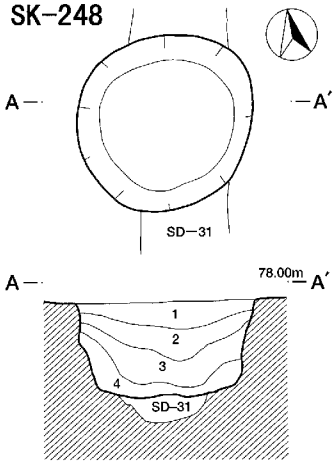
第335図　中世以降 遺構配置図－土坑・特殊遺構・集石・小穴

SK-260



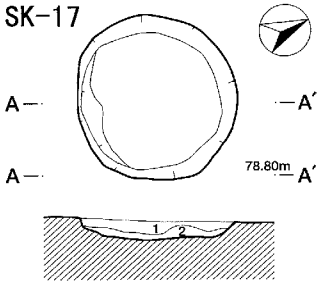
1．黒灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒灰褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む。）
3．黒灰褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
4．黒灰褐色土（1．に類似するがよりしまっている。）
5．黒灰褐色土

SK-248



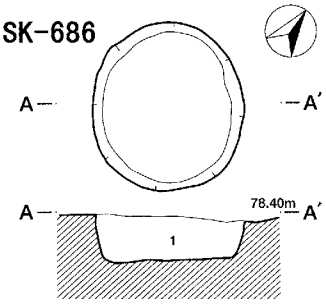
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（褐色土ブロックを少量含む。）
3．暗灰褐色土（褐色土ブロックを微量含む。）
4．黒褐色土

SK-17



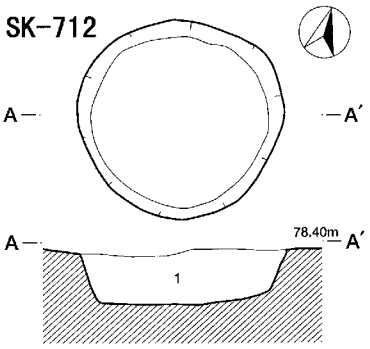
1．黒灰褐色土（暗灰褐色土粒子を多量含む。）
2．黒灰褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む。）

SK-686



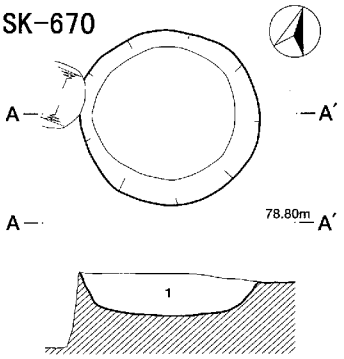
1．黒灰褐色土

SK-712



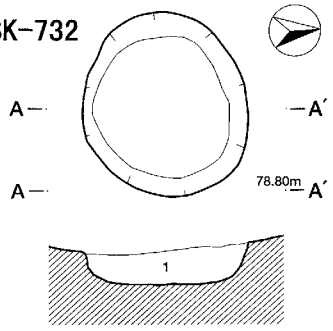
1．暗灰褐色土

SK-670



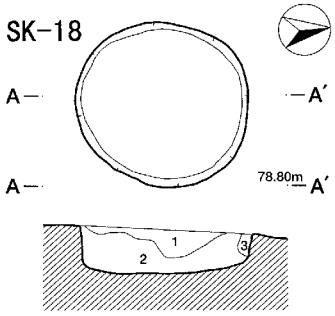
1．明灰褐色土

SK-732



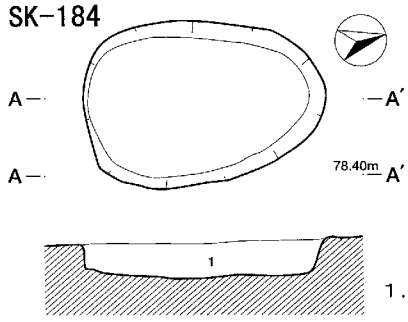
1．黒灰褐色土

SK-18



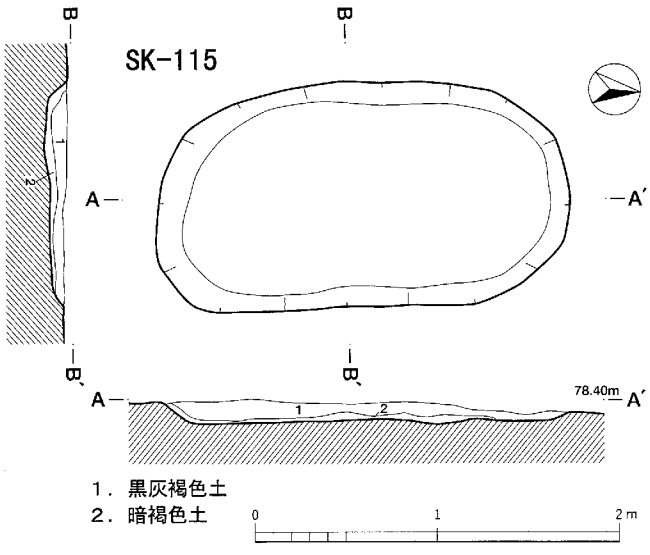
1．明褐色土
2．明褐色土（暗褐色土ブロックを多量含む。）
3．暗褐色土

SK-184



1．黒灰褐色土

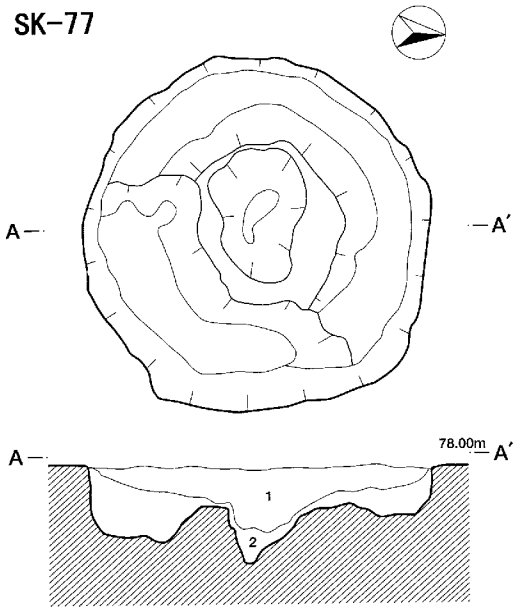
SK-115



1．黒灰褐色土
2．暗褐色土

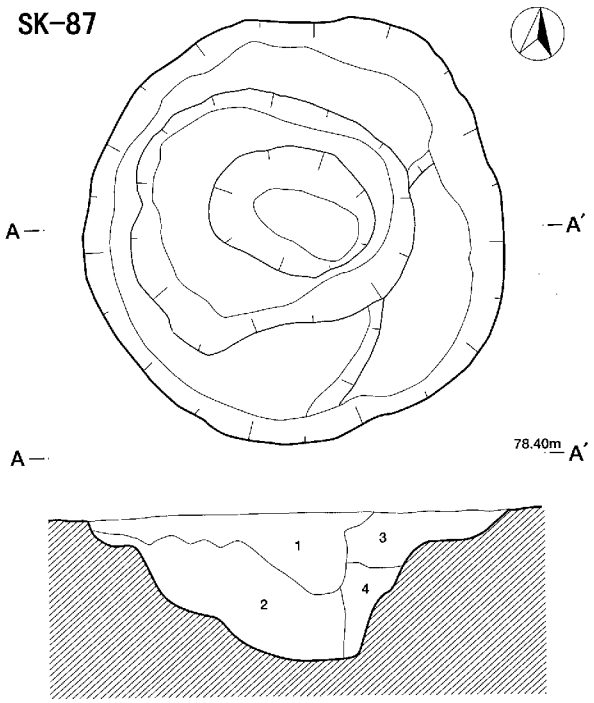
第336図　中世以降 土坑実測図（1）

SK-77



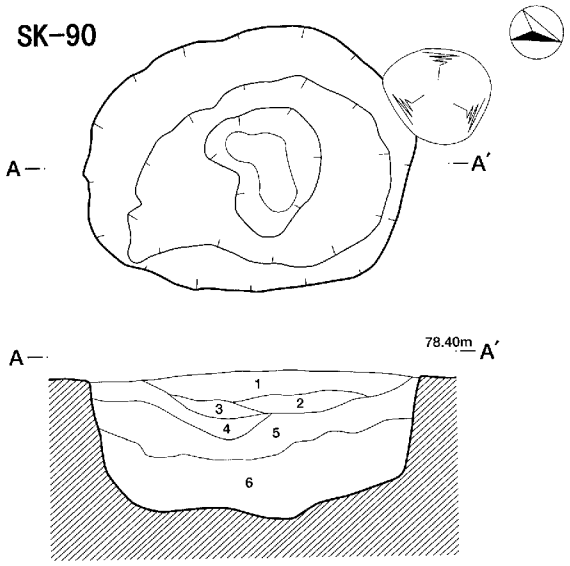
1．暗灰褐色土
2．褐色土

SK-87



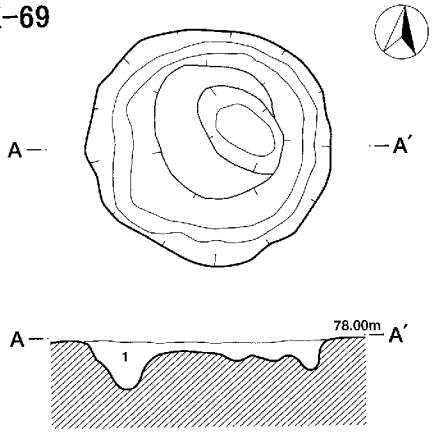
1．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
2．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
3．暗褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
4．暗褐色土

SK-90

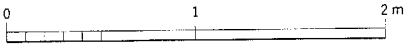


1．暗灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．暗灰褐色土（ローム粒子を少量含む。）
3．黒色土（ロームブロックを少量含む。）
4．黒色土（ロームブロックを多量含む。）
5．黒色土
6．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）

SK-69

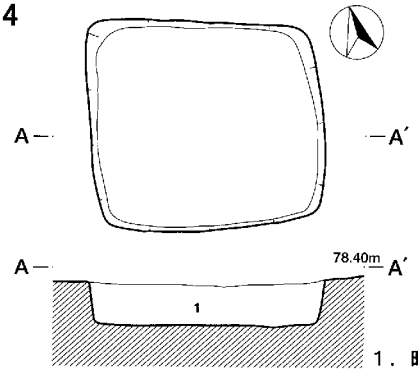


1．暗灰褐色土



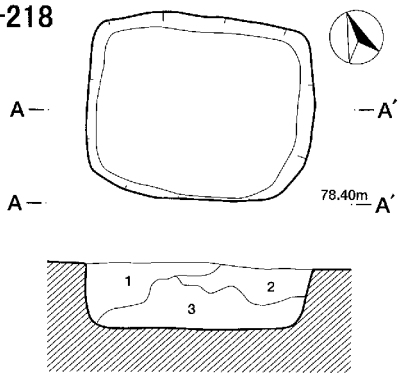
第337図　中世以降 土坑実測図（2）

SK-714



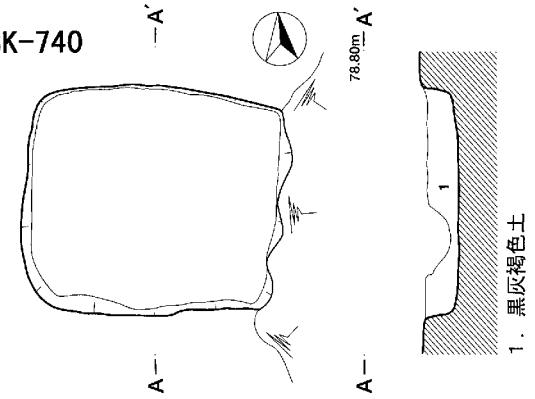
1．暗灰褐色土

SK-218



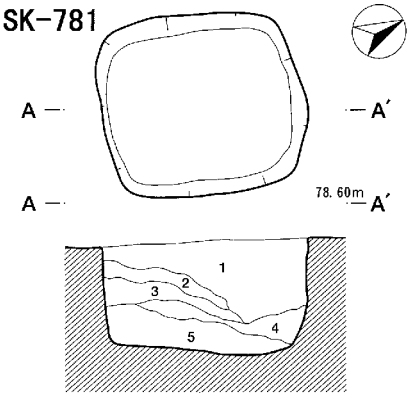
1．暗灰褐色土
2．黒褐色土
3．暗灰褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む。）

SK-740



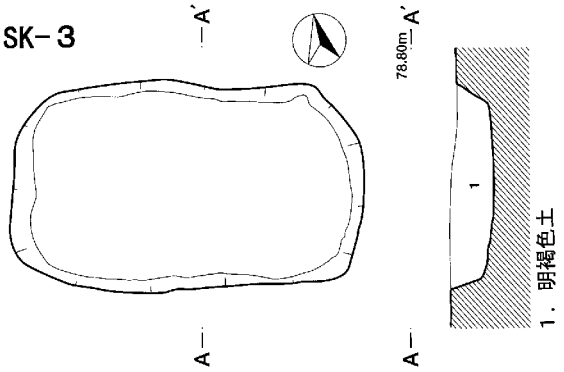
1．黒灰褐色土

SK-781



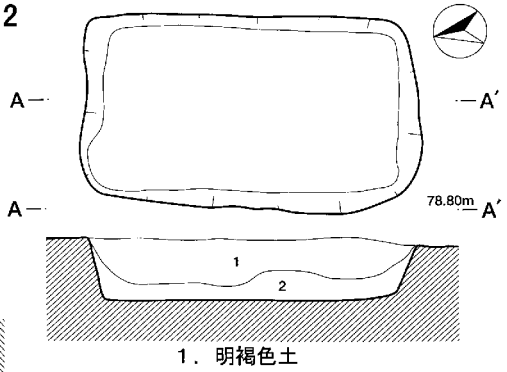
1．暗灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒灰褐色土
3．暗灰褐色土（ローム粒子を少量含む。）
4．黒灰褐色土（2．に類似するがより黒い。）
5．暗灰褐色土

SK-3



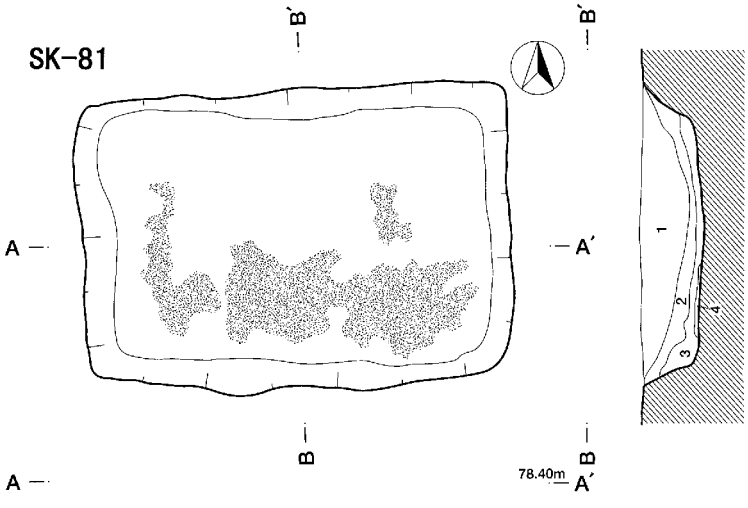
1．明褐色土

SK-12



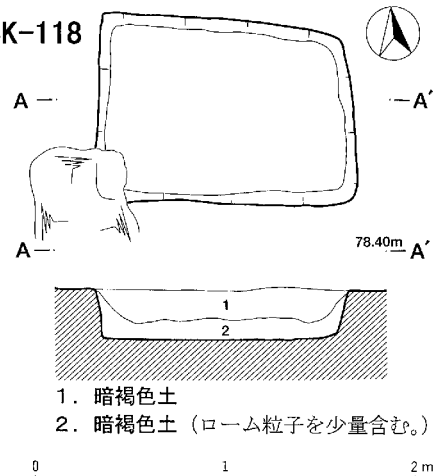
1．明褐色土
2．明褐色土（しまり弱い。）

SK-81

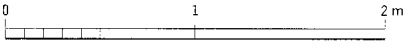


1．灰褐色土
2．黒褐色土
3．暗褐色土
4．暗褐色土（しまり強い。）

SK-118

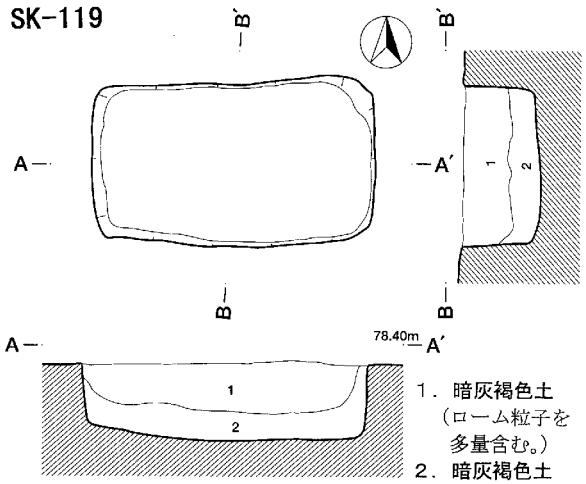


1．暗褐色土
2．暗褐色土（ローム粒子を少量含む。）



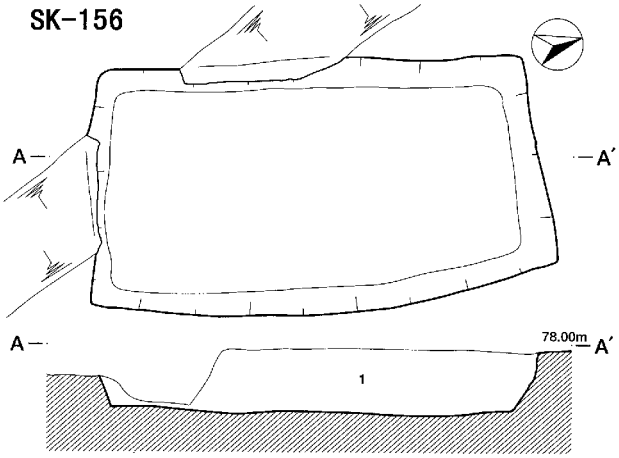
第338図　中世以降 土坑実測図（3）

SK-119



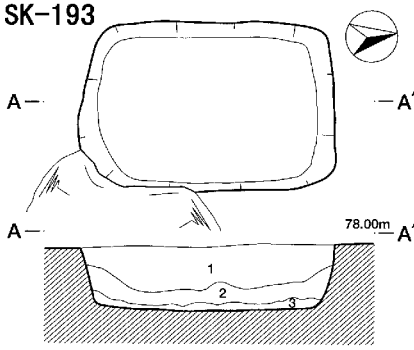
1．暗灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．暗灰褐色土

SK-156



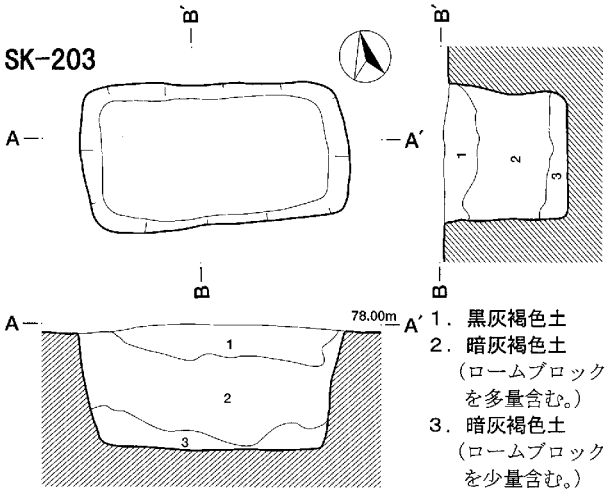
1．暗灰褐色土

SK-193



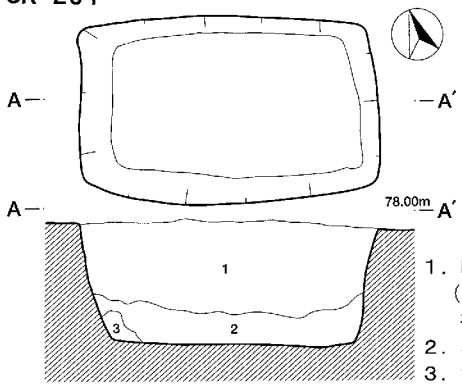
1．黒灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）
2．黒灰褐色土
3．黒灰褐色土（しまり強い。）

SK-203



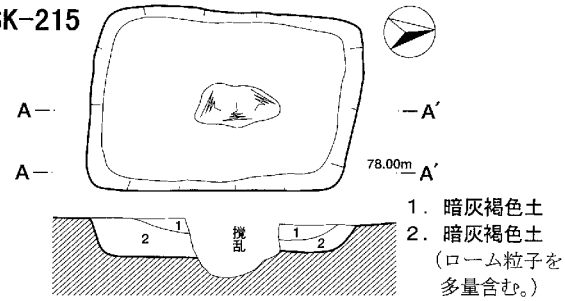
1．黒灰褐色土
2．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
3．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）

SK-204



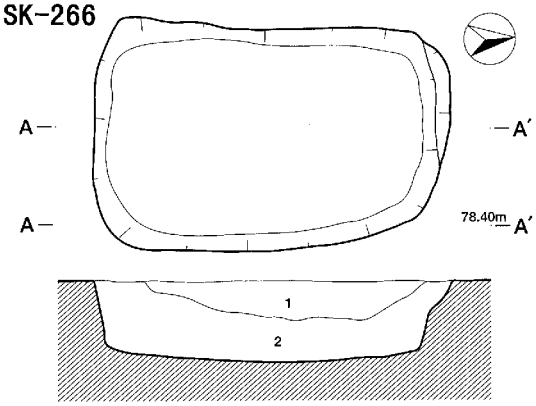
1．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
2．黒灰褐色土
3．黄褐色土

SK-215



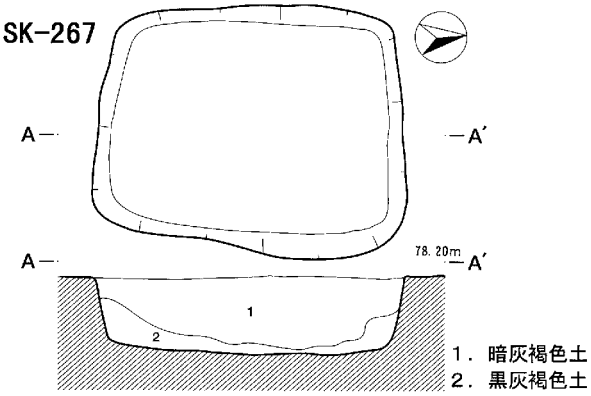
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）

SK-266

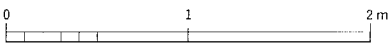


1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（ローム粒子を多量含む。）

SK-267

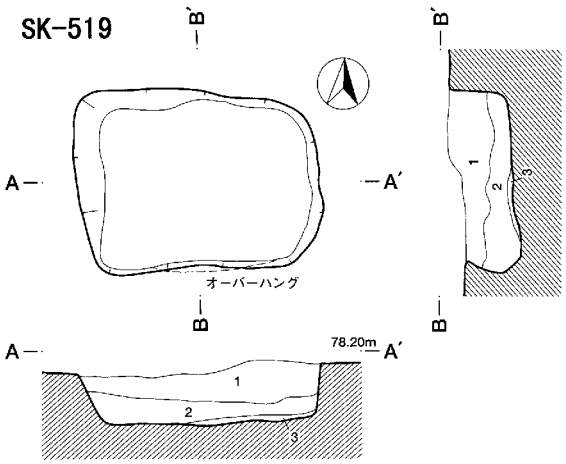


1．暗灰褐色土
2．黒灰褐色土



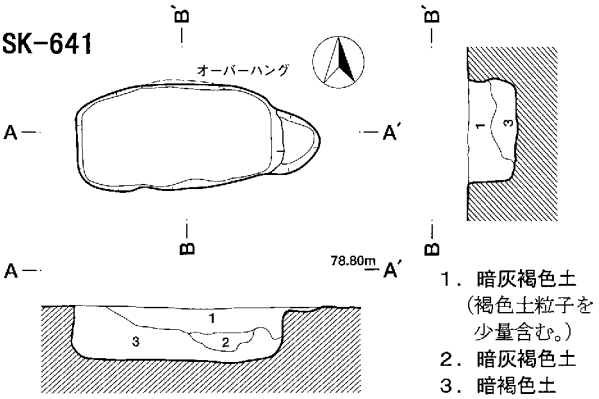
第339図　中世以降 土坑実測図（4）

SK-519



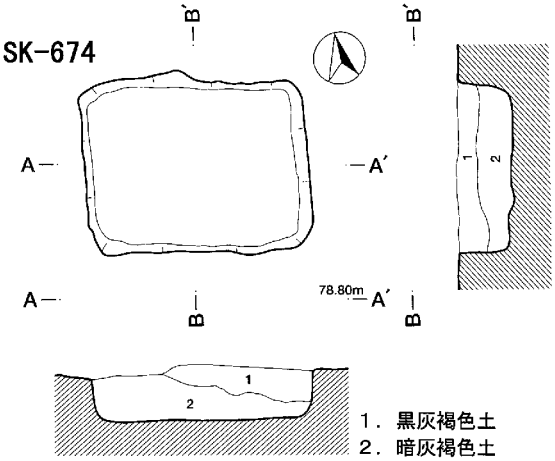
1．黒灰褐色土
2．黒灰褐色土（暗褐色土ブロックを少量含む。）
3．黒灰褐色土（2．に類似するがよりしまっている。）

SK-641



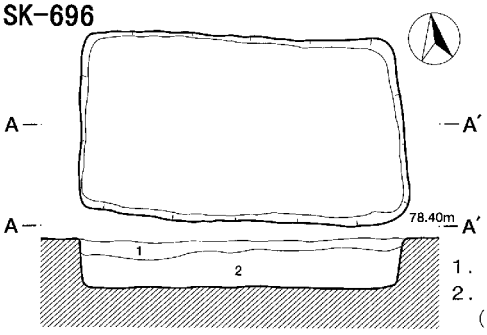
1．暗灰褐色土
（褐色土粒子を
少量含む。）
2．暗灰褐色土
3．暗褐色土

SK-674



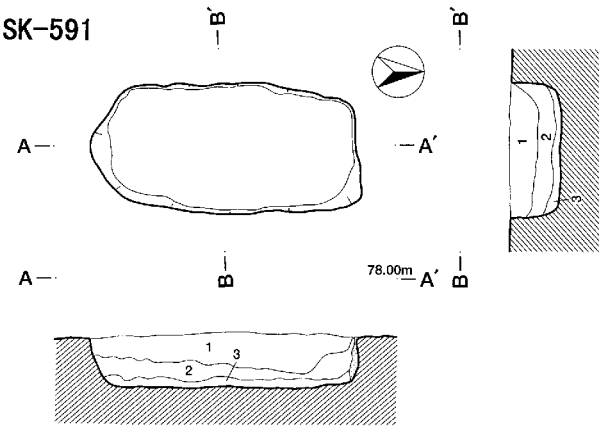
1．黒灰褐色土
2．暗灰褐色土

SK-696



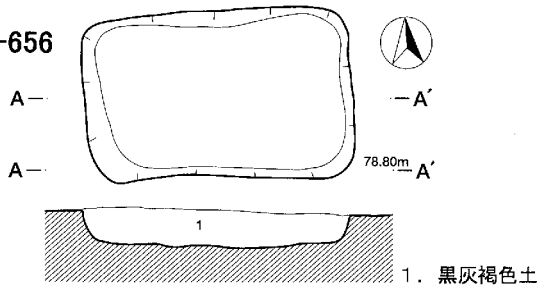
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土
（しまり弱い。）

SK-591



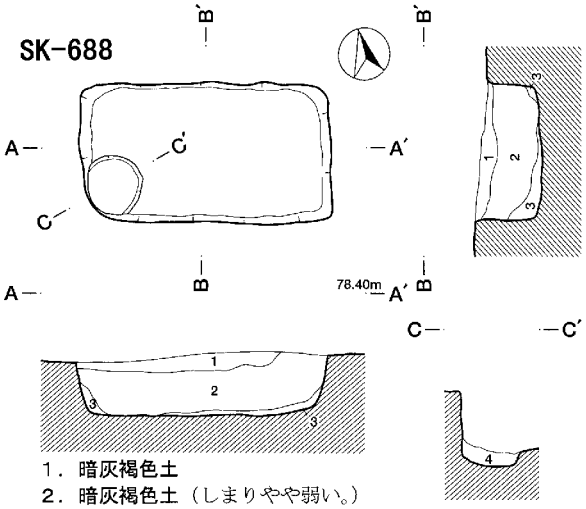
1．黒灰褐色土（灰褐色土粒子を少量含む。）
2．黒灰褐色土
3．黒灰褐色土（褐色土ブロックを少量含む。）

SK-656



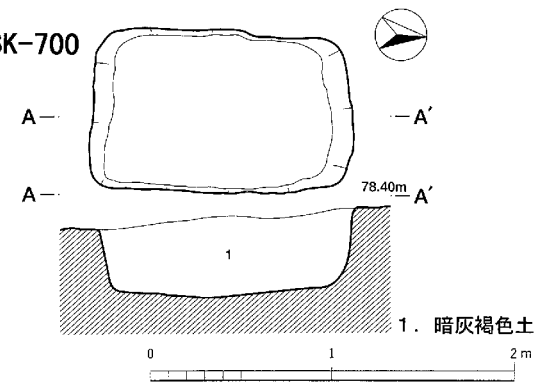
1．黒灰褐色土

SK-688



1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（しまりやや弱い。）
3．暗褐色土
4．暗褐色土（黒褐色土粒子を少量含む。）

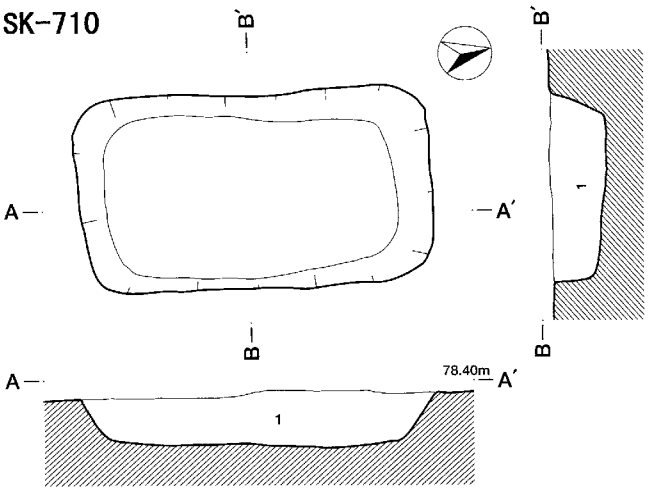
SK-700



1．暗灰褐色土

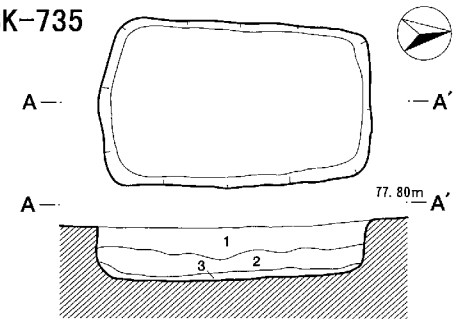
第340図　中世以降 土坑実測図（5）

SK-710



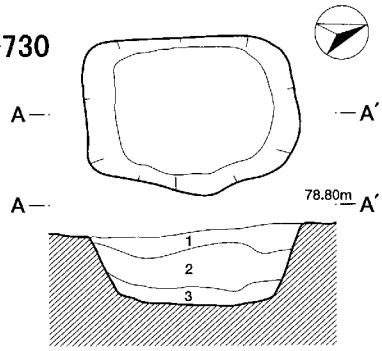
1．暗灰褐色土

SK-735



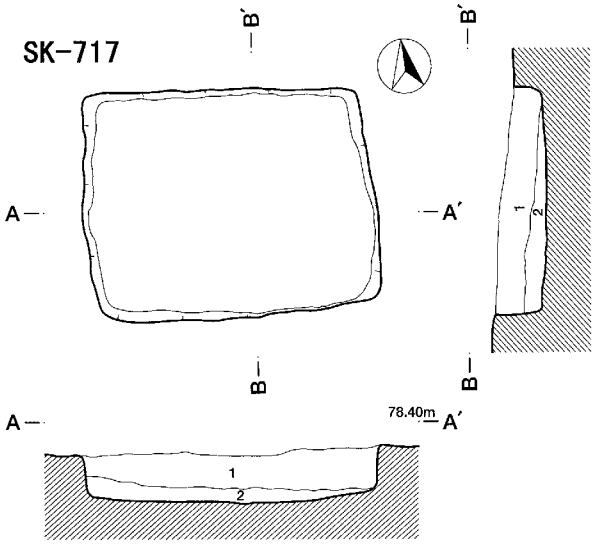
1．黒灰褐色土
2．黒灰褐色土（1．より色調黒い。）
3．暗灰褐色土

SK-730



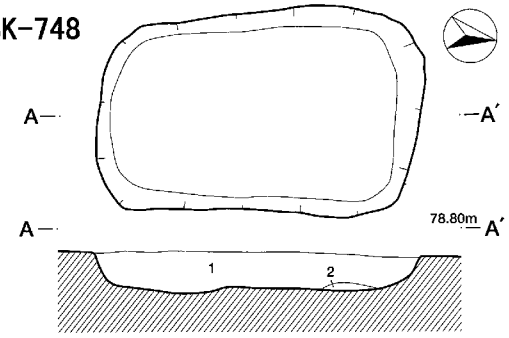
1．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．黒灰褐色土
3．暗灰褐色土

SK-717



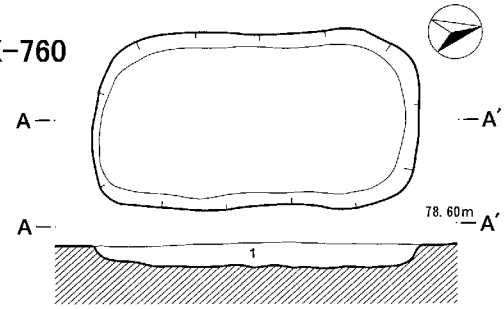
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（1．より色調やや暗い。）

SK-748



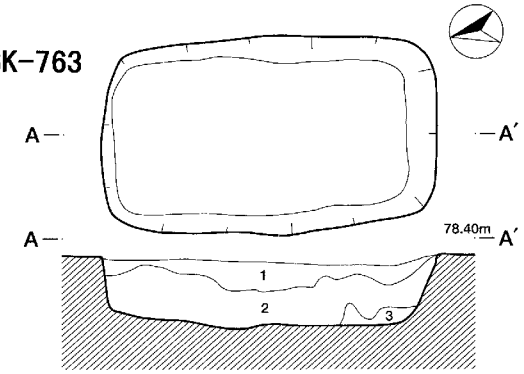
1．暗灰褐色土
2．褐色土

SK-760



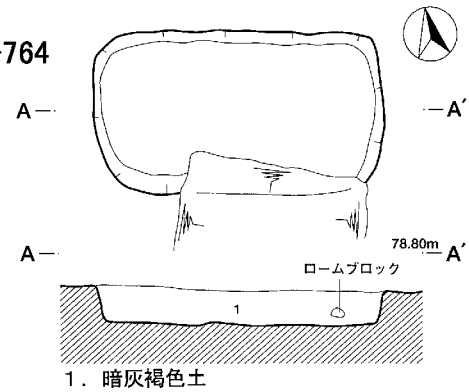
1．黒灰褐色土

SK-763

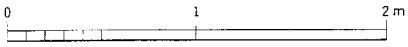


1．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．暗灰褐色土（黒褐色土粒子を多量含む。）
3．暗灰褐色土

SK-764

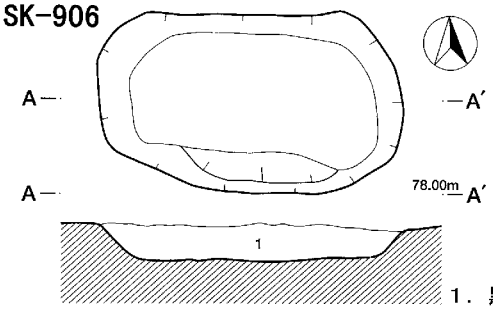


1．暗灰褐色土



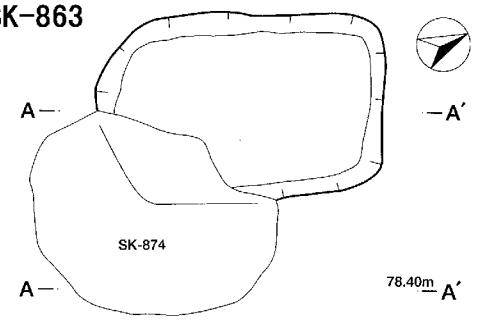
第341図　中世以降 土坑実測図（6）

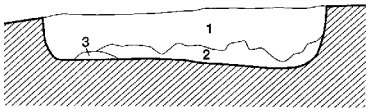
SK-906



1．黒灰褐色土

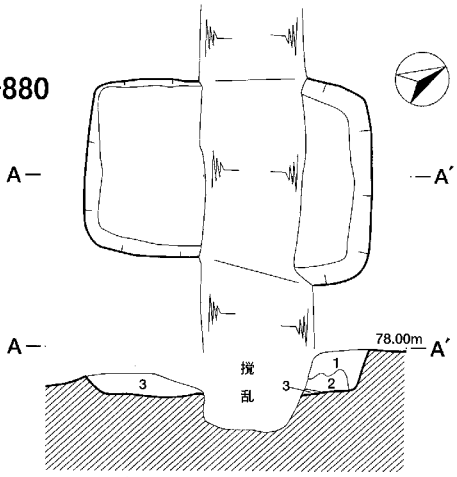
SK-863





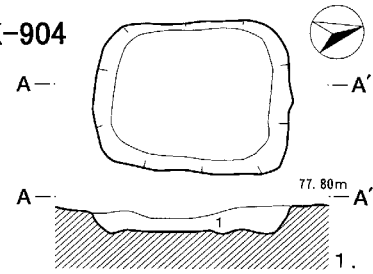
1．黒灰褐色土
2．暗灰褐色土
3．褐色土

SK-880



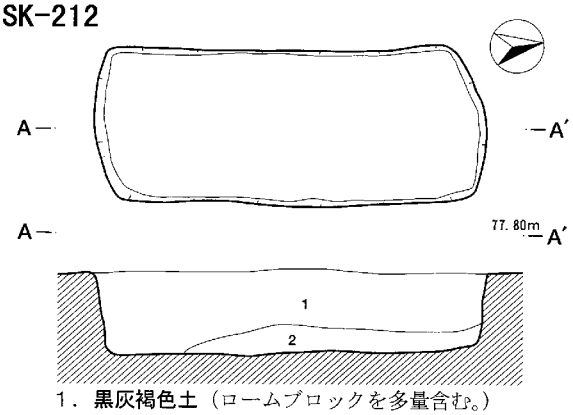
1．黒灰褐色土（黒褐色土粒子を多量含む。）
2．黒灰褐色土（暗褐色土粒子を少量含む。）
3．黒褐色土

SK-904



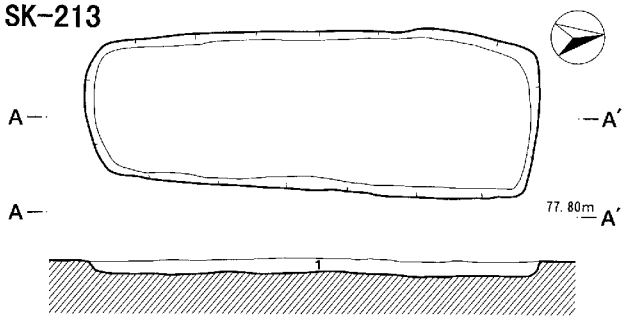
1．黒灰褐色土

SK-212



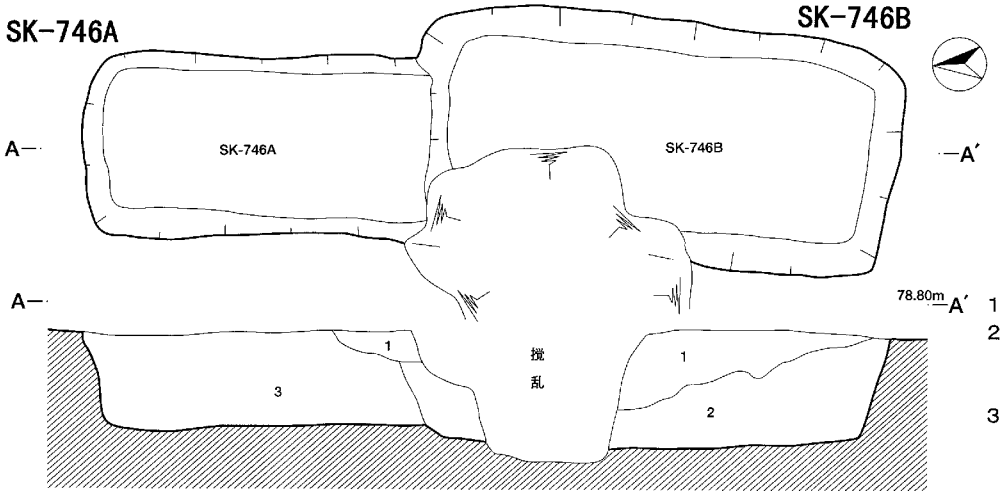
1．黒灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
2．黒灰褐色土（ローム粒子を少量含む。）

SK-213



1．黒灰褐色土

SK-746A　SK-746B

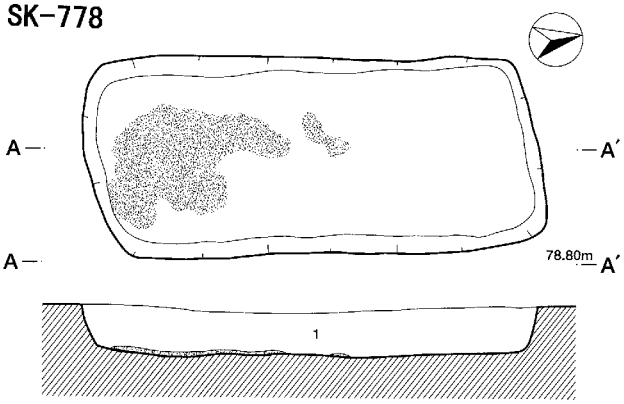


1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
3．暗灰褐色土（2．に類似するが色調やや暗い。）

0　1　2m

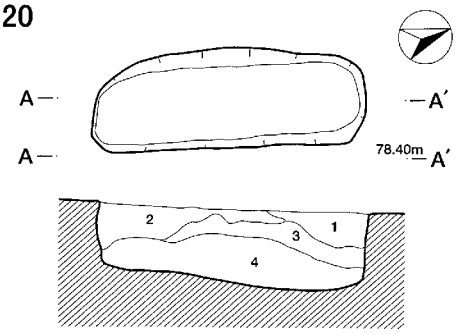
第342図　中世以降 土坑実測図（7）

SK-778



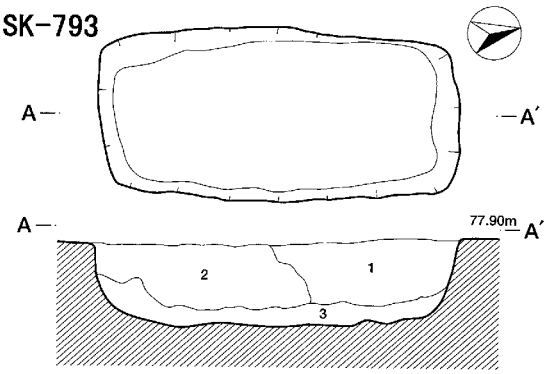
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（しまっている。）

SK-720



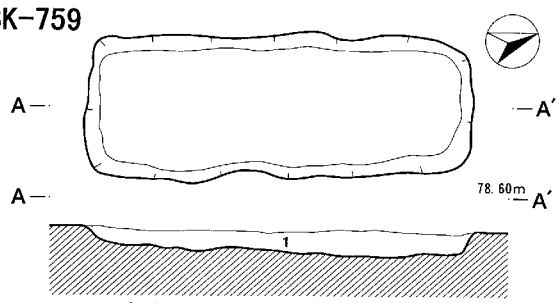
1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土（褐色土ブロックを多量含む。）
3．暗灰褐色土（1．より色調やや暗い。）
4．暗灰褐色土（褐色土ブロックを少量含む。）

SK-793



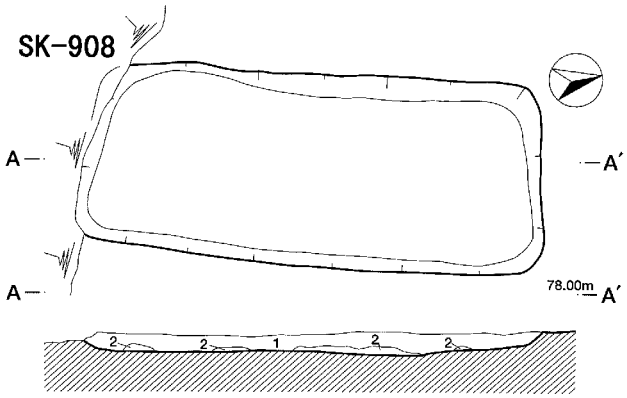
1．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．暗灰褐色土
3．暗灰褐色土（しまり弱い。）

SK-759



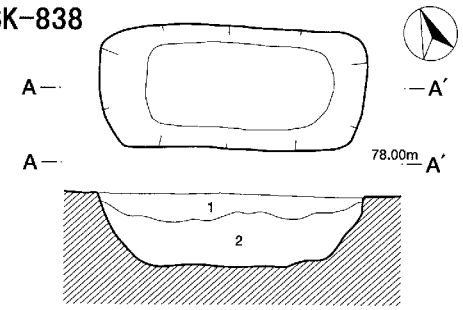
1．黒灰褐色土

SK-908



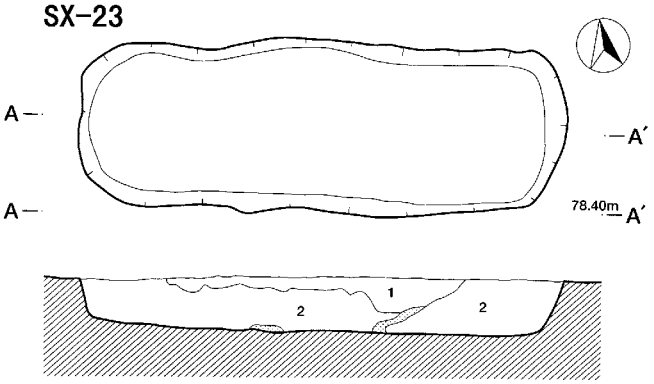
1．黒灰褐色土（明灰褐色土粒子を少量含む。）
2．褐色土

SK-838



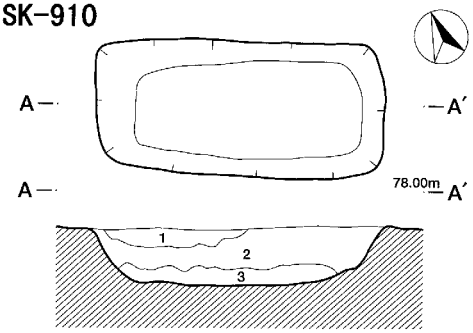
1．黒色土
2．黒色土（暗褐色土ブロックを多量含む。）

SX-23

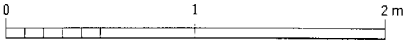


1．黒灰褐色土
2．黒灰褐色土（1．よりしまっている。）

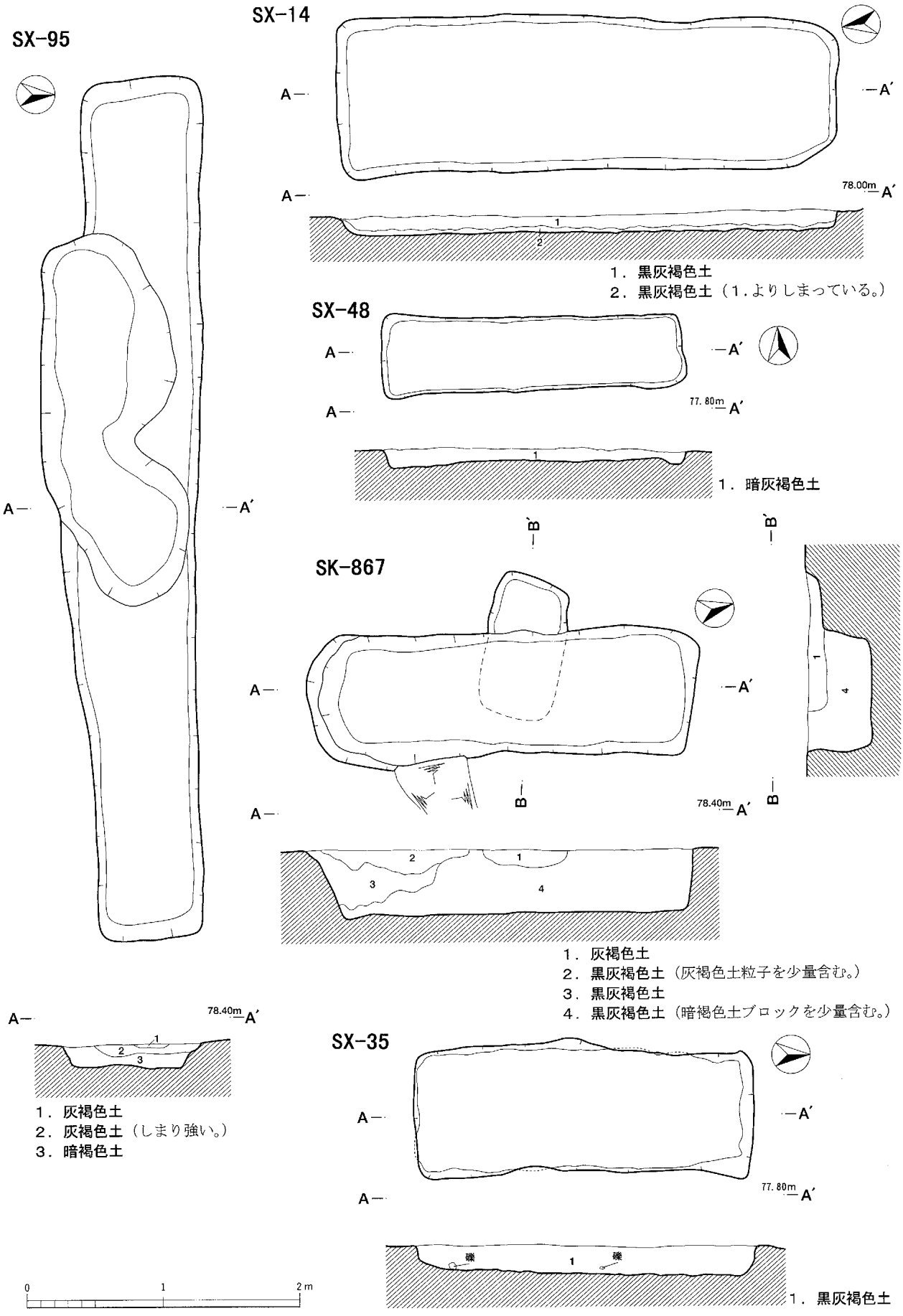
SK-910



1．黒灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．黒灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
3．黒灰褐色土（1．に類似するが色調やや黒い。）

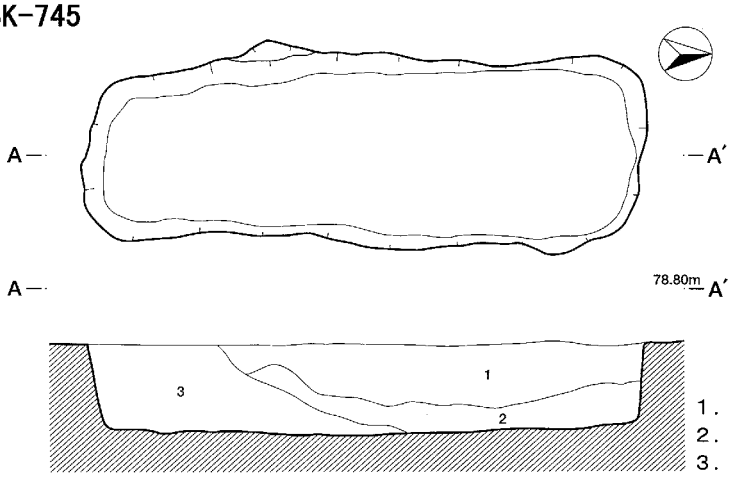


第343図　中世以降 土坑実測図（8）



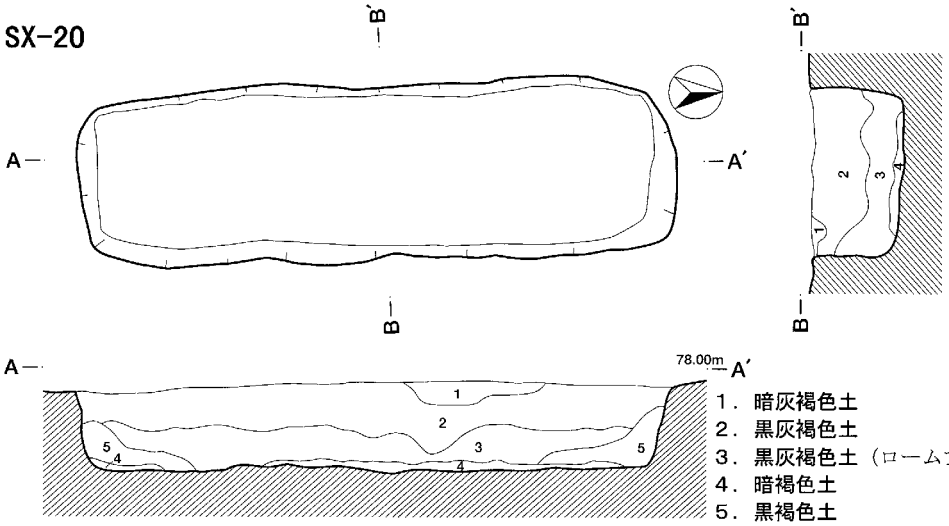
第344図　中世以降 土坑実測図（9）

SK-745



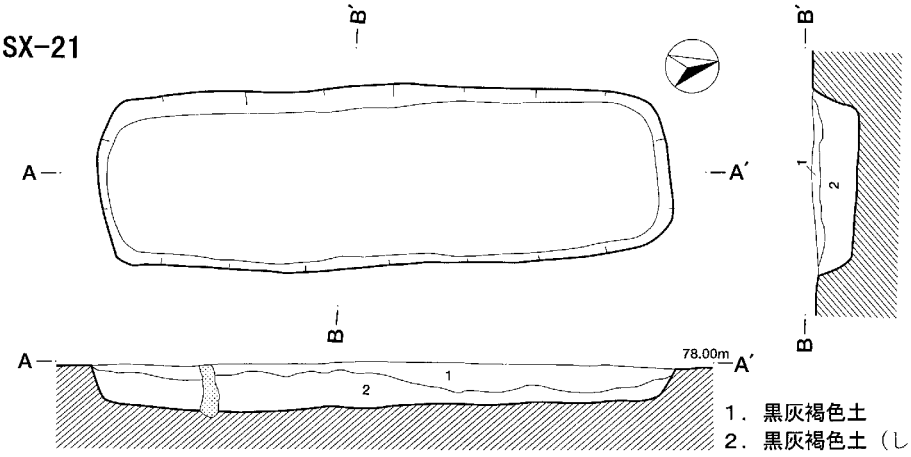
1．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
2．暗灰褐色土
3．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）

SX-20

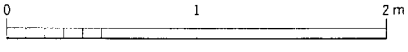


1．暗灰褐色土
2．黒灰褐色土
3．黒灰褐色土（ロームブロックを微量含む。）
4．暗褐色土
5．黒褐色土

SX-21

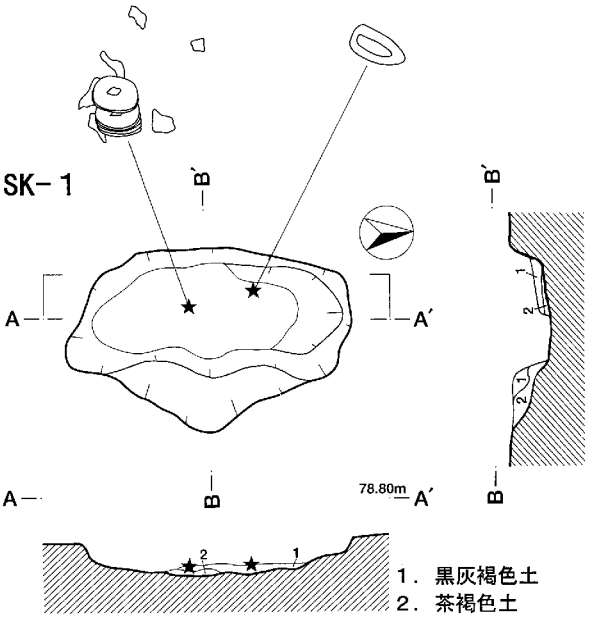


1．黒灰褐色土
2．黒灰褐色土（しまりやや弱い。）



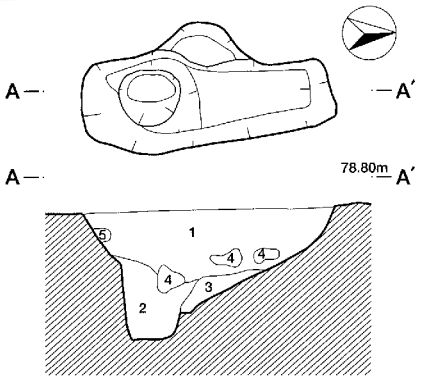
第345図　中世以降 土坑実測図（10）

SK－1



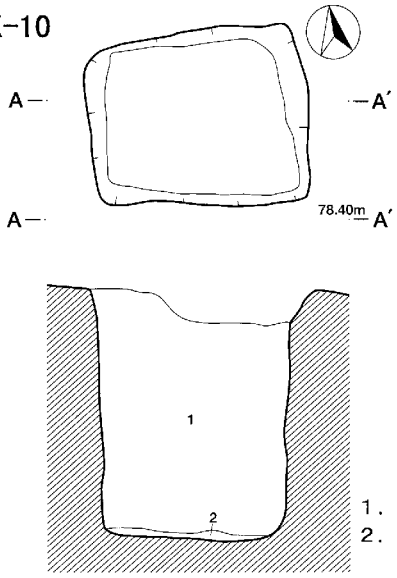
1．黒灰褐色土
2．茶褐色土

SK－2



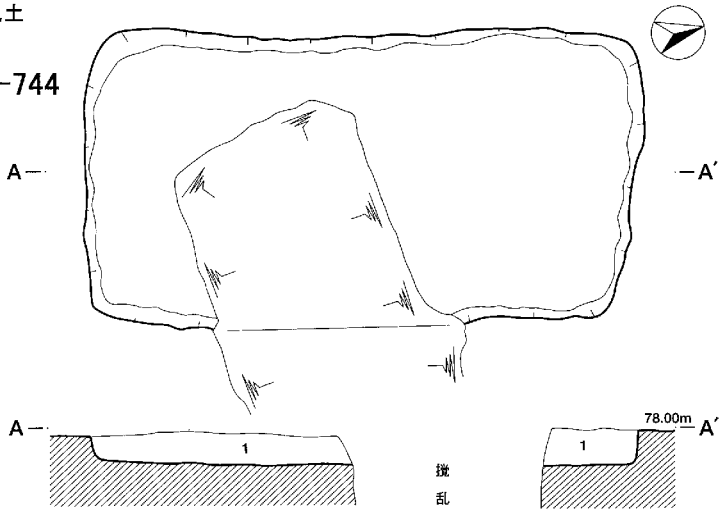
1．明褐色土
2．暗褐色土
3．黄褐色土
4．茶褐色土ブロック
5．明褐色土（ロームブロックを多量含む。）

SX－10



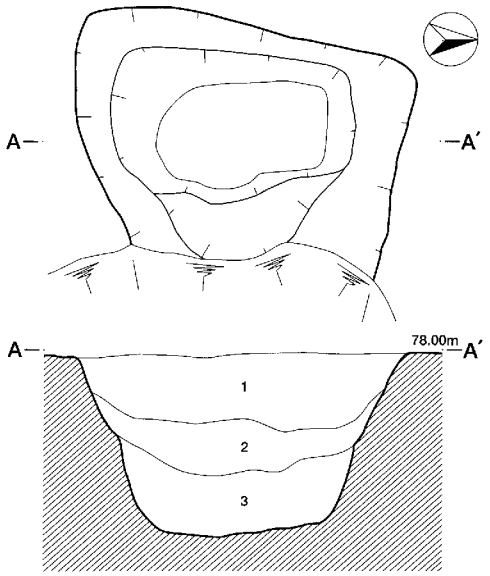
1．暗褐色土
2．暗褐色土（炭化物粒を多量含む。）

SK－744



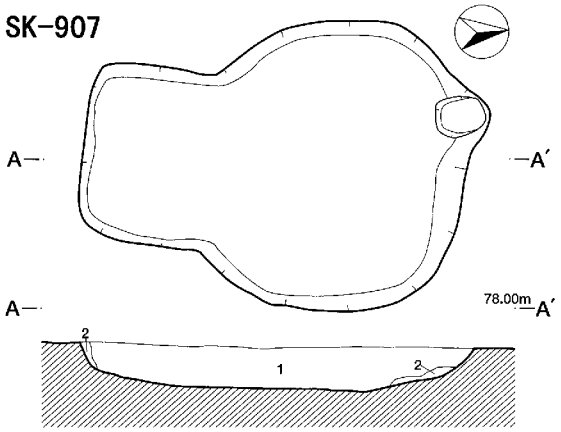
1．黒灰褐色土

SK－691

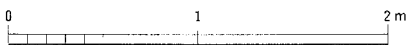


1．暗灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
2．黒灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
3．褐色土

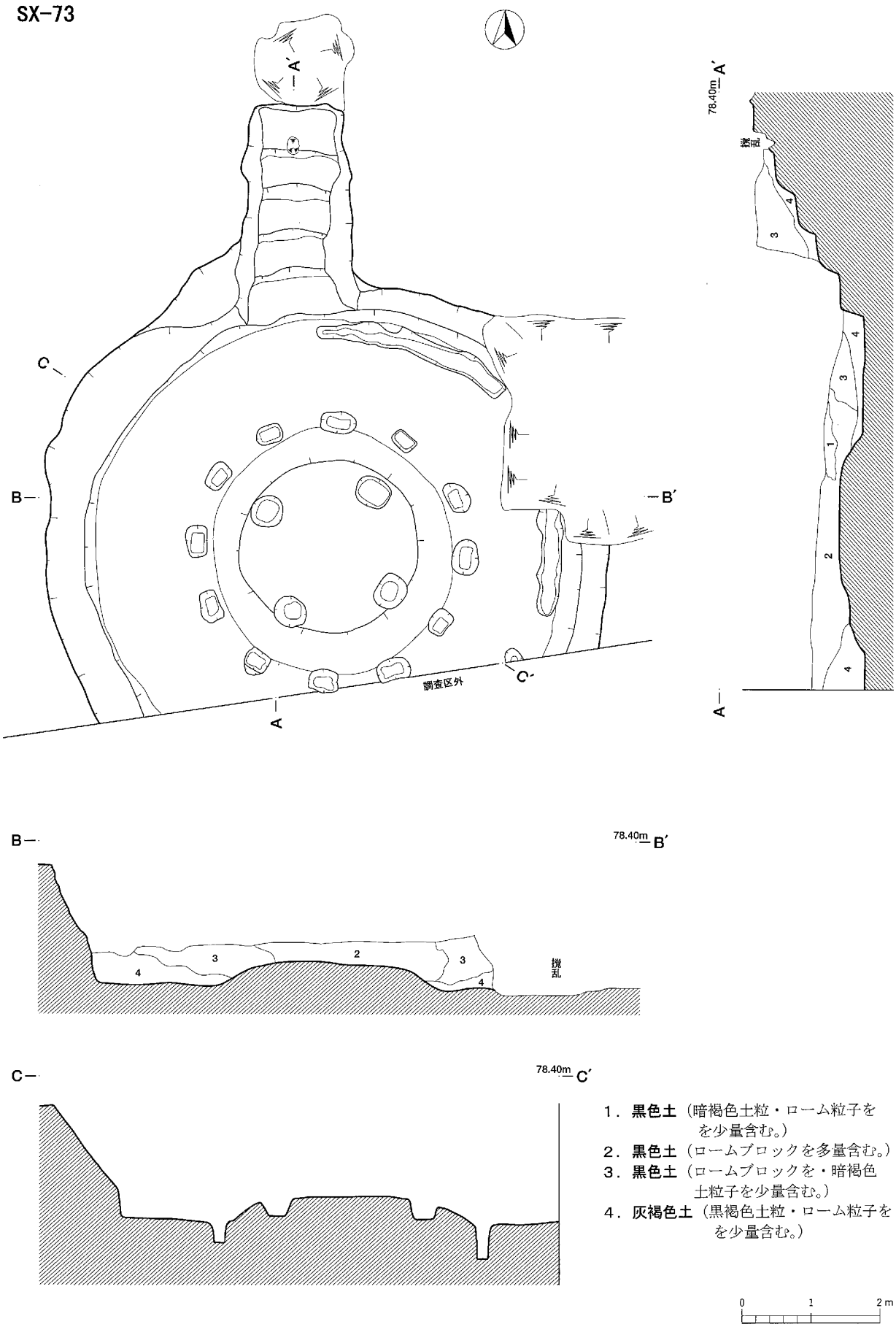
SK－907



1．黒褐色土（暗灰褐色土粒子を多量含む。）
2．褐色土



第346図　中世以降 特殊遺構実測図（1）

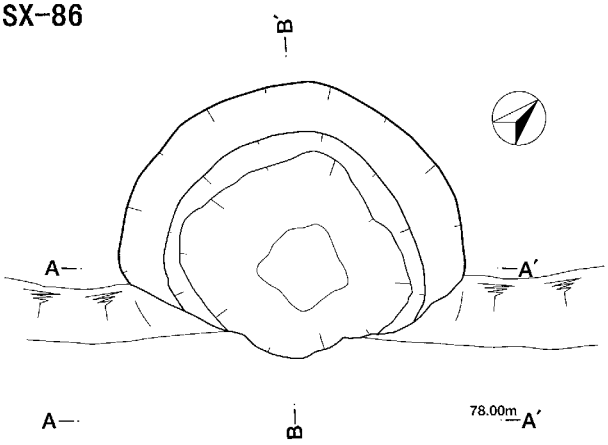


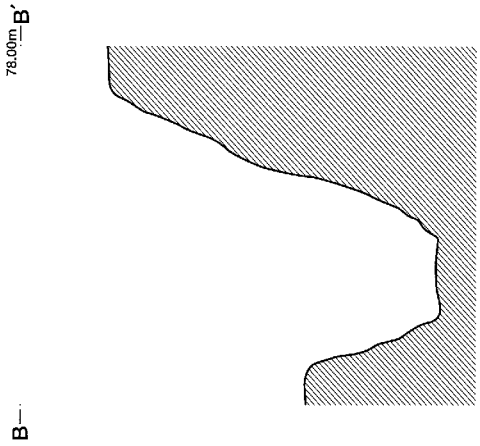
1．**黒色土**（暗褐色土粒・ローム粒子をを少量含む。）
2．**黒色土**（ロームブロックを多量含む。）
3．**黒色土**（ロームブロックを・暗褐色土粒子を少量含む。）
4．**灰褐色土**（黒褐色土粒・ローム粒子をを少量含む。）

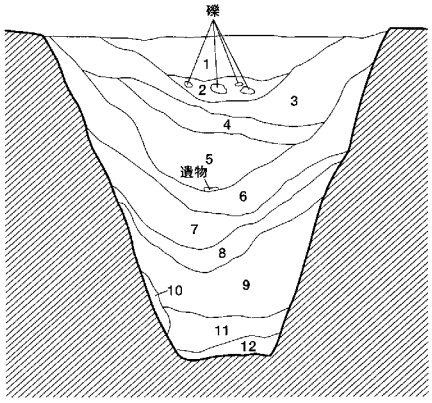
0　1　2m

第347図　中世以降 特殊遺構実測図（2）

SX-86

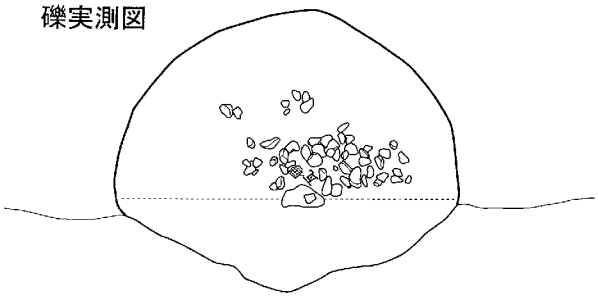




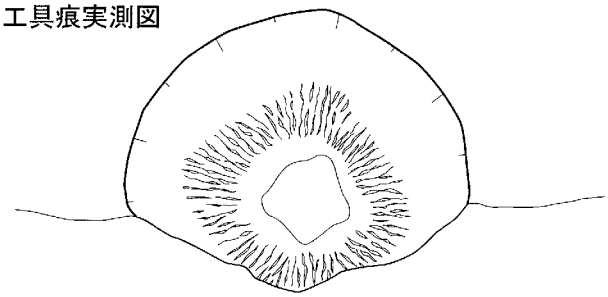


1．黒色土（ローム粒子を少量含む。）
2．黒色土（ローム粒子を微量、礫を多量含む。）
3．黒色土
4．黒色土（ローム粒子を多量含む。）
5．黒色土（褐色土粒子を少量含む。）
6．黒色土（褐色土粒子を・ローム粒子を少量含む。）
7．黒色土（ロームブロックを少量含む。）
8．黄褐色土
9．黒色土（褐色土粒子・ローム粒子を多量含む。）
10．黒色土（しまり弱い。）
11．黒色土（9．に類似するが粘性が強い。）
12．黒色土（11．より更に粘性強く粘土状。）

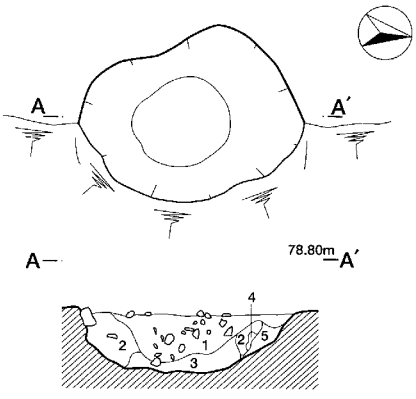
礫実測図

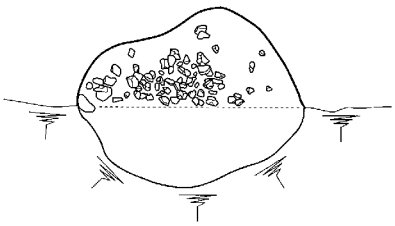


工具痕実測図

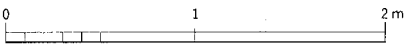


SS-2



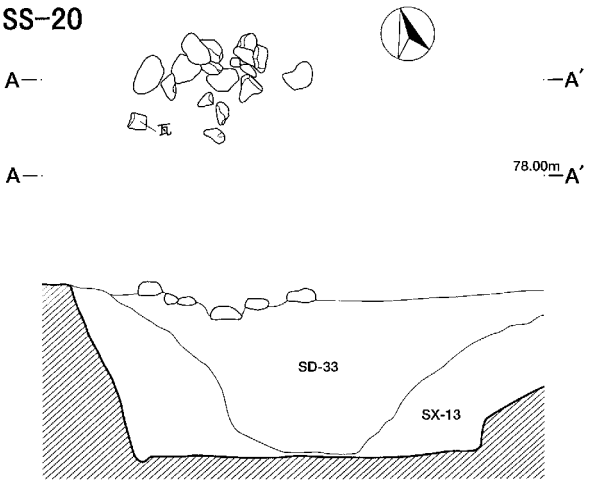


1．暗灰褐色土（黒色土粒子・炭化物を少量含む。）
2．暗灰褐色土（焼土粒子を多量含む。）
3．暗灰褐色土（ローム粒子・焼土粒を少量含む。）
4．朱褐色土
5．黄褐色土

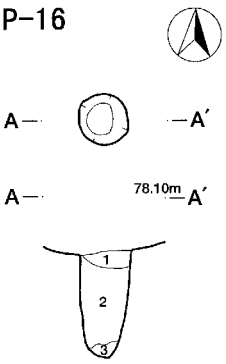


第348図　中世以降 特殊遺構実測図（3）／集石実測図（1）

SS-20

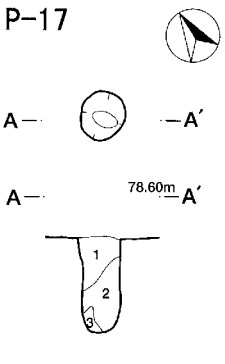


P-16



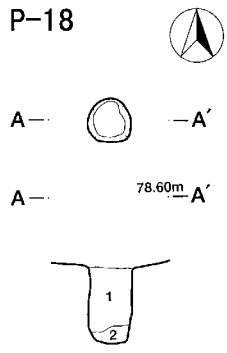
1．黒灰褐色土
2．黒灰褐色土（粘性強い。）
3．褐色土

P-17



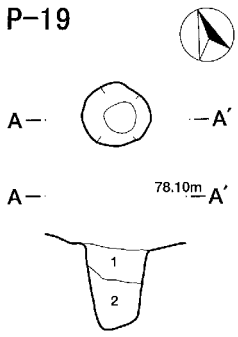
1．暗灰褐色土
2．黒灰褐色土
3．明褐色土

P-18



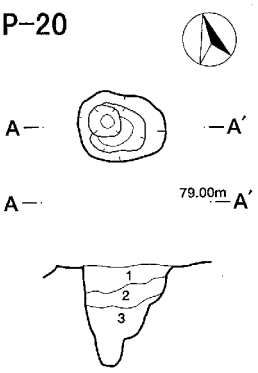
1．黒灰褐色土
2．暗灰褐色土

P-19



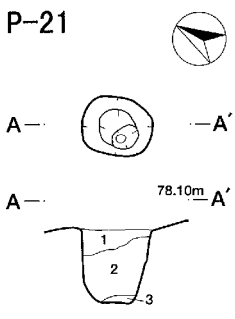
1．黒灰褐色土
2．黒褐色土

P-20



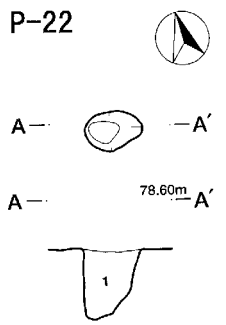
1．明褐色土
2．暗褐色土
（明褐色土粒子を少量含む。）
3．暗褐色土

P-21



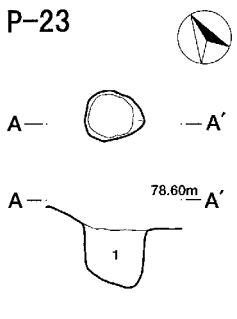
1．黒灰褐色土
（褐色土ブロックを少量含む。）
2．黒灰褐色土
3．黄褐色土

P-22

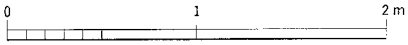


1．暗灰褐色土

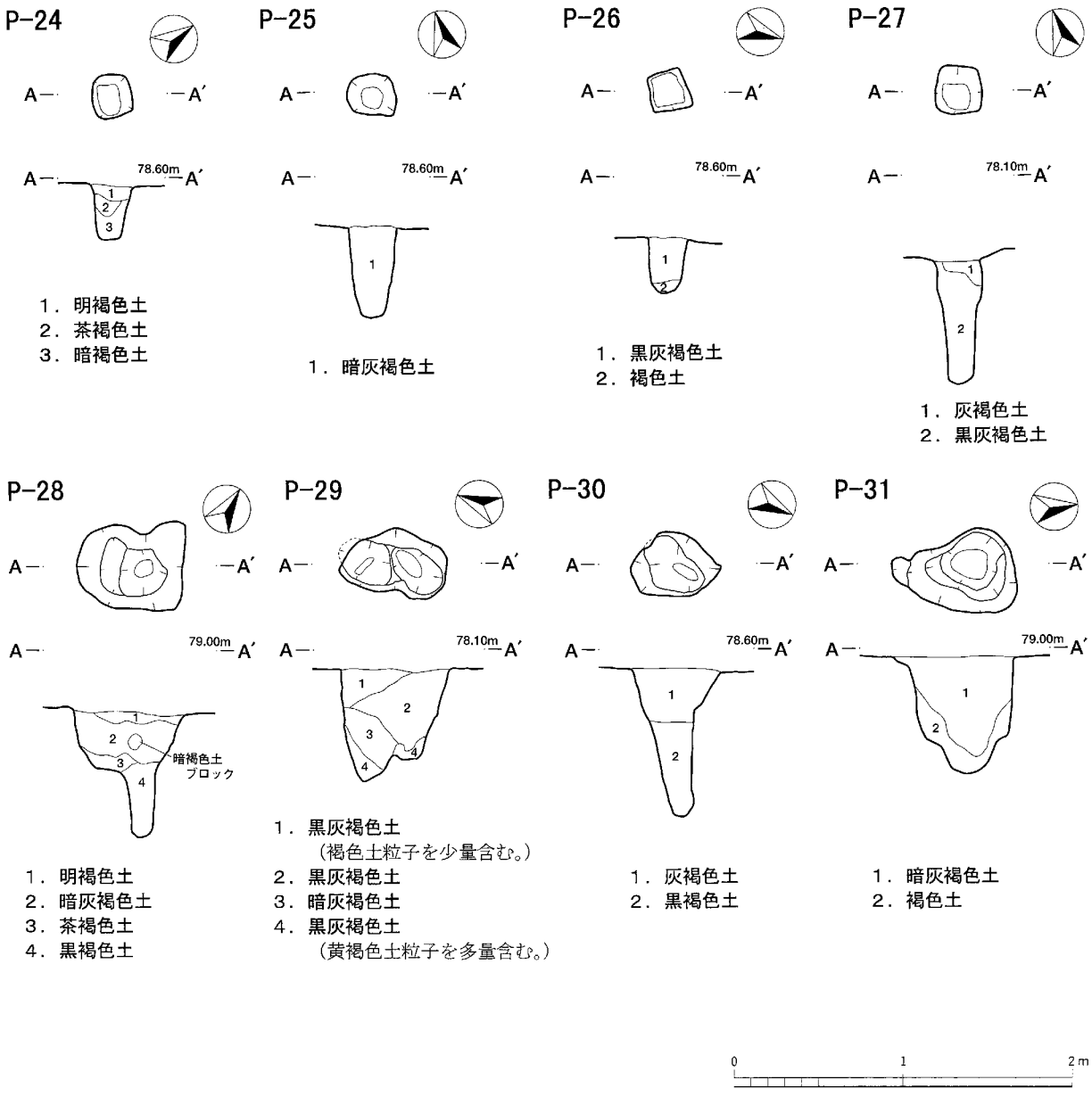
P-23



1．暗灰褐色土

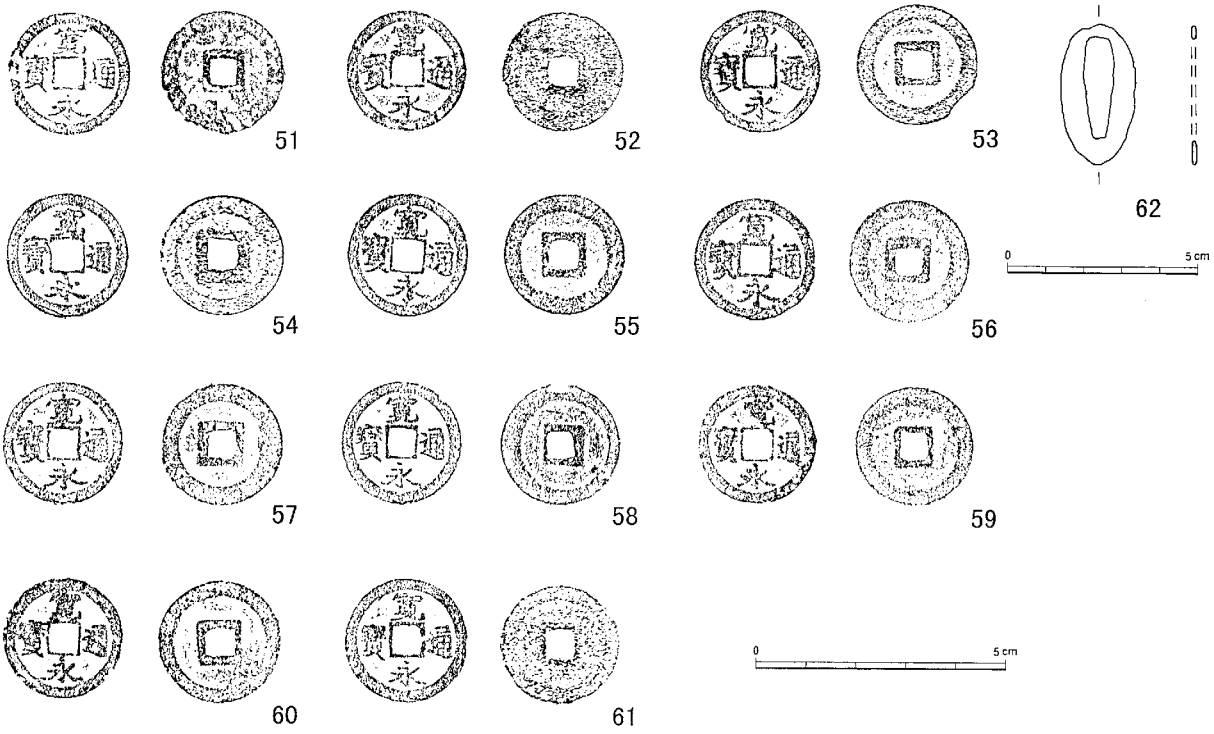


第349図　中世以降 集石実測図（2）／小穴実測図（1）

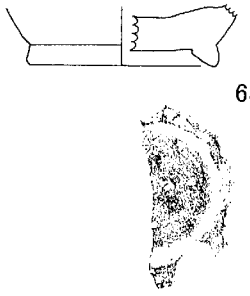


第350図　中世以降 小穴実測図（2）

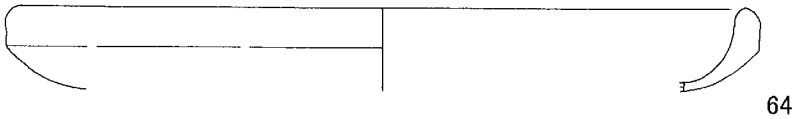
遺構出土遺物　SK－1



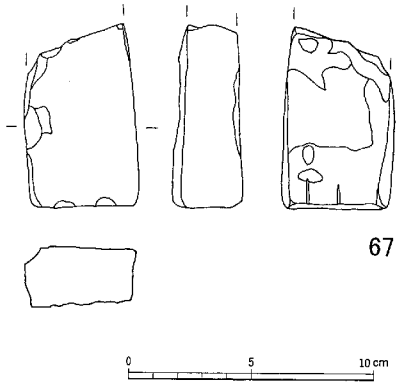
SX-86



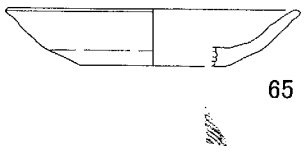
SK－2



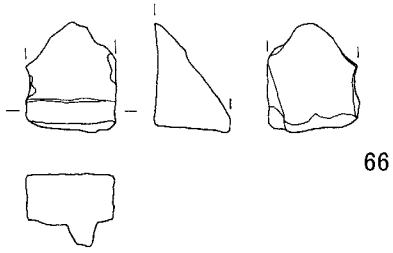
SD-15



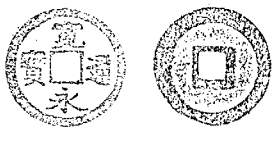
SD-20

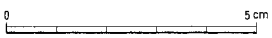


SD－6



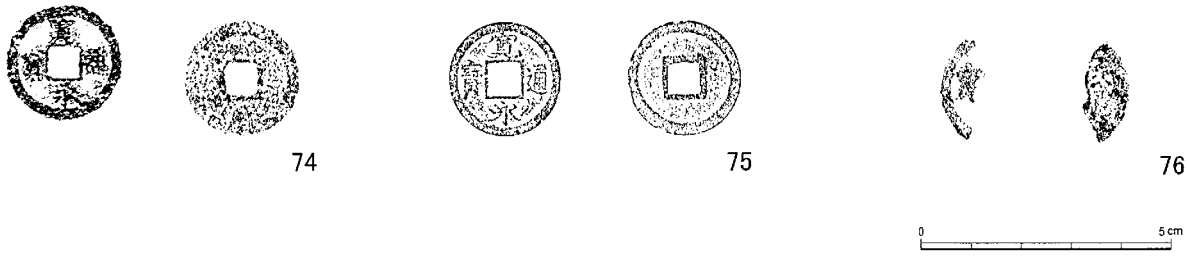
SD-22



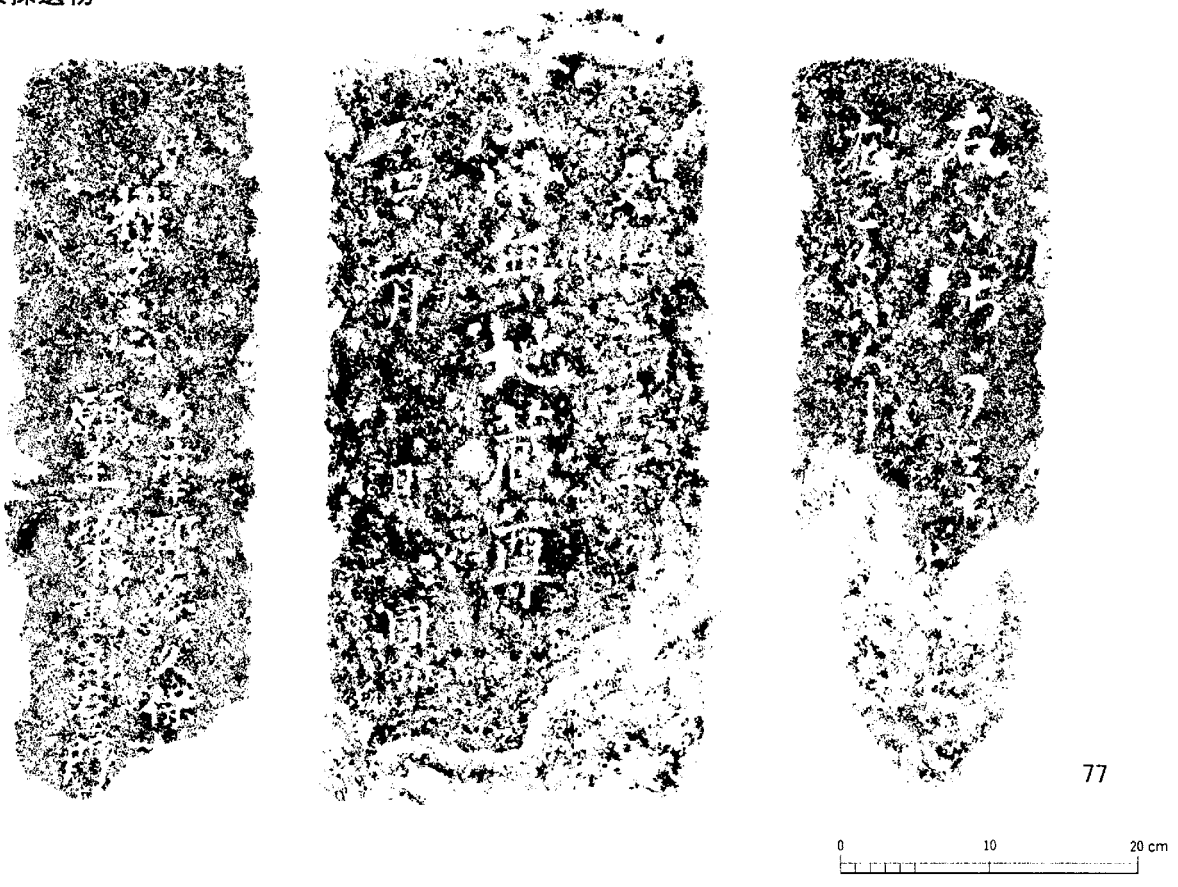


第351図　中世以降 出土遺物実測図（1）

遺構外出土遺物



表採遺物



第352図　中世以降 出土遺物実測図（2）

4. 近 代 以 降

1）遺　構

SX－84（第354図、図版217）

〈検出位置〉　３区北側の KP－95～97、KQ－95～98グリッドに位置する。

〈検 出 面〉　Ⅱ層上面。

〈遺存状態〉　東側上部を撹乱により壊されているものの比較的良好。

〈形　　状〉　やや楕円状の歪んだ長方形。

〈主　　軸〉　北76度西を指向する。　　〈規　　模〉　長軸8.4m×短軸1.8m×深さ1.0m。

〈底面・壁〉　底面はⅣ層中段まで掘削し、ほぼ平坦に構築されているが西側部分は一段上がっている。壁の西面は階段状の段差になっているが、他は底面から急角度で立ち上がっている。

〈覆　　土〉　大きく７層程に分けられ堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層は明灰褐色土が主だが、中層以下はおもに暗灰褐色土が主体で、西側中層には焼土層が確認された。

〈出土遺物〉　底面近くから薬莢および鉄片数点が出土した。

〈特徴・性格〉　本遺構は出土遺物及び規模、形状からして戦時中に戦争目的で構築、使用されたものと思われる。

SX－85（第355図、図版217）

〈検出位置〉　３区北側の KP－99、KQ－99、KR－99グリッドにかけて位置する。

〈検 出 面〉　Ⅱ層上面。　　〈遺存状態〉　良好。

〈形　　状〉　長軸中央部分が膨らんだ状態のやや歪んだ長方形。

〈主　　軸〉　北５度東を指向する。　　〈規　　模〉　長軸8.8m×短軸1.7m×深さ1.2m。

〈底面・壁〉　底面はⅣ層中段まで掘削し構築されているが凹凸がはげしく、５箇所にわたり土坑状の大きな窪みがある。壁の東西面は屈折した立ち上がり方を呈し、底面から中段まではほぼ垂直だがそれより上は外側に向かって急角度で立ち上がっている。また、南北面は４～５段の階段状になっている。

〈覆　　土〉　大きく６～７層に分けられ、堆積状態からは自然埋没と思われる。土質は上層は明灰褐色土中層以下は暗灰褐色土が主体となっている。

〈出土遺物〉　南側の底面近くから大砲の薬莢と思われる鉄片が数点出土した。

〈特徴・性格〉　本遺構は SX－84のすぐ西側に位置しており、出土遺物及び規模、形状の類似性から同時期に同一目的で構築されたものと思われる。

2）遺　物

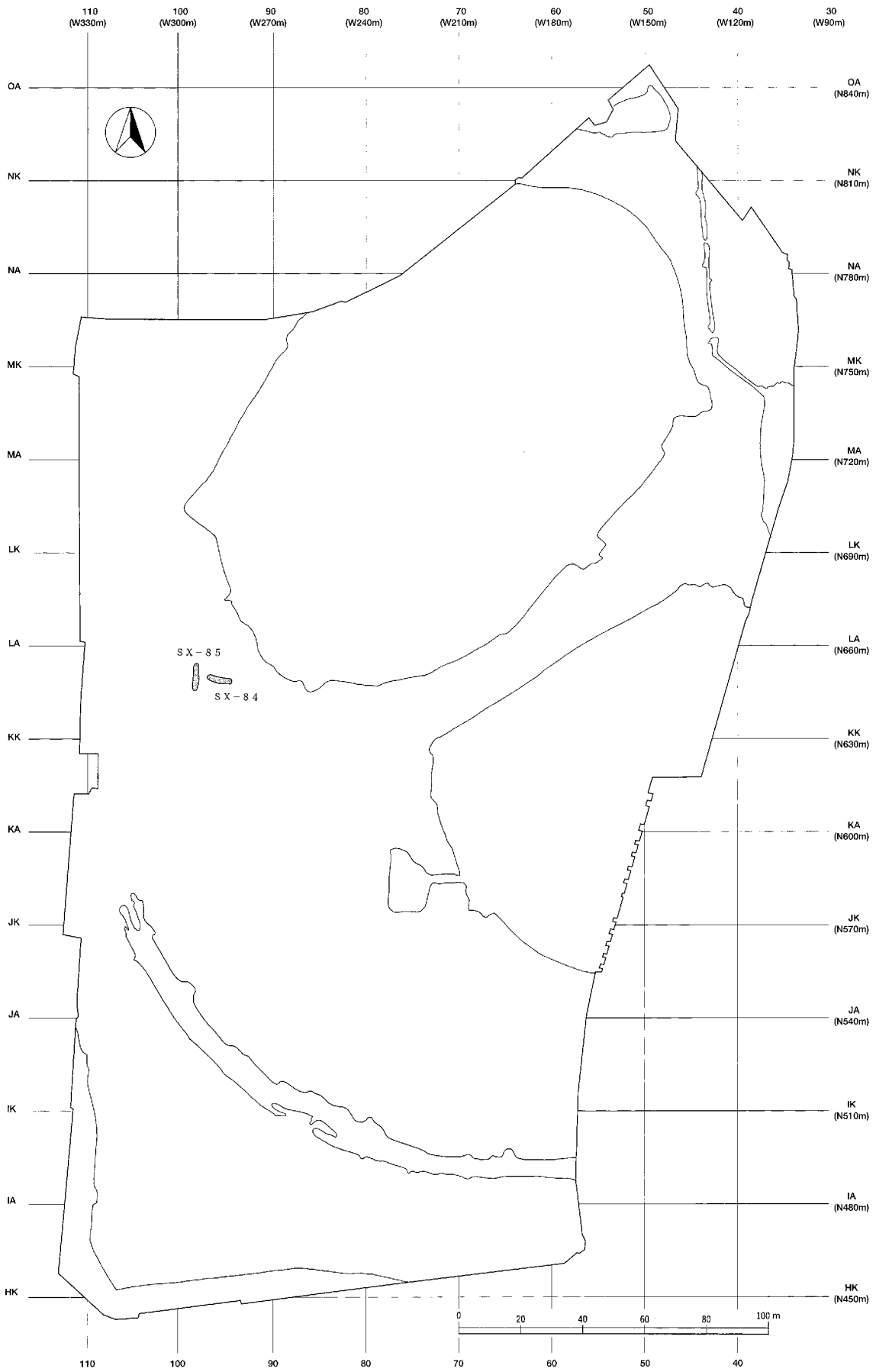
該期の遺構からの出土遺物は、第354図に写真とともに掲載した SX－840から出土した薬莢のみである。この薬莢は12.7㎜機銃弾のものであるが、日米いずれの軍のものかは不明である。

尚、計測値などの詳細は CD-ROM 収録の観察表に記した。

（伊藤）

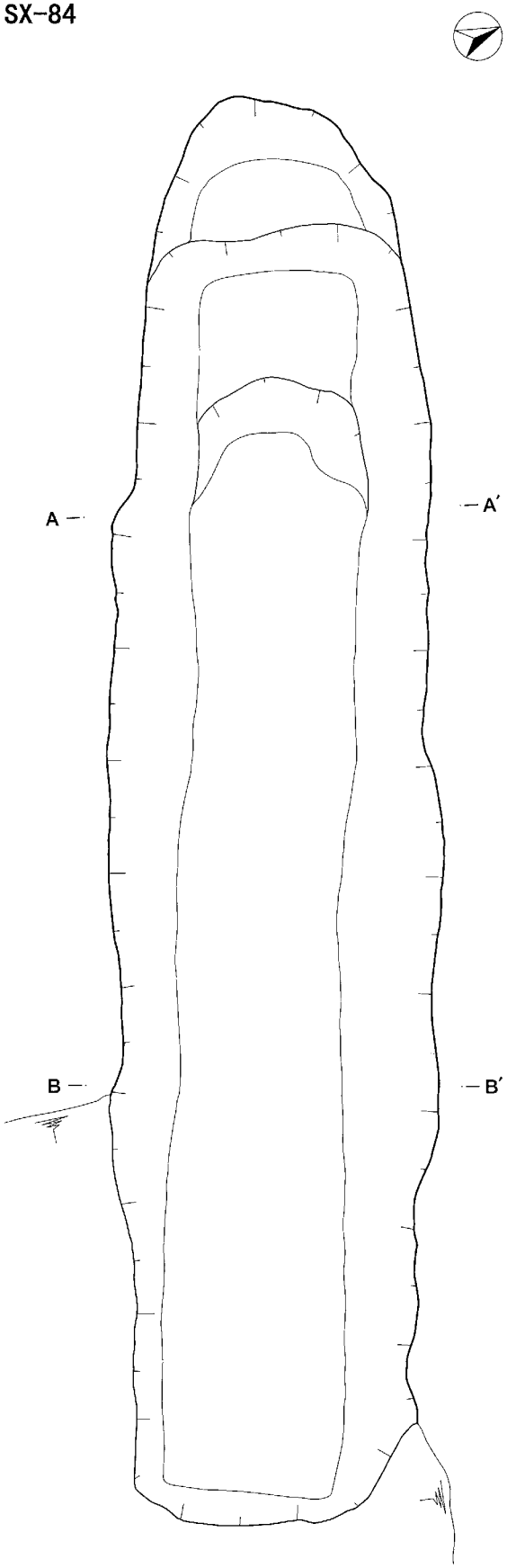
引用・参考文献

・前川要　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」－瀬戸市百代寺窯〈出土遺物〉を中心にして－『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』　1984年

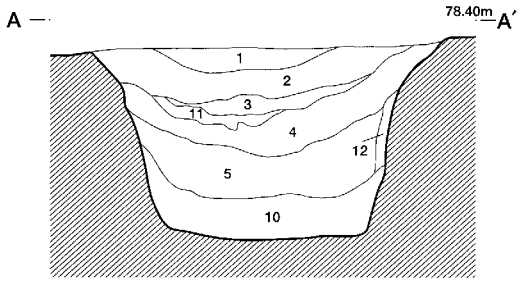


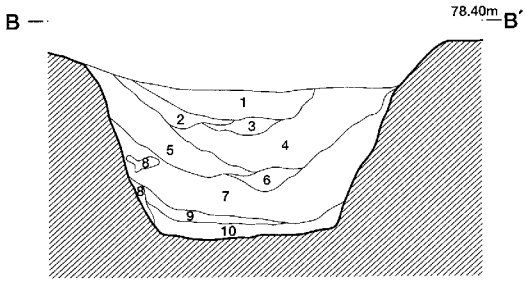
第353図　近代以降 遺構配置図

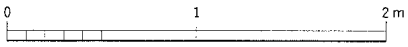
SX-84



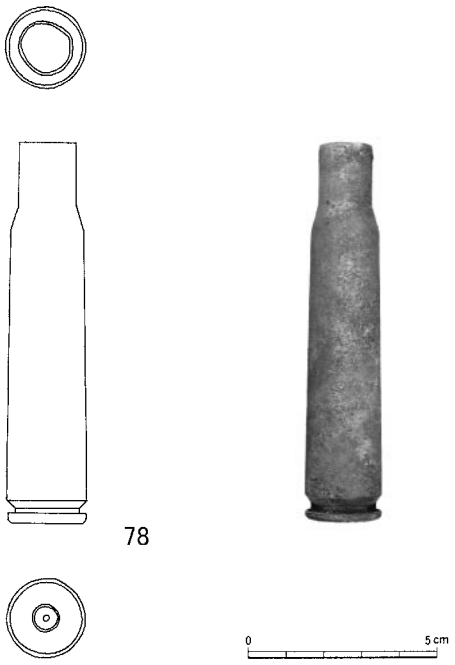
1．明灰褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
2．明灰褐色土（黒褐色土粒子を少量含む。）
3．明灰褐色土
4．暗灰褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
5．黒灰褐色土（灰褐色土粒子を少量含む。）
6．暗灰褐色土
7．暗灰褐色土（黒褐色土粒子を少量含む。）
8．褐色土ブロック
9．黒灰褐色土
10．暗灰褐色土（褐色土粒子を多量、ロームブロックを少量含む。）
11．焼土
12．暗灰褐色土（10．より褐色土粒子が少ない。）





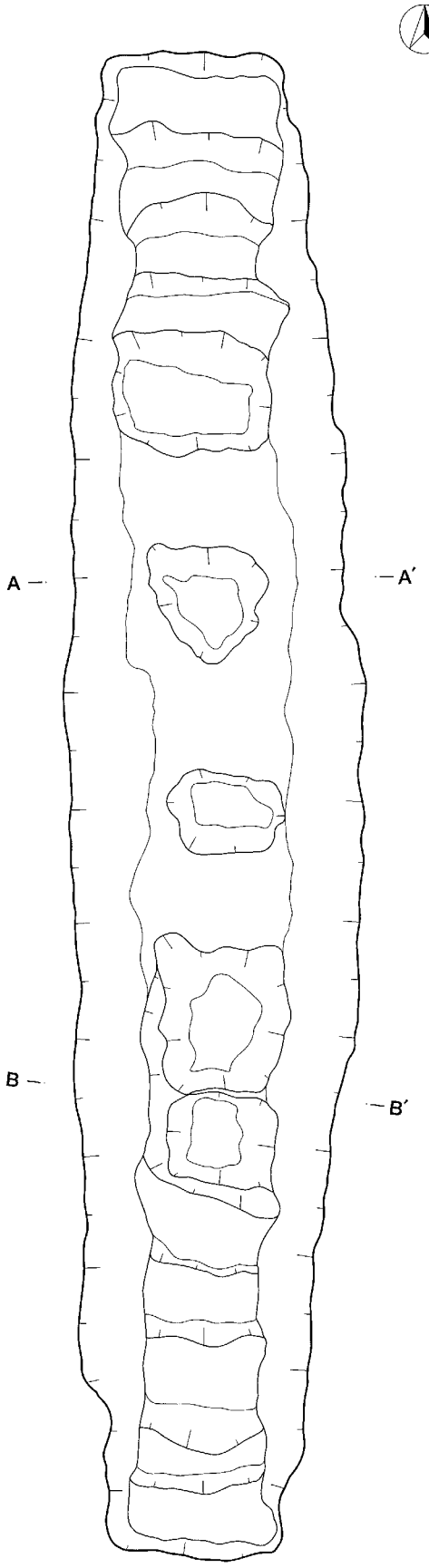


出土遺物

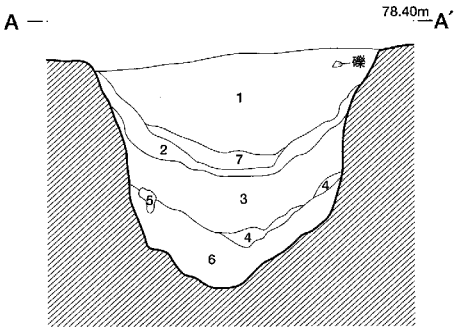


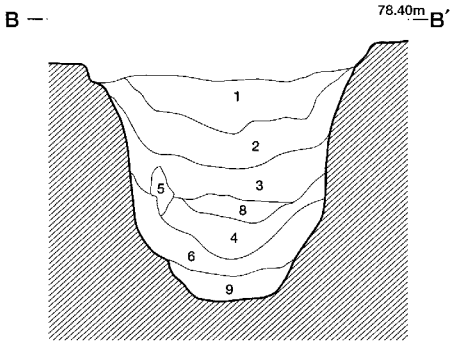
第354図　近代以降 遺構実測図（1）／出土遺物実測図

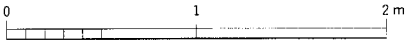
SX-85



1．明灰褐色土（褐色土粒子を少量含む。）
2．暗灰褐色土
3．暗灰褐色土（褐色土粒子を多量含む。）
4．暗灰褐色土（ロームブロックを少量含む。）
5．暗褐色土ブロック
6．暗灰褐色土（褐色土粒子・ロームブロックを多量含む。）
7．明灰褐色土（ロームブロックを多量含む。）
8．褐色土
9．褐色土（ロームブロックを多量含む。）







第355図　近代以降 遺構実測図（2）

Ⅴ．自然科学分析

1．概　要

本遺跡で検出された縄文時代・歴史時代の土坑のうち、墓坑の可能性が考えられるものについては、リン酸分析を平成７～９年度の３カ年に分け、業者に委託した。平成７年度の委託は、パリノ・サーヴェイ株式会社に、平成８年度は、応用地質株式会社に、平成９年度は、株式会社クレアテラにそれぞれ委託した。また、分析を行った遺構の位置は、第356図に示した。

旧石器時代の調査（Ⅳ層）で出土した炭化物の「放射性炭素年代測定」は、（株）地球科学研究所に委託した。また、「樹種同定」については千野裕道氏（東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員）に依頼した。

歴史時代（古代）の道路状遺構（SF－１）の側溝、および路面覆土の「火山灰分析」は松田隆夫氏（府中市役所）に、依頼した。

2．リ ン 酸 分 析

１）－西国分寺地区遺跡で検出された土坑への遺体埋葬の検証－

パリノ・サーヴェイ株式会社（平成７年度委託）

はじめに

本遺跡は、武蔵国分寺跡の北限にあたる遺跡で、奈良・平安時代の土坑や溝、道路状遺構などの遺構が検出されている。このうち、いくつかの土坑については武蔵国分寺に関連する墓坑の可能性が指摘されている。

そこで、これらの土坑について遺体埋葬を検証するために、リン酸分析を実施する。リン酸は、人や動物の骨に多量に含まれ、土壌中で比較的拡散しにくいといわれている。そこで、リン酸量を測定し、局所的な濃集状態から人体の痕跡を定性的に推定する方法（坂上, 1984；竹迫, 1981・1985；竹迫ほか, 1980）により、過去の遺体の埋葬状況を検証することができる。

１．試 料

調査対象とした遺構は、土坑SK－75、SK－76、SK－203、SK－206、SK－209の５基である。また、２区南側壁セクションの基本土層を対照試料とした。

SK－75では、試料採取用に南北セクションの南中央にA列、東西セクションとの交点にB列、北中央にC列が設けられ、覆土層から地山層まで厚さ５cmの試料20点が連続採取された。また、この土坑では、坑底に硬質面がみられたので、D列として面的に３点の試料が採取された。さらに、東西セクションで東中央の覆土上層から硬質面までの層位試料４点が採取された。なお、SK－75の対照試料として、南北セクション延長線の南側にE列、北側にF列が設けられ、土坑外の堆積層が厚さ５cmで13点連続採取された。

SK－76では、同様に東西セクションの東にA列、中央にB列、西にC列が設けられ、覆土層から地山

層まで厚さ５cm の試料42点が連続採取された。また、SK－76の対照試料として東西セクション延長線の東側に E 列、西側に F 列が設けられ、土坑外の堆積層が、厚さ５cm で28点が採取された。

SK－203でも、東西セクションの東に A 列、中央に B 列、西に C 列が設けられ、覆土層から地山層まで厚さ５cm の試料52点が採取された。対照試料として、東西セクション延長線の西側に D 列、東側に E 列が設けられ、土坑外の堆積層が厚さ５cm で32点が連続採取された。

SK－206では、南北セクションの南に A 列、中央に B 列、北に C 列が設けられ、覆土層のみが厚さ５cm で24点連続採取された。

SK－209では、南北セクションの南に A 列、中央に B 列、北に C 列が設けられ、覆土層のみが厚さ５cm で14点連続採取された。

また、基本土層の２区南側壁セクションでは、表層からⅢb 層までの基本土層が厚さ５cm で14点連続採取された。

これらの土坑試料と対照試料、合計246点を分析試料とした。試料名や室内観察結果は、リン分析結果表に併記する。

２．分 析 方 法

リン酸の測定は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）などを参考として、以下の操作工程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00g をケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10ml を加え再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100ml に定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5mg）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/g）を求める。

３．結 果

リン酸分析の結果を文末の「表1.～11.」に示し、以下に、各遺構でのリン酸含量について述べる。

（１）基本土層（２区南側壁セクション）

基本土層のリン酸含量は、表土 A・B2.93～3.12P_2O_5mg/g、Ⅰ層3.01P_2O_5mg/g、Ⅱ層2.65～3.07P_2O_5mg/g、Ⅲa 層2.47P_2O_5mg/g、Ⅲb 層1.54～2.16P_2O_5mg/g である。上層の試料ほど、高い値を示す。

（２）SK－75

対照試料とした土坑下の地山では２P_2O_5mg/g 前後、遺構外（地山層）の E 列と F 列でも２P_2O_5mg/g 前後の値を示す。また、基本土層試料と同様に上層ほど高い傾向が見られる。

土坑覆土は、各列で３P_2O_5mg/前後の値を示す。また、覆土Ⅰ層とⅡ層は地山や基本土層と比べてやや高い値を示す。また、硬化面は平均3.06P_2O_5mg/g を示し、土坑覆土と同様な含量である。

（３）SK－76

対照試料である土坑下の地山では２P_2O_5mg/g 未満、土坑外の地山の E 列と F 列では、２P_2O_5mg/g 前

後の含量である。また、上層ほど高い傾向がみられる。

土坑覆土は、各列で3 P_2O_5mg/g 前後の値を示し、上部ほど高い傾向を示した。また、土坑覆土では地山や基本土層と比べて、やや高い傾向を示す。

（4）SK－203

対照試料である土坑下の地山および土坑外の地山のD列とE列では2 P_2O_5mg/g 前後の含量値である。また、上層ほど高い傾向がみられる。

土坑覆土は3 P_2O_5mg/g 前後の含量であり、SK－76覆土と同様に上部ほど高い傾向を示す。また、土坑覆土は対照や基本土層よりもやや高い含量である。

（5）SK－206

土坑覆土は3 P_2O_5mg/g 前後の含量を示す。これは、隣接するSK－203の対照試料である地山D列・E列や基本土層と比較して、やや高い含量である。

（6）SK－209

土坑覆土は3 P_2O_5mg/g 以上の含量を示す。また、隣接するSK－203の対照試料とした地山D列・E列や基本土層と比較しても、やや高い含量である。

4．考 察

調査対象とした5基の土坑では、いずれも覆土が対照試料とした地山よりも高い値を示した。SK－75/76の覆土は基本土層Ⅰ層に対応する堆積物で構成されているが、覆土の含量は基本土層よりもやや高かった。しかし、著しく濃集していると言える含量値ではない。

また、土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量の調査例（Bowen, 1983, Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか，1991；天野ほか、1991）によれば、天然賦存量の上限は約3.0 P_2O_5mg/g 程度と推定される。人為的な影響を受けた既耕地では5.5 P_2O_5mg/g（黒ボク土の平均値）という報告がある（川崎ほか、1991）。各土坑覆土の含量値は、この天然賦存量と比較しても、リン酸の濃集を支持するものではない。

しかし、長年にわたる土壌での作用（風化や土壌生物の活動）により遺体や骨の分解とその成分の流出が生じていることも考えられる。この点を考慮すれば、土坑覆土でリン酸含量が高かった点は、土坑内に埋葬された遺体や骨の成分が残留していることを示唆する。

なお、今回の土坑覆土および対照試料とした地山試料を層位的、平面的に採取することで、土坑覆土でのリン酸含量の分布を立体的に把握できた。このような試料採取例を土坑および地山に設ける方法は、リン酸成分などの濃集場所、すなわち遺体が埋納された部分を確認する上で有効である。今後はさらに、各土坑覆土の含量の高低を明らかにするために、坑底付近に堆積する覆土を面的（10～20cm 間隔）に採取し、同様の検討を行うことが望まれる。

引用文献

天野洋司・太田健・草場敬・中井信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，P.28－36.

Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳「Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）*SOIL CHEMISTRY*」，P.235－236，学会出版センター.

Bowen, H. J. M.（1983）環境無機化学－元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳「Bowen, H. J. M.（1979）*Environmental Cemistry of Elements*」，P.297，博友社.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

川崎弘・吉田澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149p.： P.23－27.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書第１巻．441p.，産業図書.

農林水産省農林水産技術会議（1993）標準土色帖.

坂上寛一（1984）小山田№15遺跡・縄文土坑と現代芋穴における全リン酸分布の比較．東京都町田市・小山田遺跡群Ⅳ，８p.，小山田遺跡調査会.

竹迫紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析．「横浜市道高速２号線文化財埋蔵文化財発掘調査報告」，P.156－158，横浜市道高速２号線文化財埋蔵文化財発掘調査団.

竹迫紘（1985）L 地区北壁上層のリン分析結果について．「武蔵国分寺跡発掘調査報告書」，P.103－105，武蔵国分寺遺跡調査会.

竹迫紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．「神谷原Ⅰ」，P.412－416，八王子市椚田遺跡調査会.

表１　基本土層(2区南側南壁セクション)のリン酸分析結果

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
基本土層	5−1(表土A)	3.12	10YR2/2黒褐・CL	
	5−2(表土B)	2.99	10YR2/2黒褐・CL	
	5−3(表土B)	2.93	10YR2/2黒褐・CL	
	5−4(Ⅰ層)	3.01	10YR2/2黒褐・CL	
	5−5(Ⅰ層)	3.01	10YR2/2黒褐・CL	
	5−6(Ⅱ層)	3.07	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	5−7(Ⅱ層)	2.81	10YR2/3黒褐・CL	
	5−8(Ⅱ層)	2.76	10YR2/3黒褐・CL	
	5−9(Ⅱ層)	2.65	10YR2/3黒褐・CL	
	5−10(Ⅲa層)	2.47	7.5YR2/3極暗褐・HC〜CL	
	5−11(Ⅲb層)	2.16	7.5YR2/3極暗褐・HC〜CL	
	5−12(Ⅲb層)	1.97	7.5YR2/3極暗褐・HC〜CL	
	5−13(Ⅲb層)	1.64	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	5−14(Ⅲb層)	1.54	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	

表２　SK75のリン酸分析結果

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
A列　土坑覆土	A−1(Ⅰ層)	3.36	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−2(Ⅱ層上)	3.26	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−3(Ⅱ層下)	3.30	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−4(硬質面)	3.06	10YR3/1黒褐・CL〜L	
A列　地山	A−5	2.33	7.5YR2/3こく暗褐・HC〜CL	
	A−6	2.18	7.5YR3/1黒褐・CL	
	A−7	1.78	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
B列　土坑覆土	B−1(Ⅰ層)	3.35	10YR2/2黒褐・CL	
	B−2(Ⅱ層上)	3.35	10YR2/2黒褐・CL	
	B−3(Ⅱ層下)	3.42	10YR2/2黒褐・CL	
	B−4(硬質面)	3.17	10YR2/2黒褐・CL	
B列　対照試料	B−5	2.33	10YR3/3暗褐・HC〜CL	
	B−6	2.05	10YR3/3暗褐・HC〜CL	
	B−7	2.00	10YR3/4暗褐・HC〜CL	
C列　土坑覆土	C−1(Ⅰ層)	3.33	10YR2/2黒褐・L〜SL	
	C−2(Ⅱ層上)	3.40	10YR2/2黒褐・L〜SL	
	C−3(Ⅱ層下)	3.03	10YR2/2　・CL〜L	
	C−4(硬質面)	2.73	10YR3/4暗褐・CL	
B列　対照試料	C−5	2.58	10YR2/3黒褐・CL	
	C−6	2.33	10YR3/4　・CL	
D列　土坑覆土	D−1(硬質面)	3.00	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	D−2(硬質面)	3.20	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	D−3(硬質面)	3.04	10YR2/3黒褐・CL〜L	
D列　対照試料	E−1	2.80	10YR2/2黒褐・CL〜L	根混じる
	E−2	2.78	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	E−3	2.49	10YR3/1黒褐・CL〜L	
	E−4	2.14	10YR3/2黒褐・CL〜L	
	E−5	1.82	10YR3/2黒褐・CL〜L	
	E−6	1.65	10YR3/4暗褐・CL〜L	
F列　対照試料	F−1	3.09	10YR2/2黒褐・C〜CL	
	F−2	3.03	10YR2/2黒褐・C〜CL	
	F−3	2.82	10YR3/1黒褐・C〜CL	
	F−4	2.69	10YR2/3黒褐・CL〜CL	
	F−5	2.29	10YR3/2黒褐・CL〜CL	
	F−6	2.17	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−7	2.03	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	

表３　SK75東西セクションのリン酸分析結果

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
SK−75東西セクション	①(1層)	3.25	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	②(2層上)	3.27	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	③(2層下)	3.33	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	④(硬質面)	3.24	10YR3/1黒褐・CL〜L	

表４　SK76のリン酸分析結果（A・B列）

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
A列　土坑覆土	A−1	3.42	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−2	2.53	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−3	3.23	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−4	3.21	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−5	3.12	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−6	3.33	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−7	2.54	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−8	2.88	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	A−9	2.83	10YR2/3黒褐・CL〜L	7.5YR3/4暗褐・C〜CL混じる(わずか)
	A−10	3.22	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	A−11	2.97	10YR2/2黒褐・CL〜L	
A列　地山	A−12	1.32	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
	A−13	1.81	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
	A−14	1.80	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
B列　土坑覆土	B−1	3.28	10YR2/2黒褐・HC〜CL	
	B−2	3.23	10YR2/2黒褐・HC〜CL	
	B−3	3.13	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−4	3.01	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−5	2.90	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−6	2.94	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−7	2.94	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−8	2.66	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−9	2.96	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−10	2.87	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	B−11	2.81	10YR3/2黒褐・CL〜L	7.5YR3/4暗褐・C〜CL混じる(わずか)
B列　地山	B−12(Ⅲb層)	1.48	7.5YR3/3暗褐・HC〜CL	
	B−13(Ⅳ層)	1.21	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	B−14(Ⅳ層)	1.56	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	

表５　SK76のリン酸分析結果（C・E列）

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
C列　土坑覆土	C−1	3.23	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	C−2	3.32	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	C−3	3.22	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	C−4	3.12	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	C−5	2.94	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	C−6	2.85	10YR3/1黒褐・CL〜L	
	C−7	2.97	10YR3/1黒褐・CL〜L	
	C−8	2.87	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	C−9	2.61	10YR2/2黒褐・CL〜L	7.5YR3/4暗褐・C〜CL混じる
	C−10	2.91	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	C−11	2.79	10YR2/3黒褐・CL〜L	
C列　地山	C−12(Ⅲb層)	1.31	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
	C−13(Ⅲb層)	1.57	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
	C−14(Ⅳ層)	1.56	7.5YR3/2黒褐・HC〜CL	
E列　地山	E−1(Ⅱ層)	2.82	10YR2/3黒褐・CL〜L	
	E−2(Ⅱ層)	2.50	10YR3/3暗褐・CL〜L	
	E−3	2.34	10YR3/3暗褐・CL〜L	
	E−4	1.88	10YR3/4暗褐・CL〜L	
	E−5	1.51	10YR3/4暗褐・CL〜L	
	E−6	1.60	10YR3/4暗褐・CL〜L	
	E−7	1.57	10YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−8	1.45	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−9	1.58	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−10	1.64	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−11	1.59	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−12(Ⅳ層)	1.62	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−13(Ⅳ層)	1.59	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	E−14(Ⅳ層)	1.71	7.5YR3/2暗褐・HC〜CL	

表６　SK76のリン酸分析結果（F列）

	試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色・土性	備考
F列　地山	F−1(Ⅱ層)	2.55	10YR2/2黒褐・CL〜L	
	F−2(Ⅱ層)	2.28	10YR3/3暗褐・CL〜L	
	F−3(Ⅱ層)	2.20	10YR3/4暗褐・CL〜L	
	F−4(Ⅱ層)	1.96	10YR3/4暗褐・CL〜L	
	F−5(Ⅲa層)	1.69	10YR3/4暗褐・CL	
	F−6(Ⅲa層)	1.61	10YR2/3黒褐・CL	
	F−7(Ⅲa層)	1.53	10YR3/3暗褐・HC〜CL	
	F−8(Ⅲb層)	1.15	7.5YR4/4褐・HC〜CL	
	F−9(Ⅲb層)	1.22	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−10(Ⅲb層)	1.32	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−11(Ⅲb層)	1.62	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−12(Ⅳ層)	1.49	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−13(Ⅳ層)	1.69	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	
	F−14(Ⅳ層)	1.54	7.5YR3/4暗褐・HC〜CL	

表７　SK−203のリン酸分析結果（A･B 列）

試料番号			リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色･土性	備考
A 列	土坑覆土	A−1	3.48	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−2	3.37	10YR2/3黒褐･CL	
		A−3	3.22	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−4	3.29	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−5	3.03	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−6	2.75	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		A−7	3.11	10YR2/3暗褐･CL〜L	10YR3/4暗褐わずかに混じる
		A−8	3.37	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−9	3.05	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐わずかに混じる
		A−10	2.86	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		A−11	3.12	10YR2/3黒褐･CL	
		A−12	3.09	10YR2/3黒褐･CL	
		A−13	2.96	10YR2/3黒褐･CL	
		A−14	2.93	10YR2/3黒褐･CL	10YR3/4暗褐わずかに混じる
		A−15	2.68	10YR3/3暗褐･CL	
A 列	地山	A−16	1.64	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		A−17	1.87	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		A−18	2.08	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
B 列	土坑覆土	B−1	3.48	10YR2/2黒褐･CL	
		B−2	3.34	10YR2/2黒褐･CL	
		B−3	3.33	10YR2/2黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−4	2.92	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−5	2.78	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−6	2.86	10YR3/1黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
		B−7	2.80	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−8	2.53	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−9	2.92	10YR2/2黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−10	3.04	10YR2/2黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−11	3.01	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4暗褐混じる
		B−12	2.67	10YR3/2黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
		B−13	2.70	10YR2/3黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
		B−14	2.75	10YR2/3黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
		B−15	2.97	10YR2/2黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
B 列	地山	B−16	1.50	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		B−17	1.71	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		B−18	1.55	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	

表８　SK203のリン酸分析結果（C･D 列）

試料番号			リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色･土性	備考
C 列	土坑覆土	C−1	3.50	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−2	3.49	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−3	3.38	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−4	3.12	10YR2/3黒褐･CL〜L	C−5はナシ
		C−6	2.77	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		C−7	2.63	10YR3/2黒褐･CL	10YR3/4暗褐混じる
		C−8	2.59	10YR3/3暗褐･CL〜L	
		C−9	2.69	10YR3/3暗褐･CL〜L	
		C−10	2.58	10YR3/3暗褐･CL〜L	10YR4/6褐混じる
		C−11	2.78	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		C−12	2.82	10YR3/3黒褐･CL〜L	10YR3/4黒褐混じる
		C−13	2.74	10YR2/3黒褐･CL〜L	10YR3/4黒褐混じる
		C−14	3.29	10YR2/2黒褐･CL〜L	10YR3/4黒褐混じる
C 列	地山	C−15	1.54	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		C−16	1.69	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		C−17	1.66	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
D 列	地山	D−1	2.96	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		D−2	2.84	10YR2/2黒褐･CL	
		D−3	2.72	10YR3/2黒褐･CL	
		D−4	2.30	10YR3/3暗褐･CL	
		D−5	2.10	10YR3/3暗褐･CL	
		D−6	1.90	10YR3/4暗褐･CL	
		D−7	1.76	10YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−8	1.52	10YR4/4褐･HC〜CL	
		D−9	1.49	10YR4/4褐･HC〜CL	
		D−10	1.47	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−11	1.50	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−12	1.58	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−13	1.71	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−14	1.66	7.5YR4/4褐･HC〜CL	
		D−15	1.82	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		D−16	1.93	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	

表９　SK203のリン酸分析結果（E 列）

試料番号			リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色･土性	備考
E 列	地山	E−1	3.18	10YR2/2黒褐･CL	
		E−2	3.10	10YR2/2黒褐･CL	
		E−3	2.89	10YR2/3黒褐･CL	
		E−4	2.82	10YR3/2黒褐･CL	
		E−5	2.49	10YR3/2黒褐･CL	
		E−6	2.37	10YR3/2黒褐･CL	
		E−7	2.03	10YR3/3暗褐･CL	
		E−8	1.71	10YR4/4褐･CL	
		E−9	1.46	10YR3/3暗褐･HC〜CL	
		E−10	1.44	10YR4/4褐･HC〜CL	
		E−11	1.45	10YR4/6褐･HC〜CL	
		E−12	1.46	10YR4/4褐･HC〜CL	
		E−13	1.52	10YR4/4褐･HC〜CL	
		E−14	1.65	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		E−15	1.81	7.5YR3/4暗褐･HC〜CL	
		E−16	1.98	7.5YR4/4褐･HC〜CL	

表10　SK206のリン酸分析結果

試料番号			リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色･土性	備考
A 列	土坑覆土	A−1	3.31	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−2	3.32	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−3	3.38	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−4	3.37	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−5	3.28	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−6	3.24	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−7	3.22	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−8	2.83	10YR3/2黒褐･CL〜L	
B 列	土坑覆土	B−1	3.27	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−2	3.25	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−3	3.21	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		B−4	3.28	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		B−5	3.36	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−6	3.24	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−7	3.22	10YR2/3黒褐･CL	
		B−8	2.95	10YR3/2黒褐･CL〜L	
C 列	土坑覆土	C−1	3.35	10YR2/2黒褐･CL	
		C−2	3.35	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−3	3.40	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−4	3.40	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−5	3.32	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−6	3.14	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−7	3.07	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−8	2.93	10YR3/2黒褐･CL〜L	

表11　SK209のリン酸分析結果

試料番号			リン酸含量 P_2O_5mg/g	土色･土性	備考
A 列	土坑覆土	A−1	3.37	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−2	3.27	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−3	3.26	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		A−4	3.19	10YR2/2黒褐･CL〜L	
B 列	土坑覆土	B−1	3.41	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−2	3.35	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−3	3.36	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−4	3.39	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		B−5	3.17	10YR2/3黒褐･CL〜L	
C 列	土坑覆土	C−1	3.33	10YR2/3黒褐･CL〜L	
		C−2	3.36	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−3	3.45	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−4	3.32	10YR2/2黒褐･CL〜L	
		C−5	3.07	10YR2/2黒褐･CL〜L	

（1）分析値は乾土あたり。

（2）土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

（3）土性の判定は、土壌調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による。

L…壌土（ある程度を砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。）

CL…埴壌土（わずかに砂を感じるが、かなりねばる。）

HC…重埴土（ほとんど砂を感じないで、よくねばる。）

2）－ リ ン 分 析 報 告 書 －

応用地質株式会社（平成８年度委託）

１．分 析 概 要

（１）分 析 目 的

調査地の遺跡内の土壌において、過去の遺体の埋葬状況を検証するためにリン分析を実施した。

（２）件　　名

西国分寺地区遺跡　リン分析

（３）調 査 地

東京都国分寺市泉町２丁目１番地

（４）分 析 期 間

自　平成７年12月28日

至　平成８年２月16日

（５）分 析 内 容

遺跡内の各調査地点において採取した土壌試料をもとに、「底質調査方法」によるリン分析を382地点で実施した。表1.に分析数量表を示す。

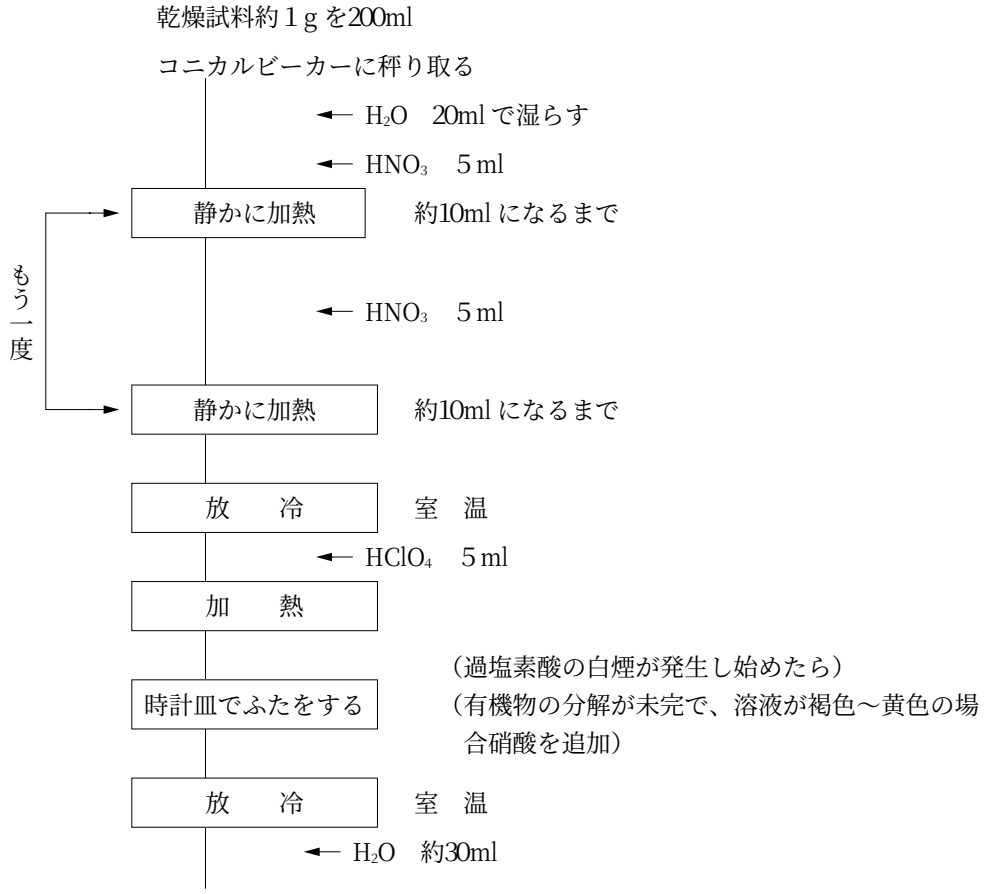
表１－１　分析数量表

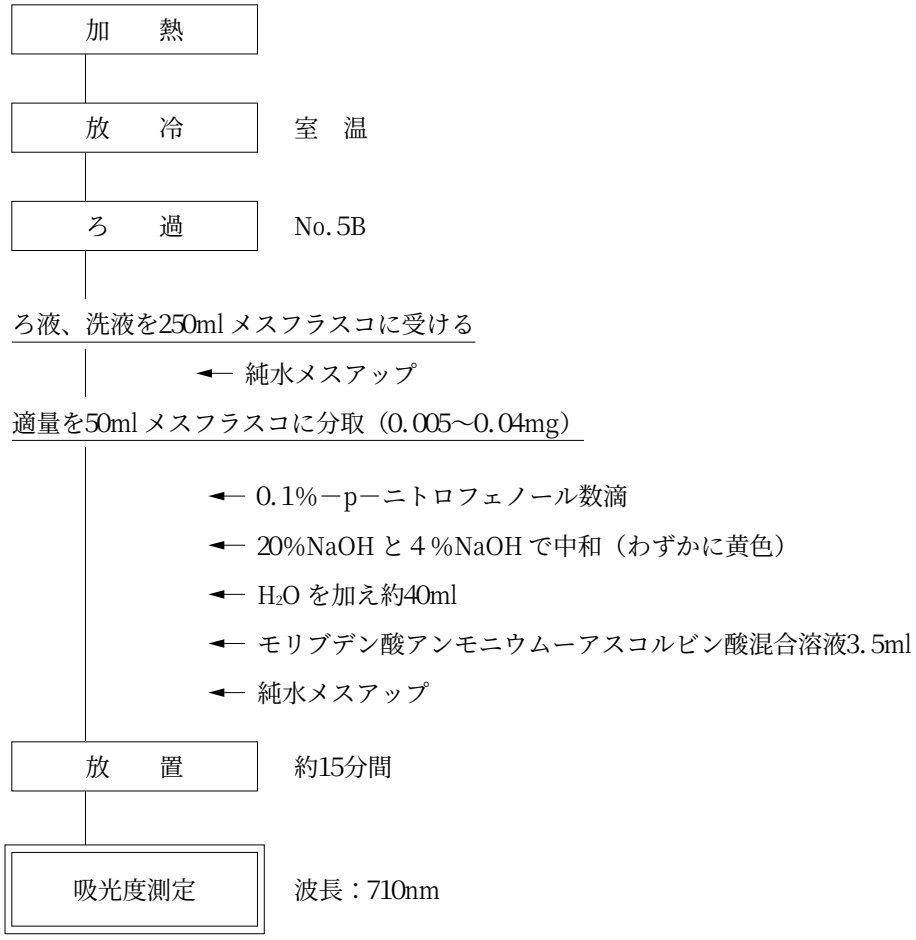
（試料）

遺構№		列					小計	合計
		A	B	C	D	E		
3区	SK523	9	8	8	6	8	39	159
	SK530	7	7	7	6	6	33	
	SK549	6	5	5	5	5	26	
	SK575	13	12	13	11	12	61	
4区	SK798	17	14	14	11	11	67	223
	SX86	41	39	38	38		156	
合　　計								382

２．分 析 方 法

リン分析は、各土壌試料について、「底質調査方法19.1硝酸－過塩素酸分解法」により行い、リン酸含有量（P_2O_5）を求めた。以下に分析方法を示す。





３．分 析 結 果

調査対象とした遺構は、第356図に示すように、３区 SK－523、SK－530、SK－549、SK－575及び４区 SK－798、SX－86の合計６地点である。土壌試料は、各地点遺構の内外で４～５列を約５cm ピッチで覆土層から地山層まで連続採取されている。以下にリン酸分析結果をまとめる。

（１）３区（SK－523、SK－530、SK－549、SK－575）

① SK－523

SK－523では、遺構の外側２列（E 列、D 列）と内側３列（A 列、B 列、C 列）より採取した各列８～９試料について分析を行った。分析結果を文末の表2. にまとめる。

遺構の内側の A 列、B 列及び C 列のリン酸含有量は、土坑覆土層では2.8～3.1P_2O_5mg/g であり、土坑下の地山層では1.6～2.2P_2O_5mg/g を示す。土坑下の地山層は土坑覆土層に比べ、0.6～1.5P_2O_5mg/g 低い値を示している。また、遺構の外側の E 列及び D 列については、1.9～2.4P_2O_5mg/g を示しており、深度方向に低くなる傾向がある。

② SK－530

SK－530では、遺構の外側２列（E 列、D 列）と内側３列（A 列、B 列、C 列）より採取した各列６～７試料について分析を行った。分析結果を文末の表3. にまとめる。

遺構の内側の A 列、B 列及び C 列のリン酸含有量は、土坑覆土層では2.8～3.0P_2O_5mg/g、土坑下の地

山層では2.2～2.6P_2O_5mg/g を示す。土坑下の地山層は土坑覆土層に比べ、0.2～0.8P_2O_5mg/g 低い値を示している。また、遺構の外側の E 列及び D 列については、2.2～2.6P_2O_5mg/g を示しており、深度方向に低くなる傾向がある。

③ SK－549

SK－549では、遺構の外側２列（E 列、D 列）と内側３列（A 列、B 列、C 列）より採取した各列５～６試料について分析を行った。分析結果を文末の表4. にまとめる。

遺構の内側の A 列、B 列及び C 列のリン酸含有量は、土坑覆土層では、B 列の上部で3.5P_2O_5mg/g、それ以外では2.7～2.9P_2O_5mg/g を示す。土坑下の地山層では、2.0～2.5P_2O_5mg/g を示しており、土坑覆土層と比べ0.2～0.8P_2O_5mg/g 低い値を示す。また、遺構の外側の E 列及び D 列については、2.0～2.5P_2O_5mg/g を示しており、深度方向に低くなる傾向がある。

④ SK－575

SK－575では、遺構の外側２列（D 列、E 列）と内側３列（A 列、B 列、C 列）より採取した各列11～13試料について分析を行った。分析結果を文末の表5. にまとめる。

遺構の内側の A 列、B 列及び C 列のリン酸含有量は、上部土坑覆土層では2.8～3.0P_2O_5mg/g、下部土坑覆土層では2.4～3.1P_2O_5mg/g を示しており、下部土坑覆土層の方が高い値を示している。土坑下の地山層については、1.2～1.4P_2O_5mg/g を示しており、土坑覆土層と比べ1.0～1.5P_2O_5mg/g 低い値を示している。また、遺構の外側の D 列及び E 列については、1.1～2.5P_2O_5mg/g を示しており、両列とも深度方向に低くなる傾向がある。

（２）４区（SK－798、SX－86）

① SK－798

SK－798では、遺構の外側２列（E 列、D 列）と内側３列（A 列、B 列、C 列）より採取した各列11～17試料について分析を行った。分析結果を文末の表6. まとめる。

遺構の内側の A 列、B 列及び C 列のリン酸含有量は、上部土坑覆土層では3.6～4.0P_2O_5mg/g、中部土坑覆土層では3.3～3.8P_2O_5mg/g、下部土坑覆土層では2.7～3.5P_2O_5mg/g を示しており、他の遺構に比べ高い数値を示している。土坑下の地山層については、1.1～1.4P_2O_5mg/g を示しており、土坑覆土層部と比べ1.5～2.0P_2O_5mg/g 低い値を示している。また、遺構の外側の E 列及び D 列については、1.2～3.3P_2O_5mg/g を示しており、両列とも深度方向に低くなる傾向がある。

② SX－86

SX－86では、遺構の外側２列（D 列、C 列）と内側２列（A 列、B 列）より採取した各列38～41試料について分析を行った。分析結果を文末の表7. にまとめる。

４．ま と め

今回の分析結果を文末の表8. にまとめる。

分析結果によると、３区でのリン酸含有量は、遺構の外側の地山層部については、上部で2.5P_2O_5mg/g

程度の値を示してはいるが、深くなるにつれて低くなる傾向がある。しかし、遺構の内側では、土坑覆土層で３P_2O_5mg/g 程度（SK－549の B 列の試料 No.1では3.5P_2O_5mg/g）の値を示しているが、土坑下の地山層になると２P_2O_5mg/g 程度に低くなる。この傾向は、SK－523及び SK－575において顕著にみられる。

４区でのリン酸含有量は、SK－798については、３区と同様な傾向を示している。遺構の内側の土坑覆土層部では3.5～4.0P_2O_5mg/g という非常に高い数値を示してはいるが、土坑の地山層になると1.3P_2O_5mg/g 程度に低くなる。遺構の外側においても、D 列、E 列とも上部で３P_2O_5mg/g 程度という高い数値を示してはいるが、深くなるにつれて低い値を示している。また、SX－86については、遺構の内側の土坑覆土層部では、A 列、B 列とも試料 No.16付近まで3.0～3.8P_2O_5mg/g といった高い数値を示しており、それ以深は2.0～2.5P_2O_5mg/g を示す。しかし、土坑下の地山層部では1.4～1.8P_2O_5mg/g に値が低くなっている。大きな土坑であるため、データのばらつきがみられるが、他の遺構と同様に、土坑下の地山層でリン酸含有量は少なくなっている。また、遺構の外側では、上部で２P_2O_5mg/g 程度を示しており、以下深度方向に若干低くなっている。

以上記したように、全体にリン酸含有量は、１～４P_2O_5mg/g であり、あまり大きな数値は記録されていない。（板橋区「五段田遺跡」で報告された分析結果(*1)によれば、人骨周辺サンプルでは、9.5P_2O_5mg/g 程度を示している。）、しかし、天然賦存量の上限を3.0P_2O_5mg/g とすれば、土坑覆土層部においてはそれ以上の数値を示したところが多く、地山層部ではほとんどがそれ以下の数値を示したという顕著な差が把握されており、人骨が埋葬されていた可能性は否定できない。

土坑外の地山において大きい値を示す地点については、地歴が明確でないため、人骨を起源とするリン酸の土坑外への流出（人骨の分解→系外への流出）か、他の影響（例えば、肥料等を起源とするもの）かは定かではない。

今後の調査においては、リン酸が拡散的であることから、データを吟味する上で比較的拡散的でないカルシウム含有量の分析も併せて実施することが望ましい。

（＊１）　五段田遺跡調査会（1991）
「五段田遺跡Ⅱ（東京都板橋区五段田遺跡第二次発掘調査報告書）」

表２　SK－523のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g									
	E		A		B		C		D	
1	地山	2.43	覆土	2.90	覆土	2.98	覆土	3.03	地山	2.37
2	地山	2.39	覆土	3.13	覆土	3.04	覆土	3.07	地山	2.47
3	地山	2.37	覆土	2.79	覆土	2.95	覆土	2.92	地山	2.42
4	地山	2.29	覆土	3.01	覆土	2.93	覆土	2.74	地山	2.18
5	地山	2.28	覆土	2.97	覆土	2.80	地山	2.39	地山	2.11
6	地山	2.18	地山	2.19	地山	2.04	地山	1.97	地山	1.92
7	地山	2.02	地山	2.00	地山	1.61	地山	1.89		
8	地山	1.86	地山	2.01	地山	1.35	地山	1.63		
9			地山	1.87						
平均 覆土	－		2.96		2.94		2.94		－	
平均 地山	2.23		2.02		1.67		1.97		2.25	
平均 全体	2.23		2.54		2.46		2.46		2.25	

表３　SK-S30のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g									
	E		A		B		C		D	
1	地山	2.58	覆土	2.74	覆土	2.85	覆土	3.07	地山	2.64
2	地山	2.94	覆土	2.85	覆土	3.03	覆土	2.87	地山	2.44
3	地山	2.65	覆土	2.77	覆土	2.94	覆土	2.78	地山	2.63
4	地山	2.65	覆土	2.90	覆土	2.76	覆土	2.76	地山	2.70
5	地山	2.51	地山	2.55	地山	2.66	地山	2.58	地山	2.49
6	地山	2.34	地山	2.52	地山	2.42	地山	2.39	地山	2.20
7			地山	2.36	地山	2.19	地山	2.29		
8										
9										
平均 覆土	－		2.82		2.90		2.87		－	
平均 地山	2.61		2.48		2.42		2.42		2.52	
平均 全体	2.61		2.67		2.69		2.68		2.52	

表４　SK－549のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g									
	E		A		B		C		D	
1	地山	2.50	覆土	2.87	覆土	3.54	覆土	2.62	地山	2.51
2	地山	2.54	覆土	2.88	覆土	2.67	覆土	2.76	地山	2.16
3	地山	2.37	覆土	2.77	地山	2.53	地山	2.36	地山	2.34
4	地山	2.00	地山	2.53	地山	2.42	地山	2.24	地山	2.32
5	地山	2.02	地山	2.30	地山	2.29	地山	2.03	地山	2.18
6			地山	2.30						
7										
8										
9										
平均 覆土	－		2.85		3.11		2.69		－	
平均 地山	2.29		2.38		2.41		2.21		2.30	
平均 全体	2.29		2.61		2.69		2.40		2.30	

表５　SK－575のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g									
	D		A		B		C		E	
1	地山	2.43	覆土(1)	2.82	覆土(1)	3.04	覆土(1)	2.85	地山	2.17
2	地山	2.41	覆土(1)	3.00	覆土(1)	2.88	覆土(1)	2.88	地山	2.13
3	地山	2.29	覆土(1)	2.85	覆土(1)	3.05	覆土(1)	2.75	地山	2.37
4	地山	1.97	覆土(1)	2.92	覆土(1)	2.87	覆土(1)	2.94	地山	2.28
5	地山	1.72	覆土(1)	2.77	覆土(2)	3.09	覆土(2)	2.75	地山	2.49
6	地山	1.68	覆土(1)	2.77	覆土(2)	3.02	覆土(2)	2.64	地山	2.32
7	地山	1.31	覆土(2)	3.00	覆土(2)	2.98	覆土(2)	2.98	地山	2.39
8	地山	1.22	覆土(2)	2.90	覆土(2)	2.81	覆土(2)	2.75	地山	2.28
9	地山	1.20	覆土(2)	2.79	覆土(2)	2.67	覆土(2)	2.36	地山	1.98
10	地山	1.11	覆土(2)	2.59	地山	1.20	覆土(2)	2.51	地山	1.57
11	地山	1.20	地山	1.27	地山	1.22	地山	1.41	地山	1.49
12			地山	1.55	地山	1.20	地山	1.32	地山	1.09
13			地山	1.25			地山	1.31		
平均 覆土(1)	－		2.86		2.96		2.86		－	
平均 覆土(2)	－		2.82		2.91		2.67		－	
平均 地山	1.69		1.36		1.21		1.35		2.05	
平均 全体	1.69		2.50		2.50		2.42		2.05	

表６　SK－798のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g									
	E		A		B		C		D	
1	地山	3.16	覆土(1)	3.70	覆土(1)	4.06	覆土(1)	3.71	地山	2.96
2	地山	3.35	覆土(1)	3.85	覆土(1)	3.90	覆土(1)	3.67	地山	2.58
3	地山	2.77	覆土(1)	3.58	覆土(1)	3.72	覆土(2)	3.82	地山	2.76
4	地山	2.56	覆土(1)	3.70	覆土(1)	3.63	覆土(2)	3.59	地山	2.44
5	地山	2.35	覆土(2)	3.65	覆土(2)	3.80	覆土(2)	3.83	地山	2.66
6	地山	1.71	覆土(2)	3.33	覆土(2)	3.83	覆土(3)	3.66	地山	2.07
7	地山	1.66	覆土(2)	3.33	覆土(2)	3.84	覆土(3)	3.50	地山	1.69
8	地山	1.35	覆土(2)	3.55	覆土(2)	3.64	覆土(3)	3.62	地山	1.18
9	地山	1.39	覆土(2)	3.57	覆土(2)	3.78	覆土(3)	3.68	地山	1.62
10	地山	1.22	覆土(2)	3.53	覆土(3)	3.42	覆土(3)	3.54	地山	1.39
11	地山	1.38	覆土(3)	3.37	覆土(3)	3.47	覆土(3)	2.99	地山	1.46
12			覆土(3)	3.12	地山	2.50	地山	1.11		
13			覆土(3)	2.71	地山	1.33	地山	1.29		
14			地山	1.34	地山	1.19	地山	1.24		
15			地山	1.48						
16			地山	1.28						
17			地山	1.36						
平均 覆土(1)	－		3.71		3.83		3.69		－	
平均 覆土(2)	－		3.49		3.78		3.75		－	
平均 覆土(3)	－		3.07		3.45		3.50		－	
平均 地山	2.08		1.37		1.67		1.21		2.07	
平均 全体	2.08		2.97		3.29		3.09		2.07	

表７　SX－86のリン酸分析結果

試料番号	リン酸含有量 P_2O_5mg/g							
	D		B		A		C	
1	地山Ⅳ	1.82	覆土	3.43	覆土	3.44	地山Ⅳ	1.83
2	地山Ⅳ	2.05	覆土	3.23	覆土	2.84	地山Ⅳ	1.67
3	地山Ⅳ	1.99	覆土	3.31	覆土	3.13	地山Ⅳ	1.79
4	地山Ⅳ	2.01	覆土	3.00	覆土	3.46	地山Ⅳ	1.73
5	地山Ⅳ	2.15	覆土	3.33	覆土	3.67	地山Ⅳ	1.81
6	地山Ⅳ	2.53	覆土	3.50	覆土	3.56	地山Ⅳ	1.87
7	地山Ⅳ	2.59	覆土	3.30	覆土	3.82	地山Ⅳ	1.69
8	地山Ⅳ	2.55	覆土	3.04	覆土	3.26	地山Ⅳ	1.73
9	地山Ⅳ	2.18	覆土	3.05	覆土	3.57	地山Ⅳ	2.00
10	地山Ⅳ	1.99	覆土	2.83	覆土	3.72	地山Ⅳ	1.78
11	地山Ⅳ	1.60	覆土	3.23	覆土	3.09	地山Ⅳ	1.75
12	地山Ⅳ	1.46	覆土	3.24	覆土	2.96	地山Ⅳ	1.88
13	地山Ⅳ	1.55	覆土	3.38	覆土	2.88	地山Ⅳ	1.88
14	地山Ⅳ	1.70	覆土	3.14	覆土	2.85	地山Ⅳ	1.75
15	地山Ⅳ	1.88	覆土	3.08	覆土	2.84	地山Ⅳ	1.67
16	地山Ⅳ	1.89	覆土	2.99	覆土	2.65	地山Ⅳ	1.73
17	地山Ⅴ	1.87	覆土	2.50	覆土	2.22	地山Ⅴ	1.70
18	地山Ⅴ	1.65	覆土	2.14	覆土	2.09	地山Ⅴ	1.76
19	地山Ⅴ	1.76	覆土	2.03	覆土	2.32	地山Ⅴ	1.74
20	地山Ⅴ	1.80	覆土	1.87	覆土	2.13	地山Ⅴ	1.69
21	地山$Ⅵ_a$	1.71	覆土	2.75	覆土	2.83	地山Ⅵa	1.47
22	地山$Ⅵ_a$	1.82	覆土	1.98	覆土	2.84	地山Ⅵa	1.62
23	地山$Ⅵ_a$	1.68	覆土	1.81	覆土	1.97	地山Ⅵa	1.73
24	地山$Ⅵ_a$	1.84	覆土	1.93	覆土	1.95	地山Ⅵa	1.80
25	地山$Ⅵ_a$	1.80	覆土	1.78	覆土	2.02	地山Ⅵa	1.70
26	地山$Ⅵ_b$	1.88	覆土	1.64	覆土	2.16	地山$Ⅵ_b$	1.83
27	地山$Ⅵ_b$	1.82	覆土	1.96	覆土	2.28	地山$Ⅵ_b$	1.91
28	地山$Ⅵ_b$	1.76	覆土	2.58	覆土	2.33	地山$Ⅵ_b$	1.87
29	地山$Ⅵ_b$	1.72	覆土	2.29	覆土	2.34	地山$Ⅵ_b$	1.84
30	地山$Ⅵ_b$	1.75	覆土	2.35	覆土	2.22	地山$Ⅵ_b$	1.74
31	地山Ⅶ	1.71	覆土	2.64	覆土	2.36	地山$Ⅵ_b$	1.82
32	地山Ⅶ	1.75	覆土	2.15	覆土	2.19	地山Ⅶ	1.70
33	地山Ⅶ	1.71	覆土	2.37	覆土	2.48	地山Ⅶ	1.90
34	地山Ⅸ	1.73	覆土	2.10	覆土	2.50	地山Ⅶ	1.77
35	地山Ⅸ	1.66	覆土	2.54	覆土	2.02	地山Ⅶ	1.79
36	地山Ⅸ	1.67	覆土	2.44	覆土	2.19	地山Ⅶ	1.81
37	地山Ⅸ	1.72	地山Ⅸ	1.79	覆土	2.03	地山Ⅸ	1.68
38	地山Ⅸ	1.71	地山Ⅸ	1.75	覆土	1.97	地山Ⅸ	1.81
39			地山Ⅸ	1.85	地山Ⅸ	1.63		
40					地山Ⅸ	1.35		
41					地山Ⅸ	1.43		
平均 遺構	－		2.64		2.66		－	
平均 地山Ⅳ	2.00		－		－		1.79	
平均 地山Ⅴ	1.77		－		－		1.72	
平均 地山$Ⅵ_a$	1.77		－		－		1.66	
平均 地山$Ⅵ_b$	1.79		－		－		1.84	
平均 地山Ⅶ	1.72		－		－		1.79	
平均 地山Ⅸ	1.70		1.80		1.47		1.75	
平均 全体	1.85		2.57		2.58		1.77	

(注)覆土は「土坑覆土層」を指す。
覆土(1)－上部土坑覆土層、(2)－中部土坑覆土層、(3)－下部土坑覆土層

3）－歴史時代・縄文時代遺跡土壌中のリン酸分析からみた人骨埋葬の可能性についての一考察－

株式会社クレアテラ（平成９年度委託）

１．目 的

関東地方に多い火山灰土壌は、母材の構成要素として、多量に遊離アルミニウムを含んでいる。それにより、土壌は酸性が強い傾向となる。このために埋葬された遺体及び人骨は、酸により溶解されてしまい、視覚的に見つけることは困難となる。

しかしながら、この土壌に含まれるアルミニウムは、リン酸の固定力が強く人骨中のリン酸と結びついて水に難溶性の化合物を形成する。

この性質を利用して、西国分寺地区遺跡調査会発掘の歴史時代及び縄文時代の土壌中のリン酸を分析し、その結果にもとずいて、人為的影響および、人骨埋葬の可能性について考察する。

２．分 析 遺 構

分析した遺構と、記号及び番号は以下の通りである。

歴史時代

SK－204、A～E 列、計83点（内地山32点）
SK－212、A～E 列、計55点（内地山22点）
SK－214、A～G 列、計38点（内地山12点）
SK－556、A～E 列、計35点（内地山12点）
SX－13、 A～C 列、計41点

縄文時代

SK－317J、 A～D 列、計52点（内地山10点）
SK－790J、 A～E 列、計96点（内地山38点）
SK－937J、 A～F 列、計93点（内地山23点）
SK－954J、 A～E 列、計71点（内地山21点）
SK－1060J、A～E 列、計51点（内地山20点）

３．分 析 方 法

各試料を一定量採取し、硝酸一過塩素酸分解する。

その後、バナドモリブデン酸で黄色に発色し、波長440nm で吸光度を測定する。

土壌100g 当たりの mg 数で表示する。

４．分 析 結 果 の 解 析

（１）分析値の範囲と平均値

分析値の範囲と平均値を文末の表1.2.にまとめた。

（２）遺構内の全リン酸との比較

全リン酸の濃度が500mg/100g 以上のところを目安として、それぞれの遺構についてその濃度を越える所を列挙し、この付近の他の記号の所の濃度も記す。

全リン酸の濃度が500mg/100g 以上のところは、

SK－214　　E－３

SK－556　　B－１

SK－937J　　A－８a

SK－954J　　B－11・12・13、C－12

である。

これらの結果は、文末の表3. 表4. にまとめた。

５．各遺構毎の特徴と考察

各遺構毎の人為的影響及び人骨埋葬の可能性について検討してみる。

当時の人為的影響としては、不要な物（ゴミ、食滓、人糞）等の痕跡が考えられる。これらは、一ケ所に集中していると推測される。

後世の人為的影響としては、リン酸肥料の施肥等を考慮しなければならない。この肥料の影響は上方のみと考えられる。

SK－204遺構

水平的に全リン酸濃度が高い所がある。

A の14、B の12、C の13、14（約400mg/100g）である。しかしながら、人骨埋葬の可能性が顕著と判断される程濃度は高くないが、当時の人為的影響があったと考えられる。

SK－212遺構

地山より全リン酸の濃度は平均値で約100mg/100g 程度高いが、最大の濃度で405mg/100g で人骨埋葬の可能性が顕著と判断される箇所は無い。

SK－214遺構

500mg/100g を越える全リン酸の濃度は記号 E の３番に見つけられた。ここは、遺構の端のほうであり垂直方向では、他と比べ若干農度が高い（442～532mg/100g）が、水平方向及び、面的には広がっていない。しかしながら、何らかの人為的影響があった可能性は否定できない。

SK－556遺構

B の１番で500mg/100g を越えているが、ここだけであり水平方向に広がっていないので、後世の影響ではないかと推測される。

SX－13遺構

ここは、A、C の２番で400mg/100g を越えるが、全般的に全リン酸の濃度は低いので人骨埋葬の可能性否定的である。

SK－317J 遺構

地山より若干全リン酸の濃度が高い程度である。人骨埋葬の可能性があるとは判断しがたい。

SK－790J 遺構

地山より平均値で約100mg/100g 程度濃度が高いが、人骨埋葬の可能性があるとは判断しがたい。

SK－937J 遺構

A の８a で520mg/100g の全リン酸の濃度が検出された。全般的に全リン酸濃度が400mg/100g を越えている。何らかの強い人為的影響があったと判断される。

SK－954J 遺構

C の12番、B の11、12、13番で全リン酸の濃度が500mg/100g を越えている。遺構の下方ではあるが、水平的広がりが認められる。人骨埋葬の可能性は否定できない。

SK－1060J 遺構

地山より若干全リン酸濃度が高いが、人骨埋葬の可能性あるとは、判断しがたい。

６．結　論

人骨埋葬の可能性のあると判断される全リン酸の濃度600mg/100g を越えるところは無かったが、強いて可能性を上げるとすると、SK－954J である。

出来得れば、この遺構の面的な全リン酸の分布及び全カルシウムの分布を求めて見てもよいのではないか。

SK－937J は、全リン酸濃度は高いところは一か所だけだが全般的に高めで、人骨埋葬の可能性は否定出来ない。この遺構も全リン酸及び全カルシウムの分布を調べてもよいのではないか。

SK－204は、全リン酸濃度は500mg/100g を越えていないが、12、13、14付近に水平的に広がりがある。何らかの当時の人為的影響があったと考えられる。

SK－214については、人骨埋葬の可能性は、遺構の端なので低いと考えられる。
しかしながら当時の人為的影響があったと考えられる。

SK－556については、上方の一点（B の１番）のみなので前述の様に後世の影響が強いと判断される。

他の遺構については、確かに地山より全リン酸の濃度が高いが、その差は100mg/100g 程度であり、人骨埋蔵の可能性は低く当時の弱い人為的影響が有ったと判断される。

前述の様に SK－954J 及び、SK－937J についてはピッチをせばめて、例えば SK－954J では、現在の A、B、C に平行で近い位置（番号は11、12、13、14）付近を又 SK－937J では、A の８a の付近について、リン酸及び全カルシウムの分析をし、推測をもっと強固なものとしても良いのではないかと考える。

表１　歴史時代

遺構番号	記　号	全リン酸の範囲 mg/100g	平均値 mg/100g
SK－204	A	123～419	295
	B	170～412	298
	C	127～473	344
	*D	145～377	226
	*E	197～355	265
SK－212	A	213～329	295
	B	184～391	324
	C	295～405	331
	*D	118～313	221
	*E	165～303	218
SK－214	A	247～409	330
	B	193～395	297
	C	199～361	275
	D	179～326	244
	E	442～532	477
	*F	252～388	293
	*G	340～416	380
SK－556	A	267～368	315
	B	245～501	327
	C	274～338	310
	*D	218～357	295
	*E	279～346	321
SK－13	A	220～411	321
	B	301～387	339
	C	272～432	333

＊は地山

表２　縄文時代

遺構番号	記　号	全リン酸の範囲 mg/100g	平均値 mg/100g
SK－317J	A	213～316	272
	B	218～427	273
	C	186～370	281
	*D	171～277	219
SK－790J	A	205～380	302
	B	230～399	323
	C	250～391	334
	*D	181～282	214
	*E	154～247	208
SK－937J	A	235～520	409
	B	241～484	388
	C	202～468	367
	D	210～467	383
	*E	183～262	226
	*F	174～335	228
SK－954J	A	215～397	304
	B	211～581	396
	C	199～501	338
	*D	202～253	224
	*E	197～267	228
SK－1060J	A	212～389	297
	B	190～347	279
	C	177～317	243
	*D	156～208	180
	*E	203～334	229

＊地山

表３　歴史時代

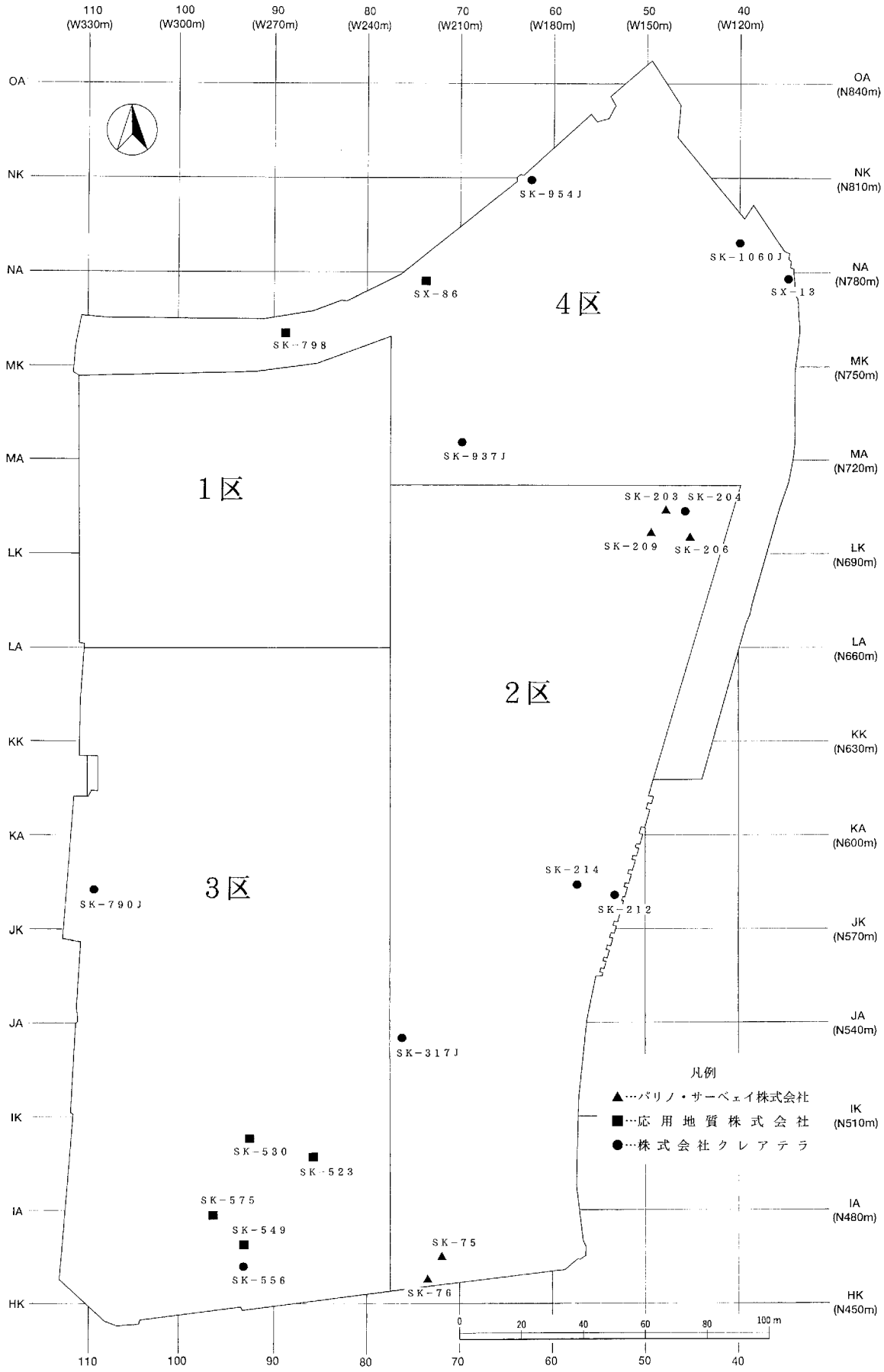
SK－214	F	A	D	B	E	C	G
1	388	409		346	456	344	416
2	252	378		395	442	325	373
3	270	319	241	379	532	361	366
4	301			266		222	373
5							
6							
7							

SK－556	E	A	B	C	D
1	334	349	501	325	351
2	346	368	357	316	357
3					
4					
5					
6					
7					
8					

表４　縄文時代

SK－937J	E	A	D	B	C	F
1	242	409	444	439	401	335
2	214	449	447	448	409	293
3	246	451	465	469	399	302
4 a	241	456	447	429	424	210
4 b		414			444	
5 a	185	399	445	423	468	216
5 b		426				
5 c		426				
6 a	183	446	432	452		204
6 b		428			424	
6 c					404	
7 a	196	451	467	484	406	209
7 b		457	443	449	389	
7 c					384	
8 a	208	520	408	434	396	206
8 b		469	420		392	
8 c					342	
8 d					298	
9 a	258	368	349	380	284	197
9 b		417		287		
10						
11						
12						
13						

SK－954J	E	C	B	A	D	地山D番号
1（地山E）						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8（1）						
9（2）	267	364	383	313	253	1
10（3）	243	461	479	312	239	2
11（4）	234	289	549	346	236	3
12（5）	253	501	581	376	219	4
13（6）	229	260	512	309	209	5
14（7）	209	334	490	222	212	6
15（8）	187	385	440	215	202	7
16（9）						8
17（8）						9
18（9）						10



第356図　業者別分析遺構配置図

３．放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定結果報告

（株）地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

14Cage（yBP）：14C 年代測定値
試料の14C/12C 比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した年代。半減期として5568年を用いた.

補正14Cage（yBP）：補正14C 年代値
試料の炭素安定同位体比（13C/12C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ13C（permil）：試料の判定14C/12C 比を補正するための13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta^{13}C\ (‰) = \frac{(^{13}C/^{12}C)\text{［試料］} - (^{13}C/^{12}C)\text{［標準］}}{(^{13}C/^{12}C)\text{［標準］}} \times 1000$$

ここで、13C/12C［標準］=0.0112372である。

暦年代：過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14C の詳細な測定値により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。（Stuiver et al, 1993；Vogel, 1993.；Talma and Vogel, 1993）
ただし、この補正は約10,000yBP より古い試料には適用できない。

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS：加速器質量分析
Radiometric：液体シンチレーションカウンタによるβ－線計数法

処理・調整・その他：試料の前処理、調整などの情報

前処理　acid-alkali-acid：酸－アルカリ－酸洗浄
acid washes：酸洗浄
acid etch：酸によるエッチング

調整、その他

Bulk-Low Carbon Material：低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction：骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction：木材のセルローズ抽出

Extended Counting ： Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

graphite： AMS 測定の際、最終的に試料を石墨に調整する

benzene ： Radiometric による測定の際、最終的に試料をベンゼンに調整する

分析機関 ：BETA ANALYTIC INC.

4985SW74Cout, Miami, Fl. 33155, U.S.A

Report of Radiocarbon Dating Analyses

測定番号	試料名	試料種	14Cage (y BP)	δ13C (permil)	補正14Cage (y BP)	暦年代
Beta－119975	NO1848－(9)	charred material	16680±120	－26.0	16660±120	交点 ******
						2 SIGMA 95%probabillity
						1 SIGMA 68%probabillity
整理番号9079	測定方法 AMS		処理・調整・その他	acid-alkali-acid graphite		

＊14C の半減期は5568年を用いた。誤差は± 1 sigma

４．「武蔵国分寺跡」北西地区出土の炭化材樹種について

千野　裕道

１）はじめに

本遺跡の４区、IVa 中～下層から発見された炭化材片９点の樹種について報告する。出土状況平面図（Ⅱ－図１）からは、近接して９点の炭化材片が発見されている。これら資料のうちｌ点（No.９）は炭化した大型の炭化木材であった。木口面に向かって観察を行うと、放射方向に枝が残っていることが確認できた。従来の出土例で、ローム層中から発見された炭化材片のほとんどは細片であったことからみると本例は極めてまれな資料である。おそらく枝が何条か伸びた樹幹がそのまま炭化したものと考えられる。この炭化材の形態等に関する詳細な報告については本文を参照されたい。他の８点は炭化した材片であるが、これらも、比較的大きな材片である。

まず、炭化材すべてについて実体顕微鏡（６倍～40倍）を用いて木口面の観察を行った。木口面において観察できる細胞組織を観察したところ、仮道管が膨れ上り広葉樹の道管のようにみえた部分を多く発見した。火熱の影響によって仮道管が膨れ上っているようであった。やや細胞が溶解し、タール状になり、固まったような部分を多く認めた。また、他のローム層発見のものに比較しても、硬質なものであった。

さらに、垂直落射型顕微鏡（50倍～500倍）を用いて３断面の観察および写真撮影を行った。

２）炭化材樹種の識別

カヤ Torreya nucifera Sieb.et Zucc.　イチイ科　図版－218

No.１～９

針葉樹で、垂直、水平樹脂道は共になく、放射仮道管の内壁にはらせん肥厚が２本並列して走り、分野壁孔はヒノキ型が２個づつあることからイチイ科のカヤ材であることがわかる。

カヤは岩手、山形県以南から九州にかけて分布し、主に温帯林に分布している。木目は密で保存性が高く、特に水湿によく耐えるので土木材、建築材等に利用されている。とくに碁盤としての利用は有名である。

３）ま と め

９点の資料すべてがカヤであった。ローム層中からカヤが発見された例はほとんどない。神奈川県王子ノ台遺跡からカヤに類似した炭化材片が発見されている例のみである（千野1997）。暖帯に多い樹種であることから、この発見の意味を考えなければならないことであるが、もともとローム層中の資料自体まだ少ない点からみれば、資料の大きさや形態、木取り、その硬質さなども含め、今後の資料の集積を待って判断すべきものと考えている。

参考文献

千野裕道　1997「出土炭化物の樹種同定と周囲の埴生」「第２回ラウンドテーブル「旧石器時代の石鏃？」の記録」　東海大学校地内遺跡調査団報告７　1995年度

5．推定東山道武蔵路跡のテフラ

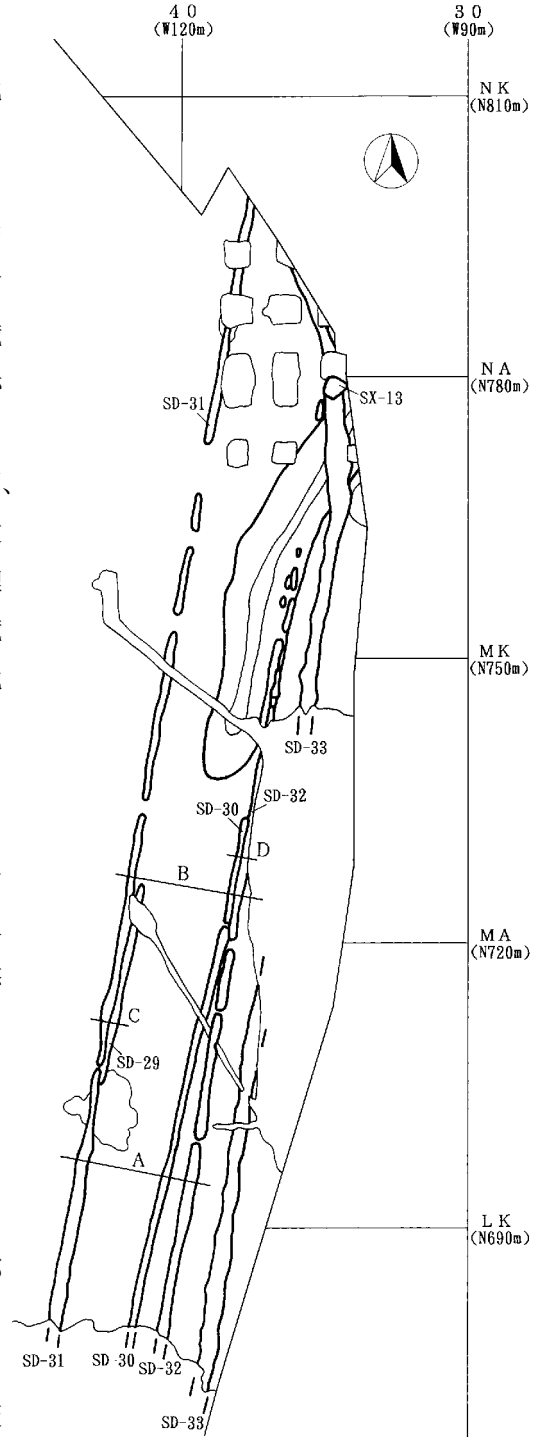
松田　隆夫（府中市役所）

1）はじめに

遺跡にかかわるテフラ（火山灰）分析は、遺跡やその周辺の自然層位の把握が課題になることが多いが、遺構の覆土分析の事例は極めて少ない。武蔵野台地のように、給源火山から離れた遠隔地の完新世テフラ分析になると、武蔵野台地の平坦部では、宝永スコリア層（1707. A.D. 富士山噴火）以外の指標テフラが極めて少なく、野外観察で区分した土層やテフラ層を細分化した遺跡層位の根拠を求めることが困難になる。筆者らは武蔵野台地南部を中心に、従来のテフラ分析に加えてスコリアなど火山岩片分析を行い、その組成から黒土層における指標テフラの把握を試みている（松田・建石1997、1998、松田投稿中）。本調査地においても、武蔵野台地南部のテフラの傾向を前提に堆定東山道武蔵路跡（東京都国分寺市）のテフラによる覆土分析を試みた。

武蔵野台地平坦部の黒土層の細分は、上位から表土層、黒色帯（上部・下部、注１）、縄文土層に区分し、縄文土層中部は富士黒土層（FB）に対比される。東京都埋蔵文化財センターの「Ⅱy層」は、立川ローム層の武蔵野の「Ⅷ層」（小林達夫他1971）と同様に、武蔵野台地平坦部では土層として形成されていない。

なお、遺構中のテフラは、テフラの自然堆積と異なって遺構の壁から崩落による崖錐的な堆積が観察される。このような堆積は道路側溝のように、ほぼ垂直的な壁では覆土中に時期の異なるテフラ粒子（黒色帯中に縄文土層や立川ローム層のテフラ粒子）が混入することが当然考えられる。本稿では試料観察やテフラ組成から、このように混入の著しい覆土を「混合層」とした。



サンプル採取位置図

2）テフラ分析の方法と課題

（1）テフラ分析

調査地区の堆定東山道武蔵路跡は、武蔵野台地南西部の中でも武蔵野段丘（Ｍ２面）の段丘平坦部に位置している。テフラ分析は、道路遺構の覆土を主体に行った。その覆土は当時の道路側溝と道路面の覆土である。各覆土のうち分析した試料は104点になる。

テフラの分析方法は、①試料10g を碗がけ法で水洗い

を行い、さらに、超音波洗浄器で試料中の濁りを除去した。その後、②試料を湯煎し、クエン酸三ナトリウムとハイドロサルファイトナトリウムを加えて脱鉄処理を行った。③試料を自然乾燥後、④標準フルイで0.25㎜～0.125㎜の粒子（砂画分）を検出した。

実体顕微鏡では重鉱物組成で200粒子以上をカウントし、岩片組成では100粒子以上をカウントし、それぞれ組成表を作成した。軽鉱物・重鉱物・岩片組成は、軽鉱物の粒子あるいは重鉱物の粒子が200粒子以上に達した段階で組成表を作成した。岩片分析は、色調で黒色・赤色・暗褐色で区分し、ガラス質岩片は赤色と褐色に区分した。さらに、黒色・赤色岩片の発泡度合いで発泡微弱・発泡弱・発泡強に細分した。発泡度合は、表土層や宝永スコリア層に多量に含まれる発泡弱の黒色岩片を基準にした。

（２）調査課題

西国分寺地区遺跡調査会では、推定東山道武蔵路跡を第１時期から第４時期に区分している。第１時期の道路遺構は側溝を伴うもので、道路幅は12m とされ、この時期の道路面は第４時期の路面形成によって消失されたとしている。第２時期の道路遺構は第１時期の道路側溝の覆土上面に形成された硬化面（７層及びその上面）とされる。第２時期の覆土である７層は、軽石（軽鉱物・重鉱物・岩片組成）やカンラン石（重鉱物組成）などで特徴的な傾向を示す。第３時期は第１時期についで、道路側溝が形成され、道幅は９m に縮小された道路であるとされた。第４時期は第３時期と比較して、側溝を伴わない狭い路面と指摘されている（西国分寺地区遺跡調査会1996）。

なお、第１時期と第３時期の切合い関係（Ａ－１）は明瞭であるが、各時期の年代は明らかでないと指摘されている（西国分寺地区調遺跡査会　前掲）。

武蔵野台地では奈良・平安時代・中世のテフラ分析でテフラの岩片組成を除くと、給源火山に対する遠隔地の指標・特徴は得られていない。しかし、遠隔地であってもテフラの岩片組成では、黒色帯上部と下部に特徴的な傾向が検出されている（松田19　）。

本調査地の覆土では上位から表土層（表土１、２）と黒色帯上部、混合層の３層に区分される。さらに、覆土の堆積状況から黒色帯上部は調査会のａ層、２・３層（６層）、７層、10層・12層の４層に細分される。混合層はａ層直下のｂ層、立川ロームの褐色～黄褐色粒子が主体、あるいは黒土層に混じる13層である。

なお、黒色帯上部で上位からａ層から12層は、テフラの上下の時間関係を示す。この中で、推定東山道武蔵路跡のトレンチ断面のテフラ観察とテフラ試料から、次のことが指摘できる。

①a 層は道路側溝内の覆土や道路面を覆い、とくに、側溝を埋めつくして平坦化された上位の覆土であり、また、b 層が欠如した路面ではａ層が路面を直接覆うことから、黒色帯上部の中でも特徴的なテフラである。

a 層は武蔵路が道路としての役割を終え（第４時期以降）、道路遺構に累積したテフラとしての性格をもつ。このような事例は、時代が異なるものの、都営川越道住宅遺跡調査会が調査した推定鎌倉街道でも観察され、同調査会が検出した推定鎌倉街道の道路面（硬化層）の直上に黒色岩片で層厚５cm 前後の宝永スコリア層が堆積した。当調査地の推定鎌倉街道は、覆土のテフラ分析から中世（黒色帯上部）から宝永スコリアが降灰する以前まで、人々の往還に使用されていたことを示す。

②２・３層（６層）は、第３時期側溝の覆土とされる。このことは第３時期と第１時期の側溝の遺構の切

合い関係で明らかにされている。

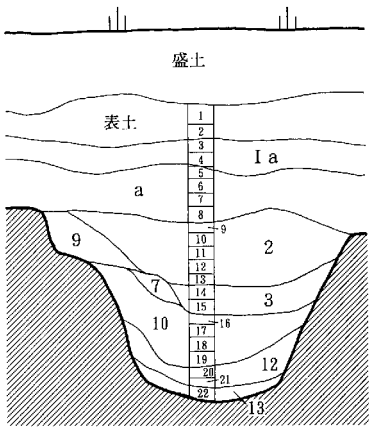
③７層は道路側溝内にレンズ状に堆積するテフラで、道路遺構では第２時期に区分されている。この区分の目安は第１時期側溝内の硬化層を伴う覆土とみなされるが、武蔵路遺構で特徴を示す。それはテフラ・土壌が褐色化すること（注２）、灰白色（あるいは灰褐色）や褐色の軽石層の濃集層が７層及びその上・下位の層位でみられる。

３）道路遺構の覆土分析

＜第１・３時期西側溝（A－１）の覆土＞

①軽鉱物・重鉱物・岩片組成で、黒色帯上部の２層最下部（試料13）から３層（試料14.15）で、灰白色軽石が17.9～36.2%になって濃集層が検出された。３層は第３時期西側溝で最初に堆積した覆土である。３層で検出された灰白色軽石の濃集層は、

この側溝覆土断面や後述するB－４・C－１の軽石濃集層などから判断すると、試料は得られていないが、レンズ状に堆積した７層から混入したものと思われる。



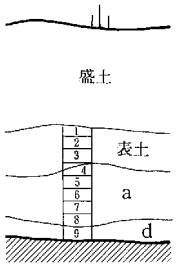
A－１

②岩片組成では、a層の試群6.7で発泡強の黒色岩片が17.2%、18.1%になってA－１の覆土では極大値を示す。

③岩片組成では、a層最下部（試料８）で発泡微弱の赤色岩片が8.5%になる。

④黒色帯上部の岩片組成で発泡弱の黒色岩片は、10層（試料18）で22.9%になる。

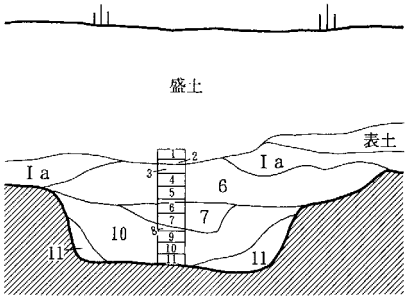
⑤軽鉱物・重鉱物・岩片組成で、13層（試料22）は軽鉱物が27.5%になり、重鉱物組成が60.2%になる。資料22は褐色テフラ（立川ローム）に黒土が混じる混合層で、重鉱物組成でみると重鉱物の多くはカンラン石であり、立川ローム層上部の青柳ローム（ソフトローム）とみられる。



A－２

＜第４時期路面（A－２）の覆土＞

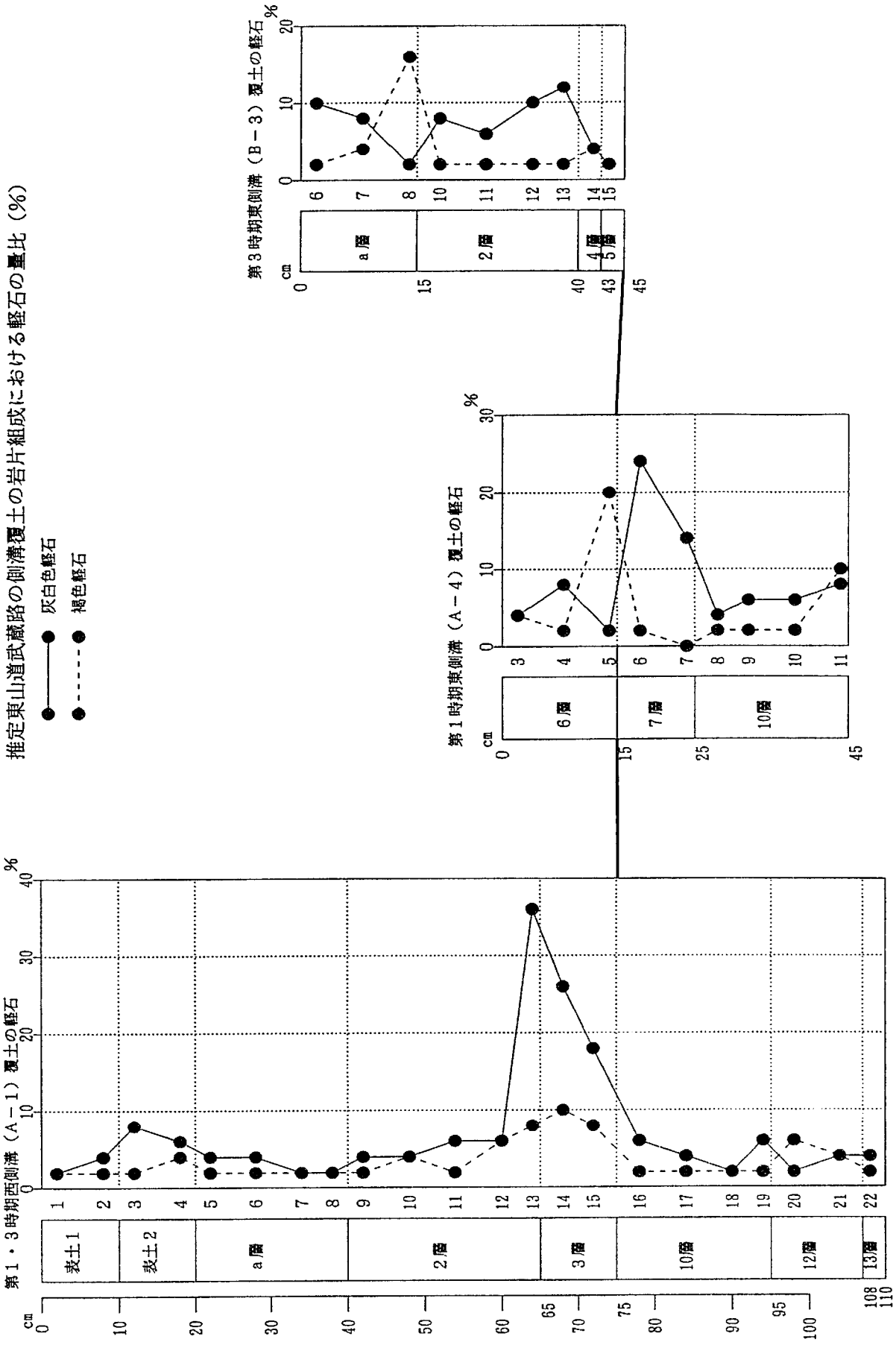
①４期路面を覆う覆土は、上位から表土層と黒色帯上部に区分される。



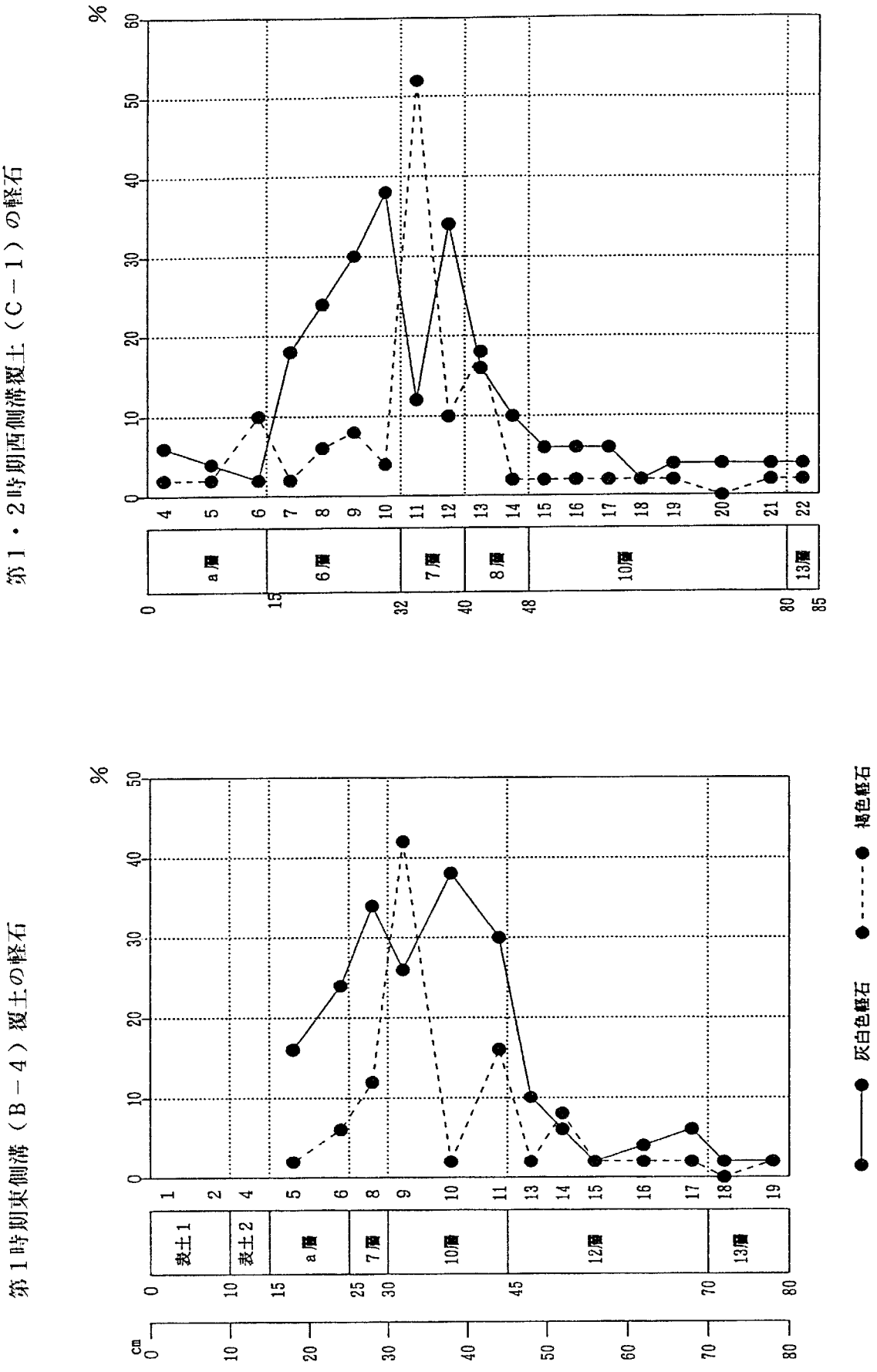
A－４

②岩片組成で黒色帯上部のa層で発泡強の黒色岩片の弱い濃集層がみられ、試料４で9.6%、試料６で8.2%になる。また、a層下部で発泡微弱の赤色岩片の弱い濃集層がみられ、試料７で9.9%になる。４期路面の覆土であるa層は１・３期西側溝の覆土であるa層に対比される。

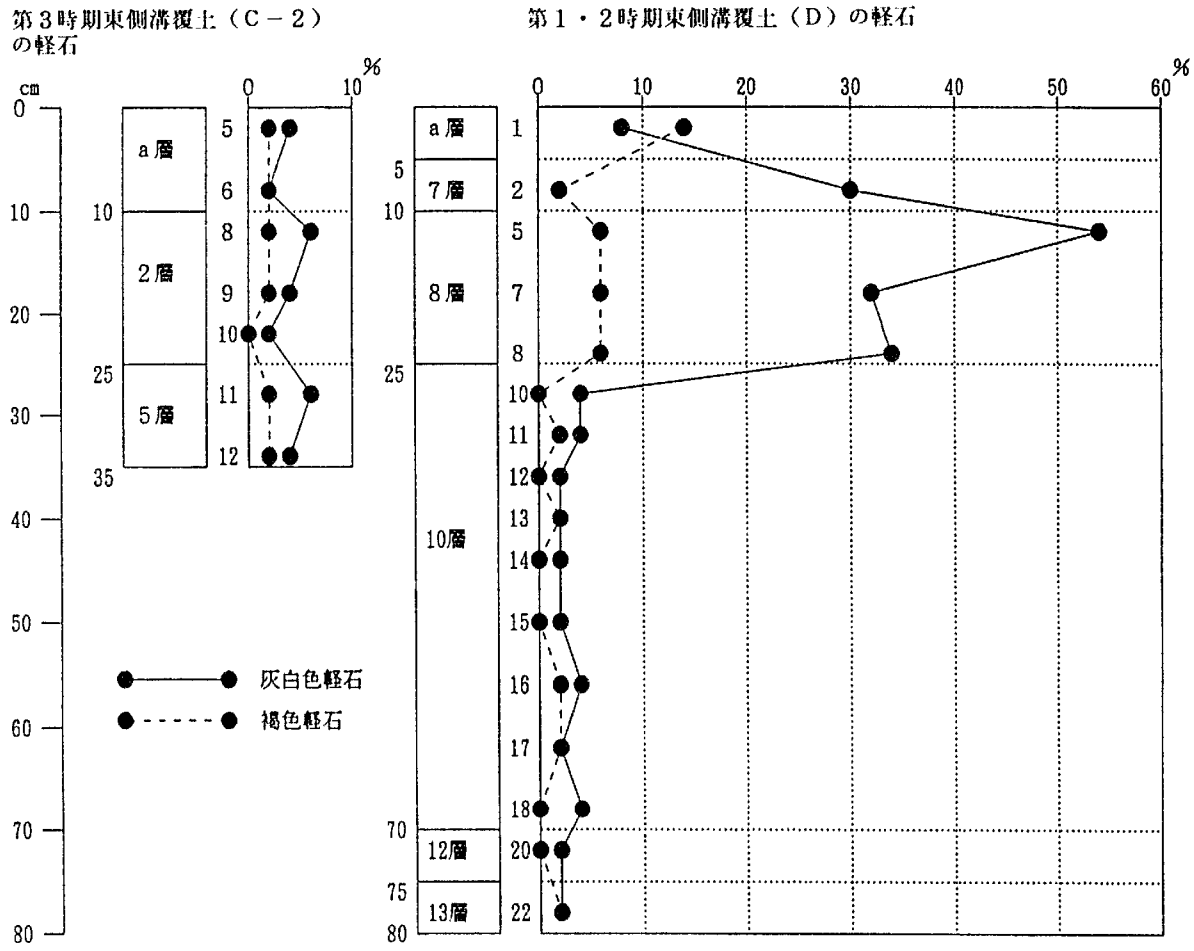
②４期路面の覆土最下部であるｂ層（試料９）は、軽鉱物・重鉱物・岩片組成で重鉱物の量比が多く（57.9%）、また、岩片中のスコリアの量比も5.7%と少ないこと、岩片組成では赤色ガラス質岩片が8.9%にもなる。これらのことととｂ層（試料９）の色調が暗褐色を呈することから、黒色帯上部と縄文土



岩片組成における軽石の量比（1）



岩片組成における軽石の量比（2）



岩片組成における軽石の量比（３）

層の混合層と思われる。

＜第１時期東側溝（A－４）の覆土＞

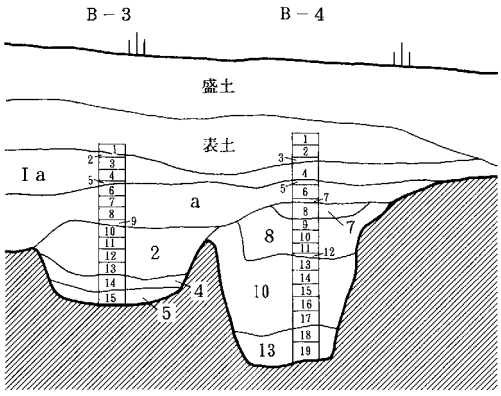
①軽鉱物・重鉱物・岩片組成で黒色帯上部の７層（試料６・７）では、灰白色軽石の濃集層がみられる。試料６で16.0%、試料７で12.0%になる。レンズ状堆積を示す７層は、やや褐色化した硬化層であり、２期の路面とされている。７層で検出された灰白色軽石の濃集層は、１・３期西側溝の覆土（２層最下部、３層）の灰白色軽石の濃集層に対比される。なお、６層（試料４）で灰白色軽石が8.1%になる。また、褐色軽石は６層下部（試料５）では褐色軽石の量比が多く、20.3%になる。

②岩片組成では、黒色帯上部の10層（試料10）で発泡弱の黒色岩片が18.1%になり、極大値を示す。

＜第３時期東側溝（B－３）の覆土＞

①a 層の試料７で発泡微弱の赤色岩片が9.7%になる。

②軽鉱物・重鉱物・岩片組成の軽石は、a 層下部（試料８）で褐色軽石が15.7%になる。灰白色軽石は第



B－３／B－４

３時期東側溝内の覆土である２層の試料11・12で10.5%、11.9%になる。

③２層最下部で発泡強の黒色岩片が19.2%になって極大値を示す。

④混合層である５層で赤色ガラス質岩片が9.0%であり、この数値は黒色帯上部以外のテフラ粒子の混入であると思われる。赤色ガラス質岩片は立川ローム層最上部（青柳ローム・ソフトローム）で濃集層がみられる。

＜第１時期東側溝（B－４）の覆土＞

①a 層下部の試料６で発泡微弱の赤色岩片が7.9%になって最大値を示す。

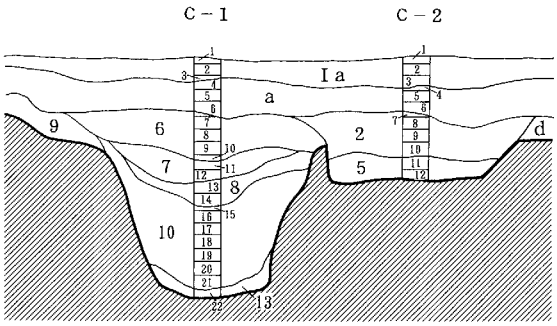
②軽石は灰白色軽石が a 層下部から７層、10層にかけて23.0%～38.9%になる。また、褐色軽石は10層の試料９で41.8%になって極大値を示す。B－４の10層は A－４の10層と異なり、軽石の量比の傾向から７層の枠の中にあるものと思われる。

③７層・10層では、重鉱物組成におけるカンラン石が59.1%～63.4%と多くなる。また、７層・10層はやや褐色化することから、黒色帯上部以外のテフラ粒子が混入したと思われる。

④混合層である13層は試料18で赤色ガラス質岩片が8.2%になり、また、カンラン石の量比も多いことから、黒色帯上部以外のテフラ粒子が混入したものと思われる。

＜第１・２時期西側溝（C－１）の覆土＞

①灰白色軽石は６層と７層でその量比が急増し、６層最下部の試料10で38.5%、７層の試料12で34.3%になる．褐色軽石は７層の試料11で51.4%になって極大値を示し、試料13で17.8%になり、弱い濃集層がみられる。C－１と B－４の軽石層の量比の傾向は、遺跡調査会の層位名と相違するものの、ほぼその傾向は同一である。軽石の濃集層は下位から褐色軽石－灰白色軽石－褐色軽石の３つのピークがみられる。



C－1／C－2

②７層は B－４と同様に重鉱物組成におけるカンラン石が59.9%、60.0%と多くなり、黒色帯以外のテフラ粒子が混入したと思われる。

③10層の試料18で発泡弱の黒色岩片が16.2%になり、極大値を示す。

④13層の試料22は、スコリア等の岩片が7.8%になって急減すること、カンラン右が63.0%になって極大値を示すことなどから混合層とした。

＜第３時期西側溝（C－２）の覆土＞

①灰白色・褐色の軽石の量比は、２層で6.8%～00.0%であり、B－３の第３時期東側溝の覆土と同様に濃集層が検出されなかった。

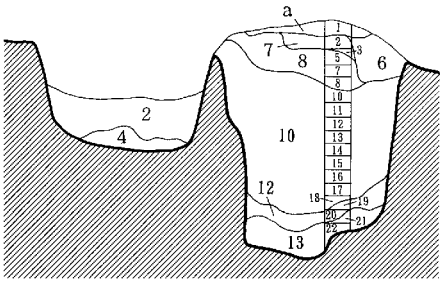
②５層はスコリア等の岩片が9.6%、6.0%でその量比が急減すること、５層の試料11で赤色ガラス質岩片が6.7%と多くなることなどから混合層とした。

＜第１・２時期東側溝（D）の覆土＞

①灰白色軽石は７層、８層で急増し、８層の試料５で53.4%となって、濃集層を形成する（注３）。

②７層・８層の色調は褐色化し、７層・８層の重鉱物組成のカンラン石が53.8%～61.3%と多くなり、黒色帯以外のテフラ粒子が混入したと思われる。

③13層の試料22でスコリア等の岩片が5.6%と急減すること、同試料でカンラン石が70.4%になって多くなることなどから、13層は混合層とした。



D

４）まとめ

推定東山道武蔵路の覆土は、道路面上の覆土（表土１・２、a 層、b 層）と道路側溝内の覆土（２層～13層）に大別され、また、テフラの堆積状態と分析結果から、黒色帯上部と混合層（b 層など）に区分できる。黒色帯上部の主な堆積時期は、国分寺市・府中市の出土遺物から奈良時代～中世（宝永スコリア降灰以前まで）までである。その時期のテフラによる細分は、これまで時期区分を示すテフラが検出されないことから困難になっていた。ただし、今回の覆土分析では、第１・２時期側溝の覆土で灰白色軽石と褐色軽石の濃集層が検出され、軽石の濃集層は第２時期とされた７層及びその上・下位の層位（A－４、B－４、C－１）に集中している。この灰白色軽石と褐色軽石の濃集層の給源火山と降灰時期は明らかではないが、給源火山が北関東の浅間山や榛名山と思われ、完新世に噴火・降灰堆積した浅間山・榛名山などの軽石層は、竹本・久保（1995）によれば、浅間 A 軽石（As-A、天明三年、1783）、浅間 B 軽石（As-B、天仁元年、1108）、榛名伊香保テフラ（Hr ないし Hr-FP、６世紀中頃）、浅間 C 軽石（As-C、４世紀中頃）などが指摘されている。このうち、黒色帯上部の７層及びその上・下位の層位から検出された灰白色軽石と褐色軽石の濃集層と関連するものは、浅間 B 軽石であるが、その噴火降灰年代は平安時代後期とされている。浅間 B 軽石については「規模の異なる噴火が、何回も続いたので、群馬県西部では、黄灰色の軽石や灰褐色の軽石や火山灰の層が、数多く重なっている。上部と下部では、岩質が異なるため、下部を B 軽石、上部を B′軽石とよぶこともある」（竹本・久保、前掲）とされている。

道路側溝覆土で検出された軽石の濃集層は浅間 B 軽石と思われるが、武蔵路と他地域の遺構との関連では、府中市・国分寺市の武蔵路で８世紀中葉・後葉には竪穴建物跡により側溝との切り合いがあると指摘されている（塚原二郎1996、早川泉1997a･b）。この切り合い関連がどの時期の側溝か、あるいは側溝覆土の７層を竪穴建物跡が切り合うのかどうか。もし、７層を切っているならば、軽石の濃集層が平安時代後期に噴火した浅間 B 軽石に対比できない。この点は武蔵路遺構に限らず、奈良・平安時代、中世の遺構覆土で再度検証する必要がある。

（注１）

武蔵野台地南部における平坦部の黒色帯の層厚は、10cm～20cm であり、トレンチ断面ではその上部と比較して下部は風化した１㎜前後の赤色（褐色）スコリアと１～３㎜の黒色スコリアに富み、また、隙間が多くなることで細分することができる。武蔵野台地平坦部の黒色帯上部の軽鉱物・重鉱物・岩片組成で軽石は検出されるが、その濃集層はみられない。本稿

で検出された軽石の濃集層は、道路側溝の覆土中で検出され、その覆土の層厚は第１・３時期で65cm～90cm になることから、降灰した軽石が台地平坦部のように拡散せずに埋積し、濃集層を形成したものと思われる。

（注２）

第２時期の７層の色調は、トレンチ断面や試料観察で褐色化する。７層の岩片組成は黒色帯上部に対比されるが、D の第１・２時期側溝覆土の７・８層は下位の黒褐色の10層と比較してより褐色化し、重鉱物組成ではカンラン石がやや多くなることから、縄文土層などのテフラ粒子が混入したと思われる。

（注３）

D の第１・３時期側溝では、覆土中の軽石の量比で８層の試料５は灰白色軽石の濃集層（53.4%）がみられるが、検鏡段階で灰白色軽石の中には灰褐色軽石の粒子もみられたが、ここでは灰白色軽石に含めた。

引用文献

・小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男（1971）野川先土器時代遺跡の研究、第四紀研究10、p231－252
・日本第四紀学会1990年大会巡検（1990）上州の完新世テフラと自然災害遺跡、日本第四紀学会1990年大会（東京）実行委員会、pp50
・竹本弘幸・久保誠二（1995）群馬の火山灰、みやま文庫、180pp
・塚原二郎（1996）武歳国府と古代道、シンポジウム東山道をさぐる、古代學協會・古代學研究所東京支所、p31－46
・西国分寺地区遺跡調査会（1996）武蔵国分寺跡北西地区の遺跡－推定東山道武蔵路、西国分寺地区遺跡調査会、16pp
・早川　泉（1997a）古代道路遺構の虚像と実像－東山道武蔵路の調査を通じて－、古代交通研究、第６号、P21－p37
・早川　泉（1997b）武蔵路の素顔－遺構はなにをおしえてくれるか－、多摩のあゆみ、Vol.88、p14－23
・松田隆夫・建石徹（1997）目黒区八雲・東光寺裏山遺跡のテフラと覆土、東光寺裏山遺跡調査会、P399－402
・松田隆夫・建石徹（1998）目黒区大橋・大橋遺跡のテフラ分析、目黒区大橋遺跡調査会、p726－748
・松田隆夫（投稿中）府中市武蔵台・武蔵台遺跡Ｆ８地区のテフラ、武蔵台遺跡調査会

A－１・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土１	1	22.9	220	18.8	181	55.6	534	2.4	23	0.3	3	100.0	961
		2	34.5	210	29.4	179	32.2	196	3.8	23	0.2	1	100.1	609
	表土２	3	40.5	201	30.0	149	21.8	108	7.3	36	0.4	2	100.0	496
		4	41.0	265	27.7	179	21.8	141	5.6	36	4.0	26	100.1	647
黒色帯上部	a　層	5	42.8	223	31.1	162	20.0	104	5.0	26	1.2	6	100.1	521
		6	45.0	202	28.3	127	20.9	94	4.7	21	1.1	5	100.0	449
		7	51.6	220	29.8	127	15.3	65	2.8	12	0.5	2	100.0	426
		8	42.8	265	35.5	220	16.3	101	2.9	18	2.4	15	99.9	619
	２　層	9	38.8	244	37.4	235	16.9	106	4.5	28	2.5	16	100.0	629
		10	34.7	180	42.7	221	12.9	67	4.8	25	4.8	25	99.9	518
		11	33.7	168	43.5	217	15.6	78	5.8	29	1.4	7	100.0	499
		12	31.3	158	43.8	221	13.7	69	5.6	28	5.6	28	100.0	504
		13	27.5	223	19.1	155	9.0	73	36.2	294	8.3	67	100.1	812
	３　層	14	27.1	209	25.9	200	11.7	90	26.2	202	9.2	71	100.1	772
		15	31.6	250	29.5	234	12.0	95	17.9	142	9.0	71	100.0	792
	10　層	16	39.5	243	37.1	228	17.2	106	5.2	32	1.0	6	100.0	615
		17	46.7	225	32.6	157	15.6	75	3.3	16	1.9	9	100.1	482
		18	49.1	227	36.8	170	11.3	52	1.9	9	0.9	4	100.0	462
		19	45.8	213	27.3	127	19.8	92	6.9	32	0.2	1	100.0	465
	12　層	20	42.5	230	29.0	157	22.2	120	1.3	7	5.0	27	100.0	541
		21	43.1	254	34.3	202	18.0	106	4.6	27	4.6	27	100.0	589
混合層	13層	22	39.2	225	37.3	214	19.3	111	3.8	22	0.3	2	99.9	574

A－１・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土1	1	35.2	76	1.9	4	37.1	80	42.6	92	9.7	21	0.0	0	5.6	12	0.0	0	5.1	11	100.0	216
		2	40.3	87	0.9	2	41.2	89	39.8	86	11.1	24	0.0	0	6.0	13	0.0	0	1.9	4	100.0	216
	表土2	3	41.2	98	1.3	3	42.5	101	39.9	95	10.9	26	0.0	0	3.4	8	0.0	0	3.4	8	100.1	238
		4	37.9	88	3.0	7	40.9	95	43.1	100	9.9	23	0.0	0	4.3	10	0.0	0	1.7	4	99.9	232
黒色帯上部	a 層	5	39.7	89	2.2	5	41.9	94	41.5	93	10.3	23	0.0	0	4.0	9	0.0	0	2.2	5	99.9	224
		6	31.6	73	1.3	3	32.9	76	46.3	107	13.0	30	0.0	0	4.3	10	0.0	0	3.5	8	100.0	231
		7	35.7	96	2.2	6	37.9	102	46.5	125	8.6	23	0.0	0	4.8	13	0.0	0	2.2	6	100.0	269
		8	35.5	78	2.3	5	37.8	83	48.2	106	5.9	13	0.0	0	5.9	13	0.0	0	2.3	5	100.1	220
	2層	9	47.2	111	2.1	5	49.3	116	32.8	77	9.4	22	0.0	0	6.4	15	0.0	0	2.1	5	100.0	235
		10	45.2	100	2.3	5	47.5	105	34.4	76	7.2	16	0.0	0	8.1	18	0.0	0	2.7	6	99.9	221
		11	53.5	116	0.5	1	54.0	117	29.0	63	6.0	13	0.0	0	9.7	21	0.0	0	1.4	3	100.1	217
		12	48.9	108	1.4	3	50.3	111	28.5	63	7.7	17	0.0	0	9.5	21	0.0	0	4.1	9	100.1	221
		13	57.2	135	2.1	5	59.3	140	25.8	61	6.8	16	0.0	0	5.5	13	0.0	0	2.5	6	99.9	236
	3層	14	49.0	98	0.5	1	49.5	99	32.5	65	6.0	12	0.0	0	8.5	17	0.0	0	3.5	7	100.0	200
		15	55.6	130	0.4	1	56.0	131	25.2	59	8.1	19	0.0	0	10.3	24	0.0	0	0.4	1	100.0	234
	10層	16	39.5	90	0.4	1	39.9	91	36.4	83	11.4	26	0.0	0	11.0	25	0.0	0	1.3	3	100.0	228
		17	43.9	105	2.1	5	46.0	110	34.3	82	10.9	26	0.0	0	8.0	19	0.0	0	0.8	2	100.0	239
		18	39.3	83	2.8	6	42.1	89	41.7	88	8.1	17	0.0	0	6.2	13	0.0	0	1.9	4	100.0	211
		19	40.2	99	0.8	2	41.0	101	37.0	91	11.4	28	0.0	0	8.1	20	0.0	0	2.4	6	99.9	246
	12層	20	54.6	131	1.7	4	56.3	135	27.9	67	6.3	15	0.0	0	8.8	21	0.0	0	0.8	2	100.1	240
		21	45.1	91	1.5	3	46.6	94	30.2	61	10.4	21	0.0	0	8.9	18	0.0	0	4.0	8	100.1	202
混合層	13層	22	73.8	158	1.9	4	75.7	162	15.9	34	3.7	8	0.5	1	2.8	6	0.0	0	1.4	3	100.0	214

A－１・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計							
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土1	1	27.5	68	35.6	88	3.2	8	66.3	164	4.0	10	2.0	5	0.0	0	6.0	15	1.2	3	0.0	0	99.8	247
		2	31.4	43	36.5	50	0.7	1	68.6	94	5.8	8	2.9	4	0.0	0	8.7	12	3.7	5	0.0	0	100.0	137
	表土2	3	23.6	30	38.6	49	8.7	11	70.9	90	2.4	3	2.4	3	0.0	0	4.8	6	0.8	1	0.0	0	100.1	127
		4	23.8	25	36.2	38	3.8	4	63.8	67	4.8	5	3.8	4	0.0	0	8.6	9	2.9	3	0.0	0	100.1	105
黒色帯上部	a 層	5	20.9	24	17.4	20	11.3	13	49.6	57	0.9	1	3.5	4	0.9	1	5.3	6	1.7	2	0.0	0	100.1	115
		6	27.3	35	16.4	21	17.2	22	60.9	78	5.5	7	3.1	4	0.8	1	9.4	12	3.1	4	0.8	1	100.0	128
		7	28.6	30	11.4	12	18.1	19	58.1	61	4.8	5	4.8	5	1.0	1	10.6	11	1.0	1	0.0	0	100.2	105
		8	25.5	27	12.3	13	12.3	13	50.1	53	8.5	9	3.8	4	0.9	1	13.2	14	3.8	4	1.9	2	100.1	106
	2層	9	30.1	37	15.4	19	10.6	13	56.1	69	2.4	3	4.9	6	0.8	1	8.1	10	1.6	2	3.3	4	100.0	123
		10	32.4	33	12.7	13	14.7	15	59.8	61	4.9	5	0.0	0	0.0	0	4.9	5	1.0	1	1.0	1	100.0	102
		11	27.5	30	10.1	11	12.8	14	50.4	55	9.2	10	0.9	1	1.8	2	11.9	13	4.6	5	0.0	0	99.9	109
		12	41.9	49	12.8	15	7.7	9	62.4	73	5.1	6	1.7	2	2.6	3	9.4	11	5.1	6	1.7	2	100.0	117
		13	42.1	45	15.0	16	8.4	9	65.5	70	5.6	6	1.9	2	1.9	2	9.4	10	0.9	1	0.9	1	100.1	107
	3層	14	33.1	41	13.7	17	5.6	7	52.4	65	4.8	6	3.2	4	0.0	0	8.0	10	1.6	2	3.2	4	99.9	124
		15	53.2	59	12.6	14	3.6	4	69.4	77	6.3	7	2.7	3	0.0	0	9.0	10	2.7	3	0.9	1	100.0	111
	10層	16	35.9	46	18.0	23	5.5	7	59.4	76	4.7	6	3.1	4	0.0	0	7.8	10	2.3	3	1.6	2	100.0	128
		17	34.7	42	13.2	16	5.8	7	53.7	65	11.6	14	0.8	1	0.8	1	13.2	16	1.7	2	0.8	1	100.0	121
		18	39.5	43	22.9	25	8.3	9	70.7	77	5.5	6	3.7	4	0.9	1	10.1	11	1.8	2	0.0	0	100.0	109
		19	22.3	31	17.3	24	11.5	16	51.1	71	3.6	5	2.2	3	0.0	0	5.8	8	0.0	0	0.7	1	100.0	139
	12層	20	31.9	43	11.1	15	9.6	13	52.6	71	5.2	7	0.0	0	2.2	3	7.4	10	2.2	3	2.2	3	100.0	135
		21	43.9	47	14.0	15	5.6	6	63.5	68	11.2	12	0.9	1	1.9	2	14.0	15	0.0	0	0.9	1	99.9	107
混合層	13層	22	32.4	35	15.7	17	8.3	9	56.4	61	5.6	6	4.6	5	0.0	0	10.2	11	0.9	1	1.9	2	100.0	108

A－２・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土１	1	34.9	204	19.1	112	35.0	205	8.4	49	2.6	15	100.0	585
		2	35.5	202	30.8	175	22.8	130	6.9	39	4.0	23	100.0	569
		3	47.1	211	29.2	131	17.9	80	4.2	19	1.6	7	100.0	448
黒色帯上部	a　層	4	45.0	216	35.6	171	15.4	74	2.5	12	1.5	7	100.0	480
		5	50.0	218	30.3	131	15.0	65	4.2	18	0.0	0	100.0	432
		6	43.5	245	31.6	178	16.9	95	5.9	33	2.1	12	100.0	563
		7	45.7	221	34.5	167	13.4	65	5.8	28	0.6	3	100.0	484
		8	41.9	206	38.2	188	12.6	62	5.1	25	2.2	11	100.0	492
混合層	b　層	9	45.8	250	44.9	245	7.5	41	1.3	7	0.5	3	100.0	546

A－２・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土1	1	36.8	84	2.2	5	39.0	89	45.6	104	5.3	12	0.0	0	4.8	11	0.0	0	5.3	12	100.0	228
		2	40.5	90	1.8	4	42.3	94	42.8	95	8.1	18	0.0	0	2.3	5	0.0	0	4.5	10	100.0	222
		3	32.7	73	0.9	2	33.6	75	43.0	96	12.1	14	0.4	1	8.1	18	0.0	0	2.7	6	99.9	223
黒色帯上部	a 層	4	36.8	81	2.7	6	39.5	87	40.5	89	9.5	21	0.0	0	5.5	12	0.0	0	5.0	11	100.0	220
		5	36.2	76	2.9	6	39.1	82	43.8	92	8.6	18	0.0	0	2.4	5	0.0	0	6.2	13	100.1	210
		6	38.2	78	1.0	2	39.2	80	44.1	90	6.4	13	0.0	0	3.4	7	0.0	0	6.9	14	100.0	204
		7	36.8	82	1.8	4	38.6	86	44.8	100	9.4	21	0.0	0	3.1	7	0.0	0	4.0	9	99.9	223
		8	36.2	76	1.9	4	38.1	80	43.8	92	9.5	20	0.0	0	4.3	9	0.5	1	3.8	8	100.0	210
混合層	b 層	9	44.1	108	0.8	2	44.9	98	40.0	98	2.4	6	0.0	0	10.2	25	0.0	0	2.4	6	99.9	245

A－２・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
表土層	表土1	1	27.5	30	34.9	38	1.8	2	64.2	70	1.8	2	1.8	2	0.0	0	3.6	4	0.0	0	0.9	1	31.2	34	99.9	109
		2	22.8	23	25.7	26	4.0	4	52.5	53	5.9	6	5.9	6	0.0	0	11.8	12	3.0	3	1.0	1	31.7	32	100.0	101
		3	27.0	30	27.0	30	4.5	5	58.5	65	6.3	7	2.7	3	1.8	2	10.8	12	0.9	1	0.9	1	28.8	32	99.9	111
黒色帯上部	a 層	4	41.6	52	11.2	14	9.6	12	62.4	78	6.4	8	0.8	1	0.8	1	8.0	10	2.4	3	0.0	0	27.2	34	100.0	125
		5	36.5	46	18.3	23	6.3	8	61.1	77	5.6	7	3.2	4	0.8	1	9.6	12	0.0	0	0.8	1	28.6	36	100.1	126
		6	47.5	58	14.8	18	8.2	10	70.5	86	3.3	4	1.6	2	4.1	5	9.0	11	2.5	3	0.0	0	18.0	22	100.0	122
		7	38.6	39	15.8	16	4.0	4	58.4	59	9.9	10	2.0	2	0.0	0	11.9	12	0.0	0	0.0	0	29.7	30	100.0	101
		8	47.2	50	8.5	9	3.8	4	59.5	63	7.5	8	1.9	2	0.0	0	9.4	10	1.9	2	2.8	3	26.4	28	100.0	106
混合層	b 層	9	34.8	39	14.3	16	2.7	3	51.8	58	8.0	9	5.4	6	1.8	2	15.2	17	2.7	3	8.9	10	21.4	24	100.0	112

A－４・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	６層	3	32.7	211	22.2	143	36.7	237	4.2	27	4.2	27	100.0	645
		4	33.8	207	34.6	212	23.2	142	8.0	49	0.3	2	99.9	612
		5	30.5	209	31.2	214	16.5	113	1.6	11	20.3	139	100.1	686
	７層	6	37.6	279	23.4	174	13.6	101	23.1	172	2.3	17	100.0	743
		7	43.2	220	29.1	148	13.9	71	13.8	70	0.0	0	100.0	509
	10層	8	42.6	201	30.7	145	20.8	98	3.6	17	2.3	11	100.0	472
		9	47.4	229	21.9	106	22.4	108	6.2	30	2.1	10	100.0	483
		10	45.7	217	22.3	106	23.8	113	6.3	30	1.9	9	100.0	475
		11	39.4	250	24.6	156	17.8	113	7.6	48	10.6	67	100.0	634

A－４・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	６層	3	44.9	105	2.1	5	47.0	110	29.9	70	12.4	17	0.0	0	7.3	17	0.0	0	3.4	8	100.0	234
		4	42.0	89	2.4	5	44.4	94	34.4	73	9.9	21	0.0	0	7.5	16	0.0	0	3.8	8	100.0	212
		5	48.6	104	2.8	6	51.4	110	36.9	79	7.0	15	0.0	0	2.8	6	0.0	0	1.9	4	100.0	214
	７層	6	37.6	88	3.9	8	47.0	96	33.3	68	10.8	22	0.0	0	7.4	15	0.0	0	1.5	3	100.0	204
		7	49.0	100	2.5	5	51.5	105	34.3	70	4.9	10	0.5	1	5.4	11	0.0	0	3.4	7	100.0	204
	10層	8	49.0	101	1.5	3	50.5	101	36.0	72	7.0	14	0.0	0	5.0	10	0.0	0	1.5	3	100.0	200
		9	45.2	109	2.1	5	47.3	114	36.9	89	8.7	21	0.0	0	6.6	16	0.0	0	0.4	1	99.9	241
		10	50.0	137	2.9	8	52.9	145	34.7	95	6.6	18	0.0	0	4.0	11	0.0	0	1.8	5	100.0	274
		11	44.1	108	1.2	3	45.3	111	39.6	97	6.1	15	0.0	0	6.1	15	0.0	0	2.9	7	100.0	245

A－４・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	６層	3	37.2	51	15.3	21	5.1	7	57.6	79	7.3	10	2.9	4	1.5	2	11.7	16	2.2	3	2.9	4	25.5	35	99.9	137
		4	41.0	50	16.4	20	4.1	5	61.5	75	6.6	8	4.9	6	0.8	1	12.3	15	1.6	2	0.8	1	23.8	29	100.0	122
		5	28.6	36	15.9	20	12.7	16	57.2	72	5.6	7	2.4	3	0.0	0	8.0	10	0.0	1	2.4	3	32.5	41	100.1	126
	７層	6	36.4	44	9.9	12	9.1	11	55.4	67	7.4	9	1.7	2	0.0	0	9.1	11	1.7	2	1.7	2	32.2	39	100.1	121
		7	27.7	33	10.9	13	9.2	11	47.8	57	10.1	11	1.7	2	1.7	2	13.5	16	2.5	3	0.8	1	35.3	42	99.9	119
	10層	8	37.7	43	15.8	18	13.2	15	66.7	76	2.6	3	0.9	1	0.9	1	4.4	5	1.8	2	0.0	0	27.2	31	100.1	114
		9	38.3	46	11.7	14	8.3	10	58.3	70	7.5	9	1.7	2	1.7	2	10.9	13	0.8	1	0.8	1	29.2	35	100.0	120
		10	31.0	36	18.1	21	11.2	13	60.3	70	7.8	9	0.9	1	0.0	0	8.7	10	1.7	2	0.0	0	29.3	34	100.0	116
		11	30.0	36	7.5	9	9.2	11	46.7	56	6.7	8	4.2	5	5.8	7	16.7	20	2.5	3	2.5	3	31.7	38	100.1	120

B－３・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	6	46.8	249	26.9	143	16.4	87	9.0	48	0.9	5	100.0	532
		7	39.1	217	32.4	180	17.1	95	7.2	40	4.1	23	99.9	555
		8	38.1	242	29.6	188	14.8	91	2.2	14	15.7	100	99.9	635
	2層	10	37.6	216	33.3	191	20.0	115	8.4	48	0.7	4	100.0	574
		11	38.7	243	40.3	253	14.8	93	5.4	34	0.8	5	100.0	628
		12	38.9	233	30.1	180	19.2	115	10.5	63	1.3	8	100.0	599
		13	46.0	256	30.4	169	9.5	53	11.9	66	2.2	12	100.0	556
	4層	14	42.7	226	31.4	166	18.0	95	4.3	23	3.6	19	100.0	529
混合層	5層	15	35.2	180	47.4	242	13.9	71	1.4	7	2.2	11	100.1	511

B－３・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	6	44.1	105	2.1	5	46.2	110	37.4	89	8.0	19	0.0	0	5.0	12	0.0	0	3.4	8	100.0	238
		7	43.7	100	2.6	6	46.3	106	34.9	80	8.7	20	0.0	0	7.0	16	0.0	0	3.1	7	100.0	229
		8	48.9	111	4.0	9	52.9	120	32.6	74	7.0	16	0.0	0	4.8	11	0.0	0	2.6	6	99.9	227
	2層	10	50.2	103	2.0	4	52.2	107	27.8	57	8.3	17	0.0	0	10.2	21	0.0	0	1.5	3	100.0	205
		11	49.8	126	3.6	9	53.4	135	29.6	75	6.7	17	0.0	0	7.5	19	0.0	0	2.8	7	100.0	253
		12	52.6	112	2.8	6	55.4	118	28.2	60	8.9	19	0.0	0	5.2	11	0.0	0	2.3	5	100.0	213
		13	42.7	94	2.7	6	45.4	100	39.5	87	9.5	21	0.0	0	4.1	9	0.0	0	1.4	3	99.9	220
	4層	14	49.2	122	1.6	4	50.8	126	37.1	92	6.9	17	0.0	0	4.4	11	0.0	0	0.8	2	100.0	248
混合層	5層	15	51.2	124	3.3	8	54.5	132	24.8	60	8.3	20	0.0	0	9.5	23	0.0	0	2.9	7	100.0	242

B－３・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	6	42.6	55	15.5	20	5.4	7	63.5	82	5.4	7	0.8	1	1.6	2	7.8	10	0.8	1	0.8	1	27.1	35	100.0	129
		7	39.8	41	10.7	11	8.7	9	59.2	61	9.7	10	1.0	1	1.0	1	11.7	12	1.0	1	1.9	2	26.2	27	100.0	103
		8	40.2	43	6.5	7	6.5	7	53.2	57	5.6	6	1.9	2	0.0	0	7.5	8	0.9	1	1.9	2	36.4	39	99.9	107
	2層	10	29.6	34	12.2	14	5.2	6	47.0	54	9.6	11	1.7	2	0.0	0	11.3	13	0.9	1	0.9	1	40.4	46	100.1	115
		11	26.5	31	9.4	11	10.3	12	46.2	54	7.7	9	1.7	2	0.0	0	9.4	11	1.7	2	0.0	0	42.2	50	100.0	117
		12	32.2	37	12.2	14	11.3	13	55.7	64	2.6	3	7.0	8	0.9	1	10.5	12	0.0	0	2.6	3	31.3	36	100.1	115
		13	33.3	40	15.8	19	19.2	23	68.3	82	0.8	6	5.8	7	0.8	1	11.6	14	0.8	1	1.7	2	17.5	21	99.9	120
	4層	14	41.5	49	15.3	18	7.6	9	64.4	76	13.6	16	2.5	3	0.0	0	16.1	19	0.8	1	1.7	2	16.9	20	99.9	118
混合層	5層	15	46.3	62	11.9	16	6.7	9	64.9	87	1.5	2	0.7	1	0.0	0	2.2	3	0.7	1	9.0	12	23.1	31	99.9	134

B－４・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	37.0	205	31.2	201	13.4	74	16.4	91	2.0	11	100.0	554
		6	30.0	223	30.3	225	10.8	80	23.0	171	5.9	44	100.0	743
	7層	8	24.6	200	21.1	171	7.9	64	34.6	281	11.8	96	100.0	812
	10層	9	15.2	209	12.8	175	5.1	70	25.1	344	41.8	573	100.0	1371
		10	25.7	226	25.7	226	7.4	65	38.9	342	2.4	21	100.1	880
		11	21.5	177	25.9	213	7.1	58	30.2	248	15.3	126	100.0	822
	12層	13	26.7	103	52.9	204	10.6	41	9.3	36	0.5	2	100.0	386
		14	38.6	231	30.1	180	17.5	105	5.7	34	8.2	49	100.1	599
		15	36.3	225	33.9	210	24.6	152	2.4	15	2.7	17	99.9	619
		16	38.4	209	37.5	204	18.8	102	4.0	22	1.3	7	100.0	544
		17	36.9	213	37.8	218	18.4	106	6.6	38	0.3	2	100.0	577
混合層	13層	18	42.6	226	49.1	260	7.0	37	1.3	7	0.0	0	100.0	530
		19	25.8	296	68.7	213	3.5	11	1.6	5	0.3	1	99.9	310

B－４・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	47.3	95	2.0	4	49.3	99	33.3	67	7.0	14	0.0	0	6.5	13	0.0	0	4.0	8	100.1	201
		6	44.0	99	7.1	16	51.1	115	31.6	71	9.3	21	0.0	0	4.0	9	0.0	0	4.0	9	100.0	225
	7層	8	54.5	128	8.9	21	63.4	149	20.0	47	8.5	20	0.0	0	5.1	12	0.0	0	3.0	7	100.0	235
	10層	9	54.8	115	4.3	9	59.1	124	27.6	58	7.6	16	0.0	0	4.3	9	0.0	0	1.4	3	100.0	210
		10	61.9	140	1.3	3	63.2	143	23.5	53	7.1	16	0.0	0	3.1	7	0.0	0	3.1	7	100.0	226
		11	58.7	125	2.8	6	61.5	131	20.7	44	8.5	18	0.0	0	7.0	15	0.0	0	2.3	5	100.0	213
	12層	13	38.7	79	1.5	3	40.2	82	33.8	69	9.8	20	0.0	0	14.7	30	0.0	0	1.5	3	100.0	204
		14	45.0	94	2.4	5	47.4	99	38.8	81	7.2	15	0.5	1	5.7	12	0.0	0	0.5	1	100.1	209
		15	37.6	79	3.3	7	40.9	86	34.3	72	8.1	17	0.0	0	11.4	24	0.0	0	5.2	11	99.9	210
		16	44.1	90	1.0	2	45.1	92	36.8	75	9.3	19	0.0	0	7.4	15	0.0	0	1.5	3	100.1	204
		17	42.7	93	1.8	4	44.5	97	35.3	77	8.7	19	0.0	0	10.1	22	0.0	0	1.4	3	100.0	218
混合層	13層	18	61.9	161	1.9	5	63.8	166	21.5	56	4.6	12	0.0	0	8.1	21	0.0	0	1.9	5	99.9	260
		19	64.8	138	2.8	5	67.6	144	18.3	39	4.7	10	0.0	0	8.5	18	0.0	0	0.9	2	100.0	213

B－４・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	38.7	43	13.5	15	9.0	10	61.2	68	6.3	7	0.9	1	0.0	0	7.2	8	1.8	2	2.7	3	27.0	30	99.9	111
		6	32.7	33	16.7	17	11.9	12	61.3	62	7.9	8	2.0	2	1.0	1	10.9	11	1.0	1	0.0	0	26.7	27	99.9	101
	7層	8	29.3	34	12.9	15	8.6	10	50.8	59	3.4	4	1.7	2	0.9	1	6.0	7	0.9	1	3.4	4	38.8	45	99.9	116
	10層	9	29.1	30	9.7	10	16.5	17	55.3	57	3.9	4	0.0	0	1.9	2	5.8	6	1.0	1	1.9	2	35.9	37	99.9	103
		10	26.9	28	15.4	16	13.5	14	55.8	58	6.7	7	1.0	1	0.0	0	7.7	8	1.9	2	3.8	4	30.8	32	100.0	104
		11	35.8	38	10.4	11	14.2	15	60.4	64	1.9	2	0.0	0	0.0	0	1.9	2	1.9	2	1.9	2	34.0	36	100.1	106
	12層	13	40.6	41	7.9	8	5.9	6	54.4	55	5.9	6	2.0	2	1.0	1	8.9	9	5.0	5	2.0	2	29.7	30	100.0	101
		14	25.7	27	11.4	12	11.4	12	48.5	51	4.8	5	4.8	5	1.0	1	10.6	11	1.0	1	0.0	0	40.0	42	100.1	105
		15	37.5	57	14.5	22	12.5	19	64.5	98	3.9	6	3.3	5	2.0	3	9.2	14	2.6	4	0.0	0	23.7	36	100.0	152
		16	36.3	37	14.7	15	12.7	13	63.7	65	5.9	6	5.9	6	0.0	0	11.8	12	0.0	0	2.9	3	21.6	22	100.0	102
		17	37.7	40	17.0	18	10.4	11	65.1	69	5.7	6	3.8	4	0.9	1	10.4	11	1.9	2	1.9	2	20.8	22	100.1	106
混合層	13層	18	31.8	35	16.4	18	14.5	16	62.7	69	12.7	14	1.8	2	0.9	1	15.4	17	1.8	2	8.2	9	11.8	13	99.9	110
		19	41.1	44	14.0	15	6.5	7	61.6	66	10.3	11	4.7	5	1.9	2	16.9	18	2.8	3	2.8	3	15.9	17	100.0	107

C－１・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	4	40.8	238	39.1	228	14.2	83	5.3	31	0.5	3	99.9	583
		5	39.4	206	41.1	215	14.1	74	4.8	25	0.6	3	100.0	523
		6	36.6	214	39.1	229	11.6	68	1.7	10	10.9	64	99.9	585
	6層	7	35.6	213	31.1	186	12.7	76	18.4	110	2.2	13	100.0	598
		8	32.6	226	26.7	185	11.8	82	23.6	164	5.3	37	100.0	694
		9	26.3	204	27.3	212	9.4	73	29.3	228	7.7	60	100.0	777
		10	26.4	222	24.5	206	7.1	60	38.5	323	3.5	29	100.0	840
	7層	11	18.8	208	13.0	144	4.2	46	12.6	139	51.4	568	100.0	1105
		12	25.4	208	21.5	176	8.0	66	34.3	281	10.9	89	100.1	820
	8層	13	29.4	215	26.1	191	10.0	73	16.8	123	17.8	130	100.1	732
		14	40.7	223	35.4	194	12.0	66	10.6	58	1.3	7	100.0	548
	10層	15	38.8	205	31.9	169	21.7	115	6.6	35	0.9	5	99.9	529
		16	40.2	204	26.2	133	26.8	136	5.5	28	1.2	6	99.9	507
		17	42.0	201	25.9	124	24.4	117	6.7	32	1.0	5	100.0	479
		18	37.0	210	34.6	196	25.0	142	2.8	16	0.5	3	99.9	567
		19	39.6	201	29.7	151	23.8	121	4.7	24	2.2	11	100.0	508
		20	40.1	216	31.9	172	24.7	133	3.3	18	0.0	0	100.0	539
		21	41.0	207	31.9	161	22.6	114	4.4	22	0.2	1	100.1	505
混合層	13層	22	42.2	222	46.8	246	7.8	41	3.0	16	0.2	1	100.0	526

C－１・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	4	38.2	87	1.3	3	39.5	90	39.9	91	6.6	15	0.0	0	9.2	21	0.0	0	4.8	11	100.0	228
		5	35.3	76	2.8	6	38.1	82	40.0	86	9.3	20	0.0	0	8.8	19	0.0	0	3.7	8	99.9	215
		6	41.0	94	2.2	5	43.2	99	36.2	83	9.2	21	0.0	0	8.7	20	0.0	0	2.6	6	99.9	229
	6層	7	50.9	108	1.4	3	52.3	111	29.7	63	8.0	17	0.0	0	7.5	16	0.0	0	2.4	5	99.9	212
		8	44.4	91	1.5	3	45.9	94	36.1	74	10.7	22	0.0	0	3.9	8	0.0	0	3.4	7	100.0	205
		9	52.4	111	0.5	1	52.9	112	33.5	71	6.1	13	0.0	0	5.2	11	0.0	0	2.4	5	100.1	212
		10	44.7	92	3.9	8	48.6	100	34.5	71	5.3	11	0.0	0	5.3	11	0.0	0	3.4	7	100.1	206
	7層	11	57.7	128	2.3	5	60.0	133	26.6	59	8.6	19	0.0	0	3.2	7	0.0	0	1.8	4	100.2	222
		12	57.4	139	2.5	6	59.9	145	31.8	77	3.7	9	0.0	0	2.9	7	0.0	0	1.7	4	100.0	242
	8層	13	52.9	111	0.5	1	53.4	112	32.9	69	7.6	16	0.0	0	5.2	11	0.0	0	1.0	2	100.1	210
		14	43.4	109	0.8	2	44.2	111	40.2	101	7.6	19	0.0	0	6.8	17	0.0	0	1.2	3	100.0	251
	10層	15	42.2	92	0.5	1	42.7	93	37.6	82	10.6	23	0.0	0	7.8	17	0.0	0	1.4	3	100.1	218
		16	45.0	118	1.9	5	46.9	123	35.9	94	8.0	21	0.0	0	8.4	22	0.0	0	0.8	2	100.0	262
		17	40.4	86	2.8	6	43.2	92	40.8	87	10.3	22	0.0	0	2.8	6	0.0	0	2.8	6	99.9	213
		18	46.0	99	0.9	2	46.9	101	35.3	76	8.4	18	0.0	0	6.5	14	0.0	0	2.8	6	99.9	215
		19	46.8	103	1.4	3	48.2	106	38.6	85	6.8	15	0.0	0	5.5	12	0.0	0	0.9	2	100.0	220
		20	40.6	102	1.2	3	41.8	105	41.8	105	6.4	16	0.0	0	7.6	19	0.0	0	2.4	6	100.0	251
		21	40.0	84	0.0	0	40.0	84	40.5	85	8.1	17	0.0	0	10.0	21	0.0	0	1.4	3	100.0	210
混合層	13層	22	62.2	153	0.8	2	63.0	155	24.4	60	5.3	13	0.0	0	6.1	15	0.0	0	1.2	3	100.0	246

C－１・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	4	36.1	39	15.7	17	12.0	13	63.8	69	7.4	8	1.9	2	0.9	1	10.2	11	1.9	2	0.0	0	24.1	26	100.0	108
		5	37.5	48	15.6	20	14.8	19	67.9	87	5.5	7	0.0	0	0.8	1	6.3	8	0.8	1	0.8	1	24.2	31	100.0	128
		6	31.9	36	12.4	14	11.5	13	55.8	63	7.1	8	1.8	2	0.0	0	8.9	10	1.8	2	0.0	0	33.6	38	100.1	113
	6層	7	26.2	34	13.1	17	10.8	14	50.1	65	4.6	6	2.3	3	2.3	3	9.2	12	2.3	3	1.5	2	36.9	48	100.0	130
		8	37.4	46	11.4	14	8.1	10	56.9	70	3.3	4	1.6	2	0.0	0	4.9	6	3.3	4	3.3	4	31.7	39	100.1	123
		9	33.0	33	10.0	10	8.0	8	51.0	51	3.0	3	1.0	1	3.0	3	7.0	7	2.0	2	1.0	1	39.0	39	100.0	100
		10	34.1	43	11.9	15	14.3	18	60.3	76	3.2	4	0.0	0	0.0	0	3.2	4	0.8	1	0.0	0	35.7	45	100.0	126
	7層	11	33.0	33	12.0	12	10.0	10	55.0	55	6.0	6	1.0	1	3.0	3	10.0	10	1.0	1	4.0	4	30.0	30	100.0	100
		12	23.8	25	8.6	9	13.3	14	45.7	48	5.7	6	1.9	2	2.9	3	10.5	11	1.0	1	3.8	4	39.0	41	100.0	105
	8層	13	32.3	41	11.8	15	11.8	15	55.9	71	5.5	7	1.6	2	2.4	3	9.5	12	1.6	2	0.8	1	32.3	41	100.1	127
		14	30.3	33	12.8	14	7.3	8	50.4	55	9.2	10	0.0	0	0.9	1	10.1	11	1.8	2	2.8	3	34.9	38	100.0	109
	10層	15	28.7	33	11.3	13	12.2	14	52.2	60	13.0	15	0.9	1	1.7	2	15.6	18	1.7	2	0.9	1	29.6	34	100.0	115
		16	32.4	44	13.2	18	11.0	15	56.6	77	5.1	7	2.2	3	1.5	2	8.8	12	0.7	1	0.7	1	33.1	45	99.9	136
		17	18.8	22	12.0	14	16.2	19	47.0	55	5.1	6	5.1	6	1.7	2	11.9	14	0.0	0	0.0	0	41.0	48	99.9	117
		18	24.6	35	16.2	23	16.2	23	57.0	81	7.0	10	4.2	6	0.7	1	11.9	17	0.0	0	1.4	2	29.6	42	99.9	142
		19	19.0	23	5.8	7	12.4	15	37.2	45	5.8	7	3.3	4	3.3	4	12.4	15	0.8	1	0.0	0	49.6	60	100.0	121
		20	30.1	40	12.0	16	13.5	18	55.6	74	6.8	9	4.5	6	2.3	3	13.6	18	0.0	0	0.8	1	30.1	40	100.1	133
		21	27.2	31	10.5	12	15.8	18	53.5	61	5.3	6	6.1	7	2.6	3	14.0	16	1.8	2	1.8	2	28.9	33	100.0	114
混合層	13層	22	35.6	36	14.9	15	10.9	11	61.4	62	11.9	12	2.0	2	1.0	1	14.9	15	1.0	1	4.0	4	18.8	19	100.1	101

C－2・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	46.1	210	31.8	145	16.0	73	4.4	20	1.8	8	100.1	456
		6	37.6	211	43.1	242	15.0	84	1.6	9	2.7	15	100.0	561
	2層	8	37.0	244	36.6	241	19.3	127	6.8	45	0.3	2	100.0	659
		9	39.3	280	38.4	274	16.8	120	4.9	35	0.6	4	100.0	713
		10	35.9	216	45.3	273	15.8	95	3.0	18	0.0	0	100.0	602
混合層	5層	11	48.4	227	35.2	165	9.6	45	6.03	28	0.9	4	100.1	469
		12	46.8	219	42.9	201	6.0	28	4.1	19	0.2	1	100.0	468

C－2・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	42.5	94	0.5	1	43.0	95	41.2	91	9.1	20	0.0	0	3.6	8	0.0	0	3.2	7	100.1	221
		6	43.4	105	0.8	2	44.2	107	34.7	84	8.7	21	0.0	0	10.3	25	0.0	0	2.1	5	100.0	242
	2層	8	48.5	117	0.4	1	48.9	118	26.6	64	7.1	17	0.0	0	14.5	35	0.0	0	2.9	7	100.0	241
		9	45.6	125	0.7	2	46.3	127	34.3	94	8.0	22	0.0	0	8.8	24	0.0	0	2.6	7	100.0	274
		10	49.8	136	0.7	2	50.5	138	28.6	78	5.9	16	0.0	0	13.6	37	0.0	0	1.5	4	100.1	273
混合層	5層	11	42.3	112	2.3	6	44.6	118	34.7	92	9.4	25	0.0	0	9.8	26	0.0	0	1.5	4	100.0	265
		12	40.8	82	0.5	1	41.3	83	35.8	72	6.5	13	0.0	0	14.4	29	0.0	0	2.0	4	100.0	201

C－2・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	5	41.8	46	6.4	7	10.0	11	58.2	64	8.2	9	1.8	2	0.0	0	10.0	11	0.9	1	1.8	2	29.1	32	100.0	110
		6	47.5	56	11.0	13	5.9	7	64.4	76	8.5	10	0.0	0	1.7	2	10.2	12	0.8	1	0.8	1	23.7	28	99.9	118
	2層	8	40.9	52	15.7	20	6.3	8	62.9	80	5.5	7	2.4	3	0.0	0	7.9	10	0.8	1	0.8	1	27.6	35	100.0	127
		9	35.0	42	15.8	19	9.2	11	60.0	72	4.2	5	3.3	4	1.7	2	9.2	11	2.5	3	0.0	0	28.3	34	100.0	120
		10	39.7	48	14.1	17	9.1	11	62.9	76	8.3	10	2.5	3	0.8	1	11.6	14	0.8	1	0.0	0	24.8	30	100.1	121
混合層	5層	11	32.8	44	16.4	22	11.9	16	61.1	82	3.7	5	2.2	3	0.0	0	5.9	8	5.2	7	6.7	9	20.9	28	99.8	134
		12	38.8	50	16.3	21	12.4	16	67.5	87	9.3	12	6.2	8	0.0	0	15.5	20	2.3	3	0.8	1	14.0	18	100.1	129

D・軽鉱物・重鉱物・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	軽鉱物		重鉱物		岩片						合計	
							スコリア等		軽石					
									灰白色		褐色			
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	1	31.8	205	36.3	234	10.5	68	7.8	50	13.6	88	100.0	645
	7層	2	23.5	138	37.6	221	5.8	34	30.5	179	2.6	15	100.0	587
	8層	5	19.9	219	18.7	205	2.5	27	53.4	587	5.6	61	100.1	1099
		7	25.9	205	32.7	259	4.4	35	31.4	249	5.7	45	100.1	793
		8	25.4	207	28.0	228	8.4	68	33.2	270	5.0	41	100.0	814
	10層	10	35.5	234	36.4	240	23.7	156	4.4	29	0.0	0	100.0	659
		11	38.0	228	36.0	216	20.8	125	4.7	28	0.5	3	100.0	600
		12	40.7	203	30.1	150	26.5	132	2.8	14	0.0	0	100.1	499
		13	44.5	218	32.2	158	20.6	101	2.2	11	0.4	2	99.9	490
		14	28.2	132	56.0	262	13.0	61	2.8	13	0.0	0	100.0	468
		15	40.1	230	37.3	214	19.9	114	2.8	16	0.0	0	100.1	574
		16	39.6	213	31.4	169	24.5	132	4.3	23	0.2	1	100.0	538
		17	40.7	218	36.3	194	19.6	105	2.6	14	0.7	4	99.9	535
		18	29.9	161	48.4	261	18.2	98	3.5	19	0.0	0	100.0	539
	12層	20	37.2	253	31.1	212	29.8	203	1.9	13	0.0	0	100.0	681
混合層	13層	22	18.8	60	74.3	237	5.6	18	0.9	3	0.3	1	99.9	319

D・重鉱物組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	カンラン石		風化カンラン石		小計		斜方輝石		単斜輝石		普通角閃石		磁鉄鉱		黒雲母		風化・不明粒子		合計	
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	1	44.9	105	2.1	5	47.0	110	33.8	79	12.0	28	0.0	0	6.8	16	0.0	0	0.4	1	100.0	234
	7層	2	52.0	115	1.8	4	53.8	119	29.0	64	5.9	13	0.0	0	10.4	23	0.0	0	0.9	2	100.0	221
	8層	5	54.6	112	2.4	5	57.0	117	26.8	55	8.8	18	0.0	0	5.9	12	0.0	0	1.5	3	100.0	205
		7	59.8	155	1.5	4	61.3	159	23.2	60	8.1	21	0.4	1	4.6	12	0.0	0	2.3	6	99.9	259
		8	60.1	137	0.9	2	61.0	139	25.0	57	4.8	11	0.0	0	6.6	15	0.0	0	2.6	6	100.0	228
	10層	10	46.7	112	0.4	1	47.1	113	30.8	74	8.3	20	0.0	0	10.8	26	0.0	0	2.9	7	99.9	240
		11	46.3	100	0.9	2	47.2	102	36.1	78	9.7	21	0.0	0	4.6	10	0.0	0	2.3	5	99.9	216
		12	43.1	107	2.4	6	45.5	113	35.1	87	10.1	25	0.0	0	7.7	19	0.4	1	1.2	3	100.0	248
		13	48.8	100	0.5	1	49.3	101	38.0	78	6.3	13	0.0	0	4.4	9	0.0	0	2.0	4	100.0	205
		14	42.7	112	0.8	2	43.5	114	38.2	100	5.3	14	0.0	0	12.2	32	0.0	0	0.8	2	100.0	262
		15	42.1	90	2.3	5	44.4	95	36.0	77	7.5	16	0.5	1	8.9	19	0.9	2	1.9	4	100.1	214
		16	44.2	121	1.8	5	46.0	126	39.1	107	8.0	22	0.0	0	6.2	17	0.0	0	0.7	2	100.0	274
		17	46.4	104	0.9	2	47.3	106	32.1	72	7.1	16	0.0	0	10.3	23	0.0	0	3.1	7	99.9	224
		18	48.3	126	1.1	3	49.4	129	26.8	70	9.2	24	0.0	0	13.0	34	0.0	0	1.5	4	99.9	261
	12層	20	51.9	110	1.4	3	53.3	113	29.7	63	3.8	8	0.5	1	11.3	24	0.0	0	1.4	3	100.0	212
混合層	13層	22	69.6	165	0.8	2	70.4	167	17.3	41	4.2	10	0.0	0	6.3	15	0.0	0	1.7	4	99.9	237

D・岩片組成

粒径0.25～0.125mm　粒数パーセント

テフラ層位	遺跡層位	試料番号	黒色岩片								赤色岩片								暗褐色岩片		赤色ガラス質岩片		褐色ガラス質岩片		合計	
			発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計		発泡微弱		発泡弱		発泡強		合計									
			%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数	%	粒数
黒色帯上部	a層	1	36.4	44	12.4	15	13.2	16	62.0	75	3.3	4	0.8	1	0.0	0	4.1	5	0.0	0	1.7	2	32.2	39	100.0	121
	7層	2	43.8	49	15.2	17	10.7	12	69.7	78	2.7	3	0.9	1	0.0	0	3.6	4	4.5	5	0.9	1	21.4	24	100.1	112
	8層	5	22.0	24	12.8	14	12.8	14	47.6	52	8.3	9	2.8	3	0.0	0	11.1	12	1.8	2	5.5	6	33.9	37	99.9	109
		7	33.3	35	17.1	18	11.4	12	61.8	65	8.6	9	1.9	2	0.0	0	10.5	11	1.0	1	2.9	3	23.8	25	100.0	105
		8	34.2	38	11.7	13	9.9	11	55.8	62	7.2	8	3.6	4	0.0	0	10.8	12	2.7	3	2.7	3	27.9	31	99.9	111
	10層	10	39.1	45	17.4	20	14.8	17	71.3	82	4.3	5	0.9	1	0.0	0	5.2	6	0.9	1	0.9	1	21.7	25	100.0	115
		11	34.4	43	4.0	5	12.8	16	51.2	64	5.6	7	5.6	7	0.8	1	12.0	15	0.0	0	0.0	0	36.8	46	100.0	125
		12	35.6	47	12.9	17	16.7	22	65.2	86	7.6	10	0.8	1	1.5	2	9.9	13	0.8	1	1.5	2	22.7	30	100.1	132
		13	20.3	30	12.2	18	18.2	27	50.7	75	8.1	12	2.7	4	2.0	3	12.8	19	2.7	4	1.4	2	32.4	48	100.0	148
		14	35.6	52	7.5	11	17.1	25	60.2	88	11.6	17	3.4	5	1.4	2	16.4	24	0.0	0	0.7	1	22.6	33	99.9	146
		15	30.7	35	8.8	10	11.4	13	50.9	58	7.0	8	3.5	4	1.8	2	12.3	14	0.0	0	1.8	2	35.1	40	100.1	114
		16	23.5	31	9.8	13	16.7	22	50.0	66	11.4	15	1.5	2	0.0	0	12.9	17	0.0	0	0.8	1	36.4	48	100.1	132
		17	34.3	36	13.3	14	12.4	13	60.0	63	6.7	7	2.9	3	0.0	0	9.6	10	2.9	3	0.0	0	27.6	29	100.1	105
		18	36.0	78	8.8	12	12.5	17	57.3	78	10.3	14	1.5	2	0.7	1	12.5	17	1.5	2	0.7	1	27.9	36	99.9	136
	12層	20	39.0	64	13.4	22	5.5	9	57.9	95	5.5	9	3.0	5	1.2	2	9.7	16	1.2	2	0.0	0	31.1	51	99.9	164
混合層	13層	22	31.1	32	16.5	17	14.6	15	62.2	64	11.7	12	2.9	3	1.0	1	15.6	16	1.9	2	1.9	2	18.4	19	100.0	103

VI. 調査成果

１．旧石器時代

武蔵野台地の南縁を東流する野川の源流域は、大きく２つに分類される。１つは、黒鐘谷の湧水池や「真姿の池」の湧水群などを擁して南側に立川段丘面を望む国分寺崖線側であり、もう１つは日立中央研究所構内の湧水池やかつて存在したとされる「姿見の池」を擁して野川によって武蔵野段丘面に開折された恋ヶ窪谷である。

この２つの源流域においては、これまで多くの旧石器時代の遺跡が報告されてきており、これらは野川源流域遺跡群として把握されるべきであると考えられる。しかしながらこれまでの調査においては、前者の国分寺崖線側においては武蔵台遺跡や多摩蘭坂遺跡など、大規模な多層遺跡が発掘されてきたが、後者の恋ヶ窪谷の周辺の資料はいずれも断片的なものが多く、その地域的な特性を把握するには未だ資料不足であった。

恋ヶ窪谷を北側に望む本遺跡の旧石器時代の調査は、従来その内容が不明であった「もう１つの源流域」において、初めて行われた大規模な発掘調査であり、野川源流域遺跡群を解明する上で、画期的な調査として位置づけることができるであろう。

恋ヶ窪谷をとりまく複雑な地形と広大な範囲からすれば、本遺跡の調査範囲はやはりその一部ではあるものの、しかしながら調査の結果、国分寺崖線側と比較するのに十分な成果が得られた。すなわち、ⅢaからⅩa層にかけて５枚の文化層が検出されたがその中でも、武蔵台遺跡や多摩蘭坂遺跡においては比較的小規模な石器群として検出された、Ⅳ層上部から中部にかけての石器群が、本遺跡においては第２文化層として、最も大規模に検出されたということである。

また逆に、武蔵台遺跡や多摩蘭坂遺跡において最も大規模に検出された、Ⅳ層下部からⅤ層にかけての石器群は、本遺跡においては第３文化層として、極めて小規模にしか検出されなかったということもつけ加えることができる。

このように、２つの異なる源流域において、主体となる文化層の時期が異なるということは、とりもなおさず両地域においては、同時期にそれぞれ異なる土地利用がなされたと考えることができる。そのような両地域における同時期の遺跡の規模の差を踏まえつつ、それぞれの遺跡における石材消費の傾向や石器群の内容の比較を行うことが、野川源流域遺跡群の究明の端緒につながるのではないかと考えられる。

ここで、それぞれの遺跡の石器群を分析し、比較することはできない。そこで、以下に、本遺跡の石器群の様相を、できるかぎり石材消費と遺跡での行動を視座の中心に据えて分析することで、今後の研究の基礎としたい。

１）第１文化層

Ⅲa層からⅢb層にかけて検出された。検出された遺構は３区南側にブロックが２カ所、４区の中央部にブロックが１カ所でそれぞれのブロックに礫群が１カ所ずつ伴っている。出土石器は細石刃３点、尖頭器６点、ナイフ形石器３点、掻器１点、二次加工のある剥片１点、剥片12点、砕片４点である。

第１文化層の各ブロックは互いに母岩の共有関係もなく、それぞれ90mから260mも離れており、共時性を有する確証はない。出土層位は２号ブロックと２号礫群がⅢa層下部で、１号ブロックと１号礫群および３号ブロックと３号礫群がⅢb層中部からⅢb層下部である。特徴的な出土遺物としては２号ブロックからは細石刃、１、３号ブロックからは尖頭器と尖頭器製作剥片が出土している。これらのことから２

号ブロックは１、３号ブロックより時期的に新しいと考えられる。

崖線から大きく離れた地点で、細石刃のみが残された小規模なブロックが検出される例は、府中市多摩蘭坂遺跡（中山1997）などのように、当地域ではしばしばみられる現象であり、本文化層の２号ブロックもその一例であると考えられる。

３号ブロックではガラス質黒色安山岩の板状の剥片を素材にして、尖頭器製作の初期工程を示す接合資料が得られた。断片的な資料であることは否めないが、両面加工の尖頭器が安定的に組成する時期において、本ブロックのように小規模なブロックにおいても、初期の工程から尖頭器製作が行われたという事実は、尖頭器製作の在り方から、該期の遺跡間のつながりを考える上で、看過できない事実であると考えられる。

２）第２文化層

Ⅲb 層下部からⅣb 層上部にかけて検出された。検出された遺構は調査区北側の４区が中心でブロック22カ所、礫群23カ所、他には調査区中央部の２区の北側にブロック１カ所、礫群１カ所、調査区西側の１区にブロック２カ所である。出土石器は尖頭器５点、ナイフ形石器86点、削器23点、掻器29点、円形掻器９点、彫器１点、二次加工のある剥片22点、微細剥離痕のある剥片17点、石核32点、剥片473点、砕片328点、礫石器３点、敲石４点、磨石４点、局部磨製礫１点である。

第２文化層の石器群は出土層位と母岩の共有関係から２時期の石器群に分かれた。すなわち、Ⅲb 層下部からⅣa 層上部にかけて検出されたブロック群Ⅰ（１～８号ブロック）とⅣa 層中部から下部にかけて出土したブロック群Ⅱa，Ⅱb，Ⅱc（９～25号ブロック）である（第22図）。この２つの石器群の編年的位置付けは、出土層位と以下に述べるナイフ形石器の形態や剥片剥離技術の特徴から、前者はナイフ形石器終末期（武蔵野Ⅱb 期後半、相模野段階Ⅶ）、後者はいわゆる砂川期（武蔵野Ⅱb 期前半、相模野段階Ⅵ）の石器群であると考えられる。以下に第２文化層において検出されたブロック群Ⅰからブロック群Ⅱc について、各ブロック群において提起された問題を述べていくことにする。

①ブロック群Ⅰ

ブロック群Ⅰにみられる、石刃を素材とする、長さ３cm 内外の小形の二側縁加工のナイフ形石器を主体に組成する石器群は、ナイフ形石器や石核のみを取り上げれば砂川期の石器群とよく近似し、そのために武蔵野台地においては編年的な位置付けが問題となるところであった（白石1995）(※1)。この石器群が、武蔵野台地のなかでもとりわけ層位的に恵まれた、当該地域に立地する本遺跡において、まとまって検出され、なおかつ砂川期の石器群と層位的に分離されて検出された意義は大変大きい。そこでこれからブロック群Ⅰの編年的位置付けについて、ナイフ形石器や剥片剥離技術を素材としてブロック群Ⅱa，Ⅱb と比較しながら検討し、そのうえでブロック群Ⅰの石材消費の傾向について検討したい。

ナイフ形石器

ナイフ形石器は、まず両者で大きさが異なっている（グラフ１）(※2)。すなわちブロック群Ⅰについては、長さが25㎜から30㎜の範囲に入るものが多いが、ブロック群Ⅱa，Ⅱb については、45㎜から50㎜の範囲に入るものが多く、50㎜以上のものも数点ある。ブロック群Ⅱa，Ⅱb にも小形のものもあるので、あるいはブロック群Ⅰには大形のものが欠落しているということができる。

次に形態と素材の用い方について検討する。ブロック群Ⅱa，Ⅱbにおいては、二側縁加工のナイフ形石器については、ほとんど例外なく厚手の石刃を素材にし、柳葉形に加工している（第63、64図など）。また砂川期に特徴的に組成される、第62図45bや49のような石刃の一端を斜断する加工を施したナイフ形石器も認められる。これに対してブロック群Ⅰでは二側縁加工のナイフ形石器については、薄手の小形の石刃を素材にして、先鋭な基部をもつものが最も多いが（第59図１、２、７、14、第60図19、21）、他に、形態はそれらに近いものの、打面を残置させブランティングの代用としているもの（第59図６、12）や、丸い基部をもち切り出し形を呈するもの（第59図３、第60図17）も認められる。裏面基部加工が施されたものも少ない。このようにブロック群Ⅰにおいては、ブロック群Ⅱa，Ⅱbの二側縁加工のナイフ形石器が小形化したものばかりでなく、形態は近似しながらも加工が省かれたものや、形態までもが変化したものが同時に組成されている。また石刃の一端を斜断する加工を施したものは少ない。

剥片剥離技術

ブロック群Ⅱa，Ⅱbでは、両設打面から石刃を連続的に剥離する剥片剥離技術が、特徴的に最も多く認められる（第78図、第79図163、第96図、第99図45、第104図265、第108図32、第112図276など）。これらでは入念な打面調整や石核調整が施されながら、剥片剥離が行われている。これに対してブロック群Ⅰでは、両設打面から縦長剥片を剥離した接合資料としては、第116図14が挙げられるくらいで、多くは単設打面から石刃や縦長剥片が剥離されている（第76図154、第92図252、第93図など）。他には90度の打面転位を繰り返して、寸詰まりの縦長剥片を剥離するもの（第96図155）や、厚手の剥片を素材にし、主要剥離面を打面として不定形な剥片を剥離するもの（第118図285）なども認められる。

以上、ナイフ形石器と剥片剥離技術についてのブロック群Ⅱa，Ⅱbとの比較から、ブロック群Ⅰにみられる石器群は、砂川期とやや近似した特徴を有しながらも、同時にナイフ形石器終末期にしばしば認められる属性も有していることが確認できる。さらに、ブロック群Ⅰの石材消費の傾向を簡単に検討する。ブロック群Ⅰについては、母岩数が多いものの、集中的に剥片剥離が行われている母岩は少ない。また石核をもつ母岩が少ないことから、石材を使い切ることなく、数点ずつの小規模な剥片剥離が多くの母岩において行われていると考えられる。このような在り方は、ナイフ形石器終末期によく認められる石材の消費傾向である。したがって、ブロック群Ⅰはブロック群Ⅱより時期的に新しく、ナイフ形石器終末期として編年的に位置付けることが妥当であろう。

このように第２文化層のブロック群Ⅰは、砂川期からナイフ形石器終末期にかけての編年や型式の問題および、石材消費からみた遺跡のつながりなどの問題を究明する上で極めて貴重な成果を提出しているといえる。

②ブロック群Ⅱa，Ⅱb

次に、砂川期と考えられるブロック群Ⅱa（９～14号ブロック）Ⅱb（15～23号ブロック）について、石材の補給と消費の傾向について検討したい。ブロック群Ⅱa，Ⅱbは、該期の石器群のなかでも極めて特殊な在り方を示している。一般に砂川期の石器群は、在地の石材を常に補給しながら、剥片剥離の前半段階と後半段階が共存する、いわゆる「原料の二重構成と時差消費」（安蒜1992）をおこなうことで、常に定形的な石刃が安定的に補給される、という石材消費の傾向を示すことが多い。

それに対して、本石器群では消費の主体になる石材が、遠隔地産と推定される良質の硬質頁岩や珪質頁

岩であるためか、特有の消費傾向を示す。

まず、良質の硬質頁岩や珪質頁岩による接合資料11、19、29、36、38、46と、それぞれの母岩全体を観察してみると、接合資料11を除けば、他は石核に１、２点から数点の石刃や剥片が接合するものが多く、それぞれの母岩が保有する剥片、砕片数も少ない。また剥片剥離の初期の工程を示す接合資料や母岩が少ない。以上のことから、これらの石材を用いた石材消費は、本遺跡においてはかなり消費の最終段階に位置付けられると考えられ、本遺跡に至るまで節約しながら消費され、本遺跡において使い切られるに至ったと考えられる。

これに対して、在地の石材による石材消費について接合資料から検討すると、接合資料28（第103図）や接合資料78（第122図）は、礫面を多く残し、それぞれ円礫や半割された円礫から剥片剥離が始められていることがわかる。また接合資料10（第93図）は礫面と素材の分割面を大きく残し、原石を荒割した直後の段階から剥片剥離が始まっていると考えられる。接合資料82（第126図）は原石の礫面除去を示す接合資料である。このように在地の石材と考えられる珪質頁岩やホルンフェルスにおいては、ほぼ原石に近い段階から剥片剥離が行われていることがわかる。

以上のように、遠隔地産と推定される良質の硬質頁岩や珪質頁岩においては、最終段階の消費傾向を示して、使い切られる一方で、在地の石材は原石段階から剥片剥離が始められており、本遺跡で補給されたものと考えられる。

次にそれぞれの石材について剥片剥離技術を検討する。まず良質の硬質頁岩や珪質頁岩については、先に挙げた接合資料11、19、29、36、38、46をみてみると、これらはすべて、砂川期に特徴的に認められる典型的な両設打面の石刃技法である。

これに対して、在地の石材については、先に挙げた接合資料10、28、78を観察すると、両設打面の石刃技法は認められない。

まず接合資料10（第93図）は、石核が一定の大きさを有している段階では、打面調整や石核調整を全く行わずに、石核の小口面を作業面として打面が厚く先端が先細りする大形の縦長剥片を剥離し、石核が小さくなると、90度の打面転位を繰り返して幅広の剥片を剥離している。接合資料28（第103図）は、打面調整を行わずに90度の打面転位を繰り返して、小形の縦長剥片を剥離している。接合資料78（第123図）は、半割された円礫の分割面を打面として、打面調整を施さずに用いて、厚手の剥片を剥離し、それによって得られた厚手の剥片を石核に用いて、求心状の剥片剥離が行われている。

このように、母岩を共有し合うブロック群で行なわれた剥片剥離作業において、遠隔地産と推定される良質の硬質頁岩や珪質頁岩では、両設打面の石刃技法を用いて石材消費を完了させ、その一方でそれを補うかのように始められた在地の石材の剥片剥離では、両設打面の石刃技法は適用されていないという現象が認められる。このような石材と剥片剥離技術の使い分け、およびそれらと石材の消費と補給との対応関係は、本遺跡の形成過程や、その背後に想定される該期の遺跡のつながりを解明する上で、極めて重要な示唆を与えていると考えられる。

次にナイフ形石器や削器、掻器などの製品類の石材についてみてみると、良質の硬質頁岩や珪質頁岩製のものがほとんどである。さらに、重要なことに、製品類の多くは搬入品である。このように本石器群における製品類は、搬入された良質の硬質頁岩や珪質頁岩製のものが主体となっている。しかし、比率は低いものの、本遺跡内において製作された製品類も存在する。

搬入品と製作品のナイフ形石器の大きさを比較すると、もう一つの大きな特徴が示される。いま問題に

している良質の硬質頁岩や珪質頁岩製の搬入品のナイフ形石器は、本遺跡内で製作されたナイフ形石器と比べて遥かに大形のものが多い。ただし小形のものも存在するので、あるいは大形のものを特徴的に含んでいるという方が適切かもしれない。例えば搬入品で大形のものとしては、23号ブロックのナイフ形石器（第63図59～70、第64図71～77）や21号ブロックのナイフ形石器（第61図41、42）が挙げられ、これらは45㎜から50㎜の長さをもち、50㎜を越えるものも存在している。それに対して本遺跡内での製作品のナイフ形石器としては第60図24や第61図32、33、34などが挙げられ、最も大形の第61図34でも40㎜に満たないものである。また、そもそも製作品のナイフ形石器自体が少ないことも見逃せない事実である。

これは先述したように本遺跡における硬質頁岩や珪質頁岩の剥片剥離が石材消費の最終段階に位置付けられることが予想され、石核の大きさが小形化し（第79図165）、大形のナイフ形石器を製作するための素材を供給し得ないためであると考えられる。

同じことは削器や掻器にも当てはまり、11号ブロックにみられたような厚手の石刃を素材にした刃部の分厚い削器や掻器と同様のものは、製作品のなかでは決して認められない。これもナイフ形石器と同じ理由によるものと考えられる。

このように製品類の製作と搬入においても、本遺跡における良質の硬質頁岩や珪質頁岩の消費傾向が反映されていると考えられるのである。

また、これらの良質の硬質頁岩や珪質頁岩製のナイフ形石器や削器、掻器が、ブロックごとに器種を違えつつ多量に搬入されている点も注目できる。具体的には11号ブロックには削器と掻器が７点、17号ブロックではナイフ形石器が10点、23号ブロックではナイフ形石器が19点というように、特定の器種が特定のブロックにまとまって搬入されている。他のブロックにおいてもこれらほど多量ではないにしても同じ傾向が認められる。

武蔵野台地の該期の石器群においては、極めて良質の硬質頁岩や碧玉を素材にしたナイフ形石器や削器、掻器および石核などが少数だけ単品で搬入されている現象がしばしば認められる（世田谷区遺跡調査会1981）。それに対して本石器群では製品のほとんどがそのようにしてもたらされている。

またそのような製品類には頻繁な使用の痕跡が伺われる資料が多い。例えば、ナイフ形石器については、19点のナイフ形石器が搬入された23号ブロックにおいては、８点が先端部を折損しており、そのうち１点は先端部に再加工が施され（第63図61）、１点は先端部の折れ面に樋状の剥離が施され彫器に再加工されている（第63図69）。他のナイフ形石器も刃部に、使用に起因すると思われる刃こぼれ状の剥離が認められるものが多い。同じ現象は、削器や掻器についても認められる。11号ブロックの削器や掻器の刃部の稜線は激しく磨滅しており（第66図96、97）、他のブロックにおいても、搬入されたチャート製の掻器も含め、刃部の再生や再加工を示す接合資料も多く認められる（接合資料30、35、51、47、60）。このように良質の硬質頁岩や珪質頁岩製の製品類には、頻繁な使用の痕跡が認められるものが多い。

以上のことから、本石器群では、遠隔地産の良質な石材を両設打面の石刃技法を適用して、節約しつつ消費しながら本遺跡に至り、消費を完了させ、一方では、在地の石材を本遺跡において補給し、両設打面の石刃技法を適用せずに剥片剥離を行い、さらに、長い使用を経てきた多量の製品を搬入して、廃棄した活動が読みとれる。

このような本遺跡における石材消費の在り方は、「原料の二重構成と時差消費」（安蒜1992）ということもできるものの、在地の石材が消費と補給のサイクルに組み込まれて、それらに定型的な石刃技法を適用することで、常に石刃が安定的に供給されることが多いと考えられる該期の遺跡の在り方のなかでは（島

田1996)、極めて特殊であるということができよう(※3)。

本遺跡が、他の遺跡との関わりの中で如何に理解されるのかについては、先にも述べたように、他の遺跡において良質の硬質頁岩製の製品が、少量だけ単品で搬入されることがあるという現象が、その手がかりになる可能性もある。またその背景を本遺跡が野川の源流域に立地しているという、立地の特殊性に求めることもできるかもしれない。本石器群において検討されるべき問題は語り尽くせないが、本石器群が示す事実によって、石材消費の観点からみた砂川期の遺跡の関係性や、その背後にある先史人類の活動の解明のために、新しくてしかも極めて重大な問題が提起されたことは確かである。

③ブロック群Ⅱc

ブロック群Ⅱc（24、25号ブロック）については、母岩をブロック群Ⅱa，Ⅱbと共有するためブロック群Ⅱa，Ⅱbと同時期としてとらえることができる。24号ブロックからは黒曜石製の有樋尖頭器が出土しており、その編年観からは、同時期としても齟齬はないと考えられる。しかしながら、ブロック群Ⅱcはブロック群Ⅱa，Ⅱbとは接合関係もなく、共有する母岩はCh４が１点とSSh18が１点の２点のみであり、その共有関係は極めて貧弱である。そのうえ最も近いブロック群Ⅱbからも約150mも離れている。以上のことからブロック群Ⅱa，Ⅱbとの共時性については断定はできない。

３）第３文化層

Ⅳb層下部を中心に検出された。２区の中央よりやや南寄りに１号ブロックが、３区の南端に２号ブロックが検出された。また４区の北端からもブロックは形成されていないが石器と礫が散在して検出された。出土石器は角錐状石器１点、ナイフ形石器３点、二次加工のある剥片２点、石核１点、剥片11点、砕片１点である。１号ブロックは搬入された角錐状石器やナイフ形石器、二次加工のある剥片が散漫に分布し、２号ブロックは小規模な剥片剥離が行われた痕跡を示している。

４）第４文化層

４区の中央と２区の西端においてⅥ層下部から石核１点と剥片２点が出土した。ブロックは構成されていない。

５）第５文化層

４区の北端においてⅩa層から二次加工のある剥片１点、微細剥離痕のある剥片１点、石刃２点が検出された。ブロックは形成されておらず、すべて単体資料で、剥片剥離が行われた痕跡は認められない。

検出された硬質細粒凝灰岩製の２点の石刃は、打面調整が施されておらず、平行した両側縁をもつことが観察される。その形態や石材、およびそれらが単品で本遺跡内へ搬入されているという点を評価すると、武蔵台遺跡Ⅸ中文化層（都立府中病院遺跡調査会1984）や、はけうえ遺跡Ⅸ層（国際基督教大学考古学研究センター1980）にその類例が求められるであろう。

（国武）

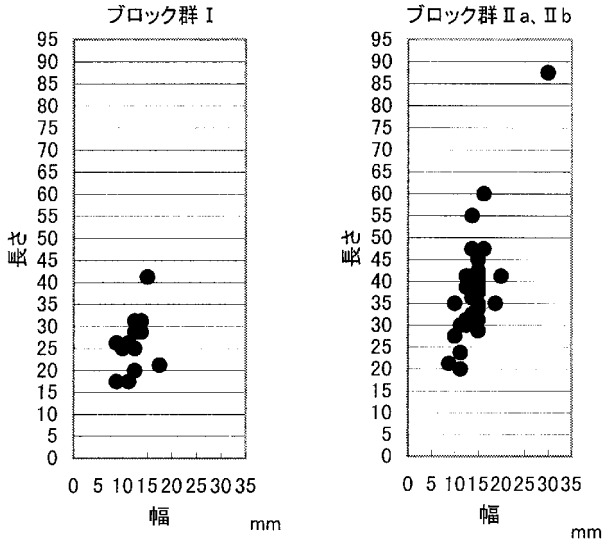
註

（※１）この類の石器群は、白石浩之氏によって指摘された（白石1995）野川遺跡Ⅳ１層の他に，近年の調査では練馬区も

みじ山遺跡Ⅲ層中部など他にも、武蔵野台地の各地に散見される。これらが、砂川期の石器群の武蔵野台地における地域的特性ではなく、砂川期とは時期を画する石器群であることは、本文化層内での２時期の石器群の分離によってより一層明確になったといえよう。また資料が増加すれば、この石器群が、ナイフ形石器終末期のなかでも一時期を画する石器群として抽出される可能性もあると考えられる。

（※２）二側縁加工の完成品のみを対象としている。

（※３）砂川期に属し、良質の硬質頁岩や珪質頁岩を主要石材に用いて剥片剥離を行っている石器群としては、練馬区高稲荷遺跡Ⅲ下～Ⅳ上を挙げることができる。高稲荷遺跡と本石器群との違いは、前者の場合は、遺跡内で製作された良質の硬質頁岩や珪質頁岩製のナイフ形石器は50㎜前後の大形品が多く、その上これらの石材の石核が遺跡内に残されていない点である。接合資料も剥片剥離の中途を示すものや、石核調整の過程を示すものが多い。これらのことから高稲荷遺跡Ⅲ下～Ⅳ上は、本稿で検討したブロック群Ⅱa，Ⅱbの石材消費の傾向とは多くの点で対照的であり、相補する関係にあるということができる。また、武蔵野台地においては、これらの石材を遺跡内で剥離せずに、製品のみが単品で搬入される遺跡がしばしば認められることは本文中で述べた。該期の遺跡のつながりを考察する上で、遠隔地石材の消費傾向は重要な検討課題であるが、黒曜石ばかりでなく、良質な硬質頁岩や珪質頁岩の消費傾向の、このような遺跡間の不均等な在り方とそれによる遺跡のつながりを抽出することで、新たな視点が拓ける可能性が高いと考えられる。



グラフ１　ナイフ形石器の大きさ

参考文献

・安蒜政雄「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作作業の体系」『駿台史学』84　1992
・かながわ考古学財団「用田バイパス関連遺跡群ローム層出土の炭化材」『旧石器時代の住居遺構を探る』1998
・国際基督教大学考古学研究センター『はけうえ』1980
・国分寺市史委員会『国分寺市史』上巻　1986
・島田和高「移動生活のなかの石器作りの営み」―砂川型刃器技法の再検討―『駿台史学』98　1996
・白石浩之「関東地方におけるナイフ形石器終末期の様相」―月見野期を中心として―『古代文化』1995
・世田谷区遺跡調査会『廻沢北遺跡―第５・６次調査概報―』1981
・中山真治「多摩蘭坂遺跡」『第４回石器文化交流会―発表要旨―』1997
・練馬区遺跡調査会『高稲荷遺跡』1989
・練馬地区遺跡調査会『もみじ山遺跡Ⅰ』1995
・府中病院遺跡調査会『武蔵台遺跡Ⅰ』1984
・武蔵関北遺跡調査団『武蔵関北遺跡』1993

2．縄文時代

「遺跡の位置と環境」の項でも触れているが、当該地区の北西部（１区から４区にかけての部分）は縄文中期の「日影山遺跡」と一部重複している。また、周辺の主な該期の遺跡としては、東方には早期から中期の遺物が出土し、早期と中期初頭の住居跡が検出されている恋ヶ窪南遺跡、南方の台地南縁には草創期から後期の遺物が出土し、中期勝坂期の良好な資料を残す多喜窪遺跡、恋ヶ窪谷をはさんだ北側には早期から後期の遺物が出土し、中期中～後期の集落が検出された恋ヶ窪遺跡などが立地している。

日影山遺跡に関しては昭和20～30年頃の佐藤敏也氏による表面採取の他、部分的に試掘調査が行われている程度である。その時期については、採取された土器から恋ヶ窪南遺跡とほぼ同時期と考えられる早期・中期のもので、特に中期の五領ヶ台式から勝坂式の遺物が中心であり、国分寺市内では資料の少ない中期前半の遺跡であると想定されていた。そういった意味でも、本調査が初めての本格的調査であり、遺跡の範囲や性格を知る上で期待されていた。

また、調査区の南部（２区・３区）は、日影山遺跡の範囲からは外れるものの、先にも述べた多喜窪遺跡との中間域として、どのように遺構及び遺物が分布しているのかなど、この地域での詳細なデータの収集に調査の主眼がおかれていた。このことから、面積に比して短い調査期間（特に３区の調査開始寸前に期間短縮が決定された）にもかかわらず、遺物包含層の掘削はすべて人力による手掘りとし、全地区を通して遺物の出土位置を全点トータルステーションで記録する方法で調査を行った。この結果、第207～211図・第238～242図の土器及び石器の分布図にあるような詳細なデータを記録する事ができ、集落の外側の地域での土地利用などといった遺跡の性格を知る上での良好な資料となった。また、遺構に付いても、集石跡や陥穴といった遺構が調査区全域で検出されており、この地域が、ある時期「狩猟の場」としてのキャンプ地的な地域であった事が明らかとなった。

以上のように、日影山遺跡はもとより、それ以外の地区での調査成果も、当初の予想をはるかに越えるものとなったが、以下にそれら調査成果について、遺構・遺物別にまとめておきたい

１）遺 構

遺構の配置や分布については、「別添第１図」及び「第159・160図」に示してあるが、まず、その分布状況等を出土遺物から時期が比定できる遺構を中心に見てゆく。

竪穴住居跡・竪穴状遺構では、早期撚糸文期に該当するSI－１Jが調査区北側やや東寄りに、SX－７Jが調査区北側の西寄りに位置しており、中期阿玉台期に該当するSI－２Jが調査区北側の東寄りに、その南東約40mの距離にSX－61Jが位置している。これらの検出位置は、いずれも日影山遺跡の範囲内、または、やや範囲から外れるものの近距離である。このことは、やはり日影山遺跡が早期から中期前半の遺跡である事を裏付ける結果といえる。

集石の分布状況は、まず、「集石土坑」とした遺構ではその出土土器から前期諸磯期と考えられるSS－８Jが調査区南西側に位置しているが、その他はすべて中期と考えられるもので、その内、阿玉台期と考えられる集石土坑はSS－１J、SS－６J・９J、SS－16Jの４基で、調査区西側の北寄りに位置する。また、中期中～後半と考えられるSS－10Jは北側に、SS－17J･SS－18J･SS－19Jの３基が調査区西寄りの中央から南側に位置している。「集石址」では、中期初頭五領ヶ台期～阿玉台期と考えられるSS－３J･SS－４J･SS－14J･SS－15Jが東寄りの北側に位置し、SS－７Jは北西に位置する。また中期後半の可能性が考

えられるSS－12Jは西寄りの南側に位置している。

遺構の規模は「集石土坑」では、前期のSS－８Jが径約１m程の掘り込みで構成礫も中小のものが主体で、中期前半のSS－１J、SS－６J・９J、SS－16Jは径約1.5mと規模が大きくなり構成礫もSS－８Jと比較すると大きくなる。また中期中葉のSS－10J、SS－13Jになると集石下に土坑を伴うものの坑の規模は小さくなり坑内部に礫がほとんど入らなくなり平面的な「集石址」のようになる。

陥穴は、その形状からⅠ類（長軸が短軸の約10倍以上のもので、所謂早期T-Pitとされるもの。）、Ⅱ類A（Ⅰ類以外で底部に５個以下の小穴があり、それらが長軸壁に平行して並ぶもの。）、Ⅱ類B（Ⅰ類以外で底部に５個以下の小穴があり、その配置が不規則なもの。）、Ⅱ類C（底面の小穴が５個以上のもの。）、Ⅲ類（Ⅰ類以外で底部に小穴がないもの。）に分類し、その分布状況及び主軸方向を第160図に示した。

早期T-PitとされるⅠ類は合計６基検出されているが、その分布は調査区の北部に集中している。その内、主軸が東西方向のSK－35J・SK－913Jの２基は、北西隅に近接して位置する。この２基はその規模や断面形状が酷似しており、主軸方向や検出位置などを含め考えると、同時期の遺構であると推定される。他の４基はいずれも調査区の北東寄りに位置し、SK－273J・SK－274Jの２基は主軸がやや東に傾き一直線上に並んでいる。また、SK－252JとSK－1019Jは、その距離こそ約65mと離れているが、主軸方向はまったく同じである。この４基の遺構の分布を俯瞰すると、その主軸方向は概ね北東方向でいずれも谷に向かって東方向に湾曲し弧を描くライン上に並んでいる様子が看て取れる。このことからも、この４基は、おそらく北の谷に向う所謂「けものみち」上に配置された同時期の陥穴であると考えられる。

次に、Ⅱ類としたものは合計28基検出されているが、その分布状況には、やや偏りが看られる。28基の内半数以上の19基が調査区の北東部（４区）に集中して分布し、残りの９基は南側及び西側に点在しているが、中央部ではまったく検出されていない。これを細分類別に見て行くと、Ⅱ類Aとした遺構は北東部に17基、南・西側に５基が分布する。北東側の17基の主軸方向は大きく見ると、東西方向のものと南北方向のものに２分出来るようであるが、全体的にはその配置に規則性は看取できない。その中でも最北部に位置するSK－1022J・SK－1027J・SK－1024J・SK－1021Jの４基だけは、位置的にも近く、主軸方向も同様で、北の谷の方向に向かって２基づつが並んだ状態で分布している。また、南・西側の５基の内、西側のSK－789J・SK－791J・SK－653Jの３基は、いずれも主軸が東西方向で約50mの間隔を置き並んだ様な状態で配置されている。

Ⅱ類Bとした遺構は３基だけであるが、それらは１基づつがそれぞれ、北西隅、中央やや北寄り、南西隅に分布している。また、Ⅱ類Cとした３基は、いずれも調査区南端に集中して分布し、主軸も概ね同じ南北方向であり、西寄りのSK－651J・SK－650Jの２基は、約15mの距離を置いて東西に並んだ状態で位置している。

Ⅲ類の４基は、いずれも北東部隅に集中し分布しているが、SK－950J以外は主軸が南北方向で北の谷の方向を指している。

以上、分類毎に陥穴の分布状況を見てきたが、全体的にはその分布に偏りがあるものの、配置には顕著な規則性・特殊性は看取できなかった。また、遺構の構築時期については、遺物の出土した遺構が数基あるが、いずれも埋没過程での流れ込みの遺物であり、遺物からの時期判断は出来ない。ただ、遺構の偏った分布は、次項に述べる中期の土器の分布と概ね重なっているようであり、陥穴の構築時期を考える上では興味深く、また、唯一切り合い関係があるSK－950Jが、中期阿玉台期の竪穴住居の柱穴の痕跡ではないかと推定される「小穴群」の一つに切られている事などから考えると、Ⅱ・Ⅲ類の陥穴の時期は中期前

半頃、または、それ以前に比定してもよいのではないだろうか。

土坑の分布状況は、概ね陥穴の分布状況と同様であるが、その他、配列や特徴的な傾向は看取できなかった。また、形状別には円形の土坑が大半を占める中、正円を呈するSK－246J・SK－790J・SK－937Jなどは用途は不明であるが、確認面からの深さも深く形も整っており、特筆すべき遺構と云える。

小穴は、４区での「小穴群」としたもの以外は調査区全域に点在している。その分布は北側に集中する他、西側の南北、南側の東西という順に密集度が低くなり中央部ではほとんど検出されていない。

２）遺 物

①土　器

土器の分類については、小片・細片のものが多いため明確に型式分類できたものが少なかったが、その中でも全体の90%ほどが中期に比定される。その他は、出土点数の多い順に早期、後期、前期、晩期になる。中期に分類したものでは初頭から前半期の小片が過半数を占め、大別できた型式の内訳は阿玉台式が約60%、勝坂式が15%、五領ヶ台式が13%、他27%となる。

土器の分布状況は第207～211図に示したが、全体的には北側に集中し、中央部が少なく、その他はほぼ均一に出土する。

時期別で見ると早期は調査区北側と西側の北寄りに集中し中央から南側の分布はまばらになる。また撚糸文期のものは西側北寄りに多く分布している。

前期は数が少ないが南側に片寄る。

中期は五領ヶ台式がやや北側東寄りに多い分布を示す他は全域に散らばる。阿玉台式も五領ヶ台式に似た分布を示す。また細分類別で観察すると、阿玉台直前式とした雷八類（西村1972）は南西側を除く位置に点在する分布を示す。阿玉台Ⅰａ式は北側に集中し、阿玉台Ⅰｂ式・Ⅱ式は全体に点在する分布を示す。Ⅲ式は南東の位置で出土している。狢沢式は北に集中し西側ではほとんど出土していない。勝坂式は全域に分布を示すが南側に多く見られる。加曽利Ｅ式は南側に集中し、曽利式は北寄りの東側に一部集中する他は南東寄りの位置で出土する。

後期は中央東寄りに少し分布するほかは南側に集まり、北側においては出土していない。

調査区北西において１点出土している晩期の遺物は、安行Ⅲa式のもので、国分寺市内においては遺物の出土及び遺構の検出例はなく初の資料である。近隣の晩期に属する遺跡としては、東村山市の日向遺跡、武蔵村山市の吉祥山遺跡、日野市の南広間地遺跡、落川・一の宮遺跡、狛江市の坄上遺跡、調布市の下布田遺跡等が挙げられる。

②石　器

石器の分布状況は第239～242図に示したが、全体的にはやや北に集中する他は調査区全域に均一な出土を示している。

器種別に観ると、尖頭器は調査区中央から南側で出土している。

石鏃は、平基無茎鏃（Ⅰ類）が南側に出土している。凹基無茎鏃（Ⅱ類）はやや北側に集まるものの全域で出土している。尖基鏃（Ⅳ類）に分類したものが調査区西壁の南よりの位置で出土する他は、凸基有茎鏃（Ⅲ類）・破片（Ⅴ類）は点在する。

二次加工剥片は、小型（Ⅰ類）のものが北から出土し、大型（Ⅱ類）のものはまばらに分布する。

磨製石斧は、資料が少ないためか形態の別無く点在する。

打製石斧は、短冊形（Ⅰ類）が全体に分散しており、撥形（Ⅱ類）は南東に１点出土する以外はまばらな分布で、分銅形（Ⅲ類）は撥形とほぼ逆の分布を示し、特殊形（Ⅳ類）は最北寄りに多い。また１/３以下の小片（Ⅴ類）は全体に分散して出土する。

礫器は小型（Ⅰ類）のものが調査区西側の北寄りに集まり、大型（Ⅱ類）のものは中央より北側に多く分布する。

スタンプ形石器は偏平礫を素材にしているもの（Ⅱ類）が全域において出土しているのに対して、棒状礫を素材とするもの（Ⅰ類）は北側において出土していない。敲石は北に集まる他は全体に点在する。

磨石は形態の別なく全体に分散する。

石皿は、最北寄り・中央の東西・最南で出土している。

凹石は、中央西側・北西・最北で出土している。

その他の石器に分類したものは、調査区全体に分散する分布を示す。

出土点数が多い石器で、器種別の細分類の割合を見てみると、石鏃では凹基無茎鏃（Ⅱ類）に分類したものが全体の87%を占める。打製石斧では短冊形（Ⅰ類）に分類したものが46%を占め、分銅形（Ⅲ類）・特殊形（Ⅳ類）が21%、撥形（Ⅱ類）が12%の順の割合になる。スタンプ形石器では扁平礫（Ⅱ類）のものが81%で、棒状礫（Ⅰ類）が19%である。磨石では丸形礫（Ⅰ類）が65%を占め、特殊磨石（Ⅲ類）の18%、扁平礫（Ⅱ類）15%の順になる。

石質は、比較的多く出土している石器でみると、打製石斧では、ホルンフェルス（Ho）が40%、硬質砂岩（HSs）が30%、砂岩（Ss）が18%等である。スタンプ形石器では、硬質砂岩（HSs）が58%、閃緑岩（Dio）が38%等である。磨石では、閃緑岩（Dio）が43%、斑糲岩（Gb）が24%、硬質砂岩（HSs）・砂岩（Ss）が８%等である。

3）小 結

調査区北側は、旧鉄道学園のグランド造成工事によりⅢ層上面まで大きく削平されていた。造成による排土は、ブルドーザー等によりグランドの周囲に集められ、グランドを取り巻く土手が作られていた。この土手の中からは多量の遺物が出土しており一括遺物として取り上げたが、この多量の一括遺物とグランド部分で検出された遺構数とを比較して考えると、住居跡を含む多くの遺構が破壊されたと思われる。

以上のことから、結果として検出された遺構数は少なかったものの、「日影山遺跡」には、恋ヶ窪南遺跡とほぼ同時期に同じ規模またはそれに準ずる様な「小集落」が存在していたことが十分に想定できる。

（板野・小林）

引用・参考文献

『国分寺市史』上巻　国分寺市史編さん委員会　1986

『武蔵国分寺地区北西地区の遺跡』平成５年度発掘調査概報Ⅰ　西国分寺地区遺跡調査会　1994

3．歴史時代

本調査区は武蔵国分僧寺跡の北西210m ほどに位置しているため、調査当初は国分寺跡に関連した遺構、特に古代（奈良・平安時代）を主体とした遺構群の検出が期待された。しかし、当初の予測に反し調査結果からは該期の遺構はあまり検出されなかった。特に住居跡が１軒も検出されなかったのは予想外であった。ただ、このことは別の意味で『武蔵国分寺跡』に関わる集落群の北限を把握するうえで新たな資料を提供し得たものと思われる。このように古代の遺構は少なかったものの、その中にあって調査区東端で検出された SF－１（推定東山道武蔵路）は特筆すべき存在であり、調査区を南北に縦断して約350m にわたって検出された。また、古代に比して中・近世とした遺構の数は総じて多かったが、ただ、ここでも住居跡等の明瞭に生活の痕跡が窺える様な遺構はほとんど検出されなかった。また近代以降では、数は少ないが第二次大戦中のものと思われる遺構が検出された。

以下に、各時代毎に遺構、遺物の概要をまとめた。但し、古代の道路状遺構については別稿（VI－4.）とした。

１）古代（奈良・平安時代）

① 遺 構

調査区内は広範囲にわたり撹乱により削平されていたこともあるが、検出遺構数は前述のように調査面積の割りには総体的に少ない。古代遺構として検出されたものは、道路状遺構を除けば溝跡、土坑、特殊遺構及び小穴である。

溝跡は古代と認定し得るものは３条のみであるが、上部を削平されている SD－37を別にすれば規模は大きい。その分布状況（第314図）を概観すると SD－５は調査区中央付近を総延長213m にわたって東西に横断しており、両端は調査区外へ延びている。そして SD－33は SD－５東端から30m 程北の東壁付近から北へ向かって総延長120m にわたって南北に走行しており、SD－37はその延長線上に位置している。この様な配置状況および規模、形状の類似性からして、これらの溝跡は同一遺構である可能性が考えられる。調査結果からは確証を得ることは出来なかったが、もし同一遺構であるとすれば、所謂区画溝である可能性が高いと思われる。区画の規模は分からないが、これら溝跡の配置状態からは南東隅を画している状況が看取される。また、SD－33は、北東の恋ヶ窪谷の南斜面に入ったノッチ部の西斜面に沿うように湾曲して構築されており、区画溝と云う点から考えても非常に興味深く、特に、本調査区北西側の現附府中街道を挟んで西側には、中世（13世紀末～15世紀末頃）とされる恋ヶ窪廃寺が位置しており、時期的には若干の差異があるため推測の域を出ないが、この寺と何らかの関連性（寺地区画溝等）があったかも知れない。この点については、平成11年度以降に調査が予定されている本調査区の北側地区での調査成果に期待したい。

土坑は62基検出された（現場調査時に特殊遺構としていたものも、整理調査段階では土坑に含めて分類した）が、形状による分類を基に全体的な分布状況を概観すれば、遺構は主に調査区東側、特に北東部に偏在している。この傾向は円形土坑において特に顕著である。武蔵国分寺跡との関連性を考えれば、土坑等はむしろ調査区の南側に集中すると思われたが、調査結果では当初の予測に反し方形土坑がまばらに散在するのみである。このことは、当地区で検出された土坑と武蔵国分寺跡との関連性が希薄であることを物語っていると思われる。そこで、改めて当地区における土坑の分布状況を考察すると、調査区東壁に

沿って検出されたSF－１（推定東山道武蔵路）との関連性が考えられる。大胆な推測の域を出ないが、北東部には同道路跡４時期目と目される切り通し状の道路遺構が検出されており、土坑の北東部への偏在もこれに関連してのものであったかも知れない。特に同遺構北肩部分に検出されたSX－13は、位置関係からしても覆土土質の類似性からしても当該道路遺構との関連性が容易に想像できる。なお、SX－13は底部近くから10世紀中葉の須恵器の坏と高台椀が出土しており、SF－１（４時期目の切り通し状道路遺構）の構築時期ないし使用時期を考察するうえで大きな意義のある遺構である。

小穴は、ほぼ土坑の分布状況に添って検出されたが、明確に古代（奈良平安時代）と認定しうるものは少なかった。形状も不整形なものが多く、円形ないし方形を呈するものは少ない。また、配置等にも規則性は看取出来なかった。

② 遺 物

遺構数に比例して遺物も総数は少ない。遺構に伴うものは僅かで、ほとんどが遺構外出土である。また遺構に伴っている場合でも、埋没時に混入したと思われるものが多く、明確に該期の遺構に付属すると認定できるものは少なかった。更に遺構内出土であっても完形ないしそれに近いものは僅かで、多くは破片または小片である。

遺構毎に主な出土遺物をみると、まず特殊遺構としたSX－13からは、先に述べたように10世紀中葉の須恵器の坏と高台椀がほぼ完形に近い状態で出土した。また性格不明の環状鉄製品と須恵器・甕の破片も出土している。溝跡ではSD－５から、須恵器・甕の破片および男瓦、女瓦の破片が出土している。SD－33からは、これも破片ではあるが須恵器の坏や甕および土師質土器等が出土し、瓦類では唐草模様の施された宇瓦と女瓦の破片が出土した。これらの遺物は溝跡からの出土と云うこともあり、遺構に付帯するものとは考えずらいが時期認定をするうえでの意義は大きい。土坑ではSK－214から刀子が、SK－76からは女瓦の破片が出土している。更に小穴であるP－14からは土師器や須恵器の甕の破片が、またP－15からは女瓦の破片が出土した。

遺構外出土遺物は破片ないし小片が大半を占めている。このうち主なものを種別毎にみると、土器類では、須恵器と土師器の坏や甕の破片が多数出土している。また土師器の灯明皿も数点出土した。瓦類では鐙瓦が２点、男瓦、女瓦の破片は多数出土した。古銭は２点出土し、内１点は北宋時代の渡来銭である皇宋通宝であり、もう１点は文字不鮮明なため種別不明だが、下の文字は「元」と読めるのでこれも渡来銭であろう。

２）中世以降

① 遺 構

調査区内で検出された中世・近世の遺構は、溝跡、土坑、特殊遺構、集石および小穴である。このうち溝跡は26条検出された。古代溝跡に比較すると、数量的には多いが規模は総じて小さい。形状は直線状またはＬ字状を呈するものが多く、おもに東西方向に走行している。分布状況を鳥瞰すれば、配置にいくつかの纏まりが認められる。北西部分では７条の溝跡が検出され、内５条は間隔こそ一定していないが、ほぼ平行して東西に走行している。北東部では５条検出されたが、内２条は同じように東西に併走している。また、これらを縦断し南北に走行する２条は互いに延長線上に位置しており同一溝の可能性が高い。中央部分では８条纏まって検出された。この内３条はＬ字状で、直線状の溝跡と相俟って何らかの区画

である気配が窺える。更に南側では４条検出されが、２条ずつ対になって併走している。この様に遺構間に何らかの関連性が窺えるものが多いにも拘わらず、調査結果からはこれら溝跡の関係および機能、性格を確認することは出来なかった。

土坑は総数368基検出された。規模・形状はさまざまだが平面形状を基にした分類からすれば、円形土坑よりも方形土坑の方が多い。また方形土坑の中でも長方形の土坑が多く検出された。分布状況を概観すれば、植栽痕と思われる不整形土坑が調査区南側に集中している他は、ほぼ全域に満遍なく分布している。

特殊遺構は８基検出されたが、そのうち１基は調査区南壁際で検出されたSX－73で、規模が大きい。張り出し部が北側に設けられた所謂柄鏡型を呈しており、主体部の径は約８m 程ある。また検出面からの深さも２m に近い。検出当初は撹乱かと思い掘削したが、次第に全容が明らかになるにつれ、かなり綿密に設計された遺構であることが判明した。すなわち、張り出し部は階段状になっており、また主体部底面中央部分は径約3.5m の半円状に盛り上げられ、その上面と周辺部に径40cm 程の小穴が合計16基構築されている。そして大半の小穴の中には支脚等の根固めのためと思われるが、自然礫が多数充填されていた。右のような構造上の特徴およびその規模、形状に鑑みれば、本遺構は第二次大戦中の高射砲設置跡ではないかとの意見もあったので、防衛研究所図書館に問い合わせてみたところ、高射砲の配置などに関する資料は残っていないとのことであり、確認する事はできなかった。また、既に報告されている『羽根沢遺跡Ⅱ』（三鷹市教育委員会、1996年）掲載の高射砲設置跡と照合してみても本遺構は土台がコンクリート製ではないため符合しない。未完成の状態で廃棄されたとも考えられるが推測の域を出ず、本遺構の性格については今後の検討課題としたい。また、調査区北壁近くに検出されたSX－86は特異な形態の遺構で本調査区内では類例がない。遺物も上層から礫が多数出土した他は中世陶器や須恵器の甕の破片が数点出土したのみで、特に遺構の性格等を認定し得るものではなかった。ただ、平成８年に府中市の宮町１丁目マンション地区で発掘された、人骨を埋納した常滑の大甕を伴った土坑墓の掘り方部分にSX－86の規模、形状は酷似している。上層に礫が多数出土した状況も似ていることを考えると、同遺構もかかる性格を有したものであったかも知れない。

集石は２基検出されたのみで、内１基は集石下に土坑を伴っていた。別の１基は先述のSX－13検出時にそのプラン上に検出されたが、同遺構との関連性はないであろう。

小穴は調査区内に満遍なく多数検出されたが、不整形なものが多かった。また配置や分布状況にも規則性等は看取されなかった。

② 遺 物

出土遺物は全体的に少ない。特に遺構に伴うものは僅かで、遺構外出土がほとんどである。また、遺物の中でも完形品は少なく、破片ないし小片が大半を占めている。

主なものを遺構毎にみると、土坑ではSK－１から11枚の寛永通宝と切羽１枚が出土しており、同土坑が墓であったことが窺える。また既述のSX－86からは須恵器や陶器等の破片が出土している。溝跡ではSD－20から磁器の底部破片が、SD－６とSD－15からは砥石が、また、SD－22からは寛永通宝が１枚出土した。遺構外からは煙管の吸い口部分や古銭（寛永通宝）等が出土している。

また、表採ではあるが、調査区北西部の西壁際から角柱型をした硬砂岩製の石塔が発見された。石塔正面には地蔵菩薩が祀られているが、側面には道標銘も併記されているので、道標としての役割も担っていたものである。

3）近代以降

① 遺 構

第二次大戦中のものと思われる遺構が２基検出された。この２基は調査区中央部西寄りに検出され、位置的に近接している。形状は共にやや楕円がかった長方形で、規模もほとんど近似している。ただ主軸方向は、東側に検出されたSX－84がほぼ東西方向を指向するのに対して、西側のSX－85は南北方向を指向している。また底部の構造もSX－84はほぼ平坦に構築されているのに対し、SX－85には土坑状の窪みが設けられている。またSX－85の南面、北面は階段状になっている。これらの遺構は、出土遺物から判断して、大戦中に構築、使用されていたであろうことは、ほぼ間違いないと思われるが詳細な機能、性格までは確認することが出来なかった。

② 遺 物

SX－85からは大砲の破片ではないかと思われる鉄片が数点、SX－84からは薬莢が１点出土した。この薬莢を防衛研究所図書館で鑑定したところ、12.7ミリ機銃弾の薬莢であることが判明したが、この型は日米両軍とも使用していたため、いずれのものかは断言できないとのことであった。ただ日本軍はもう少し短い型の方が一般的であったとのこと、及び、戦争末期の国分寺界隈では米軍機は主に輸送路を断つため線路（電車）を攻撃していたとのことであり、当調査区が中央線のすぐ南側に位置していることも合せて考えると米軍使用のものである可能性が高いと思われる。

（伊藤）

参考文献

『武蔵国府関連遺跡「府中宮町１丁目マンション地区」で見つかった墓域を持つ甕棺墓の発掘調査について』府中市遺跡調査会　平成９年

『羽根沢台遺跡Ⅱ』三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会　1996年

４．道路状遺構について

１）はじめに

近年、全国各地で大規模な古代道路跡の発掘事例報告(※1)が相次いでいるが、当該地区においても古代の官道「東山道武蔵路」と推定される道路状遺構（SF－１）が、隣接する都埋文調査区と合せて約350mの距離で検出されている。遺構の中央部は一部撹乱により削平されてはいるが、その他の部分の遺存状態は極めて良好であった事から、「特徴的な側溝」「明瞭に検出された硬化面」、遺構の切り合いによる「４時期変遷の道路跡」など多くの新知見が得られている。しかし、その反面、各時期の道路跡の「構築年代」や「使用年代」など不明な点も多く、その他にも「道幅決定の根拠」や「硬化面の成因」「側溝の性格」などと云った多くの検討課題も残されている。

また、本地区では、SF－１の他にも、SF－１同様調査区の東端に位置するSF－３からSF－６（SF－２は欠番）までの計４条の古代（奈良平安時代）の道路遺構が検出されている。このうち、SF－６以外はすべて南北方向の道路であり、特にSF－１のすぐ西脇を併走するSF－３は主軸の傾きがSF－１とほぼ同じである事、また、SF－４は主軸方向こそ違うがSF－１の４時期目とした道路跡での硬化面と酷似する硬化面が検出されている事などから、これらの道路状遺構は、SF－１と何らかの関連があるのではないかと考えられる。しかし、これらの遺構についても「使用年代」「SF－１との新旧」「道幅決定の根拠」などと云った検討課題は多い。

以下に、それら「不明点」や「検討課題」について整理し、本地区で検出されたSF－１をはじめとする計５状の道路状遺構の「位置づけ」を行っておきたい。

２）構築年代・使用年代

遺構の時期や年代を同定する方法には、その遺構の出土遺物から判断する方法（遺物編年による年代）や、実年代が同定された遺構との切り合いによる新旧から相対的に年代を判断する方法、年代の幅は大きくなるが、遺構の覆土の比較（基本層序や他の遺構との比較）や覆土中の火山灰の分析により年代を判断する方法などが考えられる。実際には、上記の方法一つ一つが独立する訳ではなく、これらすべての方法を考慮に入れながら遺構の構築年代を判断するのであるが、しかし、これらの方法を道路状遺構（特に本地区での道路状遺構）に当てはめてみた場合、若干の問題点や疑問点が残る。

まず、出土遺物について云えば、道路状遺構では道路という遺構の性格からか遺物の出土が極めて少ないと云う点（基本的に道路には落とし物以外遺物が伴わないのが普通）や、それに加え、たとえ遺物が出土しても、その遺構（路面）がその遺物より新しいと云う事はいえるが、果たして構築年代や使用年代の根拠となり得るかどうかと云う点である。次に、遺構の切り合いでは、これも遺構の性格上と云う以外にないが、道路が完全に廃絶してしまわない限り、道路上に竪穴住居や墓坑等の構築物を造らないであろうから、基本的に他の遺構との切り合い関係が非常に少ないという点である。

しかし、その反面、道路状遺構の年代判断には他遺構と違った好都合な点もある。それは、遺構の規模が大きいと云う点である。特に本地区でのSF－１のような古代律令期の「官道」とされる道路跡などは、極論をいえば「奈良の都」までの道路が一つの大規模な遺構といえる。この事は、年代判断をする上で一つの地域の調査結果だけで判断しなくても、その道路跡が同じ遺構だと云う判断がつけば他地域の調査結果がそのまま年代判断の根拠となり得ると云う事である。幸いにして、本地区で検出された「推定東山道

武蔵路」（SF－１）は、その両側溝が極めて特徴的である事や道幅が12m の直線道路である事などから、同一遺構の判断が容易に行えたため、他地域での調査結果が年代判断の拠り所として大いに役立つ事となった。このことは、現時点での多くの不明点も今後新たに調査される他地域での結果次第では、更に明確になって行く可能性が大きいという事である。

ともあれ、以上のような点を考慮に入れながら本地区でのそれぞれの道路状遺構についての年代決定の拠り所をまとめると、次の様な点が挙げられる。

SF－１〈１時期目〉

① 両側溝からの出土遺物は無く遺物による年代判断はできないが、２時期目以降の道路跡や他の遺構（土坑等）との切り合いからしても、本地区での該期の遺構としては最も古い遺構である。

② 両側溝の覆土（第308図の土層説明12とした黒色土層）が、国分僧寺Ⅰ期（創建期・８世紀中頃～９世紀中頃）の遺構や国分尼寺金堂版築土で認められる黒色土（粒子が粗く締まりが乏しいボソボソした層）と酷似している。(※2)

③ 国分寺域（国分寺市遺跡調査会）で調査された SF－１「推定東山道武蔵路」（本地区での〈１時期目〉に対応する）は、これに先行する国分寺関連の建物等の遺構が無く、二寺の伽藍配置は SF－１を中心に展開されている事や、東側溝が寺院地区画延長溝（Ⅱ期）と交差する南北２地点においてこの溝に切られている事などから、SF－１は、国分寺創建以前に存在し、廃絶（側溝の埋没）は国分寺Ⅱ期（承和十二年（845）を上限とする９世紀代）には確実に完了したとされている。(※3)

④ 最近、国分寺市遺跡調査会が実施した調査の結果、武蔵国分寺南限区画溝の延長小溝が「推定東山道」の中央硬化土及び西側溝を切って尼寺伽藍地南東隅へと延びていることが明らかになっている。(※4)

⑤ 武蔵国分寺関連遺跡で調査された「推定東山道武蔵路」では、西側溝及び溝上面の硬化面（本地区での〈２時期目〉に対応する）が、出土遺物から10世紀後半に位置づけられる土坑に切られていることから、西側溝及び上面の硬化面の道路は10世紀後半には完全にその機能を失っていたと想定している。(※5)

⑥ 国府域（府中市遺跡調査会）で調査された「推定東山道武蔵路」では、側溝が８世紀中頃の２軒の竪穴住居跡に切られている事から、側溝は８世紀中頃までには埋まっていたと考えられている。また、路面については路面部分の中央付近に一番迫る竪穴住居の年代が10世紀後半以降であることから、路面中央部の道路としての機能は10世紀前半頃までは残っていたと考えられている。(※6)

⑦ 埼玉県所沢市の「東の上遺跡」での調査所見では、「推定東山道武蔵路」の構築時期は出土遺物から７世紀第３四半期、側溝の廃絶は側溝を切る竪穴住居跡から８世紀中頃とされている。(※7)

SF－１〈２時期目〉

① １時期目の側溝が埋没した後の硬化面であり、西側溝上の硬化面は３時期目の側溝に切られている。

② 上記④の様に、武蔵国分寺関連遺跡では西側溝上面の硬化面（２時期目）は10世紀後半には道路としての機能が失われているとしている。(※8)

③ 火山灰分析（Ⅴ－5.）の結果では、この時期の側溝上硬化面の層から「浅間Ｂ軽石」（1108年）が検出されている。ただ、この結果については、側溝上の硬化層が自然堆積によるものではなく人為的に投げ込まれたローム土である事などを考慮に入れ、今後、多くの類例などを比較し検討する必要が

ある。

SF－1〈3時期目〉

① 1時期目同様、側溝からの出土遺物は無く、遺物による年代判定はできないが、東側溝が4時期目の道路に壊されている。

② 国分寺域での本遺構（3時期目）に対応する道路の築造は、遺構の重複関係から国分寺IIIa 期（10世紀代）とみられている。(※9)

SF－1〈4時期目〉

① 路面（硬化面）覆土から、転石化していない10世紀初頭の須恵器の坏（南多摩窯Ｇ5古）と灰釉陶器の碗（静岡系灰釉折戸53号窯式）が出土している。

② 土層断面の観察からすると本遺構と同時期、またはそれほど時期差のない特殊遺構（SX－13）が北側路肩に接する位置で検出されており、この遺構の底面に近い位置から10世紀中葉の須恵器の坏と須恵器酸化焔焼成の碗（いずれも南多摩窯Ｇ5）が出土している。

③ 本遺構の北側に隣接する都埋文の平成10年度の調査では同遺構の延長線が検出されており、その結果、この遺構の路面を11世紀中頃の灰釉陶器の碗と土師質土器の坏が出土した土坑（人為的な埋め戻しが認められる）が壊して構築されていることが確認されている。(※10)

④ 本遺構は、覆土や出土遺物、遺構の切り合いから平安末頃に構築されたと推定される溝跡（SD－33）に壊されている。また、この溝跡は②で述べた特殊遺構（SX－13）をも壊している。

SF－3

① 出土遺物は、主に須恵器の坏・土師器の甕・瓦類の破片である。

② 本遺構の路面中央部は、覆土（黒灰褐色土）から中世以降とした土坑（SX－14）に壊されている。

③ SF－1のすぐ西を併走し、主軸の傾きも同じである。

④ 覆土は暗褐色土ブロックを多く含む黒褐色土が主体であり、SF－4・5の覆土と類似する。

SF－4

① 覆土から須恵器の坏の破片が出土している。

② 他の遺構との切り合いは無いが、覆土はSF－3・5と類似する。

③ 本遺構で検出された硬化面は、SF－1〈4時期目〉で検出された蛇行する硬化面と規模や検出状況、硬化層の土質等が類似している。

SF－5

① 覆土から須恵器・土師器の坏の破片が出土している。

② 覆土はSF－3・4と類似する。

③ 本遺構は、SF－4の東脇を併走する点やその規模、検出状況等が類似する点から、SF－4と対をなす道路跡と推定される。

SF－6

① 本遺構は、SF－1〈4時期目〉の道路跡が埋没過程の覆土途中で検出されている。

② 硬化層の土質は黒褐色土が主体である。

以上の点から、それぞれの構築年代・使用年代を以下にまとめると、

SF－1〈1時期目〉は、⑦から7世紀第3四半期に築造され、③～⑥から8世紀中頃には側溝は埋没

し、**〈２時期目〉**は、②から10世紀中頃には道路の機能を失い、**〈３時期目〉**の築造は、②から10世紀代（国分寺Ⅲa 期）とみられる。また、**〈４時期目〉**は、③から11世紀中頃には完全に廃絶していたものと思われる。

SF－３・４・５は、①～③から考えても SF－１の各時期の道路跡と同時に使用されていたとは考えずらく、また、〈４時期目〉の道路廃絶後もその周辺には古代に比定される遺構もある事から、〈４時期目〉廃絶後の南北の道路と推定されるが、その路線を考えると SF－３～５までは同じ道路の可能性がある。

SF－６については、SF－１〈４時期目〉よりは完全に新しい事は間違いないが、使用時期については不明である。SF－４・５との位置関係から考えて、本稿では、SF－４・５の枝道的な道路と考えたい。

３）硬化面の成因

本地区で硬化面としたものは、竪穴住居の床面と同等（またはそれ以上）に硬く締まった面で、SF－１の〈２時期目〉と〈４時期目〉、SF－４、SF－６の各遺構から検出されている。これらの硬化面は、その規模や検出状況等から、以下の様に概ね３つのタイプに分類できる。

① 幅30～50cm 程で直線的に続く硬化面。
② 幅30cm 前後で蛇行しながら帯状に続く硬化面。
③ 幅２m 前後の所謂波板状凹凸を呈する硬化面。

これら、硬化面の成因については、版築などの人為的なものとする考えや、人々の往来による自然発生的なものとする考えなどがあり、特に③の波板状硬化面の凹凸については、研究者の間でも路床を作るための基礎工事の痕跡とする考え(※11)や、修羅などで重量物を運搬したときに路面に残された枕木やコロの圧痕とする考え(※12)などがあり、意見の分かれるところである。以下に、本地区での各タイプの硬化面について、検出状況などからその成因を考えていきたい。

①のタイプの硬化面は、SF－１の〈２時期目〉の道路跡から検出されたもので〈１時期目〉の両側溝が埋没した後に黄褐色粘質土（ローム層）を埋め込み、道路として使用したものと考えられる。

硬化した層の厚みは10～15cm を測り、上面が硬化面となる。この硬化面は、場所によっては溝の両肩部（検出面）より中央部が皿状に窪んでいる部分もあるが、多くの部分は溝肩よりやや高い位置で検出されており、特に東側溝の中央部付近では溝肩を覆うような状態で外側に広がっている個所も見受けられる。

このような状況は、武蔵国分寺関連遺跡で調査された「推定東山道跡」でも報告されており、ここでは、西側溝の上面を覆う形で２枚の硬化面が検出されている。１枚目の硬化面は、幅約３m の硬化面で溝の外側に広がっており、更にその下層からは SX－３とした帯状を呈する硬化面が、側溝上及び両脇で計３条検出されている。(※13)また、側溝埋没後に人為的に埋め込まれた黄褐色粘質土（ローム層）の硬化面については、都教委文化課によって平成10年度に実施された「道路遺構等詳細分布調査」でも、本地区から北へ約2.2㎞に位置する小平市上水本町二丁目で検出された推定東山道の側溝からも同様の硬化面が明瞭に検出されている(※14)。このような側溝上を道路として使用する状況は、「武蔵路」では特に顕著に検出されており、大変興味深いことといえる。

以上のことから考えると、この道路（硬化面）は当初、側溝の部分が窪んでいたため通行するのに不都

合であったことから、ローム土を人為的に埋め込んで整備したが、その後は、人々の往来により次第に踏み固められ、硬さを増しながら側溝の外側へ広がり、路幅も大きくなっていたものと考えられる。

②のタイプの硬化面は、４時期目の道路の中央路面から検出された蛇行しながら切り通し状遺構に続いていく２条の硬化面と、SF－４の路面で検出された蛇行する硬化面である。

これらの硬化面（硬化した層）の厚みは、共に10～15cm 程で中央が皿状にやや窪んでいる。硬化面の成因については、現場での所見や、硬化面が蛇行して続いていることなどから人々が往来した結果、踏み跡として硬化したとものと考えられる。このような硬化面の状況は、現代の公園などでも大勢の人々が近道するために芝生の中を斜めに歩いて行った結果、その部分の芝生が剥げ、蛇行する小道となっている状況が見られる事からも理解できる。

③のタイプの硬化面は、４時期目の切り通し状遺構の傾斜が始まった所から遺構の底部にかけて検出されたもので、幅約70cm 程の間隔で波板状の硬化面が続いており、場所によっては円形の硬化面が連続している部分もあった。この波板状の硬化面の成因については前述したように研究者の中でも意見の別れるところであるが、本地区では遺構が全面保存される事になったため、硬化面以下の調査は行っておらず、成因を探るだけの資料は少ない。ただ、この硬化面が②の蛇行する硬化面の延長線上に続いて検出されていることなどを考えると、本地区でのこの硬化面の成因は、自然発生的なものと考えておく。

４）道路幅決定の根拠

道路状遺構の道幅を決定する根拠は、遺跡の立地条件や遺構の種類、検出状況などによって意見の別れるところであるが、本地区で検出された各々の道路跡の道幅は、どの位置を計測して決めればいいのであろうか。

まず、SF－１〈１時期目〉や〈３時期目〉の道路跡は、道の左右に「道の区画」を意味する両側溝が掘られていることから、この側溝の心々距離の値を道路幅とすることに異論はないであろう。それぞれの遺構の心々距離は、〈１時期目〉が11.5～12.5m、〈３時期目〉が8.5～9.5m なので、道路幅もこの値の平均値をとって、〈１時期目〉が約12m の道幅、〈３時期目〉が約９m の道幅と云うことになる。

次に、SF－３や SF－４・５のような皿状に窪んだ道路跡や SF－１〈４時期目〉のような切り通し状の道路跡では、遺構の肩から肩までの長さ（上面幅）を道幅とする場合と、皿状に窪んだ底部の幅（所謂下場の幅）を道幅とする場合が考えられる。しかし、前者の場合は、SF－３のように遺構確認面にレベル差があり、上面幅が一定しない場合、単純に上面幅の最大値を道幅と考えればいいのであろうか。また、SF－１〈４時期目〉の切り通し状遺構のような道路跡の場合は、法面の角度にもよるが、上面幅は遺構の深さが深ければ深いほど際限なく広がってしまう事など、皿状に窪んだ道路跡や切り通し状の道路跡では上面幅の最大値を道幅にするにはやや無理が生じてしまう。この事から、このような遺構の道幅は、上面幅ではなく、下面（底面）の幅を道幅とするのが妥当であると思われる。このため、各遺構の道幅は底面幅の値、すなわち SF－３は約３m、、SF－４・５は1.5m、SF－１〈４時期目〉は約５m 前後である。

では、SF－１〈２時期目〉や SF－６のような硬化面だけの道路跡はどうであろうか。これらの道路跡の場合は道幅決定の根拠が硬化面の幅以外にないが、ただ、この幅を即、道路幅とするのには多少の問題点が残る。それは、SF－１〈２時期目〉で検出された硬化面は、場所によっては側溝の上面を覆うように

外側に広がっている部分もあることから、本来はもう少し幅広の硬化面であったものが、後の〈３・４時期目〉の道路によって削平され、結果的に側溝上の周りよりやや窪んだ部分の硬化面のみが残っていると考えられる点である。この点は、この硬化面に対応する他地域での検出状況などを検討する必要があろう。しかし、本地区では、この残存した硬化面の幅以外に道幅決定の根拠が無いことから、ここでは、とりあえずSF－１〈２時期目〉が約１ｍの道幅、SF－６が約0.3mの道幅としておきたい。

５）側溝の持つ意味・性格

本地区では、SF－１〈１時期目〉の両側溝（SD－31・32）と〈３時期目〉の両側溝（SD－29・30）の計４条の側溝がが検出されている。これらの側溝は各時期毎にそれぞれが形態の上で異なった特徴を持っていた。それらをまとめると次の様になる。

〈１時期目〉の両側溝

① 心々距離が約12mで、左右とも大きく見てほぼ平行な状態で一直線に掘られている。

② 側溝は、溝といっても繋がっているのではなく、途中所々分断されている部分もあり、長土坑が連続しているような状態である。

③ 溝幅や深さも一定ではなく、底面には大小の段差がある。

④ 壁面や肩の部分の崩れがほとんど認められない事やオーバーハングしている部分も崩れずそのままの状態であった事、覆土の堆積状態等から考えると、側溝は比較的短期間で埋没したと思われ、その後も掘り返した痕跡が無く、底部には幅15cm程の工具痕が明瞭に残っていた。

〈３時期目〉の両側溝

① 心々距離は約９ｍ前後で、〈１時期目〉の道路跡の西側部分を南の都埋文の調査区から本調査区の中央部分までは、ほぼ平行な状態で一直線に掘られている。

② 北側中央部分付近からは徐々に東寄りに逸れて行き、西側溝は以北では途切れ、東側溝は〈１時期目〉の東側溝にぶつかった所から数メートルは平行に掘られ、〈４時期目〉の遺構に切られるがそれ以北では検出されていない。

③ 〈１時期目〉の側溝とは違い、幅は50cm、深さ30cm前後とほぼ一定し、断面形状は箱型を呈し、底面は若干勾配があるもののほぼ平坦な状態である。

〈１時期目〉の①の点については、最近の全国各地での発掘事例をみても、「東山道武蔵路」の特徴と云うより、古代の「官道」（七道）の特徴といえる。「都」までを最短距離で結んだ直線道路網は、古代律令体制における国家権力の象徴とも云うべき遺構であろう。

②で述べた側溝の状況は、当調査会参与早川泉氏が「土坑連結式掘削工法」(※15)と呼称しており、こういった工法を持つ道路側溝は、下野国で調査された東山道で１件の事例があるだけだが、武蔵国では道路側溝以外でも多くの事例があり、武蔵国の、特に「東山道武蔵路」を特徴づける工法の一つといえるようである。早川氏は『古代交通研究』に発表した論文(※16)の中で、多数の調査事例を検討した上で、この工法が「初期東山道の側溝のあり方を示している可能性が強い」とし、「これらの工法が限られた年代に現れる特殊な工法であるのかは、現時点では明らかにされていない」が「今後の追及によりこの工法の位置づけが明らかになれば、この方面からも武蔵路の時期決定にせまることが可能になる。」と述べ、この工

法のもつ意味（地域性や時代性）に注目している。

③の点については、側溝を溝という観点からでなく、前述した「土坑連結式掘削工法」の土坑一つ一つが最小単位で、その単位毎に幅や深さが違っていると考えれば理解できる。一単位の土坑の長軸の長さは、底部に残された段差などを頼りに区分すると、最大11.0m、最小4.0m、平均7.0m 前後のようである。では、この土坑一つ一つの単位は、何を意味するのであろうか。これについては、不明な点も多いが、一単位は溝を掘る「人工」一人の一日の掘削量ではないか、との意見も聞かれる。そこで、そうした意見を前提に、一単位の掘削土量を計算してみると、西側溝では（全ての土坑ではないが）、長7.0m×幅0.7m×深0.61m　3.0m³、長5.5m×幅0.9m×深0.66m　3.3m³、長8.2m×幅0.65m×深0.51m　2.7m³、長9.6m×幅0.7m×深0.67m　4.5m³、長7.6m×幅0.55m×深0.50m　2.1m³、長4.0m×幅0.6m×深0.60m　1.6m³、東側溝では、長6.0m×幅0.8m×深0.58m　2.8m³、長6.5m×幅1.0m×深0.58m　3.8m³、長4.0m×幅1.1m×深0.58m　2.6m³、長5.5m×幅0.9m×深0.58m　2.9m³、長7.4m×幅0.9m×深0.57m　3.8m³、長6.6m×幅0.9m×深0.66m　3.9m³、長11.0m×幅0.65m×深0.69m　4.9m³、等といった数値になり、最大では4.9m³、最小では1.6m³、平均3.2m³である。この数値は、現在の土木工事での「人工」一日の掘削土量とされる４～５m³(※16)と比較してみても、掘削工具の違いなどを考慮に入れれば、程遠い数値ではなく、一単位が「人工」一人の一日の掘削量とする意見もまんざら見当はずれの意見とは言えないのかもしれない。このことから考えると、当時の掘削工事は、ある一定の数の「人工」が一定の間隔を置いて縦方向に並び、いっせいに掘り進めていき、一日の仕事の最後の段階で前後の溝をつなげていくと云う工法で工事したのかもしれない。土坑の大きさの違いは「人工」の個人差と考え、また、溝が分断されている部分があるのは、個人差があるがために溝をつなげる作業が一日の終わりに間に合わなかったと考えてみてはどうだろう。

以上のような事から〈１時期目〉の両側溝のもつ意味について考えると、通常、道路の側溝は路面に溜まった水の排水のためと考えられるが、「土坑連結式掘削工法」で掘られた側溝にはこの機能はまったく無いことから、側溝の持つ意味は、排水のための溝というより、むしろ、道路を区画するためだけの溝としての性格が強いと思われる。このことは、④で述べた点についても、排水を目的としていないので、溝が短期間で埋没してもその後、補修工事をする必要が無かったと考えれば理解できる。

〈３時期目〉の側溝については、①から考えると、「官道」として新たに補修された可能性か高いと思われる。②の点については不明であるが、ただ、その後の〈４時期目〉の道路も更に東に逸れていく事を考えると、何か地形的な条件（１時期目の道路が北の谷を下るのに急勾配過ぎたとか）が重なったであろうことが想像される。

６）まとめ

以上、本地区で検出された道路状遺構についての不明点や検討課題ついて述べてきたが、以下にそれぞれの遺構の「位置づけ」をまとめておく。

SF－１〈１時期目〉

構築時の古代の官道「東山道武蔵路」と推定される心々距離12m の東西両側溝を伴う直線道路で、構築時期は７世紀第４四半期、側溝の埋没は８世紀中頃である。この側溝は、「道路の区画」のためだけに

に〈１時期目〉の側溝の特徴である「土坑連結式掘削工法」で構築されており、比較的短期間で埋没している。

SF－１〈２時期目〉

〈１時期目〉の側溝埋没後に使用された幅約１m 前後の道路であるが、硬化面が側溝の外側に広がる事等から、ある意味〈１時期目〉に属する道路跡とも考えられる。道路としての機能は、10世紀中頃には完全に失っており、路面の硬化面は踏み跡として自然発生的にできたものである。

SF－１〈３時期目〉

10世紀代に、〈１時期目〉〈２時期目〉の道路（側溝）を壊して構築（補修整備）された心々距離約９m の両側溝を伴う道路である。側溝は、道路の区画及び排水のために掘られており、最北部では地形的な条件からか本道（１時期目）からやや東に逸れている。

SF－１〈４時期目〉

〈３時期目〉同様最北部で東に大きく逸れ、その後、本道（１時期目）の東脇を平行して急勾配で谷を下って行く幅約５m 前後のの切り通し状に構築され道路であり、廃絶は、11世紀中頃とされる。道路中央には自然発生的な成因と考えられる幅0.5m 程の蛇行する２条の硬化面があり、その延長には幅約2.5程の波板状硬化面を伴う。

SF－３・４・５

SF－１〈４時期目〉の道路廃絶後（11世紀中頃以降）、SF－１の西側にできた幅約３m（SF－３）、硬化面の幅約0.5m 程の（SF－４）の南北道路である。

SF－６

SF－３～５の道路の枝道的道路である。

７）おわりに

SF－１「推定東山道武蔵路」は、市民団体の要望や関係各位の努力により「保存」及び「活用」される事となった。遺構は、調査終了後には砂により埋め戻されたが、現在では、該地区での高層住宅建設など開発事業の進む中、遺構が遺存する場所だけが工事関係の機器が立ち入る事無く冬枯れの草木が横たわっている状態である。今後、この古代律令時代の国家権力の象徴である「12m 幅の直線道路」は、開発事業の最終段階において、どのような形で残され「活用」されて行くのであろうか。このことは、調査を担当した者にとっても、また、「国民の共有財産である埋蔵文化財を後世の人々に伝達する」と云う理念においても、大いに期待されるところであり、将来的な視野に立ったよりよい「活用」が望まれるところでもある。

（板野）

註

（※１）曲金北遺跡（静岡県静岡市）の「東海道」や杉村遺跡（栃木県宇都宮市）の「東山道」等。

（※２）福田信夫「武蔵国分寺と古代道路」『古代文化』VOL.49－特集東山道をさぐる－㈶古代學協會　平成９年。

（※３）※２に同じ。

（※４）上敷領久「武蔵国分寺寺院地区画溝と東山道武蔵路について」『東京の遺跡』№55　東京考古談話会　平成９年。

（※５）杉浦由恵「武蔵国分寺と国府の間」『古代文化』VOL.49－特集東山道をさぐる－㈶古代學協會　平成９年。

（※６）塚原二郎「武蔵国府と古代道路」『古代文化』VOL.49－特集東山道をさぐる－㈶古代學協會　平成９年。

（※７）飯田充晴「埼玉県所沢市東の上遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会　平成３年。

（※８）※５に同じ。

（※９）※２に同じ。

（※10）東京都埋蔵文化財センター（西国分寺分室）福嶋宗人氏の御教示による。

（※11）飯田充晴「道路構築方法について」－埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして－『古代交通研究』第２号　古代交通研究会　1993年。

（※12）早川　泉「古代道路遺構に残された圧痕」『東京考古』９号　東京考古談話会　1991年。

（※13）※５に同じ。

（※14）坂誥秀一団長の御教示による。

（※15）早川　泉「古代道路遺構の虚像と実像」－東山道武蔵路の調査を通して－『古代交通研究』第６号　古代交通研究会　1997年。

（※16）※15に同じ。

（※17）㈱加藤重機建設金子健一氏の御教示による。

参考文献（註以外）

・井上尚明「北武蔵の古代交通について」『研究紀要』第10号　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1993年。

・近江俊秀「鴨神遺跡検出の道路状遺構」『古代交通研究』第３号　古代交通研究会　1994年。

・近江俊秀「古代道路の構造（３）」－古代の道路構築方法をめぐる諸問題－『道路』日本道路協会　1996年。

・酒井清治「武蔵国内の東山道について」－特に古代遺跡との関連から－

・『曲金北遺跡』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996年。

・『推定東山道武蔵路』－試掘調査報告書－東京都埋蔵文化財センター西国分寺分室　平成９年。

・早川　泉「武蔵路の素顔」－遺構はなにをおしえてくれるか－『多摩のあゆみ』VOL.88－特集東山道武蔵路－㈶たましん地域文化財団　平成９年。

５．道標のある地蔵碑

本調査区内から表採遺物として発見された道標のある地蔵碑は、正面に「南無地蔵尊」と大きな文字を彫って地蔵菩薩を祀り、右側面に道案内の銘文を併記している。この道標銘は他の２面に彫られた文字とタガネや書体が同じであることから、追刻されたものではなく造立当初から併記されていたものと考えてよかろう。

江戸時代に造られた道標は、本来の道しるべとして道案内だけを目的として建てられたものと、本碑のように石仏や石塔類に道案内の銘文を併記したものとがある。江戸時代には村内の安全を祈願したり、悩みや苦しみを救うために人々の往来が多く誰でも拝むことができる村中の辻に地蔵尊や庚申塔あるいは道祖神などを建てることが多く行われた。また、本碑のように村境には、疫病や厄神の侵入を防ぐために地蔵像を建立することが行われた。この時代の地蔵像は光背型の地蔵陽刻像が多いが、本碑のように文字塔にしたのは道標としての目的を強く意識したために、角柱状の石塔という形をとり、地蔵菩薩を祀ることと道案内とを兼ねたのであろう。このように道案内と宗教が結びつくのは、道案内をすることによって困っている人を救うという宗教的な満足感に通じることであり、道案内標識を建てることによって功徳を得ようとする信仰心と、同時に村境に地蔵菩薩を祀ることで村内の安全を祈願し人々の苦しみを救ってほしいという願いを込めるという二重の意味があるのであろう。そしてほとんどの旅人はこれらの石仏に道中の安全を祈願しながら旅を続けたことであろう。

多摩地区に残されている江戸時代以後に建てられた道標は、石仏や石塔等に併記されたものが多い。府中市教育委員会発行の『府中市の石造遺物』（昭.55）には、江戸時代から近代までに建てられた道標として12基が記載されているが、道しるべとして建てられた石碑２基以外は庚申塔５基、馬頭観音３基、回国供養塔１基、石橋供養塔１基であり、いずれも信仰的な石造物に道標銘が併記されたものである。道標銘は「これまさ道」「かうしうみち」「かわごへみち」などのように、それぞれの地方へ通じる方向を表示したり、街道名である場合もあるが、「やくしみち」「子の権現道」「ふじ大山道」のように信仰関係と思われる行き先を表示したものもある。また建てられている場所は、村中の辻や街道の辻であり、庚申塔や馬頭観音像が建てられる場所と一致しこうした信仰的な石造物が道標としての役割も果たしているのである。青梅市教育委員会発行の『青梅市の石仏』（昭.49）には58基の道標が記載されており、道しるべとして建てられた石碑は44基で、14基は庚申塔（５基）や馬頭観音（４基）、出羽三山碑（２基）、常夜燈（１基）などの石塔に併記されている。またその行き先は江戸、五日市、八王子、飯能などそれぞれの地域の方向を表示するものと、御岳山、秩父、子の権現など信仰的なものも多い。五日市町立五日市郷土博物館発行の『五日市の石仏』（昭.62）には10基の道標が載っているが、道しるべとして建てられた石碑は７基で、３基は念仏塔（２基）と庚申塔（１基）に併記されたものである。羽村町教育委員会発行の『羽村町の板碑・石仏』（昭.51）にも市内に現存する８基の道標が紹介されているが、５基が道しるべとして建てられた石碑で、３基は馬頭観音（２基）と庚申塔（１基）に併記されている。

道標は、建てられた当初は多くの旅人の道中安全を願う石造物であり、大切にされたものであるが、社会情勢の変化と共に道路事情が変わるにつれて不用品となってしまう運命にあるようである。特に現代では道路工事等の際には粗末に扱われ、消滅の憂き目にあった道標が多い。しかし、現在では利用されなくなっていたり、消滅してしまった道路が、道標の存在によって往時は多くの人々に利用されていた大切な道路であったことがわかるのであり、また御岳山参りや子の権現参りなどの信仰の一端が明らかになって

くるなど、往時の交通事情等を適格に示す資料であり歴史民俗資料としては大変貴重なものである。造立当初の位置を示す記録と共に大切に保存しておきたいものである。

（持田）

Ⅶ. 結　　言

１．はじめに

本調査地域は旧日本国有鉄道が保有した研修施設「中央鉄道学園」の跡地である。敷地内には研修棟など低層の建物群が整然と配置されていたが、高層の建物はなく緑も豊富であったので、遺構が存在すれば比較的良い状況で残存しているものと思われた。しかし「調査に至る経過」の中に述べたように、本調査会が分担した西側地区は、厚生施設としての野球場・陸上競技場などの運動施設が集中する地域で、大規模な造成が行われており、歴史時代から縄紋時代に掛けての遺物・遺構群が極めて重大な影響を受けていることは試掘調査の段階で明らかであった。

調査を始めるにあたって、当初からその存在と内容が分かっていた遺構は、推定「東山道武蔵路」と呼ばれる道路遺構である。府中市域から国分寺市東恋ヶ窪まで約4.6㎞に亘って、点々と確認された道路遺構は、方眼北に対し平均２°09′28″を指し、ほぼ直線的に北方向に連なっていることが明らかになった。位置的には本調査地区の西端を南北方向に貫くことが地図上で確認され、試掘調査の結果もそれを支持していた。ここに調査の結言をまとめるにあたって、この道路遺構について考えてみた。

武蔵国内を通過する駅路については、10世紀前半に編纂された『延喜式』の中に五畿七道諸国の駅家名が記されており、その経路が明らかにされている。現在それぞれの駅家の比定地が、大槻如電の『駅路通』や吉田東吾の『大日本地名辞書』・邨岡良弼の『日本地理志料』などを中心に明らかにされている。また、藤岡謙二郎を中心とした歴史地理学者による『古代日本の交通路』はそれらの駅名を徹底的に分析し、全国規模でその比定地の確認・検証を行った(*1)。それらによると、武蔵国の駅路は相模国夷参駅から店屋（町田市）、小高（川崎市小田中）を通り、大井（品川区大井）から豊島（千代田区神田）を経て下総国府に至る経路が東海道本道として示されている(*2)。これが『延喜式』に示された駅家を繋ぐ武蔵国内の駅路である。

資料①　「延喜式兵部省諸国駅伝馬」

相模国駅馬　坂本廿二疋。小総。箕輪。浜田各十二疋
　　伝馬　足上．余綾。高座郡各五疋
武蔵国駅馬　店屋。小高。大井。豊島各十疋
　　伝馬　都筑。橘樹。荏原。豊島郡各五疋
下総国駅馬　井上十疋。浮島。河曲各５疋。茜津。於賦各十疋
　　伝馬　葛飾郡十疋。千葉。相馬郡各５疋
上野国駅馬　坂本十五疋。野後。群馬。佐位。新田各十疋
　　伝馬　碓氷。群馬。佐位。新田各五疋

東山道武蔵路はこの『延喜式』には存在しない駅路である。この駅路の存在を示す根拠は、『続日本紀』宝亀二年十月の記事である。

資料②　「続日本紀」宝亀二年十月己卯条。

太政官奏ス。武蔵国ハ山道ニ属スト雖、兼ネテ海道ヲ承ク。公使繁多ニシテ　祇供堪ヘ難シ。其ノ東山ノ駅路ハ上野国新田駅ヨリ下野国足利駅ニ達ス。此レ便道ナリ。而ルニ枉ゲテ上野国邑楽郡ヨリ五ケ駅ヲ経テ武蔵国ニ到リ、事畢ツテ去ル日、又同　道ヲ取リテ下野国ニ向フ。今東海道ハ相模国夷参駅ヨリ下総国ニ達ス。其ノ間四駅ニシテ往還便近ナリ。而ルニ此ヲ去リ彼ニ就クコト損害極メテ多シ。臣等商量スルニ東山道ヲ改メテ東海道ニ属セバ、公私所ヲ得テ人馬息スルコトアラント。奏可ス。

この記事は、「武蔵国は東山道に属していたが、東山・東海の両路を受けて、公使繁多であった。東山

道の駅路は、上野国新田駅から下野国足利駅に達するのは便道である。而るにこれを枉げて上野国邑楽郡より五箇駅を経て武蔵国に至る。事終わって、同じ道を通って下野国に向かう。いま東海道は相模国夷参駅から下総国へ達する。その間四駅で、往還便近である。而るにこれを去り、元来た道を帰るのは損害極めて多い。臣等商量するに、東山道を改め東海道に属すれば、公私所を得て、人馬休息する事ができます」と言う内容である。これは武蔵国が宝亀二年に東山道から東海道に所属替えになったことを示すとともに、上野国邑楽郡から武蔵国府に至る駅路が存在したことを示している。

この駅路がどのような経路を取り武蔵国府に達したかは、吉田東吾・小野文雄・坂本太郎をはじめ近年では木下良・森田悌・酒井清治・木本雅康などの意見がある。これらについては、酒井清治が整理しているので、ここでは触れない(*3)。

２．道路遺構の構造的特徴

今回の調査で明らかにされた道路遺構の詳細については、本文中に板野晋鏡の分析がある。ここでは重複を避け、道路遺構の構造的特徴を若干補足する程度に止めておきたい。

① 側溝の形態が土坑連結式である。

１時期目の側溝は底面に掘り残された高まりがあり、高まりと高まりの間が一つの土坑の単位になっている。平面形は通常の溝と変わりはないが、掘り上げた下場の平面形は土坑の形態を残している。また、所々に土橋状に掘り残された部分があり、この溝が一本に繋がった溝でないことが分かる。

② 側溝の底面はローム土で埋め戻され平坦である。

側溝の覆土を観察すると一番下層にロームブロックを多量に含む明褐色土が堆積している。側溝の底面はローム層を数十㎝掘り下げているので、この土層は土坑を掘削した時に最終部分で掘り崩したローム土を掘り上げずに平らに慣らして、側溝の底面にしたものと思われる。所謂掘り方である。そのため側溝使用時の底面は掘り残した土坑と土坑の境の高まりは見えないことになる。また、側溝の底面に工具痕が明瞭に残ったのは、側溝の底面に掘り方が存在するためで、埋め戻されたローム土により掘削時の工具痕が保護された結果に他ならない。

③ 四時期の変遷がある。

１時期目は土坑連結式の溝で芯々距離12m の道路である。２時期目は１時期目の側溝が一部埋没した後に、ローム土を突き固めながら、側溝内とその周囲に幅広に入れ込んで整地したもので、左右両側溝上に硬化面が認められる。西国分寺地区では、この２時期目の硬化面が左右の側溝内にしか認められず、一見側溝幅だけの道路と錯覚されそうであるが、幅広くローム土を入れ込んだ状況が、武蔵国分寺関連遺跡調査会が実施した国分寺跡南端地区の調査で明らかにされている。３時期目は溝芯々距離９m の道路である。４時期目は側溝を持たない幅５m の道路で、皿状に窪んでいる中央付近に硬化面が認められる。この道路は調査区北端で東に大きく反れて、恋ヶ窪谷に向かって下っていく。

この道路変遷の特徴は、側溝を持つ道路（１時期目）、持たない道路（２時期目）、側溝を持つ道路（３時期目）、持たない道路（４時期目）の繰り返しである。この様な構造的特徴を持つ道路遺構が府中市から国分寺市・小平市を経て、所沢市東の上遺跡に続いて行くのである。

３．遠距離調査区で検出された遺構の連続性

各地区で調査された道路遺構が、一連のものであるか否かを決定することは慎重であらねばならない。それは似て非なる遺構の存在があるからだ。特に溝跡のように単純な形態の遺構が連続する場合には特に注意が必要である。検出されるべき遺構が連続していなかったり、連続していたと思っていた遺構が、そ

の中間を調査してみたら、微妙に角度を変えた別の遺構が他方向から入ってきたりするからである。

今回我々が追求した道路遺構は、その特徴的な側溝の構造と覆土の堆積状況を観察する事で、その連続性を明らかにすることが可能であった。それは側溝が土坑連結式であることとその覆土の堆積状況が大きく見て三層に分離できるという極めて大きな特徴があったからである。下層がロームブロックの埋め戻し土、中層が粒子の粗い黒褐色土、上層がローム土風の茶褐色土で堅く踏み固められている。このような側溝覆土の堆積状況はどの地区でも同様に確認ができる。しかし、遺構上面が削平を受けている場合は、この上層部分が削られていて、中層からしか確認できない場合がある。いずれにしても、この側溝の形態と覆土堆積状態とその検出位置によって連続した同一遺構であるか否かの判断基準とした。

４．道路遺構と「東山道武蔵路」の同一性

次に『続日本紀』にその存在が示されている「上野国から武蔵国府に至る道」と発掘調査された道路遺構が、同一のものであるか否かを検討してみたい。

古代の道路遺構については近年発見が相次いでいる。武蔵国内でも埼玉県日高市向谷遺跡(*4)、鳩ヶ谷市辻字宮地第二遺跡(*5)などがある。それらの道路遺構と比較して、本道路遺構が所謂「東山道武蔵路」と考えられる理由は以下の通りである。

① 国府・国分寺に先行する道路遺構である。

国府・国分寺に関連する遺構でこの道路遺構に壊されているものはない。

国分寺がこの道路を意識して建設されている。

国分寺の寺地区画溝がこの道路遺構を壊している。

② 画一的で大規模な道路遺構である。

側溝芯々距離が12m である。

全線に亘って側溝の掘削方法が「土坑連結式掘削工法」を取っている(*6)。

側溝の埋め戻し等が共通の方法で行われている。

③ 直線的な道路遺構である。

武蔵国府の所在する府中市分梅町から小平市上水本町に至る全長７㎞が、直線的に確認されている(*7)。

所沢市東の上遺跡で発見された道路遺構は、方向が西に振れているが構造的には同質の道路遺構と考えられ、それぞれを延長すると狭山丘陵上で連絡するものと思われる(*8)。

④ 路線が武蔵国府と上野国を結ぶ最短の位置にある。

武蔵国府から発進した道路が狭山丘陵付近で西に角度を降ると、所沢市東の上遺跡を経て、上野国邑楽郡に至る最短距離となる。

⑤ 想定路線上に駅路の存在を伺わせる遺物の出土や関連する地名がある。

川越市八幡前若宮遺跡から「驛長」と墨書された土師器の皿が出土している(*9)。

坂戸市宮前遺跡から「路家」と墨書された須恵器の坏が出土している。主要交通路と密接に関わった公的施設・機関と理解されている(*10)。

勝呂廃寺は坂戸市石井字勝呂に所在する７世紀第３四半期ないし第４四半期に創建された寺院である。この「勝呂」は「直路」を意味し、直線的な道の存在を伺わせる(*11)。

武蔵国分寺関連遺跡（武蔵国分尼寺跡の南方150m 付近）から上野国分寺所用瓦（上野国分寺 B206 型式）が出土している。これは武蔵路を利用した両国間の物流を示す具体的な事例と考えられる(*12)。

何十キロにも亘る同企画の大規模な土木工事が行える背景を考えたとき、そこに国家の意思が働いたことを考えざるを得ない。さらにその地理的位置、年代的環境を考えあわせると本道路遺構が所謂「東山道武蔵路」そのものであることを否定する材料は存在しない。

５．「東山道武蔵路」造道の時期

『日本書紀』推古十六年八月条や推古二十一年十一月条の記事に注目して、推古朝のころには大和の交通体系が整備され直線的計画道路が存在した可能性があると指摘されている。また駅制については、壬申の乱の戦闘記事に伊賀隠駅家・伊賀駅家などの駅家名や官鑰・駅鈴・伝符などの記載があることから、天智朝の段階には畿内を中心とした周辺地域には駅制が行われていた考えられている(*13)。

これらが全国規模で整備され、東山道武蔵路の造道に至る時期は何時であろうか。『日本書紀』天武十二年十二月条に国境確定事業に関する記事がある。伊勢王とその一行には工匠者も含まれており、現地に赴き実地に諸国の国境を定めたものと思われるが、その境としたものに山の尾根筋、河川などの自然地形とともに、直線的計画道路が考えられている。直線的国境については米倉二郎(*14)や服部昌之(*15)・日野尚志(*16)が注目しているが、実際に現地調査された木下良は筑後国と肥前国の国境に幅10～15m の道路痕跡が点々と存在することを確認している(*17)。このことから、天武朝の時期には全国的に駅路が整備されていたのではないかと考えられている。

道路遺構の造道年代を特定する事は大変困難であることは以前述べたことがある(*18)。屋根など上を覆うものがなく常に露出し、人々（官人）の通行のために用いられる施設であり、しかも長期間使用される道路の性格から、調査で検出される遺構はその道路の最終使用時の状況であり、遺物も基本的には落し物程度のものしか期待できないからである。

東山道武蔵路でも遺物の出土は極めて少ない。唯一所沢市東の上遺跡の西側溝から７世紀第３四半期の須恵器の身と蓋が出土している。遺物はかなり使用されている。今のところ武蔵路造道の時期を示す遺物はこの土器だけである。他の遺構との切り合い関係では、武蔵路が壊している遺構は存在しない。

地方における官道の成立の時期は、中央集権国家体制の成立と発展の過程を示すものとして極めて重要な意味を持っている。その時期が何時であるかは、複数の資料から決定されることが望ましく、また慎重であらねばならない。側溝からの具体的な出土状況、出土位置などが考古学的に報告されてから造道の時期を決定しても遅くはないと考えている。また東の上遺跡の調査の進捗により、これを補う資料の発見も期待される。

６．東山道武蔵路と入間路

坂本太郎は延喜式から当時の幹線道路の路線の概略を記す中で、七道とともにそこから分岐する支路について具体的な名称を付している(*19)。たとえば、駿河国横走駅から北上して甲斐国府に至る道を「甲斐路」、下総国府から海岸を伝い、上総を経て安房国府に達する道を「上総路」、美濃から分かれて飛騨国府に達する道を「飛騨路」などがそれである。

東山道武蔵路は延喜式の段階では武蔵国が東海道に所属しているために、坂本太郎の路線概略の中には表れてこない。都から東山道を下って山東に入った人たちは、この道を武蔵国府に至る道として「武蔵路」と呼称したかも知れない。しかし武蔵国に住む人たちはこの道を何と呼んでいたのであろうか。

万葉集東歌の中に

いりまじの大家がはらのいわいづら
　　引かばぬるぬるわになたえそね

との歌がある。入間路をいりまじと読んでいることが分かる。武蔵国の人々にとってこの道は遠い都に至る道ではなく、武蔵国府から入間郡家に至る道なのであろうか。

この調査の結語をまとめるにあたって、本来ならば各時代について触れなくてはならないところであるが、この調査全般を通じて極めて象徴的であった東山道武蔵路を中心に所見を述べさせていただいた。もちろん旧石器時代についても重要な発見があり、該期の遺跡として極めて貴重な成果があったことは、国武氏のまとめにも明らかである。

最後に、この調査の結果、全長340m に亘る東山道武蔵路が多くの方々のご尽力により保存されたことを記して筆を置きたい。

（早川　泉）

註

（※1.）藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅰ～Ⅳ大明堂　1978～79年

（※2.）森田悌『古代の武蔵』吉川弘文館　1988

（※3.）酒井清治「武蔵国内の東山道について－特に古代遺跡との関連から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』　1993

（※4.）中平薫『向谷・宿方』日高市埋蔵文化財調査報告　第22集　埼玉県日高市教育委員会　1993

（※5.）鳩ヶ谷市教育委員会　黒済和彦氏のご教授による。

（※6.）早川泉「武蔵路の素顔」－遺構はなにをおしえてくれるのか－『多摩のあゆみ』VOL88－特集東山道武蔵路－（財）たましん地域文化財団　1997

（※7.）東京都教育委員会は東山道武蔵路の確認調査を古代学協会に委託して２年計画で実施している。

（※8.）飯田充晴「埼玉県東の上遺跡の道路上遺構」『季刊考古学』第46号　雄山閣　1994

（※9.）川越市八幡前若宮遺跡

（※10.）宮瀧交二「墨書土器「路家」について」『坂戸市宮町遺跡』埼玉県埋蔵文化財事業団報告書　第96集　1991
酒井清治は兵庫県小犬丸遺跡から出土した「布勢井邊家」の墨書土器が布勢駅家の井戸のほとりの家と読まれていることから、「路家」は道の近くの家と解釈し、付近に道が走っていたと推測している。

（※11.）田中一郎「勝呂廃寺考－埼玉県入間郡坂戸町石井－」『埼玉史談』８－１　1961

（※12.）早川泉「小結」『武蔵国分寺関連遺跡の調査Ⅱ』武蔵国分寺関連遺跡調査会　1991

（※13.）坂本太郎『上代駅制の研究』至文堂　1928
田名網宏『古代の交通』吉川弘文館　1969

（※14.）米倉二郎「九州の条理」『九州アカデミア４』　1960

（※15.）服部昌之『律令国家の歴史地理学的研究』大明堂　1983

（※16.）日野尚志「筑後川流域右岸における条理について－筑前国夜須・上座・下座三郡、筑後国御原・御井（一部）二郡の場合」『佐賀大学教育学部研究論文集25』　1977

（※17.）木下良「九州の条理」『九州アカデミア４』　1960

（※18.）早川泉「道路遺構の虚像と実像」『古代交通研究』古代交通研究会

（※19.）坂本太郎「うまやの制」『古代日本の交通』弘文堂　1955

あ と が き

武蔵国分寺跡北方地区における遺跡の発掘調査報告書が完成した。回想すれば、平成５年11月５日に着手した発掘調査は８年３月に終了し、そのあくる月より室内調査に入り３年の歳月を費やして11年３月に完了した。現地発掘の開始から室内作業の終了まで実に５年４ヶ月を閲したことになる。

調査対象地域67,000㎡のなかには、縄文時代中期の日影山遺跡、古代の推定東山道跡が含まれ、さらに一帯に広く古代の土器の散布が知られていた。とくに、推定東山道の遺構の存在については、事前の試掘調査によって確認されていた。それは、南方の武蔵国府域から派生する道路遺構が武蔵国分僧寺と尼寺の中間を南北方向に敷設されていたことが明らかにされ、さらに北方に続くと想定されていたからである。推定東山道の道路遺構の存在については、すでに明瞭であったが、それがどのような状態であったか、従来の「点」的発掘による把握を越えて「線」的認識が確実に得られるであろうと期待されたのである。

この度の発掘の契機は、西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）における住宅市街地整備総合支援事業に伴うものであった。したがって、それの実施は事前調査であり、発掘調査は「記録保存」を建前とする方針のもとに着手されたのである。かかる目的による発掘であったため、対象地域の徹底的な発掘調査が意図された。ただ、推定東山道の遺構の遺存状況が分明でなかったこともあり、その点の展望に一沫の不安を残しながらの発掘着手であった。

発掘調査が進むにしたがって、縄文時代の日影山遺跡については住居跡の群集存在－集落としての存在ではなく、小規模な集落として把握されるにいたった。その時期は、当初から考えられていた中期の前半の所産であり、検出された阿玉台式土器を伴出する竪穴住居跡１軒によって象徴されるものであった。また、縄文時代早期の撚糸文土器の竪穴住居跡１軒が検出され、日影山遺跡は、縄文時代の早期の段階から住居が開始され、以降、前期を経て中期にいたって小規模集落が形成され、さらに後期～晩期にもヒトの痕跡が認められることが明らかになった。なかでも、その形成は、中期の前半であり、住居跡が明瞭な形で見出された阿玉台式が中心であり、前後する五領ヶ台式期そして勝坂式期にも至近地に集落が存在したことが推定されたのである。その後、加曽利Ｅ式、曽利式土器をもつヒトの去来もあったことは注目されよう。このように、対象地域の土地利用は、縄文時代のとくに早期そして中期の前半に居住地として、また、狩猟の場として利用されていたこと、前期、後・晩期においても広義のテリトリーとして付近一帯が機能していたのである。

縄文時代以前における遺跡の存在については、発掘中に見出された石器によって注意され、それの包含層に鍬が入れられることになった。石器の出土した地域は、武蔵野台地の南縁に位置する野川源流域遺跡群として周知されている地でもあり、旧石器時代遺跡の存在が予測されていたところでもあった。果たせるかな第Ⅲb 下層～Ⅳb 上層にかけて、さらに第Ⅲa・Ⅲb、Ⅳb 下部、Ⅵ層下部から、それぞれ文化層が検出された。とくに第Ⅲb 下層からⅣb 上層にかけての第２文化層からは、きわめて良好な一括資料が出土し、武蔵野台地におけるナイフ形石器の様相の把握に良好な資料を提供することが出来たのである。加えて、伴出樹種がカヤであることが判明したことは、該時代における環境を示す情報と

して注目されよう。

古代については、推定東山道の道路跡の完掘が大きな目標ではあったが、一方、武蔵国分二寺の後背地としての立地から、奈良～平安時代において、この地がどのように利用されていたのか大きな関心が寄せられてきていた。それは、国分僧寺の北側の台地上にはすでに竪穴住居跡の存在が周知され、その拡がりが注目されていたのである。僧寺の北限を示す溝のさらに北側の土地利用の実態をその西側に拡大して考える資料を得る機会ともなったからである。発掘の結果は、集落の西の拡がりがこの地域に及んでいないこと、そして多くの土坑が営まれていた地域であること、が把握されるにいたった。とくに土坑が発掘地域の東北方に多く検出されたことは、土坑の存在空間の限定的あり方を示しているかのようである。その形状は、円・方があるが、このような類例は武蔵野台地においてもかなりの検出例があり「壙」としての性格が推定されてきたところである。円形土坑は、正円を示す遺例が多くある種のコンパス状用具の使用が考慮されるものであり、方形土坑の四辺計測値ともども計画的かつ規範的な規制の存在を窺わせるかのようである。このような坑が「壙」としての機能を有するものであったか、その充満土のリン酸分析を試みた。その結果、対象試料におけるリン酸の含量は「やや高い含量」を示すものが多かった。よって「壙」としての可能性を否定するものではないが、積極的に肯定する結果が得られたわけではなく将来に一つの問題提起を果すことになったのである。

推定東山道の遺構のあり方については、もっとも注目された課題であった。発掘の結果、それが予期以上に道路面が一定の幅員をもって連続的に検出されたことにより、一挙に注目されたのである。従来、古代官道の発掘はすでに東海道などにおいて試みられ、それが直線的であり、一定の幅員を具備していたことなどが知られていたが、この度の発掘の成果は、如上のそれを踏まえて、さらに道路遺構の実態把握に百尺竿頭一歩を進めたものであった。発掘された道路遺構は、南北一直線に約350m 続いていたが、当初からそれの検出を意図していたこともあり、幅員・面の仔細な発掘による観察が可能であった。その結果、道路は、敷設・修復作業による反復工事の痕跡把握によって４時期が識別され、その上限の道路敷設は、国分寺創建以前に求められることが明らかになり、そして廃絶は11世紀中頃と推測されるにいたったのである。敷設道路の幅員は、第１期12m（11.5m～12.5m）、第３期９m（8.5m～9.5m）であることが判明したことも重要であった。以上のごとき結果は、推定東山道＜武蔵道と仮称＞の一部を線として検出したことになったのである。

ここにいたって、検出された遺構の現状保存活用の問題が当然のことながら提起されるにいたった。かかる課題については、その後、紆余曲折はあったが、関係者の尽力によって「東山道遺構の保存・活用整備計画策定調査委員会」（野村武郎委員長－国分寺市教育長－）が結成され、その提言によって保存と活用が講じられることになったことは、まことに欣快にたえない。「記録保存」より「保存活用」に転換された東山道の遺構は、今後とも永く共有の歴史遺産として伝えられるであろう。その活用を大いに願ってやまない。

以上のごとき結果を顧みるとき、調査団の顧問として隠に陽にご教導を賜った吉田格・永峯光一両先生のご芳情に対し厚く御礼を申し上げたい。また、困難な作業に挺身した板野晋鏡氏を中心とする調査員、さらに、大所高所より指導を惜しまなかった東京都教育委員会・国分寺市教育委員会の関係各位のご好意に深甚なる敬意を表させて頂きたいと思う。

（坂　誥　秀　一）

Hikageyama Site and the Tosan-do road

The site of "Kokutetsu Chuo Tetsudo Gakuen" at Izumi-cho, Kokubunji city, had been under archaeological excavations from1993 to 1996. The research area totaled 67,000m^2. Hikageyama and Musashi-Kokubunji-ato are the official designations for the sites. The latter primarily corresponds to Ritsuryo (Nara/Heian) period remains. Tosan-do, 12m wide, one of the seven main roads of ancient Japan, connecting provinces, runs straight through the excavated area.

Palaeolithic Period

Investigations of the lower strata yielded 1,135 Palaeolithic implements and 1,125 pebbles from an area of 9,200m^2. Confirmed Palaeolithic industries amount to five, ranging from layer III to X of Tachikawa loam. Each industry may include sub-industries.

The second industry, ranging from layer III-b lower to IV-a, includes two block groups. Block group1, ranging from layer III-b lower to IV-a upper, corresponds to the final sub-phase of the knife-blade culture. Block group2, ranging from layer IV-a middle to IV-a lower, corresponds to the Sunagawa subphase of the knife blade culture.

Jomon Period

Jomon period remains range from Yoriito-mon (about 7,000—8,000 B.P.) to Angyo-3a (about 3,000 B.P.) Types. Ninety percent of the pottery is dated *Chuki* (Middle) Jomon, including Otamadai, Katsusaka, Goryogadai types, etc., in order of quantity.

Pit-dwellings and pit-structures date back to Yoriito-mon and Otamadai phase. Stone-heaps date back to Moroiso (around 5,000 B.P.) and *Chuki* (before 4,000 B.P.). Various types of pitfalls, round pit-features, and small pits are hardly datable.

Ritsuryo Period

Some pit-features, trenches, and roads (including Tosan-do) date to Ritsuryo period. No pit-dwellings have been found despite the proximity to the Musashi Kokubunji ruins. Feature SX-13 yielded complete *Sue* ware cups from the middle of the 10th century.

Tosan-do Road

The development of the Tosan-do road, designated SF-1, is traceable in four surfaces. Surface1 : Dug and built first in the 3rd quarter of the 7th century, buried in the middle of the 8th century. Surface2 : Abandoned in the middle of the 10th century. Surface3 : Built in the10th century. Surface4 : Abandoned before the middle of the 11th century.

There are three types of hardened surface obsereved at SF-1 and other road ruins. They vary in width, cross sections, and plans. They may indicate paths. Surface2 of SF-1 is 1m wide, surface4 of SF-1 is 0.5m wide, and that of SF-6 is 0.3m wide.

Roadside ditches found at the surface 1 of SF-1 run 12m apart from each other. Ditches at the surface3 of SF-1 run 9m apart. The former ditches are not contiguous, rather consecutive strips of pits. This feature may characterize an early phase of Tosan-do road.

Fortunately the authorities have determined to conserve SF-1, Tosan-do road (presumed Musashi-michi route). SF-1 was refilled and buried with sand. A marker indicating the site will be installed in the near future.

報 告 書 抄 録

ふ り が な	むさしこくぶんじあとほっぽうちく　　ひかげやまいせき・とうさんどうむさしみち
書 名	武 蔵 国 分 寺 跡 北 方 地 区　日 影 山 遺 跡・東 山 道 武 蔵 路
副 書 名	西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）住宅市街地総合整備支援事業に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	坂東雅樹　坂誥秀一　持田友宏　早川　泉　板野普鏡　伊藤俊治　小林定之　国武貞克
編 集 機 関	西 国 分 寺 地 区 遺 跡 調 査 会
所 在 地	〒185−0024　東京都国分寺市泉町２丁目１番地
発 行 年 月 日	1999年３月25日

ふ り が な	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		m^2	
武蔵国分寺跡 北方地区 日影山遺跡 東山道武蔵路	東京都 国分寺市 泉町2−1	13214	No. 19	35° 41′ 08″	139° 28′ 04″	平成５年 11月15日 〜 平成11年 ３月31日	67,561,92m^2	西国分寺地区住宅市街地総合整備支援事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡 北方地区 日影山遺跡 東山道武蔵路	集落跡	旧石器時代	礫群	尖頭器 ナイフ形石器 スクレイパー	
		縄文時代	竪穴住居跡 陥し穴 集石 土坑 小穴	縄文土器 打製石斧 磨製石斧 石鏃 尖頭器	撚糸文様式期の住居跡 中期前半の住居跡 陥し穴
		歴史時代	道路状遺構 溝跡 土坑 特殊遺構 集石 小穴	須恵器（坏・甕） 土師器（坏・甕） 陶磁器 古銭 刀子 瓦	推定東山道武蔵路跡

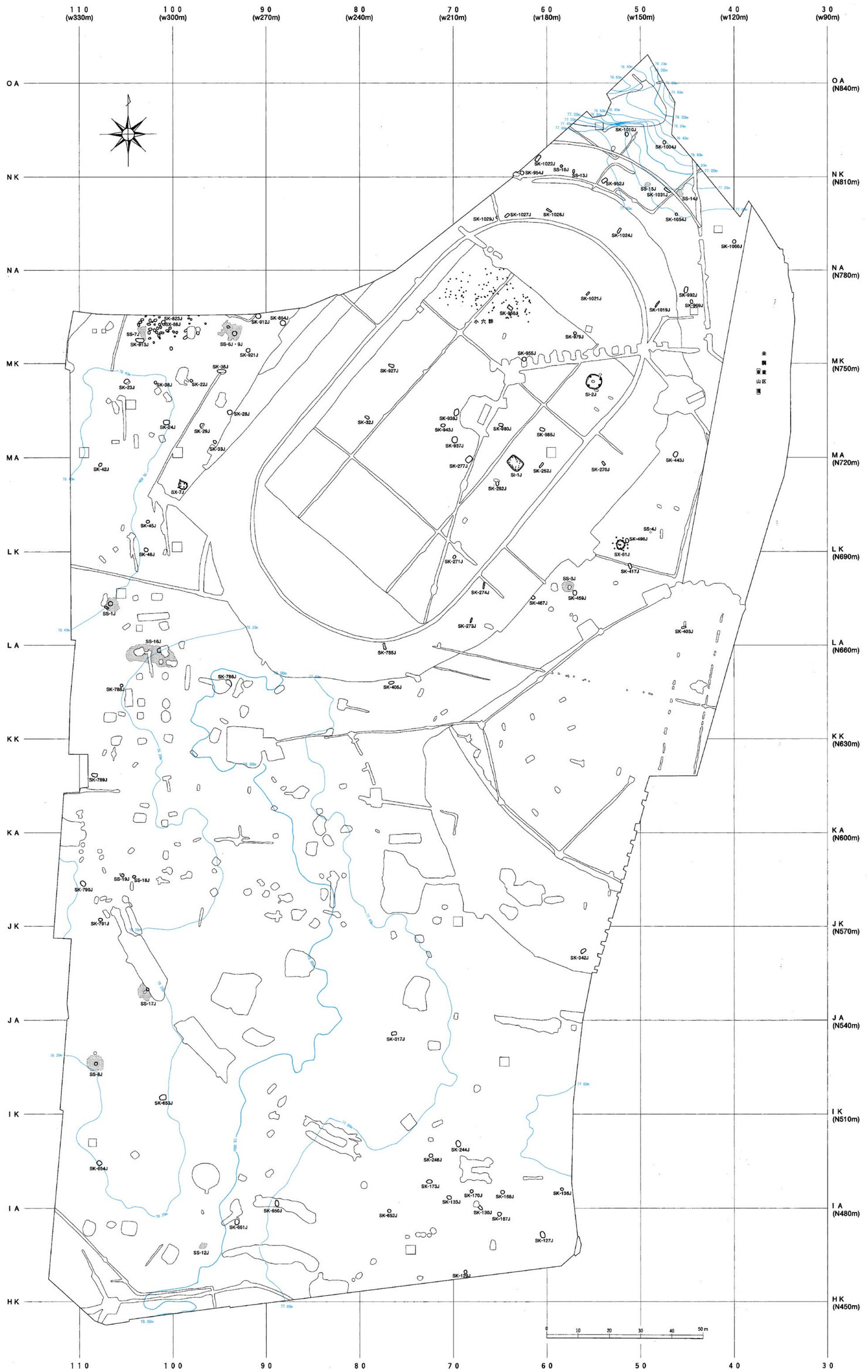
武蔵国分寺跡北方地区

日影山遺跡・東山道武蔵路

－西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）住宅市
街地整備総合支援事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
－第１分冊－（本文・実測図編）

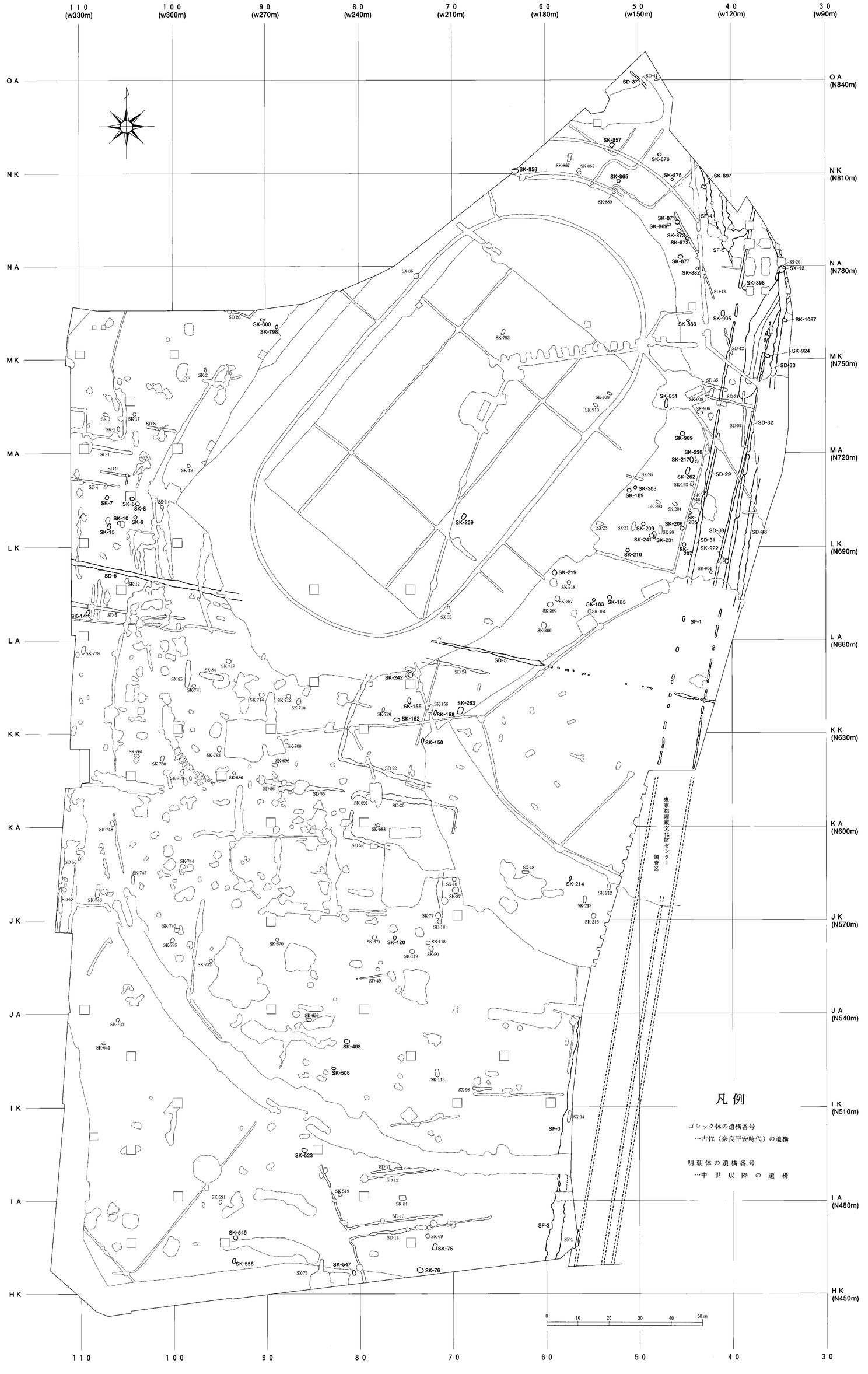
発行日　1999年３月20日
編著者　西国分寺地区遺跡調査団
（団長　坂誥秀一）
発行者　西国分寺地区遺跡調査会
〒185－0024
東京都国分寺市泉町２丁目１番地
印　刷　電算印刷株式会社

令和４年（2022）３月２日　デジタル版作成



別添第１図　縄文時代遺構配置図

日影山遺跡・東山道武蔵路



別添第２図　歴史時代遺構配置図

日影山遺跡・東山道武蔵路